神宮司廳藏版

古事類苑

地部一

古事類苑刊行會

古事類苑

地部第一冊目錄

地部一
地總載
地部二
皇都 部 併入
地部三
山城國
地部四
大和國
河內國
地部五
和泉國
攝津國

地部六
伊賀國
伊勢國
志摩國
地部七
尾張國
地部八
三河國
遠江國
地部九
駿河國
伊豆國 小笠原島附
地部十
甲斐國

相模國

地部十一
武藏國上

地部十二
武藏國下（江戸附）

地部十三
安房國
上總國
下總國

地部十四
常陸國

地部十五
近江國

地部十六

美濃國

地部十七

飛驒國

信濃國

古事類苑

地部一

地總載

名稱　二
國號　日本　ひのもと　日出國　日域　日東　烏卵　大八洲國　葦原中國　瑞穗國　やまと　野馬臺　浦安國　細戈千足國　磯輪上秀眞國　玉牆內國　虛空見日本國　秋津島　磯城島　神國　皇國　倭國　東海女國　姬氏國　扶桑國　君子國　阿每鄕　ヤアパン　ジツパン　四
位置　三七
疆域　同
廣袤　同
地勢　三八
沿革　三九
地名　命名　地形爲名　境界爲名　外國名爲名　方位爲名、天象爲名　社名爲名　寺號爲名　官衞爲名　官職爲名　神名爲名　人名爲名　動物爲名　植物爲名　金石爲名　器物爲名　事業爲名　由緣爲名　改攙文字　取嘉名　改地名　避諱　移地名　地名訛誤　四一
地方汎稱　中洲　邊遠　緣海國　東國　西國　坂東　坂西　關東　關西　吾妻國　奧羽　北國　中國　四國　九州　五四

畿内 六五
七道 六七
國 國名稱 國數 定國 國界 國等級 分割 六九
縣 八二
郡 郡名稱 郡數 建郡 郡等級 分割 八五
鄉 八九
里 同
町 九四
村 字坪 分組 同
莊 九七
保 同
筋 一〇〇
田數 一〇一
石高 同
戸數 同
人口 同
風俗 一〇三
地誌 一〇四
地圖(附圖) 一一二
雜載 一二二

地部二

皇都 鄙併入

名稱　一二六
所在　一二八
奠都 相地 定造宮司 買收宅地 運人民 遷丘墓 行鎮祭 奉告遷都於神祇及山陵 遣內裏修理神社 昇神階 修佛事 遷神社 移兵器 班給宅地 招致市人 命名 敍位賜物 免課役 敍宥 役夫 用度　一三〇
京城區畫 二京 條坊保町 行門 道路(附圖)　一四一
遷都 建議 僉議 下問遷都之可否 遷都例　一七二
遷遷都　一九〇
還舊都　一九一
興廢　一九二
雜載　一九七
○鄙　一九九

地部三

山城國　二〇三

名稱　位置　疆域　地勢　道路　宿驛　建置沿革
國府　郡乙訓葛野愛宕紀伊宇治久世綴喜相樂　鄉　村里　名
邑　莊　落封　田數　石高　出擧
稻　國產　貢獻　人口　風俗　名所

地部四　二六七

大和國

名稱　位置　疆域　地勢　道路　建置沿革　國府
郡添上添下平群廣瀨葛上葛下忍海宇智吉野宇陀城上城下高市十市山邊飽海　鄉　村里　名邑　莊　落封　田數　石高
出擧稻　國產　貢獻　人口　風俗　名所　雜載

河內國　三〇七

名稱　位置　疆域　地勢　道路　宿驛　建置沿革
國府　郡錦部石川古市安宿大縣高安河內讚良茨田交野若江澁川志紀丹比丹南丹北八上　鄉　村里　名邑　莊　落封　田
數　石高　出擧稻　國產　貢獻　人口　風俗　名所
雜載

地部五

和泉國　三三三

名稱 位置 疆域 地勢 道路 宿驛 建置沿革
國府 郡（大鳥 和泉 日根 泉南） 鄕 村里 名邑 莊 藩封
田數 石高 出擧稻 國產（貢獻）
人口 風俗 名所 雜載

攝津國 三五一

名稱 位置 疆域 地勢 道路里程 宿驛 建置沿革
國府 郡（住吉 百濟 東生 西生 島上 島下 豐島 河邊 武庫 莬原 八部 有馬 能勢） 鄕 村里 都邑 莊保 藩封 田數
石高 出擧稻 國產（貢獻） 人口 風俗 名所 雜載

地部六

伊賀國 三九七

名稱 位置 疆域 地勢 道路 宿驛 建置沿革
國府 郡（阿拜 山田 伊賀 名張） 鄕 村里 名邑 莊 田數
石高 出擧稻 國產（貢獻）
人口 風俗 名所 雜載

伊勢國 四一八

名稱 位置 疆域 島嶼 地勢 氣候 道路 宿驛
建置沿革 國府 郡（桑名 員辨 朝明 三重 河曲 鈴鹿 奄藝 安濃 一志

飯高 飯野 多氣 度會 郷 村里 名邑 莊 藩封 田數 石高 出擧稻 國產 貢獻・人口 風俗 名所 雜載

志摩國 四六八

名稱 位置 疆域 島嶼・地勢 道路 宿驛 建置 沿革 國府 郡 答志 英虞 郷 村里 名邑 藩封 田數 石高 出擧稻 國產 貢獻 人口 風俗 名所 雜載

地部七

尾張國 四八七

名稱 位置 疆域 島嶼 地勢 道路 宿驛 建置 沿革 國府 郡 海部 海東 海西 中島 葉栗 丹羽 春部 山田 愛知 智多 郷 村里 名邑 莊保 藩封 田數 石高 出擧稻 國產 貢獻 戶口 風俗 名所 雜載

地部八

三河國 五三九

名稱 位置 疆域 島嶼 地勢 道路 宿驛 建置 沿革 國府 郡 碧海 賀茂 額田 幡豆 寶飯 設樂 八名 渥美 郷 村

里 名邑 莊保 藩封 田數 石高 出擧稻 國產(貢獻) 人口 風俗 名所 雜載

遠江國 五六六

名稱 位置 疆域(島嶼) 地勢 道路 宿驛 建置沿革 國府 郡(濱名 敷智 引佐 鹿玉 長田 長上 長下 磐田 豐田 山香 山名 周智 佐野 城飼 蓁原) 鄉 村里 名邑 莊保 藩封 田數 石高 出擧稻 國產(貢獻) 人口 風俗 名所 雜載

地部九

駿河國 六〇一

名稱 位置 疆域 地勢 道路 宿驛 建置沿革 國府 郡(志太 益頭 有度 安倍 廬原 富士 駿河) 鄉 村里 名邑 莊 藩封 田數 石高 出擧稻 國產(貢獻) 人口 風俗 名所 雜載

伊豆國 小笠原島附 六三六

名稱 位置 疆域(島嶼) 地勢 道路(航路) 宿驛 建置沿革 國府 郡(田方 那賀 賀茂 私稱郡名) 鄉 村里 名邑 莊(租) 田數 石高 出擧稻 國產(貢獻) 人口 風俗 名所 雜載

附小笠原島 六七九
名稱 位置 發見 開拓 產物

地部十

甲斐國 六八九
名稱 位置 彊域 地勢氣候 道路 宿驛 建置 沿革 國府 郡山梨八代巨摩都留 鄉 村里 名邑 莊 保九筋二領 田數 石高 出擧稻 國產貢獻 人口 風俗 名所 雜載

相模國 七四〇
名稱 位置 彊域島嶼 地勢 道路 宿驛 建置 沿革 國府 郡足上足下餘綾大住愛甲高座鎌倉三浦私稱郡名津久井縣 鄉 村里 名邑 莊 藩封 田數 石高 出擧稻 國產貢獻 人口 風俗 名所 雜載

地部十一

武藏國上 七九一
名稱 位置 彊域島嶼 地勢 地味 道路 宿驛 建置沿革 國府 郡久良都筑多磨橘樹荏原豐島足立新座入間

高麗 幡羅 葛飾 新羅

鄕（比企 榛澤） 村里（横見 那珂） 名邑（埼玉 兒玉） 莊保（大里 賀美）（男衾 秩父）

地部十二

武藏國下 江戶附 九一三

藩封 田數 石高 出擧稻 國產

貢獻 人口 風俗 名所 雜載

附 江戶 九三〇

名稱 疆域 地勢 沿革 道路 市坊（飯田町 麹町 櫻田 神田 外神田 日本橋 京橋 芝 三田 高輪 白銀 目黑 麻布 飯倉 溜谷 赤坂 青山 四谷 市谷 牛込 小石川 小日向 關口 高田 本鄕 湯島 根津 駒込 巣鴨 雜司谷 下谷 谷中 淺草 本所 深川）

產物 人口 風俗 名所 雜載

地部十三

安房國 一〇〇一

名稱 位置 疆域（島嶼） 地勢 道路 宿驛 建置

沿革 國府 郡（平群 朝夷 安房 長狹） 鄕 村里 名邑 莊

藩封 田數 石高 出擧稻 國產

貢獻 人口 風俗 名所 雜載

上總國　一〇二一

名稱　位置　疆域 島嶼　地勢　道路　宿驛　建置

沿革　國府　郡 市原 海上 畔蒜 望陀 周准 天羽 夷灊 長柄 山邊 武射 埴生 郡名私稱　鄉　村里　名邑　莊　藩封　田數　石高　出擧稻　國產 貢獻　人口　風俗　名所　雜載

下總國　一〇四九

名稱　位置　疆域 島嶼　地勢　道路　宿驛　建置

沿革　國府　郡 葛飾 千葉 印旛 匝瑳 海上 香取 埴生 相馬 猿島 結城 岡田 豐田 私稱郡名　鄉　村里　名邑　莊　藩封　田數　石高　出擧稻　國產 貢獻　人口　風俗　名所　雜載

地部十四

常陸國　一〇八七

名稱　位置　疆域　地勢　地味　道路　宿驛　建置

沿革　國府　郡 新治 眞壁 筑波 河內 信太 茨城 行方 鹿島 那珂 久慈 多珂 郡名私稱　鄉　村里　名邑　莊保　藩封　田數　石高　出擧稻　國產 貢獻　人口　風俗　名所　雜載

地部十五

近江國

名稱　位置　疆域島嶼　地勢氣候　道路　宿驛　建置沿革　國府　郡志賀 栗太 甲賀 野洲 蒲生 神崎 愛智 犬上 坂田 淺井 伊香 高島　鄉　村里　名邑　莊保　藩封　田數　石高　出擧稻　國產貢獻　人口　風俗　名所　雜載　一一五一

地部十六

美濃國

名稱　位置　疆域　地勢　道路　宿驛　建置沿革　國府　郡多藝 石津 不破 安八 池田 大野 本巢 席田 方縣 厚見 各務 山縣 武藝 郡上 賀茂 可兒 土岐 惠奈 中島 海西 羽栗　鄉　村里　名邑　莊保　藩封　田數　石高　出擧稻　國產貢獻　人口　風俗　名所　雜載　一二二九

地部十七

飛驒國

一三一三

名稱　位置　疆域　地勢　地味　道路　宿驛　建置沿革　國府　郡大野益田荒城　鄉　村里　名邑　莊　田數　石高　出擧稻　國產貢獻　人口　言語　風俗　名所　雜載

信濃國

一三四四
名稱　位置　疆域　地勢氣候　道路　宿驛　建置沿革　國府　郡伊那水內諏訪高井筑摩埴科安曇小縣更級佐久　鄉　村里　名邑　莊保　藩封　田數　石高　出擧稻　國產貢獻　人口　風俗　名所　雜載

古事類苑

地部一

地總載

地ハ、ツチト云フ、天ニ對スル稱ナリ、國ハ、クニト云フ、原ト土地ノ一區域ヲ稱スル名ナリ、故ニ大ニシテハ日本全國ヲ謂ヒ、小ニシテハ一郡一鄕ノ地ヲモ謂ヘリ、

抑、我邦ノ國號ハ、遠ク神代ニ在リテハ大八洲國ト云ヒ、葦原中國ト云ヒ、又瑞穗國トモ云フ、神武天皇都ヲ大和國ニ奠メ給ヒショリ、ヤマトノ稱アリ、孝德天皇ノ大化元年ニ至リ、始テ大日本國ト號ス、

古來全國ヲ別チテ汎ク東國、西國ト云ヒ、又坂東、坂西、關東、關西トモ云フ、又各地方ヲ稱シテ、吾妻、奥羽、北國、中國、四國、九州トモ云ヘリ、

畿內ハ、ウチツクニト云ヒ、後ニ字音ヲ以テキナイト稱ス、畿外ニ對スル稱ナリ、畿外ハ之ヲ七道ニ分ツ、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海、卽チ是ナリ、

國ハ後ニ、私ニ稱シテ州トモ云ヘリ、神武天皇ノ朝、始テ國造、縣主ヲ置キ、成務天皇ノ時、諸國ノ境堺ヲ定ム、孝德天皇大化改新ニ至リ、唐制ニ摸倣シテ、新ニ國司、郡司ヲ置キ、文武天皇大寶ノ制、國ヲ大、上、中、下ノ四等ニ分ツ、其國數ハ、孝謙天皇ノ時、既ニ六十二國アリ、嵯峨天皇ノ弘仁十四年、加賀國ヲ置キ、淳和天皇ノ天長元年、多褹島ヲ大隅國ニ隷屬セシムルニ及ビ、六十八國トナレリ、明治ノ初年、陸奥、出羽ヲ七國ニ分チ、又蝦夷ヲ北海道ト稱シテ、之ヲ十一國

名稱

ニ分チ、琉球國ヲ我ガ封土ト爲ス、是ニ於テ總テ八十五國トナル、尋デ又臺灣、及ビ樺太半部ヲ割取シ、朝鮮ヲ併合シテ、其疆域ノ大ナル、今日ノ如キハ、未ダ曾テ有ラザル所ナリ、

縣ハ、アガタト云フ、後世ノ郡ノ類ナリ、但シ上古ハ、縣ト國トハ相並ビタルモノニテ、縣主ハ必ズシモ國造ノ下ニ在ラザリキ、

郡ハ、コホリト云フ、國内ニ於ケル一區域ナリ、孝德天皇ノ大化二年、始テ郡ヲ大、中、小ノ三等ニ分ツ、大寶制令ノ時、之ヲ改テ大、上、中、下、小ノ五等ト爲シ、國ヲシテ之ヲ管セシム、

鄕、里ハ、共ニサト、訓ズ、郡内ノ一小區域ナリ、大寶ノ制、五十戶ヲ以テ一里ト爲シ、之ヲ郡ノ下ニ置ク、元正天皇ノ靈龜元年ニ至リテ、里ヲ改テ鄕ト爲シ、鄕ノ下ニ更ニ里ヲ置ケリ、後世多ク村名ヲ用キルニ至リテ、鄕里ノ制漸ク廢セリ、

村ハ、ムラト訓ズ、鄕内ノ小區域ナレドモ、鄕里ノ稱廢シテヨリ直ニ郡ニ屬セリ

地名ニ好字ヲ用キルコトハ、元明天皇ノ和銅六年ノ制ニシテ、風土記ヲ作ルコトモ亦此時ニ起ル、德川幕府ノ時、史局ヲ置テ、新ニ地誌ヲ編修セシメシコトアリト雖モ竟ニ成ラズ、地圖ヲ製スルコトハ、天武天皇ノ時ヲ以テ初トス、而シテ今傳ハル所ハ拾芥抄ニ載スル僧行基ノ作、最モ舊シト云ヘリ、

〔類聚名義抄六土〕地（墜利反　トコロ）坤也

〔段注說文解字十三下土〕坤元气初分、輕淸昜爲天、重濁侌爲地、（元者始也、陰陽大論曰、黃帝問於岐伯曰、地之爲下否乎、岐伯曰、地爲人之下、大虛之中者也、黃帝曰、馮乎、岐伯曰、大氣擧之也、按地之重濁而包擧乎輕淸之氣中、是以不墜、）萬物所敶列也、○註略从土、（地以土生物、故从土、）也聲、（坤道成女、玄牝之門、爲天地根、故其字从也、或云从土乙力、其可笑、有如此者、徒四切、古音在十七部、漢書或假爲第、但也之集、）

〔釋名一釋地〕地者底也、其體底下載萬物也、亦言諦也、五土所生莫不信諦也、易謂之坤、坤順也、上順乾也、

〔伊呂波字類抄 知地儀〕地

〔古事記 上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、〇下略

〔日本書紀 一神代〕古天地未剖、陰陽不分、渾沌如雞子、溟涬而含牙、及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭〇竭原作場、據一本改、難、故天先成而地後定、然後神聖生其中焉、故曰、開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、

〔淮南子 一俶眞訓〕天地未剖、陰陽未判、四時未分、萬物未生、汪然平靜、寂然淸澄、莫見其形、

〔淮南子 一天文訓〕天墜未形、馮馮翼翼、洞洞灟灟、故曰大昭、道始于虛霩、虛霩生宇宙、宇宙生氣、氣有漢垠、淸陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地、淸妙之合專易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定、

〔釋日本紀 五述義〕三五曆記曰、天地渾沌如雞子、盤古生其中、萬八千歲、天地開闢、陽淸爲天、陰濁爲地、盤古在其中、一日九變、神於天、聖於地、

〔萬葉集 二十〕阿米都之乃、以都例乃可美乎、以乃良波加、有都久之波波爾、麻多己等刀波牟、

右一首、埴生郡大伴部麻與佐、

〔神代直指抄 一〕つちといふは、ひきゝ義、せばき義、いやしき義、くだる義、四義そなはりて、陰道の義をあらはす、つちをちといふ、ちは合聲にて、下の義也、のちに雨をあめといふは、天よりふるゆへに、天のことばを、そのまゝかりていふ、土をつちともいふ、これ又かりていふことば也、

〔日本釋名 上天象〕天地〇中略　つちといふはひきゝ義、いやしき義を取て陰道をあらはす、

〔東雅 二地輿〕地ツチ　義不詳、按ずるに我國太古の語には、天に對しては必ず國といひけり、天ツ神國ツ神、天御柱、國御柱などいふ類、悉く皆然らざるはなし、されば舊事古事等の記に見えし地の字を讀むにもクニといひ、又はトコロなど讀む、舊事紀の始に、天地未剖などしるされし事あれど、これはまさしく三五曆記、淮南子等に見えし所を、槩括して其文を成され、地の字を讀む事、我國もとより土を呼ぶことばによ

りて、ツチとせられしと見えたり、されど其餘太古の事どもしるされしことばの中に、天に對し言ふに、地をもてせられし事は見えず、さらばアメツチなどいふは、我國の上世よりいひつぎしことばとは聞えず、（萬葉集の歌に、アメツシと讀しは則轉語なり、）古事記の始に見えし所も、舊事紀の文によれるなるべし、日本紀の如きは、舊事紀に據りて撰ばれし所也といひ傳へたり、舊事紀すでにかくの如し、其他はいふに及ばず、（或人の説に、土、地の字共にツチとよむは、漢音によれる歟、當時南京の音をもて土地の二字を合せ呼ぶにツチといひ、タ○い○といふが如しといふなり、我國に漢字の傳りてより此かたの語には、漢音によりて我國の方言ともなりしいくらもあれど、土をいひてツチともツヽともいひしが如きは、我國太古よりの語たる事、疑ふべくもあらねば、其說また據るにたるべしとも覺へず。）

〔倭訓栞前編部十六〕つち　土地の音の如くいへど、大地はいづくまでも一土塊なれば、つゞきの義、つき反ち也といへり、

〔古事記傳三〕都知とは、もと泥土の堅まりて、國土と成れるより云る名なる故に、小くも大きにも言り、小くはたゞ一撮の土をも云と又廣く海に對へて陸地をも云を、天に對へて天地と云ときは、なほ大きにして、海をも包たり、

〔八雲御抄三上地儀〕地　しまのね　あらかね

〔古今和歌集序〕やまとうたは、人の心をたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける、○中略しかあれども、世につたはることは、ひさかたのあめにしては、したてるひめにはじまり、あ○ら○か○ね○の○つ○ち○にしては、すさのをのみことよりぞおこりける、

〔伊呂波字類抄知疊字〕地理

〔書言字考節用集一乾坤〕地理（關ニ東西南北、國土、山川、水石、草木類、）地形（本見ニ淮南子一）地脈

〔日本略記〕一日本之名之事、第一日域、第二日本、第三豐葦原、第四秋津島、第五大和國、第六和國、第七吾朝、第八東海州、第九水穗國、第十堪忍國、第十一神國といふ、

〔日本國郡沿革考(總說一)〕按本朝古以倭爲國號者、日本紀纂疏等之說、說得其實也否、未可知也、後改號日本、據本居宣長說云、蓋在大化二年二月也、雖國史不載其事、察其文理、則於是時改國號昭々矣、(釋日本紀引延喜講記云、日本者自唐所號也、隋文帝開皇中、入唐使小野妹子、時改倭號爲日本、然依隋皇暗物理、遂不許、至唐武德中、始號日本、和漢春秋引括地志云、和國、武后改曰日本國、新唐書云、倭咸亨元年遣使賀平高麗、後稍習夏音、惡倭名、更號日本、自言近日所出、三國史記云、新羅文武王十年十二月、倭國更號日本、自言近日所出、以爲名、按以上諸說皆有小異同、雖未可悉信、始附載以備參考、)而古史所載國號不一、或大八州國、(又作大八島國、見古事記等、)或葦原中國、(日本紀)或豐葦原之水穗國、或豐葦原千五百秋之瑞穗國、或秋津洲、(又作秋津島、或蜻蛉洲、或豐秋津洲、見日本紀等、閩書云、日本古倭國、其地東高西下、勢若蜻蜓、古亦曰蜻蜓國、)或浦安國、(日本紀)或細戈千足國、或磯輪上秀眞國、或虛見日本國、皆古雅可稱之美號也、今世雖用之、爲不害國體、或又名師木島、(或磯城島、)是本舊京之名、非國號、後世沿稱、遂爲全國之號矣、而又有漢人所名之國號、或扶桑、(淮南子云、日拂于扶桑、)或君子國、(山海經云、有君子之國、其人衣冠帶劍、注、亦使虎豹、好謙讓也、)或耶馬臺、(後漢書)或汗國、(魏書)或阿每鄉、(據三綱行實)若是等之稱、於彼稱之、猶爲未允當、況於我稱之、尤不得事體、好事者或爲文雅之稱用之、尤可厭也、

〔運步色葉集(丹)〕日本

〔書言字考節用集(一乾坤)〕日本(ニツポン)

〔釋日本紀(一開題)〕日本國　倭國○中略

問、大唐謂此國爲倭、而今謂日本者、是唐朝所名歟、將我國自稱歟、答、延喜講記曰、自唐所號也、隋文帝開皇中、入唐使小野妹子、改倭號爲日本、然而依隋皇暗物理、遂不許、至唐武德中、初號日本之號、延喜公望私記曰、案隋書東夷傳、倭國在百濟新羅東南水陸三千里、於大海之中、依山島而居、三十餘國皆稱王、其國境、東西五月行、南北三月行、地勢東高西下、於耶摩堆(ヤマタイ)則魏志所謂耶馬臺者也、新羅百濟皆以倭爲大國、多珍物、並敬仰之、恒通使往來、大業三年(隋煬帝大業三年、當本朝推古天皇十五年丁卯、)其王多利思比孤遣使朝貢、使者曰、聞海西菩薩天子、重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法、其國書曰、日出處天子、致書日沒處天子、無恙云々、帝覽之(○之原脫、據一本補、)不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者、勿復以聞云

云、就之案之、既自謂日出處天子、不可言大唐之所名歟云々、又答、推古天皇十六年九月聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白於西皇帝云々、是亦○亦原脫、據一本補、可謂日本之濫觴也、

問、號日本濫觴、見大唐何時書哉、

答、元慶說不詳、公望私記曰、大寶二年壬寅、當唐則天皇后長安二年、續日本紀云、此歲正四位上民部卿粟田朝臣眞人爲遣唐持節使、唐曆云、此歲、日本國遣其大臣朝臣眞人貢方物、日本國者、倭國之別名也、朝臣眞人者、猶中國地官尙書也、頗讀經史、容止温雅、朝廷異之、拜司膳員外郞云々、大唐稱日本之濫觴見於此、又應神天皇御時、高麗上表、云日本國云々、然則稱○稱原脫、據一本補、日本之旨亦此時歟、

又師說云、日本之號、雖見晉惠之時、義理不明、

〔國號考〕日本又比能母登といふ、事なも附いふ

日本とは、もとより比能母登といふ號の有しを書る文字にはあらず、異國へ示さむために、ことさらに建られたる號なり、公式令詔書式に、明神御宇大八洲天皇詔旨とあるをば、義解に、用於朝廷大事之辭也といひ、明神御宇日本天皇詔旨とあるをば、以大事宣於蕃國使之辭也、といへるをもて知べし、さて此號を建られたるは、いづれの御代ぞといふに、まづ古事記に此號見えず、又書紀皇極天皇の御卷までに、夜麻登といふに日本とかゝれたるは、後に此紀を撰ばれし時に、改められたる物にして、そのかみの文字にはあらざるを、孝德天皇即位、大化元年秋七月丁卯朔丙子、高麗百濟新羅並遣使進調云々、巨勢德大臣詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨云々と見えたる、これぞ新に日本といふ號を建て、示したまへるはじめなりける、故さき〴〵の詔のさまとは異になむありける、また同二年二月甲午朔戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓云々、これは異國人に示す詔にはあらざれども、此號を建られて、始めたる詔なるが故に、かく宣で皇朝の人どもにも、新號を示したまへるな

り、もし然らざれば、日本倭根子と、倭へ重ねて宣たまへるは、やまと〱と同じことのいたづらに重なるにあらずや、か丶ればこの日本といふ號は、孝德天皇の御世、大化元年にはじめて建られたることいちじるし、然るを世々の識者ども、かの文をよく考へざる故に、何れの御世より始まりしとも、えしらざるなり、すべて此孝德の御世には、年號なども始まり、その外も新に定められつる事どもも多かれば、此號の出來しも、いよ〱由有ておぼゆるなり、さてこれをもろこしの書どもと引合せて驗るに、隋の代までは倭とのみいへるを、唐にいたりて、始めて日本といふことは見えたり、新唐書に、日本古倭奴國也、咸亨元年、遣使賀平高麗、後稍習夏音、惡倭名更號日本、〇中略といへり、舊唐書には、倭と日本とを別に擧て、日本國者倭國之別種也、〇中略といへり、これらを見るに、此號の出來ていまだいくほどもあらざりしころなる故に、彼國にては、いまださだかには知らざりしなり、大化元年は、唐太宗が世、貞觀十九年にあたれるを、かの咸亨元年は、その子高宗が世にて、天智天皇の九年にあたれば、廿五年後なり、その間にも往來は有つれども、なほかの國へは、もとのま丶にて御言は通はされて、日本といふ新號の建しことは、たゞ此方の人のわたくしに語れるなどを、かつ〲聞るばかりにぞ有けむ、さて後文武天皇の御代に、粟田朝臣眞人を大御使につかはし丶をりよりぞ、かの國へも正しく日本とはなのられける、此朝臣かしこにまかり著たりし時に、いづれの國の御使ぞととはれて、日本國の使なりと名のりしこと、續紀に見え、又かの舊唐書にもさき〲の往來のことをば、みな倭國といふ方にしるして、日本國といふ方には、此眞人朝臣のまかりけるを始めとしてしるしたり、此時かの國は、武后が世なりき、故或說に此號を、唐武后が時に、かの國よりつけたるごとくにいへるは、ひが事ながら此由なり、さて又三韓の使には、大化元年にすなはち宣知らせたまひしこと、上に書紀を引ていへるがごとくなるを、その國の東國通鑑といふ書に、新羅の文武王十年のところに、倭國更號日本、自言近日

所出以爲名といへるは、唐の咸亨元年にあたりて、年も文も同じければ、かの唐書をとりて書たる物にて、論にたらず、すべて東國通鑑は、かくさまのうけがたき事のみぞおほかる、日本としもつけたまへる號の意は、萬國を御照しましますす、日の大御神の生ませる御國といふ意か、又は西蕃諸國より、日の出る方にあたれる意か、此二つの中に、はじめのは殊にことわりにかなへれども、そのかみのすべての趣を思ふに、なほ後の意にてぞ名づけられけむ、かの推古天皇の御世に、日出處天子とのたまひつかはしゝと同じこゝろばへなり、

〔唐書東夷列傳二百二十〕日本古倭奴也、○中略咸亨元年、遣使賀平高麗、後稍習夏音、惡倭名更號日本、使者自言、國近日所出、以爲名、或云、日本乃小國、爲倭所幷、故冒其號、使者不以情故疑焉、

〔舊唐書東夷一百四十九上〕日本國者倭國之別種也、以其國在日邊、故以日本爲名、或曰倭國、自惡其名不雅、改爲日本、或云、日本舊小國、併倭國之地、○下略

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年七月丙子、巨勢德大臣詔於高麗使曰、明神御宇日。本。天皇詔旨、○中略 二年二月戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日。本。倭。根子天皇詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓、○下略

〔令義解公式七〕詔書式○義解略明神御宇日本天皇詔旨謂以大事宣於蕃國使之辭也云々咸聞○下略

〔大師御行狀集記〕御生土條第一

有書曰、大。日。本。國讃岐國多度郡、

〔朝野群載文筆三〕尊星王供告文

維康和二年歲次庚辰十月朔甲午十一日甲辰、南贍部州大。日。本。國。皇帝諱謹敬白、○下略

式部大輔正家

〔本朝神社考序〕夫本朝者、神國也、○中略中世寖微、佛氏乘隙、移彼西天之法、變吾東域之俗、王道既衰、神

ひのもと

道漸廢、而以二其異端離一レ我而難レ立、故設二左道之説一曰、伊弉諾、伊弉冉者、梵語也、日神者、大日也、大日ノ本國故、名曰二日本國一、

〔南留別志三〕一大日本國をきりて、大日の本國といふは、物わらひなる滑稽なり、

〔神代卷口訣一〕爲二日本一者、從二日始出一吾國之義、比乃茂止者、而自讀、

〔國號考〕日本をも比能母登といふ事附いふ○中略

比能母登といふ號は、古の書に見えず、日本といふは、意はその意なれども、もと異國へしめさむために設けたまへるなれば、ひのもとゝはよまず、始めより爾富牟と字音にぞいひけむ、萬葉集に日本之とあるを、ひのもとのと訓るところ多かるは、後人のしひて五言によまむためのひがことにて、皆四言にやまとのとよむべきなり、たゞ三の卷なる不盡山の長歌に、日本之、山跡國乃云々とあると續後紀十九卷、興福寺の僧の長歌に、日本乃、野馬臺乃國遠云々、また日本乃倭之國波云々、などゝある、これらのみは、ひのもとのなり、されどこは國號にいへるにはあらず、倭といはむ枕詞なり、それにつきて、おのれ○本居宣長いまだわかゝりし程に思へりしは、やまとを日本と書故に、その字のうちまかせたる訓を、やがて枕詞におけるにて春日の春日、飛鳥の飛鳥など、同じ例なりと思へりしはあらざりき、まづ春日のかすがとは、春の日影のかすむといふ意につづけ、飛鳥のあすかとは、書紀に、天武天皇の十五年、改レ元曰二朱鳥元年一、仍名レ宮曰二飛鳥淨御原宮一とある、これ朱鳥の祥瑞の出來つるをめでたまひて、年號をも然改めたまひ、大宮の號をも、飛鳥云々とはつけたまひしなり、さればこれは、とぶとりの淨御原宮とよむべきなり、あすかの淨御原といはむは、本よりの地名なれば、ことさらにこゝに、仍名レ宮曰云々、などいふべきにあらざるをおもふべし、とぶ鳥とは、はふ虫といふと同じくて、たゞ鳥のことなり、さて大宮の號を然いふから、その地名にも冠らせて、飛鳥の明日香とはいへるなり、さてかすがを春日、明日香を飛鳥ともか

くことは、いひなれたる枕詞の字をもて、やがてその地名の字となせる物なり、そはかのあをによし、おしてるなどいふ枕詞を、やがて奈良難波の事にしていへると、心ばへ相似たり、かゝれば春日のかすが、飛鳥の明日香といふは、その地名の字のうちまかせたる訓を、枕詞になせるにはあらざれば、ひのもとのやまとも、然にはあらず、又これは枕詞のひのもとてふ字をもて、國名の夜麻登の字として、日本とかくにもあらざれは、かの二つの例にもあらず、たゞ日の本つ國たる倭といふ意にぞ有ける、それにとりて此枕詞、もしいと古くより有しことならば、孝德天皇も、日本といふ名は、これをおもほしてや建たまひけむ、されどかの不盡山の歌は、いとしも古からず、それよりあなたには見えざれば、こは日本といふ號のこゝろをおもひて、後にいひそめつるにもあらむか、その本末はわきまへがたくなむ、

〔萬葉集雜歌三〕詠不盡山歌一首
奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流、駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、出立有、不盡能高嶺者、〇中略日本之、山跡國乃、鎭十方、座神可聞、〇下略

〔續日本後紀仁明十九〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、〇中略副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、〇下略

〔十六夜日記〕さらにおもひつゞくれば、やまとうたの道は、たゞまことすくなく、あだなるすさみばかりとおもふ人もやあらん、ひのもとの國に、あまのいはとひらけし時、よもの神だちのかぐらのことはをはじめて、世をおさめ物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、

〔續古今和歌集十羇旅〕もろこしに渡りて侍りける時、秋の風身にしみける夕、日本にのこりとまれりける母の事など思ひてよめる、　權僧正榮西
唐土の梢もさびし日の本のはゝその紅葉散りやしぬらむ

日出國

〔玉葉和歌集二十神祇〕神祇の歌の中に　　　後京極攝政前太政大臣○藤原良經

我國はあまてる神のすゑなれば日の本としもいふにぞ有ける

〔日本書紀纂疏一〕日本、吾國之大名、在東海中、近於日所出也、

〔隋書八十一倭國〕大業三年○推古天皇十五年其王多利思比孤○舒明天皇、號息長足日廣額、遣使朝貢、○中略其國書曰、日。出。處。天。子。致書日沒處天子、無恙云々、帝○隋煬帝覽之不悅、

〔日本書紀二十二推古〕十六年九月辛巳、唐客裴世淸罷歸、則復以小野妹子臣大使、○中略副于唐客而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東。天。皇。敬白西皇帝、○下略

〔書言字考節用集一乾坤〕日本日。域。

日域

〔同二乾坤〕日域ジツイキ日本一名、師古云、日初出之處、

〔和爾雅一地理〕日本國異名

日域ジツイキ長楊賦、東震日域、師古云、日初出之處也、故吾邦人取用之、

〔日本略記一〕三國之名目之事、天竺をば月を像て月氏國と言、唐土をば星を象て震旦國といふ、日本をば日を像て日域といふ也、

〔朝野群載三文筆〕對馬貢銀記　　　作者江納言

對馬島者、在本朝之西極、○中略欽明天皇之代、佛法始渡吾土、此島有一比丘尼、以吳音傳之、因茲日域經論皆用此音、故謂之對馬音、

〔武將感狀記三〕一平松金次郎ハ、生資驍勇ニシテ外貌溫順ナリ、○中略長久手合戰ノ前ニ、平松朱柄ノ鎗ヲコシラヘタリト云、人相見テコレヲ笑フ、白柄ノ鎗ヲ以テ敵ト鋒ヲマジヘ、鎗ニ血付ルコト度々ニ及デ後ナラデハ、朱柄ノ鎗ヲ持セザルハ、日域ノ武夫ノ法ナリ、○下略

日東島卿

〔和爾雅一地理〕日本國異名

日東ニットウ華人稱日本爲日東、自古而然、近世宋景濂作日東曲十首、

大八洲國

島卯(ヒバウ)國 華人稱日本曰島卯、言島日也、卯東也、見于菩無長碑、

〔書言字考節用集二乾坤〕日東(ジツトウ) 事苑、則日本國也、 島卯(ヒノモト) 支那人斥本朝云爾、蓋島日也、卯東方也、猶言日東、見菩無長碑、

〔書言字考節用集一乾坤〕十八洲國(オホヤシマグニ) 日本一名 八洲(ヤシマ) 日本一名、并畿内七道之義、見日本紀、

〔國號考〕大八島國(オホヤシマ)

皇大御國の號、神代に二つあり、一つには大八島國(オホヤシマクニ)、二つには葦原中國(アシハラノナカツクニ)なり、その大八島國といふは、古事記に、〇中略故因此八島先所生、謂大八島國と見えたり、書紀にも生坐る次第などは、傳々異なれども、八つの數は同じくて、由是始起大八洲國之號焉とあり、そも〳〵志摩(シマ)とは周廻(メグ)りに界限(カギリ)のありて、一區なる域をいふ名なり、〇中略さてこの大八島の島も、海の周りて隔れる一界の國をいへるにて、その例は、書紀の神代卷に三韓國をも韓郷(カラクニ)之島といひ、萬葉集の歌には、海をへだてゝは、大和國の方をさしても倭島とよみ、又此大八島をすべても、倭島根とよめるなど是なり、さて八島としもいふは、海を隔てずて一連なるをば、幾國にまれ一島として、その數八なればなり、かくてその八(ヤ)は例の彌(イヤ)にて、もとはたゞ島の數の多かる意の號なりけむを、やゝ後に八つの意にとりて、その數をとゝのへていひ傳へたるかとも疑はるめれども、古事記にしるされたる八つにて、畿内(ウチツクニ)七道(ナヽミチ)の諸國(クニ〴〵)みな備はり、又他の島々は一つもまじらずして、餘れるもなく足ざるもなければ、本より八つの數は動かざるにこそ、書紀の傳々には、此内に他の島々もまじれゝば、八つの數動けれども、古事記の正しきにつきて定むべきなり、さて此號(ナ)は、外國に對はず、ひとりたちて天の下を統言號なり、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命、〇中略伊邪那美命〇中略御合、生子淡道之穗之狹別島、訓別云和氣、下效此、次生伊豫之二名島、〇中略次生隱伎之三子島、〇中略次生筑紫島、〇中略次生伊伎島、〇中略次生津島、〇中略次生佐度島、次生大倭豐秋津島、〇中略故因此八島生所生、謂大八島國、

葦原中國

〔日本書紀神代一〕於是陰陽〈○伊弉諾尊、伊弉冉尊〉始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、廼生大日本〈日本、此云耶麻騰、下皆效此、〉豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生筑紫洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、世人或有雙生者象此也、次生越洲、次生大洲、次生吉備子洲、由是始起大八洲國之號焉、

〔古事記上〕此八千矛神、將婚高志國之沼河比賣、幸行之時、到其沼河比賣之家、歌曰、夜知富許能、迦微能美許登波、夜斯麻久爾、都麻麻岐迦泥氐、登富登富斯、故志能久邇邇、佐加志賣遠、阿理登岐加志氐、久波志賣遠、阿理登伎許志氐、〈○下略〉

〔古事記中景行〕爾其熊曾建白言、莫動其刀、僕有白言、爾暫許押伏、於是白言、汝命者誰、爾詔、吾者坐纏向之日代宮、所知大八島國、大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子、名倭男具那王者也、〈○下略〉

〔令義解七公式〕詔書式〈○中略〉明神御大八洲天皇詔旨、〈謂用於朝廷大事之辭、卽立皇后皇太子、及元日受朝賀之類也、〉云々、咸聞、

〔下學集上天地〕豐葦原〈本總名也、亦云葦原之三穗國也、或書云、二神以矛探海底、有物碍矛、曰、碍矛物何哉、今地主權現日吉答曰、碍矛物卽葦也、故云葦原國也、〉

〔書言字考節用集二乾坤〕葦原國〈日本一名〉

〔國號考〕葦原中國〈水穗國をも附いふ〉

葦原ノ中ツ國とは、もと天つ神代に、高天原よりいへる號にして、此御國ながらいへる號にはあらず、さて此號の意は、いと〳〵上つ代には、四方の海べたはこと〴〵く葦原にて、其中に國處は在ッて、上方より見下せば、葦原のめぐれる中に見えける故に、高天ノ原よりかくは名づけたるなり、かれ古事記、書紀に此號はおほく天上にしていふ言にのみ見えたり、心をつけて考ふべし、その中に此御國にていへるも、いと稀にはなきにしもあらざれども、そは御孫命の天降坐て後には、此御國にても、もと天上にありて、いひならへる號をもて呼べることも有しよりおこれるなり、さてよもの海邊のこと〴〵に、葦原なりしことは、續後紀に、仁明天皇の四十の御賀に、興福寺の僧等

の獻れる長歌に、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毘古那加、葦菅遠、殖生志川々、國固米、造介牟與理云々とよめる、此書今傳はれる古事どもには見えざれども、かくよめるは、必そのかみ據ありけむ、さればもと大穴牟遲、少名毘古那二柱ノ御神の、國造堅めむために、植生し殖らしたまへるなりけり、かくて中昔のころまでも、海の渚には、いづくにも葦の多かりしこと世々の歌どもなどを見てもしるべし、さて此葦原ノ中ツ國てふ號には、くさぐさ說あれども、皆古の意にかなはず、そのわろき由は、ことごとに論はむも、わづらはしければもらしつ、○中略

○豐また大てふ稱辭

葦原中國、秋津島などに、豐てふ言を冠らせて、豐葦原中國、豐秋津島といひ、八島、倭などには、大てふ言を冠らせて、大八島、大倭といふ、これらの國號のみにもあらず、凡て豐とも大ともいへる例多き、みな上つ代の稱辭なり、然るを大日本などいふ大は、もろこしの國にて、當代の國號をたふとみて、大漢、大唐などいふにならへる物ぞといふ說のあるは、古のことをしらぬ、例のおしあてのみだりごとなり、もし然いはゞ、かの豐葦原などの豐は、いかにとかいはむ、こはかの國にはさらに聞えぬ美稱なるものをや、又もろこしにては、王の母を大后とはいふを、皇國の古には、當御代の嫡后を大后と申せりき、これらも、大といふこと、すべてかの國にならへるにあらざる證なり、然るを書紀には、古稱をたがへて、大御母をしも、皇太后と記されたる、これぞ彼國にならへるにては有ける、書紀にはかく彼國にならひてかゝれたる事もおほきからに、神代よりありこし事をも、かれと似たるをば、皆ならへるにやとは疑ふなり、抑大てふ美稱は大臣、大連などいふたぐひ猶多し、みないと上つ代よりのことにて、大倭といへるも、古事記の景行天皇御段に、熊曾建が詞に、大倭國と見え、また懿德天皇、孝安天皇、孝靈天皇、孝元天皇などの大御名、又古事記には、意富夜麻登玖邇阿禮比賣命と、假字に書る御名さへあるをや、

〔古事記傳 六〕或書に葦牙に喩しより名る由云るは、上ッ代の意に非ず、さては原と云ひ中と云ことも由なし、又中ッ國と云を、漢國の人のみづからほこりて、中華、中國と云と同じさまに說なすも、彼をうらやみたるひがことなり、たゞ葦原の中なる物をや、又この葦原ノ中國といふは、西ノ九州をさすと云は、高天ノ原を大和ノ國のことぞと誤り思ふから出たる强說なり、

〔古事記 上〕爾伊邪那岐命告桃子、汝如助吾、於葦原中國所有宇都志伎此四字以音靑人草之落苦瀨而患惚時、可助告、賜名號意富加牟豆美命、自意至美以音

〔大三輪神三社鎭座次第〕初伊弉諾伊弉冊二神共爲夫婦、生大八洲國及處々小島、而地稚如水母浮漂之時、大己貴命與少彥名命、戮力一心、殖生蘆葦、固造國地、故號曰國造、大己貴命因以稱曰葦原國、

〔書言字考節用集 二乾坤〕瑞穂國 日本一名

〔國號考〕葦原中國 水穂國を附いふ〇中略

これを豐葦原之水穂國ともいへり、豐は美稱にて、大八島の大のたぐひなり、そは此ノ國號へすべて係れり、葦のみにかけて云にはあらず、葦原は上件にいへるが如し、水の字は借字にて、物のうるはしきをほむる言にて、これは穂をほめたるなり、書紀に瑞字を書れたるはあたらず、彼字につきて、祥瑞などの意とな思ひまがへそ、穂は稻穂をいへり、葦のにはあらず、凡て稻穂をたゞに穂とのみいへるは、萬葉に秋穂などもいひ、書紀に天照大神又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穂、亦當御於吾兒とあるがごとし、さて皇國は萬の事も物も、異國にはまされる中にも、稻は殊に萬ノ國に比ひなく、はるかにすぐれて、いと美好きこと、神代よりかくのごとく深き由緒のありて、今に至るまで、まことに水穂國の名に負へるたふとさ、いふもさらなるを、天の下の諸人、かゝるめでたき稻をしも、朝夕に給べながら、皇神の御惠をおろそかに思ひなすべきわざかは、

〔古事記 上〕天照大御神之命以、豐葦原之千秋長五百秋之水穂國者、我御子正勝吾勝勝速日天忍穂

やまと

耳命之所知國、言因賜而天降也、

〔神代卷口訣一〕神代之本名、豐葦原千五百秋瑞穗國也、

〔日本書紀三神武〕神日本磐余彥天皇、○中略及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、昔我天神高皇產靈尊、大日孁尊、擧此豐葦原瑞穗國、而授我天祖彥火瓊瓊杵尊、○下略

〔延喜式八祝詞〕大殿祭

皇我宇都御子皇御孫之命、此乃天津高御座爾坐氐、天津日嗣乎、萬千秋乃長秋爾、大八洲豐葦原瑞穗之國乎、安國止平久氣所知食止、古語云、志呂志女須、言寄奉賜比氐、○下略

〔下學集上天地〕山迹○○大和也、日本總名也、日本記(記下恐脫私記二字)云、天地開始時、人皆住山、其地未堅、人迹見矣、是以云山迹也、又云山止、人皆止住山、故云爾、

〔書言字考節用集一乾坤〕大和又作大倭、日本一名、今按大和國、本朝人皇帝都始故、稱之、猶文王起周而名周世、高祖起漢而名漢世之類者乎、　山迹同、事見日本紀、神皇正統記、日本同

〔日本書紀一神代〕於是陰陽○伊弉諾尊○伊弉冉尊始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、廼生大日本○日本、此云耶麻騰、下皆效此、豐秋津洲、

〔國號考〕日本此を夜麻登といふ事も附いふ○中略

夜麻登といふに、日本といふもじを用ふることは、書紀よりはじまれり、そはいまだ例なき事にて、世人のまどふべき故に、神代卷に、日本此云耶麻騰、下皆效此、といふ訓注はあるなり、古事記は、大化の年よりはるかに後に出來つれども、すべての文字も何も、ふるく書傳へたるまゝにしるされて、夜麻登にもみな倭字をのみかきて、日本とかゝれたる所はひとつもなきを、書紀は、漢文をかざり、字をえらびてかゝれたる故に、あらたに此嘉號をあてゝかゝれたるなり、但し畿内の一國のやまとには、おほく倭とかき、天の下の大號のには日本とかき、又一國の名の時も、おほやけにかゝれるをば日本とかゝれて、紀中おほかた此例なり、人名も此こゝろばへにて、天皇の大

には日本、さらぬ人のには倭とかゝれたり、神日本磐余彥天皇、倭姬命などのごとし、日本武尊は、天皇の大御父に坐て、よろづ天皇とひとしきゆゑに、日本とはかゝれつるなり、

〔日本書紀六垂仁〕二年、是歲任那人蘇那曷叱智請之、欲歸于國、(中略)一云、御間城天皇(崇神)之世、(中略)意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等、亦名曰于斯岐阿利叱智干岐、傳聞日本國有聖皇、以歸化之、到于穴門、○下略

〔日本書紀二十二推古〕二十九年二月、高麗僧惠慈聞上宮皇太子薨、以大悲之、○中略誓願曰、於日本國有聖人、曰上宮豐聰耳皇子、固天攸縱、以玄聖之德、生日本之國、

〔神代卷口訣一〕神武天皇都開大倭國、以本處之名、總稱大八州、天平勝寶改爲大和、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字二年二月己巳、勅曰、得大和國守從四位下大伴宿禰稻公等奏偁、○下略

〔國號考〕豐また大てふ稱辭○中略

大和と書たるは、かならず意富夜麻登とよむことなり、和名抄に、畿內の大和も、又その國の城下郡なる大和鄉も、ともに於保夜萬止とあるをもて知べし、然るをつねの語にたゞ夜麻登とのみいふから、大字の添へるをも、たゞ夜麻登とのみよみ、また夜麻登といふに、かならず大字を添てかく事と心得たるなど、みなひがことなり、たゞ夜麻登といふには、和字のみかけり、但し諸國の名、又郡鄉の名、皆必二字に書べしとの御定なれば、畿內の國名、又その國名には、必大字を添書て意富夜麻登と訓ぞ正しかりける、

〔萬葉集三雜歌〕柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首

名細寸、稻見乃海之、奧津浪、千重爾隱奴、山跡島根者、○一首略

〔弘仁私記序注〕日本國○中略古者謂之倭國、○中略通云山跡、山謂之耶麻、跡謂之止、音登戸反、下同、夫天地剖判、泥濕未燥、是以栖山往來、因多蹤跡、故曰耶麻止、又古謂居住爲止、言止住於山也、音同上、○據元元集補、據原无、

〔古今集序注上〕今注云、ヤマト者斯國之總名、通云山跡也、山謂耶麻、跡謂止也、夫天地剖判、泥濕未燥、栖山往來、因多蹤跡、故云山跡、又古語謂居住為止、言止住於山也、仍云山止、

〔釋日本紀一開題〕日本國　倭國〇中略

延喜開題記曰、師說、大倭國草昧之始、未有居舍、人民唯據山而居、仍曰山戶、是留於山之意也、又或說云、開闢之始、土濕而未乾、至于登山、人跡著焉、仍曰山跡、

問云、諸國人民俱據山而居耶、將只大和國人民獨據山耶、

說云、大和國獨有此事、

問、本國之號、何獨取大和國為國號耶、

說云、磐余彥天皇定天下至大和國、王業始成、仍以成王業之地為國號、譬猶周成王於成周定王業、仍號周、

問、初國始祖天降筑紫、何國偏取倭國為國號、

說云、周后稷封邰、公劉居豳、王業雖萌、至武王居周、始定王業、仍取周為號、本朝之書亦其如此、

〔神代卷口訣一〕耶麻止者山跡也、於神代採天香山之金以作日矛(日矛者寶鏡也)靈所、故名其地云山跡、于時神廬大倭、以取義、故云大倭、

〔神皇正統記神代〕大日本は〇中略耶麻止といふ、これは大八洲の中津國の名なり、第八にあたるたび天御虛豐秋津根別といふ神を生給ひし、是を大日本豐秋津洲と名づく、今は四十八箇國にわかてり、中州たりし上に、神武天皇東征より代々の皇都なり、よつてその名をとりて、餘の七州をもすべて耶麻土といふなるべし、〇中略耶麻土といへることは、山迹といふなり、むかし天地わかれて泥のうるほひいまだ乾かず、山をのみ往來して、その跡おほかりければ山迹といふ、あるひは古語に居住を止といふ、山に居住せしによりて、山止なりともいへり、大日本とも大倭とも書

ことは、此國漢字傳て後、國の名をかくに、字をば大日本と定めて、しかも耶麻土と讀せたるなり、大日孁の御國なれば、その義をもとれるか、また日の出るところにちかければ然いへるか、義はかはれど、字のまゝに日のもとゝは讀ず、耶麻土と訓せり、我國の漢字を訓ずることおほくかくのごとし、おのづから日のもとなどいへるは、文字によれるなり、國の名とせるにあらず、また古へより大日本とも若は大の字を加へず、日本とも書り、州の名か、大日本豐秋津といふ、懿德、孝靈、孝元等の御諡、皆大日本の字あり、垂仁天皇の御女大日本姫といふ、これ皆大の字あり、〇中略その後漢土より字書を傳ける時、倭といひて此國の名に用ひたるを、卽領納してまたこの字を耶麻土と訓じて、日本のごとくに大を加へても、又除きても同じ訓に通用しけり、〇下略

〔日本書紀纂疏 一〕日本此訓曰耶麻止、猶言山跡也、舊云、上古之世、天地初判、水土未燥、故百姓往來於山、山多人跡、又云、耶麻止猶山止也、古語謂居住爲止、又云、百姓住山爲戶、故名曰山戶、以上三義大同小異也、舊說問曰、耶摩止今爲畿內一國之名、其爲有天下之號何也、曰、神武皇帝、初都於大和國磐余之地、因以耶麻止爲有天下之號、〇中略又問、支那天子因世改國號、此邦不爾何也、曰、異邦帝者、乘亂簒立、數易姓氏、故有天下之號非一、獨吾國神武皇胤相繼而不雜他氏、故耶摩止之名、亦百世不易者也、

〔日本紀神代抄 起〕日本題號事〇中略

〇〇〇ヤマトヽ云ニ就テ三義アリ、一ニハ山迹也、上古ノ世、國ノ初メ、海水ノ潤アリテ、土イマダ堅マラヌ故ニ、人皆山ニ往來シテ、其跡多ガ故ニ山跡ト云、一ニハ山止也、人ノ居住スルヲ止ト云、故ニ山ニ止ル心ニテ山止トモ云、巢居穴居ノ心ゾ、一ニハ山戶也、昔萬民ノ住所スル形ヲ戶ト云、故ニ山戶トモ云、以上三義ハ和歌ノ抄物等ニ見タリ、實ニハ天地ノ開ル音、ヤアトヒヾク也、此國ハ三界ノ源ナレバ、自開闢ノ聲ヲ以テ、ヤマトヽ云、ヤハ聲ノ初、マトトハ的ノ字也、天地開闢ノ端的ト云心也、ヤマトト云ニ字聲アリ、古今序ニヤマトウタト云ハ、此書ノヤマトフミト云ニ、字聲同ジカラ

ズ、假令大和國此聲、ヤマトウタノ聲ハ山跡ノ義也、定家卿説、ヤマトフミト云聲ハ、山戸、山止ノ義也、六條家ノ説三説ヲ以テ見レバ、ドチヘモ讀ベキ歟、日本トモ倭トモ書テ、共ニヤマドト讀也、和ノ字ヲカクハ音通ズル故也、大日本トモ大倭トモ書ドモ、必ヲホヤマトト讀マズ、只ヤマトト讀也、日本ヲヤマトト讀ハ義訓也、〇下略

〔日本釋名 上地名〕大和　やまとの訓　山迹　山止　山戸　古人此三説あり、〇中略篤信おもへらく、古人の説は後人まことにみだりに議すべからず、されど此三説皆みだりにおしはかりて附會せるやうに聞え侍べれば、信用しがたし、神武帝の日向より東征し給ふ時、先難波より枚方にのぼらせ給ひ、それよりいこま山をこえて、大和に入給ふ、膽駒山の外にある國なる故に山外と云、とは外也、淀河の内にある國を河内と云、山外とは河内に對して名づけけらし、又いこま山のうしろにある故、山背と云、うしろは北也、やまとを日本の總名とせしは、大和國に都有しゆへ也、志き島に都ありしゆへ、日本の總名を敷島と云しがごとし、もろこしに此ためし多し、〇下略

〔秦山集 雜著十三〕日本稱倭辨 壬申

耶麻騰之爲國號也、昉乎神代、盛於皇朝、有山迹山戸山止之三義、而猶有秘訓填之、以日本二字者、原於舊俗比壽茂騰之名、而亦有大日婁貴之訓傳、其義精矣、若夫倭字西土之所號、和字後世之所轉、皆非我之稱、而訓之爲耶麻騰、亦特隨乎流俗之所馴習爾、非嘉而從之也、舍人親王筆日本書紀於神代卷不用倭字、至於人皇紀、假用爲大和一國之號、以別之全國耳、未嘗爲天下之號也、其辨嚴矣、應神紀大倭木滿致、並從百濟之所稱也、以下外國所稱倣此、孝德紀我大倭、及天武紀像在倭國、偶識於改制耳、孝德二年日本倭根子天皇、是合制倭字、而誤存之者、其改正手段於此可見、其他外國之稱我者尚多、文人詞客可而用之、莫考其實焉鄙哉、〇中略曰、耶麻騰之名、創乎神武天皇、蓋天皇定天下、到大和國、王業始成、仍以定王業之地爲國號、猶武王於岐周定王業、故國號周、此説諸家相承已久、而貝原損軒亦曰、神武帝之東征也、自浪速過於河内、將遂於膽駒山而入于大和、其方駐六軍於膽駒山之

野馬臺

西也、以其地在乎淀河之內、故號其國曰河內、以其地在膽駒山之外、故號曰山外、蓋對河內而爲言也、恐非山迹、山止之謂、其以在膽駒山之北、號其國爲山背、此說近於人情、切于地界、而耶麻騰之爲神武以來之名、益分明矣、吾子未之聞乎、曰耶麻騰之爲天下號尙矣、二神之生國也、有大日本之名、而伊弉諾尊目以日本浦安國、饒速日命呼爲虛空見日本國、此皆橿原御宇以前之稱、豈得悉指爲後世之追號乎、損軒之說、誠如子之所稱、但舊事、古事、及日本紀有山背號、而無山外字、且日神都於天安河舊矣、故神武紀稱爲中州、豈以在一膽駒之東、斥爲山外哉、蓋嘗反覆考之、山外之說、恐亦傅會耳、譬如釋徒稱大日靈貴爲大日如來、雖極切近、而非事實也、蓋古者稱國之墺區、往々以同名、土左國有土佐郡、河內國有河內郡、其類寔繁、何害乎先有大日本國、然後其墺區有一小日本國耶、故神代卷曰日本國之三諸山、此可爲正名矣、何煩假岐周以爲說哉、且山背國亦以背山而名耳、猶河內國有淀河之內、日向國之向日、蓋據各國之形勢而名也、何必遙主膽駒山乎、夫神聖之創業立政、當有緩急本末、神武當時駐六軍於膽駒也、會戰神策日不暇給、其豈遑爾制王趾未加三國之名、以張虛勢哉、帝王之擧措、恐不如此也、損軒拘拘膽駒執而用之、不察其乖於物情之甚、豈其千慮之一失歟、抑俗學之誤稱呼也、扶桑若木等、固不勝枚擧、而其號山城爲雍州、平安城爲洛陽、武藏爲武陵之類、詎啻千百、然其鄙陋無稽、皆爲易見焉、獨呼日本爲倭、則雖博雅名賢、亦有不免犯此誤者、因推演所聞諸我師新蘆翁〈○保井春海〉爲之說、併俟當世有識之折衷云、

〔下學集 上天地〕野馬臺（ヤマト）〈日本總名也、支那人呼大和云野馬臺、是以字音釋倭訓也、見鶴林玉露、呼雨云下（ア）米、呼硯云蘇（ス）松（ズ）利（リ）之類也、然本朝遴要抄云、野馬臺（タイ）蜻蜓也、日本地形似蜻蛉、故云蜻蜓也、愚謂此義大誤歟、野馬臺義已注于上矣、所註蜻蛉與蜻蜓同虫而不別、共六足四翼之虫也、然則遴要抄誤用秋津島之注、爲野馬臺之注歟、日本六十餘州最初大和州出生、故曰日本總名曰大和、曰野馬臺也、蓋不忘其國初也、支那西遷部記曰、倭國始云野馬臺、唐則天皇后之時、改曰日本國也、莊子注云、野馬陽燄也、今不用莊子注意、只假字音耳、〉

〔後漢書 八十五 東夷列傳〕倭在韓東南大海中、依山島爲居、〈○中略〉其大倭王居邪馬臺國、〈按今名邪摩堆、音之訛也、〉

〔書言字考節用集 一乾坤〕耶麻堆（ヤハタイ）〈後漢書、三國志、〉野馬臺（同）〈共以日域通稱〉

浦安國
細戈千足國
磯輪上秀眞國
玉牆內國
虛空見日本國

〔釋日本紀一開題〕日本國　倭國〇中略

問、大倭、倭奴、日本、三名之外、大唐別有稱此國之號哉、

答、師說、史書中、耶馬臺、耶摩堆、耶麻堆〇耶摩堆三字原脫、據一本補、下同、倭人、倭國、倭面等之號甚多、但史官所記、只通音而曰、更無他義、〇中略

又問、耶馬臺、耶摩堆、耶麻堆之號、若各有心哉、

答、師說、雖有三號、其義不異、皆取稱倭之音也、

問、倭國之中有南北二倭、其意如何、

答、師說、延喜說云、北倭可爲此國、南倭女國云々、此說已無證據、未爲全得、又南北二倭者、是本朝南北之邊州也、無指別由、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、〇中略副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志津、國固米、造介牟與理、〇下略

〔日本書紀神武三〕三十有一年四月乙酉朔、〇中略昔伊弉諾尊目此國曰、日本者浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、秀眞國、此云袍圖莽句儞、復大己貴大神目之曰、玉牆內國、及至饒速日命乘天磐船而翔行太虛也、睨是鄕而降之、故因目之曰、虛空見日本國矣、

〔釋日本紀一開題〕日本國　倭國〇中略

問、虛盈倭、虛見倭、秋津島倭、此三倭總是稱此國爲倭之義也云々、如此稱號濫觴如何、

答、〇中略虛盈者、與虛空見訓讀通之、無別義歟、

〔古事記下仁德〕亦一時、天皇爲將豐樂而、幸行日女島之時、於其島雁生卵、爾召建內宿禰命、以歌問雁生卵之狀、其歌曰、多麻岐波流、宇知能阿曾、那許曾波、余能那賀比登、蘇良美都、夜麻登能久邇爾、加理古

牟登岐久夜、

〔下學集 上天地〕秋津嶋 日本總名也、神武帝始爲日本名也、嶋或作洲也、秋津者蜻蜓也、日本地形、如蜻蜓展兩翅、故云秋津嶋也、

〔書言字考節用集 二乾坤〕秋津洲 同上(日本一名)蓋秋津者蜻蜓也、本朝地形如蜻蛉展兩翅故名、見舊事紀、

〔倭訓栞 前編二阿〕あきつしま　秋津洲と神代紀に見えたり、歌にあきつすとも見えたり、千五百秋瑞穗國といへるに同じ、神武天皇蜻蛉のたとひは、別に一義を發したまふ成べし、後撰集に、あきつはのすがたの國に跡たるゝ、神のまもりや我君のため、日本の國形秋津虫の東に向たるに似たりといふ說も、此歌の心なり、

〔釋日本紀 五述義〕大日本豐秋津洲
私記曰、可爲我國之總名歟、而大八洲之專一也、是爲何國哉、答、代々講書之時、不見此問答、但先師相傳云、此今大倭國、陰陽二神、最初依生此國、以我國之總名號之、又問、神武天皇御宇、始有秋津島之號云々、而神代注此號如何、答、如此之名字、上代雖未得其號、以史書撰述時之名字、載之者、倭漢之例也、且此書之中、天聚雲劍者、迄于景行天皇御宇日本武尊愷旋之歲、改號草薙劍、然而神代卷注後號耳、又曰、如大字者、貴我國、如豐字者、祝我國之義也、是先師說耳、先師說云、總而謂之者、日本國之號也、別而謂之者大和國也、且當紀一書文、大己貴幸魂奇魂、欲住於日本國之三諸山云々、以大和國稱日本國是也、

〔國號考〕夜麻登 秋津島師木島をも附いふ〇中略
秋津島は、古事記に、大倭帶日子國押人命(孝安)坐葛城室之秋津島宮治天下也と見え、書紀にも此御卷に、二年冬十月、遷都於室地、是謂秋津島宮と有て、もと此孝安天皇の都の地名なり、かの神武天皇の、猶如蜻蛉之臀呫と詔へりしは、卽此地のことにて、かの大詔より起れる名なり、腋上も嗛間丘も室も、みな相近きところにて、大和國葛上郡なり、さて孝安天皇の百餘年久しく敷坐りし

京師の名なるから秋津島倭とつゞけていひならひ、その倭に引れて、つひに天の下の大名にもなれることは、師木島と全同じ例なり、次に委くいふを合せ見べし、然るにかの神武天皇の國狀を御覽して、蜻蛉の臀呫せるが如しとのたまへるを、或は天の下のことゝし、或は大和一國の事とするから、此秋津島てふ名をも然心得めれども、然にはあらず、國狀とあるにつきては、なほ疑ふ人もありぬべけれど、古は後に郡鄕などになれるほどの地をも某國といへる、常のことなれば、なにごとかあらむ、さて雄略天皇の吉野に幸行し時に、虻の御腕を咋たるに、蜻蛉飛來て、その虻を咋ける時の大御歌に、手こむらに、虻かきつき、其あむを、阿岐豆はやくひ、かくのごと、名に負むと、そらみつ倭の國を、阿岐豆島と云、とよませたまひ、それより其地を阿岐豆野と名づけられし事、古事記に見えたり、此御歌の意は、古より此倭國を秋津島といふことは、今かくの如く、其名に負て、蜻蛉が功あらむとてなり、とよみたまへるなれば、秋津島の事にはあづからず、然るを書紀には、此御歌の詞、はふ虫も、大君に、まつらふ、汝がかたは置む、秋津島倭とあり、是はすなはち汝が名におへる、此秋津島倭國に、形をのこしおきて、此地を蜻蛉野と名づけむ、とのたまふ意なるべし、されどこはよくせずば、此時の蜻蛉の功によりて、國名を秋津島と名づけたまへるごと聞えて、まぎれぬべし、さてまた秋津の津は古事記、書紀、萬葉など、古書にあまた出たる假字には皆阿岐豆と、濁音の豆をのみ書て、清音の假字書るは一つもなし、後世に清てよむは訛なり、虫の名も同じ、又この島を洲とも書るにつきて、阿岐豆須ともいふは、ことにひがことなり、洲字は須に用ゐるはつねのことなれども、秋津洲のとき然いふことは、例もなくことわりもかなはぬことなるをや、さて又海なき地に島といふ名のあることは、志麻とは、もとは必しも海の中ならねども、山川などにまれ、周れる界限のある地をいふ名なること、始にいへるが如くなれば、此秋津島なども、山のめぐれるをもていふなり、蜻蛉の臀呫せるが如しとのたまへるも、青山のめぐれる

磯城島

さまなるを思ふべし、またそのあたりを室といひしも、さる由にてつけたる名にやあらむ、猶他にも例多し、書紀に、越國を大八洲の一つにとりて、越洲といへるも、海は隔たらねども、彼國は、いづくよりも山を隔てゝ、別に一區なるが如くなればなるべく、筑紫の宇佐を宇佐島とあるも、山川などめぐりて、一區の地なる故なり、又應神天皇の都は、大和國高市郡の輕といふ所なるを、輕島といひ、欽明天皇の都は、師木といふ所なるを、師木島といへるなども皆同じ、此餘にも海なき國々に、某島といふ地名のおほかる、多くは此例にてぞつけつらむ、その中にはかならずいちじるき界限はなき地をも、ことさらに一區としめ定めて、名づけたるも有ぬべし、それもなづくる意は同じ事なりかし、

〔日本書紀 神武三〕三十有一年四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登腋上嗛間丘、而廻望國狀曰、妍哉乎國之獲矣、(妍哉、此云鞅奈珥夜)雖內木綿之眞迮國、猶如蜻蛉之臀呫焉、由是始有秋津洲之號也、

〔日本書紀通證 神代二〕兼良曰、(中略)○秋津蜻蛉之名、神武帝始呼之也、(玉木翁曰、豐秋津、言千五百秋也、神武帝則因此名、猶以一義、與雄略帝御歌意同、)

〔日本書紀 仁德十一〕五十年三月丙申、河內人奏言、於茨田堤雁產之、(雁原作鴈、據日本紀改、)即日遣使令視曰既實也、天皇於是歌以問武內宿禰曰、多莽耆破屢、宇知能(知能原倒、據日本紀改、)阿曾、儺虛曾破、豫能等保臂等、儺虛曾波、區珥能那餓臂等、阿耆豆辭莽、揶莽等能區珥珥、箇利古武等、儺波企箇輸揶、武內宿禰答歌曰、夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰波、于陪儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、阿企菟辭摩、揶莽等能俱珥珥、箇利古武等、和例破枳箇儒、

〔千載和歌集 序〕あまねき御うつくしみ、秋つしまのほかまでおよび、ひろき御めぐみ、春の園の花よりもかうばし、(下略)

〔下學集 上天地〕敷嶋(日本總名也、無深義歟、愚謂和州有磯城嶋、因之而云歟、)

〔日本書紀十九欽明〕元年七月己丑、遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島金刺宮、

〔書言字考節用集二乾坤〕敷島日本一名磯城島同上

〔萬葉集十三挽歌〕磯城島之、日本國爾、何方、御念食可、津禮毛無、城上宮爾、〈○下略〉

〔冠辭考四志〕しきしまの　やまとのくに

万葉卷十三に、〈人麻呂家集〉志貴島、倭國者、事靈之、所佐國叙、また式島之、山跡之土丹、卷九に、〈天平元年〉磯城島能、日本國乃、石上、振里爾云々、こは崇神紀に、三年九月、遷都於磯城、是謂瑞籬宮、欽明紀に、元年七月、遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島金刺宮とありて、二代ながら殊にあまた年おはしまして名高ければ、さる比よりおのづから大和の國の今一つの名の如く成にけん、仍て後にこと所の都となりても、猶やまとゝいふには冠らせてよめるならん、奈良朝となりては、既やまとの事として之奇島能、人者和禮自久としもよみたり、

〔國號考〕夜麻登〈秋津島師木島をもいふ附○中略〉

師木島は、古事記に、天國押波流岐廣庭命〈○欽明〉坐師木島大宮治天下也と見え、書紀にも此御代の卷に、元年秋七月丙子朔己丑、遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島金刺宮と有て、もと此欽明天皇の都の地名なるを、萬葉集の歌どもに、しきしまのやまとの國とよめり、抑かくのごとくしきしまのやまとゝつゞけいへる意は、もとは大和一國をさしてにはあらず、京都をさしてやまとゝはいへるにて、しきしまの都といはむが如し、かの萬葉の歌に、やまとには、鳴てか來らむ、よぶこ島、とよめるやまとも、殊に京師をさしていへると同じ、又かの秋津島倭とつゞけいふも、もはら同じくて、本は秋津島の京といはむがごとし、さればその秋つしまも、師木島も、共にみな京の名をいへるにて、國の名にはあらず、これらもし一國のことならば、倭の秋津島、倭のしきしまといはでは、ことわりかなはず、さて本はいづれも右のごとく、京師をいへるなれども、かくつゞ

神國　皇國

けなれては、やがて一國の倭にも轉じて、秋津島やまとの國とも、しきしまの倭の國ともよめる
は、枕詞のごとくにもなれるなり、さてまた轉りて萬葉十九ノ卷に、立わかれ、君がいまさば、しき島
の、人はわれじ、いはひてまたむ、とよめるは、大和國をやがてしき島といへるなり、こはかの奈良
を青によし、難波をおしてるとのみいへるに似たり、さてまた倭にひかれて、つひに天の下の大
號の如くになれることも、秋津島ともはら同じ、又歌の道をしきしまの道といふは、大號より出
て、又轉れるものなり、さて此師木島てふ名の起りをとくに、崇神天皇と欽明天皇の二御代の都
を兼ていふは誤なり、其故は、すべてかゝることに、古を考へ合せていふは、物しり人のうへのわ
ざにこそ有れ、世間のなべての人は、たゞあとなく、さしあたりたる事よりこそはいひ出る物な
れ、古を思ひていふものにはあらず、されば京をしき島といふも、たゞ欽明天皇の御時にいひな
らへる、當時の京の名を、他京にうつりて後も猶云るが、おのづからなべての京の稱のごとなれ
るなり、たとへばもろこしにも唐といへるが、後々の代まで、かの國の名になれる、それもたゞ李
姓の唐よりいひならへるにこそあれ、古の唐堯の唐をもかねていふにはあらざるがごとく、こ
れも古の崇神天皇の京までを思ひて、いひならへるにはあらず、もしまたはやく崇神天皇の都
よりいひ出たりとならば、後の欽明天皇の都までを待べきにあらずかし、

〔神皇正統記神代〕大日本(おほやまと)は神國なり、天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ、我國の
み此事あり、異朝には其たぐひなし、此ゆゑに神國といふなり、

○按ズルニ、神國ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニ詳ナリ、

〔玉勝間七〕もろこしの老子の說まことの道に似たる所ある事○中略
殊に皇國は、萬の國の本、よろづの國の宗とある御國なれば、萬ノ國々にわたりて、正しきまことの
道は、たゞ皇國にこそ傳はりたれ、○下略

倭國

〔兎園會集説〕蒲の花かつみ　瀧澤解

寛政二年の冬、琉球の使人、入朝しつと聞えしに、故ありてかのともがらと、應接をしつるもの、宇都宮にかへり來るありけり、○中略琉人われに問ていはく、皇國は誠に文あり、武あり、大かたならぬよき國なれども、○下略

〔下學集上天地〕倭國指日本國、倭、烏禾切、

〔段注説文解字八上人〕倭順貌、倭與委義略同、委隨也、隨從也、廣韵作愼貌、乃據時避諱所改耳、

〔山海經十二海内北經〕蓋國在鉅燕、南倭北倭屬燕、倭國在帶方東大海内、以女爲主、其俗露紒、衣服無針功、以丹朱塗身、不妬忌、一男子數十婦也、

〔異稱日本傳上一〕今按、王充論衡曰、禹益并治洪水、禹主治水、益主記異物、海外山表、無遠不至、以所聞見作山海經、觀此則山海經者、益之所作、堯時之書也、山海經有倭名、則倭名舊矣、凡異邦人、以我朝名倭、此爲權輿乎、然據我舊記、則倭名爲起於漢時矣、

〔馭戎慨言上之上〕後漢の光武が時に、倭奴國奉貢といへるは、倭奴國はいづれの國をいへるにか、さだかならねど、これも凡百餘國といへる中の一つにて、倭國之極南界也とあれば、つくしなどの南のかたつかたなるべし、然るを此後漢書の註にも倭といひ、唐書などに、日本古倭奴也といへるは、いかにぞや、こは本の詞をよくもわきまへず、なほざりに見て、まぎらはしつるひがことなるを、御國の人すらなほわきまへず、倭奴をも、たゞ倭とひとつことゝ心得をるかし、さるから、かへりて、かの倭國之極南界也とあるをも、倭は國の極南界也として訓るは、いみじきひがことなり、さるつたなき文詞あらんやは、

〔後漢書五安帝〕永初元年十月、倭國遣使奉獻、倭國去樂浪萬二千里、男子黥面文身、以其文左右大小別尊卑之差、見本傳、

○按ズルニ、釋日本紀引ク所ノ後漢書ニハ、倭國ヲ倭面國ニ作レリ、

〔後漢書八十五東夷列傳〕倭在韓東南大海中、依山島爲居、凡百餘國、○中略建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、

使人自稱大夫、倭國之極南界也、

〔唐書二百二十日本傳〕日本、古倭奴也、去京師萬四千里、直新羅東南、在海中島而居、東西五月行、南北三月行、國無城郭、聯木爲柵落、以草茨屋、左右小島五十餘、皆自名國而臣附之、

〔弘仁私記序註〕日本國〇中略古者謂之倭國、但倭義未詳、或曰取稱我之音、漢人所名之字也、

〔釋日本紀一開題〕日本國　倭國〇中略

問、倭字之訓、其解如何、

答、延喜說、漢書晉灼如淳各有注釋、然而總無明訓字、今案諸字書等中、又指無訓讀、東宮切韻曰、陸法言云、烏和反、東海中女王國、長孫訥言云、荒外國名、薩珣云、又於危反、順貌、孫愐云、從貌、東海中日本國也、玉篇曰、於爲反、說文云、順貌、詩云、又爲禾反、國名、〇中略

問、唐國謂我國爲倭奴國、其義如何、

答、師說、此國之人、昔到彼國、唐人問云、汝國之名稱如何、自指東方答云、和奴〇奴原作加、據一本改、國耶云々、和奴猶言我國、自其後謂之和奴國、或書曰、筑紫之人、隋代到彼國、稱此事、

又問、若然者、和奴之號、起自隋代歟、

答、此號非隋時、然則或書之說、未爲全得、〇中略

又問、倭面之號、若有所見哉、

答、後漢書云、孝安皇帝、永初元年冬十月、倭面國遣使奉獻、注曰、倭國去樂浪萬二千里、男子皆黥面文身、以其文左右大小、別尊卑之差、

〔秦山集雜著十三〕日本稱倭辨壬午

或問、西土何以名我國以倭也、曰、釋日本紀云、吾邦人始至西土、彼人曰、汝國之名稱如何、自指東方答曰、謂吾國哉、漢人即取吾字之初訓命之曰倭、近世武江人見友元曰、倭與矮通、短人也、異邦慢我

之號、二說未知孰是、但以後漢倭奴、倭面之號、及唐書倭國、自惡其名不雅之言致之、後說恐爲是、蓋據前說則侮、欲漢人之譏、據後說則甘受漢人之慢、以此爲我國之號、豈理也哉、中葉以降曰倭歌、曰倭訓、曰倭琴、因循流傳至不可改、是可歎也、

〔國號考〕倭の字

倭の字は、もともろこしの國よりつけたる名にて、その始めて見えたるは、前漢書地理志に、東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設桴於海、欲居九夷、有以也夫、樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云、といへる是なり、その後の書どもにも、みなかく倭人といひ、又はぶきて倭とのみもいへり、さて倭とは、いかなる意にて名づけつるにか、その由はさだかに見えたる事はなけれども、かの漢書に、東夷天性柔順と書出して、有倭人とつらねいへるを思へば、班固が意は、說文に、此倭字の本義を順貌と注したると同じくて、柔順なる故に倭人とはいふと心得たることく聞ゆめり、されどそれも字につきてのおしはかりなるべし、また皇國の舊說に、此國之人、昔到彼國、唐人問云、汝國之名稱如何、自指東方答云、和奴國耶云々、和奴猶言我也、自其後謂之和奴國也、と釋日本紀元々集などに載られたれども、これも信がたき說なり、そのゆゑは、まづ和奴國といふ名は、後漢書にはじめて見えて、倭國之極南界也とあれば、皇國の內の南の方の一國の名なるを、唐書などにこゝろえあやまりて、皇國の舊の大號のごとく書るを、そののちみな此誤りを傳へて、かしこにてもこゝにても、たゞさる事とのみ思ひ居るは、いみじきひがことなり、この事おのれ馭戎慨言につばらかに辨へ論へり、されば倭奴は、もとより國ノ名にまれ、又我といふ意にて答へたるにまれ、皇國の內の一國の名なれば、これをもて、大號の倭てふ意を說べきにあらず、又或說に、倭奴國を唐國の音にていへば、於能許にて磤馭盧島といふ事なりといへるもひがことなり、磤馭盧島は、大八洲より先には出來つれども、淡路島のほとりにある一つの小島の名にて

こそあれ、神代より天の下の大號にいへることとさらになし、然れば皇國人のいはぬ名を、外國の人の知て名づくべき由あらめやは、此說はもと、近き世に神道者といふもの、、此おのごろ島を、皇國の本號のごと說なせるによりていへるなり、また倭奴國といふはおのごろ島、おのころ島は丈夫島といふ意なりといふ說は、殊にあたらぬ事なり、ごは於と遠と音の異なるをだにもしらぬみだりごとぞかし、

夜麻登といふに、やがて此倭の字をあて、書ク事は、いと〳〵古へよりのこと、見えたり、古事記にもみな此字をかき、又書紀にも、日本と書て夜麻登と訓ム事は、神代卷に此云二耶麻騰一と註あれども、倭の字を書るにはか、る註もなければ、世にあまねく用ひならへることとしられたり、すべて文字は、萬の物の名も何も、もろこしの國のを借用る例なれば、これもかの國より名づけて書る字を、そのま、に用ひむ事、さもあるべきわざなり、然るを此字嘉號にあらずといひて、嫌ふ人あれども、字の意はいかにもあれ、皇大御國の號となりては、すなはち嘉號なるをや、さて此倭の字、もろこしより名づけたるは、大號のみにて、畿內のやまとをば、皇國人のいへるを聞てかけりとおぼしくて、後漢書魏志などに耶馬臺、隋書、北史などにも耶摩堆といへり、然れども皇國にては、畿內のにも通はして、みな倭の字を用ひたり、

〔日本書紀 二十九天武〕三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出二于當國一、卽貢上、由レ是大國授二小錦下位一、凡銀有二倭國一初出二于此時一、

〔書言字考節用集 一乾坤〕和ワ國コク（異域之書稱二日本一曰レ倭、山海經爲レ始、）

〔國號考〕和の字

和といふは、皇國にて後に改められたる字なり、さる故に、異國の書に、大號に此字を書ることとさらになし、思ふにこれは、古へより倭の字を用ひ來つれども、もと異國よりつけたる名にして、美字

にもあらずとしてぞ、同音の好字をえらびて、改められたりけむ、さるに古はたゞ、夜麻登といふ名をのみむねとはして、文字はいかにまれ、假の物なれば、よきあしきさたにも及ばず、あるまゝに倭の字を用ひ來にしを、やゝ後には、文字の好惡きをもえらばるゝ事になれりしなりけり、さて此和の字の事、上に引る漢書の文、又順說と注せるなどに、和順など、もつゞくを合せておもへば、倭と字義も遠からず、また書紀の繼體天皇ノ御卷の詔詞に、日本邕々(ヤマトヤハラギナ)名擅二天下一云々とある、邕は雝と通ひて、詩の大雅に雝々といふ註に、鳳凰鳴之和也とも、和之至也ともいへる、又聖德太子の憲法の首に、以レ和爲レ貴とある、又もろこしにて雍州といふは、もと王都の國の名なる故に皇國にても後世にこれにならひて、山城國を雍州といふ、此雍字も雝と通ひて、和也といふ註ある、これらみな由あれば、いづれにまれその義を取れたるかとも思はるれど、それまでもあるべからず、すべての事後に考ふれば、おのづから由ある事どもはくさ〴〵いでくる物なり、また子華子てふ書には、太和之國といふこともあれども、これらはさらに由なし、

倭をの和の字に改められつるは、いづれの御代にかと考るに、齋部正通の神代卷口決に、天平勝寶改爲二大和一と見え、拾芥抄にも、天平勝寶年月日改爲二大和一とあり、これらは後世の書なれども、よりどころありげに聞ゆる故に、なほ古書どもを考へ見るに、まづ古事記はさらにもいはず、書紀にも和の字にかけることは見えず、續紀に至りて、はじめて此字にかけること見えたり、これによりてかの天平勝寶とあるが、妄にもあらざることをかつ〴〵しりぬ、されども然改められたることはしるされず、故なほ委く彼紀を考ふるに、はじめのほどは倭の字をのみ書て、そのあひだには、和の字に書るは一つも見えず、元明天皇の御代、和銅六年五月の大命に、畿內七道諸國郡鄕名著二好字一とあれども、これは改らずと見えて、其後も猶もとのまゝに倭ノ字なり、さて聖武天皇の御代、天平九年十二月丙寅、改二大倭國一爲二大養德(オホヤマト)國一、同十九年三月辛卯、改二大養德國一依レ舊爲二大倭

國とあれば、此時もなほ倭の字なりしことしられたり、其後も孝謙天皇の天平勝寶四年十一月乙巳日の下に、以從四位上藤原朝臣永手爲大倭守とあるまでは、みな倭字にて、その後天平寶字二年二月己巳日の勅に、はじめて大和國と見えたる、これより後は、又みな和の字をのみかゝれたり、これにてまづ、勝寶四年十一月より、寶字二年二月までの間に改められたりとはしられたり、それも何となく和の字を書出せるにはあるべからず、かの養徳と改められし時の例を思へば、此和の字も、かならず詔命にて著られたりけむを、紀にはその事しるし漏されたるなるべし、類聚國史などにも見えざれば、後に寫し脱せるにはあらじ、さて又萬葉集を考ふるに十八の卷までには、歌にも詞にも、和の字を書る所はなくして、十九の卷、天平勝寶四年十一月二十五日、新嘗會肆宴應詔歌六首の中に、右一首大和國守藤原永手朝臣とある、これ和の字を書る始めなり、又二十ノ卷に、先太上天皇詔陪從王臣曰、夫諸王卿等宜賦和歌而奏云々、右天平勝寶五年五月云々とある、これに始めて和歌とも書り、そも〳〵かの永手朝臣を大倭守とせられしは、上に引る紀の文のごとく、勝寶四年十一月乙巳日にて、乙巳は二日なるに、そこにて猶倭の字をかけると、此萬葉に、その同月の二十五日の事に、和の字を書るとを引合せておもへば、まことに天平勝寶四年十一月の、三日より二十四日までのあひだに、改められたるなりけり、さて又大倭宿禰といふ姓は、かの養徳と改められし時も、その字にしたがひて、大養徳宿禰とかゝれたれば、和の字に改まりたる時も、それにしたがふべきわざなるに、寶字元年六月の所までも、なほ倭字をかきて、同年十二月の文より始めて大和宿禰とあり、そのころは既に姓氏の文字なども、私に心にまかせてはかゝず、必おほやけより勅有て、定められし事なれば、國名の和の字に成しとき、此姓の字も、然改むべき勅あるべきに、其後しばしなほ舊のまゝに書しは、此姓の字改むべき勅は、寶字元年に至りて有しなるべし、さて寶字元年の所に、此姓を大和宿禰と書るにて、國名の方は、それより

さきに既に改まりつることゝ、いよ〱いちぢるし、すべて續紀には、はじめに倭の字、なかほどはみな倭の字をのみ書て、和と書ることなく、和の字に書始めて後は、又みな和の字のみにて、倭を書雜へたることはなければ、改められつる年月も、おのづから右のごとくには考へしらるゝなり、然るを田令の中に、大和と書る所あり、又書紀崇神御卷にも、和と書る所一つあり、又續紀八の卷にも、二所大和國とかき、和琴ともかき、又萬葉集七の卷にも、和琴とかける、これらはみな後に寫し誤れるものなり、その前にも後にも、いとおぼかるやまとに、みな倭の字をのみ書る中に、いとまれ〱に一つ二つ和と書べき由なければなり、後世には、心にまかせて通はし書く故に、ただ同じことゝ心得居て、ふと寫したがへたるなるべし、又和銅てふ年號もあれども、此和はやまとの義にはあらず、さて上件續紀に出たるは、皆畿内の大和一國の名の字にて、天の下の大號のやまとのさたにはあらず、大號のには、書紀よりして、おほくは日本といふ字を用ひられたりし故に、そのさたには及ばざりしにや、和の字に改まりて後も、畿内の國名ならぬには、なほ倭の字をも廢ずして、すなはち續紀などにも、倭根子天皇などゝかゝれ、その外にもおほく見えたり、玄かはあれども、大號も本はかの一國の名よりおこれるに、その本を改められつるうへは、何事にもみな、和の字を用ひむをや宜しとはいふべからむ、

〔日本書紀崇神五〕六年、先是天照大神、和(〇和諸本作倭、永享本作大倭、)大國魂二神並祭於天皇大殿之内、(〇下略)

〔令義解田三〕凡畿內置官田、(〇義解略)大和攝津各卅町、(〇下略)

〔泰山集雜書十七甲乙錄三〕木下氏博學固然、然格致之功、恐無足觀焉、木下氏曰、倭人自堯時已朝貢見山海經、予曰、山海經文注者、固當曰日本、然既曰北倭南屬燕、則非日本可見、燕與日本風馬牛尚不足比也、木下又曰、黑齒國、君子國、扶桑國皆日本也、予曰、染齒我國中古之事也、上古無之、木下曰、他曾無染齒國、又無名倭國、予雖湖葦之老、木下又益耄矣、故予不及爭而止、今太平之餘、來貢之國多矣、近來因錄其

各國之俗、有號華夷通商考書刊行、予考之、應天府下有和州、東京政趾、男女皆染齒、木下豈不之考歟、史記、漢書、及我國史、不取山海經之妄説、山海經後世之僞作歟、戓兩國史眼目明歟、木下氏雖博學、其無識見於此可見、

東海女國
姬氏國

〔和爾雅 地理一〕日本國異名

姬氏國 略○註　東海女國

〔弘仁私記序註〕日本國 中略○ 武玄之曰、東海女國也、

〔釋日本紀 開題一〕日本國　倭國 中略○

問、此國謂東海女國、又謂東海姬氏國、若有其說哉、

答、師說、梁時、寶志和尚讖云、東海姬氏國者、倭國之名也、今案、天照大神始祖之陰神也、神功皇后又女主也、就此等義、或謂女國、或稱姬氏國也、謂東海者、日本自大唐當東方之間、唐朝所名也、

扶桑國

〔下學集 天地上〕扶桑國 日本總名也、朝暾必昇於若木扶桑之梢、故呼日本云扶桑國也、杜子美詩云、至今有遺恨、不得窮扶桑國、

〔淮南子 墬形訓四〕扶木在陽州、日之所曊、扶木、扶桑也、○下略

〔和爾雅 地理一〕日本國異名

扶桑國 淮南子曰、日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、吾邦人以之稱本邦爲扶桑國、案南史云、扶桑在大漢國之東二萬餘里、在中國之東、其土多扶桑木、故以爲名、扶桑葉似桐、初生如筍、國人食之、實如梨而赤、績其皮爲布、又云、國無兵甲、不攻戰、有犯輕罪者入南獄、重罪者入北獄、有牛角甚長、載物至勝二十斛、以此說見之、本朝曾無如此之事歟、然則古來雖爲吾邦之號、非是、

〔大扶桑國考 上〕諸越の古書どもを閱するに、其國の古傳說に、東方大荒外に扶桑國と稱する神異の靈域、君師の本國ありて、その國初に出興せし、三皇五帝など云ふは、謂ゆる扶桑國より出て、萬づの道を開きたる趣に聞ゆるを、採り集めて熟に稽ふるに、其扶桑國としも謂へるは、畏きや吾が天皇命の神ながら知食す皇大御國の事にして、其三皇五帝と聞えしは、我が皇神等になも御坐しける、其は固より然るべき道理なるを、今その由緒を述て、なほも天照坐大御神

の、本つ御國の大御光を輝さむと爲るに、旣く此方の古人たち、其扶桑と云ふを、皇國の漢名と爲して、詩賦文章の類にも往々用ひ、〇註略また歌文の集、紀事の書の名にも負せたるを、近世の學者たちは、其を非と論へるも許多あり、然れど此は古人の、皇國に當たるが實に叶ひて、其を非と云へる後人の論ぞ、却りて非には有ける、〇下略

〔元元集一本朝造化篇〕或書曰、日本國者自大唐而所名也、斯國自大唐東方萬餘里、居于東極、日出東方、昇于扶桑、已近日所出、故云日本也、仍又號扶桑國也、

〔豫章記〕夫吾朝日本秋津洲豐葦原中津國者、大洋海之東、扶桑州也、

〔夫木和歌抄三十六跋〕此夫木和歌抄者、藤原朝臣長淸自撰也、〇中略此鈔之名を思案して、少しまどろみて有ける夢の中に、白衣之老翁一人來曰、〇中略倭國之風俗なれば、扶桑集と可名付と謂れけるを、〇中略此由を冷泉黄門爲相卿に被申ければ、爲相卿〇中略扶桑者日本國總名也、可有其憚、扶之字之つくり桑之字之木を取合て、夫木和歌抄と名付、

君子國

〔續日本紀三文武〕慶雲元年七月甲申朔、正四位下粟田朝臣眞人自唐國至、初至唐時、有人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、〇中略唐人謂我使曰、亟聞、海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮義敦行、今看使人儀容大淨、豈不信乎、語畢而去、

〔山海經九海外東經〕君子國在其〇大人國北、衣冠帶劒食獸、使二大虎在旁、其人好讓不爭、有薰華草、朝生夕死、一曰在肝楡之尸北、

阿每郷

〔和爾雅一地理〕日本國異名

阿每郷（アメ）按讀三綱行實、稱日本謂杳杳滄波阿每郷、是據于隋書所謂日本國王姓阿每之說、

ヤアパン

〔釆覽異言三亞細亞〕ヤアパン　日本

國在東方極界、赤道已北三十一度、至三十八度、其地東西長而南北狹、四時平而風氣和、眞壽國也、

ジツパン

〔船長日記 上 池田寛親著〕彼かの臺の上へ、日本の繪圖いとくはしく書たるをのべて、ベゲツ初メ三人にて圖をさし示し、ジツパン〳〵と云へども、何のわけかもしれず、又指にて圖をさしをしへて、ミヤコ、キウシウ、エド、スルガといふを聞て、彼は日本の人にて、いづくの人にかと尋るならんと思ひて、○中略重吉我身をさして、ジツパンといひ、彼三人の身をさして、いかにといふ仕方をすれども、通せぬ故、同じ事を十遍ばかりしたれば、漸思ひ得たりと見えて、ランダンとぞいひける、○中略日本の事をジツパンといへば、少しは言葉の違ふ事も有べし、○下略

位置

〔日本國郡沿革考 一總說〕按本朝立國於亞細亞洲之東南、有北控大陸、南制群島之勢、而地亦適寒燠之中、京都、北緯三十五度零分三十秒、英國綠威起線東經百三十五度五十五分四十五秒、江戸淺草司天臺、北緯三十五度四十一分三十秒、京都起線東經四度四分四秒、英東經百三十九度五十分四十九秒八、肥前長崎出島、北緯三十二度四十分、英東經一百二十九度五十二分十三秒、英變時八時三十九分廿八秒八、民口極多、物產豐饒、○下略

疆域

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕本朝四方隅　追儺祭文云、追疫鬼云東方陸奥　西方遠値嘉 肥前島云　南方土左、北方佐渡 與利 乎知乃所ヲナムタチ疫鬼之住ナリ云々、

〔儀式 十〕十二月大儺儀

陰陽師進讀祭文、其詞曰、○中略事別天詔久、穢久惡伎疫鬼能、所所村村爾藏里隱布留乎波、千里千里之外、四方之堺、東方陸奥、西方遠値嘉、南方土左、北方佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氏、○下略

〔日本地誌提要 一總圖〕疆域　四方皆海、西北ハ日本海ヲ隔テ朝鮮ニ對シ、北ニ樺太島アリ、尼哥勞(ニコライ)斯(スク)海峽ヲ隔テ魯西亞ニ接ス、東北千島諸島斷續シテ、魯西亞ノ堪察加(カムサツカ)ニ連ル、東南ハ太平洋ニ面シ、西南ニ琉球諸島アリテ、臺灣及ビ支那地方ニ對ス、長凡五百餘里、廣凡三拾餘里、或六拾餘里ニ至ル、

廣袤

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕自京陸奥際行程三千五百八十七里 六町爲一里定 自京長門西濱行程一千九百七十八

地勢

里、〈六町爲二一里一定〉

〔源平盛衰記七〕丹波少將召下附日本國廣狹事

少將被レ思ケルハ、〇中略日本國ハ東西ヘ去事二千七百五十里、南北ハ五百三十七里也、筑紫ヨリ鯖(ヘラカ)ノ使ノ上ルコソ、行程十五日トハ聞エシカ、是〇原編ヨリ奥鎭西ナンドヘ下ランコソ、假令十二三日ニモ行ンズレ、備前備中サシモノ大國トハ聞ザリシモノヲ、父ノ御座所ヲシラセジトテ、角ハ云ヨト被レ思ケレバ、其後ハ又問事モナカリケリ、

〔南海通紀一〕日本地勢記　通考

愚謂ク、天ニ北斗七星アリ、是兵ノ形トス、四星方ニ布テ其中間廣シ、三星曲ニ布テ其間狹ク長シ、是ヲ四三ノ星ト云フ、其先鋒ヲ破軍星ト云フ、其中間ニ輔星アリ、故ニ名ハ七星トイヘドモ、數ハ八ツアリ、蓋シ吾邦ノ地勢モ亦是ニ彷彿タリ、東北ハ山ニ據リ、其地方ニシテ廣シ、西南ハ海ニ濱シ、其地曲ニシテ狹ク長シ、西州ニ力ノ不レ足トコロヲ教フ時ハ、其形ノ七星ニ似タリ、吾邦ハ武勇萬國ニ勝レタル所以ノ者ハ是ニ因ルカ、夫日本國ハ土地褊少也トイヘドモ、中華ノ廣大ナルニ不レ恐、東海ノ中ニ獨立シ、兵威ヲ以テ外域ヲ壓シ、諸蕃ノ來リ侵ス事ヲ得ズシテ、國家安寧ナルモノハ、誠ニ雄偉ト云ツベキ也、上古ヨリ以來天子ヲ立、我王命ヲ尊ミ、我神明ヲ崇メ、我庶民ヲ傾壞セザル所以ノモノハ、地勢ノ宜ヲ得タルニ依テ也、我神明威靈ニシテ加護アリ、我民人正直ニシテ武勇アル事モ、壤地ノ美シカラシムル所ナリ、

〔日本地誌提要一總國〕形勢　地形修長、山脈北ヨリ起リ、陸羽ノ間ニ至リ、奥岐ヲ極メ、分レテ數脈トナリ、皆蜿蜒西走シ、東海、東山、北陸三道ヲ界ス、其信濃ニ至ル淺間山ト爲リ、甲駿ノ間ニ至ル者、富士山ト爲リ、東海ニ挺立ス、其分脈南出シテ、伊豆半島ヲナシ、更ニ海南群島ニ連ル、北陸道ノ一脈、加越ノ間ニ至テ、白山、立山ト爲リ、其近江ニ至ル者、兩支ヲ分チ、其一伊勢大和ヲ經、吉野

山ニ攢集シテ、紀伊ニ趨キ、其一西ニ去テ、山陰山陽二道ヲ界シ、西海道ニ至リ、筑豐ヲ經、南折シ、阿蘇、霧島等數峯、肥後日向ノ間ニ盤踞シ、琉球群島ニ至ル、山陽及紀伊ノ餘脈、淡路島トナリ、終ニ四國ニ連リ、雲邊山、石鎚山諸山ト爲ル、淡路島以西、山陽四國ノ間、島嶼基布、是ヲ瀨戸内海ト云フ、其東口ヲ明石峽トナシ、其東南口ヲ鳴門峽トナシ、其西北口ヲ下關峽ト云フ、東海北陸ノ大川、皆源ヲ東山ニ發ス、其東流スル者ヲ、利根川トナス、其北注スル者ヲ、信濃川ト稱シ、南注スル者ヲ、天龍川ト云ヒ、西注スル者ヲ、木曾川ト云ヒ、近江湖ニ發スルヲ、淀川ト云、山陰道江川アリ、四國吉野川アリ、西海道筑後川アリ、皆海内ノ巨川トス、武總ノ際平坦膏美、所謂沃野千里ノ地ナリ、全國氣候、寒暑大率中正、北方早寒多雪、極南恒燠、物產豐饒、尤五穀ヲ殖シ、五金ノ礦ニ富ム、

〔地誌解題 一〕大日本　我邦の總稱、史にあらはるゝものは、神代卷に始起大八洲國之號焉とあれば、太古には大八洲と號せしなるべし、〇中略百四十四國〇註略の國造をおかれしよし本紀に見ゆれど、今の郡鄕をもて國と稱せしゆゑ、其一國といふもの、大小經界今よりはしるべからず、〇中略文武二代四十の御時、慶雲三年使を諸國に發して、始て田租の法をさだめ、七道の名此時にはじまる、〇中略此時〇嵯峨天皇弘仁十四年にいたつて、始て六十六國二島〇註略に定り、今にいたつてかふる事なし、〇中略扨各國の首長たるもの、神武天皇よりこのかた今にいたりて、すべて五變に及べり、初は國造をおかれ、次に國司となり、又國主とかはり、公武わかれて國主守護並びたち、戰國をへて今の制にいたれり、

〔大日本史國郡一〕夫八洲之域、山河秀靈、環以滄瀛、西臨三韓、南通隋國、北控靺鞨、自太祖定封建之制、世建國造、至繼體帝時、爲國凡一百四十四、而縣主邑君屬之、厥後國造見史、寥寥無幾、蓋微弱者不能自振、强大者僭亂失封、而大臣大連權勢太盛、兼幷縣邑、規錮山澤、其弊不可勝言、大化改新、悉

停廢之、創國郡之治、國守郡領、考績黜陟、海內清肅、生民賴安、抑太祖以來、屢遷皇都、率不出於大和之地、然天下形勢、西輕東重、其居西南、以制東北、宜矣蝦夷、久梗王化也、中宗卽位、徙都淡海、天武帝將遷都信濃不果、皆志在東方也、桓武帝一擧勦蕩、建碑北陲、勒曰日本中央、以成皇祖皇宗之志、嗚呼何其烈也、先是、三韓臣屬、建日本府鎭之、欽明以後、爲羈縻國、隸之太宰府、南海有琉球、置島司治之、後遷大隅、至嵯峨帝、置鎭守府于陸奥、特重其任、以鎭民夷、有事則發坂東兵討之、於是乎、無復東顧之憂矣、然以威信之人、臨要膂之地、士馬精强、武斷鄉曲、及其久焉、勢不得不爲自立之計、至源賴朝據鎌倉開覇府、以勳舊將士、爲守護地頭、私割莊園與之、於是國郡之制始壞、守護地頭之權漸重、則莊園廢置、鄉保沿革、關于大勢、豈鮮少乎哉、故具其名稱、以覩變遷、若夫圖籍之撰、始于大化、成乎延長、諸國進風土記、民部勒成圖帳、可謂備矣、惜哉中世亂離、載籍湮滅、其詳不可得而考、

〔日本地誌提要一〕沿革　皇國上古大八洲トイフ、神武天皇都ヲ大倭ノ橿原ニ定メ、功臣椎根津彥等ニ地ヲ賜フテ、國造トセシヨリ、疆域日ニ闢ケ、成務ノ朝ニ至リ、國境ヲ分チ、其後治化益弘リ、國造凡百四十四、推古以降國司ヲ交ヘ置キ、孝德ノ朝、始テ各州國司ヲ設ケ、郡司諸吏多ク國造ヲ以テ之ニ任ジ、漸ク國ヲ省テ郡ニ改ム、大寶中、畿內七道ノ稱始テ定リ、國司限年遷任、治所ヲ國府ト稱ス、嵯峨ノ朝ニ至テ、大國十三、上國三十五、中國十一、下國九、凡テ四等、六十八國、是ニ於テ古制一變シテ郡縣ノ治トナル、昇平日久ク、藤原氏權ヲ專ニセシヨリ、國司多ク京ニ在テ、吏ヲシテ代治セシメ、公卿ノ莊園、皆家人ヲ以地頭トシ、殆ンド七道ニ偏ク、治體漸變ズ、源賴朝府ヲ鎌倉ニ開キ、兵馬ノ權ヲ執ニ及テ、地ヲ裂テ家臣ニ授ケ、文治元年、奏請シテ守護地頭ヲ置テ之ニ補シ、往々世襲、國司復タ任ニ趣カズ、是ニ於テ始テ封建ノ漸ヲ成、建武中興、功臣ヲ守護トシ、國司ヲシテ治所ニ就シム、足利氏ニ至テ國郡ヲ分チ家臣ヲ封ジテ守護ト稱シ、三管領四職以下、皆地ヲ以テ子孫ニ傳ヘ、正平四年、關東管領ヲ置キ、鎌倉ニ鎭シテ、八州及ビ奥羽ヲ統

シム、是ニ於テ形勢終ニ一變シテ封建トナル、應仁以降天下大亂、群雄諸道ニ割據シテ互ニ相呑滅ス、織田氏興テ、東海、東山、畿内、山陰ノ地ヲ略定シ、豐臣氏之ニ繼テ海内ヲ盪平シ、群雄服從、其大者六姓、（德川、島津、毛利、上杉、前田、佐竹、）其次三十餘家、慶長五年、關原役畢リ、德川氏諸氏ヲ統率シ、子弟功臣ヲ封ズル者數十、其後加削増減一ナラズ、慶應中、凡二百七十一藩、王政革新、更メテ藩ヲ建ル者十四、既ニシテ奥羽ヲ分テ七國トシ、蝦夷ヲ以テ北海道ト稱シ、十一國ニ分チ、明治四年、諸藩ヲ廢シテ縣トナシ、郡縣ノ治ニ復ス、凡ソ五畿、七道、七十三國、二京、三府、六鎭、六十縣、皇居ヲ東京ニ定メ、開拓使ヲ置テ、北海道十一國ヲ經理シ、琉球ヲ封ジテ藩屬王國トス、此古今沿革ノ大略ナリ、

地名命名

地形爲名

〔日本國郡沿革考（一說）〕享保十五年五月令、今後有墾闢之地新建村、宜以某新田稱之、勿唱某村、

〔出雲風土記（秋鹿郡）〕惠曇鄕、郡家東北九里卅步、須佐能乎命御子、磐坂日子命、國巡行坐時、至坐此處而詔、此處者國稚美好、有國形如畫鞆哉、吾之宮者是處造事者詔、故云惠伴、（神龜三年改字惠曇）

〔日本書紀（七景行）〕十二年十月、到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也、（碩田此云於保岐陀）　十七年三月己酉、幸子湯縣、遊于丹裳小野、時東望之謂左右曰、是國也直向於日出方、故號其國曰日向也、

〔豐後風土記（日田郡）〕鏡坂（在郡西）　昔者纏向日代宮御宇天皇（○景行）登此坂上、御覽國形、卽勅曰、此國地形似鏡面哉、因曰鏡坂、斯其緣也、

境界爲名

〔和泉志（二大鳥郡）〕村里　堺南莊（大街一條自東達西謂之大正路、乃攝州分界、因有堺名、）

〔攝津志（二住吉郡）〕村里　堺北莊（中略）乃泉州界也、

外國名爲名

〔續日本紀（七元正）〕靈龜二年五月辛卯、以駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野七國、高麗人千七百九十九人、遷于武藏國、置高麗郡焉、

〔播磨風土記（飾磨郡）〕枚野里（○中略）所以號新良訓者、昔新羅國人來朝之時、宿於此村、故號新羅訓、

〔續日本紀〕二十一淳仁天平寶字二年八月癸亥、歸化新羅僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人、移武藏國閑地、於是始置新羅郡焉、

方位爲名

〔倭名類聚抄〕五國郡河內國〈○中略〉丹比〈太知比、爲丹南、爲丹北、〉　攝津國〈○中略〉東生〈比牟我志奈里〉西生〈准之奈里〉

〔南海通紀〕二十香西藤尾八幡宮記

香川郡ヲ追テ香東香西トスル事ハ其例多シ、〈○中略〉横ニ行ヲ條トス、流ニ從フヲ上下ト云ヘリ、

天象爲名

〔肥前風土記〕基肄郡昔者纏向日代宮御宇天皇、〈○景行〉巡狩之時、御筑紫國御井郡高羅之行宮、遊覽國內、霧覆基肄之山、天皇勅曰、彼國可謂霧之國、後人改號基肄國、今以爲郡名、

〔肥前風土記〕松浦郡賀周里〈在郡西北〉

昔者此里有土蜘蛛、名曰海松橿媛、纏向日代宮御宇天皇、〈○景行〉巡國之時、遣陪從大屋田子、〈日下部君等祖也〉誅滅時、霞四含不見物色、因曰霞里、今謂賀周里、訛之也、

〔常陸風土記〕行方郡郡南二十里香澄里、古傳曰、大足日子天皇〈○景行〉登坐下總國印波鳥見丘、留連遙望、顧東而勅侍臣曰、海即青波浩行、陸是丹霞空朦、國在其中、朕目所見者、時人由是謂之霞鄉、

社名爲名

〔肥前風土記〕基肄郡姫社鄉

此鄉之中有川、名曰山途川、其源出郡北、山南流而會御井大川、昔者此門之西有荒神、行路之人、多被殺害、半凌半殺、于時卜求祟由、兆云、令筑前國宗像郡人珂是胡祭吾社、若合願者、不起荒心、覓珂是古、令祭神社、珂是古即捧幡祈禱云、誠有欲吾祀者、此幡順風飛往墮願吾之神邊、使即擧幡順風放遣、于時其幡飛往、墮於御原郡姫社之社、更還飛來落此山途川邊之田村、珂是古自知神之在、家其夜夢見、臥機〈謂久都毗枳〉絡𥿻〈謂多多利〉儛遊出來、壓驚珂是古、於是亦織女神即立社祭之、自爾已來、行路之人、不被殺害、因曰姫社、今以爲鄉名、

〔東海道名所記〕四宮より桑名まで七里舟渡し〈○中略〉

寺號爲名

亭主立出て、さま〴〵物がたりし侍べりける中に爰を宮と申す事は、熱田の大明神おはします故に、熱田を略して、只宮と計申すなり、

〔土佐州郡志土佐郡〕一宮庄○中略

一宮在二村東北一、正一位高加茂大明神、○下略

〔武藏演路六足立郡〕簸川神社　大宮宿　一鳥居より本社迄十八町、武藏國一ノ宮、神領三百石、今氷川大明神ト稱、

〔攝津志十二矢田部郡〕神廟　生田神社(中略)生田宮村

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　淨土寺、古天台門主有二淨土寺之號一、今寺絕爲二村名一、

〔大和志二添上郡〕佛刹　紀寺、紀寺町○中略　元興寺、元興寺町○下略

〔攝津志八河邊郡〕佛刹　滿願寺、滿願寺村○中略　中山寺、中山寺村○中略　多田院、多田院村○中略　大覺寺、尼崎大覺寺町○下略

〔和泉志三和泉郡〕佛刹　國分寺國分村

〔江戸名所圖會九〕醫王山國分寺　最勝院と號、國分寺村にあり、

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

下總○中略　神宮寺(シゲジ)村

官衙爲名

〔若狹國志二遠敷郡〕村里　神宮寺類聚國史所謂神願寺在二于此一、後改二神宮寺一、故村名亦從レ之、

〔大宰管內志肥前三佐嘉郡〕白山高寺

同書○肥陽古跡記に、○中略昔年熊襲退治御時、龍艦の著岸せし地を龍髓島と云、卽其處に寺院をたて、龍造寺と號す、○中略處名をも龍造寺村と云、

〔倭訓栞中編八古〕こくが　國衙と書り、國司の政を行ふ所也、今尾張中島郡に國衙庄ありて、司館の趾を國衙畠といへり、

〔河內志十四志紀郡〕村里 國府一屬邑

〔倭訓栞中編二十二不〕ふちう 文選注に、府中大將軍幕府也、古文後集に、府中大臣宰相所居ともいへり、駿河國に府中と稱する所有、

〔江戶名所圖會九〕府中驛舍 甲州街道の官驛にして、〇中略舊名を小野縣と稱す、武藏國府にして、上古國造居館の地なり、

官職爲名

〔出雲風土記出雲郡〕健部鄕、〇中略纏向檜代宮御宇天皇、〇景行勅不忘朕御子倭健命之御名、健部定給、爾時神門臣古禰健部定給、卽健部臣等、自古至今、猶居此處、故云健部、

〔豐後風土記日田郡〕靭編鄕在郡東南、昔者磯城島城島宮御宇天國排開廣庭天皇〇欽明之世、日下部君等祖邑阿自、仕奉靭部、其邑阿自、久就於此村、造宅居之、因斯名曰靭負村、後人改曰靭編鄕、

〔出雲風土記意宇郡〕舍人鄕、郡家正東廿六里、志貴島宮御宇天皇〇欽明御世、倉舍人君等之祖、日置臣志毘、大舍人供奉之、卽是志毘之所居、故云舍人、

〔雍州府志八古蹟〕愛宕郡 仕丁町 在新町中立賣通南、此處人昇鳳輦、故謂仕丁町、是故無課役、

神名爲名

〔播磨風土記飾磨郡〕英賀里、土中上右稱英賀者、伊和大神之子、阿賀比古阿賀比賣二神、在於此處、故因神名、以爲里名、

〔常陸風土記香島郡〕古老曰、〇中略其處所有、天之大神社、坂戶社、沼尾社、合三處、總稱香島之大神、因名郡焉、

〔日本書紀景行七〕十八年六月丙子、到阿蘇國也、其國郊原曠遠不見人居、天皇曰、是國有人乎、時有二神、曰阿蘇都彥、阿蘇都媛、忽化人以遊詣之曰、吾二人在、何無人耶、故號其國曰阿蘇、 七月丁酉、到八女縣、〇中略水沼縣主猿大海奏言、有女神名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名由此起也、

人名爲名

〔常陸風土記筑波郡〕古老曰、筑波之縣、古謂紀國、美萬貴天皇〇崇神之世、遣采女臣友屬筑波命於紀國之國造、時筑波命曰、欲令身名者著國而後世流傳、卽改本號、更稱筑波者、

〔日本書紀垂仁六〕二年(中略)一云、御間城天皇(崇神)之世、額有角人、乘一船泊于越國笥飯浦、(中略)是時遇天皇崩、便留之仕活目天皇(垂仁)逮于三年、(中略)天皇詔阿羅斯等曰、汝不迷道必速詣之、遇先皇而仕歟、是以改汝本國名、追負御間城天皇御名、便爲汝國名、仍以赤織絹給阿羅斯等、返于本土、故號其國謂彌摩那國、其是之緣也、

〔播磨風土記揖保郡〕越部里、舊名皇子代里土中中、所以號皇子代者、勾宮天皇〇安閑之世、寵人但馬君小津、蒙寵賜姓、爲皇子代君、而造三宅於此村、令仕奉之、故曰子代村、

〔播磨風土記宍禾郡〕比治里、土中上所以名比治者、難波長柄豐前天皇〇孝德之世、分揖保郡、作宍禾郡之時、山部比治任爲里長、依此人名、故曰比治里、

〔播磨風土記飾磨郡〕伊和里〇中略註右號伊和部者、積幡郡伊和君等族、到來居於此、故號伊和部、

〔雍州府志八古蹟〕愛宕郡　大心院町　在安樂小路北、曾大心院細川政元宅在此處、今爲民家、〇中略

德大寺町　在新町武者小路北、古堂上德大寺家宅在斯處云、

〔甲子夜話四十八〕林氏曰、居宅ノ地名世上ニテ、ヤヨスガシト云、是モト諳厄利亞人ヤンヨウスト云シ者ノ僑寓セショリ地ノ字トナリ、ヤヨスガシト云、從來ハ蠻語ナリ、夫ヲ類音ニテ取ナシ、昔ハ八重洲河岸ト書ク、家ノ鳳岡文集ニ此如ク見ヘシカバ、御普請役所ノ古帳檢點ノコトヲ、先年奉行ニ賴シニ、元祿頃ノ古記、皆八重洲ノ字ヲ用テ書クト、因テ官ヘ呈スル文書並ニ世間文通ノ書牘、ソノ外ニモ予家ニテハ、舊ノマヽヲ用ユ、他ニテハ今ハ兎角八代洲ト書クナリ、

〔江戸砂子一〕八官町　八官と云異國人に、此所にてやしき下されしと也、

動物爲名

〔日本書紀神武三〕戊午年十二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨氷、乃有金色靈鵄、飛來止于皇弓弭、〇中略時人仍號鵄邑、今云鳥見是訛也、

〔常陸風土記行方郡〕自無梶河、達于部陲、有鴨飛度、天皇〇倭武尊躬射、鴨迅應弦而墮、仍名其地謂之鴨野、

（中略）

郡南七里男高里、（○中略）南有鯨岡、上古之時、海鯨匍匐、而來所臥、（○下略）

植物爲名

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、（○中略）天富命更求沃壤、分阿波忌部、率往東土、播殖麻穀、好麻所生、故謂之總國、穀木所生故謂之結城郡、（古語麻謂之總也、今爲上總下總二國是也、）

〔古事記中神武〕於是其伊須氣余理比賣命之家、在狹井河之上、（中略）（其河謂佐韋河由者、於其河邊山由理草多在、故取其山由理草之名、號佐韋河也、山由理草之本名云佐韋也、）

〔播磨風土記揖保郡〕萩原里、（土中中）右所以名萩原者、息長帶日賣命、（○神功）韓國還上之時、御船宿於此村、一夜之間生萩、根高一丈許、仍名萩原、

金石爲名

〔播磨風土記宍禾郡〕大内川、小内川、金内川、（○中略）生鐵者稱金内、

〔播磨風土記神前郡〕所以云砥川山者、彼山有砥、故曰砥川山、

〔豐後風土記海部郡〕丹生鄕、（在郡西）昔時之人、取此山沙、該朱沙、因曰丹生鄕、

〔出雲風土記意宇郡〕黑田驛、郡家同所、（今郡家西北二里、有黑田村、）土體色黑、故云黑田、

器物爲名

〔播磨風土記飾磨郡〕所以稱筥丘者、大汝少日子根命與日女道丘神期會之時、日女道神、猶丘備食物及筥器等具、故號筥丘、

〔古事記中神武〕故從其國上行之時、經浪速之渡、而泊青雲之白肩津、此時登美能那賀須泥毘古（自登下九字以音）興軍、待向以戰、爾取所入御船之楯、而下立、故號其地謂楯津、於今者云日下之蓼津也、

〔日本書紀九神功〕九年（○中略）三月戊子、皇后（○神功）欲擊熊鷲而自橿日宮遷于松峽宮、時飄風忽起、御笠墮風、故時人號其處曰御笠也、

〔肥前風土記松浦郡〕登望驛（在郡西）

事業爲名

昔者氣長足姬尊、〇神功皇后到於此處、留爲雄裝、御臂之鞆、落於此村、因號鞆驛、

〔常陸風土記 久慈郡〕郡西口里靜織里、上古之時、未識織綾之機、未在知人、于時此村初織、因名之、

〔播磨風土記 宍禾郡〕石作里本名伊和土下中、所以名石作者、石作首等居於此村、故庚午年爲石作里、

〔豐後風土記 海部郡〕此郡百姓、並海邊白水郎也、因曰海部郡、

〔日本書紀 五崇神〕七年八月己酉、天皇得夢辭、益歡於心、布告天下、求大田田根子、卽於茅渟縣〇和泉陶邑得大田田根子而貢之、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年四月廿一日丙午、河內和泉兩國、相爭燒陶伐薪之山、〇下略

〔雍州府志 六土產〕材木〇中略於京師二條北東堀河幷春日通西賣之、則號丸多町、

〔江戶砂子 一〕四日市 江戶ばし南詰廣小路の所

此所むかしは四日市場と云村にて、四々の日市立し所と云つたふ、

由緣爲名

〔日本書紀 三神武〕戊午年五月癸酉、軍至茅渟山城水門、亦名山井水門、茅渟此云智怒、時五瀨命矢瘡痛甚、乃撫劍而雄誥之曰、〇中略時人因號其處曰雄水門、

〔古事記 中景行〕倭建命、〇中略爾到相武國之時、〇中略其國造火著其野、〇中略於是先以其御刀苅撥草、以其火打而打出火、著向火而燒退、還出、皆切滅其國造等、卽著火燒、故其地者於今謂燒遣也、

〔古事記 中景行〕於是零大氷雨、打惑倭建命、〇註略故還下坐之、到玉倉部之淸泉、以息坐之時、御心稍寤、故號其淸泉、謂居寤淸泉也、自其處發、到當藝野上之時、詔者吾心恒念自虛翔行、然今吾足不得步、成當藝斯形、自當下三字以音故號其地謂當藝也、自其地差少幸行、因甚疲、衝御杖稍步、故號其地謂杖衝坂也、〇中略自其地幸、到三重村之時、亦詔之、吾足如三重勾而甚疲、故號其地謂三重、

〔日本書紀 九神功〕九年〇仲哀四月甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河之側、於是皇后勾針爲鉤、取粒爲餌、抽取裳糸爲緡、登河中石上、而投鉤祈之曰、朕西欲求財國、若有成事者、河魚飮鉤、因以擧

改撰文字取嘉名

竿、乃獲細鱗魚、時皇后曰、希見物也、希見此云梅豆邏志故時人號其處曰梅豆羅國、今謂松浦訛焉　十二月辛亥、生譽田天皇應神於筑紫、故時人號其產處曰宇瀰也、

〔播磨風土記飾磨郡〕賀野里、幣丘、〇中略所以稱幣丘者、品太天皇應神到於此處、奉幣地祇、故號幣丘、

〔出雲風土記意宇郡〕忌部神戶、郡家正西廿一里二百六十步、國造神吉詞奏參向朝廷時、御沐之忌里、故云忌部、

〔雍州府志八古蹟〕愛宕郡　吉水、在丸山下、凡斯邊依此水、總稱吉水、〇中略

徒斯辻子　在一條北油小路與堀河之間、近世耶蘇宗門之寺在斯町、倭俗誤徒斯謂太宇須、故今稱大宇須辻子、

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月甲子、畿內七道諸國郡鄕名著好字、其郡內所生、銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目、及土地沃堉、山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上、

〔延喜式二十二民部〕凡諸國部內郡里等名、並用二字、必取嘉名、

〔出雲風土記〕右〇中略其鄕名字者、被神龜三年民部省口宣改之、

〔萬葉集抄一〕たまきはるうちのおほ野にむまなへて云々〇中略

內野といふは、大和の國宇知の郡の野なり、今內野と書るは、いにしへはかくのごとくかきけるにや、又ことばだにもたがはざれば、ともかくもかける常事也、於國郡鄕村等用二字、用好字、元明天皇御宇和銅六年被作諸國風土記時事也、其以前國郡鄕村名、或一字二字、又鄕村等異名假名にて、或は三字四字もありける也、而令注進風土記之時、任太政官口下之旨、各定二字用好字也、

〔地名字音轉用例〕凡ソ諸國ノ名、又郡鄕ナドノ名ドモ、古ヘハ文字ニカヽハラズ、正字ニマレ借字ニマレ、アルベキマヽニ、身刺、三野、科野、道奧、稻羽、針間、津島ナドヤウニ書キ、或ハ上毛野、下毛野、多遲麻ナド、字ノ數ニモカヽハラズ、三字ナドニモ書キタリシヲ、ヤヽ後ニナリテ字ヲ擇ブコト始マリ、又

必ズ二字ニ定メテ書クコトヽハナレルナリ、〇中略 出雲風土記ニ、郷名ドモ、神龜三年改レ字トシルセル多ケレバ、和銅ノ後ニモ、ナホツギツギ改メラレシモ有シナルベシ、又必二字ニ定メラレタルモ、延喜式ヨリ始マルコトニハ非ズ、既ク奈良朝ノホドヨリ、多クハ二字ニ書リト見エタリ、サテ國郡郷ノ名、カクノ如ク好字ヲ擇ビ、必ズ二字ニ書クニツキテハ、字音ヲ借リテ書ク名ハ、尋常ノ假字ノ例ニテハ、二字ニ約メガタク、字ノ本音ノマヽニテハ、其名ニ叶ヘ難キガ多キ故ニ、字音ヲサマザマニ轉ジ用ヒテ、尋常ノ假字ノ例トハ、異ナルガ多キコト、相模ノ相サガ、信濃ノ信シナナドノ如シ、カヽルタグヒ皆是レ物々シキ字ヲ擇ビテ、必ズ二字ニ約メムタメニ、止事ヲ得ズ、如此ザマニ音ヲ轉用シタル物ナリ、然ルニ後ノ世ノ人、此義ヲタドラズシテ、國郡郷ノ名ドモノ、其字音ニアタラザルコトヲ疑フ者多シ、殊ニ漢學者ナドハ、タヾ漢籍ヲ見馴レタル心ニテ、字ヲ本ト心得ルカラ、其音ニ當ラザル地名ヲバ、後ニ訛レルモノトシテ、タトヘバ相模ハモトサウモ、信濃ハシンノツナリシヲ、サガミ、シナノトハ、後ニ訛レルナリトヤウニサヘ思フメリ、是イミジキヒガコトナリ、サガミ、シナノハ、本ヨリノ名ナルニ、相模、信濃ナドノ字ハ、後ニ塡タルモノニテ、末ナルコトヲ辨ヘザルモノナリ、

〔閑田耕筆一〕國里の名に、唱へと文字と異なるもの、近江はもと淡海なれども、都近き江といふより、今の字に改れり、遠江も是に對す、上毛カミツケ下毛シモツケも唱へは殘りて、文字は上野下野に改れり、むさしさがみも武藏相模の文字にては、いかにもよむべからず、むさしもむさかみの略、武者のこゝろなりと加茂氏はいへり、慶雲年間諸國好文字に改給ひし時の所爲にや、今はいふ人も書人も馴てあやしまざるなり、里の名もかすがを春日と書るは、春はかすむ義、日はいくかといふかにや、泙鹿とも古書に見ゆるは明らかなり、河内國交野郡に私部私市と書て、きさべ、きさ市といふ、私ノ字きさとよむこと心得がたし、もとさゝとかなを付たるさに一點を誤りそへて、きになりたるにやあらん、ひらかたを牧方とかけるは、枚字につめを添たる誤は誰も知べし、淀の隣村に一口

と書ていもあらひと唱ふるもいぶかしきを、ある人はいふ、一はいなり、口はもらひと義訓せるか、いもらひとも稱ふるなりといへり、備後國世良郡の邊鄙に、小童村と書、ひちむらといふ所あり、其所の人も義はしらずといふ、又伊勢國三重郡に、四足八島村と書て、ろくろみ村とよむも同じく解べからず、是等はもしひちといひ、ろくろみといふ名あるがうへに、又小童とよび、四足八島とよぶ名をおほせて、兩名の文字と唱へと混じたるにや、其文字も唱へも、其時には各所由あるべけれど、後には倶にしられずなりたるならし、近江愛知川の近邑に、いんでといへるは位田と書り、是は昔菅家の位田に充給ひし所にて、音便にて轉じたるならん、北近江坂田郡馬渡まうたりと稱するも同例也、

〔出雲風土記意宇郡〕母理郷、○中略故云文理、神龜三年、改字母理、

屋代郷、○中略故云社、神龜三年、改字屋代、○中略

飯梨郷、○中略故云飯成、神龜三年、改字飯梨、○中略

拜志郷、○中略故云林、神龜三年、改字拜志、○下略

〔出雲風土記出雲郡〕漆沼郷、○中略故云志司沼、神龜三年、改字漆沼、○中略

杵築郷、○中略故云寸付、神龜三年、改字杵築、○下略

〔肥前風土記神埼郡〕三根郷、○中略因名御寢、今改寢字爲根、

〔羅山文集三十七傳〕二荒山神傳

本朝青史公、讀延喜式、至于神名帳所載下野國河内郡二荒山神社、曰、是何神耶、二荒訓云布他阿羅、而今云補陀落、以爲觀音之所坐、又轉二荒音爲日光、而云大日遍照之山、皆是浮屠者之誣世俗欺盲瞽、而援神入佛之姦謀也、世之人不之察、遂至於使本朝之名神、合汚于胡鬼、而奪神宮爲梵字、掠社戸

爲倩倖焉、豈不惑乎、亦不悲乎、

〔南留別志〕二荒を補陀落とし、音にてよみて、にくわうといふを、日光とかき替たるを見れば、ふるき事は、考へ得がたき事おほかるべし、

〔出雲風土記出雲郡〕健部郷、〈中略〉故云宇夜里、而後改所以號健部之、〈下略〉

〔豐後風土記直入郡〕俗曰直生村、後人改曰直入郡、

〔肥前風土記養父郡〕鳥樔郷、〈中略〉因曰鳥屋郷、後人改曰鳥樔郷、

〔播磨風土記揖保郡〕大家里〈舊名大宮里〉土中上、品太天皇〈應神〉巡行之時、營宮此村、故曰大宮、後至田中大夫爲宰之時、改大宅里、

大法山〈今名勝部岡〉〈中略〉

少宅里〈本名漢部里〉土下中、所以號漢部者、漢人居之此村、故以爲名、以後改曰少宅者、〈下略〉

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし、せいとくひじりといふ聖ありけるが、〈中略〉けちえんのために物まいらせてみんとてよばせ給ひければ、いみじげなる聖あゆみまいる、〈中略〉さて出て行ほどに、四條の北なる小路にゑどをまる、此ゑりにぐしたるもの、ゑちらしたれば、只墨のやうにくろきゑどを、ひまもなくはる〲とゑちらしたれば、げすなどもきたながりて、その小路を糞の小路とつけたりけるを、帝聞せ給て、その四條の南をば何といふといはせ給ければ、綾の小路となん申と申ければ、さらばこれをば錦の小路といへかし、あまりきたなきなかな、と仰られけるよりしてぞ、錦の小路とはいひける、

〔豐鑑一長濱眞砂〕明る天正二年の春、小谷山は北にさかひ、雪いとふかく、さえまさる空のくるしみあり、三里餘のいぬゐにあたり、今濱とて古き城所あり、海にそひて雪淺く、舟の往來も便ありて、

今信長の御座安土山へも程遠からねば、かふり仕るに煩なし、此所にすまむとて、堀をふかくし石ぐらを打まはし、とのつくりしてうつり給ひぬ、今濱のなを改めて長濱となん、

君が代も我よもともに長濱の眞砂の數のつきやらぬまで、たれ人のよみしといふことも忘れにけり、

遺跡

〔藝藩通志　六　安藝國廣島府〕疆域形勢
廣島府は地安藝廣島二郡に亘る、大抵京橋川より東は安藝郡、西は沼田郡なり、舊稱五箇庄、○中略其廣島と名けしは、その地廣く四方水にて繞れるを以なるべし、俗傳る說あれども今取らず、

〔日本後紀　十四　平城〕大同元年七月戊戌、改紀伊國安諦郡爲在田郡、以詞涉天皇諱也、○平城諱安殿

〔日本紀略　嵯峨〕大同四年九月乙巳、改伊豫國神野郡爲新居郡、以觸上諱也、○嵯峨諱賀美能

〔續日本後紀　二　仁明〕天長十年七月癸巳、天下諸國、人民姓名及郡鄕山川等號有觸諱者、皆令改易、

〔古京遺文〕石川朝臣年足墓志
御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣、當平城宮御宇天皇之世、天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳、春秋七十有五薨于京宅、以十二月乙巳朔壬申葬于攝津國島上郡白髮鄕酒垂山墓、○中略

右墓志、文政三年正月、攝津國島上郡眞上光德寺村民德左衞門、鑿其宅後荒神山而獲之、○中略倭名類聚抄、島上郡有眞上鄕、無白髮鄕、按續日本紀、延曆四年五月、詔曰、臣子之禮、必避君諱、比者先帝御名、及朕之諱、公私觸犯、猶不忍聞、自今以後、宜並改避、於是改姓白髮部爲眞髮部、山部爲山、然則白髮鄕之爲眞上、亦係延曆所改、是志在詔前二十四年、故猶不避也、常陸國眞壁郡、本名白壁郡、亦在是時也、見常陸風土記、改爲眞壁、

〔常陸風土記〕白壁郡、東筑波郡、南毛野河、西北並新治郡、

〔訂正常陸風土記〕按白壁郡卽今眞壁郡也、續日本紀延曆四年、詔改姓白髮部、爲眞髮部、是避光仁

天皇諱〇白壁也、據此則郡名亦當時所改也、

〔冠辭續貂二〕大伴の　三津　高師〇中略

攝津の風土記に、夢野は雄伴郡に在と見え、又大和の法隆寺の資財牒に、攝津國雄伴郡宇奈五岳壹地と見えたり、和名抄には此郡名なきは、淳和天皇の御諱を大伴と申奉りしかば、大伴氏を伴氏と改めし時、雄伴郡を八田部と改ためけん、此事日本後紀、日本逸史等に見えざるは、脱漏なるべし、是よりさきに、桓武の御名を山部と申せしかば、山部氏を山氏と改め、平城の御名をさけて、紀の國の安提郡を在田郡と改め、嵯峨の御名をさけて、伊與の神野郡を新居に改めらるる例也、

移地名

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、〇中略天富命更求沃壤、分阿波忌部、率往東土、播殖麻穀、〇中略阿波忌部所居、便名安房郡、今安房國是也、

〔播磨風土記飾磨郡〕英保里、土中上右稱英保者、伊豫國英保村人到來、居於此處、故號英保村、

美濃里、繼潮土下中、右號美濃者、讃伎國彌濃郡人到來居之、故號美濃、

〔播磨風土記揖保郡〕大田里、土中上所以稱大田者、昔呉勝從韓國度來、始到於紀伊國名草郡大田村、其後分來移到於攝津國三島賀美郡大田村、其又遷來於揖保郡大田村、是本紀伊國大田以爲名也、

〔江戸砂子一〕三河町　御入國の時、三河の町人に此地に下され、町屋を作ルと也、

地名訛誤

〔日本書紀三神武〕戊午年二月丁未、皇師遂東、舳艫相接、方到難波之碕、會有奔潮太急、因以名爲浪速國、亦曰浪華、今謂難波訛也、訛此云與許奈磨盧

四月甲辰、皇師勒兵、歩趣龍田、〇中略更欲東踰膽駒山、而入中洲、時長髓彥〇中略徼之於孔舍衞坂、與之會戰、有流矢、中五瀨命肱脛、〇中略初孔舍衞之戰、有人隱於大樹、而得免難、仍指其樹曰、恩如母、時人因號其地曰母木邑、今云飫悶廼奇訛也、

〔日本書紀五崇神〕十年九月、天皇〇中略復遣大彥與和珥臣遠祖彥國葺、向山背擊埴安彥、爰以忌瓮鎭座

於和珥武鐰坂上、則率精兵進登那羅山而軍之、時官軍屯聚而蹢跙草木、因以號其山曰那羅山、（蹢跙此云布瀰那羅須）更避那羅山而進到輪韓河、埴安彥挾河屯之、各相挑焉、故時人改號其河曰挑河、今謂泉河訛也、埴安彥望之問彥國葺曰何由矣、汝興師來耶、對曰、汝逆天無道、欲傾王室、故舉義兵欲討汝逆、是天皇之命也、於是各爭先射、武埴安彥先射彥國葺不得中、後彥國葺射埴安彥中胸而殺焉、其軍衆脅退、則追破於河北、而斬首過半、屍骨多溢、故號其處曰羽振苑、亦其卒怖走、屎漏于褌、乃脫甲而逃之、知不得免叩頭曰我君、故時人號其脫甲處曰伽和羅、褌屎處曰屎褌、今謂樟葉訛也、又號叩頭之處曰我君、（叩頭此云迺務）

〔古事記傳二十七〕万葉三に、燒津邊吾去しかば、駿河なる、阿倍の市道に、逢し兒等はも、神名式に、駿河國益津郡燒津神社（今も燒津村と云あり、又野燒村とも云もあり、野燒ともいふ、）和名抄に、同國益頭（末志）郡益頭（万之）郷と見え、かの風土記にも、廬䏻郡など書れど、益頭は音を取れる字にて、即燒津なり、（此事谷川氏も云りき、益頭字音を取れゝば、益もヤクの音を轉じて、ヤキに用ひたるなり、然るを廊志豆としも云は、やゝ後に燒と云ことを忌嫌みて、實字の訓に唱へ更たる物なるべし、然る例他にもあるなり、）

〔日本略記〕一四方名之事、京より東を關東と言、又は東ともいふ、京より南を關南と言、又は南方ともいふ、京より西をば關西といひ、又は鎮西ともいふ、又は西國ともいふ、京より北をば關北と言、又は北陸とも又は北地ともいふ、

〔日本國郡沿革考總一說〕按、古時置逢坂關於近江國滋賀郡、稱關以東三十三國曰關東、稱關以西三十三國曰關西、後及于廢逢坂關（日本紀略、延曆十四年、廢近江國相坂剗、）更稱宮根關以東至常陸之八國爲關東、或稱坂東、（則武藏、相模、安房、上總、下總、常陸、上野、下野之八國也、北條氏據關東、以常陸非其所轄、除之、另加伊豆、仍以坂東八國稱之、又東鑑卷十七、所謂關東八國者、以五畿及東山東海二道二十八國爲關東、以北陸山陰山陽南海西海五道三十八國爲關西、與上文異其制、）今世加之以伊豆、甲斐、出羽、陸奧、四國、稱關東十二國、或又稱關東筋、（猶言道也、）又五畿內及近江、丹波、播磨之八國、稱上方筋、或稱五畿內、三州、呼山陽道稱中國筋、南海道稱四國筋、西海道稱西國筋、或稱九州筋、北陸道稱北國筋、東海道稱東海道筋、是亦俗間所稱之文字、而官府

亦沿稱之、雖不雅馴、遂不可強更者、

○按ズルニ、逢坂關ハ桓武天皇ノ朝ニ廢シタレドモ、文德天皇ノ時、復ビ之ヲ置ケリ、尙ホ關ヲ廢置セシ事ハ關篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

中洲 邊遠 緣海國

〔書言字考節用集 一乾坤〕邊要(ヘンエウ)〔延喜式、陸奧、出羽、佐渡、隱岐、壹岐、對馬、爲之邊要、〕邊鄙(ヘンピ)、邊土(ヘンド)、邊境(ヘンキヤウ)、邊陲(ヘンスイ)、邊夷(ヘンイ)、

〔令義解 三賦役〕凡邊遠國有夷人雜類〔謂夷者夷狄也、雜類者亦夷之種類也、〕之所、應輸調役者、隨事斟量、不必同華夏、〔謂中國也〕

〔延喜式 二十二民部〕陸奧國、出羽國、佐渡國、隱岐國、壹岐島、對馬島、　右四國二島爲邊要、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕邊要國　陸奧　出羽　佐渡　對馬　多禰　已上四國三島爲邊要之、可見式、

〔日本書紀 七景行〕五十一年、所獻神宮〔○日本武尊奉獻〕蝦夷等、晝夜喧譁、出入無禮、時倭姬命曰、是蝦夷等不可近就於神宮、則進上於朝庭、仍令安置御諸山傍、未經幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里而脅人民、天皇聞之、詔群卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有獸心、難住中國(ウチツクニ)、故隨其情願、令班邦畿之外、是今播磨、讚岐、伊豫、〔○伊豫原作伊勢、據一本改、〕安藝、阿波、凡五國佐伯部之祖也、

〔續日本紀 九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、遒者邊郡人民暴被寇賊、遂適東西、流離分散、若不加矜恤、恐貽後患、是以聖王立制、亦務實邊者、蓋以安中國也、望請陸奧按察使管內百姓、庸調浸免、勸課農桑、敎習射騎、更税助邊之資、使擬賜夷之祿、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年七月丁丑、勅、安不忘危、古今通典、宜仰緣海諸國、勤令警固、其因幡、伯耆、出雲、石見、安藝、周防、長門等國、一依天平四年節度使從三位多治比眞人縣守等時式、勤以警固焉、又太宰宜依同年節度使從三位藤原朝臣宇合時式、　戊子、勅曰、筑紫太宰僻居西海、〔○中略〕須緣海村邑見賊來過者、當卽差使申於國、〔○下略〕

〔文德實錄 四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、〔○中略〕嘉祥二年春、兼尾張守、于時太宰府吏多不良、衰弊日甚、貞主上表曰、夫太宰府者、西極之大壤、中國之領袖也、〔○下略〕

東國　西國

略

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年五月廿六日甲子、造八幡四天王像五鋪、各一鋪下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等國、下知國司曰、彼國地在西極、堺近新羅、警備之謀、當異他國、宜歸命尊像、勤誠修法、調伏賊心、消却災變、仍須點擇地勢高敞、瞼瞰賊境之道場、若素无道場、新擇善地、建立仁祠、安置尊像、○下略

〔類聚三代格五〕太政官符

應諸國弩師秩限一准史生事

右得式部省解偁、撿案內、弩師之興、始自邊要、陸奥、出羽、太宰府、及壹岐、對馬島、○島原脫、據一本補、皆准史生限五年、伯耆隱岐二國亦准史生限四年、而因幡出雲長門等國、偏依○依原脫、據一本補、國解徒限六年、伏尋物情、陸奧出羽之在絕遠、尙限五年、因幡出雲之居中國、何得六年、求之物情、竊所不安、○中略

元慶二年二月三日

〔釋日本紀八述義〕天日隅宮○中略

答、陰陽二神生大八洲之時、最初生大日本豐秋津洲、此今大倭國者、日本之中洲也、然則肇神代以大倭國爲中國、仍雲州依當西北之隅、定其方角耳、

〔日本書紀五崇神〕四十八年正月戊子、天皇勅豐城命、活目尊曰、汝等二子慈愛共齊、不知曷爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈寐、各得夢也、會明兄豐城命以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山、向東而八廻弄槍、八廻擊刀、○中略則天皇相夢謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、弟是悉臨四方、宜繼朕位、

〔古事記中景行〕倭建命、○中略幸于東國、悉言向和平山河荒神及不伏人等、

〔今昔物語十七〕京住女人依地藏助活語第廿八

今昔、京ノ大刀帶町ノ邊ニ住ケル女有ケリ、本者東國ノ人也、○下略

坂東　坂西

〔元亨釋書 十感進〕釋增賀、平安城人、諫議大夫橘恒平之子也、誕質後數月、父母赴東州、

〔後撰和歌集 十五雜〕小野好古の朝臣、西の國のうての使に罷りて、二年といふ年、四位には必まかりなるべかりけるを、さもあらずなりにければ、かゝる事にしもさゝれにける事の、安からぬ由を憂へ送りて侍りける文の返事の裏に、かきつけ遣はしける、　源公忠朝臣 歌〇略

〔書言字考節用集 一乾坤〕坂東 又云關東 坂西 又云關西

〔令義解 七公式〕凡朝集使、東海道坂東、謂駿河與相模界坂也、東山道山東、謂信濃與上野界山也、〇下略

〔小右記〕寬弘二年十二月廿一日乙未、左大臣申云、如今常事殿被許宜歟、〇中略仍配宛國々多以不足、至坂東已弊國、不可敢宛者、〇下略

〔官職秘抄 下〕諸國 〇中略

掾 〇中略　內舍人任坂東、諫弓馬之故也、文章生任北陸西海、練文法為蕃客也、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字三年八月庚寅、遷坂東八國幷越前、能登、越後四國浮浪人二千人、以為雄勝柵戶、

〔太平記 十六〕本間孫四郞遠矢事

本間弓杖ニスガリテ、其身人數ナラヌ者ニテ候ヘバ、名乘申共誰カ御存知候ベキ、但弓箭ヲ取テハ、坂東八箇國ノ兵ノ中ニハ名ヲ知タル者モ御座候ラン、〇下略

〔平家物語 十一〕大さかごえの事

判官、また坂西の近藤六ちか家を召て、八島には平家の勢いか程有ぞと問給へば、千ぎにはよも過候はじと申す、

關東　關西

〔書言字考節用集 一乾坤〕關西 クハンゼイ 坂西、鎭西、並同、關東 クハントウ 關左、坂東、並同、

〔居龍工隨筆〕關の東とは逢坂より東を云、關東とは足からより東を云ふならん、

吾妻國

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月廿九日辛酉、夜地震、是日關東諸國地大震裂、相模武藏特爲尤甚、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年正月五日壬子、關東健士等廻南海可入花洛之由風聞、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年八月廿七日壬戌、將軍家御不例、縡危急之間、有御讓補沙汰、以關西三十八箇國地頭職、被奉讓舍弟千幡君、十歲以關東二十八箇國地頭幷總守護職、被充御長子一幡君、六歲

〔太平記十一〕諸將被進早馬於船上事

勸解由次官光守、諫言ヲ以テ被申ケルハ、〇中略賤キ諺ニ、東八箇國ノ勢ヲ以テ、日本國ノ勢ニ對シ、鎌倉中ノ勢ヲ以テ、東八箇國ノ勢ニ對ストイヘリ、

〔建武年間記〕於決斷所可有沙汰條々〇中略

一關東十ケ國成敗事〇中略

　　已上被押決斷所事

〔北條五代記一〕小田原北條家旗馬じるしの事

見しは昔北條氏直公時代、關八州の武士の旗、家々に傳ふる紋をあらはし、さし物は其身一代にかはると見えたり、

〔南方紀傳上〕南帝興國元年北朝曆應三年二月下旬、一品親房於常陸國小田城作職原抄二卷、奉獻吉野行宮、〇中略素壅爲廣才大智、今在東關逆旅、〇下略

〔書言字考節用集二乾坤〕東（アヅマ）（從合坂關以東、都稱東、）吾妻（同、日本武尊登碓氷峠、顧吾妻橘媛之故事、見日本紀、）邊鄙（同、西京賦註、邊邑也、）

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略於是日本武尊曰、蝦夷凶首咸伏其辜、唯信濃國、越國、頗未從化、則自甲斐北轉、歷武藏上野、西逮于碓日坂、時日本武尊、毎有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺、而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶（アヅマハヤ）、（嬬此云菟摩）故因號山東諸國、曰吾嬬國（アヅマノクニ）也、

〔常陸國風土記〕常陸國司解申、古老相傳舊聞事、

問國郡舊事、古老答曰、古者自相模國足柄岳坂以東諸縣、總稱我姬國、○下略

〔萬葉集三雜歌〕登筑波岳丹比眞人國人作歌一首幷短歌

雞之鳴、東國爾、高山者、左波爾雖有、明神之、貴山乃、儕立乃、見果石山跡、神代從、人之言嗣、國見爲、筑羽乃山矣、冬木成、時敷時跡、不見而往者、益而戀石見、雪消爲、山道尙矣、名積叙吾來前二、

〔萬葉集九挽歌〕詠勝鹿眞間娘子歌一首幷短歌

鷄鳴、吾妻乃國爾、古昔爾、有家留事登、至今、不絕言來、勝壯鹿乃、眞間乃手兒奈我、○下略

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕悲別歌○中略

氣緖爾、吾念君者、鷄鳴、東方坂乎、今日可越覽、

〔冠辭考六登〕とりがなく　あづま

萬葉集卷二に、入麻呂鳥之鳴、吾妻乃國之、卷三に、筑波山の歌鷄之鳴、東國爾、卷二十に、登利我奈久、安豆麻乎能故波、云々、多し、こは鷄は夜のあか時になく故に、明といひかけたる也、いかにぞなれば、古事記に、倭建命還上幸時、到足柄之坂本云云、紀には碓氷坂とす登立其坂、三歎、詔云阿豆麻波夜、故號其國謂阿豆麻也といへり、この阿豆麻を景行紀には吾妻と書、仁賢紀には吾夫を訓て阿我圖摩ともあれば、阿豆麻の阿は阿賀を略きていふ也、然れば鷄が鳴あと一語にかゝれる如くなれど、實は吾てふもとの語によりて、明といひかけたる也けり、本語によりてつゞけたりとみゆる類は、前にも後にも擧たり、且吾と明と清濁を嫌はぬこと、既にいへる妹爾戀明すてふを、吾能松原にいひかけ給へるが如し、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、京に有わびて、あづまにいきけるに、いせおはりのあはひの海づらをゆくに、なみのいとしろくたつをみて、○歌略

〔古今和歌集八離別〕友の吾妻へまかりける時によめる　良峯ひでをか

白雲のこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな、

〔玉葉和歌集八羇旅〕小一條左大臣藏人頭に侍りける時、東へ下る女に、櫛の筥鏡など送りて侍りけるに、よみてつかはしける、　讀人しらず〇歌略

〔今昔物語二十四〕大江匡衡和琴讀和歌語第五十二

今昔式部大夫大江匡衡ト云人有キ、〇中略匡衡ヲ呼テ女房共和琴ヲ差出シテ、万ノ事知リ給ヘルナレバ、此レヲ彈キ給ラム、此レ彈給ヘ聞カムト云ケレバ、匡衡其ノ答ヘヲバ不云シテ、此ナム讀懸ケル、

アフサカノ關ノアナタモマダミネバアヅマノコトモシラレザリケリ

奥羽

〔奥羽永慶軍記一〕奥州兵亂之起ノ事

東照大權現宮ノ御代ト成テ、永ク御政務正シク、奥羽ノ二州モ靜謐ニ治リ、江府ニ從ヒ奉ラズトイフ事ナシ、

〔憲法類編二十郡府縣〕奥羽兩國ヲ七國ニ分國ノ事

戊辰〇明治元年十二月七日御布告

〇按ズルニ、此ニ揭クル布告ノ全文ハ、陸奥國篇建置沿革條ニ載ス、

北國

〔平家物語六〕飛きやくたうらいの事

鎭西の者共、〇中略一向平家をそむいて源氏に同心の由申たりければ、平家の人々、東國北國のそむくだに有に、〇下略

〔續應仁後記三〕紀州兵亂事附畠山卜山禪門病死事

今茲天文三年ノ春三月、當國ノ住人野邊(ノヘ)六郎左衛門ト云者、是モト山命ニ叛ク、卜山禪門大ニ怒テ、此野邊ヲモ沒收シテ北國エ改易スベシト議セラル、

中國

〔太平記 二十六〕直冬西國下向事

左兵衛督（○足利直義、中略、）備後ノ鞆ニ座シ給テ、中國ノ成敗ヲ司ドルニ、○下略

〔武家名目抄 職名二十七上〕長門探題（又稱中國探題）

見聞雜錄云、兼ては禁中より、信長方被仰下候は、天下の支配いたし候共、中國十六ケ國の儀は、毛利家を以て探題とすべし、○下略

四國

〔運歩色葉集 志〕四國（阿波、讃岐、伊與、土佐、）

〔書言字考節用集 十數量〕本朝四國（阿波、讃岐、伊豫、土佐、）

〔古事記 上〕次生伊豫之二名島、此島者身一而有面四、毎面有名、故伊豫國謂愛上比賣、（此三字以音、下效此也、）讃岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、（此四字以音、）土佐國謂建依別、

〔今昔物語 三十一〕通四國邊地僧行不知所被打成馬語第十四

今昔、佛ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ、四國ノ邊地ト云ハ、伊豫、讃岐、阿波、土佐ノ海邊ノ廻也、其ノ僧共其ヲ廻リケルニ、思ヒ不懸ズ山ニ踏入ニケリ、

〔玉葉和歌集 二十神祇〕そのかみよりつかうまつりなれけるならひに、世を遁れて後も、賀茂の社に參りけるを、年たかくなりて、四國のかたへ修行しけるが、又歸りまゐらぬこともやとて、仁安三年十月十日夜、參りて幣まゐらすとて、たなをの社のもとにて、靜かに法施奉りける程、木の間の月ほの〳〵にて、常よりも神さびあはれに覺え侍りければ、　西行法師○歌略

〔吾妻鏡 四〕元暦二年（○文治元年）三月九日壬辰、熊野別當湛增、依廷尉（○源義經）引級、承追討使、去比渡讃岐國、今又可入九州之由有其聞、四國事者義經奉之、九州事者範賴奉之處、更又被抽如然之輩、匪啻失身之面目、已似無他之勇士、人之所思尤爲恥云云、

九州

〔和爾雅 一地理〕西海道九箇國（楓軒曰、此稱鎭西、又稱九州、或稱筑紫、）

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、〇中略嘉祥二年春、兼尾張守、于時太宰府吏多不良、衰弊日甚、貞主上表曰、夫太宰府者、西極之大壤、中國之領袖也、東以長門爲關、西以新羅爲拒、加以九國二島、郡縣闊遠、自古于今以爲重鎭、〇下略

〔榮花物語五浦々の別〕そのおりの大貳〇大宰は有國朝臣なり、〇中略御せうそこ我子のよしなりして申させたり、思がけぬかたにおはしましたるに、京のこともおぼつかなく、おどろきながら參りさぶらふべきに、九國の守にさぶらふ身なれば、さすがに思のまゝにえまかりありかぬになむ、〇下略

〔安西軍策一〕惠林院義植卿被大內義興事

義植卿ハ柄ニテ改行年ヲ越給ヘバ、九國ヨリ大友、菊池、龍造寺、小田、島津、伊藤、星野、松浦、相良、宗像已下、打連々々舞ニ取乘、春風ニ得意、柄浦ニ著ニケル、

〔川角太閤記三〕一越中の國佐々內藏助、秀吉は四國九國えとり出すなれば、定腋入可有と油斷可仕なり、

〔書言字考節用集十數量〕九州（キウシウ）筑前後、肥前後、豐前後、薩摩、大隅、日向、

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年三月九日壬辰、熊野別當湛增、依廷尉〇源義經引級、承追討使、去比渡讃岐國、今又可入九州之由有其聞、

〔簾中抄下諸國〕西海道九國二島筑紫と云、又鎭西、

〔書言字考節用集一乾坤〕筑紫（ツクシ）西海道都謂之筑紫、又云九州、事見風土記、

〔釋日本紀五述義〕筑紫洲

私記曰、問、此號若有意哉、答、先儒之說有四義、一云、此地形如木菟之體、故名之也、木菟鳥之名、此云都久、二〇恐二下脫云字公望案、筑後國風土記云、筑後國者、本與筑前國合爲一國、昔此兩國之間、山有峻狹坂、

往來之人所駕鞍韉被摩盡、土人曰鞍韉盡之坂、三云、昔此堺上有麁〈○麁原作庶、據一本改〉猛神、往來之人、半生半死、其數極多、因曰人命盡神、于時筑紫君肥君等占之、今筑紫君等之祖甕依姬爲祝祭之、自爾以降、行路之人不被神害、是以曰筑紫神、四云、爲葬其死者、伐此山木造作棺輿、因茲山木欲盡、因曰筑紫國、後分兩爲前後、

〔日本釋名 上 地名〕○筑紫(ツクシ)　筑後國風土記に、つくしに四義あり、一義は其國形木兎(ツク)に似たる故也、其餘の三義は皆盡の意、詞林采葉抄曰、凡九州をつくしと名つくるは、此島の形木兎に似たり、紫は島と云詞也、よつてつくしまと云也、萬葉仙覺抄の意も亦同じ、篤信おもへらく、九州のかたち木兎(ツク)に似たれば、九州をすべてつくしと名付しとはいふかし、筑紫とははじめ筑前筑後一國なりし時、一國にかぎりて名付し名なれば、はじめより九州に名づけし名にはあらず、後に筑前に太宰府立し故に、官府ある國をとりて、九州をすべて筑紫といへる也、又此島のかたち木兎(ツク)に似たりと云事しかるべしとも思ひ侍らず、今九州の總圖を見るに、木兎に似たりとも見えず、古人の說はさだめて道理あるべし、されども今わが淺見よりみれば、是其義を得ずして、みだりにつくり出せし詞のやうに聞え侍べる、ひそかにおもふに、いにしへ異國より賊兵の襲來をふせがんとて、筑前の北海の濱に石垣を多くつかせらる、其故につく石(イシ)といへる意なるを、略してつくしと云なるべし、〈○中略〉むかし筑前筑後一國にて、これを筑紫と云、後にわかれて筑前筑後となる、つくちく音通ず、且つくは訓なれど、筑にちくの音あり、筑前太宰府に官府有しゆへに、九州をすべて筑紫と名づけし事、大和に都ありし故、大和を日本の總名とせしがごとし、〈○下略〉

〔秦山集 雜著甲乙錄九 二十三〕重遠謂、築石訓甚佳、然恐亦傅會耳、若上世異國賊兵屢侵、不知有何證、堂堂神國豈容異賊侵之乎、中古置防人於筑紫、亦備萬一不虞耳、文永年中、我國衰微、胡元猖獗、各極其至、而尚賊兵無噍類、此皆我神國之餘威也、損軒欲實築石之訓、誣言上世異賊屢侵、豈不汚穢我神國乎、且若

日本釋名所引仲哀帝事、謬妄特甚矣、不惟事之口、又筆之書、悲夫、古傳所謂筑紫國形似木菟、猶言日本國形似蜻蛉、蓋太古一種比興之稱、亦我國優雅之俗也、此比擬軒傷國體之訓、自不失爲典雅、恐不可以妄謬斥之、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命○中略伊邪那美命○中略御合○中略次生筑紫島、此島亦身一而有面四、每面有名、故筑紫國謂白日別、豐國謂豐日別、肥國謂建日向日豐久士比泥別、自久至泥以音熊曾國謂建日別、曾字以音

〔古事記傳五〕筑紫島、萬葉廿二十八丁に、都久之乃之麻とあり、これも伊余の如く、もと一國の名より出て、四國筑紫、豐國、肥國、熊曾の總名にはなれるなり、此島後に西海道北山抄云西之道と云ひ九國となる、俗に九州と云有面四とは、筑紫國と豐國と肥國と熊曾國と四つなり、○下略

〔拾遺和歌集別六〕筑紫へ下りける道にて　重之

舟路には草のまくらもむすばねばおきながらこそ夢も見えけれ

〔伊呂波字類抄知國郡〕鎭西筑紫

〔保元物語一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

抑爲朝○中略父不孝シテ十三ノ歳ヨリ鎭西ノ方ヘ追下スニ、豐後國ニ居住シ、○中略君ヨリモ給ラヌ九國ノ總追捕使ト號シテ、筑紫ヲ隨ヘントシケレバ、○下略

〔平家物語六〕飛きやくたうらいの事

明る十二日、鎭西よりひきやくたうらい、うさの大宮司公道が申けるは、鎭西の者共、○中略一向平家をそむいて、源氏に同心の由申たりければ、平家の人々、東國北國のそむくだに有に、西國さへこはいかにとて、手を打てあざみあはれけり、○下略

〔太平記十六〕西國蜂起官軍進發事

去程一將軍筑紫へ沒落シ給シ刻、四國西國ノ朝敵共、氣ヲ損ジ度ヲ失テ、或ハ山林ニ隱レ、或ハ所緣ヲ尋テ、新田殿ノ御教書ヲ給ラヌ人ハ無リケリ、〇下略

〔元亨釋書 五慧解〕釋覺鍐、姓平氏、肥之前州人、〇中略鍐因二幹事一將レ赴二西州一、

〔塵中抄 下諸國〕五畿內 五ヶ國 きないといふ

〔書言字考節用集 二乾坤〕畿內(キナイ) 畿與レ圻同、韵略、天子寰內地、毛詩註、王者所レ居地、方千里謂二之王畿一、

〔北山抄 三拾遺雜抄〕讀奏事

畿內 宇〇治〇都〇久〇仁〇

〔諸國名義考 上〕畿內

日本書紀孝德天皇卷に、凡畿內東自二名墾橫河一以來、南自二紀伊兄山一以來、西自二赤石櫛淵一以來、北自二近江狹々波合坂山一以來、爲二畿內國一とあり、訓法は北山抄に、宇治都久仁(ウチツクニ)とあり、さて民部省圖帳には、五畿〇垣內〇(カキツ)とあり、畿と云るは、田令に凡畿內云々、義解に謂畿猶レ壃也、言王畿之內也と見えたり、詩商頌玄鳥之篇曰、邦畿千里惟民所レ止、また東陽許氏曰、王者所レ居、地方千里謂二之王畿一、居二天下之中一、また文選注天子居二千里一曰二京畿一、また刑法志曰、同十爲レ封、封十爲レ畿、畿方千里などいへる外國の號を假用させ給へるなり、

〔令義解 三田〕凡畿內置官田 謂、畿猶レ壃也、言王畿之內、大和攝津各卅町、河內山背各廿町、

〔日本書紀 五崇神〕十年十月乙卯朔、詔二群臣一曰、今反〇反原作レ返、據二一本一改、者悉伏レ誅、畿內(ウチツクニ)無事、唯海外荒俗騷動未レ止、其四道將軍等今忽發之、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣二改新之詔一曰、〇中略其二曰、初修二京師一、置二畿內國(ウチツクニ)司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬傳馬一、及造二鈴契一、定二山河一、〇中略凡畿內、東自二名墾橫河一以來、南自二紀伊兄山一以來、兄此云レ制、西自二赤石櫛淵一以來、北自二近江狹々波合坂山一以來、爲二畿內國一、

〔古事記傳二十九〕孝德ノ卷に畿內の定め見えて、此は後の定めとは、其界限いさゝか異なることありき、又此より前、崇神ノ卷、仁德ノ卷、欽明ノ卷などにも、畿內と云ことは見えたれども、其はたゞ文のみなり、持統ノ卷に、四畿內と云こと處々に見え、こは後の五畿內と同じ、當昔河內和泉は一國なればなり、〇下略

〔日本書紀持統三十〕六年四月庚子、除四畿內百姓爲荷丁者今年調役、

〔續日本紀文武二〕大寶二年十二月乙巳、太上天皇〇持統不豫、大赦天下、度一百人出家、令四畿內講金光明經、

〇按ズルニ、四畿內ハ大倭、河內、難波、山背ノ四國ナリ、

〔續日本紀元正八〕養老五年三月癸丑、勅曰、〇中略其左右兩京、及畿內五國、並免今歲之調、〇下略

〇按ズルニ、是ヨリ先、靈龜二年、始テ和泉監ヲ置ク、因テ畿內五國ノ稱アリ、後聖武天皇ノ天平十二年、和泉監ヲ河內國ニ併合シテ、復タ四畿內ト稱ス、事ハ分割國條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年四月辛巳、是日、遣內舍人藤原朝臣薩雄、中衞二十人、迎大炊王、立爲皇太子、勅曰、〇中略又東大寺匠丁、造山陵司役夫、及左右京、四畿內、〇中略紀伊等國兵士、〇中略並免今年田租、

五月乙卯、勅曰、〇中略其能登、安房、和泉等國、依舊分立、

〇按ズルニ、是ヨリ後永ク五畿內ト稱スルニ至レリ、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年正月戊午、詔曰、〇中略役使造宮、左右京、五畿內、及近江國兵士等、寶字六年田租並免之、

〔延喜式民部二十二〕畿內　山城國上〇郡名略、下同、　大和國大　河內國大　和泉國下　攝津國上

〔扶桑略記白河三十〕應德三年十月廿日甲辰、公家近來九條以南鳥羽山莊新建後院、〇中略五畿七道六十餘州、皆共課役、堀池築山、自去七月至于今月、其功未了、洛陽營々无過於此矣、

〔法然上人行狀畫圖三十六〕おりしも最勝四天王院供養に、大赦をおこなはれけるに、その御沙汰ありて、同年(建永二年十月二十五日改元、承元元年なり、)十二月八日勅免の宣旨をくだされけり、かの狀云、

太政官符　土佐國司

流人藤井元彥

右正三位行權中納言兼右衞門督藤原朝臣隆衡宣、奉勅、件の人は、二月廿八日事につみして、かの國に配流、しかるをおもふところあるによりて、ことにめしかへさしむ、但よろしく畿內に居住して、洛中に往還する事なかるべし者、國よろしく承知して、宣によりてこれをおこなへ、符到奉行、

承元元年十二月八日　　左大史小槻宿禰

〔伊呂波字類抄見地儀〕道(ミチ、七道、東海道、東山道、南海道、西海道、北陸道、山陰道、山陽道、)

〔古事記傳二十三〕抑畿外を都て七道と分ち、又其名どもを定められたるも、何れの御世と云こと詳ならず、按に孝德天皇ばかりの御世にもやありけむ、孝德紀二年に、畿內の疆を定められしことは見えたれども其處にも、七道のさたは見えずして、同年の文に、東方八道とあるは、なほ上代の稱格(イヒザマ)なれば、是時いまだ都てを分て七道とせる制(サダメ)りは無かりしこと知られたり、然るに、彼紀の此御卷(○崇神)にしも、東海北陸などあるは、後に出來たる名を以て、記されたる物にして、當昔の名には非ず、此記に、東方十二道、高志道などあるぞ、古の稱(ナ)にはありける、又景行紀に、東山道とあるも同じことなり、凡て孝德紀より前に、かゝる名どもの見えたるは、後のを以て記されたるものぞ、成務紀に、山陽山陰とあるは、何地にまれ山ノ南、山ノ北と云ことにして、山陽道山陰道を云るには非ず、さて七道と云ことは、文武紀に始めて見えたり、

〔古事記傳二十九〕さて天ノ下の國々の分屬(キザミ)の、古書に見えたるは、水垣ノ宮(○崇神)段に、高志(コシ)ノ道(後の北陸道な

り東方十二道(日代ノ宮ノ(景行)段にも見ゆ、東海道なり、十二は國の數ぞ、)書紀ノ同御卷に、北陸東海(景行ノ卷に北陸道東海道と見ゆ)西道なり(山陽道なり)また四道(古の北陸東海西道と丹波となり)景行ノ卷に、東山道十五國など見え、〇中略天武ノ卷に、山陽道、山陰道、(成務卷に、山陽山陰とあるは、此二道を云るに非ず、)又東海、東山、山陽、山陰、南海、筑紫と六道並て見え、(此に北陸の入ざるは、いかなることにか、)文武紀に、七道と見えたり、〇下略

〔令集解三十四公式〕凡朝集使東海道坂東、(謂駿河與相模界坂也、釋云、須流河與桑花(桑花恐桑美誤、相模)界內、)東山道(謂云奈加津道、)山東、(謂信濃與上野界山也、釋云、科野與上毛野界山、)北陸道(謂云北道、)神濟(謂越中與越後界河也、釋云、高志道中與道後界、)以北、山陰道(謂云影友、)出雲以北(古記云、同山陰道從諸國、)(乘驛、答從出雲在乘限、)山陽道(謂云止毛謂、)安藝以西、南海道土左等國(穴云、於南海道只土左國乘驛耳、)及西海道皆乘驛馬、自餘各乘當國馬、

〔北山抄三拾遺雜抄〕讀奏事
東海道、(宇女都美千、又宇倍都道、)東山道、(山乃道、又東乃道、)北陸道、(久奴加乃道、)山陰道、(曾止毛乃道、書說、加介止毛乃道、)山陽道、(加介止毛乃道、書說、曾止毛之道、)南海道(南乃道、)西海道(西乃道、)

〔古事記中崇神〕又此之御世、大毘古命者遣高志道、其子建沼河別命者遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴(自麻下五字以音)人等、

〔日本書紀五崇神〕十年九月甲午、以大彥命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彥遣西道、丹波道主命遣丹波、

〔古事記中景行〕爾天皇亦頻詔倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等而、〇下略

〔日本書紀七景行〕五十五年二月壬辰、以彥狹島王拜東山道十五國都督、是豐城命之孫也、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年七月壬辰朔、遣近江臣滿於東山道、使觀蝦夷國境、遣宍人臣鴈於東海道、使觀東方濱海諸國境、遣阿倍臣於北陸道、使觀越等諸國境、

〔日本書紀二十九天武〕十四年七月辛未、詔曰、東山道美濃以東、東海道伊勢以東諸國有位人等並免課役、

九月戊午、直廣肆都努朝臣牛飼爲東海使者、直廣肆石川朝臣虫名爲東山使者、直廣肆佐味朝臣少麻呂爲山陽使者、直廣肆巨勢朝臣粟持爲山陰使者、直廣參路眞人迹見爲南海使者、直廣肆佐伯宿禰廣足爲筑紫使者、各判官一人、史一人、巡察國司郡司及百姓之消息、

〔扶桑略記 五天武〕十五年八月、七道諸國道巡察使、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年正月甲子、遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、從六位上多治比眞人三宅麻呂于東山道、從七位上高向朝臣大足于北陸道、從七位下波多眞人余射于山陰道、正八位上穗積朝臣老于山陽道、從七位上小野朝臣馬養于南海道、正七位上大伴宿禰大沼田于西海道、道別錄事一人、巡省政績、申理冤枉、

〔類聚名義抄 七口〕國 古或反、クニ、和コク、 〔同 六邑〕邦 百江反サカヒ クニ

〔段注說文解字 六篇下口〕國 邦也 邑部曰、邦國也、按邦國互訓、渾言之也、周禮注曰、大曰邦、小曰國、邦之所居亦曰國、析言之也、 从口从或 戈部曰、或邦也、古或國同

用邦、封同用、古邦切一部、

〔伊呂波字類抄 久地儀〕國 クニ列反 邦 古文作旹 縣 巳上同

〔書言字考節用集 一乾坤〕邦 國同 州同 域同 圀同 代醉、唐武后會宗秦客所製國字、又見五雜組、納會、 國土

〔日本釋名 上地理〕國 上古の自語なるべし、一說に、いにしへは郡邑をも、くにと云事、日本紀に多し、吉野のくに、難波のくになどいへり、郡の音を用てくにといへるなるべし、こゑを訓とせしためしおほし、錢をせにと訓じ、蘭をらにと訓せし類なり、

〔東雅 三地輿〕國クニ 義不詳、古語にはクムとも、クモとも、またクともいひけり、皆其語の轉せしにて、上世には天に對しいふには、必ずクニをもて稱せし事、たとへば漢に天地と云ひしが如くにぞありける、前にしるせし地の條に詳なり

舊事古事等の記に、陰陽二神、國土を生成さむ事を相議りたまひし事をしるされ、國土の字讀て、

クニツチといふは、舊事古事等の記に同じ、さらば國とは猶土といふ義の如くなりと見えたり、又國と云ひしは分界の義ありとも見えたり、（前に註せし事の如く、古語に分界の事をクマリといひけり、クニといひ、クムといひ、クモといふが如きは、クマリといふ詞の轉じたるなり、）たとへば舊事古事等の記に、伊豫二名島といふ、此島は、身一面有面四、毎面有名としるされて、伊豫國、讃岐國、阿波國、土佐國等の名を分ちしるされ、又筑紫洲亦謂身一面面四、毎面有名としるされて、筑紫國、豐國、肥國、日向國等の名を分ちしるされしが如き是也、さらば天といひ、國といひしも、一島の內にして、國相分れしも、皆是分界の義あるに似たり、（或說に、國をクニといふは、郡の字の音の轉ぜし也といふなり、我國ひらけ始りし時に、國常立、國狹土、豐國主等の神おはしませしと見えたり、それらの時に、郡の字の音轉じて、クニといふ詞の如き出來りたらむとも思はれず、凡國郡の名義は別に記せし者あれば、こゝには注せず、）

〔倭訓栞前編八〕くに　邦國をよめり、與をくみとよめる意にて、相與する土地をいへるにや、神代紀に六合をよめり、八島國とよむも同意也、日本紀萬葉集などに郡、縣、鄕、邑をくにといひしもの多しといへり、

〔古事記傳三〕師（賀茂眞淵）の久爾都知の考を見れば、なほ阿米都知ぞ古言なりける、彼考に云く、久爾と云名は限の意なり、東國にて垣を久禰と云にて知べし、○中略地は天と等しく廣く、國は限あれば狹きに似たり、○中略さて久爾は限の意ぞと云由は、天照大御神月讀命は、天の日夜を分ちしろしめすなるを、須佐之男命の天に上りたまふ時に、欲奪我國と天照大御神の詔ひ、月讀命は所知夜食國と皇祖神の詔ひ、又須佐之男命は所知海原とありて、次に不治所命之國とも皇祖神の詔ひ、又萬葉二の人麿の挽歌にも、天皇之敷座國等、天原石門乎開、神上上座奴とよめるなど、みな限りて所知めす處を、天にても國と云り、これらにて、久爾は本は天に對へ云べき名に非ることを知べし、

〔古事記 上〕國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、(琉字以上十字以音)如葦牙因萌騰之物而、成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神、(此神名以音)次天之常立神、〇中略 次成神名國之常立神、〇中略 於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而言依賜也、〇中略 爾伊邪那岐命詔、〇中略 爲生成國土、生奈何、(訓生云宇牟、下效此)

〔日本書紀 一神代〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、立於天浮橋之上、共計曰、底下豈無國歟、迺以天之瓊(瓊玉也、此云努)矛、指下而探之、是獲滄溟、

〔玉勝間 二〕國を州といふ事

國々の名を某州といふことは、いづれの御代のおさだめにもあらざることなり、いにしへは、わたくしの漢文などにこそは、いとまれ〳〵には見えたれ、たゞしきおほやけの物には、みな某國とのみありて、州といへることはさらに見えず、然るを近き世の人は、かゝる上の御さだめをもわきまへしらず、みだりにからめかすことをのみ好みて、某國といふよりは、某州といふをうるはしき事に心得て、いひも書もすなるはいかにぞや、前後上下などに分れたる國の名の、一字にてはまぎるゝをば、野之上州下州、あるは越前州筑後州なども書めり、そも〳〵國の字も州の字も、同じく久爾にはあれども、奈良御代などよりは、かゝることもみな、その文字を定められて、心にまかせてはかゝざることなるをや、又或儒者のいへるは、國といふは封建の制にこそあれ、皇朝も郡縣の制になされたる世には、州などゝこそいふべけれ、國と定められたるは、あたらぬ文字なりといへるは、漢國の今までの例になづみて、中々にかの國のこゝろにもあらず、いみじきひがことなり、まづかの國の今までの例とは、封建といひし代には、齊國魯國などいひつれども、いはゆる郡縣になりてよりは、某國といふことは、今までの代々には例なければなり、されどそれになづめるは、中々にかの國のこゝろにもあらずといふゆゑは、すべてかの國にて、かやうの

物の定めは、さき〳〵の例にはかゝはらず、其時々の王の心にて、いかにも〳〵定むる事にて、その定めわろしとても、用ひざるやうはなし、されば地の分ちざまなども、後の代々には、くさ〳〵有て、先の代に例なきこともあれど、そはとまれかくまれ、その定めにこそはしたがふなれ、さればそのこゝろをもていはゞ、皇朝にても天下を、かの郡縣の制にならひて定められたりし御代にも、其名をば改めず、なほ古へより有來しまゝに、某國と定め給ひたりしも、天皇の大御心にしあれば、なてふことかはあらん、なほいはゞ、から國のこゝろはいかにまれ、それにかゝはるべきことかは、皇國は皇國なる物をや、

〔年々隨筆 一〕皇國に某州といふ例はなきことなるを、城州、和州などやうに稱るは、みだりなる事なり、されど此事いと昔より有ことなり、大同弘仁のころの詩人などやいひそめつらん、すでにまかむかしよりいふ事なれば、今人のいはむ、はたとがむべきにもあらず、

〔隨意錄 三〕方言之習、國名略擧其一字、則必用州字、備擧其二字、則必用國字、我未知何謂也、州之與國、字義固不同焉、州者如九州十二州、是大分天下也、又如五黨爲州、五州爲鄕、是更分戸數之名也、國者諸侯之封地、周制有三等者也、謂魯國爲魯州、謂齊國爲齊州者、則未之嘗見也、

〔大和事始 天地一〕都

或人の云、近世諸の稱呼訛謬多し、○中略又尤笑べきものは、諸國號を書するに、必陽の字を以てこれにそふ、武州を武陽とし、攝州を攝陽とし、播州を播陽とし、備州を備陽とし、筑紫を紫陽とし、伏見を伏陽とし、長崎を崎陽とす、其餘皆然り、殊にしらず、陽はもと陰に對するの稱にして、則山南水北の謂也、華陽、岳陽、洛陽、汾陽、咸陽の類の如き是也、もし山水の指標すべきもののなき時は、則大都通津といへども、又陽を以て呼べからず、山の北、水の南を陰といふも亦同じ、

〔年々隨筆 一〕又某陽といふ事は、いつの頃よりいひそめけむ、二百年ばかりの書にはみゆるを、猶

ふるくも有つらんかし、ふとはえおもひいでず、これはいと／＼すぢなき事なり、さるはから國に、某陰某陽といふ所の多かるに、ならひてのわざなめれど、かの陰陽は、南北のかへもじにて、山にそひ水にそひたる地の、その山水の南につきてよぶ事にこそあれ、皇國の人の伊勢を勢陽、尾張を尾陽といふたぐひにはあらず、洛陽華陽などきこゆるも、洛華は、山水のぞかし、釜州を釜陽、荊州を荊陽といへる事はあらじ物をや、〇下略

〔日本書紀三神武〕其年〇甲寅十月辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、〇中略行至筑紫國菟狹、菟狹者地名也、此云宇佐、時有菟狹國造祖、號曰菟狹津彥、菟狹津媛、　乙卯年三月己未、徙入吉備國、起行宮以居之、　戊午年二月丁未、皇師遂東、舳艫相接、方到難波之碕、會有奔潮太急、因以名爲浪速國、　二年二月乙巳、天皇定功行賞、〇中略以珍彥爲倭國造、〇中略以劒根者爲葛城國造、

〔古事記傳二十九〕大凡諸國の古への分ざまは、後ノ世の國を分て郡とし、郡を分て鄕とせられたる如くに、際々しくはあらで、國の內なる地をも、又國と云るたぐひ多し、此記に陸奧ノ石城國造、常道ノ仲ノ國造などあるが如き、陸奧も國なるに、其國內なる石城をも、同く國と云、常道の國內の仲をも、同く國と云と、又書紀繼體ノ卷の歌に、春日國、萬葉に、吉野ノ國、初瀨國なども云るが如し、是ノ後に郡と定められたるほどの地などをも、通はして同く國とも云しなり、〇下略

〔日本書紀七景行〕十二年十月、到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也、碩田此云於保岐陀、　十二月丁酉、議討熊襲、於是天皇詔群卿曰、朕聞之、熊〇熊原脫、據一本補、襲國有厚鹿文迮鹿文者、　十八年六月丙子、到阿蘇國也、七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、〇中略爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國、　丁酉、到八女縣、〇中略時水沼縣主猿大海奏言有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名、由此起也、

定國堺

〔古事記中成務〕建內宿禰爲大臣、定賜大國小國之國造、亦定賜〇中略大縣小縣之縣主也、

〔古事記傳二十九〕大國小國とは、たゞ國々と云ことを文に云るのみなり、後ノ世に、大國、上國、中國、下國など品を云るとは異なり、されば何れは大國、何れは小國など定まれるにもあらず、又祝詞に、奥山乃大峽小峽、萬葉に、初瀨小國などある小國は、ちひさき國にはあらず、異意なり、また遠山近山爾、生立流大木小木乎、などある大小の如し、次なる大縣小縣も同じ、〇下略

〔日本書紀七成務〕四年二月丙寅朔、詔之曰、〇中略今朕嗣踐寶祚、夙夜兢惕、然黎元蠢爾不悛野心、是國郡無君長、縣邑無首渠者焉、自今以後、國郡立長、縣邑置首、卽取當國之幹了者、任其國郡之首長、是爲中區之蕃屛也、

〔日本書紀八仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫、〇中略筑紫伊覩縣主祖五十迹手、聞天皇之行、〇中略參迎于穴門引島、〇中略天皇卽美五十迹手曰伊蘇志、故時人號五十迹手之本土、曰伊蘇國、

〔日本書紀九神功〕九年〇仲哀四月甲辰、北到火前國松浦縣、〇中略故時人號其處曰梅豆羅國、今謂松浦訛焉、伐新羅之明年〇元年二月、皇后之船直指難波、于時皇后之船廻於海中以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇居、〇居原作后、據一本改、當居御心廣田國、卽以山背根子之女葉山媛令祭、亦稚日女尊誨之曰、吾欲居活田長峽國、因以海上五十狹茅令祭、亦事代主命〇命原作尊、據一本改、誨之曰、祠吾于御心長田國、則以葉山媛之弟長媛令祭、

〔萬葉集一雜歌〕幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麿作、
八隅知之、吾大王之、所聞食、天下爾、國者思毛、澤二雖有、山川之、淸河內跡、御心乎、吉野乃國之、花散相、秋津乃野邊爾、〇下略

〔萬葉集十三相聞〕隱口乃、泊瀨乃國爾、左結婚丹、吾來者、〇下略

〔古事記中成務〕故建內宿禰爲大臣、〇中略定賜國國之堺、〇下略

〔古事記傳二十九〕抑上代の國境の御制は、細なる事は、詳に知りがたけれども、古書どもに、事にふ

れて往々見えたる趣に就て考ふるに、後世の如く、際やかなることこそ無かりつらめ、大方には元よりも國々の堺限などもありはしけむを、此御世になほ又慥に定め賜ひしなり、(此より先には、堺もなかりしを、初めて定賜ふとには非ず、○下略)

〔日本書紀成務七〕五年九月、令諸國以國郡立造長、縣邑置稻置、並賜楯矛以爲表、則隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里、因以東西爲日縱、南北爲日横、山陽曰影面、山陰曰背面、是以百姓安居、天下無事焉、

〔新撰姓氏錄攝津國皇別〕坂合部連

同大彦命之後也、允恭天皇御世、造立國境之標、因賜姓坂合部連、

〔日本書紀崇峻二十一〕二年七月壬辰朔、遣近江臣滿於東山道、使觀蝦夷國境、遣完人臣雁於東海道、使觀東方濱海諸國境、遣阿倍臣於北陸道、使觀越等諸國境、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年八月癸酉、詔曰、○中略今發遣國司幷彼國造可以奉聞、○中略宜觀國々壃堺、○下略

〔日本書紀天武二十九〕十二年十二月丙寅、遣諸王五位伊勢王、大錦下羽田公八國、小錦下多臣品治、小錦下中臣連大嶋、幷判官、錄史、工匠者等、巡行天下、限分諸國之境堺、是年不堪限分、 十三年十月辛巳、遣伊勢王等定諸國界、

分割國數

〔大和事始天地一〕分國定境

いにしへ日本の國數、凡百四十四國ありしよし舊事記第十卷に見えたり、壤地褊小なるを以て、故に漸々に其國を幷て總數を減じ、或其國のあまりに大なるは、逐世割分ものも又往々これあり、嵯峨天皇弘仁十三年、越前國を割て、加賀國を置給ひしより後、始て六十六州となる、林逸が節用集に、文武天皇の御宇六十六ケ國に分給ふとあるは誤也、日本紀にこの事なし、況又文武帝の後、國を分れしもの數國あるをや、

〔古事記傳二十九〕さて諸國の總ての數は、古へに幾許とも云ること物に見えず、舊事紀の國造本紀に擧たる國々なども、なほ漏たるも多かるべければ、據としがたし、これも孝德天皇の御世には、備に定まりつらむ、大凡諸國の古の分ざまは、後世の國を分て郡とし、郡を分て郷とせられたる如くに、際々しくはあらで、國の內なる地をも、又國と云るたぐひ多し、此記に陸奥石城國造、常道仲國造などあるが如き、陸奥も國なるに、其國內なる石城をも、同く國と云、常道の國內の仲をも、同く國と云、又書紀雄略卷の歌に、春日國、同卷に、吉野國、初瀬國なども云るが如し、是後に郡と定められたるほどの地などをも、通はして同く國とも云しなり、然れば天下なる國の數、都て若干國など、きはやかに定め云ることもなかりけむ、然れども大形を以て云ば、國と云名は廣くして、縣など云しは、國より小く、又里村など云は、縣より又小し、此記に某國之某縣と云、又神功皇后卷に、末羅縣之玉島里、書紀崇神卷に、茅渟縣陶邑、景行卷に、八代縣豐村などあるを以て、其縣の大なる小きを辨ふべし、後世の分屬と、大かたは違はざるなり、○中略さて後にも一國を二に分、又二國を一に合せなど、御世々々に彼此變りしもありつるを、嵯峨天皇御世、弘仁十四年に、越前國を割て、加賀國を建られて、六十八國此內に壹岐と對馬とをば、島と云て、國とはいはず、に定まれる後、今の如くにして、永く革れること無し、

〔先代舊事本紀十國造〕總任國造百四十四國。

○按ズルニ、舊事本紀ニ載スル所ノ國名ハ、官位部古代官職編國造篇ニ載セタリ、

〔二中歷六諸國〕今案河內國神護景雲四年、停河內職爲國司、　和泉國靈龜二年、割河內國大島日根兩郡爲國、　攝津國延曆十二年、停攝津職爲國司、
安房養老二年、割上總國四郡爲國、　出羽和銅五年、始置之、十月、割陸奥最上、置賜二郡隸出羽國、　加賀弘仁十四年、割越前國江沼加賀二郡爲國、　能登養老二年、割越中四郡爲能登國、　越後同年、割越中國四郡爲國、　丹後和銅六年、割丹波國五郡爲丹後國、　美作同年、割備前國六郡爲美作國、　大隅同年、割日向國四郡爲國、又天長元年、停多褹島隸大隅國、

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第一回　塚本明毅

總論○中略

第二期○中略文武天皇大寶二年二月、新令ヲ頒タル國ヲ、大上中下四等ニ分ツ、此時五十八國三島アリ、和銅後分置スル所ヲ以テ推ス

〔續日本紀五元明〕和銅五年九月己丑、始置出羽國、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年四月乙未、割丹波國五郡、始置丹後國、割備前國六郡、始置美作國、割日向國肝坏、贈於、大隅、始羅四郡、始置大隅國、

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年四月甲子、割大島、和泉、日根三郡、始置和泉監焉、

〔續日本紀 八元正〕養老二年五月乙未、割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、割上總國之平群、安房、朝夷、長狹四郡、置安房國、割陸奧〈○陸奧原作常陸、據一本改、〉之石城、標葉、行方、宇太、亘理、〈○亘原作白、據一本改、〉常陸國之〈○常以下四字原脫、據一本補、〉菊多六郡、置石城國、割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國、割常陸國多珂〈○珂原作阿、據一本改、〉郡之鄕二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背〈○背恐城誤〉國焉、　五年六月辛丑、割信濃國、始置諏方國、

〔明治十四年東京地學協會報告〕國郡沿革考第三回　塚本明毅

陸奧〈○中略〉

石城石背二國ノ廢スル國史ニ見エズ、但神龜五年四月丁丑、陸奧國請新置白河軍團、許之トアレバ、此時二國既ニ陸奧ニ併セラレタルナリ、〈分國ヨリ此年ニ至リ十年ナリ〉

〔續日本紀 十一聖武〕天平三年三月乙卯、廢諏方國、幷信濃國、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年八月甲戌、和泉監幷河內國焉、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年十二月丙戌、安房國幷上總國、能登國幷越中國、

〔續日本紀 十五聖武〕天平十五年二月辛巳、以佐渡國幷越後國、

〔續日本紀 十八孝謙〕天平勝寶四年十一月乙巳、復置佐渡國、守一人、目一人、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲十二月己酉、勅遣皇太子及右大辨從四位下巨勢朝臣堺麻呂於東大寺、〈○中略〉講梵網經、講師六十二人、〈○中略〉仍寫六十二部、將說六十二國、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、頃者上下諸使、總附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今已後、

宜爲依令其能登安房和泉等國依舊分立、

〔律書殘篇〕日本國六十七、郡五百五十五、鄕四千十二、里萬二千卅六(左京條九、防卅六、右京條九、防卅三、)七道河東十六州、〇中略

大倭國〇中略

芳野監　芳野國(郡二、鄕三、里九、)掾一、七位以下也、〇下略

〔莊園考一〕大館高門所藏无題名古文書(〇律書殘篇)に、日本國六十七とありて、和泉國佐渡國を擧たれば、天平寶字元年、和泉國を立られし後に記せるものとみゆ、然るに芳野監、芳野國、郡二、鄕三、里九とあるを思ふに、芳野國と云がありける故に、六十七國なりしなり、されど此書に北陸東山の諸國脱漏したれば、詳かならねど、山城を山代、大和を大倭とかきて文字を改めざれば、奈良の朝の書なるべし、大倭の下には去京里程はなく、山代國の下には、去京行程半日とあるにても、延暦以前なる事は著きものなり、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

割越前國江沼加賀二郡爲加賀國事(准中國)〇中略

弘仁十四年二月三日〇中略

太政官謹奏

停多褹島隷大隅國事〇中略

天長元年九月三日

〔平治物語三〕頼朝遠流事附盛安夢合事

打鮑六十六本參シハ、六十六箇國ヲ打被召候ハンズルト合セ申テ候ツト申セバ、〇下略

〔平家物語一〕我身のゑいぐわの事

日本あきつしまは纔に六十六かこく、平家知行の國卅よか國、すでに半國にこへたり、

〔源平盛衰記 七〕丹波少將召下附日本國廣狹事

少將被思ケルハ、日本ハ是本三十三箇國也ケルヲ、六十六ニ被分タリ、越前、加賀、能登、越中、越後五箇國ハ、本一國也、中比三箇國ニ分タリシヲ、越前、加賀兩國ノ間ニ四ノ大河アリ、廳參ノ時、洪水ノ爲ニ人多ク損ケレバ、是ハ廳ノ遠キ故也トテ、嵯峨天皇御宇弘仁十四年ニ上奏ヲ經テ、加賀郡ヲ四郡ニ分テ加賀國ト定メ、能登郡廣シトテ、四郡ニ分テ能登國ト定ム、サテコソ五箇國ヲバ越路トテ道ハ一ナレ、又陸奧、出羽兩國是モ一也ケルヲ、二箇國ニ被分タリ、〇中略又備前、備中、備後、本ハ一國也ケリ、豐前、豐後モ如此、筑前、筑後モ同事、肥前、肥後モカクノ如シ、〇下略

〔蒼梧隨筆 四〕日本古今國數之多寡〇中略

以上日本紀の文、幷貝原氏の考を以て合せ考ふるに、成經朝臣の、日本は本と三十三ケ國なりと云れしことは、成務天皇の頃の事なるべし、成務天皇の時に定め給へる國々の名郡鄕のとは、今更に考ふべくも非れども、爾來分割ありし國々の事、往々舊記に由て考れば、大抵成務天皇の頃は、其國數三十有餘國なるべし、必定三十三ケ國と云事は知ること能はず、〇下略

〔太平記 十二〕公家一統政道事

九條民部卿ヲ上卿ニ定テ、御沙汰有ケル間、光經卿諸大將ニ、其手ノ忠否ヲ委細尋究テ、申與ントシ給ケル處ニ、〇中略此外相州ノ一族、關東家風ノ輩ガ所領ヲバ、無指事郢曲妓女ノ輩、蹴鞠伎藝ノ者共、乃至衞府諸司官女官僧マデ、一跡二跡ヲ合テ、内奏ヨリ申給リケレバ、今ハ六十六箇國ノ内ニハ、立錐ノ地モ、軍勢ニ可行闕所ハ無リケリ、

〔令義解 一職員〕大國。守一人、〇中略介一人、〇中略大掾一人、〇中略小掾一人、〇中略大目一人、〇中略少目一人、〇中略史生三人、

上國　守一人、介一人、掾一人、目一人、史生三人、
中國　守一人、掾一人、目一人、史生三人、
下國　守一人、目一人、史生三人、

○按ズルニ、國守以下職員ノ職掌ハ、官位部令制官職編國司篇ニ見エタリ、

〔令義解 二戸令〕凡郡以廿里以下十六里以上爲大郡、（中略）其定大小郡有別式、

〔拾芥抄 中本百官〕諸國司　守　介　掾　目　史生　國掌　郡司
大國十二（略○中）　上國卅五（略○中）　中國十一（略○中）　下國九（略○下）

○按ズルニ、延喜民部式ニ由ルニ、大國ノ數十三ナリ、拾芥抄ニ、十二トセルハ恐ラク轉寫ノ誤ナルベシ、

〔延喜式 二十二民部〕畿内　山城國上（○郡名略、以下同、）　大和國大　河内國大　和泉國下　攝津國上
東海道　伊賀國下　伊勢國大　志摩國下　尾張國上　參河國上　右爲近國　遠江國上　駿河國上　伊豆國下　甲斐國上　右爲中國　相模國上　武藏國大　安房國中　上總國大　下總國大　常陸國大　右爲遠國
東山道　近江國大　美濃國上　右爲近國　飛驒國下　信濃國上　右爲中國　上野國大　下野國上　陸奥國大　出羽國上　右爲遠國
北陸道　若狹國中　右爲近國　越前國大　加賀國上　能登國中　越中國上　右爲中國　越後國上　佐渡國中　右爲遠國
山陰道　丹波國上　丹後國中　但馬國上　因幡國上　右爲近國　伯耆國上　出雲國上　右爲中國　石見國中　隱岐國下　右爲遠國
山陽道　播磨國大　美作國上　備前國上　右爲近國　備中國上　備後國上　右爲中國　安

藝國上　周防國上　長門國中　右爲遠國

南海道　紀伊國上　淡路國下　右爲近國　阿波國上　讃岐國上　右爲中國　伊豫國上　土佐國中　右爲遠國

西海道　筑前國上　筑後國上　豐前國上　豐後國上　肥前國上　肥後國大　日向國中　大隅國中　薩摩國中　壹岐島下　對馬島下　右爲遠國

〔續日本紀三十七桓武〕延暦二年六月辛亥、勅曰、夷虜亂常、爲梗未已、追則鳥散、捨則蟻結、事須練兵教卒備其寇掠、○中略宜仰坂東八國簡取所有散位子、郡子弟及浮宕等類、身堪軍士者、隨國大小一千已下五百已上專習用兵之道、並備身裝、

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年十一月乙丑、勅曰、公廨之設本爲塡補欠負未納、隨國大小既立舉式、

〔類聚三代格五〕太政官符

加賀國定上國事

右太政官、去弘仁十四年三月一日、下式部省符偁、依太政官去二月三日論奏、割越前國江沼加賀二郡、爲加賀國、又定中國者、今件國准諸上國、課丁、田疇、其數差益、被右大臣宣偁、奉勅宜改爲上國、

天長二年正月十日

〔平治物語一〕信西子息闕官事附除目事幷惡源太上洛事

爰ニ義朝ガ嫡子鎌倉惡源太義平、母方ノ祖父三浦介ガ許ニ有ケルガ、都ニ騷事有ト聞テ、鞭ヲ打テ馳上リケルガ、今度ノ除目ニ參合、信頼大ニ悅テ、義平此除目ニ參合コソ幸ナレ、大國カ小國カ、官加階モ思ノ如ク進ムベシ、合戰モ又能仕レト宣ヘバ、義平申ケルハ、○中略世モ靜(シヅマリ)テコソ大國モ小國モ官加階モ進ミ侍ラメ、見ヘタル事モナキニ、兼テナリテ何カセン、只義平ハ東國ニテ兵共ニ喚ツケラレテ候ヘバ、本ノ惡源太ニテ候ハントゾ申ケル、

〔類聚名義抄六〕縣 胡涓反 音玄 アカタ

〔書言字考節用集二乾坤〕縣 公事根源、田舍曰縣、

〔古事記傳二十九〕大縣小縣 見て某縣と云ときは、多くは阿は省く例なれば、此も意富賀多、袁賀多とも訓べし、 大小は、大國小國の例と同くて、後の制の、大郡、上郡、中郡、下郡、小郡などの謂には非ず、たゞ縣々と云むが如し、さて阿賀多は上り田にて、元は畠のことなり、書紀仁賢卷に、暵此云二波陀該一、和名抄に、暵燥[illegible]地也、また畠一日二陸田一、和名八太介、田と云は、田をも畠をも統たる名にて、其中に、水のつかぬを畠とも、上田とも云、水田よりは高く上りたる由なり、○中略 神代卷に高田、万葉二十に、上爾種蒔などあるは、水田の高きに云るなれど、是高處を阿宜と云證なり、さて阿賀多は、元畠のことなりと云據は、上卷八千矛神の御歌に、夜麻賀多爾麻岐斯阿多泥都岐云々、下卷高津宮段大御歌に、夜麻賀多邇麻祁流阿袁那母云々、などある夜麻賀多は、山阿賀多の謂なるに、郡名の山縣などにて知べし 蒔る青菜などあるを以て、山なる畠なることを知べし、されば諸國に地名の下に、別に附て云縣にはあらで、たゞ縣とも、又某賀多とも云地名、河內に大縣、美濃に方縣、山縣、信濃に小縣、但馬に二方、安藝に山縣、日向に諸縣など云郡名、其外郷里の名にも多かる、曾木は島より眞るなり、さて地名の下に附け云も、其外も上に言な送れて、言ときの縣の唱は、上代のは多く阿を省きて、賀多と云りと聞ゆ、右に引る郡名ども、又年魚市縣、松浦縣など云類是なり、縣るにやゝ後には海邊の處と遺れてかの年魚市縣、松浦縣などの縣をも、たゞ濤とのみ心得て、後にはたゞ海邊の地名にのみ云ことのごとくなれども、右に擧たる如く、古は海なき國々の地名にも、某縣と云るが多きにや、○中略 かくて漢字を用る世になりて、此阿賀多に、縣字を當て書ならひて、やゝ後には、必しも朝廷の御料ふ地ならねども、彼漢國にて、縣と云にあたる程の地をば、凡て某縣と云ことになれるなり、

〔頑鼠漫筆一〕縣の名義

鈴屋翁の說に、阿賀多は上り田にて、元は畠の事なり○中略と見えたるは、いひしらず委しけれど、さはいへども信がたかるべし、其故はなぞといふに、阿賀多は上り田にて、本は畠の事なりとあれども、其證とせし神代卷の高田も、萬葉の上爾種蒔も、ともに水田にて畠ならねば、夜麻賀多は山阿賀多なりとも見ゆれど、其大御歌の前文を見れば、令二大座其國之山方地一、而獻二大御飯一、是爲レ煮二

大御饗、採其地之菸菓時云々とありて、この山方の字面を見れば、山阿賀多も猶強説なりけり、(後の地名に山縣といふがあるも、只山の畠といふ義にはあらず、猶次下にいふを見るべし、)かゝれば畠といふ説は、從ひ難くおぼゆるに就て、さらに又稽ふるに、こは生方の轉訛なるべし、生方は禾穀の生出る方にて、別業を奈里杼古呂といふ奈里と等しく、此奈里轉じて安里可多となり、さて其里をば省けるなるべし、(座の里を省けるは、鳥狩、後取、織田、塗師など其他にも例あるべし、)但かくいふも亦なほざりにおもはゞ、強説めきても聞ゆべけれど、これは無稽の臆説ならず、かく論らふ如くなれば、御縣は、御料地なりとはいふべく、高田とひとつには混ふまじきものぞ、又萬葉集卷七に、青角髮、依網原、人相鴨、石走、淡海縣、物語爲、(此古點はアフミノカタとあれど、今は先輩の訂正に從ふ、)古今集雜下の端詞に、文屋康秀が三河のざうに成て、あがたみにはえ出たゝじや、といひける返事に云々、土佐日記に、ある人あがたの四とせ五とせはてゝ云々、伊勢物語四十四段に、昔あがたへ行人に、馬のはなむけせむとて云々などあるをば、領國領所とこゝろうべし、是すなはち生方なり、又この阿賀多に縣字を當しは、玉篇に縣胡絹切、周禮云、九夫爲井、四井爲邑、四邑爲丘、四丘爲甸、四甸爲縣、鄭玄曰、方二十里、又曰、五家爲鄰、五鄰爲里、四里爲酇、五酇爲鄙、五鄙爲縣、(以上)廣韻に縣郡縣也、釋名曰、縣懸也、懸於郡也、古作寰、楚莊王滅陳爲縣、縣名自此始也云々、などあるを見るべし、縣は田地の名目にて阿賀多には協へる文字なり、○註略 猶後の地名に山縣と云があるも、山中の生方の義なり、又百寮訓要鈔に、諸國の司をば外官ともいひ、あがたとも申なりとあるは、縣の官人といふべきを、俗習にて略稱せしなり、

〔日本書紀 三神武〕戊午年六月、是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、 八月乙未、天皇使徵兄猾及弟猾者、(猾此云宇介志)是兩人菟田縣之魁帥者也、

己未年二月辛亥、層富縣波哆丘岬有新城戸畔者、

〔日本書紀 五崇神〕七年八月己酉、布告天下、求大田田根子、卽於茅渟縣陶邑得大田田根子、

〔古事記中成務〕建内宿禰爲大臣、定賜大國小國之國造、亦定賜國國之堺、及大縣小縣之縣主也、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年○用明七月、物部守屋大連資人捕鳥部萬、○中略騎馬夜逃向茅渟縣有眞香邑、

〔日本書紀七景行〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、到豐前國長峽縣、興行宮而居、故號其處曰京也、　十七年三月己酉、幸子湯縣、遊于丹裳小野、　十八年四月甲子、到熊縣、其處有熊津彥者、　五月壬辰朔、從葦北發船到火國、○中略天皇問其火光處曰、何謂邑也、國人對曰、是八代縣豐村、　六月癸亥、自高來縣渡玉杵名邑、　七月丁酉、到八女縣、則越前山、以南望粟岬、○下略

〔日本書紀八仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫、　己亥、到儺縣、

〔日本書紀九神功〕九年○仲哀三月丙申、轉至山○山原作小、據一本改門縣、　四月甲辰、北到火前國松浦縣、

〔日本書紀十應神〕二十二年九月、天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀、而有悅情、因以割吉備國、封其子等也、則分川島縣、封長子稻速別、是下道臣之始祖也、次以上道縣、封中子仲彥、是上道臣、香屋臣之始祖也、次以三野縣、封弟彥、是三野臣之始祖也、復以波區藝縣、封御友別弟鴨別、是笠田之始祖也、卽以苑縣、封兄浦凝別、是苑丘之始祖也、卽以織部縣、賜兄媛、是以其子孫、於今在于吉備國、是緣也、

〔日本書紀十一仁德〕三十八年七月、天皇與皇后居高臺而避暑時、每夜自菟餓野有聞鹿鳴、○中略明日猪名縣佐伯部獻苞苴、

〔日本書紀十四雄略〕九年二月甲子朔、香賜卽逃亡不在、天皇復遣弓削連豐穗、普求國內縣、クニアガタノウチ　十六年七月、詔宜桑國縣殖桑、

〔日本書紀二十二推古〕三十一○一原作二、據日本長暦改二年十月癸卯朔、大臣遣阿曇連闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之常得其縣、以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言夜言矣夜不明、日言矣則日不晚、何辭不用、然今當朕之世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人臨天下以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名則

不聽、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭
御縣爾坐皇神等前爾白久、高市、葛木、十市、志貴、山邊、曾布登御名者白氐、此六御縣爾生出、甘菜辛菜乎持參來氐、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣、

〔類聚名義抄六邑〕郡求愠反 クニ コホリ

〔伊呂波字類抄古地儀〕郡 コチリ

〔潤背上〕一疑問云、國衙何義乎、衙廳字訓如何、庄保郡鄕等、其差別幷字訓如何云々、
答曰、〇中略郡、說文曰、天子地方千里、分爲百郡云々、今按一郡長百里三百步爲一里廣又百里也、方百里者有一百、故王畿千里內有百郡也、文選審百郡之廉孝者、言王畿方千里地也、問曰、天子地已千里也、諸侯以何地爲封國乎、答曰、據周禮言之、周公旦依成王命建方一萬里國、是則如王畿千里者有一百也、其中心千里爲天子王畿、其九十九爲諸侯卿大夫之地也、故周禮又云、以同姓封畿內諸侯、以異姓封畿外諸侯者是也、

〔日本釋名上地理〕郡コホリ 小わり也、國の內をこまかにわる也、わとはと通じ、はとほと通ず、

〔東雅三地輿〕郡コホリ 舊事紀に、神武天皇卽位の初、功臣に國造縣主等を寄し賜ひしとしるされ、其後の代々國クニといひ、縣アガタといふ事は見えたれど、郡といふ事の見えしは、成務天皇四年二月、國郡立長、縣邑置首と見え、五年九月、隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里など、日本紀に見えしぞ始なる、其文の如きは、郡と縣とを分ちしるされしなど、其代にかゝる文字ありしにはあらず、是はたゞ國史選述の時によりてしるされし所にて、郡といひ、縣といひ、其名同じからねど、其實異なるにもあらず、されば國郡縣邑などしるされて、又國縣邑里ともしるされ、又縣の字讀てアガタといひしかど、又コホリとも讀み、郡縣の二字引合て、コホリと讀し事も見えたり、孝德記に孝德天皇大化

二年正月、畿內の國司を置れ、又凡郡の大中小、その郡司の大領、少領、主政、主帳等の官を定められしよりして、古の縣主等の制改りて、これより後代々の令式、皆此時の記によられし所なり、其初縣をアガタといひしは分也、其國內の地を分て、縣となすを云ふなり、後に郡をコホリといひしは、韓國の言に出しなり、卽今も朝鮮の俗、郡をも縣をも幷にコホルといふは、卽コホリの轉語なり、或說にコホリとは、小制なりと云ふ、古語にかゝる義あるべしとも思はれず、

〔倭訓栞前編九〕こほり略〇中　天平中に諸國造郡之圖奉ると見ゆ、郡縣をよめるは拾遺集物名、古本催馬樂にみゆ、小治の義なるべし、一說に今の朝鮮語にこほるといへば、もと韓語成べしといへり、韓地に熊備己富里ある事、日本紀に見えたり、成務紀に國郡縣邑と書れど、縣は郡の古名也、されば類聚國史の國造の條に、延喜の詔に、昔難波朝廷始置諸郡と見ゆ、上野國多胡郡の碑、今池村に現在す、郡を建たる事を記す、古へすべてかゝる事なりしや、略〇中　一郡に一村なるは、遠州磐田郡見附の宿是也、日本紀に背評をへこほりとよめり、今の氏姓にもしかいへり、續日本紀に、本國日高評人、內宮儀式帳に、難波朝廷天下立評給時と見えたり、郡を評といふは、新羅の俗稱なるよし梁史に見えたり、

〔日本國郡沿革考總說一〕按上古國郡之制、不可以後世之法度律之、略〇中　或以郡爲縣、以里屬之、而里又通作邑或村、古事記所謂末羅縣玉島里、崇神紀所謂茅渟縣陶邑、景行紀所謂八代縣豐村是也、或稱國縣、或稱國郡、或邑里、併稱、極不得其條理、當時之制度、於今雖不能知其詳、蓋由上古簡朴之風、無一定之制、或史官追書失其實也、强爲之說者、遂屬附會而已矣、

〔古京遺文〕妙心寺鐘

戊戌年四月十三日壬寅、收糟屋評造春米連廣國鑄鐘

戊戌文武天皇二年也、略〇中　糟屋筑前國郡名、略〇註　評造猶云郡領、古時郡縣用評字、大神宮儀式帳

云、難波朝廷天下立評給時、續日本紀天平寶字八年紀載、紀寺奴益人等訴云、本國氷高評人、內原直牟羅、其郡司亦稱評督、或稱評督領、文武天皇四年紀、有衣評督衣君縣、又神護景雲元年紀載、阿波國百姓上言曰、評督九直麻呂、那須直韋提碑云、評督被賜、大神宮儀式帳云、小乙下〇中略久米勝麻呂評督領仕奉是也、(繼體天皇紀、韓地名有背評、傍訓己富里、本註云、背評地名、亦熊備己富里、新羅其邑在內曰啄評、則知古時郡縣用評字、又訓己富里、並韓國方語也、)

〔日本國郡沿革考 一據說〕按梁書云、新羅俗、其邑在內曰啄、在外曰評、蓋往代以縣隷國、至孝德帝之時、改縣爲郡、而或借新羅所稱、又以評呼之也、衣評氷高評評督等、散見續紀者、皆是謂郡、

新井君美曰、國訓謂郡爲古保利、本是韓語、今朝鮮人猶訓郡縣爲古保利、(按以古保利爲韓語、似未妥帖、却是本朝語、波及于彼、亦未可知耳、)

建郡

〔日本書紀 二十五孝德〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、〇中略上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、　二年正月甲子朔、宣改新之詔、〇中略其二曰、〇中略凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、

〔皇大神宮儀式帳 一〕一初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事

右從纏向珠城朝庭〇垂仁以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇〇孝德御世、有爾鳥墓村造神庤氏、爲雜神政行仕奉支、而難波朝庭天下立評給時仁、〇下略

分割郡

〔類聚國史 十九神祇〕桓武天皇延暦十七年三月丙申、詔曰、昔難波朝庭、始置諸郡、仍擇有勢補於郡領、

〔延喜式 二十二民部〕凡郡不得過千戶、若餘五十戶以上者、分隷比郡、地勢不宜分者、隨狀立別郡、其不滿百戶者、隷入他郡、若不得已而應分者、別錄申官、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年五月丙申、石見國美濃郡分割爲兩郡、本郡依舊爲美濃郡、新郡取邑號爲鹿足郡、其職員者准小郡。折元四員分取一人、更加一員、總置二員、本郡則准下郡。置三員、武藏國那珂郡元來小郡、官員約小、而今戶口增益、結定四鄕、政多職少、不堪須行、據准令條、減補下郡、改小爲下、更

郡數

增一員、又讃岐國大内郡小郡、只有領帳、領則領調入京、帳稽留國、董務非常、移病无人從公、加之郷戸田數、既堪下郡、改小爲下、加領一員焉、

〔律書殘篇〕日本國六十七、郡五百五十五、

〔伊呂波字類抄古地儀〕郡コホリ五百六十三町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕大日本國圖行基菩薩所圖也、略○中郡六百四、

〔神皇正統記後醍醐〕かぎりある地をもちて、限りなき人にわかたせたまはんことは、おしはかりたてまつるべし、略○中一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人はよろこぶとも、千万人のひとはよろこばじ、

〔運歩色葉集古〕郡日本郡數六百十也

〔南海通記一〕四國王制記　通考

或書ニ曰、倭國略○中凡州ヲ以テ郡ヲ統ブ、郡ハ凡六百三十一也、

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第一回　塚本明毅

總論略○中

第二期略○中延喜式ニ載スル者、郡五百九十、而シテ和名鈔ハ郡五百九十二アリ、按ズルニ、延喜式薩摩ノ阿多ヲ脱シ、和名鈔刪ニ陸奥ノ大沼ヲ加フ、其注分ツ所ノ八郡和泉ノ泉南、河内ノ丹比南北、上野ノ群馬東西、陸奥ノ高野、伊達、河沼、筑前ノ那珂東西、夜須東西、ヲ併セテ共六百郡タリ、靈龜元年置ク所ノ陸奥ノ閉伊郡、及弘仁二年置ク所ノ同國和我、比縫、斯波三郡、皆延喜式及和名鈔ニ載セザルモノハ、蓋羈縻郡ヲ以テ之ヲ待スルナラン、略○中寛平以還國史ヲ修メズ、故ニ延喜以後分ツ所ノ諸郡、其年月ヲ考フル能ハズ、加之國司私ニ分ツテ、東西南北トナス所ノ各郡亦頗ル多シ、安藝ノ安南、安北、佐西、佐東ハ、長元永承ノ國解ニ見、尾張ノ海東郡ハ、治承四年熱田宥進狀ニ出ヅ、今皆其何年ニアルヲ詳ニシ難シ、略○中

郡等級

第三期○中略洞院左府實煕著ス所ノ拾芥抄、蓋應永以前郡國ノ制ヲ記セシナルベシ、其郡數ヲ記シテ、六百有四トナス、和名鈔ノ郡六百中南北東西ノ分郡五ヲ去リ、五百九十五トナシ、拾芥抄載スル所ノ陸奥四郡、和賀、斯波、稗縫、岩手、因幡ノ八東、備中ニ郡、川上、上房、美作ノ吉野、阿波ノ海部、共ニ九郡此九郡現今存ス、故ニ獨リ之ヲ取ル、ヲ加フル時ハ、恰モ六百有四トナル、蓋其南北東西ヲ以テ之ヲ分ツ者、此數ニ入ラザルナリ、拾芥抄載スル所、訛謬極メテ多ク、參據ニ供シ難シト雖ドモ、此書ノ外當時ノ國郡ヲ、記セシ者ナシ、

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、○中略凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、

〔日本國郡沿革考 一 總說〕按國史云、欽明帝二十二年、於難波大郡、次序諸蕃、皇極帝元年、遣諸大夫於難波郡、檢高麗貢物、天武帝二年、饗高麗邯子新羅薩儒等於筑紫大郡、大化三年、壞小郡而營宮、白雉二年、天皇從大郡遷居新宮、又石見小郡、筑紫小郡等之稱、散見於敏達持統諸紀、是皆直指官府之所在以爲郡、又隨其官府所轄之廣狹、加之以大小之稱也、蓋是當時之稱呼、自有若期者、不可以郡制之大小例視之矣、

〔令義解 二 戸〕凡郡以廿里以下十六里以上爲大郡、謂、郡不得過千戸、若餘五十戸以上者、隸入比郡、若隸入比郡、地勢不便、或不獲已而應分者、別錄申官、其定國大小、可有別式、十二里以上爲上郡、八里以上爲中郡、四里以上爲下郡、二里以上爲小郡、

鄉里

〔類聚名義抄 二 田〕里 音理 サト　〔同 六 邑〕鄉 音香 サト

〔伊呂波字類抄 左 地儀〕鄉 サト 故鄉　里 訓同、五家爲隣、五隣爲里、　閭　閈 里也、閭也、汝南平輿里門曰里、　巷　邛　閒　睘

褎　邑　郛 已上同

〔運歩色葉集 佐〕里

〔書言字考節用集 一 乾坤〕鄉村ガウソン　〔同 二 乾坤〕鄉サト 活法、鄉之爲言向也、衆所向也、　里同 活法、里之爲言止也、衆所止也、　邑同　閭同 里中門墻

（莊園考一）鄕を里と云し證は、東大寺正倉院文書に、大寶二年戶籍を擧て、御野國味蜂間郡春部里、また御野國本簀郡栗栖太里、また御野國加毛郡半布里、山方郡三井田里、肩縣郡肩々里、各務郡中里、またその斷簡、美濃國戶主弟古須見人波自年廿一、正女、大寶二年籍後、嫁出往二郡內郡上里戶主君子部波尼多戶々主同族阿佐麿一爲レ妻、また戶主大田部赤麻呂年廿五、正丁、太寶二年籍、郡內郡上里戶主大田部伊須伎戶戶主子、今爲二戶主一、全戶移來、また筑前國島郡川邊里、太寶二年戶籍、また同年豐前仲津郡丁里上三毛加自久也里とみえたり、この內に丁里は和名抄にみえねど、筑前島郡川邊里は川邊鄕、御野國加毛郡半布里は加茂郡埴生鄕、また味蜂間郡春日里は安八郡にて、春日部は後に池田郡に隷られしにや、この郡に春日鄕ある是にてしるべし、また本簀郡栗栖太里は本巢郡栗田鄕とあるものと聞ゆ、これ、孝德より以後、この大寶の頃には、いまだ鄕といふ稱なく、後の鄕といふをば、此時は里といへりし事を知るべし、常陸風土記に、新治郡云々、昔美麻貴天皇馭宇之世、爲レ平二討東夷之荒賊一、遣二新治國造祖名曰二昆奈良珠命一、此人罷到卽穿二新井一今存二新治里一云々云々、自レ郡以東五十里、在二笠間村一、また信太郡高來里云々、乘濱里東有二浮島村一、また行方郡、自レ郡西北堤賀里云々、從レ此以北曾尼村云々、男高里、また郡南二十里、香澄里從レ此以南十里板來村、また當麻鄕（こゝに鄕とあるは、寫手の後世心を以て、里を鄕と書るものなるべし、）云々、相鹿大生里、また香島郡云々、郡南廿里濱里、郡北三十里白鳥里、また那賀郡茨城里云々、片岡之村、久慈郡河內里、靜織里、小田里、また多珂郡道前里飽田村あり、この內新治、高來、乘濱、提賀、曾尼、男高、麻生、香澄、當麻、相鹿、大生、濱、白鳥、茨城、河內、靜織、太田、道前は、和名抄に新治、高來、乘濱、提賀、曾禰、麻生、香澄、當麻、逢鹿、大生、幡麻、白鳥、茨城、河內、倭文、大田、道口の鄕これなり、かくあるによりて古への里は鄕なり、里の下にある村は、後の里といふものなる事を知るべし、○中略また上野國金井澤村なる神龜三年酉寅二月十九日に建たる碑文に、上野國群馬郡下賛鄕高田里とある里は、後の村に當るべきか、其證

は河内西琳寺文書に、天平十五年帳云とて、僧沙彌の貫屬を記せる條に、僧行會、攝津國住吉郡大國里云々、戊申(和銅元ナルベシ)年四月廿八日、飛鳥寺受戒、受公驗、また僧順忠伊豫國宇麻郡常里□主金集史族麻呂弟、得麻呂、己酉(和銅二)年三月廿八日、飛鳥寺受戒、僧神耀云々、河内國古市郡下新居鄉宮處里戶主文忌寸足閇戶口、神龜三年三月廿三日、藥師寺受戒、僧智藏、河内國丹比郡余戶鄉余戶里戶主依網□政男廣岡、養老六年三月廿三日、於藥師寺受戒、僧延達、河内國古市郡尺度鄉鴨里戶主縣犬養連弓足姓乙麻呂、神龜四年三月廿三日、藥師寺受戒、僧永基、和泉監大鳥郡大村鄉山田鄉戶主比志貴造牛手男廣田、養老五年十二月廿三日藥師寺受戒(栞要)大館高門所藏无題名古文書(○律書殘篇)に、國郡鄉里の數を擧たる中に、郡五百五十五、鄉四千十二、里万二千卅六(左京條九、坊卅六、右京條九、坊卅三)、などあるに依て、古く郡鄉の下に里と書るは、後世の村なる事を辨ふべし、

〔潤背上〕一疑問云、國衙何義乎、衙廳字訓如何、庄保郡鄉等、其差別并字訓如何云々、

答曰、(○中略)鄉、有通別名、云通者、凡其人之所生地謂之鄉、樂府傳、我人詩云、涼源鄉井、又云、古鄉迢遞、是皆通名也、云別者、天子畿內方千里內、中心有百里者四、謂之鄉也、鄉地制、一方五十里(短)一方百里(長)是爲一鄉、一鄉中有方一里者五百、如此六鄉中有方一里者三千也、又方一里中有廿五家、十里中有二百五十家、百里中有二千五百家、五百里中有萬二千五百家、是爲一鄉制、總六鄉中有七萬五千家、是爲六鄉家數、云一家者方六十步也、六六而有卅六丈、(六尺爲步)六十步者有六行、則六六而有三千六百步、是爲四面三十六丈地、今田舍一町是也、三百六十步爲一段、卽三千六百步當一町步數也、天子或出軍或出獵之時、促六鄉之民、一家出一人、則自七萬五千家出七萬五千人也、是爲鄉地之制也、

〔日本釋名上地理〕里　さは小也、せばきなり、とは所也、せばき所也、里は都(ミヤコ)にあらずしてせばき所也、

〔東雅三地輿〕里サト　鄉の字、讀むこと亦同じ、鄉といひ、里といひ、其字同じからねど、共に讀てサトといへば、相通じ用ゆる事ありと見えたり、たとへば和銅の詔に、諸國郡鄉名著好字とありしに、

延喜式には、諸國の郡郷里名、並用二二字一必取二嘉名一と見えしが如き是也、郷里の字共に讀て、サトといふは、サは狹也、トは所也、其狹き所なるの謂なり、又大化の詔、及び其後代々の令式に見えし、造二戸籍一之法によれば、凡五十戸爲レ里と見えたり、郷には寬狹の同じからぬありと見えて、凡居二狹郷一、有下樂遷就二寬一を處置すべきの法なり、又度レ地之法、五尺爲レ步、三百步爲レ里とも見えたり、さらば汎く言ひてサトといふには、郷里の字通じ用ひぬれど、凡造二戸籍一度レ地等の法に至りては、里の字を用ひて讀むで其字の音を用ゆると見えたり、

〔倭訓栞前編十〕さと　郷里をいふ、狹處の義なるべし、眞名伊勢物語に、京をよめるは、日本紀に本けり、○中略邑は二里四方なるをいふ、

〔延喜式雜五十〕凡天下百姓、勸二課農業一、貯二積雜穀一、救二濟孤獨一、戸口增長、夫婦和順、名聞二郷里一、親疎相讓者、○中略申二送官一、

〔日本國郡沿革考一緒言〕按中古郷里之制、亦有レ可レ疑者、國史靈龜以來、往々有下以レ郷係上レ郡之文、則與二出雲風土記之說一合矣、然延喜式猶稱レ郷爲レ里、未レ得二其說一、○下略

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣二改新之詔一曰、○中略其三曰、初造二戸籍計帳班田收授之法一、凡五十戸爲レ里、每レ里置二長一人一、○下略

〔令義解二戸〕凡戸以二五十戸一爲レ里、謂若滿二六十戸一者、割二十戸一立二一里一、置二長一人一、其不レ滿二十家一者、隷二入大村一、不レ須二別置一也、每レ里置二長一人一、掌下檢二校戸口一、課二殖農桑一、禁二察非違一、催中駈賦役上、若山谷阻險、地遠人稀之處、謂縱山谷阻險、而人居稠密、或雖二人居疎一、而地理平坦者、並不レ在二此限一也、隨レ便量置、謂若滿二十戸一者、依二上法一立二別里一、若不レ滿者、令レ伍二相保一、附二於大村一也、

〔出雲風土記〕意宇郡郷壹拾、里三十○中略

右件郷字者、依二靈龜元年式一改レ里爲レ郷、其郷名字者、被二神龜三年民部省口宣一改之、

〔通典三食貨〕大唐令、諸戸以二百戸一爲レ里、五里爲レ郷、四家爲レ鄰、五家爲レ保、

〔出雲風土記〕意宇郡(中略)以上壹拾壹郷、別里參、

〔令義解三(田)〕凡國郡界內所部受田悉足者爲寛郷、不足者爲狹郷、

凡狹郷田不足者、聽於寛郷遙受、

〔律書殘篇〕日本國六十七、郡五百五十五、郷四千十二、里萬二千卅六、(左京條九、防卅六、右京條九、防卅三、)

〔南海通紀一〕四國王制記　通考

或書ニ曰、倭國(中略)郡ヲ以テ郷ヲ統ブ、郷ハ凡テ三千七百七十二也、

〔山州名跡志五(愛宕郡)〕糺(所名)下加茂(トモ)(中略)本名蓼倉也、源順載和名集、蓼倉里是也、總ジテ彼書ニ所載ノ村里ノ號ハ、其本郷ノ名ナリ、今民間ニ云處ノ親里(オヤサト)ナリ、(下略)

〔山州名跡志十六〕於郷爲其郡名所、俗是云親里(オヤザト)、列左、

愛宕　在同郡　宇治　在同郡　久世　在同郡　相樂　在同郡　乙訓　在同郡

綴喜　在同郡　葛野　在同郡　紀伊　在同郡

〔東海道名所圖會二〕桑名　桑名郡に桑名あるは、これを親里(おやさと)といふ、山州宇治郡に宇治あり、愛宕郡に愛宕あるが如し、(下略)

〔倭名類聚抄六(國郡)〕山城國宇治郡餘戸　綴喜郡餘戸　大和國葛上郡餘戸(下略)

〔秇苑日涉三〕屠兒(藍染家)

倭名類聚鈔曰、漢語鈔云、屠兒、(中略)越多卽越都利之轉訛耳、其種落謂之阿麻別(アマベ)、按倭名鈔所載、諸國郷名稱餘戸者、一國或及十餘所、餘戸此讀云阿麻別、蓋在昔王化之盛、唐土三韓之民來歸者、國史不絕記、姓氏錄所載、蕃部氏族之繁、可以概見已、其陋者、當時分置之諸國、各自爲郷、不與土著者相雜、故謂其種落爲餘戸、大抵外國人、慣屠獸肉、故以屠爲業、後世佛敎盛行、人忌食獸肉、遂見屠戸、如非人類者、故輓工靴匠、雖在市廛中、不敢通問、

町

〔運歩色葉集伊〕市イチ町マチ　人皇廿代持統天王之時、諸國市町始也、

〔日本釋名上地理〕町　まは間なり、ちは道也、田の間、市の間の道也、又ちは筋なり、田間及町のすぢなり、

〔倭訓栞前編二十九末〕まち　町をよめり、間路の義なるべし、或は區をよめり、○下略

村

〔類聚名義抄木三〕村　音尊聚落也　ムラ　和又受ント　サト　〔同六邑〕邑　依立反和オフ　ムラ　サト　邑俗

〔伊呂波字類抄元地儀〕村　ムラ　邑　四井爲レ邑

〔運歩色葉集無〕村ムラ

〔書言字考節用集一乾坤〕村ムラ　本字邨、韵會、人所二聚居一謂二之村落一、善見律、有レ市名二聚落一、無レ市名レ村、　墅　同、字彙、村也、韵會、田廬也、　邑　同

〔日本釋名上地理〕村　むらはむらがる也、人のむらがりすむ所也、

〔東雅三地輿〕村ムラ　ムラとは聚也、群黎の聚をいふ也、邑の字讀てムラといふ亦同じ、日神、天邑君を定められしと見え、又成務天皇の御時、國郡邑里を定められしなど見えしが如き是也、邑と村と其字同じからねど、其實は異なるにあらず、景行天皇紀に村亦讀てフレといふは、ムラといふ語の轉せしなり、亦安閑天皇紀に、竹村の地讀て、タカフといふは、猶苧生せし地をヲフといひ、茅生せし地をチフといふが如し、後にタカムラといひしは卽是也、村亦讀てスキといひ、スクといふが如きは、百濟の方言也、また古時人名姓字等に、村主の字見えて、讀てスクリといふが如きも、亦百濟の方言也、凡姓字に村主と稱せしは、皆是大漢三韓等の諸蕃也、それが中に、漢人の如きも、其祖先三韓の地に流寓し、彼土の村主などいふものになりしが、我國に歸化せしに、かへりて姓となりし所なりと見えたり、

〔倭訓栞前編三十一牟〕むら　村邑をよめり、群居の義也、村里を通じいへど、靈異記に、越前國加賀郡大野里畝田村と見えたれば、村は里の內たるべし、又相模集に、あと村の里とよめり、されば五十

戶爲里の說によれば、村中の里ときこゆ、村もと邨に作る、正字通に、經史に村字なしといへり、

〔安齋隨筆 前編十五〕一村　農民の住居する處をムラ村ノ字と云、又物の平均ならざるをムラ不平ノ字といふ、物の一處に集るをムレと云、ムレと云はムラノ轉語也何もムラと云は、ムラガルなり、郡ノ字也ムラガルは物の多ク集るを云也、〇下略

〔日本國郡沿革考 一總說〕按〇中略又國史處々有某鄕某村之文、然令式借不見以村係里之制、是亦可疑也、今以臆度推考當時之形勢、在昔剏建鄕里、大抵據山河之位置、算戶口之多寡而定之、然一鄕之民、素不居一處、或取便群居於幾處、於是不能不爲之區別、已有區別、不能無之稱呼、是村名之所以因起也、村之訓本出群之義、國訓相通、村名之起、非必在立里之後、雖未立里之前、民所群處、即有之稱呼、也、蓋立里之制、出于朝廷之法、群處之名、出于自然之勢、而當時民間或村里相通稱之、故如令義解、以里直爲村之解、雖然本是非朝廷之制、故令式無明文也、及于中世、禍亂相踵、朝綱弛棄、所在土豪、爭占土壤、或分割一鄕、各有其地、隨便多以村名呼之、於是昔時之制度皆廢、遂以鄕名爲贅物、至於今世、海內通制、以村直係郡、續紀、和銅六年、攝津國河邊郡玖左々村、日本紀略、天元元年、備中國都宇郡簑島村、如是等之類、偶以里爲村、自與今制異、鄕里之遺名、有纔存土人之口碑耳、是皆出不得止之勢也、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、伊弉冊尊生火神、時被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、

〔播磨風土記 宍禾郡〕比治里、〇中略宇波良村、葦原志許乎命、占國之時、勅此地小狹如室戶、故曰表戶、

〔日本書紀 七景行〕四十年七月戊戌、天皇持斧鉞以授日本武尊曰、朕聞、其東夷也、識性暴强、凌犯爲宗、村之無長、邑之勿首、〇下略

〔柳亭記 上〕不入計

武州荏原郡不入計村、他國にも此村名ありて、或は計を斗に作ると云々、いりやまず村とよめり、按に惠空編節用大全、以行姓氏の部に、入不讀と記て、いりやまずとかなをつけたり、算ふるを讀といふは古言なり、計も又算ふる意なり、されば、いりやまずは、いれよますの音便、かぞへいる、程にもなき小村といふ

字組坪分

義なり、伊庭氏曰、和名抄に餘戶とある則是なり、戶は家なり、一村に算へいれべき程にもあらず、餘りし家ある所をいひしなり、

〔日本國郡沿革考〈總一說〉〕今時昇平日久、民口繁饒、一村中、亦因民之所群處爲區別、俗稱之爲字、或小名、或以組、曰某組、又曰某坪、某分、而僅有私稱某村者、遂呼其本村爲親村、呼其所區別爲枝村、或枝鄕、是亦宛然似往時鄕與村生區別之形勢、

〔設草小言〈三〉〕今村中ノ小地名ヲ坪名ト稱ス、坪ヲ以テ地ニ名ツクル彼邦〇支ニモアリ、字書ニ平也トアリ、サラバ無高低地ニ名ツタル歟、

栁見坪〈三國志秦宓傳注〉　桑坪〈北魏書世宗本紀〉　坪〈國朝典彙〉　林原坪〈輿地勝、コレ朝鮮ニモアリ、〉　蓮花坪、白溝坪、〈綏寇紀略ニ〉

康家坪　金漆坪、〈同上〉猶コノ外ニモアルベシ、

〔增訂豆州志稿〈一〉〕郡鄕

貞享中、國中ヲ分テ十二組トス、〈增、十二組ハ三島組二十七村、自三島至南條、谷田組二十村、自伊豆佐野至奈古谷、田中組二十二村、自北江間至大仁、內浦組二十村、自重寺至小下田、狩野組二十七村、自熊切至湯島、大見組二十七村、自牧郷至筏場、東浦組五村、自赤澤至片瀬、川津組十七村、自梨本至見高、稲生澤組十九村、自茅原野至白濱、加納組二十二村、自大賀茂至伊濱、松崎組二十村、自雲見至江奈、宇久須組八村、自宇久須至門野、組ニ入ザル村三十九村、〉是鄕莊亡スル多キヲ以テノ故カ、此組ハ甲斐ニテ筋ト云、上總ニテ郡ト云類ニシテ、皆古ノ鄕ニ準ズ、〈然レドモ一郡ノ內、僅ニ組ト分ケタルニ非ズ、只モヨリニ因テ立タルナリ、〉

〔但馬考〈三地理〉〕朝來郡〇〈中略〉

村數二十八、分テ三トナル、

生野〈銀山也〉　猪野　奥野　小野〈以上皆銀山之內〉　竹原野　上生野　簾野　丸山　菖蒲澤　岩屋谷

津村子

右廣谷庄ト云

黑川〈枝村也〉　魚瀧　大外

右黒川谷ト云

山口　口田路　奥田路　立野　新井　羽淵　口八代　奥八代　山本　土肥　平野　老波

神子畑　佐中

右山口組ト云

〔紀伊續風土記日高郡六十三〕總論

元和封初以後十八莊の地、或は分ち、或は合せ、更に海部郡由良衣奈兩莊の地を南海部と名づけ、當郡に加へ、志賀組、入山組、天田組、南谷組、江川組、中山中組、山地組、切目組、南部組の九組とし各長を置て保管す、

〔書言字考節用集乾坤二〕莊シヤウ（韵略、田舍也、又道路交會之盛也、俗作庄者非、）庄（見上）

〔潤背上〕一疑問云、國衙何義乎、衙廳字訓如何、庄保郡鄉等、其差別幷字訓如何云々、
答曰、〇中略庄說文作莊、解曰、從艸壯、云々艸ハ是草也又曰、田舍也云々、徐鉉曰、作庄非也云々、今按日本風俗、不從國衙、不輸官物云庄、故名之曰別庄、又曰山庄、又曰別業、相傳云、陽成院脫屣之後、分國司所治之地、始名庄、爲太上皇封戶田、置院司等云々、庄號之稱始于此矣云々、既爲太上皇封戶田、故不輸國衙之貢物也、

〔隨意錄二〕我方中古、郡縣之外、有稱某庄者、庄莊之俗字、〇下略

〇按ズルニ、莊ノ事ハ、政治部莊園篇ニ詳ナリ、

〔書言字考節用集乾坤一〕保ホウ（鄉里之義）

〔潤背上〕一疑問云、國衙何義乎、衙廳字訓如何、庄保郡鄉等、其差別幷字訓如何云々、
答曰、〇中略保、說文曰、安也、保守也、周禮五家爲隣云々、按注疏意、四家人保安其一家也、今按、一家有夫婦、四家有八人、人有喪則四家人保守其一家也、故毛晃保字注曰、篆作𠈃、從子、子也從八、從人、言子八

人爲保字也、今按本朝京城圖、方一町者四爲一保、其保守者四家而被保守者一家也、今只取四家爲一保之義、又按、一家者地方六十歩也、以杖長六尺也計之、六々而得三十六丈、是爲一家之地、今當方一丁之地也、是李唐一家、與日本一丁其數同、據此按之、日本所立庄保者、雖不定其地量謂之保、其職人云保司、保名從此起歟、

〔但馬考一制度〕保ト云モノアリ、コレハ唐令ニ五家ヲ保トスト云ニヨリテ、和令ニモ載ラル、類聚三代格ニイヘル、結保ニテ、今ノ五人組ナリ、其カシラヲ保長ト云、後ハ京都ニテモ置レテ、其家ノ雜掌ヤウノモノヲ保長トセシコト、三代實錄ニアリ、中頃ヨリハ、是モ村トヒトシクナリシニヤ、御成敗式目ニハ、郡鄕庄保ト云、正統記ニハ、庄園鄕保トツヾケタリ、

〔新編常陸國誌二十〕保

東鑑ニ元久元年十月十八日丁未、諸國庄園鄕保地頭等、寄事於勳功賞、構非例、濫妨所務之由、國司領家訴訟出來之間、今日有其沙汰之、名田之所職任本下司之跡、可致沙汰、背御旨者可改職之旨、被仰下云々アリ、又承元四年五月廿五日壬子、陸奥國平泉保伽藍等興隆事、故右幕下御時、任本願基衡等之例、可致沙汰之旨、被殘御置文之處、寺塔追年破壞、供物燈明以下事已斷絕之由、寺僧各愁申、仍廣元奉行、如故不可有懈緩儀之趣、今日被仰寺領地頭之中云々、此ヲ以テ觀レバ、鎌倉ヨリ以前、保トイフモノ必ズシモ五家ニハ限ラズ、タヾ村々一組ニ立シ名トナリ、鎌倉ノ時ニ至テハ、庄ト同ジキ程ノ大キナル地ニナリタルコト知ルベシ、

〔壬生家文書一〕左辨官下播磨國

廳且任舊跡糺定四至堺、且免除雜役、穀倉院領當國小犬丸保事

在管揖西郡布施鄕內

四至東限六條十三坊卅五坪東畔、西限落道山峯

南限六條十二坊九坪南畔、北限大野山巣、

右得彼院去年十二月廿四日解狀偁、彼保解云、謹考舊貫、當保建立之後、漸雖及二百歲、四至內田畠荒野山林等、敢無有濫妨、而去應保年中、故出羽守師元朝臣補長官之後、平大納言賴盛卿相語國司、以布施鄕被申立庄號之日、小犬丸保者、作田之外、稱不可有山林畠地、不殘段步、混被押領之刻、長官注數代領知之子細、先雖被觸訴彼家、敢不承引、彌耀權威、理不盡被割取畢、沙汰未斷之間、彼朝臣被天亡畢、次長官倘怖威猛〇此間有脫字達之間、保民徒〇此間有脫字頭親能補長官之時、百姓等訴申云、當保建立以降、四至內山野畠地在家皆所領知來也、而被立布施庄之日、悉□被掠領也、所行之旨、未曾有之猥藉也、當他□□未聞如此之例、凡被點畠地者、土民居住何處勤仕課役、被押領池者、以何水令養作田、點定在家、被妨住□者、以誰人耕作保田、可令濟所當官物乎、當保者旱損□□之境、追年之訴、更無絕時、其中當保一濁之水、尙以難得、因茲往古土民等、廻計略盡功力、更構築池、漑入作田、備進年貢、是公平之其一也、豈又非國益乎、今庄家□自由、旁非可押妨之池水、就中布施鄕之內、有保有庄、當保者北也、彼庄者南也、本自其境爲各別、何構取保號以前荒凉、及古巧今案、越其四至、猥可掠取保領乎、所行之趣、已背道理者、次保者經多歲之舊領也、庄者爲近年之建立、今就成柄本劵、爭可奪取往代保領乎、無道之甚尤在斯事、早任舊跡、被糺定四至、誰謂非據、抑彼庄者、依爲結構新立之地、後白河院御分之時、有沙汰停止庄號、被付國衙畢、今鄕民等、發不當之舊惡、訴申國廳之間、不顧此等子細、又國妨出來、非蒙公裁者、保民容身於何所、可勤濟課役哉、早經奏聞、永欲被停止國郡之妨者、保之所申、旁有其謂、望請天裁、任舊跡、且被裁定四至境□、准官符地、永被停止勅事、院事、造內裏□御願寺、宇佐勅使、驛家雜事、乳牛役、總大小國役者、彌知道理之不空、全有限之公用者、中納言藤原朝臣泰通宣、奉勅依請者、國宜承知、依宜行之、

右大史三善朝臣

建久八年四月卅日

筋

右少辨平朝臣

〔古今著聞集 二十魚虫禽獸〕安貞の頃、伊與國矢野保のうちに黑島といふしまあり、〇下略

〔古文書類纂 上施行狀〕北朝後圓融天皇應安七年御教書

攝津國宮原北保領家職事、興福寺衆徒重僉議狀如此、長良孫三郎濫妨云々、及神木歸座之違亂之上者、不日止被妨、任先例可被全雜掌所務之狀、依仰執達如件、

應安七年四月三日　　武藏守 御判〇細川賴之

細河右馬之助殿

〔甲斐國志 一提要〕大凡本州地圖四郡ノ全體ヲ三劃スルニ、東爲都留、西爲巨摩、中兩斷シテ上爲山梨、下爲八代、山梨ハ北界武州秩父郡、八代ハ至河合鄕、右帶富士川、左緣駿州富士郡、阻以山、巨摩郡ハ南駿州廬原郡ニ界シテ、傍阿部山東邊、中富士川對八代郡、同云河合鄕、一帶ノ地ニシテ、後ニハ河內領云、富士阿部二郡ノ間ニ介シ、突出スルコト十數里、故ト穴山氏所食、其頃ハ制度粗九筋ニ異ナリキ、北信州佐久、諏方、小縣三郡ニ接壤シ、阻金峯八岳之重組、左ハ山梨郡、限以荒川、右有白峯駒嶽之高聳、群山嶢巖、人迹絕テ無敢西窺者、山內分堺信之伊奈郡、亦逐ニ不計知里程ト云リ、南北殆ンド二十五里、頗ル大郡ト謂ベシ、三筋內除河內領、餘地ヲ分割シテ、九。筋ト號セリ、〇中略

九筋二領

一萬力筋 山梨郡、表門、山梨三鄕隸之、〇中略　一栗原筋 山梨郡、於曾、玉井、大野、栗原、等力五鄕隸之、〇中略　一大石和筋 山梨郡、石禾、能呂、林戶、井上五鄕隸之、〇中略

一小石和筋 八代郡、八代、長江、白井、三代三鄕隸之、〇中略　一中部筋 山梨、八代、巨摩三郡ニ跨ル、〇中略　一北山筋 青沼、巨麻二鄕ハ古時皆爲巨摩郡、後分ニ青沼隸山梨郡、〇中略

一逸見筋 卽古鄕名ナリ、〇中略　一武川筋 眞衣、餘戶二鄕ナリ、〇中略　一西郡筋 在八代巨摩二郡、〇下略

〔甲斐國志 三村里〕山梨郡萬力筋

當筋ハ府城ノ東邊ニ緣リ、南畔ハ一條庄接壤シテ、至東コト里餘、石和鄕ヘ笛吹河ヲ隔ツ、其北ハ

田數　石高　戸數　人口

栗原筋ヲ左シ、河ニ中シテ、水源河浦入ニ逮ブ、西北ハ北山筋ニ堺シ、躑躅崎ノ館址ヨリ深草山、積翠寺山連綿トシテ、金峯ノ下ニ交リ、信武ノ國界ニ至ル、山內幽邃ニシテ未ダ里程ヲ詳ニセズ、村里ノ所在、凡南北五六里、東西壹里有餘ナリ、倭名抄ニ載スル山梨西郡ノ鄕名表門、山梨、加美等、此筋ニ屬ス、板垣里、山前庄、立河庄、本井窪、大八幡庄、牧庄、中牧、大御室ノ類、中世ノ書ニ見エ、或ハ里人ノ唱來ル處モ、盡ク此內ニ在リ、

一高貳萬三千百三拾四石貳斗四升三合

村里四拾九　戸四千貳百六拾四　口壹萬五千九百六拾壹 男七千九百六拾九 女七千九百九拾貳　馬五百拾壹 牛六

〔日本國郡沿革考 總一說〕按本朝往代戸口之數、於今無載籍之可稽者、然以令式之文推之、其大概可算也、當時之建郡、其數凡六百、以千戸乘之、則得六十萬戸、而民產大抵、大小平均不過六七口、權以七口乘之、則得四百二十萬口、文按、和名鈔所載諸國鄕名、綜計四千二百許、據一里五十戸之文、乘以五十、則爲二十一萬戸、亦以七口乘之、大減其數、纔得百四十七萬口、而又菅家文草祭城山神文云、八十九鄕二十萬口、是可見仁和寬平間讃岐民口之大數也、試亦以五十戸之制算之、以鄕數八十九乘之、則得四千四百五十戸、以除二十萬口、則得四十四口有奇、以之爲準、推之各國則殆及千萬以上、以近時寳曆六年所檢之民口二千六百六萬千八百三十、比較之、不啻倍蓰、蓋民口之多、以今世爲極盛矣、余(荒井顯道)嘗觀備日蓮所手錄者云、本朝六十六國、五百八十六郡、三千七百二十九鄕、田八十八萬五千五百六十七町、內上田一萬一千一百二十町、口四十九億九萬四千八百二十八、又僧行基日本國圖云、郡六百四、鄕一萬三千餘、是皆不識何所據、雖不可信之甚、暫附載以備博考、

〔大日本史 食貨 三〕按、古書無錄戸口全數者、其載一國一郡數者、東大寺正倉院文書、神龜六年、志摩課丁一千六十二、天平十二年、遠江濱名郡戸七百五十、口五千三百七十一、類聚三代格、齊衡二年、美濃惠奈郡課丁二百九十六、三代實錄、貞觀十八年、壹岐課丁二千餘人、又三代格、元慶四年、備前磐梨郡鄕六、戸二百九十七、課丁二千三百六、讃岐山田郡課丁一千七百六十、那珂郡鄕十、課丁二千八十、五年、備前赤坂郡鄕六、戸二百九十三、課丁一千七百三十六、八年、伊豫桑村郡鄕三、課丁七百二十五、久米郡鄕三、課丁七百二、喜多郡鄕三、課丁三千二百八、菅家文草、仁和中、讃岐口二十八

萬、是後諸書記全數者、日蓮書云、男百九十九萬四千八百二十八、女二百九十九萬四千八百三十、體源鈔、運步色葉集、節用集、大抵同、日蓮書、但三十或作二十、又擧一說云、男百九十九萬四千八、女二百五十九萬四千八百三十四、慶安印本日本國圖云、男女四百二十七萬六千八百、並不詳爲何時口數也、又考西土史、載本朝戶口者、魏志云、對馬國千餘戶、末盧國四千餘戶、伊都國千餘戶、奴國二萬餘戶、不彌國千餘戶、投馬國五萬餘戶、邪馬臺國七萬餘戶、末盧卽今肥前松浦郡、伊都卽筑前怡土郡、古伊覩國、奴與儺音相近、蓋筑前儺縣、不彌、不疑介之訛、蓋彌介之倒置、彌介卽筑後三毛郡、古御木國、邪馬臺卽大倭、餘未詳、晉書云、倭人戶七萬、並皆不過傳聞之說、唯宋史載我僧奝然所齎王年代記云、五畿七道鄕數三千七百七十二、課丁八十八萬三千三百二十九、是當圓融帝時、蓋得其實、然王年代記今不傳、故不能考也、閩書云、戶七萬餘、課丁八十八万三千有奇、是蓋據晉書宋史記之耳、今併注以備參考、

〔萬祖遺文錄 二十八 錄內二十一〕秋元御書

抑日本國ト申ハ、〇中略 六十六箇國、島二、長三千餘里、廣不定也、或百里、或五百里等、五畿七道、郡五百八十六、鄕三千七百二十九、田代上田一萬一千一百二十町、乃至八十八萬五千五百六十七町、人數四十九億八萬九千六百五十八人也、〇中略 男十九億九萬四千八百二十八人、女二十九億九萬四千八百三十人也、

〔秦山集 雜著十七 甲乙錄三〕日本斛二千五百萬石也、方一里耕出一萬石、河邑在其中、方五十里耕出二千五百萬石、邊鄙猶有餘地、則可爲三千萬石、戶者十分之一、乃三百萬戶、口者凡三千萬口、土地凡方二百五六十里也、按通鑑西土戶五百萬戶、口五千萬口也、

〔甲子夜話 八十七〕林曰、頃者或人吾邦唐土歷代口數ノ事ヲ問ケレバ、書テ遣シタル寫ナリトテ示サレケルマヽ、茲ニ錄ス、

口數ノ事〇中略

我ガ寛政十年午年、口二千五百四十七萬一千三十三、

右ヲ七年前ノ子年人別改ト突合セテ、各國增減差引五十七萬九千五百九十二ノ增ナリ、是ヲ以テ凡ニ推トキハ、此節ハ又餘程ノ增數ナルベシ、其上ニ我人別ハ公家武家幷ニ寺社等ヲ省キタル者ナリ、是等ヲ加ルトキハ、三四千萬以上ハアルベシ、

〇按ズルニ、戸口ノ事ハ、政治部上編下編ノ戸籍篇ニ詳ナリ、

〔閑田耕筆　一〕本邦の風は質直にて、文飾少きが本色なるべし、善も惡も進むに速にして省る所たらざるか、はた質直によりて、天皇を仰ぐこと、實に天のごとし、民心一ッなればか、雄略紀に樟姫といふ者、其夫弟君が、父と共に上に叛を知りて、ひそかに殺せるを、國家情深君臣義切、忠踰白日、節冠青雲と褒給へり、婦にして夫を殺すを節とし、忠とせる紀者の詞あたらずといへども、國風の然らしむるなり、〇中略

風習といふものは、いかにともすべからず、唐山にて國々の風を論ずるごとく、吾朝にても大國の人は氣象おのづから優に、小國の人は逼れり、或は其領主勢あれば、士民驕泰に、勢なければ畏縮す、海濱の人は散漫に、山中の人は儉素なり、市井の人は黠智多く油滑に、僻境の人は魯直にして偏窄なり、孔子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得知と、是地によりて氣をうつすの由なり、論語徵に、里の字を居のごとくなしてみるべしといへるも亦理あれども、唯字のまゝに見れば如此し、

〔南海通紀　二十　一〕老父夜話記

三谷掃部左衛門ハ天文八年ノ產ニシテ、寛永ノ晩マデ存命シ、百餘歲ヲ超タリ、其子彥兵衛ハ元龜二年ノ產ニテ、將軍八代ヲ度ル、渠ガ夜話ニ曰ク、〇中略總テ四國ハ上世ヨリ佗國ニ不變國人ナレバ、諸將兵卒凡民ノ分定テ、其禮義ヲ不紊、法令嚴重也、人倫部類ハ田夫ノ婦ヲ田佗ト云、其夫ヲ

地誌

農夫ト云、百姓ノ婦ヲ阿女ト云ヒ、副(ソヒ)ト云、其夫ヲ阿長ト云、名主ノ婦ヲ家阿ト云、其夫亭長ト云、諸士ノ婦ヲ內ト云ヒ、家公ト云、其夫ヲ脅(タフト)ト云、頭人ノ婦ヲ上ト云ヒ、奧ト云、君將ノ婦ヲ簾中ト云、各其分ヲ踰ルコト不成也、士卒モ亦恩田アリ、私田アリ、皆耕作ヲナシテ農人ニ同キ故ニ、四國破廢ノ時、我ガ前代ヨリ持來ル所ノ田地ヲ耕作シテ年貢ヲ出シ、住所ヲ不去也、其主君タル人モ世ノ望ナキハ、其被官人ニ養レ、渴命ヲ續グ人多シ、其功ヲ立ベキト思フ者ハ、佗國ヘ行也、又國ノ守ヨリ呼ビ出サルヽモ有也、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年八月癸酉、詔曰、〇中略今發遣國司幷彼國造、可以奉聞、〇中略宜觀國々堺界、或書或圖、持來奉示、國縣之名、來時將定、

〔本朝書籍目錄地理〕國府記　七卷行基菩薩撰

風土記　記諸國土地本緣

海外國記　四十卷天平五年春文撰

西京新記

民部省圖帳

〔續日本紀元明六〕和銅六年五月甲子、畿內七道諸國郡鄕名著好字、其郡內所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目、及土地沃塉、山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上、

〔帝王編年紀元明十〕和銅六年五月、諸國郡鄕名著好文字、又作風土記、

〔常陸國風土記〕常陸國司解申古老相傳舊聞事

問國郡舊事、古老答曰、古者自相模國足柄岳坂以東諸縣、總稱我姬(アヅマ)國、是當時不言常陸、唯稱新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂國、各遣造別令檢挍、其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇〇孝德之世、遣高向臣中臣幡織田連等、總領自坂已東之國、于時我姬之道、分爲八國、常陸國居其一矣、所以然號者、往來道

路、不隔江海之津濟、郡鄉境堺、相續山河之峯谷、取近通之義、以爲名稱焉、或曰、倭武天皇巡狩東夷之國、幸過新治之縣、所遣國造毘那良珠命、新令掘井、流泉淨澄、尤有好愛、時停乘輿、翫水洗手、御衣之袖、垂泉而沾、便依漬袖之義、以爲此國之名、風俗諺云、筑波岳黑雲挂、衣袖漬國是也、夫常陸國者、堺是廣大、地亦緬邈、土壤沃墳、原野肥衍、墾發之處、山海之利、人々自得、家々足饒、設有身勞耕耘、力竭紡蠶者、立即可取富豐、自然應免貧窮、況復求鹽魚味、左山右海、植桑種麻、後野前原、所謂水陸之府藏、物產之膏腴、古人曰常世之國、蓋疑此地、但以所有水田上小中多、年遇霖雨、即聞苗子不登之難、歲逢亢陽、唯見穀實豐稔之歡歟、

新治郡（東那賀郡堺大山、南白壁郡、西毛野河、北下野常陸二國堺、即波太岡、）

古老曰、昔美麻貴天皇○（崇神）馭宇之世、爲平討東夷之荒賊、（俗云阿良夫流爾斯母乃）遣新治國造祖名毘奈良珠命、此人罷到、即穿新井、（今存新治里、隨時致祭、）其水淨流、仍以治井因著郡號、自爾至今其名不改、（風俗諺曰、白遠新治之國、）

〔播磨風土記〕宍禾郡、所以名宍禾者、伊和大神國作堅了以後、堺此川谷尾巡行之時、大鹿出己舌遇於矢田村、爾勅云、矢彼舌在者、故號宍禾、鹿名號矢田村、

比治里（土中上）所以名比治者、難波長柄豐前天皇○（孝德）之世、分揖保郡作宍禾郡之時、山部比治、任爲里長、依此人名、故曰比治里、

宇波良村、葦原志許乎命、占國之時、勅此地小狹如室戶、故曰表戶、

比良美村、大神之褶落於此村、故曰褶村、今人云此良美村、

川音村、天日槍命宿於此村、勅川音甚高、故曰川音村、

庭音村、（本名庭酒）大神御粮枯而生麵、即令釀酒、以獻庭酒而宴之、故曰庭酒村、今人云庭音村、

奪谷、葦原志許乎命、與天日槍命、二神相奪此谷、故曰奪谷、以其相奪之由形如曲葛、

稻舂岑、大神令舂稻於此岑、故曰稻舂前、（生味粟）其粳飛到之處、即號粳前、

(出雲風土記)國之大體、首震尾坤、東南山、西北屬海、

東西一百卅七里一十九步

南北一百八十三里一百九十三步

一百步

七十三里卅二步

得而難可誤(〇恐有誤脫)

老細思枝葉、裁定詞源、亦山野濱浦之處、鳥獸之棲、魚貝海菜之類、良繁多、悉不陳、然不獲止、粗擧梗槪、以成記趣、

所以號出雲者、八束水臣津野命、詔八雲立詔之、故云八雲立出雲、

合神社參佰玖拾玖所

壹佰捌拾肆所(在神祇官)

貳佰壹拾伍所(不在神祇官)

玖郡、鄕陸拾壹、(里一百七十九)

餘戶肆、驛家陸、神戶漆、(里一十二)

意宇郡、鄕壹拾壹、(里卅三) 餘戶壹、驛家參、神戶參、(里六)

嶋根郡、鄕捌、(里廿五) 餘戶壹、驛家壹、

秋鹿郡、鄕肆、(里一十二) 神戶壹、(里一)

楯縫郡、鄕肆、(里一十二) 餘戶壹、神戶壹、(里二)

出雲郡、鄕捌、(里廿三) 神戶壹、(里二)

神門郡、鄕捌、(里廿二) 餘戶壹、驛家貳、神戶壹、(里一)

飯石郡、鄕漆、里一十九
仁多郡、鄕肆、里一十二
大原郡、鄕捌、里廿四
右件鄕字者、依靈龜元年式改里爲鄕、其鄕名字者、被神龜三年民部省口宣改之、
意宇郡
合鄕壹拾壹、里卅 餘戸壹、驛家參、神戸參
母理鄕 本字文里
屋代鄕 今依前用
楯縫鄕 今依前用
安來鄕 今依前用
山國鄕 今依前用
飯梨鄕 本字云成
舍人鄕 今依前用
大草鄕 今依前用
山代鄕 今依前用
拜志鄕 本字林
宍道鄕 今依前用
以上壹拾壹鄕別里參
餘戸里
野城驛家

黑田驛家

宍道驛家

出雲神戶

賀茂神戶

忌部神戶〇中略

通國東堺手間剗四十一里一百八十步、通大原郡堺林垣峯三十三里二百步、通出雲郡堺佐雜埼卅二里卅步、通嶋根郡堺朝酌渡四里二百六十步、前件一郡入海之南、此則國務也、

郡主司主帳無位海臣　無位出雲臣

少領從七位上勳業出雲臣

主政外小初位上勳業林臣、

擬主政無位出雲臣〇中略

自國東堺去西廿里一百八十步、至野城橋、長卅丈七尺、廣二丈六尺、〇飯梨川中略

天平五年二月卅日勘造　秋鹿郡人神宅臣金太理

國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣嶋

〔秦山集四十三雜著〕跋出雲風土記

垂加翁曰、六十六國風土記始于元明天皇、成于醍醐天皇、世太政官掌之、王室衰、官職廢、或放散不收、或失亡不補、今流落人間者、出雲之外未見其本書也、此本舊翁之所賜、然天平以來經千有餘載、謄手更迭、不知幾何、文字漫漶、不堪可疑、而彼本每行無高低、從頭到尾、長連爲一文、彌不可句、天和癸亥春、與亡友安藝氏相識、文字一從原初、郡鄉土產道里等粗施界劃、再改寫之、今茲檢書藏、偶獲之敗篋、竊惟先輩凋謝、不復可見、而若我亡友、雖墓木已拱、手澤猶新、三復愴然慨歎不已、因謹識其

尾云、享保三年上巳之日、谷重遠拜伏書、

〔塵袋 三〕一藤ハ木歟草歟〇中略

昔尾張國春部郡國造川瀨連ト云ケル物、田ヲ作リタリケルニ、一夜ノ間ニ藤オヒタリ、〇中略此事ヲ菅淸公卿尾州記ニ云ヘルニハ、其藤漸大ニシテ如樹、遂號藤木俗云波木田ト云ヘリ、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年十月丁丑、文章博士從三位菅原朝臣淸公薨、〇中略大同元年、任尾張介、〇下略

〔江吏部集 中神道〕冬日於州廟〇尾張賦詩小序

昔西曹始祖菅京兆〇淸公行縣邑以注風土記、今東曹末儒江侍郎〇匡房思鄕貢以興學校院、

〔類聚符宣抄 六〕可進風土記事

太政官符、五畿內七道諸國司、

應早速勘進風土記事

右如聞、諸國可有風土記文、今被左大臣宣偁、宜仰國宰令勘進之、若無國底、探求部內、尋問古老、早速言上者、諸國承知、依宣行之、不得延廻、符到奉行、

參議左大辨從四位兼行讃岐權守源朝臣悅　　外從五位下行左大史阿刀宿禰忠行

延長三年十二月十四日〇又見朝野群載

〔山槐記〕元曆元年九月十四日、大嘗會官符等請印有政、　十五日、悠紀史國通、依辨命持來日時四通古地、〇中略

近江國

注進　風土記事

志賀山　大松原志賀　筏立鄕同　青柳里同　信樂杣甲賀　佐野山里神崎

千松原(犬上)　千島浦(神崎)　千倉里(甲賀)　安吉郷(蒲生)　富羽里(野洲)　櫻村(同)
益田橋(蒲生下)　穐昌村(野洲)　大原山(甲賀東)　朝日里(淺井)　松江　千東橋(蒲生下)
勝野濱(高島)　青羽山(同)　萬木植(同)　廣瀬郷(同)　萬農池　稲倉山(淺井東)
長倉山　萬木泉　玉井(栗太)　高宮郷(犬上)　河上里(善積)　千草原
萬世濱　鶴濱井　鏡山(蒲生)　會坂關(志賀)　石根山(甲賀)　三上山
高月川(淺井)　打出濱(志賀)　日雲里　玉蔭井　勢多橋(栗太)　梅原(坂田)
佐野船橋(神崎)　祝郷　大富山　泉川　五井江(栗太)　長濤池
玉川里　石根山(甲賀)　板藏山　神山　高御藏山　彌高山(坂)
鮎岡　吉水郷　安良郷(栗太)　小松原(志賀)　香高郷　富津濱(同)
國見岡　玉野郷　比良山　藏部山　心見里(志賀)　岡見牧
篠原堤　大瀧山　大津浦　富野山　日吉社　彦根山(犬上)
石山　金柱(古麻長者持佛也)　外白川(同)　衣川(志賀)　内白川(甲賀)　安曇川(同)
龍門(栗太)　杉瀬(甲賀)

右注進如件

元暦元年九月　日

此文不加懸紙入寛筥見了返給、

〔都のつと〕風土記などいふ文にも、その國の古老の傳などかきて侍れば、さる事もやとてしるしつけ侍る也、

〔玉勝間一〕古書どもの事

ふるきふみどもの世にたえてつたはらぬは、萬ヅよりもくちをしく歎かはしきわざなり、釋日本

紀仙覺が萬葉の抄などを見るに、そのほどまでは、國々の風土記も大かたそなはりて、傳はれりと見えたり、○中略又風土記は、いとたふとき物なるに、今はたゞ出雲一國のみ、またくてはのこりて、ほかはみな絶ぬるは、かへす〴〵もくちをし、さるは應仁よりこなた、うちつゞきたるみやこのみだれに、ふるき書ども、みなやけうせ、あるはちりぼひうせぬるなるべし、○中略かくて風土記も、今の世にもかれこれとあるは、はじめの奈良の御代のにはあらず、やゝ後の物にて、そのさま古きとはいたくかはりて、大かたおかしからぬものなり、其中に豐後國のは、奈良のなれど、たゞいさゝかのこりて全からず、そも〳〵かくはじめのよきはたえて、後のわろきがのこれるは、いかなるゆゑにかと思ふに、これはた世人の心、おしなべてからざまにのみなれるから、ふるくてからめかぬをば好まず、後のいさゝかもからざまに近きをよろこべる故なるべし、○中略さてゑかもとの風土記はみな絶ぬる中に、國はしも多かるに、出雲ののこれることは、まがことの中のいみじきさきはひなり、○下略

〔秦山集雜著十五甲乙録一〕六十六國風土記今亡矣、是神慮乎、地理之志詳盡國之禍也、若大明一統志、適爲戎狄入京之資、今於長崎禁日本之圖、恐使外國知我境也、風土記今存、則其損益、豈相半而已哉、恐徒自禍耳、

〔日本國郡沿革考一總說〕文政□年、始開局於昌平黌、編輯諸國地誌、

〔地誌解題序〕國家之治、二百餘年、文物日盛、操觚之士競起、上自經藝史策、下至天文曆數農圃醫卜、無所不有、獨至輿地風土之記、未有成書也、家君蓋有慨於斯、乃建議謀編輯之擧、因先蒐羅各州地誌、以備其用、凡累數百種、卷冊浩繁、頗苦點撿焉、曩歲私與鳥取支封冠山老侯〔○池田定常〕謀、侯乃詳錄其卷帙多少、撰人名氏、且爲之辨正僞、校異同、品題其得失、業僅卒而書續出、不暇給會編輯之擧起、因屬間宮考叔、旁亦爲之續補、書成、分爲四門、曰總記、曰別記、曰游記、曰異國記、合二十八卷、附錄一卷、名曰地誌

地圖

解題、凡地理家以是取徵、則謬迁趨捷、去僞就正、犂然如辨黑白、其有功於職方亦不淺小、豈特編輯之貲云哉、贊成其事者、戶田氏德、海老原儀、中里仲舒、學館下吏岩崎愼成、村井量令、而老侯創始之功爲多云、時文政六龍集昭陽叶洽秋九月、檉宇林皝撰、

〔日本書紀 二十九天武〕十年八月丙戌、遣多禰島使人等、貢多禰國圖、十三年閏四月壬辰、三野王等、進信濃國之圖、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十年八月辛卯、令天下諸國造國郡圖進、

〔日本後紀 五桓武〕延曆十五年八月己卯、是日勅、諸國地圖、事迹疎略、加以年序已久、文字闕逸、宜更令作之、夫郡國驛邑、驛道遠近、名山大川、形體廣狹、具錄無漏焉、

〔好古小錄 上書畫〕輿地圖 編一

下鴨社所傳ニシテ、梨木三位 祐之 摸本也、延曆二十四年改定ノ圖ト云、古年代記ニ所載ノ圖ト大同小異ナリ、

〔類聚三代格 七〕太政官符

禁制國司任意造館事

右太政官去四月廿六日下五畿內諸國符偁、撿天平十年五月廿八日格偁、國司任意改造館舍、僅有一人病死、諱惡不肯居住、自今以後、不得除載國圖進上之外、輙擅移造、〇中略

弘仁五年六月廿三日

〔扶桑略記 二十二宇多〕仁和三年十一月二日、伊豆國獻新生島圖一張、見其畫中、神明放火、以潮所燒、則如銀岳、其頂有綠雲之氣、細事在圖中不更記之、

〔西宮記 臨時五〕行幸〇中略 城外

王卿裝束如常、〇中略 圖書持地圖、造酒橫甕入酒負馬、

〔群書一覽六〕日本國圖　一鋪

はじめて日本の圖を造りしは、行基大僧正にして、その圖拾芥抄に載たり、又足利時代の圖、其餘古圖往々寫本にて存せり、唐本に日本の圖をのせたるは、圖書編、武備志、海防纂要、全浙兵制、海東諸國記等なり、いづれも國名の差訛、方隅の倒置等あり、

大日本六十八州圖寫本　七十鋪

國ごとに四方の里數、郡村山川城主の名などをも、くはしくしるし、別に蝦夷朝鮮の二圖を附す、

〔異稱日本傳上一〕相傳、紀伊國熊野山下飛鳥之地有徐福墳、又曰熊野新宮東南有蓬萊山、山有徐福祠、近沙門絕海入明、太祖皇帝召見、指日本圖顧問海邦遺跡、勅賦熊野詩、〇下略

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十四日辛未、二品〇源賴朝令求奧州羽州兩國省帳田文已下文書給、而平泉館炎上之時燒失云云、難知食其巨細、被尋古老之處、奧州住人豐前介實俊、幷弟橘藤五實昌申存故實由之間、被召出令問子細給、仍件兄弟暗注進兩國繪圖、幷定諸郡券契鄉里田畠、山野河海、悉見此中也、注漏餘目三所之外、更無犯失、殊蒙御感之仰、則可被召仕之由云云、

〔續應仁後記九〕同〇足利義昭濃州著御事附信長催促事

信濃〇織田ソレヨリ岐阜エ歸城シ、江州一國ノ繪圖ヲ閱シテ、地形ノ勘辨合戰ノ委細ヲ評定シ、近日彼表エ可打立由催サル、

〔豐薩軍記二〕宗麟軍議石宗諫言幷島津系譜之事

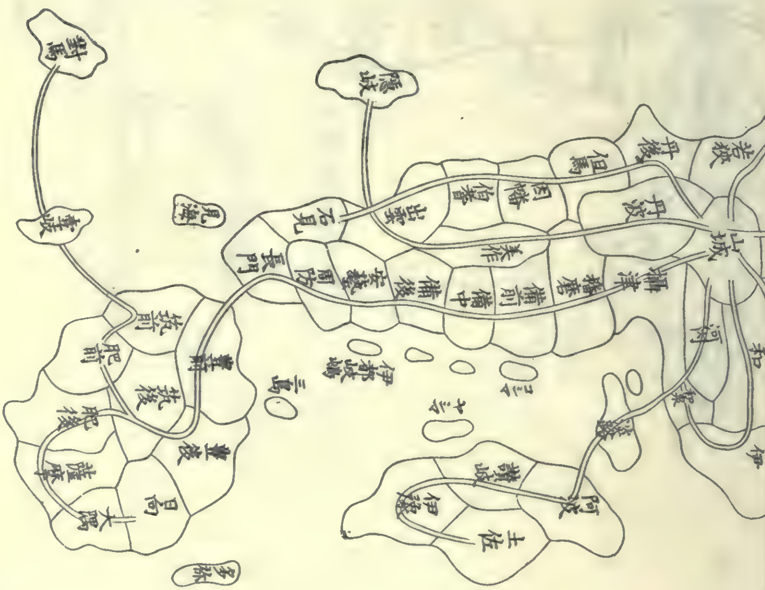
薩隅之兩國は不知案內にて候へば、先修行者商人なんどを仕立、土地の廣狹山川の險易、路次の宿驛等繪圖に摸させ御覽あり、能く〳〵勘辨あそばされ、其後御發向然るべく候はんとぞ申しける、

〇按ズルニ、戰時ニ地圖ヲ製スル事ハ、兵事部戰鬪上篇製地圖條ニ詳ナリ、

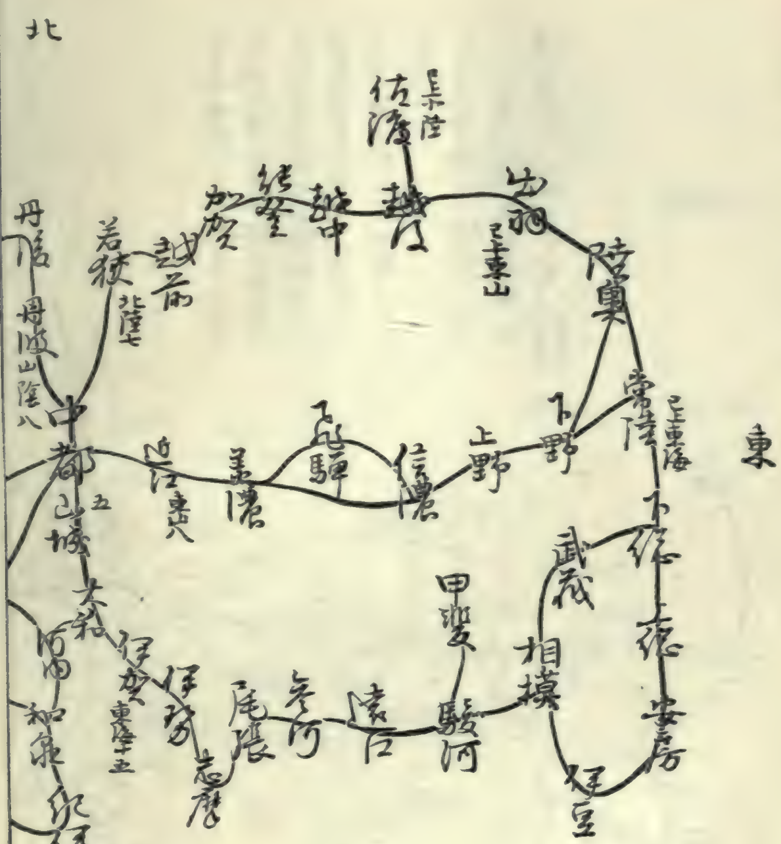

拾芥抄 中末 本朝圖部
津輕大里
夷地
陸奥
出羽
佐渡
越後
越中
能登
加賀
越前
下野
上野
常陸
鹿嶋
下総
上総
安房
武藏
相模
甲斐
伊豆
駿河
遠江
參河
尾張
信濃
飛驒
美濃
近江
伊勢
志摩
伊賀
大
紀
見付嶋

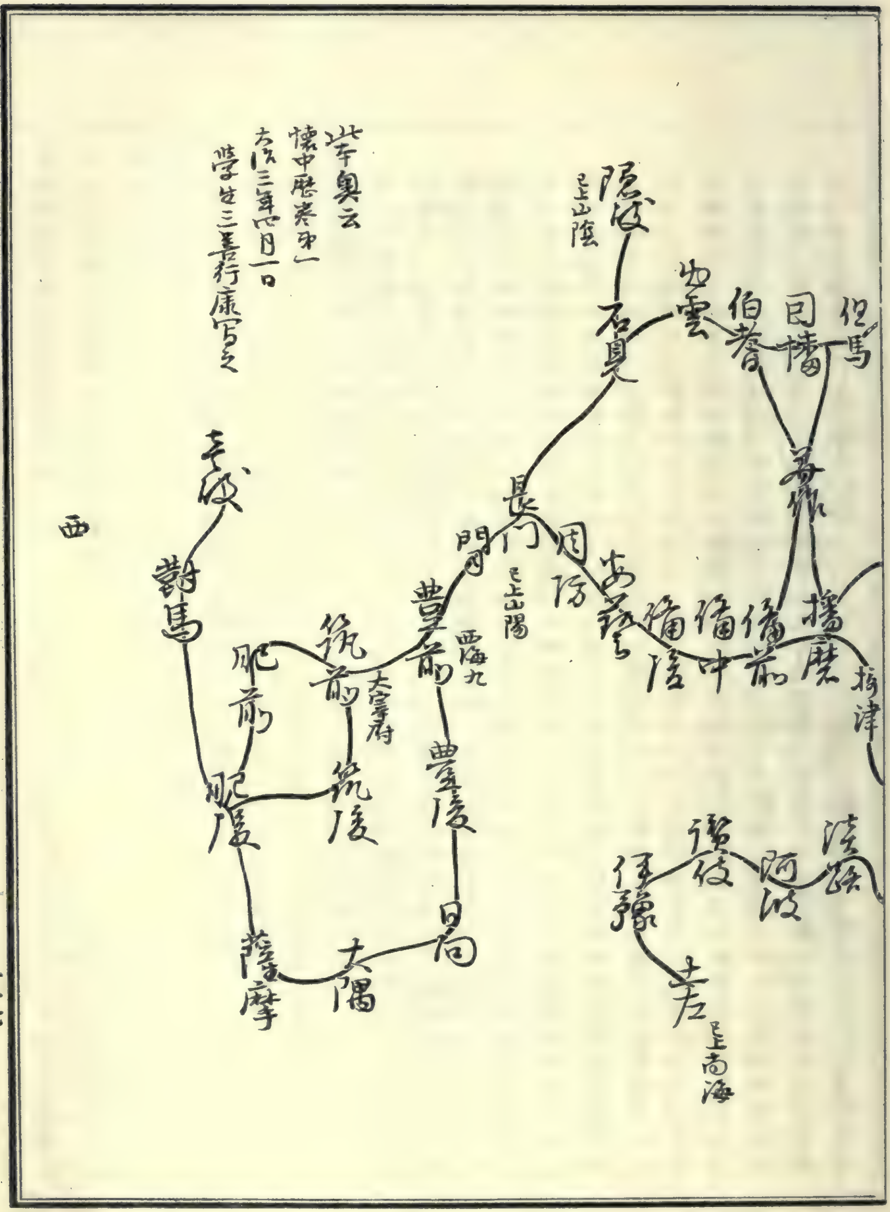
大日本國圖行基菩薩所圖也、此土形如獨鈷頭仍佛法滋盛也、其形如宝形故有金銀銅鐵等珍寶、五穀豐稔也、七道州六十八个、内嶋三、郡六百四、郷一万三千餘、

自京陸奥際、行程三千五百八十七里、六町為一里定　自京長門西濱、行程一千九百七十八里、六町為一里定



〔二中歷十 諸國〕


北
東
南
佐渡
越後
出羽
陸奥
越中
能登
加賀
越前
若狭
北陸七
丹後
丹波
山陰八
中都
山城
近江
東山八
美濃
飛騨
信濃
上野
下野
常陸
下総
上総
安房
武蔵
相模
伊豆
甲斐
駿河
遠江
参河
尾張
志摩
伊勢
伊賀
東海十五
大和
河内
和泉
紀伊
南海六


此本奥云
懷中歷巻第一
大治三年四月一日
學生三善行康寫之
隱岐
已上山陰
石見
出雲
伯耆
因幡
但馬
美作
長門
已上山陽
周防
安藝
備後
備中
備前
播磨
攝津
壹岐
西
對馬
豐前
西海九
筑前
大宰府
肥前
肥後
筑後
豐後
日向
大隅
薩摩
讚岐
阿波
淡路
伊豫
土左
已上南海

〔有德院殿御實紀附錄十〕紅葉山のみくらに藏めらるゝ所の古。新。の地。圖。古圖は寛永年中、新圖は元祿年中製する所なり、あるは諸國の城圖、家々の系譜をめして、ことごとく御覽ありしかば、世人聞つたへて、政の要領にみこゝろをもちひ玉ふ事を、おしはかり奉りしとかや、○中略すべて近郊に出させ玉ふ時は、かならず江。戸。地。圖。をもたらし玉へり、また日光山御まうでのとき、書物奉行等六國史類をもちて供奉する例なりしが、此御時よりとゞめられて、近きほとりの地圖のみもてまゐるべしと令せられしとなり、これ小事といへども、盛慮のほどおしてしるべきことになん、

〔落穗集追加十〕江戸大繪圖の事

一問曰、今時江戸大繪圖と申て世上にもてはやすは、何頃より出來致したる事にて候や、答曰、右大繪圖と申義、以前は無レ之候所に、嚴有院樣○德川家綱御代、酉の年○明曆三年大火事已後、井伊掃部頭殿、保科肥後守殿を初め、其外御老中方御寄合被レ成候て、御當地大繪圖と申物はなくては不レ叶事ど有り、御相談にて伊豆守殿の御掛りとなり、北條阿波守殿に仕立被二差上一候樣にと被二仰付一るゝ所に、阿房守殿被二申上一候は、私儀只今の御役の事に候へば、御用多一圓手透きも無レ之、其上御城廻を初め、武家屋敷幷町方共に小細にわり付、方角相違無レ之樣に仕立申と有レ之は、たやすく出來可レ申義にては無レ之候、然る所に私御役儀に取り交へ、御繪圖に打掛り罷在候義は仕りがたく候間、餘人え被二仰付一被レ下候樣にと、達て御斷りを被二申上一けれ共、外へ被二仰付一るゝ方も無レ之候間、下々役人の義は幾人なり共、其元被二申上一次第、可レ被二仰付一候間、右大繪圖方の總用として、世話被レ致候樣にと有レ之に付、安房守殿御申上候は、然るに於ては、私身にのがれざる者に、久島傳兵衞と申者有レ之、只今門弟中の指南を致させ、私方に差置候、尤當分浪人に罷在候へば、御城内へ立入候義いかゞに候へ共苦しからずとの思召にも御座候はゞ、此者に差圖仕り、私見代

りに差出候樣には如何可有之候哉と被相伺候へば、伊豆守殿御聞被有、尤には候へ共、當分浪人者と有之候へば、我等一存を以て差圖致しがたく候間、追て可申遣候と也、其後伊豆守殿御申候は、此間御申聞候久島傳兵衞義、其元由緒も有之、其上手前に被差置候と有之儀に候へば、不苦候間、成る程可被差出候、鈴木修理義、手下の御被官共召連れ罷出、其元の差圖を請け、相勤る樣にと被仰付候間、其段を相心得候樣にと有之、小川町安房守殿居宅の燒跡に、御繪圖小屋出來、修理、傳兵衞、其外御被官共罷出、最初に御本丸の地坪を打廻し、夫々西の御丸の地坪を打候節の義は、御殿に公方樣被爲入を以て、傳兵衞儀は差控へ、二三日程の間は、安房守殿自ら御出、修理へ差圖被致事濟み申也、總て外大手平川御門より內には、安房守殿直弟の者にても、傳兵衞より外には壹人も參り候儀不罷成、御城內の坪わり相濟候巳後、外の門弟共の義も、二三人程づゝ申合、傳兵衞手傳として罷出候、我等儀は、大原十郎右衞門と組合、三四度計りも罷出候、扨右の御繪圖出來候節、御納戶へ納り不申候內に、拜見致度きと存る直弟の者共は、御繪圖小屋へ罷出候樣にと、安房守殿御申之由、傳兵衞方より申傳候に付、何れも罷出候、我等義は、大原と同道にて參る所に、淸書の御繪圖は箱に入、床の上に有之、下繪圖を何れも一覽仕り居申處に、安房守殿御出、大原と我等へ御申候は、此下繪圖に有之御本丸向の義は、御堀を限り中を切りぬき候にと御申に付、兩人にて切りぬき候へば、うらの方に所々に紙にてかすがゐを掛け候樣にとの義に付、其通りに致候所に、岩城伊與守殿御出、下繪圖を披見あられ、此中をば何ゆへ御ぬかせ候やと御尋ね候へば、ちと存寄有之切りぬかせ候と、安房守殿返答被有候、我等抔も一圖合點不參候處に、後日に承り候へば、安房守殿右の御繪圖を被差上候へば、御老中方何れも殊外なる御譽に有之と也、其節安房守殿には、件の下繪圖を被差出、是は下繪圖にて御座候、淸書の御繪圖出來の上は、燒失申付候筈に御座候へ共、一應相伺候てと存候故、持參仕候、

私存候は、御本丸西の御丸の內の坪數さへ露顯不仕候はゞ、其外の向の義は不苦義にて御座候はゞ、此下繪圖の義は、板行に被仰付候ては如何可有御座候や、然ば世間の重寶にも可罷成事と存候と申上ければ、御老中方何れも御聞被有、其元御申の通り尤の事に候間、左樣に可申付、板行出來申候はゞ、手前共方にも一枚づゝ所望の由御申に付、然ば彌々板行致させ可申と御申上、安房守殿には御老中方御覽の前にて、繪圖の中の切りぬきて有之處を取りはなされ、小刀を以て細に切り破り、鼻紙に包み給ひ、御坊主衆に是を燒捨させられ候へと有之被渡るると也、其後遠近道印と申し書物屋方へ渡り、板行出來候節、安房守殿より差圖被有、御老中方を初め、御役人方へは板行の繪圖一枚づゝ、書物屋方より進上仕り、其後世上へも廣りし由、右酉の年大火事以後、御當地の義おびたゞ敷廣り候へ共、其所々には、公儀よりの御構ひも無之に付、書物屋方より人を廻し、手前見合に仕り、右の繪圖に書加へ候を以て、委細を不存る者は、始終道印が自作と取り沙汰仕るよしなり、

〔泰平年表常憲院〕元祿十年閏二月廿六日、大目付仙石伯耆守久尙が奉りし、六十餘州輿地圖の事を、安藤筑後守に命せらる、(此國繪圖井郷帳、今御文庫に現存して、郡。國。繪。圖。と云、此時の掛り寺社奉行井上大和守正峯、大目付仙石伯耆守、代り安藤筑後守信峯、町奉行能勢出雲守頼恒、勘定頭松平美濃守重貞也、此時の令條二通有、其一條に、壹万石已上井寺社領は井上大和守、壹万石已下御旗本の分は、安藤筑後守松平美濃守方へ、向寄次第、組付支配有之面々は、其頭々支配より書付を以て差出候樣、可被相觸候事、一御書物藏に有之國繪圖當分借り渡し、一覽已後返候樣、可被申渡候事とみえたり、)

〔日本國郡沿革考總說一〕元祿十年、幕府始造國郡之圖錄、(是謂御。國。繪。圖。)檢天下田圃及種類等之數、(是謂御高調)享保六年再檢、(東武實錄、寬延三年所檢種類之數云、高二千五百七十八萬六千八百九十五石餘、據是則是歲亦檢種類之數、)

〔吹塵錄二地域及田賦〕地圖小記

我邦從古以來全國の地圖不備、或は有之も兵亂の際に湮沒して不傳歟、これ大缺典にして、其沿革荒開唯口碑に傳へ、其實を察するに由なし、正保元年、國。郡。圖。諸城の圖成りて、是を政府に

納む、亦元祿九年輿。地。圖。成る、其後文化十二年、測。量。圖。成る、是れ下總の住民伊能勘解由(忠敬)なるもの、製する所也、勘解由推測の術、天文地理に通曉し、勉勵して其學を研究す、其間猶疑團甚多く、之を胸中に蓄へ、廣く古書を窺ひ、遠く術者に問ふ、其頃高橋作左衛門(景保、號觀巢)なるもの、測量天文學を以て幕府に聘せられ、西洋法式を主張す、伊能氏其説を聞くに及びて、疑團氷解し、其術益々進む、於是終に履を以て全國測量を命せらる、寒暑を不避從事數年、足跡邦內に普く、遂に測量全圖を製せり、此圖成るに及びて、始めて我邦地形の眞面目を見るを得たり、嗚呼伊能氏其志の篤く、其術の精しき、古より未だ曾てあらざる所にして、後又是に繼ぐ者無きなり、

中古より今に及ぶまで、歐羅巴洲我が國圖を收るもの、此測量を根據と爲さゞるはなし、茲に其大略を記さん、

文政の末年、和蘭加比丹江戶に來り、定規の拜禮を修む、此時其附屬の醫シーボルトなる者、諸學に通曉し、其名尤高し、高橋氏學術研究の爲め官許を得て、暫時面晤に及ぶ、シーボルト氏文化年間、魯國より我邦に使せしレサノー氏の著せる日本紀事を藏す、出して高橋氏に示す、氏此書を我邦に益あるを以て大に希望し、是書を得ん事を欲し、百方請求すれども、彼敢て不與、此時彼も亦我邦圖を求むる事切なりといへども、當時國禁第一の者なるを以て得るに道なし、此に至終に竊に謀る所あり、爾情其所好に投じ、高橋氏密に伊能氏の測量圖を縮寫し、附するに天度を以てし、贈りて以て其書に換ふ、(此事後日發覺して皆刑罰を蒙る)從是此圖和蘭國に入る、彼採て其國都に鏤刻す、英佛も亦其都府に飜刻し、彼諸州支那幷に我邦航海の用缺くべからざるの海圖となれり、これその大略なり、

〔栗山文集二上、序記〕新。刻。日。本。輿。地。路。程。全。圖。序

雜載

凡圖其急莫急於輿圖、而又其難莫難於輿圖焉、以其大則體國經野、控御攻守之政、其細則讀書考古、探勝挾蹟之學、蓋不可一日而缺者矣、而山之背向、水之迂直、吾儕孟浪、躬親履其地、猶且轉回數步之外、已茫然、失方位、況天下之大、山海之遠、苟非瓌懷偉度有領略四海之量、而縝密精細有分析毫釐之明、則焉能約略其梗槩於尺幅上而無差哉、長久保玄珠、字子玉、常陸赤濱人、飽學而富文、又好研地理、西自肥東至奧、躬略能涉其地、居常貼圖于步障、置之座側、凡雲游僧人、客商行旅、苟有抵其門、必延以飮食、與坐障前、指問其鄕里、及所歷山川城邑、道里險夷、其或裝齎圖記者、必請出之、證以已所親覩及載籍所記、參伍考究、積二十餘年、以成此圖、余嘗試叩以余所熟地界、子玉爲說、其迂直背向、險易沃瘠、與風俗之淳漓、舟車之通塞、歷歷指畫席上、皆盡其委曲、不謬毫釐也、余因奄信其他不苟焉、子玉長不滿六尺、眇然小丈夫已、而其胸中所藏如此、亦可畏哉、

〔栗山文集〈六題跋〉〕縮本日本輿地圖跋

赤水翁輿地圖、余已文而行之、未期年殆遍海內、其爲精確、世固知之矣、但方幅頗濶、是以旅途學宦人、病其艱于展閱焉、頃曾生應聖縮以九宮法、收入尺幅內、而其方位迂直、毫不謬原圖也、夫然後馬上轎中可閱之、於旅途燈前硯側可展之、於學宦不亦便乎、勸令亦刻而與人共之、

〔南蠻寺興廢記〕抑南蠻切支丹國ト云ハ、國號イスパニヤ幷〈ホルトガル、カステラ〉ト云、海上日本里程一萬二千餘里、世界ノ圖ヲ以テ見ル時ハ、唐土日本ヨリハ西方ニ當ル國ナリ、

〔春海先生實記〕寬文十年庚戌、先生〈年三十二〉〇中略以歐邏巴利瑪竇所著之坤輿萬國橫圖〈乃畫六幅屛〉、縮畫一圓球、縱橫象天度及里方、號曰地球、是亦便于學地理、且我國之地圖、合天度而定方位、別爲深秘之一圖、〈前代所未曾有之盛圖、而本朝第一之至寶也、〉

〔細川兩家記〕一同〈天文二十三年〉十一月二日、播州赤松殿を爲御合力、阿波の三豐之康內衆先陣に、安宅方篠原右京進渡海して明石表へ陣取也、

〔蒲生氏鄉記〕一信長公御切腹ノ後、羽柴筑前守味方ニ賴ミ被申ニ付テ、小牧表得押ツメラル、

〔足利季世記六久米田軍記〕阿波御所義榮御叙爵之事

此外播磨衆淡州衆ハ、越年ノ爲ニ國本エ下リケル、

古事類苑

地部二

皇都 部 併入

皇都ハ、ミヤコト云フ、卽チ宮處ノ義ニシテ、皇宮ノ在ル處ヲ謂フナリ、上古ハ皇都モ一定セザリシガ、孝德天皇大化改新ノ時、始テ京師ヲ修メ、條坊ノ制ヲ定ム、元明天皇和銅三年奈良ニ都シ給ヒ、遂ニ七代ノ皇都トナル、桓武天皇延曆三年、又都ヲ山城國長岡ニ遷シ給ヒシガ、土地狹隘ニシテ條坊ヲ區畫シ難キヲ以テ、同十三年、更ニ同國葛野郡ノ地ヲ相シテ、皇都ヲ玆ニ奠メ給フ、此ヲ平安京ト云フ、其制タルヤ、南北一千七百五十三丈、東西一千五百八丈、之ヲ東西ニ分チ、東ヲ左京トシ、西ヲ右京トス、各七百五十四丈、二京職ヲ置キ、各九條ニ分チテ條每ニ坊令アリ、條ハ又各四坊ニ分チテ、坊每ニ坊長アリ、凡ソ一行ニ八門アリ、四行ヲ町トシ、四町ヲ保トシ、十六町卽チ四保ヲ坊ト云フ、坊每ニ坊門アリ、南北ノ大路十六、或云十七小路五十二、東西ノ大路十一、小路二十四、大路中、朱雀大路最モ大ニシテ、廣サ二十八丈アリ、

抑皇都ハ、神武天皇始テ大和國橿原ニ奠メ給ヒテヨリ以來、成務、天智、聖武、淳仁四天皇ノ近江國、仲哀天皇ノ長門及ビ筑前國、仁德、孝德、聖武三天皇ノ攝津國、反正天皇ノ河內國、繼體、聖武二天皇ノ山城國等ヲ除ク外ハ、皆大和國ナリシガ、桓武天皇ニ至リテ、始テ山城國平安京ニ都シ給フ、後安德天皇ノ朝、攝津國福原ニ遷リ、後醍醐、後村上、後龜山三天皇ノ時、大和國吉野ニ遷リ給ヒシ外、復タ遷都ノ事ナカリシガ、明治天皇ノ明治元年ニ至リ、皇都ヲ武藏國江

名稱

戸ニ遷シ給ヒテ、之ヲ東京ト稱ス、

〔令義解九喪葬〕凡皇。都。謂天子所居也

〔日本書紀三神武〕己未年三月丁卯、下令曰、○中略誠宜恢廓皇都、規摹大壯、○下略

〔文選二十詩〕應詔詩一首四言　曹子建

肅承明詔、應會皇都、○下略

〔類聚名義抄六邑〕都。且胡反和ト　ミヤコ　鄢達亘反ミヤコ

〔伊呂波字類抄見地儀〕都ミヤコ、天子所宮曰都、又十邑爲都、

〔廣韻上平聲一〕都當孤切、都猶總也、(中略)帝王書紀、天子所宮曰都、

〔說文六下邑〕都有先君之舊宗廟曰都、从邑者聲、周禮距國五百里爲都、

〔運歩色葉集見〕都人皇卅九代宣化天皇御宇、大和國立之、同卅九代天智天皇御宇、近江國立之、文武(文武當作天智)天皇白鳳七年丁卯也、至天文十七戊申八百八十二年也、同五十代桓武天皇御宇、延暦十三年甲戌、遷山城國平安城也、至天文十七戊申七百五十五年也、聖武天皇天平十六年甲申遷都於難波、至天文十七八百五十年也、

〔日本釋名一地理〕都　宮どころ也、帝王の宮ある所也、所の字上下を略せり、

〔東雅三地輿〕都ミヤコ　ミヤとは宮也、コは古語にコといひ、カといひしは所也、天皇宮居し給ふ所をいふ事、大宮處などいふが如し、京の字讀事も亦同じ、城の字讀てミヤコといふは、皇城京城などいふの義也、○下略

〔倭訓栞前編三十美〕みやこ　都をいふ、日本紀に京、万葉集に京師をよみ、又華をよめり、宮所の義也といへり、菅家萬葉集に城をよめり、朱雀門より羅城門まで大道を開かれて、此大道の東の方を東のみやこといふ、左京洛陽などいふ是也、西の方を西のみやこといふ、右京、又長安といふ是也、稱德紀の歌に、爾詩乃美也古波、與呂豆與乃美也と見えたり、

〔萬葉集三挽歌〕七年乙亥、○天平大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌

栲角乃、新羅國從、人事乎、吉跡所聞而、問放流、親族兄弟、無國爾、渡來座而、太皇之、敷座國爾、內日指、京思美彌爾、里家者、左波爾雖在、〇下略

〔冠辭考二宇〕うちひさす　みや

万葉卷三に、坂上郎女、內日指、京思美彌爾、〇中略こは麗き日のさす宮とつゞけし也けり、宇都久志の都志を反せば知となる故に、略きて宇知といへり、

〔萬葉集二十〕八日〇天平勝寶八歲十一月讚岐守安宿王等、集於出雲掾安宿奈杼麿之家宴歌二首、〇中略

宇知比左須、美也古乃比等爾、都氣麻久波、美之比乃其等久安里等都氣巳曾、

右一首、守山背王歌也、

〔方丈記〕玉しきの都のうちに、むねをならべ、いらかをあらそへる、たかきいやしき人のすまゐは、代々をへてつきせぬものなれど、是をまことかとたづぬれば、むかし有し家はまれなり、

〔類聚名義抄六土〕京ミヤコ

〔拾芥抄中本宮城名〕京　長安、西、洛陽、東、京都、京師、花城、京兆、扶風、右、馮翊、左、

〔平治物語一〕三條殿發向幷信西宿所燒拂事

今ハ兵共、京白河ニ充滿リ、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十二月丁卯、皇帝在前、幸恭仁宮、始作京都矣、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、〇中略其二曰、初脩京師、〇下略

〔詩經集註六大雅〕民亦勞止、汔昔辟可小康、惠此中國、以綏四方、〇中略中國、京師也、四方、諸夏也、京師、諸夏之根本也、

〔類聚名義抄六土〕城ミヤコ

〔運步色葉集和〕王城ワウジヤウ自王城至陸奧東濱、三千五百八十七里也、同至長門西濱一千九百七十八里也、

〔類聚名義抄五水〕洛ミヤコ

所在

〔隨意錄 三〕京師稱洛者、舊擬彼方洛陽耳、洛、水名、其都在洛水之南、故曰洛陽、是不中乎此方之京、然而此稱所由來既久也、則今不可敢非也、

〔朝野群載 三文筆〕洛陽田樂記
永長元年之夏、洛陽大有田樂之事、○下略

〔法然上人行狀畫圖 三十三〕念佛の興行、洛陽にして年ひさし、邊鄙におもむきて田夫野人をすゝめん事、年來の本意なり、

〔平治物語 二〕待賢門軍附信賴落事
重盛宣ケルハ、年號ハ平治也、花洛ハ平安城也、我等ハ平氏ナレバ三事相應セリ、

〔法然上人行狀畫圖 四十八〕法性寺の空阿彌陀佛は、いづれの所の人といふ事をしらず、延暦寺の住侶なりけるが、叡山を辭して花洛にいづ、

〔倭訓栞 前編十四多〕たひら○中略 今の皇都平安城を、たひらといへり、

〔大和豐秋津島卜定記〕平京波、未深山乃時興利、既仁帝都乃勢、自眞備波支利、誠仁日本乃中心、國中乃秀、天下無雙之勝地奈利、南波晴禮、北波塞利、東波流水有天、福壽延長之謂弘顯之、西波長仁山並比連禮利、四神相應弘爲須、然波四方四隅仁、靈神並座之天、代代乃固仁奈豆氣利、○下略

〔古今著聞集 十八飲食〕親知僧都、九條の太政大臣○藤原兼實のもとへ、平茸をおくるとて、そへ侍りける、
たひらかに平のみやうにすむ人はひらたけをこそくふべかりけれ

〔八雲御抄 五名所〕都　うちのみやこ山、万、　くにの大、萬、　ならの同、萬、あをによし、　ふちはらの同、萬、　なにはの攝、萬、　さゞなみの近、萬、志がのとし、　みかのはら萬、みかはら、國のみやことも云へり、　ふるの大、萬、

〔和爾雅 一地理〕日本歷世都地　日向國宮崎(ミヤザキ)、神武　大和國橿原(カシハラ)宮、同上　同國葛城高丘(カツラキタカヲカ)宮、綏靖　同國片鹽浮穴(カタシホノウキアナ)宮、安寧　同國輕地曲峽(カルノトヲロマガヲ)宮、懿德　同國掖上池心(ワキガミイケゴコロ)宮、孝昭　同國室地秋津島(ムロノアキツシマ)宮、孝安　同國黑田廬戶(クロダイホリト)宮、孝靈　同國輕地(カルノトコロ)

境原宮、孝元同國春日率河宮、開化同國磯城瑞籬宮、崇神同國纏向珠城宮、垂仁帝都之、後景行天皇改號纏向日代宮、近江國志賀高穴穗宮、景行天皇五十八年、移都於此、居三年而崩、此以後成務仲哀相續居志賀、長門國豐浦宮、仲哀大和國磐余稚櫻宮、神功同國輕島豐明宮、應神攝津國難波高津宮、仁德大和國磐余稚櫻宮、履中河內國丹比柴籬宮、反正大和國遠飛鳥宮、允恭同國石上穴穗宮、安康同國泊瀨朝倉宮、雄略同國磐余甕栗宮、清寧同國近飛鳥八釣宮、顯宗同國石上廣高宮、仁賢同國泊瀨列城宮、武烈山城國綴喜宮、繼體天皇五年都于此、同國乙郡、同十二年遷都於此、和州磐余玉穗宮、繼體同國勾金橋宮、安閑同國檜隈廬入野宮、宣化同國磯城島金刺宮、欽明同國譯語田幸玉宮、敏達同國磐余池邊雙槻宮、用明同國倉梯宮、崇峻同國小墾田豐浦宮、推古同國飛鳥岡本宮、舒明攝津國長柄豐崎宮、孝德大和國後飛鳥岡本宮、齊明天皇重祚於大和國飛鳥板蓋宮、是冬災于板蓋宮、故遷居飛鳥川原宮、同二年、於飛鳥岡本更定都地、營宮室、天皇則遷曰後飛鳥岡本宮、筑前國朝倉橘廣庭宮、世號木丸殿、齊明天皇都、近江國滋賀大津宮、天智大和國淨見原宮、天武大和國藤原宮、持統文武、同國平城、或作奈良、諾樂、寧樂、元明帝三年、遷都於此、山城國相樂恭仁宮、聖武攝津國難波、聖武天皇十六年、遷都於此、大和國平城、聖武十七年、又都於此、近江國保良、廢帝天平寶字五年、遷都於此、大和國平城、廢帝寶字五年、又遷都於此、山城國長岡、桓武帝延暦三年十月三日、自平城遷此、同國平安城、延暦十三年十月廿一日、自長岡遷此、攝津國福原、高倉院治承四年六月三日、平清盛奉幼主遷都於此、同年十一月又復舊都、

右本朝都地凡五十

〔帝王編年記三〕神武天皇、○中略畝火橿原宮、大和國高市郡綏靖天皇、○中略葛城高岳宮、大和國葛上郡安寧天皇、○中略片鹽浮穴宮、大和國高市郡畝火山北也懿德天皇、○中略輕曲峽宮、大和國高市郡孝昭天皇、○中略掖上池心宮、大和國葛上郡孝安天皇、○中略室秋津島宮、大和國葛上郡、今掖上池南田中也、孝靈天皇、○中略黑田廬戸宮、大和國城下郡孝元天皇、○中略輕境原宮、大和國高市郡、今輕大路西方、開化天皇、○中略春日率河宮、大和國添上郡

〔帝王編年記四〕崇神天皇、○中略磯城瑞籬宮、大和國山邊郡垂仁天皇、○中略卷向珠城宮、大和國城上郡、今纏向北里西田中也、景行天皇、○中略纏向日代宮、大和國城上郡、今卷向檜林是也、成務天皇、○中略磯香高穴穗宮、近江國志賀郡同寺濱邊也仲哀天皇、○中略穴戸豐浦宮、長門國豐浦郡北樹林是也神功皇后、○中略磐余稚櫻宮、大和國十市郡磐余池里是也

遷都

〔帝王編年記　五〕應神天皇、略○中輕島明宮、大和國高市郡　仁德天皇、略○中難波高津宮、攝津國東生郡、宮垣不ㇾ堊、茅茨不ㇾ剪、　履仲天皇、略○中磐余稚櫻宮、大和國十市郡、御池中櫻花落、因名ㇾ宮、　反正天皇、略○中丹比柴籬宮、河內國丹比郡、今宮坂上路北空地、是也、

〔帝王編年記　六〕允恭天皇、略○中遠明日香宮、大和國高市郡　安康天皇、略○中石上穴穗宮、大和國山邊郡、石上左大臣家西南、古川是也、　雄略天皇、略○中泊瀨朝倉宮、大和國城上郡、磐坂谷是也、　清寧天皇、略○中磐余甕栗宮、大和國十市郡、白香谷是也、　顯宗天皇、略○中近飛鳥八釣宮、大和國高市郡、龍田宮西北是也、　仁賢天皇、略○中石上廣高宮、大和國山邊郡、石上左大臣家北邊田原、　武烈天皇、略○中泊瀨列城宮、大和國城上郡

〔帝王編年記　七〕繼體天皇、略○中磐余玉穗宮、大和國十市郡　安閑天皇、略○中勾金橋宮、大和國高市郡　宣化天皇、中○略檜隈廬入野宮、大和國高市郡　欽明天皇、略○中磯城島金刺宮、大和國山邊郡　敏達天皇、略○中磐余譯語田宮、大和國十市郡

〔帝王編年記　八〕用明天皇、略○中池邊雙槻宮、大和國十市郡　崇峻天皇、略○中倉橋宮、大和國十市郡　推古天皇、中○略小墾田宮、大和國高市郡　舒明天皇、略○中高市岡本宮、大和國高市郡島東岳本地是也、　皇極天皇、略○中明日香河原宮、大和國高市郡、岡本宮同地也、

〔帝王編年記　九〕孝德天皇、略○中難波長柄豐崎宮、攝津國西生郡　齊明天皇、略○中後岡本宮、大和國高市郡　天智天皇、略○中岡本宮五年、大和國高市郡　六年丁卯、遷ㇾ都近江國滋賀郡大津宮、或云ㇾ粟津、

〔帝王編年記　十〕天武天皇、略○中飛鳥淨御原宮、大和國高市郡　持統天皇、略○中藤原宮、大和國高市郡　元明天皇、中○略平城宮、大和國添上郡

〔帝王編年記　十一〕天平十三年、今年遷ㇾ都於甕原宮、山城國相樂郡

〔一代要記　二〕都ㇾ平城宮、元ㇾ次ㇾ長岡宮、山背乙訓郡、延曆三年十一月、遷ㇾ次平安京、葛野郡、同十三年十月廿一日辛酉、天皇駕車遷御、其後无ㇾ遷都、

〔日本書紀　三神武〕己未年三月丁卯、下ㇾ令曰、自ㇾ我東征、於ㇾ茲六年矣、賴以ㇾ皇天之威、凶徒就ㇾ戮、雖ㇾ邊土未ㇾ清、

相地

餘妖尚梗、而中洲之地、無復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯蒙、民心朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎭元元、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎、觀夫畝傍山畝傍山、此云宇禰縻夜摩、○原本作東、今依集解改、西南橿原地者、蓋國之墺區乎、可治之、是月卽命有司、經始帝宅、

〔日本書紀神武三〕天皇○中略及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、○中略抑又聞於鹽土老翁曰、東有美地、青山四周、其中亦有乘天磐船飛降者、余謂彼地必當足以恢弘天業光宅天下、蓋六合之中心乎、厥飛降者、謂是饒速日歟、何不就而都之乎、

〔秋篠月清集雑四〕中

昔より都しめたる此里はたゞ我國のもなかなりけり

〔日本書紀天智二十七〕九年二月、于時天皇幸蒲生郡遺邇野、而觀宮地、○下略

〔日本書紀天武二十九〕十一年三月甲午朔、命小紫三野王、及宮內官大夫等、遣于新城、令見其地形、仍將都矣、　十三年二月庚辰、遣淨廣肆廣瀨王、小錦中大伴連安麻呂、及判官、錄事、陰陽師、工匠等於畿內、令視占應都之地、是日、遣三野王、小錦下采女臣筑羅等於信濃、令看地形、將都是地歟、　三月辛卯、天皇巡行於京師、而定宮室之地、

〔日本書紀持統三十〕四年十月壬申、高市皇子觀藤原宮地、公卿百寮從焉、　十二月辛酉、天皇幸藤原、觀宮地、公卿百寮皆從焉、　六年六月癸巳、天皇觀藤原宮地、

〔續日本紀元明四〕和銅元年二月戊寅、詔曰、朕祇奉上玄、君臨宇內、以菲薄之德、處紫宮之尊、常以爲、作之者勞、居之者逸、遷都之事必未遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基永固、無窮之業斯在、衆儀難忍、詞情深切、然則京師者、百官之府、四海所歸、唯朕一人獨逸豫、苟利於物、其可遠乎、昔殷王五遷、受中興之號、周后三定、致太平之稱、安以遷其久安

宅、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、龜筮並從、宜建都邑、宜其營構資須、隨事條奏、亦待秋收後、令造路橋、子來之義、勿致勞擾、制度之宜、令後不加、　九月戊寅、遣幸平城、觀其地形、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年五月丙戌、勅遣中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂、從三位藤原朝臣種繼、左大辨從三位佐伯宿禰今毛人、參議近衞中將正四位上紀朝臣船守、參議神祇伯從四位上大中臣朝臣子老、右衞士督正四位上坂上大忌寸苅田麻呂、衞門督從四位上佐伯宿禰久良麻呂、陰陽助外從五位下船連田口等於山背國、相乙訓郡長岡村之地、爲遷都也、

〔日本紀略桓武〕延曆十二年正月甲午、遣大納言藤原小黑麻呂、左大辨紀古佐美等、相山背國葛野郡宇太村之地、爲遷都也、

〔神皇正統記桓武〕はじめは平城にまします、山背の長岡にうつりて、十年ばかり都なりしが、又今の平安城にうつさる、山背の國をもあらためて山城といふ、永代にかはるまじくなんはからはせたまひける、むかし聖德太子蜂岡にのぼりたまひて、太秦(うづまさ)いまの城を見めぐらして、四神相應の地なり、百七十餘年ありて、都をうつされて、かはるまじき所なりと、宣ひけるとぞ申傳えたる、其年紀もたがはず、また數十代不易の都となりぬる、誠に王氣相應の福地たるにや、

〔百練抄八高倉〕治承四年六月十五日、以輪田難被用帝都、可爲小屋野之由被改仰、而又播磨印南野可宜之由有沙汰、依無水難叶之者、

〔源平盛衰記十七〕福原京事

治承四年六月九日、福原ノ新都ノ事始アリ、上卿ハ後德大寺ノ左大將實定、宰相ニハ土御門右中將通親、奉行ニハ頭右中辨經房、藏人左少辨行隆也、河内守光行、丈尺ヲ取テ輪田ノ松原、西ノ野ニ、宮城ノ地ヲ定メケルニ、一條ヨリ五條マデ有テ、五條已下ハ其所ナシ、如何ガ有ベキト評定アリケルニ、通親勘テ三條大路ヲヒロゲテ、十二ノ通門ヲ立、大國ニモ角コソシケレ、吾朝ニ五條マデ

有バ、何ノ不足カ有ベキト被申ケレ共、不事行シテ、行事ノ人々還ニケリ、去バ昆陽野ニテ可在歟、印南野ニテ可有歟ト、公卿僉議有ケレ共未定也、先里內裏可被造進トテ、五條大納言邦綱卿、周防國ヲ給テ、六月廿三日ニ事始シテ、八月十日棟上ト被定申ケリ、彼大納言ハ、大福長者ニテ御座ケレバ、造出サン事左右ニ及ネドモ、ソモ爭カ民ノ煩(ワヅラヒ)人ノ歎ナカルベキ、殊ニ指當リタル大嘗會ヲ閣テ、カヽル亂ニ遷幸、遷都、內裏造營、山海ノ財力ノ盡ヌルノミニ非ズ、人民ノ侘際イクソバクゾ、楚起氣花之室、而黎民散、秦興阿房之殿、而天下亂トイヘリ、イサ〳〵危トゾ申ケル、

定造宮司

〔續日本紀 四元明〕和銅元年九月戊子、以正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下多治比眞人池守、爲造平城宮司長官、從五位下中臣朝臣人足、小野朝臣廣人、小野朝臣馬養等、爲次官、從五位下坂上忌寸忍熊爲大匠、判官七人、主典四人、

〔續日本紀 九聖武〕神龜三年十月庚午、以式部卿從三位藤原宇合、爲知造難波宮事、○中略難波宮官人、郡司已上、賜祿各有差、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年九月乙卯、以正四位下智努王、正四位上巨勢朝臣奈氐麻呂二人、爲造宮卿、

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆三年六月己酉、以中納言從三位藤原朝臣種繼、左大辨從二位佐伯宿禰今毛人、參議近衛中將正四位上紀朝臣船守、散位從四位下石川朝臣垣守、右中辨從五位上海上眞人三狩、兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚、造東大寺次官從五位下文室眞人忍坂麻呂、散位從五位下日下部宿禰雄道、從五位下丈部大麻呂、外從五位下丹比宿禰眞淨等、爲造長岡宮使、六位官八人、

○按ズルニ、造宮司ノ事ハ、尙ホ官位部令制官職編造宮職篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

買取宅地

〔續日本紀 三十稱德〕寶龜元年正月乙亥、大縣若江高安等郡百姓之宅、入由義宮者、酬給其價、

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆三年六月丁卯、百姓私宅、入新京宮內、亦五十七町、以當國正稅四萬三千餘束、

賜其主、

〔日本紀略 桓武〕延暦十二年十二月壬戌、勅長岡京百姓宅地價直、不可悔返云々、

遷人民遷丘墓

〔日本書紀 二十五 孝徳〕白雉元年十月、爲入宮地所壞丘墓及被遷人者、賜物各有差、卽遣將作大匠荒田井直比羅夫、立宮堺標、

〔日本書紀 三十 持統〕七年二月己巳、詔造京司衣縫王等、收所掘尸、　八月戊午朔、幸藤原宮地、

〔續日本紀 三 文武〕慶雲元年十一月壬寅、始定藤原宮地、宅入宮中百姓一千五百五烟、賜布有差、

〔續日本紀 四 元明〕和銅元年十一月乙丑、遷菅原地民九十餘家、給布穀、

行鎭祭

〔日本書紀 三十 持統〕五年十月甲子、遣使者鎭祭新益京、　六年正月戊寅、天皇觀新益京路、　五月丁亥、遣淨廣肆難波王等、鎭祭藤原宮地、

〔釋日本紀 十五 述義〕新益京

兼方按之、藤原宮地也、新益之義可考求、

〔續日本紀 四 元明〕和銅元年十二月癸巳、鎭祭平城宮地、

奉告遷都於神祇及山陵

〔日本書紀 三十 持統〕六年五月庚寅、遣使者奉幣于四所、伊勢、大倭、住吉、紀伊大神、告以新宮、

〔續日本紀 四 元明〕和銅元年十月庚寅、遣宮内卿正四位下犬上王、奉幣帛于伊勢大神宮、以告營平城宮之狀也、

〔神宮雜例集 一〕一中臣氏祖神〇中略

元明天皇和銅二年己酉、爾時遷都之由、被申太神宮、勅使祭主神祇伯中臣朝臣東人參神宮也、

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年正月癸未朔、天皇始御恭仁宮受朝、宮垣未就、繞以帷帳、　癸巳、遣使於伊勢太神宮、及七道諸社、奉幣以告遷新京之狀也、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦三年六月壬子、遣參議近衛中將正四位上紀朝臣船守於賀茂大神社、奉幣以

告遷都之由焉、

〔日本紀略桓武〕延暦十二年二月辛亥、遣參議治部卿壹志濃王等、告遷都於賀茂大神、　三月戊子、遣參議壹志濃王等、奉幣於伊勢太神宮、告以遷都之由、　癸卯、告遷都由於山陵、山階、先田原、後田原、　十三年九月戊戌、奉幣帛於諸國名神、以遷于新都、及欲征蝦夷也、

造內裏

〔續日本紀淳仁〕天平寶字三年十一月戊寅、遣造宮輔從五位下中臣連張弓、越前員外介從五位下長野連君足、造保良宮、六位已下官五人、

○按ズルニ、造內裏ノ事ハ、居處部內裏篇ニ在リ、

修理神社昇神階

〔續日本紀桓武〕延暦三年十一月戊申、○戊申原作甲子、是月戊申朔、无甲子、據一本改、　天皇移幸長岡宮、　丁巳、遣近衞中將正四位上紀朝臣船守、敍賀茂下上二社從二位、又遣兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚、敍松尾乙訓二神從五位下、以遷都也、　乙丑、遣使修理賀茂下上二社、及松尾、乙訓社、

〔日本紀略桓武〕延暦十三年十月丁卯、鴨松尾神加階、以遷都也、

修佛事

〔日本書紀孝德〕白雉二年十二月晦、於味經宮請二千一百餘僧尼、使讀一切經、是夕、燃二千七百餘燈於朝庭內、使讀安宅土側等經、於是天皇從於大郡、遷居新宮、號曰難波長柄豐碕宮、

〔續日本紀聖武〕天平十六年三月丁丑、運金光明寺大般若經、致紫香樂宮、比至朱雀門、雜樂迎奏、官人迎禮、引導入宮中、奉置安殿、請僧二百、轉讀一日、　戊寅、難波宮東西樓殿、請僧三百人、令讀大般若經、

遷神社

〔神宮雜例集一〕一中臣氏祖神○中略

元明天皇和銅二年己酉、都在奈良京之時、近奉崇居春日神社也、

〔大鏡七太政大臣道長〕鎌足のおとゞむまれ給へるは、常陸の國なれば、かしこのかしまといふところに、氏の御神をすましめたてまつり給ひて、○中略みかど、ならにおはしましゝときは、かしことほしとて、大和みかさ山にふり奉りて、春日明神となづけたてまつりて、いまに藤氏の御氏神に

て、おほやけ、をとこ女づかひたてさせ給ひ、〇中略みかど、この京にうつらしめ給ひては、又ちかくふり奉りて、大原野と申、〇中略なをもちかくとて、またふりたてまつりて、吉田と申ておはしますめり、この吉田の明神は、山かげの中納言のふりたて奉り給へるぞかし、

移兵器

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年閏三月己未、遣使運平城宮兵器於甕原宮、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年十二月己丑、始運平城器仗、收置於恭仁宮、　十六年二月甲寅、運恭仁宮高御座、并大楯於難波宮、又遣使取水路、運漕兵庫器仗、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年十二月戊戌、運恭仁宮兵器於平城、

班給宅地

〔日本書紀二十九天武〕十二年十二月庚午、詔曰、凡都城宮室非一處、必造兩參、故先欲都難波、是以百寮者、各往之請家地、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年九月辛未、班給難波京宅地、三位已上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分一町之一以下、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年閏三月乙丑、詔、留守從三位大養德國守大野朝臣東人兵部卿正四位下藤原朝臣豐成等曰、自今以後、五位以上、不得任意住於平城、如有事故、應須退歸、被賜官符、然後聽之、其見在平城者、限今日內、悉皆催發、自餘散在他所者、亦宜急追、　九月己未、遣木工頭正四位下智努王、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂、散位外從五位下高岳連河內、主稅頭外從五位下文忌寸黑麻呂四人、班給京都百姓宅地、從賀世山西道、以東爲左京、以西爲右京、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年閏正月癸酉、更仰京職、令諸寺百姓皆作舍宅、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年正月丁未、使衞門督正五位上粟田朝臣奈勢麻呂、禮部少輔從五位下藤原朝臣田麻呂等、六位已下官、七人於保良京、班給諸司史生已上宅地、

〔日本紀略桓武〕延暦十二年九月戊寅、遣菅野眞道、藤原葛野麿等、班給新京宅地、

招致市人

〔類聚國史七十八賞賜〕延暦十三年七月己卯、以山背、河內、攝津、播磨等國稻一萬一千束、賜從五位□〇從五位□當作從三位百濟王明信、從四位上五百井女王、從五位下置始女王、從四位上和氣朝臣廣虫、因幡國造淨成等十五人、爲作新京家也、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年八月丙午、遷平城二市於恭仁京、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年二月丁卯、恭仁京百姓、情願遷難波宮者、恣聽之、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年五月丁卯、恭仁京市人徙於平城、曉夜爭行、相接無絕、

〔日本紀略桓武〕延暦十三年七月辛未朔、遷東西市於新京、且造鄽舍、且遷市人、

命名

〔日本書紀二十五孝德〕白雉二年十二月晦、於味經宮、請二千一百餘僧尼、使讀一切經、〇中略於是天皇從於大郡、遷居新宮、號曰難波長柄豐碕宮、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年十一月戊辰、右大臣橘宿禰諸兄奏、此間朝廷以何名號、傳於萬代、天皇勅曰、號爲大養德恭仁大宮也、

〔帝王編年記十一聖武〕天平十三年、今年改甕原宮、號久仁宮、

〔日本紀略桓武〕延暦十三年十月丁卯、遷都詔曰云々、葛野乃大宮地者、山川毛麗久、四方國乃百姓乃、參出來事毛便之氐云々、十一月丁丑、詔曰云々、山勢實合前聞云々、此國山河襟帶、自然作城、因斯形勝、可制新號、宜改山背國爲山城國、又子來之民、謳歌之輩、異口同辭、號曰平安京、

〔憲法類編十國法〕詔書

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス、江戸ハ東國第一ノ大鎭、四方輻湊ノ地、宜シク親臨以テ其政ヲ視ルベシ、因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン、是朕ノ海內一家東西同視スル所以ナリ、衆庶此意ヲ體セヨ、

戊辰〇明治元年七月廿七日

敍位賜物

〔日本書紀 三十持統〕八年十二月乙卯、遷居藤原宮、　己未、賜親王以下至郡司等絁緜布、各有差、　辛酉、宴公卿大夫、

〔續日本紀 四元明〕和銅二年九月乙卯、授大倭守從五位下佐伯宿禰男從五位上、造宮大丞從六位下臺忌寸宿奈麻呂從五位下、是日、車駕巡撫新京百姓焉、　丁巳、賜造宮將領已上物、有差、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字四年八月己卯、賜新京(○近江國保良)諸大小寺、及僧綱大尼、諸神主、百官主典已上新錢、各有差、　癸未、施新京高年僧尼曜藏、延秀等三十四人絁綿、　五年正月癸巳、詔曰、依有大史局奏事、暫移而御小治田岡本宮、是以大和國司史生已上恪勤供奉者、賜爵一階、郡司者賜物、百姓者免今年之調、授守從四位下藤原惠美朝臣眞光從四位上、介外從五位下山邊縣主男笠外從五位上、大掾正六位下布勢朝臣清道已下、史生已上、爵人一級、賜郡司軍毅絁綿、各有差、　十月壬戌、賜大師(○惠美押勝)稻一百万束、三品船親王、池田親王者、十萬束、正三位石川朝臣年足、文室眞人淨三各四万束、二品井上內親王十万束、四品飛鳥田內親王、正三位縣犬養夫人、粟田王、陽侯王各四萬束、以遷都保良也、　甲子、行幸保良宮、　己卯、詔曰、爲改作平城宮、暫移而御近江國保良宮、是以國司史生已上供事者、幷造宮使藤原朝臣田麻呂等、加賜位階、郡司者賜物、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年十月甲子、詔以由義宮爲西京、河內國爲河內職、賜高年七十已上者物、(○中略)仍賜弓削御淨朝臣清人等、幷供事國郡司、軍毅爵一級、

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆三年十二月己巳、詔賜造宮(○長岡)有勞者爵、　乙酉、山背國葛野郡人、外正八位下秦忌寸足長、築宮城、授從五位上、外從五位下栗前連廣耳、飼養役夫、授從五位下、但馬國氣多團毅外從六位上川人部廣井、進私物助(○助原作則、據一本改)公用、授外從五位下、　丙申、預造長岡宮主典已上、及諸司雜色人等、隨其勞効、進階賜爵各有差、

〔續日本紀 三十九桓武〕延曆五年五月辛卯、新遷京都、公私草創、百姓移居、多未豐贍、於是詔賜左右京、及東

西市人物、各有差、六年十月丁亥、詔曰、〇中略朕以水陸之便、遷都茲邑、言念此民、豈無驗然、〇驗然、一本作騷然、中略、其郡司主帳已上、賜爵人一級、

〔續日本紀 四十 桓武〕延暦八年八月庚午朔、造宮官〇官原脫、據一本補、人已下、雜工已上、隨勞叙位、幷賜物有差、

〔日本紀略 桓武〕延暦十二年三月乙酉、新京宮城之內、百姓地四十四町、給三年價直、七月辛丑、巡覽新宮、賜造宮使、及將領衣、

〔類聚國史 七十八 獻物〕延暦十三年十月辛酉、車駕遷于新京、甲子造宮使、及山背國奉獻、賜五位已上衣被、幷笠、及產業器物、

〔類聚國史 十九 國造〕延暦十四年二月甲子、出雲國國造外正六位上出雲臣人長、特授外從五位下、以緣遷都奏神賀事也、

〔續日本紀 四 元明〕和銅二年八月辛亥、車駕幸平城宮、免從駕京畿兵衞戶雜徭、十月庚戌、詔曰、比者遷都易邑、搖動百姓、雖加鎭撫、未能安堵、每念於此、朕甚愍焉、宜當年調租並悉免之、

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年九月辛亥、免左右京百姓調租、四畿內田租、緣遷都也、乙卯、勅、〇中略又大養德、伊賀、伊勢、美濃、近江、山背等國供奉行宮之郡、勿收今年之調、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年十月己卯、詔曰、爲改作平城宮、暫移而御近江國保良宮、是以〇中略免當國百姓及左右京、大和、和泉、山背等國今年田租、

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年十月甲子、詔以由義宮爲西京、〇中略免當國〇河內今年調、大縣若江二郡田租、安宿、志紀二郡田租之半、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦三年十一月戊申、天皇移幸長岡宮、十二月己巳、詔〇中略免進役夫國今年田租、四年五月癸丑、先是皇后宮赤雀見、是日詔曰、〇中略其山背國者、皇都初建、既爲輦下、慶賞所被、合殊常倫、今年田租、特宜令免、又長岡村百姓家、入大宮處者一同京戶之例、

〔續日本紀 三十九 桓武〕延暦六年十月丁亥、詔曰、〈○中略〉朕以水陸之便、遷都茲邑、言念此民、豈無驗然、〈○驗然、一本作賑然、〉宜免乙訓郡延暦三年出擧未納、　七年九月庚午、詔曰、朕以眇身、忝承鴻業、水陸有便、建都長岡、而宮室未就、興作稍多、徵發之苦、頗在百姓、是以優其功賃、欲無勞煩、今聞、造宮役夫、短褐不完、類多羸弱、靜言於此、深軫于懷、宜諸進役夫之國、今年出擧者、不論正税公廨、一切減其息利、縱貸十束、其利五束、二束還民、三束入公、其勤前徵納者、亦宜還給焉、

〔類聚國史 八十三 免租税〕延暦十三年十月丁卯、詔曰云々、又愛宕葛野二郡〈乃〉、今年田租、免賜〈布止〉宣〈布〉勅命〈乎〉、衆聞食〈止〉宣、　十六年六月壬午、詔曰云々、天下地、建都者萬口勤苦殊甚、重宜免今年之租、又畿內者、口接都下、非無差發、宜半免之、

赦宥

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年九月乙卯、勅、以京都新遷、大赦天下、天平十三年九月八日午時以前天下罪人、大辟已下、已發覺未發覺、已結正未結正、無問輕重、咸釋放却、其流人未達前所、已達前所、及年滿已編付〈○當作附〉爲百姓、亦咸釋放還、其在流所生子孫、父母已亡、無可隨還者、亦〈○亦原作前、據一本改〉不限年之遠近、情願還、皆錄名聞奏、但不願還者恣聽之、又緣逆人廣繼入罪者、咸從原免、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年十月己卯、詔曰、爲改作平城宮、暫移而御近江國保良宮、是以〈○中略〉自天平寶字五年十月六日昧爽已前、近江國雜犯死罪已下、咸悉赦除、

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年十月甲子、詔以由義宮爲西京、〈○中略〉當國〈○河內〉犯死罪已下、並從赦除、

〔日本書紀 二十六 齊明〕二年、是歲於飛鳥岡本更定宮地、〈○中略〉迺使水工穿渠、自香山西至石上山、以舟二百隻、載石上山石、順流控引、於宮東山、累石爲垣、時人謗曰、狂心渠(タフレゴヽロノミツ)、損費功夫三萬餘矣、費損造垣功夫七萬餘矣、

役夫

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年九月丙辰、爲供造宮、差發大養德、河內、攝津、山背四國役夫五千五百人、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦四年七月癸丑、勅、造宮〈○長岡〉之務、事不獲已、所役之夫、宜給其功、於是和雇諸國

百姓三十一萬四千人、

〔日本紀略 桓武〕延暦十二年三月庚寅、令五位已上及諸司主典已上進役夫、築新京宮城、 十三年六月丙子、發諸國夫五千、掃新京、

用度

〔日本後紀 五桓武〕延暦十六年三月癸卯、令遠江、駿河、信濃、出雲等國、進雇夫二万卅人、以供造宮役、

〔續日本紀 十五聖武〕天平十五年十二月辛卯、初壞平城大極殿幷歩廊、遷造於恭仁宮、四年於茲、其功纔畢矣、用度所費、不可勝計、至是更造紫香樂宮、仍停恭仁宮造作焉、 十六年四月丙辰、以始營紫香樂宮、百官未成、司別給公廨錢總一千貫、交關取息、永充公用、不得損失其本、毎年限十一月、細錄本利用狀、令申太政官、

〔續日本紀 二十淳仁〕天平寶字四年八月辛未、轉播磨國糒一千斛、備前國五百斛、備中國五百斛、讚岐國一千斛、以貯小治田宮、 乙亥、幸小治田宮、天下諸國當年調庸便卽收納、

〔續日本紀 三十八桓武〕延暦三年六月壬子、又今年調庸、幷造宮工夫用度物、仰下諸國、令進於長岡宮、 壬戌、有勅、爲造新京之宅、以諸國正税六十八萬束、賜右大臣以下參議已上、及內親王夫人尙侍等、各有差、

〔賀茂皇大神宮記〕治承四年六月九日、福はらの新都事はじめあり、卿上雲客此所の地を定めけるに、一條より五條まであり、五條以下はその所なしとて、事不行して人々かへられけり、其時公卿僉議ありけれども、未定なり、先里內裏を造進せらるべしとて、五條大納言邦綱卿。。。周防國を給て、六月廿三日に事はじめして、八月十日上棟と定られける、彼大納言邦綱卿は、大福長者にておはしましければ、造出さむこと、左右に及ばずとなり、○下略

京城區畫

〔日本書紀 二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、○中略 其二曰、初修京師、○難波長柄豐崎宮、○中略、凡京毎坊置長一人、四坊置令一人、掌按撿戸口、督察姧非、其坊令、取坊內明廉強直、堪時務者充、○下略

略

〔扶桑略記　六元明〕和銅三年三月辛酉日、始遷都于平城、從難波宮移御奈良京、定左右京條坊、

〔續日本紀　十三聖武〕天平十二年十月壬午、行幸伊勢國、　十二月戊午、從不破（○美濃國）發至坂田郡横川頓宮、（○宮原作臣、據一本改、）是日、右大臣橘宿禰諸兄在前而發、經略山背國相樂郡恭仁鄕、以擬遷都故也、　丁卯、皇帝在前、幸恭仁宮、始作京都矣、太上天皇（○元正）皇后在後而至、

〔續日本紀　三十八桓武〕延暦三年六月己酉、以中納言從三位藤原朝臣種繼（○中略）外從五位下丹比宿禰眞淨等、爲造長岡宮使、六位官八人、於是經始都城、營作宮城、

〔百錬抄　八高倉〕治承四年六月九日、差遣大納言藤原實定、參議源通親、左中辨藤原經房、左少辨藤行隆、左大史小槻隆職、右大史小槻廣宗等於輪田、點定遷都之地、左京條里不足、又無右京云々、　十一日、於新院殿上、被議遷都事、左大臣已下參入、以輪田被定其所、而條里不足、又可被縮宮城歟、又平地內無右京、當西有山、儲件山、被用右京如何、山谷相交、可有其難、人々定申云、左京不足、右京山谷相交事、有何事哉、於被縮宮城之條者、不可然也、

〔玉海〕治承四年六月十五日丙申、早旦、大夫史隆職來、談遷都（○福原）之間事、（持來奈良京舊指圖、）相次穎業眞人來、各謁之、又前大納言來、巳剋着直衣、（車如昨日、）隨身二人同相從、先參內、謁女房、（主上御寢云々、）以藏人衆時、招頭辨經房朝臣、昨日所被尋問之三ヶ條、示予編畢、

一左京條里不足事

右南行及五條東行洞院西大路、不足之條、可何樣哉、其地狹少者、若可被縮宮城歟、

申云、須依地形之廣狹、被定條里之進退、不足之條暗難計申、如被注下者、減於平安城、殆可謂過半歟、隨而被縮宮城、何難之有哉、若可被縮者、其町數尤可有議定歟、南北五町、東西四町、如何、

一右京平地不幾事

右宮城西有小山、隔件山可被用其地隔山之條如何、加之平地不幾、山谷相交、被用右京不可及其難歟、

申云、如被仰下者、山谷相交、高下不等云々、專難用京都之地歟、但非大山、非深谷、漸々成功者、蓋同平地哉、又當時於不可及事之妨者、忽雖無其沙汰、何事之有哉、如此事隨便宜可被相計歟、〇中略

此外經房有相語旨等、

天正十八年、豐臣太閤秀吉公四周築土堤樹竹以爲洛之內外限、

〔和漢三才圖會〕七十二本山城都〇中略

〔京の水上〕京程圖解

平安城の制度は、延喜式に載すといへども、星霜累りて內裏も所變り、旋もすれば戰場となる、〇中略室町殿日記追加に云、天正十八年の頃、豐臣秀吉公六十餘州屬御手、四海靜謐に治りしかば、玄以法印、法橋紹巴をめして、潛に洛中の堺を御覽せらるゝに、東は高倉よりあなたは鴨河原也、遙にこれを見わたし給へば、渺々として東山にとりつゞき、みな耕作の地也、西は大宮よりあなたは嵯峨太秦へ押通つて田畠也、四方の際いづれとも界もなく田舍の在鄕の如し、幽齋を召て、花洛とは昔より言傳へぬれども、京都の分野は在鄕の如し、北は何れより南は此迄といふ洛中洛外の堺を末代迄相定べし、都の舊記をきかばやと仰出されければ、幽齋畏て釋せられけると云云、於是洛中の封境を諸侯に仰て四方に築せ給ふ、然りといへども町小路の本名を喪ひ、異名を多く呼て舊法を滅す、〇下略

〔駒井日記〕文祿四年四月朔日辰、一京總堀枯竹之事、民法〇民部卿法印前田玄以江爲御屆可申遣旨、書狀之案、〇書狀案略 三日午、一京廻土居枯竹之儀ニ付而、昨日重而御報之趣申上候、〇中略 一枯竹之事、土居

之内、薮之所により枯竹多被爲取候跡、青竹然々と無之所明候所も可有之と思召候、左候而者見懸も可爲如何候間、左樣之所には、此度青竹被爲植候而可然候哉、左之竹植候事者、此方御普請衆に成共可被仰付候間、何方も青竹可被相渡候、　九日子、一京總廻枯竹佐野請取分、東寺ゟすい坂海道迄、合壹萬六千百拾三本、内六千三百七拾六本大竹、九千七百三拾七本小竹、但右之内拾五本結四百貳拾束、同五拾本結百九拾四束三拾九本、　一京廻枯竹杉山牢左衛門、堤大三請取分、合壹萬貳千百五拾八本、内三百九拾貳束四本大竹、貳百拾五束拾四本小竹、二口合六百七束拾八本、右民部卿法印、桑形金右衛門、一瀨與左衛門、鑑見善兵衛相渡日記有之、

〔松屋棟梁集一〕答、赤松知則書

兩京は左京右京也、帝王は南面の位とまうせば、東を左とし西を右とす、○下略

〔拾芥抄中本百官〕京職（左朱雀東、姉小路北、七條北、右堀川西左京、堀川東右京、）

〔和漢三才圖會七十二本山城〕都○中略

油小路之東爲左京、（洛陽、）西爲右京、（長安、）

〔京の水上〕左京右京之辭

左京右京坊城等の制度は、文武帝の御時、平城都に初て備れりと見へたり、玄かれども其詳なる事知べからず、桓武帝今の地に都を遷し給ふより、こゝに於て兩京坊城の制法嚴重たり、（これより已前の制法、又此によつて推知べし、）左京右京の廣さ、東西の條三十二町に、南北の條三十八町也、朱雀通（今の千本通也、北に朱雀門あり、南に羅城門あり、）左京右京の間にありて、道幅二十八丈なり、これより東の分を左京とし、左京職これを掌る、其中に町數六百八町、保數百五十保、坊數三十六坊あり、（委は末に見へたり、）東の端を京極といふ、朱雀通より西の分を右京とし、右京職これを掌る、其中に町數六百八町、保數百五十保、坊數三十六坊あり、左京と同じ事にして、これも西の端を西京極といふ、○下略

〔拾芥抄中末京程〕東京。。〈號洛陽城〉　西京。。〈號長安城〉

〔大和事始一天地〕都〇中略

一或人の云、近世諸の稱呼訛謬多し、〇中略平安城を稱して洛陽といひ、長安といふ、都の中外を謂て洛中。。洛外。。と云、京に上るを上洛と云、これを承襲(ウケシタガフ)事久しといへ共、全く意義なし、周の成王河南洛水の北に都し給ふ、因て號て洛陽と云、猶汾陽、河陽と云類の如し、〇下略

〔秦山集雜著甲乙錄一十五〕世儒京都稱洛陽、稱長安、垂加嘗問、予如何會、予答曰、東京稱洛陽、西京稱長安、今之妙心寺邊也、翁曰、洛陽長安、異國地名也、非都城之號、因改、予所作測暑于洛陽之文、爲皇都、垂加定說如此、然遺文中往々循俗稱、而不及改正、可恨也、

〔年々隨筆四〕京都を洛陽長安といふ事を、物えり人のよくそしる事なり、さるはから國に此二ツの京名高きゆゑ、こゝの京をもそのまねして、何となくいふ事とおもふ故なり、そは中々物しらぬまどひ也、こゝの京の洛陽長安といふ事は、桓武の御時都定め給ひて、左京を洛陽城、右京を長安城と名づけられたる御制のまゝにいふ也、さらにわたくしの稱呼にあらず、これもとから國をうちつけにまねびたる名にて、あさまなることゝちはすれど、何事も吉例を逐るゝが朝廷の恒典なるに、この二ツは、から國にてめでたき京の名なれば、それをうつされたるにて、これ故實なり、さらにあさまなる事にはあらず、〇下略

〔帝王編年記十二桓武〕延暦十二年正月十五日、始造平安城東京。。〈愛宕郡〉又謂左京、唐名洛陽、西京。。〈葛野郡〉又謂右京、唐名長安、

〔玉勝間六〕東京西京

平安城は東西の京をおかれしかども、はじめより今のごとく東京のみ榮えて、西ノ京は榮えざりしにや、慶保胤の池亭記に、予二十年以來、歷見東西二京、西京人家漸稀、殆幾幽墟矣、人者有去無來、

屋者有壞無造とあり、

〔本朝文粹 十二 記〕池亭記　慶保胤

予二十餘年以來、歷見東西二京、西京人家漸稀、殆幾幽墟矣、人者有去無來、屋者有壞無造、其無處移徙、無憚賤貧者是居、或樂幽隱亡命、當入山歸田者不去、若自蓄財貨有心奔營者、雖一日不得住之、往年有一東閣、華堂朱戶、竹樹泉石、誠是象外之勝地也、主人有事左轉、屋舍有火自燒、其門客之居近地者數十家、相率而去、其後主人雖歸、而不重修、子孫雖多而不永住、荊棘鎖門、狐狸安穴、夫如此者、天之亡西京、非人之罪明也、東京四條以北、乾艮二方、人人無貴賤多所群聚也、高家比門連堂、少屋隔壁接簷、東鄰有火災、西鄰不免餘炎、南宅有盜賊、北宅難避流失、南院貧北院富、富者未必有德、貧者亦猶有恥、又近勢家容微身者、屋雖破不得葺、垣雖壞不得築、有樂不能大開口而咲、有哀不能高揚聲而哭、進退有懼、心神不安、譬猶鳥雀之近鷹鸇矣、何況轉廣門戶、初畫第宅、小屋相并、少人相訴者多矣、宛如子孫去父母之國、仙官謫人世之塵、其尤甚者、或至以狹上滅一家愚民、或卜東河之畔、若過大水、與魚鼈爲伍、或住北野之中、若有苦旱、雖渴乏無水、彼兩京之中、無空閑之地歟、何其人心之强甚乎、且夫河邊野外、非啻比屋比戶、兼復爲田爲畠、老圃永得地以開畝、老農便堰河以漑田、比年有水、流溢隄絕、防河之官、昨日稱其功、今日任其破、洛陽城人殆可爲魚歟、竊見格文、鴨河西、唯免崇神院田、自餘皆悉禁斷、以有水害也、加以東河北野、四郊之二也、天子迎時之場、行幸之地也、有人縱欲居欲耕、有司何不禁不制乎、若謂庶人之遊戲者、夏天納涼之客、已無泛小鮎之涯、秋風遊獵之士、又無臂小鷹之野、夫京外時爭住、京內日陵遲、彼坊城南面、荒蕪眇々、秀麥離々、去舊腴就境埆、是天之令然歟、將人之自狂歟、○中略　天元五載孟冬十月、家主保胤自作自書、

〔三代實錄 四十七 光孝〕仁和元年二月十八日甲辰、夜東京一條衞士町失火、延燒三百餘家、

〔今昔物語 十四〕依尊勝陀羅尼驗力遁鬼難語第卅二

條

今昔延喜ノ御代ニ、西三條ノ右大臣ト申ス人御ケリ、〇中略此ノ若君ミ東ノ京ニ愛念スル女有ケレバ、常ニ行キケルヲ、〇下略

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年八月癸丑、西京衞士町災、燒百姓廬舍卅餘烟、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、ならの京ははなれ、此京は人の家まださだまらざりけるときに、西の京に女ありけり、

〔元輔朝臣家集〕西の京にすむ人の、とはぬ心の歌よみし返事に、

草わかみむすびし荻はほにいでず西なる人や秋を知らん

〔口遊宮城〕凡一條之內有四坊、一坊之內有十六町、一町之內有四行、一行之內有八門、〈謂之、計京條坊〉

〔拾芥抄中末宮城〕凡一條之內有四坊、一坊之內有十六町、十六町之內有四保、一町之內有四行、一行之內有八門、一戶至長十丈弘五丈、又五家爲比、五比爲閭、廿五家、四閭爲族、百家、五族爲黨、五百家、五黨爲州、二千五百家、五家爲隣、五隣爲里、廿五家、四里爲族、五族爲鄙、五百家、五鄙爲州、二千五百家、

〔海東諸國記〕山城州　今爲國都、〇中略　都中、閭巷、道路皆方通四達、每一町有中路、三町爲一條、條有大路、井々不紊、凡九條、二十万六千餘戶、巷有市、國王而下諸大臣皆有分地、如封建世襲、雖居外州、亦皆置家京中、謂之京邸、

〔拾芥抄中末京程〕京都坊名〈土御門以上爲北邊、中御門以上爲一條、已下效之、〉

一條〈〇坊名略、下同、〉　二條　三條　四條　五條　六條　七條　八條　九條

〔七大寺年表〕和銅三年庚戌〈三月辛酉日、始遷都、從難波宮移御奈良京、定左右京條坊、〉

〔令義解一職員〕左京職〈右京職准此〉〇中略

坊令十二人

〔令集解六職員〕朱云、四坊置令一人、是以知、京可有十二條耳、四坊置令一人者、假令有大宮等、雖不足

四坊、猶置令耳、

〔職官志 四〕拾芥抄、四坊爲條、京師總爲九條、一條二條夾宮城、而東西各三坊雙列、合東西六坊同名、一云桃花、二云銅駝、令二人、其餘四坊同名、以別東西、東三條云教業、四云永昌、五云宜風、六云淳風、七云安衆、八云恭仁、九云開建、西三條云豐財、四云永寧、五云宜義、六云光德、七云毓財、八云延嘉、九云陶化、坊令京西各七人、都應十六人、而今左京坊令十二人、右京坊令十二人、集解、朱云、此知爲十二條、若令有如大宮等者、雖不能四坊猶置令然歟、是亦臆說也、蓋文武藤原之京、其營或嘗爲十二條、而未成之也、及遷都于寧樂平安、並爲九條、斯其所改營焉、職員令猶仍其舊、故左右坊令各十二人、

〔東大寺正倉院文書 九〕右京計帳

右京三條三坊〇中略

天平五年六月九日　　坊令大初位下尾張連牛養

〔東大寺正倉院文書 四〕謹解　申所盜物事

合壹拾參種〇中略

右等物、六條二坊安拜常麻呂之家、以去八月廿八日夜所盜、注狀以解、

天平七年閏十一月五日　　中宮職舍人少初位上中臣酒人宿禰久治良〇下略

〔日本靈異記 中〕閻羅王使鬼得所召人之賂以免緣第廿四

楢磐島者、諾樂左京六條五坊人也、居住于大安寺之西里、〇中略

極窮女憑敬千手觀音像願福分以得大富緣第卌二

海使表女者、諾樂左京九條二坊之人也、

〔今昔物語 十四〕依尊勝陀羅尼驗力遁鬼難語第卅二
今昔、延喜ノ御代ニ、西三條ノ右大臣ト申ス人御ケリ、〇中略大臣ノ家ノ西ノ大宮ヨリハ東、三條ヨリハ北、此レヲ西三條ト云フ、

〔小右記〕寛仁三年四月十三日、此兩三日間諸條造道守舍云々、去五日、卿相參會入道殿、有京中行火事等、可造道守舍事、余〇藤原實資所陳也、〇下略

〔朝野群載 十一 廷尉〕賑給文二人
右京三四條賑給使〇中略
三條人數三百十人〇中略
四條人數二百廿人〇中略
右去月廿九日、依宣旨賑給如件、
寛治元年六月廿八日
右兵衛少志正六位上藤井宿禰有文〇下略

〔山槐記〕長寛二年六月廿七日、賑給定、〇中略賑給使定文也白紙書樣事、賑給使、左京一條〇加北邊左衛門權佐藤原朝臣爲親、少尉平康俊、大志清原能景、〇中略以上大概如此、抑四五條外記書落折紙、仍上卿以差文覽之、以無被折紙人々被書入、〇中略亦上卿被仰大丞云、或書七八條歟、或書七八九條、此例文、久壽二年只書七八條、其外皆書七八九條、被案旨如何、大丞申云、可書七八九條歟、上卿被仰曰、七八條已在其中、只隨存知可被書者、亦上卿如何之由被仰、予〇藤原忠親并右大丞兩人共申、可被加於宣仁門外、申云、書七八條已九條其中候也、加北邊者、一條北武者小路候之故也、依上卿御疑、外史一口等書七八條、最不可然事也、右大丞有不甘心之氣、予依無爭強不申出、久壽二年定文、左右京共書七八歟之由、予奉尋、上卿被仰云、右京許也、左京者加九字、以之知之落字歟、此事專無其理、所謂一條者、自土

坊

御門、至于中御門、二條者、自中御門至于二條、三條者、自二條至于三條、如此次第可計、仍以坊門立條中、一條內有四坊、一坊內有四保、小一條者、近衛南東洞院西町也、東三條者、二條北西洞院東者、小六條者、楊梅北、烏丸西也、故皆有條號、何以大路許存九條哉、亦北邊者、一條南土御門北者、昔以土御門爲一條大路、其後北邊二丁被入宮城、既爲京中、仍有賑給、師元存武者小路、最不審重可尋事也、依其儀者、京極東有朱雀堤、被寄被如何、亦右京〔〇右恐左誤〕加北邊、右京有武者小路、歟旁無理、無異儀可書七八九條事也、

〔寂蓮法師集〕隆房卿別當の時、都のまつりごと、みなむかしにあらためられける時、七條に市のたちけるを追せければ、上の三條四條のあせたりけるに、もとの如く、むらがりわたりければ、よみてつかはしける、

古のあとをぞたのむかつまたのいけにもとりのかへりすむよに

かへし

古のあとにかへらばかつまたのいけらんかぎりものはおもはじ

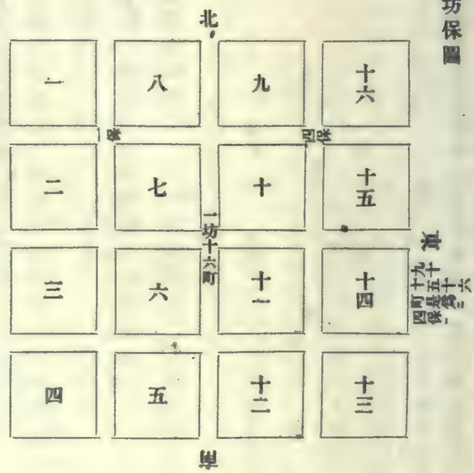
〔類聚名義抄 十六〕坊 マチ

〔口遊 宮城〕教業永昌坊　宣風淳風坊　安衆崇仁坊　陶化是左京〔謂之東京坊門起五條〕　豊財永寧坊　宣義光德坊　毓財延嘉坊　開建是右京〔謂之西京坊門起三條〕　今案坊門、弘仁九年所定、計坊者左京起西下東、右京起東下西、〇又見拾芥抄

〔拾芥抄 中 京程〕京都坊名

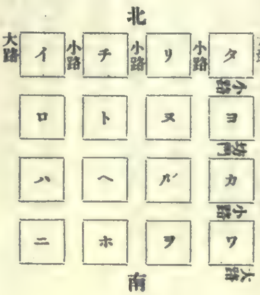
一條 桃花坊　二條 銅駝坊　三條 東教業坊、西毓財坊、　四條 東永昌坊、西永寧坊、　五條 東宣風坊、西宣義坊、　六條 東淳風坊、西光德坊、　七條 東安衆坊、西毓財坊、　八條 東崇仁坊、西延嘉坊、　九條 東陶化坊、西開建坊、

〔拾芥抄 中末 宮城〕坊保圖



〔京の水 皇〕京城坊保之圖解 坊保の積は、民家一戸より起る、〇中略 圖

一坊圖



一坊といふは、前の一保の圖を又四ッ目結のごとく、四ッ併せて二町四方十六町也、縦横とも、外側は大路にて、中に小路三筋あり、此三筋の中の筋を坊門通といふ、九重ことごとく圖の如く賦りて、一坊二坊三坊四坊あり、左京は西より始り、右京は東より始る、

〔拾芥抄中末京程〕凡左京(限以朱雀中央)有九坊門(起自北限於南)一坊當陽明門、二坊當待賢門、三坊當郁芳門、自餘皆有坊門、四條京極西、(建條中央小路○中略)

一條有四坊(起於西限於東)

一坊大宮西、二坊西洞院西、三坊東洞院、四坊京極西、○中略

右京准此　今案、坊門弘仁九年所定、○中略

或坊七十二坊、(左京卅六坊、右京卅六坊、)

〔延喜式四十二左右京〕凡京中衞士仕丁等坊、不得商賈、但酒食不在此例、

〔朝野群載二十一雜文〕權中納言家牒　左京職(衙)

欲被依實證署領地劵文燒失狀

在右京七條三坊四坊、　四至(東限佐比大路西小路、西限京極井侍從池西堤、南限七條大路北限六條大路、○中略)

長久五年六月十一日　知家事左衞門使長村重○下略

〔拾芥抄中末京程〕或○中略保三百保(左京百五十町、右京百五十町、○町恐保誤)

〔拾芥抄中末宮城〕坊保圖○中略

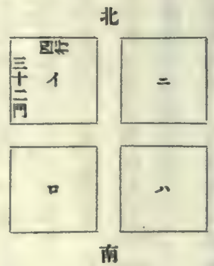


計保者、左京起西北南下、右京三七八町爲一保、三四五六町爲一保、

町

〔京の水上〕京城坊保之圖解坊保の積は、民家一戸より起る、○中略

一保圖



一保といふは、前の四行の圖を四ッ目結の如く四ッ合て、二町四方也、たとへば三條の北側より姉小路を越て、三條坊門今八幡町の南側まで、室町の東側より烏丸を越て、東洞院の西側まで、此四町を一保と號く、これも唐の代の制也、左京は西北よりかぞへ、右京は東北より算ふ、

〔小右記〕長元四年正月廿三日辛未、夜此保。夜行者、搦捕嫌疑者二人、○中略此間春日小道南邊室町西邊十人宅屋上褒火置、燃出之間所捕也、

〔朝野群載十一廷尉〕撿非違使廳下　九條二坊　刀禰職事

常陸光方

右件光方、巳三代刀禰者、早補任保。刀禰職、令知行保内、故下、

應德二年四月十七日　左衞門大尉藤原朝臣

〔朝野群載二十一雜文〕補保刀禰

右京職符　九條二坊二。保。

常澄重方

右人補任刀禰職已畢、保内宜承知令執行之狀如件、故符、

康和五年二月十三日　少進紀

大夫源朝臣

〔口遊宮城〕計町者、左京起西北下南環、右京○京下、拾芥抄有起字、東北下南環也、

〔拾芥抄中末京程〕東西二京幷千二百十六町（東京從大宮至于京極四百五十町、大内八十町、東西大宮中央自二條至于九條二百二十四町、又西京四百五十六町、大路三分可計加、〇中略）

又說云、東西兩京一千一百卌六町、　東京五百六十八町

但自二條大路北百二十町　自二條大路南四百卌八町

西京准此、除皇城外、

畝〇中略町千二百六十町（左京六百八町、右京六百八町、〇六十町恐十六町誤）

從一條南至于九條幷卅八町、從朱雀東至于京極十六町定、（平安京一條坊、井並給宅地、使東南北一千百五十三丈、）

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

東市屋（七條坊門南、猪熊東、）市價十一町、內町三町、（七條坊門南、七條北、大宮東、猪隈西、已上二町、）外町八町、左牲南、堀川西、大宮東、七條坊門二町、（七條坊門南、七條北、油小路西、堀川西、）二町、（七條南、鹽小路北、堀川西、大宮東、）二町（七條坊門南、七條北、大宮西、匣東、）二町、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應停止奪職吏考祿依法贖銅事

右得左京職解偁、〇中略今撿案內、京中總五百八十餘町、橋梁三百七十餘處、雖勤修造道橋多數、往還不絕不能无損、〇中略而以道橋之一失奪一年之考祿、賞罰之理、良近偏頗、宜依請贖銅、〇中略

天長五年十二月十六日

〔朝野群載二十一雜文〕左大辨家　沽與地貳戶主事

在左京五條三坊四町內（東西拾貳丈伍尺、南北捌丈、〇中略）

康德元年四月日　　知家事大藏史生菅野

令右京屬中原　別當散位源朝臣

〔梅窻筆記下〕內裏ノ六町町トテ、當時モ掃除ノ役ヲ勤ムル町々アリ、中山親綱卿記、文祿四年十月

行

廿五日子晴、就₂六町町₁新在家普請之儀ニ付、爲₂一安佗言₁申入候也、就₂其民法印○民部卿法印前田玄以へ折紙遣し候也トアリ、

〔口遊宮城〕計₂行者左京西上東下、右京東上西下、計₂門者、毎行左京起₂西北、右京起₂東北、並南下行也、○又見₂拾芥抄₁

〔拾芥抄中末宮城〕四行八門圖

北

西四行	西三行	西二行	西一行
西四行 行一門	西三行 北一門	西二行 北一門	西一行 北一門
西四行 北二門	西三行 北二門	西二行 北二門	西一行 北二門
西四行 北三門	西三行 北三門	西二行 北三門	西一行 北三門
西四行 北四門	西三行 北四門	西二行 北四門	西一行 北四門
西四行 北五門	西三行 北五門	西二行 北五門	西一行 北五門
西四行 北六門	西三行 北六門	西二行 北六門	西一行 北六門
西四行 北七門	西三行 北七門	西二行 北七門	西一行 北七門
西四行 北八門	西三行 北八門	西二行 北八門	西一行 北八門

南

〔京の水 上〕京城坊保之圖解○中略

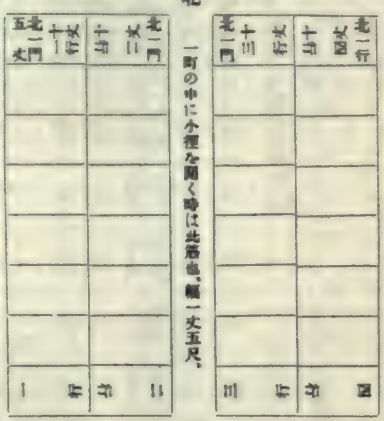
一行八門之圖

丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈
丈	十	五丈

横通壹町の長さ四十丈を四ッに截て十丈を一行といふ、縦通壹町の長さ四十丈を五丈ツヽ截て八ッを八門といふ、今の町屋片側の積也、左京は西北より算

へ、右京は東よりかぞふ、

四行三十二門之圖



此圖は壹町にして四十丈四方也、前の圖の縦通四十丈を八ツに截て八門とし、横通四十丈を四ツに截て四行とす、此四行に八門を配すれば三十二門と成、田地の何反幾畝などいふ如き也、左京は内裏の方西北より算へ、右京は東北より算ふ、四行の體は後世に至ても諸に分れり、横道東西は平安城開闢の條に變らず、縦道南北は上古にかはりて、悉く小路の數倍せり、今在存の鉄屋町、堺町、間之町、車屋町、兩替町、衣棚、釜之座、小川、醒井、岩上、新町、これらの類、後世に述んで出來たり、是四行の間に一小路を設ける式文の證也、

〔朝野群載雜文二十一〕三條令解申立賣買家地券文事

合地捌戸主　在左京三條四坊四町西一行北○中略

〔朝野群載雜文二十一〕左京五條令解申立賣買家地券文事

　應和元年八月十五日　賣人海

合地柒戸主柒丈壹尺肆寸

在左京五條四坊二町西二三四行北六七八門内○中略

　永保三年十二月日　賣人文章生藤原

〔東寺百合古文書百六十〕内侍所女官三條訴清原行守遺物事

地壹所〈在二券文一壹通〉在二左京四條貳坊玖町西。肆。行。北八門内一者、自二幼少之時一女官所二養育一也、彼地者女官所レ領也、〇中略

文治六年三月廿日

藏人左衞門權少尉藤原〈在判〉

女官三條〈加判〉

門

〔京の水〈一〉〕京城坊保之圖解〈坊保の積は、民家一戸より起る、〉

一門とふは、間口五丈奥行十丈と定たる法令にして、縦横の町に拘らず、民家一戸の事也、今俗にいふ一軒役などに當る、左京は皇城の方西北より算へ始り、右京は東北よりかぞへはじまる、

一門之圖〈縦通南北〉〈横通東西〉五丈

道路

〔侍中群要〈七〉〕申二條里號一事

北邊大路、〈或大路、只申二一條一是俗説、〉上東門大路、〈〻西〉陽明門大路、〈十二門准レ之可レ知〉二條大路、〈以下准レ之〉宮城東大路、〈〻西〉洞院東大路、〈〻西〉東京極大路、〈西〻〉鷹司小路、神解小路、萬里小路、〈已上申二本號一、他小路等只申二其大路之其方小路一、〉堀川、〈申二本號一云、元小路云〉〈今稱二大路一云々、〉

〔拾芥抄〈中末京程〉〕〈一條〉正親町　土御門　鷹司　近衞　雷解由中御門　春日　大炊御門　冷泉

〈二條〉痤小路　三條坊門〈教業坊〉　姉小路　〈三條〉六角　四條坊門〈永昌坊〉　錦小路

〈四條〉綾小路　五條坊門〈宣風坊〉　高辻　〈五條〉樋口　六條坊門〈淳風坊〉　楊梅

〈六條〉左牝牛　七條坊門〈安衆坊北少路〉　市門　〈七條〉鹽小路　八條坊門〈崇仁坊〉　梅小路

〈八條〉針小路　九條坊門　唐橋、〈自レ北起〉

又一條北有二小路一、武者小路、今小路、〈又一條北云二滋井戸一〉

朱雀　坊城　壬生　匣　大宮　猪隈　堀川　油小路　西洞院　町　室町　烏丸　東洞院

高倉　萬里小路　富小路　京極〈自レ西起〉

又京極東有朱雀、已上東京、京極川號中川、

野寺町油小路　細井大路西洞院　宇多小路町　馬代室町　惠立小路烏丸　木辻東洞院　昌蒲小路

山小路萬里小路　無武小路自富小路東起　音町正親町　西土御門　筑紫町鷹司　西近衞　松井勘解由

西中御門　木蘭春日　馬寮大路大炊御門　經師町自冷泉北起　已上西京

一條京極末、號右近衞馬場、

〔下學集 上天地〕京師九陌名　横小路。。

一條　正親町　土御門　鷹司　近衞　勘解由小路　中御門　春日　大炊御門　冷泉　二條

押小路　三條ノ坊門　姉小路　三條　六角　四條ノ坊門　錦小路　四條　綾小路　五條ノ坊門

高辻　五條　樋口　六條ノ坊門　楊梅　六條　佐目牛　七條ノ坊門　北ノ小路　七條　鹽ノ小路

八條ノ坊門　梅ガ小路　八條　針ノ小路　信乃小路　唐橋　九條以上南北三十八條

堅小路。。

朱雀西坊城　壬生　櫛笥　大宮　猪熊　堀川　油小路　西洞院　町　室町　烏丸　東洞

院　高倉　万里小路　富小路　京極　朱雀以上東西十八町也、大内爲中央、東京分也、西京略而不記焉、

〔和爾雅 一地理〕京師九陌横竪小路

横　一條、異名桃花坊　正親町、今名中立賣　土御門、今名上長者町、今禁裏號土御門亭、據此言之、禁裏西則土御門也、鷹司、當今中長者町歟　近衞、當今出水通歟

勘解由小路、當今下立賣歟　中御門、今東稱佐波良木町、西號中ノ町、或稱魚ノ棚、春日今號丸太町　大炊御門、今名竹屋町　冷泉、今名夷川通

二條、銅駝坊　押小路、　三條ノ坊門東名八幡町、西名御池通、姉小路、

三條、東教業坊、西豐財坊、六角、今又稱誓願寺通　四條坊門、今云蛸藥師通　錦小路、

四條、東永昌坊、西永寧坊、綾小路、　五條坊門、今云佛光寺通　高辻、今云下歟

五條、東宣風坊、西宣義坊、今松原通是也、樋口、今名萬壽寺通、一書今云楊梅通、六條坊門、今五條橋通歟、西號鹽竈町、楊梅、

六條、東淳風坊、西光德坊、左牝牛、　七條坊門　市門一曰北小路
七條、東安衆坊、西毓財坊、鹽小路、　八條坊門　梅小路一名信濃小路、或云此地見月似見信濃月、故名之、按兩槐門圖、古者九條邊曰月輪、然則此說有據歟、
八條、東崇仁坊、西延喜坊、針小路、一名安曇小路
九條、東陶化坊、西開建坊、九條坊門、　多那井小路
唐橋、吉祥院北有橋名唐橋、北巷號唐橋通、今有唐橋村、已上東西坊名也、爲橫、又一條北有小路、北小路、武者小路、今小路、今一條北有武者小路、元誓願寺通、堀川西有今小路、北野經堂前又須磨町通、大宮西有北小路名、
堅　朱雀、今云千本通　坊城、今當淨福寺通　壬生、今當智慧光院通　櫛笥、今當日暮通　大宮、　猪隈、中御門北頓二條以北鑑圖七條坊門以南市門　堀河、
油小路、大炊御門以北帶刀町　西洞院、　町、土御門以北町口、中御門以南町尻、室町、　烏丸、中御門以北少白　東洞院、　高倉、今云頂妙寺通　萬里小路、今云柳馬場　富小路、今云鉄屋町通、又白山通也、今云富小路、在柳馬場鉄屋町間、京極、今云寺町又京極東有朱雀、已上東京、今五條橋東南有朱雀町

〔宇治拾遺物語 二〕今はむかし、せいとくひじりといふ聖のありけるが、○中略けちえんのために、物まいらせてみんとて、よばせ給ひければ、いみじげなる聖あゆみまいる、○中略さて出て行ほどに、四條の北なる少路にゑどをまる、此しりにぐしたるものしちらしたれば、只墨のやうにくろきゑどを、ひまもなくはる〴〵としちらしたれば、げすなどもきたながりて、その少路を糞の少路とつけたりけるを、帝聞せ給て、その四條の南をば何といふといはせ給ければ、綾の小路となん申と申ければ、さらばこれをば錦の小路といへかし、あまりきたなきかなと仰られけるよりしてぞ、錦の小路とはいひける、

〔大內裏圖考證 一上 都城〕錦小路
諸圖曰、錦小路四丈、京兆圖曰、角坊錦四條、又曰、錦小路、依天喜二年宣旨、改具足小路、爲錦小路、神泉苑所傳圖曰、錦小路、天喜二年改錦小路、元爲屎小路、

〔松の落葉 一〕京のまちのみち大路小路といひ分たる事

一條より九條までのまちのさかひのみちをば、大路といひつるなり、江家次第五の卷、春日祭使途中次第のところに、梨子原在二條大路南といひ、又如一條大路儀といへるを見てしるべし、その條のうちのみち、又北より南へゆくみちをば、小路といひし事にて、同卷列見のところには、宮北ノ路（春日小路也）といひ、同書六の卷、石清水臨時祭のところには、舞人於匣小路西騎馬とあり、今も富ノ小路、錦ノ小路などいふ名のこれり、いにしへはみなしかぞいひけん、さて又ひんがし西北みなみのまちの名をあはせてもいひき、同書五の卷に、於七條大宮官人行除目、又於七條堀川有除目事など見え、大鏡八の卷にも、物見車ども二條大宮のつじにたちかたまりて見るにといへり、さてこの大路と小路とのひろさ、むかしはいたくことなりき、大路のひろさは十丈、小路のひろさは四丈なるよし、延喜式四十二の卷、左京職の京程のところに見えたり、

〔帝王編年記 十二桓武〕延暦十二年正月十五日、始造平安城、〇中略 南北一千七百五十三丈、除大路小路、東西一千五百八十（〇恐脱）十丈、除大路小路、（並計東西両京）

〔延喜式 四十二左右京〕京極

南北一千七百五十三丈

北極（〇北極下、拾芥抄有大路弘十二丈六字）并次四大路、廣各十丈、

宮城南大路十七丈

次六大路各八丈

南極大路十二丈

羅城外二丈（垣基半三尺、犬行七尺、溝廣一丈）

路廣十丈

小路廿六、廣各四丈、
町卅八、各卅丈、
東西一千五百八丈（通計東西兩京）
自朱雀大路中央至東極外畔、七百五十四丈、
朱雀大路半廣十四丈
次一大路十丈
次一大路十二丈
次二大路各八丈
東極大路十（〇十下恐脫二字）丈
小路十二、各四丈、（一路加堀川東西邊各二丈）
町十六、各卅丈、
右京准此
朱雀路廣廿八丈
自垣半至溝邊各一丈八尺（垣基三尺、犬行一丈五尺）
溝廣各五尺
兩溝間廿三丈四尺
大路廣十丈
自垣半至溝邊各八尺（垣基三尺、犬行五尺、）
溝廣各四尺
兩溝間七丈六尺

宮城東西大路廣十二丈

自宮垣牛至隍外畔三丈八尺

自傍町垣牛至溝外畔一丈二尺

隍溝間七丈

大路廣八丈

自垣牛至溝邊各八尺（垣基三尺、犬行五尺、）

溝廣各四尺

兩溝間五丈六尺

小路廣四丈

自垣牛至溝邊各五尺五寸（垣基二尺五寸、犬行三尺、）

溝廣各三尺

兩溝間二丈三尺

宮城四面、自垣牛至隍邊三丈、（垣基三尺五寸、壖地廣二丈六尺五寸、）

宮城南大路廣十七丈（宮垣牛三尺五寸、壖地廣二丈六尺五寸、○宮垣以下十六字恐本文、）

隍廣八尺

南垣牛三尺

犬行五尺

溝廣四尺

隍溝間十二丈

凡町内開小徑者、大路邊町二、（廣一丈五尺、）市人町三、（廣一丈、）自餘町一、（廣一丈五尺、）

凡築垣功程、牓示條坊、莫令違越、(其法見木工式)

〔大内裏圖考證 一上 都城〕東西丈數(〇中略)

按、兵範記云、仁安三年御禊點地曰、京内東行六百九十九丈、是自清涼殿東砌至東京極川西畔丈尺也、據延喜式所謂東京七百五十四丈者、則可爲京内東行二百丈、而曰六百九十九丈、疑後世製矣、

〔江家次第 六 四月〕齋院御禊點地

(頭書)北極幷四大路、北極謂一條大路也、四大路謂土御門、近衞、中御門、大炊御門大路也、町各四十丈、一町長四十丈也、假令一條與正親町之門、四十丈也、小路十二各四丈、縱小路除壬生、大宮、東西洞院、京極大路之外、有十一、但堀河川面四丈、東西邊四丈、故爲十二也、町十六各四十丈、自京極至朱雀十六町也、町面各四十丈也、自御在所至河原打丈尺定方角、今陰陽寮勘申、如大嘗會御禊點地、

〔拾芥抄 中末 京程〕凡左京(限以朱雀中央〇中略)

凡南北一千七百五十三丈(除大路小路、各弘見式文、)定殘卅八町(一町四十一丈)

東西七百五十丈(除大路小路七百五十丈分、)定殘十六町

右京准此　今案、坊門弘仁九年所定、

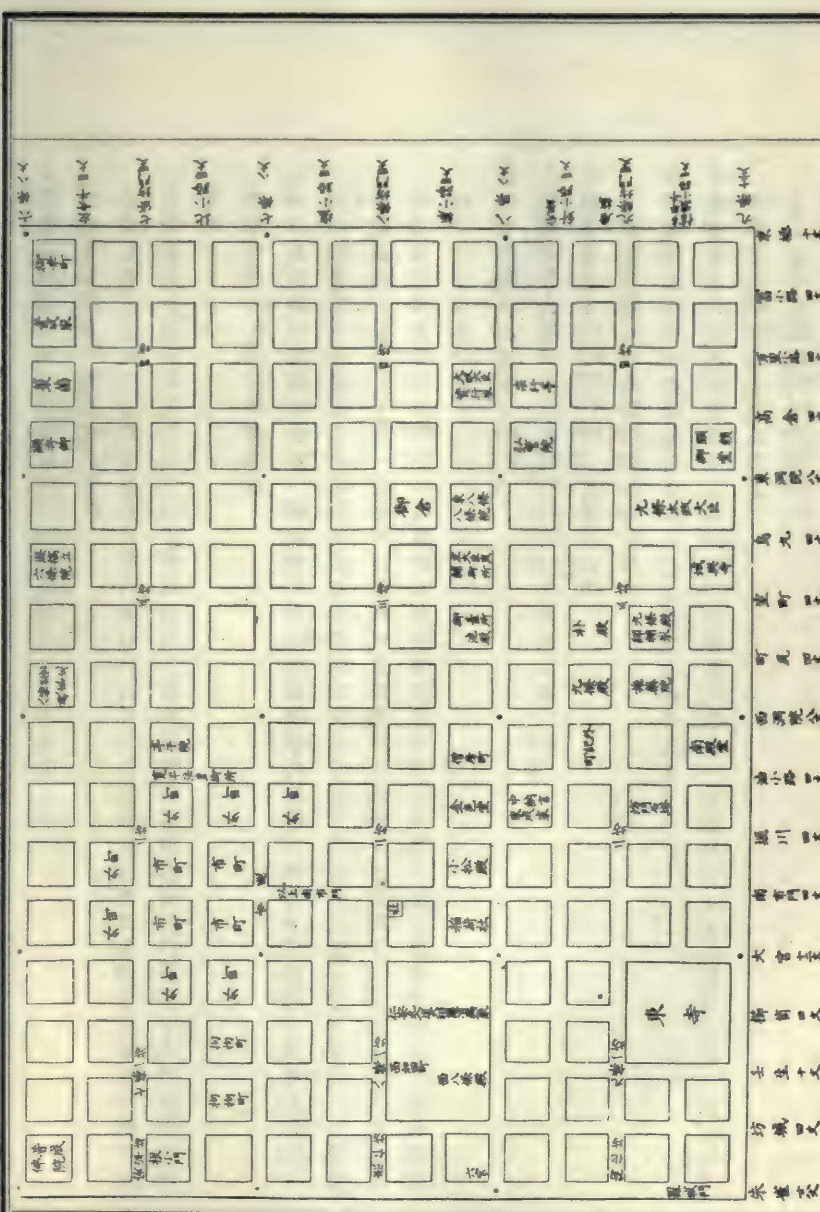
北極次四大路各十丈、宮城南大路十七丈、次六大路各八丈、

南極大路十二丈、羅城門外廿二丈(垣基生三丈)犬行七尺、溝弘一丈、大路弘十丈、小路廿六、各四丈、町卅八、

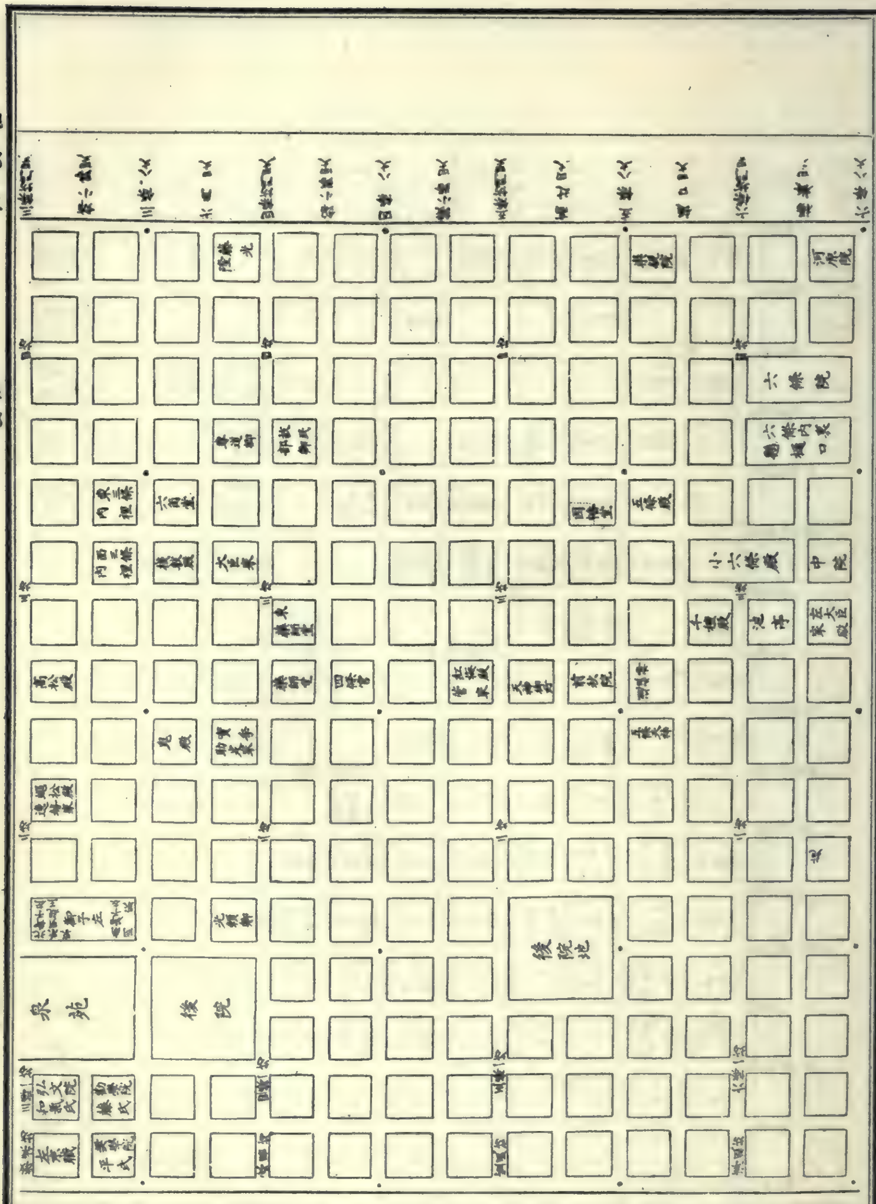
各四十一(〇一恐衍)丈十字、弘二丈、

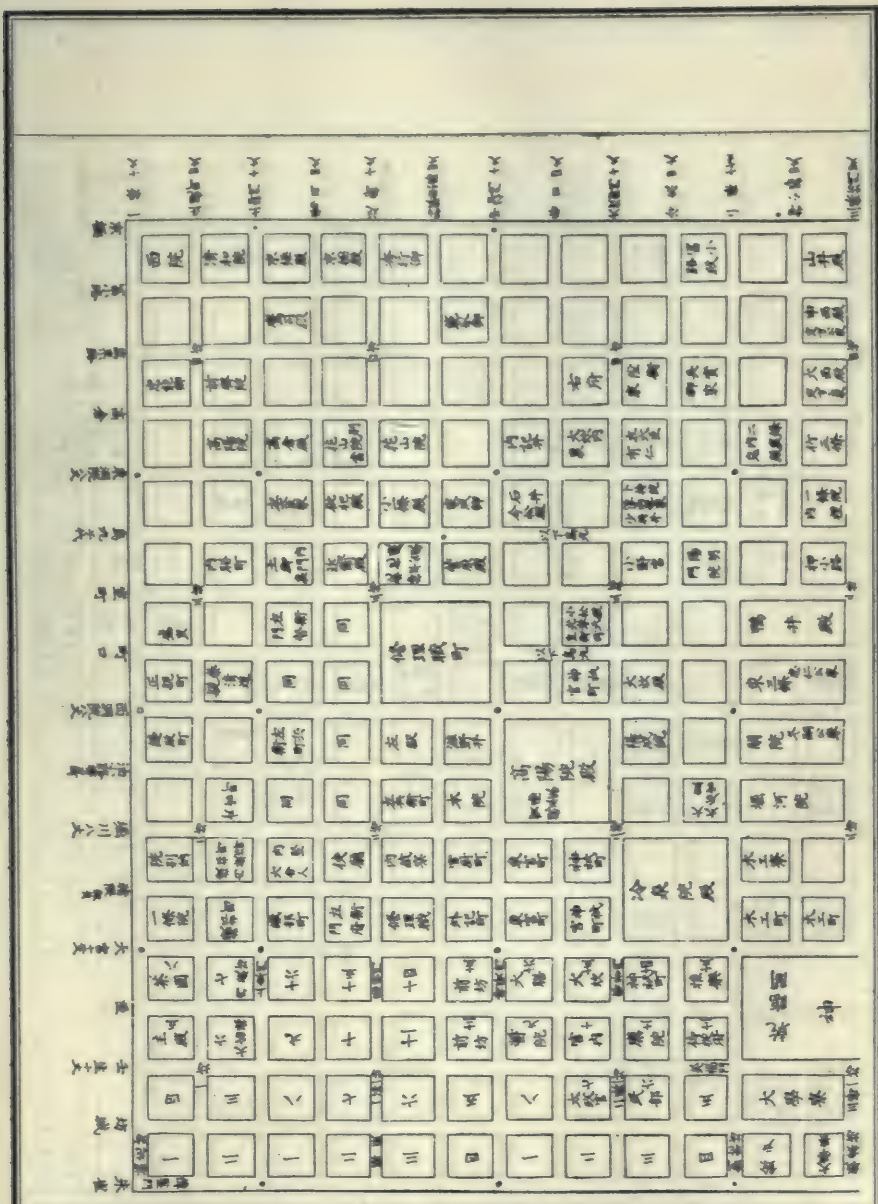
已上十七、大路(立大路四、橫大路十三、〇中略)

一條大路　上東門、陽明門、待賢門、郁芳門等大路、

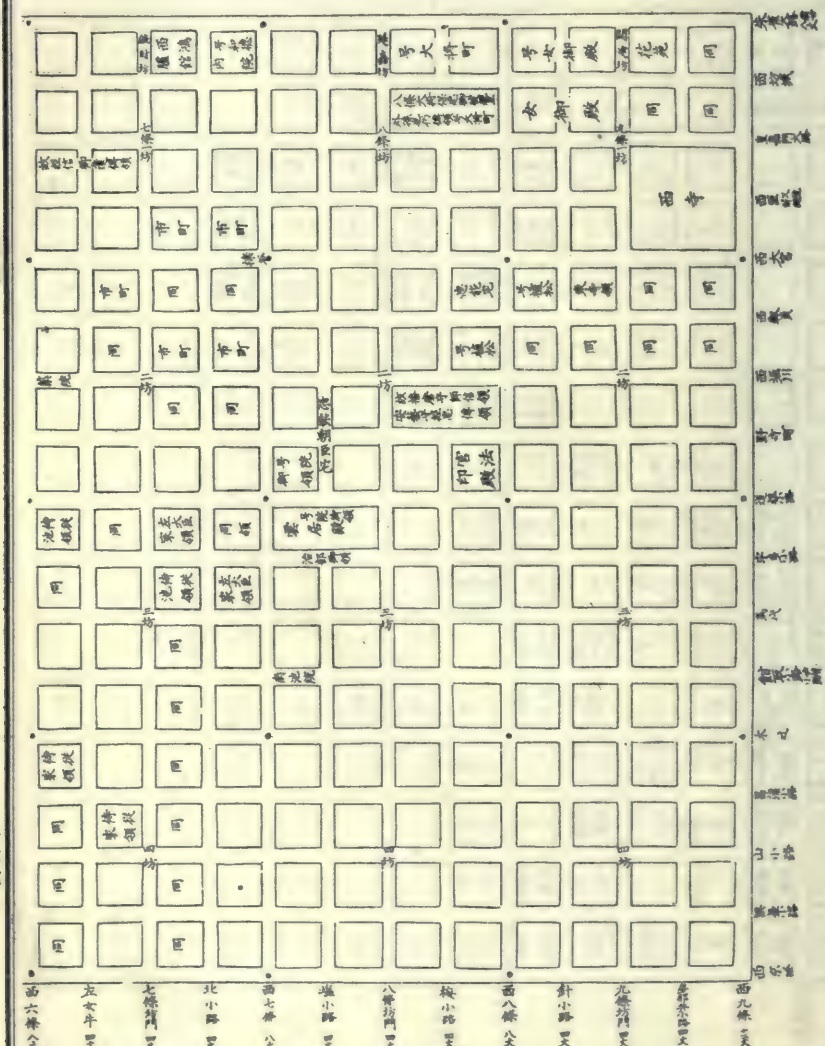


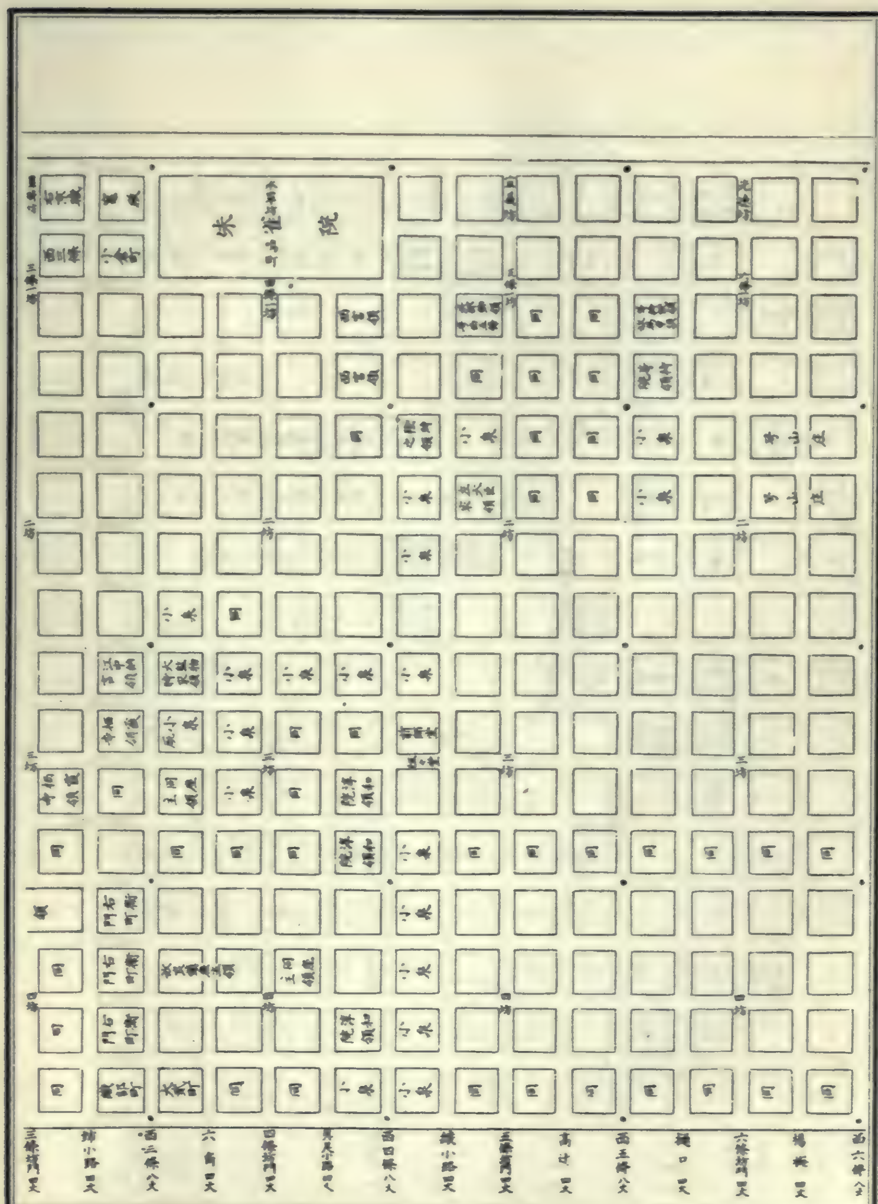
（拾芥抄（中本京程）京城圖　東京

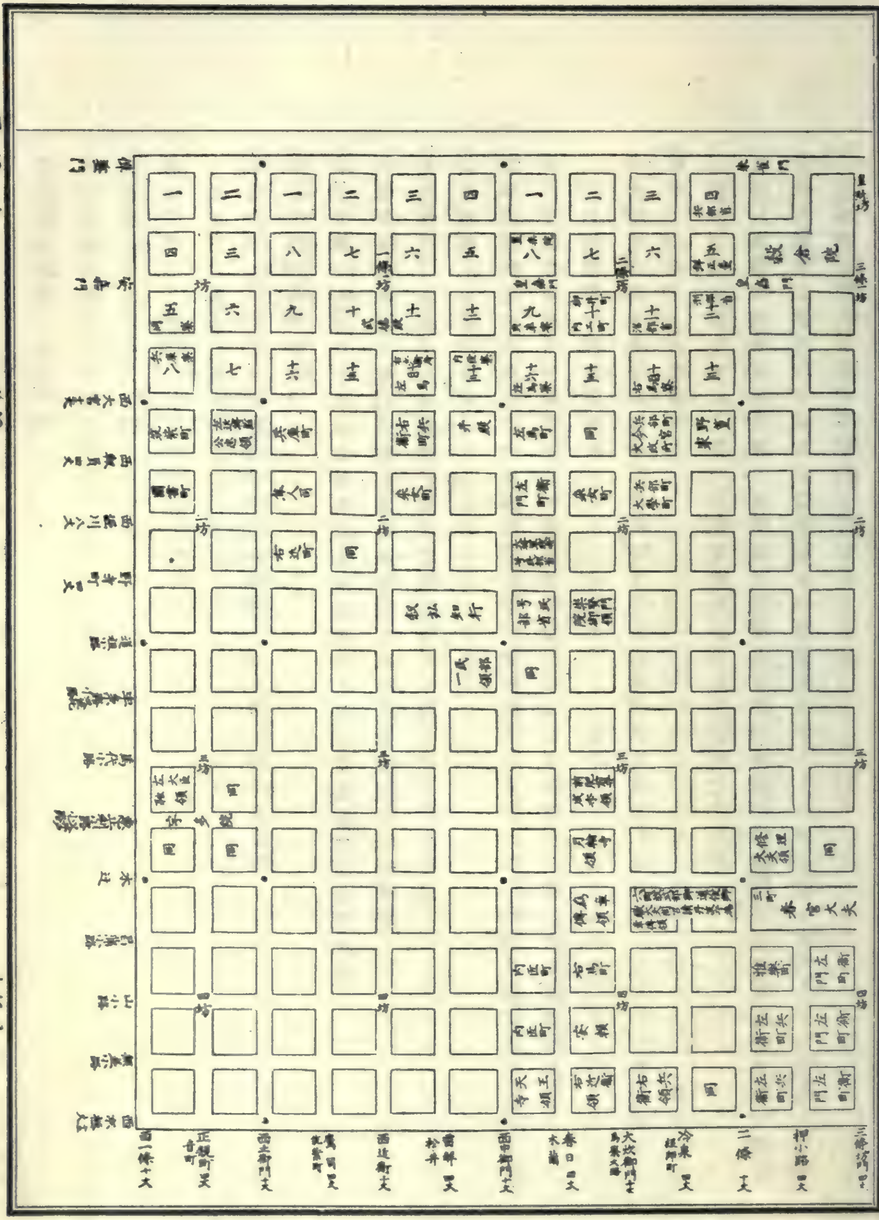

六條院
小六條殿
中院
後院
泉苑
後院地



西京




朱雀院
三條坊門 四丈
姉小路 四丈
西三條 八丈
六角 四丈
四條坊門 四丈
具足小路 四丈
西四條 八丈
綾小路 四丈
五條坊門 四丈
高辻 四丈
西五條 八丈
樋口 四丈
六條坊門 四丈
楊梅 四丈
西六條 八丈



宮城南大路、廣十七丈、二條大路

次六大條、各八丈、　三條　四條　五條　六條　七條　八條等大路

南極大路十二丈二尺九條大路

羅城門外二丈垣基半二尺、溝廣一丈、大行七尺、東西南北知是

小路廿六、廣各四丈、〇下略

〔令義解五宮衞〕凡宮墻四面道內謂、衞垣與宮墻間地、是爲道內也、不得積物、其近宮闕不得燒臭惡物及通哭聲、謂宮闕云宮也、臭惡之類、及哭泣之聲、遠聞之近也、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年二月庚辰、是日始開恭仁京東北道、通近江國甲賀郡、

〔百練抄六崇德〕長承三年三月、近日京中條里、決水爽路、別當顯頼卿之新制也、

〔兵範記〕仁安三年十月五日癸巳、曉頭參殿下、條々奉宣下趣、又申上退出、

仁安三年十月五日宣旨

宮城東西、并朱雀大路至于七條、掃除泥途、殊可令修固、兼又京裏之刑〇刑恐別誤具載式條、今開鑿溝渠、頗往來、侵奪道路、耕作田畝、論之政途、可謂違濫、宜令左右京職檢非違使永加糺斷、從停止者、

藏人頭權右中辨平信範奉

件宣旨奉檢按左大將御返給下官、〇平信範下知官之奉同檢按宣旨、

〔類聚三代格十六〕太政官符

應每坊門置兵士十二人令守朱雀道、并夜行兵衞巡檢兵士直否事、

右得左京職解偁、朱雀者兩京之通道也、左右帶垣、人居相隔、東西分坊、門衞无置、因玆晝爲馬牛之闌閑、夜爲盜賊之淵府、〇中略右大臣宣、依請、右京職准此、

貞觀四年三月八日〇又見三代實錄

〔今昔物語二十七〕冷泉院水精成人形被捕語第五

今昔、陽成院ノ御マシケル所ハ、二條ヨリハ北、西ノ洞院ヨリハ西、大炊ノ御門ヨリハ南、油ノ小路ヨリハ東二町ニナム住セ給ケルニ、院ノ不御サデ後ニハ、其ノ冷泉院ノ小路ヲバ開テ、北ノ町ハ人家共ニ成テ、南ノ町ニゾ池ナド少シ殘テ有ケル、

〔大鏡三太政大臣忠平〕つねに此三人の大臣〇忠平子實頼、師輔、師尹、たちのまいらせ給ふれうに、小一條のみなみかんでのこうぢには、いしだゝみをぞせられたりしが、まだ侍るぞかし、むなかたの明神おはしませば、洞院うしろのつじよりおりさせ給ひしに、あめなどのふる日のれうとぞうけたまはりし、おほかたその一町は人まかりあるかざりき、いまはあやしき物も、うま車にのりつゝみじみじと、あるき侍るはとよ、むかしのならひにいとかたじけなくこそみ給ふれ、

〔今昔物語二十八〕歌讀元輔賀茂祭渡一條大路語第六

今昔、清原ノ元輔ト云フ歌讀有ケリ、其レガ内藏ノ助ニ成テ、賀茂ノ祭ノ使シケルニ、一條ノ大路渡ル程ニ、〇中略此ノ犬路ハ極テ石高シ、亦馬ノ口ヲ張タレバ、歩バムト思フ方ニモ不歩セズシテ此引キ轉ガス、然レバ我ニモ非デ倒レム馬ヲ惡ト可思キニ非ズ、

〔平家物語一〕でんかのゝりあひ

其時の御せつろくは、松殿〇藤原基房にてぞましまし〱ける、東洞院御所より、御さんだい有けり、有(ゆう)はう門より入御有べきにて、東洞院を南へ、大炊のみかどを西へ入御なるに、すけもり朝臣、大炊のみかどゐのくまにて、殿下の出御にはなつきに參會(まいりあふ)、

〔徒然草上〕鳥羽のつくり道は、鳥羽殿たてられて後の號にはあらず、昔よりの名なり、元良親王元日の奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王〇重明親王の記に侍るとかや、

遷都

〔雍州府志 一形勝〕凡自四方入京師有七道、是謂七口、是自古所定之也、於今京師繁華日增月盛、故七口之外、入京師之道有數箇所、人馬之往來不絕跡、所謂七口者、東三條口、伏見口、鳥羽口、七條丹波口、長坂口、鞍馬口、大原口是也、倭俗出入之道謂口、

〔和漢三才圖會 七十二本山城〕都(ミヤコ)中略

凡擇四神相應之地以爲都、神武天皇在日向國宮崎、後移都於和州橿原、是本朝京洛始也、十三代成務天皇遷江州志賀郡、從是或長門、筑前、攝津、河內、山城等諸國有遷都、中大和國彼此最多矣、桓武天皇以和州奈良都遷山城長岡、復遷葛野郡宇多村、號平安城、今之京是也、而以來歷代爲不易之王城、當初有東西兩京、東號洛陽城、西號長安城、

〔源平盛衰記 十六〕遷都附將軍塚附司天臺事

抑神武天皇ハ、天神七代ヲ過、地神五代ノ御末、葺不合尊ノ御讓ヲ受サセ給ツヽ、人代百王ノ始ノ帝ニマシマシヽガ、辛酉歲、日向國宮崎郡ニテ、皇王ノ寶祚ヲ繼給ヘリ、五十九年ト申シ、己未年十月ニ東征シテ、豐葦原中津國ニ留リ御座、近來大和國ト云ハ是也、高市郡畝傍山ヲ點ジテ、帝都ヲ立、橿原ノ地ヲ伐拂テ、宮室ヲ作リ給キ、卽橿原ノ宮トイヘリ、自爾以降、代々ノ帝王、都ヲ移サルヽ事、三十度ニ餘リ、四十度ニ及ベリ、神武天皇ヨリ、景行天皇マデ十二代ハ、大和國所々ニ宮造シテ遷御座キ、景行天皇ノ御宇ニ、大和國纏向日代宮ヨリ、近江國志賀郡ニ被遷、穴穗宮ヲ造リ給、仲哀天皇二年ノ九月ニ、穴穗宮ヨリ、長門國ニ移サレテ、豐浦宮ニ御座ス、神功皇后御宇ニ、大和國十市郡ニ被移テ、稚櫻宮ニ御座、仁德天皇元年ニ、同國輕島豐明宮ヨリ、攝津國難波ニ移サレテ、高津宮ニ住給、履中天皇二年ニ、大和國十市郡ニ歸リ御座、反正天皇元年ニ河內國ヘウツサレテ、柴垣ノ宮ニ御座ス、允恭天皇四十二年ニ、又大和國ヘ歸テ、遠明日香宮ニ御座、安康天皇三年、同國泊瀨朝倉宮ニ御座、其後六代ハ同國所々ニ住給フ、繼體天皇五年ニ山城國筒城ニ移サレテ、十二年其後

乙訓ニ住給フ、宣化天皇元年ニ、猶大和國ヘ歸テ、檜隈廬入野宮ニ御座、欽明天皇ヨリ皇極天皇マデ七代ハ、大和國郡々ニ宮居シテ、他國ヘハ不遷給、孝德天皇大化元年ニ、攝津國長柄ニウツサレテ、豐崎宮ニ御座、齊明天皇二年ニ、又大和國ヘ歸テ、飛鳥岡本ノ宮ニ御座、天智天皇六年、近江國ニ被移テ、志賀郡大津宮ニ住給フ、天武天皇元年ニ、大和國ニ歸テ、岡本宮ニ御座、是ヲ飛鳥ノ淨見原宮ト申、持統天皇ヨリ、光仁天皇マデ、九代ハ猶大和國奈良ノ都ニ住給フ、桓武天皇御宇、延暦三年十月ニ、山城國ニ遷サレテ、長岡宮ニ十年御座ケルガ、此京狹トテ、同十二年正月ニ、大納言藤原小黑丸、參議左大辨紀古作美、大僧都賢璟等ヲ遣シテ、當國ノ中、葛野郡宇太村ヲ見セラル、三人共ニ奏シテ申、此地ハ左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、一モ闕ケズ、四神相應ノ靈地也ト、依之愛宕郡ニ御座、賀茂大明神ニ被告申、同十三年、長岡京ヨリ此平安城ヘ遷給テ以來、都ヲ他所ヘ遷サレズ、帝王三十二代星霜四百餘歳ナリ、昔ヨリ多ノ都アリケレ共、此京程ニ地景目出タク、王業久カルベキ所ナシトテ遷サレタリ、末代マデモ此京ヲ他所ヘ遷サレヌ事ヤ有ベキトテ、大臣公卿賢者才人諸道ノ博士等ヲ召集ラレテ僉議アリ、長久ナルベキ樣トテ、土ニテ八尺ノ人形ヲ造リ、鐵ノ甲冑ヲ著セ、弓矢持セテ、帝自土ノ人形ニ向祝申サセ給ケルハ、必此京ノ守護神トナリ給ヘ、若未來ニ此都ヲ他所ヘ移ス事アラバ、堅ク王城ヲ守リ、其人ヲ罰セヨト宣命ヲ含ラレテ後、東山ノ峯ニ深一丈餘ノ穴ヲ掘テ、西向ニ立テ埋マレケリ、將軍塚トテ今ニアリ、○中略福原ト云ハ、平安城ノ西也、今年大將軍在酉、方角既ニ塞レリ、イカヾ有ベキト申人アリケレバ、陰陽博士安倍季弘ニ仰テ、勘文ヲ被召ケル、勘狀ニ云、本條云、大將軍王相不論遠近、同可忌避諸事、然而至于遷都者、先例不避之歟、桓武天皇、延暦十三年十月廿一日ニ、自長岡京遷都於葛野京、今年、大將軍爲北之分、當王相方、然者就延暦之佳例案之、雖爲大將軍之方、何可有其憚哉トゾ申タル、聞之人々舌ヲ振テ申ケルハ、延暦ノ遷都ニ御方違アリキ、但永ク此城ヲ捨ラレンニハ、強ニ方角ノ禁忌ノ不可及沙汰、勘文ヲ召

建議

ル、ナラバ、何樣ニモ可有御方違ゾ、季弘ガ勘狀儒倣ノ中狀歟、情案事情、略○中去バ季弘モ入道ノ無道ノ政ニ恐ツヽ、方角ノ禁忌ヲモ不申ケルニヤトゾ、人唇ヲ返ケル、

〔日本書紀 孝德 二十五〕白雉四年、是歲、皇太子天智○奏請曰、冀欲遷于倭京、天皇不許焉、皇太子乃奉皇祖母尊間人皇后、幷率皇弟等、往居于倭飛鳥河邊行宮、于時公卿大夫、百官人等、皆隨而遷、由是天皇恨欲捨國位、令造宮於山碕、

〔續日本紀 桓武 三十八〕延曆四年九月丙辰、車駕至自平城、捕獲大伴繼人、同竹良等黨與數十人、推鞫之、並皆承伏、依法推斷、或斬或流、其種繼略○中初首建議、遷都長岡、宮室草創、百官未就、匠手役夫、日夜兼作、至於行幸平城、太子、及右大臣藤原朝臣是公、中納言種繼等、並爲留守、照炬催撿、燭下被傷、明日薨於第、略○下

〔日本後紀 桓武 八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、略○中長岡新都、經十載未成功、費不可勝計、清麻呂潛奏、令上託遊獵、相葛野地、更遷上都、

〔宇內混同秘策〕宇內混同大論

凡四海ヲ治ルニハ、先ヅ王都ヲ建テズンバアル可ラズ、王都ハ天下ノ根本ナルヲ以テ、形勝第一ノ地ヲ撰ブベシ、浪華ハ四海ノ樞軸ニシテ、萬物輻湊ノ要津ナリ、然レドモ分內狹ク人民極テ多ク、土地ヨリ生ズル所ノ米穀、或ハ居民ノ食フニ足ラズ、故ニ此地ニ大都ヲ建テ皇居ト爲スハ深ク慮ルベキ所アリ、然レバ王都ヲ建フベキノ地ハ、江戶ニ如クモノアルコトナシ、關東ハ土地廣平ニシテ沃野千里、且相模、武藏、安房、上總、下總ノ五州ヲ以テ內洋ヲ包ミ、斗禰、秩部、鬼奴、多麻ノ四大河、內洋ニ注グヲ以テ、水路能ク通流シ、百穀百菓其他諸國ノ產物運送甚便ナリ、萬貨豐饒人民飢饉ノ患アルコト鮮ク、殊ニ峩々タル崇山三方ヲ圍繞シ、以テ他鎭ト境界ヲ分チ、只東方一面大洋ニ濱シ、進デハ以テ他國ヲ制スベク、退テハ以テ自ラ守ルニ餘リアリ、郊野

曠漠ニシテ馬強健ニ、民人ハ衆多ニシテ勇壯、實ニ其形勢天下ニ雄タリ、凡ソ重ニ居テ輕ヲ馭シ、強ヲ以テ弱ヲ征スル、永靜ノ基礎ヲ立ルニ宜シ、故ニ王都ヲ建ルノ地ハ、江戸ヲ以テ天下第一トス、王都ヲ此地ニ定テ永ク移動スルコト無ルベシ、浪華モ亦天然ノ大都會ナレバ、之ヲ西京トシテ別都ニ爲スベシ、〇中略

文政六癸未年四月十一日　　松菴　佐藤信淵

〔續日本紀三文武〕慶雲四年正月戊子、詔諸王臣五位已上、議遷都事也、

〔玉海〕治承四年十一月五日癸丑、傳聞、前將軍宗盛可有遷都之由、示禪門云々、不承引之間、及口論、人以驚耳云々、

〔源平盛衰記二十四〕都返僉議事

十一月〇治承四年廿日、太政入道雲客卿相ヲ被催テ、山門ノ奏狀ニ付テ、僉議有ベキトテ、披露之次ニ問給ケルハ、抑遷都事、山門度々奏聞ニ及、縱衆徒イカニ申共、地形ノ勝劣、諸卿ノ人望ニ依ベシ、舊都ト新都ト得失甲乙、各無餙舫評定有ベシト宣フ、〇中略勸修寺宰相宗房卿ハ、公卿ノ末座ニオハシケルガ、都還ノ御事ハ、山門ノ奏狀ニ、道理至極セリ、爭カ不被垂叡信、目出カリシ都ゾカシ、王城鎭守ノ社々ハ、四方ニ光ヲ和ゲ、靈驗殊勝ノ寺々ハ、上下ニ居ヲ占給ヘリ、延暦圓城ノ法水ハ、本ノ都ニ波淸、東大興福ノ惠燈モ、舊ニシ京ニ光ヲ益、四神相應ノ帝都也、數代自愛ノ花洛也、五畿七道ニ便アリ、百姓萬民モ煩ナシ、勝劣雲泥ヲ隔テ、舊新、水火ヲ論ズ、早速ニ都還有ベキニヤト申タリケレバ、新都ヲ嘆タリケル諸卿、苦々シク思ハレケル上ニ、入道座ヲ立、障子ヲハタト立テ、內ニ入給ニケリ、サシモ執シ思給ヒツル都ヲ、無代ニ申ツル者哉、入道ノ腹立アラハ也、宗房卿イカナル目ニカ、アハンズラント、各舌ヲ卷テ、怖恐ケル程ニ、十一月廿一日ノ朝儀ニ都遷有ベシトテ廻文アリ、公卿モ殿上人モ上下ノ北面、賤ノ女、賤ノ男ニ至ルマデ、手ヲスリ、額ヲツキテ悅合ヘリ、山門

ノ訴訟ハ、昔モ今モ、大事モ小事モ不空、イカナル非法非例ナレ共、聖代明時必ズ御理アリ、況此程ノ道理、入道イカニ横紙ヲ破給フトテモ、爭カ靡キ給ハザルベキナレバ、山門ノ奏狀ニヨリ、宗房ノ言ニ付テ、其事既ニ一定也、古鄉ニ殘留テ、サビシサヲ歎ケル輩モ、是ヲ聞テハ、アナ目出ノ山門ノ御事ヤトテ、首ヲ傾掌ヲ合ワ、叡山ニ向テゾ、拜ミ悅ナドシケル、

兩院主上還御事

サテモ都還ノ後、宗房卿ノ一門會合ノ次ニ、抑入道ノサシモ執シ思ヒ給ヘル福原ノ都也、諸人皆新都ヲホメシニ、宰相殿ハ、何心オハシテカ、只一人誘給ケルゾト問ケレバ、宗房卿宣ケルハ、君モ臣モ諸事ニ於テ、思立時ハ、心ヲユルシテ人ニ不問、思煩フ事ニハ必人ニ問合ス、サレバ入道ノ心ノハヤル儘ニ、都遷トテ下給、タレ共、人ノ歎モ多テ、サスガ故鄉ニハ及バズ、栖侘給タル折節、山門ノ訴訟アリ、人ノイヘカシ都歸セント思フ心ノ内アラバ也ト推量テ、角ハ申タリトゾイハレケル、ユヽシクカシコクゾ、思申給タリケル、

〔續古事談 臣節 二〕六波羅ノ太政入道、福原ノ京タテヽミナワタリキテ後、コトノ外ニホドヘテ、古京ト新京トイヅレカマサレルト云サダメヲセントテ、古京ニノコリ居タル、サモアル人ドモミナヨビクダシケルニ、人ミナ入道ノ心ヲオソレテ、思バカリモイヒヒラカザリケリ、長方卿ヒトリスコシモ所ヲヲカズ、コノ京ヲソシリテコトバモヲシマズ散々ニ云ケリ、略○中サテモトノ京ノヨキヤウヲ云テツイニソノ日ノ事、彼人ノサダメニヨリテ、古京ヘカヘルベキ儀ニナリニケリ、後ニ其座ニアリケル上達部ノ長方卿ニアヒテ、サテモアサマシカリシ事カナ、サバカリノ惡人ノイミジト思テタテタル京ヲ、サホドニハイカニイハレシゾ、イヒヲモムケテ歸京ノ儀アレバコソアレ、イフカヒナクハラタチナバ、イカヾシ給ハント云ケレバ、此事我思ニハサル儀ナリ、入道ノ心ニカナハムトテコソ、サハ云シカ、略○中カノ京コトノホカニキツキテノチ、南京ノサダメ

ヲオコナヒシカバ、ハヤコノ事クヤシウナリニケリトイフ事ヲシリニキ、〇中略梅小路中納言ノ兩京ノサダメトテ、其時ノ人ノ口ニアリケリ、

下問遷都之可否

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年正月庚戌、任裝束次第司、爲幸難波宮也、　閏正月乙丑朔、詔喚會百官於朝堂、問曰、恭仁難波二京、何定爲都、各言其志、於是陳恭仁京便宜者、五位已上二十三人、六位已下百五十七人、陳難波京便宜者、五位已上二十三人、六位已下一百三十人、　戊辰、遣從三位巨勢朝臣奈氏麻呂、從四位上藤原朝臣仲麻呂、就市問定京之事、市人皆願以恭仁京爲都、但有願難波者一人、願平城者一人、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年五月己未、是日太政官召諸司官人等問、以何處爲京、皆言可都平城、　庚申、遣造宮輔從四位下秦公島麻呂、令掃除恭仁宮、　辛酉、遣大膳大夫正四位下栗栖王於平城藥師寺、請集四大寺衆僧問、以何處爲京、僉曰、可以平城爲都、

遷都例

〔日本書紀四綏靖〕元年正月己卯、神渟名川耳〇耳原脫、據一本補、尊、卽天皇位、都葛城、是謂高丘宮、

〔古事記中綏靖〕神沼河耳命、坐葛城高岡宮、治天下也、

〔日本書紀四安寧〕二年、遷都於片鹽、是謂浮孔宮、

〔古事記中安寧〕師木津日子玉手見命、坐片鹽浮穴宮、治天下也、

〔古事記傳二十一〕凡て書紀に、遷都とあるは、たゞ漢籍にならひて、記されたるものにして、實は後世の如く引遷されたるには非ず、上代に御代ごとに、都のかはれるは、大方上代には、皇子たちも御父天皇と、同大宮には住坐ずて、多くは別地に住坐りしかば、御父天皇崩坐て、皇太子天津日嗣所知めせば、其元より住坐る鄕、卽都となれりしなり、されば諸臣連たちなども、多くは各其本鄕に住めりしかば、都城と云ても、後世の如く、こよなく大きになどはあらざりしかば、何地にまれ、元來住坐る宮ながらに、天下知しゝなり、

〔日本書紀懿徳四〕二年正月戊寅、遷都於輕地、是謂曲峡宮、

〔古事記懿徳中〕大倭日子鉏友命、坐輕之境岡宮、治天下也、

〔日本書紀孝昭四〕元年七月、遷都於掖上、是謂池心宮、

〔古事記孝昭中〕御眞津日子訶惠志泥命、坐葛城掖上宮、治天下也、

〔日本書紀孝安四〕二年十月、遷都於室地、是謂秋津島宮、〇又見古事記

〔日本書紀孝靈四〕百二年〇孝安天皇十二月丙寅、皇太子遷都於黒田、是謂廬戸宮、〇又見古事記

〔日本書紀孝元四〕四年三月甲午、遷都於輕地、是謂境原宮、〇又見古事記

〔日本書紀開化四〕元年十月戊申、遷都于春日之地、春日此云箇酒鵝是謂率川宮、率川此云伊社箇波〇又見古事記

〔日本書紀崇神五〕三年九月、遷都於磯城、是謂瑞籬宮、〇又見古事記

〔日本書紀垂仁六〕二年十月、更都於纒向、是謂珠城宮也、

〔古事記垂仁中〕伊久米伊理毘古伊佐知命、坐師木玉垣宮、治天下也、

〔日本書紀景行七〕四年十一月庚辰朔、乘輿自美濃還、則更都於纒向、是謂日代宮、〇又見古事記

〔古事記成務中〕若帶日子天皇、坐近淡海之志賀高穴穗宮、治天下也、

〔神皇正統記成務〕辛未の年即位、近江の志賀の高穴穗の宮にまします、神武より十二代は大倭の國にまし〳〵き、景行天皇の末つかた、此高穴穗にましまししかども、さだまれる皇都にはあらじ、

〔日本書紀仲哀八〕二年九月、興宮室于穴門而居之、是謂穴門豐浦宮、

〔古事記仲哀中〕帶中日子天皇、坐穴門之豐浦宮、及筑紫訶志比宮、治天下也、

〔古事記傳三十〕訶志比宮は、和名抄に、筑前國糟屋郡香椎加須比郷、此地なり、志を須と云るは、後の訛なるべし、凡て椎と書き、又書紀にも橿日と書れたり、加志比なること決し、

〔日本書紀神功九〕三年正月戊子、立譽田別皇子、爲皇太子、因以都於磐余、是謂若櫻宮、

〔古事記中應神〕品陀和氣命、坐輕島之明宮、治天下也、

〔日本書紀十一仁德〕元年正月、○中略都難波、是謂高津宮、○又見古事記、

〔日本書紀十二履中〕二年十月、都於磐余、

〔古事記下履中〕伊邪本和氣命、坐伊波禮之若櫻宮、治天下也、

〔日本書紀十二反正〕元年十月、都於河內丹比、是謂柴籬宮、○又見古事記、

〔古事記下允恭〕男淺津間若子宿禰命、坐遠飛鳥宮、治天下也、

〔日本書紀十三安康〕四十二年○允恭十二月壬午、穴穗皇子○安康卽天皇位、尊皇后曰皇太后、則遷都于石上、是謂穴穗宮、○又見古事記、

〔日本書紀十四雄略〕三年○安康十一月甲子、天皇命有司、設壇於泊瀨朝倉、卽天皇位、遂定宮焉、

〔古事記下雄略〕大長谷若建命、坐長谷朝倉宮、治天下也、

〔日本書紀十五清寧〕元年正月壬子、命有司、設壇場於磐余甕栗、陟天皇位、遂定宮焉、

〔古事記下清寧〕白髮大倭根子命、坐伊波禮之甕栗宮、治天下也、

〔日本書紀十五顯宗〕五年○清寧正月、白髮天皇○清寧崩、是月、皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是天皇姊飯豐青皇女、於忍海角刺宮、臨朝秉政、自稱忍海飯豐青尊、當世詞人歌曰、野麻登陛爾、瀰我保指母能婆、於尸農瀰能、莒能拖智紀儺屢、都奴婆之能瀰野、

〔古事記下清寧〕天皇崩後、無可治天下之王也、於是問日繼所知之王、市邊忍齒別王之妹、忍海郎女、亦名飯豐王、坐葛城忍海之高木角刺宮也、

〔古事記傳四十三〕此皇女の此宮に坐ことを云るは、此時天津日嗣所知看べき王を尋求むるに、すべて男王は在坐ずて、唯此女王一柱のみ世に存坐るよしにて、又殊に其宮をしも擧云ることは、此宮に坐々て、暫く天下所知看つる意を含めたる文なり、抑此時此姬尊を除奉りては、王

坐ざれば、天下の臣連八十伴緒、おのづから君と戴き仰ぎ奉りけむ、

〔日本書紀 十五顯宗〕元年正月己巳朔、大臣大連等奏言、○中略制曰、可、乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮、卽天皇位、

〔古事記 下顯宗〕袁祁之石巣別命、坐近飛鳥宮、治天下也、

〔日本書紀 十五仁賢〕元年正月乙酉、皇太子於石上廣高宮、卽天皇位、○又見古事記

〔日本書紀 十六武烈〕十一年○仁賢十二月、於是太子命有司、設壇場於泊瀬列城、陟天皇位、遂定都焉、○又見古事記

〔日本書紀 十七繼體〕五年十月、遷都山背筒城、

〔日本書紀通證 二十二繼體〕筒城、筒一作綴、倭名鈔山城國綴喜郡綴喜、豆木、自多々羅村至水取村、地名猶存、

〔日本書紀 十七繼體〕十二年三月甲子、遷都弟國、

〔日本書紀通證 二十二繼體〕弟國、乙訓郡也、連亘上羽井內及上植野等、有地名西京、白井村有地名御垣本、

〔日本書紀 十七繼體〕二十年九月乙酉、遷都磐余玉穗、一本云、七年也、○又見古事記

〔日本書紀 十八安閑〕元年正月、遷都于大倭國勾金橋、因爲宮號、○又見古事記

〔日本書紀 十八宣化〕元年正月、遷都于檜隈廬入野、因爲宮號也、○又見古事記

〔日本書紀 十九欽明〕元年七月己丑、遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島金刺宮、

〔古事記 下欽明〕天國押波流岐廣庭天皇、坐師木島大宮、治天下也、

〔日本書紀 二十敏達〕元年四月、是月、宮于百濟大井、　四年、是歲、命卜者、占海部王家地、與絲井王家地、卜便襲吉、遂營宮於譯語田、是謂幸玉宮、

〔日本書紀 二十一用明〕十四年○敏達九月戊午、天皇○用明卽天皇位、館於磐余、名曰池邊雙槻宮、

〔日本書紀 二十一崇峻〕二年○用明八月、是月、宮於倉梯、

〔古事記 下崇峻〕長谷部若雀天皇、坐倉椅柴垣宮、治天下肆歲、

〔日本書紀推古二十二〕十一年十月壬申、遷于小墾田宮、〈○又見古事記〉

〔日本書紀舒明二十三〕二年十月癸卯、天皇遷於飛鳥岡傍、是謂岡本宮、　八年六月、災岡本宮、天皇遷居田中宮、　十二年十月、是月、徙於百濟宮、

〔日本書紀皇極二十四〕元年十二月壬寅、是日天皇遷移於小墾田宮、〈或本云、遷於東宮南庭之權宮、〉　二年四月丁未、自權宮移幸飛鳥板蓋新宮、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年十二月癸卯、天皇遷都難波長柄豐碕、老人等相謂之曰、自春至夏鼠向難波、遷都之兆也、

白雉五年十二月己酉、是日皇太子奉皇祖母尊、遷居倭河邊行宮、老者語之曰、鼠向倭都、遷都之兆也、

〔日本書紀齊明二十六〕元年十月己酉、於小墾田、造起宮闕、擬將瓦覆、又於深山廣谷、擬造宮殿之材、朽爛者多、遂止弗作、是冬、災飛鳥板蓋宮、故遷居飛鳥川原宮、　二年、是歲、於飛鳥岡本、更定宮地、時高麗、百濟、新羅、並遣使進調、爲張紺幕於此宮地而饗焉、遂起宮室、天皇乃遷、號曰後飛鳥岡本宮、於田身嶺冠以周垣、〈田身山名、此云大務、〉復於嶺上兩槻樹邊起觀、號爲兩槻宮、亦曰天宮、時好興事、迺使水工穿渠、自香山西、至石上山、以舟二百隻、載石上山石、順流控引、於宮東山、累石爲垣、時人謗曰、狂心渠、〈○中略〉宮材爛矣、山椒埋矣、又謗曰、作石上丘、隨作自破、〈若據未成之時、作此謗乎、〉又作吉野宮、〈○中略〉災岡本宮、

〔日本書紀天智二十七〕六年三月乙卯、遷都于近江、是時天下百姓、不願遷都、諷諫者多、童謠亦衆、日々夜々、失火處多、

〔日本書紀天武二十八〕元年、是歲、營宮室於嵩本宮南、卽冬遷以居焉、是謂飛鳥淨御原宮、

〔日本書紀持統三十〕八年十二月乙卯、遷居藤原宮、

〔萬葉集雜歌一〕藤原宮之役民作歌〈○歌略〉

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸藤原宮地、八年甲午春正月、幸藤原宮、冬十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮、

從明日香宮遷居藤原宮之後、志貴皇子御作歌、

婇女乃、袖吹反、明日香風、京都乎遠見、無用爾布久、

〔萬葉集略解 一〕此宮○藤原は持統天皇八年十二月、淸御原宮よりこゝに遷給ふ、○中略宮の所は十市郡○大和にて、香山耳梨畝火三山の眞中也、

〔續日本紀 五元明〕和銅三年三月辛酉、始遷都于平城、以左大臣正二位石上朝臣麿爲留守、

〔萬葉集 一雜歌〕和銅三年庚戌春二月、從藤原宮遷于寧樂宮時、御輿停長屋原、迥望古鄕御作歌、一書云、太上天皇御製○持統

飛鳥、明日香能里乎、置而伊奈婆、君之當者、不所見香聞安良武、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十二月戊午、是日右大臣橘宿禰諸兄、在前而發、經略山背國相樂郡恭仁鄕、以擬遷都故也、　丁卯、皇帝在前幸恭仁宮、始作京都矣、太上天皇皇后在後而至、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年正月癸未朔、天皇始御恭仁宮受朝、宮垣未就、繞以帷帳、

〔萬葉集 十七〕讚三香原新都歌一首并短歌

山背乃、久爾能美夜古波、春佐禮播、花咲乎々理、秋佐禮婆、黃葉爾保比、於婆勢流、泉河乃、可美都瀨爾、宇知橋和多之、余登瀨爾波、宇枳橋和多之、安里我欲比、都可倍麻都良武、萬代麻底爾、

反歌

楯並而、伊豆美乃河波乃、水緖多要受、都可倍麻都良牟、大宮所、

〔萬葉集 六雜歌〕讚久邇新京歌二首并短歌

明津神、吾皇之、天下、八島之中爾、國者霜、多雖有、里者霜、澤爾雖有、山並之、宜國跡、川次之、立合鄕跡、山

代乃、鹿脊山際爾、宮柱、太敷奉、高知爲、布當乃宮者、河近見、湍音叙清、山近見、鳥賀鳴慟、秋去者、山裳動響爾、左男鹿者、妻呼令響、春去者、岡邊裳繁爾、巖者、花開乎呼理、痛何怜、布當乃原、甚貴、大宮處、諾己曾、吾大王者、君之隨、所聞賜而、刺竹乃、大宮此跡、定異等霜、

反歌二首

三日原、布當乃野邊、清見社、大宮處、定異等霜、

山高來、川乃湍清石、百世左右、神之味將往、大宮所、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年二月甲寅、運恭仁宮高御座幷大楯於難波宮、　戊午、取三島路、行幸紫香樂宮、太上天皇、及左大臣橘宿禰諸兄、留在難波宮焉、　庚申、左大臣宣勅云、今以難波宮定爲皇都、宜知此城京戸百姓任意往來、　三月甲戌、石上、榎井二氏樹大楯槍於難波宮中外門、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年正月己未朔、廢朝、乍遷新京、○紫香樂宮伐山開地以造宮室、垣牆未成、繞以帷帳、令兵部卿從四位上大伴宿禰牛養、衞門督從四位下佐伯宿禰常人樹大楯槍、　五月壬戌、是日車駕還恭仁宮、　癸亥、車駕到恭仁京泉橋、于時百姓遙望車駕、拜謁道左、共稱萬歲、是日到恭仁宮、　五月戊辰、是日行幸平城、　六月庚子、是日樹宮門之大楯、

〔續日本紀考證六聖武〕中島氏曰、樹宮門大楯者、是乃以平城定爲皇都也、蓋天皇向以難波爲都、然居不幾、又造甲賀宮而樹之楯、則又似已廢難波矣、於是乎聽于輿論以還平城、然猶書曰幸平城、而他無復以平城爲都之文、雖則無文而下文書曰幸難波、則知其以平城定都焉、

〔續日本紀二十淳仁三〕天平寶字五年正月癸巳、詔曰、依有大史局奏事、暫移而御小治田岡本宮、

〔一代要記五淳仁〕天平寶字二年八月十八日、受禪、同日、於大極殿卽位、○中略都平城宮、甘樫宮、

○按ズルニ、甘樫宮ノ所在詳ナラズ、疑ラクハ小治田宮ノ別名ナランカ、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年十月壬戌、內舍人御方廣名等三人賜姓御方宿禰、又賜大師稻一百

萬東、○中略以遷都保良也、甲子、行幸保良宮、己卯、詔曰、爲改作平城宮、暫移而御近江國保良宮、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年三月甲辰、保良宮諸殿及屋垣、分配諸國、一時就功、五月辛丑、高野天皇與帝有隙、於是車駕還平城宮、帝御于中宮院、高野天皇御于法華寺、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月辛亥、進幸由義宮、甲子、詔以由義宮爲西京、河內國爲河內職、

〔扶桑略記拔萃桓武〕天應元年四月三日辛卯生、年四十五踐祚、都大和國平城宮、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年五月丙戌、勅遣中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂○中略等於山背國、相乙訓郡長岡村之地、爲遷都也、六月己酉、以中納言從三位藤原朝臣種繼○中略等、爲造長岡宮使、六位官八人、於是經始都城、營作宮殿、十一月戊申、移幸長岡宮、

〔三代實錄九淸和〕貞觀六年十一月七日庚寅、先是大和國言、○中略和銅三年遷自古京、都於平城、○中略延曆七年遷都長岡、○下略

〔賀茂皇大神宮記〕人皇五十代のみかどをば、桓武天皇とも申、またかしは原の天皇とも申ける、○中略延曆十三年十月廿一日に、長岡の京より今の京平安城にうつされけり、

〔日本紀略桓武〕延曆十三年十月廿八日、遷都、詔曰云々、葛野乃大宮地者、山川毛麗久四方國乃百姓乃參出來事毛便之氐云々、十一月丁丑、詔曰云々、○中略子來之民、謳歌之輩、異口同辭、號曰平安京、

〔類聚國史二十五帝王〕大同四年十一月丁未、遣右近衞中將從四位下藤原朝臣眞夏、左馬頭從四位下藤原朝臣眞雄、左少辨從五位上田口朝臣息繼、左近衞少將從五位下藤原朝臣眞本等、於攝津國豐島爲奈等野、及平城舊都、占太上天皇○平城宮地、甲寅、遣右兵衞督從四位上藤原朝臣仲成、左少辨從五位上田口朝臣息繼等、造平城宮、十二月乙亥、太上天皇取水路、駕雙船、幸平城、于時宮殿未成、權御故右大臣大中臣朝臣淸麻呂家、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月癸卯、依太上天皇○平城命、擬遷都於平城、正三位坂上大宿禰田村麻呂、

從四位下藤原朝臣冬嗣、從四位下紀朝臣田上等爲造宮使、丁未、緣遷都事、人心騷動、（○中略）詔曰、（○中略）尙侍正三位藤原朝臣藥子者、（○中略）又萬代宮（止）定賜（之）平安京（乎毛）、棄賜（比）停賜（氐）之平城古京（爾）遷（左牟止）奏勸（氐）天下（乎）擾亂、百姓（乎）亡弊、（○下略）

〔玉海〕治承四年八月四日甲申、未刻、大外記賴業來、（○中略）召簾前、問世間事等、申云、（○中略）又云、嵯峨隱君子算道命期勘文、不可改平安宮之由、有所見、貞觀之比、依大極殿炎上、時人可有遷都之由謳歌、且是古昔之例、大途經八十年、有遷都、延曆以後及八十年、疑其期至歟云々、隱君子聞之云、桓武聖主鑒此地久可爲帝都之故、新所營給也、東有嚴神、（謂賀茂）西有猛靈、（謂松尾）南開北塞、又見地宜足可爲帝都、永代不可變易之趣、具被勘錄了、且是非算術之所及、以人意不可測、天之令然之地也云々、而今有遷都之儀、我朝若有運者、此事不可遂、我朝若可盡者、此事可成就歟、國之安否只在此事、遂可見歟云々、

〔玉海〕治承四年六月二日癸未、卯刻、行幸於入道相國（○平清盛）福原別業、法皇（○後白河）上皇（○高倉）同以渡御城外之行宮、往古雖有其例、延曆以後、都無此儀、誠可謂希代之勝事歟、敢無知由緖之人、疑可被攻南都大衆（興福寺、延曆寺、）歟、（大衆蜂起、敢無和平云々、）之間、可有不虞之恐歟、又餘黨猶不休、爲禦彼怖畏歟、云彼云是、不可及洛中之恐事歟、或說、可有遷都云々、縱雖可然、忽臨幸如何、事體可謂物怪、必有其徵歟、又云、留洛陽之輩中、有可蒙刑之者云々、凡異議紛紜、巷說縱橫、緇素貴賤、以仰天爲事、只天魔謀滅朝家、可悲可悲、遷幸儀、（以見物之傳說注之）自八條通至草津、武士數千騎、二行並轡夾幸路、先入道相國籠屋形輿、次女車一兩、次女房輿二、（二品及攝政之室家云々）次行幸、（鳳輦）供奉人々、公卿四人、左大將實定、別當時忠、宰相中將（實守、通親）近衞司、左中將泰通朝臣、右中將隆房朝臣、職事頭前亮重衡朝臣、頭辨經房朝臣等也、隆房朝臣、著狩裝束、（褐衣、布帶、白狩袴、浮線綾、藁履、巾、狩胡籙、螺鈿、野劍、有尻鞘、）是城外之儀云々、太以不被甘心、如此事、可依時宜事也、後聞、隨身狩衣、小袴、烏帽云々、次攝政、（乘車、前駈二人、殿上人二人、騎馬、在車後、）次內侍所、藏人左少辨行隆、左少將有房朝臣等候之、各騎馬云々、次御竈神、上卿、右衞門督實家、辨右少辨兼忠、各乘車、但辨依仰自草津歸京云々、次御幸、公卿帥大納言隆季、前

大納言邦綱、殿上人左少將通資朝臣、同時實朝臣、右中辨兼光朝臣、（已上可從行）中務權大輔經家朝臣、右京權大夫信行朝臣、安藝守在經、（已上京出許云々、在經可參福原云々、實）次出車二兩、次前大將宗盛卿、騎手輿、今夜就大物、明曉御福原、內裏、（平中納言賴盛家）上皇、（禪門之別莊）法皇、（平宰相教盛家）攝政、（安樂寺別當安能房云々）參入輩、多以無宿所、如立道路云々、　六日丁亥、遣邦綱卿許使者歸來云、雖白地無御宿所者、御參不可叶、如只今一切無其所、猶相尋、且又伺形勢、自是今一兩日之間、以飛脚可令申云々、又云去四日夜、主上自賴盛家遷御禪門別莊、（太上皇御所也、則居替給云々、）家主賴盛敍正二位了、奉超右大將殿、不可說々々々云々、余全不爲苦、物狂之世、不足論是非、勿論々々、　八月四日甲申、未剋、大外記賴業來、○中略召簾前問世間事等、申云、去廿九日、出福原、今月朔日入洛、遷都事、不可棄故鄉之由、被仰下了、福原立離宮、暫可有經廻云々、不及八省大內、又大路小路、隨便披之、撰可然卿相侍臣等、可宛其地云々、大禮事延引之由、被仰下了、其後猶今年可被行之由雖云々、說未聞一定云々、○中略又語云、參院中給、深懷怨心、其故遙弃我遷幸給、尤非本意云々、是又遷都不快之祥也、先是中宮有御夢想、幷隆季之靈夢等、（件夢等見去月記）不信此等靈告、猶被營新都、誠是天魔所爲不可疑、可悲々々云々、　十一月廿五日癸酉、今夕行幸（○安德）御幸（○高倉）共著御木津殿、○中略御逗留三島江之邊、今日入夜可有入御云々、　廿六日甲戌、依先日之催、欲參會鳥羽之處、行幸早成、仍於七條朱雀辻參會供奉、日未沒西山、著御五條第、（邦綱卿家）供奉公卿、成範、時忠等許也云々、○中略院（○高倉）入夜御入洛、御賴盛卿六波羅第、（號池殿）法皇未剋許入洛、御故內大臣六波羅第、（號泉殿）武士數十騎、路之間奉圍繞云々、

〔明月記〕治承四年五月卅日、早旦著布衣參院、飾參候、上下奔走周章、女房或有悲泣之氣色、密招右馬允盛弘、（若州之後見）問子細、答云、我有遷都之聞、兩院主上（○安德）忽可臨幸由、入道（○平清盛）使申給、前途又不知安否、悲泣之外無他事云々、退出歸法性寺、　六月一日、遷都一定之由云々、傳聞、遷幸必然、或人云、右中將隆房朝臣一人、著褐顯文紗狩袴、市比脛巾、帶狩胡籙云々、自餘事不聞、　八日、今曉拾遺付中御

門亞相殿、便被參新都云々、十三日、依新都之催、參白河押小路殿御堂、(高松院御忌日)舊院女房等參入、相謁前大納言實長卿、(布衣)三位隆輔卿、侍從實保參、取布施退出、又舊臣等少々在北面方不見知、

〔百練抄 八高倉〕治承四年六月二日、行幸(〇安德)攝津國福原、法皇(〇後白河)新院(〇高倉)同以臨幸、貴賤上下、出平安舊城、赴攝州新都、今日著御寺江頓宮、翌日乘御船、著御福原、世專號之遷都、入道太相國(〇平淸盛)中行之、十一月十一日、還幸福原新造内裏、入道大相國所造進也、

〔源平盛衰記 十六〕遷都附將軍塚附司天臺事

治承四年五月廿九日ニハ、都遷アルベキ由、有其沙汰、來月三日、福原へ行幸(〇安德)ト被定仰下ケリ、日比モ猿荒増ノ事アリト私語ケレ共、指モハヤト思ケル程ニ、既ニ被仰下ケレバ、京中ノ貴賤是非ニ迷ヒ、周章騒ッヽ、更ニウツヽトハ覺エズ、兼テハ、六月三日ト有披露シニ、俄ニ二日ニ被引上ケル間、供奉ノ人々、上下周章騒テ、取物モ不取敢、東關ノ雲ノ夕、西海ノ波ノ曉、假寢ノ床ノ草枕、一夜ノ名殘モ惜ケレバ、跡ニ心ハ留リテ、思ヲ殘ス事ゾカシ、久比京ニ住馴テ、始テ旅ダヽン事倦ケレバ、外人ニハ世ニ恐テイハザリケレ共、親キ族ハ寄合テ、額ヲ合テ泣悲、何ナルベシ共覺ネバ、各袖ヲゾ絞ケル、二日ニ既ニ行幸アリ、入道(〇平淸盛)ノ年來執シ通ヒ給ヒケル所ナルニ依テ也、中宮(〇平德子)一院(〇後白河)新院(〇高倉)攝政殿(〇藤原基通)ヲ奉始、公卿、殿上人被供奉、三日ト有披露ダニモ忙カリシニ、今一日引上ラレケル間、御伴ノ上下イトヾ周章騒、取物モ不取敢、帝王ノ稚御座ニハ、后コソ同輿ニハ召ニ、是ハ御乳母ノ平大納言時忠卿ノ北方、帥ノ内侍ト申ゾ被參ケル、先例ナキ事也ト、人欺申ケリ、(〇中略)新都行幸ノ供奉ニ參ケル人ノ、舊都ノ柱ニ書ツケタリケルハ、

百年ヲヨカヘリ迄ニ過コシニ愛宕ノ里ハ荒ヤ果ナン、行幸既ニナラセ給ケレバ、諸卿已下衞府諸司供奉セリ、何者ノ態ナリケルニヤ、東寺ノ門ノ道バタニ、札ヲ立タリ、

咲出ル花ノ都ヲフリ捨テ風フク原ノ末ゾアヤウキ、行幸ノ御門出ニ、イマ〳〵シクゾ見エシ、

〔皇帝紀抄高倉七〕治承四年六月二日、相國禪門俄申行遷都之儀、行幸御幸法皇宮々渡御、攝籙已下悉以追從、即著御攝州福原別業、爲皇居、或印南野、或昆陽野、帝都之地、有評定、然而遂被定福原了、新都之儀、天下愁歎、何事如之哉、

〔方丈記〕治承四年、○中略水無月の比、にはかに都遷侍りき、いと思ひの外なりし事也、大かた此京の始をきけば、嵯峨天皇の御時、都とさだまりにけるより後、すでに四百さいをへたり、ことなる故なくて、たやすくあらたまるべくもあらねば、是を世の人たやすからず愁あへる樣、ことはりにも過たり、されどとかくいふかひなくて、御門より始たてまつりて、大臣公卿、悉攝津國難波の京に移り給ひぬ、世につかふる程の人、誰かひとり故郷に殘りをらむ、つかさくらゐに思ひをかけ、主君のかげをたのむ程の人は、一日なりともとく移らむとはげみあへり、ときをうしなひ世にあまされて期する所なき者は、愁ながらとまりをり、軒をあらそひし人のすまゐ、日を經つゝ荒行、家はこぼたれて淀川にうかび、地は目の前に畠となる、人の心皆あらたまりて、馬鞍をのみをもくす、牛車を用とする人なし、西南海の所領をのみねがひ、東北國の庄園をば好まず、其時をのづから事のたより有て、攝津國今の京に至れり、所の有さまをみるに、其地程せばくて、條里をわるにたらず、北は山に傍てたかく、南は海に近くて下れり、波の音つねにかまびすしくて、鹽風ことにはげしく、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、中々やうかはりて、優なるかたも侍りき、日々にこぼちて、川もせきあへずはこびくだす家は、いづくに作れるにかあらむ、猶むなしき地はおほく、造れる屋はすくなし、古郷は既にあれて、新都はいまだならず、あるとし有人は、みな浮雲の思ひをなせり、本より此所に居れる者は、地をうしなひて愁へ、今うつり住人は、土木の煩ある事を歎く、道の邊を見れば、車にのるべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきは、おほくひたゝれをきたり、都のてぶりたちまちにあらたまり、たゞひなびたる武士にことならず、是は世の亂

る瑞相とか聞をけるもしるく、日を經つゝ、世中うき立て、人のこゝろもおさまらず、民の愁つゐにむなしからざりければ、同年の冬、なほ此京にかへり給ひにき、されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりけるにか、こと〴〵くもとの樣にしもつくらず、

〔太平記十八〕先帝潛幸芳野事

刑部大輔景繁武家ノ許ヲ得テ、只一人伺候シタリケルガ、勾當內侍ヲ以テ潛ニ奏聞申ケルハ、○中略急ギ近日ノ間ニ、夜ニ紛レテ大和ノ方ヘ臨幸成候テ、吉野十津川ノ邊ニ皇居ヲ被レ定、諸國ヘ綸旨ヲ被二成下一、義貞ガ忠心ヲモ助ラレ、皇統ノ聖化ヲ被レ耀候ヘカシト、委細ニゾ申入タリケル、○中略雲霞ノ勢ヲ腰輿ノ前後ニ圍マセテ、無レ程吉。野。ヘ臨幸ナル、○下略

〔太平記二十六〕賀名生皇居事

貞和五年正月五日、○中略吉野ノ主上ハ、天ノ河ノ奥賀。名。生。ト云所ニ、僅ナル黑木ノ御所ヲ造リテ御座アレバ、彼唐堯虞舜ノ古ヘ、茅茨不レ剪、柴椽不レ削、淳素ノ風モ角ヤト思知レテ、誠ナル方モ有ナガラ、女院皇后ハ柴葺庵ノアヤシキニ、軒漏雨ヲ禦ギカネ、御袖ノ涙ホス隙ナク、月卿雲客ハ木ノ下岩ノ陰ニ、松葉ヲ葺カケ、苔ノ筵ヲ片敷テ、身ヲ措ク宿トシ給ヘバ、高峯ノ嵐吹落テ、夜ノ衣ヲ返セドモ、露ノ手枕寒ケレバ、昔ヲ見スル夢モナシ、○下略

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年○明治元年九月

東。京。ニ行幸ノ御達　東京行幸御出輦、來る廿日御治定之事、○中略

十月

御著輦奉迎道筋等ノ達

御著輦御當日奉迎場所　議定以下三等官以上、坂下御門外北側、　四等五等官、和田倉御門外北側、　無役諸侯、坂下御門外南側、　但當日不レ及二登城一、翌日巳ノ刻登城可レ伺二天機一、且供奉の外、兵

除召連候儀被差止候間、定式の外供連不相成候事、

右之通御治定相成候條、混雜不致樣可相心得旨、御沙汰候事、

御鳳輦御道筋、品川より大通り吳服町通り吳服橋御門、和田倉御門、大下馬通、西城大手御入輦、

右之通御改相成候間、申達候事、

今般御東幸被爲在候處、孰れも旅中の儀に付、格別の譯を以て、二等官より五等官迄、烏帽子直垂被下置候旨、御沙汰候事、

東儀石見介、東儀將曹、今般御東幸樂御用可相勤旨、御沙汰候事、

不遷都

〔日本書紀二十九天武〕五年、是年將都新城、而限內田薗者、不問公私、皆不耕悉荒、遂不都矣、

〔扶桑略記五文武〕元年丁酉歲八月一日甲子、生年十五卽位、都大倭國高市郡藤原宮、

〔神皇正統記元明〕三年〇和銅庚戌、はじめて大倭の平城の宮に、都をさだめらる、いにしへには代ごとに都をあらため、すなはちその御門の御名によびたてまつりき、持統天皇藤原の宮にまし〳〵を、文武はじめてあらため給はず、此元明天皇、平城にうつりましゝよりまた七代の都になれりき、

〔扶桑略記六元正〕和銅八年九月三日庚申、生年卅五卽位、都大和國添上郡平城宮、人進靈龜、仍卽位日、改爲靈龜元年、

〔扶桑略記六聖武〕養老八年〇神龜元年都大和國平城宮、

〔日本後紀十四平城〕大同元年七月甲辰、詔曰、比公卿奏、日月云除、臺忌將周、國家恒例、就吉之後、遷御新宮、請預營構者、此上都先帝所建、水陸所湊、道里惟均、故不憚暫勞、期以永逸、棟宇相望、規模合度、欲使後世子孫无所加益、朕忝承聖基、鬪守神器、更事興作、恐乖成規、夫漢代露臺、尙愛十家之產、大廈層構、亦非一木之枝、朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、卿等合知朕此意焉、於是百官奉表拜賀曰、亮。

遷舊都

陰之後、更建新宮、古往今來、以爲故實、臣等准據舊例、預請處裁、伏奉今月十三日勅、倩朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、臣等忝聞綸旨、載喜載悲、誠以孝子充成父志、遂昌堂構者也、凡厥百僚、幸甚々々、臣聞明王執俗、温恭寘懷、哲后經邦、澹泊爲德、伏惟皇帝陛下、聲韜嗣禹、業砌纂文、順稟成規、撿揚郁烈、亭毒被於萬品、燾載苞於兩儀、玄功盻蠁、而激大雅之風、神用周流、以布中和之樂、道融有截、化溢无垠、猗歟偉歟、盡善盡美、仍恐環瀛之表、无擊壤歌、浹寓之涯、有向隅歎、遂乃苞軌貢珍、事從蘭寘、文書調役、務期單疎、雲構非加、省口於梓匠、露臺緩作、愛費於金直、砮砌之荒凉、再迎鳳蓋、柏梁之寂寞、重轉鸞輿、臣等就日喰和、望霓沐霈、拃東海鼇、而无喩仰德、伐南山竹、而未足書恩、无任鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀以聞、

〔吉記〕治承四年十一月十一日、申剋、先參新内裏、撿知之後參内、秉燭之後上下參集、殿下令參給候、予○藤原經房覽日時勘文、不書其所、只注行幸日時、又直平覽之、次出陣下、上卿左大將其詞云、任勘申召仰諸司ヨ、路ハ御所南大路チ東行、至于東大路、南行更東折、自東造路南行、至于入道太政大臣亭北大路、西折自西南門入御、無大路之名之間、以今案新儀相計大概許也、更不可爲後例、　廿日、申剋許、自藏入辨許、以出納國貞示送云、還都一定也、來廿三日行幸前大納言宇治河亭、廿四日渡御寺江、廿五日渡御木津殿、廿六日可有御入洛、皇居五條内裏也、存其旨可申沙汰候由、有仰者、即仰官外記立方令致沙汰云々、　廿三日、今夕依可有還都、爲御出門行幸前大納言邦綱卿宇治新亭、幸此都之後、造華亭也、土木未終功、近日不日致沙汰云々、

〔百練抄八高倉〕治承四年十一月廿三日、俄立新都、可還幸舊都、今日遷御邦綱卿新造亭、兩院同御幸、廿六日、著御舊都、萬民有悅色、依東國逆亂、忽有議所歸都也、

〔古今著聞集三政道忠臣〕治承四年六月二日、福原にみやこ遷有けるに、同十三日、師の大納言隆季卿、新都にて夢にみ侍りけるは、大なる屋のすきたるうちに、我ゐたるひさしのかたに女房あり、ついがきのとに、頻になくこゑ有、あやしみて間に、女房のいふやう、これこそみやこうつりよ、太神

異殿

宮のうけさせ給はぬ事にて候ぞといひけり、すなはち驚ぬ、又ねたりける夢に、同じやうにみてけり、おそれおの〳〵きて、次日の朝院に參じて、前大納言邦綱、別當時忠卿などにかたりてけり、太政入道〈淸盛〉○平つたへきかれたれども、いと承引なかりけり、さるほどに同人の夢に、還御ありと、邦綱卿長絹の狩衣きて、新院の御ともにさぶらふ、頭亮重衡朝臣よろひをきて御供に候とみてさめぬ、去ながら一日の夢もちゐられねば、申出されざりけり、十一月廿六日、平の京に還御有ければ、かの夢にはよらざりけり、山僧のうたへ、又東國のみだれなどのゆゑとぞ聞え侍ける、

〔神皇正統記〈安德〉〕平氏はいよ〳〵おごりをなし、諸國はすでにみだれぬ、都をさへうつすべしといひて、攝津國福原とて、淸盛がすむところの有しに、行幸せさせ申しけり、法皇上皇もおなじくうつしたてまつる、人のうらみおほくきこえければにや、かへしたてまつる、

○按ズルニ、還舊都ノ事ハ、宜シク僉議條ヲ參看スベシ、

〔萬葉集〈一雜歌〉〕過近江荒都時、柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次、畝火之山乃、○中略石走、淡海國乃、樂浪乃、大津宮爾、天下、所知食兼、天皇之、神之御言能、大宮者、此間等雖聞、大殿者、此間等雖云、春草之、茂生有、霞立、春日之霧流、百礒城之、大宮處、見者悲毛、〈○反歌〉

高市古人感傷近江舊堵作歌、或書云高市連黑人、

古人爾、和禮有哉、樂波乃、故京乎、見者悲寸、

〔萬葉集〈三雜歌〉〕高市連黑人近江舊都歌一首

如是故爾、不見跡云物乎、樂波乃、舊都乎、令見乍本名、

〔千載和歌集〈春一〉〕古鄉花といへる心を、よみ侍る、　讀人不知

さゝなみやしがの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

〔萬葉集〈六雜歌〉〕春日悲傷三香原荒墟作歌一首幷短歌

三香原、久邇乃京師者、山高、河之瀨清、在吉迹、人者雖云、在吉跡、吾者雖念、故去之、里爾四有者、國見跡、人毛不通、里見者、家裳荒有、波之異耶、如此在家留可、三諸著、鹿背山際爾、開花之、色目列敷、百鳥之、音名束敷、在果石、住吉里乃、荒樂苦惜哭、

反歌三首〇二首略

三香原、久邇乃京者、荒去家里、大宮人乃、遷去禮者、〇一首略

〔萬葉集 六雜歌〕傷惜寧樂京荒墟作歌三首

紅爾、深染西、情可母、寧樂乃京師爾、年之歷去倍吉、

世間乎、常無物跡、今曾知、平城京師之、移徙見者、

石綱乃、又變若反、青丹吉、奈良乃都乎、又將見鴨、

悲寧樂故京鄕作歌一首并短歌

八隅知之、吾大王乃、高敷爲、日本國者、皇祖乃、神之御代自、敷座流、國爾之有者、阿禮將座、御子之嗣繼、天下、所知座跡、八百萬、千年矣兼而、定家牟、平城京師者、炎乃、春爾之成者、春日山、御笠之野邊爾、櫻花、木晩牢、貌鳥者、間無數鳴、露霜乃、秋去來者、射駒山、飛火賀塊丹、芽乃枝乎、石辛見散之、狹男牡鹿者、妻呼令動、山見者、山裳見貌石、里見者、里裳住吉、物負之、八十伴緖乃、打經而、里並敷者、天地乃、依會限、萬世丹、榮將往迹、思煎石、大宮尙矣、恃有之、名良乃京矣、新世乃、事爾之有者、皇之、引乃眞爾眞荷、春花乃、遷日易、村鳥乃、旦立往者、刺竹之、大宮人能、踏平之、通之道者、馬裳不行、人裳往莫者、荒爾異類香聞、

反歌二首

立易、古京跡、成者、道之志婆、草長生爾異梨、

名付西、奈良乃京之、荒行者、出立每爾、嘆思益、

〔三代實錄 九淸和〕貞觀六年十一月七日庚寅、先是大和國言、平城舊京其東添上郡、西添下郡、和銅三年

遷自古京都於平城、於是兩都自爲都邑、延暦七年遷都長岡、其後七十七年、都城道路變爲田畝、內藏寮田百六十町、其外私竊墾開往々有數、望請收公令輸其租、許之、

〔古今和歌集二春〕ならのみかどの御うた

ふるさとゝ成にしならの都にも色はかはらず花はさきけり

〔詞花和歌集一春〕一條院御時、ならの八重櫻を、人の奉りけるを、そのおり御前に侍ければ、その花をだいにて、歌よめと、おほせごとありければ、　伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬるかな

〔玉葉和歌集十五雜〕奈良の都あれたるを見て　讀人しらず

世の中は常なきものと今ぞしるならの都のうつろふみれば

〔源平盛衰記十七〕實定上洛事

其中ニ後德大寺ノ左大將實定ハ、舊都〇平安京ノ月ヲ戀ワビテ、入道ニ暇乞、都ヘ上給ケリ、元ヨリ心數寄給ヘル人ニテ、浮世ノ旅ノ思出ニ、名所名所ヲ間見テゾ上ラレケル、千代ニ替ラヌ翠ハ、雀ノ松原、ミカケノ松、雲井ニサラス布引ハ、我朝第二ノ瀧トカヤ、業平中將ノ彼瀧ニ、星カ河邊ノ螢カト、浦路遙詠ケン、何所ナルラン覺束ナ、求塚ト云ヘルハ、戀故命ヲ失ヒシ、二人夫ノ墓トカヤ、イナノ湊ノアケボノニ霧立コムル、昆陽ノ松、必春ニハアラネドモ、山本カスム水無瀨川、男山ニスム月ノ、石淸水ニヤ宿ルラン、秋ノ山ノ紅葉ノ色、稻葉ヲ渡ル風音、御身ニシミテゾ覺シケル、サテモ都ニ入給ヒ、彼方此方ヲ見給ヘバ、空キ跡ノミ多シテ、タマ〱殘ル門ノ內、行通人モ無レバ、淺茅ガ原、蓬ガ杣ト荒果テ、鳥ノ臥戸ト成ニケリ、八月半ノ事ナレバ、マダ宵ナガライヅル月、主ナキ宿ニ獨住、折知ガホニ鳴鴈ノ、音サヘツラクゾ聞召、大將ハイトヾ哀ニ堪ズシテ、大宮ノ御所ニ參、待宵ノ小侍從ト云女房ヲ尋給フ、元ヨリ淺カラザル中也、侍從出合請入奉テ、良久御物語申ケリ、サ

テモ宮ノ御方ヘ角ト被レ申ヨト仰ケレバ、侍從參テ御氣色ヲ伺進セケリ、宮斜ズ御悅アリテ、コナタヘト仰ケリ、大將南庭ヲマハリテ、彼方此方ヲ見給フニ付テモ、昔ハ二代ノ后ニ立給ヒ、百シキノ大宮人ニカシヅカレテ、明シ晩シ給シニ、今ハ幽ナル御所ノ御有樣、軒ニ垣衣繁リ、庭ニ千草生カワス、事問人モナキ宿ニ、荻吹風モ、サハガシク、昔ヲ戀ル涙トヤ、露ゾ袂ヲヌラシケル、時シアレバト覺シクテ、蟲ノ怨モタエ〳〵ニ、草ノ戸指モ枯ニケリ、大將哀ニ心ノ澄ケレバ、庭上ニ立ナガラ、古詩ヲ詠ジ給フ、

霜草欲レ枯蟲思苦、風枝未レ定鳥栖難、ト宣テ、其ヨリ御前ニ參給ケリ、八月〇治承四年十八日ノ事也、宮ハ居待ノ月ヲ待詫テ、御簾半卷上テ、御琵琶ヲアソバシテ、渡ラセ給ケルガ、立出ル月カゲヲ、猶ヤ遲トオボシケン、御琵琶ヲ閣セ給ツヽ、御心ヲ澄サセ給ケリ、源氏ノ宇治卷ニ、優婆塞宮ノ御女、秋ノ名殘ヲシタヒカネ、明月ヲ待出テ、琵琶ヲ調ベテ、通夜心ヲスマサセ給シニ、雲カクレタル月影ノ、ヤガテ程ナク出ケルヲ、猶堪ズヤ覺シケン、撥ニテマネカセ給ケン、其夜ノ月ノ面影モ、今コソ被二思知一ケレ、大將參テ大床ニ候ハレケリ、大宮ハ琵琶ヲ引サシテ、撥ニテ其ヘト仰ケリ、其御有樣アタリヲ拂テ見エ給フ、互ニ昔今ノ御物語アリ、大將ハ福原ノ都ノ住ウキ事語申テ被レ泣ケレバ、宮ハ平京ノ荒行事仰出シテ、共ニ御涙ニ咽バセ給ケリ、角テ夜モイタク深ケレバ、后宮ハ御琵琶ヲ搔寄サセ給テ、秋風樂ヲヒカセ給フ、侍從ハ琴ヲ彈ケリ、大將ハ腰ヨリ笛ヲ取出、平調ニ音取ッツ、遙カニ是ヲ吹給、其後故鄕ノ荒行悲サヲ、今樣ニ造リテ歌給フ、

古キ都ヲ來テ見レバ、淺茅ガ原トゾ成ニケル、月ノ光ハクマナクテ、秋風ノミゾ身ニハ入(シム)、ト三返歌ヒ給ケレバ、宮ヲ始進セテ、御所中ニ候給ケル女房達、折カラ哀ニ覺テ、皆袖ヲゾ絞ケル、

〔玉海〕治承四年八月廿九日己酉、未剋頭辨經房朝臣來、日者爲レ行二千僧事一上洛、明後日二日又可レ參二福原離宮、適向二京都一爭不レ參哉、〇中略 經房又云、昨日參二詣十ケ所、其次見二廻洛陽一、一切未二荒廢一、恐遂可レ還二此都一

歟云々、

〔建武式目〕一京中空地可被返本主事

如當時者、京中過半爲空地、早被返本主、可被許造作哉、如巷説者、今度山上臨幸扈從之人不論上下、不謂虛實、大略被沒收云々、如律條者、謀反叛逆之人、協同與駈卒罪名不同歟、尤被尋究、可差異哉、凡承久沒收之地有其數歟、今又悉被召放者、公家被官之仁彌可牢籠乎、

〔筆の梳 序〕昔もためしすくなく、今行末も有がたくおぼえ侍るは、應仁の今のみだりにぞ侍るべき、九のかさねのうち、二條より北は、わづかに禁裏仙洞のほかは、神祇官太政官をはじめて、百官諸司の居所一字も殘らず、咸陽宮の烟となりて、姑蘇台の露のみよしげりき、〇中略こゝに桃の名にきよしを、告げよらするものゝありければ、人なみ〳〵に蓬が門をうかれ出て、しばらく九條のほとりにやどりをかり、こしかたをかへり見れば、程なく一片のけぶりと立のぼりて、燒野の原と成にけり、〇下略

〔應仁廣記 五〕優鼠草案幷序〇中略

嗚呼悲哉、七百餘歲ノ花ノ洛、今何ゾ成犬戎境乎、就是近代予〇飯尾常房ガ見及ブ處、京白川へカケテ二十萬間ノ人家皆郊野ト成ヌル事ヲバ先ブ措テ、佛閣僧坊大家大仁ノ舊跡悉絕果テ、名ヲサヘ不殘事ヲ歎敷存ルマヽ、閑居ノ暇ニ略シテ、擧其一二、以待後君士、直當字而廣之而已、先ヅ北ハ西藏口ヨリ下ハ七條ニ至リ、西ハ壬生ヨリ東ハ至朱雀、其交ヒ皆悉人家也、故ニ九重幷甍萬國捧宦、江ノ南北、湖ノ東西、處トシテ無不朝、眞ニ名ニ負フ平安城也シニ、不量應仁ノ兵亂ニ因テ、今赤土ト成ヲントハ、就中禁裏紫宸ト成ルハ仙洞也、今ノ伏見殿是也、〇下略

〔太閤記 七〕大佛殿之事

雜載

秀吉公聚樂におはしましければ、彌洛中洛外にぎはひ侍るやうに、あらまほしくおぼしたまふて東山に大佛殿を建立し給ふべき旨、五人の奉行共に被仰付にけり、

〔雍州府志一建置沿革〕豐臣秀吉公、一統日、京城四方築封境、種修竹、是號四方土手、俗俗堤防曰土手、如今太平日久、諸民富庶、故洛中人家日盛月增、如今從公課之戶四萬七千軒、口男女五十萬七千五百四十八人餘也、是延寶九年九月之所定也、禁裏院中及諸家非斯限矣、公役之外、新在家二十八町、戶五百四十五軒、大佛殿前二十八町、戶七百三十軒、三條橋以東六町、戶二百三十八軒、東西本願寺之所領六十四町、戶千四百六十九軒、凡除皇城及寺田封戶、一千三百餘町、戶三萬五千四百二十七軒、此外東自河原町、下粟田六町以東新町、智恩院門前、宮川町、石垣町、祇園町、八坂鄕、淸水坂、西自聚樂至北野紙谷川、南自建仁寺門前至東福寺前、北今出川原土手西北柳原之外西倉口、幷安居院北、殆足與洛內相比、實四民之所安居、而太平之餘標也、

〔本朝二十不孝一〕今の都も世は借物

世に身過は樣々なり、今の都を淸水の西門より眺めまはせば、立續きける軒端の內藏は景色、朝日に映りて、夏ながら雪の曙かと想はれ、豐なる御代の例、松に音無く、千歲鳥は雲に遊びし、限も無く打開き、九萬八千軒といへる家數は信長時代の事なり、今は土手の竹籔は洛中になりぬ、〇下略

〔好古小錄上書畫〕平安都城圖

東寺所傳二種一種殘缺　神泉苑所傳圖右京不詳審　拾芥鈔所載圖脫水路　古本拾芥鈔圖左右京圖水路

〔萬葉集五雜歌〕神龜五年七月二十一日、於嘉摩郡撰定、筑前國守山上憶良、〇書略

歌詞兩首大宰帥大伴卿

多都能馬母、伊麻勿愛氏之可、阿遠爾與志、奈良乃美夜古爾、由吉帝巳牟丹米、〇一首略

〔古今和歌集 春一〕花ざかりに、京をみやりてよめる、　そせい法師

見わたせば柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりける

〔倭訓栞 前編三十美〕みやこ○中略かりの宮所をもみやことといひし事、豐前京都郡など、日本紀に見え、又萬葉集に見ゆ、

〔筑前國續風土記 六御笠郡〕大宰府舊地、○中略鎭西府と云しも卽此所なり、古歌にしづむる西の都とよめり、又都督府とも西の都ともいへり、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年十月甲辰、大宰府言、此府人物殷繁、天下之一都會也、

〔續錦舍隨筆 上〕東の都といふ詞

此江戸をさして東都と文字に書るは、都會都邑などいふ字義によりて、博士の輩の書そめたる事にて、二百年ばかりこなた書なれたり、扨これを大和ことの葉に、あづまのみやこといふ事は、縣居の翁の文にはじめてかいれたり、おのれ是をおだしからずおもひて、むかし翁にとひしかば、げにもみやことは、宮所の義なれば、みさとの外をさしていはんはいかゞなれど、今は世の上中下の人おしなべて、東都としも文字に書なれたれば、殊更に我より改むべき事とも覺えず、かかる名目の類は世に從ふ事も有習ひなれば、暫世に書なれたる文字を、訓のまゝによみてあらんもとがなかるべし、文をあやなす上には、江戸とのみいひては、よからぬいきはひもありといはれき、これいとうきたる事のやうなれど、詞を轉じ用たるには、昔よりかゝる例なきにしもあらず、○下略

〔松屋棟梁集 一〕東都稱呼辨

とりがなくあづまのみやこといへる稱は、江戸名所記(五の巻、芝泉岳寺の條に、いにしへは淀鳥羽に車借ありて、都ならでは牛車はなかりしを、江戸はあづまの都にて、牛車をゆるされ、いかなる土橋板橋のうへをも、心のまゝにひくとかやと見ゆ、○中略)かまくらの禪興寺の鐘のことがき

鄙

鎌倉志三の卷、禪興寺鐘銘に、寛文弘元辛丑歳、東都寮貫内藤佩帶内助上杉氏とあり、此銘は天和二年事月、南禪寺見借錄司副室崇寛の撰也、などに出て、はやく寛文といふとしの頃にきこえたるを、世人物部氏がみだりごとにおこれりとおもふは、いみじきひがこと也、そは古事談五の卷、神社佛寺部、北野天神の詩、太平記十二の卷、天神事の條、北野緣起下卷天滿宮託宣記正曆四年十一月十六日の條、梅城錄、空華集廿の卷、祭天神文、筑前國續風土記一の卷總論などに、太宰府を西都といひ、空華集九の卷、北野行詣祠詩に、西府東都比夢境と見ゆ、一覽亭の詩、鎌倉志二の卷に載す、嘉曆年中鎌倉の一覽亭にてつくりし詩也、慈恩寺の詩鎌倉志七の卷、前附錄大周周奇が慈恩寺の詩に、客至曾誇絶境殊慈恩山水冠東都といへり、などに、鎌倉を東都といひ、萬葉集十八の卷、越中守大伴宿禰家持の坂上郎女に報歌に、安萬射可流比奈能美夜故爾、安米比度之可久古非須良波、伊家流思留事安里、ど見ゆ、橘千蔭が略解に、本居宣長云、大平が說に、都夜故は夜都故を誤れる也といへり、まことにさかるべし、國府をひなのみやこといふべきよしなし、遠の朝廷といふとは、事のさまかはれりといへり、といふ說を載たれど、中々にひがこと也、こは仙覺抄十九の卷に、都夜故と書てみやことよむことは僻訓の證據もありぬべし、(中略)その心をいはゞ、みやことは王城をいふ、しかるにひなのみやこといふは、諸國の國府は田舍にとりてのみやこなれば、ひなのみやこといふべし、〇中略田村の諸詞表百番活板に、ひなの都路へだてきて、九重の春にいそがんと見ゆ、などに、國府をひなのみやこといへるにむかへて、そのにぎはゝしき所なれば、うちひさす花の都のありさまにたとへしのみ、〇中略和名抄に、遠江國引佐郡の京田〇註略常陸國久慈郡の都、〇註略讃岐國山田郡の宮所〇註略豐前國のこほりの名京都〇註略名所の伊勢の多氣の都、〇註略信濃の都井、〇註略みちのくの都島、〇註略おなじ國のみやこの里〇註略なども、ひなの都のあかしといふべし、そが中に太宰府と豐前國の京都のこほりとは皇居の跡也、〇下略

〔倭訓栞前編二十五比〕ひなのみやこ　萬葉集によめり、越中の國府をいふ、日本紀に、東夷之中有日高見國といへるに語意同じければ、何れの國にてもいふべし、

〔萬葉集十八〕越中守大伴宿禰家持報歌幷所心三首

安萬射可流、比奈能都夜故爾、安米比度之、可久古非須良波、伊家流思留事安里、

〇

〔東雅三地輿〕鄙ヒナ　義不詳、上古には至尊を稱するに日を以てし、其立ち給ふ所を稱するに天を

もてす、荒陬をさして、アマサカルヒナなどいひしは、天を離るゝ事の遠く、日の御蔭なきの義なるべし、さらばヒナとは日無也、後に漢字を得て、夷の字讀てヒナといふ、舊事紀日本紀に、下照姫の歌を今號二夷曲一としるされ、アマサカルヒナとは天離夷也と、釋日本紀に注せしが如き是也、舊説にヒナとは日長也、田舎のつれ〴〵にして、日長きを云ふなりなど見えたれど、下照姫の御歌に、アマサカルヒナといふ言葉始るなり、上古の代に夷等の義によりてかゝる謂あるべしとも思はれず、田舎讀てヰナカなどいふ事は、ヒナといふ語の轉ぜしにやあるべき、

〔倭訓栞前編二十五〕ひな　邊鄙をいふ、神代口訣に日無の義也といへり、日本紀に蠻夷を訓せり、高日の國に對し、天子のましまさぬ所をいふ也、よて天さかるひなとつゞけたり、一説に日の下にて、天に對して下國をいふといへり、歌にひなのわかれ、ひなの長路、ひなのあら野などもよめり、

〔日本書紀二神代〕一書曰、〇中略歌之曰、阿磨佐箇屢、避奈菟謎迺、以和多邏素西渡、〇中略此兩首歌辭今號二夷曲一、

〔冠辭考一〕あまざかる　ひな　むかつひめ
神代紀に、阿磨佐箇屢、避奈菟謎迺、〇中略こは都がたより、ひなの國をのぞめば天とともに遠放て見ゆるよしにて、天放るとは冠らせたり、さかるとは、こゝより避り離れて遠きをいふ、古事記に奥疎神、訓レ疎云二奢加留一万葉卷十三に夷離國治爾登、一云、天疎夷治爾等、なは集中に里放、澳放、振離、見放など有も、さかるは同じ語也、さて天ざかるのさは、音便にて濁るべき例也、よりて集中に、安麻射加流と書て、射は專ら濁る語に用ゆ、且夷ざかるも同じ意なるに、それに謝の字をしも書し也、ひなは田居中也、そのたゐなかの上下を略き、且ゐとひを通はせてひなといへり、即ゐなかてふも、田を略きていふにて同じ意なるを思へ、

〔書言字考節用集一乾坤〕田舍民家之謂、見二韻會一、今俗斥二邊鄙一云爾、又作二夷中一、義同、

〔倭訓栞前編四十三爲〕ゐなか　日本紀に田舍をよめり、田家も同じ、萬葉集に居中と書り、田居の中といふにや、又堰中といふにや、顔會に邑居爲市、野廬爲井と見ゆ、伊勢物語に中ゐなかとも見えたり、全浙兵制に載る歌、

事たらぬ人も都に有ものをゐなかにすむとさのみ嘆きそ

〔萬葉集三雜歌〕式部卿藤原宇合卿被使改造難波堵之時作歌一首

昔者社、難波居中跡、所言奚米、今者京引都、口備仁鷄里、

〔伊勢物語上〕むかしゐ中わたらひしける人の子共、井のもとにいでゝ、あそびけるを、〇下略

〔枕草子八〕いやしげなる物

やり戸、づし、何もゐなかものはいやしきなり、

〔源氏物語五若紫〕いでやさいふとも、ゐなかびたらん、おさなくよりさる所におひいでゝ、〇下略

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、ゐ中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、櫻のめでたくさきたりけるに、風のはげしくふきけるをみて、このちごさめ〴〵となきけるをみて、〇下略

〔平治物語三〕常盤六波羅參事

常盤先御所へ參テ申ケルハ、女ノ身ノ無墓サハ、若片時モ身ニ添テヤ見ルト、此幼者ドモ引具シ、傍田舍ニ立忍テ侍ツルガ、童故行衞モ知ラヌ老タル母ノ、六波羅へ被召テ、ウキ目ニ相給ト承レバ、餘リニ悲クテ恥ヲモ忘テ參タリ、

古事類苑

地部三

山城國

名稱

山城國ハ、ヤマシロノクニト云フ、原ト山背、山代、開木代等ノ字ヲ用キタリシガ、桓武天皇ノ延暦十三年、改メテ山城ト爲ス、蓋シ地勢ニ據レルナリ、東ハ近江ニ境シ、西ハ丹波、攝津ニ至リ、南ハ伊賀、大和、河内、北ハ丹波ニ接シ、東西凡ソ六里、南北凡ソ十五里アリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ乙訓郡ニ置キ、乙訓(オトクニ)、葛野(カドノ)、愛宕(オタギ)、紀伊(キイ)、宇治(ウヂ)、久世(クゼ)、綴喜(ツヾキ)、相樂(サガラ)ノ八郡ヲ管ス、仁明天皇ノ朝、勅シテ畿内ノ第一班ト爲シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、新ニ京都市ヲ設ケ、京都府ヲシテ一市八郡ヲ治セシム、

京都ハ、葛野愛宕ノ二郡ニ跨ル、其奠都ハ、桓武天皇ノ時ニ在リ、事ハ皇都篇ニ詳ナレバ、宜シク就テ看ルベシ、

〔倭名類聚抄 五國郡〕山城 夜萬之呂

〔運歩色葉集 屋〕山城 始曰山背、后改曰山城也、

〔易林本節用集 下〕山城 雍州 山州

〔日本風土記 一寄語島名〕山城 羊馬(ヤンマ) 失羅(シイロウ)

〔日本紀略 桓武〕延暦十三年十一月丁丑、詔、○中略此國山河襟帶、自然作城、因斯形勝、可制新號、宜改山背國爲山城國、

〔松の落葉 一〕山城國はやまきのくにといひたりし事

日本後紀一の卷、延暦十三年十一月のところに、此國山河襟帶、自然作城、因斯形勝、可制新號、宜改山背國、爲山城國、とあれば、山背國の名を山城國とかへたまへるなり、源順朝臣など新號とあるをいかゞ心えられけん、もじのみかはれる事として、和名抄に山城（夜麻之呂）としるされしはいみじきひがことなり、此抄の郡郷の名は、其時の人のいふまゝにしるして、住吉（須美與之）とかいれたるたぐひにしへにたがへる事は、ほかにもおほかれど、これらはさはかくまじき事ぞ、延暦のみかどのみさだめにたがへる事なればなり、このひがことよりおこりて、今の世には城をしろといへり、城と云もじは、日本書紀には、きと訓によみ、又さしともよめれど、しろとよめることは、すべて古書にみえたる事なし、山城國のもじは、やまきのくにとよまんぞ正しかるべき、されど國の名などはあやまりにても、久しくいひなれては、今さらにわたくしには、あらためがたき事なりかし、

〔古事記 下仁德〕於是大后大恨怒、○中略御船不入坐宮而引避其御船、泝於堀江、隨河而上幸山代、此時歌曰、都藝泥布夜、夜麻志呂賀波袁、迦波能煩理、和賀能煩禮婆、迦波能倍爾、淤斐陀氏流、佐斯夫袁、佐斯夫能紀、斯賀斯多邇、淤斐陀氏流、波毘呂、由都麻都婆岐、斯賀波那能、氏理伊麻斯、芝賀波能、比呂理伊麻須波、游富岐美呂迦母、○又見日本書紀

〔古事記傳 三十六〕都藝泥布夜は（此言書紀には四首ある皆夜字なし、萬葉十三にもあるにも夜字はなし、此記には四首ある二首には夜字あり、二首には無し、あるなば師（賀茂眞淵）は衍なりとせられつれど、も次なるも、諸本共に有れば、今はさてあるなり、）此繼苗生やなり、（夜は余と云むが如し、歌ひ出したる辭なり、）那閇を切めて泥と云り、繼苗とは山の樹を伐取たる跡に、又繼て樹を生し立む料に植る苗を云、生は其苗を豫て蒔生し設け置く地なり、（粟田、豆田、淺茅生、蓬生などの類、皆其物の生たる地を某生といへり、）さて稻の苗を蒔生する田を苗代と云如く、かの山の樹の繼苗を生する地を山代と云なるべし、凡て山の用は材を出

すを主とする故に、節材を伐取る事を山と云て、杣人の材を伐初るを山口と云、又材を遣る斧を山多豆と云、これらみな山とは材につきて云り、此は其伐出すべき材の繼苗を生する地なるを以て山代と云り、萬葉に開木代(ヤマシロ)とも書るは此義なり、開木は代と離して意を取るときは、材を伐出す意にて山なり、又代に連れて意を取るときは、材を生立る繼苗の意なり、何れに取ても此にかなへり、されば此繼苗生の考を以て、かの開木代と書る義をも相明すべし、されば此枕詞は、繼苗生之山代と云意につゞけたるなり、然るを昔より萬葉に、次嶺經と書るに依て、續きたる山を經てゆく由に解來たるは當らず、まづ次嶺と云言も、いかゞなるうへに、山城國は大和よりたゞ程近き山一重をこそ越れ、さいふばかり續きたる山を經て行國には非るを、いかでか然は云む、さて山代は、本より一國の大名にてもあるべけれど、又思ふに、始はかの繼苗生を云、山代より負る一鄕などの名にてもありけむ、木より一國の名にても、此枕詞のつゞけの意は同じことなり、

〔萬葉集問答十三〕次嶺經(ツギネフ)、山背道乎(ヤマシロヂヲ)、人都末乃(ヒトヅマノ)、馬從行爾(ウマヨリユクニ)、己夫之(オノヅマノ)、歩從行者(カチヨリユケバ)、○下略

〔萬葉集雜歌七〕旋頭歌

開木代(ヤマシロノ)、來背社(クセノヤシロノ)、草勿手折(クサナタヲリソ)、己時(オノガトキト)、立雖榮(タチサカユトモ)、草勿手折(クサナタヲリソ)、

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

〔萬葉集略解七〕卷十一にも、山しろと云にかく書たり、聖武紀天平十七年正月、云々乍遷新京、伐山開地以造室なども有て、林を開て材をとるべき所は山なれば、開木にてやまとよむべし、

〔倭訓栞前編三十四〕やましろ　日本紀に山背と書り、大和國の北にあるをもて名とす、延暦中に山城と改めさせられしは、國の形勢による也、山代とも書るは訓を借る也、萬葉集に開木代(ヤマシロ)と書るは、義をもてよめる也、杣をそまとよめるが如く成べし、大和本紀に、總て材木を採所を、杣人の諺に山開(シロ)といへば、山城も材木を取し所歟と見えたり、雍州と稱するは、西土洛陽雍州に在るをもて也、俗に山に在るの城をいふには、しを濁れり、

〔古事記傳七〕山代國造、名義は書紀に山背と書る字の意うしろのうを省くなるべし、此國は大和國の北方の山の後なればなり、

〔國名考〕山城(仁徳紀歌夜莽之呂、和名抄訓同、)

按山城字舊作山背、又作山代、延暦十三年十一月丁丑、詔改之、山城之爲言山場也、山彌限也、謂限曲彌重場猶言地、訓曰志呂、曰止古呂、志呂猶縄志呂之志呂、謂疆場平坦、此國在山間、爲平坦地、因名焉、神名式有丹後國丹波郡稲代神社、是取地名於稲田、乃稲場之義、以場呼者與此相同也、和名抄有加賀國江沼郡山背郷、阿波國那賀郡山代郷等名、蓋亦山間一場之地乎、又有出雲國意宇郡山代郷山代神社等、按風土記、山代彦命處之、故名山代云、或曰山城山背也、謂在於大和之山背、今檢其地、二國之間非無山、所在皆丘阜逶遲不甚險、然則山背之背舊假字、而非背後之背也明矣、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度(附里程)

山城京師改暦所(三條千本)極高三十五度三十秒爲東西經度之中度、從東都日本橋(下同)東海道(佐屋越、下同)一百三十五里一十五町二十五間半、中山道一百三十八里一町二十六間半、

山城伏見(西濱町)極高三十四度五十六分經度東一分、從東都(東海道)一百三十六里一町五十五間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

山城　淀　三四度五四分〇〇秒　京　三五度〇〇分三六秒

伏見　三四度五六分〇〇秒(〇中略)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒

疆域

〔山城志 二〕疆域　東至江州界、西至丹攝二州界、南至伊和河三州界、北亦至丹州界、東西六里餘、南北十八里餘、

〔日本地誌提要 三山城〕疆域　東ハ近江、西ハ丹波、攝津、南ハ伊賀、大和、河内、北ハ丹波ニ至ル、東西凡六里、南北凡壹拾五里、

地勢

〔雍州府志一建置沿革〕凡山城北至若狹、南連大和河內、其間相距十七八里餘、東限近江伊賀界、西隣丹波攝津、其間或四五里或七八里、巽與乾之間地形長而廣、至艮方則地勢窄迫、

〔山城志二〕形勝　山河襟帶、自然作城、(延暦十三年勅云、)博大爽塏天府之國、形勢雄偉易於據守、

〔和漢三才圖會七十二山城本〕二條城(艮至比叡山三里、北至鞍馬山三里、東至三井寺三里半、戌方至愛宕山三里、南至伏見三里、未方至男山八幡四里半、至宇治五里、)淀(艮至江戶百二十五里、北至京都三里半、東至伏見一里、中方至大坂九里、)

道路

從京師至諸國行程大路

武州江戶百二十四里　常州鹿島百五十三里　相州鎌倉百十九里　野州日光山百五十八里　甲州身延山九十九里　豆州箱根山百一里　駿州富士麓九十二里　信州善光寺百十二里　越前敦賀二十九里　賀州金澤六十七里　越中立山百四十六里　奧州仙臺二百十二里　奧索視濱三百二十五里　和州奈良十一里　和州吉野二十三里　和州大峯二十九里　紀州熊野四十七里　紀州弱山二十八里　江州大津三里　羽州湯殿二百五十二里　尾州熱田三十七里半　江州多賀十六里　伊勢山田四十三里半　伊勢鈴鹿十八里　若狹小濱十八里　丹波龜山五里　攝州大坂十三里　攝州高槻六里

〔山城志二〕路程　自京師至江都一百二十里、至攝州大坂十二里有半、至高槻五里、至和州南都十里餘、至郡山十一里餘、至丹州龜山五里、至江州大津三里、至膳所四里、至淀三里、至伏見二里十八町

(官道)東國路　三條口至四宮辻(江州滋賀郡界)一里十六町(所歷曰粟田口、曰日岡、曰御陵、曰竹鼻等、又自四宮辻左折一蹊、謂之小關越、)　大和路　五條口至伏見豐後橋二里(所歷曰東福寺門前、曰稻荷、曰深草、曰藤森等、)豐後橋至廣野新田二里(歷巨椋、羽拍子、)新田至長池驛一里(所歷曰平川、曰久世、曰寺田等、)長池至玉水驛一里八町(歷奈島十六、)玉水至木津驛二里四町(歷綺田、椿杉藪、)木津至一坂(和州添上郡界)二十四町、(五條口至此通計九里、又自五條橋經新熊野西山村至勸修寺三十二町、謂之滑石越、又自五條橋歷清閑寺至御陵村一里十町、謂之汁谷越、)　西國路　東

寺口至向日町一里十二町、所歷曰吉祥院、曰石原、曰上久世、曰大藪、曰下久世、曰寺戸等、向日至山崎驛關戸攝州島上郡界一里二十四町、所歷曰開田、曰馬場、曰神足、曰調子、曰圓明寺等、東寺口至此通計三里、又經歷吉祥院、塔森、久我、下植野等、至山崎、謂之久我畷路、一名古道、又自東寺口至淀驛二里十八町、所歷曰上鳥羽、曰小枝、曰下鳥羽、曰横大路、曰富森、曰納所、自淀歷美豆而到河州交野郡界橋本金橋一里十町、謂之大坂路、又自淀至和州添下郡界相樂村六里十八町、所歷曰美豆、曰下奈耳、曰上奈耳、曰岩田、曰薪、曰田邊、曰興戸、曰高木、曰蓮田、曰下狛、曰祝園、曰菅井、曰吐師、謂之歌姬越、

丹波路、一名大枝道、　七條口至樫原驛一里十二町、所歷曰川勝寺、曰下桂、曰川島等、　樫原至沓掛二十九町、經塚原、　沓掛至峠丹州桑田郡界二十一町、七條口至此通計二里二十六町、

長坂越、一名山鷹路、　長坂口至杉坂二里十三町、歷鷹峯、　杉坂至西河内一里二十町、歷眞弓、中村、　西河内至峠丹州桑田郡界十九町、長坂口至此通計四里十六町、又自杉坂至上村一里一町、上村至峠十町、謂之細河路、山國細河倶丹州、

久多越、舊名若狹路、又云小川越、　鞍馬口至鞍馬一里二十一町、所歷曰賀茂、曰幡枝、曰市原、曰野中、曰二瀬等、　鞍馬至大見三里十四町、歷百井、　大見至久多三里、山路險嶮、　久多至峠江州高島郡界一里、鞍馬口至此通計八里三十五町、又自久多至楓木峠一里、謂之楓木越、小川楓木倶江州、又自久多至能見峠十八町、乃丹州桑田郡界、又自鞍馬經過花脊峠、別所及百井、大見、二分道、至大布施村三里四町、自村至嶺二十町、乃桑田郡界也、又自大布施村至八升村二十町、自村至嶺八町、亦桑田郡界也、又自八升歷隘土峠、至久多四里九町、羊腸崎嶇、不可馬行、

龍華越、舊名大原道、又名橡生路、　大原口至八瀬一里三十四町、歷山端、高野、　八瀬至小出石峠江州滋賀郡界二里十町、所歷曰戸寺、曰大長瀬、曰來迎院、曰勝林院、自大原口至此通計四里八町、橡生、龍華、舊屬本郡、今入江州、已上京師七口路、

嵯峨路　下立賣朱雀至鳴瀧二十八町、歷木辻、仁和寺門前、　鳴瀧至嵯峨清涼寺門前二十九町、歷山越、急嶮、　嵯峨至水尾一里十四町、　水尾至峠桑田郡界十町、朱雀至此通計三里九町、又自水尾至越畑峠一里十九町、山路險隘、

高雄越　一條朱雀至鳴瀧二十七町、歷仁和寺門前、福王寺、　鳴瀧至中島三十四町、歷平岡、善妙寺、　中島至峠桑田郡界一里一町、朱雀至此通計二里二十六町、

雲畑越　大宮森至雲畑出谷二里六町、歷中津川、中畑、　出谷至峠桑田郡界一里十五町、歷岩屋山下、自大宮森至此通計三里二十一町、已上丹州境界、

山中越　今出川口至白川村十五町、歷雲母越分道、　白川至峠江州滋賀郡界二十四町、今出川至此通計一里三町、又自一乘寺村至滋賀郡界檀木島三十四町、謂之白鳥越、

竹田路　東塩小路至伏見京橋一里二十五町、已上攝路、往自京師、

大澤嶺、攝州島上郡界、　至柳谷六町、柳谷至神足一里二町、歷下海印寺村、又自柳谷、有一嶺、外通尺代村、

外畑越、桑田郡界、　至塚原二里三町、所歷曰坂本、曰長坂、曰大原野、又自坂本、有一嶺、外通出灰村、行程一里、

唐櫃越、桑田郡界、　至下山田一里、

芹生越、桑田郡界、　至貴船村一里十四町、已上丹州境界、

二ノ尾峠、滋賀郡界、　至六地藏村二里八町、歷二尾、炭山、木幡、坂理善醍、又自二尾村、有一嶺、外通栗太郡曾束村、

禪定

寺越、（栗本郡界）自界至村十六町、自村至郷口三十町、（歷岩本、荒木上町、）郷口至宇治一里二十七町、（通計三里一町、又有禪定寺村、外通曾束村一里餘、）信樂越（甲賀郡界）至茶屋十六町、茶屋至大道寺一里三十三町、（歷川上、奥山田、湯屋谷等、）大道寺至郷口一里五町、（歷糠塚、贄田、上町等、）郷口至市邊一里十五町、（國界至此通計四里三十三町）作嶺、（ハッ）（甲賀郡界）至湯船三十二町、湯船至原山三十四町、原山至川原村二里、（所歷曰岡、曰白洒、曰石寺、曰井平尾、曰岡崎、自嶺至此通計三里三十町、又自湯船至郡曰龍芝二里七町、謂之多羅尾越、）野殿越、（甲賀郡界、距野殿村一里十二町、坂礎險難、）自村至北大河原一里、（已上江州境界）大河原越、（伊州阿拜郡界、距村二十七町、）北大河原驛至北笠置驛一里二十町、（歷上有市、下有市、）北笠置至草畑渡（笠置管内）十八町、渡至西村二里十八町、（所歷曰木屋、曰錢司、曰井平尾、曰岡崎、曰川原、）西村至神童寺十二町、神童寺至綺杉二十四町、（歷平尾、自國界至此通計六里十一町、一名神童寺越、）飛鳥路越、（添上郡曰、去飛鳥路、）梅谷（村三十町、坂路嶮巇、）自村至有市三町、柳生越、（添上郡界）至草畑渡一里二十町、（歷飛鳥路、南笠置、又自南笠置至國界七町、外通廣岡村、）越、（添上郡界）至里村驛一里九町、里村至草畑渡一里二十一町、（所歷曰船屋町、曰北村、曰山田屋敷等、自國界至此通計二里三十町、已上和州境界、）

普賢寺越、（交野郡界）至田邊二十三町、荒坂越、（交野郡界）至松井村十六町、洞嶺（交野郡界）至八幡志水町十八町、（又有一蹊、曰七ッ松越、倶河州境界、大澤嶺已下來自境界、）粟生路　友岡至粟生二十五町、粟生至沓掛一里五町、（所歷曰上里、曰石見、曰大原野、曰長野、曰岡新田等、通計一里三十町、）愛宕路　上嵯峨至樒原一里十九町、（所歷曰天龍寺門前、曰上山田、曰松尾、）樒原至向日町三十二町、（歷寺戸物集女、（モズメ）通計二里十五町、）新道　伏見至藤森二十三町、藤森至小野一里六町、（歷大龜谷、勸修寺、）小野至追分一里二町、（通計二里三十一町）宇治路　小野至六地藏驛一里、（歷醍醐、石田等、）六地藏至宇治橋一里、（歷木幡、五ヶ莊等、）宇治至廣野新田十六町、（通計二里十六町）賀茂路、（一名河南路）木津村至法華寺野二十八町、（粟生路已下圖内行路之號）

〔日本實測錄（二街道）〕從東京東海道至西京、（○中略）

山城國宇治郡髭茶屋町　一里三十町一間　西京三條大橋東頭（沿鴨川至中島村小枝橋、二里三町五十三間、從小枝橋至桂川口、一里十七町五十一間、）一十六町二十一間　同寃師町（至千本通四辻、三町一十四間、從四辻至西三條臺改暦所、六町三十五間、）二町八間

同神泉苑町、三十五度三十秒、（從東京至西京）東海道通計一百三十四里一十六町三十五間（○中略）

從伊勢國津、歷伊賀國、至木津、（○中略）

山城國相樂郡北大河原村至大和國小柳生陣屋、二里三町三十五間、　一里八町四十二間　北笠置村至笠置寺、一十六町二十五間、

二里一十七町九間半至加茂宿、二里九間半、　里村至奈良坂村、一里一十町四十八間、　一里一十五町二十八間半　木津

宿本町、三十四度四十四分半、從津至木津、街道通計二十一里二十六町一十四間

從伊勢國市場庄、歷大和國、至西京、○中略

山城國相樂郡木津宿本町　二里四町九間半　綴喜郡井出鄕水無村玉水宿　一里九町一十五

間　久世郡富野村長池町、三十四度五十分半、　一里四町三十六間　廣野村至宇治鄕橋本町、二十八町四十九間半、

一里二十四町四十五間　紀伊郡向島村橋詰町　七町三間至伏見玄蕃町、二丁四間、　堀內村至鐵門、八丁三十七間、　深草

一十八町三十一間至大龜谷村七十軒町、一十六町四十二間、　大龜谷村鳥居崎町　二町九間至藤森社前、四十五間、

村玄蕃町　一十八町一十八間　稻荷村御前町至稻荷山稻荷社、二町三十間、　二十五町一十四間至東福寺前、八町一十四間、

間、　西京大佛前　一十九町三十間至建仁寺前、九町六間、從寺前、至四條通、四町五十一間、　西京三條大橋東頭從市場庄、至西京、

街道通計四十九里二十五町五十七間○中略

從東海道鳥居川、沿勢田川、至伏見、○中略

山城國久世郡宇治鄕橋本町、三十四度五十三分半、歷宇治橋、至宇治郡宇治鄕、一丁四十三間、從宇治鄕、至宇治神社、四丁一十八間、又從宇治鄕、至大鳳寺村、四丁五十七間、從大鳳寺村、至三室戸寺、一十一丁四十二間、又從大鳳寺村、至黄檗山萬福寺前、一十八丁一十五間、從寺前、至大龜谷村七十軒町、一里九丁二十一間、　三十二町

一十三間　紀伊郡向島村　二十一町一十四間　同橋詰町　四町至伏見玄蕃町、二町、　伏見豐後橋町歷彈正島、至三栖町、一十一町七間、　一町一十五間　同彈正町歷元材木町、至撞木町、四丁八間、　七町一十間至撞木町、四丁二十八間、　同南濱

町、三十四度五十六分、　二十六間　同京橋從鳥居川、至伏見、　街道通計七里二十八町二十四間

〔日本實測錄四街道〕從山城國髭茶屋、歷伏見及大坂、至西宮、

山城國宇治郡髭茶屋町　三里六町一十五間至大龜谷村鳥居崎町、二里九丁、從鳥居崎町、至深草玄蕃町、二里九間、　紀伊郡伏見京

橋　一里一十町二十八間半至三栖町、八丁五十一間、從三栖至淀小橋、三十五丁五十八間半、　久世郡淀池上町、三十四度五十四

分半、一十三町四十九間至木津川岸、一十丁二十五間、綴喜郡美豆村木津川岸、沿木津川岸、至淀川四町四十一間、三十町五十九間、橋本町一十一町八間半至國界、三町三十八間、河内國交野郡楠葉村沿淀川、至牧方宿、二里二町四十四間、○下略

〔國花萬葉記二下山城〕拾遺

宇治大路方　うぢより木幡を經て京師に上るの道也、うぢ橋の東三室に至る道路をすべて宇治大路と云へり、それをおちかたと云ならはせるは誤り也、○中略

諸方道法

大津三リ　比叡山三里　伏見二里半　鞍馬三リ　淀三リ　大原三里　山崎三里半　八幡四里　岩屋四里　勝尾八里半　有馬十六里　黃檗三里　嵯峨二里　宇治四里　愛宕三リ　高雄三里　唐崎四リ　膳所四里　石山五里　牛尾二里半　醍醐三里　栗生三里半　龜山五里　奈良十一里　大坂十二里

〔雍州府志一形勝〕凡自四方入京師有七道、是謂七口、是自古所定之也、於今京師繁華日增月盛、故七口之外、入京師之道有數箇所、人馬之往來不絕跡、所謂七口者、東三條口、伏見口、鳥羽口、七條丹波口、長坂口、鞍馬口、大原口是也、倭俗出入之道謂口、○中略

〔山州名跡志四上愛宕郡〕粟田口　東國ヨリ鳳城ニ入ル路口ノユヘニ口ト稱ス、粟田ハ總名ナリ、其方境、東ハ白河ヲ限リ、西ハ鴨川ヲ限リ、北ハ二條ノ東ヲ限リ、是ヲ下粟田ト云フ、其北ハ北白河ニ至ッテ上粟田ト號ス、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月乙巳、太師藤原惠美朝臣押勝、逆謀頗泄、壬子、軍士石村○村原脫、據一本補、主石楯斬押勝、傳首京師、押勝者、○中略遂起兵反、○反原作及、據一本改、其夜相招黨與、遁自宇治奔據近江、山城守日下部子麻呂、衞門少尉佐伯伊多智等、直取田原道、先至近江燒勢多橋、

〔下學集上天地〕苦集滅道洛陽東山清水寺南、清閑寺之麓也、三井開山敎待和尙欲往城南山崎別業、及經此地、其木履之響鳴作苦集滅道之音、奇異事也、由是厥後關東左遷人、亦及

經此道時者、必數四諦之法、故呼此道云苦集滅道也、

〔保元物語上〕官軍方々手分事
彼等ヲ南庭ニ被召テ、少納言入道ヲ以テ、去ヌル二日一院〇鳥羽崩御後、武士共兵具ヲ調テ、東西ヨリ都ヘ入集ル事道モ去アヘズ、以ノ外ノ狼藉也、弓箭ヲ帶センヤカラヲバ、一々ニ召捕テ參上スベキ由被仰下、各庭上ニ跪テ是ヲ承ル、義朝義康ハ内裏ニ候テ、君ヲ守護シ奉レ、其外ノ撿非違使ハ、皆關々ヘ可向トテ、宇治路ヘハ安藝判官基盛、淀路ヘハ周防判官季實、粟田口ヘハ隱岐判官惟重、久目路ヘハ平判官實俊、大江山ヘハ新藤判官助經承テ向ヒケリ、
〇按ズルニ、久々目路ハ苦集滅道ト同ジクシテ、清閑寺ノ麓ヨリ山科ニ通ズル道ナリ、

〔源平盛衰記二〕額打論附山僧燒清水寺事幷會稽山事
搦手ハ、大關、小關、四宮川原モ打過テ、苦集滅道ヤ、清閑寺、歌ノ中山マデ攻寄タリ、

〔源平盛衰記五〕山門奏狀事
座主〇明雲一切經ノ別所ヲ出テ配所ヘ赴給フ、〇中略彼粟田口、雨葉山、四宮河原ヲ打過テ、〇中略粟津ノ浦ニゾ出給フ、

〔源平盛衰記八〕山門變改事
南都ノ大衆、芳野十津川ノ惡黨等ヲ相語ヒテ、宇治路、淀路ヨリ挾テ寄ルナラバ、〇下略

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最期事
宮〇高倉ハ御淨衣ニテ御馬ニ召、〇中略宇治ヘゾ入セ給ケル、宇治ト寺トノ間、行程纔ニ三里計ナリ、

〔源平盛衰記三十〕平家兵被向宇治勢多事
新三位中將資盛大將軍トシテ、〇中略宇治路ヨリ田原路ヲ廻テ、近江國ヘ指下サル、

〔源平盛衰記三十五〕高綱渡宇治河事

大勢河ヲ渡ヌレバ、〈○中略〉或ハ木幡大道、醍醐路ニ懸ツテ阿彌陀ガ峯ノ東ノ麓ヨリ攻入モアリ、或ハ小野庄、勸修寺ヲ通リテ七條ヨリ入者モアリ、或ハ櫃川ヲ打渡リ、木幡山、深草里ヨリ入モアリ、或ハ伏見、尾山、月見岡ヲ打越テ、法性寺一ノ橋ヨリ入モアリ、道ハ互ニ替レドモ、同ジ都ヘ亂レ入ル、

〔源平盛衰記 三十五〕巴關東下向事

木曾〈○義仲〉ハ、此彼ヲ打破テ東ヲ差テ落行ケリ、龍華越ニ北國ヘ傳トモ聞ケリ、長坂ニカヽリ播磨ヘ共云ケリ、

〔續日本紀 五元明〕和銅四年正月丁未、始置都亭驛、山背國相樂郡岡田驛、綴喜郡山本驛、〈○下略〉

〔日本後紀 十二桓武〕延暦二十三年六月己巳、停山城國山科驛、

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年閏十二月甲辰、遊獵于水生野、御於山崎驛、

〔類聚國史 三十二帝王〕弘仁四年二月己亥、遊獵於交野、以山埼驛爲行宮、是日津頭失火、延燒廿一家、

〔凌雲集〕御製〈○嵯峨〉廿二首〈○中略〉

河陽驛經宿、有懷京邑、

河陽亭子經數宿、月夜松風惱旅人、雖聽山猿助客叫、誰能不憶帝京春、

〔朝野群載 三文筆〕遊女記

自山城國與渡津、浮巨川西行一日、謂之河陽、往返於山陽西海南海三道之者、莫不遵此路、〈○下略〉

〔山城名勝志 六乙訓郡〕河陽〈或云、山崎同所歟、〉

〔太平記 十六〕正成下向兵庫事

正成是ヲ最期ノ合戰ト思ケレバ、嫡子正行ガ今年十一歳ニテ供シタリケルヲ思フ樣有トテ、櫻井ノ宿ヨリ河内ヘ返シ遣ストテ、庭訓ヲ殘シケルハ、〈○下略〉

〔日本國郡沿革考 畿內二〕山城 古作山背、或作山代、紀通 延暦十三年十一月、詔改山背國爲山城國、是時莫都焉、民皆謳歌、異口同辭、號平安京、承和三年十月、承前之例、畿內國次以大和國處之第一、勅宜以山城國處之第一、上國、管八郡四百七十七村、郡名、以延喜式、和名抄、拾芥抄所載之異同、注各郡下、而色葉字類抄、運歩色葉抄、古本節用集、亦載郡名、各有小異同、

乙訓 五十二村 古弟國、後爲郡、延暦十六年八月、遷國治於長岡京南、舊在葛野郡、地震也、貞觀三年六月、國司奏、以河陽離宮、少行幸、而稍就破壞、請爲國司爲政之所、當存寄宿、臨有行幸、而先掃之、○中略 紀伊 三十四村 葛野 八十一村 久世 四十二村 愛宕 八十一村 宇治 五十一村 日本紀作菟道、萬葉集氏川、即是、 綴喜 五十四村 古事記作筒木、仁德紀筒城岡、萬葉集管木之原、即是、 相樂 八十二村

〔山城志 二〕建置沿革 畿內第一之城、天文距極三十五度半強、尙古曰山背國、以其在大和國北爲名、一作岡木代、又山岡、又山代、延暦十三年十一月改爲山城、神武天皇以天目一命爲國造、舊府在相樂郡甕原、貞觀中、遷于山崎、建久中執國政於六波羅、延元以來、徙于室町、今在二條城北、謂之所司代、其所職掌兼知畿內及西州事、

〔日本地誌提要 三山城〕沿革 桓武天皇ノ御宇、皇都ヲ葛野愛宕二郡ノ地ニ定メ、左右京職東西市司ヲ置、又國司アリ、府ヲ乙訓郡河陽離宮ニ置キ、都外ノ事ヲ領ス、鎌府ノ建ツ、京都守護ヲ設ケ、北條氏執權ノ日、南北六波羅探題ヲ創置シテ、京畿山陰山陽南海諸州ノ政刑ヲ兼掌セシム、建武中興大內ヲ營造シ、省司諸職始テ舊式ニ復セリ、既ニシテ足利尊氏反シ、後光明天皇ヲ擁立シ、將軍府ヲ室町ニ開キ、國命ヲ執リ、應仁以後、輦下大ニ亂レ、永祿中、三好松永群黨、將軍義輝ヲ弑シ、淀、勝龍寺諸城ニ據ル、天正ノ初、織田信長盡ク之ヲ平ラゲ、所司代ヲ京都ニ設ク、信長弑セラレ、豐臣秀吉代テ國權ヲ握リ、聚樂及伏水ニ城テ京都ヲ守ル、豐臣氏亡ビ、德川氏亦所司代ヲ置キ、二條城ヲ築キ、山城、大和、丹波、近江ノ政刑ヲ統シメ、伏水ニ奉行ヲ置キ、松平定綱ヲ淀ニ封ズ、享保中、稻葉正知之ニ代リ世襲、王政革新、所司代及伏水奉行ヲ廢ス、明治二年、乘輿東遷シ、留守官

ヲ置キ二條城ヲ以テ府トナス、尋テ淀藩ヲ廢シ留守官ヲ府ニ併ス、

〔先代舊事本紀 十國造〕山城國造

橿原朝 ○神武 御世、阿多根命爲山代國造、

山背國造

志賀高穴穗朝 ○成務 御世、以曾能振命定賜國造、

國府

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年十月己未、承前之例、畿內國次、以大和國處之第一、勅宜據新式改之、以山城國處之第一、

〔倭名類聚抄 五國郡〕山城國 源唱朝臣爲方之時奏聞、以河陽離宮爲國府、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕山城 上 八郡 乙訓府

〔日本紀略 桓武〕延曆十六年八月戊寅、遷任山城國治於長岡京南、以葛野郡地勢狹隘也、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年六月七日庚戌、山城國奏言、河陽離宮久不行幸、稍致破壞、請爲國司行政處、○中略 許之、

郡

〔延喜式 二十二民部〕山城國 上 管乙訓 葛野 愛宕 紀伊 宇治 久世 綴喜 相樂

〔倭名類聚抄 五國郡〕山城國 ○略註 管八 ○略註 乙訓 於止久邇 葛野 加止乃 愛宕 於多岐 紀伊 岐 宇治 宇知 久世 久世 綴喜 豆々岐 相樂 佐加良加

〔皇國郡名志〕山城國 八郡

乙訓オトクニ ●久我 ●岩倉 ●久世 〈向日町 〈神足 〈山崎 淀川ニ瀕テ攝丹界郡

葛野カトノ 洛西八九條、東寺、島原、壬生、金閣、嵯峨、清瀧、高雄、愛宕山、梅津、樫原、國中ノ郡也

愛宕オタギ 洛中ヨリ東ハ粟田口、白川、西ハ二條御城、北野、本願寺、南ハ七條限、北ハ鞍山迄、江丹界郡

紀伊キ 〈伏見 淀 ●竹田 ●上鳥羽 國中ノ郡也

宇治（ウヂ）　●日ノ岡　●御陵　上醍醐　●大塚　●追分　江界郡

久世（クセ）　●宇治　●長池　國中ノ郡也

綴喜（ツヾキ）　〈玉水　〈八幡　●橋本　河界ノ郡

相樂（サガラカ）　●木津　●大河原　●北カサヤ　伊賀大和界

○按ズルニ、本書ノ凡例ニ、郡名ノ下ノ地名□ハ城地、〈ハ陣屋、卄御關所、●ハ驛地、無印ハ名高キ村名也、△ハ神社佛閣名所舊跡山川等ト見エタリ、

〔郡名異同一覽〕山城

六國史	古事記以下古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	東鑑以下諸書古文書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革帳	地誌提要、郡區編制、
		葛野（カドノ）	同（加止乃）	同	同（闕元）	同（カドノ）	同	同	同（カドノ）	同
		愛宕（オタギ）	同（於多岐）	同	同（闕元）	同（オタギ）	同	同	同（オタギ）	同
墮國（紀）　弟國（紀）	同（古）　同（書）	乙訓（オトクニ）	同（於止久爾）	同	同（闕元）	同（オトクニ）	同（オトクン）	同	同（オトクニ）	同
		紀伊（キイ）	同（岐）	同	同（闕元）	同（キイ）	同	同	同（キイ）	同
菟道（紀）	鵜路	宇治	同（宇知）	同	同（闕元）	同（ウヂ）	同	同	同（ウヂ）	同

乙訓郡

久世	綴喜	相樂	
	筒城紀	相樂續 想樂古	
久西	大筒木古 管木万 綴肃	懸木古 相樂古	
久世クセ	綴喜ツヽキ	相樂サカラ	管八
同	同	同	同
同	同	同	八郡
同	同	同	
同クセ	同ツヽキ	同サガラ サウラタ	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同クセ	同ツヽキ	同サウラタ サガラ	同
同	同	同	同

○按ズルニ、本書ノ凡例ニ、紀ハ日本紀、續ハ續日本紀、後ハ日本後紀、續後ハ續日本後紀、文ハ文德實錄、三ハ三代實錄、古ハ古事記、舊ハ舊事紀、史ハ類聚國史、略ハ日本紀略、万ハ萬葉集、東ハ東鑑、圖ハ古圖、知ハ寬知集、元ハ元祿帳、銘ハ郡銘錄トアリ、

〔大館常興日記〕天文七年九月朔日、一城州下○郡○五○郡○田畠段銭、爲右京兆被相懸之間、被成御內書、四日、一城州下。五郡。段銭事、六角方より京兆へ被申候返答如此候由にて、京兆并播州書狀六角方へ也等六角方より被上進之、

〔伊呂波字類抄〕也國郡山城國　管八郡　乙訓府オトクニ

〔古事記〕中垂仁喚上美知能宇斯王之女等、○中略其弟王二柱者因甚凶醜返送本土、於是圓野比賣マトヌヒメ慚言、同兄弟之中以姿醜被還之事、聞於隣里、是甚慚而、○中略到弟國之時、遂墮峻淵而死、故號其地謂墮國オチクニ、今云弟國オトクニ也、○又見日本書紀

〔古事記傳二十五〕弟國は和名抄に、山城國乙訓郡於止久邇、神名帳に、同郡乙訓オトクニ坐ス大○大恐火誤雷神社、書

紀纂體卷に十二年、遷都弟國など見ゆ、（古弟國と云し地は、今の井内村今里村のあたりなり、井内村に乙訓明神の社あり、又今里村なる法皇寺と云寺は、昔は乙訓寺と云つと或書に云り、宇治拾遺物語に、長岡の邊をすぎて、乙訓川のつらをすぐと思へば、又寺戸の岸をのぼる云々と云り、寺戸村と云も今もあり、）

〔日本書紀 十七 繼體〕十二年三月甲子、遷都弟國、

〔山城志 三〕乙訓郡（東至紀伊郡界、西至丹州桑田郡界、南至攝津島上郡界、北至葛野郡界、）

〔山城名勝志 六 乙訓郡〕凡當郡、東限桂川下流、南限淀河、西南方限水無瀨河、西限出羽村川、北限丹波龜山路、

〔山州名跡志 一 八郡封境〕乙訓郡　當郡又南北ニ亘テ坤ニ至ル、北ハ樫原ノ西、大枝坂ノ東、塚原ヲ限ル、其西ヨリ南ニ至テハ山ヲ限ル、其西北ハ丹波ヲ爲隣、但小鹽山ノ後邊、乾ニ外畑村アリ、是當郡ニ屬ス、坤ハ大山崎ヲ限リ、艮ハ吉祥院ノ西北ニ當テ桂川ノ西面、上久世、下久世、物集女、寺戸、其南ハ開田ニ至ル、東ハ桂川ヲ限ル、川ノ西ニ久我、古河、鴨川村、赤井、菱河等ノ村アリ、其南西ハ大山崎ノ東ニシテ、調子、久貝等ノ村アリ、大山崎ノ西ハ津國ヲ爲隣也、

〔山州名跡志 十 乙訓郡〕西岡　此號ハ乙訓郡ノ別稱也、當郡北ハ大江ノ坂、南ハ山崎、東ハ川、西ハ至西山總名也、謂ハ依土地形ナリ、其地沓掛村（桂西一里余）在西ノ山ヨリ續テ、南方鷄冠井向日山ニ至テ、凡三十餘町ノ間、一擅ノ岡山アッテ、王城ノ西ナルノ謂也、上古ニハ稱長岡、凡此丘ヲ領スル民村ハ、岡村、（在桂原南）物集女、寺戸、鷄冠井等、此丘ノ在東面南北ニ亘レリ、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年七月癸酉、在山背國乙訓郡火雷神、毎旱祈雨、頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆三年五月丙戌、勅遣中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂（○中略）等於山背國、相乙訓郡長岡村之地、爲遷都也、

〔東寺百合古文書 一〕久世庄文書案

うりわたすなか地事

合壹段者　あり　山城國おと國のこほり上久世庄内すけとも名ゐあざなのつぼ〇中略

永和貳年丙辰十一月廿日　うりぬし山城國おと國のこほり上久世庄　き七判〇下略

〔伊呂波字類抄也郡〕山城國　管八郡〇中略　葛野カトノ

〔古事記上〕次大山上咋神、亦名山末之大主神、此神者坐淡海國之日枝山、亦坐葛野之松尾、用鳴鏑神者也、

〔古事記傳十二〕葛野は加豆怒カヅヌと訓べし、中卷明宮〇應神段の大御歌に見ゆ、書紀垂仁卷に、唯竹野媛者因形姿醜返於本土、則羞其見返、到葛野自墮輿而死之、故號其地謂墮國、今謂弟國訛也、とあるを思へば、古は乙訓郡のあたりまでかけて、泛く葛野と云しなり、(中略)加豆カヅに葛字を用ひたるは、久豆を加豆とも云しなり、字音を取るにはあらず、後に加杼野カドノと云は、加豆の轉れるなり、下總の葛飾は音を取れり、例と異なり、

〔古事記開化中〕次袁邪本王者(開化皇子日子坐王子)葛野之別、近淡海蚊野之別祖也、

〔古事記應神中〕一時天皇越幸近淡海之時、御立宇遲野上、望葛野歌曰、知婆能チバノ、加豆怒カヅヌ、袁美禮婆モミレバ、毛毛知陀流チダル、夜邇波母美由ヤニハモミユ、久爾能富母美由クニノホモミユ、

〔古事記傳三十二〕葛野は、〇中略垂仁紀を引て云る如く、古は乙訓のあたりをも、葛野と云しことあれば、なほ葛野、乙訓、紀伊三郡にわたりて、其平原なる地を、廣くすべて云し名なるべし、延曆十三年十月の詔に、今京の事を、葛野乃大宮地とあり、されば宇遲より望給ふこと宜なり、或說に、此の葛野は、久世郡なるも、葛野と云るは、宇治より葛野郡までは遠ければ、望賜ふべきに非ずと思ふから、御歌のもゝちだるやにはとある詞に依て、富野てふ名に附會ヒキツケたるものなるべし、そは葛野と云は、古には廣き名なりしことを知ざるひがことなり、〇中略知婆能チバノは、契冲云く、千葉之チバノなり、葛は葉の繁き物なれば、其枕詞なり、下總國に千葉郡あるも、さる意以て名けたるか、加豆怒袁美禮婆カヅヌヲミレバは、葛野を見ればなり、契冲云、加豆カヅは加豆良カヅラの下略なり、

愛宕郡

〔山城志 四〕葛野郡(東至二京師及愛宕郡界一、西北至二丹州桑田郡界一、南至二乙訓郡界一、)

〔山州名跡志 一 八郡封境〕葛野郡　當郡ハ愛宕(オタギ)ノ西ニ雙テ南北ニ長シ、東ハ洛陽朱雀通ニシテ、艮ハ紫野ノ北、氷室ニ亘リ、北ハ小野、東河内、西河内、眞弓等ヲ攝シ、北ニ山アリ、丹波ヲ爲レ隣、乾ハ鷹峯ノ奥長坂、及杉坂ヲ經テ細河ニ至リ、其上ニ丹波堺アツテ、彼國山國ニ至ル、委二卷中一、其南西ハ北山、絹笠、大内山(仁和寺山)ヲ限リ、及栂尾、高尾、愛宕山ヲ限リ、其南ハ松尾、葉室山等ヲ限リ、其南ハ大枝ノ坂ヲ限ル、西後皆丹波ト爲レ隣、(坂峠西有二國界一、見二卷中一、)坂ヨリ東ニ至テハ、樫(カタギハラ)原、桂ヲ經テ、川勝寺村、東ハ朱雀通ヲ限ル、川勝寺ノ坤ニ御所ノ内、梅(ガ)小路村アリ、其西南ハ牛(ガ)瀬、下津林、唐橋等ヲ經テ、南ハ九條通、巽ハ朱雀通ノ辻ヲ限ル、又西九條村、東鹽ノ小路等ノ民居、是ヲ當郡ニ攝ス、此地愛宕郡ノ地ナリ、此所末代ニ至テ田畠トナスヲ以テ、年貢公役ニツイテ、其支配所ニ從フニ、忿宜ユヘナリ、東鹽小路トイフハ、東洞院通七條ノ南一町許ニ、大路ノ東ニ民居アル是ナリ、是今葛野郡ニ攝ス、其南ニ洛陽外封ノ土堆アリ、是ヨリ五町許ニ九條通アリ、是ヲ限ル、其南ハ紀伊郡也、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜七年十二月戊申、左京人從六位下秦忌寸長野等二十二人賜二姓奈良忌寸一、山背國葛野郡人秦忌寸箕造等九十七人朝原忌寸、

〔三代實錄 十一 清和〕貞觀七年九月己卯朔、詔以二山城國葛野郡山地一町八段一賜二清源山寺一、

〔日本紀略 四 村上〕應和三年六月廿五日乙巳、大井河塞料掃部寮舊薦三百枚宛二給之一、依二同國(○山城)葛野郡請申一也、

〔伊呂波字類抄 也 國郡〕山城國　管八郡(○中略)　愛宕(ヲタキ)

〔山城志 五〕愛宕郡(東至二宇治及江州滋賀郡界一、西至二葛野郡界一、南至二紀伊郡界一、北至二丹州桑田、江州高島二郡界一、)

〔山州名跡志 一 八郡封境〕愛宕郡　當郡ハ王城ヲ爲二中央一、東ハ洛陽ノ東山ヲ限ル、艮ハ叡山ノ後西ニシテ、下ニ八瀬大原アリ、其中ニ大長瀬、勝林院村等アリ、委ハ載二卷中一、大原ノ北ニ近江堺アリ、其所

紀伊郡

小弟子村ノ北ニシテ、是ヲ云山城峠、中ニ往還道アリ、近江朽木及若狹小濱ニイタル、大原領西ニ山アリ、南北ニ亘ル、其山下ニ艸生、野村等アリ、其西南ニ號藥王坂坂路アリ、是ヲ越テ長谷ニ出、其西北ハ静原、鞍馬等ニ至ル、其地又東西ニ山アツテ南北ニ續キ亘ル、鞍馬ノ北ニ大悲山(センアリ、麓ニ村アリ、云大布施、蓋是大悲山ノ民語ナリ、其北ハ丹波ト爲隣、是ヲ云北丹波、此所當郡北ノ究竟也、鞍馬ノ乾ニ芹生ノ里アリ、是貴布禰ノ北ナリ、其南西ハ岩屋ヲ限ル、其南ハ畑村ヨリ西賀茂ニ亘リ、鷹峯、紫野、(次第亘南)蓮臺野、其南、町ニ至テハ朱雀通(今云千本通)ヲ限ル、朱雀通其坤ハ同街九條ヲ限ル、巽ハ東福寺ノ北一ノ橋ヲ限ル、

〔續日本紀(三十六光仁)〕寶龜十一年四月庚申、山背國愛宕郡人正六位上鴨禰宜眞髮部津守等一十人賜姓賀茂縣主、

〔日本紀略(十三後一條)〕寛仁元年十一月廿五日己未、天皇行幸賀茂社、皇太后(○藤原彰子)同輿、宣命云、愛宕郡可奉寄之由、先年祈申、而件郡、或帝王城都、或明神鎭地、皆是萬代相傳之處、非一人自由之地、仍南限皇城北大路、東限郡界、西限大宮東大路末、北限郡界、但此内有陵室藏氷之邑、是百王之職事、難致一時之改易、縦在神郡内、可除此一邑、抑上下御社平均所進分也、

〔伊呂波字類抄(也國郡)〕山城國　管八郡(○中略)　紀伊(キイ)

〔山城志(六)〕紀伊郡(東至宇治郡界、西至乙訓及綴喜郡界、南至久世郡界、北至京師及愛宕葛野二郡界、)

〔山州名跡志(一八郡封境)〕紀伊郡　當郡南北ニ亘ル、東ハ慧日山、(東福寺山)稻荷山ヲ限リ、艮ハ東福寺ノ北一ノ橋ヲ限リ、其西ニ至テハ九條ヲ限ル、乾ハ唐橋村ノ西北、西ノ庄ヲ限リ、其南西ハ吉祥院、石原、塔ノ森、其西面ハ桂川ヲ限ル、坤ハ鳥羽、横大路、富ノ森、納所、淀ニ至テ爲限、淀ノ西水垂ハ東ニ桂川ノ末アツテ、此所川ノ西トイヘドモ、古ハ無川、仍テ當郡也、此川古ハ今云フ横大路ノ東ニ流テ、宇治川ノ末ト合シテ淀ニ入シナリ、委ハ載卷中、淀ニ至テハ小橋ヲ限ル、艮ハ伏見豐後橋ノ南ノ爪ヲ限ル其

宇治郡

ヨリ北ニ續テ、東ハ伏見古城ノ山ヲ限ル、其北ハ深草山ヨリ東福寺山ニ續テ爲限、淀ノ東面ハ川ヲ限ル、其東ハ久世郡ナリ、

〔日本書紀十九欽明〕天國排開廣庭天皇〈〇欽明中略〉天皇幼時、夢有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寤驚、遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年七月丙辰、山背國紀伊郡人從八位上金城史山守等十四人賜姓眞城史、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年九月廿三日丙戌、山城國紀伊郡墾田二段、返給實相寺、

〔日本紀略四村上〕應和三年六月廿五日乙巳、自今日三箇日下神泉苑池水、漑京南紀伊郡、依山城國申請也、

〔伊呂波字類抄也郡〕山城國　管八部〈〇中略〉　宇治ウチ

〔日本書紀九神功〕三月〈〇攝政元年〉庚子、命武内宿禰和珥臣祖武振熊、率數萬衆令擊忍熊王、爰武内宿禰等、選精兵從山背出之、至菟道以屯河北、

〔古事記中應神〕於是大山守命者、違天皇之命、猶欲獲天下、有殺其弟皇子之情、竊設兵將攻、〈〇中略〉渡到河中之時、令傾其船、墮入水中、爾乃浮出、隨水流下、卽流歌曰、知波夜夫流、宇遲能和多理邇、佐袁斗理邇、波夜祁牟比登斯、和賀毛古邇許牟、於是伏隱河邊之兵、彼廂此廂一時共興、矢刺而流、故到訶和羅之前而沈入、故以鉤探其沈處者、繫其衣中甲而訶和羅鳴、故號其地謂訶和羅前也、

〔山城志七〕宇治郡〈東北至江州滋賀郡界、西至愛宕紀伊二郡界、南至久世郡界、〉

〔山州名跡志一八郡封境〕宇治郡　當郡又南北ニ行テ巽ニ亘ル、北ハ山科郷御廟野ヲ限リ、其東ハ追分ヲ限ル、其所町ノ東ニ堺ノ杭アリ、其地山科小山領ナリ、艮ハ小關ニシテ、江州三井寺ノ南ニ至ル、其艮ニ藤尾村アリ、東ハ山ヲ限ル、其山南ニ亘、醍醐山ニ續ク、其巽ニ山ヲ越テ、笠取、炭山アリ、是ヲ限ル、東面ハ山ニシテ近江ト爲隣、其卯辰ニ至テハ大鳳寺村、御室戸、宇治ニ至リ、宇治橋ノ東ノ

爪ヲ限ル、其西ハ宇治川ノ東ノ岸ヲ限ル、伏見ノ東面ニシテハ、伏見山ヲ限リ、其北ハ深草、稻荷山等ノ東面ヲ限ル、

久世郡

〔伊呂波字類抄 國郡也〕山城國　管八郡〇中略　久世クセ

〔山城志 八〕久世郡 東至宇治綴喜二郡界、西南至綴喜郡界、北至紀伊郡界、

〔山州名跡志 一八 郡封境〕久世郡　當郡ハ艮ニ入テ南ニ亘リ、東西不寬、艮ハ平等院ノ奥白河ヲ限ル、其所近江ト爲隣、宇治ハ當郡ノ子丑ニ當テ川ヲ限ル、其ヨリ南ニ至テ、中ニ大和大路アリ、此所ニテイハヾ、北ハ豐後橋ノ南ノ爪ヲ限リ、其東ハ宇治川ノ岸ヲ限ル、南境ハ巨椋オグラノ南、大和大路ノ中ニ、灰拍子、平河、久世、寺田、長池村アリ、其南中村ヲ限ル、中村内大和大路中有石橋、是堺也其西ニ至テハ、川ノ北岸ヲ限ル、川ハ木津川ノ末ニテ淀大橋ノ下ニ流ル川ノ北ニ富野トノ、枇杷莊、水主等ノ村アリ、但水主一村ハ川ノ南綴喜郡ニ攝ス、乾ハ御牧、一口イモアラヒヲ限ル、御牧ノ卯辰ニ亘テ、狹山、佐古、林、大久保、平河アリ、皆平地ナリ、其北西ハ水境ニテ巨椋ノ入江、宇治川ノ末也、水主ヲ西ニ向ヘバ、上津屋カウツヤ下津屋、封戶フコ、御牧、一口等ニ至ル、一口ハ淀ノ東面ニテ中間ハ川ナリ、此川ヲ爲限、淀ハ紀伊郡也、坤ハ淀ノ大橋ノ北ノ爪ヲ限ル、橋ノ北ハ同所小橋ヲ限ル、酉戌亥ニ至テハ、伏見ヨリ巽ニシテ宇治川、伏見川ノ入江、曠々タル水面及葦原ヲ爲限、

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年九月辛丑、正三位藤原朝臣愛發薨、〇中略至九年〇承和秋、連逮伴健岑謀反事、出于京外、在山城國久勢郡別墅而薨焉、時年五十七、

〔萬葉集 九 雜歌〕鷺坂作歌
山代ヤマシロノ久世乃鷺坂クセノサギサカ、自神代カミヨヨリ、春者張乍ハルハハリツヽ、秋者散來アキハチリケリ、

綴喜郡

〔伊呂波字類抄 國郡也〕山城國　管八郡〇中略　綴喜ツヽキ

〔山城志 九〕綴喜郡 東至江州甲賀郡界、西至河州交野郡界、南至相樂郡界、北至久世紀伊二郡界、

相樂郡

〔日本書紀 仁德 十一〕三十年九月乙丑、皇后○磐之媛中略、更還山背興宮室於筒城岡南而居之、十月甲申朔、遣的臣祖口持臣喚皇后、一云和珥臣口子臣 爰口持臣至筒城宮雖謁皇后而默之不答、時口持臣沾雨雪、以經日夜、伏于皇后殿前而不避、於是口持臣之妹國依媛仕于皇后、適是時侍皇后之側、見其兄沾雨而流涕之、歌曰、揶莽辭呂能、菟菟紀能瀰揶珥、茂能莽烏輸、和餓齊烏瀰例麽、那瀰多愚摩辭茂○又見古事記下

〔日本書紀 繼體 十七〕五年十月、遷都山背筒城、

〔山州名跡志 八 一 綴喜郡 封境〕綴喜郡 始作筒城 當郡ハ寅卯ヨリ坤ニ亘リ、其中東西ニ大和大路アリ、其所ニテイヘバ、北ハ長池村ヲ限リ、南ハ玉水ノ南、澀河トイフ河ヲ爲堺、其南ハ相樂郡ナリ、寅卯ニ宇治田原アリ、但田原ハ總名ニテ、中ニ多村アリ、載卷中、艮ヨリ卯ニ至テ近江ト爲堺、委卷中、坤ハ八幡ヲ限ル、八幡ノ南ニ洞峠アリ、此所ニ河内ノ堺アリ、男山ヲ西ニ巡テ、南ニ金橋アリ、是河内ノ堺也、其大路ハ津國大坂路ナリ、八幡ノ北ハ淀大橋ノ南ノ爪ヲ限リ、橋ヨリ巽ニ至テ大路アリ、大和歌姫ニ至ル、其中間ニ多鄕アリ、橋ノ南ニ美豆アリ、ソレヨリ川口、奈良、南上津屋、岩田、野尻、大住、岡村、山王、薪、天神ノ森是也、其南ハ相樂郡下狛ニ至ル、其ヨリ又歌姫ニ至ル、中間ノ村里載卷中、

〔續日本後紀 仁明 十五〕承和十二年五月乙卯、山城國言、綴喜相樂兩郡境內、始自去三月上旬、蝱虫殊多、身赤首黑、大如蜜蜂、好咬牛馬、咬處即腫、相樂郡牛斃盡無餘、綴喜郡病死相尋、郡司百姓求之龜筮、就于佛神、隨分祓攘、曾無止息、移染之氣、于今比行者、令卜其由、綴喜郡樺井社及道路鬼更爲祟、即遣使所謝之、兼賜治牛疫方并祭料物、

〔三代實錄 陽成 四十二〕元慶六年十二月廿一日己未、勅山城國○中略 綴喜郡田原野、天長年中、旣禁從禽、今重側斷、

〔伊呂波字類抄 也 國郡〕山城國 管八郡○中略 相樂サカラカ

〔古事記中垂仁〕又隨其后之白、喚上美知能宇斯王之女等、比婆須比賣命、次弟比賣命、次歌凝比賣命、次圓野比賣命、幷四柱、然留比婆須比賣命、弟比賣命二柱、而其弟王二柱者、因甚凶醜、返送本土、於是圓野比賣慚言、同兄弟之中、以姿醜被還之事、聞於隣里、是甚慚、而到山代國之相樂時、取懸樹枝而欲死、故號其地謂懸木、今云相樂、

〔古事記傳二十五〕和名抄に山城國相樂郡佐加良加(中略)書紀の訓にサガラとも、サハラともあるは、又訛れるなり、今もさがらと云り、又相樂村と云もあり、其は今もさがらかと云とかや、

〔山城志十〕相樂郡東至伊州阿拜郡界、西至河州交野郡界、南至和州添上下二郡界、北至綴喜及江州甲賀郡界、

〔山州名跡志一八郡封境〕相樂郡俗サガナカ、又サヽリ、ラクトイフ非ナリ、 當郡ハ巽ヨリ申酉ニ亘リ、申ニ大和大路アリ、其北ハ上ニイフガ如シ、南ハ木津ノ南一ノ坂ヲ限ル、其南ハ南都ノ領ナリ、坤ハ大和西ノ京口ニシテ、歌姫爲隣、巽ハ笠置ニ至ル、其東南ハ伊賀ヲ爲隣、彼國上野ニ至ル、東ハ近江ト爲隣、皆隔山、艮ニ鷲峯山アリ、此山ノ東南ニ至テ、湯舟、木屋、野殿等ノ村アリ、其所四面山嶽ニシテ、中ニ河アッテ、海住山ノ東南ニシテ木津川ニ出、

〔日本書紀十九欽明〕三十一年四月乙酉、越人江渟臣裙代、詣京奏曰、高麗使人、辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到著岸、〇中略詔曰、〇中略有司宜於山城國相樂郡、起館淨治、厚相資養、

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月丁酉、山代國相樂郡令追廣肆播守宿禰阿賀流爲小位、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年五月乙未、天皇幸右大臣相樂別業、宴飮酣暢、授大臣男无位奈良麻呂從五位下、

〔江家次第十二神事〕齋王歸京次第

五日、〇中略過大安寺邊幷奈良坂、至山城相樂頓宮、在木津川南、供給

〔倭名類聚抄六國郡〕山城國

乙訓郡 山崎夜末佐岐 鞆岡度毛乎賀 長井 大江於保江 物集毛豆女 訓世郡勢 榎本

羽束(波豆賀之)石作(以之都久利)

葛野郡　橋頭　大岡(於保乎加)　山田　川邊(加波乃倍)　葛野(加度乃)　川島(加八之末)　上林(加無都波也之)　櫟原　高田　下林(之毛都波也之)　蘇代　田邑(多無良)

愛宕郡　蓼倉(多天久良)　栗野(久留須乃)　上粟田(阿波多)　大野　下粟田　小野(乎乃)　錦部(爾之古利)　八坂(也佐加)　鳥戸(止利倍)

愛宕(於多木)　出雲(以都毛、在上下)　賀茂

紀伊郡　岡田(乎加多)　大里　紀伊　鳥羽(度波)　石原　拜志(波以之)　深草(不加久佐)　石井

宇治郡　宇治　大國　賀美　岡屋(乎加乃也)　餘戸　小野(乎乃)　山科(也末之奈)　小栗(乎久留須)

久世郡　竹淵(多加不知)　奈美　那羅　水主　那紀　宇治　殖栗　栗隈(久里久末)　富野(止無乃)　拜志　久世

羽栗

綴喜郡　山本　多河(○高山寺本、河字作可、)　田原(多八良)　中村　志磨　綴喜(豆々木)　大住　有智　甲作　餘戸

相樂郡　相樂(佐加良加)　水泉(以豆美)　賀茂　大狛　蟹幡(加無波多)　祝園(波布曾乃)　下狛(之毛都古末)

〔山州名跡志十六〕於郷爲其郡名、所俗是云親里(オヤザト)、列左、

愛宕　在同郡　宇治　在同郡　久世　在同郡　相樂　在同郡

乙訓　在同郡　綴喜　在同郡　葛野　在同郡　紀伊　在同郡

〔山城志三乙訓郡〕郷名　山埼　鞆岡(方廢村存)　長井(廢)　大江(已廢、有大江山)　物集　訓世(日本後紀作國背、俱廢村存)　榎本(已廢存坂本村)

羽束(已廢、有神社)　石作(方廢存氏方村)

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合處々庄拾陸處

山背國三處(中略)乙訓郡一處(在山前郷○中略)

天平十九年二月十一日(○署名略)

〔爲尹卿千首冬〕河時雨

山さきやむかひの雲の一むらは淀の河瀨に時雨來にけり

〔山州名跡志乙訓郡十〕友岡所名古ニハ作柄、在長丘南四町計、山崎街道開田町二町計、此所和歌詠笹、

〔枕草子十〕をかは

ともをかは、さゝのおひたるがおかしき也、

〔神樂歌〕採物歌　篠

此さゝは、いづこのさゝぞ、とねりらが、こしにさがれる、ともをかのさゝ、ともをかのさゝ、〇末歌略

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁六年六月癸亥、山城國乙訓郡物集國背兩郷、雷風壞百姓廬舍、人或被震死、

〔山槐記〕治承三年四月廿七日乙卯、向善峯別所、〇中略於物集繩手邊出車女房各乘輿超中山、

〔太平記八〕禁裏仙洞御修法事附山崎合戰事

桂河ヲ渡リ、河島ノ南ヲ經テ、物集女大原野ノ前ヨリゾ寄タリケル、

〔山城名勝志乙訓郡六〕訓世郷和名抄訓世郷在乙訓郡、按、今上訓世、下訓世有二村、

〔萬葉集古今相聞往來歌十一〕旋頭歌

開木代、來背若子、欲云余相狹丸、吾欲云、開木代來背、

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

〔萬葉集略解十一〕くせは、乙訓郡來背の郷なり、

〔東寺百合古文書一〕讓與　處分私領采女領畠地事

合畠壹段者　在下久世郷內牛飼里參拾壹坪〇中略

文治元年十一月十五日　瀧口藤原國成判

〔山城名勝志乙訓郡六〕羽束郷和名抄云乙訓郡羽束師郷、今古河村邊歟、自久我村牛里許南也、按古河村北有羽束師森、

〔後撰和歌集戀十〕題しらず　よみ人しらず

わすられておもふなげきの茂るをや身をはづかしの杜といふらむ

〔方丈記〕若日うら丶かなれば、嶺によぢ上りて遙に故鄕の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽東師をみる、

〔山城名勝志乙訓郡六〕石○作○鄕○和名抄云石作郷乙訓郡、按石作郷、灰方、灰谷、出灰、此邊歟、一休年譜曰、譲ユヅル羽爲名、稱實出石灰地、讓羽ユヅルハ、出灰イヅルハ、和訓相近云々、今灰方村、出灰邑隔地、氏神同社、同皆祭之、出灰在灰方村傾山、

〔類聚國史帝王三十二〕延曆十一年閏十一月己亥、幸高橋津、便遊獵于石作丘、

〔延喜式諸陵二十一〕石作陵在山城國乙訓郡、贈皇后高志內親王、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡近都諸寺、東拜志以北、西石作以北、停預講師僧綱檢察、

〔空穗物語樓の上下一〕かくていしつくりてらのやくしほとけげむじ給とて、おほくの人まうで給、

〔山城志葛野郡四〕鄕名　橋頭、廢、大岡、方廢村存、山田、方廢村存、川邊、廢、葛野、已廢存郡上野二村、川島、方廢村存、上林、已廢存平野及、葭安寺、櫟原、已廢、上山田村北有櫟谷社、高田、方廢村存、下林、方廢村存、馬代、已廢木辻村東有地名馬代、田邑、已廢、有田邑陵、

〔續日本後紀仁明三〕承和元年正月庚午、山城國葛野郡上○林○鄕○地方一町賜伴宿禰等、爲祭氏神處、

〔三代實錄淸和二十二〕貞觀十四年十二月十五日辛亥、山城國葛野郡上林鄕地一町充平野神社、○神社二字原脫、據日本紀略補、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年四月七日丙寅、庶人伴善男沒官墾田三町二段五十歩、在山城國葛野郡上林鄕、永施入安祥寺、

〔三代實錄陽成四十〕元慶五年八月廿三日己亥、勅以山城國葛野郡二條大山田地三十六町、爲大覺寺地、其四履、東至朝原山、西至觀空寺幷栖霞館東路、北至山嶺、自餘山野入嵯峨院四至者、皆爲公地、若有稱空閑申請者、一切不得勅許、但樵蘇之輩不在制限、　九月廿七日壬申、山城國葛野郡櫟○原○鄕○野地

三町賜興福寺傳燈大法師位修審、〇下略

〔文德實錄十〕天安二年八月庚申、大納言安倍朝臣安仁、率陰陽權助滋岳朝臣川人、助笠朝臣名高等、至山城國葛野郡田。邑。郷。眞原岳、點定山陵、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年八月十三日乙丑、勅以山城國葛野郡田邑郷神應寺、預於定額、〇下略

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月四日辛酉、今夕奉土葬先皇〇村上於山城國葛野郡田邑郷北中尾、

〔山城志五愛宕郡〕郷名　蓼倉已廢、存下賀茂田中二村、栗野已廢、存上野、上粟田廢　大野已廢、存大宮村、下粟田方廢、粟田口村存、小野已廢、存高野村、錦部已廢、存西賀茂、見類聚三代格、八坂方廢、町存、鳥戸已廢、山存、愛宕已廢、寺存、出雲已廢、町存、賀茂、

〔小右記〕寛仁二年十一月廿五日癸未、定文如此、

可奉寄賀茂上下社郷之事〇中略

上社　賀。茂。郷。　小。野。郷。　大。野。郷。　錦。部。郷。

下社　栗。野。郷。　蓼。倉。郷。　上。粟。野。郷。　出。雲。郷。

〔山城名勝志十一愛宕郡〕蓼倉郷(中略)下鴨東北地、高野川西也、〇中略

古文書云、柴竹常德寺分之事、在所者たて藏の郷田中の里

永享年中寺社文書云、御判山城國蓼倉庄事、可被渡付景勝季長季久代之由候也、仍執達如件、

永享四年十二月廿四日　爲種

主護代

〔山州名跡志五愛宕郡〕糺所名　下賀茂トモ　在今出河口東北二町許

糺或作只洲、又作河合、　糺トハ地ニ在河合社故ナリ、下鴨トハ有御祖社故也、〇中略下トハ對上云フ、本名蓼倉也、源順載和名集、蓼倉里是也、總ジテ彼書ニ所載ノ村里ノ號ハ、其本郷ノ名ナリ、今民間ニ云處ノ親里ナリ、彼書ノ里ノ名今猶用ルモアリ、文字ヲ改ムルモアリ、多クハ改ム、此

所古ノ蓼倉ナリト云コト、其證載風土記、○中略蓼倉里三身社、○下略

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年二月五日己丑、山城國愛宕郡下。粟。田。郷。百姓口分田四町二段九十五步奉充中宮職、以彼職新造立之地犬牙相接也、其代給於他郡、

〔山州名跡志二愛宕郡〕八。坂。所名　蓋郷名也、延喜式ニ出、其方領凡祇園ヨリ三年坂ニ至ル歟、八坂ト稱スルハ、方地ニ八ノ坂アルニヨル、所謂祇園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、靈山坂、三年坂、山井坂淸水坂是ナリ云々、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年二月庚申、從五位下菅野朝臣永岑言、亡父參議從三位眞道朝臣奉爲桓武天皇所建立道場院一區在山城國愛宕郡八坂郷、壤其疆界接八坂寺、而其形勢猶爲別院、由是道俗號八坂東院、○下略

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十二月廿五日辛亥、勅以山城國愛宕郡鳥。戸。郷。地四町爲贈正一位藤原朝臣總繼墓地、以同郡八坂郷地十町爲贈正一位藤原朝臣數子墓、

〔源平盛衰記二〕淸水寺緣起幷上皇臨幸六波羅事

此淸水寺ト申ハ、昔大和國子島寺ニ沙門アリ、其名ヲ賢心ト云、淀河ヲ渡給ケルニ、水ノ中ニ金色一筋ノ流アリ、是直事ニ非ズトテ、流ニ隨テ源ヲ尋ヌ、山城國愛宕郡ニ八坂郷、東山ノ邊リ淸水ノ瀧ノ下ニ至レリ、○下略

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年五月十六日己丑、是日、勅以山城國愛宕郡鳥。部。郷。榛原村地五町賜施藥院、其四至、東限德仙寺、西限谷幷公田、南限內藏寮支子園幷谷、北限山陵幷公田、施藥院使等奏、院所領之山元在彼村、即是藤原氏之葬地也、依元慶八年十二月十六日詔、被占入中尾山陵之內、由是氏人送葬之事、既失其便、請賜此地、依舊行事、許之、

〔山城名勝志十二愛宕郡〕出。雲。郷。和名抄愛宕郡上下出雲寺下略邊邊而出雲郷也、

〔東大寺正倉院文書十一〕山背國愛宕郡雲上里計帳
（續目裏書）山背國愛宕郡出雲郷雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

○按ズルニ、此書卷十二ニ、愛宕郡雲下里計帳ヲ載セタリ、

〔山城名勝志（十一愛宕郡）〕賀茂郷（和名抄云愛宕郡）

古文書云、賀茂社境内六郷、河上郷、大宮郷、小山郷、中村郷、岡本郷、散在、（栗野、二瀬、櫟原、幡枝在之、）小野郷南北散在之事、自往古社家當知行之處、今度小山郷有違亂之族者、以外次第也云々、如先々嚴密可沙汰由、所仰出候狀如件、

享祿二十月廿一日　堯連　長俊

當所名主沙汰人中

〔山城志（六紀伊郡）〕郷名　岡田（已廢、存東寺門前町）　大里（已廢、存西莊村）　紀伊（廢）　鳥羽　石原（方廢、村存）　拜志（廢、愛宕郡鳥部野有拜志墓）　深草、　石井（已廢、存伏見）

〔山城名勝志（十六紀伊郡）〕鳥羽郷（東限竹田、南限横大路、西限桂川末、北限四塚、此間有二村、隔小枝橋、北云上鳥羽、南云下鳥羽）

〔山州名跡志（十一紀伊郡）〕鳥羽（所名）　鳥羽在上下、　上鳥羽ハ在四塚南、　上鳥羽民居北端ヲ云出在家、此ノ所自四塚八町ナリ、

〔扶桑略記（三十白河）〕應德三年十月、公家近來、九條以南鳥羽山庄、新建後院、凡卜百餘町焉、近習卿相侍臣地下雜人等、各賜家地、營造舍屋、宛如都遷、讃岐守高階泰仲、依作御所、已蒙重任宣旨、備前守藤原季綱、同以重任、獻山庄賞也、（○下略）

〔百練抄（五堀河）〕寛治元年二月五日、上皇（○白河）遷御鳥羽離宮、營作甫就之故也、六府供奉、於陣有召仰、件地本是備前守季綱朝臣領也、去年進上之、讃岐守泰仲造進舍屋、

〔續後撰和歌集（七秋）〕名所の歌めしける次でに　後鳥羽院御製

雲ゐとぶ雁のは風に月さえて鳥羽田の里に衣うつ也

〔山城名勝志紀伊郡十六〕石原鄉〇今吉祥院村、南島村北有二石原村、桂川東也、〇中略

佐比〇中略

三鈷寺雜々文書云、〇中略紀伊郡司解、權大納言殿御領、石原田畠、

合田畠六拾伍町七段佰八十步此內在常荒川原　石原鄉十條下石原西佐里　十一條下佐比里　十二條上左比里

長元六年三月十日　刀禰左督長調仕　郡司上勝

〔小馬命婦集〕しはらにすむをとこ久しくきこえねばとて

いとゞしくもえこそわたれいしはらの中よりわれて出づる思ひは

〔菟藝泥赴四上〕深草。東は小栗栖、西は竹田、北は稻荷、南は伏見の邊も皆深草のうちなりとかや、山口野有、里有、

〔山州名跡志紀伊郡十二〕深草 所名　在稻荷南　但今云フ所ハ於深草ハ北界也、其中央ハ此ヨリ六七町南ニ至ル、凡東ハ谷口山ヲ限リ、西ハ竹田大路ヲ限リ、南ハ伏見領墨染ノ南四五町ヲ限ル也、深草ハ鄉總名ニシテ、中ニ別名アリ、

〔日本紀略桓武〕延曆十一年八月丙戌、禁葬埋山城國深草山西面、緣近京城也、

〔古今和歌集哀傷十六〕ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、〇藤原基經身まかりにける時に、ふか草の山におさめてけるのちによめる、　かむつけのみねを

深草の野邊の櫻し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

〔三代實錄清和六〕貞觀四年十月七日壬寅、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏言、〇中略請於山城國紀伊郡深草鄉別墅、爲道場、賜額報恩、然則名之與實自將相副、上答聖主覆載之恩、

下酬法界領復之德、詔許之、

〔東寺百合古文書五〕沽却　私領田事

合壹段者

在山城國石。井。鄕。鳥羽手里貳拾漆坪東縄本參段内壹段也〈○中略〉

永仁五年三月十三日　　　沽主初女〈花押○請人三名略〉

〔山城志七宇治郡〕鄕名　大國、〈屬上方〉賀美、〈屬上方、野村存、〉岡屋、餘戸、〈屬方、有三余古木邑、今入江州滋賀郡、〉小野、〈屬方、村存、〉山科、小栗〈ヲクルス、屬方、村存、〉宇治、

〔古事記中垂仁〕此天皇〈○中略〉又娶山代大國。之淵之女、苅羽田刀辨〈○下略〉

〔古事記傳二十四〕山代大國之淵、和名抄に、山城國宇治郡大國鄕あり、此地なるべし、淵は人名なり、

〔東大寺正倉院文書東南院三櫃四十一〕謹解　申家地賣買券文進事

合地捌段屋貳間〈有宇治郡加。美。鄕。堤田村〉直絁拾匹税布拾端

地主加美鄕戸主宇治宿禰大國〈○中略〉

天平廿年八月廿六日　　　賣地人宇治宿禰大國〈○下略〉

〔山城名勝志十七宇治郡〕岡。屋。鄕。〈和名抄云、宇治郡、木幡西、宇治川東、有岡屋村、〉

〔方丈記〕岡の屋に行かふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、〈○下略〉

〔善隣國寶記上〕后宇多院建治元年〈乙亥〉至元十二年

日本古記曰、正月十八日、蒙古人二人、高麗人一人、明州人一人、已上四人自鎭西送之、皆不入洛中、自山崎經岡屋醍醐赴關東、

〔承久軍物語五〕承久三年六月十四日、はう〳〵へむけられけるくわんぐん、はいぼくせしかば、木ばた、ふしみ、をかのや、くわんおゆ寺へんにて、東國せいにをつゝめられ、くみおとされ、うた

る、もの數をたらす、

〔山城名勝志 十七 宇治郡〕餘戶鄕（和名抄云、宇治郡、按今四宮村東有余古木村、是餘戶鄕遺名乎、）

安祥寺境内古文書云、山城國宇治郡餘戶鄕石雲里云々、

〔山城名勝志 十七 宇治郡〕小野鄕（和名抄云、宇治郡、今小野村在勸修寺東、村北、）

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年十二月廿五日丙戌、山城國愛宕郡小野鄕人勘解由次官從五位下小野朝臣當岑改本居貫隷左京職、

〔延喜式 三十四 木工〕凡自小野栗栖野兩瓦屋至宮中車一兩賃卌文、

〔菟藝泥封 四下〕山科（宇治郡）木幡より北、藤尾御廟野、花山などすべて十八鄕の總名とぞ、然ども山科といふ所四宮河の邊に在、

〔山城名勝志 十七 宇治郡〕山科鄕（和名抄云、宇治郡、東限逢坂、南限醍醐、西限松坂、北限山、）

〔山州名跡志 十四 宇治郡〕山科鄕（或作山階）在日岡東、如今鄕内有多村、所謂日岡、陵、四宮、安祥寺、竹鼻、音羽、小山、大宅、野村、花山、西ノ山等ナリ、

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年九月丁丑、行幸宇治及山科、

〔萬葉集 九 雜歌〕宇合卿歌三首（○二首略）

山品之、石田乃小野之、母蘇原、見乍哉公之、山道越良武、

〔今昔物語 二十七〕在原業平中將女被噉鬼語第七

今昔、右近ノ中將在原ノ業平ト云フ人有ケリ、（○中略）或ル人ノ娘ノ形チ有樣世ニ不知ズ微妙シト聞ケルヲ、心ヲ盡シテ（○中略）密ニ盜ミ出シテケリ、其レニ忽ニ可將隱キ所ノ无カリケレバ、思ヒ繚テ北山科ノ邊ニ、舊キ山庄ノ荒テ人モ不住ヌガ有ケルニ、（○下略）

〔後拾遺和歌集 十九 雜〕石山にまいりけるみちに、山しなといふ所にてやすみ侍けるに、（○下略）

〔今昔物語 三十一〕東山科藤尾寺尼奉遷八幡新宮語第一

今昔、天暦ノ御代ニ、粟田山ノ東山科ノ郷ノ北ノ方ニ寺有リ、始テ藤尾寺ト云フ、

〔山城名勝志 十七宇治郡〕白河寺（○中略）

山科家雜掌言上文書云、山科家雜掌重支謹言上、右子細者、山科郷之內、□□□之事、爲當家名字之地、譜代知行之段勿論也、就中當鄕之內、諸散在名田等、號後白河院御影堂領事、彼在所（仁）院御所被置立、御自筆（仁）御影被遺之條、則爲御修理供料可致知行之段、觀應三年八月三日、同廿三日、等持院殿樣御判兩通、幷弘安、文和、其外到應仁歲中（仁）、數通被成下綸旨云々、然（於）勝定院殿樣御代、依三寶院殿御押領、御影堂御修理已下之事者不及申、旣勅筆之御影及破滅之間、法住寺殿（江）預置申、先爲當家、每月供料致下行者也、　文龜二年十月日

〔親長卿記〕文明十三年十一月七日、先年山科申請院宣、（○名字地之內大○宅○鄕○事）

〔山城名勝志 十七宇治郡〕小○栗○鄕○（和名抄云、宇治郡、今勸修寺南、醍醐西、有南北二村、）

施凉寺（○中略）

古文書云、（報恩院僧正雜掌申）右院家領、小栗栖之內、號施凉寺分、田地之事、旣當院爲知行、及七十年無相違之地也、（文明十年九月十八日）

〔山城志 八久世郡〕鄕名　竹（カ）淵（フチ）（巳廢、今綴喜郡有竹淵神祠、）　奈美（廢）　那羅、　水（ミ）主（ヌシ）、（俱廢、今綴喜郡有奈眞村、水主村、）　那紀（巳廢、存勢田村、）　伊（有）宇治、殖（エ）栗（タリ）（廢）　栗隈、（方廢、山杜存、）　富（ト）野（ノ）（方廢、村存、）　拜志（方廢、村存、）　林　久世（方廢、村存、）　羽栗（廢）

〔山城名勝志 十八久世郡〕那○羅○鄕○（和名抄云、久世郡、男山東、木津川西端、有上下二村、）

〔延喜式 三十九內膳〕園地卅九町五段二百步（京北園十八町三段、奈○眞○園六町八段三百廿步、山科園九段、奈○美○園五町五段二百卅步、羽束志園四町九段、泉園一町、平城園二町、）

〔類聚雜要抄 一〕用途料（○中略）

奈良御園（茄子、蘿蔔、○中略）　奈美（同訓）

〔三代實錄（四十二陽成）〕元慶六年十二月廿一日己未、勅、（○中略）久世郡栗前野、美豆野、奈良野、（○中略）天長年中既禁、縱食、今重制斷、山川之利、藪澤之生、與民共之、莫妨農業、但至于北野、不在此限也、

〔山城名勝志（十八久世郡）〕那羅鄕（○中略）

古文書云、（賣渡進作手畠新立券文事）合壹段者（在奈良鄕）右件畠、元者中原氏二女之相傳私領也、（○中略）但領家者賀茂御領、地子物芋伍升、追年無懈怠可辨進、

文永六年六月十七日　賣人中原氏女　請男紀

〔山城名勝志（十八久世郡）〕水主鄕（和名抄云、久世郡、土人呼水主村、今入綴喜郡、云々、在下津屋東南川端、）

〔三代實錄（十三清和）〕貞觀八年十一月廿日辛酉、進山城國從一位勳二等松尾神階加正一位、授從四位下水主神從四位上、

〔山城名勝志（十八久世郡）〕那紀鄕（和名抄云、久世郡、）

〔山城名勝志（十八久世郡）〕栗隈鄕（和名抄云、久世郡）

〔日本書紀（十一仁德）〕十二年十月、掘大溝於山背栗隈縣以潤田、是以其百姓每豐年也、

〔日本書紀（二十二推古）〕十五年、是歲冬、山背國掘大溝於栗隈、

〔大和物語（上）〕おなじ女のもとにさらにをともせで、きじをなんおこせたまへりける返事に、

くりこまのやまにあさたつきじよりもかりにはあはじとおもひしものを

〔山城名勝志（十八久世郡）〕富野鄕（和名抄云、久世郡、長池町西有富野村、土人云、長池町元自富野村出在家也、）

古文書云、山城國富野鄕內南村、於當村之散在者、舍兄備前守政淸、（于時遊佐、號宗儀、）避狀炳焉之上、早彼一村同散在田畠、彌可被領知、

文明十八年十一月廿三日　散位加賀守

小笠原播磨守殿 元長

〔山城名勝志 十八久世郡〕久世鄕 和名抄云、久世郡、今久世村在長池町北大和路、

御教書案云、山城國采女司領久世村、文明十四年十二月廿九日

文書云、華嚴禪院事、○中略城州久世村依爲便宜之地寄附之、 子曇○判中略

寺田鄕 今久世村南有寺田村、長池町乾也、

〔公卿補任 後醍醐〕元德三年 ○元弘元年

大納言正二位藤師賢 九廿九出家、法名素眞、山城國寺田鄕地頭代野邊若熊丸召捕之、進武家云々、

〔山城名勝志 十八久世郡〕安養院 在于平川鄕、云々、今平川村在久世郡大久保村南、久世村北、

松井鄕成願寺鐘銘云、沙彌佛阿、法阿、弘長二年寄平河鄕安養院鐘樓修理料畠事、 四至 南北繩、西繩、東際目、

右山城國久世郡馬耳田里一坪內　件畠者十念相傳知行、無相違者也、件畠所奉寄進眞實也、

文保三年己未卯月八日　當寺鐘勸進聖　沙彌十念敬白

〔山城名勝志 十八久世郡〕田井鄕 下津屋乾、木津川東端有田井村、

古文書云、平野社領大井鄕內有見里餘里事、下津屋越前守親信、去應仁元年雖掠給奉書、既被遂御糺明被成御判、

明應三年六月三日　前筑後守　前信濃守

〔山城名勝志 十八久世郡〕意足軒 在橋本鄕、

默雲稿　前妙光等仲禪師、鷲峯法燈的裔、自南和尙賢孫也、現居城南竹林寺、閑門護竹鬱然成林、南風一拂則玉音琅然、如侍先人之側、又相攸於八幡橋本鄕、築軒種竹、扁曰意足、就余需一詞、　天隱

數竿也足歲寒心、況亦森々蒼雪深、知爲子孫添境地、南風養筍補疎林、

○按ズルニ、葛野郡ノ古鄕ニ橋頭(ハシモト)アリト雖モ、茲ニ謂ユル橋本鄕ハ、久世郡中ニ在リ、男山ノ西

鐘ニ位シ、淀川ニ面ス、古山埼橋在リシヲ以テ此名アリ、

〔山城志 九 綴喜郡〕鄕名　山本　多河(今方村存)　田原　中村(今方入久世郡、村存)　志磨(已廢、奈島村存)　綴喜(今呼普賢寺莊)　大住　有智　甲作(今方村存)　餘戸(倶廢)

〔山城名勝志 十九 綴喜郡〕山本鄕　和名抄云、綴喜郡、在飯岡村南、

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年七月廿九日己卯、山城國言、綴喜郡山本鄕、山頽裂陷、長二十二丈、廣五丈一尺、深八尺、底廣四丈八尺、相去七丈、小山堆起、草木無變動、時人疑陷地入地中、更堆起成山歟、

〔山城名勝志 十九 綴喜郡〕田原鄕　和名抄云、綴喜郡、自宇治一ノ坂田原鄕口ヘ二里八町坂路也、從鄕口長池ヘ一里半、鷲峯山ヘ一里半、田原鄕ヘ入口狹ク、谷中廣シ、今十五村有、誠ニ隱レ里ト云ツベシ、頗少キ奇境也、此鄕ノ內湯屋村ニ三ノ谷有、湯屋ノ谷、中ノ谷、鹽ノ谷ト云、鹽ノ谷ノ中ニ古キ給貝多シ、加樣ノ所外國ニモ海邊遠キ所ニ有トカヤ、古ヘトテモ海ニテ可レ有所ナラズ、開闢以前ヨリ有シ物ニヤ、不審シ、宇治ヨリ田原ヘ越ル道危嶮也、是栗子山越ト云、〇下略

〔山城志 九 綴喜郡〕村里　切林、名符作、老中、奧山田(四邑)湯屋谷(四邑)長山、禪定寺(有寺名)岩本、荒木、平岡、大道寺、猿塚、贄田、鄕口(以上十五村田原鄕)

〔西宮記 臨時 一〕請宣旨

田原御栗栖長(以國解自御所下、上卿下辨、辨仰官符於山城國)

〔朝野群載 五 朝儀〕田原御栗栖住人申文

田原御栗栖住人山背友武解、申請藏人所恩裁事、

請殊蒙恩裁、且依先判旨、且召問在地、被裁許、爲紀貞則男貞次、押作相傳所領御栗栖大明神御祭料田四段百八十町歩(〇町恐誤)狀、〇中略

天永四年癸卯閏三月一日　　御栗栖住人山背友武

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、早旦、自田原供御所持來甘栗三十籠、(〇上十下廿)有解文、〇中略五節之時、爲恒例持來兩貫首之許云々、

〔宇治拾遺物語十五〕今はむかし天智天皇の御子に大友王子といふ人ありけり、太政大臣になりて世のまつりごとをおこなひてなんありける、〇中略春宮〇天武これを御らんじて、ざらでだにおそれおぼしけることなれば、さればこそとて、いそぎ下種の狩衣袴を著給て、蓑沓をはきて、宮の人にもしられず、たゞ一人山を越て、きたざまにおはしけるほどに、山城國たはらといふところへ、道もしり給はねば、五六日にぞ、たどる〳〵おはし著にける、その里人あやしくけはひのけだけくおぼえければ、高つきに栗をやきまたゆでなどしてまゐらせたり、その二色のくりをおもふことかなふべくは、おひいで、木になれとて、かた山のうへにうづみ給ぬ、里人これをみてあやしがりて、しるしをさしておきつ、〇中略田原にうづみ給しやきぐりゆでぐりは、形もかはらず生出けり、いまにたはらの御くりとてたてまつるなり、

〔平治物語一〕信西最事

少納言入道信西、〇中略宇治路へ懸り、田原ガ奥大道寺ト云所領ニゾ行ニケル、

〔山城名勝志十九綴喜郡〕綴。喜。郷〇和名抄云、綴喜里、山城、八雲

〔宗良親王千首春〕隣家梅

風かよふつゞきの里の梅がかを空にへだつる中垣ぞなき

〔山城名勝志十九綴喜郡〕大。住。郷〇和名抄云、綴喜郡、松井村南手バラ川ノ北ニアリ、

〔康富記〕嘉吉三年五月五日己未、自隼人司領山城大住庄名主等中、粽十二連上之、三連米進也、文安五年正月六日癸巳、自山城國大住隼人司領、公事物七種菜、十二把上、三把未進、小餅、赤白大充十二前上之、三前未進

〔山城名勝志十九綴喜郡〕甲。作。郷〇和名抄云、綴喜郡

〔續日本紀七元正〕靈龜二年九月癸巳、正七位上山背甲作客小友等二十一人、訴免雜戸、除山背甲作四字、改賜客姓、

〔山城名勝志綴喜郡十九〕飯岡（在木津川西岸、草内村東山本村北、）

古文書云、御判壹萬部御經料所、山靑國草內鄕內飯岡、

　　永享四年五月廿五日　　　　　　貞達　爲種

　　正實坊

飯岡鐘銘云、雍州綴喜郡、飯岡者此嶺、人里不近不遠、而異俗不背云々、此岡者在國中田園內、東木津河布岩崎磐石、故洪水不漂破、西屛天王山、則大風不崩頽、北草內鄕、常揚民竈、南山本村、時掉貢賈船矣、東西量及十町、高二町餘所、唯松樹茂、南北平地、而有人家、山頭墳冢耳、其中大者二三、岡震有天滿天神宮、未知移者、免有大墓所、昔行基菩薩封所、

　　寬永十六年二月日　　　　　　良定上人入觀袋中

〔山城名勝志綴喜郡十九〕成願寺（松井鄕）

鐘銘云、山城國松井鄕成願寺鐘、當伽藍沙彌佛阿同宿尼法阿、弘長三年始置不斷念佛云々、今奉鑄此鐘、爲伽藍安穩、興隆佛法、廣作佛事、鄕內泰平、諸人快樂乃至法界、平等利益、

　　文保三年己未卯月八日　　　　　沙彌十念敬白

願主比丘尼法阿圓聚　眞慶　僧西念　大工伊勢田爲依

〔山城名勝志綴喜郡十九〕奥山田（田原鄕東限也、在湯屋谷艮、自是通江州朝宮、）

武家雜記云、大炊寮雜掌、與權曆博士宣鑑朝臣相論、山城國奥山田鄕事、〇中略止被訴訟、可被全宣鑑代所務之由所被仰下也、

　　應永八年十一月十六日　　　　　沙彌判

　　　結城越後入道殿

〔山城志相樂郡十〕鄕名　相樂（方廢村存）〇中略　水泉（イツミ今云瓶原鄕、）　加茂　大狛（方廢村存）　綺田（カハタ日本紀作綺戸、山城記作加幡、元亨釋書作蟹幡、）作祝（ハフ

圖略〇註　下狛略〇註

〔山城名勝志相樂郡二十〕相。樂。鄕。和名抄云相樂郡、今云相樂村、在木津村西南半里許、和州郡山道西也、

〔山城名勝志相樂郡二十〕水泉鄕和名抄云相樂郡、萬葉仙覺抄云、いづみの里、山城國、

〔山城志相樂郡十〕山川略〇中　木津川本名輪韓川、又名挑川、又泉川、

〔日本書紀崇神五〕十年九月、武埴安彥與妻吾田媛謀反逆、興師忽至、各分道而夫從山背、婦從大坂、共入欲襲帝京、略〇中遣大彥與和珥臣遠祖彥國葺、向山背、擊埴安彥、略〇中更避那羅山而進到輪韓河、埴安彥挾河屯之、各相挑焉、故時人改號其河曰挑河、今謂泉河訛也、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜元年十二月乙未、賜左大臣正一位藤原朝臣永手、山背國相樂郡出水鄕山二百町、

〔萬葉集雜歌四〕石川朝臣廣成歌一首

家人爾、戀過目八方、川津鳴、泉之里爾、年之歷去者、

〔萬葉集略解四〕泉の里は山城相樂郡泉川のあたりを云べし、

〔中右記〕長承四年二月廿七日辛未、院春日御幸、略〇中申時著泉木津、今度有假橋、

〔山城名勝志相樂郡二十〕瓶。原。在木津渡東一里半許、鄕內今有九村、賀茂鄕隔泉川北也、

〔古今和歌集羇旅九〕題しらず

宮こいでゝけふみかの原いづみ川かは風さむし衣かせやま　よみひとしらず

〔新古今和歌集戀十一〕題しらず　中納言兼輔

みかの原わきてながるゝいづみ川いつみきとてか戀しかるらん

〔山城名勝志相樂郡二十〕賀。茂。鄕。和名抄云相樂郡、賀茂鄕今有六村、里村北有賀茂渡、自木津渡二里東也、

〔山城志相樂郡十〕村里略〇中　高田　觀音寺　大野屬一邑　里屬一邑　北　莵並高田已下賀茂鄕

〔今昔物語十一〕天智天皇御子始笠置寺語第三十

今昔、天智天皇ノ御代ニ御子（大友）在マシケリ、（中略）山城ノ國相樂ノ郡賀茂ノ郷ノ東ニ有ル、山邊ヲ狩リ行タニ、（下略）

〔藤河の記〕ならの京を立て般若寺ざかをこえ、梅谷などいひて、人はなれこゝろすごき所々をへて、かものわたりをすぎ、三日の原といふ所に輿をとゞめて思ひつゞけ侍り、

〔山城名勝志二十相樂郡〕大狛鄕（和名抄云、相樂郡、今上狛村歟、在平尾村南、木津渡北、山際、）

下狛鄕（和名抄云、相樂郡、木津川西、祝園村西、飯岡南有下狛村、上狛隔川、）

〔日本書紀十九欽明〕三十一年四月乙酉、越人江渟臣裙代詣京奏曰、高麗使人辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到着岸、（中略）詔曰、（中略）有司宜於山城國相樂郡起館淨治、厚相資養、　七月壬子朔、高麗使到于近江、是月、遂引入山背高楲館、

〔三代實錄五淸和〕貞觀三年八月十九日庚申、左京人散位外從五位下伴大田宿禰常雄賜伴宿禰姓、先是正三位行中納言伴宿禰善男等奏言、（中略）欽明天皇時、百濟以高麗之寇、遣使乞救、狹手彥復爲大將軍伐高麗、其王踰墻而逃、乘勝入宮、盡得珍寶貨賂、以獻之、珠敷天皇（○敏達）世、還來獻高麗之囚、今山城國狛人是也、

〔萬葉集六雜歌〕讃久邇新京歌

狛山爾、鳴霍公鳥、泉河、渡乎遠見、此間爾不通、

右田邊福麿之歌集中出也

〔續日本紀二十六孝謙〕天平神護元年八月庚申朔、從三位和氣王坐謀反誅、（中略）流伊豆國、到于山背國相樂郡、絞之埋于狛野、（下略）

〔催馬樂〕呂　山城（三段、拍子各十、合拍子三十、空拍子、）

山しろのこまのわたりのうりつくりなよやらいしなやさいしなやうりつくりうりつくりはれ〇下略

〔兼盛集夏〕大盤物なる時御こき侍しに、內侍所に參りたりしに、いとおかしげなるこうりをつつみていだしたりしかば、

山城のこまのわたりをみてしかなうりつくりけん人の垣ねを

〔山城名勝志二十相樂郡〕蟹幡郷〇和名抄云、相樂郡〇玉水町南、平尾村北、有綺田村、

〔日本書紀垂仁六〕三十四年三月丙寅、天皇幸山背、時左右奏言之、此國有佳人、曰綺戸邊、姿形美麗、山背大國不避之女也、〇中略仍喚綺戸邊納于後宮、生磐衝別命、

〔今昔物語十六〕山城國女人依觀音助遁蛇難語第十六

今昔、山城ノ國久世ノ郡ニ住ケル人ノ娘、年七歳ヨリ、觀音品ヲ受ケ習テ讀誦シケリ、〇中略其ノ後蛇ノ苦ヲ救ヒ、多ノ蟹ノ罪報ヲ助ケムガ爲ニ、其地ヲ掘テ、此蛇ノ屍骸ヲ埋テ、其ノ上ニ寺ヲ立テ、佛像ヲ造リ經卷ヲ寫シテ供養シツ、其寺ノ名ヲ蟹滿多寺ト云フ、其ノ寺于今有リ、其レヲ世ノ人和カニ紙幡寺ト云フ也ケリ、本儀ヲ不知ザル故也、

〔中右記〕寛治六年二月八日辛酉、辰時許於加波多河原暫留御馬、前駈皆下自馬候左右、

〔山城名勝志二十相樂郡〕祝園郷〇和名抄云、相樂郡、今木津川西崎、下狛村東、有上祝園下祝園二村、

〔日本書紀五崇神〕十年九月、彦國葺射埴安彦中胸而殺焉、其軍衆脅退、則追破於河北、而斬首過半、屍骨多溢、故號其處曰羽振苑、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十二月戊午、從不破發至坂田郡横川頓宮、是日、右大臣橘宿禰諸兄在前而發、經略山背國相樂郡恭仁郷、以擬遷都故也、

〔山城名勝志二十相樂郡〕岡田郷驛、山、離宮、

村里名邑

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年九月廿六日甲辰、勅木工寮、採銅於山城國相樂郡岡田鄕、

〔郡名一覽〕一山城國 御料私領 城州 南北一日半餘 八郡

高貳拾貳萬四千貳百五拾七石七斗八升八合壹勺六才　四百五拾九ケ村

●二條御城 江戸ヨリ百二十三里　●淀 同百二十五里半 京四里半 大坂八里

○伏見 同百二十四里 京へ三里 大坂九里　∧京　∧宇治 江戸百二十六里

○按ズルニ、本書凡例ニ、●城、◐城主格、○陣屋、⊠寄合衆在所、其外在所住居、)(陪臣在所、口公儀御役所、∧御代官陣屋トアリ、

〔郡國提要〕山城 八郡四百七十七村 高二十三万百三十一石七斗六升八勺六才五札 御料私領

葛野郡八十一村　愛宕郡八十一村　宇治郡五十一村　紀伊郡三十四村　乙訓郡五十二村

久世郡四十二村　綴喜郡五十四村　相樂郡八十二村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名

山城　愛宕郡、葛野郡、乙訓郡、神足村、開田村、鷄冠井村、相樂郡、有市村、鹿背山村、綺田村、久世郡、富野村、一口村、宇治郡、木幡村、川邊郡、昆陽宿、中食滿村、欠屋村、

〔古事記中應神〕一時天皇越幸近淡海國之時、○中略故到坐木幡村之時、麗美孃子遇其道衢、○下略

〔山州名跡志十五宇治郡〕木幡里　今稱木幡村、自金辻南二町計、南至五箇庄、

〔延喜式二十一諸陵〕巨幡墓 贈一品伊豫親王、在山城國宇治郡、○下略

〔拾遺和歌集十九雜戀〕題しらず　ひとまろ

山しなのこはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば

〔源平盛衰記六〕西光卒都婆事

或人ノ云ケルハ、今生ノ災害ハ、過去ノ宿習ニ報ベシ、貴賤不免其難、僧俗同ク以テ在之、西光モ先

世ノ業ニ依テコソ、角ハ有ツラメドモ、後生ハ去トモ濫シキ方アリ、當初難ノ有願ヲ發セリ、七道ノ辻ゴトニ、六體ノ地藏菩薩ヲ造奉リ、卒都婆ノ上ニ道場ヲ構テ、大悲ノ尊像ヲ居奉リ、廻リ地藏ト名テ、七箇所ニ安置シテ云、〇中略加樣ニ發願シテ造立安置ス、四宮河原、木幡ノ里、造道、西七條、蓮臺野、ミゾロ池、西坂本是ナリ、

〔日本書紀十四雄略〕十七年三月戊寅、詔二土師連等一、使レ進下應レ盛二朝夕御膳一淸器上者、於是、土師連祖吾笥仍進二〇中略山背國內俯見村一、〇中略私民部、名曰二贄土師部一、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕伏見(中略)東限二木幡六地藏村一、南限二宇治河一、西限二三栖芹川村一、北限二深草里一、

〔枕草子三〕里は

伏見の里〇中略いづれもおかし

〔後拾遺和歌集十九雜〕伏見といふところに、四條宮女房あまたあそびて、日暮ぬさきにかへらむとしければ、　橘俊綱朝臣

都人くればかへるいまよりはふし見のさとの名をもたのまじ

〔萬葉集三雜歌〕高市連黑人羇旅歌

速來而母見手益物乎、山背高槻村、散去奚留鴨、

〔東大寺奴婢籍帳〕山背國司移　大養德國司

合奴婢貳拾捌人

婢飯虫女年卅六　婢伊蘇女年卅五

右二人、綴憙郡甲作里戶主粟國加豆良部人麻呂戶口所貫天平五年死亡

奴人足年廿

右一人、同郡〇綴喜山本里戶主錦部田祢戶口所貫

奴麻呂年六十〇中略

右十一人、久世郡那。紀。里。戸主水尾公眞熊戸口所貫

奴牛廿年卅八〇中略

右九人、紀伊郡邑。薩。里。戸主輕部牛廿戸口所貫〇中略

奴與止麻呂年廿四　奴蔵原年十三

右二人、乙訓郡山。崎。里戸主間人造東人戸口所貫

奴雲足年六　神龜二年僞死亡

右還附彼部添上郡師。毛。里。戸主少初位下大宅朝臣加是麻呂戸〇中略

天平十三年六月廿六日

〇按ズルニ、邑薩ハオホサトト訓ズ、即チ大里ナリ、

〔東大寺奴婢籍帳〕散位寮散位大初位上大宅朝臣可是麻呂謹解　申貢進賤事

合陸拾壹人〇中略

奴雲足年十四　一人、山背國羽。束。里。戸主長岡坂本國麻呂戸口、〇中略

天平勝寶元年十一月三日

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年八月庚申朔、從三位和氣王坐謀反誅、〇中略和氣知之其夜逃竄、索獲於率河社中、流伊豆國、到于山城國相樂郡、絞之埋于狛野、又絞老女於綴喜郡松。井。村。、

〔康富記〕寶德三年九月四日己亥、大住庄名主兩人東南來申云、大住庄與松井村百姓、草刈場堺目論事出來、〇下略

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年五月丙戌、勅遣中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂〇中略等於山背國、相乙訓郡長。岡。村。之地、爲遷都也、

〔續日本後紀 仁明 九〕承和七年五月癸未、後太上天皇崩于淳和院、戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉奉散大原野西山嶺上、

〔三代實錄 清和 二十一〕貞觀十四年五月十五日甲申、勅遣從五位上守右近衛少將藤原朝臣山蔭到山城國宇治郡山科村、郊迎勞渤海客、

〔古今和歌集 雜 十八〕深草のさとにすみ侍て、京へまうでくとて、そこなりける人によみておくりける、

なりひらの朝臣

年をへてすみこしさとをいでゝいなばいとゞ深草野とや成なむ

〔三代實錄 光孝 四十七〕仁和元年二月八日甲午、先是神祇官奏請、去貞觀十七年四月十七日有勅、以山城國葛野郡上木島下木島兩里乘田五段、奉充從一位平野神社、而班田使國帳不注神田、收公班給百姓口分、望被返充、

〔山州名跡志 葛野郡 十一〕桂里　川西ニアリ、里兩所南北ニ在テ、上桂中桂下桂ト云、

〔古今和歌集 雜 十八〕かつらに侍ける時に、七條中宮とはせ給へりける御返事にたてまつれりける、

伊勢

久方の中におひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる

〔夫木和歌抄 里 三十一〕こまのゝ里 山城 狛野

前大納言公任卿

山ちかみあさたつ雲とみえつるはこまのゝ里の煙なりけり

此歌、春日よりかへり侍けるに、山づらにけぶりの立けるをとへば、こまのゝ里といひければよめると云々、

〔今昔物語 三十一〕鳥羽郷聖人等造大橋供養語第二

今昔、鳥羽ノ村ニ大キナル橋有ケリ、此レハ昔ヨリ桂川ニ渡セル也、

〔山州名跡志 葛野郡 九〕梅津里 在松尾卯辰間三町許、隔中間川、里分東西、云東梅津、西梅津、

〔參考源平盛衰記 六〕内大臣召兵事
印本、一本、伊藤本、八坂本、鎌倉本、如白本、佐野本、並云、〇中略 淀、羽東瀬、宇治、岡屋、日野、勸修寺、醍醐、小栗栖、梅津、桂、大原、志津原、芹生ノ里ニ盜居タル兵共、或ハ鎧著テイマダ兜ヲ著ヌモアリ、或ハ矢負テイマダ弓ヲ持ヌモアリ、片鐙踏ヤ踏ズニテ周章騒テ馳參ル、

〔夫木和歌抄 三十一 里〕御集、大原せれふの里と云所にて、　後德大寺左大臣
よをそむくかどではえたり大原やせれふの里の草の庵に

〔太平記 九〕足利殿著御篠村則國人馳參事
官軍ハ五月七日京中ニ寄テ、合戰可有ト被定ケレバ、篠村八幡山崎ノ先陣ノ勢、背ヨリ陣ヲ取寄テ、西ハ梅津桂ノ里、南ハ竹田、伏見ニ篝ヲ燒、〇下略

〔長祿記〕去程ニ明レバ十九日〇長祿四年九月 辰ノ一天ニ、都ヲ落サセ給、〇畠山義就、中略 去程ニ茄子造コウブノ里ヲ打過テ、餘リノ事ノウラメシサニ、年ヲ守リノ星田ノ里打恨ツヽ、行程ニ、駒モ靜ニ打上リ、萬敷秋ノ野崎ノ里、猶裏枯ル草貫ヨリ、一宮ヲ伏拜ミ、若江ノ城ニ入給フ、自昔諸大名度々ニ及テ都ヲ落行シニ、白晝ニシトヤカニ落給ハ、今ノ義就ト皆々沙汰シケリ、去程ニ次郎殿ハ、同廿三日、家督ノ御出仕有テ、次ノ閏九月九日、和州ヘ下リ給フ、義就ハ愁ノ西路ヲ下給フ、政長ハ悅ツヽ、東門ヲ開テ、天ニモ上ル計ナル、高倉ヲ下リニ、法性寺ヲ見渡セバ、晩稻ヲ苅テ稻荷山、斯ル憑ミハ深草ノ、鶉ノ床ニ伏見ノ里、白菊笑ル野ヲ見レバ、荻ノ枯葉ニ索ノ、サナガラ藤ノ森過テ、木幡ノ里ニ馬ハアレド、歩ニテ下ル人々ガ、八十宇治川ノ邊ニテ、神保宗次郎御馬ニ近ク參リ、御物語申樣、此宇治ト申ハ久敷名所也、特更源氏ニ緣多キ處也、〇下略

〔大覺寺文書〕山城國御所内七拾石餘、幷嵯峨内 生田村 高田村 貳拾七石餘事、爲新地進覽之、全可有御直務、

之狀如件、

天正三年十一月六日　　信長押〇花

大覺寺殿

〔續應仁後記三〕三好孫次郎範長所々合戰事

同キ天文八年己亥ノ六月、公方家モ若君達モ京都ヲ御退去ナラセ給テ、洛外八。瀨。ノ里。ニ移ラセ給ヒ、朽木民部少輔稙綱等相從奉リ、同十年坂本ヘ御動坐有リ、或ハ慈照寺ニ入御マシマス時モ有リ、

〔雍州府志一山川〕八瀨里　去洛東北三里許、在叡山麓、斯邊總小野庄內也、一說天武天皇被襲大友皇子時、逃此里、流矢中天皇背後、故號矢背云、土俗男子亦椎髻、傳言山鬼嘗棲八瀨河西山中鬼洞、一村男女悉山鬼之裔也、故男子亦束髮於頭上一處、到今每年自七月七日至同月十五日、村中兒女聚斯洞、鳴鉦、大唱彌陀佛號、是謂祭先祖、予〇黑川道祐思斯處在叡山麓、自傳敎大師以後被聽牛車之僧、使此土人藏車飼牛、其僧乘車入洛日、則使土人爲牛童、倭俗牛童、束長髮於頂上、垂其末於背後、今長髮則其遺風也、何有爲鬼神之裔乎、一村百戶餘、俗朴身著木棉衣、又著裘革袴、登山如猿狖、耕田以牛馬、農暇各腰斧鎌、登山伐木、尺許束之、入窖蒸之、去濕氣則靑色忽變黑、是謂黑木、日々賣京師、大原土俗亦然、

〔夫木和歌抄三十一里〕や瀨の里山城　　戀歌中歌林　　印禪法師

日にそへてすがたぞかげに成にけりやせの里なるいもをこふとて

〔夫木和歌抄三十一里〕たけだの里竹田、山城、　永久四年百首水鷄　　俊頼朝臣

心からたけだの里にふしなれていくよくゐなにはかられぬらん

〔類聚名物考地理三〕竹。田。里。　たけだのさと　山城國紀伊郡　原　竹田

竹田は大和國十市郡にも有り、萬葉集第四に、坂上郎女從竹田庄贈女子歌あり、是はまさしく大和なり、また日本紀第三に猛田と書しを、舊事紀には建桁とも書り、又延喜式神名帳に、大和國十市郡に竹田神社あり、是等の類はまさしく大和なれども、又後世の歌によみしは、たゞ山城國紀伊郡の竹田なり、芹川淀等をよみ合せしにて知べし、

〔山州名跡志 紀伊郡 十一〕竹田　在城南宮森艮亘卯辰一町許、此所洛陽東洞院通ノ南順路也、竹田今ハ所ノ名トス、如舊記竹田ハ庄號ニシテ竹田庄ト云フ、或云眞竹庄、分村云東竹田、西竹田、中間一町餘、

〔山州名跡志 久世郡 十六〕巨椋 或作小倉　在宇治乾三十町許、有民居名村、此所伏見ヨリ到ル順路ハ豊後橋ノ南、大和路ニテ、橋ヨリ五十町ニアリ、其路左ニ宇治川アリ、右ニ伏見澤アリ、右此五十町ノ所、秀吉公ノ時所築ノ堤ナリ、古ノ大和路ハ、巨椋ヨリ寅卯ノ間ニ向ツテ宇治橋ニ出デ、木幡ノ關ニ趣キシ也、○中略

久世 所名清音　在大久保巳午間、其間十町許、但大和街道ハ於久世東ノ端ニシテ南北五町許ヲ云フ、其南ハ寺田村ニ雙ブ、但久世村ノ民居ハ大和街道ノ西ニアリ、

〔類聚名物考 地理三〕綴喜里　つゞきのさと　山城國綴喜郡　宮　都　岡　原

今は連續の訓の如く、下のつを濁りてとなふるを、上古は淸てとなへしにや、日本紀には筒城と書れしにて知べし、その類古今の違ひ、まゝその例多し、物によりてその心得有るべし、

〔山州名跡志 葛野郡 六〕花園 村名　在小野橋北十二三町、　花園ノ名ハ古左大臣夏野公ノ別莊ニヨルナリ、其地初ハ今ノ妙心寺ノ地是也、彼人於其所諸花ヲ愛セルヲ以、花園左大臣ト稱ス、然ヲ人皇九十四代ノ帝、彼地ヲ好取玉ヒテ、其裔孫良枝ニ今此地ヲ賜ル、仍テ彼別莊ヲ此地ニ移、故ニ此號アリ、上皇又彼地ニテ群花ヲ愛シ玉フ故、上皇ノ御稱號ヲ花園院トモ、又萩原院トモ申也、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合處々庄拾陸處

山背國三處 相樂郡二處 一泉木屋幷薗地二町、東大路、西藥師寺木屋、南自井一段許退、於北大河之限、 一棚倉瓦屋東谷上、西路、南川、北南大家野之堺限、乙訓郡一〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔萬葉集十九〕天平五年十月二十二日、於左大辨紀飯麻呂朝臣家宴歌、

手束弓、手爾取持而、朝獵爾、君者立去奴、多奈久良能野爾、

〔石淸水文書一〕太政官牒石淸水八幡宮護國寺

宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處事

山城國肆箇處 壹處 字奈良庄 久世郡 水田陸町玖段參佰步〇中略 壹處 字稻間庄

相樂郡 水田貳拾玖町貳段伍拾步〇中略

以前庄園如件、國宜承知、依宣行之者、宮寺承知、牒到准狀、故牒、

延久四年九月五日〇署名略

〔當宮緣事抄〕左辨官下 石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領

山城國 祖穀庄 稻八間庄 新庄 河原崎庄 本田庄〇中略

保元三年十二月三日〇署名略

〔拾玉集五〕建久二年、右少辨資實に山本の庄を給べたるよし聞て、おほぢの日野の民部卿入道の許よりよろこぶよし申とて、一絕をつかはしたるを見れば、

書所懷呈子孫　　老沙彌如之

孫枝子葉誇恩日、枯木自然如遇春、水壽徒今宜詠謝、後榮不識七旬身、

これをみて和してつかはすとて

木のもとの春にあふなる春なれば老木に花もさかざらめやは

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸莊園現存日記事

合〇中略

山城國　下巳呂波里狛野庄、畠七町百八十歩之內、一町一段百六十歩左馬寮敷公

巳上九箇庄大體有名無實、或被國領、或被人領、或半分、或三分之一也、然而就庄號注進之、

一顆倒庄々〇中略

山城國　羽束志庄、九町二段百二十步、　久世庄一町、　巳上二十七處、依流記公驗明白注進之、

右依宣旨、注進如件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔山城名勝志二十相樂郡〕狛野〇

永享年中寺社文書云、山城國狛野庄奧福寺十二大會并若宮祭禮料所、

永享二年十二月廿五日　　爲種　貞連

〔島田文書〕注進　御庄々一年中課役事付寺役井本支配內不輸物等

合〇中略

下桂庄

元三雜事　御簾二間、疊二枚、小文一枚、紫一枚、砂三兩、　三月御八講砂二兩　五月五日菖蒲二駄、付支

御更衣小文疊一枚宮御方十月料　臨時召人夫等御八講、歳末掃除、七月御盆供、舁行幸行啓等料、　不動之移花十枚〇中略

建久二年十月　日注進之

〔東寺百合古文書二〕七條院御領十七ヶ所事

山城國上桂庄(以同國桂東庄內北方御相傳之)　同國河島庄　同國廣庭庄(○中略)

正和三年七月三日　春宮亮隆長　亮判奉

粟田口少將殿

〔東寺百合古文書五十七〕山城國上桂庄(號上野庄)本主平氏女代良秀謹言上

欲早被經御奏聞、任相傳道理、被返付于氏女、全知行當主領主職事、(○中略)

建武元年十二月　日

〔東寺百合古文書四十七〕東寺領山城國上野庄(又名上桂庄)雜掌謹辨(○中略)

貞和五年九月　日

〔東寺百合古文書二〕七條院十七箇所事、上桂庄替、桂東庄北方爲安樂壽院領歟、然者被立替吉身庄候、於植木庄者、萬秋門院別相傳之由被申之、(○中略)

元亨三年九月卅日　藤房　中宮亮判

謹上　法性寺三位殿

〔吾妻鏡三十〕文暦二年(○嘉禎元年)五月廿三日乙卯、石清水八幡宮寺與興福寺有確執及喧嘩等之間、可計沙汰之旨、被下院宣之由、自六波羅被馳申、是薪大住兩庄用水相論之故也云云、

〔百練抄十四〕嘉禎元年六月三日甲子、武士多發向八幡方、是南都領大住庄與石清水領薪庄水相論、遣實檢使、可被裁許之由被仰下之處、南都惡徒等可燒拂八幡領之由風聞之間、爲防禦遣勇士也、官軍以前衆徒燒拂八幡領薪園畢、

〔扶桑略記三十堀川〕寬治六年三月六日己丑、山階寺大衆數百人引率、燒失山城國木津川東里二百餘烟、

賀茂庄云々、

〔古文書類纂(上處分狀)〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事(〇中略)

院領　山城國久世庄　曾末庄(〇中略)

寺領　山城國小塩庄(〇中略)

建長二年十一月日　愚老(御在判)

〔東寺百合古文書(三十一)〕山城國拜志庄內日吉十禪師宮神田事

合壹町貳段半內(〇中略)

在

眞幡木里廿九坪二反半　跡田里二十九坪二段　穴田里五坪一反(〇中略)　須久田里

十八坪五反

右注進如件

弘安九年五月

〔山城名勝志(十六紀伊郡)〕三栖(伏見西南、有上三栖下三栖二村、土人云、太平記山城國深須入道アリ、此所住人也云々、〇中略)

安樂壽院記云、(安樂壽院庄園)山州眞幡木、芹川、上三栖、播州石造莊、(已上見于文明天文綸旨云々)

〔看聞記〕嘉吉二年十月廿四日、下三栖內、下司名代官職事、(〇中略)仰村有景了、

〔康富記〕寶德三年九月四日己亥、大住庄名主兩人(東西)來申云、大住庄與松井村百姓、草刈場堺目論事出來、(〇下略)

〔長享年後畿內兵亂記〕永祿三庚申年臘月七日、自曉雷電、正月二十七日御即位、七月三日、三好豐前入河內、越高屋合戰、十月八日、香西越後守於宇治五ケ庄出張、九日木幡燒、十日三栖鳥羽深草燒、

藩封 田數 石高

〔信長記 六〕室町殿重御謀反之事
十六日〇元龜三年七月信長卿、槇木ノ島ヘ向ヒ玉ヒケレバ、彼四人先懸ヲ申請テゾ加リケル、翌日信長卿ハ五箇庄、柳山ニ旗ヲ立ラレ、〇下略

〔山城志 七宇治郡〕村里〇中略 大和田、廣芝、畑寺、岡本、新出、岡屋、上谷、已上八村岡ノ屋ノ郷、今呼二五箇庄一、

〔山州名跡志 五愛宕郡〕〇大原 在二矢背北一、爲レ隣二於波羅一ト唱フ、但和歌ニハ大原トモ詠ズ、是則チ庄號ニシテ、分テ云ニ大原ノ里ハ無キ也、此庄内ニ南北ニ通ツテ往還道アリ、是ヲ隔テ東西ニ八ノ村アリ、南端戸寺村、其次上野村、大長瀬村、來迎院村、勝林院村アリ、西ハ南ニ井出村、其次野村、其次草生村是ナリ、

〔續千載和歌集 十八雜〕大原にまかりて草庵の所などしめをきて後寂圓上人に申つかはしける、
常磐井入道前太政大臣
うれしくぞまだみぬ山のおくもみし世のうき時の宿もとむとて

〔山州名跡志 十三紀伊郡〕〇伏見 是郎庄號也、伏見ノ方境ハ、今墨染寺ノ南二町許ニ、左右ノ辻アリ、是レ北ノ界也、但今所レ定伏見領ハ、稻荷北一町餘、大路ノ石橋ヲ限ル、南ハ京橋南十町餘、至二淀堤ノ上ニ界アリ、西ハ竹田大路ヲ限リ、東ハ古城山巽、豐後橋ヲ限ル、

〔慶應元年武鑑〕稻葉民部大輔正邦 雁間從四位侍從文久三亥七月任、拾萬二千石 居城山城紀伊郡淀 江戸ヨリ百二十五里七町半
當城者依二台命一築レ之、元和九、松平越中守定綱、寛永十、永井信濃守尙政、同尙征、寛文十、石川主殿頭憲之、同主殿頭義孝、同石之助總慶、寶永八、松平丹波守光熙、同孫四郎光慈、享保二、松平左近將監乘邑下總佐倉ニ移、享保八稻葉丹後守正知以後領レ之、〇節略

〔倭名類聚抄 五國郡〕山城國〇註略 管八 田八千九百六十一町七段二百九十歩、正稅公廨各十五萬束、本稻五十萬四千七十九束三把、雜稻二十一萬四千七十九束、

〔伊呂波字類抄 也國郡〕山城國 管八郡(中略)本田八千九百六十二町一反

出擧稻

〔海東諸國記〕山城州　所屬郡八、水田一萬一千一百二十二町、

〔運步色葉集屋〕山城（田數一萬七千七百五町）

〔雍州府志一郡名〕凡愛宕郡有五十八村、秋米通計二萬六百七十八石九斗七升零、久世郡有二十二村、秋米通計二萬二千三百九十四石零、紀伊郡有二十三村、秋米通計二萬四千七百石九斗零、宇治郡有三十七村、秋米通計一萬五千二百十一石九斗零、綴喜郡有四十三村、秋米通計二萬八千七百三十二石一斗三升零、葛野郡有六十八村、秋米通計三萬四千九百六十八石九斗五升零、乙訓郡有四十五村、秋米通計二萬六千百五十四石八斗零、相樂郡有七十村、秋米通計三萬五千五百十石四斗九升零、今考之則山城八郡通計秋米二十一萬八千三百五十二石一斗四升零也、比古則其所收納者有餘、近年依新圖地輿、縣吏入竿也、倭俗塑田號新開、以一間六尺三寸之竹竿爲准、量土地之廣狹、是謂入竿、村號多異于古之所記、今之所名悉載于玆、此內今公家之所領合十一萬九百三十五石零也、（八郡之中其村號、倭名類聚鈔、拾芥鈔之所記載于壯、今考之多違、今之所稱、依時世而變易者乎、）

〔日本鹿子一〕山城國、八郡、大上々國、大上々國、南北百餘里、〇中略知行高二十萬六千七十石、

〔和漢三才圖會七十二本山城〕八郡　二十一万六千七十石

〔官中秘策一〕山城國〇中略

一石高貳拾貳萬四千貳百五拾七石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調

山城國（御料私領）　一高貳拾三萬百三拾壹石七斗六升八勺六才五札

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

山城國正稅公廨各十五萬束、國分寺料一萬五千束、嘉祥寺料一千七百卅六束四把、海印寺料三千束、元慶寺料一千束、圓覺寺料一千束、東光寺料一千束、文殊會料二千束、修理驛家料一千束、池溝料

國產貢獻

三萬束、救急料六萬束、交易穎直八千三百卅三束三分也、

〔倭名類聚抄五國郡〕山城國〇註略 管八(中略)正税公廨各十五萬束、本稲五十萬四千七百束、雜稲二十一萬四千七十九束三把、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略 畿內國營田舂米六百五十四斛七斗三升二合山城國百八十五斛一斗〇中略

支子數有損益二山城國二國、五斛八斗六升、

〔延喜式二十三民部〕交易雜器 山城國酒槽卅一隻、圓槽七隻、臼十腰、杵十五枚、槽八口、匱簀十三枚、匏三百卅柄、葦籠五十四脚、〇中略

交易雜物 山城國大豆三石、小豆卅石、大角豆六石、胡麻子四石、荏子四石、

〔延喜式二十四主計〕山城國

調廣席二百八十枚、狹席五百九十枚、折薦八百五十八枚、葉薦四百六枚、食薦一千五百枚、隨時損益、餘國准此、

自餘輸錢、

〔延喜式三十一宮內〕諸國例貢御贄 山城國平栗子、氷魚、鱸、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子 山城國郁子四擔、覆盆子一擔、蓏子一擔、椿子三擔、平栗子十石、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種 王不留行十二斤、獨活十斤、白朮廿五斤、地楡、黃芩各十斤、牛膝、苦參各廿五斤、桔梗卅斤、香薷、夜干各十五斤、昌蒲三斤、枳實、漏蘆、藁本各九斤、薺苨、茴草、小蘗各六斤、龍膽、通草各五斤、紫菀三斤、商陸八兩、芎藭四兩、厚朴十八斤、白歛二斤二兩、葛根卅二斤、鼠尾草三斤、桃人九升、杏人一斗八升、赤小豆四斗六升、蜀椒一斗二升、鼈甲一枚、白粟大一斗、

〔延喜式三十九內膳〕山城國山蘭二斗、(中略)已上年料所進、〇中略

年料 山城國氷魚、鱸魚、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略 宅常擔集諸國土產貯甚豐也、所謂〇中略 山城茄子、

○下略

〔庭訓往來〕大舍人綾、○中略六條染物、猪熊紺、宇治布、大宮絹、烏丸烏帽子、室町伯樂、○中略嵯峨土器、○中略大原薪、小野炭、小柴黛、城殿扇、仁和寺眉作、姉小路針、鞍馬木芽漬、醍醐烏頭布、東山蕪、西山心太、

〔毛吹草三〕山城

洛陽典藥頭屠蘇白散　半井龍腦丸　延壽院延齡丹　施藥院牛黄清心圓　竹田牛黄圓　上智院蘇香圓　家康元康齒藥　慶祐太乙膏　慶雲意德萬應膏　同茄子膏藥　大藤亮產藥（圓大極殿、大黑大夫、右三家、）　道正解毒　外郎透頂香（ウイラウノトウチン）　入江殿被綿　同表刺褙　曇花院殿干瓜　伊勢因幡守作鞍鐙　後藤彫物　同粉銅　南座金銀　本阿彌目利　正阿彌金具　埋忠錺　同剃刀　糸竹具（琴、琵琶、三味線、横笛、笙、篳篥、[illegible]竹、十二律、四穴等、）　鼓筒　鳥甲　冠　石帶　笙　張子　水引　扣箔（ウチハク）　色紙　短冊　表具　表紙　板摺本　繪草紙　摺繪　縫薄物　帽子　縮物（カヽシモノ）　結鹿子　白粉　炭團　鏡　金銀、銅、眞鍮飾細工、　御簾　桑黑柿等洗細工（スカシ）　塗師細工　蒔繪道具　筆　削楊枝　刻多葉粉　切付細工　鹿切革細工　土火鉢　團爐裏等　縮染　梅染　茶染　藍染　紗羅染（シヤムロ）　採紅梅　蘇枋染　味淋酎　消酎　南蠻酒等　西陣撰絲　厚板物（綾織島、紋島等）　金襴　唐織　紋紗　戻　絹縮　木綿羽織地　同袴地等　色絲　絹糸　安居院疊縁（高麗べり、雲繝べり也、）　筆柿（丹波ヨリ來ル）（此所ニテサヘスト云）　非田院蘭金剛（青兵寺ノ門前ニテ、非人共作テ賣ルト云、當時ハ方々ニテ作之、）　同寺内白味噌　舟橋吉岡染　木下紫染　柳原絹　本新在家龜屋島　無車小路指金細工　大峯辻子前鬼豆腐　一條藥玉（此外造花）　似紺染（ニセコン）　土御門風爐小板　長者町團爐裏縁　疊紙　新在家羽二重　羅板物（段織片、色等）　立賣　縫染物（外ヨリ宜）　春日通丸田町懸木　鷹鈴　大炊御門通爐火箸　政平庖丁　冷泉通南蠻菓子　ミズカラ、（具布ニテ作之、）　二條藥種（諸國ヨリ集ル、此所ニテ賣出ス、）　洗鮫　秤　キセル　釜鐵鐶（奈良鍛冶ト云、當時京ニ住ス、）　金　養鍋　佐伯柄卷　碁雙六盤　茶入袋　紗織物（高官ノ御衣ニ奉之、二條邊也、）　押小路針口砥粉　三條袈裟

衣　蚊帳　糯綿(ムシリワタ)　蠟燭　釜座鐵唐金鑄物　粉川鼻革　六角調緒　頭巾　木綿袴　自在位牌　銚子　坊門鑄物　目貫　四條沼津屛風　藤重中棚　坊門茶筌(麁相物、空也堂ニテ鉢扣作レ之、)　白箸　道場襪子　綾小路木綿足袋　觀音堂辻子精好　五條半女桃　扇地紙　腰張紙　表紙子　澀紙　紙帳　坊門御倫旨紙　扣薄寫紙　六條佛具　燈籠細工　梅汁(諸方染屋用レ之)　山川酒　飯餡　煎餅　醒井分餅(ヘギモチ)　坊門賀留多(麁相物也)　錫細工　御影堂扇　引物細工(狛香合等ナリ)　七條編笠團子(小麥ニテアミ笠ノナリニスル也)　八條淺瓜　九條眞桑　青瓜　芋　扣蔽(ウチナメ)　水菜　藍　大宮通葡萄(當所ニ多作出ス)　丹後織　絹紬(其品多)　堀川紺形(二條邊ニ多離也)　水屋具(井筒走釣瓶等)　戶障子細工　油小路網代塗團扇　仕立刀　縫染物糊粉　土風爐　池川針　小川組緒　紐　織帶等　箙(ウツボ)　太刀　舞扇　饅頭　毬打(ギチヤウ)　振(ブリ)振玉(ブリタマ)　羽子　胡鬼板　菖蒲甲　同刀　踊團扇　同太鼓　西洞院梠細工　茶具　棗塗師　憲法染　纐纈　雪踏　新町繪筆　面　乘物　淺黃椀　折敷　塗長持　行器　中島鏡(和泉守ト云)　挑燈　鞢　同沓　堅紅粉　室町塗葛籠　香具(掛香、匂玉、燒物等、)　目貫(麁相離也)　上金剛(絹ニテ作レ之)　下緒(鼠屋ト云)　貝桶　倚懸　縫枕(色々ノ絹也)　筒衞護(フマモリ)　烏帽子　松本洲濱糯(チコシ)　烏丸內裏粽　麩灸　鹿茸　金賀留多　歌賀留多　櫻馬場張枕　文匣　插箱　藥罐細工　新物仕立　植毛虎皮　蒔繪手道具(麁相物ナリ)　道惠盃　數寄屋家具　疊大工　頭襟　篠懸(スヾカケ)　大經師經　同曆　大佛師　東洞院三本木ムク練　茶柄杓(大津柄杓ト云、當時京ニ住ス、)　黑柿扛鍋(アブナベ)(酒ノ燗(カン)鍋ニ用レ之)　蒔繪下地印籠　板唐紙(ハンノカラカミ)　堺町明珍鐔　萬里小路鍔(麁相物ナリ)　雨紙　合羽　麩　冰蒟蒻　土圭細工　富小路扇骨要　御幸町玉細工(軸、目金、數珠等、)　練珊瑚珠　具足　椀木地　魚箸　網代籠履　寺町石塔細工　御靈前人形細工　誓願寺前糸楸(ドシ)織　數珠　繪像　木像　紙表具　櫛　硯細工　角象牙細工　口藥入　唐革細工　決拾(ユガケ)細工　鎖子　打替　寸袋(スンブクロ)　雪沓　大皮踏皮(タビ)　屛風(麁相物也)　琴絲　金銀針　鑓長刀柄　弓箭細工　角倉町辛螺蚫摺貝　摺碁石　淺黃盆

猶洛中名物雖多之、不遑記、

八幡蘇民將來　小弓　旗竹　菖蒲革　牛房　山崎油酒　善峯（ヨシミネノ）目藥　西岡竹　松尾白粉合土

梅津抹香　桂糖　常盤平野落髮細工　西京青蔬　麴（諸國麴ノ司ト云）　北野作木（諸木ノ枝チタメ盆、鉢等ニ入テ翫之、）

辛螺青貝唐繪盆、折敷等、　口人（タチウドノ）栗刀　宮司梅干　茶屋粟餅　眞盛衣（シンセイノコロモ）大豆（比丘尼ノ業ナリ）　淨福

寺納豆　大德寺蒸素麪　龍安寺山松茸　內野蕪菜　蓮臺野大根　嵯峨蘘荷　木練柿　庭石

大井川鮎（モドキ）　水尾柚樹（洛中佛前之花ニ用之）　龜山蓍木　愛宕樒（參詣之道者土產ニ用之）　高雄砥（高雄ナル砥取ノ山）

ノホトトギスチノガカ　タナチトギズトソナタ　鳴瀧飛石　槇尾土砂（末期ニ用之）　同茶（根本ト云）　畑枝土器　鞍馬草薢（トコロ）　山

椒皮　燧石　大原書提子　杉丸太　一原篠葉（洛中粽ニ用之）　八瀨黑木　谷川カジカ　車坂鮎　賀

茂川鯇（ニヘ）　鯭（イシブシ）　ヲイカハ　打蒔青石　社家虫籠細工（色々ノ作物チシテ大內ヘ上之）　御手洗團子　田中鮨餅

吉田大根　黑谷茶入合土（漢ノ土ニ假ト云）　鐘鑄形工（諸寺ニ用之）　白川眞鍮瑠土（諸國ニ行）　切石　成道寺淨（フ）

（ウベ）壺便　粟田口キセル土物　天邊太鼓、（六サイ念佛具、戶等ニ用之）　モロヲロシ（ウシノ子ノ皮ト云、刀ノ柄ヌリ下地ニ用之、）　祇園

風車　蕚箒　茶屋豆腐　甘餅（アンモチ）　丸山醬　梅漬　八坂笠　履（尚家用之）　遊行澀土（壁ニ用之）　淸水坂灸

餅　作紙子　淸閑寺木石（ボクセキ）　花山多葉粉　山科金屑丸　澀柿　茜染　源氏繪具　荷馬腹當

醍醐蒸竹　楊梅　甘干柿　大佛餅　簇瓦（シヽカハラ）　樓欄箒　明珍轡　象眼鐙（洛中ニ多之）　鷹鈴　著籠（キゴミ）

摺火打　法性寺篠笠　鼻尺八　東福寺門前地黃煎　火繩　額板　稻荷染團子　山黃土（ワウド）（繪具ニ用之）

刃土（諸國ニ行）　壺々火桶　唐菘（タウガラシ）　深草糸瓜　蘭箒　茶屋鶉餅　竹田蕗　鳥羽瓜　伏見蕪喉

竹簾　美豆菖蒲（五月五日洛中用之）　蘆　眞菰（同日洛中ニ用之）　淀川サガシ　名吉　宇治川小白魚（キスゴ）　鯎

鱸　鯉　鱠鮓（是ヲ宇治丸ト云）　茶　同磨　風爐灰　圓柿　瓶原（ミカノハラ）砥　狛越瓜（シロウリ）　茄子（外ヨリ早シ）　薯蕷

ヌカゴ　牛房　蜜柑　柑子　金柑　柚柑　代々　久年母　當歸　地黃　山藥　干姜　生姜

紫蘇　薄荷　荊芥　靑皮　陳皮　牡丹皮　山城朮

人口

〔日本書紀 天智 二十七〕六年六月、葛野郡獻白鵲、

〔官中秘策 一〕山城國〇中略

一人數五拾貳萬貳千六百貳拾六人　内 貳拾七萬六千九百四拾人 男 貳拾四萬五千六百八拾六人 女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年〇中略

一人數四拾六萬九千五百拾九人 御料私領　高貳拾貳萬四千貳百五拾七石餘　山城國

内 貳拾四萬貳千九百貳拾人 男 貳拾貳萬六千五百九拾七人 女〇中略

諸國人數調 弘化三丙午年

一人數四拾五萬貳千百四拾人 御料私領　高貳拾三萬百三拾石餘　山城國

内 貳拾貳萬九千八百八拾人 男 貳拾貳萬貳千八百六拾人 女

風俗

〔人國記〕山城國

山城之國之風俗ハ、男女トモニ其言葉自然ト清濁分リ善クテ、譬バ流水之滯フル事無フシテ、イサギヨキガ如シ、世俗ニ其國風ハ其水ヲ以知ルト云事誠ナル哉、城州ハ其水潔フシテ萬色ヲ染ムルニ、其色餘國ニハルイ違ヘル事、從古至于今如斯、人之膚之滑成事、亦如斯、女之姿音聲之尋常ナル事ナラブ國ナシ、然ドモ武士之風俗不好事、中々不及子細也、其所以考ルニ、王城之地ニシテ、常ニ管絃之樂ヲ翫ブ事ヲ見馴レ、或ハ商賣之人等ハ、遠國波島マデモ僞ヲ以テ實トスル習ナレバ、殊ニ王城ノ地如斯シ、サレバ常ニ實ヲ忘レテ虛ヲ談ズルヲ以テ、世ヲ渡ルヲ本トス、タマ〳〵實儀ノ人有トイヘドモ、其邪ニ推カクサレ、或ハ其實ヲ隱シテ、其風儀勤ルノ類有ト見ヘタリ、如斯之武士千人ニ一人ナレドモ、是人モ後ハ如形之惡キ形儀ニ成ナリ、然レバ總テ此國ノ風俗實ヲ用勤ル人スクナキ故不知義理也、不知義理ガ故ニ、勇臆之儀ヲ沙汰スレドモ、餘所ノ事ニ心得ル故也、此氣質ヲ不離也、自然ニ好キ人有ハ口傳、

〔山城志二〕風俗　水甘土厚、人嗜技藝、性稟寛舒、多文雅士、勁勇間豪傑、沈靜有工思、北山郷民、樸素存古風、

〔雍州府志一風俗〕山城國中州而帝都之所有也、故古今之間、材德技藝之人不可勝數、故人物措而不論、依之不置人品門、凡國中人情寛舒而無疎豪之氣、是又中土地氣之所使然者乎、

〔徒然草下〕悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり、故郷の人の來りて物語すとて、あづまの人々に、いひつることはたのまるれ、都の人はことうけのみよくて實なしといひしを、聖それはさこそおぼすらめども、おのれは都にひさしくすみて、なれて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず、なべて心やはらかに情あるゆへに、人のいふほどの事、けやけくいなびがたくて、よろづえいひはなたず、心よはくことうけしつ、いつはりせんとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、をのづからほいとをらぬ事おほかるべし、あづま人はわがかたなれど、げには心の色なくなさけをくれ、ひとへにすぐよかなるものなれば、はじめよりいなといひてやみぬ、にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞかしと、ことはられ侍りしこそ、此ひじりこゑ打ゆがみ、あら〳〵しくて、聖敎のこまやかなることはり、いとわきまへずもやと思ひしに、此一ことばの後、心にくゝなりて、おほかる中に、寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたるところありて、其益もあるにこそとおぼえ侍し、

名所

〔日本鹿子一山城〕名所の類

白川　南禪寺のおくなり、寺の門前より西へ流たる川也、○中略

岩藏山　此名洛の四方にあり、帝都鎭護の爲に、一切經を書て四方の山に埋れし故、此名ありといへり、東の岩くらは、白川の東南禪寺の上なりと云、北は松が崎の後、西はよしみね也、南は大和の國にあり、○中略

粟田山　粟田口といふ所也、三條通の東あふ坂に近し、十禪寺より花頂院のあたりをいふといへり、

　うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはだつ山のふもとに

山階里　郡の名也、粟田口より相坂へ行間、四の宮などゝいふ所有、

音羽山　相坂の關より南に有と云　相坂の筧の水に流るゝは音羽の山の紅葉なりけり

花山　清水寺の東也、遍昭の舊跡なり、また山科の內に鏡山といふあり、花山北也、

栗栖野　伏見の東、醍醐の西也、

　見わたせば若なつむべく成にけりくるすの小野の萩の燒原

篠の隈　山階のうちに有、京より二里あまりなり、

清水寺　くはしく佛閣の所にしるせり

日吉の社　神社の所にくはしく有、〇中略

稻荷　神社の所に有、〇中略

深草山、野、里、　京よりは辰巳のかたなり、いなりの山の續也、

伏見里山　深草の南里續也、乘功法師のうたに、

　冬の夜のさむけき月にかすみえてふしみの澤にわたるみづどり

木幡山里　伏見の東なり、〇中略

笠取山　醍醐の南木幡の東也、大山なり、〇中略

宇治の山、里、川、　京より辰巳の方三里也、水上は近江の水海より流落て、末は淀川へ落る川は北へ流れて、橘は東西にかけたり、山吹の瀨、槇の島、橘の小島が崎、皆同所の名所なり、〇中略

竹田河原　淀より東、伏見方也、〇中略

鳥羽　秋の山　同池鳥羽のうちの名所也、竹田に近し、京より一里餘、淀の續也、〇中略

淀　河、渡、橋、〇中略　京より未申の方三里也

美豆野　淀川の南の方也、みづの御牧と續たるも此所の事也、

八幡山　神社の所にくはしく有〇中略

駒野里　京より奈良へ行道也

木津川　此川は駒野と木津の里との間なり、木津と云は南也

泉川　都より南、奈良の順道にして、木津に近し、〇中略

柞の森　京より大和へ行道〇中略

岩田小野　淀の小橋の浮田の森のあたりなり〇中略

神南備杜　山崎の西也、賀茂春日兩社ならびし故に此名あり、京より未申の方也、〇中略

水無瀬　山崎に近し、男山より西にあたる也、〇中略

桂川　西川と云、七條通の西也、

大原野　九條の通より少南なり〇中略

小鹽山　大原野のうちにあり、京より四里ばかり也、春日の末社たち給ふ、此所に岩倉といふ山寺あり、よしみねと云も此山のみね也、

葉室里　西山青生野より南也〇中略

松尾　葉室より北也、神社の所にくはしく書記せり、〇中略

衣手森　松の尾と嵐山の間也

梅津川　洛の西、松尾より東也、舟渡し有、〇中略

大井川　洛の西、嵯峨天龍寺の前の川也、〇中略

嵐山　洛の西、松尾の北、法輪寺の後の山也、

龜尾山　嵯峨天龍寺上の山也、○中略

雙岡　仁和寺の東の方の岡也

阿太子山　樒原　月輪の里、兩所もあたごのうちの名也、

高雄山　洛の西北にして、あたご山のならびさがの北也、紅葉の名所也、栂尾、槇尾、皆近隣也、

鳴瀧川　仁和寺のおく、ならびの岡の北より流れ出る小河也、○中略

衣笠山　是も仁和寺西也

位山　一條より北の通也、衣笠山より未申也、總而帝王の御座所をさして此名有と云説あり、

北野　京より戌亥にあたりて天神の御社有、神社の所に委ク書り、○中略

紙屋川　北野の西也、北より流たる小川也、

平野　北野の西也

卜野　紫野同所か、また歌には紫野のならびのやうに見へたれどもいかゞ、北野のことか、○中略

北山　京より戌亥也、衣笠山の近所なり、

船岡野　室町通也、一條より十町計也、○中略

小野　若狹の境也、京より四里也、

鞍馬　此山都の北にあたりて、行程三里也、○中略

貴船川　くらまの西也、○中略

大荒木杜　京とくらまとの間、市原野といふ所に有、鞍馬より一里南也、○中略

松が崎　一條より一里計也、賀茂より東也、七月十六日妙法の送り火ともす、

氷室山　洛の北、松が崎より丑寅也、○中略

大原　都より三里、八瀬より一里北也、○中略

瀬井清水　大原の里にあり、○中略

御影山　賀茂也、ひえいざんのふもとやせの里也、俗にみあれ山と云、○中略

神樂岡　吉田山春日の社より南の方茂りたる松の木高き林のうちに小社有、是神樂岡の神、吉田の地主也、○中略

雲の林　雲林院の事か、梶井殿とて、一條大宮より北に千本近くに御門跡の御所也、舟岡と北野との間也、○中略

中川　北畠より一條東洞院へ流れたり、今出川共いへり、京極川とも云り、源氏かたたがへの夜、うつせみの尼の住ける、中川の宿といへるは、此あたりなりといへり、

滋野井　勘解由小路と、中の御門の間也、

鹽竈　六條高倉にあり、融大臣の舊跡也、

古事類苑

地部四

大和國

大和國ハ、ヤマトノクニト云フ、五畿内ノ一ニシテ、仁明天皇ノ承和三年以前ニ在リテハ、其首班タリシガ、後第二班ト爲ル、東ハ伊賀、伊勢、西ハ河内、南ハ紀伊、北ハ山城ニ堺シ、東西凡ソ十里、南北凡ソ二十五里アリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ高市郡ニ置キ、添上、添下、平群、廣瀨、葛上、葛下、忍海、宇智、吉野、宇陀、城上、城下、山邊、十市、高市ノ十五郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、明治維新ノ後、郡ノ併合ヲ行ヒ、添下、平群ノ二郡ヲ生駒郡トシ、城上、城下、十市ノ三郡ヲ磯城郡トシ、忍海、葛上ノ二郡ヲ南葛城郡トシ、葛下、廣瀨ノ二郡ヲ北葛城郡トシ、新ニ奈良市ヲ設ケテ一市十郡ト爲シ、奈良縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕大和 於保夜萬止

〔饅頭屋本節用集 也天地〕大和 ヤマト和州

〔書言字考節用集 一乾坤〕大和 ヤマト又作大倭、日本一名、今按、大和國、本朝人皇帝都始、故稱之、猶文王起周而名周世、高祖起漢而名漢世之類者乎、

〔日本風土記 一寄語島名〕大和 ヤマト野馬多

〔日本書紀 一神代〕一書曰、○中略大己貴神曰、唯然、迺知汝是吾之幸魂奇魂、今欲何處住耶、對曰、吾欲住於日本國之三諸山、故卽營宮彼處、使就而居、此大三輪之神也、

〔日本書紀 三神武〕戊午年九月、弟猾又奏曰、倭國磯城邑有磯城八十梟師、三十有一年四月乙酉朔、皇

輿巡幸、因登腋上嗛間丘、而廻望國狀曰、姸哉乎國之獲矣、雖内木綿之眞迮國、猶如蜻蛉之臀呫焉、由是始有秋津洲之號也、昔伊弉諾尊目此國曰、日本者浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、復大己貴大神目之曰、玉牆内國、及至饒速日命乘天磐船、而翔行太虛也、睨是鄕而降之、故因目之曰、虛空見日本國矣、

〔古事記 中 景行〕零大冰雨、打惑倭建命、○中略 自其幸行而、到能煩野之時、思國以歌曰、夜麻登波、久爾能麻本呂婆、○下略

〔古事記傳 二十八〕此二句は、倭國は大八島國の中の麻本羅なる國ぞと、稱給へるなり、

〔日本書紀 二十九 天武〕四年正月壬戌、大倭國貢瑞鷄、　二月癸未、勅大倭、河內、攝津、山背、播磨、淡路、丹波、但馬、近江、若狹、伊勢、美濃、尾張等國曰、選所部百姓之能歌男女、及侏儒伎人、而貢上、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平九年十二月丙寅、改大倭國、爲大養德國、

〔續日本紀 十七 聖武〕天平十九年三月辛卯、改大養德國、依舊爲大倭國、

〔伊呂波字類抄 也 國郡〕大和 ○中略 勝寶元年、改爲大和、○下略

〔國號考〕夜麻登 秋津島、師木島などもいふ、

夜麻登といふは、もと畿内なる大和一國の名なるを、神武天皇此國に大宮しきませりしよりして、後の御代々々の京も、みな此國内なりける故に、おのづから天の下の大名にもなれるなり、さて此名は、邇藝速日命のあまくだらし、時に、虛空見倭國といへる古語ありて、神代よりの名なり、又それよりさきに、八千矛神の御歌に、やまとの一本すゝきとあれども、そは此國の名をよみたまへるにはあらじとぞおもふ、又書紀の神武御卷の末に、昔伊弉諾尊目此國、曰日本者浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國とも見えたり、かくて神武天皇は此國に宮しきましけるによりて、神日本磐余彥尊と大御名を稱奉れり、然るをかへりて、此大御名より起りて國の名ともなれりと

いふは、いみじきひがことなり、〇中略また生大日本豐秋津洲とあるは、天の下の大號にもなりての後の世よりいへる語にして、神代の當昔の言にはあらず、〇中略夜麻登は一國の名なるが、天の下の大號にもなり、又一國の内にて、わきて京師をさしてもいひて、廣くも狹くも用ひらる、號なるが故なり、そは筑紫といふも、伊豫といふも、一國の名なるを、九國四國の大名にもして、筑紫洲、伊豫之二名洲などいへる例に同じ、〇中略夜麻登といふは、本よりの大號にはあらず、一國の名より轉れること疑ひもなし、すべてもとは狹き名の、後に廣くなれる例おほし、出羽加賀なども、もとは郡の名なりしを取て、國の名とはせられつること、國史に見え、〇中略夜麻登といふ名の意は、萬葉考の一つの考へに、此國は四方みな山門より出入れば、山門國と名を負るなりと有て、そのよし委く云るされたり、此説ぞ宜しかるべき、又己〇本居宣長が考へあり、そはまづ書紀神武御卷に、天皇の御言に、此國の事を聞於鹽土老翁曰、東有美地、青山四周云々と見え、又大己貴命は、玉墻内國と目けたまひ、又古事記倭建命の御歌に、夜麻登波、久爾能麻本呂波、多々那豆久、阿袁加岐夜麻、碁母禮流、夜麻登志、宇流波斯とよみたまひ、又石比賣命の御歌に、袁陀氐夜麻夜麻登云々とよみたまふ、此比賣命の御歌なるは、かの倭郷をのたまへるなれども、袁陀氐夜麻といふは、一國の倭によれる枕詞にて、楯を立並べたる如くに、山のめぐれるをのたまへるなり、右の件の古言どもみな、此國は山の周廻れる中にあることをいへるなれば、夜麻の山なることは論なし、登には三つの考へあり、一つには、登は處にて、山處の意なるべし、〇中略二つには、登は都富の約まりたるにて、山都富なるべし、〇中略三つには、登は、宇都の字を省き、都を通はしいへるにて、山宇都の國なるべし、〇中略上件師〇賀茂眞淵の山門の説と、己が此三つの考へとのうち、見む人心のよらむかたをとりてよ、

〔倭訓栞前編也三十四〕やまと　日本大和をよむは義訓也、山跡の義といへる尤舊き説也、とは多く

處をいへり、もと山邊郡大和(おほやまと)と式に出たる名にして、後國號となりし成べし、此鄕に國魂の神もましませる也、げにも大和國形、吉野一郡三分の一に居て、山のみ國に充てり、神武天皇東征ましましてより、代々めでたき皇都なりしかば、大八洲の内に豐秋津洲も大日本と標し、後は六十餘州を併ての總號とはなれる成べし、邪山臺、野馬臺など書るは西土の私也、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度 附里程

大和奈良町(標井)極高三十四度、四十一分、經度東五分、從東都(東海道、自伊賀越)一百三十三里二十七町四十間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

大和　法隆寺村　三四度三七分〇〇秒　小泉　三四度三八分〇〇秒

郡山　三四度三九分〇〇秒　南都　三四度四一分〇〇秒　〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒　大和　郡山　東〇度〇二分三五秒

疆域

〔大和志一〕疆域　東至勢伊二州界、西至河州界、南至紀州界、北至山州界、東西十四里有半、南北三十里有奇、

〔日本地誌提要四大和〕疆域　東ハ伊賀、伊勢、西ハ河内、南ハ紀伊、北ハ山城ニ至ル、東西凡壹拾里餘、南北凡貳拾五里、

〔易林本節用集一〕大和(和州)　大、管十五郡、大上々國也、南北二百餘里、山繞而生十倍、出國之差圖、故名所舊跡繁、

地勢

〔大和志一〕形勝　壯哉一故都、四禽叶圖、三山作鎭、(元明紀曰、今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、)面臨吉水、背倚雍良、左擁國見横嶺、右抵葛城高天、表山帶河、山水秀麗、郡鄙平壙、土脈膏腴、穀稼多實、横脩縱窄、所謂猶如蜻蛉臀

道路

呫、神武紀曰、三十有一年夏四月、登腋上嗛間丘、廻望國狀曰、姸哉乎、猶如蜻蛉之臀呫焉、吉野一郡、居於本州三分之二、山崇溪邃、居民鮮少、

〔和漢三才圖會七十三〕大和　郡山寅卯至江戶、過伏見行百三十四里、同過伊賀行百十六里、北至京師十二里半、丑寅至奈良二里、戌方至大坂八里、　高取至江戶百三十四里、至京師十七里半、亥方至郡山八里、　奈良至京師十一里、至大坂八里、至高取六里半、至三輪五里、至伊賀上野九里、　柳生西至奈良六里、北至笠置一里半、艮至大河原二里、　柳本北至奈良四里　蓋樹北至柳本一里、至奈良四里半、

〔大和志一〕路程　南都至京師十一里、至江都一百二十里、至大坂八里、至上野九里、至高取七里十八町、至郡山一里十八町、官道　高座嶺舊名椿岡坂、山州相樂郡界、謂之奈良坂越、　至南都驛一里、歷般若寺奈良坂、　南都驛至帶解一里、歷肘塚永井、　帶解至丹波市二里、所歷、曰藏莊、曰楢村、曰櫟本、曰河原城、　丹波市至三輪二里十町、所歷、曰三昧田、曰新泉、曰柳本、曰辻村、曰箸中、曰芝村等、三輪至櫻井驛十八町、高座嶺至此、通計六里二十八町、謂之上道、又自櫻井到吉野郡大野三里、謂之針道越、所歷、曰倉橋、曰針道、曰宮奧、曰牧村等、又自櫻井到松山二里有半、所歷、曰外山、曰忍坂、曰牛坂、曰下竹等、　歌姬越相樂郡界、越本道路一條之名、如直越不盡越之類、是也、近世假用以爲境界之號、此志姑從之、下皆倣之、　至郡山驛二里、歷尼辻、六條等、郡山驛至筒井一里許、筒井至田原本一里三十町、所歷、曰馬司、曰長安寺、曰菅田、曰菴治等、田原本至八木一里六町、八木至土佐二里、所歷、曰三瀨、曰越村、曰勸學寺等、　土佐至檜垣本一里十八町、歷清水谷、薑原、自歌姬至此、通計九里二十二町、謂之中道、又自檜垣本至洞川五里許、所歷、曰下市、曰善城、曰四村、曰廣橋、曰栗飯谷、曰寺戶、曰河分等、謂之山上道、又自筒井至高田三里十二町、所歷、曰額田部、曰小柳、曰古寺、曰南鄉、　高田至御所一里十五町、所歷、曰中村、曰新町、曰葛、曰松本、　御所至三在二里三十一町、經風森、筒井至此、通計七里二十二町、謂之下道、又自御所至吉野山村五里二十町、所歷、曰稻宿、曰戶毛、曰古瀨、曰今木、曰下淵、曰檜垣本、曰土田、曰越部、曰新野、曰六田、曰佐督、曰橋屋等、　暗嶺河州河內郡界　至南都驛四里四町、所歷、曰西畑、曰藤尾、曰萩原、曰小瀨、曰砂茶屋、曰寶來、曰尼ガ辻、　立野越高安郡界、上古謂龍田越、河州謂之龜瀨越、　至郡山驛三里十五町、所歷、曰勢野、曰龍田、曰法隆寺、曰小泉、　郡山驛至南都驛一里有半、經大安寺、自立野至此、通計四里三十三町、　竹內嶺河州石川郡界　至竹內二十町、竹內至高田二里十九町、經長尾、　高田至八木一里八町、所歷、曰曲川、曰曾我、曰小綱、　八木至櫻井驛三十四町、所歷、曰石原田、曰四宮、曰戒重等、　櫻井至初瀨一里有半、所歷、曰外山、曰慈恩寺、曰脇本、曰黑崎、曰出雲、初瀨至萩原驛一里、萩原驛至赤埴一里餘、所歷、曰檜牧、曰自明、曰高日、　赤埴至桃俣四里、所歷、曰諸木野、曰田口、曰黑岩、曰山粕、　桃俣至神末二里十三町、歷土屋原、菅野、神末至岩坂嶺勢州壹志郡界三十一町、自竹內嶺至此、通計十四里二十三町、又自萩原至長瀨馬邑上野二里許、　杉谷嶺勢州飯高郡界　至鷲家二里十一町、上野至長瀨二十四町、通于伊州名張郡阿部田村、謂之新路、

（經木津）鷲家至上市四里許、（所歷、曰小名、曰柳村、曰山口、曰平尾、曰河原屋、曰立野等、）上市至五條驛五里、（所歷、曰麻志口、曰北六田、曰越部、曰土田、曰檜垣本、曰下淵、曰阿陀、曰三在、曰宇野、曰須惠等、）五條驛至畑田（紀伊州界）二十七町、（所歷、曰新町、曰二見、曰待乳嶺等、自杉谷至此通計十二里許、道國）　大澤越（錦部郡界）至五條驛一里二十七町　北山嶺（石川郡界外、通千早村、因謂千早越、）至五條驛一里六町　金剛山嶺（石川郡界）至名柄一里五町　水越嶺（石川郡界）至御所一里二十三町（所歷、曰豐田、曰森脇、曰鎌田、）　平石峠（石川郡界外、通平石村、因名、）至竹內二十一町（又自今市至此、一徑、謂之岩橋越、）　岩屋越（石川郡界）至御所三里餘（所歷、曰長尾、曰今市、曰大畑、曰辨莊、曰南花田、曰忍海、曰薑、曰松本、）　穴蟲越（石川郡界）至狐井一里九町、狐井至高田一里六町、（經五位堂、大谷、）　關屋峠（安宿郡界）至關屋十九町、關屋至狐井一里許、（經逢坂、又自關屋外通田邊一徑、謂之田尻越、）　比留米越（安宿郡界）至龍田一里二十四町、（所歷、曰比留米、曰畑田、曰王子、曰車瀨、）　信貴越（高安郡界）至南畑十町、南畑至勢野三十町、　十三越（高安郡界、今曰龍田越、）至龍田一里十七町（所歷、曰福貴畑、曰福貴、曰西宮等、又自西宮外通服部川村、曰立石嶺、一名千家越、）　生駒越（讃良郡界外、通中垣內、因云中垣內越、）至砂茶屋二里十四町（所歷、曰俵口、曰山崎、曰柴畑、曰三碓、曰森木、又自山崎至此一徑、謂之岩屋越、）　清瀧越（讃良郡界、界在田原、以外通清瀧、因名、）至高山前田邑十八町（又自田原通于交野郡私市一徑、謂之岩舟越、）　傍示嶺（交野郡界）至砂茶屋三里二十一町（所歷、曰前田、曰高山、曰二名、曰三碓、又自前田通于山州相樂郡天王村一徑、謂之天王越、以上河州境界、唯除天王越、）　廣岡越（相樂郡界）至奈良坂三里許、（所歷、曰廣岡、曰下狹川、曰上狹川、曰法用、曰鳴川、曰中川、又自中川外通西小田原一徑、謂之中川越、又自奈良坂外通賀茂一徑、謂之賀茂越、）　笠置越（相樂郡界外、通笠置、因名、）至南都驛四里十町（所歷、曰小柳生、曰大原、曰大柳生、曰忍辱山、曰大慈山、曰高畑、又自小柳生有外通大飛鳥路越、大河原越二徑、）　小魂石越（相樂郡界）至水間二里五町（所歷、曰邑地、曰下丹生、曰北山、曰切山、曰上丹生、又自邑地外通一徑、謂之法弘越、）　高屋越（相樂郡界外、通高尾、因名、）至桃香野八町、桃香野至水間二里二十町（歷峯寺、松尾、室津、）　田山越（相樂郡界外、通田山、因名、）至北野一里十八町（經尾山、長引、月瀨、又自北野經尾山外、通田山一徑、謂之矢川越、以上山州境界、小魂石越已下皆小徑、山路嶮岨、）　長嶺越（河內郡界）至尾山二十七町（歷寺代、又自寺代外通伊賀郡治田一徑、謂之大多和越、）　松瀨濟（在中峯山村、伊賀郡界、亦通治田、）中峯山至北野二里七町（歷大西、兩河內、大照、又自大西至廣瀨濟一里六町、謂之大門越、）　靑越（又云北葛尾越、名張郡界、）至和田三里十一町、（所歷、曰倉生、曰三箇谷、曰勝命、曰伏拜、曰深川、曰別所、曰南田原、）和田至鹿野園二里二十八町、（歷鉢伏、）鹿野園至郡山驛一里二十四町、（歷東西九條、自界至此、通計七里有半、又自北葛尾歷鶴山外、通東鶴山、謂之鶴山越、）　笠間峠（又云木引越、名張郡界、）至白石二里十一町、（所歷、曰小原、曰染田、曰多田、）白石至櫟本三里十町、（所歷、曰清水、曰來迎寺、曰藺住、曰岩屋谷等、）櫟本至郡山驛一里三十四町（所歷、曰櫟枝、曰横田、曰筒井等、自峠至此、）

通計七里十九町、　長瀨越乃長瀨村、名張郡界、至白石二里三十三町、經向淵、靈龜元年六月、闢都祁山之道、卽此、　松峠在龍口村、名張郡界、至瀧谷二十五町、瀧谷至上田口二里七町、經室生角川、　中山越在伊賀見村管內、名張郡界、至今井一里二十三町、經葛及太郎路、今井至山精一里許、又自今井通名張郡青蓮寺村一徑、謂之鬼坂越、以上、伊州境界、　龜山越壹志郡界、至太郎路一里一町、山徑、無民家、　白髮嶺飯高郡界、至菅生一里十三町　受取嶺飯高郡界、至土屋原一里二十五町　神合嶺越壹志郡界、牛馬不行、至鹽葉四里三十町、鹽葉至和田一里二十六町、以上、勢州境界、　伯母谷路　上市至西河二里五町、所歷、曰宮瀧、曰菜摘、曰樫尾等、西河至和田四里許、所歷、曰大瀧、曰寺尾、曰人知、曰井戶、曰白川渡等、　和田至中根辻堂四里二十一町、經柏木伯母谷、辻堂至小瀨二里有半、小瀨至白川一里十九町、經槇本、河合、　白川至池原二里二十六町、池原至桑原屬邑川口二里五町、牟婁郡界、外通桃崎、謂之川口越、上市至此、通計十九里二十二町、　龍辻越牟婁郡界、至橡本二里、又自小瀨有一徑、俱至此、　落牛越牟婁郡界、至白川二里十町、又自屬邑古川有一徑、謂之破神越、　不動根越牟婁郡界、至大瀨一里二十二町　田戶越牟婁郡界、至寺垣內一里二町、又自寺垣內外通七色一徑、謂之太觀越、　安曾越牟婁郡界、外通小松、故又謂小松越、至大杉一里、大杉至中村一里二十五町、經下葛川、又自大杉至田戶三十町、謂之田戶越、外通玉井口、蓋安曾大杉田戶三邑、屬于神山村、　天川越　下市至尼生屬邑十日市二里二十町、經樫原、平原、十日市至天川辻三里二町、所歷、曰小古田、曰川岸、曰城戶、曰河合、曰坂卷、曰宗川野、曰立川渡、曰永谷等、天川辻至辻堂二里十一町、經坂本、小代、辻堂至上野地三里二十町、所歷、曰宇井、曰長殿、曰宇宮原、上野地至風屋三里十町、經高津、　風屋至高瀧三里二十九町、所歷、曰野尻、曰山崎、曰池穴、曰中原、曰小森、曰小原等、　高瀧至竹筒三里、牟婁郡界、外通藤生、謂藤生越、下市至此、通計二十里二十六町、又有二徑、一通藤生、謂竹筒越、一通島津、謂入鹿越、　水峯越伊都郡界、至此、十八町、謂之高野道、水峯至今西屬邑大俣二里、有平茶屋、　辻　大俣至三浦管內寒川渡三里二十町、經杉瀨、宇瀨、又有櫃小屋、檜嶺、上四水本、待平茶店、寒川渡至眞砂瀨管內柳本渡四里十五町、所歷、曰中村、曰玉垣內、曰長井、曰田瓦原、曰樫尾崎、又有矢倉茶店、柳本渡至七色二里、歷無終山、因名無終越、牟婁郡界、界外經燒尾谷通熊野本宮、故又云燒尾越、自水峯界至此、通計十二里十七町、　引牛越在上湯川屬邑川俣、日高郡界、至上湯川一里十六町、上湯川至田良原二里十五町、　口太越在迫西川、日高郡界、至中村二里八町、經小坪瀨小山手、　燒笹越在瀨原村、日高郡界、至杉瀨三里二十三町、又自瀨原外通宇原一徑、謂之宇原越、道程一里十三町、　美濃嶺在弓手原、有田郡界、至大俣二里十九町、經檜木股今西、又自檜木股一徑西折、三十三町、謂之保婦峠、又自弓手原一徑東折、謂之湯川越、　池津川越伊都郡界、至中津川三里二十四町、經紫園、

天狗嶺（伊都郡界）至坂本三里二十町（所歴、曰上村、曰中村、曰柞原、曰平川、曰今井、並本郡、吉野川以南、山徑嶮峭、上傍石壁、下臨深谷、馬牛不行、唯此一路三里程、容馬行、又自今井西折十七町、謂之今井峠、伊都郡界、馬牛不行、）水呑峠（在立川渡邑、大月、伊都郡界、）大日川越（伊都郡界）至平原二里二十町（所歴、曰向加、名生、曰湯鹽、曰夜中、曰平沼田、）峯大深越（伊都郡界）至五條驛二里二十五町（經櫃辻御山）火打野越（伊都郡界）至犬飼一里十町（經大津）（以上、紀州境目、）

〔日本實測錄（二街道）〕從伊勢國市場庄歴大和國至西京（中略）○

大和國山邊郡髭無村三本松三十四度三十四分、二里二町三十九間　宇陀郡萩原村　一里八町一十五間半　式上郡初瀨村（至長谷寺四丁二十一間）　一里二十町四十四間　十市郡櫻井村　七町三十五間　同谷村仁王堂（至安倍山滿願寺九丁四十八間、）　一里一町二十八間　高市郡南八木村　一十四町三十一間　今井町　二里四十間（至久米寺二十四町二十八間）　土佐町　一十一町三間　清水谷村（至壺坂山南法華寺一十四丁一十五間、又至高取城、汎測一十八丁三十六間、）　三里一十六町四十四間　吉野郡吉野（至吉野町七丁八間、北極高三十四度二十二分半、又從吉野町至吉野山天王橋、一十一丁五十四間、）　三十二町四十一間　上市村、三十四度二十四分、　三里四間　高市郡島之庄村（至岡村宿所三丁三十八間、北極高三十四度二十八分半、從宿所至岡寺、四丁三十六間、又從岡村至飛鳥社、九丁五十一間、）　一里八町五十一間　十市郡多武峯八井内町、三十四度二十八分、　一里一十七町四十七間　櫻井村　一十七町三十六間半　式上郡三輪村（至三輪社六丁五十八間）　八町二十四間　芝村　二十四町三十三間　柳本　一里八町三十三間　山邊郡丹波市村（至永久寺一十三丁一十八間）　二里一十八町三十一間（至在原寺前二十四丁一十八間、從寺前至今市村、二十五丁四間、從今市至奈良竹花町、二十五丁一十二間、）　添上郡奈良樽井町、三十四度四十一分　四町六間半　同春日華表前（至春日社一十二丁三十六間、又至東大寺二月堂一十五丁四十八間、）　二十三町　奈良坂村　一里一町三十九間（至國界九丁三十四間）　山城國相樂郡木津宿本町（中略）○

從奈良歴龍田及十三峠至大坂

大和國添上郡奈良樽井町　一里二町五間（至下三條町限四丁五十一間）　添下郡寶來村（至秋篠寺二十丁）　一里一十

町　郡山柳町、三十四度三十九分、至矢田山金剛山寺、一里一十八丁四十八間、　一里一町九間　小泉、三十四度三十八分、　三十五町一十九間　平群郡法隆寺村新町歷法隆寺前、至法隆寺村宿所、六町六間、北極高三十四度三十七分、　八町二十間

龍田村龍田町、三十四度三十六分半歷王寺村、至當麻寺、三里九丁四十六間、北極高三十四度三十一分半、　六町三十六間　龍田村至勢野村一十八丁二十一間、從勢野至龍田本宮、一十三丁五十三間、又從勢野至信貴山毘沙門堂、二十六丁五十五間、　二里八町三間至國界十三峠、一里二十七丁五十九間、

河內國高安郡神立村

〔日本國郡沿革考二 畿內〕大和　古作倭、以帝都爲所在、或稱大倭、天平九年十二月改爲大養德國、十九年三月、依舊爲大倭國、後又改爲大和國、拾芥抄云、天平勝寶年間、改大和、本居宣長曰、據國史之文稽之、蓋天平勝寶四年十一月、改爲大和國、　大國、管十五郡、千三百五十四村、

添上百十四村、神武紀層富縣卽是、祈年祭祝詞作曾布、分爲上下二郡、未詳在何時、　添下六十四村　平群七十六村　廣瀨三十二村

葛下七十八村、古葛城國、國造紀云、橿原朝置、祈年祭祝詞作葛木、葛城下郡見天武紀十三年、蓋分爲上下二郡、在其前、神武紀云、高尾張邑有土蜘蛛、皇軍結葛網而掩殺之、因改號其邑曰葛城、　忍海十九村　宇知五十九村、萬葉集、所謂內之大野、卽是地、　吉野三百三十一村、或作芳野、養老間置芳野監、後廢爲郡、　葛上六十二村、說詳上文、

式上五十六村、古磯城郡、見欽明紀、皇極紀作志紀、古事記師木縣主、卽是、萬葉集敷野、亦此地、分爲上下二郡、未詳在何時、延喜式等作城上、　山邊百十八村

高市百十三村、古府治、　宇陀百十五村、日本紀作菟田下縣、續紀作宇太、萬葉集宇陀大野、卽此地、　式下四十村、延喜式等、作城下、　十市七十七村

今來見欽明七年紀、萬葉集今城岳、卽此地、延喜式等不載、廢置未詳、和名抄、今來鄕隸吉野、雄略紀、新漢同訓、　飽波見天武五年紀、廢置未詳、和名抄、飽波鄕隸平群郡、

〔大和志一〕建置沿革　天祖磐闢排闢高市、饒尊石船遷泊白庭、世遠年邈、不可悉知、神武東征定鼎橿原、以珍彥爲國造、崇神畏威、懸鏡笠縫、以入姬爲祭主、自爾以降繼嗣以逮百王之半、海內無虞、固雖闢時運、又王氣之所鍾也、天平九年、改名大養德、十九年復舊爲大和、延曆年中、遷都山州、平城故京是謂南都、班列四畿之上、直隷山州、延元二年、天皇○後醍醐南狩、遂以吉野、爲皇居、傳及後龜山院、和議始成、明德三年遷居峩山、舉朝尊崇、號太上皇、是謂南朝五十六年、將軍義滿公令畠山堂國守護本國、逮政長義就兄弟爭國、國士越智、十市、清澄、福住等、各割據其地、統屬不一、加之多武吉野緇徒、衡行國中、天

國府

郡

正年間、筒井松永占其渠魁、國入戰國、民勞賦役、豐太閤龍驤虎視、悉掃攘之、及秀長受封于郡山、使井上定利布政南都、慶長七年、令中坊秀行掌其府事、始置府史胥徒之屬、

〔日本地誌提要四大和〕沿革　神武天皇橿原（葛上郡柏原村）奠鼎ノ後、列聖地ヲ相テ都ヲ遷ス、凡十數次、和銅中、平城（今ノ奈良）ニ都シ、八十餘年ニシテ、延曆中、山城ニ遷都ス、國府ヲ高市郡ニ置、延元ノ初、後醍醐天皇南狩シ、吉野ヲ以テ皇居トナス、元中ノ末、南北講和、將軍足利義滿、畠山義深ヲ以テ守護トス、四傳シテ持國ニ至ル、其子政長、義就、嫡ヲ爭フニ及テ、筒井、越智、十市、藕住、諸黨州內ニ分據シ、畠山氏號令行ハレズ、永祿ノ初、筒井順昭自ラ州ノ守護ト稱シ、三好氏ニ屬ス、（筒井氏、初筒井城ニ居リ、後布施城ニ移ル、）既ニシテ松永久秀諸城ヲ徇ヘ、信貴城ニ居リ、（後多門城ニ居ル）筒井氏ト地ヲ爭テ連戰ヤマズ、元龜三年、二氏皆織田信長ニ降ル、天正五年、信長、久秀ヲ誅シ、順昭ノ子順慶ヲシテ舊領ニ復セシム、十三年、豐臣秀吉、筒井定次（順慶ノ嗣）ヲ伊賀ニ徙シ、其弟秀長ヲ本州及和泉紀伊ニ封ジ、郡山ニ治ス、關秀俊天シテ國除シ、增田長盛ヲ郡山ニ封ズ（貳拾萬石）關原役後、其封ヲ失フ、德川氏ニ至リ、封ヲ受ル者、郡山（初水野勝成、後松平吉里、）高取（植村家政）小泉（片桐貞隆）櫛羅（永井直圓）芝村（織田長益）柳本（織田尚長）柳生（柳生家矩）凡テ七藩、又奈良奉行ヲ置、王政革新、奈良府ヲ置キ、田原本藩ヲ建、（平野長裕）既ニシテ皆廢シテ縣トシ、更ニ奈良縣ニ併ス、

〔日本書紀三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、（○中略）又以劍根者、爲葛城國造、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年十月己未、承前之例、畿內國次、以大和國爲之第一、勅宜據新式改之、以山城國爲之第一、

〔倭名類聚抄五國郡〕大和國（國府在高市郡、行程一日、）

〔拾芥抄中末本朝國郡〕大和國（大）十五郡（○中略）　高市府

〔延喜式二十二民部〕大和國大（管添上添下平群廣瀨葛上葛下忍海宇智吉野宇陀城上城下山邊十市高市○中略）

右爲₂近國₁

〔倭名類聚抄（五國郡）〕大和國（略○註管十五（略○註））添上（曾不乃加美）添下（曾不乃之毛）平群（倍久里）廣瀬（比呂世）葛上（加豆良岐乃加美）葛下（加豆良木乃之毛）忍海（於之乃美）宇智 吉野（與之乃）宇陀（宇太）城上（之岐乃加美）城下（之岐乃之毛）高市（多介知）十市（止保知）山邊（夜萬乃倍）

〔皇國郡名志〕大和國十五郡

添上（ソフノカミ） ⌃奈良 ⌃高畑 ⌃野田 ⌃川上町（城界郡） ●櫟本 ●大柳生 ●テビトキ

添下 [郡山] ●尼ヶ辻 ⌃小泉（城界郡）

平群（ヘグリ） ⌃龍田 ⌃會嶺 △法隆寺（河界郡） △信貴山 △生駒山

廣瀬 ⌃叢尾 叢井（國中小郡）

葛上（カツラギノカミ） ⌃五條 △金剛山（河界郡）

葛下 ⌃タカ口 ⌃竹内 △達磨寺（河界郡）

忍海（オシノミ） 葛上下ノ間ニ有テ、至テ小郡ニテ驛町無、（河界）

宇智（ウチ） ⌃五條 ●宇野 △待乳茶屋（紀河界郡）

吉野（ヨシノ） ⌃吉野（和州國一郡） ⌃上市 ⌃下市（○頭書曰、吉野宇陀十市ノ間ニ中宮奥ト云處一村、城上郡ニ屬ス、） ●六田 ●檜垣本 ●洞川 ●天川 壷内 ●湯本 勢紀界大

宇陀（ウダ） ●灰原 ●山邊 ●赤埴 ●田口（伊賀伊勢界郡） ●桃股

城上（シキノカミ） ●初瀬 ●チサン寺 ●三輪 ⌃柳本（國中郡）

城下 ●二階堂（國中郡）

高市（タケチ） [高取] ●土佐町 ⌃八木（國中郡）

山邊（ヤマノベ） ●大野 ⌃丹波市 ●三本松（伊賀界）

十市（トイチ） ⌃櫻井 ⌃田原本 △多武峯（國中郡）

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕大和

六國史	添上 記 曾富 記 添下 記				葛田 記 宇太 紀	志紀上 紀 磯城 紀	
古事記以下諸書					宇陀 古	師木 古	
延喜式	添上(ソフノカミ)	添下(ソフノシモ)	平群(ヘグリ)	山邊(ヤマノヘ)	宇陀	城上(シキノカミ)	城ノ下
倭名抄	同 曾不乃加美	同 同上	同 倍久里	同 夜萬乃倍	同 宇太	同 之岐乃加三	同 之岐乃之毛
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	同
諸書古文書	同 國知元	同 國知元	同 國知元	同 國知元	宇陀 知元 宇多 國	城上 知 式上 國元	城下 知 式下 國元
郡名考	同(ソフカミ)	同(ソフノシモ)	同(ヘグリ)	同(ヤマノヘ)	宇陀(ウダ)	式上(シキノカミ)	式下(シキノシモ)
天保鄉帳	同 ソフカミ 鄉	同 ソフシモ 鄉	同	同	同	同 シキカミ 鄉	同 シキシモ 鄉
明治沿革帳	同	同	同	同	同	同	同
地誌提要	同(ソフノカミ)	同(ソフノシモ)	同(ヘグリ)	同(ヤマノベ)	同(ウダ)	城上(シキジヤウ)(シキノカミ)	城下(シヤウグ)(シキノシモ)
郡區編制	同	同	同	同	同	式上	式下

	十市	廣瀨	高市	葛上	葛下	忍海	宇智	吉野
		廣湍史		葛上續	葛木下紀　葛下續		宇智續　宇知續　有智續	吉野紀　芳野監續
				葛木上	葛城古			吉野古　芳野萬
管十五	十市トホチ	廣瀨ヒロセ	高市タケチ	葛上	葛下	忍海ヲシノウミ	宇智	吉野
同	同止保知	同比呂世	同多介知	同加豆良岐乃加三	同加ツ良岐乃之毛	同於之乃三	同	同與之乃
十五郡	同	同	同	同	同	同	宇治	同
	同國知元	同國知元	同國知元	同國知元	同國知元	同國知元	宇治國　宇智知元	同國知元
同	同トイチ	同ヒロセ	同タカイチ	同カツジヤウ　カツラギノカミ	同カツゲ	同オシノミ	宇智ウチ	同ヨシノ
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同トヲチ	同ヒロセ	同タケチ	同カツジヤウ　カツラギノカミ	同カツゲ　カツラギノシモ	同ヲシウミ	同ウチ	同ヨシノ
同	同	同	同	同	同	同	同	同

〔足利季世記一畠山記〕畠山政長自害之事

若君ヲ桂ニ作リ、カノ女ドモノ中ニ入レ、己ハ桂ガ男ノ風情ニナリ、被ノタグヒ、セウゾクナドヲツヽミニ入レテ、畠山重代ノ長刀ヲ、竹ノ筒ニ入テセオヒ、敵陣ノ前ヲ通リケル、敵方ニモ桂ヲ見知タル人ヲヽケレバ、無左右是ヲ通シケル、其ヨリ馬ニノセ申、轅ヲスヽメテ、大和國奥郡エ落シ申ケル、

添上郡

〔大和志二〕添上郡東南至山邊郡界、北至山州相樂郡界、西至添下郡界、

〔日本書紀神武三〕己未年二月辛亥、命諸將練士卒、是時層。富。縣。波哆丘岬、有新城戶畔者、

〔續日本紀元明四〕和銅元年九月乙酉、至春日離宮、大倭國添。上。下。二。郡。勿出今年調、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年十一月七日庚寅、先是、大和國言、平城舊京其東添上郡、西添下郡、和銅三年遷自古京、都於平城、於是兩郡自爲都邑、延曆七年、遷都長岡、其後七十七年、都城道路、變爲田畝、內藏寮田百六十町、其外私竊墾開、往往有數、望請收公、令輸其租、許之、

添下郡

〔大和志三〕添下郡東至添上郡界、西南至平群郡界、北至山州相樂郡界、

〔日本書紀天武二十九〕五年四月辛丑、倭國添下郡鱷積吉事貢瑞鷄、其冠似海石榴華、

〔續日本紀元明六〕和銅七年十一月戊子、大倭國添下郡人倭忌寸果安、添上郡人奈良許知麻呂、有智郡女曰比信紗、並終身勿事、旌孝義也、

〔令集解假寧四十〕古記云、〇中略添下郡平群郡、四月種七月收、葛上葛下內等郡五月六月種、八月九月收之類是、

平群郡

〔大和志四〕平群郡東至添下山邊二郡界、西至河州河內高安大縣三郡界、南至城下廣瀨葛下三郡界、北至河州讚良郡界、

〔日本書紀武烈七〕十七年三月己酉、幸子陽縣、遊于丹裳小野、〇中略是日陟野中大石、憶京都而歌之曰、波辭枳豫辭、和藝幣能伽多由、區毛位多知區暮、夜摩苦波、區珥能摩保邏摩、多多儺豆久、阿烏伽枳夜摩、許莽例屢、夜摩苦之于瀰破試、異能知能、摩曾部務比苦破、多多瀰許莽、幣。邏。利。能夜摩能、志邏伽之之餓

延埴于受珥左勢、許能固、是謂思邦歌也、

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合水田參佰玖拾陸町參段貳佰拾壹步參尺陸寸〇中略

大倭國肆拾玖町壹段伍拾漆步參尺陸寸

平群郡卅六町九段二百一步三尺六寸
添上郡二町一段二百十六步〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

廣瀨郡

〔大和志五〕廣瀨郡東至十市城下二郡界、西南至葛下郡界、北至平群郡界、

〔東大寺正倉院文書十〕大倭國正稅帳

廣湍郡

天平元年定大稅穀漆仟玖伯參斛肆斗玖升伍合〇中略

天平二年十二月廿日〇署名略

〔類聚國史田地百五十九〕延曆十七年二月甲寅、右京人正六位上許曾部朝臣帶麻呂等言、大和國廣瀨郡、田疇多數、灌漑乏水、伏望以公田七町、築堤爲池、同利公私、其功食等、並用私物、許之、

葛上郡

〔大和志六〕葛上郡東至高市郡界、西至河州石河郡界、南至宇智郡界、北至忍海郡界、

〔日本書紀推古二十二〕三十二年十月癸卯朔、大臣遣阿曇連闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣、以欲爲臣封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣則夜不明、日言矣則日不晚、何辭不用、然今當朕之世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不聽、

〔續日本紀文武一〕四年十一月壬寅、大倭國葛上郡鴨君粳賓、一產二男一女、〇下略

〔日本靈異記上〕憶持法花經得現報示奇異表緣第十八

昔大和國葛木上郡、有一持經人、丹治比之氏也、

葛下郡

〔大和志七〕葛下郡（東至高市廣瀨二郡界、西至河州石川安宿二郡界、南至忍海郡界、北至平群郡界、）

〔日本書紀二十九天武〕十三年十一月、倭葛城下郡言、有四足鷄、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年六月癸卯、大倭國葛下郡人白丁花口宮麻呂、散己私稻、救養貧乏、仍賜少初位上、

〔今昔物語十一〕德道聖人始建長谷寺語第卅一

今昔、世ノ中ニ大水出タリケル時、近江ノ國高島ノ郡ノ前ニ、大ナル木流テ出寄タリケリ、○中略大和國葛木ノ下ノ郡ノ當麻ノ郷ニ曳付ツ、○下略

忍海郡

〔大和志八〕忍海郡（東至高市郡界、西至河州石川郡界、南至葛上郡界、北至葛下郡界、）

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月丁未、先是、遣大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬島、冶成黃金、○下略

宇智郡

〔大和志九〕宇智郡（東南至吉野郡界、西至紀州伊都河州石川二郡界、北至葛上郡界、）

〔續日本紀一文武〕二年二月丙申、車駕幸宇智郡、

〔續日本紀二文武〕大寶二年六月壬寅、復大倭國吉野宇。知。二郡百姓、

吉野郡

〔大和志十〕吉野郡（東至勢州飯高郡及紀州牟婁郡界、西南至紀州牟婁日高有田伊都四郡界、北至宇陀高市十市宇智四郡界、）

〔日本書紀三神武〕戊午年八月、天皇欲省吉野之地、○中略至吉野時、有人出自井中、光而有尾、天皇問之曰、汝何人、對曰、臣是國神、名爲井光、此則吉野首部始祖也、

〔續日本紀五元明〕和銅四年四月甲申、大倭國芳野郡、始置大少領各一人、主政二人、主帳一人、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月丙寅、芳野監、讃岐、淡路等國、去年不登、百姓飢饉、勅賑貸之、

宇陀郡

〔大和志十一〕宇陀郡（東至伊州名張、勢州一志飯高三郡界、西至十市城上二郡界、南至吉野郡界、北至山邊郡界、）

〔日本書紀三神武〕戊午年六月、大伴氏之遠祖日臣命、帥大來目、督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、因號其所至之處、曰菟田穿邑、（穿邑、此云于介知能務羅、）

〔日本書紀〕二十四皇極三年三月、倭國言、頃者菟田郡人押坂直、闕名將一童子、欣遊雪上、登菟田山、便見紫菌挺雪而生、高六寸餘、滿四町許、○下略

〔續日本紀〕三十文武慶雲二年九月丙戌、置八咫烏社于大倭國宇太郡祭之、

〔日本靈異記〕下閻羅王示奇表勸人令修善緣第九

藤原朝臣廣足者、帝姬阿倍天皇○元明御代、依病嬰身、爲差身病、神護景雲二年二月十七日、至大和國菟田郡於眞木原山寺而住、○下略

〔今昔物語〕二十女人依心風流得感應成仙語第四十二

今昔、大和國宇陁ノ郡ニ住ム女人有ケリ、○下略

〔大和軍記〕大和國侍之事

筒井方、總敗軍に及、筒井へ取籠り申事不成候て、直に宇多郡江落被申候、其頃宇多郡には、秋山と申仁居候、

城上郡

〔大和志〕十二城上郡東至宇陀郡界、西至城下十市二郡界、南至十市郡界、北至山邊郡界、

〔日本書紀〕三神武二年二月乙巳、天皇定功行賞、○中略弟磯城名黑速、爲磯城縣主、

〔日本書紀〕十九欽明元年七月己丑、遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島金刺宮、

〔續日本紀〕十八孝謙天平勝寶三年十月丁巳、大倭國城下郡人大倭連田長、古人等八人、賜宿禰姓、

城下郡

〔大和志〕十三城下郡東至城上山邊二郡界、西至廣瀨郡界、南至十市郡界、北至平群郡界、

〔今昔物語〕三十大和國人得人娘語第六

今昔ロロノ守ロロノロロト云フ人有ケリ、○中略少將家ニ止事无キ學生ノ博士ノ來タリケルニ、物語ノ次デニ、少將疊ノ裏ト云フ事ハ何ト云事ゾト問ケレバ、博士、疊ノ裏トハ大和ニ有ル城下ト云フ所ヲコソ、古ヘ舊事ニ申タレト云ケレバ、少將此ヲ聞テ心ノ内ニ喜ビ思テ、然テハ其ニ住

ム人ナヽリト心得テ、上ノ空ナレドモ、彼ノ人ニ心移リ畢ニケリ、

高市郡

〔大和志十四〕高市郡（東南至吉野郡界、西至葛上葛下忍海三郡界、北至十市郡界、）

〔古事記上〕天津日子根命者、（中略）高市縣主（中略）三枝部造等之祖也、

〔坂上系圖〕阿智王（○中略）大鷦鷯天皇〈諡仁德〉御世、擧落隨來、今高向村主（中略）尾張次角村主等是其後也、爾時阿智王奏、建今來郡、後改號高市郡、而人衆巨多、居地隘狹、更分置諸國、（○下略）

〔日本書紀十九欽明〕七年七月、倭國今來郡言、於五年春、川原民直宮〈宮名〉登樓騁望、乃見良駒、（○下略）

〔日本書紀十九欽明〕十七年十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡、置韓人大身狹屯倉、（○註略）高麗人小身狹屯倉、

〔令集解四十賦役〕古記云、遊部者在大倭國高市郡、

十市郡

〔大和志十五〕十市郡（東至宇陀郡界、西至廣瀨郡界、南至高市郡界、北至城上城下二郡界、）

〔今昔物語二十七〕雖財娘爲鬼被噉悔語第卅七

今昔、大和ノ國十市ノ郡奄知ノ村ノ東ノ方ニ住ム人有ケリ、家大キニ富メル、姓ハ鏡造也、

山邊郡

〔大和志十六〕山邊郡（東至伊州伊賀、名張二郡界、西至城下、平群二郡界、南至宇陀、城上二郡界、北至添上郡界、）

〔日本書紀十五仁賢〕六年、是歲、日鷹吉士還自高麗、獻工匠須流枳、奴流枳等、今倭國山邊郡額田邑熟（○恐熟執）皮高麗、是其後也、

〔古簡雜纂午〕寄進　所領壹處事

右大和國山野邊山口庄事（○中略）

建曆二年二月廿九日　　藤原氏在判

飽海郡

〔日本書紀二十九天武〕五年四月辛丑、是日、倭國飽海郡言、雌鷄化雄、

〔倭名類聚抄六大和國〕平群郡　飽波〈阿久奈美〉

鄉

〔大和志四平群郡〕鄉名〇中略 飽波已廢、存二安堵村一〇中略 村里〇中略 東安堵屬邑二、其一曰二飽海一

〔倭名類聚抄六大和國〕添上郡 山村也末無良 檜中 山邊ヤマノヘ 楊生也木布 八島也之末 大岡 春日加須加 大宅

添下郡 村國 佐紀 矢田 鳥貝止利加比

平群郡 那珂 飽波阿久奈美 平群倍久利 夜麻 坂門 額田奴加多

廣瀨郡 城戶 上倉 下倉 山守 散吉 下句

葛上郡 日置 高宮多加美也 牟婁 桑原 上鳥 下鳥 太坂 檜原奈良波良 神戶カムヘ 餘戶

葛下郡 神戶 山直 高額 賀美 蓼田 品治保無智 當麻多以末

忍海郡 津積 園人 中村 栗栖

宇智郡 阿陀陀音可二濁讀一 賀美 那珂 資母

吉野郡 賀美 那珂 資母 吉野與之乃

宇陀郡 漆部奴利倍 伊福 浪坂奈無佐加 多氣 笠間加佐末

城上郡 辟田 下野 神戶 大市於保以智 大神於保無知 上市 長谷波都勢 恩坂於佐加

城下郡 賀美 大和於保夜末止 三宅美也介 鏡作加加都久利 黑田久留多 室原他本也

高市郡 巨勢 波多 遊部 檜前比乃久末 久米 雲梯宇奈天 賀美

十市郡 飯富 川邊加八乃倍 池上 神戶

山邊郡 都介 星川保之加波 服部波止利 長屋奈加也 石成以之奈利 石上伊曾乃加美

〔大和志二添上郡〕鄉名 山村方廢、村存、 檜中ナラナカ方廢、檜村存、 山邊已廢、存二佐保法華寺二村一、 楊生ヤギフ方廢、大柳生小柳生二村存、 八島 大岡方廢、廣岡村存、 春日カスガ方廢、春日社存、 大宅オホヤケ已廢、存二白毫寺村一、今曰二宅ヤケ春日一

〔東大寺奴婢籍帳〕散位寮散位大初位大宅朝臣可是麿謹解申貢進賤事

合陸拾壹人〇中略

右卌九人、大倭國添上郡大宅鄕戶主大宅朝臣可是麻呂戶賎、(中略)

婢飯虫咩年卌四(中略)

天平勝寶元年十一月三日

〔日本書紀 十六武烈〕十一年(仁賢)八月、億計天皇(仁賢)崩、大臣平群眞鳥臣專擅國政、欲王日本、(中略)大伴連(金村)將數千兵、徼之於路、戮鮪臣(眞鳥子)於乃樂山、(略)○註 是時、影媛逐行戮處、見是戮已、驚惶失所、悲涙盈目、遂作歌曰、伊須能箇美、賦屢嗚須擬底、擧慕摩矩羅、施箇播志須擬、慕能娑播儞、於裒野該須擬、播屢比能、箇須我嗚須擬、逗摩御慕屢、嗚佐裒嗚須擬、拕摩該儞播、伊比佐倍母理、拕摩慕比儞、瀰逗佐倍母理、儺岐曾裒遲喩倶謀、柯騰比謎阿婆例、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年九月廿一日壬寅、大和國添上郡百姓從七位上相模宿禰阿古麻呂、從八位下相模宿禰門主、從八位上相模宿禰魚麻呂等三戶、男女三十一人移隷河內國澁河郡、阿古麻呂等言曰、父正六位上相模宿禰仁麻呂、本是大和國添上郡八島鄕人也、(下略)

〔水鏡 下〕延暦十七年に、勅使をあはぢのくにへつかはして、早良親王の骨をむかへたてまつりて、やまとの國八島のみさゝぎにおさめ給き、

〔大和志 三添下郡〕鄕名　村國(廢)　佐紀(已廢、存超昇寺、常福寺二村、)　矢田(方廢、村存、)　鳥貝(今曰鳥見、存、)

〔續日本紀 六元明〕和銅七年十一月戊子、大倭國添下郡人倭忌寸果安、(中略)終身勿事、旌孝義也、果安孝養父母、友于兄弟、若有人病飢、自齎私粮、巡加看養、登美箭田二鄕百姓、咸感恩義、敬受如親、

〔續日本紀 三十光仁〕寶龜元年八月丙午、葬高野天皇於大和國添下郡佐貴鄕高野山陵、

〔大和志 四平群郡〕鄕名　那珂(廢)　飽波(已廢、存安堵村、)　平群(今曰平群谷)　夜麻(已廢、存興富、三井二村、)　坂門(已廢、存立野村、)　額田(方廢、村存、)

〔日本書紀 二十九天武〕五年四月辛丑、是日、倭國飽波郡言、雌鷄化雄、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕山林岳嶋等貳拾陸地

大倭國參地
(平群郡屋部鄕一地、東限鳥方岳板垣嶺、北限澀谷至於保伊知比石庭、西限石庭至大谷須疑墓、南限寺領、同郡坂戶鄕岳一地、東限平群川、南西限久度川、北限志比坂路、添下郡菅原鄕深川栗林一地、東限道、南限百姓家、習宜池、西北限百姓田、〇中略)

天平十九年二月十一日(〇署名略)

〔大和志廣瀨郡五〕鄕名　城戶(已廢、存河合村、)上倉下倉山守(俱廢)散吉(已廢、存大恩寺村、)下句(廢)

〔日本書紀武烈十六〕三年十一月、詔大伴室屋大連、發信濃國男丁、作城像於水派邑、仍曰城上也、

〔萬葉集挽歌二〕明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌
飛鳥、明日香乃河之、上瀨、石橋渡、(〇中略)幸而、遊賜之、御食向、木瓲之宮乎、常宮跡、定賜、味澤相、目辭毛絕奴、

〔大和志葛上郡六〕鄕名　日置(已廢、存戶羅村、)高宮(已廢、存森脇二村、)牟婁(方廢、村存、)桑原、上鳥、下鳥(俱廢)大坂(已廢、存增村、)檜原(方廢、村存、)神戶(今曰佐味莊、)餘戶(方廢、小殿村存、)

〔日本書紀崇神五〕十年九月、武埴安彥與妻吾田媛謀反逆、興師忽至、各分道、而夫從山背、婦從大坂、共入欲襲帝京、時天皇遣五十狹芹彥命、擊吾田媛之師、卽遮於大坂、皆大破之、殺吾田媛、悉斬其軍卒、

〔日本書紀履中十二〕八十七年(〇仁德)正月、大鷦鷯天皇(〇仁德)崩、(〇中略)太子(〇履中、)中略、自大坂向倭、至于飛鳥山、遇少女於山口、問之曰、此山有人乎、對曰、執兵者多滿山中、宜廻自當摩徑踰之、太子於是以爲、聆少女言、而得免難、則歌之曰、於朋佐箇珥、阿布夜烏等謎烏、瀰知度沛麼、哆駄珥破能邏孺、哆幡摩知烏能流、

〔大和軍記〕大和國侍之事
檜原。檜原と申所に、檜原と申仁居候、是も國侍の內にては、能身上の仁に候、尤旗下も多く持候、

〔大和志葛下郡七〕鄕名　神戶(已廢、存正田大島二村、)山直(廢)高額(已廢、存染野村、)賀美(方廢、上里村存、)蓼田(已廢、存高田村、)品治(方廢、寺村存、)當

麻（方殿、村存、）

〔長谷寺緣起〕推古天皇卽位廿六年丙寅歲、葛下郡當麻鄕挽移、其願不應、大水命過彼郡、五十餘年郡里ノ不吉也、

〔大和志八忍海郡〕鄕名　津積、國人、中村（俱廢）、栗栖（已廢、在御原村、）

〔大和志九宇智郡〕鄕名　阿陀、賀美（廢）、那珂（廢）、資母（廢）

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年十月廿三日甲午、贈太政大臣藤原朝臣墓、在大和國宇智郡阿陀鄕、詔置守冢徭丁十二人、

〔萬葉集十秋雜歌〕詠花

眞葛原、名引秋風、吹每、阿太乃大野之、芽子花散、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

安太人乃、八名打渡、瀨速、意者雖念、直不相鴨、

〔大和志十吉野郡〕鄕名　賀美（今曰川上莊）　那珂（今曰中莊）　資母（廢）　吉野（已廢、吉野山村、御吉野村存、）

〔太平記五〕大塔宮熊野落事

戸野兵衞申ニヤ及ビ候、身不肖ニ候共、某一人ダニ斯ル事ゾト申サバ、鹿瀨、蕪坂、湯淺阿瀨川、小原、芋瀨、中津河、吉野十八鄕ノ者迄モ、手刺者候マジキニテ候トゾ申ケル、

〔金峯神社文書〕金峯山吉水院

申請坊領證文紛失狀判事

大和國（中略）

吉野郡高原鄕、二十河鄕、檜垣本鄕內水田五段、阿智我鄕內、屋敷壹所幷水田五段、新住水田四段、河藝河水田四段、比曾鄕內水田五段、摩志鄕內水田五段、波佐鄕內水田貳段、都原鄕內水田參段、古田

郷。内水田貳段、○中略

建武元年二月日　阿闍梨幸詮（花押）○下略

〔大和志十一宇陀郡〕郷名　漆部、伊福、（已廢、存井足福西二村、）浪坂、（已廢、存平井村、）多氣、（已廢、存入谷村、）笠間、（方廢、笠間村存、今屬城上郡、）

〔續日本紀六元明〕和銅六年七月丁卯、大倭國宇太郡波。坂。郷。人、大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而獻之、

〔大和志十二城上郡〕郷名　辟田（ヒラタ）（方廢、東田村存、）下野（廢）神戸（カンヘ）（廢）大市（已廢、存箸中村、）大神（オホムチ）（方廢、三輪村存、）上市（已廢、存金屋村、）長谷（方廢、長谷村存、）恩坂（オンサカ）（方廢、忍坂村存、）

〔長谷寺縁起〕天智天皇即位七年戊辰歳、指城上郡長谷郷北神河浦挽捨去、其後留于此里、卅九年、犯彼木者不平、

〔大和志十三城下郡〕郷名　賀美（廢）大和（已廢、存海知村、）三宅（已廢、存宮古村、）鏡作（已廢、存八尾小坂二村、）黒田（方廢、黒田村存、）室原（已廢、存唐古村、）

〔日本書紀四孝德〕百二年○孝安十二月丙寅、皇太子遷都於黒田、是謂盧戸宮、

〔大和志十四高市郡〕郷名　巨勢（コセ）（方廢、越村存、）波多（方廢、畑村存、）遊部（ユフ）（已廢、存今井四條二村、）檜前（ヒノクマ）（方廢、村存、）久米（クメ）（方廢、村存、）雲梯（ウナテ）（方廢、村存、）賀美（已廢、存飛鳥村、）

〔日本紀略淳和〕天長六年三月己丑、以大和國高市郡賀。美。郷。甘南山飛鳥社、遷同郡同郷鳥形山、依神託宣也、

〔大和志十五十市郡〕郷名　飯富（已廢、存飯高村、）川邊（已廢、存下莊村、）池上（已廢、存安倍屬邑長門、）神戸（已廢、存橋本村、）

〔大安寺伽藍縁起幷流記資財帳〕合處處庄拾陸處○中略

大倭國五處

一在十市郡千。代。郷。　一在式下郡村屋　一在高市郡古寺所　一在添上郡瓦屋所○中略　一在山邊郡波多蘇麻

天平十九年二月十一日○署名略

村里名邑

〔東大寺正倉院文書東南院雜帳附錄六〕大和國十市郡池上鄕屋地賣買券

十市郡司解　申立賣買地券事

合地貳區（並在十市郡池上鄕）○中略

天平寶字五年十一月廿七日（○署名略）

〔大和志十六山邊郡〕鄕名　都介（ツゲ、已廢、存山口、針田二村）　星川（已廢、存吐山村）　服部（已廢、存新莊村）　長屋（已廢、長原村存）　石成（廢）　石上（イソノカミ、方廢、村存）

〔日本書紀十一仁德〕六十二年、額田大中彥皇子、獵于鬪雞、時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬、仍遣使者令視、還來之曰、窟也、因喚鬪雞稻置大山主、問之曰、有其野中何窟矣、啓之曰、氷室也、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十二月廿一日己未、勅、大和國山邊郡都介野、天長承和、累代立制、今宜加禁莫令縱獵、觸犯禽鳥、許採草木、

〔延喜式四十主水〕凡運氷駄者、○中略氷室、○中略大和國山邊郡都介一所、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年三月庚申、大和國言、居住山邊郡長屋鄕京戸左京三條一坊戸主犬甘千麻呂牛、産三足犢、下唇長於上唇、行步不便、勸則顚仆、

〔郡名一覽〕一大和國（御料私領）（和州、南北一日半餘）拾五郡

高五拾萬四百九拾七石三斗八合六勺八才　千四百五ヶ村

●郡山（伏見通百三十四里、伊賀越百十六里）　●高取　百三十四里　○柳本　百二十里　○芝村　百十九里卅二町　○柳生　百十三里　○小泉　百三十三里　○新庄　百三十六里七町

⊠田原本（五千石平野權平）　∧五條　百四十六里　□奈良（江戸百二十四里、京十一里、大坂十八里）

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕大和　十五郡、千三百五十四村、

（御料私領）高五十万千三百六十一石六斗九升一合五勺六才

添上郡百十四村　添下郡六十四村　平群郡七十六村　山邊郡百十八村　宇陀郡百十五村
式上郡五十六村　式下郡四十村　十市郡七十七村　廣瀬郡三十二郡　葛下郡七十八村
高市郡百十三村　忍海郡十九村　葛上郡六十二村　宇智郡五十九村　吉野郡三百三十一
村

〔地勢提要 地〕郡邑島嶼奇名

大和　宇陀郡、萩原村、式上郡、角柄村、吉隱村、外山村、高市郡、畝傍村、吉野郡、檜垣本村、新野村、六田村、十市郡、百市村、下居村、山邊郡、三昧田村、勾田村、添上郡、櫟本村、肘塚村、添下郡、外川村、新木村、平群郡、勢野村、福貴畑村、

〔日本書紀 神武三〕戊午年九月、時弟猾又奏曰、倭國磯城邑、有磯城八十梟帥、又高尾張邑、或本云、葛城邑也、有赤銅八十梟帥、此類皆欲與天皇距戰、　十月、勅道臣命、汝宜帥大來目部、作大室於忍坂邑、盛設宴饗、誘虜而取之、　十二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨氷、乃有金色靈鵄、飛來止于皇弓弭、其鵄光曄煜、狀如流電、由是長髓彥軍卒皆迷眩、不復力戰、長髓是邑之本號焉、因亦以爲人名、及皇軍之得鵄瑞也、時人仍號鵄邑、今云鳥見、是訛也、

〔古事記傳 十八〕登美〇中略此地名神名帳に、大和國城上郡等彌神社、又添下郡登彌神社と、二所見えたる中に、今は城上郡なる登美にて、今世に外山村といふぞ此名の遺れる地なる、〇中略萬葉四（四十九丁）八（三十三丁 三十九丁）などに、跡見莊といひ、射目立而跡見乃岳邊之と詠るも同じ登美也、〇註略さて添下郡なる登彌は、今も鳥見莊と云號にて、〇註略此の登美にはあらず、

〔日本書紀 神武三〕戊午年十有二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨氷、乃有金色靈鵄、飛來止于天皇弓弭、〇中略時人仍號鵄邑、今云鳥見、是訛也、　己未年二月辛亥、又高尾張邑、有土蜘蛛、其爲人也、身短而手足長、與侏儒相類、皇軍結葛網、而掩襲殺之、因改號其邑曰葛城、夫磐余之地、

舊名片居(片居此云伽多韋)、亦曰片立(片立此云伽多多知)、逮我皇師之破虜也、大軍集而滿於其地、因改號爲磐余、或曰、天皇往嘗嚴瓮粮、出軍西征、是時磯城八十梟帥、於彼處屯聚居之、(屯聚居此云怡波瀰萎)、果與天皇大戰、遂爲皇師所滅、故名之曰磐余邑、又皇師立誥之處、是謂猛田、作城處、號曰城田、又賊衆戰死而僵屍枕臂處、呼爲頬枕田、

二年二月乙巳、天皇定功行賞、賜道臣命宅地、居于築坂邑、以寵異之、亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地、今號來目邑、此其緣也、(中略)又給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、

〔日本書紀六垂仁〕二十七年、是歲、興屯倉于來目邑、

〔日本書紀五崇神〕六年、先是、天照大神和大國魂二神、並祭於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神、託豐鍬入姬命、祭於倭笠縫邑、(下略)

〔日本書紀六垂仁〕七年七月乙亥、左右奏言、當麻邑有勇悍士、曰當麻蹶速、其爲人也强力、以能毀角申鉤、恒語衆中曰、於四方求之、豈有比我力者乎、何遇强力者、而不期死生、頓得爭力焉、天皇聞之、詔群卿曰、朕聞、當麻蹶速者、天下之力士也、若有比此人耶、一臣進言、臣聞、出雲國有勇士、曰野見宿禰、試召是人、欲當于蹶速、卽日遣倭直祖長尾市、喚野見宿禰、於是野見宿禰自出雲至、則當麻蹶速與野見宿禰令捔力、二人相對立、各擧足相蹶、則蹶折當麻蹶速之脇骨、亦蹈折其腰而殺之、故奪當麻蹶速之地、悉賜野見宿禰、是以其邑有腰折田之緣也、野見宿禰乃留任焉、

〔日本書紀九神功〕五年二月、抜草羅城還之、是時俘人等、今桑原、佐糜、高宮、忍海、凡四邑漢人等之始祖也、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年四月庚午、正四位下近衛員外中將兼安藝守勳二等坂上大忌寸苅田麻呂等言、以檜前忌寸、任大和國高市郡司、元由者先祖阿智使王、輕島豐明宮馭宇天皇(應神)御世、率十七縣人夫歸化、詔賜高市郡檜前村而居焉、凡高市郡內者、檜前忌寸及十七縣人夫滿地而居、他姓者十而一二焉、(下略)

〔日本書紀十四雄略〕七年、是歲、天皇詔弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢(堅磐、此云柯陀之波、)使共復命、遂即安置於倭國吾礪廣津邑、(廣津、此云比盧岐頭、)而病死者衆、

〔日本書紀十五仁賢〕六年、是歲、日鷹吉士還自高麗、獻工匠須流枳奴流枳等、今倭國山邊郡額田邑執(○執恐熟誤)皮高麗、是其後也、

〔新見文書〕弘福寺領田畠流記寫

弘福寺川原

田壹百伍拾捌町肆段壹伯貳拾壹步

陸田肆拾玖町漆段參步

大倭國

廣瀨郡大○豆○村○田貳拾町玖段貳拾壹步

山邊郡石○上○村○田貳拾捌町肆段壹伯肆拾陸步

葛木下郡成○相○村○田壹町貳段漆拾貳步

高市郡寺邊田參町參段參拾玖步

陸田壹拾壹町玖段壹伯貳步

內郡二○見○村○陸田陸段○中略

和銅二年歲次己酉七月廿五日

正七位下守民部大錄兼行陰陽曆博士山口伊美吉田主○署名略

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十月壬午、是日、到山邊郡竹○谿○村○堀越頓宮、

〔東大寺奴婢籍帳〕山背國司移　大養德國司○中略

合奴婢貳拾捌人

奴雲足年六○中略

右還附彼部添上郡師○毛○里戶主少初位下大宅朝臣加是麿戶口○中略

天平十三年六月廿六日

〔日本靈異記上〕偷用子物作牛役之示異表緣第十

大和國添上郡山村中里、昔有直椋家長公、

〔日本靈異記中〕依惡夢至誠心使誦經示奇表得全命緣第廿

大和國添上郡山村里、有一長母、姓名未詳也、

〔日本書紀十九欽明〕元年二月、百濟人己知部投化、置倭國添上郡山村、今山村巳知部之先也、

〔日本靈異記上〕女人好風聲之行食仙草以現身飛天緣第十三

大和國宇太郡漆部里有風流女、是即彼部內漆部造麿之妾也、

〔日本靈異記中〕觀音銅像反化鷺形示奇表緣第十七

大倭國平群郡鵤村岡本尼寺觀音銅像、有十二體、〇中略

未作畢佛像而棄木示異靈表緣第廿六

禪師廣達者、〇中略聖武天皇代、廣達入於吉野金峯、經行樹下而求佛道、時吉野郡桃花里有椅、椅本伐梨引置之而歷歲餘、〇中略——

女人惡鬼見點攸食噉緣第卅三

爾時大和國十市郡菴知村東方、有大富家、〇下略

〔古事記上〕次天津日子根命者、(中略)倭淹知造、(中略)三枝部造等之祖也、

〔古事記傳七〕倭淹知造、淹知の訓は阿牟知なるべし、(和名抄、伊勢國郡名に、奄藝阿武義、隱岐國周吉郡奄可安無加などある例によりて阿牟知と訓べし、)今山邊郡に庵治(アムヂ)と云村あり、此なるべし、(今あうぢと唱るは、伊勢の奄藝郡をも、俊賴集に、あふぎの郡とありて、歌に扇によせてよめり、これ同例なり、)又靈異記に、大倭國十市郡菴知部と云あり、

〔日本靈異記下〕用網漁夫値海中難憑願妙見菩薩得全命緣第卅二

呉原忌寸名妹丸者、大和國高市郡波多里人也、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜五年十月己巳、散位從四位下國中連公麻呂卒、本是百濟國人也、〇中略寶字二

年、以居大和國葛下郡國中村、因地命氏焉、

〔東寺文書 禮〕大和國符

國符十市郡司

應施入田肆町 元故從四位下佐味朝臣官位田

路東廿二條三山部里九麻生田一町　八葛野田一町

廿三條二耳梨里卅五畫工田一町　三上藤里二柏原田一町 中略

寶龜八年七月二日

〔日本後紀 二十嵯峨〕弘仁元年九月己酉、太上天皇至大和國添上郡越田村、卽聞甲兵進前、不知所行、下略

〔三代實錄 三十八陽成〕元慶四年十月廿日庚子、大和國十市郡百濟川邊田一町七段百六十步、高市郡夜部村田十町七段二百五十步、返入大安寺、下略

〔延喜式 二十一雅樂〕凡四月八日、七月十五日齋會、中略官人史生各一人、就樂戶鄕簡充、在大和國城下郡杜屋村

〔伊呂波字類抄 奈國郡〕平城ナラ　奈良　南京 已上ナラ

〔日本書紀 五崇神〕十年九月、遣大彥與和珥臣遠祖彥國葺、向山背、擊埴安彥、爰以忌瓮、鎭坐於和珥武鐰坂上、則率精兵、進登那羅山而軍之、時官軍屯聚而蹢（フミナラス）跙草木、因以號其山、曰那羅山、

〔運步色葉集 那〕奈ナ良ラ

〔日本靈異記 上〕諾樂右京藥師寺沙門景戒錄

〔日本靈異記考證 上〕諾樂 樂字原譌作楽、今依中下卷皆作樂改、日本書紀武烈紀、天智紀、天武紀作乃樂、萬葉集作寧樂、亦可以證、本書中卷或作奈羅、欽明紀同、中卷下卷或作奈良、今世用之、下卷或作平城、續日本紀同、古事紀作那良、崇神紀、仁德紀作那羅、國遣本紀作諾羅、又諾良、皆同、

〔日本靈異記 中〕贖蟹蝦命放生得現報緣第八

置染臣鯛女者、奈良京富尼寺上座尼法邇之女也、中略

極窮女於尺迦丈六佛願福分示奇表以現得大福縁第廿八

聖武天皇世、奈羅京大安寺之西里、有一女人、極窮命活无由而飢、(略)○下

〔倭訓栞(前編十九)〕なら　奈良を日本紀に平と見えたり、よて平城ともいへる也、ならの葉の名におふみやとよめるも、平城の宮をさして申せる也、寧樂をよむは寧呉音にやう、にや反な也、諾樂をよむは韻會に諾、養入聲と見ゆ、なくともなぎともよむ意也、諾樂は唐書に出たり、靈異記に諾樂とも見ゆ、

〔和漢三才圖會(七十三大和)〕奈良　當國者本朝之國初而神武天皇自日向宮崎遷都於當國橿原、以來數回遷、有遷都、多有於大和、于今呼奈良稱南都、亦其縁也、

〔大和志(二添上郡)〕村里　南都(一名奈良、町名一百三十五、)　高畠　紀寺　梅園　肘塚(カヒナツカ)　京終(キヤウバテ)　木辻　城戸(シヤウト)　杉ガ町　三條　油坂　芝辻　川上　般若寺　奈良坂　野田(以上十五村屬南都、因統曰南都、)

〔日本書紀(十一仁德)〕三十年九月乙丑、皇后遊行紀國、(中略)天皇遣舍人鳥山令還皇后、(中略)皇后不還猶行之、(中略)即越那羅山、望葛城歌之曰、菟藝泥赴、揶莽之呂餓波、烏瀰能朋利、和餓能朋例麼、阿烏珥豫辭、儺羅烏輸疑、烏陀氐夜、莽苔烏輸疑、和餓瀰餓朋辭區珥波、箇豆羅紀多伽瀰揶、和藝弊能阿多利、

〔日本書紀(二十八天武)〕元年六月庚寅、初向乃樂、

〔續日本紀(四元明)〕和銅二年九月戊午、車駕至自平城、

〔三代實錄(四清和)〕貞觀二年十月十五日辛卯、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八歩施捨不退超昇兩寺、

〔伊勢物語(上)〕むかし、をとこうひかうぶりして、ならの京かすがの里にしるよしして、かりにいにけり、

〔日本書紀(四開化)〕元年十月戊申、遷都于春日之地、

莊

〔新撰姓氏錄左京皇別〕大春日朝臣
出自孝昭天皇皇子天帶彥國押人命也、仲臣令家、重千金、委積爲堵、于時大鷦鷯天皇諡仁德臨幸其家、詔號糟垣臣、後改爲春日臣、桓武天皇延曆二十年、賜大春日朝臣姓、

〔榊葉の日記〕ならの京春日の里、さほのわたりにしるよしして、とし經たる翁侍り、○下略

〔大和軍記〕主馬手前の人數も少々相加、以上二千計も打出、大坂より夜越に、くらがり越と申險難を越參候、其道筋郡山迄七里御座候、先手初に郡山を可放火と申、から島と申所にて手分を仕、二手に作り、九條口奈良口と申所より押込、町口にてつるべ鐵炮を打、時の聲を上、火の手を上申候、其段右之主殿殿被聞付、取物も取あへず、郡山東口高田と申所より、東の山中へ落被申候、○下略

〔四國御發向并北國御動座事〕秀長○羽柴 大和國郡山拵城郭、近國無雙之固也、

〔萬葉集略解四〕神武紀、皇師立誥之處、是謂猛田、式大和國十市郡竹田神社あり、

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上郎女從竹田庄贈賜女子大孃歌二首

〔東大寺要錄六〕別功德分庄○中略

大和國

添上郡滿登庄田地十五町三百十九步五月二日御齋會料○中略

山邊郡長屋庄田八町七月十九日梵網會料○中略

右諸國庄家田地目錄如件○中略

以前被太政官去天平勝寶元年七月十四日符偁、奉今月十一日勅偁、去四月一日詔書、寺々墾田地許奉者、宜依件數施行、今以狀下、符到奉行、

天平勝寶二年三月廿九日

〔萬葉集八秋雜歌〕典鑄正紀朝臣鹿人至衛門大尉大伴宿禰稻公跡見庄作歌一首

射目立而、跡見乃岳邊之、瞿麥花、總手折、吾者將將去、寧樂人之爲、

〔東大寺要錄　六〕一諸國諸庄田地長德四年注文定○中略

新發田○中略

大和國添上郡春日庄田六町二段六十四步○中略　同郡櫟本庄田卅町三段八十步○中略

山邊郡長屋庄田地三町○中略　城上郡社屋庄田五町九段百步

高市郡飛驒庄地三町九段九十步　添下郡清隆庄田廿七町二段

十市郡十市庄田地二町五段十步○下略

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緖輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領○中略

大和國　宇陀國秋篠庄　田村兎○中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判下略○

〔西大寺文書　一〕注進　西大寺所領諸庄薗現存日記事

合○中略

大和國　添下郡清澄庄、田畠四十六町、　十市郡坂戸庄四町六段三百廿步、　同郡十市庄、四町

九段三百七步、　高市郡加留庄、畠一町二段半、　宇智郡桃島庄、田畠一町餘、○中略

已上九箇庄大體有名无實、或被國領、或被人領、或半分、或三分之一也、然而就庄號注進之、

一顚倒庄々

大和國○中略　平群郡俿波庄、田畠三町、

已上二十七處、依流記公驗明白注進之、

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日　　　　郡維那法師進與（○下略）

〔東寺百合文書〕（リ五十四）奉讓　私領壹處事

在大和國宇陀郡　字檜枚庄

四至在本劵（○中略）

建久九年八月廿六日　　　　平（花押○下略）

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、（烏帽）相具御書、御手箱

□□□（存日予參御所、預置也）（○中略）女院御方自餘御書等、（並有御封、以檀紙被立文之、押折上下、又有銘等、）悉盛宮蓋、（○中略）

一通（銘曰、昭慶門院、）處分　昭慶門院（○中略）大和國波多小北庄（御判○中略）

嘉元三年七月廿六日　　　　御判

〔金峯神社文書〕金峯山吉水院

申請坊領證文紛失狀證判事

大和國

丹生谷莊、戶毛莊、南喜殿莊、豐田莊、新口莊、曾我莊、內市庭幷名田參町、宇智郡西穴生莊、同郡水田參段、宇多佐久良名田五段、阿陀鄉內水田參段、龍門鄉水田參段、玉田水田五段、學恩寺水田五段、羽符水田五段、矢田莊內水田參段、（○中略）

建武元年二月　日　　　　阿闍梨幸詮（花押○下略）

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合（○中略）

五貫文（○中略）安富勘解由左衛門尉殿（觀修寺御門跡領和州郡家庄段錢）

遷封

〔慶應元年武鑑〕松平甲斐守保申 帝鑑間四品 拾五万千二百八十八石、居城大和添下郡郡山、江戸ヨリ伏見通百三十四里、伊賀通百十六里餘、大和大納言秀長、同中納言秀保居、慶長五以後御番城、元和元水野日向守勝成、同五松平下總守忠明、寛永十六本多內記政勝、寛文十三同中務大輔政長、延寶七松平日向守信之、同年本多下野守忠平、同能登守忠常、同信濃守忠直、同喜之助忠村、同喜十郎忠烈、享保九松平甲斐守吉里以後領之、

植村駿河守家保 帝鑑間朝散大夫 二万五千石、居城和州高市郡高取、江戸ヨリ百三十四里、大和大納言秀長家臣本多太郎左衛門居、天正十八脇坂中務大輔安元、本多因幡守、寛永十七ヨリ植村出羽守家政、以後代々領之、

片桐主膳正 柳間朝散大夫 一万千百石餘、在所和州添下郡小泉、江戸ヨリ百三十三里、元和年中ヨリ片桐氏、代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕永井信濃守 菊之間朝散大夫 一万石在所和州葛上郡櫛羅、江戸ヨリ百廿六里七丁、大和國葛上葛下忍海三郡、延寶八ヨリ領之、

織田攝津守長易 柳間朝散大夫 一万石、在所和州式上郡芝村、江戸ヨリ百十九里廿二丁、伊賀通關口出、慶長五ヨリ遠山之高織田氏代々領之、

田筑前守信成 柳間朝散大夫 一万石、居城和州式上郡柳本、江戸ヨリ伊賀通百二十里、慶長五ヨリ遠島之高、織田氏代々領之、

柳生但馬守 菊之間朝散大夫 一万石、在所和州添上郡柳生、江戸ヨリ百十三里、寛永年中ヨリ柳生氏、代々領之、○節略

田數石高

〔日本後紀十七平城〕大同三年九月乙巳、大和國言、此國水田一萬七千五百餘町、河內和泉兩國田一萬七千餘町、以此比彼、多少無異、而班田使員、已倍兩國、伏請□河內等國、省使員數、除民之弊、許之、○下略

〔倭名類聚抄五國郡〕大和國○註略・管十五、田萬七千九百五町九段百八十歩

〔伊呂波字類抄也國郡〕大和管十五郡○中略 本田一万七千七百五十町

〔海東諸國記〕大和州　郡十三、水田一萬七千六百十四町

〔拾芥抄〕（中末本朝國郡）大和（大、十五郡（中略）田萬（萬原脫）拾二一本、補七千五町七反）

〔日本鹿子〕二〕大和國十五郡、大上々國、（中略）　知行高四十四万四千二十石

〔和漢三才圖會〕七十三（大和）十五郡　高四十四万四千百三十四石

〔官中秘策〕一〕大和國　十五郡（中略）

一石高五拾万四百九拾七石餘

〔吹塵錄〕五（人口及國高）天保度御國高調（中略）

大和國（御料私領）　一高五拾万千三百六拾壹石六斗九升壹合五勺六才

出擧稲

〔延喜式〕二十六（主稅）諸國出擧正稅公廨雜稻（中略）

大和國正稅公廨各廿万束、國分寺料一万束、豊山寺料二千四百束、壺坂寺料三千束、松尾寺料二千八百束、靈安寺料四千束、八島寺料一万束、子島寺料四百束、文殊會料二千束、修理官舍料二万束、池溝料四万束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄〕五（國郡）大和國（中略）〇註　管十五、（中略）正公各二十萬束、本稻五十五萬四千六百束、雜稻十五萬四千六百束、

國產貢獻

〔延喜式〕十五（內藏）諸國年料供進　畿內國營田舂米六百五十四斛七斗三升二合（中略）大和國百四斛五升六合（中略）支子（數有損益）　山城國二國五斛八斗六升　大和國國卅斛

〔延喜式〕二十三（民部）交易雜器（中略）　大和國、酒槽七隻、（二隻長各八尺、廣二尺三寸、深八寸、手長一尺、五隻長各六尺、廣二尺五寸、深八寸、手長九寸、）閜槽二隻、（口徑各二尺五寸、手長一尺、）槽二口、（一口高二尺七寸、口徑二尺一寸、一口高二尺二寸、口徑二尺、）臼三腰、（高各二尺二寸、徑二尺一寸、）杵六枚、（長各三尺、）輿籠廿口、匏三百廿五柄、筥簀四枚、（中略）

交易雜物（中略）　大和國（大麥三石、小麥十一石七升三合、薑子六斗、大角豆四石、）

〔延喜式〕二十四（主計）大和國（行程一日）

調、筥一百卌枚、鍋二百二口、玉手土師坏五十口、間坏百口、贄土師竈廿八口、竈子卌四口、甑卌四口、瓮三百五十八口、片坏七十二口、自餘輸綿、錢、

〔延喜式 三十一 宮內〕諸國例貢御贄　大和(干棗、榛子、)

〔延喜式 三十三 大膳〕諸國貢進菓子　大和國(干棗一擔、椿子二擔、榛子、)

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥(○中略)

大和國卅八種　前胡十二斤、王不留行二斤、槀本、升麻各八斤、獨活廿五斤、紫菀六斤、大青廿斤、茵草、牛膝各七斤、桔梗廿一斤、黃檗十一斤、香薷、澤蘭各十五斤、白朮卌斤、枳實、通草、大戟各十斤、拔葜卌斤、厚朴九斤、龍膽三斤、蒼朮、桑根白皮各五斤、澤寫、當歸各四斤、薏苡芢十五兩、白芷十八斤、橘皮十斤、地楡十六斤、茴芋一斤、榧子一斗六升、署預七斗、桃人、蜀椒各二斗、車前子二斗八升、充蔚子六升、鬼箭三升、吳茱萸三斗、白花木瓜實廿三斤、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、(○中略)宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂(○中略)大和苽

〔毛吹草 三〕大和

奈良綿美　澡　平布　縮　島布　畦布　衣地　蚊帳地　具足　鐙　作綠青　曆　扣薄(榠木ト云)

油煙墨　色墨　中繼(奈良塗師榠木ト云)　土風爐　塗桶　瓦燈　灰ホウロク　早鍋(ワサナベ)　付硫黃　膠

物　馬皮　滑　金剛　指縄　箒　澁團扇　法論味噌　イロリ　漬香物　溜糖　饅頭　飯鮨

僧坊酒　東大寺蘭奢待　興福寺銀杏　春日山櫟　禰宜屋敷木練柿　西大寺豊心丹　法華

寺作土小犬(比丘尼ノワザナリ)　藥師寺造花(年中拾置テ、二月上旬法事之時用之、)　法隆寺沈水香　吉野漆　葛粉　榧

御所柿　松茸　岩茸　前胡　枸杞子　松脂　松角(目通ト云、書院木ニ用、)　楫丸太(同上ニ)　煎茶　塗鉢

山折敷　小紙(楽紙ニ用之)　塵羅紙　國栖魚　鮎白干　釣瓶鮨(鮎也、柾物ニ入、藤ニテ手ヲスル故ニ云フ、)　龍田紙羽

三輪素麪(是ハフトキヲ賞翫ス)　箸中糖粽(根本ト云)　郡山繰綿　高山茶筅　山邊米　空穀　梵天瓜

人口

〔官中秘策 一〕大和國 十五郡 ○中略

一人數三拾七万四千四拾壹人 内 拾八万九千貳百五拾八人男 拾八万四千七百八拾三人女 高五拾万四百九拾七石餘 大和國

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略

一御料私領人數三拾四万七百六人 内 拾七万四千七百六拾七人男 拾六万五千九百四拾人女 ○中略

諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略

一御料私領人數三拾六万千百五拾七人 内 拾八万三千三百貳拾五人男 拾七万七千八百三拾貳人女 高五拾万千三百六拾壹石餘 大和國

風俗

〔人國記〕大和國

大和國之風俗、表郡ハ人ノ氣、大形名利ヲ好ムモノ多シ、奥郡之者ハ隱ル氣有レ之、蓋シ此國之人ハ、大體山城之國人ニ風俗似タル處多シ、昔日王城之地ト成ガ故ニ、其風俗漸ク似タル處多シトイヘドモ、山城之國ヨリ人之氣、少シ実成所有、雖レ然表部者名利ニカヽハル人多ク而、常ニ詞ニ諂ヲ巧ミニシテ、上分ハ巧ミスクナウ而、名ヲ擧ンコトヲ願ヒ、下劣ハ於二言句之下一而、僞ヲ述テ兩舌ヲ吐ク風俗也、若是國之人ヲ味方ニ從ハシムルニハ、議者ヲ以テ人ノ氣ヲ可レ分、名利無キ則ハ速ニ分ツ、亦奥郡之人ハ隱ルヽ氣質、自然ト生レツキタリ、是ハ山深ク而常ニ人倫ニ交、道理ヲ談ズル人モ寡ケレバ、自ラ如レ斯ニ而、道理ヲ不レ知風俗也、自然ニ實ヲ振舞フ人ハ、猶以テ隱遁之氣發シ、世ヲ無キ物トナス、形儀ヲノミ見聞ガ故ニ、如レ斯之風儀多シ、サレバ古ヨリ芳野山奥ハ人之氣、五畿内之人ニ勝レテイサギヨキ也、雖レ然物之形儀ヲ不レ知ガ故ニ、智アッテ道理ニ從ヒ、謹トハナケレドモ、邪僻之爲ニ驕ヲ禁ズルモノ也、故ニ自ラ愚成人多シ、若是ヲ取ラバ、其威ヲ仰テ氣ヲ悅バシメテ、我國ヲ全ウ而國人ヲ不レ勞而、自ラ愚ヲ行ハセヨ、サアル時ハ陰却而陽ニ變ジ、驕奢之氣出ル

モノナリ、都而名利名聞ニツナガレテ、氣質ニ勝チタルト可知也、千萬人ニ一人二人ハ國風ヲ忘レタル人モアリ、〇中略

〔大和志 一〕風俗　性緩才敏、高尙氣力、地廣俗雜、庶物繁衍、習文彬々、習武赳々、儉嗇少等、女務紡績、二粥一飯、營室不飾、佞佛媚神、不事香火、敬人君子、吉野見休、

名所

〔日本鹿子 二〕大和國中名所之類

奈良　山城より南也、京都より十里半あり、　猿澤池　南都興福寺の前なり〇中略　春日山〇中略　春日野〇中略　三笠山〇中略　柏木森　奈良のうちなり〇歌略　羽買山〇歌略　飛火野〇歌略　佐保山〇歌略　手向山〇中略　布留山　石上寺より南なり〇中略　三輪山　布留より南、山續なり、奈良より五里あり、〇歌略　初瀨山　三輪より辰巳にあたりて、道法二里なり、〇歌略　天香久山　初瀨より西也〇歌略　耳無山　香久山より西の方也〇歌略　畝火山　右三の山は、東西にならびたる山也、いづれもひくき山也、　袖振山　奈良より紀伊國への順道也〇歌略　妻池　耳無山のほとりなり、此所を過て紀伊國へ行ば、三輪初瀨は東にみえたり、立田かつらぎは西に見えたる也、　吉野山　初瀨より南にあたる、歌には三吉野とも讀り、〇歌略　青葉山　金峯山と象山と口口の間一里也、奥の御前と云は十八丁奥也、御たけ詣といふも此在所也、こもりかつて奥の御前とて有間八町づつ也、　秋津野〇歌略　御垣原〇歌略　十津川　葛城山　高天山　右二の山はならび也、はつせより西也、〇歌略　立田山　奈良より西也、立田越といふは、河内へ行山道也、立田は京より南より東也、〇歌略　三室山　立田川より水上也、神所也、　辰市〇歌略　神南備森　立田山近き所也、かつらぎ高天は立田より南也、いづれも河内の國をさかひたる山也、かつらぎもたつたも山つゞき也、小倉のみねといふあり、　菅原伏見　はつせより西にあたる也〇歌略　八鹽山　初瀨近所也、山城の國にも同名有〇歌略　飛川　吉野宮瀧通の道、櫻井より南の方、飛鳥の里といふ所にある名

所也、往來岡（ユキヽ）飛鳥川の近所也〇歌略　眞土山（マツチ）紀伊の國ざかひなり、京より十二里餘有、〇歌略

〔應仁前記下〕同廿六日〇寛正六年九月尊勝寺法華寺へ御成、御遊覽、御詠歌有之、〇中略且又南都八景ノ所所御遊覽有之、先人ノ詩歌ニ其體相適之由、甚以御入興云々、抑當所八景ノ詩歌ノ事、昔日後小松院御宇至德ノ比、相定マルニ依テ、其時ノ公卿詩歌堪能ノ人々、吟詠一篇、謂之南京八景詩歌、如左、

南圓堂藤

華構高挑玉座春　紫藤花照紫金身　我先昔日得誠戚　後世子孫爲世臣

前關白左大臣道嗣

藤浪は神のことばの花なれば八千代をかけて猶ぞ榮ん

太政大臣良基

佐保川螢

一帶惜川華館傍　綠楊陰暗引風涼　晩來千點流螢亂　疑是大官庭燎光

權中納言公時

飛螢かげをうつして佐保川の淺瀨に深き心をぞしる

前内大臣公忠

猿澤池月

水浸影娥秋滿塘　神嗁鬼哭是巫陽　今宵誰灑藻中玉　解爲先王敷斷腸

文章博士淳嗣朝臣

のどかなる波にぞこほる猿澤の池より遠く月はすめども

左近衞權少將雅幸朝臣

春日野鹿

無臭無聲野色姸　只看麋鹿食華眠　舜深山與文靈囿　斯處聖神易地然

參議右大辨經重

春日山みねの嵐やさむからん麓の野邊に鹿ぞ鳴なる

權中納言公勝

もてす、荒陬をさして、アマサカルヒナなどいひしは、天を離るゝ事の遠く、日の御蔭なきの義なるべし、さらばヒナとは日無也、後に漢字を得て、夷の字讀てヒナといふ、舊事紀日本紀に、下照姫の歌を今號夷曲としるされ、アマサカルヒナとは天離夷也と、釋日本紀に注せしが如き是也、舊說にヒナとは日長也、田舍のつれ〳〵にして、日長きを云ふなりなど見えたれど、下照姫の御歌に、アマサカルヒナといふ言葉始るなり、上古の代に夫等の義によりてかゝる說あるべしとも思はれず、田舍遠てキナカなどいふ事は、ヒナといふ語の轉ぜしにやあるべき、

〔倭訓栞前編二十五〕ひ。な。　邊鄙をいふ、神代口訣に日無の義也といへり、日本紀に蠻夷を訓せり、高日の國に對し、天子のましまさぬ所をいふ也、よて天さかるひなとつゞけたり、一說に日の下にて、天に對して下國をいふといへり、歌にひなのわかれ、ひなの長路、ひなのあら野などもよめり、

〔日本書紀二神代〕一書曰、略○中歌之曰、阿磨佐箇屢、避奈菟謎逎、以和多邏素西渡、略○中此兩首歌辭今號二夷曲一、

〔冠辭考一阿〕あまざかる　ひな　むかつひめ
神代紀に、阿磨佐箇屢、避奈菟謎逎、略○中こは都がたより、ひなの國をのぞめば天とともに遠放て見ゆるよしにて、天放るとは冠らせたり、さかるとは、こゝより避り離れて遠きをいふ、古事記に奧疎神、訓二疎一云二奢加留一、万葉卷十三に夷離、國治爾登、一云、天離夷治爾等、なほ集中に里放、漠放、振離、見放など有も、さかるは同じ語也、さて天ざかるのさは、音便にて濁るべき例也、よりて集中に、安麻射加流と書て、射は專ら濁る語に用ゆ、且夷ざかるも同じ意なるに、それに謝の字をしも書し也、ひなは田居中也、そのたゐなかの上下を略き、且ゐとひを通はせてひなといへり、即ゐなかてふも、田を略きていふにて同じ意なるを思へ、

〔書言字考節用集一乾坤〕田舍民家之聚、見二韻會一、今俗斥二邊鄙一云、又作二鄕中一、義同、

〔倭訓栞前編四十三〕ゐなか　日本紀に田舍をよめり、田家も同じ、萬葉集に居中と書り、田居の中といふにや、又堰中といふにや、顯倉に邑居爲市、野廬爲井と見ゆ、伊勢物語に中ゐなかとも見えたり、全浙兵制に載る歌、

事たらぬ人も都に有ものをゐなかにすむとさのみ嘆きそ

〔萬葉集三雜歌〕式部卿藤原宇合卿被使改造難波堵之時作歌一首

昔者社難波居中跡所言奚米、今者京引都備仁鷄里、

〔伊勢物語上〕むかしゐ中わたらひしける人の子共、井のもとにいでゝ、あそびけるを、〇下略

〔枕草子八〕いやしげなる物

やり戸、づし、何もゐなかものはいやしきなり、

〔源氏物語五若紫〕いでやさいふとも、ゐなかびたらん、おさなくよりさる所におひいでゝ、〇下略

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、ゐ中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、櫻のめでたくさきたりけるに、風のはげしくふきけるをみて、このちごさめ〴〵となきけるをみて、〇下略

〔平治物語三〕常盤六波羅參事

常盤先御所へ參テ申ケルハ、女ノ身ノ無墓サハ、若片時モ身ニ添テヤ見ルト、此幼者ドモ引具シ、傍田舍ニ立忍テ侍ツルガ、童故行衞モ知ラヌ老タル母ノ、六波羅ヘ被召テ、ウキ目ニ相給ト承レバ、餘リニ悲クテ耻ヲモ忘テ參タリ、

〔日本書紀 二十二推古〕十六年六月丙辰、是日、以飾船三十艘迎客等于江口、安置新館、於是以中臣宮地連烏麻呂、大河內直糠手、船史王平、爲掌客、

〔古事記傳 七〕凡河內國造、卽河內國なり、和名抄に河內(加不知)とあり、(加波字知の波字を切めて布なり、今加波知といふは訛なり、)凡は書紀安閑卷推古卷などに、大河內とも書て、大の意なり、名義は、倭の京にて、山代大河(淀河なり)の此方にある國なればなり、本は大河內と云しを、諸國名必二字に定められしより、大をば除つらむ、さて大とか・すて、凡と書は、意富と云へで意布志といひならへる故なるべし、凡の假字は、和名抄に郷名(丹波國加佐郡)に、凡海を於布之安萬とあるに依べし、

〔倭訓栞 前編六 加〕かふち　河內をよめり、はう反ふ也、もと凡河內といふ國に名けしは大河西北に在をもて名く、皇都の大和にありしよりいへり、今かはちといふ、萬葉集には、川の行廻れる所をいへり、今も村里の名に呼もの是也、瀧津河內は吉野也、

〔諸國名義考 上 畿內〕河內
和名抄に、河內(加不知、國府在志紀郡)、古事記及國造本紀には大河內とあり、姓氏錄には凡河內といふ氏もあり、名義は古事記傳に、倭の京にて山城の大川の此方にある國なればなり、もとは大河內と云しを、諸國の名必二字に定られしより、大をば除きつらむ云々とあり、この意なるべし、萬葉集に瀧津河內云々とよめるも川のこなたをいふなるべし、河內志に、以皇都在和州、大河繞州西北、故名、とある大河も、山城の淀川なるべし、日本書紀仁德天皇十一年の紀に、河內國茨田堤を造られしこと見えて、延喜神名式に、河內國茨田郡堤根神社などあり、姓氏錄河內皇別に、茨田宿禰、彥八井耳命之後、男野見宿禰、仁德天皇御代造茨田堤、又仁明天皇嘉祥元年、令築茨田堤、とあり、さて畿內志に、長柄川淸河第二支上古水道、唯是一川橫流不一、仁德天皇疏導堀江、延曆中通三國川、然猶汎濫不已、疏柴島北、故水道濶水勢于三國川、名曰中津川、今二重堤卽此、後淡名柄川、塞此水路、童謠

位置

曰、攝津國能、中津河原袁、潮鼓加禰氏云々とあり、また續日本紀、聖武天皇天平十三年夏四月辛丑云々、撿挍河內與攝津相爭河堤所、また桓武天皇延曆七年三月甲子云々、河內攝津兩國之堺、堀川築堤、自荒陵南導河內川、西通於海云々などあり、また神護景雲三年、河內職を置れしことなどもあれば、川より負し國名なることうつなし、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

河內守口驛極高三十四度四十三分半、經度西一十分半、從東都東海道一百四十三里二十八町三十九間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

河內　守口驛　三四度四三分三〇秒　枚方驛　三四度四八分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　河內　守口　西〇度一〇分三七秒

疆域

〔河內志 一〕疆域　東至和州界、西至攝泉界、南至紀州界、北至山州界、東西五里、南北十四里、

〔日本地誌提要 五河內〕疆域　東ハ大和、西ハ攝津、和泉、南ハ紀伊、北ハ山城ニ至ル、東西凡四里、南北凡壹拾三里、

地勢

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年四月辛丑、遣從四位上巨勢朝臣奈氐麻呂〇中略等、撿挍河內與攝津相爭河堤所、

〔續日本紀 三十九桓武〕延曆七年三月甲子、中宮大夫從四位上兼民部大輔攝津大夫和氣朝臣清麻呂言、河內攝津兩國之堺堀川築堤、自荒陵南導河內川、西通於海、然則沃壤益廣、可以墾闢矣、於是便遣清麻呂勾當其事、應須單功二十三万餘人給粮從事矣、

〔易林本節用集 下〕河內河州大、管十五郡、四方二日餘、堤沼池井多而種生五倍、市鄽許多也、大中國也、

道路

〔河內志 一〕形勝　山嶽糾紛於左、大河縈帶於右、地高東南、和水西流、石河北注、土沃而平、衍多陂池、播時麻穀、

〔河內志 一〕道 官金橋在楠葉北、山州茨田郡界、至枚方驛二里、所歷、曰楠葉、曰上島、曰下島、曰渚、曰禁野等、枚方驛至守口驛三里、所歷、曰伊加賀、曰出口、曰木屋、曰大間、曰點野、曰仁和寺、曰一番、曰七番等、守口驛至土居攝州東生郡界、十二町、金橋至此、通計五里十二町、謂之京路、　洞峠綴喜郡界、至田口三十町、田口至中垣內三里二十五町、所歷、曰御茶屋、曰大谷、曰甲可南、曰北條、曰野崎等、中垣內至國府三里三十一町、所歷、曰芝、曰寶藏新家、曰切川、曰六萬寺、曰垣內、曰恩智、曰大縣、曰市村新田、曰舟橋等、國府至富田林二里五町、所歷、曰道明寺、曰譽田、曰古市、曰東坂田、曰喜志、曰中野、曰新堂等、富田林至三日市二里、所歷、曰向田、曰錦郡、曰市、曰向野、曰古野、曰長野、曰上田等、三日市至天見一里三町、所歷、曰新町、曰石佛、曰清水、曰上岩瀨、曰流谷等、天見至紀伊見嶺紀州伊都郡界、一里十七町、洞峠至此、通計十五里三町、謂之古道、又云紀路、　暗嶺和州平群郡界、山峰崇疊、日光少見、故名、舊名草香、至松原驛一里六町、所歷、曰豐浦、曰寶藏新家、曰水走等、松原驛至足代攝州東生郡界、一里二十八町、所歷、曰菱江、曰菱屋新田、曰築合、曰御廚、曰新喜多新田、曰高井田等、暗嶺至此、通計二里三十四町、　龜瀨峠平群郡界、至國分一里十町、所歷、青谷、國分至南花田攝州住吉郡界、二里三十町、所歷、曰片山、曰國府、曰林、曰小山、曰鳥泉、曰一津屋、曰阿保茶屋、曰向井、曰更池、曰清水等、龜瀨至此、通計四里四町、　竹內嶺和州葛下郡界、至山田二十町、山田至古市一里四町、所歷、曰春日、曰飛鳥、曰駒谷等、古市至黑土攝州住吉郡界、二里三十町、所歷、曰輕墓、曰野野上、曰壁山、曰岡、曰野遠、曰金田等、竹內嶺至此、通計四里十八町、通攝泉交界三國辻、又自古市至住吉郡界西出戶、二里七町、所歷、曰譽田、曰野中、曰葛井寺、曰岡、曰小山、曰津堂、曰大塚、曰新家、曰川邊、曰長原等、道同、　東瓜破住吉郡界、至狹山三里餘、所歷、曰三宅、曰阿保茶屋、曰新堂、曰岡、曰眞鍋寺、曰東野等、狹山至長野一里二十町、所歷、曰新町、曰半田、曰四鉤樟、曰原等、謂之狹山路、　荒坂嶺綴喜郡界、至田口三十二町、經長尾、　尊延寺越綴喜郡界、至枚方二里十三町、經杉村、　傍示越和州添下郡界、至御茶屋一里十一町、御茶屋至枚方三十二町、　割石越一名岩船越、添下郡界、至私市二十五町、私市至御茶屋三十町、又自岡山古道經清瀧峠邑、至此、謂之清瀧越、道程一里有奇、　生駒越和州平群郡界、至中垣內二十七町、又自中垣內左折、至添下郡界下田原三十町、經龍間上田原、謂之中垣內越、　十三嶺平群郡界、至神立二十三町　立石嶺平群郡界、至服部川十八町、服部川至鞍作攝州住吉郡界、二里十町有奇、經萬願寺、八尾、久寶寺等、

信貴越平群郡界、至教興寺二十八町　蛭目越和州葛下郡界、至國分三十町、　關屋嶺葛下郡界、至國分二十七町、

國分至新家攝州住吉郡界、二里五町、所歷、曰高井田、曰新町、曰植松、曰太子堂、曰跡部、曰龜井等、　穴虫越葛下郡界、至飛鳥二十町　岩室嶺

(葛下郡界)至山田二十町　平石嶺(在平石村上方、葛下郡界、)至大个塚一里二十町　山越嶺(葛上郡界)至上河內三十町、上河內至大个塚一里二十町、(所歷、曰下河內、曰弘川、曰加納、曰寺田等、)　金剛山嶺(葛上郡界)至水分一里三十三町　千早嶺(葛上郡界)至千早村一里二町、千早村至富田林三里二町、(所歷、曰東坂、曰森屋、曰神山、曰寬弘寺、曰東板持等、又自千早村左折至金剛山嶺、二十九町、)　大澤峠(和州宇智郡界)至觀心寺一里三十四町、(所歷、曰石見川、曰小深、曰大井、曰鳩原、)　觀心寺至長野三十町、(經河合寺、)　九重嶺(紀州伊都郡界)至加賀田一里十七町、加賀田至上田二十町、　藏王嶺(伊都郡界)至瀧畑一里、瀧畑至四鉤樟(ヨツクヌギ)二里餘、(所歷、曰日野、曰高向(タカ)、曰上原、曰錦作、曰野村、曰西代、曰原村等、)　槇尾嶺(泉州和泉郡界)至瀧畑十八町、　天野嶺(和泉郡界)至高向二十六町　釜室嶺(泉州大鳥郡界)至天野一里(經下里、)

〔日本實測錄(四街道)〕從山城國髭茶屋歷伏見及大坂至西宮(○中略)

河內國交野郡楠葉村(沿淀川、至牧方宿、二里二丁四十四間、)　二里四町一十一間半　茨田郡牧方宿三十四度四十八分半　二里一十二町三十二間(至佐太天神社前、一里二十六丁三十六間半、)　八番村(沿淀川、至守口宿、二十四丁一十四間、)　一十六町一間　守口宿三十四度四十三分半、　一十六町四十八間半(至國界、一十四丁七間半、)　攝津國東成郡今市村

宿驛

〔續日本紀(十九孝謙)〕天平勝寶八歲四月戊辰、車駕取澀川路、還至智識寺行宮、

〔延喜式(二十八兵部)〕諸國驛傳馬(○中略)

河內國驛(楠葉、槻本、津積各七疋、)

〔續日本紀(五元明)〕和銅四年正月丁未、始置都亭驛、(○中略)河內國交野郡楠葉驛、

建置沿革

〔日本國郡沿革考(二畿內)〕河內　古作凡河內(古事記○中略)或大河內(日本紀)神護景雲三年十月、以由氣宮爲西京、改河內國爲河內職、寶龜元年八月、復爲河內國、大國、管十六郡、(延喜式十四郡)五百四十五村、

茨田(マツタ)八十一村　交野(カタノ)三十八村　讚良(サンラ)(三十四村　欽明紀作更頁、持統紀作更荒、)　河內(カハチ)二十九村　若江六十一村

高安十四村　澀川三十一村　大縣(十四村、養老四年十一月、堅上堅下二郡、更號大縣郡、)　志記(二十二村　古國府、延喜式等作志紀、古事記作志幾、)

丹北(タンホク)(四十三村、古丹比郡、延喜式等作丹治、古事記多遲野、即此地、蓋中世折置、爲南北二郡、)　丹南(四十九村　延喜式等不載、說詳上文、)　八上(ヤカミ)(十二村)

延喜式等不載、　古市十六村、日本紀書市村、卽是、　安宿(アスカベ)部五村、延喜式等作安宿、雄略紀作飛鳥部、　錦(ニシキベ/ニシゴリ)部四十八村

〔河內志一〕建置沿革　上古曰凡河內國、以皇都在和州、大河繞州西北、故名、元正天皇詔去凡字、神武天皇之東征、至此勒兵、遂以彥巳曾保里命爲國造、大化二年正月、始置國司、靈龜元年三月、割和泉日根二郡、令供珍努宮、夏四月、割大島和泉日根三郡、始置和泉監焉、神護景雲三年九月、詔以由義宮陞爲西京、於是罷司置職、四年八月、罷職復爲司、迨桓武天皇遷都山州、以交野爲南郊、乃郊祀天神也、降及建武隷于南朝、楠氏守焉、應永中、將軍義滿公、使畠山義深拗略之、義深卒、其子基國、命家臣遊佐某、爲守護代、寬正以降、營于小山、據於嵩山者、爲畠山義就、居高屋城者、爲畠山尙順、居飯盛山者、爲三好長慶、皆不常治所、天正中、織田侯平均畿內、豐太閤悉廢諸城、令攝州布政司兼知事、今仍舊、

〔日本地誌提要五河內〕沿革　古ヘ反正天皇丹比ニ都ス、今丹北郡松原莊植田村後世國府ヲ大縣郡ニ置キ、府址今國府村ト云、志紀郡ニ屬ス、建武中興、楠正成ヲ以テ守護トス、元中末、足利氏畠山義深ヲシテ侵略セシメ、本州及ビ大和ノ守護タラシム、子基國、州中望族和田、隅屋、甲斐莊等ヲ招降シ、古市郡高屋城ニ治シ、遊佐氏ヲ以テ守護代トナス、基國ノ孫持國ガ子政長、義就、兄弟相爭ヒ、其子孫互ニ爭擾シ、政長ノ孫稙長、終ニ本州ヲ取リ、再傳シテ高政ニ至リ、永祿三年、三好長慶ト戰テ城陷リ出亡、長慶其地ヲ併セ、飯盛城ニ居ル、十一年、織田信長地ヲ分テ、高政及ビ長慶ガ嗣義繼ニ賜フ、後二氏皆亡ビ、豐臣氏諸城ヲ廢シテ、攝津ヨリ兼治ス、德川氏ノ時、封ヲ受ル者、丹(タン)南(ナン)高木正次狹山北條氏規凡テ二藩、王政革新、皆之ヲ廢シ、堺縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕凡河內國造

橿原朝〇神武御世、以彥巳曾保理命、爲凡河內國造、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月甲子、詔以由義宮爲西京、河內國爲河內職、

寶龜元年八月乙卯、河內職復爲河內國、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕河內國 國府在志紀郡、行程一日、

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕河內 大 十四郡 ○中略 大縣 府

〔本朝無題詩 七 旅館〕河州府下卽事　　大江佐國

河州底事屬相歡、爲是詩朋會遇難、酒酌十分籍下醉、歌傳五袴境中寬、他鄕秋暮行衣薄、旅館曉來落月寒、華洛欲歸君勿駐、每思堂上淚闌干、

〔河內志 十四 志紀郡〕總社 在國府村、古昔國府必建社、有事于國內官社、則國司率僚屬、先修典禮於此、其儀猶京師神祇官然、

〔延喜式 二十二 民部〕河內國大 管錦部 石川 古市 安宿 大縣 高安 河內 讃良 茨田 交野 若江 澀川 志紀 丹比 ○中略 右爲近國

〔倭名類聚抄 五 國郡〕畿內郡 ○中略 河內國 ○註略 管十四、 ○註略 錦部、爾之古里 石川、以之加波 古市、不留知 安宿、安須加倍 大縣、於保加多 高安、多加夜須 河內、與國名同 讃良、佐良良 茨田、萬牟多 交野、加多乃 若江、和加江 澀川、之不加波 志紀、之岐 丹比、太知比、爲丹南、爲丹北、

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕河內 大 十四郡 錦部 石川 古市 大縣 府 安宿 高安 河內 讃良 茨田 交野 若江 澀川 志紀 丹治

〔易林本節用集 下〕河內 河州 大、管十五郡、○中略 錦郡(ニシコホリ) 石川(イシカハ) 古市(フルイチ)ゝ 安福(ヤスカベ)宿 大縣(オホガタ) 高安(タカヤス) 河內(カハチ) 讃良(サラ・サカラ) 茨田(マツタ) 交埜(カタノ) 若江(ワカエ) 澀河(シブカハ) 志紀(シキ) 丹北(タンボク) 府 丹南(ナン)

〔皇國郡名志〕河內國 舊十四郡 今十六郡

錦部(ニシゴリ) ●錦部 ●三日市 ●天野 △正成首冢 紀泉界郡

石川(イシカハ) ●上大手 △荒田新町 △千早正成墓 和界郡

古市(フルチ) ●古市 △譽田八幡 國中小郡

安宿(ヤスカヘ) △玉手山 △國分川 △飛鳥 驛町無シ 和界小郡

大縣(オホカタ) 驛無シ △龜瀬嶺 和界小郡

高安（タカヤス）　驛無シ　△天照皇高座　△十三嶺　△雲ノ瀧　和界小郡

河內（カウチ）　●峰　△鷺尾山　△玉串川　和界小郡

讚良（サヽラ）　驛町無シ　△飯盛山　和界小郡

茨田（マムタ）　^牧方　●佐田　^守口　^新町　^泥町　淀川邊ノ郡也

交野（カタノ）　●備業　△王仁ノ墓　△國見山　△金川　和城界郡

若江（ワカエ）　八尾　國中小郡

澁川（シブカハ）　驛町無シ　△長谷川　攝界小郡

志紀（シキ）　驛町無シ　△道明寺　國中小郡

丹南（タヂヒノミナミ）　●丹南　△狹山　岩室　△藤井寺　國中ヨリ泉界

丹北（ノ）　△大和川　攝界小郡

八上（ヤカミ）　●扁町　攝泉界小郡

今増ニ八上郡ハ爲ニ丹北ヲ分チテ南北ハ

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ。

〔郡名異同一覽〕河內

六國史	古事記以下諸書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書古文書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
		交野（カタノ）	同（加多乃）	同	同（[illegible]）	同（カタノ）	同	同	同（カタノ）	同

更荒 紀				堅上 續 堅下 續	飛鳥戸 紀					
同			凡河內 書					志幾 古		
讃良 サラヽ	茨田 マムタ	若江 ワカエ	河內 カフチ	高安 タカヤス	大縣 オホカタ	安宿 アスカヘ	志紀 シキ	澀川 シフカハ		
同 佐良々	同 万牟多	同 和加江	同 [illegible]	同 多加夜須	同 於保加多	同 安須加倍	同 之紀	同 之不加波		
同	同	同	同	同	同	同	同	同		
同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	安宿 知 安宿部 圖元	志紀 圖知元 志貴	同 圖元	丹南 圖元
同 サラ	同 マフタ	同 ワカエ	同 カハチ	同 タカヤス	同 オテカタ オフカケ	安宿部 アシユクブ アスカヘ	志紀 シキ	同 シブカハ	同 タンナン
同	同	同	同	同	同 テカタ鈔	同 ヤスカヘ鈔	同	同	同
同	同	同	同	同	同	安宿	同	同	同
同 ヤヽラ	同 マムダ	同 ワカエ	同 カフチ	同 タカヤス	同 オホカタ	同 アスカベ	同 シキ	同 シブカハ	同 タンナン
同	同	同	同	同	同	安宿部	同	同	同

	丹比(記)		舊市(記)		
	丹治比				
倭十四	丹比(タチヒ)		古市(フルチ)	石川(イシカハ)	錦部(ニシコリ)
同	同(丹南 丹北)		同	同	同
十四郡	丹治		同	同	同
	丹北(郷)	八上	同	石川 石河	同
十六郡	同(タンボク)	同(ヤカミ)	同(フルイチ)	石川(イシカハ)	同(ニシキベ)
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同(タンボク)	同(ヤカミ)	同(フルイチ)	同(イシカハ)	同(ニシゴリ)
同	同	同	同	同	同

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合水田參佰玖拾陸町參段貳佰拾壹步參尺陸寸〇中略
河內國捌拾漆町陸段壹佰捌拾漆步　志°貴°郡°一町　澀°川°郡°卅六町二段百八十七步　更°浦°郡°卅町　和°泉°郡°卅五町九段〇中略
合陸地壹千玖佰貳拾玖町玖段漆拾陸步貳尺肆寸〇中略
山林岳島等貳拾陸地〇中略
河內國日°根°郡°鳥取鄕深日松尾山壹地　東限高峯、西限路、南限我紀谷、北限鎭川〇中略
合庄庄倉捌拾肆口〇中略
河內國陸處　大°縣°郡°一處　志°貴°郡°一處　和泉郡一處　日根郡一處　澀川郡一處　更浦郡一處〇中略

天平十九年二月十一日（○名略）

錦部郡

〔河內志 二〕錦部郡（東至石川郡界、西至泉州大鳥和泉二郡界、南至紀州伊都郡界、北至丹南郡界、）

〔續日本紀 文武一〕三年三月甲子、河內國獻白鳩、詔免錦部郡一年租役、又獲瑞人犬養廣麻呂戶給復三年、并赦畿內徒罪已下、

〔續日本紀 稱德二十六〕天平神護元年十二月乙巳、河內國錦部郡人從八位上錦部毗登石次、（○中略）錦部毗登高麻呂等二十六人、賜姓錦部連、

石川郡

〔伊呂波字類抄 加國郡〕河內國（○管十四中略）石川（東西條）

〔河內志 三〕石川郡（東南至和州葛上、葛下、忍海、宇智四郡界、西至錦部、丹南二郡界、北至安宿古市二郡界、）

〔續日本紀 文武三〕慶雲三年五月丁巳、河內國石川郡人河邊朝臣乙麻呂獻白鳩、賜絁五疋、絲十絇、布二十端、鍬二十口、正稅三百束、

〔日本靈異記 上〕邪見假名沙彌斫塔木得惡報緣第廿七

石川沙彌者自度无名、其俗姓亦未詳、所以號名石川沙彌者、以其婦河內國石川郡人也、

古市郡

〔河內志 四〕古市郡（東南至石川郡界、西至丹南郡界、北至安宿志紀二郡界、）

〔續日本紀 文武三〕慶雲元年六月乙丑、河內國古市郡人高屋連藥女、一產三男、賜絁二疋、綿二屯、布四端、

〔續日本紀 聖武十〕天平元年八月癸亥、河內國古市郡人无位賀茂子虫、授從六位上、賜物絁二十疋、綿四十屯、布八十端、大稅二百束、

安宿郡

〔河內志 五〕安宿郡（東至和州葛下郡界、西至志紀郡界、南至石川古市二郡界、北至大縣郡界、）

〔日本書紀 雄略十四〕九年七月壬辰朔、河內國言、飛鳥戶郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、（○下略）

〔續日本紀 聖武十一〕天平六年四月甲午、免河內國安宿、大縣、志紀三郡今年田租、以供竹原井頓宮也、

〔續日本紀 十七聖武〕天平勝寶元年十月乙亥、幸石川之上、志紀、大縣、安宿三郡百姓、年百以下小兒以上、賜綿有差、

〔日本靈異記 中〕智者誹妬變化聖人而現至閻羅闕受地獄苦緣第七

釋智光者、河內國人、其安宿郡鋤田寺之沙門也、○下略、

〔日本靈異記 下〕妙見菩薩變化示異形顯盜人緣第五

河內國安宿郡部內、有信天原山寺、爲妙見菩薩獻燃燈處、○下略

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年七月廿八日乙未、河內國安宿郡人、外從五位下行主計助飛鳥戶造豐宗、改本居隸左京職、○下略

大縣郡

〔河內志 六〕大縣郡（東至和州平群郡界、西至志紀郡界、南至安宿郡界、北至高安郡界、）

〔續日本紀 八元正〕養老四年十一月乙亥、河內國堅下堅上二郡、更號大縣郡、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年八月癸丑、河內國大縣郡人從五位下上村主五百公賜姓上連、

高安郡

〔河內志 七〕高安郡（東至和州平群郡界、西至若江郡界、南至大縣郡界、北至河內郡界、）

〔續日本紀 三十稱德〕寶龜元年正月乙亥、大縣、若江、高安等郡百姓之宅、入由義宮者、酬給其價、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年十月廿二日戊寅、河內國高安郡人、常陸權少目從八位上常澄宿禰秋雄、權史生從八位上常澄宿禰秋常、河內國撿非違使從七位下八戶史野守安藝、醫師從八位上常澄宿禰宗吉、河內國高安郡少領從七位下常澄宿禰宗雄、式部位子從六位上常澄宿禰秋原等六人、賜姓高安宿禰、秋雄等自言、先祖後漢光武皇帝孝章皇帝之後也、裔孫高安公陽倍、天萬豐日天皇○孝德御世立高安郡、陽倍二字音與八戶兩字語相涉、仍後賜八戶史姓、末孫正六位上八戶史貞川等、承和三年改八戶史賜常澄宿禰、望請、改八戶常澄兩姓、復本姓高安也、

〔伊勢物語 上〕むかしゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとに出てあそびけるを、おとなに

なりければ、〇中略さてとしごろふるほどに、女おやなく、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、かふちの國高安のこほりに、いきかよふ所出きにけり、〇下略

河内郡

〔河内志八〕河内郡東至和州平群郡界、西至若江郡界、南至高安郡界、北至讃良郡界、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年二月庚辰、河内國河内郡人、日下部意早麻呂、賜姓日下部連、

讃良郡

〔河内志九〕讃良郡東至和州平群郡界、西至茨田郡界、南至河内郡界、北至交野郡界、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年七月己巳朔、新羅遣使、獻調賦、其使人、〇中略遂留不歸本土、例同國家百姓、今河内國更荒郡鸕鷀野邑新羅人之先也、

〔日本書紀三十持統〕八年六月庚申、河内國更荒郡獻白山鷄、賜更荒郡大領小領位人一級、幷賜物、以進廣貳賜獲者刑部造韓國、幷賜物、

〔日本靈異記中〕女人大蛇所婚賴藥力得全命緣第卌一

河内國更荒郡馬甘里、有富家、〇下略

〔延喜式四十主水〕凡運氷駄者、以徭丁充之、山城國葛野郡德岡氷室一所、〇中略河内國讃良郡讃良一所、

〔今昔物語二十〕河内守依慳貪感現報語第卅六

今昔、河内ノ國讃良ノ郡ニ、郡司ナル男有ケリ、〇下略

〔法然上人行狀畫圖四十三〕西仙房心中におもはく、同朋同行したきあたしりは、ことにふれてその難おほし、たれともえられざらんところにひとりゐて、えづかに念佛せんとおもひて、さるべき所やあると、たづねありきけるほどに、河内國讃良といふところに、あたりもにぎはひてみゆる家ありけり、〇下略

茨田郡

〔河内志十〕茨田郡東至讃良郡界、西至淀河、南至若江郡界、北至交野郡界、及攝州東生郡界、

〔日本書紀十八宣化〕元年五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、〇中略故朕遣阿蘇仍君、〇註略加運河内國茨田

郡屯倉之穀、
〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆三年閏九月戊申、河內國茨田郡堤、決一十五處、單功六萬四千餘人、給粮築之、

交野郡
〔河內志 十一〕交野郡（東至山州綴喜、和州添下二郡界、西至茨田郡界、南至讃良郡界、北至攝州島下郡界、）
〔文德實錄 八〕齊衡三年十一月壬戌、大祓於新成殿前、○中略 乃遣大納言正三位藤原朝臣良相○中略 等、向河內國交野郡柏原野、設肄習禮、祠官畫會、

若江郡
〔河內志 十二〕若江郡（東至高安、河內二郡界、西至攝州東成郡界、南至志紀、澀川二郡界、北至茨田郡界、）
〔續日本紀 八 元正〕養老四年六月戊申、河內國若江郡人、正八位上河內手人刀子作廣麻呂、改賜下村主姓、免雜戶號、
〔日本靈異記 中〕行基大德、携子女人、視過去怨、令投淵示異表緣第卅
行基大德、令堀開於難波之江、而造船津、說法化人、道俗貴賤、集會聞法、爾時河內國若江郡川派里、有一女人、携子參往法會、聞法、其子哭譴不令聞法、○下略

澀川郡
〔河內志 十三〕澀川郡（東北至若江郡界、西至攝州東生郡界、南至志紀、丹北二郡界、）
〔今昔物語 二十二〕房前大臣始北家語第三
今昔、房前ノ大臣ト申ケル人御ケリ、○中略 河內ノ大臣ト申ケリ、其レハ河內國澀河ノ郡□□ノ鄉ト云所ニ、山居ヲ造テ微妙ク可咲クシテ住給ケレバ也、

志紀郡
〔河內志 十四〕志紀郡（東至安宿、大縣二郡界、西至丹北、澀川二郡界、南至古市、丹南二郡界、北至若江郡界、）
〔古事記 中 景行〕零大冰雨、打惑倭建命、○中略 故自其國飛翔行、留河內國之志幾、故於其地作御陵鎭坐也、
〔續日本紀 六 元明〕和銅六年六月辛亥、河內國志紀郡人、刀母離余叡色奈、並染作暈繝色而獻之、勞各授從八位下、并賜絁十疋、絲四十絇、布卌（○布卌二字原脫、據一本補、）端、鹽十籠、穀一百斛、

丹比郡
丹南郡
丹北郡

〔續日本紀三十二 光仁〕寶龜三年八月、是月、自朔日雨、加以大風、河内國茨田堤六處、澀川堤十一處、志紀郡五處並決、

〔伊呂波字類抄加 國郡〕河内國○管十四 中略 丹○北○タンホク 丹○比○タチヒ 丹○南○

〔郡名考〕郡名後改文字説
丹比タヂヒ 今讀日本紀ノ丹南丹北

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第一回　塚本明毅
河内 略○ 註
元正天皇養老四年十一月乙亥、併堅下堅上二郡、更號大縣郡、延喜式十四郡トアリ、和名抄亦同ジ、其丹比郡ノ注ニ、爲丹南丹北トアリ、當時蓋既分郡セシナラン、丹比郡十一鄕アリ、其地勢ヲ察スルニ、其五鄕丹北ニ屬シ、其六所丹南ニ屬セシナルベシ、八○上○郡○ハ丹北ノ分郡ニシテ、二鄕ノ地ナリ、其置何代ニアルヲ詳ニセズ、

〔續日本紀一 文武〕四年三月己未、道照和尚物化、中○略 和尚河内國丹比郡人也、

〔續日本紀二十六 稱德〕天平神護元年十月丙戌、到河内國丹比郡、

〔日本靈異記下〕寫法花經經師爲邪婬以現得惡死報緣第十八
丹治比經師者、河内國丹○治○比○郡人、姓丹治比、故以爲字、

〔河内志十五〕丹南郡 東至石川、古市二郡界、西至八上、及泉州大島郡界、南至錦部郡界、北至志紀、丹北二郡界、

〔河内志十六〕丹北郡 東至志紀郡界、西至攝州住吉郡界、南至丹南、八上二郡界、北至澀川郡、及攝州住吉郡界、

八上郡

〔伊呂波字類抄加 國郡〕河内國○管十四 中略 八上ヤカミ

〔河内志十七〕八上郡 東南至丹南郡界、西至泉州大島郡界、北至丹北郡界、及攝州住吉郡界、

鄕

〔倭名類聚抄六 河内國〕錦部郡 餘戶 百濟

石川郡　佐備　紺口　雜居　大國
古市郡　新居　尸度　坂本　古市
安宿郡　賀美　尾張　賓母
大縣郡　鳥坂　鳥取　津積　大里　巨麻　賀美
高安郡　坂本　三宅　掃守　玉祖多末乃於也
河内郡　英多　新居　櫻井佐久良井　大宅　豐浦　額田沼加多　大戸
讃良郡　山家　甲可　枚岡比良乎加　高宮　石井
茨田郡　幡多　佐太　三井　池田　茨田　伊香以加加　大窪於保久保　高瀨
交野郡　三宅　田宮　園田　岡本　山田　葛葉久須波
若江郡　弓削由介　刑部　新治　巨麻　川保　錦部　餘戸
澁川郡　竹淵多加不知　邑智　餘戸　跡部阿止倍　賀美
志紀郡　長野　拜志　志紀　田井　井於井乃倍　邑智　新家　土師
丹北北恐比○誤郡　依羅與佐美　黒山　野中乃奈加　丹上　三宅三也介　八下波知介　田邑多無良　菅生須加不　丹下
土師　狹山佐也萬

〔河内志二錦部郡〕鄉名　餘戸　百濟俱廢

〔日本書紀二十敏達〕元年四月、是月、宮二于百濟大井一、

〔河内志三石川郡〕鄉名　佐備サヒ、方廢、村存、紺口カンク、甘南備龍泉、俱有二咸古祠一、雜居サハヰ、廢、大國、方廢、今存二大黒村一、屬二古市郡一、

〔河内志四古市郡〕鄉名　新居、廢、尺度、方廢、坂田村存、坂本、廢、古市、方廢、村存、

〔河内志五安宿郡〕鄉名　賀美　尾張　賓母　俱

〔河内志六大縣郡〕鄉名　鳥坂、已廢、存二高井田村一、鳥取、已廢、存二青谷村一、津積ツヽ、已廢、存二法善寺村一、大里、方廢、大縣村存、巨麻、已廢、存二本堂村一、加美、已廢、存二雁

（多尾畑村、）

〔河內志 七 高安郡〕鄉名　坂本（方廢、村存、）三宅（已廢、存大窪村、）掃守（カモリ）（已廢、存黑谷村、）玉祖（方廢、存神立村、）

〔河內志 八 河內郡〕鄉名　英田（已廢、存吉田村、）新居（廢）　櫻井（已廢、存六萬寺村、）大宅（廢）　豐浦（方廢、村存、）額田（方廢、村存、）大戶（方廢、存神並芝二村、）

〔河內志 九 讃良郡〕鄉名　山家（已廢、存寺川野崎二村、）甲可（方廢、甲可南村存、）枚岡（廢）　高宮（方廢、村存、）石井（廢）

〔今昔物語 二十四〕嫁蛇女醫師治語第九

今昔、河內ノ國讃良ノ郡馬甘ノ鄉ニ住ム者有ケリ、下姓ノ人也トハ云ヘドモ、大キニ富テ家豐カ也、

〔河內志 十 茨田郡〕鄉名　幡多（廢）　佐太（方廢、村存、）三井（ミツ）（方廢、村存、）池田（方廢、村存、）茨田（マンタ）（已廢、存平池村、）伊香（イカゴ）（方廢、村存、）大窪、　高瀨（今曰小高瀨莊、）

〔河內志 十一 交野郡〕鄉名　三宅（廢）　田宮（方廢、村存、）園田　岡本（俱廢）　山田（已廢、存田口村、）葛葉（方廢、村存、）

〔日本書紀 五 崇神〕十年九月壬子、遣大彥與和珥臣遠祖彥國葺、向山背擊埴安彥、○中略　褌屎處曰屎褌、

今謂樟葉。訛也、

〔河內志 十二 若江郡〕鄉名　弓削（ユゲ）（方廢、村存、）刑部（オサカベ）（方廢、村存、）新治（ニイハリ）（廢）　巨麻（已廢、存若江村、）川俣（方廢、村存、）錦部（ニシゴリ）（方廢、村存、）餘戶、

〔河內志 十三 澁川郡〕鄉名　竹淵（タカフチ）（方廢、村存、）邑智（オホチ）（方廢、村存、）餘戶（已廢、有出戶村、亦屬丹北郡、）跡部（已廢、存龜井村、）賀美（已廢、存正覺寺村、）

〔三代實錄 四十八 光孝〕仁和元年九月廿一日壬寅、大和國添上郡百姓從七位上相模宿禰阿古麻呂、從八位下相模宿禰門主、從八位上相模宿禰魚麻呂等三戶、男女三十一人移隷河內國澁河郡、阿古麻呂等言曰、父正六位上相模宿禰仁麻呂、本是大和國添上郡八島鄉人也、去弘仁五年任河內大目、罷秩之後、居住澁川郡邑智鄉、連婚華乳、子孫繁多、望請除本國籍、貫附當土、詔許之、

〔河內志 十四 志紀郡〕鄉名　長野（已廢、存澤田村、如譽田野中、式屬本郡、今爲隣郡、）拜志（ハヤシ）（方廢、村存、）志紀（廢）　田井（方廢、村存、）井於（已廢、存老原村、）邑智（已廢、存木本村、）新家（方廢、村存、今屬丹北郡、）土師（已廢、存道明寺村、）

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年五月壬辰、河內國志紀郡志紀鄉百姓志紀松取宅中、所生橘樹、其高僅二

寸餘而花發者、殖于土器進之、

〔河内志 十五丹南郡〕鄕名 黒山 野中 丹上 菅生 丹下 狭山 俱廢、村存、 田邑 已廢、存太井村、

〔日本書紀 五崇神〕六十二年七月丙辰、詔曰、農天下之大本也、民所恃以生也、今河内狭山埴田水少、是以、其國百姓怠於農事、其多開池溝、以寛民業、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年四月丁巳、河内國狭山池隄決、以單功八萬三千人修造、

〔和漢三才圖會 七十五河内〕狭山 サヤマ 西戌至大坂五里、戌至泉州界三里、

村里名邑

〔河内志 十六丹北郡〕鄕名 依羅 ヨサミ 廢、 三宅 方廢、村存、 土師 方廢、村存、

〔郡名一覽〕一河内國 御料私領 河州 四方二日餘 拾六郡

高貳拾七萬六千三百貳拾九石八斗貳升九合五勺四才 五百拾壹ケ村

〇狭山 〇丹南

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕河内 御料私領 十六郡、五百四十五村、

高二十九万三千七百八十六石六斗三升四合五勺

茨田郡八十一村 交野郡三十八村 讃良郡三十四村 河内郡二十九村 若江郡六十一村 高安郡十四村 澁川郡三十一村 大縣郡十四村 志紀郡二十二村 丹北郡四十三村 丹南郡四十九村 八上郡十二村 古市郡十六村 安宿部郡五村 石川郡四十八村 錦部郡四十八村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

河内 茨田郡 マンダ、點野村 シメノ、交野郡 カタノ、

〔日本書紀 三神武〕戊午年三月丙子、遡流而上、徑至河内國草香邑、青雲白肩之津、

註

〔新撰姓氏錄 河内國皇別〕大戶首

阿閉朝臣同祖、大彥命男、比毛由比命之後也、謚安閑御世、河内國日下大戶村、造立御宅、爲首仕奉、仍賜大戶首姓、日本紀漏、

〔日本書紀 七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略既而崩于能褒野、○中略卽詔群卿命百寮、仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武尊化爲白鳥、從陵出之、指倭國而飛之、群臣等因以開其棺櫬而視之、明衣空留、而屍骨無之、於是遣使者追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處造陵焉、白鳥更飛至河内、留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵曰白鳥陵、然遂高翔上天、徒葬衣冠、○中略是歲、○中略四十三年焉、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十七年十月辛亥、河内國司言、右京人尾張王、於部内古市郡古市里田家庭中得白龜一頭、長九分、闊七分、兩目並赤、

〔日本靈異記 中〕行基大德携子女人視過去怨令投淵示異表緣第卅

行基大德令堀開於難波之江而造船津、說法化人、道俗貴賤集會聞法、爾時河内國若江郡川派里有一女人、携子參往法會聞法、

〔日本書紀 十一仁德〕十四年、是歲、作大道置於京中、自南門直指之至丹比邑、

〔日本書紀 十二反正〕元年○中略十月、都於河内丹比、是謂柴籬宮、

〔石淸水文書 一〕太政官牒石淸水八幡宮護國寺

宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處事○中略

河内國漆箇處○中略　壹處　字甲斐伏見庄　錦部郡○中略

壹處　字矢田庄　丹北郡○中略　壹處　字大地庄　澀河郡○中略

延久四年九月五日○署名略

〔集古文書一 綸旨〕後白河院綸旨 河內國錦部郡觀心寺藏

河內國錦部郡觀心寺山內、幷石川郡東坂庄、任承知〇知恐和誤緣起之旨、不可有知行相違者、天氣如此、悉之以狀、

保元二年二月十三日　　右少辨 御判

觀心寺寺僧等中

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永傳止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略

河內國　今富庄　古市庄　若江庄　橘部別宮　神並庄　本御座園　三宅山　須彌寺　窪庄

寺島庄　大地庄　中村庄　紺口庄　延命園　大御園〇中略

極樂寺領〇中略

河內國　長曾根庄　大西庄　栃榴庄　內山庄　高井田小庄　新御座園　林燈油園　養父庄

近末名〇中略

保元三年十二月三日　　大史小槻宿禰在判〇下略

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元曆元年四月六日甲戌、池前大納言幷室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言沙汰　走井庄河內〇中略

右莊園拾七箇所載沒官注文、自於院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月五日

〔金峯神社文書〕金峯山吉水院

申請坊領證文紛失狀證判事〇中略

河內國　加〇納〇莊、東〇山〇莊、板〇持〇名、田〔參段、〕〇中略

建武元年二月日〇署名略

〔集古文書〕〔綸旨〕後村上天皇綸旨〔河內國錦部郡觀心寺藏〕

河內國小〇高〇瀨〇庄〇領家職、爲御祈禱料所、可被知行者、天氣如此、悉之以狀

延元五年二月廿二日　右少辨花押

觀心寺寺僧等中

藩封

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕〇中略

六貫文〇中略　三寶院御門跡〔河內國五〇丁〇庄〇段錢〕〇中略　拾五貫百十五文〇中略　三條右大臣家〔河內國鼓〇呂〇岐〇庄〇段錢〕

〔慶應元年武鑑〕高木主水正正坦〔菊之間朝散大夫〕　一万石、在所河內丹南郡丹南、〔江戸ヨリ百三十五里〕

〔元和九年ヨリ高木氏代々領之、柳間從五位上〕

北條相模守氏恭　一万石、在所河內丹南郡狹山、〔江戸ヨリ百三十五里〕

〔慶長年中ヨリ、北條氏代々領之、〇中略〕

田數石高

〔倭名類聚抄〕〔五國郡〕河內國〇註略　管十四〔田萬千三百三十八町四段百六十步〕

〔伊呂波字類抄〕〔加國郡〕河內國〇中略〔管十四〕　本田一万九百七十七丁

〔海東諸國記〕河內州　郡十一、水田一萬九千九十七町

〔日本鹿子〕二河內國　十五郡、大中國、〇中略　知行高三十万八千八百五十石

〔和漢三才圖會〕地七十五河內　十五郡　高三十萬八千八百五十七石

出擧稲

國產貢獻

〔官中秘策一〕河內國〇中略

一石高四拾七万六千三百貳拾九石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

河內國御料私領　一高貳拾九万三千七百八拾六石六斗三升四合五勺

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稲〇中略

河內國正稅公廨各十四万九千四百七十七束、國分寺料一万束、文殊會料二千束、修理池溝料二万束、堤坊料一万束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕河內國〇註略　管十四(中略)正公各十四萬九千四百七十七束、本稲三十九萬八千九百四十六束、雜稲十萬二束、〇十萬二束恐十萬二千束誤

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進　畿內國營田舂米六百五十四斛七斗三升二合(中略)河內國百廿斛〇中略

支子數有損益〇中略　河內國八斛

〔延喜式二十三民部〕交易雜器〇中略　河內國酒槽卅四隻十一隻長各一尺、廣二尺五寸、深八寸、手長一尺三寸、十一隻長各六尺、廣二尺三寸、深八寸、手長一尺、十二隻高二尺七寸、口徑二尺一寸、手長九寸、臼六腰、杵六枝、箕籠卅口、匏二百廿五柄、置簀卅枚、長各八尺、廣四尺〇中略

交易雜物〇中略　河內國大豆三石、小豆卅五石、薑子五斗、薑二千五百枚、

〔延喜式二十四主計上〕河內國行程一日

調、黑山席五十枚、折薦一千三百八十三枚、葉薦二百枚、柳筥一合、簡筥大十合、贄土師鏡形二百七十口、片盤二百七十六口、手洗盤廿二口、手湯瓮四百十三口、水椀八十八合、鍋二百口、大高盤五十口、粥盤十四合、酒盞三百廿口、汁漬坏六十口、中片坏八百六十一口、吐盤六口、坏作土師酒盞七十六合、小高盤百廿四口、中片坏六百六口、自餘輸錢、

〔延喜式三十一宮內〕諸國例貢御贄〇中略　河內木蓮子

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子〇中略　河內國菌子一擔、覆盆子一擔、楊梅子一擔、椎子一擔、花橘子一擔、蓮根五百六十節、木蓮子、

人口

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥〇中略河內國三種　椅杞十斤、蒲黃一斤、黑大豆大五斗、

〔延喜式三十九內膳〕荷葉　稚葉七十五枚、波斐四把半、並起五月中旬盡六月中旬　壯葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、起六月下旬盡七月下旬　黃葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、起八月上旬盡九月下旬　右河內國所進、各隨月限隔一日供之、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略　宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略　河內鍋又味噌

〔庭訓往來〕能登釜、河內鍋、

〔毛吹草三〕河內

青皮　蛇床子　雞頭實　菱河骨　白黑烏芋　蓮根　同葉　大菰　干瓢　小角豆廿五サヽゲトモ云、垣ニ生ナガラサヤ共ニ干置テ、後是ヲ煮テ用ニ、サヤ生ノ如ト云、　石川郡楊梅　錦郡柿　往生院柘榴　道明寺木槵子數珠ニ用之　引飯比丘尼ノ餘ナリ　山田茜　紫染　毛利口漬香物天滿宮ノ前ノ大根ヲ以漬之　石戶米　天野酒　平野糖、　產藥　久寶寺木綿　譽田コンダ瞥　鷹鈴　玉串楊枝　芹谷野老　橫山白炭　金剛山金剛砂

〔官中秘策一〕河內國〇中略

一人數貳拾三万千貳百六拾六人

內　男拾壹万四千六百五十壹人
　　女拾壹万六千二百拾五人

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調〇中略　文化元甲子年

御料私領　高貳拾七万六千三百貳拾九石餘　河內國

一人數貳拾壹万四千九百四拾五人

內　男拾万九千九人
　　女拾万五千九百三拾六人

〇中略

弘化三丙午年

諸國人數調〇中略

風俗　名所

高貳拾九万三千七百八拾六石餘　河內國

御料私領一人數貳拾貳万四千五拾五人

內　拾壹万貳千六百六拾人　男
　　拾壹万千三百九拾五人　女

〔人國記〕河內國

河內國之人ハ、風俗上下男女トモニ氣柔ニシテ、譬ヘバ雪之朝ニ庭前ヲ見レバ、一柳之枝ヲタヲマスト云ヘドモ不折ガ如シ、上手之風俗ト可知ナリ、然レバ士農工商トモニ富貴ナル人ハ、都テ驕リ之氣有テ、人ヲ足下ニ見イヤシム心甚强シ、雖然氣ニ和有ガ故ニ、物之道理ヲ知ル時ハ、名高キ人モ有ルベキナリ、上河內郡ハ、城州ニ風俗不替ナリ、下河內郡ハ、人之氣直ニ而頼母敷キ處有リ、丹南郡、石川郡、錦部郡之人ハ、別而餘國ニ違テ、智惠有テ實有テ物之品アリ、言葉之樣子ハ城州ニ似タル樣ナレドモ、上下トモニ每物卑劣ナリ、此レ是國之人ヲナビケンニハ、其政ヲユルクシ、氣ヲ同フ而、少シ辨有人ヲマヂキテ、談ズル時ハ、危キコトナク可從、若シ權威ヲ振フ時ハ、惡ム處之者多カルベシ、己ガ長ヲ立ル時ハ、必ズ妬起リ禍ヲタクム故ニ、却而敵トナルベシ、亦自ラ言ヲ出テ人ヲ誅ル時ハ、還而是國之人ハイキドヲリ深クシテ、從フヤウ成トモ服スル處ナカルベシ、寔ニ其國其温土ニ因テ、音聲之替ルコト可知事ナリ、

〔河內志〕一風俗　素樸淳厚、不事奢靡、力稼穡、存尙古之風、有些義氣、婦務織紝、業麻布棉布、爲恒產、凡民淫佛崇僧、先香火後貢賦、

〔日本鹿子〕二同國〇河內名所之部

交野原　八幡にちかし、葛の宮よりは南也、〇歌略

天川原　東より西へ流たり、ほそき川也、かたのの間也、竹川も此つゞきなり、

渚森　淀川の末也、川より南に宮あり、京より六里也、

生駒山　此山立田にちかし、京よりかすかに見えたり、八幡より南に高安の里有、〇中略

秋志野 生駒山の麓也〇略歌

稲葉里〇略歌 鴬關 越前に同名有

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略 河內國卅人

古事類苑

地部五

和泉國

和泉國ハ、イヅミノクニト云フ、五畿內ノ一ニシテ、東ハ河內、紀伊ニ接シ、西ハ海ニ面シ、南ハ紀伊、北ハ攝津ニ堺ス、東西凡ソ四里十餘町、南北凡ソ六里アリ、此國ハ元正天皇ノ靈龜二年ニ、河內國ナル大鳥、和泉、日根ノ三郡ヲ割キテ和泉監ヲ置キ、孝謙天皇ノ天平寶字元年更ニ改テ國ト爲ス、古ヘ國府ヲ和泉郡ニ置キ、大鳥(オホトリ)、和泉(イヅミ)、日根(ヒネ)ノ三郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、後和泉郡ヲ分チテ和泉〔又泉ニ作ル〕泉南ノ二郡トシ、又日根郡ヲ泉南郡ニ合セ、新ニ堺市ヲ置テ一市二郡ト爲シ、大坂府ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄〔五國郡〕〕和泉〔以三郡〕

〔運歩色葉集〔伊〕〕和泉(イツミ)

〔日本風土記〔一寄語島名〕〕和泉〔因字米〕

〔倭訓栞〔前編三伊〕〕いづみ〇中略　和泉の國は清泉國府にあり、よて名とすといへり、和泉と書るは、國郡の名に二字を用ゐさせられしよりのことなり、

〔玉勝間〔五〕〕和泉の和字の事

國名のいづみを和泉とかく和の字は、いかなる故をもて添られたるにか、どしごろいぶかしか

りつるを、つら〱思へば、まづいづみといふは、和泉郡ありて、上泉下泉てふ郷もあれば、そこより出たる國の名なることは論なし、かくてその郷の內、府中村といふに、今も和泉の井とて、いとめでたき清水ありて、そこに泉井上神社、和泉神社なども有て、式にも見ゆ、然るに並河氏がかける和泉志を見れば、此和泉井を擧て、其水清且甘と記せるをもて思へば、此清水、上つ代よりいと清くて、甘かりし故に、にぎいづみと號て和泉と書たりしを、其里人などは、たゞ泉とのみいひならへるがひろごりて、名高き水なれば、京人なども、泉とのみいひあへりしまゝにて、郡の名にも國の名にもなれるを、すべて國郡などの名、二字にかく事なる故に、文字にはかならず本の名のごとく、和泉とは書なるべし、やまとの國も、語には常には、たゞやまとゝのみいふを、もじには必大の字をそへて、大和とかくと同じたぐひなり、されば和泉の和の字は、もとにぎ泉といひけんゆゑとぞ思はるゝ、

〔日本靈異記 中〕觀音木像不燒火難示威神力緣第卅七

聖武天皇世、泉國泉郡部內珍努上山寺居于正觀自在菩薩木像而敬供之、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

和泉堺 市之町濱 極高三十四度三十四分半、經度西一十六分半、從東都 東海道歷大坂、一百四十九里三十町五十六間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

和泉　岸和田　三四度二七分三〇秒　堺　三四度三四分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　和泉　岸和田　西〇度二二分三五秒

疆域

〔和泉志 一〕疆域　東至河州界、西至海濱、南至紀州界、北至攝州界、南北十二里餘、東西五里許、

〔日本地誌提要 六和泉〕疆域　東ハ河內紀伊、南ハ紀伊、北ハ攝津、西ハ海ニ至ル、東西凡四里壹拾四町、南北凡六里、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年三月四日庚申、遣左衛門少尉正六位下紀朝臣今影、右衛門大志從六位上櫻井田部連貞雄麻呂於河內和泉兩國、辨決陶山之爭、　四月廿一日丙午、河內和泉兩國、相爭燒陶伐薪之山、依朝使左衛門少尉紀今影等勘定、爲和泉國之地、

〔平治物語 一〕從六波羅紀州被立早馬事
大將(○平清盛)以下皆淨衣ノ上ニ鎧ヲ著、敬禮熊野權現、今度ノ合戰無事故討勝サセ給ヘト祈精シテ、引懸引懸打程ニ、和泉ト紀伊國トノ境ナル鬼ノ中山ニテ、蘆毛ナル馬ニ乘タル者、早馬ト覺シクテ、揉ニ揉デ出來タリ、スハ惡源太ガ使カト、皆人色ヲ失フニ、源氏ノ使ニハアラズシテ、六波羅ヨリノ早馬也、

〔易林本節用集 下〕和泉(泉州)下、管三郡、南北百餘里、負山抱海、故五穀帶冷澀之氣、欠味、國廣醬醢魚鼈多、大下國也、

地勢

〔和泉志 一〕形勝　山環東南、海接西北、國無巨川、雄府豪邑、魚鹽利繁、

道路

〔和泉志 一〕路程　自堺至京師、淀道十四里、伏見道十五里十四町、至江戶一百三十七里、至大坂三里、至和歌山十三里、

官道　紀州道　堺驛大小路(攝州住吉郡界)至岸和田驛三里二十八町、(所歷曰湊、曰石津、曰高石、曰助松、曰下條、曰大津、曰宇多大津、曰忠岡、曰春木、曰野村等、)岸和田驛至信達驛三里十一町、(所歷曰津田、曰貝塚、曰澤、曰佐野市場、曰蟻通、曰安松、曰樫井、曰大苗代等、)信達驛至山中驛界橋(紀州名草郡界)一里二十七町、(歷牧野中村等、自大小路至于此、通計九里四町、外通瀧畑村、)　濱道　岸和田驛至男里三里二町、(所歷曰湊、曰佐野、曰賀祥寺、曰上岡田、曰樽井等、)男里至深日三里十八町(所歷曰尾崎、曰新、曰波字手、曰貝掛、曰箱作、曰淡輪等、)深日至小島大岩(紀州名草郡界)一里三十一町、(歷谷川村、岸和田至此、通計八里十五町、外通大川村、)　中道　堺驛至府中二里二十八町、(所歷曰湊、曰上石津、曰大鳥、曰長承寺、曰舞、曰土生、曰王子、曰伯太等、)府中至紀州官道(佐野川)三里四町、(所歷曰井口、曰額原、曰上松、曰作才、曰橋本、曰王子等、堺驛至此、通計五里三十二町、)

宿驛

間道　岩室越河州丹南郡界、至堺二里三町經土師金口等、謂之高野道、道左乃河州、　釜室越河州錦部郡界、至堺四里所歷曰深坂、曰小坂、曰深井等、

天野峠錦部郡界、坂路嶮岨、至國分一里二町經南面利、善正等、　卷尾峠錦部郡界、坂路嶮岨、至納花三里二十二町經大野、國分等、又自下宮

峠右寄、至善正村十町、　七越峠紀州伊都郡界、曲路七盤、方達山頂、至長承寺五里經父鬼、納花等、又自峠至卷尾山、徑嶮岨、謂之檜原路、　牛瀧嶺伊都郡界、嶮路人不

通行、至府中四里有半所歷曰大澤、曰內畑、曰福川、曰稻葉、曰中村、曰三田、曰今福等、　葛城嶺伊都郡界、多嶮坂路、外通粉川、因呼粉川越、　至岸和田四里十

四町所歷曰塔原、曰相川、曰河合、曰八田、曰七生等、　大木嶺紀州那賀郡界、路嶮隘、馬牛不行、至岸和田三里有半所歷曰土丸、曰大久保、曰王子、曰神前、曰貝塚等、

三燈越以樫谷川爲那賀郡界、外通根來、因呼根來路、至信達驛一里三十町經葛畑、童子畑、金熊寺等、　井關峠又云坂道峠、紀州名草郡界、至黑田

二里六町經桑畑、石田、　箱作嶺名草郡界、嶮路、嶮岩、始難辨、至貝掛一里十町　孝子燈嶺名草郡界、至深日一里三十町

東燈越名草郡界、至谷川一里二十町所歷曰橫手畑、曰石橋畑、曰大谷畑、又自谷川經佐瀨川畑、逸谷畑、謂之西畑越、路　堺濱　至淡州由良

十八里、至須本十七里、至岩屋十二里許、　至播州赤石十二里餘　至攝州兵庫七里餘、至西宮七里、

至尾崎五里、至大坂大嶋二里、至谷川十一里、至岸和田三里有半、

〔日本實測錄一沿海〕從東京沿海至大坂略○中

和泉國日根郡谷川浦、三十四度一十九分、　三里二十五町二十七間　尾崎村　四里九町三十八

間　南郡岸和田濱町、三十四度二十七分半、至岸和田城大手前、五町二十四間　四里一十町四十一間　大島郡堺

燈明臺至市之町濱上町二十九間、北極高三十四度三十四分半、從市之町濱歷大和橋、至安立町二十二町一十七間、從安立町至天下茶屋、三十二町五十七間、從天下茶屋至大坂長町、三十町

九間半、從長町至長堀橋、一十九町二十二間半、　二里一十八町四十八間至國界大和川口、二十五町二十一間半、從大和川至津守新田木津川口、一里二十七町三十一

間、　攝津國西成郡千島新田木津川湊口

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬略○中

和泉國驛日部、呼唹、各七疋、

〔續日本紀二十廢帝〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、頃者上下諸使、總附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今以後

宜依令、其能登安房和泉等國、依舊分立、

〔日本國郡沿革考 畿內二〕和泉 靈龜二年三月、割河內國和泉日根兩郡、令供珍努宮、(或作珍努宮、鉄、古事記作血沼、崇神紀茅渟縣、允恭紀茅渟宮、續紀智努離宮、即是、萬葉集陳奴之海、或珍海、亦斥此地、國造記云、靈龜元年、割置茅野監、)四月割河內國大鳥和泉日根三郡、始置和泉監、天平十二年八月、併河內國、天平寶字元年五月、依舊分立、天長二年三月、攝津國江南四郊、隷和泉國、閏七月江南四郊、還附攝津國、下國管四郡、(延喜式等三郡)三百二十村、

大鳥(オホトリ)八十八村　泉(イヅミ)八十九村(古國府、延喜式等作和泉、日本紀作泉水、)　南六十七村(和名抄云、國分置泉南郡、延喜式不載、)　日根七十六村

〔和泉志 一〕建置沿革 尙古名曰茅渟、(或作血沼、又珍努、)隷河內、神武天皇東征之日、欲踰膽駒山、入中洲、長髓彥禦之、皇師不利、更循海舟行、南至山城水門、皇弟彥五瀨命矢瘡痛甚、就水洗血、血沼之名、由此起也、神功皇后三韓凱旋、居小竹宮、謂之舊府、靈龜二年三月、割河內國和泉日根二郡、令供珍努宮、四月、割河內國大鳥、和泉、日根三郡、始置和泉監、府有靈水、地多淸泉、故曰和泉國、天平十二年八月、併河內國、天平寶字元年五月、依舊分國置司、天長二年三月、割攝津國東生西成百濟住吉四郡、隷于本國、閏七月、停隷本國江南四郡、還附攝津國、以百姓騷動、無願私業也、建久年間、以佐原義連補守護職、義連卒、悉其公稅、供上皇幸熊野之費用、降及延元、直隷南朝、和田氏據守府中、南朝衰弊、山名時氏取之、明德中山名氏淸築城于堺、以名泉府、氏淸敗亡、周防國大內義弘兼守護職、應永六年、義弘戰死、細川滿元、兼守享祿中、家臣三好長慶、使其族十河存保守之、以爲南海四國要衝、永祿初、根來寺僧徒劫略國中、天正五年、織田侯建營南莊、(今農人町)使松井友閑司國務、稱之布政所、十三年、豐臣太閤討根來寺、燬其巢穴、播擾國害、徙營北莊、(爲攝州)攝津守行長司府事、

〔日本地誌提要 六和泉〕沿革 靈龜中、河內ヲ割テ和泉監ヲ置、天平寶字ノ初、改メテ國トナシ、府ヲ、和泉郡ニ置、(府址今府中ニアリ)鎌府、佐原義連ヲ以テ守護トス、建武中興、楠氏守護トナリ、和田正遠ヲシテ岸和田ニ鎭セシム、南北講和、將軍義滿、山名氏淸ヲ以テ守護トシ、堺津ニ城キ、泉府ト稱ス、明德ノ初、氏淸誅セラレ、大內義弘之ニ代ル、應永中、義弘亦誅ニ伏シ、細川滿元之ニ代リ、四傳シテ

國府

郡

政元ニ至ル、其養子高國、澄元、嫡ヲ爭ヒ、大永中、澄元ノ子晴元、堺ニ據テ遂ニ本州ヲ取リ、家臣三好長基ヲ守護トス、天文ノ末、長基ガ子長慶、晴元ニ畔キ、本州ヲ攘奪シ、姪十河(ソガウ)存保(マサヤス)ヲシテ堺ニ居ラシム、永祿ノ初、織田信長、三好氏ヲ降シ、國廳ヲ堺南ノ莊ニ置キ、松井友閑ヲシテ州務ヲ裁セシム、(當時之ヲ政所ト云フ)天正中豐臣氏廳ヲ北ノ莊ニ移シ、小西行長ヲシテ之ヲ掌ラシメ、州ヲ以テ豐臣秀長ニ賜フ、秀長國絶ニ直ニ大坂ニ隷ス、德川氏ノ時、堺ニ奉行ヲ置、封ヲ受ル者、岸和田、(岡部宣勝)伯太(ハカタ)(渡邊吉綱)凡テ二藩、王政革新、近江三上ノ遠藤氏來リテ吉見ニ徙リ、三藩トナル、尋テ悉ク之ヲ廢シ、堺縣ヲ置、

(續日本紀七元正)靈龜二年三月癸卯、割河内國和泉日根兩郡、令供珍努宮、　四月甲子、割大島和泉日根三郡、始置和泉監焉、

(續日本紀十三聖武)天平十二年八月甲戌、和泉監并河内國焉、

(日本紀略淳和)天長二年三月癸酉、攝津江南四郊隷和泉國、　閏七月壬辰、停隷和泉江南四箇郊、還附攝津國、百姓騷動、無願私業也、

(倭名類聚抄五國郡)和泉國(國府在和泉郡、行程上二日、下一日、)

(伊呂波字類抄伊國郡)和泉國(管三中略)○和泉府

(延喜式二十二民部)和泉國下(管大島日根○和泉中略)右爲近國、

(倭名類聚抄五國郡)和泉國(略○註)管三(略○註)大島(於保止利)和泉(國分置泉南郡)日根(比禰)

(島林本節用集下)和泉(泉州)下管三郡(略○中)大島(オホシマ)和泉(イヅミ)府日根(ヒネ)

(皇國郡名志)和泉國(舊三郡今四郡)

大島(オフトリ)(堺○大島△泉式部●石津上下△行基出生地●濱●モヅ攝河界)

和泉(イヅミ)(●横山●大津△信田森△牛ダキ山河紀界ヨリ海貫)

日根(ヒネ) ●山口 ●山中 ●信達 ●市場 ●貝掛 △青池 △蟻通社 紀界西海向郡

泉南(イヅミノミナミ) 〔岸和田〕 〈貝塚 ●麻湯 △牛瀧川 紀界ヨリ海貫

今増二泉南郡一

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國爲郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕和泉

六國史		泉(紀)			
古書		同			
延喜式	大鳥(オホトリ)	和泉(イヅミ)		日根(ヒネ)	管三
倭名抄	同(於保止利)	同(泉南)		同(比禰)	同
拾芥抄	同	同		同	三郡
諸書	同(國知元)	同(知) 泉(國元) 南(國元)		同(國元知)	
郡名考	同(ヲホトリ)	同(イヅミ)	同(ミナミ)	同(ヒネ)	四郡
天保鄉帳	同	同	同	同	同
明治沿革帳	同	和泉	同	同	同
地誌提要	同(オホトリ)	同(イヅミ)	泉南(センナン)	同(ヒネ)	同
郡區編制	同	同	南	同	同

〔續日本紀 二十六 稱德〕天平神護元年閏十月辛卯、詔、河内和泉今年之調、皆從原免、○中略 和泉國三郡田租

亦免、

〔和泉志　二〕大島郡（東至河州八上丹南二郡界、西至海濱、南至和泉郡界、北至攝州住吉郡界、）

〔日本書紀　三十持統〕三年八月丙申、禁斷漁獵於攝津國武庫海一千步內、紀伊國阿提郡那耆野二萬頃、伊賀國伊賀郡身野二萬頃、置守護人、准河內國大鳥郡高脚海、

〔續日本紀　十五聖武〕天平十六年十月辛丑、賜郡司十四人爵一級、高年一人六級、三人九級、行所經大鳥和泉日根三郡百姓、年八十以上男女穀、人有差、

〔日本後紀　十二桓武〕延曆廿三年十月丙午、至和泉國、遊獵于大鳥郡惠美原、

和泉郡

〔和泉志　三〕和泉郡（東至河州錦部郡及紀州伊都郡界、西至海濱、南至泉南郡界、北至大島郡界、）

〔續日本紀　三十六光仁〕天應元年六月戊子朔、和泉郡人坂本臣糸麻呂等六十四人、賜姓朝臣、

〔和泉井緣起〕神功皇后征新羅之年、此清水一夜涌出、故此地名和泉郡、三韓悉平、皇后歸自新羅詣紀伊國、下御舟覽此水、賞之矣、清水有八幡社、號井八幡、或曰水內社、相傳神功皇后行宮也、

〔日本後紀　十二桓武〕延曆廿三年十月辛亥、遣使於和泉日根二郡諸寺施綿、

〔日本靈異記　中〕生愛欲戀吉祥天女像感應示奇表緣第十三

和泉國泉。郡。血渟山寺、有吉祥天女攝像、○下略

日根郡

〔和泉志　五〕日根郡（東南至紀州那賀名草二郡界、西至海、北至泉南郡界、）

〔東大寺正倉院文書　十四〕和泉監正稅帳

日根郡天平八年稅帳達定稻穀伍仟柒伯貳拾捌斛陸升捌勺陸撮○中略

天平十年四月五日

〔續日本紀　二十六稱德〕天平神護元年九月庚戌、遣使造行宮於大和河內和泉等國、以欲幸紀伊國也、十月甲申、到和泉國日根郡深日行宮、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年六月二日乙巳、和泉國日根郡田、幷山岡二十三町七段百九十九歩、永充淳和院、

〔大和物語 上〕みかど(○宇多)おりゐ給ひて、又のとしの秋、御ぐしおろしたまひて、ところ〴〵山ぶみしたまひて、をこなひ給けり、(○中略)いづみの國にいたり給て、ひねといふところにおはします夜あり、いとこゝろぼそうかすかにて、おはしますことを思ひて、いとかなしがりけり、さてひねといふことを、歌によめと仰ごとありければ、このよし、大とく(○寛蓮)

故鄕の旅ねの夢にみえつるは恨やすらん又ととはねば、とありけるに、みな人なきてえよますなりにけり、

泉南郡

〔和漢三才圖會 七十六和泉〕泉南郡　當國元三郡也、中世私割和泉郡之南邊、爲泉南郡、而似四郡、

〔和泉志 四〕泉南郡(東至紀州那賀郡界、西至濱海、南至日根郡界、北至和泉郡界、)

〔半陶藁 三〕明甫字說

余昔避亂、寓岐嶽齋、利涉老師在焉、(○中略)爾來師移法施泉南、余往而省焉、(○中略)瘞履之後六七年、余再遊泉南、意在禮率覲也、有諱滝者、師之寧馨也、字明甫、蕉菴季弘師、臥海倉先廬之日所命也、明甫一日出二大字、請說、蕉菴親蹟也、蕉菴余所敬也、嘗携所業謁之、一言之褒、莫華衣如焉、往事鍾懷、夢耶不夢耶、先是人指泉南爲佛國、以二師故也、(○中略)延德二載秋閏八月初吉書、

鄕

〔倭名類聚抄 六和泉國〕大島郡　大鳥(於保止利)　日部(高山寺本作日下部、久佐倍)　和田(爾木、高山寺本作邇岐、多)　上神(加無、高山寺本脫無字、都美和)　大村(於保無良)　土師(波爾、高山寺本作邇之)　蜂田(波知多)　石津(以之都)　鹽穴(之保乃阿奈)　常凌(今爲深井、不加井、)

和泉郡　信太(臣多)　上泉(加美都以都美、○高山寺本作加无都以豆美、)　下泉　輕部(加留倍)　坂本(佐加毛止)　池田(以介多)　山直(也末多倍)　八木　掃守(加爾毛利)　木島(木乃之末)

日根郡　近義　賀美　呼唹(唹、高山寺本作於、乎)　鳥取(止々利)

〔和泉志二大島郡〕郷名　大島、日部、（日今作草）和田、（今曰美木多）上神、（今曰富和）大村、（今曰陶器上村）土師、（今曰毛須荘、毛須、一作毛受、又萬代）蜂田、（今曰牛陀）石津、蹔穴、（方違村在、）常陵、（今曰深井）

〔田代文書〕攝政家政所　和泉國在廳官人幷大番舍人等

可早任先例停止尊惠正方等妨、以友貞重富如元爲大島日下部兩郷村々刀禰職事、（○中略）

建仁二年四月十五日　案主中原（○下略）

〔泉州志二〕鉢峯（山上有神社）　山林方五町官税免除

緣起云、人王十一代垂仁天皇八年、天照太神化鳳凰降此嬰于峯、（或云小倉峯、或云上野峯、）垂仁皇子登臨而遣祭其化跡、故曰神鄉焉、（○中略）

余（○石川新右衛門）按（○中略）上神訓上三輪者、對大和國三輪云爾歟、

○按ズルニ、和名抄ニ上神郷有リテ、下神郷無キヨリ、泉州志ノ按文ニ、上神訓上三輪者、對大和國三輪云爾歟トアレドモ、同書引ク所ノ大島神社流記ニ、正三位鍫靫社坐下神里五六坪原里十二三坪云々ト見エタレバ、大和ニ對スルニアラザルコト明瞭ナリ、

〔土佐日記〕いしづといふところの松原、おもしろくて、はまべとほし、

〔和泉志三和泉郡〕郷名（倭名類聚抄曰、郷十、其四爲泉南郡、今郷六、）信太　上泉（今曰上條郷）下泉（今曰下條郷）輕部　坂本　池田

〔和泉志四泉南郡〕郷名　山直　八木　掃守　木島

〔久米田寺文書〕和泉國久米多寺別當僧祐圓、與同國山直郷四箇里地頭代沙彌西生相論、當寺免田肆町參段餘事、

右對決之處、如祐圓申者、當寺免田貳拾陸町餘、散在六箇鄉、代々國司無妨、承久以後、爲守護人逸見入道奉行、被尋在廳之時、承久以前、往古本免之由、進勸狀之間、六箇鄉地頭去退畢、其後輕部鄉新地頭波多野彌藤二左衛門尉、令破之日、經種々沙汰、令落居畢、爰山直四箇里地頭代、不敘用度々御下

村里名邑

知、去年召上下司、遂問注之處、退之畢、○中略壽永二年、三箇鄕百姓等申狀具也、而聖靈法師、以謀書付强縁、以神社佛寺權門勢家百姓等私領、假號寺領、擬庄號之間、八木、山直、加守、三箇鄕百姓等、訴申之處、不可有庄號之由、同守成外題畢、○中略如同所進文曆二年田所注文者、久米多寺免田在鄕田數事、貳拾町陸段肆拾歩、但本數貳拾陸町肆段小内輕部鄕壹町伍段小、坂本鄕陸段、山直鄕拾壹町漆段小、加新分定庄八木鄕伍町佰歩、内壹町者承久以後加守漆段、木島鄕内埴生村壹町陸拾歩、任承久三年以前引付注進云々、○中略如此等狀者、久米多寺本免散在鄕々、當時相論山直鄕四箇里、免田肆町參段餘、可停止地頭役之由、雖不被載之、文治元曆免田、輙雖被顚倒之上、六波羅下知狀、已爲柄焉歟、然者於彼免田者、可停止地頭役、但承久以後、新免與自今以後浮免者、可令停止自由之募者、依鎌倉殿仰、下知如件、

寶治二年十二月五日

左近將監平朝臣花押

相模守平朝臣花押

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年六月一日庚辰、矢部禪尼、法名禪阿賜和泉國吉井鄕御下文者、前遠江守盛連、依令讓附也、彼御下文、五郞時頼、被持向三浦矢部別庄云云、

〔和泉志五日根郡〕鄕名　近義コギ　賀美今作上　呼唹ヲ今信達中通莊　及　鳥取

〔吾妻鏡六〕文治二年五月廿五日壬寅、能保朝臣平六傔仗時定、及常陸房昌明等飛脚參著、持參前備前守行家之首、○中略各申云、備州、日來横行和泉河内邊之由、風聞之間搜求之處、去十二日、在于和泉國一在廳日向權守清實許之由、得其告行向、圍清實小木鄕宅、○下略

〔郡名一覽〕一和泉國御料私領　泉州　南北一日半餘　四郡

高拾六萬千六百九拾貳石壹斗貳升六合四勺　三百拾七ケ村

●岸和田百四十一里京十九里　○伯太　百卅九里　□堺百三十七里京十五里大坂三里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕和泉　四郡三百二十村

御料私領高十七万二千八百四十七石九斗八升六合

大島郡八十八村　泉郡八十九村　南郡六十七村　日根郡七十六村

〔地勢提要　坤〕郡邑島嶼奇名

和泉　日根郡波有手村

〔今昔物語　二十〕和泉國人燒食鳥卵得現報語第卅

今昔、和泉ノ國ノ和泉ノ郡ノ下ノ痛脚村ニ一人ノ男有ケリ、

〔和田家譜〕楠左衛門尉成康之二男太郎新遠、曾從河州移住泉州和田村、故號和田、是和田氏之祖也、其子四郎高遠、其子孫三郎正遠也、楠正成之妹嫁高遠生正遠、故正遠者正成之甥也、者子孫高家正武等住同國岸城、曰之岸和田、後歸于河州、與楠之末葉同住大饗邑、又有號上和田者、住于吉野、是亦其先出泉州和田村、

〔和漢三才圖會　七十六和泉〕岸和田〈泉南郡也、本名岸村、楠正成之氏族和田新兵衛尉高家、始築城郭住之、子氏、號之岸和田、後竟爲邑名也、丑方至京師十九里、寅方至江戸百四十一里、北至攝州大坂七里、南至紀州若山九里餘、〉

〔細川兩家記〕一同四年〈〇永祿〉七月廿日、〈〇中略〉南方泉州表へは根來寺衆、畠山高政安見方一味して、岸和田邊へ陣取也、

〔中村一氏記〕成合平左衛門一番ヤリ、此人ハ泉州岸和田ヲモテ一番ヤリヲツカマツリ、覺ヲトリ申候故、又一番ヤリヲツカマツリ、此度ハ討死仕候、

〔和泉志　二大鳥郡〕村里　堺南莊〈大街一條、自東達西、謂之大正路、乃攝州分界、因有堺名、又官道一條自北達南、謂之大道、坊名十、曰市町、曰甲斐町、曰大町、曰宿院町、曰中町、曰寺地町、曰少林寺町、曰新在家町、曰旅籠町、曰南半町、其東西町名、多臨大道呼、濱芝原等在西、[illegible]次、片原、島人町等在東、東南有津守町、乃舊高情町、正東有輪松村、其北有中筋村、獨陸北莊、凡町區七十六、

〔和漢三才圖會和泉七十六〕大島郡

堺津　攝河泉之堺也、大小路東有三國境目、東河州、北攝州、南泉州、自古渡唐商人居住、西國海舶大湊也、總二庄五村、向井領村中筋村原村、謂之北庄、屬攝州、開口村木戸村、謂之南庄、屬泉州、山名氏淸大内義弘等、從築城於此津、專爲繁花之地也、後三好修理大夫長慶、使三好存保司泉河兩國政道、世稱堺殿、今亦當地町奉行、司和泉一國事、稱政所、

〔應永記〕去レ共城ニハ、矢櫓ノ上ニテ戰テ、火中ニ落入テ燒死者モアリ、戰合程ニ曉ニ至マデ、四方ノ矢櫓勢樓ヨリ火移テ、堺一万間一字モ不殘同時ニ燒ケレバ、上蒼ヲ焦シ血ハ大海ヲ流ス、咸陽宮ノ燒テ、火ノ三月迄不絶ケルモ、角ト覺テ淺猿カリシコトヾモ也、

〔二水記〕享祿五年十二月廿二日、和泉堺北庄。。十五六日事歟、可尋、大涯燒亡、南庄三分一燒云々、財寶可惜之、燒死者數百人云々、

〔應仁後記中〕雪蔽事附畠山義豐自害事

畠山尾張守尙順ハ、和州奧ノ郡ニ隱レ居テ、年月ヲ送ラレケルガ、彼家人ニ木澤ト云侍有リ、○中略主人ノ敵ヲ伐亡シ、尙順ヲ本領ニ還シ入レバヤト、忠義骨髓ニ徹シ思ケルガ、木澤其頃、浪人ニテ落魄ノ身ナル故、軍用ノ儲無レバ不力及、泉州ノ堺ノ庄エ落行キ、商人ニ成テゾ歎キ居ケル、

〔續應仁後記二〕三好元長蒙晴元勘氣事

元長ハ堺ノ南ノ庄エ引籠ミ、某晴元異心無キ申シ分ケノ爲ニトテ、本取切リ僧衣ヲ著テ、法名ヲ海雲ト名乘リ、讃岐守之持ヲ賴テ色々陳謝ス、○中略晴元終ニ承引ナケレバ、讃岐守之持モ侘言仕兼テ晴元エ述懷シ、鬱憤ノ餘リニ、予此津ニ居テ詮無トテ、堺ノ庄ヲ引拂ヒ、同キ三月三日、阿波國エ下ラレケリ、是ヨリ堺ノ町中、何共無ク騷立テ、樣樣ノ雜說起シ程ニ、町中大小ノ小路ヲ指堅メ、何レモ通ヒハ無リケリ、

〔續應仁後記 八〕阿波御所義榮被任左馬頭事附三好松永取合事

松永急度思案ヲ廻ラシ、日來茶ノ湯ノ友ナリケル、堺ノ庄官大福者能登屋臙脂屋其外ヲ相頼ム、抑此堺ノ庄ハ大富有ノ所ニテ、三十六人ノ會合衆ト名付ケ、福者有テ此庄ヲ支配ス、中ニモ能登屋臙脂屋ハ又三十六人ノ内ノ長吏也、因茲三十六人ノ庄官相談シテ、三好家エ暖ヲ納ケル、

左馬頭殿被任征夷大將軍事附義次心替事

義次今茲十六歳、未ダ若冠也ト云ヘ共、器量有人ナレバ、能此諫ヲ聞受テ、態ト其色ヲ人ニ不見、今ノ陣所ハ地狹シト云ナシテ、同〇永祿十年二月廿六日、堺ノ北ノ庄村木町ノ木家ガ家エ宿替ヲシ給ヒ、緩々トシタル體ヲ見セテ、〇中略同月廿六日ノ夜、ヒソカニ木屋ヲ忍出テ、松永ガ宿所エ移ラレケリ、

〔當宮縁事抄〕左辨官下　石清水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絶處々付本所事、

宮寺領〇中略

和泉國　萬代別宮　蜂田庄　額助燈油〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔殿暦〕嘉承二年五月三日戊子、今日依日次宜、〇中略和泉國信達莊預兵部大輔師俊母、

〔賀茂注進雜記 神領下〕同〇壽永三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

和泉國　深日　宮作庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、惟可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔古文書類纂上〕處分狀後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分條々事〇中略

一家地文書庄園事

九條禪尼〇中略　家領〇中略　和泉國大泉庄〇中略

前攝政〇中略　家領　女院方〇中略　和泉國春木庄春日四季御八講被宛之〇中略

右大臣〇中略　新御領　和泉國日根庄　善興寺〇中略

建長二年十一月日　愚老御在判

〔金剛寺文書〕楠木正儀書狀

和泉國和田莊領家職分朝用事、止料所之儀、金剛寺一圓知行、不可有相違之由事、去正平九年十一月十八日綸旨如此、早任被仰下之旨、可被沙汰居寺家雜掌於下地候、恐々謹言、

四月十日　正儀花押

新判官殿

〔應仁後記下〕四國勢攻上攝州合戰事附前公方家御逝去事

同〇永正八年秋七月細川右馬頭政賢ヲ指南トシ、澄元ト兩大將ニテ、多勢ヲ催シ、渡海シテ和泉國マデ攻上リ、深井ノ庄ニ陣取タリ

〔信長公記十〕天正五年二月十五日、信長公八幡より若江迄御著陣、十六日和泉の內香庄御陣取、國

中の一揆貝塚と云所、海手を拘へ舟を引付楯籠、翌日先陣の衆貝塚取懸可被攻干の所、夜に入、舟に取乗罷退候、少々退後の者討捕頸を香庄へ持來懸御目、

藩封

〔慶應元年武鑑〕岡部筑前守長寛帝鑑間朝散大夫　五万三千石　居城泉州南郡岸和田　江戸ヨリ百四十一里

城主小出播磨守秀政、同大和守吉政、右京大夫吉英、元和五、松平周防守康重、同周防守康映、寬永十七、岡部美濃守宣勝以後、代々領之、

渡邊丹後守章綱菊之間朝散大夫　一万三千五百廿石餘　在所泉州泉郡伯太　江戸ヨリ百三十九里

寬文年中ヨリ渡邊氏領之

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕和泉國○中略管三田四千五百六十九町六段三百五十七歩

〔伊呂波字類抄伊國郡〕和泉國管三○中略　本田千五百六十九町六段上二日下一日

〔拾芥抄中末本朝國郡部〕和泉(中略)田四千百二十六町

〔新撰類聚往來下〕和泉泉州　三郡(中略)田數一万(万恐千誤)五百六十九町

〔日本鹿子二〕和泉國　三郡、大下國、○中略　知行高十三万八千七百九十石

〔和漢三才圖會七十六和泉〕三郡　高十三万八千七百五十石

〔官中秘策一〕和泉國

一石高拾六万千六百九拾貳石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

和泉國御料私領　一高拾七万貳千八百四拾七石九斗八升六合七石、一本二五石二作ル、

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

和泉國正稅公廨各八万束、國分寺料五千束、文殊會料一千束、卷尾寺觀音堂料五百束、勅旨庄御稅一千束、修理官舍料一万束、池溝料二万束、救急料三万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕和泉國○註略管三(中略)本稻廿二萬七千五百束

〔延喜式内藏十五〕諸國年料供進 ○中略 蘭笠卅六枚 和泉國調

畿内國營田舂米六百五十四斛七斗三升二合(中略)和泉國十五斛八斗六升七合

〔延喜式民部二十三〕交易雜器 ○中略 和泉國酒槽七隻、長各九尺、廣二尺七寸、手長一尺三寸、圓槽二隻、槽二口、臼三腰、杵六枚、輿籠十一口、匏一百五柄、置簀廿枚、○中略

交易雜物 ○中略 和泉國 小麥廿五石

〔延喜式主計二十四〕和泉國 行程、上二日、下一日、調、蘭笠卅六枚、蘭筥十合、大五合、小五合、陶池由加三口、瓱二口、𤭖百十口、缶百卅二合、由加十六口、脚短坏八十六口、酒壺八口、筥坏廿六口、多志羅加十二口、大山瓱八口、叩瓮七十七口、水瓮九十二口、大瓱十二口、洗盤廿口、中瓱九十口、平瓶百十口、酒壺十四口、等呂須伎九十二口、缶蓋五十七口、高盤百四口、小瓱九十八口、山瓱二口、臼九十六口、水瓶九十九口、酒埀百六口、祭壺四百廿九口、短女坏九十二口、小坏百卅五口、𤭖八口、片盤百六口、燈盞十二口、自餘輸レ錢、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子 ○中略 和泉國 楊梅子一擔

〔延喜式内膳三十九〕造雜味鹽魚廿石六斗、和泉國網曳御厨所レ進、料商布十六段、信濃麻百斤、鹽二石、○中略

年料 ○中略

和泉 網曳、

〔庭訓往來〕備後酒、和泉酢、

〔毛吹草三〕和泉

南庄堺纈紗綾　撰糸　髮モジ　町離 鹿相物也　茶柄杓　風爐立土器　茶酌　出齒庖丁　酒　醬

油溜　返魂丹　付硫磺　目藥貝　貝香　海羸バイ　烏貝　前魚 其品多不レ及レ注レ之、就レ中鯛ノナリ、餘國ニカハル、　湊壺鹽

同土物 鹽壺蠟燭壺等、當所ニテヤク也、　屏張紙　芥子　防風　紬松瓜　海會寺鬼煎餅　コキ槲　中濱塗木

履　常器椀　數奇屋天井莚　馬尾篩　土田燒物(底取、灰ホウロク等、)　光瀧(クハウノタキ)白炭　上村笠　鳥取通　茶　磨(表相物也)　貝塚麥粉　大島草履　鍛冶炭　天川烏子(紛チフキメル紙也)　岡田干鮓　石津神馬藻　瓦　ヤスマサ飴　花落米

〔和漢三才圖會 七十六 和泉〕和泉國土產

金紗　撰絲絹　鐵炮　朱座(柳町)　白粉(小西)　尻切履(櫻町)　酢　傘　庖刀　瓜(植松)　鋼　金魚(以上堺津多出之)　湊紙　壺燒鹽　花鹽(津田)　編笠(松村)　雞卵紙(阿間川)　白炭(横山)　壺(蜂田)　觽(近木コキ)　旅(富木トノキ)　笠(上村)　鰈(岡田)　煙草(新田)

人口

〔官中秘策 一〕和泉國(○中略)

一人數貳拾万七千九百五拾貳人

内　拾万四千七百貳拾三人　男

　　拾万三千貳百貳拾九人　女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年(○中略)

御料私領

一人數貳拾万貳千貳百八拾三人　高拾六万千六百九十貳石餘　和泉國

内　拾万三千百九拾三人　男

　　九万九千九拾人　女

弘化三丙午年諸國人數調(○中略)

御料私領

一人數拾九万七千六百五拾六人　高拾七万貳千八百四十七石餘　和泉國

内　九万九千貳百七拾九人　男

　　九万八千三百七拾七人　女

風俗

〔人國記〕和泉國

和泉國之人ハ、風俗且而實儀ナク、最千人ニ一二人ハ實儀之人モアルベケレドモ、都而物之上手成モノ無之、增而名人ト云ホドノ者鮮シ、末世モサ有ベシ、本此國ハ河內ト紀伊國ヨリ割リ出シタル國ト聞ク、先其風俗ヲ見ルニ、人ヲタブラカシ、出家沙門他國之商賣之人等、金銀等ヲタクハフルト見ル則ハ、關東之人之人ヲ殺害スルノ類ハ無フ而、懐ケテ後ニ品ヲ以テカドワカス等之

風儀ナリ、根本ニ實儀スクナキガ故ニ、譬バカミソリノハガチ惡キヲ如見ガ也、人前行跡ハ如形見ユルトイヘドモ、彼ノカミソリノハガチ少ナキガ如キ故ニ、後ニハ可用樣ナキニ等シ、タマタマ實儀ノ人有トイヘドモ、國風ノ垢ヲ削ル人無キ故ニ、身持墜弱ニ而、踏シムル心モ後ハ大形失フ也、石津神馬藻鹽船乘リハ餘國ニ勝レタリ、是國ヲ傾ケン事ハ五日之內也、威ヲ高ク振、卒法ヲ以テ是ヲ勵バ不可經數日也、次ニ癩瘡人多シ、篠田明神ニ野狐多シ、此狐人ヲ能クタブラカス事ヲ得タリ、サレバ此國ハ唯野狐ニ衣服ヲシタルニ似タリ、不穎也、別而和泉ノ府日根惡シ、

〔和泉志　一〕風俗　民心柔和、好尙華麗、舊時堺府、賈胡輻湊、蜀錦齊紈、家藏人玩、奢靡爲習、義氣日衰、海濱漁獵豪富相雜、佐野賀祥寺、多造巨舶、行商四方、其細民千里游漁、妻孥守室、雖有汚行、亦不甚怪、山民淳厚、敬祀祖考、日根郡菟才田村民、以農隙出大坂及堺、爲人舂米、凡雇傭者、雖出他邑、總呼曰菟才田、其歌謠、亦謂之菟才田曲、又樫井村民、善伐木、謂之杣人、每春二月、負斧入山林、季冬歸家、又鰯取莊朝代村民、就山中閑地、建祠祭祖、除夜酒掃、元旦納拜、而後賀里甲、又日根莊總山有小祠、是祭田村氏者、田村乃岸和田小吏、愛民如傷、以濟患興利爲心、卒後士人追想建祠、其淳風可以觀云、

名所

〔日本鹿子　二〕和泉國中名所之部

信太森　此森ハ楠也、歌にも千枝の秋かせなど、よめり、〇中略

吹居浦　紀伊丹後、同名有、

〔萬葉集　六〕春三月幸于難波宮之時歌

從千沼回、雨曾零來、四八津之泉郞、網手綱乾、有沾將堪香聞、〇〇〇〇〇

雜載

〔延喜式　二十八兵部〕諸國健兒〇中略　和泉國廿人

攝津國

攝津國ハ五畿內ノ一ニシテ、東ハ、河內、西ハ播磨、南ハ和泉及ビ海ニ面シ、北ハ山城、丹波ニ接

名稱

シ、東西凡ソ十二里、南北凡ソ九里アリ、此國ハ初メ浪速國ト云ヒ、後ニ津國ト云ヒシガ、天武天皇ノ六年ニ始テ、攝津職ヲ置キ、大寶ノ制、攝津職ヲシテ津國ヲ帶セシム、桓武天皇ノ延暦十二年職ヲ停メテ國ト爲シ、國府ヲ西生郡ニ置キ、住吉、百濟東生、西生、島上、島下、豐島、河邊、武庫、菟原、八部、有馬、能勢ノ十三郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、住吉、百濟二郡ヲ東成郡ニ併セ、菟原八部二郡ヲ武庫郡ニ併セ、島上島下二郡ヲ合セテ三島郡トシ、豐島能勢二郡ヲ合セテ豐勢郡トシ、新ニ大阪神戸ノ二市ヲ設ケテ、大阪府及ビ兵庫縣ヲシテ之ヲ分治セシム、

〔倭名類聚抄國郡五〕攝津

〔運歩色葉集津〕攝津國　〔同勢〕攝州　〔同那〕難波攝州

〔饅頭屋本節用集天地門〕攝津州攝

〔日本風土記國名一〕攝津子拔國

〔倭訓栞中編十七〕なには　難波と書り、神武紀仁德紀に見えたるは攝津也、式部卿藤原宇合の歌に、むかしこそ難波居中といはれけめ今は京引みやこびにけり、○下略

〔倭訓栞中編十五〕つのくに　津ノ國なり、今攝津と書、字彙に攝靜謐也、

〔玉勝間二〕攝津

津國を攝津といふは、もと國の名にはあらず、難波津をつかさどれる官ノ名なり、難波は古京師に准へて、京職と同じく攝津職をおかれたる、これむねと難波によれる官にして、津國の事をも兼掌れり、職員令に、攝津職帶津國とあるをもて心得べし、そのかみ國のことをも攝津國と書る、これも攝津職の掌る國といふ意なり、さて攝字は、難波と津國とを攝て掌るよしなり、靜謐の意ぞなどいふはあらず、かくて延暦十三年停職爲國とありて、それより其官、諸國司の列となれり、然

位置

れども字はなほもとのまゝに、攝津とかゝれたる故に、後の人皆これをもとより國名と思ふめり、さて文には攝津と書ながら、職にて有しほども、口によぶ詞には、たゞ津のつかさとぞいひけむ、さらではよぶべきやうなし、國の列になりてはさらなり、然るを俗にせツつとしもよむはいふにたらぬひがことなり、今の世にも津の國といひ、攝津守などをも、つのかみとよむぞ正しかりける、むかし女房の名にも攝津といひし有て、撰集などにも出たり、これもたゞ津とこそはよびつらめ、續世繼に、津のごとぞあるごは伊勢のごなどいふごなり、

〔諸國名義考 上〕攝津

和名抄に訓法なし、たゞ津とのみよむべきか、名義は卽津なり、津は同抄に、四聲字苑云、津渡水處也、唐令云、諸渡關津及乘船筏上下經津者、皆當有過所(和名)とあり、然るを神武天皇御代に、奔潮太急にあひて、浪速國と云しを、後に訛て難波といへるよし、國史に見えたり、其後仁德天皇御代に皇都となし給ひて、高津宮と號く、さて高津とは岸高ければにや、下河邊長流が續歌林良材集に、此國風土記を引て、天稚彥に屬て下れる神、天探女磐船に乘て爰に泊る故に、高津と號くといへり、〇下略

〔屠龍工隨筆〕みよし野とは、吉野山の峯をいゝ、〇中略浪花も、もとなみはやの國といゝぬれば、同じ津の國とても江によりたる今の大坂のあたりを、ことさらにいゝたるならん、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

攝津大坂、(長堀留田屋町)極高三十四度四十分、經度西一十五分、從東都(東海道)一百四十六里三十四町一十間、

攝津兵庫(新在家町)極高三十四度四十分、經度西三十二分半、從東都(東海道、淀西國海道、)一百五十二里二十七町三十八間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

攝津　大坂　三四度四〇分〇〇秒　　西宮　三四度四四分三〇秒

兵庫　三四度四〇分〇〇秒　　尼崎　三四度四四分〇〇秒略中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略中

攝津　大坂　西〇度一五分〇〇秒　　尼崎　西〇度一九分二五秒

疆域

〔攝津志　一〕疆域　東至河州界、西至丹播二州界、南至海濱及泉州、北至山丹二州界、東西十五里餘、南北十五里餘、

〔日本地誌提要　七攝津〕疆域　東ハ河內、西ハ播磨、南ハ和泉及海、北ハ山城丹波ニ至ル、東西凡壹拾貳里餘、南北凡九里、

〔續日本紀　十四聖武〕天平十三年四月辛丑、遣從四位上巨勢朝臣奈氐麻呂、從四位下藤原朝臣仲麻呂、從五位下民忌寸大楫、外從五位下陽侯史眞身等、撿按河內與攝津相爭河堤所、

〔續日本紀　三十九桓武〕延曆七年三月甲子、中宮大夫從四位上兼民部大輔攝津大夫和氣朝臣淸麻呂言、河內攝津兩國之堺、堀川築堤、自荒陵南導河內川、西通於海、然則沃壤益廣、可以墾闢矣、於是便遣淸麻呂勾當其事、應須單功二十三万餘人給粮從事矣、

地勢

〔易林本節用集　下〕攝津攝州　上管十三郡、二日半、帶皇城而抱西海、南暖北寒、故五穀先熟、魚鹽繁、大上國也、

〔日本鹿子　三〕攝津國　十六郡、大上國、四方二日半、京ヨリ未申、河內ヨリ西也、西南ハ海、北ハ山也、

〔攝津志　一〕形勝　海陸都會、天下要衝、咽喉西州、闔域皇州、郡峯右繞、平野左連、淀水貫內、江海抱外、山川明麗、田野壤腴、海濱廣斥、澤國佳致、

〔攝津志 一〕路程 大坂至京師十二里有半、至江都百三十二里、至尼崎三里、至兵庫十里、至高槻六里、至播州明石十五里、至丹州篠山十五里、至山州淀八里、至河州狹山五里十八町、至堺三里、至泉州岸和田七里、官道 西國路 關戶山州乙訓郡界 至芥川驛一里三十一町、其所歷則曰東大寺、曰廣瀨、曰櫻井、曰神內、曰梶原、曰丹波谷、曰下村等、芥川至宿川原驛一里、所歷曰新町、曰宮田、曰上野、曰大田、曰十日市、曰耳原、曰中川原、曰下居等、宿川原至瀨川驛二里十二町、所歷曰道祖本、曰小野原、曰今宮、曰西宿、曰芝村、曰東稻、曰西稻、曰落村、曰西牧、曰牛町等、瀨川至崑陽驛一里三十町、所歷曰石橋、曰今在家、曰下河原、曰大鹿、曰千僧等、崑陽至西宮驛二里二町、所歷曰寺本、曰廣田、曰中村等、西宮至兵庫驛四里五町、所歷曰打出、曰蘆屋、曰片町、曰住吉、曰河原、曰味泥、曰岩屋、曰生田、曰神戶、曰二ノ茶屋曰走水等、兵庫至濱須磨一里十八町、所歷曰西代、曰東須磨、曰西須磨等、濱須磨至界溪播州明石郡界十五町關戶至此通計十五里二十二町 紀州路、一名京路 今市河州茨田郡界 至京橋驛一里十四町、所歷曰森小路、曰關目、曰內代、曰野江、曰野田町、曰片町等、京橋至堺大小路泉州大鳥郡界 二里二十三町、所歷曰大坂、曰今宮新家、曰天下茶屋、曰住吉新家、曰安立町等、今市至此通計四里餘、 龜山路 國界嶺丹州桑田郡界 至吉野六町、吉野至木津四里十九町、所歷曰倉垣、曰山內、曰宿野、曰大里、曰栗栖、曰今西、曰垂水、曰神山、曰槻並等、木津至道場川原四里二十九町、所歷曰長谷、曰大原野、曰波豆、曰山田、曰桑原、曰田中、曰鹽田等、道場川原至唐櫃一里、所歷曰下部、名來等、唐櫃至衝原四里、所歷曰上谷上、曰下谷上、曰原野、曰福地、曰中村、曰東下、曰坂本等、衝原至國界嶺播州三木郡界 二十五町、丹州界至此道計十五里七町 南都路 玉造大坂 至深江河州澀川郡界 三十町、所歷曰中道、曰本莊、曰大今里等、間道 喜連路 高麗橋至平野二里、歷天王寺、桑津、平野至國界河州澀川郡界 十三町、歷喜連、又有自平野出竹淵正覺寺二村之徑路、 古堤路 京橋至放出河州茨田郡界 一里、所歷曰片町、曰野田町、曰蒲生、曰今福等、又有自京橋經過森小路等數村、至般若寺國界一路、謂之世木路、以出茨田郡世木村也、路程同上、 鳥居嶺、又名清坂嶺、桑田郡界、天滿橋至長柄濟二十六町歷國分寺南長柄 濟至吹田濟一里十一町、所歷曰柴島、曰新家、曰下新莊、曰上新莊等、下濟至官道二里二十五町、所歷曰小路、曰七ッ尾、曰市場、曰宇野邊、曰下穗積、曰中穗積、曰上穗積等、官道至清坂二里二十五町、所歷曰福井、曰國見、曰忍頂寺、曰下音羽等、天神橋至此通計七里、 吉野嶺、桑田郡界 天神橋至長柄濟二十八町、濟至小曾根濟一里六町、所歷曰藥師堂、曰南方新家、曰崇禪寺濱、曰蒲田、曰十八條等、濟至池田三里七町、所歷曰小曾根、曰西願寺、曰染香、曰櫻塚、曰岡町、曰新免、曰刀根山、曰石橋、曰井口堂、曰新家、曰尊鉢、曰才田等、池田至吉野四里三十二町、所歷曰木部、曰吉田、曰吉川、曰黑川、曰野間、曰地黃、曰倉垣等、吉野至嶺六町、天神橋至此通計十里八町 天王嶺丹州多喜郡界 高麗橋至十三濟一里、歷北野三番茶屋 濟至神崎濟一里、所歷曰堀、曰三津屋、曰加島等、濟至小濱驛三

里三町、所歷曰小中島、曰下食滿、曰上食滿、曰綿寺、曰伊丹、曰廣大寺、曰大鹿、曰安倉等、　小濱至生瀨驛三十一町、所歷曰米谷、曰川面、曰安場等、生瀨至三田三里十八町、所歷曰名鹽、曰平田、曰道場、曰川原、曰下宅原等、又自生瀨歷舟坂至湯山二里、謂之湯山道、　三田至母子四里、所歷曰三輪、曰志手原、曰尼寺、曰小野、曰乙原等、母子至嶺六町、高麗橋至此通計十三里二十三町、喜連路已下、住自大坂、　長坂嶺乙訓郡界、至高槻三里、歷大澤、尺代、　横縱嶺桑田郡界、至高槻三里、歷原村、郡芥川村等、　關明神越桑田郡界、至余野九町、余野至池田三里十八町、所歷曰木代、曰川尾、曰上止止呂美、曰下止々呂美、曰伏尾、曰東山、曰中川原、曰木部等、　攝歷峠一名天王村越、又名福住路、多喜郡界、其路嶮巇、殆難攀陟、峠至天王十七町、天王至池田六里二十五町、所歷曰山邊、曰山田、曰今西、曰平野、曰山原、曰西畝野、曰横山、曰古江等、池田至此七里六町、又有一徑、曰猩巻峠、又杉生有杓子嶺、柏原有七石嶺、小柿有氷柱嶺、嶮巇滑、不通馬牛、此外通于後川村、

日出坂嶺多喜郡界、至日出坂六町、日出坂至井澤二里、所歷曰本庄、曰波田、曰四辻、曰長坂町、曰廣野等、　井澤至三田一里、所歷曰加茂、曰福島、曰川防、曰三輪等、　駒丸嶺多喜郡界、至上相野二十町、　三國嶺丹播攝三州交界、仍名、路通丹州小津村、至大川瀨二十九町、山路嶮、　大川瀨至井澤二里五町、歷下內神、　平松嶺播州加東郡界、至大川瀨十二町、　注連引越三木郡界、至大川瀨九町、　二本松嶺三木郡界、至井澤三十二町、　赤松嶺三木郡界、至岩谷四町、岩谷至道場川原一里二十五町、所歷曰上津、曰上津下、曰上宅原、曰下宅原等、　屏風嶺明石郡界、至屏風八町、屏風至湯山二里二十八町、所歷曰深谷、曰附物、曰吉尾、曰田尾寺、曰下山口、曰上山口、曰中野等、　鵯越明石郡界、至兵庫三里、歷小河藍那、　白川越明石郡界、至白川七町、白川至兵庫二里、歷長田、又自藍那歷少河、出播州木津村、謂之小河越、　日野嶺明石郡界、至多井畑八町、多井畑至東須磨一里、長坂嶺已下、來從郡界、　津戶中道　西宮至吹田五里十三町、所歷曰上今津、曰四軒茶屋、曰東新田、曰尼崎、曰長洲、曰淨光寺、曰神崎、曰戶內、曰莊本、曰牛立、曰小曾根、曰廣芝等、　吹田至芥川四里十五町、所歷曰小路、曰七尾、曰市場、曰宇野邊、曰茨木、曰戶伏、曰富田、曰西五百住、曰東五百住等、　野香越　八幡至唐櫃三里、歷篠原、　鳥原谷越　兵庫至西下三里、歷鳥原谷、曰天王谷越、又自兵庫至下谷上三里、歷天王谷、越路、津戶中道以下、國內行路之謂、

大坂至尼崎三里、至堺三里、至兵庫十里、至淡州岩屋十四里、至泉州谷川十四里、至紀州和歌山十八里、至阿州北泊二十二里、至播州室二十六里、至讃州高松三十三里、至備之前州牛窓三十五里、至備之後州鞆五十五里、至豫州松山八十八里、至藝州嚴島百里、至土州高知百八里、至豐之後州臼杵百二十八里、至豐之前州小倉百三十六里、至防州岩國百四十里、至肥之後州熊本百五十八里、至筑之後州久留米百五十九里、至筑之前

州福岡、百六十八里、至壹州勝本、百九十五里至日州飯肥、二百十二里、至對州府中、二百四十五里至武州江都、二百四十八里、至肥之前州長崎、二百七十里、至薩州鹿兒島、二百八十一里、

〔日本鹿子三〕攝津國

大坂ヨリ西國所々エ之船路附リ攝津國中之分道法付

大坂ゟ傳法へ　一里　傳法ゟ尼崎へ　二里　尼崎ゟ鳴尾崎へ　一里　尼ケ崎城あり、大物の浦といふも此所なり、大坂よりいぬい也右の方にみかげ、てつかいがみね、ひよ島ごへ、一の谷みゆる、　鳴尾崎ゟ西ノ宮へ　二里　西宮ゟあふぎへ　一里　あふぎゟみかげへ　一里　御影ゟわきの濱へ　一里　わきの濱ゟかうべへ　一里　かうべゟ兵庫へ　一里　兵庫ゟ須磨へ　二里　此間に平の淸盛入道のつきし經の島あり、爰に淸もり入道の影像有、福原舊城郭の跡あり此間わだの御崎あり、　須磨ゟ一の谷へ　一里　一の谷ゟ鳥崎へ　一里　平家の城跡あり、かねかけの松山ふもとの野べ、海邊にあつもりのせきたうあり、攝州と播州の堺なり、はりまの方には松原あり、此さかいに双方より松をうへたるよし、相生のまつといふて大木あり、左の方にあわぢしま山みゆる也、

〔日本實測錄沿海一〕從大坂沿海至赤間ケ關

攝津國西成郡千島新田木津川湊口　三里三十五町六間（至安治川口、一里二十町五十五間、従安治川口、至中津川口、三十三町四十五間、従中津川口、至神崎川口、一里十六町一十二間、）一　川邊郡初島新田（沿川、至西川村、一里六町二十五間半、）　二里二十町五十一間　武庫郡西宮宿（至街道七町五十二間）　二里三十五町二十七間　兎原郡大石村、三十四度四十二分半、　二里六町三十七間（至生田村一里三町二十五間）　八部郡兵庫津新在家町、三十四度四十分、　二里五町三十間　西須磨村　二里三十一町一十九間（至一ノ谷八町三十間、従一ノ谷至二ノ谷五町三十間、従二ノ谷至國界三ノ谷四町二十二間、従三ノ谷至舞子ノ濱、一里一十九町二間、）　播磨國明石郡大藏谷

官驛

〔續日本紀五元明〕和銅四年正月丁未、始置都亭驛、〔○中略〕攝津國島上郡大原驛、島下郡殖村驛、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〔○中略〕

攝津國驛馬〔草野、須磨、各十三疋、葦屋十二疋、〕

〔日本紀略十二朱雀〕天慶二年十二月廿六日壬戌、備前介子高於攝津國須岐驛、爲前伊豫掾藤原純友、爲海賊首〔○以下四字恐分注〕被圍、遂放矢合戰、隨兵員少、子高乞降、卽縛子高、子高太郎爲賊被殺了、

建置沿革

〔日本國郡沿革考二畿内〕攝津　古攝津職延暦十三年、停職爲國、〔據和名抄、類聚三代格、爲十二年三月、〕上國、管十二郡、〔延喜式等〕十三郡、九百五十五村、

島上〔六十五村、古三島郡、見日本紀、伊豫風土記作御島、分爲上下、未詳在何時、谷川士清曰、今島上、島下、豐島之三郡、古三島郡之地、〕　島下九十九村　豐島〔九十三村、古國府、天長二年四月、遷國治於豐島郡家以南地、先是未詳在何地、蓋莫定處也、承和十一年十月、國司奏、依去天長二年正月及承和十一年十月勅旨、欲定河邊郡以爲國治、然以邦弊民不堪役、故請以鴻臚館爲國治、古事記、手島遠、則尚子此地之爾、〕　有馬九十村　八部〔四十五村、古事記云、若郎女之御名代、定八田部、和名抄、里名部、拾芥抄、共作八田部、〕

兎原五十一村　川邊〔百九十三村、延喜式等、作河邊、〕　武庫〔五十村、神功紀、務古水門、卽此地、〕　西成〔百二十二村、延喜式等、作西生、和名抄、里名部、作西成、拾芥抄、以是爲國府、〕　東成〔六十二村、延喜式等、作東生、〕　住吉〔四十九村、古事記、墨江、萬葉集清江、卽是、〕　能勢〔三十六村、和同六年九月、割河邊郡玖左々村、爲能勢郡、玖左々村、續略紀、作來狹々村、〕

百濟〔延喜式等、共載、廢置未詳、〕　雄伴〔見攝津風土記、廢置未詳、延喜式等不載、〕

〔攝津志一〕建置沿革　舊古曰浪速國、〔或作浪華〕神武天皇、舳艫東征、方到于此、適會海潮太急、因以名國、逮應神天皇之時、始有攝津之號、以萬國海舶會于此也、仁德天皇元年春正月、都難波居高津宮、孝德天皇大化元年十二月、遷都長柄豐碕、天武天皇六年冬十月、置攝津職、天平十六年二月、以難波宮定爲皇都、十七年九月、復還于平城宮、延暦十二年三月、罷攝津職、爲國司、天長二年三月、以江南四郡隷和泉國、夏四月、遷國治於豐島郡家以南、閏七月、以江南四郡還附於本國、承和十一年十一月、以鴻臚館爲國府、建武中河内守楠正成、兼守本國、延元中赤松範資掠略河西之地、文和元年、佐佐木秀詮代之、

應安七年使細川頼之兼守護、明應中政元強梁、二子閲牆、家臣瓜裂、各結黨與、相爲仇讎、若池田伊丹能勢有馬諸士、互舉更興、荒木占其上頭、遂補攝津守、而斃於織田侯、若守護代藥師寺秋庭、皆有名而無實也、初明應中、釋兼壽建本願寺于大坂、天正初光佐營爲城、號曰石山、相結黨與、抗衡諸侯、織田侯使諸將攻之、光佐逃于紀州雜賀、天正十三年、豐太閤益拓其城、元和中、廢而復興焉、

〔日本地誌提要攝津七〕沿革　古ヘ浪速國ト云、仁德天皇高津宮ニ都ス、(今東成郡高津小橋)孝德天皇亦長柄豐崎宮ニ都ス、(西成郡長柄村)天武天皇六年、攝津職ヲ設ケ、延暦中國司ニ改メテ、府ヲ西生郡ニ置ク、(府址未詳、續日本後紀承和十一年、鴻臚館ヲ以テ府トスルノ語アリ、館址今東成郡玉造ノ南、眞田山ニアリト云、)治承中、平清盛、安德天皇ヲ奉ジテ、福原ノ都(今兵庫)ニ徙ル、未ダ半歳ナラズ舊都ニ復ス、元暦元年、平氏再ビ天皇ヲ奉ジテ此ニ居リ、幾バクモナクシテ讃岐ニ奔ル、鎌府ノ建ツ、大内惟義ヲ以テ守護トス、建武中興、楠氏本州ノ守護ヲ兼ヌ、足利尊氏、赤松範資ヲシテ州疆ヲ侵略セシメ、後ニ佐々木秀詮ヲ守護トシ、應安中、管領細川頼之之ニ代リ、終ニ其管國トナリ、其臣藥師寺氏ヲシテ守護代タラシメ、頼之ヨリ六傳シテ政元ニ至ル、其義子高國、澄元、互ニ相閲ギ、池田伊丹諸族競ヒ起リ、或ハ澄元ニ屬シ、或ハ高國ニ應ジ、闔州分裂、永正五年、高國終ニ本州ヲ取テ尼崎城ニ居ル、享祿四年、高國澄元ガ子晴元ト、天王寺ニ戰テ敗死シ、地皆晴元ニ歸ス、天文ノ末、三好長慶、高國ガ義子氏綱ヲ奉ジテ州境ヲ侵シ、晴元ヲ逐ヒ、終ニ本州ヲ奪ヒ、同族ヲシテ芥川ニ居テ之ヲ守ラシム、永祿中、織田信長之ヲ降シ、地ヲ分テ伊丹親興、池田勝政、和田惟政ニ畀フ、元龜ノ末、惟政ヲ誅シ勝政ヲ逐ヒ、荒木村重ヲ以テ守護トス、天正七年、村重叛シ、伊丹城ヲ棄テ出亡、信長地ヲ以テ池田信輝ニ賜フ、豐臣氏、信輝ヲ轉封シテ、其地ヲ有シ、大坂城ヲ築キテ之ニ居ル、元和元年、豐臣氏亡ビ、德川氏其故城ヲ修シ、松平忠明ニ賜フ、同八年、始テ内藤信政ヲ以テ城代トナシ、戍士及騎歩卒ヲ置キ、攝河泉播政刑ヲ統シム、後奉行ヲ兵庫ニ置、又封ヲ本州ニ得者、尼崎(松平忠喬)高槻(永井直清)三田、(九鬼久隆)麻田、(青木一重)凡テ四藩、

王政革新、大坂ヲ以テ府トナシ、更ニ兵庫縣ヲ置キ之ヲ治ム、

〔日本書紀 三 神武〕戊午年二月丁未、皇師遂東、舳艫相接、方到難波之碕、會有奔潮太急、因以名爲浪速國、亦曰浪華、今謂難波訛也、(訛此云與許奈磨盧)

〔日本書紀 十 應神〕二十二年三月戊子、天皇幸難波、居於大隅宮、四十一年二月戊申、天皇崩于明宮、時年一百一十歲、(一云、崩于大隅宮、)是月、阿知使主等、自呉至筑紫、時胸形大神乞工女等、故以兄媛奉於胸形大神、是則今在筑紫國御使君之祖也、既而率其三婦女、以至津國、及于武庫而天皇崩之、

〔日本書紀 十五 清寧〕三年正月丙辰朔、小楯等奉億計弘計、到攝津國、使臣連持節以王靑蓋車迎入宮中、

〔日本書紀 二十九 天武〕六年十月癸卯、內大錦下丹比公麻呂、爲攝津職大夫、

〔令義解 一 職員〕攝津職(帶津國)

〔日本紀略 桓武〕延曆十二年三月丁亥、改攝津職爲國、

〔令集解 六 職員〕攝津職

延曆十二年三月九日官符云、廢停攝津職、爲國司事、右被右大臣宣偁、奉勅、難波大宮既停、宜改職名、爲國、其二季祿及月料並宜停止、

國府

〔伊呂波字類抄 都 國郡部〕攝津國(管十三 ○中略)　西成府

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕攝津(○中略)　西生府

〔日本後紀 十三 桓武〕延曆廿四年十一月乙酉、遷攝津國治於江頭、許之、

〔續日本後紀 十四 仁明〕承和十一年十二月戊子、攝津國言、依去天長二年正月廿一日、承和二年十一月廿五日兩度勅旨、定河邊郡爲奈野、可遷建國府、而今國弊民疲、不堪發役、望請停遷彼曠野、便以鴻臚館爲國府、且加修理者勅聽之、

郡

〔延喜式 二十二 民部〕攝津國上(管 住吉 百濟 東生 西成 島上 島下 豐島 河邊 武庫 菟原 八部 有馬 能勢 ○中略)　右爲近國、

〔倭名類聚抄　五國郡〕攝津國、〈略〇註〉管十三、〈略〇註〉住吉、〈須三與之〉百濟、〈久太良〉東生、〈比牟我志奈里〉西生、〈邇之奈里〉島上、〈志末乃加美〉島下、〈准上〉豐島、〈手島〉河邊、〈加波乃倍〉武庫、〈無古〉菟原、〈宇波良〉八部、〈夜多倍〉有馬、〈阿利萬〉能勢、〈乃世〉

〔拾芥抄　中末本朝國郡〕攝津　上　十三郡　住吉　百濟　東生　西生府　島上　島下　豐島　河邊　武庫　菟原　八田部　有馬　能勢　羽束〈無延喜式〉

〔易林本節用集　下〕攝津〈攝州〉上、管十三郡、〈略〇中〉住吉　百濟　東成　西成府　八部　島下　島上　豐島　河邊　武庫　菟原　有馬　能勢

〔和漢三才圖會　七十四攝津〕十三郡〈略〇中〉

住吉　百濟　東生　西生府　川邊　武庫　菟原　八田部〈一本、無田字、〉有馬　島上　島下　豐島

能勢〈拾芥抄、有羽束郡、而如十四郡、延喜式、倭名抄等、無羽東之名、〉今無百濟〈俗稱欠郡、多入東生西生、〉

〔攝津志　一〕建置沿革〈略〇中〉延喜式曰、攝津國管郡十三、曰住吉、曰百濟、〈今入住吉、東生二郡、如南田邊、北田邊、砂子、桑津、平野町西、皆舊百濟郡、〉曰東生、〈上古難波大郡、〉曰西成、〈上古難波小郡、〉曰島上、曰島下、曰豐島、〈以上三郡、上古渾曰三島、〉曰河邊、曰武庫、〈日本紀作務古、〉曰菟原、曰八部、〈或作矢田部、〉曰有馬、曰能勢、〈略〇下〉

〔皇國郡名志〕攝津國十二郡

住吉　●住吉　〈同社　〈安立町　●平野　〈大念佛　河泉堺郡

能勢　〈地黄　●吉野　〈妙見宮　丹界郡

東成　大坂御城ヨリ上町玉造天王寺茶臼山　河界淀川ニ添

西成　大坂船場島ノ内　●曾根崎　●江口　●長柄　大坂西海ニ向

島上　［高槻］　〈芥川　礒島　丹城界ヨリ淀川ニ至

島下　〈吹田　〈勝尾寺　茨田　〈郡山　●箕見　●清坂　丹界郡

豐島　〈瀬川　〈池田　〈清明塚　國中郡

河邊(カハノベ)　尼崎　〈神崎　●柏原　●伊丹　●大井　〈寬陽　丹界ヨリ海ニ貫　●小濱　〈銀山　●國サキ

武庫(ムコ)　〈西宮　●中村　△蛭子社　海ニ付郡

菟原(ウハラ)　●生田　●ミカゲ　△布引　右瀧井

八部(ヤタベ)　〈兵庫　△スマ寺　●田井畑　△アツモリ塔　●小川　●廣野　播界海付　△龍ノ塒　△生田社　三ニ一ノ谷

有馬(アリマ)　●岩谷　●生瀬　●大川　●塩子　セ　●新町　丹播界　〈湯本町　△温泉　●青坂　〈三田

舊有二百濟郡一、今省レ之、

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ山城國舊郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕攝津

六國史	古事記以下諸書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書古文書	郡名考	天保郷帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
難波大郡　難波郡　難波小郡　西成		東生(ヒガシナリ)	同	同	同　東成	同(ヒガシナリ)	同	同	同(ヒガシナリ)	同
		西成(ニシナリ)	西生	同	同　西成	同(ニシナリ)	同	同	同(ニシナリ)	同
		住吉(スミヨシ)	同	同	同	住吉(スミヨシ)	同	同	同(スミヨシ)	同
		百濟(クダラ)	同	同	闕					

	手島/豊島	島上	島下	能勢	河邊	武庫	菟原	八部	有馬
		三島紀				務古紀 武庫紀			有間紀
	手島							矢田部	
管十三	豊島(テシマ)	島上(シマノカミ)	島下(シマノシモ)	能勢(ノセ)	河邊(カハノベ)	武庫(ムコ)	菟原(ウバラ)	八部(ヤタヘ)	有馬(アリマ)
同	同(手島)	同(之末乃加美)	同(之末乃之毛)	同(乃世)	同(加波之倍)	同(無古)	同(宇波良)	同(夜多倍)	同(阿利万)
十三郡	同	同	同	同	同	同	兎原	八田部	同
	同(國元知)	同(國元知)	同(國元知)	同(國元知)	河邊(國) 川邊(知元)	同(國知元)	同(國元知)	矢田(國) 八部(知元)	同(國元知)
十二郡	同(テシマ)	同(シマカミ)	同(シマシモ)	同(ノセ)	川邊(カハヘ)	同(ムコ)	同(ウハラ)	八部(ヤタヘ)	同(アリマ)
同	同	同	同	同	同	同	菟原	同	同
同	同	同	同	同					
同	同(テシマ)	同(シマカミ)	同(シマシモ)	同(ノセ)	河邊(カハノベ)	同(ムコ)	同(ウメラ)	同(ヤタベ)	同(アリマ)
同	同	同	同	同	川邊	同	兎原	同	同

〔續應仁後記八〕阿波御所義榮被任左馬頭事附三好松永取合事

高屋ノ城ヨリ馳向フ寄手ノ三好勢、先ヅ總大將左京大夫義次、相從フ輩、〇中略攝津上。郡下。郡衆、〇下略

住吉郡

〔攝津志二〕住吉郡東至河州丹北、八上三郡界、西至海濱、南至泉州大鳥郡界、北至東生西成二郡界、

〔古事記上〕其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、墨江之三前大神也、

〔古事記傳六〕墨江之三前大神、墨江は津ノ國の住吉をいへるなり、住吉を須美興志と唱ろは、後世のことにて、那良のころまでは、須美能延とのみ云り、まづ此記には墨江とかき、書紀万葉には、住吉と書ても須美乃延とよみ、又万葉に墨之江、清江、須美乃延など有て、須美興志と云ることは一つもなし、

〔釋日本紀六述義〕住吉大神〇中略

攝津國風土記曰、所以稱住吉者、昔息長足比賣天皇世、住吉大神現出、而巡行天下、覓可住國、時到於沼名椋之長岡之前、前者今神宮南邊、是其地、乃謂、斯實可住之國、遂讚稱之云、眞住吉住吉。〇住吉二字原脫、據一本補。國、乃是定神社、今俗略之、直稱須美乃叡、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年八月辛未、攝津國住吉郡人外從五位下依羅我孫忍麻呂等五人、賜依羅宿禰姓、

〔法隆寺緣起資財帳〕合墾田地壹伯貳拾五町

攝津職住吉郡廿五町〇中略

天平寶字五年十月一日　寺主法師隆信〇下略

百濟郡

〔和漢三才圖會七十四攝津〕西生郡

按、昔百濟郡、有住吉郡之北、何時乎失其名、俗稱欠郡、木津、難波、勝間、今宮、西高津等是也、今屬西生郡、湯屋島、喜連、田邊、砂子、山內、寺岡、奥村、大豆塚、淺香、天王寺、阿倍野、新家、舍利寺、林寺、平野町、東高津等、百濟郡爲欠郡、今屬東生郡、但天王寺東門東、有百濟寺舊地、

〔續日本紀 桓武四十〕延暦十年八月壬子、攝津國百濟郡人正六位上廣井造眞成賜姓連、

〔續日本後紀 仁明一〕天長十年四月己卯、以攝津百濟郡荒廢田卅七町野、賜源朝臣勝、

〔細川兩家記〕高國川○細方の乘切まけて、大將分皆々討死する、雜兵以下三百餘人死するなり、殘る勢はいづみの境へ漸々逃入也、然ばその日七月十三日○永正八年に、澄元川○細方、欠郡中島まできり上る、○中略

一同文○天十二年十月十二日に、氏綱川○細欠郡内喜連杭全と云處へ御出張候へども、泉州横山合戰玉井總じて引退候間、同十九日に則氏綱も御歸陣也、然ば世上しづか也、

〔細川兩家記〕同年七月○永祿二廿九日に南河内喜連杭全と云處へ、三好慶○長方又陣替候也、

東生郡

〔攝津志 三〕東生郡 東至河州澁川、若江、茨田三郡界、西北至西成郡界、南至住吉郡界、

〔聖德太子傳曆 上〕推古天皇元年四月(中略)本願緣起云、(中略)法華勝鬘兩部經典、六節講演、其供養料、以東生郡陸箇坪水田應輪物、獻供而已、○下略

〔續日本紀 聖武十一〕天平六年三月丁丑、免供奉難波宮東西二郡今年田租調、自餘十郡調、

〔東大寺小櫃文書 上〕東大寺三綱牒　攝津職

家壹區地參町陸段貳伯肆拾玖歩 東生郡三町三段今校壹百十五步 西成郡地三段二百卅九步○中略

天平寶字四年十一月十八日 名○署略

〔今昔物語 二十〕攝津國殺牛人依放生力從冥途還語第十五

今昔攝津ノ國東生ノ郡、撫凹ノ村ト云フ所ニ、住ム人アリケリ、

西生郡

〔攝津志 四〕西成郡 東至東生郡及河州茨田郡界、西至海濱、南至住吉郡界、北至島下豐島二郡界、

〔東大寺正倉院文書 十四〕攝津國正稅帳

西成郡

天平七年定穀壹萬貳仟貳伯貳拾肆斛陸斗陸升漆勺伍撮

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲三年五月己丑、攝津國豐島郡人正七位上井手小足等十五人、賜姓秦井手忌寸、西成郡人外從八位下秦神島、正六位上秦人廣立等九人秦忌寸、

島上郡

〔攝津志 五〕島上郡 東南至淀河、西至島下郡界、北至山州乙訓郡及丹州桑田郡界、

〔攝津國島上郡水無瀨繪圖〕

奥書 天平勝寶八歲十二月十六日　島上郡主帳无位物部首子老 ○下略

〔續修東大寺正倉院文書 二十八〕

合三箇日 以廿四日參

右依親父老人衣具可進、退攝津職三島上郡、仍具注狀申送、以解、

天平寶字四年十月廿二日

判聽　主典安都宿禰　史生福麻呂

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲三年二月辛酉、攝津國島上郡人正六位上三島縣主廣調等、並賜姓宿禰、

島下郡

〔攝津志 六〕島下郡 東至島上郡界、西至豐島能勢二郡界、南至西成郡及河州茨田郡界、北至丹州桑田郡界、

〔續日本後紀 仁明 十一〕承和九年六月戊寅、以攝津國島下郡古荒田五十二町、賜從五位下大中臣朝臣岑子、

豐島郡

〔攝津志 七〕豐島郡 東至島下郡界、西至河邊郡界、南至西成郡界、北至能勢郡界、

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲三年五月己丑、攝津國豐島郡人正七位上井手小足等十五人、賜姓秦井手忌寸、

〔續日本後紀 仁明 一〕天長十年二月甲戌、攝津國豐島郡人散位從七位下出雲連男山、河邊郡人正六位上出雲連雄公、出雲連伊都岐麿等男女廿二人、賜姓於○於字恐衍出雲宿禰、

〔應仁後記 下〕四國勢蜂起攝州所々合戰事附若槻伊豆守辭世事

池田〇三郎五郎ハ其日討捕タル頸共ニ、合戰ノ次第ヲ記シ添、阿州エ遣シタリケレバ、京兆澄元感悅シテ、攝州豐島ノ一郡ヲ三郎五郎ニ賜リ、改名サセラレテ、池田彈正忠トゾ呼レケル、寔ニ父子二代忠功ノ者トゾ聞ヘシ、

〔細川兩家記〕一攝州三宅出羽守は、此とき畠山方へ一味して、此日色を立候て、同〇永祿五年五月廿日に、攝州豐島郡十里計、放火共候つれば、如此成行候條、則晩景より我城を明、浪人にて候、

河邊郡

〔攝津志 八〕河邊郡東至豐島、能勢二郡界、西至武庫、有馬二郡界、南至海濱、北至丹州多紀郡界、

〔日本後紀 十七平城〕大同三年七月甲申、廢攝津國河邊郡畝野牧、爲牧馬逸出損害民稼、

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年三月壬子、停攝津國川邊郡猪戸十烟、豐島郡二烟、爲平民、

武庫郡

〔攝津志 九〕武庫郡東至河邊郡界、西至菟原郡界、南至海濱、北至有馬郡界、

〔續日本紀 二十七稱德〕天平神護二年九月壬申、攝津國武庫郡大領從六位上日下部宿禰淨方、獻錢百万、相榑一千枚、授外從五位下、

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁五年八月甲子、免四人日下部土方、補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢、著鏁役、於堀河、頗善工巧、仍棄瑕取才、

菟原郡

〔攝津志 十一〕菟原郡東至武庫郡界、西至八部郡界、南至海濱、北至有馬郡界、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合水田參佰玖拾陸町參段貳佰拾壹步參尺陸寸〇中略

攝津國菟原郡參拾壹町陸段貳佰捌拾捌步〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲三年六月癸卯、攝津國菟原郡人正八位下倉人水守等十八人、賜姓大和連、

八部郡

〔攝津志 十二〕矢田部郡東至菟原郡界、西至播州美嚢、赤石二郡界、南至海濱、北至有馬郡界、

〔三代實錄 四十九 光孝〕仁和二年八月四日庚戌、攝津國島上、島下、豐島、河邊、武庫、兎原、八部、能勢、八箇郡官田四十七町一段百二十二步、給主計寮要劇并番上料、十月十九日甲子、勅以〇中略 攝津國島上、島下、河邊、武庫、菟原、八部、有馬郡官田五十二町八段三百十一步、賜典藥寮、爲月料田、

〔釋日本紀 十二 述義八〕菟餓野鹿

攝津國風土記曰、雄伴郡有夢野、〇下略

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合陸地壹仟玖佰貳拾玖町玖段柒拾陸步貳尺肆寸〇中略

山林岳島等貳拾陸地〇中略

攝津國雄伴郡宇治郷宇奈五岳壹地

東限彌奈刀川、南限加須加多池、西限凡河内寺山、北限伊米野、〇中略

合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口〇中略

攝津國伍處 西成郡一處 武庫郡一處 川邊郡一處 雄伴郡二處 〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔冠辭續貂 二〕大伴の　三津　高師

攝津の風土記に、夢野は雄伴郡に在と見え、又大和の法隆寺の資財帳に、攝津國雄伴郡宇治郷宇奈五岳壹地と見えたり、和名抄には此郡名なきは、淳和天皇の御諱を、大伴と申奉りしかば、大伴氏を伴氏と改めし時、雄伴郡を八田部と改ためけん、此事、日本後紀、日本逸史等に見えざるは、脫漏なるべし、是よりさきに、桓武の御名を山部と申せしかば、山部氏を山氏と改め、平城の御名をさけて、紀の國の安諦郡を、在田郡と改め、嵯峨の御名をさけて、伊勢の神野郡を、新居に改めらるゝ例也、是を八部ならんと云は、かの資財帳に、東限彌奈刀川、南限加須加多池、西限凡河内寺、北限伊米野と見ゆると、風土記に夢野の地を指とかなへるは、今の兵庫の津より西邊を云也、さらば津の國の西の極を雄伴郡と云、東南の河内國今の和泉までを、大津三津又大伴の高石(タカシ)ともよみたるを思ひ

て、攝河の二國は、大伴氏の食地ならんかとはいふ也、さて大伴はおほども、雄伴はをどもと言を略してとなへしなるべし、（○下略）

有馬郡

〔攝津志十〕有馬郡（東至河邊郡界、西至播州美嚢、加東二郡界、南至武庫、菟原、矢田部三郡界、北至丹州多紀郡界、）

〔三代實錄（三十八陽成）〕元慶四年十月廿七日丁未、免攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福貞、無位川原公福繼、有馬郡人無位川原公千破、河邊郡人十世從八位下川原公夏吉、大初位下川原公有利等五戸課役、

〔應仁後記下〕四國勢蜂起攝州所々合戰事附若槻伊豆守辭世事

攝州勢ニハ、池田故筑後守ガ嫡子池田三郎五郎、時ヲ得タリト馳來テ、某今度攝州口ノ先陣ヲ仕ラント、同國有馬郡田井ト云處エ出來テ、勢揃セシ處ニ、（○下略）

〔信長公記十二〕天正七年四月廿八日、有馬郡迄、中將信忠卿御馬被入、是より直に野瀨郡へ御働、耕作薙捨、

能勢郡

〔攝津志十三〕能勢郡（東至島下郡界、西至河邊郡界、南至豐島郡界、北至丹州桑田郡界、）

〔續日本紀（六元明）〕和銅六年九月己卯、攝津職言、河邊郡玖左佐村、山川遠隔、道路嶮難、由是大寶元年始建館舍、雜務公文、一准郡例、請署郡司、許之、今能勢郡是也、

郷

〔倭名類聚抄（六攝津國）〕住吉郡 住道（須無知） 大羅（於保與佐美） 杭全（久末多） 餘戸、榎津（以奈豆）

百濟郡 東部 南部 西部

東生郡 古市（不留智） 郡家、酒人 味原（○原、高山寺本作厚、） 餘戸、

西成郡 長源 安良 伏見（布之美） 槻本（都木乃毛止） 郡家 宅美 讃楊 雄惟 三野 津守 驛家

餘戸

島上郡 濃味 兒屋 眞上（末加美） 服部（波止利） 高上、

島下郡　新野(比夜)　宿人(〇人恐久誤)　安威(阿井)　穗積(保美)　都

豐島郡　秦上　秦下　驛家　豐島(天萬)　之餘戸　桑津(久波都)　大明(於保阿介)

河邊郡　雄家(乎倍)　山本(也末毛止)　爲奈　郡家　楊津(也奈以豆)　餘戸　大神(於保無知)　雄上

武庫郡　賀美　兒屋(古也)　武庫(無古)　石井(以之井)　曾禰　津門(都止)　廣田(比呂多)　雄田(乎多)

有馬郡　春木(波留木)　幡多(波多、在上下)　羽束(波都加之)　大神　忍壁(於之加倍、在上下)

菟原郡　賀美　葦原　布敷　津守　天城　覺美　佐才　住吉

八田部郡　生田(以久多)　宇治、神戸　八部(也倍)　多　長田(奈加(加高山寺本作以)多)

能勢郡　能勢　雄村(乎無良)　枳根(木子)

〔攝津志 二住吉郡〕鄉名　住道(スンヂ)(方廢、村存、今隸河州丹北村)　大羅(オホヨサミ)(巳廢、存庭井村)　杭全(クマタ)(巳廢、存山内村)　榎津(エナツ)(巳廢、存杉本住吉二村、〇中略)

廢百濟郡(入住吉東生兩郡)　鄉名　東部(巳廢、屬住吉郡平野中野邑)　南部(巳廢、爲住吉郡南田邊、延喜式曰、凡諸國部内郡里等名、並用二字、必取嘉名、故源順省田字、爾)

西部(巳廢、屬東生郡阿部野村)

〔攝津志 三東生郡〕鄉名　郡家(巳廢、存國分村)　酒人(廢)　味原(方廢、味生原存、今屬島下郡)　餘戸(廢)

〔東大寺小櫃文書 上〕香山藥師寺鎭三綱牒　攝津職東生郡務所

賣買庄地立劵事

合地參町貳段肆拾漆歩(東限御鑿殿西道、南限路、西限谷、北限堀江)

在彼部酒人鄉御鑿殿村　價錢漆拾貫文

右依勅旨省幷職牒、充上件錢價直、永爲公地、奉賣既畢、今依式立劵如前、仍注事狀、以牒、

神護景雲三年九月十一日(〇署名略)

〔攝津志 四西成郡〕鄉名　長源(或曰、源當作洲、傳寫誤、方廢、而長洲村存、村入川邊郡)　安良(或曰、安當作長、方廢、而長柄村存)　伏見(巳廢、故伏見川在大坂島内、見三津八幡社記)　榎本(方廢、或曰、塚本村存)　郡家(巳廢、存國分寺村)　安美(巳廢、存浦江大仁二村)　讃揚(或曰、揚當作楊、方廢、而三番村存)　雄惟(廢)　三野(巳廢、勝間、今宮、中在家、三

野村、之號、有三津守、驛家、(俱廢)餘戶

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺三綱牒　攝津職

請庄地劵文事

折東南地參町壹段壹佰貳拾玖步(○中略)

以前地、在西生郡美怒鄉、本數三町六段二百卌九步、主安宿王、以去天平勝寶四年正月十四日、充價錢一百貫文、賣納東大寺已訖、(○中略)

天平寶字四年十一月七日(○署名略)

〔攝津志五島上郡〕鄉名　濃味、(已廢、存上田邊村、)兒屋、(已廢、存土室塚原二村、)眞上、(方廢、村存、)服部、(方廢、村存、)高上、(廢)

〔古京遺文〕石川朝臣年足墓志

武內宿禰命子、宗我石川宿禰十世孫、從三位行左大辨石川石足朝臣長子、御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣、(○中略)以十二月(○天平寶字六年)乙巳朔壬申、葬于攝津國島上郡白髮鄉酒垂山墓、(○中略)

右墓志、文政三年正月、攝津國島上郡眞上光德寺村民德右衞門、鑿其宅後荒神山而獲之、按(○中略)倭名類聚抄、島上郡有眞上鄉、無白髮鄉、按續日本紀、延曆四年五月詔曰、臣子之禮、必避君諱、比者先帝御名及朕之諱、公私觸犯、猶不忍聞、自今以後、宜並改避、於是改姓白髮部爲眞髮部、山部爲山、然則白髮鄉之爲眞上、亦使延曆所改、是志在詔前二十四年、故猶不避也、(○下略)

〔東大寺奴婢籍帳〕攝津職移　大養德國司

合十三人　奴伊賀臣大麿(年九十一○中略)

右五人、部內島上郡野身鄉戶主輕部造弓張戶口所貫(○中略)

天平十五年九月一日

從四位上行大夫大伴(病)　從六位上少進高向朝臣諸成

〔東大寺奴婢籍帳〕東大寺大宅可是麻呂□籍帳案天平勝寶元年

散位寮散位大初位上大宅朝臣可是麻呂謹解　申貢進賤事

合陸拾壹人〇中略

婢古阿禰年十五已上四人、攝津國島上郡濃味里戶主辛矢田部君水內戶口、〇中略

天平勝寶元年十一月三日

〔朝野群載二十一雜文〕攝津國島上郡兒屋鄕長解申立賣買常地券文事

合地參町伍段

在五條一里、十七十八兩坪內七段、　十九坪八段　廿坪一町　廿一坪一町

四至限東宮地、限南路、限北公田、限西藤原鷹雄地、幷紀峯髙領山〇中略

天曆四年六月十七日　長〇以下署名略

〔攝津志六島下郡〕鄕名　新屋、已廢、存西川原村、　宿人、人宿作久、傳寫誤、宿久莊存、　安威、穗積、倶廢、村存、

〔神宮雜例集一〕一中臣氏祖神〇中略

聖武天皇天平十二年庚辰四月五日、春日御社奉遷壽久山御社、是右大臣大中臣清万呂卿、致仕籠居攝津國島下郡壽久鄕之間、住家近所奉崇也、

〔攝津志七豐島郡〕鄕名　秦上、方廢、但村存、　秦下、已廢、存池田村、　驛家、今曰萱野谷、　豐島、餘戶、今曰原田莊、　桑津、已廢、村存、今屬河邊郡、　大明、發

〔攝津志八河邊郡〕鄕名　雄家、今作小戶、雄家莊存、　山本、爲奈、方廢、稻寺村存、　郡家、方廢、鴻池村存、　楊津、方廢、木津對津二村存、　餘戶、廢、　大神、方廢、大物村存、　雄上、已廢、存切畑村、

〔攝津志九武庫郡〕鄕名　賀美、廢、　兒屋、方廢、村存、　武庫、今曰武庫莊、　石井、廢、　曾禰、方廢、村存、　津門、方廢、村存、　廣田、方廢、村存、　雄田、廢

〔攝津志十有馬郡〕鄕名　春木、已廢、存有野村、　幡多、有上下、　羽束、方廢、有羽束山、　大神、已廢、存三輪村、　忍壁、有上下、方廢、草下部村存、今入幡多鄕、

村里
郡邑

〔攝津志十一菟原郡〕鄕名 賀美(廢) 葦原(原作蘆、今呼本莊) 布敷(今呼葺屋莊) 津守(已廢、存森杉) 天城(已廢、存上野村) 覺美、佐才(俱廢) 住吉(方廢、村存、)

〔攝津志十二矢田部郡〕鄕名 生田(方廢、村存、) 宇治(方廢、村存、) 神戸(方廢、村存、) 八部(廢) 長田(方廢、村存、)

〔攝津志十三能勢郡〕鄕名 能勢(已廢、存地黄村) 雄村(已廢、存大里村、今屬枳根鄕) 枳根、

〔郡名一覽〕一攝津國(御料私領) 攝州 南北一日半餘 拾貳郡

高三拾九萬貳千七百七石六斗九升九合九勺七才 八百七拾七ヶ村

●大阪御城(京十二里半、百三十三里) ●尼ヶ崎 百三十五里 ●高槻 百三十七里 ○三田 百卅三里七町 ○麻田 百三十里 八大坂 鈴木町 百三十三里餘

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕攝津 十二郡九百五十五村

高四十一万七千三百九十九石一斗二升七合(御領私料)

島上郡六十五村 島下郡九十九村 豐島郡九十五村 有馬郡九十村 八部郡四十五村

兎原郡五十一村 武庫郡五十村 川邊郡百九十三村 西成郡百二十二村 東成郡六十二村 住吉郡四十九村 能勢郡三十六村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

攝津 東成郡、澤上江村、荒止村、豐島郡、蔣江村、西成郡、成少路村、島上郡、神内村、島下郡、安威村、耳原村、泉原郡島養三ヶ村、能勢郡、木代村、

〔日本書紀十四雄略〕十七年三月戊寅、詔土師連等、使進應盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾笥、仍進攝津國來狹狹村(○中略)民部、名曰贄土師部、

〔日本書紀 十五 清寧〕二十三年○雄略八月、大泊瀨天皇○雄略崩、○中略小根仍使湏彥啓於大連曰、大伴大連我君、降大慈愍、促短之命、既續延長、獲觀日色、輙以難波來。目。邑。大井戶田十町、送於大連、又以田地與于湏彥、以報其恩、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶五年九月壬寅、攝津國御。津。村。南風大吹、潮水暴溢、壞損廬舍一百十餘區、漂沒百姓五百六十餘人、並加賑恤、仍追海濱居民、遷置於京中空地、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

合田六町○中略

攝津國二町一町九條五里卅五大針田、一町九條六里二丈針田、在島上郡[illegible]屋里、

右修理大門中門四王幷金剛力士等像料○中略

神護景雲元年十二月一日

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆三年五月癸未、攝津職言、今月七日卯時、蝦蟇二万許、長可四分、其色黑斑、從難波市南道、南行池列可三町、隨道南行、入四天王寺內、至於午時皆悉散去、

〔玉勝間 六〕しはつ山笠縫島

古今集大歌所の歌、しはつ山ぶり、しはつ山うち出て見れば笠ゆひの島こぎかくるたななしをぶね、これは萬葉三の卷に、四極山、打越見者、笠縫之島榜隱、棚無小船とある歌なるを、笠ゆひとは、うたひひがめたるなり、さてしはつ山笠ぬひのしまは、或人のいはく、ともに津ノ國なり、○中略さて笠縫島は、今東生郡の深江村といふところ是なるべし、此所、菅田多く有て、其菅他所より勝れたり、里人むかしより、笠をぬふことを業として名高く、童謠にもうたへり、今も里長幸田喜右衛門といふ者の家より、御卽位のをりは、內裏へ菅を獻る、又讃岐の殿へも、圓座の料の菅をまゐらすとぞ、○中略さて此深江村は、大坂城より東にあたりて、河內の堺に近し、此地いにしへは島なりし

よし、里人いひ傳へたり、まことに此わたり、古は、北の方は難波堀江につゞき、東は大和川、南西は百濟川、そのほかも小川共多く流れあひて、廣き沼江にて有しとおぼしくて、難波の古圖のさまも、然見えたり、又今此里人の語るをきくに、此村のみ地高くて、ほとりはいづ方もいづかたも地ひきし、井などほれば、葦の根、貝のからなどいづといへり、かくて此ところ、かのしはつ山の坂路より北にあたりて、よきほどの見わたしなれば、島こぎかくるたななし小船とはよめるなりけり、

〔攝書漫筆〕二 京都空也堂の叩鐘の銘に、天曆十年伊丹住貞俊作と見ゆ、こは空也上人のことおほせて鑄させられし也、今も攝津國伊丹の里より、廿町ばかり西北に、鑄物師村あり、昆陽のちかきわたりなれば、昆陽寺の鑄物師が子孫など、世々こゝには住たりけん、

〔西大寺文書〕一 注進　西大寺所領諸庄園現存日記事

合〇中略

一顚倒庄々〇中略　攝津國　豐島郡佐伯村三十町〇中略　已上二十七處、依流記公驗明白注進之、

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日〇署名略

〔石淸水文書〕一 茨木長隆領知證狀寫

攝州島下郡溝杭村內本領幷所々散在田畠、小西分寺庵被官人等、目錄在別紙、封裏事、任當知行旨、被成御判上旨、彌領知不可有相違由候也、仍執達如件、

天文十四年
八月廿六日　長隆花押

溝杭龜松丸殿

〔和漢三才圖會〕七十四攝津 東生郡或用成字

按、大坂。舊東生郡内一邑名、而今廣跨二于西生郡一、民家聚二於東一、其境以レ岸爲レ限、今之天神橋筋東裏通、自レ北至レ南有二山岸形一、有レ川、流二于南北一、名二東横堀一、大坂爲レ境、東高西卑、地面坂嶝多、故呼曰二大坂一矣、元和以來益繁昌、其瓦土壁土礎土、自レ東擾レ西、稍至二平均一、自二淀川一北稱二天滿一、北組、南組、天滿、稱二之大坂三郷一、

〔攝津志　三東生郡〕村里　大坂以二谷町街路一、爲二西成郡界一、玉造町名三十、上町町名二十六、

〔由遠隨筆　上〕大坂は、津の國第一の湊にして廣大の地也、しかも其古名、古書和歌等にいまだ見わたらず、〇此間引二用日本書紀仁德天皇皇后贈答歌及續日本紀文一、今略、承德年中の古圖を考るに、大江岸の巽、生玉之庄小坂村有、後世村民繁榮して、民家廣大の地となり、時の人、小坂を轉じて大坂とする歟、〇下略

〔孝經樓漫筆　二〕石山

大坂、中古まで石山とよびしにや、永祿十年の古記に、東成郡生玉庄石山本願寺と書る、

〔御文章　四〕抑當國攝州東成郡生玉ノ庄内大坂トイフ在所ハ、往古ヨリイカナル約束ノアリケルニヤ、サンヌル明應第五ノ秋下旬ノコロヨリ、カリソメナガラ、コノ在所ヲミソメシヨリ、スデニカタノゴトク一宇ノ坊舍ヲ建立セシメ、當年ハハヤスデニ三年ノ星霜ヲヘタリキ、〇中略

明應七年十一月廿一日ヨリハジメテコレヲヨミテ、人々ニ信ヲトラスベキモノナリ、

〔嚴助往年記　上〕享祿五年〇天文元年六月五日夜、山科本願寺坊主、其外内衆以下退去、小。坂。大騷動也、

〔碩鼠漫筆　十〕大坂は舊小坂と呼けむ事

攝津國の大坂は、舊は小坂と呼び、或は尾坂ともかけりけむを、明應の頃よりか、大坂とも書そめけむとおぼし、〇中略上件の諸書〇蔭凉日記、嚴助信正記、二水記、天龍集、無名記、永祿九年記、の限り、或は小坂ともかけるにやともおもへど、猶よくおもふに然るべからず、此地本よりしからむには、大かたは大坂と有て、たま〳〵小坂尾坂などはあらむを、小坂の號のみ多く見ゆれば、是を古名と決むべきに似たり、さて大坂と呼そめたりしは、何時許りならむと推考なるに、疑ふらくは明應五年に、蓮如

上人此地をトて、本願寺を建立せしほど、小坂の號を祝ひ更め、始て大坂と呼びしにはあらじか、何れにも此寺建立せし後に、改めしものと見えたり、但ししか呼かへたる事、やがて世間にしるべくもあらねば、暫くはなほ舊名にのみ、他し方よりは呼てぞ有けむ、〇中略其後天正に及びては、凡て大坂とのみ呼びけむとぞおぼゆる、されば小坂はいと古き名とおもへど、いつばかりよりともしるべき由なし、〇下略

〔經厚法印日記〕享祿五年八月八日、自堺津打向大坂、津州合戰、一揆又失利、下間刑部大夫等討死也、

〔二水記〕享祿五年九月廿六日巷說云、堺儀、依不通不慥聞、尾坂未攻落如何云々、〇中略十月廿日〇中略風聞云、堺武家近日御出奔、御落所不慥聞、尾坂一向衆、不及指合戰歟、〇下略

〔續應仁後記三〕畿內近國一揆所々騷動事

細川晴元ハ淡路國ヨリ歸帆シテ、同〇天文二年四月六日ノ夜、池田ノ城ニ落著ケル、斯ニテ各々評議シテ、堺庄ヲ取返サントテ、多勢ヲ催シテ、同月廿九日ニ打立、堺ノ庄ヲ攻ケル程ニ、一向門徒等悉攻破ラレ、本願寺上人ハ堺庄ヲ落去テ、攝州西成郡石山ノ庄ニ居住セラル、此石山ハ元ヨリ大河帶ノ如ク岡ヲ卷テ、要害堅固ノ勝地也、シカモ海陸自由ニシテ、繁昌ノ地ナルガ故ニ、此所ニ伽藍ヲ建テ、上人卽チ安居シ給フ、今ノ大坂ト云ハ此地也、右京大夫晴元ハ元ノ如ク、堺ノ庄エ入リ替テ斯ニ居住シ、人數ヲ催シ、武士ニハ木澤左京亮等、僧ニハ又日蓮宗ノ僧俗數多勢揃シ同キ五月五日大坂エ押寄セ攻ルト云ヘ共、元ヨリ堅固ノ要害ニ防グ兵多シテ、攻落ス事成難ケレバ、漸當分ノ和議ヲ扱ヒ、同キ廿日ニ寄手ノ諸勢等悉歸陣シケリ、

〔嚴助往年記下〕天文十五年三月日、小坂講衆參宮、

弘治三年四月十七日、小坂本願寺江、晴元女被相越云々、六角猶子云々、

〔信長公記十三〕天正八年庚辰八月二日、〇中略抑大坂は凡日本一之境地也、其子細は、奈良境京都程

近く、殊更淀鳥羽より大坂城戸口まで舟の通ひ直にして、四方に節所を拘、北は賀茂川、白川、桂川、淀、宇治川之大河の流幾重共なく、二里三里之內、中津川、吹田川、江口川、神崎川引廻し、東南者、上が嵩、立田山、生駒山、飯盛山之遠山の景氣を見送、麓は道明寺川、大和川之流に新ひらき淵立田之谷水流合、大坂之腰まで三里四里之間、江と川とつゞひて、渺々と引まはし、西は滄海漫々として、日本之地者不及、申唐土高麗南蠻之舟、海上に出入、五畿七道集之賣買利潤、富貴之湊也、

〔國花萬葉記攝津六之一〕大坂大圖

上町とは、京橋ゟ大坂之入口、御本城之東のうしろより西は東堀とて高麗橋農人橋等の堀すじを限とす、此所は古より、住吉大江の岸の上すじなる故、東堀より西船場の地よりは町に坂有て岸通高し、故に上町と云なり、東堀と云も、船場より東に有故東横と云り、上町よりは西なる故、上町にしてはさは云べからず、此堀は北今橋の大川口より南へ一すじに、高津の宮の順路へ通り、それゟ西へくじきながるゝ、川すじを道頓堀と云、此所の角をほりつめと云、道頓堀ゟ北は十筋目に長堀とて、東横堀ゟ西へ流れ、西横堀を十文字に堀通りて、すぐに西濱へ流れ入也、道頓堀と本末ひとしき堀也、

〔半日閑話九〕一文化元子年九月　大坂町中幷大坂附之寺社人數書

都合三拾七万五千五百三拾壹人

內僧七百八拾四人　男拾九万七千九百八人　女拾七万六千八百三拾九人

外四千三百七拾六人　內男貳千貳百拾九人　女貳千百五拾七人　攝津西成郡穢多村

町數竈數橋書付

一三口町數高六百貳拾町　內貳百五十町北組　貳百六十一町南組　百九町天滿組

一同竈數九万三千九百六拾七軒

一同橋數高百五十七　内公儀橋十二

〔浪花の風〕浪花の地は、日本國中船路の樞要にして、財物輻湊の地なり、故に世俗の諺にも、大坂は日本國中の賄所とも云、又は臺所なりともいへり、實に其地巨商富估軒を並べ、諸國の商船常に碇泊し、兩川口よりして、市中縱横に通船の川路ありて、米穀を始め日用の品はいふに及ばず、異國舶來の品に至る迄、直ちに寄場と通商なる故、何一つ欠るものなし、古來よりかくの如き土地がら故、商估專らにして、人氣もおのづから其風に移り、利を謀ること他國に超て慧敏なり、故に淳朴質素の風は更に失ふて、只だ利益に走るの風俗のみ、士といへども、土著のものは自然此風に浸潤して、廉耻の心薄く質朴の風なし、これ浪花風俗の大概なり、

〔一話一言首〕大阪狀

一此地米直段下直に候、〇中略扨々結構成所にて、遊で食ふもの多き筈にて候、江戸より見候へば、半分は遊んで居り、氣の長き事、急の間に不ㇾ合、道をもうかり〳〵あるき、人をよけ候事を不ㇾ知、供などに叱られ、肝をつぶし申候、大名往來など見候はゞ、驚き可ㇾ申候、正九ッゟ八時迄は、町中にて晝寐也、

一家作の仕方、至て上手にて、戸のしまり、竈本の樣子、臺所向棚のつり樣など、感心いたし候、〇中略

一土用に成候へども、具足など干し候事、一向跡かたもなき事也、誰も見やうなどゝいふものなし、重ては張ぬきにてもよし、町人いづれも人柄よく候處、此方體の家來御普請役など、家來ども其さま賤しく、氣の毒なる位也、嘸々わるせはしく下卑たる事と、さげすみ居り可ㇾ申と耻入候、〇中略

六月〇享和元年七日　大田直次郎

島崎金次郎樣

天保

一毎朝、辰牌後より未牌後までは、役所に罷在候、〇中略市中の人、日傭取まで、古雅に御座候、皆々朝寐、午時より未時頃迄は、市人といへども、一度づゝ、晝寢也、夜談をこのみ候、米價は一升五十二文より九十文位まで故、市人くらしよく候、女の風俗重て可申上候、餘程面白事に候かつぎを著候形など、小原女の體など、金屏風の如し、二千年來の化には感じ入候、

六月七日　大田覃

山内甫助様

一六月十八日出の狀、廿五日夕相達候、其地〇江戸暑中冷氣の由、此方〇大坂は土用前は、左のみにも不覺候處、暑中酷烈、夜分蒸しあつく御坐候、乍去旅宿廣く風入候間、凌ぎよく候、其上夕方日影傾候へば、二階の物干へ上り候處、ことの外涼く御座候、物干ゟ屋根へかけ階子腰掛等有之、南は紀州の山々、近くは天王寺の塔、東は伊駒山金剛山、近くは大坂の御城の櫓白壁、北は京の山山、丹波の山、西には武庫山、甲山、一の谷、ひよどり越、すま明石の方、すこしはなれて淡路島、其前は海、木津川口の帆柱林のごとく、近くは兩本願寺の堂(下谷の西念寺ュリチン寺位也)大てい上野山王より見わたしたる所程、又は愛宕より下の屋敷を見るごとく、家根より下の方は大坂の市中不殘見わたし申候、夕日に雲のうつるけしき、機關の畫とも、阿蘭陀畫とも可申、是にて夕方は、暑をわすれ臥り申候、只今迄かゝる見晴しは覺不申、ことに名所計にて、中々詩も歌も出不申候、〇中略

七月二日　大田直次郎

島崎金次郎様

〔江家次第十二月〕御佛名

今夜差栢梨(左近衛府攝津庄名也、彼地利所遣之甘梨也、)以二

裏書曰、栢梨、昔府中將和氣某、以₂攝津國栢梨庄₁寄₂左近府₁、以₂其地利₁充₂官人以下酒醪料₁、

〔東大寺要錄 六〕一諸國諸庄田地長德四年注文定○中略

新發田○中略

水成瀨庄田八町七段七十八步在₂攝津國島上郡₁○中略

攝津國

西成郡安曇江庄地六段

河邊郡猪名田八十五町一段三百卌三步

或日記云、猪名庄野地百町、濱二百五十町云々、

〔東大寺要錄 二〕東大寺注進　寺領役夫工免除證文事○中略

一卷三枚　六箇寺領役夫工免除宣旨嘉應元八月廿三日○中略

攝津國猪名　水成瀨　兩庄○中略

右件役免除請文等、開印藏隨₂可₁有₂進上₁如₂件₁、

文治四年七月十三日　寺主大法師嚴信

〔東大寺要錄 二〕攝津國長洲庄者、本願勅施之地、當寺根本之領也、而於₂開發地₁、鴨社々司等、去建保之比、致₂濫訴₁、驚₂上聞₁之間、或被₂尋₂記錄所₁、或被₂問₂三大臣公群臣₁、皆可₃爲₂當寺之進止₁之由、被₂奏聞₁了、其狀云、

鴨社東大寺相論長渚開發事

右件地、可₃爲₂東大寺領₁之條、應德皇后宮職相傳之狀、嘉承宣旨、承安祐季請文等、已以炳焉歟、○中略但如₂康和宣下₁者、猪名庄四十餘町之外、可₃非₂寺領₁歟、○中略

六月廿一日　右大臣在判

右大辨宰相殿

〔殿暦〕嘉承二年五月三日戊子、今日依二日次宜一、攝津國垂水莊、右大辨時範朝臣預レ之、

〔當宮縁事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應下永停二止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號レ有二先祖讓狀一、或稱レ相二傳文書一、致二異論一企中掠領、兼又有二由緒一輩、令レ傳二領子孫斷絕處々一付中本所上事、

宮寺領〇中略

攝津國　鹽田庄〇中略

極樂寺領〇中略

攝津國　天下高羽國　富垣庄　可賀島庄〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰花押

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年四月六日甲戌、池前大納言幷室家之領等者、載二平氏沒官領注文一、自二公家一被レ下云云、而爲レ酬二故池禪尼恩德一、申二宥彼亞相勅勘一給之上、以二件家領三十四箇所一、如レ元可レ爲二彼家管領一之旨、昨日有二其沙汰一、令レ辭之給、〇中略

池大納言家沙汰〇中略　兵庫三箇莊〇攝津中略　已上八條院御領〇中略

右莊園拾陸箇所、注文如レ此、任二本所之沙汰一、彼家如レ元、爲レ有二知行一、勤狀如レ件、

壽永三年四月六日

〔賀茂注進雜記神領下〕同〇壽永三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任二院廳御下文一、可レ止二武家狼藉一之由、有二其沙汰一云々、

下二諸國一　可下早任二院廳御下文一、停二止方々狼藉一、備中進神事用途上、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

攝津國　米谷庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、慥可處重科之、狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡七〕文治三年二月一日癸酉、二品以沒官領內二箇所、可被避于建禮門院之由、有其沙汰、是攝津國眞。井。島。屋。兩庄也、元者八條前內府知行云云、依被訪申彼御幽栖也、十月廿六日癸巳、攝津國山。田。庄。、○中略被奉寄左女牛若宮、

〔吾妻鏡十〕文治六年四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州幷盛時、俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事○中略

攝津國　平。野。安。垣。

下知景時處、返事如此、相副之、

同國　安。富。

相尋早河太郎遠平處、件所一切不知行之由申之

然者、可被尋之、

同國　武。庫。庄。○中略

文治六年四月十九日

〔西大寺文書〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事

合○中略

攝津國島下郡三島庄、七十町田畠領知半分、

已上九箇庄大體有名无實、或被國領、或被人領、或半分、或三分之一也、然而就庄號注進之、○中略

建久二年五月十九日　○署名略

〔吾妻鏡　十二〕建久三年十二月十四日壬子、一條前黄門書狀參著、以亡室遺跡廿箇所、讓補男女子息、爲塞將來之乖違、去月廿八日、申下宣旨訖、○中略　是平家沒官領內、攝津國福原庄、武庫御厨小松庄、○中略　先日被寄讓黃門室家、將軍家御妹也云云、

○按ズルニ、高倉天皇ノ治承四年、都ヲ福原ニ遷シヽコトアリ、皇都篇ニ在ルヲ見ルベシ

〔吾妻鏡　二十五〕承久三年五月十九日壬寅、午刻大夫尉光季、去十五日飛脚下著關東、申云、○中略　武家背天氣之起、依舞女龜菊申狀、可停止攝津國長江倉橋兩庄地頭職之由、二箇度被下宣旨之處、右京兆不諾申、是幕下將軍募勳功賞、定補之輩、無指雜怠、而難改由申之、仍逆鱗甚故也云云、

〔古文書類纂　處分狀上〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分條々事

一寺院　○中略

院領　攝津國輪田庄　○中略

一家地文書庄園事　○中略

尙侍殿　○中略　新御領　攝津國松山庄　○中略

前攝政　○中略　家領　女院方　○中略　攝津國倉垣庄　春日四季御八講被宛之○中略

新御領　○中略　攝津國湖江庄　長入道寄進○中略

佐々木女房讓進所々　攝津國富島庄　○中略

右大臣　○中略　家領　女院方　○中略　攝津國輪田庄　報恩院領　生島庄　被寄進春日四季御八講○中略

建長二年十一月日　　愚老在御判

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、烏帽相具御書、御手箱□□□存日予預置也、參御所、〇中略女院御方自餘御書等、兼有御封、以檀紙被立文、押折上下、又有銘等、悉盛筥蓋、〇中略一通銘曰禁裏

備前國長田庄二品一期可被免知行　攝津國位倍庄〇中略

右庄々所讓進也

嘉元三年七月廿六日　御判

〔梅松論下〕建武三年二月朔日、猶都に責入べき其沙汰有といへども、退て功をなすは武略の道なりとて、細川の人々赤松以下西國の輩を案内者として申されけるは、先御陣を攝津の國兵庫の島にうつされて、當所の船を點じて、兵粮等人馬の息をつがせて、諸國の御方に志を同して、同時に都に責入べしとて、三草山通に播磨のいなみ野に出て同二月三日、兵庫の島に御著有處に、赤松入道圓心參て申けるは、當所は要害の地にあらず、御座痛敷候、兩大將をば圓心が摩耶の城にうつし奉り、軍勢は當津に陣を取べし、兵庫と摩耶の間五十町のよし申所に、〇中略其時圓心、當所は要害にあらざるに依て、愚意の及所を申上候計也、更に諸國の事思ひもよらず、遠方の聞え尤大切なる間、縱城に御座候共、御出有べきにてこそ候べけれど、赤松此儀に同じければ、當所御陣にさだめらる、

〔應仁廣記四〕山崎天王山合戰事附大内介降參事

于斯先年ヨリ山名彈正忠是豐ハ、一家ヲ離レテ御所方ト成リ、攝州兵庫ニ在ケルガ、京都ヘ責上リ、東陣〇細川ニ力ヲ合スベシトテ、山崎ノ天王山ヲ城郭ニ拵ヘ、〇下略

〔報恩院文書〕醍醐寺報恩院所司等謹解

欲早依相承理、且被優數代護持勤勞、預御吹擧、達理訴、全公家武家御祈禱、當院領攝津國平馱足庄、讃岐國陶保等間事、○中略

建武四年十二月日

〔多田神社文書〕攝津國多田庄條目

條々○中略

文永十年十二月七日　田部花押○以下四名略

多田庄兩政所

恒念御房

〔續應仁後記三〕三好孫次郎範長所々合戰事

此範長、武勇智謀ノ器量有テ、父ガ讒死ノ恨ヲ不夾、忠義ヲ守テ晴元ノ敵徒ヲ退治シ國亂ヲ靜メントス、先ヅ故常桓禪門ノ妹聟鹽川伯耆守政年ガ、攝州多田ノ庄一藏ノ城ニ在ケルヲ攻落サント相議シ三好新五郎政康、同舅波多野備前守等ヲ催シ、天文十年辛丑九月六日打立テ、一藏ノ城ヲ攻ル、

〔多田神社文書〕足利尊氏政所平氏契約狀

けいやく申、つの國せんげん寺庄東かたの地頭しき(すはの三郎左衛門入道跡)半ぶん事、御けいやくにまかせて知行申べく候、○中略

康曆二年六月三日　平氏女花押

〔應仁後記下〕四國勢攻上攝州合戰事附前公方家御逝去事

高國(細川)先ヅ五百餘騎ヲ攝州へ差下ス、此勢萬代ノ庄ニ陣取タルニ、四國勢モ不寄來、空ク日數ヲ送リケレバ、同(○永正八年)七月十三日、京方ノ兵、深井へ押寄セ、輕々敷合戰ヲ始ケルニ、澄元勢ノ横

合ニ駈立ラレテ、京方悉打負、同國堺ノ庄ヘ引退ク、勝ニ乘テ澄元勢ハ中島邊迄攻入タリ、攝州兵庫ノ津ヘハ、細川淡路守成春兵船ヲ著ケ、押上ツテ難波ノ庄マデ攻上レバ、高國方ノ勇士河原林對馬守正頼、同國蘆屋ノ庄上ナル鷹尾ノ城ニ楯籠テ、是ヲ防ギ留ントス、○中略

三好希雲居士降參自害事

細川高國沒落シケレバ、同○永正十七年二月廿七日、三好入道希雲居士、京都ヲ差テ攻上ル、威勢權柄アタリヲ拂テ見ヘニケル、同三月十六日、細川右京大夫澄元神呪寺ノ陣ヲ拂テ、伊丹ノ庄エ移リケレバ、攝津國ヨリ京都マデ、軍兵巷ニ滿々タリ、

〔古野文書〕新右衞門等請狀

定

一今度當町火付有レ之ニ付而、改可レ被二申事、或はばくち類之儀仕候もの有レ之か、或は作りとても商内にても不レ仕、不思儀成徒者有レ之か、一町切に被レ致二穿鑿一、於レ有レ之者、縱緣者親類たりと云共、見隱聞隱なく、有樣に可レ被二申上一候事、○中略

巳二月廿四日　小川又左在判

伊丹町　紙屋與左衞門殿
豐島屋二郞左衞門殿

〔續應仁後記〕二常桓禪門最期事

去程ニ、三好筑前守元長ハ合戰ニ打勝テ、四國勢、赤松勢、何レモ頸數多討捕ケレ共、未ダ細川常桓ノ頸ハ見ヘザリケル程ニ、方々エ手分シテ、常桓ノ行衞ヲ搜シ索ル、村々里々ハ云ニ不レ及、木ノ茂リ草ノ陰迄尋ヌ所ハ無リケリ、常桓禪門ハ六月○享祿四年四日ノ戰場ヲ落延テ、播磨路エ趣キケレ共、敵徒路々ヲ遮テ、落行方モ塞リケレバ、大物ノ庄ノ民家エ入テ、紺屋ヲ賴テ忍居ラル、○中略搜ス兵共紺屋エムズト押入テ、紺搔ノ男ヲ搦置、其外多勢シテ彼藍瓶ヲ取ノケ、隱レシ法師ヲ出シ見

ケレバ、疑モ無キ常桓也、○中略同六月八日、寅ノ刻バカリニ、尼ガ崎大物ノ庄廣德寺ニ於テ、常桓禪門ニ腹ヲ切ラセケルトゾ聞ヘシ、

〔細川兩家記〕一同○永祿四年五月日、細川の晴元、入道有て一清と號申候也、修理大夫殿と御和睦有、攝州富田庄普門寺へ入被申候、富田庄御料所被付、御馳走候てめで度由候也、

〔古文書類纂施行狀上〕北朝後圓融天皇應安七年御教書

攝津國宮原北保領家職事、興福寺衆徒重僉議狀如此、長良孫三郎濫妨云云、及神木歸座之違亂之上者、不日止被妨、任先例可被全雜掌所務之狀、依仰執達如件、

應安七年四月三日　武藏守御判○細川頼之

細河右馬之助殿

同上遵行狀

攝津國宮原北保事、今年○應安七四三御教書并今年七月二日御施行案文遣之、早任被仰下之旨、退長良孫三郎濫妨沙汰付興福寺雜掌可執進請取之狀如件、

應安七年七月廿三日　左衛門尉花押

難波太郎左衛門入道殿

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平遠江守忠興帝鑑間從五位上　四万石　居城攝州河邊郡尼崎　江戸ヨリ百三十五里

城主荒木攝津守村重居、池田紀伊守信輝、元和三、戸田左門氏鉄、寛永十二、青山大藏大輔幸成、同大膳亮幸利、同大藏少輔幸實、同播磨守幸督、同大膳亮幸侶、信州飯山ニ替ル、寶永八、松平遠江守忠喬以後領之、

永井鐵之丞雁間　三万六千石　居城攝州島上郡高槻　江戸ヨリ百三十二里

高山右近居、元和三、土岐山城守定吉、同三、松平紀伊守家信、寛永十、岡部美濃守宣勝、同十七、松平若狹守康信、慶安二、永井日向守直清、以後代々領之、

九鬼長門守柳間朝散大夫　三万六千石　居城攝州有馬郡三田　江戸ヨリ百三十七里餘

柳間青木源五郎重義　一万石餘　在所攝州豐島郡麻田（江戸ヨリ百卅三里）山崎左馬介居、天正十八、有馬中務大輔則頼、同玄蕃頭豐氏、元和七、松平丹波守康長、寛永十一、九鬼大和守久隆以後、代々領レ之、寛永年中ヨリ、青木氏代々領レ之、○節略

田數石高

〔倭名類聚抄 五國郡〕攝津國○註略 管十三（田萬二千五百二十五町百七十八歩）

〔伊呂波字類抄 國郡部〕攝津國（管十三○中略）　本田一万二千十四町

〔海東諸國記〕攝津州　郡十四、水田一千一百二十六町、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕攝津上　十三郡（○中略）田萬千三百十四町

〔新撰類聚往來 下〕攝津攝州　十三郡（○中略）田數三万三千三百十四町也

〔日本鹿子 三〕攝津國　十六郡、大上國、○中略　知行高二十九万九百石

〔官中秘策 一〕攝津國○中略

一石高三拾九万貳千七百七石餘

〔吹塵錄 五人口及國高〕天保度御國高調○中略

攝津國御料私領　一高四拾壹万七千三百九拾九石壹斗貳升七合

出擧稻

〔延喜式 二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻○中略

攝津國正税公廨各十八万五千束、國分寺料一万五千束、大日寺料五千束、修理池溝料三万束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕攝津國○註略 管十三（○中略正公各十八萬五千束、本稻四十八萬束、雜稻十一萬束、）

國産貢獻

〔延喜式 十五內藏〕諸國年料供進○中略

畿內國營田舂米六百五十四斛七斗三升二合（○中略）攝津國二百九斛七斗九合

〔延喜式 二十三民部〕交易雜器○中略

攝津國酒槽十七隻、（長各八尺、廣二尺三寸、手長一尺、）圓槽四隻、槽六口、輿籠五十口、臼八腰、杵十四枝、匏一百七十五柄、置簀五十四枚、

凡五畿內丹波等國、例進雜器幷櫃、十月以前充進、若致未進、移式部省、不聽國司預新嘗會節、

交易雜物略○中　攝津國大豆三石、小豆卅五石一斗、薑子九斗、薦一千五百枚、

〔延喜式主計二十四〕攝津國行程一日

調、薬薦五百枚、折薦一千廿枚、明櫃十合、大明櫃二百卌五合、小明櫃一百八十四合、折櫃一千二百九十六合、麻笥三口、板笥六百三合、圓笥一百廿四合、大笥四百五十合、陶鑪瓮四口、脚短坏卌六合、筥坏二百七十二合、水椀卅九合、壺坏七十合、自餘輪鍑、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子略○中　攝津國菁子二擔、覆盆子四擔、楊梅子四擔、花橘子二擔、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略○中

攝津國卅四種　獨活、漏蘆各五斤、茹莓、松脂、桑根白皮各四斤、橘皮六斤、墻薇根、烏賊骨各四斤、桔梗廿三斤六兩、香薷七斤、白朮廿三斤、枳實、黃蘗、玄參、人參、茯苓、升麻各三斤、厚朴十斤、杜仲三斤十二兩、松蘿、萆薢、地楡、桑螵蛸各二斤、桃花十兩、夜干五斤、茜根一斤、蜂房七兩、菟絲子二升、署預六升、桃人一升、車前子、葶藶子、蓼子、蜀椒各三升、荏子二升五合、胡麻子○此間有脫文、各四升五合、杏人一斗九升、鼈甲四枚、鹿角四具、葵子大五升、枸杞六斤、

〔延喜式內膳三十九〕年料略○中　攝津[illegible]

〔毛吹草三〕攝津

天滿宮前大根　新艘　立臼　韋囊　碁盤　川崎島木綿　フケ島　福島縞木綿　雀鮨江鮒也、腹ニ飯ナ多入タルガ、雀ノゴトタフクル、ヲ以云ナリ。　野里川島村蟹昔島村ト云人、此所ニテ合戰シ果ケル、其幽靈ト云、カニノ甲ニ人顏スハレリ、　京橋網島網

今橋戶障子　高麗橋團子ダンゴ　古手道ニツギハギ、又新染ナ云、　繪馬麁相物也　道修谷延命散定齋藥トモ云、根本之出所也、　疊

薄緣麁相物、相國ニ行、　平野町傘　双六石賽　備後町摺碁石　安土町厨子　紫革　錦革　毛皮細

工　唐物町切革細工　久寶寺町紙子　澀紙麁相物ナリ　橫堀川引板　榑板諸國ニ遣ス　阿波堀川石

人口

灰（シジミ貝ノ灰ナリ）　安堂寺町髮（モジ）　津村木綿織帶、同織足袋、（指豆袋ノゴトク織レ之）　雪踏　張人形（世ニ是ヲオキアガリコボシトモ云也）　張箱（蒔相物也）　難波橋筋文臺　重箱（蒔相物）　阿波座指物（櫃箱等ヲ切合、雛様ニテ計諸國ヘ商レ之、）　大溝筋

木綿組緒（蒲團張葛籠等ニ用レ之）　大坂高津瓦　生玉澀（サビ）土　玉作疊針　天王寺鋸　綿體　ハゼ　蕪　住

吉御祓團子　松露　水仙花（分テ當所ニ多シ、桐ノ箱ニ入テ諸方ヘ遣ス、）　馬刀（マテ）　酢蛤　木津瓜　難波干瓢　今宮千

生瓢簞　古妻木綿　遠里小野油　築島櫛　キセル　將碁馬　堺北庄大道筋朱座　丹　唐土

鉞割　阿仙藥　粒半夏　疊庖丁　柳町針口　櫻町鐵炮　分銅下地　秤金竿　小櫻町多葉

古庖丁　土井原鋸　針金　中濱懸硯　机　十露盤　天秤　旦過小路圍爐裏　木綿織緒（箱掛物等）

（ノ緒ニ用レ之）　ドシ織帶　山口筋大工墨斗糸　川口蜆　鮒　尼崎餅貝　蛤　爪白蟹　西宮水鰊

水鱧　小鯛　烏帽子糖（アメノ金（カネ）トモ云）　御影飛石　兵庫簾　干小鰯（世ニ是ヲゴマメ、又コトノバラト云）　同鯷漬　牛舌

赤貝　須磨濁酒（サヽホロヤ、波コヽモトヲ打過テ、スマデノムコソ、濁酒ナレ、所ニ云ナラハシタル歌ナリ、）　多田紺青　緑青　藜蘆　生木

香　香薷　防己　木通、菊花　葛根　銀銅　勝尾寺氷餅　能世篇栢（外ヨリ勝レリ、ワラニテアミタルヲイヘリ、）

一倉炭（此所ヨリ池田ノ市ニ出テ賣ナリ、故ニ是ヲ池田炭共云、）　池田呉服綾服御衣　名鹽鳥子　有馬引物（湯ノ山引共云宜シ）　楊

枝　竹柄杓　竹水嚢　人形筆　眉作　庖丁　菜刀　鼓瀧盃山蒔砂　藥師山琢砂　伊丹酒

富田酒　漬物　三島江大根（勝テ太シ、雜煮用レ之、）

〔官中秘策　一〕攝津國（略）○中

一人數八拾万三千五百九拾五人　内（男四拾貳万六千七百五拾六人　女三拾七万六千八百三拾九人）

〔吹塵錄　五〕（御料私領人口及國高）諸國人數調（文化元甲子年）○中略

一人數七拾八万九千八百五拾七人　高三拾九万貳千七百七石餘　攝津國

（弘化三丙午年）諸國人數調○中略

内（男四拾壹万九百六拾六人　女三拾七万五千八百九拾壹人）○中略

高四拾壹万七千三百九拾九石餘　攝津國

御料私領
一人數七拾六万三千七百貳拾八人
内
三拾八万九千八百六拾四人　男
三拾七万三千八百六拾四人　女

○按ズルニ、文化度ノ諸國人數調ノ總計ハ内譯ト合ハズ、蓋シ一誤アラン

風俗

〔人國記〕攝津國

攝津國之風俗、山城之國ニ似タリ、一圓不可好也、先武士ハ町人百姓ノナス所ヲ我ガ業ト覺テ、是ヲ眞似、而モ其當然ヲ勤ル處ハ、武士之業之樣ナレドモ、武藝ヲ學ブハ渡世之爲、光陰ヲ送ラン所作也ト覺ユル風俗ニテ、更ニ武士之武士ニハ非ズ、而僞リ諂フ類之人多シ、亦町人ハ武士ヲ眞似、己ガ實ニ勤ル身ニアラザレバ、譬バ座敷之置合ニ兵具ヲナラベ置テ、インケンヲ吐キ、亦ハ刀脇指ヲ拵ニモ、異風ニ作リテ金銀ヲ費シ、己ガ業ヲバ如形大樣ニモテナシ、百貫之身體之者ハ、千貫モ持タルヤウニ有德顏シテ、己モ身上ヲ滅シ、人ニモ損ヲカクル風俗也、雖然北郡之者ハ實儀少有、武士モハゲシキ處有テ、諂フ心スクナシトイヘドモ、國風ヲマヌカル、事ナクテ、百人ガ九十人ハ欲心深シ、是國ノ人ヲ傾ンニハ、威ヲ專ニシテ、金銀花飾ヲ以テ是ヲナビクベシ思ヒ、諂タル心ナク、我々ガチ成風俗故ニ、欲ニフケリ威ニ恐ル、形儀也、サレドモ和泉之國ニハハル〲マサレリ、若柔ニ而示ス則ハ威ヲ蔑ハレ、還テ害ト成ベキ國風也、大和山城河内之ハブレノ國成故ニ、四ケ國之水土集リタル風俗ナレバ、善事モ有テ、亦惡キ事モ有トイヘドモ、總而之風儀、柔弱虛談之國風故、武ハ用ルニ不足也、雖然間々義ヲ辨フルモノモ可有トハ、北郡ヲ差テノ事也、　口傳

右五畿之風俗、都而智惠ハシリテ、實ヲ失フ人多シ、人ハ唯實ヲ本ト而身ヲ定ルヲ以テ人トス、實寡ク虛多ク智有者ハ疑之第一也、實寡フ而虛多ク智有者ハ、疑心多ク而一和スル事ナキ也、己ヲ全フ而人ヲ不可疑也、人我ヲ疑フハ我ニ實不足乎、我ニ實有ト云共、來ル人虛之邪智カト可知也人々ヲ疑フ風俗之國成故ニ、人ヲ而人ヲ疑セテ、時至ラバ不招トモ可來、此時出陣セバ、一陣ニ向

フテ滅セン事手中ニ有、猶口傳、

〔攝津志　一〕風俗　習俗喜勤、意氣慷慨、殷富奢靡、厚于滋味、崇尙浮屠、不好名敎、

〔日本鹿子　三〕攝津國中名所之部、

難波　郡の名也、大坂より未申のかた也、〇歌略

長柄橋　難波より北也、橋はなし、〇歌略

渡邊橋　是も難波邊也、天王寺の北一里なり、長柄は此所より北也、淀川の末也、渡邊橋今ははしなし、その跡のみいひつたへて侍る、此所に熊野の一の王子御座なり、是より神崎といふ所ちかし、川尻大江の岸などいふ所あり、〇歌略

蘆屋の里　天王寺よりいぬゐのかたなり

鳴尾崎　なには近所なり、かい邊なり、〇歌略

田蓑島　天王寺の西、海邊也、源氏身をつくしに、光源氏みやこより住吉へまうで給ふに、明石のうへに行逢給ふと有も、此あたりの事とかや、

御津松原　是も難波近所也、敷津などいふ所あり、〇歌略

高師濱(タカシノハマ)　遠江に同名有、難波郡のうち也、小松崎、蘆間、橋本などいふ所あり、〇歌略

住吉　郡の名也、西は海、北は難波、南は阿波也、淡路は西なり、明神の宮井西向也、松原あり、住吉のかたははまなり、あられ松原當所也、難波より住吉へ一里餘也、〇歌略

安倍野　すみ吉より北のかたなり、〇歌略

長井浦　〇歌略

遠里小野　住よしゟ東也、〇中略

猪名山　〇歌略

芥川　いなのうち也、北より南へながれたる細き川也、京よりつくしへ下る海道なり、大田の宿といふ所より十町計東也、大田迄京より六里なり、〇歌略

武庫川　北より南へながれたる川也、山は北也、大田宿より西いなの内也、

有馬山　出湯あり、いなのうち也、北にはるかに見えたり、いなの奥なり、美作の境なり、俗に湯の山といふ、京より廿里なり、西の宮は南にあたる也、しば山はやまいづれも北に見えたり、〇歌略

小夜(コヤ)池　大田の宿よりは西なり、鳴尾の北也、

打出濱　北は山、南は海也、西の宮より十八町西也、小清水と云宿より西の宮は南なり、小清水と打出は未申也、京より兵庫へくだれば海邊に出る初也、十三里也、近江に同名あり、過ればすゞめの松原といふあり、勝尾山といふ山寺あり、瀬川と云宿の北也、こやのあたり也、

箕面　北は山寺あり、辨財天也、瀧あり、勝尾山のつゞき也、

五月山〇歌略

御影の森　すゞめの松原の内也、社あり、天神の御座也、南向也、海きわの海道也、北は山なり、

生田の里　北は山、南は海也、東西へ遠き所也、〇歌略

布引の瀧　生田のもりより北山をく也、山より南へながれたり、〇歌略

湊山　兵庫の北なる宿なり〇歌略

輪田の御崎　ひようごの南に出たるすゞ崎の事也、兵庫は南向なり、いにしへのつきしま有之、〇歌略

夢野　兵庫より北、みなと川邊也、

蓮の池　ひようごより西十町計也、湊川の宿よりも西也、うみより北也、

廣田濱　兵庫より五丁計西なり

須磨　北は山、南は海也、蓮の池より西なり、間ちかし、○中略歌　須磨の里は兵庫より一里餘なり、西也

京より兵庫まで十八里也、そなれ松は、里より南濱邊に有之、○中略

鼓瀧　有馬湯本より八丁程南にあり

〔延喜式　二十八兵部〕諸國健兒○中略　攝津國卅人

古事類苑

地部六

伊賀國

伊賀國ハ、イガノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ伊勢、南ハ大和、西ハ山城、大和、北ハ近江ニ堺シ、東西凡ソ七里、南北凡ソ九里アリ、天武天皇ノ朝、伊勢ノ阿拜、山田、伊賀、名張四郡ヲ割キテ此國ヲ建テ、國府ヲ阿拜郡ニ置ク、延喜ノ制、下國ニ列ス、明治維新ノ後、阿山名賀ノ二郡ト爲シ、三重縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊賀 以加

〔易林本節用集 下〕伊賀 伊州

〔日本風土記 一寄語島名〕伊賀 衣加

〔倭訓栞 前編三伊〕いが　伊賀の國號もあがの轉音にて、猿田彥神の女吾娥津媛命より出たるよし風土記に見え、倭名鈔伊賀郡阿我と見えたり、

〔日本總國風土記 五〕伊賀國

猿田彥神女吾娥津媛命、〇中略　又此神之依知守國、謂吾娥之郡、其後淸見原天皇御宇、以吾娥郡分爲國之名、後改伊賀、吾娥之音轉也、

位置

〔日本經緯度實測〕北極出地

伊賀　簗瀨村 名張郡　三四度三七分三〇秒　左那具市　三四度四八分三〇秒〇中略

疆域

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中　伊賀　粂瀬村　東〇度二〇分三六秒

〔國分記〕伊賀國竪横之事

一長、北近江堺丸柱村ゟ、南へ和州堺安部田迄九里半、

一横、西山城堺よひ坂ゟ、東伊勢堺之別符村迄九里、

〔伊水温故春〕伊賀國分來由略〇中

凡國の境は、艮より巽の方に至て、伊勢國に弁たり、午より酉の方に大和國に弁ぶ、戌の方は山城、亥子の方は江州に合たり、

〔日本地誌提要八伊賀〕疆域　東ハ伊勢、南ハ大和、西ハ大和、山城、北ハ近江ニ至ル、東西凡七里、南北凡九里、

地勢

〔易林本節用集下〕伊賀略〇中四方一日、東南海面北山多、依生暖氣草木竹蕩多、小上國也、

〔伊水温故春序〕爾白鳥乃伊賀國は、四境の八重山に巍峙として、唯翠屏のごとくに峙ち、山満苔露、渓谷の湍狹間を礒、嵯山の觸水少成しに、行末は、山川數十の流を催し、森汇と落絢て、青山河の河不ヨ行は、猶岷江不異、浩る處を田附し國は、伊水の名を得たり、略〇下

道路

〔三國地志五十八伊賀〕路程　按、上野ヨリ京師ニ至ル十八里或神童寺越十六里　江戸ニ至ル百七里廿八町

南都ニ至ル九里　大坂ニ至ル十八里　津ニ至ル十二里　勢州龜山ニ至八里　松坂ニ至ル十四里　江州彦根ニ至十八里　大津ニ至ル石部越十七里田上越十三里　瀨田ニ至ル玉瀧越十五里田上越十一里　膳所ニ至ル十里　水口ニ至ル七里　和州初瀨ニ至ル十一里　宇多ニ至ル十一里半　紀州和歌山ニ至ル三十六里

官道　東國路　按、伊賀山城州界大川原ヨリ島ケ原ニ至ル一里廿町拾間、島ケ原ヨリ上野ニ至ル

二里、(所歷曰川南、曰三本松、曰山口、曰市場、曰小田、)上野ヨリ佐那具ニ至ル一里十五間、(所歷曰服部、曰印代、曰松原、)佐那具ヨリ柘植ニ至ル二里、(所歷曰御代、曰下柘植、曰中柘植、曰野村、)柘植ヨリ勢州加太ニ至ル二里八町、(所歷曰小林、曰岡花、)通計八里廿九町十五間、

神宮道(俗參宮道ト云、大和攝津ヲ經ル參宮人多ク此ノ道ニ出ヅ、)按、名張ヨリ阿保ニ至ル二里半、(所歷曰藏持、曰新田、曰七見、曰羽根、)阿保ヨリ伊勢地ニ至ル一里、(所歷曰岡田、曰下川原、)伊勢地ヨリ勢州垣内ニ至ル三里、(所歷曰松地、曰伊賀茶屋、)通計六里半、

京師道　按、一ハ島ケ原ヨリ城州大河原ヲ歷テ笠置ニ至ル、一ハ佐那具ヨリ玉瀧ニ至リ、江州深川ヲ歷テ石部ニ至ル、

江戶道　按、柘植ヨリ加太ヲ歷テ關ニ至ル、東國路是ナリ、

伊勢道　按、上野ヨリ山田ニ至ル二里、(所歷曰車坂、曰西明寺、曰荒木、曰眞泥茶屋、曰川原出、)山田ヨリ平松ニ至ル二里廿二丁、(所歷曰中村、曰廣瀨觀音寺、曰下阿波、)平松ヨリ長野ニ至ル二里十四丁、(所歷曰元町、曰汁付、曰峠、)

〔日本實測錄二街道〕從伊勢國津歷伊賀國至木津(中略)〇

伊賀國山田郡平松宿　二里二十町四十二間　平田宿　二里三町四十六間(至上野車坂町一里三十二丁)　阿拜郡上野農人町　五町四十七間　同中町(至愛宕社七丁四十八間)　二里二町四十八間　島ヶ原宿　一里三十三町三十三間(至國界二十三丁)　山城國相樂郡北大河原村(中略)〇

從伊勢國市場庄歷大和國至西京(中略)〇

伊賀國伊賀郡伊勢地村　二里五町三十五間　阿保宿　三里三町一十八間半　名張郡簗瀨村名張町三十四度三十七分半　二里一十一町三十九間(至國界一里一十八丁三十九間)(中略)〇

從東海道關歷加太至上野(中略)〇

伊賀國阿拜郡上柘植宿三十四度五十分半　二里一十一町一十八間　佐那具宿三十四度四十八分半　一十三町三十九間　東條村(至一宮敢國神社一十三丁)　一里四町二十四間　上野農人町(自關至上野

街道、通計七里一十八町五十九間、

〔神風行嚢抄　二〕阿波〈自長野(伊勢堺)到于此二里〉　上野〈自阿波三里〉　城主藤堂和泉守　島ケ原〈自上野二里〉　大河原〈自島ケ原一里卅丁、是ヨリ山州ナリ、○中略〉是路ノ事、勢州關ヨリ經伊州、到于奈良、別卷ニ委ク記之、是ニハ大概ヲ書ス、

〔日本書紀　二十八天武〕元年七月辛卯、遣田中臣足麻呂、令守倉歷道、

〔日本書紀通證　三十三天武〕倉歷道〈倭名抄、近江國甲賀郡藏部、久眞布、又伊賀阿拜郡柘植郷有倉部里、〉

宿驛

〔三國地志　七十五伊賀〕伊賀郡

阿保驛　按和州ヨリ伊勢神宮ヘノ官道ナリ、名張ヨリ此ニ至ル三里、阿保ヨリ勢州垣内ニ至ルコト四里、

〔三國地志　八十一伊賀〕名張郡

名張驛、〈又曰簗瀬、或作南張、○中略〉按和州大野ヨリ、本國上野、又ハ阿保ヘノ驛次ナリ、古驛ハ名張ヨリ西南二十町許、今ノ丈六村ニアリト云、古市アリ、今ニ至テ民居市鄽ニ類ス、

〔日本書紀　二十八天武〕元年六月、及夜半到隱郡、焚隱驛家、因唱〈○唱原作昌、恐誤〉邑中曰、天皇入東國、故人夫諸參赴、

〔日本書紀通證　三十三天武〕隱驛家〈在簗瀬郷、倭名抄、諸國郷名有驛家、即此、〉

〔日本書紀　二十九天武〕朱鳥元年六月庚寅、名張厨司災之、

〔釋日本紀　十五述義〕名張厨司

彙方案之、伊賀國之驛家也、

建置沿革

〔日本國郡沿革考　二東海道〕伊賀　白鳳〈○天武〉九年七月、割伊勢國四郡、建伊賀國、〈扶桑略記、倭姫世記、國造記云、志賀高穴穗朝定伊賀國造、難波朝隸伊勢國、〉下國、管四郡、百八十二村、

阿拜（六十九村、古府治、神宮儀式帳作阿閉、倭姫世記、神名秘書作敢、）　山田（二十五村）　伊賀（五十村、延長風土記云、伊賀津姫之領地、仍爲郡名、又爲國名、）

名張（三十八村、古事記那婆理之稲置、卽是、天武紀作隠郡、釋日本紀作名墾、）

〔日本地誌提要 八伊賀〕沿革　古ヘ國府ヲ阿拜郡ニ置ク、（今ノ西條村是ナリ）鎌府ノ時、平賀朝雅、大内惟義、子惟信、相繼テ守護タリ、足利尊氏ノ筑紫ヨリ京ニ入ル、仁木義長ヲシテ、伊勢守護ヲ以テ本州ヲ兼知セシメ、子孫ニ傳フ、應永ノ初、將軍義滿、名張伊賀二郡ヲ北畠顯泰ニ與フ、永正ノ末、仁木氏衰ヘ、柘植服部諸族相鬩ク、北畠氏擧テ之ヲ降ス、天正九年、織田信雄、諸族ヲ滅シ、其地ヲ併セ、瀧川雄利ヲ以テ守護ト爲シ、上野城ニ居ラシム、十一年、信雄、豐臣秀吉ト隙アリ、秀吉ノ臣脇坂安治、上野ヲ襲ヒ雄利ヲ逐フ、秀吉、安治ヲシテ長田市場ニ居テ州事ヲ管セシム、明年、筒井定次ヲ封ズ、慶長十三年、德川氏其封ヲ收メ、之ヲ藤堂高虎ニ賜ヒ、世襲、王政革新、三重縣ヨリ兼治ス、

〔扶桑略記 五天武〕九年七月、割伊勢四郡、建伊賀國、（○又見倭姫命世記、帝王編年記、）

〔先代舊事本紀 十國造〕伊賀國造

志賀高穴穗朝（○成務）御世、皇子意知別命三世孫武伊賀都別命、定賜國造、難波朝（○孝德）御世、隷伊勢國、飛鳥朝（○天武）代、割置如故、

〔續日本紀 五元明〕和銅五年九月己巳、又詔曰、（○中略）況復伊賀國司阿直敬等所獻黑狐、卽合上瑞、（○中略）其伊賀國司目已上、進位一階、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年（○元曆元年）三月廿日己酉、今日大内冠者惟義、可爲伊賀國守護之由、被仰付之云云、

〔日本鹿子 六〕伊賀國　上野　江戸ヨリ百七里廿八町

天正十一年以後、尾張及當國、織田信雄領ス、

慶長十三年ヨリ　（當領主勢州共）藤堂和泉守高虎持分　同大學頭高次持分　同和泉守高久持分

慶長十一年（八万千石指出高）　（當領主勢州共）筒井伊賀守定次

國府

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊賀國 國府在阿拜郡、行程上二日、下一日、

〔三國地志 六十七伊賀〕國府　西條村ニ地名存ス、是則舊府ノ地ニシテ、今府中鄕內ナリ、

〔伊水温故 夏〕國府　三田村

此處には國中の土貢を被納所にて、御倉の跡今も侍る、〇中略

國府湊　東條村 西條村

戀の森に續く地なれば戀の湊可也、小川府中村の前を流れ三田の鄕へ水落る也、府中國府同訓にして、其地を流る川なれば、國府の湊共可唱か、其共戀の神、貴布禰垂跡の地なれば、歌には戀の森と知べき也、昔は船の著たりと覺、小川の上に舟戸と云處も有、

郡

〔延喜式 二十二 民部〕伊賀國下 管 阿拜 山田 伊賀 名張 〇中略 右爲近國、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕伊賀國 〇註略 管四 〇註略 阿拜 安部、國府、 山田 也末太 伊賀 同、與國 名張 奈波利

〔伊水温故 春〕伊賀國分來由

郡の方角は、阿拜郡は北に當、山田郡城下、上野の東、伊賀郡は巽より酉の方にて　名張郡は國の坤方

〔皇國郡名志〕伊賀國 四郡

阿部 アヘ　●阿保　●伊セ地　△七見峠和界　△長田川口ヨリ勢界賀

山田　●山田　〈平田町〉　●平松　勢界郡

伊賀 イカ　[上野]　〈繩人町〉　●丸柱 城江界　●佐那具　●中柘　●島ヶ原　●三本松

名張　〈名張〉　△名ヘリ川　△黒田川 勢和界

〇按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕伊賀

	阿拜	山田	伊賀	名張	
六國史古書	阿閉紀			名墾紀 隱紀 名張紀	
延喜式	阿拜アヘ	山田ヤマタ	伊賀イガ	名張ナハリ	管四
倭名抄	同安部	同也末太	同與國名同	同奈波利	同
拾芥抄	同	同	同	同	四郡
諸書	阿拜知元 綾國	同國知元	阿我國 伊賀知元	同國知元	
郡名考	阿拜アエ	同ヤマダ	伊賀イガ	同ナバリ	同
天保郷帳	同アヘ[illegible]	同	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同	同	同
地誌提要	同アハイ アベ	同ヤマタ	同イガ	同ナバリ	同
郡區編制	同	同	同	同	同

阿拜郡

〔東大寺小櫃文書上〕民部省牒東大寺三綱所

伊賀國

合田壹町漆段陸拾伍步　阿拜郡一町一百廿五步〇中略

天平神護三年二月廿八日〇署名略

〔日本書紀天武二十八〕元年九月丙申、車駕還宿伊勢桑名、丁酉、宿鈴鹿、戊戌、宿阿閉、

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年九月五日癸未、伊賀國阿拜、山田、伊賀三郡田六町九段二百八十八步施入

貞觀寺、

〔東大寺小櫃文書下〕散位藤原朝臣實遠先祖相傳所々領掌田畠目錄事

伊賀國　在合〇中略

阿拜郡　三田鄉〇中略

天喜四年二月廿三日〇署名略

山田郡

〔東大寺小櫃文書下〕散位藤原朝臣實遠先祖相傳所々領掌田畠目錄事

伊賀國　在合〇中略

山田郡

一處　食代村　四至東限高山、南限山、西限黑山、北限谷口、〇中略

天喜四年二月廿三日〇署名略

伊賀郡

〔大神宮諸雜事記一〕垂仁天皇卽位廿五年丙辰、天照坐皇太神〇中略倭姬內親王奉戴天、先伊賀國伊賀郡一宿御坐、卽國造奉進其神戶、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月甲申、卽急行到伊賀郡、焚伊賀驛家、

〔東大寺小櫃文書下〕散位藤原朝臣實遠先祖相傳所々領掌田畠目錄事

伊賀國　在合

伊賀郡

一處　猪田鄉　四至東限阿我條格、南限防道國、西限治田村、北限大內堺、〇中略

天喜四年二月廿三日〇署名略

名張郡

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年十月癸未、車駕到伊賀國名張郡、

〔倭姬命世紀〕六十四年〇垂仁丁亥、遷幸伊賀國隱部ナバリ〇部本元一市守宮、二年奉齋、

〔日本書紀孝徳二十五〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、〇中略凡畿內、東自名墾横河以來、〇中略爲畿內國、

〔東大寺小櫃文書下〕散位藤原朝臣實遠先祖相傳所々領掌田畠目錄事

伊賀國　在合〇中略

名張郡　一處　矢川村　四至東限柚山、西限宇陁河、南限知陁賀明神、北限矢川、〇中略

右件所所、先祖相傳領掌、而年老衰之間、或荒廢、或牢籠、依茲有相傳領掌道理上、爲得敎養存生之時、讓與卽甥養子藤原信良朝臣旣畢、仍勒目錄讓文如件、

天喜四年二月廿三日〇署名略

〔倭名類聚抄六國郡〕伊賀國　阿拜郡　拓殖〇拓恐柘誤　川合　印代　服部　三田　新居

山田郡　木代　川原　竹原

伊賀郡　阿保　阿我　神戸　猪田　大內　長田

名張郡　周知　名張奈波利　夏身

〔三國地志伊賀五十九〕阿拜郡　鄕名

柘殖〇中略　按、天武紀積殖ニ作リ、倭姬世記云、都美惠是ナリ、風土記植柘ニ作リ、盛衰記殖柘ニ作ルモノハ、顚倒或ハ誤字ノミ、天平勝寶、永保、永久等ノ年間東大寺古文書、阿拜郡柘植鄕ニ作ル、植恐クハ誤寫ナラン、倭名鈔柘ノ訓豆美、今柘植ニ作リテ黃楊ノ訓トスルモノハ古義ニアラズ、今上柘植、中柘植、下柘植、野村、愛田、新堂、御代、楯岡、小杉、柏野、上村、是ヲ呼テ柘植鄕ト云、　河合〇中略按、東大寺古文書、阿閉郡河合鄕、今河合、馬田、千具、田中、石川、圓德院、波鋪野、馬場、西澤、是ヲ河合鄕ト云、　印代今屢〇中略　按、今村名ニ存ス、　服部〇中略　按、今服部、羽根、高畠、寺田、荒木、西明寺、是ヲ服部鄕ト云、　三田〇中略　按、東大寺古文書、阿拜郡三田鄕云々、今三田、大谷、守羽、北會、河內、丸柱、是ヲ三

田鄕ト云、　新居　按、續日本紀新家ト云是也、今西山、西村、東村、風野間、是ヲ新居鄕ト云、　已上和名抄ニ出ル所ナリ、○中略　長田　按、東大寺古文書、阿拜郡長田鄕云々、舊伊賀郡ニ屬ス、今更テ本郡ニ移載ス、長田、朝屋、木興、大野木、法華、大內、下庄是ヲ長田鄕ト云、　小田　按、今小田、上野、農人町、久米、淺宇田、四十九、是ヲ小田鄕ト云、　府中舊作二國府一　按、西條村ニ存ス、東條、西條、土橋、山神、印代、坂下、是ヲ府中鄕ト云、　一宮　按、今一宮、千歲、佐那具、外山、是ヲ一宮鄕ト云、　北五箇○中略　按、今玉瀧、內保、西湯舟、友田、上中下三村ヲ一鄕トス、是ヲ北五ケ鄕ト云、　島ケ原　按、淮后伊賀記、島ケ原鄕云々、大道、與村、中屋、河南、中村、是ヲ島ケ原鄕ト云、風土記伊賀郡ニ屬ス、今更テ本郡ニ移載ス、　壬生野○中略　按、今川東、川西、山畑、是ヲ壬生野鄕ト云、　已上七鄕ニ上ノ五鄕ヲ合シテ十二鄕今存スル所ナリ、　音羽今缺　淮后伊賀記曰、音羽鄕、按今村名ニ存ス、

〔倭姬命世記〕活目入彥五十狹茅天皇○垂仁卽位二年癸巳四月四日、遷于伊賀國敢都美惠宮、二年奉齋矣、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月辛酉朔壬午、會明至莿萩野、暫停駕而進食、到積殖山口、高市皇子自鹿深越以遇之、

〔東大寺小櫃文書下〕小治田藤麻呂解申立賣買舍宅幷墾田等券事

家壹區　地貳町　在阿拜郡柘殖鄕○中略

右左京三條四坊戶主小治田朝臣藤麻呂家幷墾等、頓賣東大寺已訖、仍注狀以解、

天平廿年十一月十九日○署名略

〔東大寺小櫃文書下〕伊賀國司解申貢買開田地立券文事

台地壹拾町　開田四段　島九町六段　限東界樋宮谷　南界驛道　西南角界藤原夫人地　北界山嶺　過價錢玖貫文

右在阿拜郡柘殖鄕、左京四條二坊正五位上市原王之地如件、此今爲東大寺家通分買得已訖、仍依

式立券參通、以一通爲國案、以一通爲郡案、以一通付寺家案、

天平寶字二年十一月廿八日（署名略）

〔東大寺小櫃文書下〕注進

栢殖川合兩郷山内土作目錄田事

合

栢殖郷山内土作四十八丁五反百歩　川合郷山内土作廿丁五反六十歩

右件兩郷山内土作注進如件

永久三年五月廿五日（署名略）

〔吾妻鏡三〕壽永三年（○元暦元年）五月廿四日辛亥、左衞門尉藤朝綱、拜領伊賀國壬生野郷地頭職、

〔源平盛衰記四十一〕三日平氏附維盛舊室歎夫別并平氏歎事

同（○元暦元年六月）六月八日、（○中略）秀義ハ、法勝寺領大原庄ニ入、平家ハ伊賀壬生野、平田ニアリ、行程三里ヲバ不過ケリ、（○中略）源次能盛、貞繼法師三百餘騎ノ兵ヲ引卒シテ、栢植郷、與野、道芝打分テ、近江國甲賀郡上野村、樝窪、篠鼻田、堵野ニ陣ヲ取テ、北ニ向テ磬ヘタリ、

〔源平盛衰記三十五〕範賴義經京入事

當國（○伊賀）ノ一宮南宮大菩薩ノ御前ヲバ、心計ニ再拜シテ、暫新居川原ニ磬タリ、西ニ平岡アリ、九郎義經、里人ヲ招キテ、是ヨリ宇治ヘ向ハンニハ、何地カ道ハ能ト問給ヘバ、西ニ見エ候平岡ヲバ、アヲタ山ト申、其ヨリ前ニ、頸落瀧ト云所ヲ通ルニハ、近ク候ト申、

〔三國地志伊賀六十八〕山田郡　郷名

中村　按、千戸、眞泥、畑、甲野、鳳凰寺、平田、出後、炊、富岡、中村、是ヲ呼テ今中村郷ト云、古千戸眞泥畑、是ヲ河原郷ト云、　阿波（一作淡、二作粟、伊賀記、佳后郷）（○中略）　按、上阿波、猿野、富永、下阿波、川北、廣瀨、是ヲ呼テ阿波郷ト云、　馬野（○中略）　按、奥馬野、中馬野、坂下、是ヲ呼テ馬野郷ト云、　喰代　按、喰代、鷹山、蓮池、是ヲ呼テ

喰代鄕ト云、　友生　按、上友生、界外、中友生、下友生、是ヲ呼テ友生鄕ト云、　已上五鄕今存在スル所也、　川原〈今廢〇中略〉　按、今畑村ニ川原出ノ字アリ、此地山田川ノホトリニテ水難ノ地ナレバ、此名アルニヤ、　竹原〈今廢〇中略〉　按、今廢シテ鳳凰寺村ニ存ス、　已上三鄕和名抄出ル所也、　阿野〈今廢〇中略〉　按、阿野ハ今上野ノ東南字野畠ノ地ナリ、古ハ郡ノ西界ニシテ、今阿拜郡ニ屬ス、　島合〈今廢〇中略〉　玉井〈今廢〇中略〉　按、今平田町ニ玉井ノ名アリ、　郡〈今廢〇中略〉　川向〈今廢〇中略〉　按、平田ヨリ出後ヲ呼テ川向ト云、

〔三國地志〕〈七十二伊賀〉伊賀郡　鄕名

依那具〈〇中略〉　按、依那具村ニ存ス、今依那具、市部、沖、才良、猪田、上郡、下郡、上神戸、下神戸、上林、山出、上莊ノ十二邑ヲ呼テ依那具ノ鄕ト云、　比土　按、比土村ニ存ス、今比土、高瀨〈比土支鄕〉古郡ノ三邑ヲ呼テ比土鄕ト云、　比自岐〈〇中略〉　按、比自岐村ニ存ス、今岡波、森、界外、摺見、折川ノ五邑ヲ呼テ比自岐鄕ト云、　北山　按、北山村ニ存ス、今北山、藤地、妙樂寺、瀧下川原、伊勢地、奥鹿野ノ七邑ヲ呼テ北山鄕ト云、又上津(カウト)谷トモ云、　阿保〈或云二十七津鄕、〇中略〉　按、阿保村ニ存ス、今阿保、岡田、柏尾、寺脇、別府、羽根ノ六邑ヲ呼テ阿保鄕ト云、　種生　按、種生村ニ存ス、今種生、諸木、腰山、霧生、高尾、老川、福川、川上ノ八邑ヲ呼テ種生鄕ト云、　小波田　按、小波田村ニ存ス、今上波田、下小波田、中村、東田原、新田ノ五邑ヲ呼テ小波田鄕ト云、　古山　按、古山村ニ存ス、今假治屋、東谷、南、安場、蔵縄手、湯屋谷、菖蒲池ノ七邑ヲ呼テ古山鄕ト云、　予野　按、予野村ニ存ス、今予野、治田、白樫、大瀧、桂ノ五邑ヲ呼テ予野鄕ト云、　已上九鄕今存スル所也、　阿我〈〇中略〉　按、阿我ハ神戸ノ舊名ニシテ、神戸ハ大神宮遷幸以降ノ名ナリ、今我山ノ半腹ニ我山ト云支鄕アリ、是舊鄕ノ遺稱歟、神戸四村、俗呼テ五箇鄕ト云ハ、伊賀記ニ謂ユル五保ノ名ノ存スルモノカ、　神戸〈〇中略〉　猪田〈〇中略〉　大内〈〇中略〉　長田〈今屬二阿拜郡一〉　按、已上五鄕和名抄ニ出ル所ナリ、今皆鄕廢シテ村里トナル、　霧生　按、已上伊賀記ニ出ヅ、今廢シ

テ村トナル、

〔令集解　四十喪葬〕古記云、遊部者、在大倭國高市郡、生目天皇〇垂仁之苗裔也、所以負遊部者、生目天皇之孽、圓目王、娶伊賀比自支和氣之女爲妻也、凡天皇崩時者、比自支和氣等、到殯所而供奉其事、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國戸、御厨、御薗、神田、名田等、〇中略

伊賀國〇中略　兩宮

比志岐御厨　神酒代布十七段、白布六反、井等、卜一丁六段、三石四斗八升、内宮御

〔三國地志　七十八伊賀〕名張郡　郷名

簗瀬　和名鈔云、名張、和名奈波利、今廢、曰簗瀬、〇中略　按、モト簗瀬村ハ村名ナリ、倭姫世記ニ簗作瀬ノ細鱗魚ヲ奉ルト、是地名ノオコル所ナリ、元德元年、及養和元年東大寺古文書ニ、簗瀬莊ニ作ルハ、本寺ノ莊園トナレバナリ、今南出、北出、平尾、藏持、夙、コノ六郷ヲ簗瀬郷ト云、　夏見　又作夏箕、今廢、〇中略　按、康保年間東大寺古文書、及後鳥羽院御巡禮記、神宮古記錄等、皆夏見郷ニ作ル、今村名ニ存ス、　周知　按、今所在詳ナラズ、　已上和名鈔ニ出ル所ナリ　薦生　按、薦生、八幡、鵜山、家野、葛尾、西田原、下三谷ノ七邑、今呼テ薦生郷ト云、　大屋戸　按、大屋戸、短野、夏秋、松原ノ四邑、今呼テ大屋戸郷ト云、　安部田　按、安部田、黒田、井手、結馬ノ四邑、今呼テ安部田郷ト云、　矢川　按、矢川、上三谷、瀧口、市之井、瀧長坂ノ五邑、今呼テ矢川郷ト云、　檀　按、檀、柏原、星川ノ三邑、今呼テ檀郷ト云、　中村　按、中村、瀬古口、青蓮寺、夏見ノ四邑、今呼テ中村郷ト云、　丈六　按、丈六長屋ノ二邑、今呼テ丈六郷ト云、　比奈知　按、上比奈知、下比奈知、瀧原、長瀬、布生、奈垣、神屋ノ七邑、今呼テ比奈知郷ト云、　已上八郷今存スル所ナリ　黒田　今廢〇下略

〔春日神社記〕第一御殿武雷神者、有出御於常陸國鹿島、人皇四十八代稱德天皇、神護景雲元年丁未六月廿一日、移御于伊賀國名張郡夏身郷、〇中略　註供奉者、社司二人、舍人一人也、

村里名邑

〔郡名一覽〕一伊賀國 皆私領 伊州 四方一日 東南海北山 四郡

高拾萬五百四拾石貳合　百八拾貳ケ村

●上野 百十三里 津ノ持)(○名張 一萬五千石 津藩 藤堂宮內

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕伊賀　四郡百八十二村　高十一万九十六石五斗三升六合 皆私領

阿拜郡六十九村　山田郡二十五村　伊賀郡五十村　名張郡三十八村

〔地勢提要〕坤 郡邑島嶼奇名

伊賀　阿拜郡、愛田村、御代村、印代村、山神村、名張郡、結馬村、山田郡、異泥村、猿野村、

〔續日本紀〕十三 聖武 天平十二年十一月甲申朔、到伊賀郡安保頓宮宿、大雨途泥人馬疲煩、

〔新撰姓氏錄〕右京皇別 阿保朝臣

垂仁天皇皇子、息速別命之後也、息速別命之後也、息速別命幼弱之時、天皇爲皇子築宮室於伊賀國阿保村、以爲封邑、子孫因家之焉、允恭天皇御代、以居地名、賜阿保君姓、廢帝天平寶字八年、改公賜朝臣姓、續日本紀合、

〔續日本紀〕三十八 桓武 延曆三年十一月戊午、武藏介從五位上建部朝臣人上等言、臣等始祖息速別皇子、就伊賀國阿保村居焉、遠於遠明日香朝廷、〇允恭 詔皇子四世孫須珍都斗王、由地錫阿保君之姓、〇下略

〔日本書紀〕三十 持統 三年八月丙申、禁斷漁獵於〇中略 伊賀國伊賀郡身野二万頃、置守護人、准河內國大鳥郡高脚海、

〔日本靈異記〕中 奉寫法華經因供養顯母作牛之因緣第十五

高橋連東人者、伊賀國山田郡噉代里人也、大富饒財、奉爲母寫法華經、〇下略

〔東大寺小櫃文書〕下 玉瀧御杣、湯船、柘田等四村工等謹解申請本寺政所恩裁事

請被殊任道理、奏聞事由於公家、令杣工等安土各村々愁狀、〇中略

天喜四年三月十日〇署名略

〔東大寺小櫃文書下〕應令東大寺進上證文、寺領伊賀國玉瀧杣內字鞆田村分田陸拾餘町并杣工肆拾餘人混合六條院御庄事、

右得彼寺去二月廿四日解狀稱、謹撿案內、玉瀧杣者、自天平年中以降、爲寺家領歷數百年、雖無指免田、以杣工作田爲雜役免所勤來也、所謂玉瀧村廿町、湯船村十五町、鞆田村六十餘町、杣工玉瀧湯船等村十五人、鞆田村卌人也、代代之間、敢無牢籠、爰去承德二年、依備前守平正盛寄文、以鞆田村內田廿町、被立券六條院御庄已畢、其後天仁二年、同村田十三町、都介村田卌餘町、暗被押籠之後、卌人杣工稱其作人、併駈仕之間、全不隨寺家之所勘、但於國司者、每年撿注之後、依例勘除、至于所當官物者、以寺家封戶百卌一石所率補也、〇中略

永久三年四月卅日

左大史小槻宿禰花押奉

〔東大寺小櫃文書上〕謹辭　請伊賀國領所等直事

合准米貳仟斛

右伊賀國名張郡矢川中村田畠直、如員所請如件、

延久六年七月六日〇署名略

〔東大寺小櫃文書上〕僧源祐謹奉渡　所領壹所事

合　在伊賀國名張郡字矢河中村者四至載公驗面〇中略

長承二年正月十七日〇署名略

〔三國地志伊賀九十九〕舊案

太政官符伊賀國司　雜事伍箇條內一

一應遣官使同停廢東大寺、興福寺兩寺押領字簗瀨、眞木山、丸柱、幷予野村等內公田參佰餘町不令辨濟調庸雜物事

東大寺領　字黑田庄（加納字簗瀨村、公田三百餘町）、眞木山村　丸柱村

興福寺西金堂領　字予野村、公田三十餘町、　島原保

得彼國守從五位上藤原朝臣信經去月十日奏狀偁、信經去正月廿四日任彼國守、先召在京雜掌等、尋問立庄之處、□公東大寺領黑田庄者、本田廿五町八段百八口也、而近代以降、募寺家威、押領字簗瀨、眞木山、丸柱三箇村內、公田三百餘町、公民一百餘家、不輸租稅、不勤課役、其中簗瀨村者、前司小槻祐□宿禰任、寬治年中、始□一別保之後、偏號寺領之間、藤原孝清任云、長治三年下宣旨、被停廢畢、眞木山村者、□□為重朝臣任、同下宣旨被停廢焉、丸柱者、源憲明任、始所稱彼庄領也、因玆代々之間、每經奏聞、或附使廳、令追却腐掠之徒、或遣官使被停止加納之地、雖然猶不懲嚴制、猥以所押取也、寄名廿餘町之免田、假奪三箇村之國領、貪猾之甚、爭無禁遏乎、又猪田鄉內予野村、公田卅餘町、忽號興福寺西金堂領、同不輸租調、國之蠹害、無過於斯矣者、望請天恩、任代々宣下狀、重遣官使、被停止彼兩寺所押領之公田三百餘町者、將伏彫弊之憂者、正二位行大納言藤原朝臣宗輔宣、奉勅依請者、以前條事如件、國宜承知依宜行之、符到奉行、

從四位上行權右中辨藤原朝臣（在判）　左大史正六位上惟宗朝臣（在判）

天養元年三月廿九日（○中略）

按、已上東大寺寶庫ニ藏ム、

〔源平盛衰記　三十五〕範賴義經京入事

九郎義經、里人ヲ招キテ、是ヨリ宇治ヘ向ハンニハ、何地カ道ハ能ト問給ヘバ、（○中略）是ヨリ長田里、花苑ト云所ヲ廻テ、射手大明神ノ御前ヲ、笠置ニ懸ツテモ、道能候ト申、

莊

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事

合〇中略

一顛倒庄々〇中略

伊賀國　名張郡須智村田一町、同郡畠川村栗林十二町四段二百四十六歩、〇中略

已上二十七處、依流記公驗明白注進之、

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔藤川記〕廿五日、〇中略かねては、水口より、伊賀のはとりにつくべき支度なれど、洪水に、道とをる事安からず、

〔十樂庵記〕一宮の祭あすといふことよひ、度會の行量にさそはれて、まうでゆき侍るに、宮のほどちかき里を千座村といふ、こゝは、神供などとゝのふる所になむ、みてくらそこら數見へて、神かせの國めきたり、

〔伊水溫故夏〕千座　千歲村

昔は千座村、中古謬り、今は千歲村といふ、千座とは神供所を云、

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地長德四年注文定

新發田幷治開田〇中略

伊賀國

阿拜郡柏野庄田廿町八段十九歩〇中略　笠間庄卌二町二百歩　鷹生庄合四町二百八十歩

庄甲庄

〔東大寺小櫃文書下〕税所

注進東大寺庄出作公田官物未進事〇中略

黑田庄出作　　名張郡公田內
　三斗米四百九十四石三斗四升八合　准米三百七十二石九斗五升二合　穎五千四百廿五束
鞆田玉瀧兩庄出作　　柘殖川合鄕公田內
　三斗米五十八石五斗八合　准米百九石一升三合　穎八百廿一束二把
右件未進便補東大寺御封米三百六十餘石之殘所注進如件、
　保安三年二月廿八日〇署名略

〔東大寺要錄〕二被院宣偁、伊賀國鞆田庄者、雖爲天平施入之地、非無地利開墾之主、因玆、正盛朝臣、承德二年、以相傳證文、寄進郁芳門院、御領庄號先了、〇中略
　貞應元年七月廿二日　　參議源雅淸
　謹上東大寺別當僧正御房

〔東大寺要錄〕二伊賀國阿波、廣瀨、山田、有丸庄者、爲平家沒官之地、前右大將家知行、而依後白河院勅命、被賜當寺總大工宋人陳和卿之日、右大將家同以次令去進地頭給了、仍和卿發善願、永以寄付淨土堂領矣、其旨具見于大和國讓文
院宣案
東大寺衆徒訴申、伊賀國阿波、廣瀨兩庄地頭職事解狀、副證文案如此、任道理可令成敗之由、可令仰遣關東給者、依御氣色、執啓如件、
　二月十日　　宗行奉
　　右大將殿
鎌倉殿御下文案右大將賴朝
下伊賀國山田郡內有丸、幷廣瀨、阿波杣山、可早停止地頭職事、
右件所、依爲沒官地、雖補地頭、依院宣所停止彼職也、早可爲宋人進上之狀、付使以下、
　建久元年十二月十二日

田數
石高

〔東大寺要錄〕二左弁官下東大寺

應令國司且停止武士狼藉且言上子細當寺諸國寺領貳拾參箇處事、〇中略

伊賀國　黑田庄　同新庄　同出作　簗瀨庄　薦生庄　玉瀧庄　鞆田庄　阿波庄　廣瀨庄

山田有丸庄〇中略

右近日都鄙騷擾、丁壯苦軍旅、俗之凋弊、職而斯由、就中五畿七道諸國、神社佛寺已下庄領、或武士寄事左右、煩費州縣、或民庶不營租稅、已命山澤、權大納言源朝臣通具宣、奉勅宜令下知彼宰吏等、停止狼藉、但若有子細者、言上聽裁者、同下知諸國、既畢寺宜承知依宣行之、緈在機急、暫莫延怠、

承久三年七月廿七日　大史小槻宿禰

中弁藤原朝臣

〔吾妻鏡〕三壽永三年〇元暦元年四月六日甲戌、

池大納言沙汰

走井庄河内　長田庄伊賀〇中略

右庄園拾七箇所、載沒官注文、自於院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月五日

〔吾妻鏡〕二十二建保四年十二月八日丙辰、伊賀國壬生野庄者、爲春日社領而宇都宮彌三郎朝綱入道、稱地頭押領之由、興福寺住侶僧信賢所參訴也、今日有其沙汰、不能關東御成敗、於記錄所被遂對決、可宜之由被仰下云云、

〔百練抄〕十四四條嘉禎元年閏六月廿一日壬子、伊賀國大內庄所當三百餘石、爲散神人怨、被寄進八幡宮畢、

〔倭名類聚抄〕五國郡伊賀國〇註略管四田四千五十一町一段四十一步

〔海東諸國記〕伊賀州　郡四、水田一千五百町、

〔日本鹿子 六〕伊賀國、四郡、小上國、四方一日、知行高九万五千五百九十石

〔國花萬葉記 九伊賀〕知行高九万九千五百五拾四石

〔官中秘策 二〕伊賀國　四郡 〇中略

一石高拾万五百四拾石餘

〔吹塵錄 五人口及國高〕天保度御國高調 〇中略

伊賀國 皆私領　一高拾壹万九拾六石五斗三升六合

出擧稻

〔延喜式 二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻

伊賀國正税公廨各十三万五千束、國分寺料五千束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、堰河防料一千束、救急料三万束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊賀國 〇註 管四 (中略) 正公各十三萬五千束、本稻三十二萬七千束、雜稻四萬七千束、

國産貢獻

〔延喜式 十五內藏〕諸國年料供進　色絲三百絇 伊賀國所進、〇中略　橡 伊賀、伊勢、(中略)各二合、

〔延喜式 二十三民部〕年料別納租穀　伊賀國 二千石 〇中略

年料別貢雜物　伊賀國 紙麻五十斤 〇中略

諸國貢蘇番次 〇中略　伊賀國七壺 小一升 〇中略　右六箇國爲第二番 寅申年 〇中略

交易雜物 〇中略　伊賀國 白絹十二疋、鹿皮廿張、櫃二合、加赤漆杉、以下皆國、

〔延喜式 二十四主計〕伊賀 〇中略　右廿五國中絲 〇中略

伊賀 〇中略　右廿九國綿絹 〇中略

伊賀國 行程上二日、下一日、

調一窠綾三疋、二窠綾一疋、絹二百疋、數內輸白絹十疋、餘輸絹、皆准此、橡絲廿絇、練絲一百絇、國以傜夫練染、餘皆准此、夫絲 〇絲上當、內藏式有色字、三百絇 夏調 自餘輸絲布、庸、白木韓櫃九合、自餘輸米、中男作物、紅花七斤八兩、紙、茜、胡

麻油、蜀椒、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥 ○中略

伊賀國廿三種　前胡八斤、王不留行、玄參、升麻各八斤、獨活、苦參各廿斤、連翹、瞿麥各六斤、桔梗卅斤、昌蒲木斛、夜干各十斤、大青廿七斤、茯苓七斤、栝樓五斤、當歸十一斤、蛇脫皮一兩、署預、桃人各五升、麥門冬四升、車前子七升、半夏二斗、蜀椒子一升、

〔毛吹草 三〕伊賀

燒物　紅花　多葉古　松茸　目藥 家里眞島右二ヶ所

人口

〔官中秘策 二〕伊賀國　四郡 ○中略

一人數九万千三百九拾貳人　內 男四万七千百四拾九人 女四万四千二百四拾三人

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略

皆私領 一人數八万百九拾六人　高拾万五百四拾石餘　伊賀國

內 男四万六百九拾七人 女三万九千四百九拾九人 ○中略

諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略

皆私領 一人數九万千七百七拾四人　高拾壹万九拾六石餘　伊賀國

內 男四万六千七百貳拾八人 女四万五千四拾六人

風俗

〔人國記〕伊賀國

伊賀之國ノ風俗、一圓實ヲ失ヒ欲心深シ、サルニ因テ、地頭ハ百姓ヲタブラカシ、犯シ掠メントスル事日々夜々也、百姓ハ地頭ヲ掠メン事ヲ日夜思ヒ、夢ニダニ義理ト云事ヲ不知ガ故ニ、武士之風俗、猶以不被用也、

名所

〔伊賀名所記〕伊賀郡　いがの國西の方の名所來歷

伊賀山　少納言入道信西の國分には、山城の國のよし申侍れども、因幡の山もその國にあるをいふ事に侍れば、伊賀の國のかたといはんは、とがあるべからず、○中略

名張郡　南の方の名所

夏身山　山田郡のさかいにある山となり○中略

阿拜郡　伊賀の國北よりの名所來歷なり

敢國大明神　直指抄云、少彥名神者、伊賀國阿拜郡敢國明神也、○中略

山田郡　いがの國東よりの名所

鳥坂明神　鳥坂のさとにまします、直指抄に下照姬なり、

○按ズルニ、本書ニハ伊賀國中ニ於ケル山川、寺社、古蹟ヲ擧グルコト甚ダ多ケレドモ、今其煩ヲ避ケテ一部分ヲ示ス、

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒○中略　伊賀國卅人○中略

諸國器仗　伊賀國甲一領、橫刀四口、弓廿張、征箭卌具、胡籙卌具、

〔延喜式木工三十四〕鍛冶戶○中略　伊賀國三烟

伊勢國

伊勢國ハ、イセノクニト云フ、東海道ニ在リ、東及ビ南ハ海ニ至リ、西ハ近江、伊賀、大和、東南ハ志摩、西南ハ紀伊、北ハ美濃尾張ニ堺シ、東西凡ソ十二里、其狹キ處凡ソ四里、南北凡ソ二十七里アリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ鈴鹿郡ニ置キ、桑名、員辨、朝明、三重、河曲、鈴鹿、庵藝、安濃、壹志、飯高、多氣、飯野、度會ノ十三郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、明治維新ノ後、朝明郡ヲ廢シテ三重郡ニ

併セ、河曲、奄藝兩郡ヲ合セテ河藝郡ト稱シ、飯高飯野兩郡ヲ合セテ飯南郡ト稱シテ十郡ト爲シ、新ニ津、四日市、宇治山田ノ三市ヲ設ケテ、三重縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔易林本節用集下〕伊勢勢州

〔倭名類聚抄五國郡〕伊勢以世

〔日本風土記一寄語島名〕伊勢衣舍

〔釋日本紀二十三和歌〕伊勢國風土記曰、夫伊勢國者、神武天皇勅天日別命曰、國有天津之方、宜平其國、卽賜標劍、天日別命奉勅東入數百里、其邑有神、名曰伊勢津彦、天日別命問曰、汝國獻於天孫哉、答曰、吾覓此國、居住日久、不敢聞命矣、天日別命發兵欲戮其神、于時畏伏、啓云、吾國悉獻於天孫、吾不敢居矣、天日別命令問云、汝之去時、何以爲驗、啓云、吾以今夜起八風吹海水、乘波浪將東入、此則吾之却由也、天日別命令整兵窺之、比及中夜、大風四起、扇擧波瀾、光耀如日、陸國海共朗、遂乘波而東焉、古語云、神風伊勢國、常世浪寄國者、蓋此謂之也、詔曰、國宜取國神之名號伊勢、

〔日本書紀二神代〕一書曰、○中略天鈿女復問曰、汝○猿田彦何處到耶、皇孫何處到耶、對曰、天神之子、則當到筑紫日向高千穗槵觸之峯、吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上、

〔倭訓栞前編三伊〕いせ　神武天皇の兄に五瀨命ましませり、後撰集にいせわたる川などよめるは此義なり、又五十瀨の義なりともいへり、伊勢の國の名義も同義にて、江次第に渡安濃川三瀨、夫木集に、

鈴鹿山いせ路にかよふ三瀨川のみせばや人に深きこゝろを、とも見えたれば、川瀨の多きよりの名なるべし、眞名伊勢物語には、妹背と書り、猿田彦、鈿女命の故事によれるにや、古事記に伊勢部を定めし事見えたり、

〔大神宮儀式解一〕伊勢の名義思ひ得がたし、伊鈴川など、名たゝる川あれば、瀨の國なるを、伊の發

語を冠らせ、伊勢といふよしいへど、體語に發語ある事なし、又磐余彥天皇の御兄、五瀨命坐せる國なれば、伊勢といふよしいへど、よくもあらず、度會正身神主、伊勢は伊弉諾尊生れたまへば、夫々の國なり、伊は發語なるべしといへど、發語の例にもたがひ、又伊弉諾尊此國にて生れ給ひし事徵する事なければ、是とも見えず、伊勢風土記、磐余彥天皇御時、伊勢津彥命此國を奉上りしを、天皇悅たまひ、國神の名をとりて、伊勢と名付ぬる事見ゆれど、此年より前に磐余彥天皇御歌あり、○中略されば風土記の說は國史に合はず、街談を正さず記せしなるべし、その上神代卷下皇孫降臨條の一書、吾名是猿田彥大神云々、吾則應ㇾ到二伊勢之狹長田五十鈴川上一とのたまひつれば、神代より此名ある事明かなるをや、その名義尙考索べきなり、

〔諸國名義考上〕伊勢○中略或人は伊須受の約り轉りたるなりともいへり、又は五瀨命より負ひし名なりともいへり、立入信友は、風土記に大風四起云々とあるをおもへば、伊は息にて、勢はせく、せむる、せまる、せる、せゝらぐなどいへるせにて、すべて物のいきほひあるにいへり、この神大風を息吹放つ德あるによりて、伊勢津彥とおひしにやあらんといへり、

〔三國地志伊勢六〕州名

按伊勢ノ名義、前ニモアル如ク、皇孫降臨ノ時、已ニ伊勢狹長田五十鈴河上ノ語アリ、神武東征ノトキ、神風伊勢ノ海ノ御謠アレバ、伊勢ノ國號其始ルトコロヒサシ、然ルニ風土記ニ伊勢彥ヨリハジマル名トスルハ誤ナルベシ、伊勢津彥、伊豫津彥ナド、皆其國ヲ領スルヨリ、人ノ名トスルモノニシテ、人ノ名ヨリシテ國ノ名トナルニアラズ、且伊勢ノ調意詳ナラズ、婦女ノ詞ニ、衣服ヲ縫フトキ、皺ヲヨセルコトヲイセルト云コトアレバ、垂仁紀ニ神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也ト云ヲ以、波イセルノ略語ニゾイセト云カ、然ドモ浪ヨセル國ハ、イセニモカギルベカラザレバヲボツカナシ、或ハイセハ妹背ノ中略ト云ヒ、又歌ニ五十瀨渡ルト讀ル如ク、五十瀨ニシテ、猿田彥命ヨリハジマリ、則五十鈴ノ略語、土金自然ノ國號ナリトモ云々、イヅレカ是ナルヲシラズ、

〔勢陽五鈴遺響首上〕國號總論

愚案ニ、前書各僻説ナリ、伊勢津彥ト謂フ時ハ、伊勢ハ音讀ナリ、神代ノ國名音ヲ以呼ベカラズ、伊勢津彥トハ、何ニ號スル事ヲ不知、諸説信ジ難シ、僅ノニ夫伊ハ助字也、釋日本紀曰、易喩者ハ行也、易ハ助語也、伊輔曳符枳能明流、笛吹上ナリ伊ハ助語也、万葉集曰、伊緣立之、御執乃、梓弓之、又曰、山際伊隱、万代、又曰、射往廻流伊射共ニ助字ナリ、按ニ紀伊ノ伊モ厚顏抄ニ紀ノ韻伊ナレバ韻ヲ加ヘタリト云、是其證トスベシ、勢ハ脊ナリ、伊勢國ハ山脊國ト云意ニテ、神代自然ノ稱號トスベシ、國形北ヨリ南ニ長ク二十餘里、又東ニ折テ東西六七里、或十里、或十五里、東西南ノ三面、志摩、紀伊、大和、伊賀、近江、美濃、尾張ニ接續シテ皆山ナミ、唯東北ノ一隅ニシテ尾三ニ對ス、山海ノ間、平地アリ、海ハ腹、山ハ脊ナリ、海腹ハ少ク、山脊ハ多シ、神代卷曰、膂宍之空國自頓丘覓國行去、纂疏曰、膂ハ脊也、其山形ヲ思フニ相類ス、是地形ニツキ、脊國ト云意ニテ、自然ニ伊勢ト呼來ルナルベシ、故ニ自國ノ名ニ因リ、伊勢津彥ト稱呼シ來ルナラン、然レバ國ヲ伊勢ト云ヨリ神ノ名トス、〇中略又神風ノ伊勢ト連續シテ言ハ、神風ハ枕辭ナリ、久方ノ天、足引ノ山ノ類ニシテ、和語ノ習ナリ、〇中略伊勢ノ名義ハ、區々タル俗説ハ容難シ、其地形ノ山嶽ヲ背ニ帶ブニ據テ、勢ノ國ト稱スベシ、伊ノ助辭ニシテ紀伊ノ例ニ相同ト云ハ、今古ノ確論ナリ、

〔八雲御抄三上國名〕伊勢(かみかせ)

〔日本書紀神武三〕戊午年十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之糧、勒兵而出、〇中略是役也、天皇志存必克、乃爲御謠之曰、伽牟伽筮能、伊齊能宇瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍離、之多儴瀰能、之多儴瀰能、阿誤豫、阿誤豫、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智氏之夜莽務、于智氏之夜莽務、謠意以大石喩其國見丘也、

〔日本書紀垂仁六〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜姬命、託于倭姬命、爰倭姬命、求鎭坐大神之處、而詣菟田筱幡、筱此云佐佐更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神、誨倭姬命曰、是神風伊勢國、

則常世之浪重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神敎、其祠立於伊勢國、

〔神名秘書〕常世國者云仙宮也、伊勢島與常世國其境未遠、故常世之浪重浪寄來國也、因以號重浪之國也、故則當國魚類海草珍美也、又柑類菓茂昌、此之緣也、

〔倭姬命世紀〕十四年〇垂仁九月一日、遷幸于伊勢桑名野代宮、〇中略國造建日方命參相支、汝國名何問給、答白久、神風伊勢國止白、二十五年三月、于時猿田彥神裔宇治土公大田命參相支、〇中略倭姬命問給久、有吉宮處哉、答曰久、〇中略往昔大神誓願給比天、豐葦原瑞穗國之內爾、伊勢加佐波夜之國波、在美宮處止見定給比天、從天上志天投降坐比志、天逆大刀、逆鉾、金鈴等是也、二十六年十月甲子、奉遷于天照大神於度會五十鈴原河上、〇中略爰倭姬命、朝日來向國、夕日來向國、浪音不聞國、風音不聞國、弓矢鞆音不聞國、打摩伎志賣留國、敷浪七保之吉國、神風伊勢之國、百傳度會郡之佐古久志呂五十鈴宮爾、鎭理定理給止、國保伎給支、〇中略

一書曰、〇中略故則天皇〇垂仁御手、二柱靈尊〇天照大神豐受大神訪神風之地比、尋重浪之國天、天降鎭座給倍利、

〔冠辭考三〕かんかぜの　〇いせの國〇中略

こは神風の息といふべきを略きて、伊の一語にいひかけたるなり、何ぞなれば、神代紀に、我所生之國、唯有朝霧、而薰滿之哉、乃吹撥之氣化爲神、號曰級長戶邊命、亦曰級長津彥命、是風神也と云て、風は天津神の御息なれば、神風のいきとはいふべき事也、〇中略註さて万葉卷二に、〇中略註神風爾、伊吹惑之、天雲乎、日之目毛不令見、云々、こは右の吹撥之氣云々の語によりてよみたれば、伊吹は即息吹の上のきを略きし事右に同じ、大祓詞に、氣吹戶主止云神、根國底之國爾氣吹放氏牟、といへるも、氣をいとのみよめり、はた一語に云かくる冠辭の例は下に多し、〇中略註

仙覺は風土記を引て、伊勢津彥の神風を起して、信濃國へ去しより、神風の伊勢とはいふと

位置

いへりしを、契冲がいへらく、神武紀を考るに、戊午の年の十月に、八十梟帥を國見の丘にて撃給ふ時、がんかせの、いせの海の、大石にや、いはひもとへる、云たゞみの云々、此天皇菟田の下縣に到給へるは、同年七月なるに、それより天日別命、東の數百里に入て、伊勢津彥を平げたまへるを、十月に至りて、天皇やがて神風の伊勢とよませ給はん事信じ難しと、眞淵おもふに、風土記は古き書といへど、該を專ら擧たれば、泥むべからぬ物なるを、仙覺はまだしくて、みだりに引り、契冲が論ひは、實にいはれて侍りけり、さて神武の大御歌と、紀の語などによりて、その後には只伊勢にのみ冠らせこし也、凡の事多くは云かり、譬へば靑によし奈良は、たゞ平すとかゝりたる語なるを、此詞いひなれては、既奈良の名のごとくなりて、あをによしくぬちともよめるが如く、後には神風といへば、伊勢の國の事の樣におもふなりけり、

〔萬葉集雜歌一〕和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌、

山邊乃、御井乎我見氐利、神風乃、伊勢處女等、相見鶴鴨、

〔關岡家始末〕一伊賀國關岡ノ城主、伊賀守氏清（中略）七歲ニシテ母ト相共ニ勢陽ニ赴キ、國司顯能（北畠）ノ許ニアリ、

一永和四年十一月、（中略）氏清是ヨリ紀伊、勢陽ノ兩國ニ武勇ヲ顯シ、殊ニ國司ノ壻ナレバ、伊賀守殿ト諸人崇敬シテ、肩ヲ雙ブル人ナカリシトナリ、

〔信長公記六〕元龜四年九月廿四日、信長北伊勢に至て御馬を出され、其日は大柿之城御泊、（下略）

〔續武將感狀記〕信雄秀吉和議調ヒタリトイヘドモ、信雄ハ愈勢ヲ失ナヒ、秀吉ハ益威ヲ逞フシテ、伊賀全州、南伊勢五郡ハ秀吉取之、

〔地勢提要乾〕各國經緯度實測幷里程

伊勢山田（妙見町）極高三十四度二十九分、經度東五十七分、從東都（東海道）一百二十五里三十五町四

十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

伊勢　桑名　三五度〇四分〇〇秒　四日市　三四度五八分〇〇秒

山田　三四度二九分〇〇秒　松坂　三四度三四分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　伊勢　桑名　東〇度五七分一一秒

疆域

〔勢陽雜記〕一凡伊勢の國は山を西にし、海を東になせり、この故に大體西南の風には船かゝり快く、東北の風には不快なり、國の圖ナリ、南北二十餘里、東西六七里、或は十里、十五里、其中南の方は、東西廣し、西の方峯筋を國境とせし故、海迄の川の大小を以て、國境の遠近をはかるべし、偖山につづきて、美濃、近江、伊賀、大和、紀伊、志摩六ケ國に隣をなし、海より向ひは、尾張、三河まのあたり近うして、七八九里餘の渡海なり、京都への行程二十餘里、東海南海の兩道は舟路のたよりよし、此故に商賈運送の廻船、いづれの湊にもたえまなく、出入しけるほどに、他國の名物重寶求るにたよりあり、元來魚類海藻鹽油炭薪材木に至るまで、當國の土產にしてとぼしからず、

〔南方紀傳〕下嘉吉元年三月二十三日、將軍〇足利義持參宮後、勢州稅相改堺目等也、

〔日本地誌提要〕九伊勢疆域　東及南ハ海、西ハ近江、伊賀、大和、東南ハ志摩、西南ハ紀伊、北ハ美濃、尾張ニ至ル、東西壹拾貳里、狹處四里、南北凡貳拾七里餘、

島嶼

〔日本實測錄〕九島嶼伊勢國度會郡　實測　桂島　周廻一十五町一十五間　七日山　周廻二十一町四十五間　小品島　周廻三町四十六間　シヽ島　周廻五町六間　中之磯　周廻一十二町一十一間　村島　周廻八町三間　遠淛　御座石　立石　小村島　杉島　琴島　御所島　茶臼島　張島　雀島　村島　思ヒ島　丸島礫渚　烏帽子島　大島礫渚　ナラシ

島　筆島　ヲ島　ヲカ島　辨天島　丸島大江村　渡島　槇木島　贄島　立崎島　大島神崎村　ミサゴ島

〔萬葉集一雜歌〕明日香淸御原御宇天皇代　天渟中原瀛眞人天皇

麻績王流於伊勢國伊良虞島之時、哀傷作歌、

打麻乎、麻績王、白水郎有哉、射等籠荷四間乃、珠藻苅麻須、

麻績王聞之感傷和歌

空蟬之、命乎惜美、浪爾所濕、伊良虞能島之、玉藻苅食、

右案日本紀曰、天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯、三品麻績王有罪、流于因幡、一子流伊豆島、一子流血鹿島也、是云配于伊勢國伊良虞島者、若疑後人緣歌辭而誤記乎、○中略

幸于伊勢國時、留京柿本朝臣人麻呂作歌、○二首略

潮左爲二、五十等兒乃島邊、搒船荷、妹乘良六鹿、荒島回乎、

〔萬葉集略解一〕いらごは參河國也、其崎長くさし出て、志摩のたぶしの崎と遙に向へり、其間に神島、大つゞみ、小つゞみなどの島々あり、それらを古いらごの島といひしか、されどその島あたりは波荒く、舟遊びなどすべき所にあらず、是は京にておほよそに聞て、おしはかりによめるなるべし、

〔藻鹽草五水邊〕伊良虞島志摩

〔三國地志九十七志摩〕辨疑

伊良虞島　按此島ハ、三州渥美郡ニ屬ス、然レドモ今ニ於テ鳥羽侯ノ領邑トナルモノハ、蓋シ上古本國ノ隷邑ニシテ、中古參州ニ屬ストイヘドモ、貢服ノ便利ニヨッテ、今猶其舊ニ仍ルカ、歌人往々伊勢ノ島トスルハ、伊勢海ノスサキナルヲ以、泛然ト稱スルナルベシ、

〔躬恒集〕延喜十七年、伊勢の齋宮の御料に、國々の名ある所々をかゝせ給へる御屛風の歌めしければ、

うきしま
いさやはた身のうき島にとまりなむまづみつゝのみ世をふればうし

〔伊勢名所拾遺集〕浮島山は、松下村東、伊氣浦の見渡し、離島也、

地勢

〔易林本節用集下〕伊勢〈中略〉南北三日餘、山海平均勝=餘州=、仍爲=國親=、土厚貢多、爲=一得=百也、大々上國也、

〔勢陽五鈴遺響首上〕郡縣總論
本州ノ國郡界ノ定置スル處ハ、西北ノ極ハ各山嶺ヲ列リテ他州ノ分界トス、美濃、近江、伊賀、大倭ニ接スルハ然リ、南極ハ南海ニ限リテ、紀伊州牟婁郡ニ接ス、東極ハ各東海ニ限リ、其東南ノ隅ニ至リ稍ク志摩州ニ接スルナリ、其郡ハ桑名郡東西短少ニシテ南北長濶ナリ、國ノ東北隅ニアリ、員辨郡ハ東西南北共ニ相等シ、朝明三重二郡ハ東西長濶ニシテ南北短少ナリ、鈴鹿郡ハ東西共ニ南北ニ同ジ、河曲郡ハ東西短小ニシテ南北長濶ナリ、奄藝郡ハ東西長濶ニシテ南北短小ナリ、安濃郡相同ジ、一志郡相同ジ、稍タ南北モ安濃ヨリ長濶ナリ、飯高郡相同ジ、西ハ南北稍ク長濶ニシテ、東ニ至リ南北稍短小ナリ、飯野郡東西長濶ニシテ南北短小ナリ、多氣郡ハ東西長濶ニシテ南北短小ナリ、度會郡相同ジ、然ドモ本州郡ニ於テ度會一志ハ最大ナリ、多氣亞之、安濃是ニ亞リ、其餘鈴鹿、飯高、三重、朝明、員辨大略相同ジ、奄藝、飯野、河曲至小ナリ、

氣候

〔勢陽五鈴遺響首中〕風土總論
風土寒溫ヲ論ズルニ、一志郡雲出川ヲ限リ、南北ヲ分裁シテ稍異也、古昔北郡南郡ヲ分置ノ稱實ニ合ヘリ、桑名、員辨、朝明、三重、河曲、奄藝、鈴鹿ノ八郡ハ、風土相似テ寒溫相等シ、寒ハ速ニ暑ハ稍遲シ、然ドモ桑名、員辨、朝明、三重ノ四郡ハ、嶺雪多シテ寒嚴ナリ、最桑名海南ノ地ハ、冬月稍溫ナルニ

似リ、其餘ノ三郡ハ寒甚シ、河曲、鈴鹿、菴藝、安濃ハ相等シ、然ドモ菴藝、河曲、海南ノ地ハ稍温ナリ、暑モ相從ヘリ、南郡一志、飯高、多氣、飯野、度會五郡ハ、風土相似テ寒温稍同ジ、然ドモ度會海東南ノ地ハ、至テ温ニシテ霜雪希ナリ、其餘四郡ハ暑速ニ寒遲シ、大路相似リトス、北郡山嶽險巖ニ倚ル處ハ寒甚ク、海瀕低坦ニ居スルハ稍濕ナリ、西北ニ山嶽ヲ帶、東南ニ海江ニ據ルガ故ニ温和ナリトスベシ、南郡ハ山嶽坦平ニシテ、東南江海ニ臨ムガ故ニ、至テ温ニテ陰温多シ、常ニ東南ノ風多シテ、陰雨屢下リ水厄多シ、北郡ハ常ニ西朔ノ題多シテ、霜雪頻ニ厚ク、燥寒ニシテ水厄希ナリ、

〔三國地志伊勢七〕路程　按、津ヨリ京師ニ至ル廿五里、江戸ニ至ル百一里廿三丁　南都ニ至ル廿一里　大坂ニ至ル廿九里　鳥羽ニ至ル十一里廿九丁○中略　間道　堂坂越　按、朝熊ヨリ此ニ至リ、志州答志郡坐神村ニ至リ、夫ヨリ鳥羽ニ至ル、　大坂越　按、志摩國界答志郡ヱリ原村へ至ル、　山原越　按、志州英虞郡鹽屋村へ至ル、　八鬼山越　按、田丸ヨリ數里ヲ歷テ、紀州牟婁郡錦浦ニ至ル、　荷坂越　按、度會郡梅箇谷ヨリ峠ニ至ル十四町、峠ヨリ紀伊國界ニ至ルコト廿四町、　大杉越　按、大杉ヨリ峠ニ至ル二里五町、和州吉野郡鹽奈ニ至ル三里卅町、　舟戸越波瀬郷高見峠　按、舟戸ヨリ鳥居ニ至ル廿二町、是大和國界、　御取越　按、波瀬ノ草鹿野ヨリ此峠ニ至ル廿四町、是大和國界、　志良加美越　按、波瀬ヨリ此ニ至ル一里十八町、是大和國界、　三子越　按、富長ヨリ此峠ニ至ル十二町、是大和國界、　杉平越　按、和州宇陀郡神末村ニ至ル三十二町餘、國界ニ至ル十六町、　太郎生越　按、和州宇陀郡神末村ニ至ル、一里四町餘、　櫻峠越　按、伊州伊賀郡高尾村津本ニ至ル一里廿二町餘、又八知谷中村ヨリ高尾村古田ヘ至ル十二町　鹽見峠越　按、伊州伊賀郡霧生村ニ至ル一里卅二町餘、　大原越　按、伊州伊賀郡奥鹿野村ニ至ル一里十一町餘、　垣內越　按、伊州伊賀郡伊勢地村ニ至ル二里九町、　鬼瘤越　按、一ノ瀬ヨリ伊州山田郡坂下村ニ至ル二里十六町、　河內谷越　按、伊州山田郡阿波村ニ至ル、槇箇野ヨリ二里卅町、　長野越　按、上ニ出ス、　蝙蝠峠越

按、加太中在家ヨリ伊州山田郡阿波村子日ニ至ル、　加太越　按、北在家ヨリ伊州阿拜郡柘植ニ至ル一里廿三町餘、是大和路ノ官道ナリ、　安樂越　按、江州甲賀郡黒川村ニ至ル、　大川原越　按、小岐須村ヨリ江州甲賀郡小屋ニ至ル、　水澤越　按、山房村ヨリ江州甲賀郡木地ニ至ル四里、　鷺野越　按、江州甲賀郡大河原ニ至ル五里、　千草越（或云上津畑越）　按、江州蒲生郡根平ニ至ル三十一町餘、　八風越（或云田光越、或云切畑越、○中略）　按、切畑ヨリ江州愛知郡ユヅリヲニ至ル二里三十町、　君畑越（或云治田越○中略）　按、江州愛知郡君ガ畑ニ至ル、　燒屋越　按、野尻村ヨリ江州犬上郡大君畑ニ至ル、　山口越　按、濃州石津郡草鞋畑ニ至ル一里卅一町、　土岐多羅越（○中略）　按、山口村ヨリ美濃國界ニ至ル一里十六町、篠立村ヨリ同郡土岐ヘ三十五町、　河原越　按、濃州石津郡若宮村ニ至、

小原越　按、濃州石津郡福田村ニ至ル、　太田越　按、抽井村ヨリ濃州石津郡太田村ニ至ル、

航路　按、江戸ニ至ル百五十六里餘、大坂ニ至ル百廿二里餘、熱田ニ至ル十七里、大野ニ至ル九里、須佐ニ至ル十三里、諸崎ニ至ル十里、篠島ニ至ル十六里、吉田ニ至ル廿六里、伊良古ニ至ル十六里、田原ニ至ル廿一里、鳥羽ニ至ル十二里、神島ニ至ル十五里、自餘ノ湊諸州ニ通ズ、此ニ略ス、

〔日本實測錄（二街道）〕從東海道桑名歷高須及大垣至柳瀨、

伊勢國桑名郡桑名川口町　二里三十五町四十五間　香取村三十五度七分半（至多度神社、二十三丁三十九間）

二里三十一町三十六間（至國界、一十六丁三十九間）　美濃國石津郡高須村（○中略）

從東海道追分歷山田至下之鄕、

伊勢國三重郡日永村追分　一里二十三町二十三間　河曲郡神戸十日市町、三十四度五十三分、

一里二十五町三十八間　庵藝郡白子村　一里二十町三十四間　上野村（至海岸、七町四十二間、）　一里三十町一十七間半　大部田村　二十五町四十四間　安濃郡津大門町（至乙部村岩田川、一十二丁四十五間半）

二里五町四十一間（至津立合町、一十二丁四十四間、）　一志郡雲出　一里七町三十八間半　市場庄村　一里八

町四十八間半　飯高郡松坂中町、三十四度三十四分、二里三十町三十一間　多氣郡上野村本明星　一里一十四町三十七間　小俣村　一里五町三十四間（至宮川岸、五丁一間、）度會郡山田妙見町、三十四度二十九分（竪大中島村、至大湊、二里八丁三十三間、）三十一町三十一間　宇治今在家町、三十四度二十七分半三町二十七間半　同下館町宇治橋東頭（至内宮華表前、二丁三十三間、）一町四十八間　同下館町（至朝熊山奥院、一里一十六丁二十二間、）四里八町三十一間（至國界相坂峠、二里五丁二十八間、自峠至磯部上之郷、一里二十六丁一間、）志摩國答志郡下之郷村（從追分、至下之郷、）街道、通計二十二里二十七町四十四間、

從伊勢國津、歷伊賀國、至木津、

伊勢國安濃郡津立合町　一里一十五町三十間　一志郡久居本町　三里三十一町三間（至三軒茶屋、二里八町六間、）安濃郡長野宿　二里一十五町四十五間（至國界長野峠、一里四丁五十四間、）伊賀國山田郡平松宿（中略）

從伊勢國市場庄、歷大和國、至西京、

伊勢國一志郡市場庄村　二里八町四十三間　八太村　二里八町四十五間　大村　一里一十四町四十七間半　入道垣外村、三十四度四十分、一里二十二町一十三間（至國界河保峠、一里五丁四十四間、）伊賀國伊賀郡伊勢地村（中略）

從東海道關、歷加太、至上野、

伊勢國鈴鹿郡關宿　一里二十八町八間　加太宿　一里三十三町三十間（至國界、一里二十一間、）伊賀國阿拜郡上柘植宿（中略）

從東海道龜山、歷鳶野及多良、至關原、

伊勢國鈴鹿郡龜山茶屋町　三里四町九間　山本村（至椿太神社、一里二十四間、）二里四町五十四間　三重郡宿野村（至高角村、一里四丁、從高角至四日市宿、一里三十一丁四間、又從高角至神前神社、九丁二十四間、）九町二十一間　鳶野、三十五度一分半、五里一町二十九間　員辨郡阿下喜村　三里三十一町三十二間（至國界、三里二十三丁五十六間、）美濃國

石津郡時郷打上村〇下略

〔國分記〕伊勢國竪横之事

一北美濃堺三ツ和田戸山田ゟ志摩國境鳥羽之城迄ハ三十三里

一横伊賀境かいと村ゟ東白子迄七里

一同大和堺高見峠ゟ東松坂迄拾貳里

〔信長記七〕長島凶徒被攻干事

天正二年七月廿三日、〇中略二男茶筅御曹子、是モ船手ノ大將トシテ、八千ノ勢ヲ引具シ、桑名口ヨリ攻入玉フ、敵方ノ城々、篠橋、大鳥居、カロト島、大島、中江トテ五箇所アリ、

〔日本實測錄一沿革〕從武藏國東京沿海至大坂

伊勢國桑名郡シメ切新田沿川至和泉新田、二十六町二十七間、　二里一十六町一十一間至田代新田二十七町八間半、從田代新田至大島村、一里一十八町一間半、　桑名川口町　三里一十二町四十四間半　朝明郡東富田村至南道、六町四間半　一里八町九間半　三重郡四日市　六里一十三町二十八間　庵藝郡上野村　二里四町四十九間　安濃郡乙部村　二里二十八町五十七間　一志郡星合村至洲崎、一十八町四間半、　二里一十五町六間半　飯高郡大口村至松坂宿、二十三町四十二間半　五里三十三町一十一間半至祓川口、二里二十二町四十九間、從祓川至相合川口、二里一十四町一十七間半、從相合川至宮川口、七町五十二間　度會郡大湊　一里一十町三十間　竹ヶ鼻村　二里三町四十間　今一色村　一里三町二十八間　江村二見浦　三里二十五町九間至國界、一里一十三町二十三間　志摩國、答志郡、鳥羽中之郷至藤之郷、四町二十四間、北極高三十四度二十八分半、又從中之郷、歷木町、至峠門、一十一町二十五間、從木町至日和山、三町一十七間、　七里四十九間半　伊勢國度會郡五箇所浦至船越村、經測五町五十四間、　二里二十二町三十九間　船越村　三里三十一町五十八間　迫間浦歷三浦峠、至大江村、一里一十四町一十六間、　三里二十九町二十五間半至礫峠、二里二十一町　相賀竈、　六里一十町二間至シト峠、二里六町四十六間　大江村　二里一十五町一十六間半　贄浦歷東宮峠、至奈屋浦、一十四町四十六間、　七里一

宿驛

十八町五十三間半(至奈屋浦二里二十四町四間、從奈屋浦至神前浦二里三十町、) 方座浦(歷小方竈至朽木竈、二十八町一十八間、) 六里八町(至三石三里一十五町、從三石至朽木竈一里二十町二十六間半、) 古和浦、三十四度一十五分、 五里二十一間(至國界三里、二町五十八間、) 紀伊國

牟婁郡錦浦

〔延喜式 兵部二十八〕諸國驛傳馬〇中略

伊勢國驛馬(鈴鹿廿疋、河曲、朝明、榎撫、各十疋、市村、飯高、度會各八疋、) 傳馬(朝明、河曲、鈴鹿郡、各五疋、)

〔日本後紀 桓武十三〕延曆二十四年十一月壬申、先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京、至伊勢國榎撫朝明二驛之間、就村求湯、有人與之、更復煖酒相飮、其後嘔吐、至伊賀國堺、豐濱從者死、豐濱情知毒酒、勤加療治、至京遂死、

〔三國地志 伊勢十〕桑名郡 桑名驛 按、五十三驛ノ一ニシテ、慶長六年ノ公案アリ、天武紀所謂桑名郡家ハ、古ヘ東方西方ノ中間、益田莊ニアリト云、

〔信長公記 二〕永祿十二年八月廿日、勢州表御馬を被出、〇織田信長 其日桑名迄御出、翌日御鷹つかばされ、御逗留、

〔勢陽雜記 一〕一四日市、東海道の往還也、驛次舍五百軒餘、此湊貳町程遠淺也、大船は五町程沖にかゝる、大風には不懸、〇中略 市日、毎月六齋、四日、九日、十四日、十九日、廿四日、廿九日、但シ四日ゟ始る故、四日市と云、

〔東海道名所記 四〕四日市より石藥師まで二里半七町、御殿右にあり、 はまた村 、あかぼり村右のかた松林のうちに、天照太神の社あり、〇中略 追分の町はづれ、左のかたは、參宮の人、松坂へゆく海道也、右の方は京海道なり、

〔三國地志 伊勢二十〕三重郡 神戶驛 按、神宮ノ官道ナリ、十日市場、小山、石橋、新町、茅町、地子町、川町、西條、是ヲ呼テ神戶ノ町ト云、天正三年五月、織田信孝地子ヲ許シテ、初テ驛ヲ置、

〔關岡家始末〕一永正七年八月、大和國筒井某甲ヨリ、勢州河曲郡神戸ノ關家へ使アリ、

〔安齋隨筆十八〕洞津　武備志に洞津(アノツ)の字を用ふ、日本紀安濃津なり、作者洞津の字を用ふるは非なり、國字の安濃津の字を用ふべき事なり、

〔勢陽五鈴遺響安濃郡四〕安乃津村　本州中央ノ府ニシテ、東海及諸道ノ大神宮ニ詣ズル官道ニシテ、滄海ノ瀕ニアリ、北ハ奄藝郡ニ接シ、南ハ一志郡ニ界シテ、本郡及鈴鹿、奄藝、一志ノ郷民、コ、ニ聚テ山海ノ産ヲ貿易シ、志摩州及尾、參州ノ海船ヲ艤シテ、海錯產物ヲ交易ス、故ニ其地豪富商民多シ、

○按ズルニ、阿濃津ノ事ハ津篇ニ在リ、參看スベシ、

〔勢陽五鈴遺響飯高郡八〕松坂府　本州激奥ノ府ニシテ、東街道及諸道ヨリ大神宮ニ詣ズルノ官道ニシテ、東海瀕ニ邇ク、北ハ一志郡ニ接シ、西ハ本郡及多氣郡ノ山嶽連綿シテ、山郷ノ民聚テ、山河ノ產物、薪炭山菓等ヲ貿易シ、南ハ飯野郡ニ接シテ、村民會シテ、米穀菜蔬ヲ鬻グ、東海ノ漁民ハ、魚錯ヲ齎來テ售賣シ、其地豪商富民多シ、其防間ハ、北ハ坂內川ヲ限リ、南ハ愛宕山ヲ限リ、凡テ南北十九町餘、是竪町ナリ、東西九町餘、是橫町也、民屋二千三百餘戶、男女八千三百餘口、中略○舊ト此府ハ、天正十六年、蒲生飛驒守氏郷本郡一志郡○松ケ島城ヲ此地ニ遷シ經營セシヨリ、其民家モ從ヘ遷シテ、今ノ府城ノ坊間トナレリ、故ニ蒲生家領宰ナル近江州日野ニ比シテ、日野町ト稱スアリ、

〔勢州四家記〕蒲生飛驒守氏郷○は天正拾六年秋、松ケ島より飯高郡四五百森へ城を移され、松坂と號す、

〔日本國郡沿革考二東海道〕伊勢國造記云、橿原朝定二伊勢國造一、　大國、管十三郡、千三百二十五村、

桑名百六十九村　員辨百六村　朝明(アサケ)六十四村　三重八十九村古事記云、倭建命到二三重村一之時乃言、吾足如二三重勾一而甚疲、故號二其

地謂二三重一、　鈴鹿八十八村古府治　河曲三十八村　安藝(アンキ)六十一村延喜式等作二奄藝一、拾芥抄作二奄治一、　安濃八十五村　一志三百

十一村拾芥抄云、飯町、或壹志、　飯高百十三村　飯野三十九村　多氣百二十九村　渡會二百十三村延喜式等作ニ度會、垂仁二十五年紀、渡遇宮部是、或作ニ渡逢、

〔日本地誌提要九伊勢〕沿革　古ヘ國府ヲ鈴鹿郡ニ置、今ノ國府村是ナリ鎌府ノ建ツ、平賀朝雅、大内惟信、相繼テ守護タリ、建武中興、北畠顯能、州守ニ任ジ、志摩ヲ兼知シ、一志郡多藝ニ居リ、子孫任ヲ襲グ、足利尊氏ノ反スル、仁木義長ヲ守護トシ、北畠氏ヲ攻メシム、義長、吉野ニ歸順スルニ及ビ、足利義詮、土岐頼康ヲシテ之ニ代フ、時ニ州族長野藤房、長野城ニ據ル、安濃郡ヲ領ス奄藝ニ關、神戸、峯、鹿伏兎、國府ノ五族、鈴鹿河曲二郡ニ據ル皆之ニ應ジ、共ニ北畠氏ヲ拒ム、元中ノ末、南北講和、顯能ノ子顯泰、南境五郡一志、多氣、飯野、飯高、度會、ヲ領シ、國司タル故ノ如シ、土岐氏亦守護ヲ襲グ者三世、永享中、土岐持頼誅セラレテ後、土豪四十八族、北勢ノ地ニ相爭フ者數十年、統一スル所ナシ、顯泰ノ曾孫政具ニ至リ、勢漸ク強ク、長野神戸諸氏ヲ降シ、全州ニ號令ス、政具ノ曾孫具教ニ至リ、織田信長其北境ヲ侵シ、弟信包ヲシテ長野氏ヲ繼ガシメ、第三子信孝ヲ神戸氏ノ後トシ、皆其地ヲ陰奪シ、又瀧川一益ヲ北境五郡桑名、員辨、朝明、三重、鈴鹿、ニ封ジ、長島ニ居シム、永祿十二年、具教信長ト和シ、國ヲ其子信意ニ讓リ、信長ノ二子信雄ヲ養ヒ信意ノ嗣トシ、松島ニ居シム、天正四年、信長具教ヲ殺シ、信意ヲ幽シ、北畠氏ヲ滅シ、悉ク本州ヲ併ス、信長弑ニ遇フ後、信雄、尾張清洲ニ徙ル、尋テ豐臣秀吉、一益ノ封ヲ奪ヒテ信雄ニ納レ、南五郡ヲ以テ蒲生氏郷ヲ封ジ、松坂ニ治ス、信雄又關一政ニ龜山ヲ畀フ、一政後ニ白河ニ轉封天正十八年、秀吉悉ク信雄ノ封ヲ奪ヒ那須ニ放キ、北五郡ヲ以テ義子秀次ニ賜フ、氏郷徙封ノ後、服部一忠古田重勝、相繼テ松坂ニ治ス、文祿ノ初、信包ノ地ヲ收メ、分部光嘉ヲ上野ニ、壹萬石富田知信ヲ安濃津ニ封ズ、五萬石四年、秀次自殺、國除シ、氏家行廣ヲ桑名ニ封ズ、貳萬貳千石徳川氏ニ至テ、菅沼定仍ヲ長島ニ、後増山正彌一柳直盛ヲ神戸ニ、後本多忠統松平忠明ヲ龜山ニ、後石川總慶土方雄久ヲ菰野ニ封ジ、古田重勝ヲ濱田ニ徙シ、松坂ヲ徳川頼宣ニ加賜シ、近傍拾八萬石ヲ領ス分部

富田二氏ヲ他州ニ移シ、藤堂高虎ヲ封ジテ安濃津ニ鎮セシム、其支封ヲ久居ニ藤堂高次二男高通トス、又關原役後、行廣ノ地ヲ沒シ、本多忠勝ヲ桑名ニ封ズ、拾貳萬石元和中、嗣忠政姫路ニ轉ゼシ後、松平定勝、松平定綱、松平忠雅、相繼テ封ゼラレ、忠雅ノ後七世ニシテ忍ニ移リ、定綱十世ノ孫定永復封ゼラル、凡七藩皆世襲、更ニ山田奉行ヲ置キ、神宮ノ事ヲ司ドラシム、王政革新、度會府ヲ山田ニ置、既ニシテ改テ縣ト稱ス、又諸藩ヲ廢シテ、安濃津度會二縣トナシ、安濃津ヲ四日市ニ徙シ、三重縣ト改稱ス、尋テ再ビ治ヲ安濃津ニ復ス、

〔先代舊事本紀國造十〕伊勢國造

橿原朝(神武)以天降天牟久怒命孫天日鷲命(○本書頭書有二天牟久怒、天牟羅久母怒之誤、日鷲日別之誤、等之十九字一、)勅定賜國造、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月壬午、越大山至伊勢鈴鹿、爰國司守三宅連石床(○中略)等參遇于鈴鹿郡、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年(○元久元年)五月十日壬申、伊勢平氏等追討賞事有其沙汰、廣元朝臣、問注所入道等奉行之、朝政(○平賀)補任伊勢國守護職、又給彼輩私領水田、件兩國守護者、經俊(○首藤)本職也、而忍于平氏之片時權威逃亡、仍所被改補也、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕伊勢國(國府在鈴鹿郡、行程上四日、下二日、)

〔伊呂波字類抄伊國郡〕伊勢國(○管十三中略)鈴鹿(府)スヽカ

郡

〔延喜式二十二民部〕伊勢國大(管桑名、員辨、朝明、三重、河曲、鈴鹿、奄藝、安濃、壹志、飯高、多氣、飯野、度會、○中略)右爲近國、

〔倭名類聚抄五國郡〕伊勢國(○註略)管十三(○註略)桑名(久波奈)員辨(爲奈倍)朝明(阿佐介)三重(美倍)河曲(加波和)鈴鹿(須々加、國府、)奄藝(阿武義)安濃(安乃)壹志(伊知之)飯高(伊比多加)多氣(竹)飯野(伊比乃)度會(和多良比)

〔拾芥抄中末本朝國郡〕伊勢(大近)十二(○二恐三誤)郡　桑名、員辨、朝明、三重、河曲(カハワ)、鈴鹿(府)、奄治(アンチ)、安濃、飯高、多氣、度會、飯野、今飯町、(城壹志)

〔新撰類聚往來下〕國名(○中略)伊勢(勢州)十三郡鈴鹿(スヽカ)、桑名(クハナ)、員名(イナヘ)、朝明(アサケ)、三重(ミエ)、河曲(カハチ)、庵藝(アンキ)、安濃(アノ)、壹志(イチシ)、飯高(イヽタカ)、飯

野、多藝、度會、

〔易林本節用集下〕伊勢勢州 大、管十五郡、〇中略 桑名、朝明、鈴鹿、河曲、壹志、菴藝、多度、錦島、御座島、員辨、三重、安濃、飯高、飯野、渡會、多氣、已上六郡者神郡也、

〔官中秘策二〕伊勢國　十六郡　桑名　朝明　鈴鹿　河曲　壹志　奄藝　多氣　錦島　御座島
員辨　三重　安濃　飯高　飯野　渡會　多度

〔勢陽雜記一〕郡部目錄〇中略 〆十三郡〇中略
古來錦島御座島を入て十五郡と云々、此二郡不知、名所和歌集に、今志摩の國に有之、名所は伊勢に入たり、然れば志摩二郡も、古は伊勢の內にてありつるか、依之志摩の國の名所をも、少々渡會の郡の內へ相兼記之、又郡境も時代によりかわり侍るか、延喜式、源の順和名などに考るに、今の神社又は村の名、郡の村分ケ、今世に引くらべては相違多し、

〔勢陽五鈴遺響首上〕建置總論
伊勢國ハ舊十九郡ヲ所置ニシテ、四郡ヲ割テ後ニ伊賀國ヲ置處ナリ、〇中略 又武烈天皇朝ニ二郡ヲ割テ志摩國ヲ分置、今答志英虞ノ二郡ナリ、本州ニ隷屬スル處ハ、其餘十三郡ニシテ、所謂桑名、員辨、朝明、三重、鈴鹿、河曲、菴藝、安濃、一志、飯高、飯野、多氣、度會是ナリ、〇中略 俗諺ニ本郡十三管ニ錦島多度ヲ增シテ十五郡ニ作ルアリ、延喜中既ニ十三管ニ載ル時ハ、其本據ハ誣難シ、十二管ニ作リ、及錦島多度御座ノ三處ヲ增シテ十五管ニ塡ツルハ、錦島舊昔ハ本州ノ所隷ニシテ、今紀伊州牟婁郡ニ屬セリ、多度ハ本州桑名郡所屬ニシテ今然リ、卽多度村ニシテ稍ク一邑ノ名ニ遺レリ、憶フニ錦島ハ、今錦浦ト稱シテ多度ニ同ク、一邑ノ遺存スル處ト云ヘドモ、本州度會郡南海瀕ハ、舊時ハ錦島ノ名ヲ總裁シテ一郡ノ名トシ、或ハ志摩州ニ隷シ、今紀州ニ屬スルガ如シ、多度モ然リ、舊ハ多度山ノ際畔ハ多度ノ名ヲ總裁シテ、一郡ノ名ニモ及ベシ、今方俗桑名郡ヲ横ノ郡ト稱シ、或

多度郡トモ呼ブニ相同ジ、横ノ郡ハ員辨郡ニ對シテ其終ニ所置ニ據レリ、是各私稱ニシテ公スルニ非ズ、然レドモ舊時ニ稱呼セシ處ノ遺習ナリ、又御座島ヲ増加スルハ其徴ヲ得ズ、本州ニ其地名ナシ、志摩州英虞郡ニアリ、本州度會郡南海ニ邇シ、臆斷スルニ、志摩舊昔ハ本州ノ隷屬ナリ、故ニ其本郡ハ十三管ニシテ、或ハ時世ニ應ジ、十二或十五ニ増減シテ所置ナリト知ベシ、

〔明治三十年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

伊勢

伊勢十三郡亦變更ナシ、神宮記曰、難波長柄豐前宮御世(孝德天皇)飯野多氣度會總一郡也トアレバ、後度會ヲ割テ、飯野多氣二郡ヲ置シナルベシ、

〔皇國郡名志〕伊勢國十三郡

桑名(クハナ)　桑名　長島　別島也　多度社　尾ニ向入江ニ付

員辨(イナベ)　郡町無シ　江濃界

朝明(アサケ)　富田　テキ峠　アテ江ノ川界ヨリ海ニ貫

三重(ミヘ)　四日市　追分　古薦野江界ヨリ三重川海ニ貫

河曲(カハワ)　神戸　神戸ノ邊小郡

鈴鹿(スヽカ)　石藥師　坂下　庄野　關　龜山　國中ヨリ江伊賀界

奄藝(アムキ)　上野　楠原　白子　一身田　國中　久保田ヨリ海ニ島

安濃(アノ)　津　前田　椋本　長野　伊賀界ヨリ海貫

壹志(イチシ)　矢野　久居　雲津　三間茶ヤ　月本　六軒　和伊賀界　小杉ヨリ海貫　入太　大ノ木　ナヤマト

多氣(タケ)　明星　新茶ヤ　相可　相橋立山　大鳳　岡保　和界ヨリ　三瀬　海ニ貫

飯高(イヒタカ)　松坂　二條　大石　濃野　仁柿　和界ヨリ　宮前　海ニ貫　波瀬　和州境

度會(ワタライ)　〈宇治 内宮 〈山田 外宮 〈小畑 ●池邊 〈田丸 ●狛野 ●アツ ●眞弓／●長島 ●ノシリ 紀界ヨリ海ニ出志ニツヤク

飯野(イヒノ)　〈七見 ●櫛田 ●ツル 松坂ト明星ノ間小郡

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕伊勢

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
	桑名(クハナ)	同(久波奈)	同	同(國元知)	同(クハナ)	同	同	同(クハナ)	同
	員辨(キナヘ)	同(爲奈倍)	同	同(國知元)	同(イナベ)	同	同	同(キナベ)	同
	三重(ミヘ)	同(美倍)	同	同(國知元)	同(ミヘ)	同	同	同(ミヘ)	同
	明朝(アサケ)	同(阿佐介)	同	朝明(國知元) 味酒	朝明(アサケ)	同	朝來	朝明(アサケ)	同
川曲(紀)	河曲(カハワ)	同(加波和)	同	河曲(知元) 川曲(國)	同(カハノ)	同	同	同(カワ カハワ)	同
	鈴鹿(スヽカ)	同(須々加)	同	同(國知元)	同(スヾカ)	同	同	同(スヾカ)	同

		奄藝(アムキ)	同(阿武義)	同	奄藝([illegible]) 安藝(元)	安藝(アンキ)	同	奄藝	同(アング アムキ)	同
		安濃(アノ)	同(安乃)	同	安東阿濃([illegible]) 安西安濃(知)	安濃(アーノ)	同	同	同(アノ)	同
	壹師(古)	壹志(イチシ)	同(伊知之)	今飯町(或作志)	一志([illegible])	同(イチシ)	同	同	同(イチシ)	同
		飯高(イヒタカ)	同(伊比多加)	同	同([illegible])	同(イヒタカ)	同	同	同(イヒタカ)	同
		飯野(イヒノ)	同(伊比乃)	同	同([illegible])	同(イヒノ)	同	同	同(イヒノ)	同
		多氣(タケ)	同(竹)	同	同([illegible])	同(タケ タキ)	同(タキ[illegible])	同	同(タケ)	同
度逢(記) 度合(紀)		度會(ワタラヒ)	同(和多良比)	同	度會(知) 渡會([illegible])	度會(ワタラヱ)	渡會(ワタラヒ[illegible])	度會	同(ワタラヒ)	同
		管十三	同	十三郡		同	同	同	同	同

〔神宮雜例集〕一 神封事 付神田幷御領

朝明郡　寛仁三年九月十一日符

員弁三重朝明、謂之道前三郡、

〔吾妻鏡十八〕元久三年〇建永元年五月廿四日甲辰、爲前大膳大夫奉行、能隆卿之所申、被尋下于光員之處、陳申云、伊勢國道前郡、政所職者、爲祭主恩顧之間、所從其成敗也、神領知行事者、元自開發之地、寄附神祝、許也、雖稱押領云云、依之不及沙汰云云、

〔神宮雜例集一〕神封事付神田并御領

太政官符伊勢大神宮

一多氣、度會二ヶ郡堺内授受寺田并王臣位田及他郡百姓口分田事〇中略

寶龜五年七月廿三日〇署名略

飯野郡仁和五年三月十三日勅、一代之間奉寄、寛平九年九月十一日符永奉寄、〇中略

已上謂之神三郡、又云道後、

〇按ズルニ、神郡ノ事ハ、神祇部大神宮神領篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔勢州軍記〕勢州諸家第一

一勢州分領事、近來伊勢國者、諸家凡四分而守護之、南五郡者、國司北畠家之領地也、北八郡者、工藤一家、關一黨、其外北方諸侍之領地也、但南方渡會郡山田、三方宇治六鄕并在々所々、天照大神宮之神領也、是守護不入之地也、古謂神三郡者、度會、多氣、飯野云々、當國司奉行之、

〔勢陽五鈴遺響桑名郡一〕桑名郡　桑名ト稱スル名義ハ、相傳云、舊キ名ニシテ太古ノ時、天照大神此伊勢國ニ宮處ヲ覓メ玉ハントテ、大鳥ニ化シテ此地ノ桑原ニ天降リ、桑ノ若枝ニ止リ坐セルヲ以テ、扶桑若木ノ名起リ、其處ヲ桑名ト號スト、詮要抄ニ載タリ又美濃ト尾張ノ界ニテ、桑ノ幾モト植ニケント、古咏國風ニ諷セリ、コヽヲ以郡名ノ起原ナルベシト、桑名郡賦ニ記セリ、憶フニ桑名ハ即桑田ノ通音ニシテ、名田相適ヘリ、敢テ名ト云ニ泥ベカラズ、此ニ據ルトキハ、此地ノ總名ニシテ、本郡ニ桑部村アリ、田ニ相同ジ、舊桑名神社ノ所在ニシテ、舊貫ニ從フトキハ、尊重スベ

キ所ナリ、〇中略本郡邦俗多度ノ郡、或ハ横ノ郡トモ稱セリ、多度郡ノ名ハ、北畠村親卿ノ記ニモ載ス、和漢三才圖會等ノ俗書ニ、伊勢國郡管内十二、多度錦島御座島ヲ加テ以上十五郡トス、及拾芥抄ニ十二郡トシ河曲ヲ省ケリ、多度錦島御座ノ三名ナシ、今考ニ錦島ハ紀州牟婁郡ニ隷リ、御座ハ志州英虞郡ニ隷ル、往昔本州ニ混屬セリ、其時世ニ桑名ノ外ニ美濃州ニ屬セル多度ヲ以テ、本州ノ有トナリシヲ加ヘテ十五郡ト稱スナルベシ、故ニ多度桑名同郡ナレバ、今モ通ジテ私稱ス、横ノ郡ハ員辨郡ハ、西北ニ居シテ縱トシ、本郡ハ東南ニ蟠テ横ナル地勢ヲ以テ俗稱スナルベシ、〇中略本郡疆域ハ、東ハ滄海ヲ限リ、尾張州知多郡及海東郡ニ接ス、西ハ員辨郡界ヲ限リ、南ハ朝明郡界ヲ限リ、北ハ尾張州海西郡、美濃州揖斐郡及多藝郡ヲ限レリ、

〔倭姫命世記〕十四年〇垂仁九月一日、遷幸于伊勢桑名野代宮、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月丙戌、天皇宿于桑名郡家、即停以不進、丁亥、高市皇子遣使於桑名郡家、以奏言、遠居御所、行政不便、宜御近處、即日天皇留皇后而入不破、比及郡家、尾張國司小子部連鉏鉤率二万衆歸之、

員辨郡

〔勢陽五鈴遺響員辨郡一〕員辨郡〇中略本郡封疆ハ、東桑名郡界ニ限リ、西ハ近江國犬上郡越智郡、及美濃國石津郡ニ跨テ界ヲ限リ、南ハ朝明郡界ニ限リ、北ハ美濃國石津郡界ニ限レリ、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年五月癸未、伊勢國員辨郡人猪名部文丸獻白鳩、賜爵二級、當國稻五百束、

朝明郡

〔勢陽五鈴遺響朝明郡一〕朝明郡　或朝家ニ作ル、朝明ト稱ス、名義ハ或説ニ朝明山ト歌ニ稱シ、當今員辨郡ヨリ山脈連綿シテ街道ノ乾位ハ纔ニ小山アリ、西南ニ聯リテハ田光山、國見嶽、水無瀬山等ノ高嶽列テ聳タリ、近江國ニ隣比シテ、界ス、是ヲ徴シテ朝明山ト詠タルナリ、〇中略姓氏錄云、朝家直火明命之後也云々、〇中略然レバ火明命ノ御名ヨリ起リテ、昭明ノ義ヲ採用テ朝明ト郡名

ニ稱スルナリ、○中略本郡封疆ハ、東西五里、南北一里餘、東ハ海瀕ヲ限リ、西ハ近江國犬上郡界ヲ限リ、南ハ三重郡界ヲ限リ、北ハ員辨及桑名郡界ヲ限レリ、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年六月丙戌、且於朝明郡迹太河邊、望拜天照大神、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年十月壬午、行幸伊勢國、 十一月丙午、從赤坂發到朝明郡、

三重郡

〔勢陽五鈴遺響 三重郡 一〕三重郡 三重ト稱スル名義ハ、舊ト景行天皇朝ニ倭建命東征ノ時、古事記曰、自其地幸到三重村之時、亦詔曰、吾足如三重勾而甚疲、故號其地謂三重、是桑名郡尾津山ヨリ鈴鹿郡能褒野ニ到玉フ順路ナリ、其故ヲ以テ名ノ起レルナリ、○中略本郡封疆ハ東西四里、南北二里、東ハ東海ヲ限リ、西ハ近江州ヲ限リ、南ハ鈴鹿河曲二郡ノ界ヲ限リ、北ハ朝明郡界タリ、朝明郡界ハ、當郡羽津村ト三ツ屋ノ間、羽津志氐神社ノ前ニ標石アリ、又鈴鹿郡界ハ、高岡川ノ水源ヲ界トシ、今宿村ト高岡村ノ間ニ界アリ、

〔古事記 下 雄略〕天皇坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、伊勢國之三重婇(ウネベ)指擧大御盞以獻、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年六月甲申、到川曲坂下而日暮也、以皇后疲之暫留輿而息、然夜曀欲雨、不得淹息而進行、於是寒之雷雨已甚、從駕者衣裳濕以不堪寒、及到三重郡家、焚屋一間而令熅寒者、

河曲郡

〔勢陽五鈴遺響 河曲郡 一〕河曲郡 河曲ト稱スル名義ハ、和名類聚抄ニ、河曲、加波和ト訓ジテ、今略約シテ加波ノ郡トモ俗稱セリ、拾芥抄ニ、河曲ヲ河久摩ト訓ズ、○中略本郡ハ鈴鹿川ノ下流ニ、甲斐川、高岡ノ大河、其郡ノ北ニアリ、又服部郷ノ大流、郡ノ南ニアリ、南北相對シテ、二河ノ隈ニアルヲ以テ、加波久麻ヲ略シテ、加波和ト稱スナリ、 本郡封疆ハ、東ハ滄海ヲ限リ、西ハ鈴鹿郡界ヲ限リ、東西一里餘、南北一里、

〔神宮雜例集 一〕一神田事

伊勢國 ○中略 川曲郡 光富神田

鈴鹿郡

〔勢陽五鈴遺響鈴鹿郡一〕鈴鹿郡　鈴鹿ト稱スル名義ハ、舊典ニ據ナシ、〇中略本郡封疆ハ、本郡東西四里、南北二里、東ハ河曲郡ヲ限リ、西ハ近江國犬上郡ヲ限リ、南ハ菴藝郡ヲ限リ、北ハ三重郡ヲ限リ、本郡大河久保村ヨリ近江國甲賀郡大河原村ニ至ル、山路二里半、大河原越ト稱ス、

〔倭姬命世記〕十四年〇垂仁九月一日、遷‐幸于伊勢國桑名野代宮、四年奉‐齋、次鈴鹿奈具波志忍山、爾神宮造奉、天、六箇月奉‐齋、于時〇中略川俣縣造祖、大比古命參相支、汝國名何問給、答白久、味酒鈴鹿國、奈具波志忍山止白支、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月甲申、至‐伊勢鈴鹿、爰國司守三宅連石床、介三輪君子首、及湯沐令田中臣足麻呂、高田首新家等參‐遇鈴鹿郡、則且發‐五百軍、塞‐鈴鹿山道、到‐川曲坂下、而日暮也、

菴藝郡

〔勢陽五鈴遺響菴藝郡一〕菴藝郡〇中略本郡ノ疆域ハ、西ハ鈴鹿郡界ヲ限リ、東ハ滄海ヲ限リ、尾州智多郡ニ接ス、南ハ安濃郡界ヲ限リ、北ハ河曲郡界ヲ限リ、郡中凡テ大河ナシ、楠原川、窪田川、越智川ノ小流アリ、土立ハ稻田圃蔬及海物多ク、山林稍ナリ、柴薪又產リ、

〔散木弃謌集九雜〕伊勢に侍りける比、みやこのかたよりしりたる人のもとより扇にそへてをくりて侍けり、〇中略

かへし

すゞか山は扇のこほりにあり

ふりすてゝこえざらましかゞか山扇の風ふのきこましかば

安濃郡

〔勢陽五鈴遺響安濃郡一〕安濃郡〇中略郡疆域ハ、西ハ伊賀州山田郡界ヲ限リ、東ハ東海ヲ限リ、南ハ一志郡ノ界ヲ限リ、北ハ菴藝郡ヲ限レリ、

〔倭姬命世記〕十四年〇垂仁九月一日、遷‐幸于伊勢國桑名野代宮、四年奉‐齋、次鈴鹿奈具波志忍山、爾神宮造奉、天、六箇月奉‐齋、于時〇中略阿野縣造祖眞桑枝太命爾、汝國名何問賜、白久、草蔭阿野國止

一志郡

白氏、進神田并神戸、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年七月十四日丙戌、先是伊勢國司介從五位下清原眞人長統、中略并諸郡司十五人、總廿七人、爲安濃郡百姓神人部束成建部繼束所告隱、

〔神宮雜例集 一〕神封事 付神田并御領

朝明郡　寬仁三年九月十一日符

員辨、三重、朝明、謂之道前三郡、安濃之謂東西郡、中略

一神田事 中略

安乃郡七町三百步 東郡三町四段、田代五町一段、以一段百八十步爲供田一段、西郡三町六段三百步、代田五町五段九十步、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、中略

伊勢國 中略　安東郡 中略　安西郡

〔安東郡專當沙汰文〕元德 後醍醐 元年 己巳 十一月注之

安東郡權專當方御田供用御籾大餅小餅等收納、并宮中奉納以下方々支配沙汰之次第、中略

一宮中奉納之時、安濃東西郡正權專當等、寄合テ直會祓料肴魚以下之物等買之大意日記事、中略

右安東郡權方當年所當御籾進上如件

嘉曆參年十一月廿一日　　安東郡權專當守吉上 中略

一在閏月之歲、酒月籾代トテ、錢三百文、宮中出納所方ヘ進之、中略彼籾代者西郡正權專當六百 三百文宛 東郡正權六百 三百文宛 出對之間、彼是一貫二百之內、一貫爲正物出納所 或時政所 方ヘ進之、

〔勢陽五鈴遺響 一志郡 一〕一志郡 中略　本郡疆域、伊勢國風土記曰、東西十三里、南北三里、上世ノ里程ニシテ今ト異ナリ、西ハ伊賀州山田郡、伊賀郡、名張郡、大和國宇陀郡ヲ限リ、東ハ東海ヲ限リ、南ハ飯高郡界ヲ限リ、北ハ安濃郡界ヲ限レリ、

飯高郡

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年十月壬午、行幸伊勢國、十一月乙酉、到伊勢國壹志郡河口頓宮、謂之關宮也、乙未、從河口發、到壹志郡宿、

〔勢陽五鈴遺響 飯高郡 一〕飯高郡　飯高ト稱スル名義ハ、飯野ト同ク舊ト一郡ニ隷ルノ處ニシテ、後ニ分置セルナリ、〇中略本郡界域ハ、東ハ海瀨ヲ限リ、西ハ大倭州宇陀吉野二郡ヲ限リ、南ハ飯野、多氣、度會三郡ヲ限リ、北ハ一志郡ニ限レリ、

〔倭姬命世記〕二十二年〇垂仁十二月二十八日、遷飯野高宮、四箇年奉齋、于時飯高縣造祖乙加豆知命 爾、汝國名何問賜、白久、意須比飯。高。國。止白 而、進神田幷神戶、倭姬命飯高志止白事貴止、悅賜支、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十年九月甲寅、伊勢國飯高郡人无位伊勢直族大江授外從五位下、

〔神宮雜例集 一〕神封事 付神田井御領

飯高郡　文治元年九月九日符

南北兩郡

多氣郡

〔勢陽五鈴遺響 多氣郡 一〕多氣郡　多氣ト稱スル名義ハ、舊竹郡ニシテ、後ニ二字ニ塡ン爲ニ、字ヲ假テ多氣ト稱スルナリ、〇中略本郡疆域ハ、東ハ海瀨ヲ限リ、西ハ大和州吉野郡、及添下郡界ヲカギリ、南ハ度會郡界ヲ限リ、北ハ飯高郡、及飯野郡界ヲ限レリ、東西十八里、南北二里餘、

〔倭姬命世記〕大足彥忍代別天皇 景行〇卄年庚寅歲、倭姬命年既老耆、不能仕、〇中略五百野皇女於皇大神乃御杖代天止志。多。氣。宮造奉天、齋愼美令侍給支、

〔續日本紀 三十 文武〕慶雲元年正月戊申、伊豫國多氣、度會二郡少領已上者、聽任三等已上親、

〔續應仁後記 三〕大神宮炎上勢州一揆亂事

其比伊勢國司北畠晴具卿ハ勢。南。ノ。多。藝。ニ住シ、武威專ラ盛ニシテ、和州エモ打入リ、宇智郡ノ諸士ヲ靡カス、

飯野郡

〔勢陽五鈴遺響 飯野郡〕飯野郡　飯野ト稱ス名義ハ、舊ト飯高郡ニ隷リテ一郡ノ地ナリ、中略　本郡ノ疆域ハ、東ハ東海ヲ限リ、西ハ飯高郡界ヲ限リ、南ハ多氣郡界ヲ限レリ、北ハ一志郡界ヲ限レリ、東西三里、南北一里、

〔倭姬命世記〕神服機殿

倭姬命入坐飯野高宮、作機屋、令織大神御衣、中略　難波長柄豐崎宮御宇天皇孝德　丙午年、竹連磯部直二氏建此郡焉、

〔續日本紀 十八 孝謙〕天平勝寶四年十月辛巳、伊世國飯野郡人飯麻呂等十七人、賜秦部姓、

度會郡

〔勢陽五鈴遺響 度會郡 一〕度會郡 中略　本郡界域ハ、東ハ海瀨ヲ限リ、西ハ紀伊州牟婁郡ヲ限リ、南ハ海ヲ限リ、北ハ多氣郡ニ限レリ、

〔倭姬命世記〕裏書勘註曰、風土記曰、夫所以號度會郡者、畝傍樫原宮御宇神日本磐余彥天皇神武　詔天日別命、覓國之時、度會賀利佐嶺火氣發起、天日別命視之曰、此小佐居歟、遣使者見、使者還來申曰、有大國玉神、賀利佐到于時大國玉神、遣使奉迎天日別命、因令造其橋、不堪造畢、于時到、今以梓弓爲橋而渡焉、爰大國玉神資彌豆佐々良比賣神參來、迎相土橋鄉岡本村、天日別命歎地出之、參會日刀自爾度會焉、因以爲名也、

〔日本書紀 九 神功〕九年三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮、親爲神主、中略　逮于七日七夜、乃答曰、神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉、

〔釋日本紀 十一 述義〕百傳度逢縣

兼方案之、百傳者、天照大神鎭座五十鈴宮之以前、遷坐于大和國以下處々、故云百傳也、號度會郡蓋又度過之義、

〔神宮雜例集 一〕神封事 付神田井御領

伊勢國神郡八郡事〇中略

又云、〇本記 難波長柄豐前宮御世、〇孝德 飯野、多氣、度相總一郡也、其時多氣之有爾鳥墓立郡時爾、以己酉年始立度相郡、以大建冠神主奈波任督造、以少山中神主針間任助造、皆是大橋主命末葉度會神主先祖也、

〔續日本紀 文武 一〕二年十二月乙卯、遷多氣太神宮于度合郡、

〔續日本紀考證 文武 一〕遷多氣太神宮云云 未詳、和名抄郡名、伊勢國多氣、或曰、宮下一本有寺字、疑司字之譌、

〔倭名類聚抄 國郡 六〕伊勢國

桑名郡　野代 乃之呂　桑名 久波奈　額田 奴加多　尾津 乎都　熊口 久末久知

員辨郡　野摩 也末　笠間 加佐萬　石加 以之加　美耶 三也　久米 久女

朝明郡　田光 多比加　杖部 波世都加倍　額田 奴加多　大金 於保加禰　豐田 止與多　訓覇 久留倍

三重郡　采女 宇禰倍　河後 加波之利　葦田 安之美多　柴田 之波多　刑部 於佐加倍

河曲郡　神戸　驛家　中跡 奈加止　海部 阿末　川部　賀美 加美　資母 之毛　深田 布加多

鈴鹿郡　英多 安加多　高宮 多加美也　長世 奈加世　鈴鹿 須々加　枚田 比良多　神戸　驛家

奄藝郡　奄藝 安無木　田井 多井　鹽屋 之保也　服部 八止利　黑田 久呂多　窪田 久保多

安濃郡　建部 太介無倍　村主 須久利　内田 宇知多　英太 阿加多　跡部 阿止倍　長屋 奈加也　石田 伊波多　驛家　駅寺〇駅高山本作片

縣 加多々々

壹志郡　八太 波多　日置 比於木　島抜 之末奴木　民太 三乃多　神戸　須可 須加　小川 乎加波　呉部 久禮倍　宕野 多木乃

餘戸

飯野郡　乳熊 知久末　兄國 江久爾　黑田　長田 奈加多　漕代 古以之呂　神戸

飯高郡　上枚 加無都比良　下枝　丹生 爾布　英太 阿加多　立野 多千乃　驛家　神戸

多氣郡　相可 阿布加　有貳 宇爾　多氣 多介　麻績 乎宇多　三宅 美也介　流田 奈加禮多　櫛田 久之多

度會郡　宇治　田部多乃　城田多木　湯田多由　伊蘇以曾　高田　箕曲美乃和　沼木奴木　繼橋都木波之　二見布多美　伊氣伊介　驛家　陽田比奈多

〔三國地志伊勢九〕桑名郡　鄕名

野代和名乃之呂、今廢、　按、今村名ニ存ス、　桑名和名久波奈、今廢、　按、今驛名ニ存ス、　額田和名沼加多、今廢、　按、今村名ニ存ス、　尾津和名乎都、今廢、　按、今村名ニ存ス、　熊口和名久末久知、今廢、　按、今所在詳ナラズ、　已上和名抄ニ出ル處ナリ　香取五箇鄕〇中略　按、今村名ニ存ス、五箇ハ香取、南、松木、上逆手、下逆手ナリ、今松木以下長島ニ屬ス、　深矢部鄕　按、大系圖ニ出ル、今村名ニ存ス、

〔古事記中卷景行〕倭建命到坐尾津前一松之許、先御食之時、所忘其地御刀、不失猶有、爾御歌曰、袁波理邇、多陀邇牟迦幣流、遠都能佐岐那流、比登都麻都、阿勢袁、比登都麻都、比登邇阿理勢婆、多知波氣麻斯袁、岐奴岐勢麻斯遠、比登都麻都、阿勢袁、

〔古事記傳二十八〕尾津前、此なる御歌に依に、津は淸て讀べし、和名抄に伊勢國桑名郡尾津乎都鄕、神名帳に同郡尾津神社もあり、此地なり、今は地の名も社の名も遺らず、たゞ戸津村と云があるを、其と語傳へたり、今桑名より二里許西北方、多度神社より廿町ばかり東南の方に、濃野村、戸津村と云ありて、東西に並びたり、其間に八劔宮と云社のあるを、尾津神社なりと云、戸津を尾津なりと云、此なる倭建命の御故事をも語り傳へたり、其地美濃より伊勢に通ひし古道にて、今も然なり、美濃の多藝郡より石津郡を經て至る處にして、美濃との國堺より、一里あまり南なり、此わたり今は海邊よりは遠けれども、古はやがて海邊にて、尾張の津島より渡る泊なりしよし云傳へたり、まことにさぞありけむ、凡て今の桑名郡の長島あたりの地より、尾張の海西郡海東郡の地などは、古は多くは海にてありしを、やう〳〵に南の方へ地を廣けて、今の如くにはなれるなれば、尾津崎は此戸津村のあたりにて、上代には尾張の年魚市縣に、直に向へる地にぞありけむかし、內山眞龍云、此あたりは多度山の尾崎の長く引延たる地にて、其山の崎を里人は鼻長と云り、まことに崎と云べき地形なり、又今は海は遠けれども、入海のさまして、古海べたなりけむこと、著く見ゆるところなりと云へり、此言に就て思ふに、多度山の尾崎の地なる、津なるを以て、尾津とは云しにもやあらむ、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略日本武尊便移伊勢而到尾津、昔日本武尊向東之歲、停尾津濱而進食、是時解一劒置於松下、遂忘而去、今至於此劒猶存、

〔多度神宮寺伽藍緣起幷資財帳〕伊勢國桑名郡楉梓島東庄墾田幷田代○中略
桑名郡野代郷條外里十九室木田貳段參伯歩（常荒、中略）○已上延曆十七年人々所ㇾ進

〔吾妻鏡五〕元曆二年（文治元年）○十一月十二日辛卯、今日河越重頼所領等被ㇾ收公ㇾ、是依ㇾ爲ㇾ義經緣者ㇾ也、其內伊勢國香取五箇郷、大井兵三次郎實春賜ㇾ之、

〔三國地志（伊勢十二）〕桑名郡　郷名

長島○中略　按、長島ノ地、東西二里有餘、南北或一里、或半里ニシテ、大河四方ヲ環リ、其ハ東海勢尾ノ交會ニシテ、桑名ヲ隔コト纔ニ八丁、船ヲ以他境ニ便シ、運漕自由ヲ得タリ、魚鳥蛤蜊尤多、城邊、池沼、平田、葦葭連リ、至テ堅固也、其地尾張ノ西、伊勢ノ北也、（押付村ノ番チ界ヒ、西中川村、東殿名村ニ至ルマデ、北方尾州海西郡內ト稱ス、）故ニ中古、尾州西方ト稱ス、信長記等亦然リ、近世伊勢ノ地トノミ云テ、郡名ヲシラズ、或ハ尾州海西郡ト云ヒ、或ハ勢州横郡ト云、（小寺氏説云、蓋伊勢國者、南北二日路、或二日半路、東西一日路、或半日路也、乃桑名郡勢北地僻横、其餘郡皆狹ㇾ竪也、疑卑俗以ㇾ是謂二横郡一）歟、寬文四年ノ夏、公裁ニ依テ桑名郡ニ屬ス、今之ヲ思フニ、ヨク古ニカナフト云ツベシ、風土記、本郡ニ河內野ノ地名アリテ、眞記ニ河內長島ト記シ、今其名ノ存スルアレバ、古ヨリ桑名郡ナルコト必セリ、

〔信長記七〕長島凶徒被ㇾ攻干事

抑此長島ニハ、一向宗修行ノ僧徒楯籠タリケルガ、所ハ四方節所ニテ、二三里ノ間、大河三重四重引廻シケレバ、地ノ利ニ自慢シテ鐵ノ楯ト心得、近國ノ徒者ドモ相集、山賊海賊等ヲ業トシ、征伐ノ妨ヲナシ、勝ノ利ヲ見テハ、是非ヲ顧ルニ能ハズ、逆威ニヲノリ、王政ヲモ不ㇾ恐ノ間、旁攻伐ントテ、手ヲ分、四方ヨリ推入給フ、

〔三國地志（伊勢十三）〕員辨郡　郷名

野摩（和名也末、今廢、）　按、今所在詳ナラズ、

笠間（和名加佐万、今廢、）　神鳳抄曰、員辨郡笠間郷、按、今村名ニ存ス、

石加(和名加以之、今廢、)　按、石河村是ナリ、石加石河相通ズ、石河ハ、神鳳抄皇宇沙汰文ニ載セテ古邑ナリ、又飯倉村ニ石神社アリ、石加(イシカ)石神(イシカ)相通シテ、飯倉石河隣里ナレバ、古ハ共ニ石加ノ郷内ナルニヤ、記シテ後ノ考ヲ俟ツ、　美耶(和名三也、今廢、)　神鳳抄曰、員辨郡宮郷、又宮郷司職田、按、今所在詳ナラズ、　久米(和名久女、今廢、)　神鳳抄曰、員辨郡久米郷、又同郷用永、又久女郷司職田、按、今赤尾村ニ此郷名存スト云、　已上和名抄ニ出ル所ナリ

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、〇中略

伊勢國　員辨郡〇中略

宮〇〇郷司職田　久米〇〇郷外宮神田(五丁三反)　笠間〇〇郷司職田(六丁)

〔三國地志(伊勢十五)〕朝明郡　郷名

田光(和名多比加、今廢、)　按、今村名ニ存ス、　杖部(和名鉢世部加倍、今廢、)　按、羽津村ニ長谷神社アリ、皆是杖部ノ省語ニシテ、其遺郷ナルベシ、　額田(和名沼多、今廢、)　按、今村名ニ存ス、　大金(和名於保加爾、今廢、)　按、今村名ニ存ス、　豊田(和名止與多、今廢、)　按、今村名ニ存ス、　訓覇(和名久留倍、今廢、)　按、今大矢智村ノ字ニクルベ垣内ノ名アリ、是ナリ、　已上和名鈔ニ出ル所ナリ　小向郷　按、異本親元日記ニ出ヅ、今村名ニ存ス、　金綱郷(一作二歟擴一、又擴〇中略)　羽津郷　按、金綱以下今アリ、古今ノ廢置考ル所ナシ、

〔親元日記〕寛正六年七月六日辛亥

施行案(諏信州書上〇〇)伊勢國朝明郡小向郷內、名主山本兄弟等(交名在二別紙一)跡散在(名田畠屋敷)山林以下事、早任二御判之旨一、可レ被レ沙二汰付下地於伊勢與一貞弘(貞弘作二被上野一、後號二下手一)、代一之由所レ被二仰下一也、仍執達了、

寛正六六十七　管領畠山尾張守在判(政長免玖彼入)

一色左京大夫殿(義直)

七月十二日丁巳、與一殿奉之奪行一色殿小倉方ヨリ到來之、

伊勢國朝明郡小向鄕內、名主山本兄弟等交名在別紙跡散在名田畠屋鋪山林以下事、任去月十七日

御施行旨、可被沙汰付伊勢與一代之狀如件、

寛正六七七　　制

石河佐渡入道殿

〔三國地志十七伊勢〕三重郡　鄕名

采女和名宇禰倍、〇中略　按、今存ス、天文年中、火宮梁棟文ニ采女鄕ト云、采女、杖突、古市場、清水、小松、羽木、貝家、是ヲ采女七鄕ト云、　河後和名加紫之利、今廢、〇中略　按、今村名ニ存ス、　葦田和名安之美多、今廢、神祇式及神鳳抄作足見田、

按、式足見田社水澤村ニアリ、　柴田和名之波多、今廢、〇中略　刑部和名於佐加倍、今廢、　按、村名ニ存ス、　已上和名抄ニ出ル所ナリ、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合今請墾田地玖佰玖拾肆町〇中略

伊勢國六百四十四町〇中略

同〇三重郡采女鄕十四町〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔大神宮諸雜事記二〕長曆三年七月十六日、齋宮內侍ノ託宣偁、〇中略　具注託宣之狀、奏聞於公家了、隨則以同廿九日、被下宣旨、召返流人佐國、賜位記已了、抑佐國被送配所國之間、老病難堪、途中三重郡河後鄕數日逗留之間、依件託宣被召返也、

〔朝野群載六神祇官〕神祇官謹奏〇中略

坐伊勢國大神宮御服織殿麻績少神部、三重郡司、柴田鄕專當〇中略等、依過穢神事祟給、遣使科中祓可令祓清奉仕事、〇中略

康和五年六月十日〇署名略

〔三國地誌 伊勢 二十〕河曲郡　郷名

神戸 按、今存ス、 驛家 今廢 按、兵部式ニ所謂河曲驛是也、在所詳ナラズ、○中略 中跡 和名奈加止、今廢、 按、今村名ニ存ス、東大寺尊勝院領康暦舊案ニ云、伊勢國中臣號河曲、神鳳抄云、永藤(ナカトウ)ノ類、或ハ省語清濁ノ異ナルヲ以、其文字ヲ異ニストイヘドモ、倶ニ奈加等郷ノコト也、 海部 和名阿末、今廢、 按、玉垣ノ村里、海邊ニアリシトキノ舊名ナリト、○中略 川部 今廢 按、今詳ナラズ、 賀美 和名加美 資母 和名之毛、今井廢、 按、今上箕田下箕田ノ村アリ、恐ハ是ナラン、 深田 和名布加多、今廢、 按、今ノ北若松村ノ古名ニシテ、式ノ深田杜此處ナリト云、 已上和名鈔ニ出ル所ナリ、然ニ今郷ヲ以テ稱スルモノ、杉野郷吉清郷ノミ、其沿革存亡更考ル處ナシ、

〔三國地志 伊勢 二十二〕鈴鹿郡　郷名

英多 和名安加多、今廢、 按、川崎村別名ニ縣ノ名存シ、縣主ノ式社アリ、 高宮 和名多加美也、今廢、 按、今村名ニ存ス、 長瀨 和名奈加世、今廢、 按、今菅內村ニ長瀨ノ式社アリ、其舊跡ヲ長瀨沖ト云、古ヘ其邊ヲ長瀨郷ト云傳說アリ、 鈴鹿 和名須々加、今廢、 按、今鈴鹿ノ社、鈴鹿山、鈴鹿峯、鈴鹿川ノ名、坂下驛ニ存ス、 枚田 和名比良多、今廢、 神戸 今廢 按、今野尻村古昔行宮ノ地ニシテ、皇館ノ遺址アリ、神戸七郷ノ名存ス、恐ハ神戸此地ニアルベシ、 驛家 今廢○中略 按、今古馬屋村ト云、 已上和名鈔ニ出ル所ナリ 按、今郷ヲ以稱スル晝生七郷、加太郷、畑三郷、莊內七郷、岡田郷、國府郷等ノ名アリ、其沿革存亡更ニ考ル所ナシ、

〔尾張國熱田大神宮緣起〕日本武尊體中不豫、欲歸尾張、便移伊勢、到尾津濱、○中略 過鈴鹿山、○中略 渡鈴鹿河中瀨、忽隨逝水、時年三十、仍號其瀨曰能知瀨、能知者命終之詞也 今改爲長瀨、訛也、

〔三國地志 伊勢 二十三〕鈴鹿郡

長瀨神社 按、菅內村ニ坐ス、○中略 竊意フニ長瀨ハ長背ニシテ、尊ノ長大ヲ以テ稱スルナルベ

シ、緣起ノ說未瑩ザルニ似タリ、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年二月己卯、伊勢國言、鈴鹿郡枚田鄕戶主川俣縣造繼成戶口保茂麻呂妻川俣縣造藤繼女產二男、

〔三國地志二十九伊勢〕奄藝郡　鄕名

奄藝（和名安無木、今廢、）　按、今郡名ニ存ス、古ヘ一身田ノ邊ナリト云、　田井（和名多井、今廢、）　按、今山田井村存ス、　鹽屋（和名之伍、今廢、）　按、今稻生村支鄕ニ存ス、　服部（和名入止利、今廢、）　按、式ニ服部社アリ、郡山神領舊案ニ服部鄕七尾崎ト云コトアリト云、今所在詳ナラズ、　黑田（和名久呂多、今廢、）　按、今村名ニ存ス、　窪田（和名久保多、今廢、）　按、今村名ニ存ス、今窪田ノ庄ト云、　已上和名抄ニ出ル所ナリ

〔神領給人引付〕一禰宜度會神主文通貞松等謹言上

欲早任先規傍例、且依代々地頭方寄進狀、預御興判、全以下領被備進有限二宮御油間事、副進、一卷代々地頭寄進狀案、

右於伊勢國安藝郡栗眞庄黑田鄕千王名內禰久者、（○下略）

〔三國地志三十一伊勢〕安濃郡　鄕名

建部（和名太介倍、今廢、）　總國風土記曰、安濃郡建部鄕、（○中略）　按、今此名亡ブ、風土記ニ、東ハ建部浦ヲ限ルトイヘルヲミレバ、八幡浦邊ノコトヽミエタリ、八幡ノ相殿ニ建部ノ神號アリ、是本鄕ノ神ナル歟、（○中略）　村主（和名須久利、今廢、○中略）　按、今村ニ存ス、　內田（和名宇知多、今廢、○中略）　按、今村名ニ存ス、　英太（和名阿加多、今廢、）　按、所在詳ナラズ、　跡部（和名阿止倍、今廢、）　按、今村名ニ存ス、　長屋（和名奈加也、今廢、）　按、神鳳抄ニ安西郡長屋御園アリ、所在詳ナラズ、　石田（和名伊波多、今廢、）　按、今村名ニ存ス、　驛家　按、阿濃驛是歟、　駅縣（和名加多加多）　按、駅縣ハ駅々ニシテ今片田ニ作、　已上和名鈔ニ出ル所ナリ、

〔三國地志三十五伊勢〕壹志郡　鄕名

八太和名鉢多、神祇式作二波多一　日置和名比於木　島抜和名之末招木　民太和名三乃多　按、八太ヨリ以下今廢シテ村名ニ存ス、　神戸　按、今廢シテ所在詳ナラズ、　須可和名須加、神祇式作二須加一、　小川和名乎加波　按、今廢シテ村名ニ存ス、　呉部和名久禮倍　宕野和名多木乃　餘戸　按、呉部ヨリ以下、今廢シテ所在詳ナラズ、　已上和名鈔ニ出ル所ナリ

〔三國地志四十三伊勢〕飯野郡　郷名

乳熊和名知久末、今廢、○中略　按、今ノ中間村ハ乳熊ノ本郷ニシテ、即訓ノ譌轉セルナリ、○中略　兄國和名江久爾、今廢、○中略　按、今村名ニ存ス、多氣郡ニ屬ス、　黒田今廢○中略　按、今村名ニ存ス、　長田和名奈加多、今廢、○中略　按、所在詳ナラズ、　濯代和名古以之呂、今廢、　按、朝田村北ニ濯村アリ、蓋是乎、　神戸今廢　按、今詳ナラズ、　已上和名抄出ル所ナリ　井手今廢○中略　按、井口村ト云是ナリ、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、○中略

伊勢國　飯野郡

中万郷七十二丁七段　完一國郷○完一本作兄　黒田郷六十丁一段二十歩　長田郷四十六丁五段三十歩　井平郷十六丁三段

〔三國地志四十一伊勢〕飯高郡　郷名

上枚和名加無都比良、今廢、　下枚今廢　按、上枚中枚北枚ノ三邑、今多氣郡ニ屬ス、然レドモ地勢ヲ考フルニ、舊本郡ノ地ナルコト必セリ、枚牧字形ノ似タルヲ以テ後世誤ル歟、　丹生和名爾布、今廢、　英太和名阿加多、今廢、　立野和名多千乃、今廢、　按、丹生以下今村名ニ存ス、　驛家　按、岸江村ハ故驛ノ地ナリ、蓋シ其異稱歟、　神戸　已上　和名抄ニ出ル所ナリ

〔今昔物語十五〕伊勢國飯高郡尼往生語第卅八

今昔、伊勢國飯高郡上手ノ郷ニ一人ノ尼有ケリ、

〔三國地志四十五伊勢〕多氣郡　郷名

相可和名阿布加、今廢、○中略　按、今村名ニ存ス、　有貳和名宇閇、今廢、○中略　按、今村名ニ存ス、　多氣和名多介、今廢、　按、今郡名ニ存ス、　麻績和名乎宇美、今廢、○中略　按、三代實錄下麻續中麻續ト云、今中村下村アリ、是古ノ麻績郷ナリ、　三宅和名美也介、今廢、○中略　按、今所在詳ナラズ、　流田和名奈加禮多、今廢、○中略　按、雜例集飯野郡ニ隷ス、　櫛田和名久之多、今廢、○中略　按、今村名ニ存ス、　已上和名抄ニ出ル所ナリ

〔神宮雜例集　一〕御鎭座事付改二宮地一事

一神服麻績兩機殿

神服機殿在二多氣郡流田郷服村一　麻績機殿在二同郡井手郷一○中略

一齋宮寮在二多氣郡竹郷一

〔神鳳抄〕二所太神宮御領諸國神戸、御厨、御園、神田、名田等、○中略

伊勢國　多氣郡

麻績郷　三宅郷　有爾郷　田邊郷内原村　相可郷内佐奈村　流田郷　櫛田郷

〔倭姬命世記〕神服機殿

倭姬命入二坐飯野高宮一、作二之機屋一、令レ織二大神御衣一、從二高丘宮一而入二坐礒宮一、因立二社於其地一、曰二名服織社一、號二麻績郷一者、郡北在レ神、此奉二大神宮荒妙衣一、神麻績氏人等別二居此村一、因以爲レ名也、

〔吾妻鏡　七〕文治三年五月廿六日丁卯、宇治藏人三郎義定代官、押二領伊勢國齋宮寮田櫛田郷内所處一云云、可レ被レ糺二明之一旨被レ仰二下之一、○下略

〔三國地志　四十八〕度會郡　鄕名

宇治二儀式帳作二宇治一○中略　按ニ、宇治二郷松下、朝熊、東鹿海、西鹿海、楠部、市宇田、中村、之ヲ呼テ宇治六郷ト云、　田部和名多乃倍○中略　按、田邊上下ノ二村ニ、數野ヲ合シテ田邊郷ト云、　城田和名木多○中略　按、宮古、山神ノ二村、是ヲ城田郷ト云、　湯田和名由多○中略　按、湯田ニ小俣佐田ノ二村ヲ合シテ湯田郷ト云、

伊蘇（和名伊蘇、今廢、○中略）　按、今村名ニ存ス、　高向（今廢、○中略）　按、今村名ニ存ス、高向ヲ高田ニ作ルモノハ、和名抄傳寫ノ誤ナラン、

箕曲（○中略）　沼木（和名奴木、風土記作貫木、○中略）　按、佐八、葛原ノ二村、是ヲ沼木郷ト云、継橋（○中略）　二見（和名布多美、○中略）　按、山田原、三津、荘村、出口（今亡）今一色、西村、江村、是ヲ二見七郷ト云、　伊氣　驛家　陽田（和名比奈多、今廢、）　按、今日向村ニ存ス、　已上和名抄ニ出ル所ナリ　按ニ、今郷ヲ以テ稱スル宇治郷、田邊郷、城田郷、湯田郷、沼木郷、二見郷（並見上）　山田十二郷（田尻、阿竹、竹ヶ鼻、新開、馬瀬、小米、久志本、神田、船江、川崎、）濱五郷（中村、一色、通村、神社、下野、黒瀬、）等ノ名アリ、其沿革存亡更ニ考ル所ナシ、　香樉郷　荒木郷　田尻郷　雲宇途郷　櫻田郷　右五郷、風土記ノ所見ナリ、其存亡考ル所ナシ

〔大神宮諸雜事記〕一天皇（垂仁）○即位卅五年（丙辰）天照坐皇大神天降坐於大和國宇陀郡、○中略其後奉令鎭坐伊勢國度會郡宇治郷五十鈴川上下都磐根御宮所也、

〔倭姫命世記〕二十五年（垂仁）○倭姫命○中略　二見濱御船坐、于時大若子命（仁）國名何問給（支）、答白（久）、速雨二見國（止）白（支）、○中略五十鈴川後江（爾天）奉御饗、于時猿田彦神裔、宇治土公祖太田命參相（支）、汝國名何問給、答白（久）、佐古久志呂宇遲之國（止）白（氏）、御止代神田進（支）、

〔神宮雜例集〕一御鎭座事附改宮地事

一中臣氏祖神○中略

桓武天皇延暦十六年丁丑八月三日官符、移立離宮院於度會郡湯田郷之時、件社自津島崎奉遷鎭彼院西方也、○中略

一離宮院

延暦十六年丁丑八月三日官符、從度會郡沼木郷高川原移造於同郡湯田郷宇羽西村畢、

〔大神宮諸雜事記〕一天平三年六月十六日、御祭（仁）、二見郷長石部島足參入神宮、而煩霍亂退出之間、於神宮近邊倒死亡了、

村里名邑

〔勢陽雜記　一〕郡部目錄

桑名八十三村、外小村三、　員辨百村　朝明五十六村、内二ヶ村ハ一所ニ兩村ヅヽ有、　三重八十九村、内二ヶ村、一所ニ兩村ヅヽ有、小村五、　河曲三十村内三ヶ村、一所ニ兩村ヅヽ有、外小村一、　鈴鹿八十七村、内二ヶ村ハ一所ニ兩村ヅヽ有、外小村十一、　安藝五十七村、外小村四、　安濃八十五村、外小村三十五、　一志百三十三村、外小村七十八、　飯高百十二村、外小村四、　飯野四十一村、外小村十三、　多氣百三十三村、内二ヶ村一所ニ兩村ヅヽ有、外小村八、　度會百八十八村、外小村廿一、

〆十三郡　〆千百九十四村内十一ヶ村ハ一所ニ兩村ヅヽ有之、外ニ小村百七十四ヶ村、亦地高ハ有之、無里八ヶ村、

〔郡名一覽〕一伊勢國御料私領勢州　南北三日餘　拾三郡

高六拾貳萬千貳拾七石四斗四升貳合　千四百ヶ村

●津百二里半安濃津共　●久居百六里半　●龜山百三里半　●桑名九十四里

●神戶百二十一里半一丁　●長島九十五里半　○菰野九十八里　□山田百十四里京三十五里大坂四十三里

松坂紀州領　田丸紀州領

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕伊勢　十三郡千三百二十五村　高御料私領七十一万六千四百五十一石四斗九升二合七勺

桑名郡百六十九村　員辨郡百六村　朝明郡六十四村　三重郡八十九村　鈴鹿郡八十八村

河曲郡三十八村　安藝郡六十一村　安濃郡八十五村　一志郡百三十一村　飯高郡百十三村

飯野郡三十九村　多氣郡百二十九村　渡會郡二百十三村

〔地勢提要　坤〕郡邑島嶼奇名

伊勢　三重郡、閏田村、生桑村、小生村、大沼田村、鈴鹿郡、椿世村、桑名郡、横滿藏新田、朝明郡、河曲郡、長太村、一志郡、肥留村、多氣郡下有爾村、渡會郡、礫浦、大江村、

〔古事記　中景行〕倭建命幸到三重村之時、亦詔之、吾足如三重勾而甚疲、故號其地謂三重、

〔日本書紀　十四雄略〕十七年三月戊寅、詔土師連等、使進應盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾笥、仍進中○

莊

〈略〉伊勢國藤形村、及丹波、但馬、因幡私民部、名曰贄土師部、

〔日本書紀 十八 安閑〕元年閏十二月、是月、物部大連尾輿恐事由已不得自安、乃獻十市部、伊勢國來狹狹、登伊、〈來狹狹、登伊、二邑名也、〉贄土師部、筑紫國膽狹山部也、

〔大神宮諸雜事記 二〕治暦二年十二月廿六日宣旨、明正月五日到來、使神祇權大祐大中臣惟經、右史生佐伯親寵、使部二人等也、件勅使等不著於離宮院天、小俣村乃小人乃宅來著天、二宮神主宮司祭使權少副共任宣旨、件合戰亂行之由、弁定使勘記云々、具不記、

〔吾妻鏡 十八〕建永二年〈〇承元元年〉十一月十七日戊子、伊勢國小幡村者、爲伊勢平氏富田三郎基度、年來忽緒領家、押領之、滅亡後又爲沒收地、被補新地頭之間、領家女房頻愁申之、爲大夫屬入道善信奉行、今日停止其職、如本可爲領家進止之由、被仰遣云云、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年八月七日戊午、世上屬無爲、是符合二品禪尼〈〇平政子〉夢想、仍奉寄所於二品大神宮、所謂內宮御料後院領、伊勢國安示村、井後村、外宮御分、同國領葉若西園兩村也、祭主神祇大副隆宗朝臣、藤原朝臣、定帶彼寄附狀等、重爲報賽使節云云、

〔勢陽五鈴遺響 庵藝郡二〕白子　稻生ノ東海瀕ニアリ、舊名白兒ト記ス、又栗眞庄ト稱ス、

〔朝野群載 七攝籙家〕政所御下文

攝政右大臣家政所　下伊勢國稻生社、幷栗眞御庄、

可早任年來例、且停止彼此非論、且召遣濫行下手人事、〈〇中略〉

嘉承二年十二月日〈〇署名略〉

〔太平記 五〕大塔宮熊野落事

道路ノ辻ニ札ヲ書テ立ケルハ、大塔宮ヲ奉討タラン者ニハ、非職凡下ヲ不云伊勢ノ車間庄ヲ恩賞ニ可被充行由、關東ノ御敎書有之、〈〇下略〉

〔應仁廣記三〕今出河殿御歸洛事

同年○應仁二七月二十六日、國司栗眞庄ノ内白子ヘ着陣シ、同廿八日、世保本城上箕田林崎、并ニ外城柳若松同時ニ被攻落ケリ、

〔勢州軍記上〕武家執權　第二

一關之一黨事、關一黨者、六波羅太政大臣平淸盛公之後胤、幕紋揚羽蝶也、先祖小松内大臣重盛公之天下執權之頃、次男小松新三位中將資盛卿十三之歳、依殿下乘合、父公憤之、流罪於勢州鈴鹿郡久我庄也、資盛於配所、送凡六年之春秋、

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元暦元年四月六日甲戌、池前大納言竝室家之領等者、載平家沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、○中略

池大納言沙汰○中略　野俣道庄伊勢　木造庄同○中略

右庄園拾七箇所、載沒官注文、自於院所給預也、而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勒狀如件、

壽永三年四月五日

〔吾妻鏡七〕文治三年四月廿九日丙申、三日公卿勅使驛家雜事、伊勢國地頭御家人等、多以對捍之間、召在廳等注進狀、被下之、○中略件目錄云、

文治三年三月卅日

公卿勅使伊勢國驛家雜事、勤否散狀事、合、

一勤仕庄

勸覺院領鹿庄松本判官代盛澄知行　多々利庄四方田五郎弘綱知行　荻野庄一方欠官一方中村藏人　常樂寺庄山城介久兼

一不勤仕庄

壹生庄預所次官親能代官民部大夫範重　富田庄院御領工藤左衛門尉祐經知行　豐田庄地頭加藤太光員　池田別府同前
中跡庄同前　栗眞庄因幡前司廣元　窪田庄同前　長田庄光員○中略　曾禰庄刑部丞經俊○中略　黑田庄二位經俊○中略
穗積庄預所式部大夫雄度　小倭田庄預所廣元　長田庄光員○中略　家城庄地頭常陸六郎　英多庄經俊○中略　新屋
庄二品近衛局○中略　岩成庄小次郎○中略

此外一志驛家甕　三百前沙汰進之

後院御庄內葉若村久吉名　井後村河曲村　平野村安樂村　上野村已上

已上皆無沙汰

介大鹿俊光○下略

〔吾妻鏡十〕文治六年四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米地頭未濟事、頻有職事奉書、○中略
內宮役夫大工作料未濟成敗所々事○中略
伊勢國　新屋庄○中略　伊勢國　小倭庄

〔應仁廣記三〕今出川殿勢州御下向事
同年○應仁元八月廿九日、勢州小倭ノ庄常光寺ニ御著アリ、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年六月廿二日、高野法印貞曉去二月廿二日被入滅訖、其遺跡被奉讓補內府實氏公若公、由相副文書等、被申送武州泰時北條之間、彼領掌任讓狀不可有相違之旨、今日有評定、被成御下知、是○中略伊勢國三箇山、山田野庄等也、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年○曆仁元年二月十六日壬辰、從五位下行隱岐守藤原朝臣行村法師法名行西卒、年八十四、于時在伊勢國益田庄、此間向彼所云云、

〔政所賦銘引付〕一長谷川彥右衛門尉定弘申狀文明五九廿九
勢州益田庄大夫名之內、左近兵衛左衛門商賣料足錢百九十五貫文事、號先年德政无沙汰之、不

藩封

加₌利平₋之上者、更不₋可₋及₌其儀₋、不₌日可₌責渡₋之由、御代官方江奉書事、

〔古今著聞集 十七 恠化〕これも仁治の頃、伊勢の國壹生庄より、百姓也ける法師のぼりて、五條坊門とみの小路にやどりて居たりけり、

〔慶應元年武鑑〕藤堂和泉守高猷 大廣間 従四位上中將元治元子四月任　三拾二万三千九百五十石　居城勢州安濃津 江戸ヨリ百二里半

天正三、織田上總介信包、同十七、富田左近大夫、同信濃守、慶長十三、當城主伊賀國、藤堂和泉守高虎以後代々領之、

藤堂佐渡守高邦 柳間 朝散大夫　五万三千石　居城勢州一志郡久居 陣屋 江戸ヨリ百九里半

寛文十年、藤堂佐渡守高通營之、當所居所以後代々領之、

松平越中守定敬 溜間 従四位少將元治元子四月任　拾一万石　居城勢州桑名郡桑名 江戸ヨリ舟路共九十四里餘

瀧川左近將監一益、後一柳右近將監直盛、氏家内膳正、慶長五、本多中務大輔忠勝、同美濃守忠政、元和三、松平隱岐守定勝、同隱岐守定行、寛永十二、松平越中守定綱、同攝津守定良、同越中守定重、寶永七、松平下總守忠雅、同下總守忠刻、同下總守忠啓、同下總守忠功、同下總守忠和、同下總守忠與、同下總守忠堯、文政六ヨリ松平越中守定永再領之、

石川保之助 帝鑑間 朝散大夫　六万石　居城勢州鈴鹿郡龜山 江戸ヨリ百三里半

始岡本下野守、後關長門守一政居之、慶長十五、松平下總守清匡、元和元、三宅越後守康信、同大膳亮康盛、寛永十三、本多下總守俊次、慶安四、石川主殿頭昌勝、寛文九、板倉隱岐守重常、同周防守重冬、同新十郎重治、寶永七、松平和泉守乘邑、享保二、再板倉近江守重治、同周防守勝澄、延享元ヨリ石川主殿頭總慶以後領之、

增山對馬守正修 雁間 従五位下　二万石　居城勢州桑名郡長島 江戸ヨリ九十五里半餘

福島掃部介居、慶長六、菅沼織部正定盈、同志摩守定芳、元和六、松平隱岐守定勝、寛永二、松平美作守定房、同十二、松平能登守定政、同佐渡守忠充、元祿十五、增山兵部少輔正彌以後領之、

○節略

〔慶應元年武鑑〕本多伊豫守忠貫 帝鑑間 朝散大夫　一万五千石　居城勢州河曲郡神戸 江戸ヨリ百一里半十一町

神戸藏人友盛住、永祿十二、織田三七郎信孝、羽柴下總守勝雅、瀧河左近將監一益居、慶長五、一柳監物直盛、同丹後守直重、寛永十一、石川播磨守總長、同若狹守總眞、同近江守總茂、元祿十七ヨリ本多伊豫守忠統以後領之、

土方聟千代 柳間　一万千石餘　在所勢州三重郡菰野 江戸ヨリ九十八里

田數石高

慶長十年ヨリ土方氏代々領〆之○節略

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊勢國○略 註 管十三 田一萬八千百三十町六段二百四十五歩

〔伊呂波字類抄 伊國郡〕伊勢國 管十三(中略)本田一万八千百三十町六段二百四十五歩

〔海東諸國記〕伊勢州 產水銀、郡十三、水田一万九千二十四町、

〔勢陽雜記 一〕一豐臣秀吉公、天正文祿年中に諸國撿地し給ふ時、當國をば羽柴下總守、岡本下野守、一柳右近大夫、朽木河內守、新庄東玉齋、服部采女正、稻葉兵庫頭等に被仰付、文祿三年に撿地ありしなり、一國の五十九万六千三百三十四石六斗八升八合なりと、村數一千八十九ヶ村也、如此改り、大神宮領四十ヶ村は、上古より守護不入の地として、代々不改例にまかせ、さし除き給ひぬ、此故に高の員數もしらず、さて地方に厚薄有といへども、大やう五穀民性みのり肥やすく、水旱風の損領は、所により歲にしたがふ事なれば、定式考に用ひ難し、大體年の豐凶を押平、六ッ物成にして、一年に得米、

石〆三拾五万七千八百石八斗也　俵〆八拾九万四千五百貳俵　以四斗爲俵也

黃金貳拾貳万三千六百貳拾五兩貳步　此價金子兩ニ付米四俵、兩代六十六匁ニシテ　白銀一万四千七百五拾九貫貳百八拾三匁○中略

一一國總高五拾九万六千三百三拾四石六斗八升八合

但外ニ神領四十ヶ村、古來より不知其高、

四拾三万四千七百六拾四石七斗六升三合　田方

拾五万九千三拾九石九斗貳升二合　畑方

貳千五百石　葭島方

外六万貳千五百六拾壹石六斗三升四合　餘田新田

〔日本鹿子 六〕伊勢國　十五郡大々上國　南北三日餘　知行高五十七万二千七百八十石

〔官中秘策二〕伊勢國　十六郡〇中略

一石高六拾貳万千貳拾七石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

伊勢國御料私領　一高七拾壹万六千四百五拾壹石四斗九升貳合七勺

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

伊勢國正稅公廨各卌〇卌、一本作二四十一万束、國分寺料四万束、修理志摩國國分寺料三千束、文殊會料二千束、〇修理以下十九字原脱、據一本補修理池溝料四万束、救急料四万束、浮囚料一千束、

〔倭名類聚抄五國郡〕伊勢國〇中略管十三(中略)正公各四十萬束、本稻八十八萬千束、雜稻八十束、〇十束、恐千束誤

國產貢獻

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略　水銀小四百斤伊勢國所進、〇中略　白絲二千八百八十絇(中略)八百八十絇伊勢國所進、〇中略　韓櫃(中略)伊勢(中略)伊賀十五箇國、各二合

〔延喜式二十三民部〕年料舂米　伊勢國大炊寮料一千七十石、〇中略

年料別納租穀〇中略　伊勢國四千五百斛〇中略

年料別貢雜物〇中略　伊勢國筆一百管、紙麻一百十一斤、〇中略

諸國貢蘇番次

伊勢國十八壺七口各大一升、十一口各小一升、〇中略　右八箇國爲二第一番一〇丑未年中略

交易雜物〇中略　伊勢國白絹十二疋、絹三百疋、水銀四百斤、櫁二合、鹿角菜二石、青苔五十斤、海松五十斤、搗栗卅斤、於胡栗卅斤、鳥坂苔五斤、海藻根十二斤、那乃利曾五十斤、

〔延喜式二十四主計〕伊勢〇中略　右十二國並上絲〇中略

伊勢〇中略　右廿九國輸絹

伊勢國行程上四日、下二日、

調、兩面十疋、一窠綾、二窠綾、各十六疋、三窠綾六疋、薔薇綾四疋、帛二百疋、白絹百疋、白絲八百八十絇、

夏調赤引絲百十絇、神服絲一百絇、御調絲廿絇、自餘輸絹鹽、庸、韓櫃廿三合、(塗漆著鏁八合、白木十五合、)自餘輸米鹽、中男作物、紙、木綿、麻、紅花、茜、胡麻油、榎椒油、雜魚腊、煮鹽年魚、雜魚鮨、滑海藻、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥○中略

伊勢國五十種　前胡一斤四兩、黎蘆二斤四兩、王不留行六斤、獨活卅五斤、菥蓂卅二斤、牛膝八斤、桔梗九斤四兩、高梁薑十一斤、昌蒲一斤、恒山十斤、藍漆一斤、龍膽三斤四兩、苦參卅三斤、人參三斤八兩、五茄十六斤十兩、躑躅花十斤、杜仲十五斤、白芷卅四斤、細辛十一斤、栝樓十九斤、木斛廿斤、白薇一斤四兩、松脂十六斤、大戟五斤四兩、地楡十五斤十兩、楡皮五斤、厚朴十九斤八兩、茯苓十一斤十兩、蜂房一斤十二兩、升麻卅九斤二兩、當歸四斤八兩、黃蓍十一斤、葛根十斤、秦皮三斤十二兩、夜干卅五斤、橘皮五斤、牡丹七斤十兩、桑螵蛸一斤、白殭蠶十兩、茵草十一斤、馬刀七斤、蘇子一斤、菟絲子五斤、胡麻子二升、胡桃子二斗、半夏六升、牡蠣一斗九升、水銀八斤、雄黃四斤、

〔庭訓往來〕伊勢切付

〔毛吹草三〕伊勢

神仙丸(久志本ト云)　綿　紬　木綿　海老　馬刀　蜊　帆立貝(杓子貝トモ云)　蠣　鮑　フクダメ貝　熨斗　鯨　鮐　桑名蛤　馬瀨青苔　二見防風　海松　海蘿　國崎若和布　同和布耳　荒和布

鹿尾藻　甘苔　生浦梨　川俣谷串柹　椎茸　煎茶　橡　黑柹板　丹生山水銀(異國ノ外當所ニ有)

曆　松坂鐙　編笠　山田櫛　物指　疊扣　キセル通　笙笛　御田扇(骨、外宮ハ六本、內宮ハ七本、神主ヨリ配之、此風ヲアタレバ病ナシト云、五月下旬、內外ノ祭ニ用之、)　齋宮菅笠　宇治與米　合道錫　草履　白子紺形(當所ヨリ多諸國ニ遣之)　白粉

素麪　阿野津戻(肩衣ニ用之)　鑄物　鍋　馬鈴　搔筒　奇居虫　關地藏　竹火繩　神戸筵　庄野俵米(旅人土產ニ用之)

〔續日本紀一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金青、伊勢國朱沙雄黃、十一月辛酉、伊勢國獻白鑞、

人口

〔續日本紀 元明六〕和銅六年五月癸酉、令(略○中)獻(略○中)伊勢水銀、

〔官中秘策 二〕伊勢國　十六郡(略○中)

一人數五拾貳万三千三拾七人
內 貳拾五万九千三百六拾三人 男
貳拾六万三千六百七拾四人 女

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年(略○中)

御料私領
一人數四拾七万六千五百人　高六拾貳万千貳拾七石餘　伊勢國
內 貳拾三万七千百八拾三人 男
貳拾三万九千三百拾七人 女 ○中略

弘化三丙午年 諸國人數調(略○中)

御料私領
一人數四拾九万九千八百七拾四人　高七拾壹万六千四百五拾壹石餘　伊勢國
內 貳拾五万八百九拾五人 男
貳拾四万八千九百七拾九人 女

風俗

〔人國記〕伊勢

伊勢國之風俗　、南伊勢北伊勢トテ有之、同ジ國之中ニテモ、南伊勢之作法ハ、諸人ノ心入、土ニテ作リタル器ヲ、漆ヲ以テ能クヌリ、其上ヲ金銀ヲ以テ色ドリタルニ不異、誠ニ毎物詞之體ハシホラシク、柳ノ枝ニ雪折ナシト云心ニテ、山城之人同前ナレ共、心底ハ飽マデ慾深ク、親ハ子ヲタバカリ、子ハ親ヲ謀事ヲ以テ本トス、實少モナシ、心萬事ニ付テキタナキ意地ニ而、侍モ心入キタナク、下々ヲ情ナクツカヒ、愛スル心ハ微塵モ無之、亦下々ハ、主ヲ當座之光陰送ル爲ニ、賴ミニスルトノミ思ヒテ、主下之法之辨モ無キハ、偏意地キタナキヨリ發リタル事也、諸事賴無之也、偖亦北伊勢之風俗ハ、南伊勢トハ替リテ、人ノ心能キ所モ多シ、是モ譬ヲ以テ是ヲ云ニ、雜木ヲ以テ萬器ヲ作リ、其上ヲ漆ヲ以莊ヒタルニ不異、然者土ヲ以テ作リタル器ヲ、漆ヲ以テ莊ヒタルヨリハ、ハルバル違タルモノナリ、是ニ因テ侍ノ風儀モ、シホラシキ處有テ義理モ知リタレドモ、根性之處

ハ雜木ヲ以作リタル器之如ナレバ、根ノトクル人鮮シ、都而上方之內、別而京伊勢ノ風儀、女人之形莊最善シ、男ハ心不定而頼スクナシ、亂世之時ハ、昨日味方タリシ人モ今日ハ敵トナリ、主ハ被官ニ被見放、子ハ親ヲ捨テ敵ト成ノ類ハ、南伊勢之風俗也、北伊勢ハ約而違フ事アレバ赤面ヲナス、意地アレバ義ヲ以是ヲ可看、南伊勢ハ違亂威光嚴ヲ以是ヲシメサバ、卽時ニ可傾也、

〔日本鹿子 六〕同國勢〇伊 名所之部

鈴鹿山　坂の下より土山へ越る間也、坂の上に鈴鹿御前と云宮あり、〇歌略

八十瀨川　俗に鈴鹿川と云、關の宿より鈴鹿の坂下迄、同じながれを幾度と云ことなくわたる也、ゝかるゆへに八十瀨川と云にや、〇歌略

阿野の松原　鈴鹿より六里東也、〇歌略

錢掛松豊國野　安部郡なり、むかし西國の人參宮せしに、此松に錢壹貫文かけ置、本國にかへりしに、此錢人のめにはへびになりて見ゆる、それより三ヶ年過て、又かの錢ぬし參宮の節、此錢を取て參宮をせしと云傳ふるも此所の事也、

星川　朝明の里　海の宿也、日永川と云あり、阿野より行程三里也、川は北より南へながれたり、浦ちかき所なり、

桑名　日永の宿まで三里なり、桑名も海邊なり、〇歌略

竹の宮　齋宮の御座所也、山田より三里計北也、海邊也、櫛田川雲津川と中間近し、〇歌略

宮川　山田の入口也、此川にて參宮の人祓をする也、〇歌略

天照篇　俗に天の岩戸といふは外宮の上也、南方に山あり、此山に岩戸有之、神路山といふ、岩戸南向也、山は高からず、〇歌略

五十鈴川　內宮へ參詣の人、此川にて祓するなり、此川は御山より西也、南より北へ流たり、御も

雜載

すそ川とも云也、○歌略

朝熊　内宮より一里計北の海ちかくなり、宮あり、鏡の宮と云也、○歌略

二見浦　參宮の人、此浦に行てこりを取て參詣すれば、不淨をさりぬとて、多くは先爰に行て身を清め、其後さんぐうする也、

伊勢海　總名いせ浦をさしていふ也、泪の浦など云あり、○歌略

伊勢島○歌略　錦の浦○歌略　泪川○歌略　忘井○歌略　立入　飯野郡ノ内○歌略

阿漕の浦　星合の濱　逢洲の濱　千刃海　大淀の濱　千尋の濱　一志の浦　是等はみな伊勢浦につゞきてある名所也、

車の岡　川口の關　小野　小鹽井　鼓の嶋　林崎

右の分は、みな渡會のうちにある名所依之有所也、

〔名所方角抄〕伊勢より尾張へ行ば、桑名より北に津島の渡りと云所あり、名所也、尾張のつしまにてはなし、津島より下津(おりつ)の宿へあがりて、あつたへ行也、東海道也、つしまとおりつの間四里なり、おりつよりあつたへ五里也、

〔源光行海道記〕七日、市腋を立て、津島の渡と云所を、舟にて下れば、蘆の若葉のあをみわたりて、つながぬ駒も立はなれず、○中略渡りはつれば、をはりの國にうつりぬ、

〔延喜式〕二十八兵部　諸國健兒○中略　伊勢國一百人○中略

諸國器仗○中略　伊勢國甲六領、横刀廿口、弓六十張、征箭六十具、胡簶六十具、

〔延喜式〕三十四木工　鍛冶戸○中略　伊勢國三烟

〔玉勝間〕十四伊勢國

伊勢の國は、かた國のうまし國と古語にもいひて、北のはてより南のはてまで、西の方は山々つ

らなゝつゞきて、まことに青垣をなせり、東の方は入海にて、いせの海といふこれなり、かくていづこもいづこも、山と海との間、ひろく平原にして、北は桑名より、南は山田まで、廿里あまりがほど、山といふ物一つもこゆることなく、ひたつゞきの國原なり、その間に、廣き里々おほかる中に、山田、安濃津、松坂、桑名など、ことににぎはゝしく大きなる里なり、大かた京より江戸まで、七國八國を經てゆく間に、かばかりの大里は、近江の大津と、駿河の府をおきてはあることなし、外の國國も思ひやらる、猶件の里々につぎて、四日市、白子などよき邑なり、かくて此國、海の物、山野の物、すべてともしからず、暑さ寒さも、他國にくらぶるに、さしも甚しからず、但しさむさは、北の方へよるまゝに次第に寒し、風はよくふく國なり、國のにぎはゝしきことは、大御神の宮にまうづる旅人たゆることなく、ことに春夏の程は、いと〳〵にぎはゝしき事、大かた天下にならびなし、土こえて稲いとよし、たなつ物も畑つ物も大かた皆よし、かくて松坂は、ことによき里にて、里のひろき事は、山田につぎたれど、富る家おほく、江戸に店といふ物をかまへおきて、手代といふ物をおほくあらせて、あきなひせさせて、あるじは國にのみ居てあそびをり、うはべはさしもあらで、うち〳〵はいたくゆたかにおごりてわたる、すべて此里町すぢゆがみ正しからず、家なみわろく、一つごとに一尺二尺づゝ出入てひとしからず、いと〳〵しどけなし、家居はさしもいかめしからず、されど内々のすまひはいとよし、水はよき所とわろき所とありてひとしからず、川水すくなく、潮もさゝねば、船かよはず、山へは大方一里あまり、海へは半里、あまり、諸國のたよりよし、ことに京江戸大坂はたよりよし、諸國の人の入くる國なれば、いづこへも〳〵たよりよし、人の心はよくもあらず、おごりてまことすくなし、人のかたち、男も女もゐ中びたることさらになくよろし、女は里のゆたかににぎはゝしきまゝに、すがたよそひよし、すべてをさ〳〵京におとれることなし、人の物いひは、尾張の國より東の國々はなまりおほきを、伊勢は大かたなまりなし、

されど山城大和などとは、何となく鄙いやしく、詞もいやしきこと多し、いはゆる呉服物、小間物のたぐひ、松坂はよき品を用ひて、山田津などゝは、こよなく代物よし、されば商人の、京よりしいるゝも、松坂はことに物よく上々の品なり、京のあき人つねに來かよふなり、時々のはやり物も、をり過さず、諸藝は所がらにあはせては、よきこともあらず、もろ〳〵の細工いと上手なり、あきなひごとにぎはゝし、芝居、見せ物、神社、佛閣、すべてにぎはゝし、すべて此國は、他國の人おほく入こむ國なる故に、よからぬ物もおほく、盜なども多し、松坂は魚類野菜など、すべてゆたかなり、されど、魚には鯉鮒すくなく、野菜にはくわゐ、蓮根などすくなし、松坂のあかぬ事は、町筋の正しからずしどけなきと、船のかよはぬとなり、

志摩國

名稱

志摩國ハ、シマノクニト云フ、東海道ノ一國ニシテ、西ハ伊勢ニ接シ、東及ビ南、北ノ三面ハ海ニ臨ム、東西凡ソ三里、南北凡ソ七里アリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ英虞郡ニ置キ答志、英虞ノ二郡ヲ管シ延喜ノ制、下國ニ列ス、明治維新ノ後、二郡ヲ合セテ志摩ノ一郡トナシ、三重縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕志摩 之萬

〔易林本節用集 下〕志摩 志州 四方牢日、一郡志州合爲一國、海藻多、下々國也、答志、英虞 府 甕島此內一郡伊勢也、

〔古事記 上〕於是送猿田毘古神而、還到、乃悉追聚鰭廣物鰭狹物、以問言汝者天神御子仕奉耶之時、諸魚皆仕奉白之中、海鼠不白、爾天宇受賣命謂海鼠云、此口乎不答之口而、以紐小刀拆其口、故於今海

鼠口拆也、是以御世御世、〈〇御世御世原作二御世一、據二一本一改、〉島之速贄獻之時、給二猿女君等一也、

〔古事記傳十六〕さて志摩は、もと伊勢の内にて、島々の多くある處を分て、一國とはせられしものにて、後までも伊勢に附たる國なり、然れば此に島とあるも、伊勢の海の島にて、卽志摩國なり、

〔萬葉集六雜歌〕狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首〈〇一首略〉

御食國、志摩乃海部有之、眞熊野之、小船爾乘而、奥部榜所見、

〔倭訓栞前編十一〕しま　國の志摩も島の義也、古事記にみゆ、續日本後紀に、伊勢答志郡と見えて伊勢を分てりといふ、よて伊勢島などいへり、或はもと伊勢參河の中間に在りしが、海の爲に淪沒せられて、後來伊勢の東邊を割て、志摩國とすといへるも、地形を觀察するに、さもありぬべし、畔乘のあたり、伊雜の浦に、數千尋の海底に、鳥居のありし物語も、證とするに足れり、

〔諸國名義考上〕志摩

和名抄に志摩〈之萬、國府在二英虞郡一、〉名義は、或書に志摩國風土記の逸文とて引たるに、志摩爲二伊勢島一之意也、放二地出二海中一之島也、後成二國名一云々、こは國體によりて號けたるなるべし、此國答志郡答志崎、海中にさし出て、參河國いらごが島と對ひ合ひたれば、島の國ともいふべきさまなり、

〔志摩國舊地考一〕志摩〈一云島津國、又云伊勢島、〇中略〉

橘守部、神樂歌入文、弓立注云、今按、伊勢島とは志摩國の事也、志摩はもと伊勢に屬て、一島はなれたれば然か云也、されば此神樂などの如く、伊勢島やいそらが崎、伊勢島やたふしの浦になどよみたるはよし、中昔後の歌に、伊勢島や一志の浦などよみしはひが事なり、一志は雲津星合の浦、藤方、垂見邊の郡名にて、元より島國にはあらず、按ルニ入綾ノ辨說最宜シ、但シ一島はなれたれば然か云也、ト云ヘルハ違ヘリ、國名ヲ志摩トハ云ヘド、彼淡路、隱岐、佐渡ノ如キ離レ

島ノ一圓ニハアラズ、伊勢及舊クハ紀伊國ニ堺ヒタル地續キノ國ナレド、管スル島々ノ多クアル故ニ、一國ノ號トナレルモノナリ、上ニ引ク風土記抄ニ、放地出海中之島也トアルモ、島々ノ多カル國體ノ、大凡ヲ稱ヘルナルベケレド、然ハ聞取ガタク、實ニ離島ノ一國タル狀ニ思ハル、龜湍ノ記文ト云フベシ、又諸國名義考志摩條ニ、こは國體によりて號けたるなるべし、此國答志郡答志崎は、海中にさし出て、參河國いらごが島と對ひ合ひたれば、島の國ともいふべきさまなり、ト云ヘレド、答志崎ト伊良虞島ト對ヒ合セタリトテ、島ノ國ト謂フニ決スベカラズ、カヽル地勢ハ、沿海ノ國ニ、數知レズ多キコトナリ、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度實測幷里程

志摩島羽(郷野) 極高三十四度二十八分半、經度東一度五分、從東都(東海道經山田及大湊沿海)一百三十六里一十九町二十八間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

志摩　島羽　三四度二八分三〇秒(中略)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(中略)　志摩　島羽　東一度五六分四七秒

疆域

〔三國地志 志摩 八十三〕疆域

按、西ハ伊勢ニ達リ、東南北ハ滄海ニシテ、紀勢尾參遠ノ海ヲ界フ、

〔日本地誌提要 志摩 十〕疆域　西北ハ伊勢、東南及北三面海ニ臨ム、東西凡三里、南北凡七里、

〔紀伊國昔時國界辨〕本國與熊野ノ國堺、今ハ伊勢國ト隣リテ、二江村錦浦ヲ極トスレドモ、古クハ志摩國トナラビテ、國界モ大ニタガヘリ、今ノ國界ハ天正年中以來ノコトナリ、ソハ寛永十九年ノ記ニ云、紀州ト勢州東ノ堺目、長島ノ東、荷坂峠ヨリ南ハ、二鬼島浦ノ近所壓ケ崎、西ハ曾根村マ

デ、通リ道十一里五町、里數合テ四十ケ村、昔ハ志摩國英虞郡ノ由ナレドモ、六十餘年以前、堀內安房守時代ヨリ、紀州牟婁郡ノ中ニナリタル由申傳フトアリ、寬永十九年ヨリ六十餘年已前ハ、天正十年已前ナリ、○中略サレバ古クハ楯ケ崎ノ山通リヲ限リ、曾根浦ノ所謂、曾根太郎、曾禰次郎ノ峠ゾ國界ナリケル、此西奥ハ、山深クシテ外ニ道ナシ、サテ此界マデハ、舊來伊勢ノ神領ニテ、國ハ志摩國ナレドモ、多氣ノ北畠家勢ヒ强大ニテ、大方其旗下ニ附タリシヲ、後ニ錦浦マデハ堀內家ヘ責取タリシヨリ、紀ノ國ニ入、カナタハ北畠ニ隨ヒテ、伊勢國度會郡ノ內ニナリテ、ツヒニ志摩國ト紀伊國トハ間隔リケルナリ、古キ日本ノ總圖ニハ、紀伊國、志摩國トツヾキテ、伊勢ノ南邊ニ海邊アル事ナシ

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　　塚本明毅

志摩

現今志摩ノ地、田圃合セテ一千七百五十八町ニ過ギズ、此ノ如キ褊狹ノ地ヲ建テ一國トナス事、甚ダ疑フベシトナス、因テ史誌ヲ考ヘ、古郷ヲ徵シ、始テ其州境ノ大變革アルヲ知レリ、和名抄曰、田百二十四町九十四步、粒總千七百斛、正糓千二百石、救急料五百石、拾芥抄曰、田四千九百十七町、按ズルニ、米五升ハ一束ヨリ之ヲ得、千七百斛、卽チ三万四千束ナリ、一段稻五十束ヲ得ルノ制ニ從ヘバ、田一百二十四町ノ獲稻、六万二千束ニ過ギズ、一町ノ租禾二十二束ノ制ニ據ルトキハ、三万四千束ヲ收ムルノ田ハ、一千五百四十五町ノ地ナリ、蓋和名抄百字ノ上、一千五百ノ字ヲ脫セシナルベシ、後世ニ至リ增加シテ四千九百十七町ノ田ヲ得ル、故ニ拾芥抄ノ記スル所此ノ如シ、是此州境ノ變遷セル一證ナリ、紀伊續風土記ノ說ニ、紀伊國牟婁郡ノ東北、曾根庄以東古本(コノモト)長島ノ地、古志摩國ニ屬ス、天正中新宮ノ堀內安房守氏善、長島城ヲ取リシヨリ後、永ク紀伊ニ屬スト云、因テ相賀庄古ノ本村庄司氏ノ所藏古文書數通ヲ引テ據トナス、今其

一二通ヲ揭出ス、

下志摩國木本御厨百姓等可令早以息長吉守爲下司職事、

右云々(下文略之)

寛喜三年十一月十四日　地頭彈正忠源判

下志摩國長島並合賀木本御厨內定補豫所職事

沙彌實章

右以人爲彼職、恆例臨時課役等、無懈怠可致沙汰之狀如件、庄官百姓等宜承知、敢勿違失、故下、

弘安九年七月日　公文阿闍梨判

右文中木本、今古ノ本ニ作ル、古本村現存ス、合賀(アフガ)後相賀ニ作ル、相賀庄ハ、上里、中里、河內、船津、小道、矢口等諸村是ナリ、今皆紀伊牟婁郡ニ屬ス、此其州境ノ變遷シテ紀伊ニ入ルニ證ナリ、和名抄英虞郡ノ下ニ甲賀(今村存ス)名錐(今波切村存)船越、道潟、(原本誤テ道浮ニ作ル、今神名抄ニ從テ之ヲ改ム)芳草、二色、餘戶、神戶トアリ、今波切村ノ西南二十四五町ニ船越村アレドモ甚ダ波切村ニ近キテ、一郷トナスベキ地ニアラズ、今伊勢ノ度會郡船越村ハ、甲賀村ヨリ西ノ方凡五里ヲ隔ツ、此卽チ船越郷ナリ、其西南凡三里半ニ當リテ、道方村アリ、卽チ道潟郷ナリ、其西南凡五里餘ニシテ、紀伊ノ牟婁郡錦浦アリ、卽チ二色郷ナリ、同郡古ノ本尾鷲ノ地ハ、卽チ餘戶神戶ナランカ、紀伊續風土記ニ辨ジタリ、芳草獨リ其遺名ナシト雖モ、道方ト長島ノ間、一郷ヲ容ルベキ地アリ、古和村是ナリ、此ヲ以テ芳草郷トナス時ハ、善ク和名抄ノ順序ニモ合ヘリ、然ル時ハ、英虞郡ノ古郷、皆明晰ニシテ、伊勢ニ入ルモノ三郷、紀伊ニ入ルモノ三郷ナリ、此其州境ノ變遷ヲ徵スベキ三證也(略)○(註)又伊勢國船越村ノ西方ニ伊勢路村アリ、道方村ノ西ニモ同名ノ地アリ、是伊勢ニ通ズル路ナル故ニ此名アルナリ、伊賀國阿保村ニモ伊勢地村アリ、伊勢ノ一志郡垣內村ニ通ズル路ナリ、若シ

此地古ヨリ伊勢國ナラバ、何ゾ此名稱アラン、此其州境ノ變遷ヲ徵スベキ四證ナリ、又伊勢國度會郡ノ古郷名ヲ按ズルニ、其十二郷皆歷然明晰ニシテ、皆北方ニアリ、其南方ノ地ハ、一ノ陽(ヒナ)田(タ)郷(今日向村)アルノミ、此其南方沿海ノ地、古伊勢ニ屬セザル一證ナリ、今其地勢ヲ按ズルニ、朝熊山ノ山脈、西南ニ奔リ東宮山ニ至リ、自ラ伊勢ノ地ト限リ、以テ今ノ紀伊ノ牟婁郡八鬼山ニ至ル、(今志摩ノ西境ヨリ此ニ至ル凡十七里餘)此古ノ志摩國タル事疑ヲ容ルベカラズ、

〔日本實測錄(九島嶼)〕志摩國答志郡　實測　日向山　周廻一十六町二十間　飛島　(從西岬至東岬)二十四町　浮島　周廻三十町二十七間　牛島　周廻二十三町三十間　答志桃取島　周廻六里一町六間　大築海島　周廻二十一町四十六間　神島　(從島岬至北岬)二十七町　大島　周廻四町三十六間　坂手島　周廻三十二町四十四間　菅島　周廻三里四町一十九間　麻生島　周廻九町六間　苧村島　周廻二十四町四十間　渡鹿野島　周廻一里七町三十八間　ツナヘ島　周廻二町五十三間　遠測　中島　小築海島　辨天島　石鏡　白島

英虞郡　實測　ザカ山　周廻一十一町二十五間　松ヶ島　(從南岬至北岬)四町　イノコ島　(從南岬至北岬)四町　小筵島　周廻六町四十一間　大筵島周廻一十二町四十六間　兎島　周廻八町一十七間　市場島　周廻三町二十二間　名高島　周廻三町四十八間　天童山　周廻一里二十六町三十三間　小天童　周廻三町五十二間　間崎島　周廻一里五町一十七間　小高島　(從北岬至西岬)五町　大高島　周廻四町三十一間　中之通島　周廻二十四町一十八間　カレ島　(從東岬至南岬)二町　日德島　周廻一十町五十六間　横山島　周廻一十三町一十八間　カシコ山　周廻一里一十九町五十二間　大明神島　周廻一町四十七間　ナメ島　周廻九町一十一間　遠測　大王岩　小島　大島　鳴神島　城ヶ島　雀島(越賀村)　カラ松島　船島　花川島　兎島離島　宮島　辨天島　雀島(間崎島)　向島　大矢取　小

矢取

〔吾妻鏡十一〕文治六年○建久元年四月十九日壬寅、造太神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、○中略

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事、○中略

志摩國　答志島○淨和院下略

〔倭姫命世記〕廿六年、今歲○中略、倭姫命御船乘給、御膳御贄處定、行幸島國國崎島爾、朝御饌夕御饌止詔而、湯貴潛女等定給天還坐、廿七年、年中雜神態三節祭定賜、御贄島爾神主等罷、御贄漁天、島國國崎潛女取奉、玉貫鮑、鵜倉、慥柄島神戸、進堅魚等御贄、○下略

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、○中略

志摩國答志郡　神島　須賀島○中略　贄島

〔神宮雜例集一〕神封事○中略

志摩國○中略六十六戸　鵜倉神戸　慥柄神戸　右○中略鵜倉、慥柄等島者、朝夕御饌御贄之所也、

〔拾玉集五〕神宮之中遊興之間、爲永例有長柏、謂之三角柏、件柏者志摩國吉津島堺、土貢島內在山中生木上也、吉津島風土記曰、昔行基菩薩請南天竺婆羅門僧正天竺僧佛擔、殖三角柏爲太神宮御園、天平九年十二月十七日、致御祭之勤也、其後傳教大師、弘法大師、慈覺大師、續以脩行之、

〔吾妻鏡二〕治承五年正月五日壬子、關東健士等、廻南海可入花洛之由風聞、仍平家分置家人等所々海浦、其內差遣伊豆江四郎、警固志摩國、而今日熊野山衆徒等、競集于件國菜切島、襲攻江四郎之間、郎從多以被殺敗走、

〔吾妻鏡十〕文治六年四月十九日壬寅、造太神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨、下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州幷盛時、俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事○中略

志摩國　答志島(淳和院)　菅島(本宮御領)　佐古島

不知行所也、其中菅島佐古島地頭、不分明、若依爲所々小名、獨不得其名所歟、此外所々、下文上、

相副請文、

〔志摩國舊地考二〕佐古島○中略

按ルニ佐古島ハ、今佐久島ト呼ブ是ナリ、上ニ云篠島ハ、尾張ノ師崎ト三河ノ伊良胡崎トノ中間ノ海中ニアリ、左久島ハ、篠島ヨリ東北、師崎ト三河ノ權現岬トノ、中間ノ海中ニアリ、

〔日本地誌提要十志摩〕島嶼　答志島(答志郡小濱ノ北拾五町、島羽ノ北貳里ニアリ、周回六里壹町六間、東端三河渥美郡伊良湖岬ニ對ス、○中略)大築海(オホツクミ)島(同郡答志島ノ東七町ニアリ、周回貳拾壹町四拾六間、多ク桑樹ヲ生ズ、東北七町ヲ隔テ、小築海島アリ、)坂手(サカテ)島(同郡島羽ノ東五町ニアリ、周回三拾貳町四拾四間、○中略)菅(スガ)島(同郡坂手島ノ東六町ニアリ、周回三里四町拾九間、○中略)神(カミ)島(一名甕(カメ)島、同郡島羽ノ東少北三里拾町、○中略)渡鹿野(ワカノ)島(同郡的矢港ノ東南三町ニアリ、周回壹里七町三拾八間、○中略)大村(オホムラ)島(一ニ苧村島ニ作ル、同郡浦村ノ東北一五町ニアリ、周回貳拾町四拾間、)

地勢

〔志陽略志上形勝〕夫志摩州、古之所謂伊勢島也、此故今所在志陽之名所舊蹟、古詠和歌者、多以伊勢國稱之、可併考焉、爲其州也、西方地脈連伊勢國、有一帶路、而枕山嶽險、一夫横槊則万夫不能敵之、東南北皆海而洋溟万里、所其環旋紀伊伊勢尾張三川遠江、而帶蒼海阻地勢廣濶風氣和暖也、海山多雖水田少、海產鱗介、山出柴薪、依得其利民戶安逸也、鳥羽城魏然立乾位、可謂長鎭海南之地也、

道路

〔三國地志八十三志摩〕路程　按、鳥羽ヨリ京師ニ至ル三十六里餘、　江戶ニ至ル百三十四里半　勢州安濃津ニ至ル十一里廿九町　紀州和歌山ニ至ル四十一里

官道　堅神口(堂坂越)　按、堅神村ヨリ勢州朝熊村ニ至ル一里廿一町、夫ヨリ一宇田楠部ヲ歷テ山田ニ至ル、是鳥羽ヨリ勢州ヘノ正路ナリ、　逢坂越　按、惠利原村ヨリ朝熊山ノ南ヲ歷テ、勢州宇治鄉ニ至ル　三里五十六間、是ヲ礒部路ト云、

宿驛

間道　岳越　按、河内坚神ヨリ朝熊ヘ出ル、　南張村ヨリ勢州田曾村ヘ出ル廿八町　築地村ヨリ泉村ヘ出ル卅二町十二間　迫間村ヨリ勢州山原ヘ出ル十五町　大内山梅谷ヨリ紀州荷坂峠ヘ出ル一里十四町

航路　按、鳥羽湊ヨリ神島ニ至ル三里　勢州大湊ニ至ル三里　三州大崎ニ至ル三里　伊良湖ニ至ル五里　大山ヘ至ル七里　吉田ニ至ル十四里　勢州白子ニ至ル十五里　桑名ニ至ル十八里　長島ニ至ル廿二里、

〔延喜式 二十八兵部〕諸國驛傳馬 中略○

志摩國驛馬、鴨部、磯部、各四疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考 二東海道〕志摩　古作島 古事記、國造紀云、島津國造、志賀高穴穗朝御宇定、卽是、下國、管二郡、五十六村、

答志 タフシ 三十七村 延喜式作倉志、疑誤、據紀作塔志、万葉集手節之崎、卽是、　英虞 アゴ 十九村 古府治

〔三國地志 八十三志摩〕建置沿革

伊勢島風土記曰、島者豈安曇別命神逵也、謂志麻、蓋伊勢島之意乎、天日方奇日方命至此擧言云、豈志萬魚足之國哉、三字闕 後世覺爲國名、以下說　按、本國舊阿曇郡アリ、蓋豈安曇別命ノ出ル處ナラン、然レバ國初其化生ノ地ノ民庶ヲ統治シテ一島ニ主タルヲ以、コヽニ神逵トハ云ヘリ、其命封ニアラザルコトシルベシ、成務天皇四年始テ國造ヲ定メ、此國ヲ以テ笠屋命ニ賜フ、是封建ノ始ナルベシ、所謂後世覺爲國名トハ、蓋シ是時ヲサスナリ、

〔日本地誌提要 十志摩〕沿革　古ヘ國府ヲ英虞郡ニ置、今ノ國府村是ナリ、 建武中興、北畠顯能、伊勢國司ヲ以テ本州ヲ兼知ス、州ノ豪族橘氏、答志郡鳥羽城ニ居リ、九鬼氏、同郡波切ナキリニ居、皆北畠氏ニ屬ス、橘氏相傳テ宗忠ニ至リ嗣ナシ、鳥羽ヲ以テ女壻九鬼嘉隆ニ畀フ、永祿ノ末、北畠氏亡ビ、嘉隆、織田信長ニ屬ス、信長仍テ本州ヲ賜フ、關原ノ役、嘉隆西軍ニ屬ス、子守隆東軍ニ從ヒ、本州ヲ領スル

故ノ如シ、（五萬五千石）寛永中、子久隆、攝津三田ニ徙封セラレ、內藤忠重之ニ代リ、（三萬五千石）其孫忠勝ニ至リ收封セラル、後土井利益、松平乘邑、板倉重治、松平光慈、相代テ封ヲ受ク、享保中、稻垣昭賢之ニ代リ世襲、（三萬石）王政革新、改テ鳥羽縣ヲ置、既ニシテ廢シテ度會縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀（十國造）〕島津國造

志賀高穴穗朝（○成務）出雲臣祖佐比禰足尼孫出雲笠夜命定賜國造、

〔國造本紀考（一）〕島津國造

島は志摩國、津は助辭也、古事記上に、島之速贄とあり、古は伊勢に隷たりしにや、（○下略）

國府

〔續日本紀（八元正）〕養老三年七月庚子、始置按察使、令伊勢國守從五位上門部王管伊賀志摩二國、

〔職原抄（下）〕志摩（下、高橋氏爲內膳正者任之、仍他人不任之、）

〔倭名類聚抄（五國郡）〕志摩國（國府在英虞郡、行程、上六日、下三日、）

〔拾芥抄（中末本朝國郡）〕志摩（下近）二郡　英虞（府）

〔大神宮諸雜事記（一）〕醍醐天皇延長五年九月、伊雜宮御祭料、志摩國例進之幣帛、并御調種々御贄等、依例爲令調備、太神宮禰宜、大小內人、物忌、及當宮內人、物忌、相共引率神戶神民、進向志摩國府、爰國司氏胤申云、件御贄等、須任例備進也、

郡

〔延喜式（二十二民部）〕志摩國下（管答志英虞○中略）右爲近國、

〔倭名類聚抄（五國郡）〕志摩國（○註略）管二（○註略）答志、英虞、（國府）

〔拾芥抄（中末本朝國郡）〕志摩（下近）二郡　答志（タウシ）、英虞、（アコ府）

〔皇國郡名志〕志摩國（二郡）

答志（タフシ）（鳥羽）（●鹽屋●礒邊●合坂△同社●本郷勢海ヨリ東北ノ海向）

英虞（アコ）（驛無シ）（南出崎郡）

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕志摩

書名	塔志郡 / 答志郡	英虞郡	郡數
六國史古書	塔志郡		
延喜式	答志(タフシ)	英虞(アゴ)	管二
倭名抄	同	同[illegible]	同
拾芥抄	同	同	二郡
諸本	同[illegible]	同[illegible]	
郡名考	同(トウシ)	同(アゴ)	同
天保郷帳	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同
地誌提要	同(タフシ)	同(アゴ)	同
郡區編制	同	同	同

答志郡

〔東大寺正倉院文書十五〕志摩國輸庸帳

志摩國司解　申神龜六年輸庸事

管郡貳、課丁壹仟陸拾貳、正丁九百卅二、次丁一百卅、○下略

〔延喜式四伊勢大神宮〕伊雜宮一座、大神遙宮、在志摩國答志郡、去大神宮南八十三里、

〔萬葉集一雜歌〕幸于伊勢國時、留京柿本朝臣人麻呂作歌二首、○一首略

釧著(クシロツク)、手節乃崎二(タフシノサキニ)、今毛可母(イマモカモ)、大宮人之(オホミヤビトノ)、玉藻苅良武(タマモカルラム)、○釧今本誤作鋺

佐藝郡

〔續日本後紀九仁明〕承和七年十一月戊子、以在志摩國答志島、賜無位常康親王、

〔續日本紀八元正〕養老三年四月丙戌、分志摩國塔志郡五郷、始置佐藝郡、

英虞郡

鄕

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

志摩

元正天皇養老三年四月丙戌、分志摩國塔志郡五郷、始置佐藝郡、按ズルニ和名抄ニ塔志郡五郷、英虞郡六郷アリ、佐藝郡他書ニ見ヘズ、塔志郡ヲ割キシ地、英虞郡ノ外、之ニ充ツベキナシ、蓋志摩元一郡ニシテ、是時始テ二郡トナシ、（佐渡元一郡、養老五年四月、分爲三郡、）佐藝郡ヲ置キ、後ニ英虞郡ト改稱セシナルベシ、持統天皇紀曰、六年五月庚午、御阿胡行宮、阿胡即英虞ナリ、和名抄曰、國府在英虞郡、蓋シ分郡ノ後、阿胡宮ヲ以テ國府トナシ、因テ郡名ヲ改メシナラン、但シ今國府村答志郡ニ屬セシモノハ、郡境變遷セルニ因レリ、

〔日本書紀持統三十〕六年五月庚午、御阿胡行宮、時進贄者、紀伊國牟婁郡人阿古志海部河瀬麿等、兄弟三戸復十年調役雜徭、復免挾抄八人今年調役、

〔書紀集解持統三十〕類聚鈔曰、志摩國英虞郡、

〔萬葉集雜歌一〕幸于伊勢國之時、留京柿本朝臣人麻呂作歌、
嗚呼見〇兒原作見今改乃浦爾（アコノウラニ）、船乘爲良武（フナノリスラム）、嫐嬬等之（ヲトメラガ）、珠裳乃須十二（タマモノスソニ）、四寶三都良武香（シホミツラム）、

〔倭名類聚抄國郡六〕志摩國　答志郡　答志　和具　伊可　伊椎〇椎恐雜誤　驛家　神戸
英虞郡　甲賀　名錐　船越　道浮　芳草　二色　餘戸　神戸

〔三國地志志摩八十五〕答志郡　郷名
答志　按、郡名及ビ村名ニ存ス、　和具　按、村名今英虞郡ニ存ス、　伊可　按、神鳳抄雜事記ニ伊志賀ト云是歟、今石鏡村存ス、　伊椎並今廢　按、椎ハ雜ノ誤字ニシテ伊雜郷是也、今礒部ト云、古ハ五智、上ノ郷、惠梨原、迫間、築地、穴川、下郷ノ七郷ナリ、後上ノ郷ヲ割テ沓掛山田ノ二村ヲ置、九郷トナル、　驛家〇中略　按、古鴨部礒部ノ二驛アリ、共ニ今廢シテ加茂五郷、礒部九郷ノ名アルノミ、

神戸今磯部○中略　以上和名抄ニ出ル所ナリ　伊佐郷　伊勢島風土記曰、答志郡伊佐郷、　田輿奈古郷　伊勢島風土記曰、答志郡田輿奈古郷、　麻縣郷　伊勢島風土記曰、答志郡麻縣郷、○中略　按、以上ノ郷今詳ナラズ、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、○中略

志摩國答志郡○中略　和。具。

〔倭姫命世記〕廿七年九月、鳥鳴聲高聞氏、晝夜不止囂、此異止宣、氏大幡主命舍人紀麻呂等差使遣、令見、彼島鳴處、罷行見波、島國伊。雜。方上葦原中在稲一基、生本波一基爾爲氏、末波千穗茂也、○中略　彼稲生地千田止號支、

〔簡禮集〕近江國犬上郡貳千貫餘、志摩國答。志。郷。七百貫、都合三千貫餘事、右全可領知、○中略

文保元年二月十八日

吉良龜松殿

〔三國地志八十九志摩〕英虞郡　郷名

甲賀　名錐　船越　按、並今村名ニ存ス、　道潟神鳳抄作道方　芳賀　按、並今詳ナラズ、　二色神鳳抄作錦

按、今イセヨリ熊野ヘノ道路、長島浦ノマヘ、海中ニ島アリ、是ヲ錦島ト云、紀伊ノ地ニ屬ス、節用集ニ、御座島錦島ノ二郡ヲ加ヘテ伊勢十五郡トスルハ妄勘ナリ、御座島ハ舟越村ノ地ツヾキ海道ニ出ヅル處也、錦島ハ夫ヨリ西ノ入海、泊子村ノ邊ナリ、　餘戸　神戸甲賀以下皇今麻　按、右二郷今詳ナラズ、

〔藻鹽草五水邊〕錦浦志摩

○按ズルニ、本居内遠ノ丹敷浦考ニ、日本書紀神武天皇ノ條ナル、熊野荒坂津、亦名丹敷浦ト見エタル丹敷ヲ、和名抄ナル志摩國二色郷二色郷ハ今ノ錦浦ニ擬村ノ邊ヨリ廣ク南方ニ木島ノ邊マデアチ三フトイヘリ、ニ充テ、今

村里名邑

ノ二木島ノ事ナリト云ヘリ、紀伊國篇ニ掲ゲタリ、

〔神宮雜例集二〕内宮

神堺〇中略　南志摩國鵜椋山嵩、錦山坂、並爲二山堺一、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、〇中略

志摩國　答志郡〇中略

錦御厨〇又見二神領給人引付、神領目錄等一、

〔内宮子良館舊記〕長享三年六月、山田三方ヲ始トシテ、濱七郷、三ケ郷、神戸七郷、五智、白木、上野、一宇郷、原、外木田(トキタ)ノ勢ハ、イクバクトモ數ヲシラズ、

〔郡名一覽〕一志摩國皆私領　志州　四方半日　貳郡

高貳萬六拾壹石六斗四升壹合　五拾六ケ村

●鳥羽東海道百三十四里半　舟路百四十四里

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕志摩　二郡、五十六村　高皆私領二万千四百七十石三斗九升八合

答志郡三十七村　英虞郡十九村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

志摩　答志(トウシ)郡、安樂島(アラシマ)村、石鏡(イシカ)村、渡鹿野(ワタカノ)村、安乘(アノリ)村、大築海(オホツクミ)島、渡鹿野(ワタカノ)島、英虞(アコ)郡、波切(ナキリ)村、迫子(ハヂコ)村、間崎(アサキ)島、

〔三國地志八十五志摩〕答志郡　村里

鳥羽町　按、鳥羽一名潟ト云ハ、三郷ノ總名ナリ、其三郷ハ岩崎、藤郷、大里ナリ、其地勢鳥翼ヲ張ルガ如ナルヲ以名ツク、俗傳、古八王子ノ神、鷲ノ羽ニ乘ジテコヽニ降ル、故ニ名クトモ云、府城鳥羽ヲ以呼ブ、相橋ノ外千家甍ヲ並ベ、輻輳之船舶軸艫相接ギ、人物ノ會集浪華ニ亞グト云、〇下略

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、〇中略

志摩國　答志郡〇中略

泊。浦。御厨〇又見二神領給人引付、神領目錄等一、

〔藻鹽草五水邊〕鳥羽田浦志摩、但伊勢に飛鵜と書るあり、

〔志摩國舊地考二答志郡、村名〕泊浦トマウラ泊今作二鳥羽一、土地書係二伊勢、志摩兩國一、

〔家忠日記追加十五〕慶長五年八月廿九日、九鬼長門守守隆、大神君ノ台命ヲ奉テ、池田輝政ト相伴テ、野州小山ヲ發シテ、三州吉田ニ到リ、ソレヨリ本國勢州ニ馳歸ル、父大隅守嘉隆、逆徒ニ與シテ、長門守ガ鳥羽ノ城ニ殘シ置ク從卒等ヲ追出シテ、紀州新宮ノ城主堀內安房守ヲ招テ、彼ト共ニ鳥羽ノ城ニ楯籠ル、

〔皇大神宮儀式帳〕伊雜宮一院、在二志摩國答志郡伊。雜。村一、太神宮相去八十三里、稱二天照太神遙宮一、御形鏡坐、

〔神宮雜例集一〕一神田事

志摩國　賀。い。茂。村神田、內宮推追神田三段、外宮三町、五百二十人、又五段、　甲賀村神田內宮五町九段、外宮二町二段、又二段百廿人如何、〇何件恐誤、

〔神鳳抄〕二所太神宮御領、諸國神戸、御厨、御薗、神田、名田等、〇中略

志摩國　答志郡〇中略

白木三反、鳥二丁、〇中略　賀茂村所在內宮神田二町二反大、外宮神田二丁二反小、

〔台記〕久壽元年五月廿三日乙亥、余〇藤原賴長已下著陣、定申祭主清親卿散位正弘、阿閑梨相基等相論事、太神宮預伊雜神戸、內膳司預畔。乘。御厨相論事八ケ條、國司依二異損一請レ被レ免二濟物一事、

〔家忠日記追加十五〕慶長五年八月廿九日、〇中略長門守〇九鬼守隆爲方ナク、同國畔。乘。ノ舊壘ニ、俄ニ要害ヲ構ヘテ、是ヨリ後父子屢挑戰ス、

藩封

〔慶應元年武鑑〕稻垣信濃守長明（帝鑑間朝散大夫）三万石　居城志摩答志郡鳥羽（江戸ヨリ東海道百卅四里、舟路百十四里、）
（當城者天正年中、九鬼大隅守嘉隆、同長門守守隆、同大和守久隆、寛永十一內藤志摩守忠重、同飛驒守忠種、同志摩守忠次、同和泉守忠勝、延寶九、土井周防守利益、元祿四、松平和泉守乘邑、寶永七、板倉近江守重治、享保二、松平孫四郎光慈、信州松本エ移、享保十、稻垣攝津守昭賢以後領之、○中略）

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕志摩國（○註略）管二（田百二十四町九十四步）

○按ズルニ、本文田數百字ノ上、千五ノ二字ヲ脫セシナルベシトノ說、疆域條下ニ載セタル東京地學協會報告ニ見エタリ、

〔伊呂波字類抄志郡〕志摩國（管二、中略本田四千九百十七町）

〔海東諸國記〕志摩州　郡二、水田九十七町、

〔日本鹿子六〕志摩二郡、下々國、　四方半日、　知行高壹万七千八百四十石

〔官中秘策二〕志摩國　二郡（○中略）

一石高貳万六拾壹石餘　領主　大名壹人

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調（○中略）

志摩國（皆私領）　一高貳万千四百七拾石三斗九升八合

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻（○中略）

志摩國、正稅穀一千二百斛、救急料五百斛、

〔倭名類聚抄五國郡〕志摩國（○註略）管二（中略）（粒總千七百斛、正稅千二百石、救急料五百石、）

國產貢獻

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進（○中略）白玉一千丸（志摩國所ㇾ進、臨時有二增減一、）

〔延喜式二十三民部〕交易雜物（○中略）　志摩國（大凝菜卅四斤、白玉千顆、）

〔延喜式二十四主計〕志摩國（行程、上六日、下三日、）

調、御取鰒、雜鰒、堅魚、熬海鼠、雜魚楚割、雜魚腊、雜腊、雜鮨、漬鹽雜魚、

紫菜、海松、鹿角菜、海藻、海藻根、小凝菜、角俣菜、於期菜、滑海藻、　鹿輪鮑、堅魚、鯛楚割、　中男作物、雜魚腊、

〔延喜式三十九内膳〕諸國貢進御贄、中宮准此、旬料略○中　志摩國御厨鮮鰒螺、起九月盡明年三月、月別上下旬二擔、味漬腸漬蒸鰒玉貫御取夏鰒等、月別總五擔、雜魚十三擔、並以徭丁運進、節料略○中　志摩國正月元日、五月五日、七月七日、九月九日五節、各三擔、新嘗會二節、各八擔、正月七日十六年料略○中　志摩國深海松

〔毛吹草三〕志摩

眞珠貝　井貝　鷄冠苔　和布　鳥羽鱩　鹽漬臼　答志涌砂盆山ニ用之、海底ヨリ五色ニ涌砂ト云、

人口

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十月廿五日甲子、志摩國年貢御贄四百三十一荷、令近江、伊賀、伊勢等國驛傳貢進、

〔官中秘策二〕志摩國　二郡郡名略○

一人數三万四千六拾八人　内男壹万六千貳百三拾六人　女壹万七千八百三拾貳人

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略○中

皆私領一人數三万七千八百七拾五人　内男壹万八千五百四拾四人　女壹万九千三百三拾壹人○中略

高貳万六拾壹石餘　志摩國

弘化三丙午年諸國人數調略○中

皆私領一人數四万六百九拾三人　内男壹万九千八百三拾六人　女貳万八百五拾七人

高貳万千四百七拾石餘　志摩國

風俗

〔人國記〕志摩國

志摩國之風俗、凡ソ伊賀伊勢ニ替ル事ナク、侍ハ兵器ヲ身體ヨリハ結構ニ而、我館ニナラベ置キ、諸朋友ニ見セテ、己モ驕ノ氣ヲ内ニ含ミ、人モサゲシミ、我ヲアナドル事、上下トモニ皆如レ斯、下々ハ夫ニ應ジテ意地キタナシ、不レ及レ書二記之一也、

名所

〔日本鹿子六〕同國〇志摩名所之部

麻(アフ)生の浦　戸羽城下より辰巳のかたにあたりて、行程二里計也、浦村といふ所にある名所也、麻生の浦の磯山に權現の祠あり、無雙の景地なり、〇中略

まかぬ麻(アフ)〇歌略　片枝の梨〇歌略　からぬまこも　なかぬ蛙　鏡石　右の分、皆麻生の浦名所也、

安太子(アタコ)の濱　面白の松と云有、戸羽の城下より南にあたりて、海路五里ばかり也、

〔三國地志八十五志摩〕答志郡　村里

浦村〇中略　此地七奇アリ、曰不蒔(マカズ)麻、曰不鳴(ナカズ)蛙、曰不苅(カラズ)蔣(マコモ)、曰片枝梨、曰石面(イシカヾミ)鏡、曰逆(サカサマ)流川、曰四季櫻、在二櫻崎一是ナリ、

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　志摩國卅人〇中略

諸國器仗〇中略　志摩國橫刀二口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

古事類苑

地部七

尾張國

名稱

尾張國ハ、ヲハリノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ參河、西北ハ美濃、西南ハ伊勢ニ界シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ八里、南北凡ソ十九里、其地勢ハ、概ネ平衍ニシテ、西半ハ卽チ濃尾平原ノ一部ヲナシ、其間ニ甚シキ高低ヲ見ズ、東半ハ、一般ニ低キ丘陵地ヲナシ、國境ニ於テ僅ニ山巒起伏スルアレドモ、絕エテ峻秀ナルモノナシ、此國ハ、古ヘ國府ヲ中島郡ニ置キ、海部、中島、葉栗、丹羽、春部、山田、愛智、知多ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、中世ニ至リ、海部郡ヲ海東、海西ノ二郡ニ分チ、春部ヲ改メテ春日井ト爲シ、山田郡ヲ廢シテ春日井、愛智ノ二郡ニ併セ、天正年中、中島、葉栗、海西ノ各一部ヲ割キテ、之ヲ美濃國ニ屬セシム、明治維新ノ後、春日井郡ヲ東西二郡ニ分チテ、凡テ九郡ト爲シ、新ニ名古屋市ヲ設ケテ、愛知縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕尾張平波里

〔饅頭屋本節用集天地〕尾張 尾州

〔日本風土記一寄語島名〕尾張倭阿里

〔倭訓栞前編五乎〕をはり　尾張の國は、南智多郡のかた、尾の張出たるが如し、一說に小墾の義也、式山田郡尾張神社あり、小針村にて、香語山命を祭れり、又中島郡に尾張大國靈神社とも見えたり、續日本紀に、太宰府帥、大貳、幷三關、及尾張守等始給傔仗と見えたるは、尾張國は路四方に通じて、

殊に非常を禁ずべき地なれば也といへり、尾張を混と書は、尾閭を混濁とも書しに據なり、

〔古事記傳二十七〕尾張國、名義未思得ず、萬葉十三に、小治田之年魚道之水乎云々、此治字は、治の誤にて、實は遲陀なるべし、さて續紀廿九に、尾張國山田郡人、小治田連藥等八人、賜二姓尾張宿禰一とあると合せて思へば、尾張を小治田とも云しか、若然らば、即小治にて、田に依る名なるべし、又神代に伊都之尾羽張と云劒名もあれば、草薙劒に因て、此も尾羽張の約まりたる名かとも思へど、此國名は、倭建命より前にあり、又彼劒もと大蛇の尾より出たるに就て云る說もあれど、あたらず、又國形の南方へ長く尾の張たる故の名と云もいかゞ、又此國の風土記と云物に、終の意に云ることあれど、其說さだかに聞えがたし、凡て此風土記はやゝ後の物なり、

〔古事記傳二十一〕尾張連○中略此氏の本居は、大和國葛城なり、○中略書紀神武卷に、高尾張邑、或本云二葛城邑一也、また高尾張邑云々、因改號二其邑一曰二葛城一とあるは、高尾張と云は、葛城の本名と聞ゆれば、國名の尾張は、此高尾張より出て、其は此氏人の葛城より出て、彼國に下住居し故に、其本居の名を取て國名とせるかと思へども、然には非じ、かの神武卷の趣は、一の傳へにて、實は天火明命の子孫葛城に住居けるが、尾張國造になりて、彼國に下り居住し人ありし緣によりて、其國名を取て、本居の葛城を高尾張邑とも云けむを、誤て本名の如く傳へ云しなるべし、但しこれらは、今己が思ひよれることにて、たしかには定めがたけれども、とまれかくまれ、葛城に高尾張てふ名のあるは、此氏の本居なる由緣なる事は、違はざるなり、

〔諸國名義考上〕尾張

和名抄に、尾張、乎波里、國府在二中島郡一、名義は、○中略こは十拳劒より負し名なるべし、その故は、古事記に故所レ斬之刀名謂二天之尾羽張一、亦名謂二伊都之尾羽張一とあるは、草薙劒にはあらねど、尾羽張とは劒先の巾廣きを云るよし、古事記傳に見えたり、かゝれば草薙劒も、劒尾の巾張たるゆゑにやゝか號けむ、天之波士弓、天之羽々矢、また八坂瓊の玉など、みなひとつの名にあらぬをも合せ思ふべし、

〔尾張志〕國號及本基の總論○中略

尾張と號たる故緣は、古傳を失ひて知りがたし、○中略按するに、郷の名より出て國の大號となれ

位置

るなるべし、然いふ故は、諸國に例多かる上に、本所の地名あれば也、まづ延喜神名式に、山田郡尾張神社、尾張國內神名帳に、山田郡尾張田天神と見えたる地は、今春日井郡（もとは加須我倍といひて、春部と書り、倍な井と呼は、音便にあやまれる語、春日井と三字にかくも、中昔の御提にたがへる近世のならひ也、）味岡莊に屬る也（この地あたりまで、古くは山田郡なるしかば、此處の莊名も山田なる事著明を、後に他莊につけるなり、）小針村なり、是は尾張氏本居の地にて、はじめは小治田といひしが、後に小針となれり、小治田といひし事は、萬葉集（卷十三）に小治田之、（今本治を沼にあやまれり）年魚道之水乎云々、また續紀に、神護景雲二年十二月甲子、尾張國山田郡人從六位下小治田連藥等八人、賜姓尾張宿禰（これ小治田を乎波里といひ、連を宿禰とし、文字をも尾張と改められし明證なり又この小治田連藥等は、姓氏錄左京神別天神部に、小治田宿禰云々、右京神別天神部に、小治田連云々とある氏人とは同名異氏姓也、思混ふべからず、姓氏錄なるは、皆饒速日命の後裔にて、石上朝臣物部氏など同氏也、藥等はしとより尾張氏にて、天火明命の後にて、小針村本居の氏人也、然るを舊事紀に、尾張氏と物部氏な混一にして、其始祖を饒速日命に充たるは僞說也、）など見えたり、又村名の乎波里を小針とかく文字は、古代の書體の今に存せるにてめづらし、國號の尾張も、舊は小治、小墾、小針、尾治などぞ書けむ、（書紀にはさらなり、古事記にも、國號に必尾張とかけるは、改られたる後の世の人のわざにもやあらむ、國造本紀に、山背相武胸刺淡海三野斐陀稻葉針間とかき、古事記に科野常道稻羽阿岐などあるは、舊上代より書來りしまゝの文字也、）小治田といふ名の義は、萬葉に小墾田とも書る如く、田に依れる名なるべし、

〔地勢提要（乾）〕各國經緯度（附里程）

尾張名護屋（玉屋町）極高三十五度一十分、經度東一度一十分、從東都（東海道）九十五里三十一町二十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

尾張　熱田宿　三五度〇七分〇〇秒　名古屋　三五度一〇分〇〇秒

佐尾宿　三五度〇九分〇〇秒（中略）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（中略）　尾張　名古屋　東一度〇七分三〇秒

疆域

〔尾張志〕國號及本基の總論

國の大體、西北を首とし東南を尾とす、東は參河につゞき南は海を隔て、志摩、西北は陸にて、北より西は美濃、西より南は伊勢に亘れり、

〔日本地誌提要尾張十一〕疆域　東ハ三河、西北ハ美濃、西南ハ伊勢、南ハ海ニ至ル、東西凡八里、南北凡壹拾九里、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年九月壬申、尾張國言、此國與美濃國堺有鵜沼川、今年大水、其流改道、毎日侵損葉栗中島海部三郡百姓田宅、又國府幷國分二寺俱居下流、若經年歲、必致漂損、望請遣解工使開掘、復其舊道、許之、

〔鹽尻三十三〕一日本紀に、尾張美濃の界を鵜沼河といへり、豐臣家妄りに國界を私になしてより、尾張の地濃州と呼地多し、

〔鹽尻五十五〕一尾張川九瀨　大炊渡　鵜沼渡　板橋渡　氣瀨渡　大豆途渡　食卯渡　釋島渡　墨俣渡　市川渡

是は古へ尾州より美濃へ渡る境なり、今の如きは濃州に屬す、

〔更科日記〕尾張の國なるみの浦を過るに、夕しほたゞみちに滿て、こよひ宿からんもちうげんにしほみちきなば、こゝをも過じと、ある限り走りまどひすぎぬ、美濃の國なるさかひにすのまたといふわたりして、野上といふ所につきぬ、

〔鹽尻七〕一古しへ濃州より尾州に至る道は、野上、春野、大墓、赤坂、是より墨俣川をこえ小熊に出づ、古濃州道春は、羽栗郡也、今は屬濃州、加納古書ニ蚊野、尾州羽栗郡也、今は濃州、墨田、一宮、下津、萱津、　今は濃州赤坂より墨俣を經て、結やをに至り、是より萩原稻葉清須を歷て、名古屋に出て、熱田に行、

島嶼

〔日本實測錄島嶼九〕尾張國知多郡　遠測　鼠島　日間賀島　小礒島大　中手島　ツクミ島　篠島　トカノ島　平島　小礒島　松島　野島

地勢

〔易林本節用集下〕尾張州尾下、管八郡、南北三日、地厚土肥、種坐千部里多勝日本國也、大上國也、

〔尾陽雜記一〕抑尾州は、東海上國十五州の要津也、東は三河、西は濃河をおび、北は信山に跨、南は勢海をへだつ、いはゆる四塞の地にして、要衝の都會也、俗に術智あり、民驍勇を好、いにしへより武を用るの國なり近は名譽の武將あまた出生の地云々、

〔佳境遊覽一〕尾張國

風土記曰、尾張國土地大肥、用富榮也、出名材多、而海鮮以萬數之、西限愛智海、東限富川、北限澤田海、南限多田、峯山之數百餘峯、郡之數八、鄕之數二百、村之數四百四十三、海强半、川之數二十八所、神社六十箇、大上國也、凡尾張州形勝、東北環三河美濃、西南連伊勢志摩、地勢廣濶、風氣和暖、田宅豐饒、而四民安逸也、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十二月廿七日甲戌、尾張國言、昔廣野河流、向美濃國、當于斯時、百姓無害、而頃年河口壅塞、總落此國、每遭雨水、動被巨害、望請、堀開河口、令趣舊流、太政官處分、依請、

道路

〔尾陽雜記十〕尾張國道法海陸道程記第二卷

名古屋ヨリ須賀口へ二リ　須賀口ヨリ稻葉へ二リ　稻葉ヨリヲコシへ二リ　ヲコシヨリ美乃ノ內須ノ俣へ出ル一リ木曾河舟渡リ也　須賀口ヨリ黑田へ掛リ、美乃大垣へ出ル舟ワタリ也、名古屋ヨリ木曾河へ四リ半　木曾川ヨリ美乃ノ內高巢へ二リ半　丸山ヨリ長久手へ一リ　長久手ヨリ鳴海へ四リ　鳴海ヨリ横須賀へ二リ半　横須賀ヨリ大野へ二リ半　大野よりとこなべへ一リ九丁　とこなべヨリ內海へ三リ半　內海ヨリ諸崎へ三リ　名古屋より平張へ二リ半　平張より國境へ三リ　國境より三州堤へ出ル　名古屋より熱田へ一リ半　熱田より

鳴海へ一里半餘　鳴海より三州地鯉鮒へ三リ　名古屋より小牧へ三リ　小牧ヨリ犬山へ三里　犬山ヨリ美乃鵜沼へ出ル舟渡し　名古屋より濃州高須へ八リ餘　丸山ヨリ科野へ五里　科野より濃州柿野へ出ル一リ　犬山より内津へ四リ　内津より美乃内池田へ一里半　ナゴヤより同國黒田へかゝり美乃ノ内加納へ出ル、

〔日本實測録二街道〕從東京東海道至西京〇中略

尾張國愛知郡鳴海宿　一里三十町一間　熱田宿　二十四町一十八間　古渡村　一里一十一町二間半　海東郡萬場宿　一里二十八町九間　神守宿　二里七町一十一間半　佐屋宿三十五度九分　二里一十四町一十五間半至國界木曾川岸三十三丁四十一間半　伊勢國桑名郡駒江村〇中略

從東海道古渡歷名護屋及大垣至垂井、

尾張國愛知郡古渡村　二十八町三十九間半　名護屋玉屋町三十五度一十分　二里一十八町五間至名護屋傳馬町二丁一十間　春日井郡清須　二十三町二十一間　中島郡井之口村四ツ家至美濃國加納八幡町五里二十一丁　一里九町五十三間　稻葉宿　一里一十町三十九間半　萩原宿　三十五町二十一間　越宿オコシ沿佐屋川至海東郡佐屋宿五里九丁三十四間半、　二里一十九町一十間半至國界一十一丁一十九間半　美濃國安八郡墨俣宿

〔日本實測録一沿海〕從東京沿海至大坂〇中略

尾張國知多郡大足村　四里一十九町五十七間半　大井村三十四度四十三分半　一里二町四十三間　師崎村三十四度四十二分半、　三里一十四町四十六間　東端村濱至東端村宿所三町四十七間、三十四度四十四分、　三里五町二十九間　小鈴ヶ谷村三十四度五十分、　三里二十一町五間　大野町至片町六町五十七間、北極高三十四度五十六分、　二里二十七町一十一間　大里村　四里四十六間　愛知郡熱田宿三十五度七分至街道二町五十五間　五里二十六町三十三間半至五條川口二里六町二十八間半、從五條川口至庄內川口一里二十四間半、海西郡大寶新田至鳥ヶ地前新田川岸一十七町二十六間半、從川岸至鳥ヶ地前新田宿所八町一十七間、北極高三十五度六分、又從鳥ヶ地前新田沿川至佐屋宿二里一十一町九

宿驛

間 一里一十四町八間 至國界三十五町一十二間半 伊勢國桑名郡シメ切新田

〔延喜式 二十八兵部〕諸國驛傳馬 ○中略

尾張國驛馬 馬津、新溝、兩村、各十疋、 傳馬 海部、愛智郡、各五疋、

〔張州府志 二十三海東郡〕津梁 佐屋驛 即赴勢州桑名路次、自神守到此、 神守驛 在万場于佐屋之交、至万場、 万場驛 在岩塚川西、自此至神守、

〔張州府志 十一春日井郡〕津梁 小牧驛 經木曾路驛次也 內津驛 經信州及東濃驛次也 清洲驛 經西京東都路驛次也

〔張州府志 八愛智郡〕津梁 熱田驛 又稱宮宿 鳴海驛 倶自京師至東武驛路也 平針驛 即今平針村也、古到駿州驛置、而今尚課役比之本驛、 岩塚驛 在岩塚村、自是經佐屋到勢州之間道也、公程慎風波者、多倚此路、俗謂之佐屋廻、

〔吾妻鏡 六〕文治二年四月一日戊申、北條四郎主、出京之後、今日著尾張國萱津宿、而關東御使、來會于此所、帶去月十六日御書、仍相副狀被送進帥中納言殿許云云、

〔吾妻鏡 十〕文治六年 ○建久元年 十月廿八日己酉、於小熊宿、須細大夫爲基、賜身暇、自鳴海迄于此所、候御駕前、當國內牢籠所領等令安堵云云、

〔沙石集 六上〕袈裟之德事

去文永七年七月十七日、尾張ノ國下津ノ宿ニ雷墮テ、道行馬三匹ケ損ジテ、小家ニ走入テ、帷ニ袈裟掛テ雙六打テヰタル法師ノセナカニカキアガリテ、帷ヲバ散々ニ掻裂テ、袈裟ヲバ少モ不損法師モ无恙ケリ、

建置沿革

〔建武三年以來記〕同五年、同月 ○正 廿二日、自東方飛脚來、陸奧國司 顯家 勢、已責入尾張國黑田宿云々、

〔日本國郡沿革考 二東海道〕尾張 國造記云、志賀高穴穗朝定尾張國造、 上國、管八郡、千八村、

愛智 百二十二村、神代記作五湯市、景行紀作年魚市、靈異記作阿育知、 春日井 百八十九村、延喜式等作春部、拾芥抄作春日部、 丹羽 百十八村 葉栗 四十一村、或作羽栗、 中島 百六十七村、古府治 海東 百三十八村、延喜式等作海部、中世分爲東西二郡、 知多 百四十二村 山田 延喜式等共載、廢置未詳在何時、

〔日本地誌提要十一尾張〕沿革　古ヘ國府ヲ中島郡ニ置ク、今ノ國府宮村是ナリ　鎌府ノ初、大屋安資守護ノ事ヲ行フ、足利氏ノ時、土岐頼康、子康行、満貞、相繼テ守護トナル、應永中斯波義重之ニ代リ子孫ニ傳ヘ、世京都ニ在テ將軍ノ管領トナリ、其臣織田氏ヲ以テ守護代トナス、五世義敏、同族義廉ト嫡ヲ争ヒ、義敏越前ニ奔リ、文明ノ末、義廉京ヲ去リ、來リテ清洲城ニ居、曾孫義統ニ至テ、威柄下ニ移リ、天文ノ末、家臣織田信友ニ弑セラル、信友ノ同族信長、兵ヲ興シテ信友ヲ誅シ、義統ノ遺孤義銀ヲ清洲ニ奉ジ、代テ州事ヲ管ス、義銀後ニ信長ヲ除カンコトヲ圖ル、信長怒テ之ヲ逐フ、是ニ於テ信長、勢日盛ニ、遂ニ美濃ヲ取リ岐阜ニ徙リ、足利義昭ヲ京師ニ納レ、京畿内外二十餘州ヲ併セ、足利氏ニ代テ兵權ヲ掌ル、天正十年弑ニ遭フ、豊臣秀吉亂ヲ定メ、諸臣ト會議シ、其舊疆ヲ分チ、信長ノ子信雄、伊勢ヨリ清洲ニ移リ本州ヲ領ス、十八年、秀吉其封ヲ奪ヒ、之ヲ那須ニ謫シ、義子秀次ヲ封ズ、文祿四年、秀次罪有テ自殺ス、秀吉福島正則ヲ清洲ニ封ズ、慶長五年、徳川氏正則ヲ安藝ニ徙シ、第四子忠吉ヲ封ズ、嗣ナシ、其弟義直代テ封ヲ受ケ、清洲ニ館ス、十五年、名古屋ニ城テ之ニ遷リ、子孫封ヲ襲グ、忠吉ノ藩ニ就ク、平岩親吉ニ犬山ヲ賜ヒ、之ガ相トス、嗣ナク封除レ、成瀬正成之ニ代テ、義直ニ相トシ、職ヲ世ス、王政革新、犬山ヲ以テ成瀬正肥直ニ藩屏ニ列ス、既ニシテ皆縣トナシ、尋デ稲置縣郡犬山ヲ廢シテ、名古屋縣ニ併セ、改稱シテ愛智ト云、

〔尾張志〕この尾張國を經營ありし國靈神及其繼々に國主と坐しはいかなる神とも、傳記せる書の、今遺らねば知るべき由なけれど、もしくは尾張氏の遠祖等などにてもあらむか、尾張氏は、天火明命の子孫にて、はじめは大和國葛城に住居たる地、高尾張といひしよし也、その同族の別れて、この尾張に下り來て住るが、世々經たる後に、尾張といふ姓を賜へり、されば尾張といふも、高尾張といふも、本はひとつにて別ならざりし也、其故縁は、三代實錄に九卷貞觀六年八月八日、尾張國海部郡人治部少錄從六位上甚目連公宗氏、甚目の二字、今本に其目と誤れり、古本によりて改む、海東郡なる甚目寺は、此氏人の建たる寺にて、其

村、即本居の地也、此處に今も甚目といふ家三家あるは、即この同族の氏人なり、尾張醫師甚目連公冬雄等、同族十六人賜姓高尾張宿禰、天孫火明命之後也と、見えたるにてあきらけし、扨尾張氏の世系は、舊事紀天孫本紀に、始祖を天照國照彥天明櫛玉饒速日尊、亦名天火明命實は天火明命なるを、饒速日命の亦の名として、かく同神にしたる説は、上にいふがごとし、として、其子天香語山命、其子天村雲命、亦名天五多底、其子天忍人命、其子天戸米命、其子建斗米命、其子建宇那比命、其子建諸隅命、其子倭得玉彥命、亦名市大稻日命、其子弟彥命、其子淡夜別命、其子乎止與命、國造本紀に、尾張國造は、志賀高穴穗朝、以天別天火明命十世孫小止與命定賜國造と見え、亦天孫本紀この命の條下に、尾張大印岐女子、眞敷刀俾爲妻生一男などもあり、かゝれば古事記傳に、この命や尾張の國に、此氏人の住しはじめ也けむとあるも、げにさる事也、式帳に見えたる、愛智郡上知我麻神社は、此命を祭るといへり、又美夜受比賣命は、この命の御むすめ也、其子建稻種命、此命の御名は、古事記に建伊那陀宿禰とあるによりて、然よむべくおぼゆ、日本武尊の東國を討玉へる時、供奉に從奉りて、駿河の海にて身まかり玉ひき、其子尻調根命、この命の尻調二字を、舊事紀に尻綱、または尾綱ともかけるに見なれて、古事記傳及荏野房子に、尻綱根命とし、熱田尊命記集説、本國帳集説、尾張式内神社考證等には、尾綱根命とかけり、こは皆舊事紀今本の誤字に心づかざりし誤なり、古事記に、尾張連之祖伊那陀宿禰之女、志理都紀斗賣と見え、姓氏錄に若犬養宿禰、火明命十六世孫、尻調根命之後也とあるによりてあらためつ、其子尾治弟彥連、其子尾治金連など、已下繼々に皆尾治某連とあり、續紀の文武紀にも、尾治連若子麻呂牛麻呂などあり、尾治といふ文字用は、當時の書ざまなるべし、また尻調根命の條に、品太天皇御世、賜尾張連姓とあれば、始め乎止與命も、國造の如くにて尾張に住るが、たゞし此氏人の、葛城よりはじめて尾張に下り住しは、此命より今すこし巳前ならむとおもふよしあれど、決ては言がたし、又日本武尊の下來坐し時に、既に此國にこの氏人の有つるを思ひて、志賀高穴穗朝とあるは、時代たがへりと、古事記傳に言たれど、必國造に任ぜられて、其國に下るにはあらず、もとより本居の其國人を、其國造に任じ玉へるぞ大方の例なる、されば乎止與命も、はやくより此國人なりつらむを、其志賀穴穗朝に至りて、國造にめされしなるべし、其孫尻調根命に至りて、尾張連といふ姓を玉ひし也、かくて乎止與命の子孫、世々繼々に廣ごりて、國造及郡司、大領、小領などにもなりて、國中諸郷に住り、熱田大宮司千秋家の遠祖、及神官田島馬場などいふ家も、皆此尾張氏也、其住處の明に物に見えたるは、熱田緣起に、日本武尊云々、到尾張國愛智郡時、稻種公啓曰、當郡氷上邑有桑梓之地、伏請大王税鴐息之とある氷上今知多郡に屬る大高村是なりをはじめ、中島郡小塞今葉栗郡なる尾關村也、延暦元年十二月、內掃部正外從五位下小塞宿禰弓張に、尾張姓を賜へる事、續紀に見えたり、海部郡甚目など、其餘も猶あるべし、また山田郡小針、春日

井郡小針、（今白山村田地の字に遺れり、小針とかきてコバリといふは、後世の轉訛なり、）山田郡尾張戸、（尾張戸は、神名式に、尾張戸神社とある是也、此戸は部の借字にて、尾張部なり、此社を俗に富國明神と稱し、其社地を富國山といふも、是尾張山といふ意也、此地今は水野村につけり、和名抄に、信濃國水内郡尾張郷とあるを、乎波利倍と註せるは、此處の同例、部は群の意にて、衆をさしていふ名也、）丹羽郡二宮村なる尾張（今田地の字にあり）などいふ地は、並尾張氏の住居たる事あきらけし、（住りし時代の新古あり、山田郡なる小針は、神護景雲の比なる事、續紀に見えて、上に引る如く、二宮なる尾張は、やゝ後にて、左衛門尉尾張俊村、同俊秀等や住けむとおもふよしあり、そは寛元の頃にて、假名を重松といへり、今二宮神主重松と稱するは、この同族の子孫なるべし、）

〔塵尻二十一〕一謹按、尾張國列東海道（東海名出日本紀景行紀、訓字登天美知、）第三云、古昔神武天皇東征之日、天種子命（天兒屋根命之孫也）云々、討海部佩室臣定國見延長風土記、成務天皇五年、以小豊命（天火明命十世孫、尾張連祖、其廟有愛智郡熱田郷、號上電神殿、）爲國造、（後世國司也）縣邑各置稻置、（後世郡司也）同分郡縣、定邑里、（八郡盡始于此）自此尾張氏世爲國造、天武天皇御宇、以小子部連鉏鉤任守、府本在中島郡、　今郡有國衙庄松下村、即司館舊跡、而俗呼曰國衙畠、守介等館於此治、致施教、後鳥羽院御宇、前右大將源賴朝及爲都元帥、請命別置守護一人、以並司執國務、後世武臣自立、不待官命、而私領郡郷、如斯波氏織田氏數家、

斯波氏領國之際、遷候官於同郡清洲、（今爲春日井郡）建城、武衛（斯波）源義統之時、其臣織田彥五郎（某）弑義統奪清洲城、自此織田氏專國、後贈相國信長住于此、其子前内大臣信雄又居此、然前關白豐臣秀次領之、後福島左金吾正則領焉、後陽成院慶長五年、東照神君封從三位前左近衛權中將源忠吉卿、候官清洲城、　同十二年、前權大納言（御諱義直）襲封、築大城於愛智郡那古屋庄、遷于候官、初今川左馬助源氏豐築之、織田備後守平信秀奪之、天文年中信長居之、後使林佐渡守監之、然後平岩主計頭弓削朝臣親吉領之、至此敬公始居焉、先此神君幼子千君來尾州、爲平岩氏之嗣、然慶長五年庚子三月七日早世也、號高岳院、

〔先代舊事本紀十國造〕尾張國造。。。。

志賀高穴穗朝、(○成務)以天別天火明命十世孫小止與命定賜國造、

〔古事記 中(景行)〕故到尾張國、入坐尾張國造之祖美夜受比賣之家、乃雖思將婚、亦思還上之時將婚、

〔續日本紀 十七(聖武)〕天平十九年三月戊寅、命婦從五位下尾張宿禰小倉授從四位下、爲尾張國國造、

〔日本書紀 二十八(天武)〕元年六月丁亥、天皇留皇后而入不破、比及郡家、尾張國司守小子部連鉏鉤、率二万衆歸之、

〔尾陽雜記 一〕一天文比、尾張八郡、上四郡織田伊勢守信安、(入道常松末岩倉城)下四郡織田大和守達勝、(淸洲城)織田伊勢守入道常松ハ、應永十五年比、織田大和守達勝ハ大永六年比、天文二十二年日本高寄ニ、尾張、五十七萬千七百三十七斛、是ヲ天文繩ト云、

國府

〔倭名類聚抄 五(國郡)〕尾張國(國府在中島郡、行程上七日、下四日、)

〔鹽尻 七〕一古しへ國衙ノ(今國府松下村、一宮より東の方、)より增田に(赤染衛門歌よみ處)出て、萱津へ行、今小路森及び古道の稱、增田の西南の方村名に有、昔の路趾なるべし、

〔佳境遊覽 三(中島郡)〕司廳　在今所謂國府松下村、呼國衙畠之地、其舊墟也、

郡

〔倭名類聚抄 五(國郡)〕尾張國、(○略)管八、(○略)海部(阿末)　中島(奈加之萬)　葉栗(波久利)　丹羽(邇波)　春部(加須我倍)　山田(夜萬太)　愛智(阿伊知)　智多、

〔延喜式 二十二(民部)〕尾張國上(管)　海部　中島　葉栗　丹羽　春部　山田　愛智　智多(○中略)　右爲近國、

〔拾芥抄 中(末諸國郡數)〕尾張(上近)八郡　海部　中島(府)　葉栗　丹羽　春日部　山田　愛智　智多

〔佳境遊覽 一〕郡名(○中略)

海部(和名阿末)中世分爲二郡、所謂海東海西也、

海東郡　(莊)十三、村百三十六、津島山新田五箇村、松葉(ノ)十二村、相江(唯)(旦)海部ハ延喜式作綠海部、

海西郡　(莊)六、村七十七、立田十五村、市江七箇村、(豐臣秀吉以河西屬美濃及伊勢、故海西郡長島以北之地、多隸于他也、)

中島郡　和名奈加之萬、國府在當郡、又隷美濃者固有之、莊二十一、村百六十三、絹屋郷五ヶ村、牧鄕七村、下津、當郡今屬美濃國之地、凡五十二村、大栖莊二十餘村、今隷美濃、

葉栗郡　和名波久利、莊二、村數四十一也、

丹羽郡　和名爾波、風土記作丹波、莊十一、村百有九、岩倉、

春日井郡　和名加須我倍、春日部與井義、又合山田郡爲一郡、或云、春日井郡國中央、面有稱尾張村國、俗誤書小針村、是尾張之本土也、山田郡今稱春日井郡、爲莊之名矣、或云斯波氏領國之時、

停山田郡合春日井郡爲一郡、莊十一、村百七十四、篠木驛三十三村、柏井鄕五村、落合鄕六村、淸洲十四村、小牧驛、

愛智郡　和名阿伊知、今稱智多、地多矣、古記書熱市、古事記曰、尾張之相津、神代卷曰、香湯市村、數行紀日、年魚市郡、本朝文粹、尾州岡育郡、莊十二、村百十五、星崎四村、熱田驛、鳴海驛、

知多郡　和名知字、莊二十一、村百四十、英比莊十六村、內海莊十四村、野間莊七鄕、荒尾鄕七村、寺本鄕四ヶ村、日長七ヶ村、大野、師崎、河和、中田、成岩、東浦、諸川、大高、

〔皇國郡名志〕尾張國　八郡

中島（ナカシマ）　△起　●萩原　●稻葉　△一ノ宮　中野ト云處美濃ニカヽル　濃界木曾川ニ瀕

葉栗（ハクリ）　△北方　濃界木曾川小郡

丹羽（ニハ）　△入鹿池　[大山]　●樂田　●善師ノ　國中ヨリ木曾川

春日部（カスガイ）　△淸須　△小牧　勝川　●坂下　●內津　淸須ヨリ濃三ノ界

愛智（アイチ）　[名古屋]　△宮　△熱田社　●山崎　△鳴海　三界ヨリ海ニ貫

智多（チタ）　●龜崎　●半田　●大野　△横須賀　三界

海東（アマヘノヒガシ）　△津島　△佐屋　●神守　●萬場　西海ニ向郡

海西　勢ノ長島ニ幷テ小島也、郡無シ、大川ノ中島一郡也

今海部分爲東西、舊山田郡今含之、又春日部ヲ今作春日井、

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國舊郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕尾張

	愛智	智多	春部	山田	丹羽	葉栗	中島	海部
六國史古書	吾湯市 年魚市紀							
	年魚道万 阿育知日本靈異記					羽栗風土記		
延喜式	愛智	智多(チタ)	春部(カスカヘ)	山田	丹羽(ニハ)	葉栗(ハクリ)	中島(ナカシマ)	海部(アマ)
倭名抄	同	同	同 加須我倍	同	同 爾波	同 波久利	同 奈加之万	同 阿末
拾芥抄	同	同	春日部	同	同	同	同	同
諸書	愛智元 愛知圖	知多元	春日井元		同元	葉栗元 羽栗	同元 圖	海東 吾妻古文書
郡名考	愛智(アイチ)	同(チタ)	同(カスガイ)		同(ニハ)	葉栗(ハクリ)	同(ナカシマ)	同(カイトウ)
天保郷帳	愛知	同	同		同	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同		同	同	同	同
地誌提要	愛智(アイチ)	同(チタ)	同(カスガヰ)		同(ニハ)	同(ハグリ)	同(ナカシマ)	同(カイトウ)
郡區編制	愛知	同	西春日井 東春日井		同	同	同	同

					海西開元	同カイサイ	同	同	同カイサイ	同
		管八	同	八郡		同	同	同	同	九郡

海部郡
海東郡
海西郡

〔住境遊覽一〕郡名〇中略

風土記云、尾張に上郡と云名あるは、古來葉栗、丹羽、山田、春日井之四郡を上之四郡と云、中島、海部、愛知、知多之四郡を下四郡と云、上四郡は織田伊勢守領之、丹羽郡岩倉に在城し、下四郡は、武衛家幷織田大和守領して、淸須に居城せり、此時より上郡の名起れり、丹羽郡は本城岩倉に在城なれば、至于今丹羽郡を別て上之郡と云、於鄕て爲其郡名所、俗是を云親里、按るに親里大小あり、今是を稱頭鄕、風土記云、古しへは諸國に庄司と云職あり、尾張の國に九十餘庄を置、九十餘人の庄司在しとなり、今國中に庄と稱するの地九十三箇所あり、

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地長德四年注文定〇中略

尾張國　海部郡十町　中島郡二百九十六町三段　春日部郡五十町　愛智郡七十町　葉栗郡卅六町七段　山田郡卅六町　丹羽郡百八十町八段

〔尾張志〕古今のかはり

むかしは海部郡といひて、尾張のうち西南の隅にて、海にそひたる大郡なりしを、六七百年さきつかた、右大將賴朝卿治世の頃にや、二郡にわかちて、東を海東とし、西を海西と名づけたり、此故に續日本紀の神護景雲元年五月戊辰の記、同三年七月甲辰の記、日本後紀及類聚國史の延暦十八年五月己巳の記、天長九年己亥の記、三代實錄の貞觀六年八月八日壬戌の條、元慶元年十二月

二十五日辛卯の條をはじめ、和名類聚抄、延喜式等、その外數百部の古書どもに、みな尾張國海部郡と記せり、

〔張州府志　二十三海東郡〕疆域　東西三里、南北三里、東至愛智郡、西隔河隣海西郡、南至海、接熱田浦、北至中島郡、凡一百三十二村、

〔續日本紀　二十八稱德〕神護景雲元年五月戊辰、尾張國海部郡主政外正八位下刑部岡足、獻當國國分寺米一千斛、授從五位下、

〔續日本紀　三十稱德〕神護景雲三年九月壬申、尾張國言、〇中略今年大水、其流改道、毎日侵損葉栗、中島、海部三郡百姓田宅、〇下略

〔尾張志〕海。西。郡。

當郡は此國の西南の極に屬る地にて、東西は一里ばかり、南北は七里ばかりあり、地形少し曲りて張れる弓に似たり、東は海東郡につゞき、北は中島郡に接はる、西は大河を隔てゝ美濃國海西郡を境とし、（是はもと此尾張國内なりしを、天正年中に木曾川を境として、葉栗、中島、海西と三郡ともに、川向を美濃に屬られたるによりて、今は美濃國にも彼三郡あり、されど是は、本國の郡名にて、彼國のもとよりの郡名にあらず、是は豐臣家のはからひなり、）南は海にて、伊勢國桑名郡に並べり、延喜式尾張國綠海郡（こは此國の郡名を擧たる部にはあらず）といふ名目見えたるは、海邊の地をさしてかりにいへるさまにて、本國八郡の正しき郡名にはあらず、八郡の郡名は、和名抄及延喜民部式に見えたるぞ正しき、かの八郡の中に海部郡とあるは、今この海東海西と二郡に分れたる本基也、其わかれて二郡と建られたるはいつばかりなりけむ、定かならず、されども賴朝將軍の熱田宮の寄進狀に、治承四年八月云々、海東郡といふ名目見えたれば、治承よりも以前なる事はしられたり、

〔張州府志　二十六海西郡〕疆域　東西一里、南北七里餘、竪長橫狹、宛如一島、東接海東郡、東北與中島郡接壤、西則隔河曰濃州海西、南則海面連勢州、凡七十三村、

〔尾張志〕古今のうつりかはり
凡六國史をはじめ、和名類聚抄、延喜式、その外もろ〳〵の古記錄どもに、皆中島とかきて、更に外の文字を用ひたる例なし、參河國猿投神社の所藏なりしといへる尾張國古圖に、南の海の中に一箇の島をかきて、中島と志るせり、いと古き世にはさもありしなるべし、吉蘇川墨俣川などの末の幾派にもわかれて海におつるあたりは、おのづから島となりて、今海東郡沖の島村、馬島村のごとき地も、海中の小島なりしが、年歷をふるまゝに、川上より砂土流れ來て、地つゞきとなり、延喜式和名抄などの頃には、まさしく郡となりしかもはかりがたし、かゝればかの尾張の古圖も、ひたぶるに僞作ともいひがたきにや、近年諸桑村の地水より、古代の船の大きやかなるを堀出しつるにても考ふべし、信濃國の川中島などのごとき地、諸國に例多くみな中島と呼り、中島宮緣起に、むかし倭姫命、八ッ節の竹の杖を四ッに折て、四方に投給ひしが、八ッの竿竹と生たりし、そこを御園といひ、其四隅のうちを中國とよびし、是中島の郡名の起れるもとなるよし記したれど、附會甚しくうけがたし、此地京都より當國の入口にて近ければにや、むかしの國府館も、國分寺、國分尼寺、學校などもありて、いとおもたゞしき郡なりしが、斯波氏の守護職たりし頃より、清須を城地とし、其後今の名古屋を府城とし給ひしかば、道隔りて片田舍となれり、天正十二年、當郡のうち三十四村美濃に屬きし事、葉栗郡の條にいへるがごとし、

〔張州府志十八中島郡〕疆域　東西三里、南北四里、東接丹羽郡、北接葉栗郡、南隣海東郡、東南界河與春日井郡接、西以岐蘇川爲界、西南接海西郡、

〔日本靈異記中〕力女示強力緣第廿七
尾張宿禰久玖利者、尾張國中島郡大領也、聖武天皇食國之時人也、〇下略

〔尾張志〕古今のうつりかはり

和名類聚抄、延喜式をはじめ、古書どもにみな葉栗郡とかき、羽栗と書るもまれには見えたり、羽栗とは熟字の正しからぬにやとおもへど、其例なきにもあらず、參河國額田郡に羽栗村あり、むかしは墨俣川、又厚見郡の堺川をもて西北の堺としたりしを、天正十二年、秀吉公のはからひにて、起川を國ざかひにあらため、川西の村々を美濃に屬られたり、その美濃の地は今羽栗郡とかけり、偖織田信雄公の尾張を領知有しかば、其地をせばめむ爲に、かく國境を改られしといふ人あれど、さにはあらず、むかしより墨俣川を東西わかれの切所とし、京方墨俣を破らるれば、必宇治勢多にもふせぎ得ずして敗軍となり、又關東方墨俣川を引退けば、起矢矧を防得ず、かならずまけ軍となるが多ければ、信雄公に與力し給へる德川公の强兵を懼れ、かくはからはれし事疑なし、

〔張州府志 十七 葉栗郡〕疆域　東西三里、南北一里半、東接丹羽郡、南接中島郡、西北以岐蘇川爲界、

〔尾張志〕いにしへ今のあるやう、

和名類聚抄の諸國郡名の條に、尾張國丹羽 邇波 と記し、六國史をはじめ、延喜式、風土記、拾芥抄等、其外の古書どもにもみな丹羽と見え、本國帳の一本にのみ丹波とかけり、往昔日本武尊の御裔爾波縣君のしりし地也、中むかしの頃は、當郡誰人の領地なりしにかきるしたるものなし、斯波氏の領國となりし後、その家臣織田氏當郡をあづかり、大和守敏信、伊勢守信安父子岩倉の城にありて、當郡又上の四郡をもつかさどりし也、

〔張州府志 十四 丹羽郡〕疆域　東西三里、南北三里、南至春日井郡、東北接濃州可兒郡、北以木曾川爲境、西與葉栗中島二郡接壤、

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁五年七月辛亥、尾張國丹羽郡田廿四町、賜夫人從三位橘朝臣諱、

〔尾張志〕むかし今のあるやう

昔は此郡をかすかべといひて、愛智、山田、春部、丹羽、葉栗、中島、海部、智多を尾張の八郡といひ來りしが、いつの頃にかありけむ、海部郡をわかちて海東海西の二郡とし、(治承四年に書る賴朝將軍の熱田寄附狀に、海東郡といふ事見えたれば、是よりさきに東西二郡にわけられたる事はしられたり、)山田郡を廢して、其地を多くかすかべの郡に合せ、また愛智郡にも屬たりしを、いつとなくかすがゐといひならひて、文字も今のごとく書替しなり、今山田莊といへる地は、皆いにしへ山田郡に屬し村里也、三代實錄貞觀十九年、但馬國獲白雉、尾張國樹連理云々、是等の佳瑞によりて元慶と改元ありし詔に、宜復尾張國百姓當年徭役、春部郡免當年之庸と志るし、和名類聚抄に春部(加須我倍)とあるをはじめ、延喜民部式、塵添壒囊抄等の古き書どもに、多くは春部とかけり、又延喜神名式、拾芥抄、梅花無盡藏、新撰類聚往來等に春日部と、日文字を添て書るもあり、三國傳記、また三の丸天王の拜殿にかけたる元龜元年の鰐口の銘、同三年に奉納したる熱田の御寶物の天滿宮の畫幅等に春日郡とかける類も少からず、又今の文字を用る事も、ふるく四五百年より以往の事にて、大須の眞福寺に所藏せる十住心論聞書の終に、應永十六歲己丑、尾州春日井郡云々と見えたり、

〔張州府志 十一 春日井郡〕疆域　東西九里南北四里、東至三河加茂郡、東北至濃州可兒土岐二郡、西至海東中島二郡、南與愛智郡接壤、此郡廣大、統一百六十餘邑、

〔三代實錄 三十一 陽成〕元慶元年四月十六日丁亥、詔曰、○中略去正月卽位之日、但馬國獲白雉一、二月十日、尾張國言、木連理、閏二月二十一日、備後國貢白鹿一、○中略其葦田郡勿輸今年之調、春部郡及養父郡、並免當年之庸、

〔三代實錄 四十八 光孝〕仁和元年十二月廿九日己卯、尾張國春日部郡大領外正六位上尾張宿禰弟廣男安文安鄉二人、始自中男迄于不課、總計課役進調庸物、○下略

〔日本書紀 二十九 天武〕五年九月丙戌、神官奏曰、爲新嘗卜國郡也、齋忌(齋忌此云踰既)則尾張國山田郡、次(次此云須岐也)

丹波國訶沙郡、並食ㇾ卜、

〔續日本紀十七聖武〕天平感寶元年五月戊寅、尾張國山田郡人外從七位下生江臣安人多〇中略等、各獻ニ當國國分寺知識物ㇾ並授ニ外從五位下一、

〔尾張志〕愛知郡

當郡は東西六里、南北二里あり、參河國加茂郡碧海郡の境に至り、東南は知多郡に並び、西は海東郡に亘り、枇杷島川を限り、南は熱田よりはじめて、西の方遠く海際を極として、北は春日井郡を境とす、さて此地名の舊くものに見えたるは、熱田ノ緣起倭建命の御歌に、阿由知何多比加彌阿禰古波云々とよませ給へるをはじめにて、書紀の神代紀に、吾湯(アユチ)市村云々、萬葉集に年魚(アユチ)市方(ガタ)、又年魚(アユチ)道水(ノミヅ)など見え、續紀和銅二年五月の條に、愛知郡大領云々と記し、和名類聚抄この國の郡名を書る條に、愛智とあるも、阿由知と訓べく充られたるなれば、然訓べきなり、愛を阿由と訓は、同書相模國郡名に愛甲とある註に、阿由加波とあると同じ例也、然るを同書に、この愛智の字註に阿伊知とある伊字は、由の誤字歟、さらずは後人のさかしらに改たるならむか、たゞし諸國郡鄕の名を此抄に載らるゝ頃は、旣音便に轉へる地名もや、出來つれば、此處も然唱へならひつらむより、かく注せるにもあらむ歟、今より定かに分別がたし、すべて二字に限れる地名の文字は、奈良朝廷の御世の頃の詔命によりて、當時の博士等の考へ定められたるにて、いと正しき用格也、さて此郡名となれる本所の愛智といふ地、今は其名存らねばたしかに知られねど、書紀神代紀一書に、是號ニ草薙劍一、此今在ニ尾張國吾湯(アユ)市(チ)村一、卽熱田祝部所ㇾ掌之神是也とあるに據れば、熱田の古名卽吾湯市村なる事いちじるく、又古事記傳に、熱田といふ名義は、年魚市田(アユチタ)の約りたる名にもあらむかと見えたるも、さる事ぞかし、年魚市といふは、舊は大名にて、熱田より西北の方、則武(ノリタケ)一楊庄あたりより、星崎庄富部村あたり富部を今戸部と書は、二百年ばかりこなたの事也、までを、かけていへりしならむかとおもふよしあり、その故は、中世に

愛智郡司といふ司人ありて、卽愛智を稱號となしたるが、(中むかしには假名といひ、今は苗字といふなかくいふ也、)歷代不絕富部村に住り、

〔地名字音轉用例〕イノ韻ヲヤノ行ノ音ニ通用シタル例

あゆち　愛智(尾張郡)書紀ニ吾湯市(アユチ)、又年魚市(アユチ)、萬葉ニモ年魚市(アユチ)トアリ、然ルヲ和名抄ニ、阿伊知(アイチ)ト注セルハ、後ニ訛レル唱(ナリ、魚ノアユチモ、今人ハアイトモ云ニ同ジ)、愛(アイ)ヲアユニ用ヒタリ、

〔張州府志(七愛智郡)〕疆域　東西六里、南北二里、東至參州加茂碧海二郡界、東南接知多郡、西迄海東郡界長河、南枕于海、北至春日井郡界、

〔日本書紀(七景行)〕五十一年八月壬子、初日本武尊所佩草薙橫刀、是今在尾張國年魚市郡熱田社也、

〔日本靈異記(上)〕得雷之喜令生子强力子緣第三

昔敏達天皇(是磐余譯語田宮食國渟名倉太玉敷命也)御世、尾張國阿育知郡片蕝里有一農夫、作田引水之時、小細雨降、故隱木本、捽金杖而立、時雷鳴、卽恐驚、金杖而立、卽雷墮於彼人前、

〔續日本紀(四元明)〕和銅二年五月庚申、授外從五位上尾張國愛知郡大領外從六位上尾張宿禰乎己志外從五位下、

〔尾張志〕古今のさま

智多郡

和名抄延喜式をはじめ、万葉集等の古書どもに、みな智多とかきて、外の文字を用ひたる例なし、里老の云傳へに、むかし昔相丞筑紫に遷されさせ給ひ、其三男英比麻呂當郡にさすらへ給ひしが、其子五歲の時、この地に勅使を下されし事ありけるに、出むかひ腰をかゞめて會釋ありければ、勅使口ずさみに、をさな心にかゞみこそすれといひかけられたり、其子とりあへず、英比(エビ)の子は生るゝよりも親に似て、とつけたまひければ、勅使歸洛して、其趣を奏聞ありけるに、帝感じ給ひて、其地に生るゝものは智惠多し、智多郡と名づくべしと仰られ、其住居の地十六村を英比莊

と名づけて賜ひしとぞ、是久松氏の祖のよしいへりと、衣浦千鳥集といふものに書たれど、此郡名は、その比よりはるかむかしより呼びしなり、日本後紀に、延暦廿四年七月丙子、尾張國智多郡地十三町、賜中納言從三位藤原朝臣內麻呂とも見えたり、その里老の傳への附會なること知るべし、されども菅公の御子の當郡に住給ひ、其裔孫地士となり、久松氏と稱せしことは實事にて、久松の家譜等にも然いへり、慶長六年、性高院君當國拜領あらせられし時は、この智多郡は除きて七郡なりしが同十一年智多郡を御加增あらせられて、繼て源敬公拜領し給へり、

〔張州府志二十七智多郡〕疆域　凡智多郡、當州南而遠出海中、南北率可十三里、東西或一里、或二里餘、北接界於愛智郡、然實似孤絕之一島、西南三方隔海、與伊勢志摩及三州地相對、郡中南北連山、其山谷之間有民居者、俗謂之中通、其沿海之邑、謂之東浦西浦、與勢州海路七八里、或十里許、東浦與三州相去甚近、三里或一里、阿野竟以一川爲界、郡中凡一百四十餘村、

〔日本後紀十三桓武〕延暦廿四年七月丙子、尾張國智多郡地十三町、賜中納言從三位藤原朝臣內麻呂、

〔倭名類聚抄六國郡〕尾張國　中島郡　美和　神戶　拜師　小塞乎世木　三宅　茜部阿加奈倍　石作以之豆久利　日野　川埼

海部郡　新屋　中島　津積　志摩　伊福　島田　海部　日置　三刀　物忌　三宅　八田

葉栗郡　葉栗　河沼　大毛　村國　若栗

丹羽郡　五〇五恐百誤蠶　稲木以奈木　上春　丹羽　穗積　大桑　下沼　上沼　前刀　小弓　小野　小日

春部郡　池田　柏井　安食　山村　高苑　餘戶

山田郡　船木　主惠　石作　志誤　山口　加世　兩村布多無良　餘戶　驛家　神戶

愛智郡　中村　千電　日部　大毛　物部　厚田　作良　成海奈留美　驛家　神戶

智多郡　番賀　贄代　富具　但馬　英比

〔張州府志十八知多郡〕郷名　鈴置郷今矢合村是也　大屋郷今大屋村是也、見二于梅華無盡藏一、　大須郷今四貫村、野田村等是也、　內籠郷今奥村是也

〔張州府志二十海東郡〕郷名　藤浪郷今屬津島　秋竹郷　松葉郷

〔張州府志十四丹羽郡〕郷名　柳橋郷今小折村是也

〔張州府志十七葉栗郡〕郷名　大家郷今島村是也、一曰若栗郷、

〔張州府志十一春日井郡〕郷名　高田郷曾以二高田、比良、二子、久地野、井瀨木、片場一爲二高田六郷一、

〔張州府志七愛智郡〕郷名　熱田　御厨古書統二數村一稱二御厨郷一、其名村之傳絕而僅存、中郷、横井兩邑、是皇大神宮御厨舊址也、

〔張州府志二十七智多郡〕郷名　日永郷今森岡田、鍛冶屋、松原、羽根、南北粕谷、大興寺等諸邑是也、　常滑郷今常滑庄是也　山田郷今山田、大井等諸村是也　横根郷今横根、大島寺諸邑是也

〔釋日本紀十述義〕尾張國風土記中卷、丹羽郡吾縵郷、卷向珠城宮御宇天皇垂仁○品津別皇子生七歲而不語、傍問群下無能言之、乃後皇后夢有神、告曰、吾多具國之神、名曰阿麻乃彌加都比女、吾未得祝、若爲吾充祝人、皇子能言、亦是壽考、帝卜人覓神者日置部等祖建岡君卜食、卽遣覓神時、建岡君到美濃國花鹿山、攀賢樹枝造縵、誓曰、吾縵落處、必有此神、縵去落於此間、乃識有神、因竪社、由社名里、後人訛言阿豆良里也、

〔塵袋二〕一朴ハホクナリ、榎木ナリ、カヨウ說アリト云如何、○中略
尾張國山田郡山口郷ノ內有張田邑、尾州記云、昔此ノ間ニ多榛、俗謂之波里云云

〔尾陽雜記八〕下山田庄內志田見郷

定補　下司職事

平高家

右以彼人、爲下司職、可令執行庄務、所司住人等宜承知、依件用之、敢不可違失之、故下、

治承四年十二月二十三日

源朝臣

〔鹽尻七〕水野祖小河下野次郞雅繼　將軍家政所下

尾張國英比鄕內小河村一宮住人、可令早雅繼源法師法名覺妙爲地頭職事、

右任親父前下野守雅經法師法名雅貫去年八月十五日讓狀、爲彼職、守先例、可致沙汰之條、聊仰如件、

文永二年十二月七日

〔集古文書六院宣〕伏見上皇院宣尾張國愛智郡熱田社藏

熱田社領尾張國落合鄕總領主職事、令和與知範之外、於所職者相傳領掌不可有相違者、院宣如此、悉之以狀、

永仁六年九月一日　兵部卿花押

左進藏人殿

〔妙興寺文書〕をちあひの鄕內、一しき四丁がぶん御年ぐまいねむ四貫文のうち、六月壹貫文と十一月三貫文とうりやう御方へ、けたいなくさたしまいらせ候べき狀くだんのごとし、

ゑいきやう四年二月十四日　ふぢはらのより女花押

〔妙興寺文書〕賣渡　尾張國草部鄕內淸水寺田畠事

合

畠貳町漆段在坪付別紙　田地壹町漆段

右件所者、○中略現錢伍拾貫文仁限永代所令沽却藤原氏女千代松御前實正也、若付公私違亂出來時者、賣主藥師丸今者泰經可明申、猶以難治之時者、本錢仁付半倍之利分、三十ヶ日內仁可令糺返者也、仍爲後日之狀如件、

元德參年十二月廿日　　藤原泰經花押

〔蠹簡集殘編一〕

尊氏　花押

下本多右馬允助定、可令早領知尾張國横蕭鄕、同栗飯原鄕等事、

右爲勳功之賞所宛行也者、早守先例、可令領掌之狀如件、

建武四年八月五日

〔妙興寺文書〕沽却　尾張國中島郡北條美和鄕笥野田畠事

合壹丁　在所高田迫

右件田畠ハ、能親重代相傳所領也、依有直要用、報恩寺佛物用途拾六貫文、代々相副本證文等、限永代所令沽却于當寺也、於有限色者、任先例可有其沙汰、其外全無他役也、若背此狀、子孫等中致違亂煩者、可爲不孝仁也、仍爲後證沽劵之狀如件、

延文二年十月三日　　式部丞能親在判

〔妙興寺文書〕沽却　尾張國左手原鄕坪付注文在別紙事

右件所領者、能親重代相傳無相違地也、而依有直要用、相副外題安堵、限永代、現錢伍拾貫文仁所令沽却于妙興寺也、〇中略仍爲後證、契約之狀如件、

貞治二年癸卯十二月十三日　　能親花押

〔妙興寺文書〕宛行　妙興寺領牛野鄕內東本地半分地頭方年貢事

合

一所六町三段小　分錢貳拾壹貫貳百六十六文、百姓名、〇中略

應永九年二月日　　宗亨花押

牛野百姓等中

〔梅花無盡藏 雜文六〕尾州藥師寺化縁疏幷序

娑婆世界南贍部州東海道尾州路春日部郡砥山郷瑠璃山藥師禪寺化縁疏、幷叙茲匃叒某等敬白、

○下略

〔集古文書 判物十七〕法住院義澄公御判物 京師清和院藏

清和院領○中略尾張國荒木郷 ○荒木恐荒子誤、荒子在愛知郡、中略 等事、早任當知行之旨、領掌不可有相違之状如件、

延德三年八月廿四日

參議左近衛權中將源朝臣 花押

村里名邑

〔郡名一覽〕一尾張國 尾州南北三日 皆私領 八郡

高五拾貳萬千四百八拾石五斗壹升八合　九百八拾九ヶ村

●名護屋 東海道八十六里ヨリ 東山道百十一里ヨリ)(●犬山 尾州三万石 成瀨隼人正)(○大高 同一万石 志水甲斐守

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕尾張　八郡千八村 皆私領 高五十四万五千八百七十五石七斗九升三合

愛智郡百二十二村　春日井郡百八十九村　丹羽郡百十八村　葉栗郡四十一村

中島郡百六十七村　海東郡百三十八村　海西郡九十一村　知多郡百四十二村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

尾張　知多郡成岩(ナラハ)村、久(ク)村、常滑(トコナメ)村、海西郡鯏(ウグイ)浦村、春日井村、味鋺(アジマ)原新田、中島郡下津村、陸田(クガ)村、海東郡我原(ワイハラ)村、神守(カモリ)宿、

〔日本書紀 神代〕一書曰、○中略其蛇飲酒而睡、素戔嗚尊拔劍斬之、至斬尾時、劍刃少缺、割而視之、則劍在尾中、是號草薙劍、此今在尾張國吾湯市村、即熱田祝部所掌之神是也、

〔塵袋五〕人ノ心ノ大ナルヲ大魁ナルト云フハ何ナル義ゾ〇中略尾張國ニ大與ノ里ト云フ所アリ、舊記ニハ、大塊トカケリ根元ヲタヅヌレバ、卷向日代ノ宮ノ御宇ニハ、天皇〔景行〕國ニヲハシマシケル時、西ノ方ニ大ニモノヽワラフコヱノシケレバ、アヤシミヲドロキ給ヒテ、石津田連ト云フ人ヲツカハシテミセラルヽニ、カホハ牛ノゴトクナルモノヽ、アツマリテワラヒケルコヱノヲビタヾシカリケルヲ、此ノ石津田スコシモヲソルヽ心ナクシテ、劒ヲ拔テ一々ニ切テケリ、自是其ノ所ヲバ大斬(オホキリ)里ト云ヒケルヲ、後ニ謬テオホクレトハ云ヒナセルトカヤ、

〔日本靈異記中〕力女捔力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片縣郡少川市有一力女、爲人大也、名爲三野狐、〇中略時尾張國愛智郡片輪里有一力女、爲人少也、〇中略

力女示强力緣第廿七

尾張宿禰久玖利者、尾張國中島郡大領也、聖武天皇食國之時人也、久玖利之妻有同國愛知郡片蕝里之女人、〔是昔有元興寺道場法師之孫也〕隨夫柔儒、如練糸綿、績麻細㲲、而著夫大領、壹姝无比、

〇按ズルニ、片蕝里、今昔物語ニハ片輪鄕ニ作ル、

〔妙興寺文書〕永代讓渡所領事　尾張國中島郡長谷村內

一所一丁藤內太郎屋敷　一所四段藤內入道屋敷　一所四段倉垣內

右、所領者、宣俊重代相傳之所也、雖然又三郎秀宣爲養子之間、限永代讓渡所實正也、〇中略仍爲後日、讓狀如件、

延慶二年十二月三日　尾張宣俊花押

〔田文四〕尾張國林阿賀良村作田坪々名寄事

合

一林。村。余一左近名○中略

一阿。賀。良。村田代坪

合

一所二反小　元松　一所二反六十歩元松○中略平七二郎

元亨貳年六月廿七日○署名略

〔相州文書〕當寺○圓覺寺領尾張國篠木莊、富田莊、國。方。溝。口。兩村、○中略地頭職事、任去々年十一月八日官符、並關東安堵等、可令知行給之狀如件、

建武四年七月十日　左馬頭花押○足利直義

謹上　圓覺寺長老

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合○中略

壹貫五百文○中略　御蘭五郎左衞門尉殿尾張御。薗。村。散在段錢

〔張州府志一府城〕疆域　本隸愛智郡、名曰名。古。屋。莊、其村則今之府城、及郭南坊巷也、慶長中、移於此地、後爲大都會、疆域甚廣、東北至大曾根、杉村、乃屬春日井郡、北至田幡村、以深井丸御渠水爲界、西至枇杷島川、其間、榮、押切、兒玉等坊巷、總屬府下、西南至廣井村、第宅坊巷甚多、南至日置村、古渡村、街衢相接、東南至前津小林邑、槩而言之、則東西南北連亘數邑、實一大都會也、

〔尾張志〕名。古。屋。の事

此名古屋と呼地は、愛智郡のうち、北の極によりて、舊は山田郡に隣れる一村里なりしが、今は四至いと廣く、豐饒繁榮の一都會となれり、東の方は古井村、杉村、大曾根村に亘り、南は前津小林村、廣井村、日置村、古渡村に續き、西は中野高畠村、押切村、榮村、枇杷島村に至り、北は田幡村、西志賀村、

兒玉村をかぎりとせり、此内東西縱横の坊巷、甲乙大小の道路連綿として、神社寺院たち交り、士農工商の家々軒をならべ甍をつらねたる、その數いくばくといふことをしらず、御城の西十町ばかりに名古屋村あり、是此地の、舊邑にして、上にいはゆる四至の廣き大名となれる本所なり、さてこの名古屋といふ地名は、何ごろより呼そめしにか定かならねども、大須眞福寺の藏書のうち、貞治三年にかけるものに、尾張國那。古。野。莊安養寺今の天王坊と記したるをはじめにて、應安六年應永十一年など書るものに、並那古野とあり、熱田宮神寶の刀の彫文字、大永二年八月云々とあるには、今の如く名古屋とかけり、名古屋と書事は、寛永已後の定り也、凡て那古野、名古屋など三字にかくは假名書なれば、いづれにてもあるべく、さま〴〵心々にものしたるも、古風の存れるならはし也、

〔尾張志〕熱。田。

往古は郷名村名にてもなく、たゞ神宮御名よりうつりて里の名ともなりしなり、其故は日本書紀神代卷の八岐大蛇退治の條の一書に、其蛇飲酒而睡、素戔烏尊拔劒斬之、至斬尾時、劒刃少缺、割而視之、則劒在尾中、是號草薙劒、今在尾張國吾湯市村、卽熱田祝部所掌之神是也とえるし、かくあゆち村といひ、熱田の祝部とあるにて知るべし、こゝぞ郡中の本處にて、廣く吾湯市村といひしを、成務天皇の御時、諸國の郡縣を定給ひしかば、村名を郡名におよぼして、愛智郡とはなりし也、舊事紀、古事記、六國史をはじめ、普く古書にみな熱田とかけるゆゑよしは、寛平二年十月十五日書る尾張守藤原村椙朝臣が熱田緣起に、宮簀媛命のはからひにて、社の地を占ひ、草薙の神劒を遷し奉らむと衆議ありて、その社の地を定られしに、其處に楓樹一株ありしが、自然に炎燒して、その樹水田の中へ倒れ入、光焰不銷して、其田あつかりければ、熱田と名づけしよし記したるによれり、この說御鎭座の舊地を考ふるに、少したがへるふしあれど、尾張風土記の古說なればい

かゞはせむ、先その旨に隨ひつ、和名類聚抄には、諸國の郷名のうちに、文字を替へて厚田と書り、さて武家執政の世となりては、京都より鎌倉へ通ふ道筋にて、今の如く旅宿もありしよし、吾妻鏡、源平盛衰記等をはじめ、古軍書紀行などに見えたれど、今の繁昌のさまには及ばざりし也、當所地藏院の文正元年五月朔日の古證文に、今道東脇等に住みしと覺しき人の名見えたれど、皆新地なるべく、享祿の宮圖にも、南の方は陸地至て少く、傳馬町のあたりは船のつく濱ばたのやうにおしはからる、されば三四百年已前までは家並は多からず、其後追々海へ築出し、町家どもなりしかども、二百年以前には家作も麁略に、旅宿などもはか〴〵しからずありしにや、明暦二年に印行したる東海道の道中記といふものに、五十三驛のよしあしをことわりて、なるみ宿惡し、みや宿惡しと書たり、今をもて見れば、其五十三驛のうち、此宮宿にまされる驛はさらになきにて、古今の變革を知るべし、

〔尾張志〕清須。

凡四至の境内ひろく、其地三郡にかゝれり、東は須賀口村を本郷とし、春日井郡に屬けり、東北は市場村、西北は六角堂村、共に中島郡に屬し西は廻間村、西南は土田村、ともに海東郡とす、是を清須五ケ村と稱し、其中央清須の町並也、○中略犬山は丹羽郡につき、津島は海東郡につきて、餘郡にかゝはらざる地とは例を異にす、永和の頃より、當國の守護、當所に城を築き國府として政務公事を行ひしなり、されども斯波武衞家元祖高經より、五六代は京都すまひにて、當城に守護代を置て在國なく、又土岐氏より尾張の守護を兼しときは、美濃の川手に居住して、猶更此清須には代官も置ざれば、守護の在城うちつゞかず、

〔張州府志〕十清洲建置沿革　昔王政之盛時、國衙在松下、大守當任、開府於此、中世皇綱紐解、號令不行、源右幕下爲總追捕使、諸國置守護、覇業丕興、國衙迄廢、建武之後、足利氏執權、以斯波氏高經爲尾張、

莊保

越前、遠江、三州太守、其子孫代々領之、

〔張州府志二十三海東郡〕莊名　松葉庄　江加見庄　戸田庄　富吉庄　蟹江庄　乙ノ子庄　蔭保庄

秋竹庄　門間庄　日置庄　中切庄　牛之庄

〔張州府志二十六海西郡〕莊名　茨木庄　日置庄　早尾庄　富安庄　市江庄　長岡庄

〔張州府志十八中島郡〕莊名　中島莊　今寄莊　野ノ宮庄　荒木庄　濱田庄　眞清田庄（或作松降庄）　國衙庄

中庄　河内庄　長岡庄　高北庄　生出庄　小平庄　河北庄　熱田庄　重田庄　丹羽庄

立部庄　鯰庄　對手庄　赤目庄

〔張州府志十七葉栗郡〕莊名　上門直莊　平泉莊　村久野莊

〔張州府志十四丹羽郡〕莊名　稻置莊　小弓莊　岩田莊　虫鹿莊　柳莊　高雄莊　井上莊　江城莊

淺野莊　河上莊

〔張州府志十一春日井郡〕莊名　小田井莊　山田莊（古郡山田郡者隷于此）　朝日莊　熊莊　一色莊　船場莊

田中莊　醍醐莊　篠木莊（一作篠城）　柏井莊　安食莊（一作安敷）

〔張州府志七愛知郡〕莊名　名古屋莊　市部莊　長根莊　井戸田莊　星崎莊　鳴海莊　八事莊

一柳莊　則武庄　日置庄　山田庄

〔張州府志二十七智多郡〕莊名　大高庄　江庄　鳴海庄　英比庄　荒尾莊　木田莊　薮莊　寺本莊

大野莊　西枳豆志莊　野間莊　内海莊　鴻莊　但馬莊　花房莊　常滑莊　東枳豆志莊　田

島莊　河和莊　東浦莊　内鳴莊　土田莊

〔朝野群載七攝籙家〕補二御庄司一

右大臣（忠實）〇藤原家符　尾張國富田莊。。。

大膳少進平季致

右人補任下司職、可令執行庄務之状、所仰如件、宜承知依件行之、故符、○中略

康和五年二月十日

〔尾陽雜記 六〕請被以圓覺寺爲御願寄附尾張國富田庄。并富吉加納、上總國畔蒜庄内龜山鄕供給寺用状、

右茲者、爲鎭護國家、紹隆佛法、究華麗所草創也、○中略以件精舍爲御願寺、放寄田園、永備寺領、○中略時宗誠恐頓首謹言、

弘安六年七月日　相模守平朝臣時宗伏

〔相州文書〕當寺領尾張國富田莊事、被召返所被下中納言三位局也、○阿野廉子綸旨之○此間恐有誤脱可被存知者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年八月十六日　皇太后宮權大進花押

〔圓覺寺文書 一〕端書

富田下庄領家書狀（建武五八六下之、□□方與奉之、）

尾張國富田下庄、建武四年々貢事、申談圓覺寺方候之間、止訴訟了、可得御意候哉、仍執達如件、

八月五日　沙彌元□

謹上　藤少納言殿

〔尾陽雜記 八〕下八條院御領尾張國山田御庄内志談百姓等所補鄕司職事

平隆家

右人爲鄕司職、令安堵百姓於有限公事等、無懈怠可令勤仕者、百姓等宜承知、敢勿違失、故以下、

壽永三年二月十一日

〔吾妻鏡 三〕壽永三年元○元暦元年四月六日甲戌、池前大納言並室家之領等者、載平家沒官領注文、自公家

被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言沙汰〇中略　眞淸田庄〇尾張　已上八條院御領〇中略

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行勤狀如件、

壽永三年四月六日

〔賀茂注進雜記神領下〕同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

尾張國　高畠庄　玉井庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、儻可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月廿二日癸卯、故左典厩義朝墳墓在尾張國野間庄、無人于奉訪沒後、只荊棘之所掩也、而此康頼任中赴其國時、寄附水田三十町、建小堂、令六口僧修不斷念佛云云、仍爲被酬件功、如此云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年十月廿五日丙午、以尾張國御家人須細治部大夫爲基、爲案内者、到于當國野間庄、拜故左典厩廟堂、〇平治有事、奉葬于此所云云、給、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年〇嘉禎元年七月七日戊辰、近江入道虚假所賜之承久宇治河先登賞、被付神社等之間、今日有其替沙汰、被成御下文、依爲殊勳功、被載其詞、

將軍家政所下　尾張國長岡住人
補任地頭職事
前近江守信綱法師
右人承久兵亂宇治河勳鋒之勸賞、豐浦庄之替可爲彼職之狀、所仰如件、以下、
文曆二年七月七日　案主左近將曹菅原

〔勸修寺文書二十一〕尾張國甚目寺莊事、如關東狀者、非弃捐之義歟、早可領掌之由、可令傳仰吉祥女者、天氣如此、仍執達如件、
元亨三年二月十三日　柳原資明 中宮大進判
謹上　按察法印御房

尾張國甚目寺莊、去々年の勅裁にまかせて知行せらるべきよし、仰下され候也、
正中二年三月十三日　萬里小路季房 左少辨判
吉祥どのへ

〔園太曆〕觀應二年十一月二十六日、朝間大藏卿來、仙洞御領元弘御沙汰之次第談之、今日具忠朝臣爲示聞也、所詮長講堂、法金剛院領並龜山院御讓五箇所院御方御分、室町院御領半分、法皇御分等被進給旨云々、
長講堂領　尾張國黑田莊〇中略
右所々御管領不可有相違者、天氣如此、以此旨可令申沙汰給、仍執達如件、
元弘三年六月七日　左中將忠顯
謹上　高三位殿

〔三寶院文書〕雜訴決斷所牒　尾張國衙

醍醐寺三寶院結緣灌頂領當國安食莊預所道親、當莊內田畠荒野等、同國味鋺鄉左衞門大夫子息太郎同舍弟三郎打越堺、致押領由事、本解幷具書

右、爲被尋問子細、來二十日以前、可令參洛之由、相觸交名輩、可被申散狀者、以牒、

元弘三年十一月五日　大外記中原朝臣

右少辨藤原朝臣 花押

〔三寶院文書〕雜訴決斷所牒　尾張國衙

道觀申安食西莊濫妨事

右、止前公文國政以下輩濫妨、可令全所務之由、宜令下知道親者、以牒、

元弘三年十月九日　大外記中原朝臣

右中辨藤原朝臣 在判

〔圓覺寺文書 一〕花押

尾張國篠木莊內石丸保野口村國衙所務事、爲請所圓覺寺領知、更不可有相違、於御年貢者、任員數無懈怠可被致其沙汰之由、國宜所候也、仍執達如件、

建武元 六月卅日　散位光延 奉

圓覺寺僧侶御中

當寺領尾張國富田篠木兩莊事、早止中分之儀、守濟例、可濟領家年貢者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年七月十一日　左中將 中院具光

圓覺寺長老禪室

〔東大寺文書 書七之十二〕當寺領平野殿庄、攝津國垂水庄、尾張國大成庄、○中略 等、知行不可有相違之由、院宜所候也、仍執達如件、

建武三年十二月八日　參議花押○四條隆蔭

謹上　東寺供僧御中

〔園城寺文書〕近江國山賀庄猷覺跡伊勢國丹生庄佐□守跡□□尾張國枳○頭○子○庄○名越遠江入道跡事、當□□營之間、所ㇾ令ㇾ寄附ㇾ也、守ㇾ先例ㇾ可ㇾ致ㇾ沙汰ㇾ之狀如ㇾ件、

建武四年二月晦日　源朝臣花押○足利尊氏

園城寺衆徒中

〔守部文書〕熱田太神宮領山田郡○尾張內野田村、幷柏○井○莊○內十五坪、及玉野村等、各半分代官職事、右幡屋部○守大夫政繼、任ㇾ社家往古例ㇾ、各半分可ㇾ令ㇾ知行ㇾ之狀如ㇾ件、

建武四年卯月五日

〔鹽尻七〕一尾州木賀崎長母寺尊氏公證狀井寄附賢按、無住法師の寺なり、○中略

寄附　尾張國木賀崎長母寺當國狩○津○庄內山眼森[illegible]二郎事

右爲ㇾ當寺與隆所寄附所之、守ㇾ先例ㇾ可ㇾ令ㇾ致ㇾ沙汰ㇾ之條如ㇾ件、

文和三年五月廿五日　正五位源朝臣在判

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合

五貫八十文　峨嵯大雄寺領尾州味○岡○庄○段錢　貳貫五百十六文　大內五郎殿尾州靑山段錢　三貫三百九十文　等持寺領尾張國中○庄○段錢　八貫二百六十文　萬壽院領尾州味○岡○新○庄○段錢　一貫七十六文　藤民部

又六郎殿尾州田中○庄○段錢　貳貫八十三文　妙法院御門跡領尾州一橋余田段錢　六百文　雅樂備中入道殿尾州長○岡○庄○段錢　七貫八百六十七文　武田兵庫頭殿尾張國坂○田○庄○同高島村段錢　四貫八百文　加治豐前守殿近江國比江鄕前尾張國狩○津○段錢○節略

〔張州府志十八中島郡〕保○名○　山口保　吉松保　朝宮保俱見ㇾ于妙興寺藏書

〔集古文書五十讓狀〕嘉暦二年讓狀尾張國中島郡妙興寺藏

讓渡　尾張國中島郡保々寺領等內吉松保散在田畠等事

合　吉松保內散在田畠等員數坪付注文在但松口今除三町四

右散在田畠等者、子息口若丸限永代所讓渡也、致子々孫々無相違可令知行者也、於領家年貢關東御大事等、任總領友口旨、無懈怠可有之其程何何所讓渡狀如件、

嘉暦三年九月五日　　沙彌歸覺押

〔妙興寺文書〕寄進　正福庵田地事

合伍段者

在管尾張國中島郡山口保內在所下切須賀堤內也　四至限東國分領　限西當領　限南類地　限北類地

右件田地者、高階朝臣爲現當二世祈禱所、奉寄進山口保內乾一色正福庵也、而勘料錢貨拾貳貫伍百文神氏女辨之間、爲名主職永代可令知行者也、於色陸拾文津々每年無懈怠可令備進彼庵者、自公家武家縱雖出來何樣御德政、佛陀寄進之上者、至子々孫々不可有悔返之儀、將又就公私不可宛天下加徵万雜公事、爲一圓不輸地、神氏女可令知行之、若背此狀者、寺家者本主致違亂煩者、以本物一倍三十ヶ日內可令糺返也、仍爲後代龜鏡證文之狀如件、

嘉暦四年己巳六月二日　　散位宗顯花押

〔妙興寺文書〕寄進　報恩寺

尾張國中島郡朝宮保內畠地事

合參町者　一所貳町參段　阿古江名　一所七段　孫次郎名

右件畠地者、宗顯重代相傳之所領也、而爲現當二世善根、永代所奉寄附于當寺也、於領家年貢者、每年參町分仁五百文可有其沙汰也、至于地頭方夫役以下公事等者、不可宛申之、然者寺家一圓仁可

藩封

田數石高

令知行給也、若子々孫々中、背此狀致違亂煩者、可爲不孝之仁者也、仍爲後證寄附之狀如件、

觀應貳年辛卯六月日　民部權少輔宗顯花押

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合〇中略

壹貫六百文　北野社領尾張國下淺野保段錢　貳貫五百五十八文　飛鳥井殿家尾張國竹鼻和鄕井小熊保段錢〇節略

〔慶應元年武鑑〕尾張元千代樣　六十一万九千五百石御在城尾州愛知郡名古屋、江戶ヨリ道法東海道八十六リ廿一町、東山道百十一里餘、

當國清須織田信長居城、慶長五、松平薩摩守忠吉卿、同十五、移地於名古屋、命諸州牧伯築城、尾張大納言義直卿以後御代々被領之、〇節略

〔倭名類聚抄五國郡〕尾張國〇略　註　管八田六千八百二十町七段三百十步

〔運步色葉集〕尾張〇中略　八郡、田數一万六町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕尾張近上　八郡(中略)田萬千九百卅町

〔海東諸國記〕尾張州　郡八、水田一萬一千九百四十町、

〔鹽尻五十五〕一秀吉檢地文祿元年　尾張國五十七万一千七百二十七石

〔和漢三才圖會七十一尾張〕八郡　高五十二万石

〔官中秘策二〕尾張國　九郡〇中略

石高五拾貳万千四百八拾石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

尾張國皆私領　一高五拾四万五千八百七拾五石七斗九升三合

〔張州府志二十四海東郡〕財賦戶口　公領高七万六千二百一十一石五斗七升三合　公領外迫間神明祠領高一十五石〇公領外計二千四十九石七斗八升、中略、　通計高七万八千二百六十一石三斗五升三合

〔張州府志二十六海西郡〕財賦戶口　公領高一萬二千一百三十六石八斗一升二合　增高二百一十六石九斗八升七合　公領外東保祭祀領津島天王舟祭神事者〇中略　高五十三石〇公領外計一百七石六斗二升、中略、　通計一萬二

出擧稻

千二百四十四石四斗三升二合

〔張州府志十九中島郡〕財賦戸口　公領高七万千七百四十八石一斗五升三合　公領外國府宮大國靈神祠領高一百二十四石九斗八升七合（○公領外計六百十八石二斗七升七合、中略、）　通計高七万八千三百六十六石四斗三升

〔張州府志十七葉栗郡〕財賦戸口　公領高一万三千五百三十七石八斗四升三合　公領外前飛保曼陀羅寺領高二百三十一石　通計高一万三千七百六十八石八斗四升三合

〔張州府志十五丹羽郡〕財賦戸口　公領高五萬七千九百二十九石四斗四升四合　公領外二宮大縣祠領高一百三十六石六斗一升七合（○公領外計一千五十七石四斗三升一合。中略。）　通計高五万八千九百八十六石八斗七升五合

〔張州府志十一春日井郡〕財賦戸口　公領高一十萬四千九十石五斗六升六合　公領外清洲山王祠領高二十石（○公領外計八百七十一石二斗五升五合、中略、）　通計一十万四千九百六十一石八斗二升一合

〔張州府志八愛智郡〕財賦戸口　公領高七萬四千三百四十石五斗一升七合（往古檢地沃瘠面計其田所登一年之米、製之米以爲高、郡將來爲定法也、大率公入十之四、私取十之六、下倣之、）　公領外天王坊領高三百石（○公領外計二千七百六十三石六斗二升八合、中略、）　通計高七万六千一百一十四石一斗四升五合

〔張州府志二十七智多郡〕財賦戸口　公領高六万六千二百三十三石三升四合　公領外大野光明寺領高六石七斗八升六合（○公領外計四百三石五斗八升一合、中略、）　通計高六万六千六百三十六石六斗一升五合

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻（○中略）

尾張國正稅公廨各廿万束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、修理地溝料三万束、救急料二万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕尾張國（○略）　管八（中略）（正公各二十萬束、本稻四十七萬七（七恐二誤）千束、雜稻七萬二千束、）

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國正稅帳

尾張國司解　申收納天平六年

合八郡、天平五年定穀貳拾五萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合、

　不動壹拾捌萬陸仟肆伯伍拾陸斛參斗陸升玖合

　動用漆萬壹阡玖伯捌拾參斛捌斗壹升貳合

正稅穀貳拾肆萬玖阡肆伯參拾壹斛陸斗陸升陸合

郡稻穀捌仟伍伯肆拾捌斛貳斗肆升伍合○中略

中島郡

天平五年定穀參萬玖阡捌拾漆斛漆斗玖升捌合

　不動貳萬玖阡參伯壹拾肆斛玖斗參升肆合

　動用玖阡漆伯漆拾貳斛捌斗陸升肆合

正稅穀參萬漆阡肆伯貳拾肆斛參斗玖升捌合

郡稻□仟肆伯□□參斛參斗陸升○中略

葉栗郡

天平五年定穀壹萬捌阡陸伯伍拾漆斛捌斗漆升正稅

　不動壹萬壹阡參伯漆拾貳斛伍斗漆升

　動用漆阡貳伯捌拾伍斛參斗

穎稻捌萬貳阡玖伯玖拾漆束伍把

正稅參萬肆阡捌拾肆束貳把

□稻貳萬阡漆伯漆拾捌把

□□稻壹萬伍阡□拾參束

國產貢獻

□用稻伍阡壹伯捌拾貳束伍把〇中略

天平六年十二月廿四日〇署名略

〔尾張國郡司百姓等解〕申請官裁事

請被裁斷當國守藤原朝臣元命、三箇年〇自寬和二年至永延二年内責取非法官物、幷濫行横法卅一箇條愁狀、

一請被裁斷例擧外三箇年内、收納加徵正稅卅三萬二百卅八束、息利十二萬□□百七十四束四把一分事、

右正稅本穎式數卅七萬二千四百束、除減省之遺定擧廿四萬六千七百十束、明錄稅帳、是則一朝之輔弼、百姓之依怙也、然而則凋弊之民、負正稅而不耕田疇、富勢之竈、領能田以不請正稅、仍爲存公平、同以息利七萬三千八百六十三束、率於國内力田之間、當任守元命朝臣、三箇年所納既以繁多也、輙不可勝計、所以何者、窮民之身纔雖致究進之勤、或號見納、或稱未進、暗擄掠數多之財物、依此呵責、人民逃散、累彼騷動、土浪不靜、加之郎等從者如雲散滿於部内、居胎之類如蜂移住於府邊、此等寔雖隔山川之境程、爲思京洛之古鄕、猶貪當國土產、因之郡司迷心神、百姓失爲方、更忘萬民之撫育、只存純一身之利潤、絓愁如此之間、專無判斷之心、而恐朝家貴公之威、卷舌呑音、敢不言、終無據容身、將流冗於他國、是以吏富國貧物盡民失夭孽之起莫不由此、望請裁斷停止件元命朝臣、被拜任良吏、將留人民之浮跡矣、〇中略

以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、〇中略　仍具勒參拾壹箇條事狀、謹解、

〔儀式　四〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國有〈符脩國〉

應造新器〇中略

尾張國　甕瓱各八口　瓫五十口　高坏卌口　𤭯十口　中坩十二口　短女坏四十口　御酒瓶

八口　大𤭯十二口　小坏十二口　飾𤭯八口　𥓔十六口　片坏卅口　酒垂八口　瓦碓八口

筥坏卅口（○中略）　已上人給料

〔延喜式七神祇〕踐祚大嘗祭

尾張國所造、甕八口、缶五十口、筥坏卅口、𤭯八口、瓫十口、短女坏卅二口、酒瓶八口、𨋳十六口、片坏卅口、陶臼八口、飾𤭯八口、高盤卅口、坩十二口、都婆波十二口、酒盞十二口、酒垂八口、

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進（○中略）　樽（中略）尾張（中略）伊豫十五箇國各二合、○中略）　青木香二百七十斤（尾張國一百六十斤）

〔延喜式二十三民部〕凡諸國所進兵庫寮修理甲料馬革者、尾張六張、（○中略）

年料舂米（○中略）　尾張國（大炊一千八十石、糯廿石、○中略）

年料租舂米（○中略）　尾張國（一千石○中略）

年料別貢雜物（○中略）　尾張國（筆一百管、紙麻九十斤、青木香一百六十斤、馬革六十張、○中略）

諸國貢蘇番次（○中略）　尾張國十五壺（五口各大一升、十口各小一升、○中略）　右八箇國爲第一番（丑未年○中略）

年料雜器　尾張國瓷器、大椀五合、（徑各九寸五分）中椀五口、（徑各七寸）小椀□（徑各六寸）茶椀廿口、（徑各五寸）盞五口、（徑各四寸七分）中擎子十口、（徑各五寸）小擎子五口、（徑各四寸五分）花盤十口、（徑各五寸五分）花形鹽坏十口、（徑各三寸）瓶十口、（大四口、小六口、○中略）

右兩國所進年料雜器、並依前件、其用度皆用正稅、（○中略）

交易雜物（○中略）　尾張國（白絹十二疋、絹百五十疋、油三石、樽二合、苧一百五十斤、鹿革廿張、鹿皮十張、鹿角十枚、薭子五石、胡麻子四石、荏子四石、鹿角菜三石、凝菜卅斤、於胡菜卅）斤、

〔延喜式二十四主計〕尾張（○中略）　右廿五國中絲（○中略）　尾張（○中略）　右廿九國輸絹（○中略）

尾張國（行程上七日、下四日、）

調、兩面八疋、冠羅、鼠跡羅各一疋、二窠綾廿疋、三窠綾五疋、七窠綾三疋、薔薇綾五疋、帛二百疋、緋絲、縹絲、綠絲各卌絇、皂絲廿絇、橡絲二百卌二絇七兩二分、生道鹽一斛六斗、（與調鹽共進、）　自餘輸絹絲鹽、庸、

韓櫃十五合、(塗漆著鏁五合、白木十合、)白餘鮑(米顚)、 中男作物、麻一百斤、黃蘗二百斤、紙、紅花、胡麻油、雉腊、雜魚腊、煮鹽年魚、雜魚鮨、

〔延喜式(宮内三十一)〕諸國例貢御贄(○中略) 尾張國(雉腊)

〔延喜式(典藥三十七)〕諸國進年料雜藥(○中略)

尾張國卅六種、黃芩十四斤、芎藭廿二斤、白蘞十三斤、前胡廿斤、白芷十斤、枸杞廿斤、柴胡、玄參各十二斤、王不留行、牛膝、地楡、升麻各十斤、昌蒲一斤、獨活十六斤、蛇銜大黃各五斤、桔梗六十六斤、白朮卅斤、藍漆五斤、龍膽八斤、大戟十一斤、五茄皮、伏苓各七斤、杜仲、厚朴、伏神、茵蔯蒿各六斤、黃蓍、蛇脫皮各四斤、夜干廿四斤、連翹八斤、桑螵蛸二兩、干地黃六斗四升、榧子四斗、署預、海蛤各一斗、麥門冬四升、桃人二斗九升六合、蛇床子一升、菟絲子、紫蘇子各五升、山茱萸大一斗五升、亭藶子二升、半夏大五升、蜀椒二斗五升八合、靑木香十八斤、

〔延喜式(内膳三十九)〕年料(○中略) 尾張國(雜二擔廿壺、白貝二擔四壺、鯉鮨二擔四壺、雉腊納二十八籠、別六翼、)

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、(○中略)宅常(擔集)諸國土產、貯甚豐也、所謂(○中略)尾張(杷ノ)、

〔拾遺和歌集(七物名)〕をはり米　すけみ

池をはりこめたる水多かればいひの口よりあまるなるべし

〔庭訓往來〕尾張八丈、信濃布、

〔毛吹草(三)〕尾張

綿　藍玉　蒲(ホワ)黃　大根　同干大根　那古屋藻(セイラ)魚　南方(ナンバウクヌキ)鑪　淸須政常小刀

〔和漢三才圖會(七十一尾張)〕尾張　土產

大根(宮重村、及木曾、大根長大而長、)　干瓢(木曾)　檜　白木　椹　阿須奈呂(檜之類)　眞珠(下品不ㇾ如二于伊勢產一)　瓷器(瀨戶)

〔佳境遊覽(二)〕名產

海鼠、〇和漢三才圖會 〇中略 奥州松前津輕爲上、其大者尺有餘、尾州熱田、三州栅島三浦、武州本木、讃州小豆島皆得名、〇中略

海鼠腸、香美不可言 多春爲珍肴、或曰近世三州栅島、有異僧、守戒甚嚴、而調和於腸醤者最妙、浦人取腸、洗淨入盤、僧窺之、腸之多少、安白鹽投于腸中、浦人用木箕、勾收之、經二三日而嘗之、其味不可云、今貢獻者是也、故以參州之產爲上品、後僧有故移于尾州、而調腸醤、以尾州之產爲第一、皆稱奇矣、

藻魚　熱田漁人網捕之、而出于名古屋市鄽、此魚眼不大、鰭長無岐肉、淡白脂少、味甘平、大近于尺、諸病不妨、最賞之、

梭子魚腸　作醢名志築、自淡路志築始出得名、今當國及勢州之產亦佳也、

牡蠣　自熱田魚市送名府魚店售之、味甘美也、

眞珠　謂尾張眞珠、則蜊貝珠也、其珠有大小、與伊勢眞珠不異、但無光澤、如魚眼玉、〇中略

鹽　在熱田鳴海之間、星崎村是謂本州前濱鹽、白鹽也、　延喜式曰、尾張國生道鹽一斛六斗云々、

按、生路村石濱村以南而海邊地也、注日煮海鹽者宜也、生路知多郡英比庄內也、

白柹ツルシガキ、又枝柹　濃州蜂屋土產也、然元和年中爲尾州領、仍今爲尾張產矣、本艸所謂牛心柹是也、

饅頭蒸物也、謂之蒸菓子、在城府本町、桔梗屋、兩口屋、鋼屋、鶴屋、製之、得名也、鋼屋今斷絕、〇中略

地黃圓　張氏製之、異于他良藥也、　祖父壽山振甫者、大明國產、入朝止住本町龍口下、而奉謁光義邦君、所謂尾州唐人醫師是也、和俗呼中華人稱唐人、漢唐之數最久遠也、故習俗薰染、至于今不去稱舊號而已、

烏犀圓　城市本町六丁目小見山宗甫所製、男女一切中風之妙藥也、

奇妙丸　同所一丁目唐木屋花井製之、小兒一切疾病之佳藥也、

慈姑屋膏藥　同所十丁目水野勘左衞門製之、從寬文元年以來沽弘諸州也、

酒古新燒酎　諸白味淋酒　次酒白酒　中汲　長者町和泉屋、傳馬町笹屋、釜屋、田島屋、京町通福德屋等製之、得名、但白酒南京製方、七間町小川屋製之、○中略

紙　城西格紙司辰巳市右衛門製諸紙、而捧當國太守、所謂奉書、杉原、鳥子直紙、此外打曇雲紙、墨流等諸紙、則白紙而施文采者也、辰巳氏則國主累代之紙漉、而賜月俸若干、凡造紙謂漉、

土圭　自鳴鐘也、和俗謂時計、元由阿蘭陀來於當府、津田助左衛門得名也、賜年俸若干、

刀劒鍔　菊與　戶田稱彥左衛門、櫻稱山吉兵衛、得名今斷絕也

刀劒藤原政常納、土氏稱曰美濃守、祖父相模守入道在于淸洲城下、至慶長年中移任名府本町、食邑百石、賜下河村、信高稱伯耆守、初信照伯州入道閑遊孫也、平貴道丹羽氏、阿波守源遣通號信濃守、壽命法橋弘安齋、其子今稱丹後守、藤原壽命或稱尾州彥五郎、肥後守泰光代熱田氏命相模大掾祖地氏　鳴海氏雲豐前守源

鐙　南方七間町瓜生氏鍛冶屋町常陸大掾也　鈫　臺町肥前守　此等皆以當國之名產也、　本州人物志云、鍛冶藤原政常、奈良兼常之裔、舊號千手院、濃州武蓺郡上有知村之住人上野介國常末葉、相模守政常移本州淸洲府、作刀劒、世傳號稱政常、又鍛冶藤原信高與政常同祖濃州武蓺郡下有智住人三阿彌、陸奧守兼高後葉、伯耆守信高移居淸洲府以來、是又代々稱信高、伯耆大掾入道閑遊孫、今稱信照、是黃門綱誠卿所賜之名也、右二家自武衛本州進止之時仕司家、慶長十五年、移居於名古屋、受俸祿、

材木　角物　丸多　樽　槍　明檜　椹等

總而材木樽等、諸木皆以信州木曾之產也、尾張全無深山矣、然寬永年中、木曾山爲尾州領、故今稱尾州之產、白鳥材木場所有諸木者、國主城郭之用木也、大猷院公○德川家光寄斯山於尾張家、爲靈仙院大夫人粧田、俗女中所領之地稱粧田、言爲女中脂粉之料義也、

石　凡當國出自菱野村山口村者、悉白石也、村民農業之暇事石工、故其用而斫取之、似攝津國御影

山之石、稱御影石、

〔續日本紀 五元明〕和銅五年七月壬午、令○中略尾張○中略等二十一國、始織綾錦、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶五年十一月己亥、尾張國獻白龜、

〔三代實錄 三十一陽成〕元慶四年四月十六日丁亥、詔曰、○中略二月十日尾張國言、木連理、閏二月二十一日備後國貢白鹿一、○中略宜復尾張、但馬、備後等三國百姓當年徭役十日、○中略主者施行、

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年六月二日甲辰、伊賀、伊勢、尾張○中略等十九國貢絹、麁惡特甚、不如昔日、勅譴國宰、採取正倉舊樣絹、毎國賜一疋、依舊樣作、

〔尾張國郡司百姓等解〕申請官裁事

請被裁斷當國守藤原朝臣元命、三箇年○自寛和二年至永延二年内責取非法官物幷濫行橫法卅一箇條愁狀、○中略

一請被裁斷所進調絹減直、幷精好生糸事

右兩種貢進官物、定數具錄官帳、但疋別所當料田、先例二町四段、代米四石八斗也、然而絹實所進之日、所定納直、匹別一町餘也、亦至精好之生糸者、責取當國之美糸、織私用之綾羅、買畢他國之麁糸、備貢官之例進、抑蠶養之業、進退更不任心、或國吏令得蠶養、而不登年穀、或國宰令登年穀、以不宜蠶養、而當任守元命朝臣、共不可也、是只絹減直、糸精好所致歟、專城之吏、忠節已空、分憂之職、國宰政永絕、所謂傾國驕害人蠹、豈過於斯、望請蒙裁糺、被召問其旨、兼亦被改任良吏矣、

一請被裁斷號交易誣取絹手作布信濃布麻布油茜綿等事

右交易雜物等、於絹者納官年料無限、而國内所加徵、漸及數千匹、即始自五月中旬、以九月之内令究進、爰所取絹直四五十束、手作布直八束已上、信濃布直五六束、自餘雜物直更不幾、又以減收、殘號減直、如本宛結絹布直、加以勸徵之使、引率數多從類、所責取土毛、疋別米一石五六斗、布端別四五斗、自

餘雜物准本物過三四倍也、何況供給裝束費、不可輙勝計、拼濟如此非法之物之間、沽却先祖之永財、滅子孫之存命、賣代夫妻之衣裳、失愛子之寒温、凡依一身之貪利、遂絕百姓之世途、于時天朝人民轉用泣歎、部內浪人啟躍悲愁、既見此由、不足國宰者也、望請被裁斷、以早被免許非法之强責矣、

一請被裁斷代々國宰分附新古絹布幷米穎等自郡司百姓竊責取事

右新古等、寔雖錄載稅帳面、有名無實也、仍代々國宰、更無求徵、其由何者、或負名死去、及四五十年、或負名逃散、已數千餘人也、而當任守元命朝臣、以去年三月中旬、撰幹了之使、差暴惡之人、令勘責、如切如燒、往古舊代所不然也、而自郡司之身、就部內負累、皆悉搜取、從人民之竈稱所由差法、暗以寃凌、亂入一二家之間、致騷動十廿所、濟進一兩種之日取費於二三倍、國土凋弊職而緣是、爰郡司百姓雖經愁不安由、於國底彌施梟惡之政、曾無裁報之心、責使還成得水之龍、弱民倍類覆栖之鳥、望官裁且被召亂、且扶亡民矣、

一請被裁定守元命朝臣三箇年間每月號借絹誣取諸郡絹千二百十二匹幷使之副取土毛事、

右絹等八箇郡之內、三ヶ年之間、或號借絹、或稱見交易、所責取也、但件絹、或月一二度、或月二三度、每月計其數、如上件、其直准穎疋別四十束以下三十束以上、僅有判定之返抄三分一也、然而其直于今未下行、抑件絹更以難堪、因之買求於隣國之間、直米上品者六石以下、中下品五石以上、乍知其弊而所減納也、進納之日不放返抄、立用之時、還致覆勘、加以責使多連日、辦納人不隔月、面々色々所取土毛過絹直、故何者、徵一疋之處、重取二匹、何況供給裝束之費乎、各爲豪奢之營、好非法之費、凡破郡破國之謀、劫民劫物之機尤有斯、望請蒙裁許、早被召替、猶被任良吏矣、〇(中略)

一請被停止號有藏人所召例貢進外加徵漆十餘石事

右漆丹羽郡土產也、即例貢進藏人所召三四斗也、然而所徵已巨多也、所幷進以一升納四五合、以一斗減四五升、幷之填之間非無欠失、就中以去年三月十三日、號有未進、放幹了使、令呵責、不令旋踵、仍

有漆民以漆弁、無漆民以絹弁、漆一二斗減收四五升、絹五六疋補取一二斗之代、一樹所出汁僅勺撮、爰自木所出者已以少、自國所責者甚以多、此間人去園荒、爲野火燒亡、木倒枝枯、爲國土大損、纔見立則如塗漆之杜、適播殘則之法露之滯、而守元命朝臣不知其枯朽、誣以勸徵、望請裁斷、以將省貢進之外責矣、○中略

以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、○中略 仍具勒參拾壹箇條事狀、謹解、

〔張州府志二十四海東郡〕財賦戸口○中略

戸口之數 戸八千八百九十三、口四万五千九百二十二、以上所依有司古簿也、延享元年有官命、改民之口數、益于古簿一万六千百七十五也、

〔張州府志二十海西郡〕財賦戸口○中略

戸口之數 戸三千四百二十八、口一万八千九十八、以上所依有司古簿也、延享元年有官命、改民之口數、較之古簿多五千九十三也、

〔張州府志十九中島郡〕財賦戸口○中略

戸口之數 戸一万七、口五万七千六百三十四、以上所依有司古簿也、延享元年有官命、改民之口數、益于古簿一万二千九十也、

〔張州府志十七葉栗郡〕財賦戸口○中略

戸口之數 戸二千二百六十一、口一万三千一百六十八、以上依有司古簿所載之也、延享元年有官命改民之口數、益於古簿二千二百四十二也、

〔張州府志十五丹羽郡〕財賦戸口○中略

戸口之數 戸六千八百一十八、口四萬七十八、以上所依有司古簿也、延享元年有官命、改民之口數、益于古簿七千二百八十五也、

〔張州府志 十一 春日井郡〕財賦戸口 ○中略

戸口之數　戸一万一千三百八十八、口六万六千四、以上依㆓有司古簿所載㆒也、延享元年有㆓官命㆒改㆓民之口數㆒、登㆓于古簿㆒一万五千三十五也、

〔張州府志 八 愛智郡〕財賦戸口 ○中略

戸口之數　戸一万三千六十、口七万二千五百五十、

右依㆓有司古簿所載㆒之也、延享元年有㆓官命㆒改㆓民之口數㆒、登㆓於古簿㆒一万七千一十六、

〔張州府志 二十七 智多郡〕財賦戸口 ○中略

戸口之數　戸一万三千十五、口七万七千二百二十九、以上所㆓依有司古簿㆒也、延享元年有㆓官命㆒改㆓民之口數㆒、登㆓于古簿㆒二万六千三百六十八也、

〔官中秘策 二〕尾張國　九郡 ○中略

一人數五拾五万三千三百四拾人　内 貳拾七万九千八百拾人 男　貳拾七万三千五百三拾人 女

〔吹塵錄 人口 五 又國高〕諸國人數調 文化元甲子年

官私領　一人數六拾万五千六百八拾六人　高五拾貳万千四百八拾石餘　尾張國

内 三拾万五千百九拾六人 男　三拾万四百九拾人 女 ○中略

弘化三丙午年 諸國人數調

官私領　一人數六拾五万三千六百七拾八人　高五拾四万五千八百七拾五石餘　尾張國

内 三拾貳万八千三百四十三人 男　三拾貳万五千三百三拾五人 女

風俗

〔人國記〕尾張國

尾張國之風俗ハ、進走之氣強ク而、善ヲ見レバ善ニ進ミ、惡ニ成レバ惡ニソミ、我ガ親キ者之善キ事少シアレバ、大分ニ能キ樣ニ云成、惡キ事アレドモ夫ヲ異見ヲ加ヘ、後來之過チナキ樣ニト有

志ナクテ、共ニ推シ隱シテ人之非ヲ揚テ、夫ガ惡ヨリハ輕キナド、談ズルノミニテ、邪智我慢第一強ク、人ヲ足下ニ見ナシ人ノ善ヲケシ、我惡ヲ隱スノ類ニテ、萬事根ノトグル事無、唯大風洪水之出ルガ如クニテ、根ニシマル意地スクナシ、雖然形儀勇武ノキビシキ處アレバ、伊賀伊勢、志摩三ケ國合タルヨリ上成所有、古ヨリ秀ル者モ有、下劣之心底猶以カタクナシ、然ル故ニ、善ニ進ム事寡フ而、惡ニ從フ事強シ、去ルニ因テ謀叛一揆之類發スル事モ古今多シ、飾氣スクナキ故ニ、實儀之人モ多クシテ、惡ヲ見テ惡ト知テ改ル人モ有、中ノ風俗之國也、男之言葉好シ、是國ヲ治ムルニハ、處々ニ黨多而、地下人モ黨ヲ結ビ、我慢ノサムルコトヲ不盡而、傾ク事日ヲ可經乎、其黨類ヲ懷ケ、正道ヲ以是ヲ敎ヘ、邪義ヲ不誅シテ恩ヲ加ヘ、是ニ談ズルニ禮ヲアツク而威ヲハゲマシ、與之節ヲ考ヘ、是ヲ示ニ節ヲ以シテ、後ニ善ヲ全ク知テ合一スベシ、無左シテ一應ノ威光嚴ヲ以テ是ヲトリヒシグトモ、亦本ニ可歸、視其機氣、察其未發而後ニ是ヲヌクハ良將之法也、此國ニハ別而口傳、

〔日本鹿子六〕尾張國中名所舊跡之部

阿波手(アワテ)の森　下津と云里の南に此森あり、美濃の垂井より此森まで行程十里なり、あかし川と云あり、是は美濃の内なり、すのまたと云所より下津まで五里ばかりなり、源雅光のうたに、
名にたてる阿波手の浦のあまだにも見るめはかづく物とこそきけ

萱津原(カヤツノハラ)　下津より一里ばかり北にあり
東路のかやつの原の朝露におきわかるらん袖はものかは

熱田(アツタ)　宮あり、くはしく神社の所に有之、南より西へ海あり、熱田の潟(カタ)といふなり、

鳴海(ナルミ)　宿の名也、熱田より行程一里半餘なり、
昔にもあらず鳴海の里にきて都ゆかしき旅ねをぞする

上野　鳴海の宿より西北のかたなり、鳴海野とも云也、
鳴海がた鹽干に浦やなりぬらん上野の道を行人もなし
宵月の濱　熱田より鳴海の宿へこゆれば、右のかたの濱邊に見ゆるなり、海士の家居あり、鹽や多く見えたり、
星崎　宵月と鳴海との間也、東には潟あり、西南は海邊なり、
袖かはす人もなき身をいかにせん夜寒の里にあらしふく也
夜寒の里　星崎より西のかた、浦ちかくある里なり、
松風の里　夜寒の里にならびてある名所也
松風の里にむれゐるまなづるはちとせかさぬる心地こそすれ
衣の浦　鳴海より六里計辰巳のかたなり、のまのうつみと云所も、此浦にちかき所也、そのかみ源の義朝軍に打まけ、此所にをち下り、長田の庄司と云ものゝもとにかくれ住給ひしを、庄司たばかり、我むこの正清とともにころせし所也、今に義朝石塔此所にあり、

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　尾張國五十人〇中略
諸國器仗〇中略　尾張國甲六領、横刀十六口、弓卌張、征箭五十具、胡籙五十具、
〔日本書紀十八安閑〕二年五月甲寅、置〇中略　尾張國間敷屯倉、
〔日本書紀十八宣化〕元年五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、〇中略　蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連、運尾張國屯倉之穀、
〔日本書紀二十五孝德〕大化元年七月庚辰、是日遣倭漢直比羅夫於尾張國、〇中略　課供神之幣、
〔日本書紀二十九天武〕四年二月癸未、勅〇中略　尾張等國曰、選所部百姓之能歌男女、及侏儒伎人而貢上、
〔日本書紀二十九天武〕十二年、是年詔、伊賀伊勢美濃尾張四國、自今以後、調年免役、役年免調、

〔今昔物語二十八〕尾張守□□五節所語第四

今昔□□天皇ノ御代ニ、□□ノ□□ト云フ者有ケリ、年來舊受領ニテ、官モ不成デ沈ミ居タリケル程ニ、辛クシテ尾張ノ守ニ被成タリケレバ、喜ビ乍ラ任國ニ忩ギ下タリケルニ、國皆亡ビテ田畠作ル事モ露无カリケレバ、此ノ守ミ本ヨリ心直クシテ、身ノ辨ヘナドモ有リケレバ、前々ノ國ヲモ吉ク政ケレバ、此ノ國ニ始メテ下テ後、國ノ事ヲ吉ク政ケレバ、國只國ニシ福シテ、隣ノ國ノ百姓雲ノ如クニ集リ來テ、岳山トモ不云、田畠ニ崩シ作ケレバ、二年ガ内ニ吉キ國ニ成ニケリ、然レバ、天皇モ此レヲ聞シ食テ、尾張ノ國ハ前司ニ被亡サレテ、无下ニ弊ト聞食スニ、此ノ任二年ニ成ヌルニ、吉ク福シタ、ナント被仰ケレバ、上達部モ世ノ人モ、尾張吉キ國ニ成タリトゾ讃ケル、然テ三年ト云フ年五節被宛ニケリ、尾張ハ絹糸綿ナド有ル所ナレバ、萬ヅ不乏、況ヤ守本ヨリ物ノ上手ニテ、物ノ色共打目針目皆糸ト目安ク調ヘ立テ奉ケルニ、五節ノ所ニハ常寧殿ノ戌亥ノ角ヲゾシタリケルニ、〇下略

古事類苑

地部八

三河國

名稱

三河國ハ、ミカハノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ遠江、西ハ尾張、北ハ美濃、及ビ信濃ニ界シ、南ハ海ニ面セリ、東西凡ソ十六里半、南北凡ソ十七里、其地勢ハ、北方ニハ飛驒、信濃二國ニ蟠マレル木曾山脈ノ一部重疊シ、東南ニハ甲斐、信濃、遠江ニ連ナレル赤石山脈ノ餘波、其國境ヲ走リ、國內概ネ山嶽ニ富ム、此國ハ、古ヘ國府ヲ寶飫郡ニ置キ、碧海(アヲミ)、賀茂(カモ)、額田(ヌカタ)、幡豆(ハヅ)、寶飫(ホオ)、設樂(シタラ)、八名(ヤナ)、渥美(アツミ)ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後加茂郡ヲ東西ニ、設樂郡ヲ南北ニ分チ、凡テ十郡ト爲シ、愛知縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕參河 三加波

〔饅頭屋本節用集 美天地〕參河(ミカハ) 參州

〔日本風土記 一寄語島名〕三河 迷茄懷(ミイキヤアワイ)

〔參河國古蹟考 三〕參河 三加波 日本紀 廿五ノ廿丁 同 三十ノ廿一丁 續日本紀 二ノ五丁 十 舊事記 十ノ四丁 令義解 二ノ初丁 姓氏錄 上ノ一丁 十 万葉集 一ノ廿二丁 參河ト作リ、古事記 中ノ廿四丁 同 中ノ四丁 卅 舊事記 五ノ三丁 廿 等三川ニ作リ、舊事記 五ノ十六丁 日本紀 廿五ノ廿六丁 續紀 二ノ五丁 十 令義解 二ノ一丁 等ニ三河ト作リ、舊事記 七ノ四丁 卅 續紀 廿八ノ十八丁 參川ニ作リ、其餘餘多アリ、今略之、

〔古事記傳 二十二〕三川は、參河國なり、此國、男川、豐川、矢作(ハギ)川とて、三の大川ある故に、三川と名くと

云り、(男川は今大平川と云、豊川は吉田川なりと云り、或說には、男川は加茂郡より出て、池鯉鮒の西今岡の東を、南へ流るゝ川なるべし、大平川には非じとも云り、)

〔諸國名義考　上〕參河

和名抄に參河、(三加波、國府在寶飯郡、彦麻呂云、今は飯を飯に誤てほひの郡といふ、)名義は或書に引たる參河國風土記逸文に、參河國有三川、一曰男川、二曰豊川、三曰矢作川、○中略立入信友云、今遠江に二河てふ鄕ありて、よく似かよひてきこゆ、彦麿思ふに、三大川によりて三河國としも號しはうつなき物から、又思へば、數をいはず、たゞ大川を稱へて、御川となづけしにてもあらむか、こはこゝろみにいふのみ、

〔三河國二葉松　一〕三河

松涇子曰、男川一ノ名ハ扶土川、(今大平川ト云)矢矧川、(矢作矢矧)豊川、右川三ツ有、以參河ト云トナリ、○中略或翁曰、三河ノ水源ヲ考ルニ、豊川ハ設樂郡ノ神田ノ埜ニ出テ、八名郡ノ長篠村ニ合ヒ、寶飯郡ノ前芝ニテ海ニ入ル、矢作川ハ其源南ハ保殿ニ出テ、北ノ源大多賀ノ山下ニ遶テ、黒岩ニテ合ヒ、額田郡ノ西ニ出テ、播豆郡ニテ海ニ入落ル也、男川ヲ扶土川トシ、大平川トスル說ヲ取ルニ、大平川ノ源額田北ノ上毛呂ニ出テ、南ハ宮崎ニ出テ、保母生平ニテ合、大平橋ヲ流レ、上六名ニ合、矢作川ニ合流シ、海ニ落ル也、或人ノ云、大平川ヲ三河ノ中ニ入ル事信用シガタシ、夫水ハ高源ニ出テ北ヨリ西ヘ流ル、是逆流ト云ツベシ、我壯歳ヨリ是ヲ疑ヘリ、諸人ニ尋問ヒシニ不決之、然ルニ或修行僧ノ曰ヒケルハ、三ノ河ノ中ニ、男川トハ男川ノコトニテ、其源加茂郡ノ擧母梅ケ坪ノ上四鄕花本之邊ヨリ出テ、一流ハ花園ノ上竹村邊ヨリ流出テ、二流池鯉鮒之上駒場邊ニテ合、池鯉鮒ト今岡トノ間ニテ、東海路ヲ横ニ南ヘ流レ、高津川鷲村苅谷ノ西ヲ流レ、碧海ノ海ニ入ル、考ルニ豊川ト矢作川ハ順流ナルニ、大平川ノ横逆流ヲ並ベカゾヘテ三河トハ云ヒ難シ、後考ヲ待ト云、再ビ按ズルニ、國名風土記ニ、三ツ之河アルニ因テ國ノ名トスルト云ヘバ、下流短キ逆流ニテハ並ベガタカルベシ、當國ノ形容、東ノ端ニ豊川アリ、中ニ矢作川有、西ニ男川アリテ、三流ヲ杻トシ經トス

位置

べシ、矢作第一ノ長流、豐川次之、男川次之、

〔地勢提要〕乾各國經緯度 附里程

三河岡崎町傳馬極高三十四度五十七分半、經度東一度二十五分、從東都 東海道 八十五里二十七町五間半、

三河伊良湖村極高三十四度三十五分半、經度東一度一十六分、從東都 東海道經吉田驛沿豐川至海岸沿海 九十八里二十九町二十七間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

三河　吉田　三四度四六分三〇秒　御油宿　三四度五一分〇〇秒

　　　岡崎　三四度五七分三〇秒　池鯉鮒　三五度〇〇分三〇秒 〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒 〇中略　三河　岡崎　東一度二四分一三秒

疆域

〔三河國二葉松 一〕三河

按、東限東海路高師山、西限今岡ノ村堺川、十四里半、而爲西東焉、積六町一里、則八十七里、　南限海邊伊良湖崎、北限山中津具邑堺、三十一里而爲南北焉、積六町一里、則百八十六里、

〇按ズルニ、伊良湖ハ、伊勢國鳥嶋條ニ收ムル所ノ萬葉集ニ據ルニ、古ハ伊勢國ニ屬セシガ如シ、姑ク記シテ疑ヲ存ス、

〔日本地誌提要 三河 十二〕疆域　東ハ遠江、西ハ尾張、北ハ美濃信濃、南ハ海ニ至ル、東西凡一十六里、南北凡一十七里、

〔丙辰紀行〕しほ見坂より三河の間に、纔なる溝あり、是なん遠江、三河の境なりといふ、

島嶼

〔三河國二葉松 三〕三州島名

一竹島、一祠在之、不相村之氏神也、三辨天ノ其一ニ而、風景佳也、

一大島、小島對面之名也、又小島ハ、大島對面之名也、

一佛島、巖立並テ千體佛之如シ、隱顯ハ潮汐滿干ニ隨フ也、

一小島、右ニ記ス、已上三島ハ、三谷村ニ屬スル也、

一蠅田島、西浦村ニ屬ス、松樹鬱々トシタルヲ御前ト云、雪中ニモ蠅有、

一辨才天島、幡豆村ニ屬ス、雜樹茂リタル中辨天ノ祠在リ、三辨天ノ一也、

一梶島、宮崎村ノ沖ニ有、異具島、

一佐久島、三國三島ノ一也、參河ニ屬ス、東南アリ、竹木繁茂シタル中ニ辨天ノ祠有、三辨天ト云、弘法大師彫刻ノ靈像三辨天ノ第一也、雌龜島、雄龜島、其外寺院多シ、

日間賀島ハ、尾州ニ屬ス、三國三島ノ其一也、

篠島ハ、勢州ニ屬ス、三國三島ノ一所也、今代官ニ知行ハ尾州ニ屬ス、

一龍宮島、竈屋穴處、渥美郡日出村ニ有

一飛馬島、渥美郡片濱波瀨之沖ニ在、

一龜島、寶飯郡拾石村ニ屬ス、俗ニ志州神島ヲ云ニ龜島ニ非也

一西濱田坪、渥美郡中山村ニ屬ス、

一貝作島、非島、在渥美郡浦村、山也、

一老津島、出名所記、渥美郡大津大崎、云洲崎、

一青木島　同斷

一座敷島　同斷

〔日本實測錄 島九嶼〕三河國渥美郡　遠測　姬島

地勢

寶飯郡　遠渕　辨天島　大島　龜岩

幡豆郡　遠渕　琵琶島　梶島　佐久島　辨天島

〔易林本節用集下〕參河參州 上、管八郡、東西一日半、山河多而淺一尺、故五穀不熟、國乏、下々小國也、

〔三河國二葉松序一〕參河國之大體、西首東尾、南海北嶺、中貫三河、西極尾州、抵遠州、南限滄海津湊、北境信州之山丘、郡縣邑里無不豐饒、疆理之制、則以五城直隷州府、中國分爲八郡、曰碧海、曰幡豆、曰額田、曰加茂、曰設樂、曰寶飯、曰八名、曰渥美、總之爲村千二百七十四箇邑、爲地高三十五万八百八十石餘、賜分諸侯大夫旗下之臣數十人、誠神祖龍飛之地、如周之岐幽漢豐沛矣、眞足以當形勢之勝而爲萬世不拔之鴻基國家根本之會成、未有過之者也、○下略

〔梧窻漫筆拾遺〕三河の國より、天下を領する人の起りしこと、如何なる故と云ふことを知らず、山川の英靈にや、鳳來山、本宮山、猿投山等、さまでの高山にも非ず、吉田川、矢矧川も、岐岨川、利根川などに比類すべきにも非ず、往古民情風俗の至りて善き處と云ふことも、新太郎少將の諸士へ勸戒し給へる書にて知りたり、さて予○太田錦城が所見は、山は童山のみ多くて、草木を生せず、灌漑の木少なく、いかにも瘠薄の地にて、下々の國と云へり、是れ人の興るべき基源なり、魯語の公父文伯の母の言に、沃土之民不才者淫也、瘠土之民莫不嚮義思也と、瘠薄の土ゆゑに、人浮華に走らず、篤實儉朴にて能く勤む、是興るべきの源本なり、されども只今にては、昔の樣子とは事替りたるべし、新太郎少將の見給ふとも、最早ほめ給ふことはあるまじと思ふなり、

矢矧の橋を渡りて、西は土地肥磽の異あるは知らず、先尾張と同國樣にて、四方を遠望すれば、東照神君の興り給へる國と云ふことも、自然に知るべき形象あり、是れは別論に附す、

〔日本實測錄二東海道〕從東京東海道至西京○中略

三河國渥美郡二川宿　二里一十三町八間半　豐橋本吉田 船町、三十四度四十六分半、　二里一十

六町二十八間　實飯郡御油宿　七町一十二間　御油宿茶屋町、三十四度五十一分、　一十六町二十三間　赤坂宿　二里一十九町五十四間　額田郡藤川宿　二里二十九間（至大平一里五町三十三間半）岡崎傳馬町、三十四度五十七分半、　三十町四十七間（至龍田町三丁三十六間、從龍田町至矢作橋東頭二十四丁二十一間半）碧海郡矢作村矢作橋西頭　二里三十三町二十八間　池鯉鮒宿三十五度三十秒、　三里一町五間（至國界一里四丁五間半）　尾張國愛知郡鳴海宿（○中略）

從東海道濱松驛本坂至御油（○中略）

三河國八名郡嵩山村、三十四度四十八分、　二里一十町三十八間　寶飯郡北金屋村、（至北金屋村宿所三丁六間）三十四度四十九分半、　二十六町四十二間半　市田村諏訪　一里一町四十八間半　御油宿（從濱松至御油）街道、通計一十二里二十八町三十九間

從東海道岡崎、伊奈街道、至金澤、

三河國額田郡岡崎籠田町　一十九町五十八間半　井田村（至大樹寺一十一町一間、又至瀧山寺三十五丁五十三間）　三十町一十一間　岩津村（至信光明寺三丁一十間）　一里二町三十間半　桑原村（至集殿陣屋四丁四十四間）　二十二町一十間　加茂郡中垣外村、三十五度二分半、　一十六町二十四間　九久平村、三十五度三分半、（至松平郷高月院、一里二十五丁四十五間）　二里九町三十三間　大島村、三十五度六分半、　一里二十三町三十四間　足助村本町、三十五度七分、　二里一十八町一十一間　明川村　三里一十一町九間　設樂郡（武節町村）一里一十八町一十四間（至國界一里二十一丁二十三間）　信濃國伊奈郡根羽村（○中略）

從伊奈街道根羽驛新城至市田（○中略）

三河國設樂郡上津具村　三里三町四十八間半　田口町村　一里二町四十六間半　東田内村一里一十五町一十五間　海老村　一里二十六町五間半　田代村（歷門谷町、至鳳來寺、二十三丁五十八間）　三里七町七間半　新城町　二里一十五町二十一間　寶飯郡一宮村（至一宮砥鹿明神社六丁三十九間）　一里一十二

町三十九間（至大木村五丁九間）　市田村諏訪（從根羽（信濃）至市田）街道、通計一十七里一十八町五間半

〔日本實測錄一沿海〕從東京沿海至大坂（○中略）

三河國渥美郡伊古部村濱（至伊古部村宿所三町四十二間）三十四度三十九分半、　三里一十八町一十間　高松村濱、（至高松村宿所八町一十五間）三十四度卅七分半、　四里五町五十三間　西堀切村、三十四度三十五分半、　一里二十五町廿九間（至伊良湖岬一里十四町五十九間）一、伊良湖村濱、（至伊良湖村宿所三町二十六間）三十四度三十五分半、　四里二十七町五十五間（至中山村洲岬二里十九町九十二間半）一　白田村、三十四度三十八分、　一里三十五町五間　江北間村（至東岬八町四十六間、又至西岬三町二十間、）二里四町四十六間　野田村（至間草一十四町二十六間、北極高三十四度卅九分半、）四里二町五十五間半　波瀬村タツヱノ岬　二里八町五十五間半（至鬼塚岬一里十町一十一間）一　吉胡村（至田原木町一十七町四十八間、北極高三十四度四十分、）三里二十一町三十間（至大崎一里一十七町）　牟呂村濱、（至牟呂村宿所四町一十六間）三十四度四十五分、三十町三間　同豐川口（沿豐川至吉田宿一里三町三十八間）一　一里四町一十六間　寶飯郡御馬湊　六里二町三十九間半（至西浦村東浦四里一十四町三間半）　西浦村（至東浦徑側七町三十五間半）　一里三十四町八間半　幡豆郡宮崎村、三十四度四十六分半、　五里六町二十二間　寺津村（至平坂湊八町四十六間半、北極高三十四度五十一分半、）　三里一十七町五十二間（至矢作川口三十二町五十九間）　碧海郡大濱　二里三十五町二十六間　元刈谷村川口（至刈谷本町一十一町四十六間、北極高卅四度五十九分半、）　五里三十一町五十二間半（至國界一十五間）一　尾張國知多郡大足村

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬（○中略）

參河國驛馬（鳥捕、山綱、渡津各十疋、）傳馬（碧海寶飫郡各五疋）

〔源平盛衰記四十五〕內大臣關東下向附池田宿遊君事

二村山ヲ過ヌレバ、三川國八橋ヲ渡給フ、昔業平ガ劇草(カキツバタ)ノ歌讀タリケルニ、皆人袖ノ上ニ涙ヲ流シケル所ト覺シケルモ、御涙關敢給ハズ、矢矧。宿。ヲモ打過、宮路山ヲモ越ヌレバ、赤。坂。宿。ト聞エケリ、三川入道大江定基ガ、此宿ノ遊君力壽ト云ニ後レテ、眞ノ道ニ入事モ、アラマホシクヤ思召ケ

ン、高師山ヲモ過ヌレバ、遠江橋本宿ニ著給、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎四年〇曆仁元年十月十八日己未、有熱田社御奉幣、酉一點、入御矢作宿、遠左馬頭義氏朝臣亭、十九日庚申、戌一剋、著御豐河驛、

〔日本國郡沿革考二東海道〕參河　古作三川、國造記云、志賀高穴穗朝、定參河國造、或云、國內以有男川豐川矢作川之三大川得名、男川今之大平川、豐川今之吉田川、上國、管八郡、千二百九十二村、

額田百六十八村　加茂三百四十七村延喜式等作賀茂、　碧海百二十九村　幡豆百五十一村延喜式等作播豆、或作播頭、

寶飯百八村、古穗國、見古事記、國造記云、穗國造、泊瀨朝倉朝定、後爲郡、建國府于此、俗作寶飯、非、　設樂二百二十九村、延喜三年八月割寶飯郡置、　八名六十五村　渥美九十五村

〔日本地誌提要三十二三河〕沿革　古ヘ國府ヲ寶飯郡ニ置、今ノ國府村是ナリ鎌倉ノ初、源範頼州守ニ任ジ、建久正治ノ間、安達盛長守護タリ、足利氏ノ時、吉良滿貞ヲ守護トシ、八名郡西條ニ居、其弟尊義幡豆郡ヲ領シ、東條ニ居、寛正ノ初、吉良氏大ニ衰ヘ州內擾亂、將軍義政、細川成之ヲシテ守護タラシム、天文中、今川義元、本州ヲ侵シ、東條義安ヲ駿河ニ幽シ、義安ハ尊義ノ孫ナリ入西條義昭ヲ東條ニ徙シ、義昭ハ滿貞七世ノ孫州東ノ地ヲ奪フ、是ノ時ニ當テ、德川氏額田郡ニ與リ、岡崎ニ治シ、西境近郡ヲ略取ス、既ニシテ義元、德川氏ヲ劫掣シ、其地ヲ擁有スル十一年、義元敗死スルニ及ビテ、德川氏舊疆ヲ復シ、額田、寶飯、碧海、三郡ニ跨ル遂ニ東條ヲ取リ、西尾、牧野氏吉田、小原氏諸城ヲ拔キ、盡ク全州ヲ併ス、天正十八年、其關東ニ遷ル、豐臣氏、池田輝政ヲ吉田ニ、田中吉政ヲ岡崎ニ封ズ、關原役畢リ、德川氏二氏ヲ徙封シ、松平家淸ヲ吉田、後ニ松平信祝本多康重ヲ岡崎、後ニ本多忠肅本多康俊ヲ西尾、後ニ松平乘祐戸田尊次ヲ田原ニ後ニ三宅康貞封ジ、水野勝成ヲシテ刈谷ノ舊邑ヲ襲ガシム、後ニ土井利信ヲ封ズ其後州內封ヲ受ル者、擧母、初本多忠利、後內藤政苗奧殿、松平乘次西大平、大岡忠相西端、本多氏凡テ九藩、文久中、奧殿藩、松平乘謨信濃ノ田野口ニ徙ル、王政革新、吉田ヲ改テ豐橋ト稱シ、板倉勝達ヲ重原ニ、舊陸奧福島安部信發ヲ半原ニ舊武藏岡部移

國府

郡

封シ、十藩トナル、既ニシテ皆改テ縣トナシ、又悉ク之ヲ廢シテ額田縣ヲ置キ、岡崎ニ治ス、尋デ之ヲ廢シテ愛知縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕參河國造

志賀高穴穗朝、〇成務以物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命定賜國造、

穗國造

泊瀨朝倉朝、〇雄略以生江臣祖葛城襲津彥命四世孫、菟上足尼定賜國造、

〔倭名類聚抄五國郡〕參河國國府在寶飯郡、行程上十一日、下六日、

〔今昔物語十九〕參河守大江定基出家語第二

今昔、圓融院ノ天皇ノ御代ニ、參河ノ守大江ノ定基ト云フ人有リ、〇中略而ル間其國ニシテ、國ノ者共風祭ト云事ヲシテ、猪ヲ捕生ケ乍ラ下シケルヲ見テ、彌ヨ道心ヲ發シテ、〇中略守其ノ日ノ内ニ國府ヲ出テ京ニ上ニケリ、道心堅ク發ニケレバ、髻ヲ切テ法師ト成ニケリ、名ヲ寂照ト云フ、世ニ參河ノ入道ト云フ此レ也、

〔倭名類聚抄五國郡〕參河國〇中略管八〇中略碧海、阿乎美賀茂、額田、奴加太幡豆、寶飫、穗、國府設樂、志太良八名、也名渥美、阿豆美

〔延喜式二十二民部〕參河國上管　碧海　賀茂　額田　幡豆　寶飫　設樂　八名　渥美　右爲近國

〔皇國郡名志〕參河國八郡

碧海アフミ　刈屋　△矢矧川　△池鯉鮒　△中島　尾界堺川、矢ハギ川ノ間

賀茂カモ　●市野　衣　△衣里　△松平　●明智　△上伊保　尾濃界　●足助　●サ投　●白川

額田ヌカタ　岡崎　△藤川　△奥殿　國中郡

幡豆ハヅ　西尾　△釜池　△吉良庄　南海向郡

寶飯(ホイ)　●上東　(形原)　●大木　(蒲形)　(御油)　(赤坂)國中ヨリ入江　(豐川)向

設樂(シタラ)　(新城)　●岩村　●清井田　●川手　●門谷　(鳳來寺)　遠信遠界郡　●追分　●板場　●左太頁分　●下利　●アス用

八名(ヤナ)　●大野　(板シキ川)　●須山　●大平　●高瀬　遠界

渥美(アツミ)　吉田　田原　●二川　南出崎郡

○按ズルニ、本書及ビ次ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕參河

六國史古書	延喜式倭名抄拾芥抄諸書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
	碧海(アヲミ)	同(阿乎美)	同	同(國郷元)	同(アヲノヘキカイ)	同	同	同(アヲミ)	同
	額田(ヌカタ)	同(奴加太)	同	同(國郷元)	同(ヌカタ)	同	同	同(ヌカタ)	同
	賀茂	同	同	賀茂(國元) 加茂(元)	加茂(カモ)	同	賀茂	同(カモ)	西加茂 東加茂
	播豆(ハツ)	幡豆	同	同(元)	同(ハツ)	同	同	同(ハツ)	同

寶飫	設樂	八名	渥美	
穂				
寶飫ホオ	設樂シタラ	八名ヤナ	渥美アツミ	管八
同	同 志多良	同 也奈	同 阿都美	同
寶飯	同	同	同	八郡
同 元	同 訓元	八名 訓元 楊那	同 訓知元	
同ホイ	同シタラ	八名ヤナ	同アツミ	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同ホイ ホオ	同シタラ	同ヤナ	同アツミ	同
同	北設樂 南設樂	同	同	十郡

碧海郡

〔參河國古蹟考 三〕碧海 阿乎美 民部式 廿二ノ二丁 碧海郡、拾芥抄 四ノ十二丁六 碧海郡、○中略 此郡今モ碧海郡ト稱テ、高七万八千七十石餘アリテ、村數ハ三川雀ニ百廿四村、二葉松ニ百卅六村、三川堤ニ百四十三村ヲ擧タリ、

〔新撰姓氏錄 右京皇別〕御立史

御使同氏、氣入彥命之後也、持統天皇御代、依居參河國青海郡御立地、賜御立史姓、日本紀漏、

〔續日本紀 二十六 稱德〕天平神護元年四月丁亥、參河國碧海郡人 ○人原脫、據一本補、 從八位上石村村主押繩等九人、賜姓坂上忌寸、

賀茂郡

〔參河國古蹟考三〕賀茂(民部式、拾芥抄同、當郡賀茂郷アリ、其ヨリ出タル郡名ナルベシ、)
此郡今モ賀茂郡ト稱テ、高五万九百八石餘アリ、村數ハ、春雨啪ニ三百卅四村、二葉松三百四十七村、三川堤三百七十一村、刪補松ニ三百五十七村トアリ、

額田郡

〔參河國古蹟考三〕額田(奴加太、民部式廿二、拾芥抄四同、當郡ニ額田郷アレバ、其レヨリ出タル郡名ナルベシ、○中略)
此郡今モ額田郡ト稱テ、高四万三千九十四石餘アリ、(三川堤ニハ四万二千八百十石餘トアリ、)村數、春雨啪ニ百五十四村、二葉松ニ百五十村、三川堤ニ百六十八村、刪補松ニ百五十七村ヲ擧タリ、

幡豆郡

〔參河國古蹟考三〕幡豆(民部式廿二、拾芥抄四同、神名式幡豆郡、○中略)
當郡幡豆郡(又幡。頭トモ書リ)ト稱テ、高四万六千六百十八石餘アリ、村員ハ、春雨啪ニ百三十六村、二葉松百廿九村、刪補松ニ百三十二村、三川堤ニ百三十七村ヲ擧ゲタリ、
〔三代實錄二清和〕貞觀元年四月十五日庚子、是日神祇官ト、以參河國播。豆。郡。爲悠紀、
〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年六月二日丙寅、勅以參河國播磨(○磨恐豆誤)郡荒廢田一百町、賜孟子内親王、爲一身田、

寶飫郡

〔倭訓栞前編三十一保〕ほ　三河郡寶飫、ほとよめり、飫飯に作るは誤なり、
〔地名字音轉用例〕韻(ヒヾキ)ノ音ノ字ヲ添ヘタル例
ほ　寶飫(三郡)穗　飫ハオノ假字也
〔參河國古蹟考三〕寶飯(穗國府、民部式廿二、神名式九、拾芥抄四同、民部式古本寶飫郡、)
古事記(中ノ廿四丁)開化天皇條ニ、朝廷別王者三川之穗別之祖、　國造本紀(十ノ四丁)穗國造、泊瀨朝倉以生江臣祖葛城襲津彦命四世孫兎上足尼定賜國造ナリ(寶飫郡菟足神社ハ菟上足尼ヲ祀ルト社ニ云リ、委クハ官社私考上卷ニ云リ、)レ其本ニテ、舊クハ穗郡ナリケムヲ、大人等ノ云レタル如ク、民部式(廿二十一丁)ノ凡諸國部内郡里等名並用二字、必取嘉名トアル御制ニ依テ、其一音ノ名ハ、二字ニ書クニ足ザリシ故、其響音ノ字ヲ加

テ、木國ヲ紀伊、衣郡ヲ穎娃、(エエ)ツ國ヲ噞吹ナド書ル例ニ依テ、寶飫(ホオ)ト二字ニナセシナリ、此例ニ依ラバ、ホオト唱ヘテ可ナラン、扶桑略記(廿九ノ廿四丁)寶飯郡、卜部兼敎ノ諸社根元記ニ寶飫郡ニ作レリ、然ルヲ後ニ飫ヲ飯ニ誤リ、唱ヲモホイト誤リシナリ、此抄(○倭名類聚抄)ノ比ハ、ホノ郡ト唱ヘタリト見エテ、寶飯ト記シナガラ、唱注ニハ穗ト記セリ、伴主云、日本紀ニ飫ヲ飯ニ作ル多シ、五音海篇ニ飫與飯同トアリト云リ、飫ヲ飯ト誤リシ例ハ、當抄大和國十市郡飯富アリ、神名式ニ多ニ作リ、遠江國磐田郡飯寶ハ、殘風土記飫寶ト作リ、万葉八ニ大乃浦アリ、上總國望陀郡飯富、(於布)神名式ノ古本ニ飫富ト作リ、(○中略)續日本後紀(八ノ廿九丁)寶飯郡トアルモ、飫ヲ誤リシナルベシ、當郡今寶飯郡ト書テホイト唱フ、高五万二千(千八百七十八石餘三川雀)二百六十石餘アリ、村員、春雨嘂ニ百卅六村、二葉松ニ百四十村、三川堤百十四村、刪補松ニ百四十三村ヲ擧タリ、

〔古事記(中開化)〕其美知能宇志王、娶丹波之河上之摩須郎女生子、(○中略)次朝廷別王、(四柱)此朝廷別王者、(○三川之穗別之祖)

〔古事記傳(二十二)〕三川之穗別、三川は參河國なり、(○中略)穗は、和名抄に參河國寶飫(穗)郡とある是なり(飫字誤て飯と作り、今も然り、)舊事紀五に、三川穗國造美己止直と云人あり、(美己止、美加度よく似たれば、若くは此は此朝廷別王のこと、には非るか、さて國造本紀には、穗國造、泊瀨朝倉朝以生江臣祖葛城襲津彥命四世孫菟上足尼定賜國造とあり、此の傳と異なり、)

〔續日本後紀(八仁明)〕承和六年十二月丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣(○中略)奏言、(○中略)伏見參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏偁、去年十一月三日、五色雲見寶飯郡形原鄕、(○下略)

〔扶桑略記(二十九後冷泉)〕治曆三年八月十六日、參河國解狀偁、管寶飫郡渡津鄕住人壬生眞世、(○下略)

〔參河國古蹟考(三)〕設樂(太志良)(民部式廿二、拾芥抄四同、當設樂鄕アリ、此ヨリ出タル郡ノ名ナルベシ、)

民部式(廿二ノ二丁)首書云、延喜三年八月十三日、割寶飫郡置設樂郡トアリ、サレド式ハ延長二年奏上ノ書ナルニ、神名式ニ石座神社ヲ寶飫郡ニ取ラレタルハ、未ダ訂シアヘ玉ハザリシナルベシ、國

太暦ニ云、暦應二年、伊勢國不通達之間、先被行御卜、用参河國設楽山杣ヌトアリ、コハ大神宮御遷宮ノ御材木ヲ採レルナリ、○中略當郡今モ設楽郡ト稱ヒテ、高二万五百十四石餘アリ、村數ハ、春雨啼ニ二百六十五村、二葉松ニ百八十四村、删補ニ百八十七村、三川堤二百十六村ヲ擧タリ、

〔地名字音轉用例〕入聲ツノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

したら　設楽三郡　志太良シダラ　設ヲシダニ用ヒタリ○中略

サノ行ノ音同行ニ通用セル例

シダラ　設楽三郡　志太良シダラ　設ヲシダニ用ヒタリ

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕合○中略

一貫文　杉山彈正左衛門尉殿三川國設楽郡段錢　二貫五十文　疋田孫左衛門丞殿三川國設楽郡段錢○中略

八名郡

〔参河國古蹟考三〕八名。八名也。民部式廿二、拾芥抄四同、當郡八名郷アリ、此郡ノ本土ナルベシ、

世系志ニ云、平姓高力氏直鎮云々、賜三州梁郡、○中略當郡今モ八名郡ト稱テ、高一万八千六百九十石餘アリ、九千三百六十五石餘三川雷村員ハ、春雨啼ニ五十三村、二葉松ニ七十村、三川堤ニ八十九村ヲ擧タリ、

渥美郡

〔参河國古蹟考三〕渥美阿豆美民部式廿二、拾芥抄四同、當郡渥美郷アリ、是ヨリ出タル郡ノ名ナルベシ、

當郡今モ渥美郡ト稱テ、高四万六百七十四石餘アリ、三川、四万六千六百七十四石餘アリ、村員ハ春雨啼ニ八十一村、二葉松九十村、删補松九十三村、三川堤ニハ八十六村ヲ擧タリ、

〔大神宮諸雜事記一〕抑皇太神宮勅託宣偁、我天宮御宇之時、天下四方國擬鎮、可天下宮所、放光明見定置先畢、仍彼所可行幸御之由宣、倭姬内親王奉載天、○中略次三河國渥美郡一宿御坐、國造進渥美神戸、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年八月十四日辛卯、參河國獻銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於渥美郡村松山中獲之、或曰是阿育王之寶鐸也、

〔倭名類聚抄 六 參河國〕碧海郡 智立 采女 刑部 依綱（與佐美） 鷲取（和之止利） 谷部 大市（於保以知） 碧海（阿乎美） 横禮 呰見 河内 櫻井 大岡 薢野 驛家

額田郡 新城 鴨田 位賀 額田 麻津 六石 大野 驛家

賀茂郡 賀茂 仙陁 伊保 擧母（古呂毛） 高橋（多加波之） 山田 賀禰 信茂

幡豆郡 能束 八田（也多） 意太 礒泊（之波止） 大川（於保加八） 大擴 新島 修家

寶飫郡 形原（加多波良） 赤孫（安加比古） 美養 御津（美津） 宮道（美也知） 望理 賀茂 度津（和無都） 篠東（之乃都加） 宮島（美也之末） 豐川（止與加波） 雀部（散々倍） 驛家

八名郡 多木 美和 八名（也奈） 養父（也布） 和太 服部（波止利） 美夫

渥美郡 幡太 和太 渥美（安久美） 高蘆（多加之） 礒部（以曾倍） 大壁（於保加倍）

設樂郡 賀茂 設樂（之多良） 黒瀨 多原

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年十二月丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣〈○中略〉等奏言、〈○中略〉伏見₂參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏₁偁、去年十一月三日、五色雲見₂寶飯郡形。原。郷。₁、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕治暦三年八月十六日、參河國解狀偁、管寶飫郡渡。津。郷。住人壬生眞世所₂領牝牛、以₁去七月廿七日辰一點、所₂生犢牛、其體長三尺許、毛色赤斑、額腰少白、有₂四牙₁有₂二尻二尾七足₁、〈○下略〉

〔參河國古蹟考 一〕菟足神社〈○中略〉當社古鐘アリ、其銘文ニ、

參河國寶飯郡渡津郷菟足大明神洪鐘、右爲₂志者、天長地久、仰願圓滿國土安穩、諸人快樂所₁₂奉₁鑄也、

應安三年庚戌十一月日　大工藤原助久　勸進墨見阿彌陀佛　檀那朝阿彌陀佛

〔白河證古文書 一〕

一讓與所領等事〈○中略〉

一參河國渥美郡内

村里名邑

野田郷　高足郷　細谷郷　大岩郷　若見郷　赤羽郷　彌熊郷　吉胡郷　岩崎郷　牟呂郷　草間郷

右於彼所領等者、相副手繼證文、所讓與孫子七郎左衛門尉顯朝、不可有他妨、爲後日讓狀如件、

延元元年四月二日　道忠（花押）〇城宗廣〇結

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合

八百十文　借宿五郎殿（三川國豐原庄若林郷段錢）　七百五十五文　大草次郎左衛門殿（三川國大草郷段錢）　百二十五文　伊勢國幡入道殿（三川國赤羽根郷段錢）　九百五十文　彥部近江守殿（三河國設樂郡內黑瀨郷段錢）　壹貫文　朝倉左京助殿（三河國寶飯郡爲任郷段錢）　五百五十五文　天花寺領（三河國[illegible]谷郷段錢）　貳貫五百八文　山下上野入道殿（參河國保久郷段錢）　四貫七百五十文　七條金光寺領之內〇（三河國中山之郷段錢）〇節略

〔郡名一覽〕（御料私領）三河國（三州北西一里半）　八郡

高三拾八萬三千四百拾三石四斗四升貳合三勺　千貳百六拾七ヶ村

●苅屋（八十二里）　●吉田（七十二里）　●擧母（七十九里）　●岡崎（七十七里）

●西尾（八十里■）　●田原（七十五里九丁）　○奥殿（八十里）　○西大平（七十六里）

○畑村　☒新城（菅沼織部正）　☒西郡（松平主水）　☒大嶋（中島與五郎）

☒松平（松平太郎左衛門）　☒長澤（松平源七郎）　)(○寺部（尾州一万石）　渡邊半藏

∧赤坂（七十九里）

〇拔ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ

〔郡國提要〕三河　八郡千二百九十二村　（御料私領）高四十六万六千八十石七斗四升六合八勺

額田郡百六十八村　加茂郡三百四十七村　碧海郡百二十九村　幡豆郡　百五十一村　寶

飯郡百八村　設樂郡二百二十九村　八名郡六十五村　渥美郡九十五村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

三河　加茂郡明川村、足助村、酒呑村九久平村、設樂郡小野村、身平橋村、雙瀬村、出澤村、下下村、新門下柳村、碧海郡渡刈村、舳越村、矢作村、高足郡、渥美郡吉胡村、幡豆郡生田村、巨海村、八名郡嵩山村、月ケ谷村、寶飯郡當古村、雨谷村、引佐郡、祝田村、形部村、加茂郡擧母、

〔夫木和歌抄 三十一〕たけの○や○の○さ○と○ 三河里

三河國名所歌合竹屋の里　藤原道經

みどりなる色もかはらでよのつねにいくよかへぬるたけのやの里

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕合

四百文　岩堀修理殿 三川國西郡中村段錢　一貫二百五十文　大和彌九郎殿 三河國一木村之段錢　參貫五百文　設樂越中守殿 三河國下鄕河路村段錢 ○中略

〔東照宮御實紀 一〕かけまくもかしこき東照宮のよつて出させ給ふその源を考へ奉れば、○中略 有親の子を三郎親氏といふ、新田の庄にひそみすまれたりしが、京鎌倉より新田の黨類を搜索ひまなかりしかば、この危難をさけんがため、故鄕をさすらへ出られ、○中略 三河國大濱の稱名寺に寄寓せられ、こゝにうき年月を送られし間に、○中略 其頃同國。松平村。に、太郎左衛門信重とて、これも近國にかくれなき富豪なり、たゞ一人の女子ありしが、いかなるゆへにか、婚嫁をもとむる者あまたありしをゆるさで年をへしに、今親氏やもめ居し給ふと見て、其女にあはせて家をゆづらんとこふこと頻なり、親氏もとより大志おはしければ、かの酒井村にて設け給ひし忠廣に酒井の家をゆづり、其身は信重が懇願にまかせ、松平村にうつり、其女を妻とし、その讓りをうけて、松平太郎左衛門となのられけるが、○下略

〔賀茂注進雜記 下神領〕同〇壽永三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

參河國　小野田庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、猶可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年二月十九日癸酉、南御堂事始也、〇中略申剋番匠等賜祿、被引御馬云々、其後熊野山領、參河國竹谷、蒲形兩庄事、有其沙汰、

〔吾妻鏡 六〕文治二年十月一日甲戌、賀茂別當領出雲國福田庄、石見國久永保、參河國小野庄等、成御下文、被遣社家、當宮事、二品〇源頼朝御歸依異他之故也、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年十月十七日戊戌、齒御療治事、頼基朝臣注申之、其上獻良藥等、藤九郎盛長傳進之、彼朝臣者、參河國羽渭庄、爲關東御恩所令領知者也、

〔三河妙源寺文書〕奉寄進三河國平田庄桑子左近五郎屋敷幷伍事

右於畠者、爲太子堂職地之上者、至于子々孫々、不可成妨、仍所奉寄進如件、

建武參年十二月五日　　物部熙氏 花押

〔參河國古蹟考 一〕御津神社〇中略　當社ニ古鐘アリ、其銘ニ云、日本國三州御津庄大明神洪鐘也、述一偈而銘之、〇中略

享德元年壬申十月十五日

溜封

當庄刺吏　細川兵部少輔源朝臣　大願主　藤原政家〇中略

又鰐口アリ、銘ニ奉寄進三州御津庄船主大明神御寶前、于時万治三庚子暦三月十五日トアリ、〇中略

奉懸鰐口總庄大明神御寶前、三州寶飯郡御津庄信心衆等、于時永祿元戊午八日吉月禰宜成政氏政守規　大工南金屋宗次トアリ、

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕合

八百十文　借宿五郎殿三川國豐〇原〇庄〇若林鄕段錢　四貫五百文　慈恩庵領三川國宇〇利〇庄〇段錢

一貫百五十文　堤新次郎殿〇三河國重〇原〇庄〇之内鄕段錢〇節略

〔今川文書〕可早被知行參川國須〇美〇保〇政所職事

右守先例、可被致其沙汰之状如件、

建武三年十月十一日　滿義花押〇吉良

今川九郎殿〇氏兼

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕合

壹貫六百文　莊修理亮殿三川國莊〇山〇保〇段錢　四貫七百五十文　富永彌六殿三河國設樂郡之内富〇永〇保〇段錢〇

節略

〔慶應元年武鑑〕松平刑部大輔信古溜間格四品　七万石　居城參州渥美郡吉田江戸ヨリ七十二里永祿七、酒井左衞門尉忠次、同左衞門尉家次、天正十八、池田三左衞門尉輝政、慶長五、松平玄蕃頭家清、同民部大輔忠清、同七、松平主殿頭忠利、寬永九、水野隼人正忠清、同監物忠善、正保二、小笠原壹岐守忠知、同山城守長頼、同佐渡守長重、元祿十、久世讃岐守重之、寶永二、牧野備前守成春、同大學成央、正德二、松平伊豆守信祝、享保十四、松平豐後守資訓、寬延二ヨリ松平伊豆守信復、以後領之、

松平主水正乘秩帝鑑間從五位上　六万石　居城參州幡豆郡西尾江戸ヨリ八十里餘田中兵部大輔吉政、慶長七、本多縫殿助康俊、元和三、松平左近將監成重、同六、本多下總守俊次、同十九、太田備中守資宗、正保二、井伊兵部少輔直之、万治二、増山彈正少弼正利、同兵部少輔利須、寬文

國數石高

三、土井兵庫頭利長、同伊豫守利意、同淡路守利房、同伊豫守利信、延享四、三浦主計頭義次、同志摩守明次、明和元ヨリ松平和泉守、乘祐以後領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕本多美濃守忠民 溜間從四位侍從 五万石 居城參州額田郡岡崎 江戸ヨリ七十七里

原隱岐守居、慶長五、田中兵部少輔吉政、同年、本多豐後守康高、同豐後守康重、同伊勢守忠利、正保二、水野監物忠善、同右衞門大夫忠春、同肥前守忠盈、同和泉守忠之、同監物忠輝、同監物忠辰、同和泉守忠任、寶曆十二ヨリ松平周防守康福、明和六ヨリ本多中務大輔忠粛、以後領之。

雁間朝散大夫 土井大隅守利善 二万三千石 居城三州碧海郡刈屋 江戸ヨリ八十二里

水野和泉守忠重居、慶長九、水野日向守勝成、元和元、水野隼人正忠清、寛永九、松平主殿頭忠房、慶安二、松平能登守定政、同四、稻垣攝津守重綱、同藤助重昌、同信濃守重昭、同對馬守重富、元祿十五、阿部伊豫守正春、同民部正員、寶永七、本多中務大輔忠良、正德二、三浦壹岐守明敬、同壹岐守明喬、同志摩守義次、延享四ヨリ土井伊豫守利信、以後領之。

帝鑑間 內藤金一郎 二万石 居城參州加茂郡擧母 江戸ヨリ七十九里

延寶五年本多氏忠利、以後領之、寛延二、同兵庫頭[illegible]與遠州相互替テ、寛延二當主依台命領之、

帝鑑間朝散大夫 三宅備後守康保 一万二千石餘 居城參州渥美郡田原 江戸ヨリ七十五里九丁 三河通

當城者、明應年中築之、戸田彈正左衞門宗光、彈正忠憲光、同左近尉政光、同彈正少弼康光、天正十八、池田輝政領家臣伊木淸兵衞忠次居、慶長六、戸田土佐守忠次、同土佐守高次、同因幡守忠能、同伊賀守、天草ニ移、寛永年中、三宅土佐守康勝、以後代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕大岡越前守忠敬 菊之間朝散大夫 一万石 在所三州額田郡西大平 江戸ヨリ七十六里

寛延元ヨリ越前守忠相、以後代々領之、○節略

〔倭名類聚抄 五國郡〕參河國 ○註略 管八 田六千八百二十町七段三百十步

〔伊呂波字類抄 見國郡〕參河國 管八(中國)本田七千五十四丁

〔海東諸國紀〕參河州 郡八、水田八千八百二十町、

〔みかは雀 二〕參河八郡

碧海郡 高七万八千七十五石八斗五升五合、御朱印寺三十六本、同社廿一ヶ所、 百卅四村

賀茂郡 高五万九百四十八石八斗九升七合、御朱印寺一本、同社一ヶ所、 三百五十一村

額田郡 高四万二千八百十石四斗五升四合、御朱印寺廿六本、同社九ヶ所、 百五十二村

幡頭郡 高四万六千六百十八石貳升七合、御朱

出擧稻

印寺六十本、同社十三ヶ所、百廿四村　寶飯郡高五万千八百七十八石貳斗貳合、御朱印寺十八本、同社九ヶ所、百卅七村　設樂郡高二万五百十四石四斗五升六合、御朱印寺二本、百六十五村　八名郡高一万九千三百六十五石七斗四升四合、御朱印寺十三本、同社十一ヶ所、五十二村　渥美郡高四万六百七十四石八升七合、御朱印寺六十六本、同社廿一ヶ所、八十二村

高都合卅五万八百八十五石九斗二升　外中古新田三万石餘村高未ㇾ詳

御朱印三河之分　高壹万千三百九十五石五斗七升二合　御黒印并

此譯　寺高七千七百十六石五斗六升七合　社高三千二百八十一石六斗五合

寄附寺社　高三百九十七石四斗

〔三河國二葉松 一〕參河國八郡　當代高三十五万八百八十石五升八合

碧海郡　高七万八千七十石三斗三升八合　播豆郡　高四万八千六百十八石二升七合

加茂郡　高五万九百八石九斗三升七合　額田郡　高四万三千九十四石九斗六升三合

寶飯郡　高五万二千二百六十石六斗六升七合　設樂郡　高二万五百十四石六斗五升六合

八名郡　高一万八千六百九十石三斗八升三合　渥美郡　高四万六百七十四石八升七合

〔和漢三才圖會 六十九 參河〕八郡　三十五万八百八十五石餘

〔官中秘策 二〕三河國　八郡○中略

一石高三拾八万三千四百拾壹石餘

〔吹塵錄 五 人口及國高〕天保度御國高調○中略

三河國御料私領　一高四拾六万六千八拾石七斗四升六合八勺

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

參河國正稅公廨各廿万束、國分寺料二万束、修理志摩國國分寺料三千束、文殊會料二千束、修理地溝料三万束、救急料二万二千束、

國產貢獻

〔倭名類聚抄 五國郡〕參河國(〇中略) 管八(中略)正公各二十萬束、本稻四十七萬七千束、雜稻七萬七千束、

〔儀式 四〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國(每國有レ符)

應レ造二瓮器一(〇中略)

參河國　等呂須岐卌口　都婆波卅二口　多志良加八口　山坏小坏各六十口　巳豆伎毬各六十口(〇中略)　已上人給料

〔延喜式 內藏十五〕諸國年料供進(〇中略)　調(絁〇)二百疋(白一百疋、參河國所レ進、〇中略)　白絲二千八百八十絢(二千絢、參河國所レ進、〇中略)　緋(中略)參河(中略)伊豫十五箇國各二合

〔延喜式 民部二十三〕年料舂米(〇中略)　參河國(大七百石〇中略)

年料租舂米(〇中略)　參河國(一千石〇中略)

年料別貢雜物(〇中略)　參河國(筆一百五十管、紙麻十斤、黃檗一百六十枚、〇中略)

諸國貢蔬菜次(〇中略)　參河國十四壺(四口各大一升、十口各小一升、〇中略)　右八箇國爲二第一番一(丑未年、〇中略)

交易雜物(〇中略)　參河國(白絹百廿疋、鹿革六十張、櫃二合、苧九十斤、荏子廿石、胡麻子三石、鹿角菜二石、海松五十斤、雞冠菜廿斤、海藻根十斤、青苔五十斤、鳥坂苔五十斤、於胡菜廿斤、那乃利曾五十斤、)

〔延喜式 主計二十四〕凡貢夏調絲者、(〇中略)　參河二千絢、(大甞、〇中略)並七月卅日以前納訖、(〇中略)

參河(〇中略)　右十二國並上絲(〇中略)

參河(〇中略)　右廿九國輸絹(〇中略)

參河國(行程上十一四日、下六日)

調、緙羅、㡡羅各一疋、一窠綾十五疋、二窠綾五疋、犬頭白絲二千鉤、(夏調)雜魚楚割二千五百五十一斤、鯛脯一百斤、鯛楚割九十斤、貽貝鮨三斛六斗、自餘輸二白絹一、　庸、韓櫃十合、(塗レ漆著レ鐵二合、白木八合、)自餘輸二米鹽一、　中

男作物、麻一百斤、黄蘗三百斤、紙、紅花、席、胡麻油、鳩腊、雜魚腊、海藻、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〇中略

參河國廿一種　甘遂十斤、獨活、薺苨各二斤、桔梗卅八斤、白朮卅斤、茈胡、厚朴各三斤、木斛五斤、松脂四斤八兩、地楡、黄耆各一斤、伏苓六斤、桑螵蛸三兩三分、署預二斗、麥門冬五升、桃人一斗、胡麻子三合、蜀椒一斗、栢子人一斗九合、白殭蠶二兩、支子大二斗、

〔延喜式内膳三十九〕諸國貢進御贄〇中略、中宮准此

節料〇中略　參河國正月三節各三擔〇中略　右參河國進雑〇中略

年料〇中略　參河稚海藻一擔四籠、籠様長一尺二寸、廣八寸、深四寸、他皆同此〇中略　右諸國所貢、並依前件、

參河國、保夜一斛、

〔毛吹草三〕三河

ギン　雲母モロヲロシ　蜊アサリ　寄居虫ガウナ　海鼠腸コノワタ　苅屋白魚カリヤノシロウヲ　岩堀菱イハホリビシ此菱角二ツアリ、味勝タリ、　名倉砥ナグラド

田原矢根　伊羅期碁石貝イラゴノゴイシガイ　稚海藻チカイソウ

〇按ズルニ、日本鹿子、和漢三才圖會等ニハ、右ノ外ニ足代紙、芋川温飩等ヲ擧ゲタリ、

〔三河國二葉松三〕參河國土產名物器財部

一碧海郡　大濱鯆　苅谷白魚　同酒　重原土器

一播豆郡　佐久島海鼠腸　同小海羅靈爪鹿尾藻、小島龍海鮒、　錯石

一賀茂郡　松平漬松茸　同漬蕨　擧母綿　足助紙漉

一額田郡　岩堀菱有角二ツ　同鮒　平口ノ魚　浦邊糯米　大平鮎　宮崎鮎　羽栗山雲母　岡崎弦差、菅生海工イモリ、

一寶飯郡　穗蓼穗生蓼也、被種盛　前芝白魚　御馬蠣　高礒苔ノリ　同柴胡　犬飼蠟　松茸　大島小海羅　竹島貝蛃　同海松　御津蓴菜一名奴名菜　金谷海工　篠田土器造

一八名郡　大野硯石　足代紙（作田吉）　温泉（能止瀬今代）　石灰（嵩山）

一渥美郡（和地海藻、同胎貝）　五拾子恭石　同石貝（書云亡貝）　同坊風（亀山）　連根　大崎串蝌　飛島島駒

同蝌貝　同藻江澤　小海蘿　田原刀鍛冶（田原文珠、今世斷絶）　同鐔鍛冶（名赤松、上同）　燧石（大打坂）

一設樂郡（奈眞山ヨリ出、住ニ云河合砥石三川山、段戸山ヨリ出ル）　鍛鍛石（銘云竹下五部、今世斷絶）　鐵砂（俗名鐵利古、古戸山ヨリ出）　皺文（以中葉造ヒキハメ也、今世斷絶）　木葉石（長江村黒瀬山ヨリ出）　カリヤス（津具山ヨリ出）　作手蕨水品方（下津具山武節）　石貝（方瀬山ヨリ出）　辛

灰（ナマキ葉カタキ類ヲ以テヤキ用）　蕨粉（羽布村ヨリ出ル）

諸木部

一段戸山（設樂郡）松椴檜　一雙瀬（設樂郡）松檜雜木　一神田山（同）松檜　一大高山（賀茂郡）松檜椴

一川合山（同）松檜椴雜木　一大谷山（同）松檜椴雜木

〔續日本紀 五元明〕和銅五年七月壬午、令(略)○中 參河(略)○中 等二十一國、始織綾錦、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年八月己酉、參河國獻白鳥、

〔今昔物語 二十六〕參河國始犬頭糸語第十一

今昔參河國□郡ニ一人ノ郡司有ケリ、妻ヲ二人持テ、其ニ蠶養ヲセサセテ糸多ク儲ケル而ルニ本ノ妻ノ蠶養何ナル事ノ有ケルニカ、蠶皆死テ養得事无リケレバ、夫モ冷カリテ、不寄成ニケリ、(略)○中 其家ニ白キ犬ヲ飼ケルガ(略)○中 其前ニテ此蠶ヲ物ノ蓋ニ入テ、桑咋テ見居程ニ、此犬立走テ寄來テ此蠶ヲ食ツ、(略)○中 此犬鼻ヲヒタルニ、鼻ノ二ツノ穴ヨリ白キ糸二筋一寸許ニテ指出タリ、此ヲ見ニ恠クテ、其糸ヲ取テ引バ二筋乍ラ絡絡ト長ク出來レバ、篗ニ卷付ク、(略)○中 四五千兩許卷取テ後、糸ノ畢被絡出ヌレバ犬倒テ死ヌ、(略)○中 其犬埋シ桑ノ木ニ蠶繭無量ヲ造テ有、然レバ亦其ヲ取テ糸ニ引ニ微妙キ事无限、郡司此糸ノ出來ケル事ヲ、國ノ守□ト云フ人ニ語テ出シ

タリケレバ、國ノ司公ニ此由ヲ申シ上テ、其ヨリ後犬頭ト云糸ヲバ彼國ヨリ奉ル也ケリ、其郡司ガ孫ナム傳ヘテ、今其糸奉ル竈戸ニテハ有ナル、此糸ヲバ藏人所ニ被ㇾ納テ、天皇ノ御服ニハ被ㇾ織也ケリ、

〔兵範記〕仁安三年七月六日乙未、藏人信廣申ㇾ上犬頭糸解文二通、下官信範〇平取之、先内覽、次持ㇾ參院ㇾ奏聞、次啓ㇾ皇太后宮御方、件糸自ㇾ參河國衙ㇾ一向調進、四百勾、總數二千兩、別五兩云々、勾近年以後、三條女御御領碧海庄立券之中、被ㇾ籠ㇾ此所土、仍彼庄分進ㇾ六十勾ㇾ、國領分進ㇾ三百四十勾、仍解文有ㇾ二通ㇾ也、

人口

〔官中秘策〕二 三河國 八郡〇中略

一人數四拾壹万九千貳百八拾三人
内 男貳拾万八千四百六人 女貳拾壹万八百七拾七人

〔吹塵錄〕五 人口及國高 文化元甲子年諸國人數調〇中略

一人數四拾貳万六百九拾七人 高三拾八万三千四百拾三石餘 三河國
内 男貳拾万七千四百六拾六人 女貳拾壹万三千貳百三拾壹人〇中略

弘化三丙午年諸國人數調〇中略
御料私領一人數四拾三万千八百人 高四拾六万六千八拾石餘 三河國
内 男貳拾壹万四千七百三拾人 女貳拾壹万七千七拾人

風俗

〔人國記〕三河國

三河之國風俗、氣勝テ人之長ケ十人ニ七八人ノビズ、其言葉イヤシケレドモ實義也、人ト物ヲ談ズルニ、其事トゲズト云事ナシ、若シ違却スル事アレバ、其子細ヲ理ル風俗ニ而、子ハ親ヲシチ、親ハ子ヲ耻テ、虛談スル事ヲ禁ズルトイヘドモ、偏屈ニ而我言ヲ先トシ人之述ル處ヲ不ㇾ待而是ヲ談ジ命ヲ終之族多シ、亦自然ト氣質之邪僻スクナキ人モ有、我心ヲ知テ吾ニ勝人アレバ、諸人是ヲ崇敬スル形儀也、別而北三州之人尖ナリ、尾州ニ隣ルトイヘドモ、ソノ氣質亦勝タリ、武士之風

儀善多シテ惡スクナシ、女モケナゲニシテ恥ヲ知レリ、

〔日本鹿子 六〕參河國名所舊跡之部

八橋　岡崎の宿よりちりうの宿へこゆる中間より、半路ばかり北のかた、八橋と云村の中にあり、南より北へ流るゝ小川にわたしたる橋なり、むかしなりひらの朝臣、此橋の澤邊なるかきつばたを見て、たびの心をよめる歌、

から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵來ぬる旅をしぞ思ふ

いかなるゆへにや、此在所になりひらの石塔なりと云傳て、今にあり、

花の瀧　八橋の村より三町餘、ひがしのかたに有之、

矢作の里　岡崎の宿より西の出はづれに河あり、矢はぎの橋と云、此橋をこゆれば、矢はぎの里なり、東やはぎ、にしにしやはぎと云、ひがしのかたの田中にやぶ有、むかし矢はぎの長がすみし跡とてあり、此所を矢はぎと云事は、むかし日本武の尊東夷をほろぼさんとて此所にくだり、矢を多く作らせ給ひしより、此名ありと云傳なり、

長居せそ心していよあづさ弓矢はぎの川の葦の一むら

宮地山　矢作の里より近し、北向の里也、東に川あり、山は高からず、後撰戀のうたに、

君があたり雲井に見つゝ宮地山打こえゆかんみちも知らなくに

二村　宮地山ちかくなり、千載夏の歌に、權中納言俊忠、

五月闇二村山のほとゝぎす峯つゞきなくこゑを聞かな

衣の里　二村よりは北也、行程一里ばかりなり、

程ちかく衣の里も成にけり二村山を越てきつれば

豊河　今橋と云里より北なり、三河の國の北は山つゞき也、八橋と云所より遠江の國高師山の

ふもとへ出る中間、北のかたに大山あり、其ふもとに有河也、

狩人の矢はぎに今宵やどりなば明日やわたらん豐河の浪

星野　豐河より東のかたにある名所なり

花園山（ハナゾノ）　然菅渡（シカスガノワタリ）　荒野（アレ）　右の分、在所いまだ志れざる也、

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒○中略　參河國五十人○中略

諸國器仗○中略　參河國甲三領、横刀七口、弓卌張、征箭卌具、胡籙卌具、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年三月甲子、詔東國國司等曰、○中略　有百姓臨向京日、恐所乘馬疲瘦不行、以布二尋麻二束、送參河尾張兩國之人、雇令養飼、乃入于京、於還鄕日、送鍬一口、而參河人等不能養飼、翻令疲死、○下略

〔梧窻漫筆拾遺〕三河の武士

兩度天下を取りたれども、此事世に知れるものもなく、まして記載せるものもなし己卯文政二年の秋、予○錦城太田先主人吉田の松平侯の扈從として、三河に一年在留せり、是れにて始めて此事を知りたり、さて新田の庶流は、世良田德川を始として、皆上州新田郡の在名なり、里見は義俊流なり、山名は義範伊豆守山名流なり、是は新田正統大炊助義重の兄なり、故に遠く隔たりて、今の上州高崎の南に山名あり、北は里見上中下三村かあり、其他は義貞擧兵の時、天狗山伏の催促せる、三國峠を越て越後の羽川鳥山等なり、然るに下野足利郡に足利と云ふ處はあれども、足利庶流の人は、村名一もなし、少き時天明七丁未予二十三に、毛の野に浪遊して、此事を不審に思ひたれども、誰ありて此等の事を辨知せる人もなし、三河に在留して、其輿圖を披見すれば、足利庶流第一たる、仁木細川は額田郡、矢矧川の東に並びたる村名なり、吉良、一色、今川、荒川、戸ヶ崎まで幡頭郡の村名なり、されば鎌倉の初に、足利庶流の人々を、此國に封じたり、細川、一色の人々、又已の次男三男を分封せし地と

見えて、三河の國中に、一色、細川と云へる在名夥しく見えたり、元弘、建武の亂にて、尊氏天下を領し給ひ、慶長の亂にて、御當家天下を領し給ふ、三河武士の兩度まで天下を經營したること奇と云ふべし、妙と云ふべし、

名稱

遠江國

遠江國ハ、トホツアフミト云ヒ、後ニトホタフミト云フ、東海道ニ在リ、東ハ駿河、西ハ參河、北ハ信濃ニ界シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ十八里、南北凡ソ二十里、其地勢ハ、一般ニ山嶽多ク、特ニ北部ニハ赤石山脈ニ屬スル高峻連亙シ、西南ニ走ルニ從ヒ、漸次峻嶮ノ度ヲ減ズ、此國ハ、古ヘ國府ヲ豐田郡ニ置キ、濱名、敷智、引佐、麁玉、長上、長下、磐田、山香、周智、山名、佐野、城飼、蓁原ノ十三郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、初メ長上、長下ノ二郡ハ、長田郡ト稱セシガ、和銅二年ニ之ヲ分置シ、後更ニ長下郡ヲ長上郡ニ併セ、又山香郡ヲ周智郡ニ合シ、城飼郡ヲ城東郡ニ改ム、明治維新ノ後、濱名、敷智、引佐、長上ノ四郡、及ビ麁玉郡ノ一部ヲ廢合シテ引佐、濱名ノ二郡ト爲シ、又豐田、山名ノ二郡、及ビ麁玉郡ノ一部ヲ磐田郡ニ、佐野、城東ノ二郡ヲ小笠郡ニ併セテ六郡ト爲シ、靜岡縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕遠江 止保太阿不三

〔饅頭屋本節用集 止天地〕遠江 遠州

〔武備志 二百三十一日本考〕遠江 撓多[illegible]

〔萬葉集 十四東歌〕譬喩歌

○等○保○都○安○布○美、伊奈佐保曾江乃、水乎都久思、安禮乎多能米氏、安佐麻之物能乎、

右一首遠江國歌

〔枕草子十二〕ある女房、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、同じ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、親などもかけて誓はせ給ふ、いみじき空言なり、ゆめにだに見ずとなんいふ、いかゞいふべきといふと聞きて、

ちかへきみとほつあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや

〔倭訓栞前編十八〕とほつあふみ　倭名抄に、遠江をよめり、遠つ淡海の義也、枕草紙の歌にはしか見えたり、たとつは通音、つあ反た、はふ反ふ也、万葉集に、とへたほみとも云へり、今はとほたふみとよめり、皆音のつゞまりたる也、神名式盤田郡に、淡海國玉神社みゆ、もと國に湖ありしが、永正七年に、地震洪水の變ありて、湖海一に通せしより、今は名のみなりき、山つなみにて寶螺の出たるにや、今切の渡りといへり、もとは虎關の詩に、左海右湖同一碧、長江合含兩波瀾と作れり、

〔古事記傳七〕遠江國造、師〇賀茂眞淵說に、此記〇古事記に國名を遠江など二字に約て書るは、後人の爲なり、其は後に定まりしことなれば、此記には必遠淡海（トホツアフミ）など、有べきわざなりと云れき、今考るに、此記は凡て國地名、或は一字三字にも書、又二字に書るも、多くは後に定れる字と異なり、此古の書格なり、然るに遠江など後文字の如く書る所に稀にあるは、淡海と書ると准へて思ふに、信に後人の改めしことゝは見えたり、〇中略されどかの和銅六年よりやゝ前にも、國名などはかづかづ文字を擇び、又二字に約られしことも有しも知がたければ、遠江なども決て後人の爲とも定めがたくもあれば、今は舊の如くておきぬ、されど古の書格は、必師說の如く有しことぞかし、〇註略和名抄に、遠江止保太阿不三とあるは、阿字衍なり、登保都阿布美を約むれば登保多布美都阿を約めて多なりなり、今人も然云ぞ、萬葉十四丁十五に等保都安布美、同二十丁十六に等保多保美などもあり、さて此國には、古湖ありしを以、此名を負り、近江國の京に近きに對へて遠とは云なり、

位置

疆域

〔諸國名義考 上〕遠江

和名抄に、遠江、止保太阿不三、國府在豐田郡、名義は、或書に引る遠江國風土記の逸文に、近江始書淡海、有大江、自帝都近、故改近江、又遠江始書遠淡海、此國有大江、自帝都遙遠、故改名遠江とあり、もと阿波宇美なりしを、後に京よりの遠近によりて遠つ淡海、近つ淡海とせられたるを、必用二字の例なれば遠江近江と書る事とはなりぬ、さるを和名抄に止保太阿不三とあるは轉約なるを、後世止保多不三と云り、いよゝ約りたるなり、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

遠江濱松 旅籠町 極高三十四度四十二分半、經度東一度五十八分半、從東都 東海道 六十八里九町四十九間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

遠江　相良街　三四度四一分三〇秒　横須賀　三四度四一分〇〇秒

濱松　三四度四二分三〇秒　舞坂　三四度四一分〇〇秒

掛川　三四度四六分〇〇秒　見付　三四度四三分三〇秒 〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒 〇中略

遠江　濱松　東一度五八分四〇秒

〔遠江國風土記傳 一〕國之大體、南陽北陰、日經限本坂峠與大井川、日緯限灘大海與青崩山、西東一十八里廿七町、海路七十五里、即遠江灘 〇中略 南北一十九里、南自欠塚濱、北至信濃堺青崩山峠行程、

〔日本地誌提要 十三 遠江〕疆域　東ハ駿河、西ハ三河、北ハ信濃、南ハ海ニ至ル、東西一十八里、南北二十里、

〔日本靈異記 中〕藥師佛木像流水埋沙示靈表縁第卅九

島嶼

駿河國與遠江國之堺有河、名曰大井河、其河上有鵜田里、是遠江國榛原郡部內也、

〔日本實測錄島嶼九〕遠江國榛原郡　遠淵　足立岩　御前瀨

敷知郡　實測　辨天島從東岬至北岬二十三町四十三間　遠淵　ソチ島　礫岩

地勢

〔易林本節用集下〕遠江遠州上、管十四郡、東西二日半、山河鄉里相交、地七尺、種到千倍、又萬倍、大上々國也、

〔遠江國風土記傳一〕所以號遠江者、上古國之境區有淡海、去皇都遙遠、故號遠津阿不美、淡海則磐田海也、淡海國玉神社在于磐田郡海之西東原野、南瀨海、北大河、大河水落而潮不泝、沙土彌積、洲渚彌乾、變爲島、號長田郡、俗曰中部今度之、凡西東三里、南北五里、

道路

〔日本實測錄二街道〕從東京東海道至西京○中略

遠江國榛原郡金谷宿　一里二十五町二十三間至小夜中山三十五丁五間　佐野郡日坂宿　二里一町九間

懸川、三十四度四十六分、　二里二十町五十六間　山名郡袋井宿　一里二十二町三十間　磐田郡見付宿、三十四度四十三分半、　四里八町二十三間至天龍川岸一里二十八丁二十二間半、從川岸至濱松連尺町二里一十二丁五十三間

敷知郡濱松旅籠町、三十四度四十二分半、　二十一町五間半　若林村　二里一十五町二十間半

舞坂宿、三十四度四十一分　渡海直徑　一里三町四十八間　新居宿　一里二十五町二十三間半

濱名郡白須賀宿、三十四度四十一分半、　一里二十二町一十四間至國界一十一丁四間　三河國渥美郡二川宿○中略

從東海道濱松歷本坂至御油

遠江國敷知郡濱松連尺町　一里二十六町二十町　一本杉村至上島村三十四丁一十間　二里七町八間

引佐郡氣賀町、三十四度四十八分半、　二里二十一町五十九間　敷知郡三ヶ日村、三十四度四十八分、　二里六町三間至國界本坂峠一里二十二丁三間　三河國八名郡嵩山村

〔日本實測錄 沿海一〕從₌東京₋沿海至₌大坂₋ 略○中

遠江國榛原郡川尻村濱、(至₌川尻村宿所₋七町五十間)三十四度四十六分半、 二里三十町一十二間 相良町、三十四度四十一分半、 三里五町四十間 地頭方村(至₌御前崎₋三町九間、北極高三十四度三十六分、) 四里三間 城東郡成行村國安川口(至₌成行村宿所₋十三町七間、北極高三十四度四十分、) 二里八町二十六間 沖之須村(至₌横須賀本町₋廿一町一間、北極高三十四度四十一分、) 豐田郡鮫島村濱(至₌鮫島村₋二十町、) 一里三十四町四十五間(至₌駒場村₋一里一町四十六間、從₌駒場₋至₌天龍川口₋一十七町八間半、) 長上郡松島村濱、(至₌松島村宿所₋廿町、)三十四度四十一分、 一里二十三町 敷知郡堤村(至₌若林村₋二十二町二十一間、) 二里二十七町四十四間 舞坂宿(至₌辨天島₋二町五十二間) 一里二十六町二十九間 志都呂村(至₌入野村₋二十九町三十六間、北極高三十四度四十二分、) 一里一十六間 宇布見村(至₌山崎村₋徑測六町二間) 五里八町一十九間半(至₌山崎村₋一十四町四十三間) 上田村・六里一十六町一十間(至₌村櫛村洲岬₋一里二十六町一十八間、從₌洲岬₋至₌堀江村₋一里一十七町、) 引佐郡油田村(至₌氣賀₋一十七町十九間)二 二里二十五町一十五間 敷知郡佐久米村(至₌洲岬₋三町四十三間) 一里六町三十一間 大崎村、三十四度四十五分半、 二里七町五十五間(至₌瀬戸口₋二十一町六間) 三ヶ日村、(至₌街道₋二町二十五間) 五里二十八町五十七間(至₌瀬戸口、一里二十四町廿九間半) 新所東方村 二里一十三町一十二間半 新居宿 二里一十九町七間(至₌洲岬₋一里二十六町七間) 橋本村(至₌街道₋八町二十八間) 一里一十一町四十五間 濱名郡白須賀宿(至₌街道₋四町五十六間) 二里三十三町一十六間(至₌國界₋一十八町一十二間) 三河國渥美郡伊古部村濱

宿驛

〔延喜式 兵部二十八〕諸國驛傳馬 略○中

遠江國驛馬(猪鼻、栗原、引摩、横尾、初倉各十疋) 傳馬(濱名、敷智、磐田、佐野、榛原郡各五疋)

〔遠江國風土記傳 二敷智郡〕濱。松。宿。 倭名鈔訓₌波萬々都₋、昔鄉名也、東鑑(卷二)記₌濱松庄₋、又(卷十四)書₌引馬₋、今爲₌鄉宿驛之總名₋、阡陌二十五坊連₌肆、東照神君開基地也、

元濱松、引馬拾遺曰、謂₌野口八幡玄默等之地₋也、八幡社家曰、所₌以號₌濱松₋者昔八幡大神之御船著御之時、有₌白狐₋、採₌持於二箇松樹₋、而於₌古賀禰之原₋仕₌奉御先途₋也、然植₌一木於社邊₋、又植₌一本於御

船著御之海邊、名颯々松音羽松、依松號濱松者卽是緣也、

〔十六夜日記〕こよひはひくまのしゆくといふところにとゞまる、このところのおほかたの名ははま松とぞいひし、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、逸勢者〇中略承和九年、連染伴健岑謀反事、拷掠不服、減死配流伊豆國、〇中略逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年十月十二日癸巳、於岡部宿、進院宣請文、給按察大納言使、此程奉扈從、賜御請文、進以歸洛云云、十三日甲午、於遠江國菊川宿、佐々木三郎盛綱、相副小刀於鮭楚割、居折敷、以子息小童、送進御宿、十八日己亥、於橋本驛、遊女等群參、有繁多贈物云云、

〔田園地方紀原下〕永定メ　遠江田郡磐田郡

一高七百七拾壹石貳斗九升九合　見附宿

〔本朝俗諺志一〕一郡一村

遠州磐田郡見付宿ハ、高三千石餘の場所也、これ一郡一村の所也、諸國に又ありといふを不聞、

〔日本國郡沿革考東海道二〕遠江　古作遠淡海、上國、管十二郡延喜式十三郡千九十四村

榛原（百四十一村、延喜式等作蓁原、）　城東（百八村、本城飼郡、延喜式等作城飼、蓋中世折爲東西二郡、後復廢城西者、）　佐野（九十四村、作佐益、）　山名（百八村、養老六年二月、割佐益郡八郷置、或云今山名郡久努郷、卽古久努國造之地、）

周知（九十四村、古素知國、見國造記、延喜式等作周智、）　盤田（一村）　豐田（二百五十九村、延喜式不載、和名抄等載爲府治、蓋中世所置、）

長上（百二十村、本長田郡、和銅二年、紀、長田郡地界廣遠、民居遙隔、往還不便、辛苦極多、於是分爲二郡、）　麁玉（五村、和名抄云、今釋有玉、）

敷知（百二十一村、延喜式等作敷智、）　濱名（七村）　引佐（四十一村）

山香（元慶五年十月、割磐田郡置、）　長下（已上二郡、延喜式等載、永正七年八月地震大風雨、二郡共陷没爲海、新井君美曰、明應八年九月、洪水湖決、水涸成陸、今名今切者、卽其決處也、）

〔遠江國風土記傳序一〕私考舊記、遠江國造之祖、建比良鳥命也、檀原宮朝廷（神武）美志印命爲素賀國造、於

志賀高穴穗宮御代（成務）以物部連祖伊香色雄命兒印岐美命、定賜遠江國造、於筑紫香椎朝廷（仲哀）以伊香色男命孫印播足尼、定賜久努國造、（木）三箇國造、而久努素賀國號早廢、總爲遠江國、（其詳具國造記）國中南海、北山爲鎭、中原獻嘉瑞於奈良都、（元明）和銅元年有大嘗會供奉之例、靈龜二年、爲由機國、國司大伴宿禰牛養、大伴宿禰山守、櫻井王、於平安城巨勢朝臣總成、仁壽元年橘數雄等、任遠江守、正曆以後、井伊共賁男共保領當國、於鎌倉將軍之時、源義定爲國司、南北朝以後今川井伊二氏爲守護職、書記往々雖見、任國人、管府早廢、政要不傳、郡家莊園有口碑、鄕名敢不用、以村號通用焉、故自然忘舊名、

〔日本地誌提要（十三遠江）〕沿革　古ヘ國府ヲ豐田郡ニ置、（今ノ見附驛）鎌府ノ初、安田義定守護ヲ以テ州守ニ任ズ、建武中興、足利直義ヲ以テ守護トス、直義國ニ就ニ及バズ、親王成良（シゲナガ）ヲ輔テ鎌倉ニ鎭シ、兄尊氏ト共ニ反ス、延元元年、井伊道政、親王宗良ヲ奥山城ニ（引佐郡）奉ジテ勤王ス、後遷テ井伊谷城ニ居ル、州人叛テ尊氏ニ應ズル者多シ、是ニ於テ尊氏其將今川範國ヲ以テ守護トス、宗良去テ駿河信濃諸州ノ將士ヲ招徠シ、後吉野ニ赴ク、弘和ノ初、再井伊谷ニ來テ薨ズ、井伊氏終ニ今川氏ニ屬ス、範國死シ子貞世、孫仲秋（貞世ノ弟ナリ、貞世養テ子トス、）守護ヲ襲グ、應永中、將軍義持、斯波義重ヲ守護トシ、今川氏猶其東境ヲ領ス、永正ノ末、今川氏親、盡ク全州ヲ併セ、傳ヘテ孫氏眞ニ至ル、永祿ノ末、武田晴信駿河ヲ取リ、氏眞出奔シ、本州遂ニ德川氏ニ歸シ、徙テ濱松ニ治ス、其關東ニ遷ルニ及テ、豐臣氏、堀尾吉晴ヲ濱松ニ、山内一豐ヲ掛川ニ、有馬豐氏ヲ横須賀ニ封ズ、關原役畢リ、德川氏、三氏ヲ轉封シ、濱松ヲ松平忠頼ニ、掛川ヲ松平定勝ニ、横須賀ヲ松平忠政ニ賜フ、慶長十四年、三藩ヲ徙シテ、德川頼宣ヲ封ズ、元和五年之ヲ紀伊ニ移シ、再濱松、（高力忠房、後井上正春、）掛川、（松平定綱、）横須賀（松平重勝、）ノ三藩ヲ建ツ、寛永ノ初、掛川横須賀二藩ヲ轉封シ、德川忠長ニ駿河ヲ賜ヒ、本州（十二萬九千餘石）ヲ兼領ス、九年、忠長罪有テ收封セラレ、横須賀ヲ井上正就ニ、（後西尾忠成）掛川ヲ青山幸成ニ賜フ、（後太田資俊、）寶暦中、田沼意次（オキツグ）ヲ相良ニ封ジ、（其嗣意明、陸奥ニ徙封シ、意正ノ時復封ス、）凡テ四藩、王政革新、四藩ヲ安房

國府

總ニ徙シ、地皆靜岡藩ニ屬ス、別ニ一藩ヲ建テ堀江ト云（大澤基壽）既ニシテ改テ縣ト爲シ、又廢シテ濱松縣ヲ更置ス、

〔先代舊事本紀（十國造）〕遠淡海國造

志賀高穴穗（○成務）朝、以物部連祖伊香色雄命兒印岐美命、定賜國造、

久努國造

筑紫香椎（○仲哀）朝代、以物部連祖伊香色男命孫印播足尼、定賜國造、

素賀國造

橿原（○神武）朝世、始定天下時、從侍來人名美志印命定賜國造、

〔續日本紀（八元正）〕養老三年七月庚子、始置按察使、令（○中略）遠江國守正五位上大伴宿禰山守管駿河伊豆甲斐三國、

〔續日本紀（十三聖武）〕天平十年四月庚申、從五位下百濟王孝忠爲遠江守、

〔倭名類聚抄（五國郡）〕遠江國（國府在豐田郡、行程上十五日、下八日、）

〔拾芥抄（中末本朝國郡）〕遠江（上中）十三郡（○中略）　磐田府

〔遠江國風土記傳（六磐田郡）〕國府（天平年間所置國廳）

按、舊府當國府八幡之地、新府當城之崎、壽永建久年間、安田三郎義定任遠江守、住于玆乎、文治四年於引用水之論、書近隣熊山者、自城之崎相近焉、天文十年官府既廢矣、

〔吾妻鏡（二十五）〕承久三年六月三日丙辰、關東大將軍著畢遠江國府之由、飛脚昨日入洛之間、有公卿僉議、爲防戰被遣官軍於方々、仍今曉各進發、

〔十六夜日記〕こよひは、とをつあふみみつけのこふといふ所にとゞまる、里あれて物おそろし、かたはらに水の井あり、

郡

誰かきてみつけの里と聞からにいとゞ旅ねの空恐ろしき

〔大久保文書〕遠江國見付府之事

右本年貢百貫文ニ相定之處、以五拾貫文之增分、百姓職事訴訟申之間、停止代官一圓領掌畢者、每年百五拾貫文可納所、若於無沙汰者、則可令改易之者也、仍如件、

天文十五月五日

見付府　町人百姓

〔倭名類聚抄〕(五國郡)遠江國(○註略)管十三(○註略)濱名(波萬奈)、敷智(布知)豐田(止與太、國府)引佐(伊奈佐)麁玉(阿良多末、今稱有玉)長上(長乃加美)長下(准上)磐田(伊波太)山香(也末加)周智(末也)山名(也末奈)佐野　城飼(岐加布)蓁原(波伊波良)

〔延喜式〕(二十二民部)遠江國上(管)濱名　敷智　引佐　麁玉　長上　長下　磐田　山香　周智　山名　佐野　城飼　蓁原(○中略)右爲中國

〔遠江國風土記傳〕(一)郡壹十貳(延喜式、倭名抄、載十三郡、後世長上長下合、山香廢、隸周智、割蓁田、置豐田、)村壹千九拾三、驛家一拾貳、城三、關二、刹壹、(倭名抄鄉九十一、驛五、正保國繪村九百三十八、計、鄉混爲村、其神社鄉村宿驛、或變名移地、或水沒破壞、有無傳說者、)

〔皇國郡名志〕遠江國十四郡

濵名(ハマナ)　●荒井廿　●白スカ　●木坂　三ケ日　三ケ日　三界郡

敷智(フチ)　濱松　●マイ坂　△堀江　△味方原　南海向

豐田(トヨダ)　●川合　△光明山　●神澤　四十八セ　●豐村　△石打　△戊亥川　●雲名　●二俣　●西カシマ　國中ヨリ三界ニ至

引佐(イナサ)　△氣和廿　△伊谷山　三界

麁玉(アラタマ)　驛無シ　國中小郡

長上(ナガノカミ)　小郡天龍川下西邊處

長下　●天龍　掛塚　長ノ上ニ次ク

磐田(イハタ)　△見付　中泉　此二ケ村限リ　國中小郡

山香(ヤマカ) 森町 國中小郡

周智(スチ) ●戊亥 ●水サクガ ○秋葉 ●大瀧 ●市村 ●山住 ○同社 信界

山名(ヤマナ) ●袋井 海ニ付小郡

佐野(サノ) 掛川 ●日坂 ○小夜中山 國中

城飼(キカフ) 橫須賀 ●佐倉ヶ池 ○小笠山 日坂邊ヨリ入江出

蓁原(ハンハラ) ○相良 ●上長尾 ●金谷 ●大町 ●高クマ ●シトロ 駿信界大井川ニ添テ海ニ至

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕遠江

六國史古書				
延喜式	濱名(ハンナ)	敷智(フチ)	引佐(イナサ)	麁玉(アラタマ)
倭名抄	同(波万奈)	同(渕)	同(伊奈佐)	同(阿良多末 今称有玉)
拾芥抄	同	同	同	同
諸書	同(國元)	敷智(知) 敷知(國元)	同(知國元)	同(知國元)
郡名考	同(ハマナ)	敷知(フチ)	同(イナサ)	同(アリタマ)
天保鄉帳	同	同	同	同(アラマタ銘)
明治沿革帳	同	同	同	同
地誌提要	同	敷智(フチ)	同(イナサ)	同(アラタマ)
郡區編制	同	敷智	同	同

長田(續紀)		石田(續紀)			佐益(續紀)				
		伊波多(風土記)			佐夜(拾芥抄)				榛原(萬葉集)
長上(ナガノカミ)	長下(ナガノシモ)	磐田(イハタ)		山名(ヤマナ)	佐野(サヤ)	周智(スチ)	山香	城飼(キカフ)	蓁原(ハイハラ)
同([illegible])	同	同([illegible])	豐田	同([illegible])	同	同	同([illegible])	同([illegible])	同([illegible])
同	同	同		同	同	同	同	同	同
長上(知圓元)		同(圓元)	豐田(圓元知)	同(圓元知)	同(圓元知)	周智(知元)	周知(圓)	城飼(知)・城東(圓元)	蓁原(知)・榛原(圓元)
同(ナガミ)		同(イハタ)	同(トヨタ)	同(ヤマナ)	同(サノ)	周智(シユチ・スチ)		城東(シヤウトウ)	蓁原(ハイハラ)
同		同	同	同	同	周知		同(キトウ[illegible])	同
同		同	同	同	同	周智		同	同
同(アラタマ・チヤウノカミ)		同(イハタ)	同(トヨタ)	同(ヤマナ)	同(サノ・サヤ)	同(スチ)		同(キトウ)	同(ハイバラ)
同		同	同	同	同	同		同	同

〔明治十三年〕東京地學協會報告〔三〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

遠江○中略

陽成天皇元慶五年十一月五日割ニ磐田郡、置ニ山香郡、（民部式首書）是ニ於テ十三郡トナル、此十三郡ノ中、山香長下二郡ハ既ニ廢シ、又磐田郡ヲ割テ豐田郡ヲ置キ、且濱名、麁玉、磐田、周知、山名、五郡ノ地、大ニ古昔ト異ナリ、濱名郡六郷、今其地大抵敷知郡ニ入リ、僅ニ白須賀一驛ヲ存ス、麁玉郡四郷、其碧田赤狹二郷ハ、今豐田郡ニ入リ、覇(ハン)多(タ)郷（今中田村）ハ長上郡ニ入リ、僅ニ三宅一郷ノ地ヲ存セリ、豐田郡ハ和名鈔國郡部、敷智ノ次ニ豐田（止與太國府）トアリ、然レドモ既ニ管十三トアリ、豐田ヲ加フルトキハ十四郡ナリ、且郡郷部ニ此郡ナシ、蓋シ後人ノ竄入ナラン、今ノ盤田郡見付驛ハ、古ノ國府ナリト云フ時ハ、豐田郡分立ノ日モ、國府ハ必ズ變遷ナカルベシ、長下郡八郷、其地多ク詳ナラズト雖モ、大楊郷（大柳村アリ）ハ長上郡ニ存シ、老馬郷（老間村）ハ豐田郡ニ入リタレバ、其地此二郡ニ併セタルコト知ルベシ、遠江風土記傳ニ、此郡ノ貫名郷ヲ以テ、今山名郡貫名村ナルベシト云ヘリ、然レドモ其地甚ダ隔絶シテ、且中間ニ古ノ磐田郡ノ郷名アレバ、其説蓋シ誤ナリ、磐田郡十四郷アリ、飯寶郷重出セリ、蓋誤寫ナラン、飯寶ハ飫寶(オホ)ノ誤ニシテ、大之郷村アリ、今山名郡ニ屬ス、其曾能(ソノ)（今二宮村）小野(ヲノ)（小野田村アリ）小谷(ヲヤ)（小谷田アリ、今城東郡屬ス、山名郡ト接セリ、）ニ及飫寶ハ四郷ノ地、今山名郡ニ入リ、其入見(イルミ)（向坂中村ニ入見神社アリ）高苑(タカソノ)（高園村アリ）壬生（今二殿ノ地）野中（今神増野部等ノ地磐田原中ニアリ）神戸（中田村ナリ）五郷ノ地ハ、今豐田郡ニ存セリ、此ニヨリテ之ヲ見レバ、中世磐田郡ノ北方ヲ割テ豐田郡ヲ置キ、而シテ磐田郡南方ノ地、終ニ山名郡ニ入テ、今僅ニ見付一驛ヲ存セリ、山香郡四郷、皆今周智郡ニ入レリ、周智郡五郷、小山（村存ス）山田（同上）依智（不詳）大田（村存ス）ハ、今皆豐田郡ニ入リ、僅ニ田椀(タマル)（今田園郷）及衾(フスマ)

管十三　同　十三郡　十二郡　同　同　同　同

田（原本山名郡ニ屬ス、說前ニ見エタリ、）二郷ノ地ノミ本郡ニ屬シ、又古ノ山名山香二郡ノ地ヲ併セタリ、山名郡五郷、山名、（山梨村是ナリ、）宇知、信藝、（シヤ）荻戶（三郷未詳、）久努（クノ）（久野村）ノ地、今皆周智郡ニ入リ、而シテ古ノ磐田郡ノ南方ヲ以テ本郡トセリ、

古十三郡ノ中、山香長下二郡既ニ廢シ、十一郡トナリ、之ニ豐田郡ヲ加ヘテ、今十二郡トナル、但城飼郡今城東郡ト稱ス、

濱名郡

〔遠江國風土記傳 一〕濱名郡（波集郡、海西總號濱名、割濱名郡隸敷智郡者、寬永十七年以前也、）村貳、驛家壹、（南大海、西三河國堺、東北並敷智郡堺也、）高一千七拾九石九斗五升六合、（依元祿三年高帳、他郡准之、）敷知郡內、河別西、（古之濱名郡也、東入海、南大海、西北並山、三河國堺、限本坂峯、○中略）所以號濱名者不傳、（郡有猪鼻湖、與細江水通、呼河別四、井瀨海面淵濱者、知高師濱、）

〔東大寺正倉院文書 十六〕遠江國濱名郡輸租帳

濱名郡　依式造天平十二年輸租帳事

合郡內管田總壹阡捌拾陸町壹段壹伯肆拾伍步（○中略）

天平十二年十一月廿日（○署名略）

○按ズルニ、此輸租帳ノ全文ハ、政治部上編田租篇租調條ニ載ス、

敷智郡

〔遠江國風土記傳 二〕敷智郡（倭名鈔、濱名、）濱松庄（庄本字莊、李總紀曰、田莊是也、）合村百廿八、（海西村四十二、古濱名郡內有別記、）驛家二、鳴海東村八十六、驛家二、城一、南大海、西今切海、北引佐郡原、東植松堺、高二萬九千三百二十四石九斗四合、所以號敷智者、潤也、（細江之水爲潤、故號敷智乎、音繩（マイナハ）澤與猪木之間陸地驛路也、半途有庄堺石、石與村舘崎南北相對、是濱名與潤二郡之堺、敷智堺內有村、號姬田赤坂、柴江、舊荒井、應永十二年、明應八年、永正七年等、有大波、斷驛路、併鄰村水沒爲海、故二郡之舊地大變矣、長上與敷智二郡堺、亦古今不同、）

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年二月甲午、遠江國敷智郡古荒田卌三町賜阿保親王、

引佐郡

〔遠江國風土記傳 三〕引佐郡、（倭名鈔、伊奈佐、）渭伊庄、村四拾壹、驛家壹、關刻壹、東南限麁玉敷智二郡之山野、西限細江與引佐山、北限三河與遠江國二堺山峯也、應永十二年、明應八年、永正七年、寶永四年等、有

急波、細江變爲潮海、依之地形古今不同、　高壹萬貳千漆百陸拾玖石陸斗漆升貳合（依元祿三年高牒）　所以號伊奈佐者、基引佐山引佐細江、（郡内讀引馬野、故以引馬坂、略言乎、（引馬國造之名）又按、准出雲國伊奈佐之小濱、伊奈佐社、大和國伊奈佐山等名、萬葉集（卷十四）遠江國歌、秋伊奈佐保曾江、）

〔地名字音轉用例〕ンノ韻ヲナノ行ノ音ニ通用シタル例

いなさ　引佐（遠江）伊奈佐（イナサ）

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年九月廿五日丁亥、遠江國引佐、長上郡百姓、給復一年、

麁玉郡

〔遠江國風土記傳四〕麁玉郡（倭名鈔曰、阿良多末、稱有玉、）村五、　西限引佐郡都田原、北限豐田郡阿多古山、杉之本尾多加、東限宮口與小野柴本之田中、南限新原與平口之田野堺、　赤狹庄（元和以前書赤狹、寬文以後書赤蛇、）　高千肆百石零玖斗升伍合（依元祿三年之高牒〇中略）　所以號麁玉者、珠之所由、如有玉村說、（依古書寮郡堺者、南自有玉村、併欠下（欠崩爲岸）牛田（倭名反多）内野（神風宇治乃御厨）平口小松木船等、麁玉郡内也、北阿多古十八村、限三河國堺熊村、西原野、東河橫流於郡内、故喚麁玉河、號廣瀨河、按更科日記、是河自長元年間以來、離東岸流、號天龍河、其中島之村號中郡十八村、雖附豐田郡、於今喚赤狹庄、（中略）按麁玉郡内割東南北、以隸豐田長上、僅以五村立一郡者、年代未詳、）

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

和我都麻波（ワガツマハ）、伊多久古比良之（イタクコヒラシ）、乃牟美豆爾（ノムミヅニ）、加其佐部美曳氐（カゴサヘミエテ）、余爾和須良禮受（ヨニワスラレズ）、

右一首、主張丁麁玉郡若倭部身麿、

長田郡
長上郡
長下郡

〔遠江國風土記傳五〕長上郡（續日本紀長田郡、倭名鈔長乃加美、）村壹百貳拾參、驛家壹、　西限敷智郡堺植松、及有玉川渡場、北限麁玉郡堺平口、東限豐田郡安間、南限大海、　高貳萬五千七百貳拾壹石六斗壹升七合　所以號長上者、續日本紀（元明天皇）和銅二年紀曰、遠江國長田郡、地界廣遠遙隔、往還不便、辛苦極多、於是分爲二郡焉、（按、長田鄉以北爲長上、以南爲長下、乎、後混而復爲一郡、大田、貫名、通熊等、隔越而在山名郡也、郡中古今水破多、故舊傳說亡焉、天平寶字五年、麁玉河洪水損五郡鄉村田地、今役民造堤、而鄉村田地漸定矣、於今天寶堤之名存、）

〔續日本紀四元明〕和銅二年二月丁未、遠江國長田郡、地界廣遠、民居遙隔、往還不便、辛苦極多、於是分爲

二郡長、

〔東大寺正倉院文書十二〕山背國愛宕郡雲下里計帳（紙目裏書）
山背愛宕郡出雲鄉雲下里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君
姪王首姉賣年貳拾陸歲　丁女　右四人、遠江國長田上郡、

〔三代實錄八 清和〕貞觀六年三月四日庚寅、詔以內藏寮所領遠江國長上郡田地一百六十四町、施入貞觀寺、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌
可之古伎夜、美許等加我布里、阿須由利也、加曳我伊牟多禰乎、伊牟奈之爾志氐、
右一首、國造丁長下郡物部秋持、〇中略
和我都麻母、畫爾可伎等良無、伊豆麻母加、多比由久阿禮波、美都々志努波牟、
右一首、長下郡物部古麿、

〔三代實錄十一 清和〕貞觀七年九月十四日壬辰、勅以遠江國長下郡水田十二町施入貞觀寺、

〔遠江國風土記傳六〕磐田郡（倭名鈔伊波太）町貳、驛家（遠町）　古城壹、國府跡貳、（壹所屬豐田郡、壹所在磐田郡、）　西限中泉堺町、東限貝塚原三本松、各驛路也、南限今之浦與二之宮堺堤、北古驛路、（道上道下之中道也）　高千肆拾貳斛漆斗壹升漆合（正保圖牒書九百三十四石永定、今依元祿三年之高牒、）〇中略　所以號伊波太者、雖不傳其基、依倭實鄉名考之者、則約轉稻穗田之訓、而號伊波太也、以佳言負地名者、古命也、（非磐田之字義）

〔續日本紀六 元明〕靈龜元年五月乙巳、遠江地震、山崩壅麁玉河、水爲之不流、經數十日、潰沒敷智、長下、石田三郡民家百七十餘區、幷損苗、

〔日本靈異記中〕將建塔發願時生女子捲舍利所產緣第卅一
丹生直弟上者、遠江國磐田郡之人也、弟上作塔發願、未造其塔而歷淹年、猶睠顧果、每軫于懷、聖武天

皇御世、弟上年七十歳、妻年六十二歳、懷妊生ㇾ女、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜二年三月辛酉、遠江國磐田郡主帳無位若湯坐部龍麻呂、〇中略以ニ私物一養ニ窮民廿人已上一、賜ニ爵人二級一、

豐田郡

〔遠江國風土記傳 七 上〕豐田郡 倭名鈔止與太、國府 池田庄 本字莊 村貳百五十參 外無高村參 古宿壹 西限ニ長上郡堺池田庄圍一、在ニ庄塚一 東限ニ磐田郡堺中泉堺町一、南限ニ懸塚湊一、北限ニ信濃國堺青崩山一、 高五萬四百六拾貳石四升貳合六勺參才 依ニ元祿高帳一 所ニ以號ニ豐田一者、割ニ磐田郡一、改ニ豐國郷一、以置ニ豐田郡一、改名之年月書記脱漏、

山香郡

〔遠江國風土記傳 八〕山香郡 今北周智、山香郡者、元慶五年十月五日割ニ磐田郡一置ニ山香郡一、延喜式(廿二九卷、民部上)記山香郡名誤ニ雜周智一)鹿苑神社在ニ磐田郡一、鹿苑社者、與利郷六香社也、倭名鈔山香郡内在ニ四郷一、今也廢ニ山香一、爲ニ周智一者三拾七村、古今同地異名也、

周知郡内〇中略總村九十二、高貳萬三千一百八石九斗八升四合、依ニ元祿三年高帳一

南周智者、大田郷、鎚久保以南五十五村、山名庄也、續日本紀曰、養老六年割ニ佐益郡八郷一始置ニ山名郡一者是也、別記

北周智 昔山香郡 山香庄 訓山香、倭名也末加 村三拾七

南限ニ胡桃平一、北限ニ信濃國堺青崩山一、西限ニ天龍河邊平山一、東限ニ蓁原郡堺尾股京丸山一也、方自ニ氣田領家一度於ニ氣田領家一 在ニ大居庄圍一、於ニ奥山領家在ニ奥山庄圍一也、近世割ニ氣田奥山二郷之地一分ニ廿餘村一、隷ニ豐田郡一、郡堺如ㇾ圖、古證文曰、應永六年山香庄領家云々、同十六年山衙庄西手村云々、各天野氏之所ㇾ知也、

高四千三百貳石八斗八升三合 證田

傳曰、書式民部頭書 元慶五年十月五日、割ニ磐田郡一置ニ山香郡一、

〔掛川志稿 八周智郡〕古山香郡ノ地大略本郡〇周智郡ニ入ル、北ノ方犬居山中ノ諸村ハ古山香郡ナリ〇中略此山香郡ヲ中古山香庄ト號ス、應永六年、畠山左衞門佐ヨリ天野遠江入道ニ與ル文書云、山香庄領家職之事、東手之内藤川事、同十六年、鎌倉滿兼ヨリ天野左京亮ニ與ル文書云、山衙庄西手村

ノ內瀨尻大峯之事、明德四年、今川仲秋ヨリ長瀨駿河守ニ與ル書云、山香庄之內犬間、上長尾之事、藤川、犬間、長尾ハ榛原郡ノ北大井河ノ西ニアリ、今其邊ヲ總ジテ河根ト云、瀨尻、大峯ハ天龍河ノ上流ニアリ、今ハ豐田郡ニ屬ス、然レバ中古山香庄ト呼ビシ所ハ、卽古ノ山香郡ナルコト知ルベシ、其境界東ハ大井川ノ上流ニ至リ、西ハ、天龍川邊ニ至リシ事、亦古文書ヲ以テ證トスベシ、今大時村六所大明神神像、文安五年ノ背書、周智郡之內大土岐、小股村諏訪明神延德ノ棟札、周智郡氣田庄小股村ナドアレバ、中古ヨリ既ニ山香郡ハ廢シテ周智郡ニ入リ、猶其地ヲ山香庄ト稱セシ也、

山名郡

〔遠江國風土記傳十〕山名郡（倭名鈔也末奈）　村壹百壹、驛家壹、舊塔陸、　西北限磐田郡堺三本松、東北限周智佐野二郡堺久津部北原川、正東限佐野郡堺貫名及法多山、東南限城飼郡堺馬伏塚及西同笠、正南限福田湊、正西限二之宮、　高參萬漆千五百參拾貳斛陸斗壹升壹合伍勺　所以號山名者、對島名鄉名也、式內山名神社坐、（在飯田村）其地上古久努國中（國造本紀曰、久努國造、筑紫香椎朝代（仲哀）以物部連祖伊香色男命孫印播足尼定賜國造是也、）中古在佐益郡內、（續日本紀曰、養老六年二月、割佐益郡八鄉、始置山名郡是也、）割之以置郡、其郡家庄園既廢、而如無所指也、今於周智郡有山名子鄉、又飯田一村表書山名郡、又呼山名庄者、於周智五十五村、於山名凡廿一村、古山名郡堺自知焉、是之餘者、長下磐田二郡內也、雖如隔越、而延喜式倭名鈔等之鄉名、現然存于茲、沒長下之名、以其地隸山名者、時代未考、

〔續日本紀九元正〕養老六年二月丁亥、割遠江國佐益郡八鄉、始置山名郡、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌
等伎騰吉乃、波奈波佐家登母、奈爾須禮曾、波々登布波奈乃、佐吉低己受祁牟、
右一首、防人山名郡丈部眞麿、

周智郡

〔遠江國風土記傳九〕南周智郡（北周智有別紀、南周智、音號久努國、養老六年始置山名郡、改山名號周智者、時代未詳、周智名、上古久努國也、（中略）而倭名鈔載久努鄉、所以號

久努者、蓋國造之姓名歟、(中略)南周智郡之神社(三座)者、在今之北周智、而山名郡之式社者多在南周智也、改山名號周智者時代未考、(今之山名郡之地理者、古之長下郡也、雖郡堺隔越、依續日本紀延喜式倭名鈔等案之求之、則舊名遺跡無不存者焉)中略

山名庄(古山名郡)　南限久野、北限龜久保村、西限袋谷、東限吉岡原口、　高壹萬捌千捌百陸斛壹斗壹合　村五十五、舊堵四、(依元祿三年之高帳)

佐野郡

〔遠江國風土記傳十一〕佐野郡(續日本紀佐益、姓氏錄佐夜、延喜式倭名鈔等佐野、今人曰佐乃、)○中略　佐野郡内、舊是素賀國也、○中略雖國號早廢、迄今喚曾我庄也、○中略　西限山名郡堺原川、東限蓁原城飼堺菊川、南限城堺青陀坂、北限周智郡堺炭燒村、　高貳萬六千七百七拾石貳斗七升七合餘(依元祿高帳)

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

知々波々母(チヽハヽモ)、波奈爾母我毛夜(ハナニモガモヤ)、久佐麻久良(クサマクラ)、多妣波由久等母(タビハユクトモ)、佐々己氐由加牟(サヽゴテユカム)、

右一首、佐野郡丈部黑當、

城飼郡

〔遠江國風土記傳十二〕城飼郡(倭名鈔訓岐加布)所以號城飼者、牧飼之地也、故昔有白羽牧官及駒場之舊名、(白羽駒場、今屬蓁原、)○中略　西限山名郡堺岡崎三輪之林丘、南限横須賀湊及佐倉濱白羽海、東限蓁原郡堺佐倉村古谷菊川、北限佐野郡堺青陀坂幷小笠山、　高六萬千貳拾九石九斗四升三合(依元祿三年之高帳)

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年三月辛酉、遠江國○中略城飼郡主帳無位玉作部廣公、○中略以私物養窮民廿人已上、賜爵人二級、

蓁原郡

〔遠江國風土記傳十三〕蓁原郡(倭名鈔訓波伊波良)村壹百參拾八　西野限佐野郡堺菊川、城飼郡萩間、南海限白羽岬相良湊、東河限駿河國堺大井河、北山限信濃國堺千頭山、　高四萬六千五百拾七石五斗八升四合五勺(依元祿高)　所以號蓁原者、蓋基蓁原鄉、昔時置白羽牧官、今時存駒場牧野原萩間等之地名者、如萩倉牧、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年九月丁亥、遠江國蓁原郡人君子部眞鹽女、一產三男、賜大稅二百束、乳母一

郷

人〕

〔倭名類聚抄六郡〕遠江國　濱名郡　坂上　坂本　大神　驛家　贄代　英多　宇智

敷智郡　蛭田(比留多)　赤坂(阿加佐加)　象島　柴江(之波江)　小文　竹田(太介多)　雄踏　尾間(於萬)　和治　濱松(波萬萬都)　驛家

引佐郡　京田(美也古多)　刑部(於佐加倍)　渭伊(井以)　伊福(以布久)

麁玉郡　三宅(美也介)　碧田(安乎多)　覇多(反多)　赤狹(阿加佐)

長上郡　茅原(加波眞)　碧海(安乎宇美)　長田(奈加多)　河邊(加波乃倍)　蟾沼(比木奴萬)　壹志(以知之)

長下郡　太田　長野(奈加乃)　貫名(奴木奈)　伊筑　幡多(判多)　大楊(於保也奈木)　老馬(於以萬)　通熊(止保利久萬)

磐田郡　飯(○飯、高山寺本作飫、)寶　曾能　山香　入見　小野(乎乃)　千柄　高花(○花、高山寺本作苑、)　壬生(爾布)　野中(乃奈加)

久米　小谷(○谷、高山寺本作谷、)　飯寶(○飯寶重出、恐有誤、)　神戶　豐國(止與久爾)　驛家

山香郡　大岑　與利　岐階　氣多

周智郡　小山(乎也萬)　山田(也萬多)　依智(江知)　大田(於保多)　田椀

山名郡　山名(也萬奈)　衾田(布須萬多)　宇知　信藝　荻戶　久努(久度)

佐野郡　山口(也萬久知)　小松(古萬都)　邑代(伊比之呂)　幡羅　日根(比禰)　驛家

城飼郡　加美　新井(爾比井)　荒木(安良木)　河上(加波加美)　高橋(多加波之)　新野(爾比乃)　鹿城(加良古)　朝夷(安佐比奈)　松淵(萬都布知)　土形(比知加多)　狹束(佐加都)

蓁原郡　質治　驛家　蓁原(波以八良)　大江(於保江)　細江(保曾江)　神戶　船木(布奈木)　勝田(加都萬多)　相良

〔遠江國御神領記〕伴良志等解申請畠地事

合口段者

在二織。橋。郷。阿多氣村一

右件畠地口令口相傳所領居住也、而定永財船江太郎太夫殿所沽渡進也、○中略仍爲後代請文以解

文治三年十月三日　　伴良志　女子伴孫犬　夫　橘淸次

〔集古文書一綸旨〕後醍醐天皇宸翰横瀨家藏

遠江國澀俣鄕泰家法師跡○中略

右所々地頭職、可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日　　式部少輔

兵部大輔殿

〔古文書淺草文庫本〕遠江國東方高部鄕總領職事、任本領尾張孫三郎朝宣知行不可有相違者、天氣如此悉之以狀、

建武元年三月二十七日　　式部丞判

〔南禪寺文書〕當寺領遠江國初倉莊內、大井河以東、鮎河鄕江富鄕吉永鄕藤守鄕等、所被付寺家也、致知行可被全寺用者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年七月十二日　　左中辨在判

南禪寺明極上人御坊

花押

南禪寺領遠江國初倉庄江富鄕守延名事、止京上夫日公事菜料等、爲彼代下行米每年拾石可令進濟云々、早任申請旨、有限年貢所當段別以下、長吏修理替物雜掌用途外、免京鎌倉夫万雜公事、於拾石米者、可令進濟之狀、下知如件、

建武四年正月廿日　　監寺得觀花押　都寺心法花押

〔南禪寺文書〕遠江國新所鄕所被寄附南禪寺也、早令知行可給之由、天氣如此、仍執達如件、

建武元年十二月三日　宮内卿〔門〇中御經季〕

夢窓上人方丈

〔秋元興朝所藏文書〕南禪寺雜掌申、遠江國初倉庄内鮎河郷、江富郷、〔付上泉村〕吉永郷藤守郷〔已上領家方〕同國新所郷事、任去五日御寄附狀、可被沙汰付寺家雜掌狀、依仰執達如件、

建武三年十二月十一日　武藏權守〔花押〇高師直〕

遠江國守護所

〔德禪寺文書一〕法皇御代安堵、嵯峨ニ御通世、近江國今西庄、伊勢國上野御厨、遠江國内野郷、若狹國名田庄内田村下村、知行不可有相違之由、院宣所候也、仍執達如件、

建武三　九月九日　隆蔭

謹上花山院前中納言殿

〔秋鹿文書〕八幡新宮領遠江國中泉郷殺生禁斷事、以崩成敗之上、不可有相違、固可被禁制、若有違犯之輩者、可令罪科之狀如件、

建武四年八月十四日　沙彌心省〔花押〇今川範國〕

〔集古文書四十二寄附狀〕等持院尊氏公寄進狀〔相模國鶴岡八幡宮藏〕

奉寄　鶴岡八幡宮

遠江國宮口郷、相模國弘河郷〔備前入道跡〕地頭職事

右爲天下泰平國土安穩、奉寄之狀如件、

曆應二年四月五日　正二位權大納言源朝臣尊氏

〔集古文書四十五寄附狀〕今川氏親寄進狀〔遠江國平田寺藏〕

遠江國金屋鄉內深谷、山口鄉內奧野、下西鄉內聊道寺并五領田事、

右爲新所奉寄進之上者、如前々可有執務之狀如件、

明應五丙辰年九月二十六日　　五郎　押

長松院

〔天宮神社文書〕天宮鄉之內、其方被拘置候神役田、并各職等之事、右定夫參ケ一、入本入草等代物仁積、此代九貫文、此外綿百文目、布參ツ如前々可被相渡候、其外者神役田之事ニ候間、我等綺不可有之候、〇中略雖然追却之社人之事者、雖被申付我等、合點無之人者、一切不可有許容者也、仍如件、

弘治參丁巳四月十七日　　武藤刑部少輔氏定花押

中村助太郎殿

〔白羽大明神文書〕禁制

一御普請以下之役事〇中略

右條々、不可有御相違、然則令沈輪百姓等召還、可令居住彼鄉中、但渡海之奉公者、嚴重可致勤仕之由被仰出者也、仍如件、

天正五年丁丑十一月五日　　朱印〇武田氏丸龍印　　安倍加賀守奉之

白羽鄉

〔大通院文書〕遠州濱松庄新橋之鄉大通院於寺中門前狼藉、并山林竹木猥伐採放牛馬儀、一切停止之、然者在々所々諸末寺輪番出仕、如前々不可有懈怠事、〇中略

天正十四年九月七日　　三位中將藤原家康花押

大通院

〔本間文書〕新野池新田置目之事

村里名邑

一田地起ス其年者十分一たるべき事、○中略

右峯田新田如置目諸役令免許候、但苗代所之儀者、新野、あさいな、門屋三ヶ郷にて、田地之積り次第可申付者也、仍如件、

慶長十年巳正月十一日　　忠政（朱印）○遠江横須賀城主大須賀

池新田百姓かたへ

〔郡名一覽〕一遠江國 御料私領 遠州東西二日半　拾貳郡

高三拾貳万八千六百五十一石四斗三升六合五勺八才　千九十三ケ村

●濱松 六十五里六丁　●掛川 五十五里　●横須賀 五十七里　○相良 五十五里

〆氣賀 近藤縫殿助　∧中泉 六十一里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕遠江　十二郡、千九十四村、 御料私領 高三十六万九千三百五十二石五斗七升五合一勺八才

榛原郡百四十一村　城東郡百八村　佐野郡九十四村　山名郡百八村　周知郡九十四村

磐田郡一村　豐田郡二百五十九村　長上郡百二十村　麁玉郡五村　敷知郡百二十一村

濱名郡二村　引佐郡四十一村

〔地勢提要〕坤 郡邑島嶼奇名

遠江　敷知郡新槇村、志都呂村、增樂村、馬生村、段子川村、一本杉村、榛原郡海老名村、

〔山内首藤文書十一〕花押 尊氏○足利

讓渡所領事 ○中略

一遠江國飯田莊内加保村地頭職事、○中略 任此讓狀可令知行狀如件、

建武二年六月二十三日

莊保

藤原通繼花押

〔東寺百合文書一之六〕寶莊嚴院御庄園〇中略

遠江國初倉庄　朝隆卿

六丈細布十三段二丈　四丈白布三百段〇中略

右注進如件

平治元年潤五月　日

〔士林證文二〕八木新左衛門尉秀清本領事

一遠江國初倉莊永郷內、下司名、并阿曾名、

元弘二年被召放之伯耆守號拜領當知行、

右秀清參御方、致軍忠之上者、任法如元返給之、彌爲致忠節、恐々言上如件、

建武三年二月八日　左衛門尉秀清

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年閏二月十七日癸亥、安田三郎義定、相率義盛、忠綱、親光、祐茂、義淸、并遠江國住人横地太郎長重、勝田平三成長等、到于當國濱松庄橋本邊、是依前武衛仰也、此所爲要害之間、可相待平氏襲來之故也、

〔集古文書一寶筐〕後醍醐天皇綸旨所藏不詳

妙音堂領遠江國濱松庄、可令知行給者、天氣如此、仍被仰如件、

延元四年四月廿八日　左中辨花押

謹上左兵衛督殿

〔吾妻鏡一〕治承五年〇養和元年四月卅日乙亥、遠江國淺羽庄司宗信、依安田三郎義定之訴、雖被收公所領、謝申之旨、不等閑之間、安田亦執申之、仍且返給彼庄內、柴村、并田所職畢、是子息郎從有數、尤可爲

御要人之故云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年十二月五日戊戌、被収公遠江守義定所領、當國淺羽庄地頭職、以景廉被補其替、今日賜御下文、大藏丞頼平奉行之云云、

〔賀茂注進雜記神領下〕同永〇壽三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下　諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

遠江國　比木庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、僻可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年八月十九日辛丑、板垣三郎兼信依違勅以下積惡、被處配科之上、其領所可被改地頭職事、備後國在廳等捧申狀、訴土肥彌太郎遠平之不法事、被下院宣之間、兩條御請文載一紙、所令言上給也、

國府寺領、遠江國雙侶庄地頭事、不當に不候ば、何事之候哉と存候處、於兼信者、誠不當に候らん、早可令改易候也、但不當に候ざらむ者を、其替に令補候はむと思給候、此條も可隨御定候、一向に可被停止候者、不及左右候、

備後國在廳申狀給候畢、相尋子細、追可令言上候也、此旨可令洩達給、頼朝恐々謹言、

八月十九日　　頼朝

〔東寺百合文書一ノ五〕七條院　在御判

修明門院御處分御所庄々等○中略

遠江國　氣賀庄

安貞二年八月五日　七條院在御判

〔東寺百合文書　一之六〕當庄依遠亂不管領門跡之間、口欲申中知大僧正、僧正口口安堵之院宣案、最勝光院領遠江國原田庄事、任實賢僧正幷實徽法印爾次第、附屬可令相傳知行者、依院宣上啓如件、

正安元年閏十月十三日　治部卿經鄕

口經恐惶謹言、

〔東寺百合文書　ノ一五〕最勝光院

注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事○中略

一遠江國

原田庄　本年貢四百五十石　綾被物二重内（四月八月懸一重　七月八講一重）

八月兵士十人

近年以代錢七十六貫文内（三貫百文　被物代）

近年濟之減濟之年記不存知之、近年四十五貫沙汰歟、

右就所見注進如件、凡近年背先例不被成返殘於執事公文間御年貢濟否事委不存知之、

正中二年三月日　公文左衛門少尉大江

〔東寺百合古文書　百七十九〕和與

遠江國原田庄雜掌直謚與當庄内細谷地鄕頭原小三郎忠益相論當鄕所務條々事

元德三年十二月十五日　藤原忠益花押

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣烏帽相具御書、御手筥

□□□（存日予預置也）參御所（○中略）女院御方自餘御書等、（並有御封、以權紙立文、押折上下、又有銘等、）悉盛宮蓋（○中略）

一通（銘曰新院御方、）播磨國多可庄（○中略）遠江國飯田庄（○中略）

右庄々可讓進也、輕微之至、頗雖有其憚、爲顯志不顧恐者也、

嘉元三年七月廿六日　御判

〔園太暦〕觀應二年十一月二十六日、朝間大藏卿來、仙洞御領元弘御沙汰之次第読之、今日具忠朝臣持示聞也、所詮長講堂法金剛院領、幷龜山院御讓五箇所院御方御分、室町院御領半分、法皇御分等被進給旨云々、

長講堂領（○中略）遠江國飯田莊

右所々御管領不可有相違者、天氣如此、以此旨可令申沙汰給、仍執達如件、

元弘三年六月七日　左中將忠顯

謹上　高三位殿

〔集古文書（綸旨一）〕後醍醐天皇宸翰（横瀬家藏）

遠江國大池莊（○高家跡○中略）

右所々地頭職可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日　式部少輔

兵部大輔殿

〔集古文書（十五判物）〕今川心省判物（家臣三輪元成藏）

遠江國二宮庄於俱鄕之事、長尾次郎國貞依爲子孫三和次郎右衞門尉光継、爲本領望申間、今給被分宛行所也者、任先例早可致其沙汰之狀如件、

建武四年八月十八日　花押（○今川範國）

三和次郎右衛門尉殿

〔秋鹿文書〕奉寄遠江國府八幡宮、
當國羽鳥庄內貴平鄉地頭職事
右爲天下太平家門繁昌、令奉寄之狀如件、
建武四年十二月廿二日　源朝臣花押○足利尊氏

〔東寺百合文書一ノ三〕遠江國村櫛庄役、最勝光院寺用事、眞鍮法印申狀副具書如此にて可致其沙汰之由、可致下知行之旨、被仰下候也、恐々謹言、
九月六日　隆蔭
德大寺中納言殿

〔東寺百合文書ゐ一之十五〕山城
最勝光院領遠江國村櫛庄本家米事、深源僧都申狀副具書如此、子細見狀候歟、可被仰武家之由、院御氣色所候也、以此旨可令申給、仍言上如件、雅仲誠恐頓首謹言、
九月十六日　大藏卿雅仲
進上　前左馬助殿

〔鎌倉大草紙上〕扨京公方は、普光院殿御時なり、いかゞ思召けん、信長に先遠江國蒲の庄御厨にて、千貫の地を懸命のためにたまはりける、

〔集古文書三十九施行狀〕應永三十三年施行狀京師清和院藏
遠江國質呂莊領家職半分事、任去年八月十一日奉寄御判之旨、彌可被全所務之由所被仰下也、仍執達如件、
應永三十三年十一月十八日　沙彌花押

清和院長老

〔梅花無盡藏(六雜文)〕遠江州方廣禪寺山門化緣疏幷序

娑婆世界南贍部洲大日本國東海道遠江州伊那佐郡井伊保奥山鄕、深奥山方廣禪寺、山門修造化緣疏幷序、住持比丘某敬白、(○下略)

〔平田寺文書〕遠江國相良庄平田寺之事

一寺領田畠山林(幷)寺中之塔頭(靈松庵、正心庵、廣濟寺、一枝庵)四ケ寺領寺外之塔頭(大聖寺、正福寺、井谷寺、慶安寺、理趣寺、四方寺、)六ケ寺領等之事、任天澤寺殿兩通判形之旨畢、(幷)寺中寺外塔頭末寺領等田畠共、去天文亥年檢地增分寄進之上、向後庄內雖有檢地、寺領塔頭末寺領共停止地頭代官之綺、檢地免除之旨、爲證文明鏡之條、任其儀畢、縱至于後年、爲私領雖充行于他、聊不可有相違事、(○中略)

右條々任先判形(幷)印判之旨、永不可有相違者、守此旨彌可被專修造勤行等之狀如件、

永祿四(辛酉)年三月十八日　氏眞(花押)

平田寺方丈

藩封

〔慶應元年武鑑〕(原圖從四位侍從)井上河內守正直　六万石　居城遠州敷知郡濱松(江戸ヨリ)六十五里六丁

(元龜二ヨリ當將軍家御居城、天正十八、堀尾帶刀吉晴、同信濃守忠氏、慶長六、松平左馬介忠賴、同十四、水野對馬守重仲、元和五、高力攝津守忠房、寛永十五、松平和泉守乘壽、正保元、太田備中守資宗、同攝津守直廷、延寶五、青山因幡守宗俊、同和泉守忠雄、同下野守忠重、元祿十五、松平伯耆守資俊、同豐後守資訓、享保十四、松平伊豆守信祝、同伊豆守信復、寛延二、松平豐後守資訓、同富之助資昌、寶曆八、井上大和守正經、同河內守正定、同河內守正甫、文化十四、水野越前守忠邦、弘化二、井上河內守正春、以後領之、)

(原圖)太田總次郎□□　五万三十七石餘　居城遠州佐野郡懸川(江戸ヨリ)五十五里餘

(城主、天正十二、石川日向守家成、同十八、山內對馬守正之、慶長六、松平隱岐守定勝、同河內守定行、元和三、安藤帶刀直次、同五、松平越中守定綱、寛永二、朝倉筑後守定重、同十、青山大藏大輔幸成、同十二、松平大膳亮忠重、同十六、本多能登守忠義、正保元、松平伊賀守忠晴、慶安元、北條出羽守氏重、萬治元、井伊兵部少輔直之、同伯耆守直武、同兵部少輔直朝、寶永三、松平遠江守忠高、同八、小笠原壹岐守長熙、同山城守長庸、同佐渡守長恭、延享三ヨリ太田攝津守資俊、以後領之、)

西尾隱岐守忠篤（帝鑑間朝散大夫）　三万五千石　居城遠州城東郡橫須賀（江戸ヨリ）五十八里（天正十六、大須賀五郎左衛門、松平五郎左衛門忠政、同十六、渡瀨左衛門佐、文祿二、有馬玄蕃頭豐氏、慶長五、松平出羽守直政、元和五、松平大隅守重勝、同丹後守重忠、同九、井上主計頭正就、同河内守正利、正保二、本多伊勢守忠利、同越前守利長、天和二、西尾隱岐守忠成、以後領レ之、）

田沼玄蕃頭意尊（菊之間從五位下）　一万石　在所遠州榛原郡相良（江戸ヨリ）五十五里（從二奥州信夫郡下村一、文政六未年田沼玄蕃頭意正移レ之、以後領レ之、○節略）

田數石高

〔倭名類聚抄　五〕遠江國（○註略）管十三（田一萬三千六百十一町三段三十五歩）

〔拾芥抄　中末本朝國郡〕遠江（中上）十三郡（中略）（田一萬二千九百六十七町）

〔伊呂波字類抄　止國郡〕遠江國（管十三（中略）本田一万二千九百八十七町）

〔海東諸國記〕遠江州　郡十三、水田一萬二千九百六十七町、

〔和漢三才圖會　六十九遠江〕十四郡　二十八万石

〔官中秘策　二〕遠江國　十四郡（○中略）

一石高三拾貳万八千六百五拾壹石餘

〔吹塵錄　五人口及國高〕天保度御國高調（○中略）

遠江國（御料私領）　一高三拾六万九千五（○五一本作三）百五拾貳石五斗七升五合壹勺（○下略）

出擧稻

〔延喜式　二十六主税〕諸國出擧正稅公廨雜稻（○中略）

遠江國正稅公廨各卄八万束、國分寺料三万束、大安寺料四万九千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料六万束、夷俘料二万六千八百束、白羽官牧馬直四千四百六十束、藥分料一万束、

〔倭名類聚抄　五國郡〕遠江國（○註略）管十三（中略）（正公各二十八萬束、本稻五十八萬二千二百六十束、雜稻三萬三千二百六十束、）

○按ズルニ、此書擧グル所ノ雜稻數、之ヲ他國ニ比スルニ、甚ダ少キニ過グ、今延喜式ニ記スル所ヲ計算スルニ正ニ二十一万二千二百六十束ナリ、此書誤アルコト明ナリ、サレバ本稻五十

國產貢獻

八萬二千二百六十束ト云フモノ亦用キル可カラズ、

(延喜式十五內藏)諸國年料供進○中略 交易絁○中略六百五十疋遠江(中略)上野七箇國各五十疋○中略 櫁(中略)遠江(中略)伊豆十五箇國各二合○中略 干薑小一百斤、薑種十石、 右遠江國交易所進○中略 大鮑卌口遠江國卅口○中略 斑竹千六百隻遠江國所進 支子數有二種、合○中略 遠江國二圍五十四斛一圍五十四斛、一

(延喜式二十三民部)年料租舂米○中略 遠江國一千三百石○中略

年料別貢雜物○中略 遠江國筆一千管、零羊角四具、○中略

諸國貢蘇番次○中略 遠江國十四壺四口各大一升、十口各小一升○中略 右八箇國爲第一番丑未年○中略

交易雜物○中略 遠江國絹六十八疋、零羊一百卌斤、鹿皮二十張、鹿革卌張、木綿四百七十斤、櫁二合、搗栗卌斤、海藻一十斤、胡麻子二十石、大鮑卌口、干薑一百斤、種薑十石、

(延喜式二十四主計)遠江○中略 右廿五國中絲○中略

遠江○中略 右廿九國輸絹○中略

遠江國行程、上十五日、下八日、

調、一窠綾十三疋、二窠綾八疋、三窠綾廿疋、七窠綾廿五疋、小鸚鵡綾廿七疋、薔薇綾廿四疋、苡核綾白十疋、赤廿疋、輿服綾白廿疋、赤十五疋、御襪料白絹十二疋、緋帛卌疋、縹帛十五疋、橡帛廿五疋、貲布十二端、自餘輸絹、但山香郡輸布、 庸、韓櫃廿合、塗漆著鏁十合、白木十合、 自餘輸絲、 中男作物、木綿、胡麻油、輿理等魚腊、

(延喜式三十一宮內)諸國例貢御贄○中略 遠江國甘葛煎、甘子、海藻、

(延喜式三十三大膳)諸國貢進菓子○中略 遠江國甘葛煎二斗、柑子四擔、

(延喜式三十七典藥)諸國進年料雜藥○中略

遠江國十三種 黃芩十斤、青葙三斤、桔梗廿二斤、黃蘗、伏苓各卅斤、桑螵蛸一斤七兩三分、署預三斗、麥門冬六升九合、桃人二斗四升、蜀椒八升、梔子人七升、干姜八十六斤、支子大二斗、

〔延喜式 内膳 三十九〕諸國貢進御贄 准此 中宮 年料 中略 遠江國 雉䐗 海

〔毛吹草 三〕遠江

干蓑 茜 紫根 濱松蜜柑 ケガ餅 掛川葛布 同搗和布 西坂ノ葛餅 濱名納豆 菊川酒

糖 矢根 荒井饘

〔日本鹿子 六〕同國 遠江〇 名物出所之部類

干蓑 當國國領と云所より大半出る 紫根 同所より出る 茜 同所より出る 濱松蜜柑 餅 氣賀ト云所の名物なり 葛布 懸川の宿にて商、根本ハ上根村と云所にて作之、 搗和布 懸川より行程五里計南の海邊相良といふ所より出る 白羽柑子 白羽村と云て、是も懸川より五里計南の濱かだより出る、 荒井饘 納豆 濱名と云在所より出るなり 松茸 小笠山より出る メ治 横須賀山より出る 筝子 久野村大藪より出る 小尾山鷹 菊川糖 同所矢根 日坂蕨餅

人口

〔官中秘策 二〕遠江國 十四郡 中略

一人數三拾三万三千七百四拾四人 内 拾六万六千八百五拾七人 男 拾六万六千八百八拾七人 女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 中略

御料私領

一人數三拾四万貳千三百九拾八人 内 拾七万三千五百四拾八人 男 拾三万八千八百五拾人 女 中略

高三拾貳万八千六百五拾壹石餘 遠江國

諸國人數調 弘化三丙午年 中略

御料私領

一人數三拾六万三千九百五拾九人 内 拾八万四千七百三人 男 拾七万九千貳百五拾六人 女

高三拾六万九千五百五拾貳石 遠江國

風俗

〔人國記 二〕遠江國

遠江國ノ風俗、三河ニ不異而、人之氣何事ニ付テモヒルム氣ナシ、サルニ仍テ可死處ト見ル則ハ、タトヘ節ニアタラズシテモ死ヲスル人多シ、雖然三州ニ替リテ物ヲ賴ニスル氣有、因茲ニ諂フ

氣質アラハレテ見ユル儀、事々ニ付テ如斯、サレドモ昨日味方ニナリ今日敵ニ成如ク之儀ハ、イカヾ頼ム程ノ儀有トテモ有間敷國也、唯己々智ヲ以テ下ヨリ上ヲハカツテ我ヲ不知而、上下トモニ主之善惡ヲ、下トシテ誹謗シテ、而モ夫ヲ諫ル事ナク、黨ヲ立テ他ヲ求ン事ヲ好ム族ノ風俗也、智惠アツテ氣尖成故善ニ近シ、何事ニ付テモ明白トノブル事ノ不成風俗也、嫌フ處モ多シ一國之内ニテモ東ヨリテ一入カクノゴトクナリ

〔日本鹿子 六〕遠江國名所之部

高師山　二川の宿と白須賀の宿との間なり、北は山南は海なり、鎌倉右大臣の歌に、

雪のゐる梢はづかに露こめて高師の山に鹿ぞなくなる

鹽見坂　白須賀の宿へ下る坂なり、是より南のかたは遠江灘はるかに見へ渡り、無雙の景地なり、

橋本　白砂の湊より一里なり、橋本の北に水海あり、

高師山松に夕ゐるかささぎの橋もとかけて月渡る見ゆ

濱名橋　入海より北の山ぎわ也、橋もとより三里餘北也、いにしへは濱名を海道にせられけり、

本坂越とて、高師山の北に今もあり、はしもとは今の海道なり、

天龍川　濱松の宿と見付の宿との間に有て、大河なり、鴨の長明此河をこゆるとて、

此川のはやき流もよの中の人の心のたぐひとぞ見る

今の浦　見付の宿近所にあり、水海なり、鴨長明此所一見の時、

浪の音も松の嵐も今の浦にきのふの里の名殘をぞきく

原川　袋井の宿と懸川の宿との間にある川なり、北より南へ流たり、

原川や瀬川の水のそこ清みすむ里人の心をぞしる

雜載

懸川　宿の名なり、佐野郡のうちなり、此所の名物にて葛布と云ものを商なり、

これぞこの里のならひと門ごとに葛てふ布を懸河のしゆく

釘の浦　懸川より行程五里ばかり東南のかたにあたりて、海邊なり、相良と云所、湊あり、釘の浦、大磯の湊と云て、舟入也此邊を専釘の浦と云也、當浦よりかぢ和布と云海草、名物にて出る也、所の人の云ならはせる歌に、

釘の浦うちくる浪の音するは沖のかぢ和布のしはざ成らん

佐夜中山　白坂の宿より金谷の宿へ越る中間也、左右ともに大木の松立こみたり、西行法師のうたに、

年たけてまたこゆべきと思ひきや命なりけり佐夜の中山

ふみまよふ峯のかけはしと絶して雲に路とふさゝの中山

菊川　佐夜山東の麓なり、新坂の宿より東の海道なり、承久の合戰のとき、院宣を書し咎により、光親公關東へめしとられ下り給ひし時、昔南陽縣の菊水下流を汲てよはひをのぶる、今東海道の菊川西岸に宿て命終と、辭世のことばを作りて、誅せられ給ひしと云、此所也、歌に、

わすれめやかやが軒端に雨もりて袖引かぬる菊川の宿

大井川　此川は駿河遠江の堺にして、金谷の宿と島田の宿との中間を、北より南へ流出るなり、川原のうち一里あり、海道一番の大河なり、元暦元年の比、鴨長明鎌倉に下りける時、この川を過るとて

日數ふる旅のあはれは大井川わたらぬ水もふかき色かな

〔延喜式　兵部二十八〕諸國健兒〇中略　遠江國六十人〇中略

諸國器仗〇中略　遠江國甲四領、横刀七口、弓五十張、征箭五十具、胡籙五十具、

〔日本書紀天武二十九〕四年九月丙戌、自筑紫貢唐人三十口、則遣遠江國而安置、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年七月辛丑、遠江國荒玉河堤決三百餘丈、役單功三十万三千七百餘人、充粮修築、

〔皇年代略記後柏原〕永正七年八廿七、遠州今切崩出云々、

〔宴垜隨筆八〕遠江濱名

あふみは都に近き江といひ、遠江は都に遠き江と有を以て、國號とす、然るに貝原篤信の大和本草に見ゆ、後土御門院明應八年六月十日(或ハ九月)大地震動夥しく洪水して、其江湖の水溜て陸となり、湖口切れて入海となる、今切の渡り是なり、荒井宿の町はづれに濱名の橋の跡あり、一説には、人皇百三代後柏原院永正七年の洪水ともいふ、三代實錄に曰、元慶八年九月朔日、遠江國濱名橋長五十六丈、廣壹丈三尺、高一丈六尺、貞觀四年修造、歷二十四年、既以破壞、勅給彼國正稅稻一萬二千六百三十束改造焉と、海道は本坂越とて今も有なり、

汐みてる時に行かふ旅人や濱名のはしと名付そめけん

○按ズルニ、今切渡ノ事ハ、渡篇遠江國荒井渡條ニ詳ナリ、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

阿良多麻能、伎倍乃波也之爾、奈乎多氐天、由吉可都麻思自、移乎佐伎太多尼、

伎倍比等乃、萬太良夫須麻爾、和多佐波太、伊利奈麻之母乃、伊毛我乎杼許爾、

右二首遠江國歌、

古事類苑

地部九

駿河國

名稱

駿河國ハ、スルガノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ相模、伊豆、西ハ遠江、北ハ甲斐、信濃ニ界シ、南ハ海ニ面ス、東西凡ソ十八里、南北凡ソ十二里、其地勢ハ概ネ山嶽ニ富ミ至ル所丘陵起伏シ、平坦ノ地ハ、僅ニ南方沿海ノ小區ニ過ギズ、此國ハ實ニ名山富士ノ所在地トシテ其名高ク、隨テ東海道中最モ勝區ニ饒ナリ、古ヘ國府ヲ安倍郡ニ置キ、志太(シダ)、益頭(マシヅ)、有度(ウド)、〈後有渡ニ作ル〉安倍(アベ)、廬原(イホハラ)、富士(フジ)、駿河(スルガ)ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制上國ニ列ス、後世駿河郡ヲ駿東郡ト改稱セシガ、明治維新ノ後、益津郡ヲ志太郡ニ合シ、有度郡ヲ安倍郡ニ併セ、凡テ五郡ト爲シ、新ニ靜岡市ヲ設ケテ、靜岡縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄〈五國郡〉〕駿河〈須流加〉

〔倭頭屋本節用集〈天地寸〉〕駿河(スルガ)〈駿州〉

〔地名字音轉用例〕ンノ韻ヲラノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

するが　駿河〈國〉　須流加(スルガ)　駿ハシユンノ音ナルヲ、〈シユンヲ直ニシテスニ用ヒ〉ンノ韻ヲ轉ジテ、スルニ用ヒタリ、

〔倭訓栞〈前編須十二〉〕するが　駿河をよむは、ゑゆ反す、むとると通せり、大井川富士川などの、するどき川あるをもて名とす、

〔諸國名義考上〕駿河

和名抄に、駿河、(須流加、國府在安倍郡、)名義は、萬葉集に、打縁流駿河能國云々とある如く、尖川の意なるべし、また東遊駿河舞歌に、須留可奈留、宇止波末仁、宇知與須留、奈見波奈々久佐乃云々ともあり、こは川ならず、海なれば、いづこも浪はつよく打よすべけれど、万葉集の歌にゆかりあればいふのみ、すべて此國の川は、山より落て海に入る水のけはしければ、川波強く打よする勢ひの猛烈なるによりて、尖川國と云なるべし、此國に駿河郡あり、もとはそこより出し名なるべし、此國の風土記に、駿河有三大河、而其濤勢如駿馬駆千里、故爲國號、また駿河者、依其河流駿々、而不知淀瀦也、所謂志通波他河、不二河、大堰河也とあるは、共に字になづみたる也、

〔比古婆衣十八〕駿河國名義

和名抄に駿河國駿河郡駿河郷あり、今按ふに、舊はスルガてふ一處の地名の、例の漸々に廣ごりて郷名となり、又郡名にも定められ、竟に國名にも負せ定められたるものなるべし、さて其スルガてふ舊の地は、富士川の下つかたの川邊に在しなるべし、(此考は下に云ふべし、)名義は此川世に名だたる大なる荒川にて、ともすれば水がさ登り溢りて、岸波立て川邊ゆすり流るゝが、殊にその甚しきわたりをユスルガといへるを、ユスの約りておのづからスルガと呼びならへるものなるべし、さてユスルとは、すべて鳴響むやうの事を云ふ言にて、そを水につきていへる例は、萬葉集七卷に、大海之磯本由須理立波之、(略)○註とよめるこれなり、(沐浴、淅瀋などの字をゆするとよむも、本の義は同じけれど、轉りたる言にて、異義のごとくなれり、事長ければこゝにはいはず、)カは處にて例多き言なるが、ことに當國には白須加、横須加、大須加など云へる地名多し、おもひ合すべし、(但しこれらのスカは諸處の義か○中略)さてそのスルガてふ舊地は、富士川の下方の川邊に在しなるべく考へたる事は、古駿河郷と稱し處今慥ならず、又駿河郡と建められたりし界域も慥ならねど、今駿東郡とて富士郡の東にあるは、古の駿河郡を東西と兩に割たれたる

東の方なるべければ、駿西郡はそれに接續きて西の方、今の富士郡の南の方かけて、富士川の下流も、其郡内にて其處に舊のスルガてふ地は任しを、又後に駿西郡を停て、富士郡に合られたるなるべし、故舊スルガと云ひし地は、今の富士郡の富士川の下流の川邊なりけむとはいへるなり、なほその國人によく訪ひ尋ねてさだむべし、

〔駿河國新風土記一〕郡名考

駿河郡　オノレツラ〲思フニ、ソノカミシルカト云シヲ、言ノ通フマヽニ、ヲノヅカラスルカト云ナルベシ、言ノ意ハ滑所(シルカ)ト云義ナラン、シルハシユルノ略(シユノ反ス)ナレバ、スルカトモ云、所ヲカト云ハ、住所(スミカ)、在所(アリカ)、隱所(カクレカ)ナドノ如シ、其ジルト云ハ固ノ反ニテ、和名抄ニ、饘(和名加太加由)厚粥也、粥(和名志留加由)薄糜也トアルニテ固(カタ)ニ對シテシルテフ言ノ例ハイチシロシ、扨此國名、今ノ駿東郡ノ内ニスルカノ郷トイヒシ所アリシトゾ、夫ヨリ起レルコトトゾ思ハルヽ、其スルカノ郷ト云シハ、イヅクトモ今ハ知ガタシ、サレドモヨク〲考ルニ、今ウキ島ノ原ト云アタリナルベシ、今ノ原宿其アタリノ村々、スベテ中ムカシヨリウキ島ノ原トハ云ナリ、今モ田地皆深田ニテ、足入ガタク、苗植ルニモ稻苅ルニモ船ニテゾスナル、又淺キ所ハ橇ノ如キ物ヲハキテ草取ナドスルナリ、此地斯テシカリケレバ、滑所トハ名ニ負ヒツラン、(中略)

駿河　河野通世撰述

舊事記作珠流河、類聚國史作駿河、或作洲流河、万葉集作駿河、或須流河、風土記作仙河、或作尖蛾、駿河字、日本紀其餘諸書皆有焉、(中略)するがてふ名の義を思ふに、萬葉集高橋蟲麿歌集中の歌に、打縁流、駿河能國と云、又春日部麻呂の歌に、宇知江須流、須流河乃襧良とも云て、エとヨと音通ふなればなり、此辭をつら〲考るに、打よするは浪を云るにて、下にするがと續けたるは、すは洲なり、るは寄のよを省けるにて、がは陸棲(クガスミカ)などのかと同じ、人の行かふべき所(カ)を云、山が海がなど皆

同じ、されば、するがは洲寄る所にて、浪の洲を打寄せて、人の行かふべき所と成れるを云、

〔萬葉集 雜歌 三〕詠不盡山歌一首幷短歌

奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流、駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、出之有、不盡能高嶺者、〇下略

〔萬葉集 二十〕和伎米故等、不多利和我見之、宇知江須流、須流河乃禰良波、苦不志久米阿流可、

右一首、春日部麿、〇駿河國防人

〔詞林采葉抄 五〕打縁流駿河國

打よするするがの國とは異儀多く、波のすなごを打よするとつゞけたりとも、亦彼國には富士と葦高との二の山あり、是則金胎兩部の垂跡也、此兩山の間は、昔は東海道の驛路也、その間に横走の關と云ありけり、此道は觸穢の者の通けるを、明神いとひ給て、南海に浮島原の砂のゆられあるきけるを、打寄させ給ひければ、打寄る駿河國と申とも云へり、今或記云、昔富士山は海中より涌出して波に隨て、うかれけるに、もろ〳〵の天女あまくだり舞遊けるを、白波打寄て、此國の山となれりければ申とかや、是蓬萊にて有と云說に、符合する歟、

〔冠辭考 二〕うちよする　するが　又うちえする

萬葉卷三に、不盡山を詠る、奈麻余美乃、甲斐乃國、打緣流、駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、卷二十に、駿河國防人宇知江須流、須流河乃禰良波、云々、こは音し通へば、打よするとも打えするともよみたるを思へば、その二つもはた正しからで、實は打泔る泔る髮てふ意につゞけなしけんかし、髮を梳るとき用る水をゆするといへば也、さて此國はいとはやき川有故に、する河とはいふらめど、今ゆ泔するか髮みのゆとみを略けるが如くいひなすは冠辭也、同卷二十に、駿河國防人の多々美氣米、牟良自加巳蘇てふは、薦を編といふを、あを略きてつゞけたる類ひ也、する河てふ名につきて浪の打よするといへる說あれど波ともいはで打よするといはんは、古歌の冠辭ともな

く、又此上のなまよみてふも、未乾弓の反るといひかけつること奈部にいふが如くて、只冠辭なれば、此語も駿河に由ある語ならぬを思ひやるべきなり、

〔碩鼠漫筆七〕打緣流の發語追考〔附甜坏名義〕

今一說の僻按あり、此打ゆするよりつゞけたる意を、なほ熟稽ふるに、するがを陶汰る金ととりなしたるにはあらじか、〔金をかとのみも云ふべきは、する〳〵と落ちゆく川をするがといひ、又白髮をしらがといひ、あて君、犬君等を、あてき、いぬきと云へるなど同じ、又俗語にも、兄君をあにきといへり、又故伴信友の、駿河國名義考といふものには、駿河は響る處の義にて、駿河郷は富士川の岸なるべければ、さる郷名に負たりけむを、それが後に郡名になり、竟に國名とさへなれるならむ、と云へり、此說も由なきにはあらねど、處の義と云へるは信じがたし、響る川の義とは云ふべし、猶末に全說をもしるしたるを見るべし、〕金は鏈石〔金山にて是をタサレ石と云〕を搗き砕きて、水をかて、打陶汰り、樋に流してとるものなれば、〔此事は那須の汰金の解に、委曲にいふを見るべし、〕ゆすがねと云ふべきなり、良玉集、八雲御鈔等に、ゆりがねとあるも同じ、萬葉集卷七〔二十二左〕に大海の磯もと由須理たつ波の云々、武烈天皇紀に、那爲我與靡據魔〔地震がゆり來ばなり、よりはゆりなり、是をもて打緣流も、打ゆすると同語なる事を了知すべし、〕とあるを見るべし、ゆするも、よするも、ゆるも、よるも、もとはみな同語なるをや、かゝれば打汰る汰る金とやうに、取なせるにやとは云へるにこそあれ、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度〔附里程〕

駿河府中〔傳馬町〕極高三十四度五十八分半、經度東二度三十八分、從東都〔東海道〕四十七里一町五間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

駿河　沼津　三五度〇六分〇〇秒　府中　三四度五八分三〇秒

　　　吉原　三五度一〇分〇〇秒　藤枝　三四度五二分〇〇秒〔中略〕

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〔中略〕

疆域

駿河　府中　東二度三七分一四秒　富士山　東三度〇〇分〇〇秒

〔駿河國新風土記二提要〕疆域

風土記ニ、疆域ヲ記シテ、此國東西二日半ノ宿、南北一日半之宿、地勢强而山嶺多、東南海嶼多、河流帶之焉、東限息田神祠、西限大井川、北限猪川山、南限有渡沖トイエリ、東西ノ里程、三十六町ヲ一里トシテ、島田宿ヨリ三島宿マデ二十四里餘、二日半ノ宿ナリ、南北ノ里程、有渡郡中島村ヨリ安倍郡梅ケ島マデ十五里、一日半ノ宿ナリ、東限息田神祠ト云所、今詳ナラズ、伊豆國ノ疆、駿東郡ニ柿田村ト云村アリ、息ハ臭ノ誤ニテ、カキトヨムベキニヤ、此村トスルトキハ、東ノ限リト云ニカナヘリ、西限大井川ハ論ナシ、北ハ限猪川山、富士郡猪頭村ノ山ヲ云ナルベシ、此村甲斐ノ境ニテ、北ノ限トナスベシ、南限有渡ノ沖モ論ナシ、スベテ四境ハ、伊豆、相模、甲斐、信濃、遠江ノ五國ニワタレリ、伊豆國志ニ疆域ヲアゲテ云、西北大深瀧溪ノ二溪、茶畑村上ニテ合流シ、以下ヲ界川ト云、幸原村ヲヘテ三島ノ千貫樋下ヲ過テ、長伏村ニシテ狩野川ニ注グマデ、駿州駿東郡ト凡テコノ川ヲ界別トス、近世幸原ニテ水盡ク東決シ、西南ノ方千貫樋マデ水枯竭レドモ、依舊古水道ヲ界トス、長伏ヨリハ狩野川界タリ、江間川ニ至リテハ、駿州大平村口野村トノ間、連山岡脊界ナリ、海濱ハ重寺村ト駿州口野村ノ間、大瀬ト云處ヲ分界トス、按ニ、古昔相州トノ疆界ハ、箱根山脊通ヲ北ニ指シ、今ノ箱根三島町ト小田原町トノ間ヨリ、湖水ノ中通ヲ伊駿相ノ分界トス、信教記曰、孝安天皇時、熟視而境風致作東而當地跨伊駿相三州、因分其域、而良材立波心、號日代木、西汀名駿河津、南岸號伊豆地、東濱名相模津ト記、附錄云、是木ニ和歌ヲ刻ス、又印木トモ國分トモ云、三椏木ナリ、歌ニ、

足柄也箱根ノ湖ノケヽラキニ三國ヲ分テ立ル白波、此木ノコト、箱根ノ人ニ尋ヌルニ、ソノ木今ニ存在ス、早年ニ湖水減ズレバ、三尺許水上ニ見ルト云、稻葉氏小田原侯タル頃、界今ノ所ヘ移ルヨシナリ云々、コレ伊豆國田方郡君澤郡ト駿河國ノ界ヲ云、道雄按ニ、信教記トハ、大夫坊覺明

ガ書ル箱根權現ノ緣起也、古風土記ニヨリテイエルナルベシ、其ハ後ノ世ノ口ツキニテ、上古ノモノトハ思ハレズ、〇中略上件伊豆國トノ疆ヲ云、相模國ノ疆ハ、三國峠ヲ界テ、此山ノ東面相模、北面甲斐國、南面ハ駿河國トス、甲斐國ノ堺ノコト、甲斐國志ニ記ス事詳ナレドモ、各郡各村ニシルシタレバ、カヘリテマギラハシキニ似タル所、スベテコレヲイフニ、甲斐國都留郡ト駿河郡ノ堺、東ノ方甲斐國山中村ト駿東郡須走村トノ界ハ、籠坂峠ヲ東南ニ下リテ傍ニ杭アリ、富士郡トノ界ハ、富士山無間ケ嶽ヨリ西北ヲ甲斐國トシ、東南ヲ駿河トス、庵原郡ノ界ハ、甲斐國万澤ノ南白鳥山二國ニ跨リ、庵原郡内房村ト界川ヲ以テ界トス、コノ川富士川ニ入、安倍郡ハ梅ケ島村、甲斐成島村ニ隣リ、又安倍郡井川ハ、甲斐湯島村、十郎次山、千挺木山等ニ界ヒ、夫ヨリ遠江榛原郡千頭村公林、井川七村ノ山ト、信濃國ニ連リ、遠江ノ界ハ、千頭村公林ノ中ニアリ、大須俣川ト井川ノ流合シテ、遠江駿河トノ界トナリ、下流志太郡細島村ヨリハ、大井川ノ流中古變ジテヨリ川ノ東ニ榛原郡ノ地アリテ、志太郡一色村ハ遠江國小杉村ト小路ヲ以テ界トス、コレ此國ノ四境ノ大略ナリ、

〔日本地誌提要駿河十四〕疆域　東ハ相模伊豆、西ハ遠江、北ハ甲斐信濃、南ハ海ニ至ル、東西壹拾八里、南北壹拾貳里、

〔日本靈異記中〕藥師佛木像流水埋沙示靈表緣第卅九

駿河國與遠江國之堺有河、名曰大井河、其河上有鵜田里、是遠江國榛原郡部内也、

〔松屋筆記六十〕伊豆駿河古は木瀨川を界とす

玉海、元曆元年八月廿一日の條に、此日定能卿來、傳聞、賴朝出鎌倉城來著木瀨川、伊豆駿河之間云々より逗留、進飛脚申云、已所上洛仕也、但ひきはりても、不令上洛候也云々、〇中略按、今は駿豆の二國三島の西千貫樋の川をもて界とすれど、古は木瀨川を界とせり、伊豆志一の卷郡鄕部に、鏡作、泉水二鄕分置

地勢

ノ時、伊豆ニ屬シ、延喜ノ後、復駿河ニ屬シ、北條氏割取シテ伊豆トシ、駿河亞相駿城ニ在ス時、庖廚(ダイドコロ)料トシテ復駿河トナルと見ゆ、

〔易林本節用集下〕駿河州駿上、管七郡、東西二日半、山原野里、皆均等也、抱海帶山、肥產多、大中國也、

〔駿河國新風土記一〕駿河　河野通世撰述

此國、東西を經とし、南北を緯とす、經凡二十二里餘、緯凡二十里餘より七八里に至る、山川田野程よく相錯れり、驛路に三つの峻嶺あり、宇津谷坂、薩埵坂、七難坂なり、三の大河あり、大河川、阿倍川富士川なり、是皆天然の要障なり、國形は東西長うして南北短く、前後廣うして中狹く、千木の如く、また鼓に似れり、西北に高山を負ひ、東南に大洋を抱たるが故に、國中おのづから暖和にして、雪ふれども積らず、氷ぬれども厚からず、是以百穀善熟り、菓蓏早就、されば國富物豐にして、俗文華を好む、延喜式此國を上國の列に入れ、風土記定駿上之上とす、宜なるかな、さて限るに山を以てし、横に最を截ば、遠江の國界より宇津の山に至る凡五里を第一截とす、宇津の山より薩埵山に至る凡六里を第二截とす、薩埵山より七難坂に至る凡四里を第三截とす、七難坂より伊豆國の界に至る凡七里餘第四截とす、限るに川を以てすれば、大井川より阿倍川に至る七里を第一截とす、阿倍川より富士川に至る凡八里餘を第二截とす、富士川より伊豆の國の界に至る凡七里餘を第三截とす、かく山と川と點綴して、たとへば一匹錦の花紋列なるが如し、これ自然の形勢なり、又縱に是を分ちて三路とす、山中を上の一路とす、其民良材を伐て桴を下し、茶を製し、紙を製し、藥草を採などを業とす、官道を中の一路とす、逆旅亭、茶店、酒肆相連り、逆旅亭長(俗云本陣)驛長、(俗云問屋)驛老(俗云年寄)あり、貧しきものは驛馬を驅せ、行客の裝を荷ふをもて業とす、海濱を下の一路とす、魚鹽の利夥しく、志かのみならず通船運漕天下の諸國を比隣の如くするの便あり、農は此三路の間に充滿して耕耘を勤む、是民產業をなすの大略なり、

〔日本實測錄二街道〕從東京東海道至西京○中略

駿河國駿東郡沼津本町、三十五度六分、（至沼津岸廿三丁）一里二十三町二十五間半　原宿　一里一十三町一十五間半　富士郡柏原新田（至沼津岸二丁三十間）一里二十三町二間　吉原宿、三十五度一十分、　一里五町二間（至吉原宿追分町一十二丁五十一間）一　松岡村（至松岡村宿所八丁九間）三十五度九分八町五十一間、（至富士川岸四丁三十間）　菴原郡岩淵村　二十八町五十七間半　蒲原宿　一里一十七町二十四間半　由比宿、三十五度六分半、　二里一十三町四十二間半　興津宿、三十五度三分、　一里一十三町五十七間半　江尻宿　二里二十六町二十七間（至靜岡横田町二里一十六丁一十四間、從横田町至八幡町六丁九間、）　有渡郡靜岡（本府中）傳馬町、三十四度五十八分半、　一里二十二町五十六間（至安倍川岸二十四丁八間）　丸子宿（又書鞠子）　二里三町五十七間半（至宇津谷峠三十二丁一十九間半）　志太郡岡部宿　一里一十五町一間　藤枝宿追分（至益津郡田中城大手七丁）　一十二町二十七間　藤枝宿、三十四度五十二分、　二里一十五町二十間　島田宿　一里四町四十二間（至國界大井川岸一十八丁五十間）　遠江國榛原郡金谷宿○中略

從東京歷大山及御殿場至大月○中略

駿河國駿東郡竹之下村　一里一町三十二間　御殿場村追分（至相模國足柄上郡仙石原村二里一十五町二十二間、從仙石原歷關所至宮城野村一里二十三丁二十二間半、從宮城野至湯本村一里三十二丁四十二間、又從宮城野至蘆之湯一里二丁四十八間、從蘆之湯至元箱根八丁坂二十丁二十二間、）一町一十二間　御殿場村、三十五度一十九分、　四町三十六間　同上宿（歷神山村至佐野村西原四里九丁三間）　一十七町三十七間半　仁杉村　一里三十三町一十六間半　須走村、三十五度二十一分、　二里六町三十六間（至國界一里二十七間半、從國界至籠坂峠四丁四十五間、）　甲斐國都留郡山中村○中略

從東海道三島歷佐野至今泉○中略

駿河國駿東郡佐野村二本松新田（至西原七丁一十八間、從西原至深山村三里四丁三十六間、從深山至印野村十文字一里四十一間、又從深山至富士淺間社五丁一十五間、）　一十九町五十四間　水窪村　二里二町四十五間　中澤田村　二里二十一町　西船津

村、三十五度九分、二十六町五十四間　富士郡中里村須津川岸（至廣沼十三丁三間）一十六町一十八間　比奈村、三十五度一十分、三十二町一十八間　今泉村横道（從三島〈伊豆〉至今泉）街道通計八里三十二町三十五間半、

從東海道吉原歷身延至韮崎

駿河國富士郡吉原宿追分町　四町九間　傳法村（至六所淺間社二丁二十七間）　二里一町一十三間　上小泉村（至久遠寺五丁五十七間）　一十二町二十八間　大宮鄕靑柳町（至岩本町實相寺一里二十九丁九間、從實相寺至松岡村一十六丁一十八間）　三町三十間　同中宿町、三十五度一十四分、二町一十五間　同西新町淺間華表前（至大宮鄕田宿三丁四十六間）（從田宿至富知神社四丁四十八間、又從田宿至西山村新垣外一里七丁二十七間）　一里一十五町五十一間（至淺間社前一丁五十一間）　粟倉村（至村山鄕）（淺間社一十四丁九間、北標高三十五度一十五分半、）　一里六町五十一間　北山村本門寺門前　一里二町五十一間　上井出宿新田（至上井出宿所四丁五十一間、北高三十五度一十八分、從宿所至觀音前三丁三間、從觀音前至人穴村追分一里一十丁二十四間、從追分至人穴四丁五十間、又從追分至原村二里八丁二間、從原村至上井出觀音前六丁四十二間）　三十五町六間　上條村大石寺門前（至大石寺三町三十間）　一十七町一間　下條村妙蓮寺門前（至妙蓮寺一丁四十五間）　一里五町三十六間　上柚野村（至勢子一丁二十一間、標高三十五度一十六分、）　一里一十一町三十九間　西山村片館（至新垣外六丁四十二間、從新垣外至本門寺八丁五十一間、）　一里八町五十一間半（至長貫村富士川網）（網一里五十四間、從網至內房村二十七間半、）　庵原郡內房村八幡前（至岩淵村三里四十五間）　三十四町二十八間半（至國界二十九丁五十五間半）

甲斐國巨摩郡萬澤村並久保澤岸

〔日本實測錄沿海一〕從東京沿海至大坂○中略

駿河國駿東郡口野村、三十五度三分、二里一十九町二十二間半　沼津　三里一十九町一十九間半　富士郡西柏原新田　一里一十三町四十二間半（至吉野湊一里二町二十六間）　田子村、三十五度八分、一里五町二十八間　五貫島村富士川口（至渕師七町四間）　一里二町二十二間　庵原郡蒲原宿（至街道五町四間）　一里二十三町五十三間半　有渡郡淸水湊（至江尻宿十八間）　三里一十間（至倉澤村一里二十八町三十一間）　興津宿

宿驛

二十二町三十九間　二里一十七町二十九間半　三保村北濱（至南濱、徑測一十八町二十八間）　二十九町五十六間　同

南濱　二里三十四町三十七間半（至根古屋村久能、二里五町四間半）　大谷村濱（至大谷村宿所、三町三十間）　三十四度五十七分

半、（徃大谷村濱、至靜岡本府八幡町一里六町五十九間）　二里三町二十三間（至安倍川口、三十五町二十九間）　石部村、三十四度五十五分、

一里二十九町二十七間　益津郡城腰村、三十四度五十二分、　三里一十二町五十四間（至大井川口一里二十八町四十一間半）　遠江國榛原郡川尻村濱

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬（中略）

駿河國驛馬（小川、横田、息津、蒲原、長倉各十疋、横走廿疋、）傳馬（益頭、安倍、廬原、富士、駿河郡、井横走驛各五疋、）

〔駿府志略〕海港（郵驛付）

丸子驛、在府西里許、戸數二百餘煙、（中略）驛東大半里有手越村、古驛也、有佳人千壽居趾、村南手越原、建武二年新田義貞大捷地也、

藤枝驛、在府西五里、跨益津志太二郡、戸數一千三百餘煙、多青鮫魚皮、

岡部驛、在宇都嶺西、距府三里、戸數四百餘煙、驛原係益津郡、後屬志太郡、

江尻驛、在府東三里、戸數八百餘煙、巴水絶驛東流、有橋曰兒子橋、長二十一弓、都亭北有故壘、穴山梅雪所居、

與津驛、在府東四里、戸數三百餘煙、負山臨海、多魚蝦、驛東捍海隄長一千二百五十弓、隄盡有津、冬春架橋、夏秋撤之、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年十二月癸卯、改駿河國駿河郡永藏驛家、遷置于伊豆國田方郡、以駿河郡特帶三驛、百姓殊苦重役也、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年十二月十日癸亥、駿河國言、駿河郡帶三驛二傳、横走、永倉、柏原驛家是也、總差點丁驛子四百人、傳子六十人、年來疫旱荐臻、課丁欠少、因而驛傳子等、不能滿數、郡民凋殘、莫甚於

國郡沿革

此、望請廢柏原驛、富士郡蒲原驛遷立於富士河東野、然則蒲原驛與永倉驛、行程自均、民得息肩、從之、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十月十三日壬辰、甲斐國源氏并北條殿父子、赴駿河國、今日暮兮、止宿大石驛云云、戌剋、駿河目代、以長田入道之計、廻富士野襲來之由、有其告、仍相逢途中、可遂合戰之旨群議、武田太郎信義、次郎忠頼、三郎兼頼、兵衛尉有義、安田三郎義定、逸見冠者光長、河内五郎義長、伊澤五郎信光等越富士北麓若彦路、爰加藤太光員、同藤次景廉、石橋合戰以後、逃去于甲斐國方、而今相具此人人到駿州云云、

〔吾妻鏡 五〕元暦二年〇文治元年十一月一日庚辰、二品著御駿河國黄瀬河驛、被觸仰御家人等云、爲聞定京都事、暫可逗留于此所、其程可用意乘馬幷旅粮已下事云云、

〔吾妻鏡 二十一〕建暦三年〇建保元年四月十八日己丑、義直相具朝盛入道、自駿河國手越驛馳歸、仍義盛遂對面、暫散鬱憤云云、又作著黒衣參幕府、依有恩喚也、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年十月廿五日丙寅、御逗留蒲原宿、聊依御不例也、

〔沙石集 六下〕正直之女人事

近比奥州ノアル山寺ノ別當ナル僧、本尊ヲ造立セムト年來思企テ、金ヲ五十兩、守袋ニ入テ頸ニ掛テ上洛シケル程ニ、駿河ノ國原中ノ宿ニテ、晝水ヲアミケル家ニテ、此袋ヲ忘テ、菊川ニテ思出シタリケリ、

〔日本國郡沿革考 二東海道〕駿河　古作珠流河、駿河風土記、垂仁三年、割伊豆國西分、蓋誤説、不可信、又云、國內有三大河、其灘勢如駿馬、故爲國號、　上

國管七郡、七百八十村、

志太 百二十六村　益津 三十二村 延喜式等作益頭、正德二年令、自今宜書益頭、而今仍作益津、萬葉集所謂燒津邊、即此地、土人今尚仍稱也、伊津蓋古訓之遺、日本紀云、日本武尊至駿河、賊欺曰、野多麋鹿、王信其言、入野覓獸、賊放火燒其野、王知被欺、則以燧出火向燒、悉焚其賊、滅之、故號其處曰燒津、　安倍 百二十三村 古府治、駿河風土記作安辨、

廬原 八十二村 古廬原國、見國造記、古事記作五百原、延喜式等作廬原、　富士 百四十八村　駿東 百七十一村 古駿河郡、延喜式作駿河、蓋中世析爲東西二

郡、後駿河四郡、未詳何時、　有渡九十九村、孝德紀作荒、延喜式等作有度、正德二年令、自今宜書有度、而今仍作有渡、

〔日本地誌提要十四駿河〕沿革　古ヘ國府ヲ安倍郡ニ置、今ノ靜岡是ナリ 鎌府ノ初、武田信義ニ命ジテ、本州ヲ管セシメ、源廣綱、三浦義村、相繼テ守護ヲ以テ州守ヲ兼ヌ、建武中興、脇屋義助ヲ守護トス、正平六年、足利尊氏、今川範國ヲ以テ守護トシ、府中ニ治ス、相傳ル八世、義元ニ至リ、勢頗ル强大、遠江三河ヲ兼併ス、永祿三年、織田氏ト戰テ敗死、子氏眞嗣ギ、州人離叛ス、永祿ノ末、武田晴信、襲フテ府城ヲ陷レ、氏眞ヲ逐ヒ、遂ニ本州ヲ奪フ、武田氏ノ亡ブル、德川氏之ヲ取リ、遠江ヨリ移テ府中ニ治ス、天正十八年、關東ニ遷ル、豐臣氏、中村一氏ヲ本州ニ封ジ、嗣忠一封ヲ襲グ、慶長五年、德川氏之ヲ伯耆ニ徙シ、府中ヲ內藤信成ニ賜ヒ、三萬石大久保忠佐ヲ沼津ニ、酒井忠利ヲ田中ニ、天野康景ヲ興國寺ニ封ズ、後沼津興國寺二城ヲ廢ス、十四年、信成忠利ヲ徙封シ、德川賴宣ヲ全州ニ封ジ、府城ニ鎭ス、元和中、之ヲ紀伊ニ移シ、寛永元年、德川忠長ヲ封ズ、元和ヨリ寛永ニ至ルマデ、田中城ニ城代ヲ置キ、州事ヲ理セシム、九年、罪有テ國除セラレ、城代ヲ府中ニ置キ、士隊及騎步卒ヲ置テ戍シ、松平忠重ヲ田中ニ封ズ、後ニ本多正矩 元祿中、松平信治ニ小島ヲ賜ヒ、安永ノ初、水野忠友ヲ沼津ニ封ジ、凡テ三藩、王政革新、三氏ヲ安房上總ニ徙シ、德川家達イヘサトヲ本州ニ封ジ府中ニ治シ、改テ靜岡ト云、旣ニシテ廢シテ靜岡縣ヲ置、

〔先代舊事本紀十國造〕珠流河國造

志賀高穴穗朝成務○世、以物部連祖大新川命兒片堅石命、定賜國造、

廬原國造

志賀高穴穗成務○朝代、以池田坂井君祖吉備武彥命兒意加部彥命、定賜國造、

〔駿府志略〕襍記　駿河、景行天皇四十年、神烈東征、分爲四國、宇都山以西爲素賀國、富士水以西爲安倍廬原二國、足柄山以西爲駿河國、孝德天皇時始併爲一國、

國府

〔駿府志略〕輿替

府城安倍氏城、後爲州治、並不詳其時世、至建武二年、今川範國始封駿遠二國、範國居遠府、今見附驛也、卒壽八十七、諡省公、子範氏立、徙居本州華倉里、卒壽五十、諡慶公、子泰範立、卒壽五十五、諡高公、子範政立、始居本府、嘉吉二年卒、壽七十八、諡全公、子範忠立、多力善射、寛正二年夏五月五日卒、壽五十四、諡賀公、子義忠立、文明七年夏四月、西伐横澗氏、敗死、諡昌公、邦内大亂、關東帥足利氏滿遣兵來討、立義忠子氏親、氏親西伐報父讐、遂併參河、大永六年夏六月卒、壽五十四、諡信公、子氏輝立、天文五年夏四月卒、諡玄公、弟義元立、永祿三年夏五月、率師四萬、西伐織田氏、敗死桶狹、時年四十四、諡哲公、子氏眞立、奢侈無度、邦人大畔、十一年冬、爲武田氏所攻出走、今川氏建國二百三十四年、首乙亥、盡戊辰、武田信玄、以永祿十一年入駿河、明年春、與北條氏相持薩埵山、凡百餘日北還、冬十月、復南伐盡有駿地、修横山江尻田中等諸城、分戍諸將、天正元年春、信玄大擧西伐、卒于師、子勝頼立、十年夏、烈祖（○徳川家康）與織田氏夾攻滅勝頼、武田氏有駿十四年、首戊辰、盡壬午、烈祖以天正十年併駿河、越四年營府城、遷居焉、十八年秋東遷、豐公以本府封其將中村一氏、食十四萬石、慶長五年秋卒、子忠一立、冬烈祖徙忠一于伯耆、以本府賜韮山城主内藤信成、十一年夏、徙信成於江之長濱、明年秋七月、烈祖再還焉、又二年己酉冬、封八子頼宣於遠之横沙、食駿遠二國、頼宣年幼、未就封、元和二年、烈祖薨、頼宣遂居本府、五年、移封紀伊、台廟（○徳川秀忠）二子忠長代封、忠長以寛永九年、謀反賜死、爾後置留守、

〔倭名類聚抄　五國郡〕駿河國（國府在安倍郡、行程、上十八日、下九日、）

〔伊呂波字類抄　須國郡〕駿河國（○中略）安倍（アヘ）府

〔駿府志略〕襍記　國府、或云在廬原、或云在藤枝、或云今府即古國府、或云厥初在廬原、後徙藤枝、又徙今地、其說不一、府人新莊雄曰、駿河本四國、廬原自有廬原國府、安倍自有安倍國府、此說似是、

〔駿河國新風土記國府六〕和名抄、國府在安倍郡、行程上十八日、下九日、今案ルニ、府ヨリ京マデ今ノ道七十五里トイフ、〇中略府ヲ當郡ニ置レシ事、イヅレノ御代トイフ事ヲシラズ、古ハ廬原郡ニアリテ風土記ニ、古國府トアル所是ナリ、今ハ廬原郡ニアル事ハ、ムカシ廬原國造ヲ任サレシヨリ、其氏人五百原君代々コノ所ニ住シテ、國ノ政ヲモトリシカラニ、國守ノ府モ爰ニ定リシナルベシ、〇中略國分寺ヲ置レシハ、神龜三年聖武天皇ノ御代ナルニ、廬原郡北高橋ニアリト、風土記ニアリ、コハ府ノ東西ニ建トイフコトナレバ、郡ヲヘダツルコトモアルベケレド、コノ川邊ノ國分寺トイフモ、圖帳ニアレバ、後ニ安倍郡ニウツシタルニヤ、然レバ府ノウツリタルハ神龜ヨリ後チニテ、風土記ノナリタル延長ヨリ前ナルベシ、〇中略今ノ町ハ、往昔安部市ノ舊跡ナリ、其ムカシ、今ノゴトク小路ナドノ町アリシニヤ未詳、永祿九年今川家ノ老臣飯尾豐前守トイフモノ、野心ノ沙汰アリテ、遠州掛川ノ城ヨリ爰ニ招寄テ、家人ニ命ジテ誅セシ事アリ、其時小路軍トイフ事アリシト見エタレバ、今ノ如キマチノアリシコトハ知ラレタリ、其後永祿天正二度ノ兵火ニテ、昔ノ家居ハ殘リナク失テ、天正ヨリ以前爰ニ住シトイフモノ有事ナシ、カクテ慶長ノ初メヨリ、民家モソココヽニ建初タルヲ、同十二年神祖爰ニウツリ賜ヒテ、同十四年彥坂九兵衞光政、畔柳壽學ヲ奉行トシテ、繩張シテ今ノ町ヲ割ラシメ賜ヒシト云、今ノ町ノナレルハ、友野宗善ガ力ナリ、宗善ハ代々府ノ町人ノ頭ニテ、町年寄友野與左衞門トイヘル者ノ祖ナリ、其家ニモテル古文書アリ、

定

一御普請幷鄉夫之事　一人質之事　一壹揆之事

令歸參駿府、爲居住者、右如此之諸役、可有御免許之由仰出者也、仍如件、

天正三年乙亥十月朔日　跡部九郎左衞門尉奉之

駿府商人衆

今ノ町ハ、安倍郡有渡郡ニマタガル、其境官道ヨリ北ヲ安倍トシ、南ヲ有渡トス、一町兩郡ニワタルモノナリ、

〔加藤文書〕傳馬壹疋、自金屋駿府迄可出者也、仍如件、

戊子壬五月廿日　淺井鷹兵衛奉之

右之宿中

〔集古文書四十九配符〕天正十六年配符紀伊國高野山高室院藏

傳馬四疋、自駿府岡崎迄可出立候也、仍如件、

戊子三月廿八日　石原市左衛門尉奉之

右宿中

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕駿河國管七○註略　志太、益頭末志豆、有度宇止、安倍、廬原伊保波良、富士浮志、駿河與國同

〔延喜式二十二民部〕駿河國、上、管志太、益頭、有度、安倍、廬原、富士、駿河○中略　右爲中國、

〔伊呂波字類抄須郡國〕駿河國管七　志太シタ　益頭マシツ　安倍府アヘ　廬原イチハラ　富士フシ　有度アリト　駿河

〔拾芥抄中末本朝國郡〕駿河上中七郡　志太シタ、益豆マシフ、有度ウト、安倍アヘ府、廬原イホハラ、富士フジ、駿河スルカ、上下與國同

〔皇國郡名志〕駿河國七郡

志太シタ　●泉　●桑山　●御室　遠信甲界大井川上

益頭マシツ　〔島田　〔藤枝　大井川下海ニ至

有度ウト　田中　〔岡部　●丸子　△ウツノ山　△アベ川　府中ト藤枝ノ間小郡

安倍アヘ　〔久能　府中　△三保　○△清水　△蘆久保　國中

廬原(イホハラ)　●岩淵　●蒲原　●由井　●沖津　●江尻　●松野　●蘇子原　甲界　海ニ貫
富士(フシ)　●吉原　●北山　スベテ不二山邊テ村カズ少　甲界　海ニ貫
駿東(スントウ)　●原　沼津　●カウ山　須走　(松山　(浮島原　豆相甲ノ界

舊駿河今作二駿東一

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕駿河

六國史古書	六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
	止駄(風土記)	志太	同	同	同(國郡元)	同(シダ)	同	同	同(シダ)	同
燒津(紀)	麻賤(駿河風土記)	益頭(マシツ)	同(末志豆)	益豆	益津(國元)	同(マシツ)	同(マシツ館)	同	同(マシヅ)	同
		有度	同(宇土)	同	有渡(國元) 烏渡(元亨釋書)	有渡(ウト)	有渡	同	同(ウド)	同
	安辨(駿河風土記)	安倍(アヘ)	同	同	阿兵(元) 安部(國元)	安倍(アベ)	同	同	同(アベ)	同
		廬原(イホハラ)	同(伊保波良)	同	庵原(國元)	同(イハラ)	同	同	同(イハラ イホハラ)	同

		富士(フジ)	同	同	同	同(フジ)	同	同	同(フジ)	同
		駿河	同	同	駿河 駿東	駿東(スントウ)	同	同	同(スントウ)	同
		管七	同	七郡		同	同	同	同	同

〔駿河國新風土記二十二〕郡

道雄曰、コノ國、昔ヨリ郡ヲ分ツコト七ツ、風土記ニ、大郡參中郡貳小郡貳、島渡郡大伊穗原郡大富士郡中安辨郡中薦河郡大志太郡小廬賤郡小ト見エタリ、有渡郡ノ地、今ノ田頴三万三千石餘、駿河郡高四万千七百石餘ナレバ大郡ト云ベシ、伊穗原郡高二万百石餘ナリ、二郡ニ比スレバ小ナレドモ、コノ郡ハ多ク海濱ナレバ、人民モ多ク、昔ヨリ土地開ケシ所ナレバ、大郡ト云シナルベシ、富士郡高三万五千三百石餘ナレバ、郡ノ中富士川ノ急流アリテ、昔ハ田地モ開ケズ、人民モ少カリシカラニ、中郡トハ定マリシナルベシ、安辨郡高一万二千五百石餘、田ハ少ケレド、土地廣ケレバ中郡ニハ入シナルベシ、志太郡高三万六千百石餘、益津郡高一万千八百石餘、コノ二郡ハ大井川ノ急流アリテ、今ノ田地多クハ新ニ開キシ所ナレバ、土地ノ人民モ少カリシコト知ラレタリ、大中小ノコト、今ノ田頴ノ高ヲ以テ論ズベキニアラネドモ、戸數多ケレバ田所モ多キコト知ルベキナレバ、今ノ田數ニヨリテ論ズルナリ、

〔駿河國新風土記一〕郡の事

志太郡　和名抄風土記、并作志太、風土記異本作止太、其餘諸書、皆作志太、　志太と名付し事は、此郡の内、えだと云草の多く生ふる故にやあらむ、凡其地に多く生ふるものもて、郡名又は郷名に

益頭郡

負する事甚多し、近江國蒲生郡、武藏國橘樹郡遠江國榛原郡など是なり、今此志太郡は其名の元なる志太村を始として、夫より西北の方、皆山に傍たる村里にして、玄だと云ふ草至て多し、

〔駿河隨筆上〕小志太郡止駄　百六十一村

北自宇津山峠、西大井川除限、南藤枝之驛、中割西之方、東岡部驛ノ入朝比奈ヲ限、西宇津山際ヲ限、

〔駿河國新風土記一〕郡の事

益津郡　古書皆作益津、延喜式作麻賤、後世諸書多作益津、郡名もとやきつの郡なり、呉音釋轉して、やきの假字に用ゆ、頭呉音ヅ濁音なり、後に燒と云辭を忌てましづと呼、終に頭の字を改めて津の字を書しなり、

〔駿河隨筆上〕小益豆郡　麻賤　三十二村

南東海際限、北自宇津山、當目山ニ限、西大井川際ニ限、

〔日本書紀七景行〕四十年、是歲日本武尊初至駿河、其處賊陽從之、欺曰、是野也、麋鹿甚多、氣如朝霧、足如茂林、臨而應狩、日本武尊信其言、入野中而覓獸、賊有殺王之情、王謂日本武尊也放火燒其野、王知被欺、則以燧出火之、向燒而得免、○中略故號其處曰燒津、

〔古事記中景行〕故爾到相武國○日本武尊之時、其國造詐白、於此野中有大沼、住是沼中之神、甚道速振神也、於是看行其神、入坐其野、爾其國造火著其野、○中略於今謂燒遺也、

〔古事記傳二十七〕燒遺、○中略萬葉三に、燒津邊吾去しかば、駿河なる阿倍の市道に逢し兒等はも、神名式に、駿河國益頭郡燒津神社今も燒津村と云あり、また野燒村とも云もあり、野島ともいふ、和名抄に、同國益頭末志豆郡益頭万之都郷と見え、かの風土記にも麻賤郡など書れど、益津は音を取れる字にて、即燒津なり、此事谷川氏も云りき、頭字音を取れゝば、益もヤクの音を轉じてヤキに用ひたるなり、然るを麻志豆としも云は、やゝ後に燒と云ことを忌憚みて、其字の訓に唱へ更たる物なるべし、然る例他にもあるなり、

有度郡

〔駿河國新風土記　一〕郡名考

有渡郡　万葉集有度ニ作リ、風土記島渡ニ作リ、和名抄延喜式有度ニ作リ、今有渡ト書ス、中古ヨリ同ジ、万葉集二十有度部牛麿ト云名アリ、コノ國人ナリ、風土記ニ、有度清水、有度釆女、藪子陵アリ、有度山アリ、中古ノ歌ニ有度濱トヨム、皆此ナリ、其有度テフ語意ハ、有ハ借字ニテ、ウウノ約リヲウトナリ、度ハ所ノ意ニテ、植所ノ義ナリ、植トハ稲苗ヲ植ル所ト云意ナリ、其有度ノ里トサス所、今ノ有東村成ベシ

〔駿河隨筆　上〕大有渡郡　島渡　九十村

南海際ヲ限、北自丸子左渡字津山際ヲ限、東府中奥服町一町目二町目境、南側江尻橋際ヲ限、西宇津、山際ヲ限、

〔萬葉集　二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

美豆等利乃、多知能已蘇伎爾、父母爾、毛能波須價爾氏、已麻叙久夜志伎、

右一首、上丁有度部牛麿

安倍郡

〔駿河國新風土記　一〕郡名考

安倍郡　古事記阿倍ト書キ、書紀同ジ、類聚國史ニ安倍、風土記并民部省圖帳安兵ト書ス、今安倍ノ文字ニ隨フ、中古ヨリ同ジ、〇中略此地、中ムカシヨリ二ツニ分レテ、東ノ方ヲ安東ト云、西ヲ安西ト云テ二郷トハナレルナリ、スベテ大郷ニテ、此アタリノ大名ナレバ、郡ノ名ニモ及ビシ成ベシ、又昔武治河命ノ子孫ノ、知ラシヽ所ノカギリノ郡名ト成ルニモアランカ、安東安西ハ總テ府ノ東西ニテ、中古ノ書ニモ數多出タル地名ナリ、

〔駿河隨筆　上〕中安倍郡　安辨　百十一村

南府中奥服町ヲ限、北江尻能島ヲ限、西信濃境ヲ限、東横内川流ヲ限、

〔駿河國新風土記 一〕郡の事

廬原郡　後世或作₂庵原₁、廬原は浮島原に對へての名なり、古浮島原は、渺茫たる野原にして、人の家居すべき所なし、此郡浮島が原に降りて家居多かりければ名付けるならむ、廬は民の家を云、原は廣く平らかなる義なり、舊事紀有₂廬原國₁、廬原、安倍、有度、志太、益頭五郡を合せての名なるべし、何れの御世よりか廬原の國を駿河の國に合せて、駿河は一國の大號となり、廬原は降て郡の名となれり、

〔駿河隨筆 上大〕庵原郡　伊穗原　七十九村

東富士川ヲ限、西江尻能島ヲ限、南海ヲ限、北甲州山ヲ限、

〔續日本紀 十八孝謙〕天平勝寶二年三月戊戌、駿河國守從五位下楢原造東人等、於₂部內廬原郡多胡浦濱₁獲₂黃金₁獻之、練金一分、沙金一分、於是東人等賜₂勤臣姓₁、

〔駿河國新風土記 一〕郡名考

富士郡　書紀不盡川ト書、万葉不二ト書ス、和名抄以下富士ニ作ル、本朝文粹都良香富士山記ニ、古考傳云、山名富士、取₂郡名₁、山有₂神、名₂淺間大神₁トアルハ、本末ノタガヒニテ、コノ山ヨリ郡ノ名トモナレルナリ、

〔駿河隨筆 上中〕富士郡　百村

東原ノ驛ヲ限、西富士川ヲ限、南海ヲ限、北富士山ヲ限、

〔駿河國新風土記 一〕郡の事

駿東郡　古駿河郡とす、享保年間、官より命じ玉ひて駿東郡と改む、舊事紀に駿河國と云へるは、本郡と富士郡とを合せての名なるべし、後廬原國を併せて、駿河と云名は一國の大號となりて各郡を置玉ひしとき、此郡に舊名を殘せしなるべし、

廬原郡　富士郡　駿河郡

鄕

〔駿河隨筆上〕大駿東郡　駿河　百五十村

東伊豆國ヲ限、西富士郡ヲ限、南沼津ノ驛ヲ限、北山ヲ限、

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年四月戊申、駿河國駿。河。郡。大領正六位上金刺舍人廣名爲二國造一、

〔駿河國新風土記二提要〕鄕庄略○中　此國ノ庄名、古書ニ出タル事左ノ如シ、略○中　走湯山所藏、嘉元二年文書、駿河國金持庄、駿。東。郡。

〔倭名類聚抄六國郡〕駿河國　志太郡　大長　大津　葦原〇葦高山寺本作レ英　餘能　刑部　英原　夜梨　大野

益頭郡　西刀世止　澤食〈食高山寺本作レ會〉佐波比　朝夷安佐比奈　飽波阿久奈美、在二上下一　八田也太　物部毛乃乃倍　益頭萬之都　高楊多加也奈

小河　新居爾比井

有度郡　內屋宇都乃也　眞壁萬加倍　他田乎佐多　新居爾比井　託美多久美　嘗美奈女美　會星安布保之

安倍郡　川邊加波乃倍　埴生反布　廣伴比呂止毛　葛間加都良萬　美和　川津加波都　八祐也分之　横太與古太

廬原郡　西奈世奈　大井於保井　河名加波奈　廬原伊保波良　蒲原加無波良　息津於木都

富士郡　島田之萬多〇高山寺本、島作レ島、無二之萬多訓一　小坂乎佐加　古家布留伊倍　蒲原　驛家　大井於保井　久貳久爾　姫名比奈

神戸

駿河郡　柏原加之波波良　矢集也都女　子松古萬都　古家布留以倍　玉造多萬都久里　横走與古波之里　駿河　山埼也萬左木　宍人之々比止　永倉奈加久良　宇良

〔集古文書四十二寄附狀〕北條時頼寄進狀伊豆國熱海走湯山東明寺藏

寄進　走湯山寺領事

駿河國伊。賀。留。美。鄕。內水田伍町

右爲二天下泰平一、爲二息災安穩一、以二彼口田地所一、令二寄進一也、早停二止鄕司地頭一口沙汰、爲二一圓不輸之地一、限二永代一可レ爲二當山御領一之狀如レ件、

寛元五年二月十六日　　左近將監平朝臣花押

延慶四年寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　駿河國池田鄕內田畠屋敷注文在別紙事

右爲鶴岡八幡宮毎季大般若經轉讀料所寄進狀如件、

延慶四年正月十九日　　沙彌花押

〔富士文書乾〕駿河國下島鄕地頭職、所被寄附當宮也、□知行者天氣如此、悉之以狀、

元弘三年九月三日　　左少辨花押○中御門宣明

富士大宮司館

〔三島神社文書乾〕奉寄　三島大明神

駿河國土加利鄕內、田參町、畠壹町事、

右奉寄、如件、

建武元年二月九日　　左兵衞督源朝臣花押○足利尊氏

〔小早川什書六〕駿河國安部鄕內、殿岡七郎入道跡事、爲闕所之由望申之間、爲相模國北成田鄕、波多野鄕之內阿曾沼下野權守綱朝跡替、暫所被預置也、自將軍家被仰下之程、可被所務由候、仍執達如件、

建武三年十月十日　　家長花押○斯波

小早河左衞門五郞入道殿

〔和簡禮經上〕曾我奥太郞時助申、駿河國沼津鄕工藤右衞門尉跡事、任去二月八日御下文之旨、可被沙汰付之狀、依仰執達如件、

建武三年十月十五日　　武藏權守○高師直在判

少輔四郎入道殿

〔蠹簡集殘編〕二　駿河國香貫郷正稅四分壹事、爲井伊城責兵粮所充行之狀如件、

建武五年三月廿七日　花押○今川範國

松井八郎殿○宗助

〔實相寺文書〕駿河國岩本郷内實相寺寺務職事

右法東侍者禪師爲口職、任先例可令管領之狀、國宣如件、

建武五年六月廿七日　花押○今川範國

〔集古文書〕十五判物　延文三年判物○伊豆國熱海走湯山東明寺藏

走湯山領駿河國中田保西島郷等事、依安部凶徒蜂起、雖預軍勢等、如元所返付也、任先例可被致沙汰之狀如件、

延文三年十二月廿六日　前上總介花押

當所預所

〔駿陽徵古〕一　寶樹院領駿河國内尾郷佛光寺田、并番匠治同大岩郷内等持院殿御寄進紺免、同下島道場田慶壽寺被寄進、井宮、同上足洗内壹名長慶寺被寄進、木作跡、瀬宮、今林寺被寄進、并馬淵御堂屋敷貳段、向笠文太夫知行内壹町、當府内寺中屋敷、同玉屋屋舖等事、

右依此等證文等事文安元甲子二月七日寺家炎上、悉令紛失畢、雖然任當知行之旨、領掌不可有相違者也者、守先例可被全寺家執務之狀如件、

文安元年三月廿七日　前上總介在判

〔駿陽徵古〕三　駿河國下方内大塚郷稚村太郎左衞門尉爲久名主職此内、神尾右京亮讓分共、并新屋名等之事、

右代々證文、近日逢盜賊失却之候、縱從他之手雖出之、不可有許容、兼又親類割分事、於令同心者可

爲如前々、至于有異儀者、爲久宜然可相計、定納年貢納一門以下等者、可爲如年來之狀如件、

大永八戊子年八月七日　五郎花押

稚村太郎左衞門尉殿

〔久住文書〕口野鄕之內、江浦へ著岸伊勢船之儀、其外縱爲小舟、於諸商賣不可有橫合、幷問屋之儀も申付上、代官かたへ禮等之儀者、可爲如前候、但於有役者、此方へ可致沙汰、若依打鑑錠者、代物以貳拾疋可致浦祭、此上代官百姓、若有兎角儀者、爲先彼判形可相斷之狀如件、

弘治三丁巳三月廿四日　氏元花押

橋見善左衞門尉殿

〔淸水寺文書〕於稻葉鄕內淸水寺、每年正月十七日七月十七日兩度、新町可相立事、

一商人諸商買不可有役事　一押買狼藉之事　一喧嘩口論事

右條々、於違犯之輩者、急度可加成敗者也、仍如件

永祿四年六月朔日

淸水寺衆徒中

〔駿陽徵古　一〕駿河國椎尾增善寺境內門前田畠、幷諸塔頭諸末寺光雲寺領壹町四段半畠貳枚、上島鄕內浮免貳町、同段錢六貫文、字名鄕地頭方、岡部左馬允分、拾貫文、賀島內遠光寺分米百貳拾俵餘、代五貫文、小杉米六拾六俵半等之事、

右寺領所々、任代々判形之旨、如宗瀰和尙讓狀令領掌畢、〇中略守先例可被執務之狀如件、

永祿八乙丑年十一月七日　上總介花押

增善寺宗佐和尙

〔駿陽徵古　一〕駿河國太平之鄕臥雲庵領之事　合八貫五百文者

右爲天澤寺殿御靈供寄進申候、寺家山林、并門前棟別轉役課役如前々免除之、不可有相違者也、仍如件、

元龜三年壬申二月廿二日　氏眞（花押）

大草和尚

定

阿野庄之内、赤野山青野鄕淺間并足高明神別當職之事、如前々被仰付畢、然者神前之諸役等、如舊規不可有怠慢者也、仍如件、

元龜三年壬申五月十四日（判在）　市川宮内助奉之

定

瀨名鄕内利倉宮事、自前々拘來之上者、自今以後、彌不可有御相違、去宮中造立祭祀等、無怠慢可令勤仕之旨所被仰出也、仍如件、

天正四丙子年二月十六日（判在）　跡部大炊助奉之

奈吾屋大夫

〔渡井文書〕布澤之鄕小屋之者、何も赦免候間、爲先印判可被申付候、軍勢甲乙人、彼男女ニ手指候者、可處嚴科者也、仍如件、

壬午三月六日（北條氏虎朱印）　垪和伯耆守奉之

源五郎殿

村里名邑

〔駿河國志〕郡數七郡

村數三百四ヶ村　内貳百九拾三ヶ村　御代官所　拾壹ヶ村　御預リ所

〔郡名一覽〕一駿河國（御料私領）　駿州　東西二日半　七郡

莊

高貮拾三万七千八百三拾七石四斗七合貮勺八才　七百九拾五ヶ村

●府中御城四十五里　●田中四十八里　●沼津廿九里半　○小島四十三里半

〼久能四十二里榊原越中守　∧府中紺屋町四十五里　∧島田出張五十里

∧松岡同上卅八里　∧三島同上廿八里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕駿河　七郡、七百八十村、

御料私領高二十五万五百三十八石七斗五升三合九才

志太郡百二十六村　益津郡三十二村　安倍郡百二十三村　庵原郡八十二村　富士郡百四十八村　駿東郡百七十一村　有度郡九十九村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

駿河　有渡郡、安古村、用宗村、有東坂村、富士郡、神戸村、駿東郡、新芝村、仁杉村、北久原村、深良村、芝穗田村、

〔駿河國新風土記二提要〕鄕庄　庄號ハ國中ノ各村ニアルニアラズ、臣下ニ賜フ所ニノミアリテ、公田ノ所ニハ庄名ナシ、此國ノ庄名、古書ニ出タル事左ノ如シ、東鑑ニ出タル庄名　服織庄、八條院御領、安部郡ナリ　益津庄、圓勝寺領トモ鶴岡神宮寺領トモ、益津郡ナリ　蒲原庄、庵原郡ナリ、　大岡庄、駿河郡ナリ、　太平記ニ、駿河國入江庄、有渡郡　走湯山所藏嘉元二年文書、駿河國金持庄、駿東郡　永正年古文書、國界庄、同郡ナリ、此庄名不審、地名所々ニ論ズ、　曾我物語、富士郡松風庄、今詳ナラズ、　古書ニ出タル所コレラナリ、中古ノ文書、棟札、鐘名ナドニアルモノ、多クハ不審ナルノミアリ、元祿年間ノ高附帳ニシルシタル庄名、　安部郡服織庄、一郡スベテ服織庄ト云、何ヨリイヅレナルコト未詳、安部山中ニ玉川庄ト云村アレド、古ニ證トスベキ者ナシ、俗稱ナルベシ、　有渡郡長田庄、古ノ鄕名ナリ、長田或ハ中田ニ作ルモノアリ、同ジ所ナリ、一郡コノ庄名ヲ稱ス、　志太郡大津庄、古ノ鄕名ナリ、又御厨ノ名ナリ、庄トイ

ニフコト古書ニハ見ヘズ、葉梨庄、風土記ノ郷名ナリ、前ニ同ジ、前島庄、中古ノ驛ノ名ニアリ、前ニ同ジ、益津郡益津庄、東鑑ニ出タルニ同ジ、廬原郡蒲原庄、同、高部庄、下方庄、此庄名、北條五代記ニモミヘタリ、須津庄、駿東郡鮎澤庄、本邦竹下村鮎澤川アリ、小泉庄、泉六ヶ村ト稱ス、金持庄、前ニ出、大岡庄、同、阿野庄（阿野冠者師公曉モ、コノ所ニ住テ、阿野ヲ以テ稱ス、）上件ノ外ニ改選系譜、松平伊賀守忠晴、寛永十九年九月、賜駿河國志太郡御厨庄田中城三万石トアルハ、外ニ見ヘヌ庄名ナリ、此御厨ト云ハ、イヅレノ御厨ノナマヲナリクン、若クハ小楊津御厨ノウチナリシヤ、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年（〇元暦元年）四月六日甲戌、池前大納言幷室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申有彼亞相勅勘之上、以彼家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言沙汰〇中略　大岡庄（駿河）〇中略

右庄園拾七箇所、載沒官注文、自於院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月五日

池大納言家沙汰〇中略　服織庄（駿河）〇中略　已上、八條院御領、〇中略

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月六日

〔吾妻鏡　八〕文治四年七月廿八日壬戌、式部大夫親俊募武威、貪他人領所、抑留乃貢之間、雖預勅問失陳謝之由、依其說出來、二品令尋親能許給之處、不能委細言上、只去六月已捧狀訖、案文獻上之、若此事候歟之由申之、此由訴之歟之由、二品令感給云云、

謹請　院宣二箇條事

一駿河國蒲原御庄御年貢事

藩封

右件御庄、大外記師尙依相親令訛付之間、以內儀令致沙汰之處、文治元二年者、令究濟預返抄畢、可被召尋彼師尙朝臣歟、去年分、去四月令積載令解纜畢、〇中略

文治四年六月十一日　散位藤原朝臣親能

〔吾妻鏡十九〕承元三年十一月八日戊戌、鶴岡神宮寺可奉常燈之由被仰下、以駿河國益頭庄乃貢可爲彼燈油之由、被仰相州云云、

〔白河文書〕駿河國須津莊內須津河鄕事、不可混總莊之上者、可被全知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年八月十一日　宮內卿〇中御門經季在判

結城上野入道〇宗廣館

〔叢簡集殘編一〕駿河國葉梨莊內田地壹町、幷屋敷壹所地頭代職事、守先例可令知行之狀如件、

建武五年正月二日　花押〇今川範國

松井兵庫允殿

〔梅花無盡藏一〕里槃脚上方始對談二十日黎明、出袖浦、午時入葉梨庄、日遣山槃脚寺、前夕舟于迷津、纜岸移刻、小河大船多、而道路甚汚穢、無可投脚之地、〇詩略

〔駿陽徵古二〕定

駿州阿野庄之內眞如寺之事、從法性院殿被懸置候之上者、自今以後、彌不可有相違候之條、修造已下、無怠慢樣、可被加尊意儀肝要候、恐惶敬白、

元龜四年癸酉八月廿七日　勝賴花押

拜進　長禪寺侍衣閣下

〔慶應元年武鑑〕帝鑑間朝散大夫水野出羽守忠誠　五万石　居城駿州駿東郡沼津江戸ヨリ三十九里半

當城者、天正七己卯年、武田勝賴使其臣高坂源五郎築之、其后同九辛巳年、松平周防守康重、慶長六辛丑年、大久保次右衞門尉忠佐居、同十九甲寅、廢城、安永六丁酉年、侯台命、水野出羽守忠友築城、以後領之、〇後節略

田數
石高

〔慶應元年武鑑〕本多紀伊守正訥 雁間 朝散大夫　四万石　居城駿州益津郡田中 江戸ヨリ四十八里 慶長十五、御番城、寛永二、駿河大納言忠長領、同八、松平大膳亮忠重、同十二、水野監物忠善、同十九、松平伊賀守忠晴、正保元、北條出羽守氏重、慶安二、西尾丹後守忠照、同隠岐守忠成、延寶七、酒井日向守忠能、同九、土屋相模守政直、貞享五、太田攝津守資直、同鐵次郎資晴、寶永二、内藤豐前守式信、正德二、土岐伊豫守頼殷、同丹後守頼稔、享保十五ヨリ本多伯耆守正矩、以後領之、

松平丹後守 雁之間 朝散大夫　一万石　在所駿州庵原郡小島 江戸ヨリ四十三里半 元祿年中ヨリ松平氏代々領之〇節略

〔倭名類聚抄 五 國郡〕駿河國 〇略 註 管七 田九千六十三町二段百六十五歩

〔伊呂波字類抄 須 國郡〕駿河國 管七 〇中略 本田九千七百九十七町

〔海東諸國記〕駿河州　郡七、水田九千七百十七町、

〔官中秘策 二〕駿河國　七郡 〇中略

一石高貳拾三万七千九百三拾七石餘

〔駿河國志〕駿河國總高合貳拾四万六千八百七十四石四斗壹升四合四勺貳才

内譯

安部郡	高壹万九千八百五拾五石四斗七升七合五勺
有渡郡	高三万六千壹石八斗五合五勺五才
庵原郡	高貳万千七百七拾壹石七斗七升六勺
富士郡	高四万八千貳百五拾七石三斗九升壹合三勺
志太郡	高五万五千三拾八石三斗五升
益津郡	高壹万千八百四拾七石七斗四升三合

〔吹塵錄 五 人口及國高〕天保度御國高調 〇中略

駿東郡	高四万九千六百六拾四石八斗六升三合

駿河國御料私領　一高貳拾五万五百三拾八石七斗五升三合九勺

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

駿河國、正稅廿三万束、公廨廿五万束、國分寺料二万束、大安寺料四万一千束、藥師寺料八千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料六万束、俘囚料二百束、官牧牛直一千三百卅四束、

〔倭名類聚抄五國郡〕東海道〇中略　駿河國〇註略管七(中略)正公各二十八萬束、本稻五十八萬二千二百六十束、雜稻三萬三千二百六十束、

〇按ズルニ、此書ノ記スル所、頗ル延喜式ト合ハズ、而シテ遠江國ノ稻數ト相同ジ、其遠江國ノ條ト相混ジテ錯誤ヲ致シヽヤ必セリ、

〔東大寺正倉院文書十八〕駿河國正稅帳

志太郡、天平九年定穀參萬伍仟伍伯參拾陸斛肆斗捌升、振入三千二百卌斛五斗九升、斛別入一斗、

定參萬貳阡參伯伍斛捌斗玖升〇中略

益頭郡、天平九年定穀萬肆阡伍伯壹拾參斛陸斗、振入四千卌六斛六斗九升、斛別入一斗、

定肆萬肆伯陸拾陸斛玖斗壹升〇中略

安部郡、天平九年定穀伍萬玖阡陸伯肆拾伍斛參斗貳升、振入五千四百廿二斛三斗、斛別入一斗、

定伍萬阡貳伯貳拾參斛貳升〇下略

國產貢獻

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀〇中略　駿河國三千五百石〇中略

年料別貢雜物〇中略　駿河國筆一百管、零羊角四具、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略　駿河國十二壺四口各大一升、八口各小一升、〇中略　右八箇國爲第一番丑未年〇中略

交易雜物〇中略　駿河國絹二百疋、商布二千一百段、段別長二丈六尺、鹿革卌張、樽二合、

〔延喜式二十四主計〕駿河〇中略　右十一國絁絲〇中略

駿河〇中略　右十國輸絁〇中略

駿河國行程、上十八日、下九日、

調、一窠綾六疋、二窠綾五疋、三窠綾四疋、小鸚鵡綾一疋、薔薇綾三疋、帛一百廿疋、橡帛十三疋、橡帛八疋、皂帛十疋、倭文卅一端、煮堅魚二千一百卅斤十三兩、堅魚二千四百十二斤、自餘輸絁、庸、白木韓櫃廿合、自餘輸布、　中男作物、手綱鮨卅九斤十三兩二分、紙、紅花、火乾年魚、煮鹽年魚、堅魚、煎汁堅魚、

〔延喜式三十四木工〕諸國所進雜物○中略　商布七百六十二段三千七百九十二段內、配修理職之遣、　駿河國七百段、下野國六十二段、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥○中略

駿河國十七種　桔梗廿斤、白朮十兩、木斛、橘皮各五斤、伏苓、防風、夜干、防己各十斤、桑螵蛸五兩、署預、附子、蜀椒各二斗、麥門冬、決明子各五升、桃人一斗、亭藶子二升、零羊角四具、

〔毛吹草三〕駿河

安倍川紙子　久野蜜柑　三穗松露　富士苔山中谷川ニ有之　黃芪　香爐灰　大井川萸　瀨戶染飯

宇都山十團子　善德寺酢　澳津鯛　同白砂干　神原鮎鮓

〔駿府志略〕物產

漆器、磁器、白銅器、竹絲籃屬、府人製之、楮紙、檀紙、出于安倍諸邑、牡丹、芎藭、桂蘭、石斛、萬年青屬、出于龍爪、葡萄石出于橫澤、馬蹄石出于藁科、蠣灰出于三尾、龜甲、昆布、出于八幡、青鮫魚皮、出于藤枝、葛根、獨活、山藥、出于宇都谷、伏苓出于廬原諸山、沙糖以三尾爲最、茶以廬窪爲最、

蜜柑出于小坂朝夷、梅子出于西谷內牧、松蕈出于建穗雄鹿、乾苔、松露、番薯、甘瓜屬、出于三尾、薯蕷出于廬窪丸子、香蕈出于安倍山中、芹菜出于稻川、牛房出于松野、蔓菁出于大內、萊菔出于雄鹿江尻、

蒪菜出、有東木溪者爲最、蒪田布細石於淺水中、種蒪其間、蓋惡泱氣也、石蟹好食之、故往往有蟹荒、

鳧、雁、鸛、鵠、鯉魚、鯽魚、皿魚、鰻鱺屬、出于麻機鯨池、溪鰛出于安倍藁科朝夷興津諸水、鰒魚出于石部、奇

鱶、黃穡、松魚、鰈魚、鱸魚、鰺魚、河豚、華臍、烏賊、龍蝦、海參、牡蠣屬、出于清水城䑓、
鰊鱶魚餻、謂之半平、忠長寵臣戸田半平始製、因以名之、至今其法精於佗方、半平或作鱣餅、音訛也、
興津鯛、卽乾黃穡魚也、炙煮皆宜、烈祖之在駿城、興津河內屢進之、因賜名、
角粽、朝夷郷人、以山茶灰汁製之、色如琥珀、數月不變、佳品也、

人口

〔續日本紀 五元明〕和銅五年七月壬午、令○中略駿川○中略讚岐等二十一國、始織綾錦、

〔官中秘策 二〕駿河國　七郡○中略
一人數三拾三万三千八百拾九人　内 拾六万千三百八拾八人 男 拾五万貳千四百三拾壹人 女
高貳拾三万七千八百三拾七石餘　駿河國

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年○中略
御料私領
一人數貳拾五万貳千七拾貳人　内 拾三万千百三拾人 男 拾貳万九千四百四拾貳人 女 ○中略
諸國人數調 弘化三丙午年○中略
御料私領
一人數貳拾八万六千貳百九拾人　内 拾四万六千八百五拾四人 男 拾三万九千四百三拾六人 女
高貳拾五万五百三拾八石餘　駿河國

風俗

〔人國記〕駿河國
駿河國之風俗、遠州ニ替リ、人ノ氣狹ク、而モ實寡シ、然ドモ氣狹キガ故ニ、伸ル心スクナク、氣ノ屈スル時ハ取ナヲス事ナラズ而、命ヲ總ルモノ時々成故ニ、思ヒ詰タル時ハ、氣一和スル故ニ、片クヘナキ所有、雖然常ニ諂フ事ナク而、毎物ニ氣ヲ付、思慮深クシテヌキンズル者スクナク、人ニ從フ心大分有テ、義ヲ思ヒ詰テ立ル人ハ小分也、都而イケン多ク而、吾ハ人ヲ誹リ、人ハ吾ヲイヤシム、風儀更ニシマリナキ國ナリ、去ルニ因テ一國一和スルトイヘドモ、一郡一庄一郷ニ氣質之公成人希ニ而慾深シ、是國ヲ靜メン事、舊惡ヲ不赦而、其悔ル處之事ヲ不糺、其勢ヲ高ク振フ時ハ、心

名所

氣キロケテ旗ヲ卷クコト、日ヲ不レ可レ期也、

〔日本鹿子 五〕駿河國名所舊跡之部

岡部　丸子と藤枝との間也、宿の名なり、○中略

宇津の山　岡部と丸子の宿との間也、けはしき坂也、宇津の谷とも云、業平の朝臣、東に下りし時、此所にてす行者に都に言傳しけんといふも此所なり、○歌略

蔦の細道　宇津の山のうちをいふなり、○歌略

木枯の森　府中と丸子との間に川あり、安部川と云、此水上に此木村あり、○中略

清見潟　清見寺　沖津の宿近邊なり、寺は山かげ也、北は山、南は海也、清見が關といふは所寺の門前なり、○歌略

清見がたより一里餘有りて、江尻といふ宿あり、三保より汐入の川一里西に有レ之、舟にて三保へは川をさし出るなり、無雙の景地也、

三保の浦　同崎　同松原　同入海　西より東へ一里計海中へ出たる松原也、南は江尻につゞきたり、清見がたより三保は南也、入海の上一里あり、富士も三保よりはよく見えたり、言語につくしがたき景地也、入江より東の沖になりては、伊豆の海のうち也、○歌略

奥津の里　同川　海際也、北はさつた山といふ山あり、清見よりちかし、川は北より南へ流出たり、○歌略

富士山　富士のすがたは、北へ遠く足をはりて、南西はけんそに見えたり、さるによりて、遠江より駿河の宇津の山にて見るまでも、山のなりは同じ様なり、清みがたを過て神原を行々見れば、丑寅にあたりてけんそに見ゆるなり、○中略

田子の浦　富士は川より少東也、岩本へ五十町ばかり也、かん原よりは東也、三保の入江よりう

き島がはら傳の浦をしなべて、田子の浦と總名に云なり、清見奥津などそのうちの小名也、〇歌略

足高山　富士より東にあり、此山は唐土の山となり、富士に岳くらべせんとて日本え來るを、足柄の明神けくづさせ給ひて、富士よりひきしと云へり、駿河の沖に浪のごとくにて有りけるを、神力を以今うき島が原と成し、と云々、子細ありてことのよし、むかし鎌倉へ下るには、ふじと足高山との間を、足柄ごえとてくだりしとなり、

浮島が原　東西三十里也、但し六町を一里とすと云へり、富士より南也、富士と此原との間は水海也、京より南は大海也、ふじ川より東に見付といふ所あり、爰より次を浮島が原といふとなり、〇歌略

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　駿河國五十人〇中略

諸國器仗〇中略　駿河國甲三領、横刀七口、弓卅張、征箭卅具、胡簶卅具

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十三日辛卯、關東御分國々乃貢、日者依朝敵征伐事、頗懈緩、然者被免以前分、自今年可合期沙汰之由、所被申京都也、

諸國濟物事、治承四年亂以後、至于文治元年、世間不落居、〇中略　頼朝知行國々、相模、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等也、〇中略

三月十三日　　頼朝

進上帥中納言殿

〔萬葉集十四東歌〕相聞

安麻乃波良、不自能之婆夜麻、己能久禮能、等伎由都利奈波、阿波受可母安良牟、

不盡能禰乃、伊夜等保奈我伎、夜麻治乎毛、伊母我理登倍婆、氣爾餘婆受吉奴、

可須美爲流、布時能夜麻備爾、和我佐奈婆、伊豆知武吉氐加、伊毛我奈氣可牟、

佐奴良久波、多麻乃緒婆可里、古布良久波、布自能多可禰乃、奈流佐波能基登、或本歌曰、麻可奈思美、奴良久波〇波一本无、恐衍、思家良久佐〇佐原脱、據一本補、奈良久波、伊豆能多可禰能、奈流左波奈須與、

一本歌曰、阿敵良久波、多麻能乎思家也、古布良久波、布自乃多可禰爾、布流由伎奈須毛、

駿河能宇美、於思敵爾於布流、波麻都豆良、伊麻思乎多能美、波播爾多我比奴、一云、於夜爾多我比奴、

右五首駿河國歌〇中略

譬喩歌

斯太能宇良乎、阿佐許求布禰波、與志奈之爾、許求良米可母、與奈志許佐流良米、

右一首駿河國歌、

伊豆國 小笠原島附

伊豆國ハ、イヅノクニト云フ、東海道ニ在リ、北ハ駿河及ビ相模ニ接シ、東西南ハ海ニ面ス、東西凡ソ七里、南北凡ソ十四里、其地勢ハ鐵狀ヲ爲シタル半島ニシテ、相模駿河二灣ノ間ニ突出シ、國內山巒多ク、沿海危岩ニ富ム、此國ハ古ヘ國府ヲ田方郡ニ置キ、田方那賀賀茂ノ三郡ヲ管シ、延喜式ノ制下國ニ列ス、中世北條郡ト稱スルモノアレド、其廢置詳ナラズ、後世ニ至リ、田方郡ヲ割キテ、別ニ君澤郡ヲ置キ、凡テ四郡ト爲シヽガ、明治維新ノ後、君澤郡ヲ廢シテ田方郡ニ併セ、那賀郡ヲ廢シテ賀茂郡ニ合シ、凡テ二郡トシ、靜岡縣ヲシテ之ヲ治セシム、

此國ハ島嶼極メテ多ク、大小百餘ニ及ブ、就中最モ大ナルモノヲ伊豆七島ト稱ス、卽チ伊豆半島ノ東南約三十里ノ海上ニ點在スル群島ノ名ニシテ、大島、三宅島、御藏島、新島、利島、神津島、八丈島ノ七個ノ大島ト、附近ノ小嶼ヨリ成ル、現今ハ東京府ノ所管トス、而シテハ大島、三宅島、八丈島等ハ、古ヘヨリ罪徒ヲ放流スル處トシテ其名高シ、事ハ法律部流刑篇、及ビ遠島篇ニ載セタレバ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊豆

〔饅頭屋本節用集 天地以〕伊豆(イヅ)　豆州

〔日本風土記 一寄語島名〕伊豆　因熱(インフウ)

〔倭訓栞 前編三伊〕いづ　出をよめり、○中略 伊豆の國も、相模駿河の海南に出たる土地なるをもて名くる也、

〔諸國名義考 上〕伊豆

和名抄に伊豆、國府在田方郡、名義は、或書に引る伊豆國風土記逸文に、伊豆東相模、西駿河、出其中間之國故伊豆則出之義也云々とあり、眞麻呂思ふに、出湯(イデユ)の約りにてはあらざるか、○中略 今も熱海(アタミ)、走湯(ハシリユ)山(ヤマ)、伊東(イトウ)、松原(マツバラ)などの温泉あり、古本和名抄に、温泉一曰以天由(イデユ)、出湯也とあり、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

伊豆下田町、極高三十四度四十分半、經度東三度一十分、從東都(東海道經三島驛、天城越)四十六里一十五町一十二間半、

伊豆八丈島、大賀郷 極高三十三度六分半、經度東三度五十分半、從下田渡海、直徑四十七里二十一町三十六間、從東都(東海道經三島驛、天城越至下田、沿海九十四里四十八間半、)

〔日本經緯度實測〕北極出地

疆域

伊豆　三島　三五度〇七分三〇秒　下田湊　三四度四〇分三〇秒

八丈　三五度〇六分三〇秒略○中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略○中　伊豆　下田　東三度〇九分二九秒

〔増訂豆州志稿　一〕疆域

伊豆者出也、南海ニ突出ブ、故ニ以テ州ニ名ク、略○中東西南三面至海、北接駿相二州、南北二十三里許、東西十一里餘、略○註東北方相州足柄下郡トノ疆界ハ、伊豆雄山ノ東方門川一名千歳川、又境川ヨリ役行者役行者ノ石像アルユヱ地名トナルニ至ル、見通州界也、赤神祠也北ヨリ一線ノ山脊路ヲ界トシ、石原坂ノ表木ニ至ル、表木ヨリ蘆湖ノ西ノ山脊通、山伏嶺三國山君澤郡伊豆佐野村ニ屬スニ至ル、西北ハ大溪瀧溪ノ二溪、茶畠村二溪東上ニテ合流シ、以下ヲ界川ト云、幸原村ヲ経テ三島ノ千貫樋下ヲ過ギ、長伏村ニシテ狩野川ニ注クマデ、駿州駿東郡ト凡テ此川ヲ界別トス、サレドモ近昔幸原ニシテ、水盡ク東ニ決シ、西南方千貫樋マデ水枯渇スレドモ、仍舊古水道ヲ界トス、長伏村ヨリハ狩野川界タリ、江間村ニ至テハ、駿州大平村口野村トノ間、連山岡脊界ナリ、海濱ハ、重寺村ト駿州口野村トノ間ニ犬潜ト云處ヲ分界トス、略○註按ニ、古昔相州トノ疆界ハ、箱根山脊通ヲ北ニ指シ、今箱根驛ノ三島町ト小田原町トノ間ヨリ、湖水ノ中通ヲ豆駿相ノ分界トス、略○註稲葉氏小田原侯タル頃、疆界今ノ所ヘ移ル由ナリ、善隣國寶記ニ、應永戊申、源道詮、求二一切經於朝鮮國、書曰、吾州伊豆州泰簏山東福教寺、東方之靈區也ト、又相模風土記曰、西限二湯之瀬山一ト、湯之瀬山トハ蘆湯山ノ山ナルベシ、但箱根權現ノ相模ニアル諸書ニ明也、豈時代ニ因リ、其邊伊豆ニ屬セシ事モ有ンカ、略○註北方ハ古ヨリ境地少クシト見ユ、伊豆佐野ノ北方一里許ニ間答山アリ、曾テ二州山訟アリシニ因テ名ヅクルヨシ、是古ノ分界也ト云、甲陽軍鑑等ニ、伊豆境深澤城、新莊城ナドアルハ小田原侯北條氏切取タル駿河ノ地、皆伊豆ト稱シタリ、總テ戰爭ノ時ハ、諸州共ニ此ヤウノ事多ク、疆界大ニ錯亂スルナリ、

〔日本地誌提要十六伊豆〕疆域 北ハ駿河、相模、東西南ハ海ニ至ル、東西七里壹拾貳町、南北壹拾四里餘、

〔日本實測錄九島嶼〕伊豆國賀茂郡 實測 大島、周廻一十里二十六町四十一間半、 岡田村、三十四度四十七分半、 新島村、三十四度四十四分半、從岡田村至新島村徑測一里二十一丁四十間半 利島、周廻二里三町三十三間 利島村、三十四度三十二分半、從前濱至宿所四丁五十五間 新島、周廻六里三十四町五十九間半、新島本郷、三十四度二十三分、若郷村三十四度二十五分半、從本郷前濱至羽伏浦徑測二十二丁三十八間半、從若郷至伊澤浦一十三丁六間、又從本郷至十三社明神三丁四十五間、又從若郷至子ノ崎二丁三十八間、又從本郷南岬至早島二丁三十間、 神津島、周廻五里三十三町三十二間、本郷三十四度一十二分、從前濱歷本郷至タコ濱徑測二十二丁二十四間從本郷歷赤羽根至タコ濱二十四丁五十九間半、從赤羽根至南山五丁九間、 三宅島、周廻七里二十八町六間半、伊ケ谷村、三十四度七分半、阿古村三十四度六分半、坪田村三十四度四分、從伊ケ谷至坪田村徑測二里一十三丁四十三間半、從火寄濱至神着村六丁四十二間、從阿古村濱至富賀明神三町四十五間半、 八丈島、周廻一十里一十三町一十間半、三根村、三十三度八分、大賀郷三十三度六分半、末吉村三十三度五分半、從三根村濱至宿所八丁四十五間、從三根村神濱至大賀郷前崎濱徑測一里一十二丁五十九間半、從大賀郷歷中之郷至末吉村三里五丁二十九間半、又從三根村至西山一里六丁一十三間、從中之郷至海岸七丁五十六間、 小島、周廻一里三十町二十六間、鳥打村三十三度九分、從宇津木村濱至爲朝明神三丁四十七間半、從鳥打村濱至宿所二丁四十八間 初島、周廻二十六町二十六間、 地内島、周廻二十三町三十八間半、 式根島、周廻三里一町三間半、從野伏浦至釜子浦徑測一十五丁四十五間 御藏島、周廻四里七町五十三間、從前之濱至鎌取明神四丁三間、從南之郷至次郎濱八丁四十五間、 惠比須島、周廻五町二十三間、 鵜島、周廻一町五十五間半、 犬走島、周廻二町四十九間、 赤根島、周廻九町一十八間、

遠測 沖之磯 烏帽子根熱海村 雀島多賀村 二ツ根多賀村 神樂岩 平床根 二ツ根宇佐美村 黒根宇佐美村 手石島 女郎岩 尾根 間通島 西島 波高根 タンコ根 沖島八幡野村 前島 鯖根 ウシ根 千束根 平根谷津村 雀島白濱村 龍宮島 地サク根 雀島外浦 赤子根島 鷹島 筆島外浦 沖サク根 足根 爪木島 田浦島 サヲリ根 平根須崎村

ミサゴ島　カネ島　小赤島　雀島吉佐美村　サク根田牛村　平根田牛村　横根田牛村　ソ
ミコモト島　トイキ　石取根　接掛島　ウルイ　辨慶島　センクワンモン　コミタケ　ソ
チノ山　田子島　篠島　丸根　ラダイ根　中根大島　ヲコ島　鵜糞根　宇渡間島又呼二宇土根一
平根利島　ラダイ根　フツン根　大平根　平根地內島　大島根　權大根　サイマ根　赤根
式根島　モウヤ根　裸根　カンノ根　カイタカ根　疊根　大島　コンタンバラ根　セイ根
長根　ヲン根　ミブタ根　早島　コタキ根　鵜根　タン桂　ヲンバ瀬　タヽナヘ島　ソ
ウダイ島　ヲヽアマ根　白根　マナイタブラ　大アサラ　牛根　サク根　下黒根　タヽキ
根　カンナギ根　三本岳又呼二大野原一　ケンキ根　大横根　濤根　トウシ根　沖スフ根　丸根大
丸根小　平分根　赤根三宅島　大三郎根　マン根　コシ根　一根小島　中根小島　カン
ナキ根　トダテ根　ヲリカ根　平根小島　カチイ根　ミナ根　イナンバ瀬又書二濤波一　馬鞍石
イチノ根八丈島　ウルヲ根　ユルカ根　大淺石　ハンゾウ根　久太郎根　青ケ島

君澤郡　遠淵　アハ島

〔日本國郡沿革考四屬島〕伊豆諸島　天武天皇十三年、伊豆島西北二面、自然增益三百餘丈、更爲二一島一、仁和三年十一月、伊豆獻二新島圖一、

大島五村、南北五里餘、東西二里半餘、　三宅島五村、南北四里餘、東西二里餘、　神津島一村、日本後紀、作二上津一、或作二神集一、南北二里、東西一里餘、　利島一村、保元物語、作二三附島一、或作二十島一、方一里餘、　新島二村、南北三里餘、東西一里餘、數根島、本與二新島一接續、昔年因二海嘯一破裂、爲二別島一、無二居民一、方一里許、　御倉島一村、或作二三倉島一、東西一里半許、南北一里、　八丈島五村、玉海所謂隱島、百錬抄所謂隱岐島、皆卽是、或作二沖島一、南北七里餘、東西三里餘、延德中、伊豆國加茂郡人朝夷六郎知明、航二南海一始檢二出島一、島出レ絹、長八丈、因爲二島名一云、或云、漢人所謂女國、卽指二此島一也、韓人亦呼爲二女子郷一、而世人呼爲二女護島一、未レ詳二其說一、

八丈屬島二　小島二村、平家物語、半井本所謂奧小島、疑是、而鎌倉本作二奧之島一、南北一里餘、東西二十町許、　青島二村、或云、古名二鬼島一、南北一里餘、東西二里餘、

右名二伊豆七島一、隸二伊豆國賀茂郡一、或者○者下恐脫二除字一八丈、加二敷根一、以爲二七島一、

〔伊豆島々家數人別其外〕一男千四百八拾八人女千六百貳拾四人　大島　一男千八百四拾六人女千貳百四拾四人　三宅島　一男百四人女百貳拾壹人　御藏島　一男九百九拾五人女千六百六拾六人　新島　一男百拾人女百貳拾九人　利島　一男六百八拾九人女七百壹人　神津島　一男三千七百四拾七人、女四千五百六拾六人、八丈島　〃男七千九百七拾九人女九千四百壹人

〔南方海島志上〕一大島、八丈、三宅ノ三島ハ、其城小キ也ト雖、瀕海ノ民有リ、山民有リ、頗ル俗ヲ異ニス、海濱ノ民ハ江都及諸州エ舟行スルヲ以テ、衣食言語稍々豆州ニ類ス、山民ハ生レ立チノマヽニテ、外人ト交ワラザル故、特ニ朴野也、衣ハ膝ヲ蔽フバカリノ短衣ヲ著シ、食物モ甚ダ麁惡也、諸島ノ男女髮ニ元結油ヲ用ズ、婦女ハ紅粉ヲ以粧スルコトナク、皆素面也、長簪、簪(カウガヒ)ヤウノ首飾ナク、推髻ニテ、其結ビヤウ前後甚ダユルシ、所謂倭墮髻也、言語モ難辨、別シテ八丈小島青島ハ遠ク隔リタル故、風俗殊ニ異也、言語ハ舟乘ノ外ハ大半通ゼズ、サレドモ昔ニ比スレバ、風俗移リ易リタリ、二十年以來ハ、髮ニ元結油ヲ用ル者モ間々有リ、古風漸ク衰フ、猶島々ノ下ニ其風俗ヲ記ス、

一島ニヨリ風俗稍不同イエドモ、總テ言エバ朴野敦實ニシテ、一島ヲ一家ノ如クニ思ヒ、先祖神佛ヲ崇敬シ、親ノ喪ヲ愼ミ、墓所ハ掃除シテ常ニ清シ、死シテ大葬ノ慘ナシ、盜賊ノ患ナク、爭鬪獄訟ナク、往古ヨリ干戈ノ禍ヲ知ラズ、路ニ遺タルヲ拾ハズ、夜ル戸ヲ閉ズ、畢竟僻遠ノ小地ナル故也、但流人多ク到ル島ハ、風俗澆漓ニ降リヤスシ、大抵流罪ニ遇フ人ハ内地ニテ兇暴無賴惡少年多シ、島人ソノ風ニ移ルコト悲ムベシ、○中略

一凡島婦人女子、木ヲ伐リ薪ヲ負ヒ、畠ヲ耕耘スル、都テ男子ヨリアラキハタラキヲ爲ス、サレドモ耕耘ノ法ヲ知ラズ、農業ニオイテ甚疎略也、漁獵ト雖、亦ソノ方ニウトシ、

一凡婦人懷孕ノ時、產帶スルコトナシ、產甚ダ安シ、產婆ヲ用ズ、三宅島ナドハ臨產デ自ラ家ノニハニ下、臼ニトリ付キ產ス、ソノ外スベテ他ノ力ヲカラズ、妊身ノ中ハ常ヨリアラキ働ヲ爲ス、ミ

ナ難產ノ患ナシ、

一婦人女兒佳節、又ハ神佛エ請スル時ナド皆抹額ヲ用ユ、新島ナドニテコレヲシヽホト云、富家ハ紫揚紗紅絹ナドヲモ用ユ、額ヨリ・マワシ頂ニテ結ビ、長ク垂ルヽヲ美ト云、貧家モ相應ノ物ニテ製シ、且ツ短ス、常ニモ木綿ナドニテ抹額ス、畢竟髮ニ油ヲ塗ザル故、毛ノ亂ルヽヲ以也、中土朝鮮ニテ網巾ヲ用ルガ如シ、

一冬春ノ間、家々酒ヲ釀シ、酸酯ニテ飲ム、醉則歌舞、以爲歡樂、皆一家ニ集リ、其家醪盡レバ又他ノ家ニ往ク、島人他ノ業ミナシ、唯此而巳、

一凡島山茶樹多シ、實ヲ採リ油トシ、島中燈油トシ、又髮ニ塗リ、又シボリタル後、鍋ニテ煮返シ、凡ソノ食物ニ加フ、人ヲ饗應スル時、殊ニ馳走トス、サテ島ニヨリテ多キ處ハ江都エ出シ賣ル、

一凡島他屋ト稱シテ、人家ヲ隔テ山側ナドニ、地板モナキ小茅舍ヲ造リ、毎村數ケ所有リ、婦人有月事者、又臨產ノ婦人入之、其法經水ノ婦人ハ八九日、產婦ハ五十餘日、其間絕テ家人ト往來セズ、其父母雖疾而其婦來リテ侍養スルコトヲ不得、在他屋之婦、雖病而臨死、其子不得往而省覲焉、是以其婦人大率濕邪瘴氣ニ感ジ、或ハ死シ或ハ痼疾ヲ得、少婦ハ淫行ヲ階ス、庚寅ノ巡島使ソノ傷風敗敎ヲ痛ンデ、島民ヲ曉喩シテ曰、此事內地ニ無之、不慈不孝莫大於此焉、且廢業導淫、促壽召疾、自今以往禁止スルコト可也ト、丁寧ニ示シケレバ、島人皆曰、此他ナシ、唯神明ノ祟ヲ畏レテ然リ、願クハ訓言ニ從ヒ、他屋ヲ毀チ、ソノ跡エ作物ト爲ント、此誠ニ敎化之一端也、○中略

一凡テ船乘ノ內地ト買賣スルニ金銀ヲ用ユ、ソノ外ハ皆交易ニシテ金銀錢ノ通用ナシ、故ニ山民ハ畢生金錢ヲ見ザル者モアリ、物ヲ交易スル亦古風也、

一木匠、船匠、鋸工、鍛冶、桶師ノ工人ハ、島ニヨリ多少有リ、其他ノ工人スベテ無シ、醫士亦無シ、流人ノ內コレアルカ、或ハ土人ノ醫方ヲ喜ム者ニ就テ藥ヲ乞フ、大概疾アル者藥ヲ不服、ソノ自ラ療

ルヲ待ツ、八丈ニ案摩導引ノ別法有リ、

一戸口、天和三年夏書上、諸島合戸、凡九百十三口、凡二千三百七十三、今風土記據ニ、戸二千二百五十三口、一萬三千四百、僅ニ百年許リノ間ニ、戸ハ一倍餘、口ハ六倍ニナリタリ、スベテノ島女人殊ニ男子ヨリ多シ、新島ノ諺ニ云、女人七分ト、コレハタトヘバ十人　内女人七人アリト云コト、ナリ、古エハ猶更トヲボユ、八丈島ノ女人國ト云タルモ宜也、今男女大抵等也、人別ノ書上ゲハ甚ダ不審、流人多ク到リテ男子衆クナルト云ヘドモ、如此增スベカラズ、〇中略

一凡島近世泣瘡疱甚ダ稀也、八丈ノ三島及三倉島ニハ絶テ無シ、或云鹹草ヲ喫フガ故也ト非也、蓋シ瘡ハ一種ノ、疫氣ニシテ、ソノ氣流行スレバ輙發ス、故ニ雖島人東都ナドエ往來スル者ハ、乃チコノ患ニ罹ル、

〔日本書紀推古二十二〕二十八年八月、掖玖人二口、流來於伊豆島、

〔日本書紀天武二十九〕四年四月辛卯、三位麻績王有罪、流于因幡、一子流伊豆島、一子流血鹿島、　六年四月壬寅、杖田史名倉、坐指斥乘輿、以流于伊豆島、　十三年十月壬辰、逮于人定、大地震、〇中略　古老曰、若是地動未曾有也、是夕有鳴聲如鼓、聞于東方、有人曰、伊豆島西北二面、自然增益三百餘丈、更爲一島、則如鼓音者、神造是島響也、

〔扶桑略記宇多二十二〕仁和三年十一月二日、伊豆國獻新生島圖一張、見其畫中、神明放火、以潮所燒、則如銀岳、其頂有祿雲之氣、細事在圖中、不更記之、

〔今昔物語十七〕伊豆國大島郡建地藏寺語第十六

今昔、伊豆ノ國大島ノ郡ニ、海ノ岸遙ニ絶テ島獸モ難通キ島有リ、極テ惡キ邊地也、其島ノ西南ノ方ニ一勝地有リ、昔役ノ優婆塞ノ此ノ國ニ被流タリケル時ニ、時々飛來テ勤メ行ヒ給ケル所也、

〔參考保元物語三〕爲朝鬼島渡幷最期事

京師本、杉原本、鎌倉本、牛井本並云〇註略為朝大島ニ月日ヲ送リ、〇中略此島ハ為朝ガ帝王ヨリ賜タル所領也トテ、三宅島、八丈島、ミツケノ島、オキノ島ナド云鎌倉本、牛井本云、大島ヲ始トシテ、ミヤケノ島、上津島、八丈島云云、牛井本、奥島作ニ沖小島一、不レ載ニ三倉島一、而云凡七島、島共ヲ従ヘテケリ、

〔伊豆海島風土記　二〕大島は、伊豆國加茂郡下田湊より卯辰の間に當り、海上隔たる事十八里、同國河南へは七里程、江戸よりは未午の間にあたりて、海上四十六里餘あれども、つねに島船行かよひ、交易の事安し、島の地程は、東西二里半、南北へは五里餘またがり、高山もあれども、なべて嶮しからず、濱邊はたへず浪の打洗ふゆへ、巖石顯れ出て、あら磯多し、さて此島人の住始ける年暦流人配所と成し始不詳、

〔伊豆七島調書〕伊豆國附大島東西二里半程南北五里程　江戸より海上三十六里程

一家數四百七拾軒、人數男八百九十二人女九百二十七人外に流人男七人、馬百疋、

三原大明神　神主藤井内藏助　寺三ケ寺豆州下田海善寺末浄土宗潮音寺、同網代修善院末禪宗金光寺、同下田本覺寺末法花宗海中寺

一此島御貢金四拾壹兩永二百拾七文宛年々定納仕候

一為御救米、一ケ年二拾石五斗八升三合宛被下置候、

一御園米無御座候

一此島田方無之、畑方有之、麥、粟、稗、芋を作り、夫を食に仕候、

一此島には稼は、男は薪を伐、笘を織、江戸へ積出し、漁事多き節は鰹鰹を取、干物鰹節にいたし、江戸へ積出し渡世仕候、

一女は冬より春迄海苔を取、又漁事手傳いたし渡世仕候、

一流人渡世之儀は、親類より見繼無之者は、百姓之手傳致渡世仕候、〇中略

寶暦三年酉十二月

〔丙辰紀行〕大島
術ありとて類むべからず、役優婆塞が鬼神をつかひしも、廣足が讒によりて流され、力ありとて賴むべからず、鎭西の八郞が大弓をひきしも、信西がはかりごとにてうつさる、されば此島は、伊豆の沖にありて大島と名づけ、いにしへより風浪のたよりまれなれば、遷客投荒の所とす、近比仙洞の脫屣ましまさゞりし時、宮女の和姦の罪によりて幽閉し、死を給ふべきなれど、天氣しきりにありしを、大相國寬仁の心まし〳〵しかば、申宥められて、あまたの宮女を、流し遣はされし新島も此澳にあり、〇中略

迢々南海濱、擧目不知津、小角來驅鬼、八郞謫化神、土人畜獸類、風俗混魚鱗、寄語一漁叟、天涯奈汝身、

〔伊豆海島風土記〕二利島は、伊豆國加茂郡下田湊よりは巳午のかたにあたり、海上十里餘、江戸よりは午未の境に當り、海上四十八里程あり、伊豆國の方に向ひ荒濱ありて、此處に船を置、國地のわたりも遠からねど、瀨戸の汐はやく波高く、朝には海底の大石を打よせて汀に堤をなし、又波汐の引拂ふ夕には、石盡て淵海となり、きのふ船を浮めし事、人力を盡すに堪たりといへども、又けふは童の力にても船のうかみ安き事ありて、船長の甘苦定りなき地なり、しかはあれど伊豆相模の浦々へは一日の內に渡り、江戸へも行通ふこと安きゆへ、わづか一里にみちざる小島なるに、家數八十六軒、人數三百二十人餘り、流人は三人ありて、程々の世わたりをなす、其產業には、男は漁獵を專らとし、重に干魚鰹ぶしを以て、國の雜穀と交易す、女はむかしは絹をも織りしよし、今は其業絕て農事に身をやつし、日每に畑に出て、麥、粟、大根、芋、蒟蒻の類を作るに、肥しをも厚く用ゆるゆへ、穀の實りも大島などにはまさるべし、

〔伊豆七島調書〕利島　一里四方江戸より海上四十八里程

一家數九拾八軒、人數男百四十二人女二百卅一人牛なし、外に貳軒流人男二人、
寺貳ヶ所豆州下田本覺寺末法花宗長久寺、甲州身延山久遠寺末同宗海岸寺、
一御年貢金拾八兩三分永五十五文宛年々定納仕候
一爲御救米一ヶ年拾石一斗一升宛被下置候、
一御囲米無御座候
一此島田方畑方少々宛有之、麥、粟、稗、大豆、小麥、芋、大根、菜、其外胡麻、芥子、多葉粉等作り申候、
一麻少々宛作り申候
一此島水不自由にて、纔之清水二ヶ所有之候得共引足り不申候に付、雨降候節は辻々溜置天水を遣ひ申候、
一此國稼には、男は畑作之間は薪を伐、江戸へ積出し、夏は鰹を釣、渡世仕、女は蠶を飼、其外芋野老草木の葉取、渡世仕候、
一廻船二艘、漁船四艘御座候、
一流人渡世之儀は親類見繼無之者は、百姓之手傳致、渡世仕候、○中略

寶曆三年酉十二月

〔伊豆海島風土記　二〕新島は、伊豆國加茂郡下田湊より午の方にあたり、海上十三里、江戸よりは午未の間に當り、海上五十一里程あり、島の廻り砂濱多き故、海靜なる日は船を浮むる事安く、順風には、伊豆相模の浦々へ一日のうちに渡り、江戸へも常に行かよふ、島の地程は、東西へ一里、南北へは三里程をへだてたる島なり、四季の時候暑寒とも、伊豆の國にかはりたる事なし、

〔伊豆七島調書〕新島東西三十町程南北三里程江戸より海上四十六里程
一家數三百七拾二軒、人數男四百七十五人女九百三十八人外に流人男四十八人女壹人牛三十疋、

三島大明神　神主前田長門　寺一ヶ所下總國正中山法花寺末法花宗　三松山長榮寺

一此島御年貢金拾六兩三分永貳百卅三文宛年々定納仕候

一爲御救米、一ヶ年米貳拾三石四斗五合宛被下置候、

一御圍米無御座候

一此島稼には男は薪を取、江戸へ積出し、鰹、鯖を取、干物鰹節に致、江戸へ出し、夫を食に代替渡世仕候、

一女は冬春は海苔を取、其外漁事手傳致、渡世仕候、

一廻船拾三艘、漁船四十艘御座候、

一流人渡世之儀は、親類より見繼無之者は百姓手傳致、渡世仕候、○中略

寶暦三年酉十二月

〔南方海島志上〕新島

式○○事嶼○○　南方一里許リ在リ、周回一里餘、上ニ松林アリ、葛、草薢、薯蕷、鹹草等ヲ生ズ、常ハ不採、凶年ノ備トス、昔ハ本島ト地連キタリ、海溢ニテ切シ故ニ、海溢トモ云、本人家及寺ナドモ有タリシガ皆廢ス、嶼ノ西ノ方ニ泊リト云處、野蟲ト云處、僅カノ嶴アリ、八丈船ナド詮ナキ時ハコヽニ繫泊ス、

〔南汎錄〕十五日○天保九年四月　小舟如式事、謁山神祠、屋壁皆用浮石、穿簣二百歩出東濱、奇嵓巉崎、○中略躑躅生有洞通潮汐、曰潮穿嵓、洞中見三宅於東南之際、是爲嶼中最勝區、○中略　古者式事接本島、○新島一歲海嘯中斷爲二、所謂潮穿、獨松、當時所洗出云、嶼有三十一灣、灣皆可漁可泊、故東風則漁西灣、西風則漁東灣、島人目爲寶庫、

〔伊豆海島風土記二〕神津島は伊豆國加茂郡下田湊より午の方にあたり、海上十八里、江戸よりは

午未の間にて、未の方へより、海上五十五里程あり、めぐり五里はかりの島にて、海ぎはも嶮岨なれど、新島に双びて國地への便り能く、順風には伊豆の浦々へ一日に走り、渡通船江戸へも常に行通ふ、時候著寒も伊豆國に異ならずといふ、

〔伊豆七島調書〕神津島(東西一里、南北一里半程、江戸より海上五拾六里程)

一家數百四十五軒、人數(男二百五十九人、女二百九十一人、)外に流人男七人、(野牛有、數不二相知一、)

正一位定大明神　寺一ヶ所(豆州下田海善寺末)淨土宗　濤關寺

一御年貢金七兩二分永二文づゝ、毎年定納仕候

一爲二御救米一、一ヶ年五石六斗六升二合づゝ、被二下置一候、

一御國米無二御座一候

一此國田方無レ之、畑方少々有レ之、粟、稗、胡麻、多葉粉等作り申候、其外椎の實、のたみの實、薯蕷、野老、葛、あした草を取、夫を食の足様に仕候、

一此島稼には男は薪を伐、江戸へいだし、夏秋は鰹、鮭を釣、冬は海苔を取、江戸へ出し渡世仕、其外海鹿、はゝ等取、夫食足様に仕、女は蠶飼、葛、野老、あした草取、渡世仕候、

一廻船二艘、漁船二十四艘御座候、

一流人渡世之儀は、親類見繼無レ之者は、百姓手傳致、渡世仕候、(○中略)

寶暦三年酉十二月

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作島、本名上津島、此島坐阿波神、是三島大社本后也、又坐物忌奈乃命、即前社御子神也、新作二宮四院、石室二間、屋二間、闇室十三基、上津島本體草木繁茂、東南北方巖峻嶮峭、人船不レ到、纔西面有二泊宿之濱、今咸燒崩、與レ海共成二陸地、(○下略)

〔倭訓栞 前編三十〕みやけ(○中略)三○宅○島は、北條早雲が得たる所、八丈島に近し、

〔伊豆海島風土記二〕三宅島は、伊豆國加茂郡下田湊より巳午の方にあたり、海上二十六里江戶よりは午未の間にあたり、海上六十里ばかりあり、尤潮急にして波高く、渡海不易といへども、順風には伊豆相模の浦々より、一日のうちに著岸なるゆへ、江戶へも一年には四五度づゝも島船ゆきかよふ、島の地程は、東西平均二里餘、南北へは四里餘りもまたがり、山々嶮岨にして平地なし、濱邊は猶たへず波の打洗ふゆへ、巖石顯れ悉く荒礒なり、

〔伊豆七島調書〕三宅島 東西二里程 南北三里程 江戶より海上五十九里程

一家數二百二十七軒、人數 男四百三十五人 女五百九人 野牛有、數不知、

富賀三島大明神　神主壬生甲斐

寺六ヶ所 下田海善寺末淨土宗大林寺　豆州新島長榮寺末法花宗善陽寺　當島大林寺末妙樂寺　同海藏寺　同圓德寺　同普西寺

一御年貢金拾六兩一分宛年々定納仕候

一御救米無御座候

一御圍米無御座候

一此島田方無之、畑方計有之、麥、粟、稗、大豆、芋、大根、蕪等少々宛、多葉粉少々作り、其外のたみの實、山の芋、葛、野老、あした草取、食に足糧に仕候、此島稼には、男は薪を取、江戶へ積出し、夏秋鰹を釣、冬春は海苔を取、其外海鹿はゞびろめを取、渡世仕候、女は蠶を飼、葛、野老、薯蕷、椎の實、あした草取、渡世仕候、

一此島の椎木の澤山にて、椎實なり候節は、江戶へ出し、夫食に代替申候、

一廻船五艘、漁船二十艘御座候、〇中略

寶曆三年酉十二月

〔伊豆海島風土記二〕〇〇御藏島は、伊豆國加茂郡下田湊より巳午の方にあたり、海上三十里餘、江戶よ

りは午未の間に當り、海上七十里程あり、三宅島よりは五里ばかり南へはなれ、八丈灘に近き島へ汐行甚だ早し、海邊巖尖にして、常に洗波高く、山崖峩々と聳へて樵路甚だ嶮きなり、海陸の通ひ安からず、猶かつ船の出入危く、唯一艘の島船にて國地との交易をなすに、其の便年に稀なり、しかも四方一里に過ぎざる小島なるゆへ、物毎至つて乏しく見ゆる、四季の時候寒暑とも三宅島に不異、また人物も、かたち言語は三宅に等としく甚律儀なり、男女とも髮は細き苧縄にて束ね、身にはひざかくるゝばかりのものを著し、帶には葛藤かづらやうのものを打和らげ、縄になひて用ゆ、

(伊豆七島調書)御藏島 東西廿五町程、南北一里程、 江戸より海上六十四里程

一家數三十一軒、人數 男五十四人 女六十人 牛馬なし、外に流人男五人、

富賀大明神　鎌取大明神　御笥大明神　神主加藤藏人

寺一ケ所 豆州三宅島大林寺末淨土宗 萬藏寺

一御年貢金一兩永百拾八文づゝ、年々定納仕候

一爲御救米、一ケ年米七斗宛被下置候、

一御園米無御座候

一此島田方無之、畑少々有之、麥粟稗、大豆、大根、蕪、少々作り、其外葛、野老、薯蕷、あした草等取、夫食足糧に仕候、

一此島稼には、男は薪を取、江戸へ積出し、夏秋は鰹を釣、其外かさご、鮫等を取、渡世仕候、女は蠶を少々飼、葛、野老取渡世仕候、

一廻船壹艘漁船貳艘御座候、

一流人、渡世之儀、親類より見繼無之者は、百姓之手傳致、渡世仕候、○中略

寶暦三年酉十二月

〔書言字考節用集　一乾坤〕八丈島（ハチヂヤウジマ）豆州附庸之地、事見殘太平記

〔伊豆海島風土記　一〕八丈島は、伊豆國加茂郡下田湊より巳の方にあたり、海上六十里、江戸よりは午にあたり、海上百二十里程あるべし、晴天なる夕には、伊豆の山々、駿河の富士、勢州志州のやまもかすかに見ゆる事あり、又未申の方に當り、島山やうのもの見ゆる、これは薩摩の島々にもあるべしやといふ、是等の見ゆる事は年に稀なり、東南の海限りなきゆへ、常々波高く潮急にして渡海容易からず、古しへより春の末、夏の中をだやかなる順風を待得て、船を渡す事とし、しかも國方の船猥りに渡る事あたはず、島船のみ年に一度の往來ゆへ、國地の便尤も稀なり、島の地程は、東西三里、南北へは七里餘またがり、廻りの礒悉嶮岨にて、或は三四丈、あるひは八九丈十丈餘の磐石そばだち、海より陸へあがる事容易からず、海の深さは岸際にても三四十尋、又は六七十尋、半町計も沖にては、二百尋三百尋餘もあり、殊に海底岩ばかりにて、泥砂の類曾てなく、此ゆへに來船碇を入る事不能、岸波少しく高き時は洋中に漂ひ、波の治まるを見て船をよせ、巖石の低き處へ木を渡し、或は綱をはへ、島人數百人あつまり、船を岸上へ曳上る故、大船及び獨舟とも、出入甚危して、人力の費ゆる事不少、然るにより往古より難船破船の憂も多し、

〔伊豆七島調書〕八丈島　東西五里程　南北七里程　江戸より海上凡二百里程

一家數六百拾五軒、人數、男二千三百八十七人　女二千四百七十五人　牛八百二拾九疋、外に拾軒浮田流人　男二十六人　女三十三人

又二拾五軒流人　男七十一人　女五人　島出生分悴十三人　娵九人、

正一位寶明神　神主貞山遠江　正一位姥婆明神　豆州下田海善寺末浄土宗　宗福寺

右同斷同宗　長樂寺

一御用船二艘　但シ長十三間一尺五寸　横三間二尺二寸　深サ六尺一寸　船頭水主共拾人乘　御船頭　山下與惣兵衛

右同斷　服部源藏

一御年貢紬五百四十七疋毎年上納仕候、

一右御用船江戸出帆之節、船中爲用米一艘へ米八十石宛相渡、用米殘り候得者、島著之上、總百姓へ割賦仕、右代り織物にて、翌年返納仕候、

一鍋釜大小四百二十三、隔年に御買上にて被下置候、總百姓割賦仕、代り織物にて翌年返納仕候、

一此島田方少く、何れも山田澤間の田にて、霧深く實入不宜、總て水拂底之場所故、旱損年々有之候、畑方も多分切替畑にて土地惡敷、年々不作仕候、作物之儀は、麥、粟、稗、胡麻、芋、あした草作り、夫食に仕候、其外蕎、大根、茄子、大豆、小豆、少宛作り申候、

一此島稼には、男は農業之間漁事仕、鰹、鯖、ふたひ、さゝ魚、海老、かさこ、鮫等を取、鰹多き節は鹽辛に致し置、平生夫食に入申候、海藻之内、海苔、はゝ、芋、ところてん草の類を取、其外葛、野老、薯蕷、柑子、あさみ、屋々染、虎杖、椎の實を取、渡世仕候、女は御用織物、蠶を飼、糸拵織立、一式并賣物紬、すゝし等織出渡世仕候、染方は男計にて染申候、

一漁船拾五艘御座候

八丈島　小島　靑ヶ島　御圍穀（米九十九石六斗七升一合　麥百三十四石二斗五升）

右者享保六、夫食種物代金五百兩拜借被仰付候處、七十兩は享保十三申年、御用船破損之節、米麥流失之分、山田治右衛門伺之上被仰付、殘金四百三十五兩之儀は、齋藤喜六郎伺之上、享保十九年寅年より元文五申年迄七ヶ年賦返納被仰付、寅巳二ヶ年、作方損毛に付年延、卯辰午未申酉戌迄七ヶ年金六十一兩一分永百七十八文六分づゝ取立、右上納金を以、其年に米麥差出、右之内卯年分穀物は、御用船破損仕、海中より取揚候米麥御拂代金十七兩一分永九十六文八分に相成、殘金四十四兩、永八十一文七分は、并損に被仰付候に付、右六ヶ年返納金、并御拂代金を以調達候、米百

四十三石九斗一升、麥百八十九石七斗六升五合有之、島御園に申付候處、延享四年ゟ、諸作損毛、不漁相續、島中夫食に差詰り、右の園米、寛延元年辰夏迄、不殘拜借候得共、其節又候損毛にて、別段之夫食いたし、拜借被仰付候、

右御園米麥代金三百八十五兩三分永百六十四文三分返納之儀、寛延二巳年私支配に被仰付、吟味仕候處、巳ゟ亥まで七ヶ年賦、一ヶ年に金五十五兩永百三十一文二分づゝ返納、尤前々之通返納金を以、米麥相調、島御園穀無之候ては、外島と違、渡海無之遠島、ことには再園と夫食に難儀仕候間、伺之上御下知相濟、巳ゟ未迄三ヶ年分調遣候米麥、當時園穀、書面之通に御座候、

一流人、渡世之儀は、親類より見繼無之者は、百姓之手傳致、渡世仕候、

八丈枝島

小島一里程四方（江戸より海上凡二百里程）

一家數五十二軒、人數（男百七十七人 女百八十一人）牛馬なし、外に流人三人、

正一位八郎大明神　神主菊池壹岐　寺無御座候、八丈島兩寺旦那に御座候、

一此島御年貢紬五十七反、毎年定納仕候、

一園米無之、尤急難之節は、八丈島御園穀貸渡申候、

一此島田方無之、畑計有之、麥、粟、稗、芋、あした草、大豆、小豆、大根、菜作り、夫食に仕候、

一此島男は畑作之間は漁事仕、其外山海之稼を致、女は蠶を飼、御用織物、幷貢紬、すゞし等、八丈に同じ織出し、渡世仕候、

一漁船六艘御座候（一艘ハ中船 五艘ハ小船）

一流人、渡世之儀は、親類ゟ見繼無之者は、百姓之手傳致、渡世仕候、

八丈島附

青ヶ島（東西二十四町程、南北壹里程）（江戸より海上二百三十里程）

一家數四十六軒、人數（男百三十四人、女百廿七人）牛三十一疋、

ごうき明神　一社　神主兵庫　寺一ヶ所　（豆州下田海善寺末）淨土宗清受寺

一御年貢紬三十壹疋、毎年定納仕候、

一御圍米無之、急難之節は、八丈島御圍米貸し渡申候、

一此島田方無之、畑計有之、粟、稗、芋、あした草、大根、蕎作り、夫食に仕候、

一此島稼には、畑作之間は漁事仕、海上之稼をいたし、女は蠶飼、糸綿、八丈島へ渡し、御年貢物糸綿等積入、渡海仕候、

一漁船三艘御座候

一流人、渡世之儀は、親類より見繼無之者は、百姓手傳致し申候、○中略

寶暦三年酉十二月

〔北條五代記〕五八丈島へ渡海の事

聞しは今、愚老（○三浦淨心）伊豆の國下田と云在所へ行たりけるに、里人語しは、是より南海はるかにへだて八丈島あり、此島は日本の地よりも唐國へ近く覺えたり、それいかにと云に、雲しづかなる時分、此島より見れば、唐島に當り定て雲たなびく山あり、是から國より別に有べからず、然共此島をもろこしにてはいまだしらず、北條早雲の時代、關東より此島を見出し、伊豆の國の内に入たり、北條氏直公時代までは、三年に一度、伊豆の國下田より渡海あるに、大船に水手をすぐり取のせて秋北風に此島へわたる、年貢には上々の絹を納るとくはしく語る所に、村田久兵衞と云者いひけるは、我先年八丈島へわたりしが、今にをいて此島なつかしく、夢まぼろしに立そひ忘れがたし、○中略 我主板部岡江雪入道、元來いづの下田の郷の眞言坊主也、能筆ゆへ氏直公へめ

し出され、右筆に召つかはれたり、是により伊豆島々の事をよくしられたり、故に伊豆七島のさし引を仰付られ、一年江雪齋八丈島仕置として、渡海の時節供して渡りたり、〇中略女房、絹を織、北條家へ貢絹とておさむる故にや、むかしより家主は女にて男は入むこなり、佛は五障三従と說給ひて、女に三ッの家なし、此島は世界にかはり男に三ッの家なし、去程に女子を持ぬればよろこび、親の家財跡職をわたし、男子を持ぬれば、すてものに思ひ、入聟になす、萬事皆女房のさし引也、此島へ日本の舟著ぬれば、島のおさきもいり先立、國朶をともなひ、其好の家に入、其家の女房を其妻とさだむるゆへに、女房共天道へ祈をかけ、我家へ國朶いらしめ給へとねがふ、國朶とは日本人をいふ、國朶いらざる家の女は、天道をうらみ身をかこちあへるばかり也、國朶入ぬる家よろこぶ事、たとへばから天竺に住付てゐたる子や親が、不慮の仕合有て歸朝し、二たびあへる心ち、扨又及びなき人を、年月戀詫しがまれにあふがごとし、〇中略

江雪入道一興の事附男女別の事

むかし清盛公賴朝公の時代に至て、非常の流人おほく遠島す、西は鎮西鬼海が島、北は佐渡が島、東は夷が島、南は伊豆の大島ならで遠島のさたなし、それより以來延德年中、早雲宗瑞伊豆の國を治給ひしまでも、八丈島の名を聞ず、其比豆州賀茂の住人朝比奈の六郎知明と云侍あり、是より南海に當て島有よし聞及び、大船一艘に人多く取乘、伊豆下田のつより渡海し、彼島につき民家をなびかし、末代伊豆の國の內たるべき旨申さだめ歸海し、早雲へ此よし告しらしむ、早雲喜悅なゝめならず、八丈島見出したるけんしやうに、伊豆の國下田の鄕を、朝比奈六郎知明子々孫孫、永代他の妨有べからずと云々、故に今知明が孫あさひな兵庫助、下田を知行す、此島より北條家五代、毎年の貢絹をおさむる事、千秋萬歲なるべし、

〔伊豆海島風土記 一〕一此島〇八丈上古に遠流の人在りし事きこへず、慶長のころ、宇喜多の一統を

配せられしより以來の罪人、今在島の人數百五十人餘、此內四十人ほどは宇喜多の末裔島の產なり、

〔伊豆七島日記　天〕抑八丈島に船よすべき所、たゞ二所あり、うしとらの方に有を神湊といひ、未申のかたに有を八重根といふ、そのうち神湊は舟のいでいり安ければ、そこに船をよせんとするに、汐あしくちからおよばで、八重根につく、常に島の浪のむつかしき事、是にてもしるべし、○中略九日○寛政八年五月けふは船ひきあげるとて濱邊に出て見るに、數百石を積ふねなれば、たやすくひきあぐべきにあらず、村々より大勢を出して、かくらざとなんいへるものにて、聲々にはやしたて、拍子をそろへてひきあげるが、此島もとより五穀とぼしくして鹹草と云ふものを、常に食とする故に、大かたはやせおとろひたるがほそきうでにちからこぶいだして、ひきあぐるぞあわれなる、さて鹹草は四季ともに有て、葉は常の食とする、根は三年をまちてとりてくふとぞ、凡十人の食に麥三四合を煮たゝらかし、粥の如くなりたる中へ、あした草をさはにきざみ入、潮水あるはゐんばいと云ものをうち入てくふ、○中略かくまでからきすきはひなるが、みな長壽にて八十歲九十歲のものはめづらしとせず、百歲にも至ざれば、ながいきとはいはず、すべて病すくなし、島中一萬あまりの人なるが、盲人とては壹人もなし、中風癲風いとまれなり、なしと云ても有なんとぞ聞る、また產かろくして、いにしへより難產有事なしとぞ島の風俗にて血のけがれをいみにくむ事甚しく、里ごとにたやといふ家を作りおきて、月のさはりになりたる女は、そのたやに十二日の間ひきこしてけがれをさくる、又孕婦はうみ月になれば、たやへゆきて產をまつ、右にいへる如くに、難產はたえてなければ、みなやすやすと產して、七夜を過れば、出生の兒をいだきて家に歸る、かくの如くなるゆへに、家ごとに子ども多し、ことに多きは十人より十五六人をうむといふ、能かんがへ思ふに、同じ人にて、かはりたることわりの有べきにあらねども、先常

に疎食をくふなれば、食物の毒をうくる事なく、又世の中の事を見つき、つする事すくなければ奢(おごり)をしらず、又いにしへより金銭の通用なければ、むさぼるこゝろうすく、兎にも角にも、心を勞する事すくなく生涯無事に過る、おのづから仙境の趣有、心を用ひずして養生の道にかなへるなるべし、しかあれども女多き島なれば、色欲に耽る事はなはだしと聞ゆるが、かの常にうまからぬ物のみくひ、又心を勞する事すくなく、形體すくやかなるゆへに、色欲の害もうすきにや、そも飲食男女の事をほしいまゝにし、それがうへに常に心をらうするもの、天壽をたもつものはあらじ、されば男女の大欲も、常に美食をくらひ美酒をのみ、心を勞するほどの損はなきかとぞおぼゆる、八丈島にわたりて、わきて養生の理を思ひしるに似たり、さて、女は操正しく不義婬行をせず、またことづまをかさぬる事をたえてせず、たまたま婬行不義ある女あれば、ともにまじはる事をせず、しかる故に夫の不義をたゞす事、國地にて女を制するが如し、夫婬行あれば、いとからきめを見るとなん、いにしへ女護の島に、はじめて男のわたりたる時の遺風にやとおかし、

〔南方海島志〕下 小島

南北一里餘、東西二十許町、周回三里餘、　在八丈島西二里、隷八丈、小島トハ八丈ヲ大島トシ、ソレニ對シタル名也、

形勝　一峯巍々四崖懸絶、少シノ平地ナシ、一體石島故水ト薪乏シ、薪ハ本島ヨリ採ル、〇中略

青島

東西二里餘、南北一里餘、在八丈島南十八里、隷八丈、古名鬼島、其人被髮長髮、身長色黑シ、被木葉狀如鬼神、吾邦古人怖ロシキ者ハ渾テ鬼ト稱セリ、上ニ舉ル冲島ヱ鬼八人岸ニ登ルナド、意フニ西南ノ蠻人ナルベシ、而シテ爲朝公、此蘆葦多ク生ズルヲ見テ葦島ト改ム、後人アシノヒヾキヲ忌

地勢

悪セシニヤ青島ト改名ス、アシノアトオニノオトヲ取リタルカ、三宅記ニハ、此島ノ形勢オフノ魚ノ身ニ似タリ、因テヲフノ島ト名クト、ヲフノ魚ハ鯨魚乎、此島人ハ今モ身長ク、毛多ク、稍内地ノ人ニ異也、

〔西遊記續編一〕ヲガ島

余○橘南谿が野館に遊びけるは、冬のはじめなりけるが、其年の夏の頃かとよ、彼地の二木島といふ所に、伊豆の沖の青が島の人漂著して、其中に出來次郎といふ若者病しかば、余が友喜多氏療治をくはへて、日久敷行かいければ、いろ／＼の物語を聞きとりて余に語れり、青が島をヲガ島と唱ふ、其島は伊豆の八丈が島より遙に南の海中にある小島なるが、人は多く住けるに、十三年以前、島の山火に燒出て、島中火となり、人蓄燒死ける其中に、身分宜敷百姓の船を持たるが、家内十餘人其船に取り乘り、火中を遁れ出て、無難に八丈が島にいたり、此年月住居したるに、青が島近年は火消て無事になりしと聞て、故郷なつかしく、八丈が島をいとま申て、又もとの船に家内男女、皆々取り乘り、家内の雜具並農具まで取そへて、今年青が島へ戻る海上、難風に逢て吹流され、熊野浦へ著たるなり、其百姓の嫡子を出來次郎といひしなり、珍敷名也、八丈が島にても出生の子もありて、幼少の童子をも具せりとぞ、

〔易林本節用集下〕伊豆豆州下、管三郡、東西一日餘、畠多而田少、山高海莊、鹽魚類多辨貢、大中國也、

〔增訂豆州志稿一〕形勝

豆爲州、南大洋張出、三面海ヲ環ス、北方纔ニ駿相ニ接シ、西駿州、東北ハ房州ト相望ム、南方極天無際ノ大海ニシテ、九島及小笠原島諸島ノ外、復一片ノ土壤ナシ、州ノ幅員里數ヲ以テ見レバ、不甚小州ニガ如クナレドモ、地形斜尖ナル故、州域ハ則狹窄也、且中央ニ天城山磐礴シ、函嶺左ニ蟠リ、鎌山、達磨山右ニ聳ヘ、闔州凡テ亂山復嶺、嶮岨崎嶇、唯三島ノ南二三里廣半里許ノ間平地有ノミ、其他

ハ山峽溪間ニ傍テ、栖居スベク見ユル處ニ家作シ、村落ヲ成セリ、○略 註 誠ニ僻遠偏小ノ州故、聖武帝ノ時、流刑三居中、伊豆遠流地定メ給フ、豐太閤ノ頃マデ、流人ヲ遣放ズル事易ラズ、又天下諸州大上中下ノ四等ニ定ルニモ、伊豆ハ下國ニ列ス、サレドモ源武衞ノ北條ニ龍興シ、府ヲ鎌倉ニ奠シヨリ、行程僅ニ三日、於是兩都ノ間ニ介ルヲ以テ、稍通用宜ク成リ、國家德川氏ニ至テ、其壯麗繁榮、啻鎌倉ニ十倍スルノミナラズ、是ヲ以テ州人海濱ハ漁獵ヲ務メ、山民ハ入山伐薪、漕運ニ習ヒ、魚物薪炭等ヲ都下ヘ輸ス、順風ニハ旦ニ開帆シテ午時ニ達ス、陸路ハ緊要ノ急事ニハ一日ニ至ルベシ、實ニ水陸交通ノ州トナル、夫三島ハ箱根山上口也、海舟往來ハ下田湊ニ繫泊セザルハ少シ、予○秋山章嘗曰、地當水陸形要、實江都之扼喉、但土田狹隘ニシテ、且磽确、是ヲ以テ粟米麻絲ノ産寡少、民衣食ニ營々シテ、般富ノ者ナシ、

〔增訂豆州志稿〕一里程

自三島至西京九拾貳里增、百一里廿七町三十間、至東京貳拾八里增、二十九里十三町十二間、　增、至靜岡拾六里貳拾貳町四拾貳間　至箱根三里貳拾八町增、三里十八町十三間五尺、　至沼津壹里拾八町增、一里二十町三十四間四尺、至根府川十二里餘、至足柄山嶺九里二十町、至甲州山中十二里、

三島ハ國府ナル故、諸方ノ行程此ヨリ起ス、方位ヲ記セザル事ハ、三島ハ州ノ北方ニ偏テ、ソレヨリ北方僅ニ數村アルノミ、郷村ノ方位、大略南方ニ當ル故ナリ、○中略

官道、自三島至山中村貳里七町三拾三步、增、二里五町五十五間、歷川原谷、塚原、市山、三谷、篠原諸村、　自山中至相州界三十四町增、三十四町十間四尺、

下田路、自三島至北條貳里貳町五十貳步、增、至四日町二里十四町二間、歷中島、大場、間宮、新宿、原木諸村、　自北條至大仁壹里三拾壹町四拾貳步、增、一里三十一町十間、歷寺家、中條、南條、宗光寺、御門、三福、吉田、　自大仁至湯島三里拾六町貳拾八步、增、三里十九町三十間、歷瓜生野、小立野、本立野、大平、松瀬、柿木、青羽根、下船原、月瀬、門野原、市山、　自湯島至梨本六里、增、五里十八町廿七間、天城山嶺ヲ踰ユ、草徑狹窄、險岨、復人家ナシ、嶺ヨリ一里許下、水又ノ處ヨリ左ヘ入リ、南モ亦嶺下一里許下、水又ノ處ヘイヅ、是古道ナリ、　自梨本至下田三里三拾五町拾

九步、（增、四里、自大場至小鍋、歴北野澤、茅原野、箕作、落合、河内、立野、本郷諸村、）通計拾七里拾四町貳拾壹步、（增、十七里、又茅原野ヨリ、歴字土金、椎原、有増、蓮臺寺、立野、本郷、岡方、下田ニ至レバ、八町五十六步近シ、但藤原山越ノ嶮ナリ、又梨本ヨリ川津濱邊ヲ下田ニ至レバ五里十一町廿六步、增、五里十三町一同、歴湯野、下佐野、筏場、澤田、田中、篠原、谷津、縄地、白濱、柿崎諸村、）

根府川路、自三島至輕井澤三里拾五町三拾八步、（增、三里廿一町三十七同、歴中島、大場、大土肥、平井、此ヨリ山路ナリ、）自輕井澤至熱海貳里八町、（經笹山、芋臈崎、嶺頭ニ一草堂アルノミ、人家ナシ、增、三里七町二十同、近者開ク所新道里程ナリ、）自熱海至門川（相州足柄下郡界）貳里拾七町、（增、二里二町六同、歴伊豆山、）通計八里四町三拾八步、（增、八里三十一町三同、）

東浦路、自熱海（此迄ハ根府川路ト同ジ）至網代貳里壹町三拾八步、（增、二里廿七町五十同、歴上下多賀、）自網代至伊東、和田三里六町五步、（增、二里廿八町四十九同、琵琶峠ノ嶮アリ、歴宇佐美、湯川、松原、竹内、）自和田至赤澤四里拾三步、（增、三里三十二町五十九同、歴吉田、八幡野、）自赤澤至稻取四里七町三步、（增、三里廿七町十同、歴大川、奈良本、片瀨、白田、）自稻取至白濱四里九町貳拾四步、（增、四里三十町廿六同、歴見高、濱、谷津、縄地、）自白濱至下田壹里貳拾三町三拾步、（增、一里十三町四十三同、歴柿崎、）通計（自熱海至此）拾九里拾壹町五拾三步、（增、十九里二十五町五十八同、）

西浦路、自三島至三津三里貳拾八町拾五步、（增、四里一町、歴中島、大場、間宮、新宿、原木、南北江間、墹上、長岡、長瀨、此ハ是順路ナリ、サレドモ重寺村ハ駿州境界西浦ノ始ナレバ、此ヘ由ランドスルニハ、上ノ如ク江間マデ來リ、此ヨリ駿州口野村ヘ由リ、重寺ニ至リ、此ヨリ小海ヲ歴テ三津ニ至ル、其間十二町、增、十町四十五同、）自三津至古宇壹里三拾貳町貳步、（增、一里三十二町三十同、歴長濱、重須、木負、久連、平澤、立保、）自古宇至戸田貳里拾町、（增、二里十一町二十同、コレ眞城山ノ嶮路ヲ踰ルナリ、若シ海濱ヲ行ケバ、古宇ヨリ足保、久料ヲ經テ江梨ヘ三十七町八步、增、一里四町廿同、江梨ヨリ戸田ヘ、井田ヲ經テ二里十八町五十一步、增、二里十三町十九同、コノ道通計三里十九町五十九步、較遠シ、增、三里十七町三十九同、）自戸田至土肥壹里三拾五町拾八步、（增、三里二町廿九同、歴北土肥、）自土肥至宇久須三里貳町三拾步、（增、二里二十四町三十六同、）自宇久須至松崎四里九町五拾三步、（增、三里三十二町廿九同、歴安良里、田子、濱、江奈、不來坂、尤モ嶮阻、）自松崎至子浦貳里拾貳町拾七步、（增、二里、道部、岩科、伊濱等ノ山嶺ヲ踰ユ、若海濱路ハ、歴道部、岩地、石部、雲見、伊濱、至子浦、四里二町二十七步、增、四里六町四同、）自子浦至妻浦貳拾六町、（增、二十三町三十二同、海路十五町、）通計貳拾里貳拾貳町拾五步、

南浦路、自下田至手石貳里三拾三町貳拾步、（增、三里十町八同、歴大賀茂、青市、又海濱路ハ、歴吉佐美、田牛、湊村、鈴尾、西谷嶺ノ坂路嶮ナリ、二里廿九町三

十五歩、增、三里三町五十六間、　自手石至長鶴壹里貳拾七町四歩、增、一里廿町五十一間、歷下流、大瀨、　自長鶴至妻浦三里拾壹町四拾歩、增、二里廿三町四十間、歷入間、一色、　通計八里四歩、增、七里十八町三十九間、マタ手石ヨリ、下賀茂、加納、二條、蝶野、一色ヲ歷テ、妻浦ニ至ル、三里十三町十八歩、增、三里四町八間、山徑甚タチカシ、　又自下田至子浦通計六里拾町四拾六歩、增、六里七町五十六間、コレ手石迄ハ加前路、上下加茂、石井、岩殿、上下小野ヲ歷テ、子浦ニ至ルナリ、增、以上下田町ヨリ、子浦村ニ至ルマデヲ南組ト稱ス、

大見路、自大仁此迄ハ下田路ニ同　至白岩壹里三拾三町貳拾歩、增、一里三十町四十二間、歷牧鄕、柏窪、年川、下白岩、　自白岩至德永壹里拾七町三拾五歩、增、一里廿町七間、歷關野、城、八幡、柳瀨、冷川、　通計七里拾三町貳拾九歩、增、七里三十町二間、又八幡ヨリ、柳瀨、原保、地藏堂ヲ經テ(一ハ梅木、宮上、姫湯、貴僧坊ヲ歷)筏場村ニ達スル路アリ、

北山路、自三島至伊豆島田中橋此三島北方、佐野村屬里、壹里六町拾八歩、增、一里、歷幸原、中橋豆駿州界ナリ、○中略

〔增訂豆州志稿 一〕航路

自下田安乘至江都五拾里、至相州浦賀三拾貳里、至大坂九拾四里、至志州鳥羽七拾五里、至遠州御前埼貳拾四里、至駿州清水拾六里、至房州洲埼三拾里、至本州戶田(ヘダ)拾六里、至網代拾八里、至大島拾三里、至新島拾三里、至神集島拾八里、至利島拾里餘、至三宅島貳拾六里、至三倉島三拾里、至八丈島六拾四里、至青島八拾貳里、至小笠原北島壹百七拾四里、

〔日本實測錄街道二〕從東京東海道至西京○中略

伊豆國君澤郡三島宿傳馬町至伊豆三島神社、二丁三十間、又從傳馬町、至橋原神社、四町一十八間、　三十一間半　三島宿久保町三町三十二間半　三島宿、三十五度七分半、　一里二十三町一間半至國界九丁二間半　駿河國駿東郡沼津本町○中略

從東海道三島歷天城峠至下田、

伊豆國君澤郡三島宿傳馬町　三十二町五十六間半　大場村歷日金山至賀茂郡熱海村四里九丁二十八間　一里五町三十二間、　田方郡北條四日町村至韮山下一十七丁二十七間　一里一十五町四十二間　大仁村至賀茂郡八幡村、二

里一十六丁三十六間、從八幡至和田村二里三十三丁四間、又從八幡至最勝院一十二丁四十四間、一里一十八町三十六間　本立野村、三十四度五十八分半、至君澤郡下修善寺村溫泉一十八丁二十四間一里三十三町　門野原村、三十四度五十四分、一里一十町一十五間　湯島村茅野新田、三十四度五十二分、至天城峠一里二十丁七間三里一十五町五十三間　賀茂郡梨本村沿河津川至濱村一里二十八丁三十六間三里一十五町八間半　立野村至蓮臺寺村溫泉六町四十八間三十一町一十五間　下田町、三十四度四十分半、至吉佐美村キサメ濱一里八丁五十七間從三島至下田街道、通計一十五里三十五町一十八間、

〔日本實測錄一沿海〕從東京沿海至大坂〇中略伊豆國賀茂郡伊豆山走湯、三十五度七分、至伊豆山社前六町一十八間二十町四十八間　熱海(アタミ)村、三十五度六分半、二里一十町一十六間　網代村、三十五度三分、一里二十七町二十七間　宇佐美村　一里九町三十六間　和田村、又呼伊東三十四度五十九分經吉田村至八幡野村三里一十町二十一間半、從吉田至大池村二十町二十二間半、從八幡野村間至池村二十六町四十九間、又從八幡野間至八幡社五町一十五間、三里一十八町三十九間　富戸村釜屋濱至富戸村宿所三町三十六間、北極高三十四度五十五分、一里二十七町一十二間半至日蓮崎三十三町三間八幡野村、三十四度五十三分、經赤澤山至赤澤村二十四町五十四間二里二十一町三十間至赤澤村二十五町一十二間片瀨村、三十四度四十八分半、一里七町一十八間　稻取村　一里三十三町四十八間　濱村　二里一十一町五十三間　白濱村至下田町三十五町一十七間半　二十三町四十八間　柿崎村外浦至柿崎村濱庄十一町一十五間一里三十二町五十九間至瓜木崎一里一町一十八間須崎村、三十四度三十九分半、一里一十九町二十四間至柿崎村一里七町九間下田湊至大浦徑測五町三十七間半一里三町四十九間半至大浦一十九町四十四間半吉佐美村　一里一十八町五十五間　手石村手石濱至手石村宿所一十七町一十六間半、北極高三十四度二十八分半、一里一十九町二十四間　長津呂村至石室權現社六町五十六間一十里七町二十七間　那賀郡田子村井田子、三十四度四十八分半、四里一十九町二十四間　君澤郡土肥村、三十四度五十五分、七里一十九町五十八間至大瀨明神崎四里二十二町四十八間久連村、三十五度一分半、

宿驛

二里一十五町二十間（至國界二里三町五十五間）　駿河國駿東郡口野村

〔五驛便覽 乾〕東海道

豆州君津郡
一三島（壹里半）　江川太郎左衛門御代官所

建置沿革

〔日本國郡沿革考 二東海道〕伊豆（略〇中）上國、管四郡、（延喜式三郡）二百八十四村、

君澤（六十九村、延喜式等不載、蓋中世所置）　田方（七十一村）　加茂（百二十七村、延喜式等作賀茂）　那賀（十七村）　北條（見東鑑建保三年、廢置未詳）

〔日本地誌提要 十六伊豆〕沿革　古ヘ國府ヲ田方郡ニ置、（今ノ君澤郡三島驛是ナリ）鎌府ノ初、山名義範守護ヲ以テ州守ヲ兼ヌ、文治中、後白河法皇特旨アリ、本州ヲ頼朝ニ賜ヒ、子孫ニ傳ヘシム、足利基氏鎌倉管領タルニ及ビ、其執事上杉憲顯ヲ以テ守護トス、正平中、憲顯歸順シ、畠山義深之ニ代ル、義深西歸、憲顯再足利氏ニ降リ、本州復其所管トナル、享德ノ初、足利成氏（シゲウヂ）兩上杉氏ト相攻メ、關東大ニ亂ル、長祿元年、山内房顯、扇谷定正、將軍義政ノ弟政知ヲ北條鄕堀越ノ館ニ奉ジテ主帥トシ、關東ニ號令ス、延德中、政知卒シ内亂作ル、韮山城主北條長氏襲ヒ擊テ堀越ヲ陷レ、政知ノ子茶々丸ヲ殺シ、遂ニ闔州ヲ併ス、天正十八年、豐臣氏東征、北條氏亡ビ、地德川氏ニ歸シ、内藤信成ヲ韮山ニ封ジ、戸田忠次ニ下田ヲ賜ヒ、其餘郡邑州ノ豪族江川英長ヲ代官トシテ、民政ヲ知シム、慶長中、内藤戸田二氏封ヲ轉ジ、江川氏代官ヲ世襲ス、（後大島八丈諸島ヲ隷管ス）王政革新、改テ韮山縣ヲ置、既ニシテ廢シテ足柄縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀 十國造〕伊豆國造

神功皇后御代物部連祖天䅣桙命八世孫若建命、定賜國造、難波朝（〇孝德）御世隷駿河國、飛鳥朝（〇天武）御世分置如故、

〔蒼梧隨筆 四〕日本古今國數之多寡

圖

伊豆　日本紀曰、日本武尊、歷二常陸一至二甲斐一云々、此時ノ紀ニ伊豆名不レ見、風土記抄云、伊豆ハ、倭名也、東ハ相模、西ハ駿河、ソノ間ニ出ルノ義ニテ、下略シテ伊豆ト云ト云リ、日本紀應神天皇紀ニ云、五年冬十月、科二伊豆國一、令レ造レ船、長十丈、船已成、浮二于海一、便輕泛疾行如レ馳、故名二其船一曰二枯野一、註曰、枯野者輕野ノ訛カ舊事紀曰、神功皇后御代、物部連祖天莪梓命八世孫若建命、定二賜國造一云々、日本紀舊事紀共ニ成務天皇ノ御時ヨリ後ニ伊豆ノ名アリ、舊事紀又云、難波朝御代、隷二駿河國一トアレバ、其本ハ駿河ヨリ分レルタガ如シ、

〔扶桑略記 五天武〕九年七月、割二駿河二郡一、爲二伊豆國一、

〔續日本紀 八元明〕養老三年七月庚子、始置二按察使一、令〇中略 遠江國守正五位上大伴宿禰山守、管二駿河伊豆甲斐三國一、

〔鎌倉大草紙 下〕伊豆國は昔より源氏重代の國也、賴政仲綱の以後、賴政の子孫代々守護たり、但二位の禪尼の時、武田信光も此國を玉はり、十ケ年ほど居住ありとかや、其後又賴政の子孫給はり、多田治部少輔とて、三代相續あり、此人々の建立しける中花山禪長寺と號して、賴政以來の木像あり、河內と云所にて、山の堂とも賴政堂とも申て于レ今有、尊氏公の御代に、畠山阿波守國淸、其息尾張守、二代關東の執事にて、此國の守護と成、彼人の建立の寺、瑞龍山吉祥寺と申て于レ今有、木像も有レ之、其內上杉山の內憲顯給はりて、代々關東の管領也、今又堀越殿關東の主君として、此國へ御下向有しからは、當國は關東には吉例有國にて、源家有緣の所也、

〔倭名類聚抄 五國郡〕伊豆國 國府在二田方郡一、行程、上十三日、下十一日、

〔伊呂波字類抄 伊國郡〕伊豆國 〇中略 田方府

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月廿七日丁未、加藤五景員、幷子息光員景廉等、去廿四日以後、三箇日之間、在二筥根深山一、各粮絕魂疲、心神惘然、就中景員、衰老之間、行步進退谷也、于レ時謂二爾息一云、吾齡老矣、縱雖レ開二

愁眉、不可有延命之計、汝等以壯年之身、徒莫殞命、棄置吾於此山、可奉尋源家者、然間、光員等、周章雖斷腸、送老父於走湯山、於此山景員逢出家云々兄弟赴甲斐國、今夜亥剋、著于伊豆國府祓土之處、土人等怪之、追奔之間、光員景廉、共以分散、互不知行方云云、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年三月二十七日丙辰、三品羽林著伊豆國府、境節武衞令坐北條給之間、景時以專使伺子細、早相具可參當所之由被仰、

〔梅松論〕十三日、○建武二年十二月はれまをもまたずして、伊豆の國府に攻入給ふ處に、義貞以下の輩、水呑の陣を引打て通夜沒落しける、

〔東關紀行〕伊豆の國府に到りぬれば、三島の社の御しめの内拜み奉るに、松の嵐こぐらくおとづれて、庭の氣色も神さびわたれり、

〔倭名類聚抄　五國郡〕伊豆國　略○註　管三　略○註　田方多太　那賀奈加　賀茂

〔延喜式　二十二民部〕伊豆國、下　管　田方　那賀　賀茂　○中略　右爲中國、

〔皇國郡名志〕伊豆國舊三郡今四郡

田方タカタ　△韮山　△天城山　●北條　△蛭ケ子島　國中

那賀ナカ　●松崎　エナ　西海入江ノ口

加茂カモ　△伊豆山　笹原山中　●熱海　●網代　相界ヨリ　●伊東　●外浦　東南海ニ向　●下田　●手石

君澤クンタク　●三島　●宇久須　●土肥　●江梨　●三津　此郡海邊ヨリ東海道ヲ貫山ニ入千貫樋チ驗ノ界トス

今君澤郡加

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕伊豆

	田方	君澤	那賀	賀茂	郡數
六國史					
古書					
延喜式	田方		那賀(ナカ)	賀茂	管三
倭名抄	同(多加太)		同(奈加)	同	同
拾芥抄	同		同	同	三郡
諸書	田方(圖元)　君津(圖元)　君澤(元)		同(圖元)	賀茂(圖)　加茂(元)	
郡名考	田方(タガタ)	君澤(クンタク キミサハ)	同(ナカ)	賀茂(カモ)	四郡
天保鄕帳	同	同	同	加茂　賀茂	同
明治沿革帳	同	同	同	賀茂	同
地誌提要	同(タガタ)	同(クンタク キミサハ)	同(ナカ)	同(カモ)	同
郡區編制	同	同	同	同	同

田方郡

〔增訂豆州志稿　一〕郡鄕

田方郡　鄕十三、村六十九、〇略　註此郡古昔最大ニシテ、南ハ天城山脊ニ至リ、東ハ相州界ヨリ海ニ至リ、西北ハ駿相ノ界ヨリ海ニ至ル、且國府モ此郡ニ在リ、府南數里間、壙地坦平ニシテ水田アリ、此郡名ヲ田方ト稱スル所以ナリ、增、舊天城山北一里田方郡ニシテ、東ハ赤澤村ヲ限リ、西ハ江梨村ニ至リ、北ハ相模、駿河ニ界シテ、皆本郡ノ地ナリ、而シテ後、西北部ハ君澤郡トナリ、東南部ハ加茂郡ニ併サレテ、其中央部三分一ヲ以テ達スニ至ル、乃現今ノ區域幅員、東南ハ山脈及川流ヲ以テ賀茂郡ニ界シ、西北亦山脈及川流ヲ以テ君澤那賀二郡ニ界ス、(中略)東西三里、南北十里、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年十二月癸卯、改駿河國駿河郡永倉驛家、遷置于伊豆國田方郡、

那賀郡

〔增訂豆州志稿 一〕郡郷

那賀郡　郷三、村拾七、（增、村十七、）此郷田方賀茂二郡ノ中ニ在リ、故ニ名トス、室町ノ末ヨリ此郡漸々ニ壅リ、北方井田郷ハ君澤郡ニ入リ、南方石火郷ハ賀茂郡トナル、今ノ那賀郡ハ卽古ノ那賀郷陞リテ郡トナリタルナリ、（增、現今那賀郡ノ區域幅員、東南山脈川流ヲ以テ賀茂郡ニ界シ、東北亦山脈ヲ以テ田方君澤二郡ニ界シ、西ハ海ニ面ス、(中略)南北四里十二町、東西二里三十町、）

賀茂郡

〔增訂豆州志稿 一〕郡郷

賀茂郡（增、元祿天保二圖共ニ、加茂ニ作ル、）　郷五村百貳拾七、（增、町一、村百二十八、島一、外ニ海島二十三、）東ハ赤澤邊ヨリ南入間ニ至ル沿海ノ諸村、北ハ天城山背界ナルガ、中古以來、田方那賀ノ二郡ヨリ次第ニ入リ、山中聚落モ漸々增益シテ、今甚ダ大郡タリ、海島ハ固ヨリ總テ本郡ニ屬ス、（增、國郡沿革考曰、賀茂郡、後世此境ハ田方郡、東邊三郷ノ地ヲ併セ、西境ハ那賀郡一郷ノ地ヲ合セ、其疆域殆ド全國ノ半ニ及ブト、現今ノ區域幅員、北川流ヲ以テ相模ニ界シ、北ヨリ西ニ走リ、概ネ山脈ヲ以テ田方郡ニ界シ、東南及西ニ回リテ海ニ面シ、西北川流ヲ以テ那賀郡ニ界ス、(中略)東西七里、南北二十五里、）

私稱郡名

〔增訂豆州志稿 一〕郡郷

私ニ稱セシ郡郷アリ、增、北條郡（東鑑、增鏡、蘇我物語、）　室郡（或作室野、舟原、牧郷邊、增、田代、加殿、其他諸村、天正十八年檢地帳、實郡ニ作ルモノ多シ、タカラハタカメノ轉訛ニテ、實郡ナラムモ知ルヘカラズ、）　厚見郡（戸田、增、山宮社上梁文、厚見郡戸田村ト、）　楠木郡（梨本、縄地邊、增、梨本村水神社慶長二年文、豆州楠木郡河津莊川井郡村ト、縄地村子安神社金鼓銘、楠木郡河津莊ト、）　高島郡（小海、增、久料村天正十八年檢地帳、豆州高田郡トアルヲ思フニ、高島ハ高田ノ誤謬ナランモ知ルベカラズ、）

〔吾妻鏡 十八〕元久二年閏七月二十日乙巳、辰刻、遠州禪室下向伊豆北條郡給、今日相州令奉執權事給云云、

〔吾妻鏡 二十二〕建保三年正月八日戊辰、伊豆國飛脚參申云、去六日戊刻、入道遠江守從五位下平朝臣（年七十八、）於北條郡卒去、日來煩腫物給云云、

〔増鏡新島守〕さてかの維時が名殘は、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふ者のみぞ、伊豆の國北條のこほりとかやにあめる、

〔郡名考〕伊豆〈中略〉　君澤（キミサハ）〈クンタク〉

〔増訂豆州志稿一〕郡郷

君澤郡〈郷名、田方郡ニ載ス、〉村六拾六〈増、町一、村六十一、此郡ハ田方郡ヲ割テ置所ナリ、但六村ハ賀茂郡ヨリ入ル、〉小濱池ヨリ流出ル水ヲ廣瀬ト云、下流數派トナル、其一ノ小溝ヲ君澤（キミサハ）ト云、是郡名ノ起ナリ、或云、鎌倉ノ頃郡宅郷ト云アリ、古文書ニ見ユ、〈増、三島大社貞和、觀應、延文等文書、郡宅郷ヲ載ス、此ヨリ起レル郡名ナルベシ、〉此ニ始ルト、本君澤荘ト云フ數村ノ荘號ナルガ、文第ニ廣リ、元祿ノ頃ニ至リ、五拾餘村トナル、〈増、天正十八年諸村検地帳、君澤郡ノ稱アルヲ思フニ、當時既ニ郡名トナリシ事著シ、然レドモ未ダ一定ナラズ、同年度御園村検地帳ニ田方郡、久料村帳高田郡ト記シ、マタ同年中島村、同十九年中村帳、文祿三年塚本村丹那村等ノ帳ニ、君澤郡ト記シ、其他一村ニシテ一ハ田方、一ハ君澤ノ記載アルナドヲ見テ、其錯雜ナリシヲ知ル可シ、〉同十四年、御代官小長谷氏ノ時、川原谷、冢原、北澤、大場、市野山、山中、谷田、中村、多呂、三谷、竹倉、中島、篠原ノ拾三村、君澤郡タルベキノ令アリテ郡始テ定マル、〈増、此時令アリテ今ノ如ク定メラレシナリ、國郡沿革考曰、君澤荘戰國ノ時、既ニ郡トナル、故ニ正保圖之ヲ載ス、寛文中復古ノ時之ヲ停ス、元祿十四年ニ至リ、再ビ此郡名ヲ置シナリ、而シテ正保圖既ニ六十八村アリ、元祿ノ時六十九村アリ、大抵今ノ地ニ同ジトアル、其停廢及再置ヲ云ルハ臆測ノ説ナリ、現今本郡ノ區域幅員、東山脈川流ヲ以テ田方郡ニ界シ、北箱根山脈及川流ヲ以テ相模、駿河ニ界シ、南山脈ヲ以テ那賀郡ニ界シ、西面ハ海ニ枕ム、〈中略〉東西二里、南北七里、〉

〔明治三十年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

伊豆

伊豆三郡、後世分ヲ君澤郡ヲ置キ、郡境盡ク變遷セリ、和名抄、田方郡十三郷中、小河（ヲガハ）〈三島地〉、依馬（エマ）〈江間村アリ、〉天野（アマノ）〈村存ス〉吉妾（キサフ）〈木負村アリ〉及鏡作五郷ノ地、今君澤郡トナリ、久寢（クガミ）〈後葛見、又久須美庄ト稱ス、伊豆山ヨリ宇佐美ニ至ル諸村、〉直見（タヾミ）〈今ノ熱海ノ地〉有弁（ウヘ）ノ東方三郡ハ、加茂郡ニ入ル、君澤郡ハ、伊豆志稿云、鎌倉以後君澤庄アリ、元祿十四年、代官小長谷氏ノ時、川原谷塚原等十八村ヲ以テ君澤郡トス、按ズルニ、君澤庄、戰國ノ

世既ニ郡トナリ、故ニ正保圖ニ此郡アリ、寛文復古ノ時、之ヲ停メ、元祿十四年ニ至テ、再ビ此郡名ヲ復セシナリ、小長谷氏ノ創置セシニ非ザルナリ、

〔倭名類聚抄六〕伊豆國 田方郡 新居 小河 直見多々美 佐婆 鏡作加々美豆久里 茨城 依馬 八邦〇邦、高崎本作牧、 狩野 天野 吉妾 有辨〇辨、高山寺本作雜、 久寢

那賀郡 井田 那賀 石火

賀茂郡 賀茂 月間 川津 三島 大社

〔增訂豆州志稿一〕郡鄉

私ニ稱セシ郡鄉アリ、〇中略 鄉ハ牧鄉東鑑、近來マデ鄉ト稱ミテ村字ニ附セズ、ノ、山木鄉、阿多美鄉、東鑑、此他多シ、郡宅鄉、稻梓鄉、三島大社文書ナホ多シ、土倉鄉、佐野鄉、箱根山緣起 田中鄉、松笠鄉、天正十八年豐臣氏文書 御薗鄉、塚本鄉、天正十八年檢地帳 等ノ類甚多シ、

〔拾遺往生傳上〕延暦寺座主大僧都陽生者、伊豆國酒井北條比田鄉人也、俗姓伊豆氏、少年登山、多歲忘鄉、〇下略

〔吾妻鏡一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆前延尉、號山木判官、者、伊豆國流人也、依父和泉守信兼之訴、配于當國山木鄉、漸歷年序之後、假平相國禪閤之權、輝威於郡鄉、 九月二日辛亥、御臺所自伊豆山遷秋戶鄉給、

〔三島古文書〕下 伊豆國川原谷鄉沙汰人等、可爲早當鄉內致沙汰黍波多事、

右件所者、先例川原谷鄉內也、早爲三島大明神御領、無他妨、可致沙汰之狀如件、

治承五年七月二十七日

源朝臣花押

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年 七月二十六日丁未、前律師忠快爲流人、一昨日到著伊豆國小河鄉之由、

宗茂申之、是平家緣坐也、

〔吾妻鏡 二十一〕建曆三年（○建保元年）十二月十八日甲辰、今日修理亮（泰時）以伊豆國阿多美鄉地頭職、令奉寄走湯山權現給、是元者件神領也、而頃年仁田四郎忠常令顚倒之、彼滅亡之後、匠作拜領之給訖、根本由緖、今朝始聞之、即爲放生之地、永所被寄進也、

〔三島神社文書〕下　三島宮領伊豆國玉河鄉住人

可早爲地頭伊豆局沙汰散田事

右當鄉者、元久二年閏七月、被寄進當宮之間、於鄉司職者、盛重神主知行來之處、承久二年二月、伊豆局補地頭之日、盛重依爲彼局舍弟、內々申付代官職之間、盛重、光盛、盛忠等皆爲代官、一向沙汰來歟、而今地頭與久盛向背之剋、地頭屋敷二町七段大之外、不可相交他事之旨、久盛張行之由、地頭所訴申也、然者一向沙汰之時、與各別知行之今、爭無差別哉、早且任傍例、於散田者、可爲地頭之沙汰、至所當收納者、可爲鄉司沙汰也、兩方可存此旨之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

安貞二年三月三十日　武藏守花押（○北條泰時）　相模守花押（○北條時房）

〔三島古文書〕可令早伊豆厚盛領知駿河國良知鄉內田肆町五十步、（在家、畠、山野準之、）伊豆國長崎鄉內參町、（同前）同國欅田鄉內田五段六十步（同前）事、

右以亡父三島社神主前伊豆守盛時法師（法名盛普）跡所配分也者、早守先例可致沙汰之狀、依仰下知如件、

正和四年九月十日　相模守平朝臣花押　武藏守平朝臣花押

〔三島神社文書（乾）〕雜訴決斷所牒　伊豆國衙　三島社神主盛親代實法申、當社領北中村、安富、鶴喰、欅田御園、長前、并宮倉神護以下、社邊敷地等事、（副重訴狀具書、）

牒、當社神主職、并社領等、先度盛親所預勅裁也、而貧盛盛行等令濫妨云々、太不可然、早止彼等之

妨、宜沙汰付盛親者、以牒、

建武二年三月十二日　　　　　　　前加賀守三善朝臣〇町野信宗、以下署名略

〔三島神社文書乾〕奉寄　伊豆三島大明神

伊豆國[illegible]崎郷事

右所奉寄進之狀、如件、

建武二年十二月十一日花押〇足利尊氏

〔上椙古文書一〕伊豆國奈古屋郷地頭職事、爲勳功之賞、任先例可被領掌之狀、如件、

元弘三年十二月二十九日　　　　　　　左兵衛督花押〇足利尊氏

上椙兵庫藏人殿〇憲房

〔三島神社文書乾〕寄進　三島社

伊豆國三福郷事

右爲當社領、守先例、可致沙汰者、奉寄之狀、如件、

建武二年九月二十四日　　　　　　　源朝臣花押

〔史徵墨寶乾〕北畠顯家寄進狀伊豆三島神社藏

寄進　三島社

伊豆國安久郷事

右爲天下泰平所願成就、奉寄進之狀、如件、

延元三年正月七日　　　　権中納言兼陸奥大介鎮守大將軍源朝臣花押

〔三島古文書〕三島宮神主盛實代光顯申、伊豆國郡宅郷內御名社玖町八反大事、御神領之條無子細之間、如元所被返付社家也、早可沙汰付下知於光顯之狀、如件、

觀應元年十二月十五日

守護代

〔三島古文書〕伊豆國三園鄕事、三島社本神領之條、治承四年八月十九日、同十月廿一日、御寄進狀、幷義時朝臣狀等分明之上者、如元可致沙汰之狀、如件、

康安二年七月六日　花押

東大夫殿

〔三島古文書〕寄附　三島社

伊豆國北中村鄕內衙職事

右爲天下安全、所奉寄進之狀、如件、

貞治五年十一月七日　左兵衞督源朝臣花押

〔三島古文書〕寄進　伊豆國三島宮

同國愛玉鄕事

右爲當社二季祭禮神寶物要脚、所寄附之狀如件、

應永八年三月廿四日　左馬頭源朝臣花押

〔三島古文書〕奉寄進　伊豆國三島大明神

同國稻梓鄕內事（土肥近江五郎入道跡一圓、除庶子分、）

右爲不斷護摩料所、所奉寄附之狀、如件、

應永廿二年十一月九日　安房守憲基花押

〔三島古文書〕五百文　三島祭錢三月分

右於仁田鄕御田地被下畢、田畠上田下田引合倉地代原神左衞門、名主藤左衞門、前より可請取者

村里名邑

也、仍如件、

辛未卯月十日

多留玄蕃頭殿

〔杉山文書〕條々　伊豆國宇佐美

一地下人百姓等、急度可レ令二還住一事、○中略

右條々、若於二違犯之輩一者、速可レ被レ加二御成敗一者也、

天正十八年卯月　日　朱印○秀吉

〔郡名一覽〕伊豆國御料私領　豆州　東西一日餘　四郡

高八万三千七百九拾壹石貳斗八升貳合三勺五才　貳百八拾五ヶ村

〈韮山　三十里　□下田　海上五十八里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕伊豆　四郡、二百八十四村、　御料私領高八万四千百七十一石二斗九升三合六勺二才

君澤郡六十九村　田方郡七十一村　加茂郡百二十七村　那賀郡十七村

〔地勢提要神〕郡邑島嶼奇名

伊豆　加茂郡、富戸村、吉佐美村、下流村、石部村、戸田村、八幡村、田方郡大仁村、君澤郡久連村、木負村、

重洲村、三津村、重寺村、谷田村、大場村、

〔三島古文書〕三島社領伊豆國長崎鄕井田中村事

神領異二他上一者、被レ渡二付社家一之歟、嚴密可レ有二御沙汰一候也、謹言、

十月二日　義滿花押

左馬頭殿

莊

〔増訂豆州志稿 一〕郡郷

私ニ稱セシ郡郷アリ、(○中略)莊ハ、馬宮莊(玉海)狩野莊(東鑑、大社文書)又三島葛見莊(蘇我物語)井田莊(藤原道家處分記)仁科莊(増、北條氏文書、諸社上梁文ニ屢々用ヰタリ)田中莊(田方郡田中邊)羆籠莊(君澤郡大澤邊、増、子神社天文元年上梁ニミユ、)鶴食(ツルハミ)莊(鶴食邊、増、文書類、)ノ如キ莊號ハ、物ニ紛亂シテ盡ク擧ルニ暇アラズ、(増、保ハ本州ニ所見ナシ、今君澤郡ノ村名、立保、足保、賀茂郡ノ村名、原保ノ稱アリ、其何ノ故ニ號シヤヲ知ラズ、)

〔相州文書〕伊豆國三浦莊内壹萬疋田地、爲守時(○赤橋)後家尼通盛活計可被知行者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年十一月二十二日　右中辨(花押)(○中御門宣明)

〔三島神社文書(乾)〕伊豆國狩野莊三福郷内田五町、在家壹宇事、任被仰下之旨、爲三島宮御神領、奉打渡之處狀、如件、

建武元年九月二十三日　僧祐禪(花押)

組

〔増訂豆州志稿 一〕郡郷

貞享中、國中ヲ分テ十二組トス、(増、十二組ハ、三島組二十七宿村、自三島至南條、谷田組二十村、自伊豆佐野至奈古谷、田中組二十村、自北江間至大仁、内浦組二十村、自重寺至小下田、狩野組二十七村、自細切至湯島、大見組二十七村、自牧郷至筏場、東浦組五村、自赤澤至片瀬、川津組十七村、自梨本至見高、稲生澤組十九村、自茅原野至白濱、加納組二十二村、自大賀茂至伊濱、松崎組二十村、自雲見至江奈、宇久須組八村、自宇久須至門野、組ニ入ザル村三十九村、)是郷莊亡スル多キヲ以テノ故カ、此組ハ甲斐ニテ筋ト云、上總ニテ郡ト云類ニシテ、皆古ノ郷ニ準ズ、(然レドモ一郡ノ内、數組ト分ケタルニ非ズ、只モヨリニ因テ立タルナリ、)

田數石高

〔倭名類聚抄 五 國郡〕伊豆國(○略)　註管三(田二千百十町四段百十二歩)

〔伊呂波字類抄 伊 國郡〕伊豆國(管三(中略)本田二千七百十町四段十二歩)

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕伊豆(下中)三郡(中略)田二千八百十四町)

〔海東諸國記〕伊豆州(中略)郡三、水田二千八百十四町、)

〔新撰類聚往來 下〕國名　伊豆(中略)田數五千八百四十町)

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕六万九千八百三十二石　伊豆

〔增訂豆州志稿 一〕租調庸

天正以後、本州ノ石高ヲ記セルモノハ、易林節用集、倭漢三才圖繪、○註略其他往々見ル所ナリト雖、因據詳ナラザレバ之ヲ取ラズ、今其正確ナルモノ、ミヲ次々揚ゲテ、參攷ニ供セムトス、

正保年中調査（同年度調製ニ係ル伊豆國繪圖所載ナリ、其他年號不詳國圖アリ、各大同小異トス、）增、高七萬九千六百五拾三石壹斗八升八合、（君澤郡二万千五百三十八石四斗六升四合、田方郡二万四千八百九十石一斗五升四合、賀茂郡二万九千百五十一石三斗四升二合、那賀郡四千七十三石二斗一升、增、年號不詳一書ニ高八万八百三石餘、村數二百九十一ヶ村、家數一万二千七百七十軒、人別六万人餘、神社六百九十二所、寺院三百九十八所、堂庵二百五十一所ト、案ズルニ、貞享元祿ノ記載ナルベシ、）

元祿十五年壬子調査（同元年調〔地方大概集等所載〕同九年調查〔村高比較表所載〕ミナ同之、）增、高八萬三千七百九拾壹石貳斗八升貳合三勺五撮、（君澤郡二万二千七百九十三石三升四合九勺、村數七十三、田方郡二万五千七百六十五石三斗九升一合、村數七十七、賀茂郡三万六百二十八石八斗七升九合四勺五才、村數百五十一、那賀郡四千六百三石九斗七升七合、村數二十六、村數總計三百二十七ト、其過多ナルハ枝村サモ計入セル故ナリ、奥書元祿十五年壬午七月、井上大和守、安藤筑後守、松前伊豆守、久貝因幡守ノ連署アリ、伊豆鑑一書所載、四郡總高八万三千八百十九石八斗六升六合五勺五才ト、按ズルニ元祿後ノ記載ニ係ルモノナル可シ、）

寛政十二年庚申調査（本書村里部所載總計ナリ、同五年出板伊豆國村邑高附大同小異トス、）增、高八萬四千七百九拾貳石壹斗貳升五合壹撮、（君澤郡二万二千七十石四斗六升八合一勺六才、村數六十六、田方郡二万五千九百七十六石六斗八升三合六勺、村數六十九、賀茂郡三万九百二十一石五斗八升三合二勺五才、村數百二十七、那賀郡四千五百五十六石一斗九升、村數十七、總計二百七十九、）

天保五年甲午調査（天保鄕帳所載村高比較表、地方大概集同之、但大概集天保七年改正記リ、）增、高八萬四千百七拾壹石貳斗九升三合六勺貳撮、（君澤郡二万二千九百四石六斗二升六合五勺六才、村數六十九、田方郡二万五千八百三十九石九斗一升一合六勺八才、村數七十一、賀茂郡三万八百十一石五斗五升八合八勺八才、村數百二十七、那賀郡四千六百十五石一斗九升六合五勺、村數十七、總計二百八十四、）

〔和漢三才圖會 六十七伊豆〕三郡　九万九千三百五十三石餘

〔官中秘策 二〕伊豆國　三郡 ○中略

一石高八万三千七百九拾壹石餘

出擧稻

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調〈略〇中〉

伊豆國〈御料私領〉　一高八万四千百七拾一石貳斗九升三合六勺貳才

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻〈略〇中〉

伊豆國、正税公廨各六万五千束、三島神料二千束、國分寺料一万束、大安寺料三千束、藥院料一千束、國分二寺供養料一万束、三神寺料二千束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、救急料一万束、

〔倭名類聚抄國郡五〕伊豆國〈略注〉　管三〈正六萬五千束、公六萬束、本稻十七萬二千束、雜稻四萬七千束、〉

國產貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀〈略〇中〉　伊豆國〈斛一千五百〇中略〉

年料別貢雜物〈略〇中〉　伊豆國〈零羊角四具、甘葛汁二斗、〇中略〉

諸國貢蘇番次〈略〇中〉　伊豆國七壺〈並小一升〇中略〉　右八箇國爲第一番〈丑未年〇中略〉

交易雜物〈略〇中〉　伊豆國〈猪皮十張、鹿皮卅張、堅魚煎汁一石四斗六升、橘子四合、〉

〔延喜式主計二十四〕伊豆〈略〇中〉　右十一國、麁絲〈略〇中〉

伊豆〈略〇中〉　右十國輸絁〈略〇中〉

伊豆國〈行程、上廿二日、下十一日、〉

調、一窠綾三疋、二窠綾二疋、冠羅一疋、緋帛十五疋、皂帛十疋、自餘輸絁、鰹魚、　庸、輸布中男作物、木綿、胡麻油、鰹魚煎汁、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〈略〇中〉

伊豆國十八種　藍漆四斤六兩、商陸、白石脂各五斤、白薇七斤、防風十五斤、木斛三斤、石斛十一斤、瓜蔕五兩、木防己、赤脂各十斤、黃礬石二斤一兩、椎子、署預、蜀椒各一斗、桃人一斗一升、決明子二升、莨菪子一斗、牡荆子四升、

〔毛吹草三〕伊豆

縮砂　良姜(リヤウコ)　推茸　打鮑　柄川酒　三島暦　修禪寺紙　八丈島紬

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年六月二日甲辰、伊豆〇中略等十九國貢絹、麁惡特甚、不如昔日、勅諸國宰、採取正倉舊樣絹、每國賜一疋、依舊樣作、

〔吾妻鏡 六〕文治二年二月十九日丁卯、供御甘海苔、自伊豆國到來于鎌倉、彼國土產也、仍任例差專使被京進之云云、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年正月三十日壬辰、伊豆國海苔被進京都、雜色吉野三郎爲御使云云、

人口

〔官中秘策 二〕伊豆國　三郡 〇郡名略

一人數拾万五千百貳拾人　内 五万三千八百六人 男 五万千三百拾四人 女

〔吹塵錄 五〕人口及國高 諸國人數調 文化元甲子年 〇中略

御料私領 人數拾貳万五千五百五人　高八万三千七百九拾壹石餘　伊豆國

内 六万三千九百三拾人 男 六万千五百七拾五人 女 〇中略

諸國人數調 弘化三丙午年 〇中略

御料私領 一同拾壹万五千百九拾七人　高八万四千百七拾壹石餘　伊豆國

内 五万九千壹人 男 五万六千百九拾六人 女

風俗

〔人國記〕伊豆國

伊豆國之風俗強シ、中之強ニシテ其氣ニ乘ル時ハ強シ、其氣ニ不乘時モ強シ、是ハ國風トハ云ナガラ、氣質之稟ル所、都而清成所ヲ自然ト得タルモノ也、雖然一花氣ニ而、今日ハダカヒニ命ヲ投ウタント約スル所ノ人ニテモ、少シモ違有時ハ數日之約ヲ一時ニ忘レテ、俄ニ亦遺恨甚ダ強ク而、大敵ト成テアダヲ施サン事ヲ常ニタクミニスル風俗也、然故ニ人皆氣一流ニシテ亦各別也、是國ヲヒキユルニハ、耳目ヨリ而是ヲ覆セシムベシ、氣ハ皆天氣ニシテ陽也、陽ハ升ル也、サレバ

恐ル氣强故ニ、恐リ深キモノハ名利ヲ好ムモノ也、イカニモ隨テ是ヲ可ㇾ願也、口傳、

名所

〔日本鹿子五〕同〇伊豆國名所之部類

三島　明神の御座なり、御池有、水涌出る、伊豆の府也、三島の宿といふなり、明神の草創のことくはしく神社の所に見えたり、

伊豆の高根　箱根より南の山也、海にさし出たるなり、山中にはしり湯あり、鎌倉右大臣の歌に、

千早ぶる伊豆のお山の玉椿八百万代も色はかはらじ

筥根山　三島より三里餘行て山中なり、矢たての杉とてあり、山のかしらに水海あり、湖水北南へ五十町、東西はちかし、東の汀に權現の社だんあり、西むきなり、湖の南の汀に蘆の宿とて民家あり、ひよりよきときは、此水うみに富士のかげうつりて、眺望無雙の景地なり、ふじは是より西に見えたり、

筥根山うす紫のつぼすみれ二しほ三しほたれかそめけん

阿妻の小野　二葉山　井國の山　志柄城の山　これはみなうち續て近所にある名所なり、此外三島より二里餘右のかたに、蛭が小島赤澤山など丶云所あり、名所にはあらす、

右の外、ゆるぎの橋、こく井の森など丶云名所、當國の内なりといへども、いまだ所をしらす、

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略伊豆國卅人〇中略

諸國器仗〇中略　伊豆國甲一領、横刀三口、弓卅張、征箭卅具、胡籙卅具、

〔百練抄十六後深草〕寶治元年正月十二日丙寅、此間風聞云、伊豆國長十二町、弘八町自十餘町行去、其跡如二湖水一云々、

〔清獬眼抄凶事〕配流公卿殿上人事〇中略

流移國々〇中略伊豆國七百七十里　右六ケ國遠流

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十三日辛卯、關東御分國々乃貢、日者依朝敵征伐事、頗懈緩、然者被免以前分、自今年可合期沙汰之由、所被申京都也、

諸國濟物事、治承四年亂以後、至于文治元年、世間不落居、〇中略賴朝知行國々、相模、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等也、〇中略

三月十三日　賴朝

進上帥中納言殿

〔萬葉集十四東歌〕相聞

伊豆乃宇美爾、多都思良奈美能、安里都追毛、都藝奈牟毛能乎、美太禮志米梅楊、

或本歌曰、之良久毛能、多延都追母、都我牟等母倍也、美太禮曾米家武、

右一首、伊豆島歌、

附小笠原島

小笠原島ハ、伊豆ノ東南約二百三十里ノ洋中ニ散布セル群島ノ總稱ニシテ、島嶼凡九十餘、其最大ナルモノヲ父島、母島ノ二島トシ、兄島、弟島、姉島、妹島等ノ諸島之ニ次グ、此群島ハ、文祿年中、小笠原貞賴ノ發見スル所ニシテ、小笠原島ノ名、蓋シ之ニ因ル、現今ハ東京府ニ隷屬ス、

〔南方海島志〕小笠原島　在下田縣東南貳百四拾四里、此島大ニシテ人ノ住スベキ十島アリ、其他八十餘アレドモ、大概石島ニシテ居住スベカラズ、昔絶テ此島有事ヲシラズ、赤水云、文祿年間、信州深志ノ營、小笠原民部少輔貞賴者闢之、故ニ總名ヲ小笠原島トイフ、又此島人無キヲ以、無人島トモ云、鄙俗メツポウ島ト云、メツポウハ無量ノ義、云其極大也、阿蘭陀モ此島ノ事ヲ知テ、ウーストエーランドト名付、セオガラーヒノ地理書ニ出ヅ、ウーストエーランドハ、荒地島ト云義也ト

位置

林子平イヘリ、

(南方海島志)小笠原島○中略

黄龍島一名父島、周回十五里餘、八丈ヨリ巳ニ當ル、是ヲ本島ト名付、丑寅之方ニ向キタル湊アリ、入口ハ二町許リニシテ、其內ハ甚廣シ、濱ハ白砂ニテ五町ニ三町許リノ平地也、誠ニ極上ノ湊ナリ、何レノ時カ爰ニ天照太神宮ヲ祀リテアリ、極テ人居ニ宜處也、延寶年中唐船造リ之船コレヨリ入タリト云、此處ヨリ西方へ山ヲ越シ、又上バ湊アリ、小湊トイフ、亦平地ナリ、凡而此島ニ平地有處者、何レモ白砂ノ濱ナリ、北ノ背ノ西ノ方、長サ五町ニ廣サ三町許リノ平地アリ、大村トイフ、西北ノ隅ニ方三町許リノ平地アリ、是ヨリ東ニ、長サ五町廣サ三町ノ地アリ、奥村ト云、此海濱ニ村落トモ爲ベキ處多シ、

南島、一名母島、又沖島、在黄龍島ノ南貳拾里、周リ十里許、此黄龍島ノ南ニアル故名付、東北ノ方ニ片湊ト云有リ、亦平地アリ、西南ノ方ニ湊アリ、紀州ノ橘船ハ爰ニ著ト云、方四町許リ平地アリ、此處ニ火ヲ燃タル樣子、木ノ伐リ口抔アリ、外ニモ聚落トスベキ處アリ、北極二十七度、

丹鶴島一名兄島、本島ノ東ニアリ、海路僅ニ三町ヲ隔ツ、周リ七里、赤鶴甚多シ、故ニ名付、西ノ方ニ亦上々ノ湊アリ、廣サ六拾歩、奥エ百八十歩、コノ處ノ山ニ高キ瀑布アリ、故ニ此濱ヲ瀑布浦トイフ、故ニ島名ヲタキ共云、平地ノ砂濱アリ、山ニ大木多シ、

大樹島一名弟島、丹鶴島ノ北ニアリ、海路五町周リ五里、大樹極メテ蒼欝翠茂、故ニ名付、八丈ヨリノ船、先ヅコヽニ著ク、

三里島、一名姉島、南島ノ南ニアリ、周回ヲ以名付、又古木多シ、

美濃島、一名妹島、亦南島ノ南ニアリ、周リ二里貳拾町許、亦林樹多シ、

南嘉(ナカ)島、黄龍島ト南島ノ間ニアリ、故ニ名付、西ノ方ニ平地ノ砂濱アリ、林樹茂密、

発見 開拓

圓碁島、黃龍ノ西南ニアリ、林樹蓊蔚、東ノ方碁有、入口十三歩、内廣サ六十歩許リ、其形口狹ク内圓ク、恰モ袋ノゴトシ、故ニ亦袋ノ碁トモイフ、海ノ深サ十五尋許、此島ノ近旁ニ嶼苔多シ、

東島、本島ノ北ノ猪ノ東ニアリ、

飛岸島 同上

以上十島、人居住スベシ、又本島ノ少シ西南島西倶ニ高山アリ、又本島ノ西二十五里ニ釜島トイフアリ、形ニ因テ名付、此外八十餘ノ嶼苔アリ、岩石巉峨トシテ居住スベカラズ、只產物アルノミ、八丈ヨリ小笠原島エ渡ル洋中ニ五嶕アリ、皆純石ノ一大山ニシテ、產物ナシ、唯舟行ノ標準トスベシ、

〔日本地誌提要 伊豆十六〕附、小笠原島、

小笠原群島、伊豆八丈島ノ南少東壹百八拾里ニアリ、北緯貳拾六度三拾分ヨリ、貳拾七度壹拾貳分ニ至リ、東經貳度貳拾分ヨリ、三拾三分ノ間ニ散布ス、大小八拾九島、最大ナル者ヲ父母二島トナス、兄弟姉妹諸島之ヲ環リ、小嶼其間ニ點綴ス、全島山谷深阻、地質磽确ニシテ、平曠ニ乏シ、然ドモ氣候恒燠、能茂木衆草ヲ育ス、瀕海亦巉巖、礁斥相連リ、風濤險惡、碇泊ニ便ナラズ、文祿中、小笠原貞頼航海シテ始テ之ヲ撿出ス、故ニ小笠原島ト稱ス、後開拓ヲ計ル者アリ、終ニ果サズ、文久元年、德川氏巡視使ヲ派シテ各島ヲ測定シ、士民ヲ移居セシメ、墾闢ヲ議ス、會内地多故、事終ニ中止ス、

父島 一名北島、又本島ト云、周回凡壹拾五里、東西壹里、南北貳里、○中略

母島 一名南島、父島ノ南少南拾壹里餘ニアリ、周回九里、東西貳拾七町、南北四里、

〔南方海島志〕小笠原島

赤水云、文祿年間、信州深志ノ餧、小笠原民部少輔定頼者闢之、故ニ總名ヲ小笠原島トイフ、○中略延

寶ノ初メ、紀州ヨリ橘ヲ載タル船、江都エ往ントシテ颶風ニ遇ヒ、是島ニ漂著セリ、幸ニ便風アリヲ歸ルコトヲ得テ、之ヲ官ニ告ス、縣官乃チ長崎ノ人島谷氏中尾氏ニ命ジ給ヒ、唐船樣ノ船ヲ造リ、長崎ノ善操船者、其外三拾餘人舵師ヲ立テ、延寶三年閏四月五日、豆州下田ヲ開帆シ、先八丈島ニ到リ、夫ヨリ東南ノ洋中ヲ探リ、遂ニ八十餘島ヲ見定ム、島谷氏等三人、皆頗ル學術有テ、天文ヲモ曉シタルモノ也、故ニ天度ノ高下、島ノ大小及產物マデ圖記シ、島エ表木ヲ建テ、日本伊豆國ノ屬島タル事ヲ著記シ、是年六月二十日下田エ歸帆ス、

〔小笠原島記 一〕伊豆國八丈之沖、小笠原島之儀ニ付、先規之趣由緒書寫、

信州深志ノ館小笠原大膳大夫四位少將源朝臣長明之孫小笠原民部少輔貞頼者、永祿年中ゟ奉屬權現樣之御幕下、數度之軍忠仕、數通の御證文頂戴仕就中永祿二年、高麗陣歸朝之節、權現樣御證文ヲ以、伊豆遠江之沖ニ而、貳百里四方之國島ヲ見出シ給、幷土產之品々取來奉獻上候ニ付、永永領地ニ被下置、於今國キ可號小笠原島ヲ奉蒙御上命、永祿三年ゟ船ヲ通シ、民部長直今領地候處、故有て渡海及中絕、其後延寶三年、元祿十五年御訴申上候得共、御免許無之處、去ル享保十二未年、御月番御老中松平伊賀守樣江民部長直孫小笠原宮內御訴申上候得者、大岡越前守樣御吟味被爲仰付申、五月廿七日、勝手次第見屆船出仕候樣蒙御免許、雖有仕合奉存候趣、書付ヲ以御月番御老中松平左近將監樣江御禮ニ罷出候、同日其外ニ御老中樣方江モ不殘御禮ニ罷出申候、委細先規之書付由緒書等宮內方ニ御座候、文祿三甲午年ゟ寬永三丙寅年迄三拾三年ニ成、寬永丙寅年ゟ延寶三乙卯年迄五拾年ニ成、延寶三乙卯年ゟ享保十八癸丑年迄百四拾年ニ相成申候、

大坂御番所江御訴申上候書付寫　小笠原宮內美任　式部長矩

乍恐宮內曾祖父小笠原民部少輔貞頼與申もの、文祿三年高麗御陣之檢使相勤、歸朝之砌、可然島國有之者、手柄次第可乘取旨、從東照宮樣御證文被下置候故ヲ以、伊豆國八丈之南沖ニ而、此人家

島國ヲ見出シ、奉行仕、則大閤秀吉公より安堵之御證文被成下、殊ニ東照宮樣御感悅之餘、一國書現名非爲ニ一己、民之困窮人遠流之輩ヲ可乍放遣候、於闢起者爲天下也、自今苗字ヲ以國名ヲ可號小笠原島旨奉蒙上命ヲ候ニ付、折々通船、土產等取來候得共、寬永三年より有故て渡海中絕仕候處、享保十二丁未年、彼島江御用船可被遣也、御沙汰奉承知候ニ付、從先祖代、雖爲此納之地、令領地之旨奉蒙上諭ヲ候、島國之儀ニ御座候間、私共手船仕立御屆之上、書上可仕候旨、六月御用番御老中松平伊賀守樣江奉願上候得者、町御奉行大岡越前守樣御吟味御座候而、翌申年五月廿七日、勝手次第渡海可仕旨、奉蒙御免許候而、此度於御當地船調達仕、出帆之用意仕候間、暫御當地湊江船繫置候、依之御屆申上候、宮内儀老衰仕、病身ニ罷成候ニ付、名代式部申上候、尤江戶表舊冬未極月十日、御用番御老中松平左近將監樣、并右御吟味掛り大岡越前守殿江、叔父宮内一同參上仕、右之御屆申上候、

享保十八癸丑三月十日

御用達御中

〔小笠原島御開拓ニ付見込申上候書付〕伊豆國附島々其外江爲御用被差遣候ニ付、見込の趣申上候書付、　水野筑後守

今般伊豆國附島々御備向取調、小笠原島御開拓の御用被仰付候ニ付、得與勘考仕候處、小笠原島の儀、御國屬島之趣者、蘭書等にも相見江、外國人共辨知罷在候得共、南海數里之絕島、是從民御開墾之御所置も難被爲屆所より、外國人漸々居留之者も有之、右の者共島中江家屋等取補理住居候趣に候間、

彼理（ペルリ）日本記行、并蘭人著書中に、千八百廿七年我文政十年ニ當ル英國測量船加比丹渡航之上、英國諸願與いたし候趣、銅板江認建置、又者國旗ヲ岡上ニ引揚置、千八百三拾年我天保二年ニ當ル英亞其他之國

人四五人移住之上、サントウイス島より男女連越、追々開拓いたし候趣ニ而、千八百三拾七年（我天保八年ニ當ル）ニ而、人口四拾貳人罷在候趣ニ候得共、追々同島の地勢、其外探索可仕儀に有之候得共、此節者英人其外他人數移住も難計儀ニ御座候、

御國屬島之趣ヲ以、右住居の者共江申諭候共、承伏之程如何可有之哉、乍然右島者、文祿年中小笠原民部少輔貞頼戰功有之候得共、本原江復不申候ニ付、島國等有之候ハヽ、手柄次第乘取可申旨、權現樣御證文被下置候ニ付、南海江出帆、其上及見出候處、以後御國之重寶多く、第一以御威光御世一統ニおよび、御開起之儀末代ニおよび、御名を被爲殘、御大悅之旨御稱美之上、小笠原島與名付可申旨御沙汰有之候に付、彼地江其旨相認メ、杭印貳ケ所江建置候て、度々渡海產物等取來候處、貞頼之子長直、病氣ニ而流浪、上州館林ニ罷在致中絕、其後ニ至り度々渡海相願候得共、許容無之處、享保之度、右島見分の者被遣候趣承及、右民部少輔末孫小笠原宮內ゟ渡海相願候節、御調之上、由緒分明ニ依り、願之通御差許、人家無之ニ於而者、追々民家御移可被下、別段見分之者ハ被遣間敷旨被仰渡候趣、舊記ニ相見え、往古ゟ格別之御由緒有之、殊ニ延寶度巡見相越候共、島名村名を附、又者太神宮社をも勸請致置候趣ニ有之所、當節ニおよび外國の屬島共罷成候而者不相濟儀ニ付、何れも御國屬島之廉、確與相貫候樣仕度處、英亞人等數輩移住罷在候趣ニ付而者、右公使共江御說得之上、御手を不被爲掛候而者、何樣之不都合可有之も難計、左候迚、同島御開拓之御所置、大要御取極メも相附、出帆之手順等相整候譯ニも至り不申內、即今同所御開拓之儀、外國人致承知候ハヽ、猶以國々ゟ許多之人種引移、其他何等計畫可施哉難計、今般之御所置ニ而、後來之御得失も粗相定可申歟、然ル時者彼地江罷越、實見之上罷歸、委細申上、夫ゟ追々御所置被爲在候譯ニ而者、自然月數も相掛り可申、其內外島人共十分開拓仕候得者、機會相後れ、後日ニ至り如何とも取計方無之、只々見分仕候迄ニ而、御主意空敷可相成も難計、依之猶勘辨仕候處、彼地江罷越候

砌、外國人居住も少く、手餘地等も有之候ハヽ、不取敢、即時ニ御國人移住爲致候儀專要ニ可有之歟、左候得者、出帆以前同島江被罷越、開拓之見込有之者とも取調、十人以上も同船召連、右之者共住居可相成丈ケ、小屋組材木等も用意不仕候而者難計、乍去只今ゟ右等取掛り候得者、自然外國人共承傳可申、然ル上者前文申上候通り、彼計畫ヲ促し候基と可相成も難計、且右木品等ニ至ル迄、一船中積入候儀ハ差支可申ニ付、八丈三宅島等之様子柄、江川太郎左衛門手附等江承糺候處、右島之儀、近來人別殊之外繁殖いたし、當節ニ至り候而者、内地生産之作物、島中人口半年之夫食にも引足兼候程ニ而、其餘者土地産物を江戸表ゟ相廻し、穀物等ニ交易之上、夫食ニ引替候趣ニ付、兼々出島出稼之儀者、各島之者共擧而相願候由ニ而、尤八丈其外とも、浪人者別種ニ引別れ、全く往古ゟ之島人有之趣ニ付、右島人之子弟厄介等、小笠原島ゟ移住人申諭候ハヽ、願候者共出來可仕、左候得者、内地の農民等と違ひ、平生之夫食ニ穀物等相用候者稀にて、總而質素を極メ候趣ニ相聞候間、諸事取扱易く、御費用も薄らぎ、移住之上、開墾等ニ者十分力を竭シ可申、兩全之都合ニ可有之候得共、人數見計、同船召連候様可仕、尤右之者共住居爲致候家屋木材之儀も、八丈島に有之大工、其外作事向相心得居候職方之ものも罷在候由ニ付、同所ニ而簡便之建家爲切組、持越取建、且耕作漁獵之具、椀家具之類、一ト通宛、幷凡壹ケ年分夫食之品々種物に至迄渡し遣候積ヲ以、

　伊豆國附島々住居之土地人民江、前爲夫食男壹人米貳俵、麥四俵、女壹人米壹俵、麥貳俵宛被下候趣ニ付、右等ヲ見合、耕作之具、日用之器等者、當地より用意罷越候積、右者伺之通被仰渡候ハヽ、尚巨細取調可申上候、

持越相與ひ、土著爲致、猶其模様次第、八丈其外之島役人、又者召連候支配向之内爲取締殘置可申、
　島中土人之儀者、各國ゟ移住勝手ニ活計ヲ謀ル事故、各國捕鯨船投錨之節食料賣渡し方、土人

共相競ひ不和合ヲ生じ、又者右船中之者と雨爭論、或ハ島人共私闘ヲ生じ候儀有之候ても、其理非曲直相糺、教諭いたし候もの無之、不都合之趣者、蘭人撰遣いたし、書中にも相見候間、右を扱候權有之長官之もの居住罷在候ハヾ、土人倚頼する處出來、強ハ弱を凌候樣之儀無之、銘々安心生產を營候樣相成可申、乍然是以當節者、英國ゟ取締向相心得候もの差越置候も難計候間、右ハ實見之上ニ而勘辨取計候樣可仕候、

尤居住外國人之樣子次第、機會取失、御手後レニも相成可申樣子ニ候得者、猶御軍艦を以、八丈其他之島々江往返致し、直樣移住人相增候樣〆計候得者、幸御國內地ゟは里數も不遠事故、暫時ニ御開拓御創業の基本相立可申奉存候、然ル上ニ而、追々便宜ニ隨ひ、御取締向を始、御開拓諸般之御取置被爲在、外國ゟ相越居候もの共をも、漸々御撫育被成遣候はゞ、御國之屬島たる事不待議論事實ニ相顯れ、御主意相貫き可申哉ニ奉存候、尤咸臨丸御船長崎表ニ於て御脩復相濟、岡部駿河守乘組、近日到著仕候由、且右御船、對州表ゟ爲御用罷越候もの、拜借仕候積、被仰渡候も御座候處、此程右爲御用罷越候野々山丹後守等ゟ、君澤形御船、幷松平修理大夫手船蒸氣天祐丸借受、渡航仕候間、咸臨丸御船同所ゟ御差廻し、御見合之儀申上候趣も有之、就而者四季之儀も、多分者波高く候得共、颶風之患無之、渡航ニ者可然趣可有之候間、右御船著候はゞ、早々開帆之積取計可申哉、右等之儀御治定相成候はゞ、同島渡海中絶ニ付、此節ゟ猶亦渡海御開拓被爲在候積之所、英亞人等移住之趣も相聞候間、爲含被置御達候樣、右公使ゟ爲心得御達、其模樣に寄、前文往古より之次第、御説論被爲在可然哉ニ奉存候、其餘伊豆國附之御備場向等之儀者勿論、小笠原島之儀も、得與實檢之上、悉細取調可申上候得とも、差向先此段奉伺候、依而者兼而御沙汰之通、御勘定奉行支配向之內、地方功者之者、幷御目付支配之ものをも、被差遣候樣仕度候間、其段早々御勘定奉行御目付江も被仰渡、御船之儀者、御軍艦奉行江被仰渡可被下候、依之見込之趣申上候間、急速御差圖

御座候樣仕度奉存候、以上

文久元年酉十月

產物

〔小笠原島記 一〕小笠原島ニ有之品々荒增之覺

一桑木多く、野蠶多く桑ニ出生有之、

棕梠ニ似テ甚高キ木、ソロナルベシ、水木垻、左江麻多シ、

一山漆多し、漆の木大木、小木共夥敷有之、

海岸石間ニ生ズ、大木を見ず、季口ゟ並花、九月實熟す、食するに味よし、

一杉三抱四抱の大木多し

此木ヲ煎じ、數度染て鳶色と成、濱もつこくといふに蘇木有りといふとなり、

一槍帆柱ニ成べきもの多し　内槇内楠大木多し、内樫類多し、内椎多し、柳何れも雜木也、夥敷有之、内椰子内梹榔子内白檀内木香内丁子内胡椒内人參朝鮮人參に勝れりと、長崎の四川某正眞と申候、内甘草内肉桂氣味辛く勝れたり内龍眼肉多し、内山芋内口芋内蕨内狗脊内葛内鶴内雁内鴨内鷺但黃色多し内鳩内小鳥多し、内鳩の樣成四足成鳥多し、正寶年中ニ取來て見世物ニ仕候、内白鳥有、兩羽翼一間程あり、内琉球蝙蝠あり、内鯛多し、内鰯の類多し、内鰹多し、内鰆多し、内鮫多し、内鼈甲龜多し、内鮪多し、三間程内成るあり　海老四五尺も有、髯長サ九尺も有之、延寶年中來ても千歳海老と名付申と也、鮑差渡壹尺四五寸程なるもの多し、内海豚内鯨多し、内島々にかき捕場あり、南方海島志ニ、此外ニ大壯蠣洋カキ、又コロヒカキと云ふ甚大なり、みちと云魚多く有之、油取候へば多しといふ、内膃肭臍多く嶋ゟ島に渡るヲ見る也内魚貝類多し、内眞砂に砂なるべし、内金口内水銀其外金砂金石の類多し、

右の類岩山に有之、其外金砂金石之類多し、寛永三年ニハ金砂多く取來候、延寶年中、御撿使之節ハ不取來、右之外異木品々多く、海草ニハ珍敷物有といへども、名を不存候、尤書付にも不仕、取不

來候、

古事類苑

地部十

甲斐國

甲斐國ハ、カヒノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ相模、武藏、南ハ駿河、西ハ信濃、北ハ信濃武藏ニ界シ、東西凡ソ二十五里、南北亦略、相若ケリ、其地勢ハ富士山ノ北面ニ位シ、四方山嶽ヲ以テ環繞シ、中央平坦ニシテ殆ンド凹字形ヲ成セリ、而シテ都留ノ一郡ハ獨リ東ニ突出シ、別ニ一區ヲ成ス、此國ハ古ヘ國府ヲ八代郡ニ置キ、山梨(ヤマナシ)、八代(ヤツシロ)、巨麻(コマ)、都留(ツル)ノ四郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、近世ニ至リ郡名以外ニ、別ニ萬力、栗原、大石和、小石和、中郡、北山、逸見、武川、西郡ノ九筋、及ビ河内、郡内ノ二領ノ名ヲ設ケタリ、明治維新ノ後、山梨、八代ノ二郡ヲ各、東西ニ分チ、巨摩郡ヲ南、中、北ノ三郡ニ分チ、都留郡ヲ南北二郡ニ分チ、凡テ九郡ト爲シ新ニ甲府市ヲ設ケ、山梨縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕甲斐(カヒ)賀比

〔運歩色葉集 賀〕甲斐(カイ) 甲州(カウ)

〔日本風土記 一寄語島名〕甲斐 岐(カイ、タ)怡害(イ、タ)蘇一作䕅

〔甲斐叢記 一〕國名

甲斐國 一作甲虔 柯彼日本紀 歌斐續日本紀 賀比古吏 介實風土記 兜巖徂徠峽中紀行 峽同上

〔秉燭譚 二〕甲虔州ノコト

續字彙補、㚏字註曰、音義、日本有甲㚏州、見平壤錄、亦作甲斐、ト、和爾雅ニコレヲ引テ云、作㚏裴者並非、斐字是ト、近代日本ニテ製スル文字、楡畠等アレドモ、郡國ノ名ヲ命ジ玉フニ、和字ヲ用ルコトナシ、斐ノ字ヲ草書ニ書タルヲ見アヤマリ、或ハ書アヤマリテ、遂ニ㚏字ト覺タルナリ、唐人ノ遠キコトヲモ、筆マメニ記シ置クコト是ニテシルベシ、シカレバ今ハ直ニ㚏字ヲ書モ宜カルベキニヤ、郡ニ拇㚏ト云アリ、氏ニ志㚏ト云アリ、何モ同例ナリ、今ハ多ク斐字ヲ書ク、コレモ無キ字ナリ、

〔峽中紀行 上〕寛永丙戌秋、余〈○荻生徂徠〉與省吾奉使適峽、〈國語、謂峽爲甲斐、地皆峽、故得名、而甲斐之名行久矣、人不識其爲峽也、〉

〔倭訓栞 前編 六〕かひ　山のかひは、倭名抄に峽をよめり、間の義也、日本紀に谷字をよむも同じ、熊谷椿谷など此訓を用う、國の甲斐も峽の義也、

〔古事記傳 二十七〕甲斐、名義、山の峽(カヒ)なる由なりと云說宜し、加比は間(アヒ)と同じ、

〔諸國名義考 上〕甲斐

和名抄に、甲斐〈加比、國府在八代郡、〉名義は、鴨祐之が大八州記に、甲斐之爲言飼也、飼養駒馬之謂、因以爲國號乎といへり、日本書紀雄略天皇十三年、甲斐黑駒云々とあり、〈○中略〉さて古事記傳に、山の峽なる由なり、加比は間と同じ云々と云れつるぞよろしかるべき、今其國のさまを思ふに山々群立る間間に民屋ありて、峽の國ともいふべきさまなり、和名抄に、峽山間陜處也、〈俗云山乃加比、〉とあり、

〔甲斐名勝志 一〕夫甲斐國は、山嶽四方に連なり、郡鄕其間にあり、甲斐は峽の假字也、倭名鈔、峽は山間陜處、俗云山乃加比とあれば、山のかひの意もて、名付たる國の號なるべし、峽は間也、阿加同韻にて通ずる也、風土記には介賓(カヒ)、日本紀には柯彼、續日本紀には歌斐とも書り、皆假字がきなり、〈○中略〉一說に、甲斐國は諸國に勝れて、果の美き國なり、斐の字、木實と讀字なり、故木の實に甲たりと云意にて、甲斐と名付しと云、今字彙及正字通を見るに、斐の字、木の實と訓ずる義なし、假令木の

實と訓するとも、甲斐は假字なり、字によりて解すべからず、是俗說の誤也、

〔萬葉集 三雜歌〕詠不盡山歌一首并短歌

奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、出之有、不盡能高嶺者、（中略）

右一首、高橋連蟲麻呂之歌中出焉、以類載此、

〔詞林采葉抄 五〕打縁流駿河國

なまよみのかひの國とは、なよやかにかほる香のよきとつゞくる也、

〔冠辭考 七奈〕なまよみの　かひのくに

万葉巻三に、（不盡の山の歌）奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流駿河能國與云々、こは生弓の返るといふを、かひにいひかけたるなるべし（加倍利の倍利を反せば、斐となる故に、甲斐に冠らせし也、）周禮に（弓つくることを）幹角を、熟於火、而膠法を擧て、然則居旱亦不動、居濕亦不動、苟有賤工、必因角幹之濕、以爲之柔、善者在外、動者在內、雖善於外、必動於內といへり、されど皇朝の古き弓は、たゞ木のまゝに作りて、膠して竹を合せなどする事はなかりき、兵庫寮式に、御梓弓の樣を委くゑるされしに、膠も竹も擧られぬは、延喜の御時までも、木のかぎりなりし事しらる、今も大和の大安寺法隆寺などにある古き弓はしかなり、さてその木のかぎりなる弓も、まだなまなる新弓は、動き反りけんかし、（又續日本紀にも、甲斐にも信濃よりおほく弓を獻る事見えて、集中に信濃の眞弓ともよみたれば、甲斐にも事と思ふ人もあれど、それは冠辭の意をよくし見で思へる物也、さるべき辭もそはで、ならまてかひとてさる意あらんかは、くにつ物もてその所に冠らするると思へるは誤り也、）

〔甲斐叢記 一〕國名

萬葉集高橋蟲麻呂が奈麻與美乃加比といへる詞、諸說區々にして一定せず、欽繇〇大按するに、詩の小雅の注に、慭は心不欲、而自彊辭とあるを、萬葉集に奈麻志斐と訓たり、奈麻とは生熟の生にして與美はヤミなり、ヨとヤと同韻にして通へり、奈麻也美は淺闇きをいへり、カヒは山

位置

間の陜處なれば、樹木蓍茂て常に淺闇し、故に斯く冠らせしならん、〇中略追鏡、奈麻與美の甲斐と云る事を、黒川春村の考には、奈麻與美はなみやまの轉語にて、並山の間といへる義なるべしと云り、

〔萬葉集枕詞解 四〕なまよみの　かひのくに

卷三二十七丁長歌に、奈麻余美乃、甲斐乃國　此はまづ奈麻余美乃は、生の肉之なるべし、甲斐とかるは貝の意なり、貝は鰒螺などをむねと云ことにして、其は生の肉を作身など云ものにして食ふが、殊更に味善きものなればかくいへり、善きものを善某と云例は、吉詞吉事など云是なり、肉をミといふは、いはゆる作肉、刺肉など云るにて知べし、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

甲斐府中、柳町二丁目　極高三十五度三十九分、經度東二度四十一分、從東都甲州街道三十四里一十一町五十四間半、

甲斐波木井村身延山、所在町　極高三十五度二十三分、經度東二度四十分、從東都甲州街道至甲府、四十四里七町五十間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

甲斐　府中　三五度三九分〇〇秒　身延町　三五度二三分〇〇秒　〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒　〇中略　甲斐　府中　東二度四五分二三秒

疆域

〔甲斐叢記 一〕國名

凡本州の地形は、信武相駿の四州に包括られ、其首信駿に信び、腰は武に殺れ、駿東に踰り、足は相に蹈る、山梨、八代、巨摩、都留、四郡の全體を三劃にして、東を都留とし、西を巨摩とし、中を二に斷て、

地勢

上を山梨とし、下を八代とす、都留は東相州津久井縣に疆し、南駿州駿東郡に界し、北は武州多摩河を限る、山梨は北武州秩父郡に接し、八代は河合郷（今の河内領なり）に至り、右に富士川を帶び、左は山を阻て、駿州富士郡なり、巨摩は南駿州庵原郡に界して、阿倍山の東邊に傍ひ、富士川を隔て、八代郡に對て、同じく河合郷と云一帶の地にして、富士阿倍二郡の間に介り、南に突出たる事十數里、北は信州佐久諏方二郡に接壤き、左は山梨郡荒川を界とす、右に白峯駒岳の聳えたるあり、人迹斷て西に通せず、山内信州伊奈郡に分界すれども、里程を計知ずと云、南北二十五里もあるべければ、大郡と謂べし、

〔日本地誌提要十五甲斐〕疆域　東ハ相模、武藏、南ハ駿河、西ハ信濃、北ハ信濃武藏ニ至ル、東西凡貳拾五里、南北凡貳拾五里餘、

〔日本後紀五相武〕延曆十六年三月戊子、先ㇾ是甲斐、相模二國、相二爭國堺一、遣ㇾ使定二甲斐國都留郡都留村東邊砥澤一、爲二南國堺一、以ㇾ西爲二甲斐國地一、以ㇾ東爲二相模國地一、

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

甲斐

按ズルニ、和名鈔都留郡ニ相模郷アリ、今秋山村及道志村ノ地ナリ、其西ニ戶澤村アリ、卽砥澤ナリ、蓋二國分界ノ後、其地再ビ甲斐ニ入リ、仍テ相模郷ト稱セルナルベシ、

〔易林本節用集下〕甲斐（カイ）州（甲）上、管二四郡一、南北二日餘、田淺畠深、四方寒无二陽氣一、草木滋、牛馬夥、中々國也、

〔裏見寒話一〕或說に、此國山林多くして、竹木の不足なし、四方山を圍ひて、陽氣薄く、邊部は蠶業を專にして、民用を助く、或は紙を漉、漢芭蕉を作る事を第一とす、其外菓類は、甲土の產を佳味とす、大河なく海なし、故に他國よりの著船なく、海魚なし、冬より二月の頃迄は、駿州沼津より鮮魚をおくるといへども、山路雪深く凍付る時、馬蹄不時して、魚荷を送る事能はざれば、冬といへども

魚肉乏しき事あり、中秋の央迄は、乾魚鹽魚のみ、亦山里はいふにやおよぶ、府下も庭上より地氣生じ、雲霧となり、濕深き故、夏秋の間、瘴病痢疾流行す、（府下も庭上より地氣生じ、雲霧と成り、濕深しとは、甚不審、予府中にも田舍にも、二三ケ所に住居したりしが、如此の事なし、上岩崎村山の根かたの村なれども、其邊にさへ、かよふの事なし、尤濕氣もなし、大抵濕深きは中郡筋のみにて、其他濕深き所なし、中郡も不殘濕深きにはあらず、笛吹川の北に添し一里ばかり、堅二里餘三里もあるべし、是も川の南方は濕氣曾てなし、病も同斷に覺ゆ、）

〔甲斐叢記　一〕國名

凡本州の地形は、○中略山梨、八代、巨摩、三郡の內、東西河內二領を除き、九筋に分てり、釜無笛吹の二川、郡中を劃け、山岳四方に聳峙ち、爵壁八面に環拱て、自ら蕃籬となる、內に九筋の道を開き、二十三所の關（下に出づ）を置て、東南北の三面に交通れり、其間の群流の會聚る所を三瀧（鰍澤青柳黑澤の三村）といふ、此處にて一道の富士川となり、東南へ流るゝ事十八里にして、南海に注る、（道路の條に委しく記す）其疆界、南北を經とし、東西を緯とす、（周禮の天官冢宰、體國經野、疏曰、南北謂之經、東西謂之緯、）經の延袤凡二十五里餘、緯は上廣くして凡二十五里、下窄して十四五里より拾里に至る、山川田野相錯れる中に驛路あり、所謂甲州道中なり、府城に至て分岐て（右は信州へ達き、左は駿州に出づ、）丫字の如し、緯を分ちて三條とし、武川、逸見、北山、万力（九筋の名）を一條とす、水晶良材萓岩百藥藥草を產す、西郡、中郡、大石和、小石和、栗原、（上に同じ）都留郡を一條とす、郡にて稍美く、綿軟く菓樹奇品を生じ、上品の絹紬を出す、闔國第一の饒なる地なり、又東西河內領を一條とす、巢鷹を產し、硯石を出す、金礦ありて砂金を淘採り、良材を伐て桴を下し、楮三椏を植て紙を製れり、万民此の三條の中に生養挙息て、稼穡を勤め產業をなす、且つ東西に鉅防あり、南北は信駿二州を擁き、東山東海の二道に介り、山河關梁點綴て、一匹の錦の文采る如し、自然に形勝備りて、天府の國と謂つべし、中世武田氏、此嶮に據りて武德を耀かし、五百餘年の星霜を保ちし事宜なるかな、其俗驕り傲て、各常に門地を論じ、氣槩を尙び、武術を好む、是は山川風土の氣に由といへども、亦武田氏の遺風の漸染なる所なるべし、

氣候

〔甲斐國志提要一〕一本州ノ氣候ハ、大山高嶽、四維ニ無間斷疊立シタル國ナレバ、瘴氣內ニ鬱蟠シテ、陰包陽、運動スルコト常ニ晚シ、然レドモ駿州ヲ南ニシ、信州ヲ北ニシ、南北各十數里ニシテ接境、而駿於暖信於寒、自古海內ニ所名ナレバ、北吹南熏時アリテ無變態コト能ハズ、嚴冬不視氷雪歲アレドモ、又亙寒墮指年アリテ、國中ニ年歷ル竹木モ枯痛メリ、概シテ之ヲ測ルニ、陽氣較劣レリ、如何トナレバ、早稻ハ常ニ實少シ、晚稻若シ持暖歲ニ會ヘバ、雖其利許多、高山ニ雪下リ、秋冷蚤ク到レバ、農夫空手スル事アリ、橘柑橙柚ノ屬ヒ生產セズ、茗茶不充民用、駒犢畜シ蠶絲多シ、故ニ寒キ方勝レリト云、亦春時陽焰ニ向テ、寒違節雪霰相侵スコトアリ、古ヨリ爾リト云、寒暖ノ中間ニ居ル國ナレバナリ、壬生忠岑ガ、本州ニ知事タリシ時ノ歌トテ、口碑ニ傳フ、(新後拾遺集載之)

題しらず

足引の山のかひよりかすみきて春しりながらふれるしら雪、此歌能ク其實ヲ得タリト云ベシ、

道路

〔甲斐國志提要一〕道路關梁

本州九筋ヨリ他州ヘ達スル道路九條アリ、皆路首ヲ酒折ニ起ス、(酒折ハ上代ノ府治ナリ、古蹟部ニ委シ、)酒折ノ北ハ板垣村官林ヨリ、金峯、御嶽ニ連綿シテ、人蹤罕ニ至ル、南面シテ前ニ在ル三路ヲ、若彥路、中道、河內路ト云、凡ソ此路スヂニ屬スル村里ヲ中郡ト稱ス、左ハ鴈坂口、萩原口、鎌倉海道ナリ、謂之東郡、右ハ穗坂路、大門嶺口、諏訪口是ヲ西郡ト呼ブ、其大體ヲ三分シテ、假リニ呼ブ言葉ナレドモ、軍鑑等ニモ所記ニシテ、今尙ホ人口ニ存シタリ、

若彥路　板垣村ヨリ東南ヘ出テ、國玉、小石和、八代、武居ヲ經テ鳥坂ヲ超、上下壹里餘、蘆川村ニ口留番所アリ、自府中五里、都留郡大石村ヘ三里、○中略

中道　駿州ノ通路三條アリ、其中間ナル故ニ名トセリ、府中ヨリ三里、右左口村ニ至ル、(木馬貳百四拾貳文、輕尻百五拾文、駕籠四百七拾五文、人足七拾五文、)迦葉坂ヲ越テ九一色鄕ニ出ヅ、凡三里ニシテ古關村、此所ニ口留番所ア

リ、阿難坂上下二里半ニシテ精進村、古作ニ青地又見地一、在ニ富士山北麓一、又二里ニシテ本栖村、置ニ國界番所一、番人ノ事見ニ職令支部一、自ニ府中一拾里半、自ニ本村一壹里八町到ニ駿州根原村一、人穴、上井田、若彦路相會ス大宮、東海道吉原驛マデ總テ九里餘ナリ、此路、天正壬午後、神祖數回御通行ノ事ハ、古蹟部ニ詳ナリ、

河內路　古時傳遞ハ、府中ヨリ三里半ニシテ市川大門宿、本馬貳百拾貳文、輕尻百四拾文、人足百六文、又三里半ニシテ岩間宿ニ達ル、但シ當郡通リナリ、此處ニ驛舍ノ迹アリ、後置ニ鰍澤宿一、自ニ市川一壹里拾貳町ナリ、越ニ割石峠一貳里ニシテ岩間ニ出ヅ、此路モ神祖御通行ノ事アリ、古蹟部ニ出ヅ、慶長以後、富士川通船開ケテ便道ナレバ、西郡鰍澤宿ヘ遞送ス、自ニ府四里八町、本馬貳百七拾壹文、輕尻百六拾四文、人足百貳拾四文、鰍澤黒澤二村、夾ニ川相對シテ、各ニ口留番所アリ、河內領ト九筋堺ナリ、略○中　又鰍澤ヨリ此方於ニ青柳一分岐シテ、荊澤宿ニ馹行ス壹里、本馬百六文、輕尻四拾貳文、人足貳拾九文、西郡路ナリ、信州街道トモ云　府中ニ係ラス韮崎ヘ遞送ス、荊澤ヨリ鰍澤ヘハ壹里八町、本馬四拾壹文、輕尻貳拾九文、人足貳拾壹文、韮崎宿ヘ三里半、本馬百八拾壹文、輕尻百貳拾貳文、人足八拾九文、古時ノ西郡路ハ、小室ニ番所ノ廢迹アリ、即チ河內領界ナリ、略○中　凡ソ河內領ハ、鰍澤ヨリ南駿州廬原郡ノ堺ニ至リ拾貳里餘、東ハ同州富士郡、西ハ安倍郡二郡ノ中間ニ介シ、富士川ノ兩涯ニ沿ヒ長ク延タル地ニテ、左右ノ山頂ヲ限リ、皆駿州ノ境ナリ、其間ダニ徑路數條通ゼリ、三澤ニ岐路アリ、略○中

雁阪口、秩父街道トモ云　酒折ノ前ニ孔道東西ヘ亘レリ、今官道ナリ、自ニ府中一、在ニ石和一、東方ニ有ニ岐一、里人山崎ト云　左ヘ行キ鎭目、別田、桑戸等ノ諸村ヲ歷テ、笛吹川ヲ濟リ、神內川村、小原村古ヘ狩野川原八日市場ト云ニ抵ル、略○中　天科ニ國界番所ヲ置ク、自ニ小原一六里、自ニ府中一九里餘、自是雁阪嶺ノ上至ニ國界一四里八町ナリ、武州秩父郡栃本ノ番所出ヅ、峠上下凡八里、無人境也、略○中

萩原口、青梅通リ、又大菩薩越トモ云、神內川ヨリ、井尻、於曾、鹽山下ヲ歷テ萩原郡ニ至ル、略○中　大菩薩嶺上下六里、亦無人ノ境ナリ、古云ニ玉山一、武州玉川ノ水、發ニ源于此一、都留郡多波山村、小菅村ニ下ル二路アリ、多波山ヨリ三里ニシテ、武州多摩郡川野村ニ到ル、略○中

鎌倉海道、今官道石和宿ヨリ分ル、黒駒村貳里半、本馬百貳拾九文、軽尻八拾四文、人足六拾三文、本村ヨリ御坂越藤木(トツノ)村ヘ貳里八町、本馬百七拾壹文、軽尻百貳拾文、人足八拾八文、二村中間駒木戸ト云枝村ニ口留番所アリ、府中ヘ五里、都留郡谷村ヘ八里、但間道ヲ往キ大畑村ニ出レバ四里ナリ、自藤木御坂越三里ニシテ、都留郡川口宿ニ下ル、本馬貳百九拾文、軽尻貳百二拾文、人足百六拾八文、是ヨリ貳里ニシテ、同郡上吉田村ニ至ル、本馬百七拾文、軽尻百貳拾貳文、人足八拾文、又貳里八町ニシテ、山中村ニ至ル、本馬百六拾九文、軽尻百貳拾文、人足七拾九文、是ヨリ駿州駿東郡須走村ヘ貳里四町、本馬百六拾九文、軽尻百貳拾文、人足七拾九文、此間ニ番所アリ、國界ナリ、竹下足柄嶺ニ達ス、古ヘ官使來臨ノ道ナリ、延喜式曰、略○中 甲斐國驛馬、水市河口、加吉(キ)、各五疋トアリ、水市ハ山梨郡、加吉ハ八代都留兩郡ノ間ニ在ベキナレドモ、二所共ニ今詳ナラズ、略○中 此道鹽田村ニ係リ、國衙ヘ達セシト見ユ、今ノ道ハ成田村、中川村、井田上村、金河原村、下黒駒村ヲ經ルナリ、古ヘハ金河暴漲シテ通路異ナリシナラン、鹽田町屋ト云處ニテ、黒駒一之關駒口ヲ取タル事、武田ノ文書ニ在リ、然バ今云市之藏村、即チ水市驛ノ遺名ナランカ、略○中 逸見筋ニ到リ、分岐シテ三條トナル、又飯田ヨリ南ヘ分ル、西郡ノ通路ヲバ戸田街道ト云、

穂坂路(ホサカヂ) 即河上(カハカミ)口ナリ、千塚ヨリ志摩(シマ)庄、穂坂庄ヲ歷ル故ニ爲路名、略○中 黒森ト云處ニ、國界番所アリ、信州佐久郡、河上御所平(カハカミゴショダヒラ)ヘ三里、此間ニ河上峠アリ、平澤及ビ十文字嶺武州ヘ出ヅ 依路嶺(ヨザタウゲ)上州ヘ出ヅ等ニ達ス、亦西方ハ津金、淺川ヘ貳里許、隔一嶺タリ、

逸見路(ヘミヂ) 若神子(ワカミコ)ハ通邑四達ノ地ナリ、略○中 逸見路ハ若神子ニ係ラズ、穴山村ノ車坂ヲ上リ、日野ノ原ニ出テ、片颪(カタオロシ)ノ堺ヨリ花水坂(ハナミヅサカ)ヲ下リ、釜無川ヲ渡リ、臺原(ダイガハラ)宿ニ達スルヲ古道ナリト云、即チ諏訪口ナリ、今ノ官道モ西河路トテ、臺原ニテ會セリ、原路(ハラヂ)ト云ハ、韮崎宿ヨリ新府墟下ヲ過ギ、穴山村ニ係リ、日野原ニ會ス、略○中 自韮崎三里八町至淵澤、本馬百四拾四文、輕尻九拾三文、自淵澤三里至小淵澤、本馬百三拾八文、輕尻八拾九文、此所ニ有國界番所、府中九里半、信州下蔦木、又田端(タバタ)ヘ各壹里、略○中

大門嶺(ダイモンタウゲ)口 棒道(ボウミチ)ト稱ス、凡上中下三道アリ、八嶽(ヤツガタケ)ノ西麓ヲ北ヘ行キ、信州大門嶺ヨリ、東山道長窪

驛ニ出ヅ、古時軍行ノ宏道ニテ、慶長五年、台徳廟(秀忠、德川)避和田嶺嶮、自此入諏方玉ヒシト云、〇中略

以上九條ハ皆古道ナリ、

〔日本實測録 二〕(街道)從東京歷大山及御殿場至大月、〇中略

甲斐國都留郡山中村　二里四町二十八間半　上吉田村、三十五度二十九分、　七町五十一間半　同追分(至川口村二里六丁三十六間、從川口歷御坂峠至藤野木村一里三十四丁三十七間、從藤野木至上黒駒村新宿一里一十一丁四十九間、從新宿至石和宿二里八丁四十九間半、)　一里二十九町一十九間　小沼村　一里二十一町四十四間　上谷村、三十五度三十三分、　二里一十五町四十六間半(至下谷村一十一丁二十四間)　大月宿(從東京至大月)街道通計四十一里一十町一十五間〇中略

從東海道吉原歷身延至韮崎、〇中略

甲斐國巨摩郡万澤村韮久保澤岸(至駿河國庵原郡宍原村一里一十六丁一十間、從宍原至小島宿所二里二十七町二十六間、北極高三十五度五分半、從宿前至小島津屋前五丁五十一間、從津屋前至興津宿中町三十五丁五間半、)　二十七町四十九間　万澤村　三里一十三間　南部宿下町、三十五度一十七分、　三里四町五十一間(至相木峠一里二十一丁五十一間)　波木井村、身延山東谷上町、(至久遠寺門前一丁)(三十間)　五町一十二間　同片熊町、三十五度二十三分、　一里一十一町一十三間　下山村、三十五度二十五分、　一里七町五十七間　八日市場村　二十町一十三間　切石村　三十二町二十三間　八代郡楠甫村富士川岸　一里六町五十九間　巨摩郡鰍澤村、三十五度三十三分、　一十五町三十三間　青柳村　二十四町四十七間　荊澤村　二里八町四間　百々村　一里十九町二十一間　河原部村、韮崎宿、(從吉原至韮崎)街道通計二十八里二十二町二十五間

〔日本實測録 三〕(街道)從東京歷甲府至下諏訪、〇中略

甲斐國都留郡上野村　一十五町二十五間半　鶴川村　一里四町二十一間　野田尻宿　二十九町三十六間　犬目宿　一里六間　鳥澤村下鳥澤　一十町三十九間　同上鳥澤　二十四町五間　猿橋村　二十三町六間　駒橋村　一十六町四十八間　大月宿　一十三町五十九間

下花咲村　六町二十一間　上花咲村　二十八町二十一間　下初狩宿　一十三町二十七間

中初狩宿、三十五度三十六分　二十四町三十六間　白野宿　一十五町五十七間　阿彌陀海道

宿　一十二町三間　黒野田宿（從小佛峠至笹子峠、呼郡內、）　一里三十五町六間（至笹子峠一里三丁三十一間）　八代郡日影

村駒飼宿　一十二町五十一間　山梨郡鶴瀨宿　一里四町九間　勝沼宿　三十町五間半　栗

原宿　一里五十八間半　八代郡川中島村（至一宮淺間社一里四丁三十二間）　一十五町七間半　市部村石和宿

一里六町四十間半　山梨郡板垣村（至善光寺五丁四十八間）　一十六町三十六間半（至府中城屋町一丁一十二間）　府中

八日町（至城大手前四丁五十六間、又歷境町至長禪寺七丁五十四間半）　一十四間　同柳町二丁目、三十五度三十九分、二町一

十五間　同柳町三丁目（至緑町二丁目四丁三十六間、從二丁目至光澤寺一丁二十四間、又從二丁目至一蓮寺二丁一十五間、）　六町一十間　府中

青沼町二町目（至布施村一里三十五丁五間半、從布施至青柳村二里二丁七間、又從布施歷市川大門村至高田村一里二十二町二間、從高田沼至川黒澤村二十二町一十五間、又從高田至青柳村一十三丁三十二間、）　巨摩郡河原部町韮崎宿　一里八町五十七間　臺原宿　一里一十六町二間

敎來石宿　一里五町三十五間（至山口關所前一十九丁一十三間、從關所前至國堺二十八丁四十三間、）　信濃國諏訪郡蔦木宿

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬（○中略）

甲斐國驛馬（水市、河口、加吉、各五疋、）

〔甲斐國志一提要〕道路關梁

一甲州道中　今ノ官道、江戸五海道ノ一ナリ、自府中到內藤新宿三拾六里、上ハ東山道信州下諏訪宿ニ到ル拾八里、國堺內凡貳拾七里、置驛拾九所ニシテ貳拾五宿站ナリ、街道四郡亘レリ、（巨摩三、山梨四、八代一、都留十一、合十九驛也、）道中奉行諸觸アリ、道橋ノ修理官裁ナリ、

府中柳町、（宿役貳拾五人、貳拾五疋、）定助郷內七町、（種高貳百三拾人、百拾疋、）大助郷外三拾貳町、（種高五百三人半）在郷大助拾六村、合高壹万六百六拾九石餘、大々助三拾貳村ナリ、（○中略）

韮崎（ニラサキ）宿、（河原部村ト云、宿役、貳拾五人、貳拾五疋、）大助郷拾三村、高七千七拾九石餘、（○中略）

臺原宿、宿役同前定助鄕三吹大助鄕四村、合高千五百六拾六石餘、○中略

教來石宿、宿役同前定助鄕上教來石村、大助鄕七村、合高千八百五拾五石餘、○中略

石和宿、宿役同前加宿成田村、大助鄕九村、合高六千八百壹石餘、○中略

栗原宿、宿役同前加宿歌田小城ノ二村大助鄕拾貳村、合高六千六百四拾壹石餘、○中略

勝沼宿、宿役同前大助鄕拾貳村高五千八百貳拾六石餘、○中略

鶴瀨宿、宿役同前加宿小佐手初鹿野二村、大助鄕拾壹村、合高五千三百五拾五石餘、上廿日ノ驛場也、○中

略

駒飼宿、宿役助鄕同前下十日ノ驛場ナリ、○中略

黑野田宿、宿役同前助鄕九村、合高千七百拾石貳升七合、上十五日傳遞ノ驛場ナリ、○中略

阿彌陀海道宿、宿役助鄕同前十六日ヨリ廿二日ニ至ル傳遞ノ驛場ナリ、○中略

白野宿、宿役同前助鄕同前、○中略

中初狩宿、宿役同前助鄕三村、合高五百八拾石貳斗壹升四合、○中略

下初狩宿、宿役助鄕同前○中略

上花咲宿、宿役同前助鄕三村、合高六百四拾七石八斗九升、○中略

下花咲宿、宿役助鄕同前○中略

大月宿、宿役同前助鄕八村、合高六百壹石六斗三升、○中略

駒橋宿、宿役同前助鄕四村、合高六百拾七石五斗壹升壹合、○中略

猿橋宿、宿役同前助鄕三村、合高七百拾八石八升貳合、○中略

上鳥澤宿、宿役同前助鄕六村、合高五百八拾九石三斗三升三合、○中略

下鳥澤宿、宿役助鄕同前○中略

犬目宿、同宿前役助郷五村、合高七百九拾三石四斗貳升壹合、○中略

野田尻宿、同宿前役助郷八村、合高七百四拾七石六斗七升壹合、○中略

鶴川宿、同宿前役助郷四村、合高七百八石壹斗三升六合、○中略

上野原、同宿前役助郷四村、合高六百七石七斗五升貳合、○下略

建置沿革

〔日本國郡沿革考二東海道〕甲斐　古作二歌斐一、續紀、字彙補云、日本有二甲斐國一、兩朝平攘錄作二甲斐一、　上國、管四郡、七百六十九村、

山梨和名抄云、於曾、能呂、林戸、井上、玉井、五郷、爲二山梨東郡一、石禾、表門、山梨、加美、大野、五郷、爲二山梨西郡一、　八代古府治　巨摩延喜式、和名抄作二巨麻一、　都留

〔日本地誌提要十五甲斐〕沿革　古ヘ國府ヲ八代郡ニ置、國衙村是ナリ、今山梨郡ニ屬ス、　源賴朝、同族武田信義ヲシテ本州及駿河ヲ管セシム、後本州ヲ分テ三トナシ、中郡山梨八代ヲ信義ノ子信光ニ、東郡都留ヲ加藤氏ニ、西郡巨摩ヲ逸見氏ニ賜ヒ、信光ヲ以テ守護トシ、子孫ニ傳ヘ、山梨郡石和ニ治ス、應永中、信光八世ノ孫信滿、讒ヲ鎌倉管領足利持氏ニ受ク、巨摩ノ逸見有直、持氏ノ命ヲ矯テ信滿ヲ殺シ、本州ヲ奪フ、既ニシテ將軍義持、有直ヲ黜ケ、信滿ノ弟信元ヲ立ツ、信元封ヲ信滿ノ子信重ニ讓ル、信重ノ玄孫信虎ヲ躑躅崎ニ徙ス、今ノ古府　子晴信ニ至テ菩ク兵ヲ用ヒ、四隣ヲ呑併ス、子勝賴、韮崎ニ移リ、殘暴武ヲ黷ス、天正十年、織田信長之ヲ滅シ、其將川尻鎭吉シゲヨシヲ封ズ、信長弑セラル、ニ及テ國人鎭吉ヲ殺シ、闔境大ニ亂ル、德川氏伐テ之ヲ平ゲ、遂ニ全州ヲ取リ、平岩親吉ヲ以テ府中城代トス、十八年、德川氏關東ニ遷ル、豐臣氏其義子秀勝ヲ封ズ、明年、秀勝轉封シ、加藤光泰之ニ代ル、光泰卒シテ後、其嗣貞泰ヲ濃州黑野ニ徙シ、淺野長政ヲ封ジ、小山ニ城チ治トス、今ノ甲府　關原役舉リ、德川氏長政ヲ紀伊ニ徙シ、平岩親吉ニ甲府ヲ賜フ、慶長八年、德川義直ヲ全州ニ封ジ、親吉ヲ以テ其相トナス、尋テ之ヲ尾張ニ徙シ、大久保長安等ヲ奉行トシ、州事ヲ管ス、元和二年、德川忠長ヲ封ズ、寬永九年、國除シ、大久保忠成ヲ以テ府中城代トシ、秋元泰朝ヲ谷ヤ村ムラニ封ズ、壹萬八千石　慶安中、城代ヲ罷メ、全州ヲ德川綱重ニ賜ヒ、府中ニ鎭ス、子綱豐後家宣入テ將軍綱吉ノ嗣ト爲

ルニ及テ、柳澤吉保ヲ封ジ、秋元喬朝ヲ川越ニ徙ス、享保中、吉保ノ子吉里、郡山ニ轉封シ、勤番支配ヲ置キ、士隊騎歩卒ヲ統ベ、府城ヲ守ラシメ、代官ヲシテ民政ヲ分治セシム、王政革新、甲斐府ヲ置、既ニシテ廢シテ縣トナシ、又山梨ト改稱ス、

〔古事記中開化〕次沙本毘古王者、(開化皇子彦坐王子、中略)甲斐國造之祖、

〔先代舊事本紀十國造本紀〕甲斐國造

纏向日代朝(○景行)世、狹穗彦王三世孫臣知津彦公、此子鹽海足尼、定賜國造、

〔續日本紀八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、令(○中略)遠江國守正五位上大伴宿禰山守、管駿河伊豆甲斐三國、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月十六日丙申、是日、置諸國介掾、甲斐、(○中略)今置介、(○中略)先是、三月九日、太政大臣已下、參議已上奏言、謹案令條、上國有介、中國無介、(○中略)今件等國、或前爲上國、未備介職、或國務稍繁、官員猶少、(○中略)伏請、甲斐周防新備介職、(○中略)詔從之、

〔鎌倉大草紙上〕甲斐國の住人に、逸見中務丞有直と云者あり、古より逸見、武田、小笠原三家は、甲州の大將なりしかは、頼朝の御時に、加賀見小笠原は信濃國の守護となり、信州にうつり給ひ、甲州半國石澤五郎に玉はり、それより代々初は本郡を知行有、東郡は加藤、西郡は逸見給はりしを、後には一圓に武田拜領して、加藤は被官に成、逸見は公方へ御奉行の體也、西郡の名字の地計知行有しかば、いかにもして武田を絕して、甲州一圓に守護せばやと、持氏公へ盡忠功ける、今度禪秀逆心して、京鎌倉より退治被成しかば、武田安藝守入道明庵は禪秀の小舅也、千葉修理大夫兼胤は聟也、兩人ともに持氏の寵臣、二階堂三河守は逸見緣者なれば、是を賴み、色々甲斐の事望申ける、去程に甲斐の國は關東の御分國にて、基氏の御所の御時より、鎌倉へ出仕申といへども、明庵も禪秀の事に恐れ不參候間、鎌倉より御勢を被向、大將は上杉淡路守憲宗也、千葉は早々降參す、

武田安藝守信滿もつるの郡へ馳出、二年に及て合戰すといへども多勢に無勢不叶、終に打負、信滿は甲州都留郡木賊山にて自害してうせぬ、法名明庵道光、于時應永廿四年二月六日の事也、〇中略甲斐國は逸見に給はり打入けり、然といへども、京都公方より御引渡はなし、鎌倉殿よりの御意計也、此時信滿入道朋庵の二男右馬助信長と云人有、一人國へ立歸り、郡内の加藤入道梵玄を相具し、西郡へ押寄、逸見と合戰數年也、此加藤と申は、賴朝の御時、武田兄弟に安田遠江守義定と申て、遠江當國を給し人あり、梶原が讒言して、安田謀反の由、賴朝へ申上ける間、賴朝大に感則梶原と加藤の元祖加藤景廉と、二人に打手を被下、義定は法光寺にて自害被成、然ば義定の跡を加藤に被下、甲斐國に加藤と申在所あり、是は彼加藤入道妙法房の居所を、後に在所の名と也、〇中略逸見武田兩家の合戰、應永廿四年より初る、終に逸見は打負、或は討死、或は自害にをよび、殘る人人鎌倉へ歎申間、持氏大にいかりたまひ、應永卅三丙午年、一色刑部大輔持家爲大將、一千餘騎發向す、しかれば甲州は要害能國にて、人の心も不敵なれば、鎌倉勢を事ともせず、度々の戰に持氏方打負しかば、持氏御旗をむけらるゝ、同六月廿六日、武州横山口より發向有て、武田を責らるゝ、信長もさる橋へ馳むかひ、責戰といへども、同八月一日、武州の七黨秩父口より亂入しかば、八月廿五日不叶信長甲をぬぎ降參しける、御免被成鎌倉へ召れける、加藤入道は無雙の大力にて、鐵の棒を杖につきて參りける、見る人驚目ける、甲州をば京都へ御申上られ、逸見に可被下候よし、海老名三河守を以て再三御訴訟有しかども、其比の公方義持公より、高野に在し信濃守信元を召出して、是に給るべきよしの上意にて、信元國に打入ける、鎌倉殿も力に不及、信元に御敎書を給けり、逸見は知元西郡名字の地計を知行す、信元は武田陸奧守に成、鎌倉へ出仕申、法名は淨國院、信元に一子有、彥次郎と號、父より先に逝去す、信元にも甥なり、武勇もよし、信長に家を禪りたくおもひけれども、一度禪秀一味の科有て、京より御免なし、然間信長の一男伊豆千世丸とて、土屋

の娘の腹に生れし子を養子に定て、系圖幷代々の御感書、手次證文不殘相傳也、其比信元の家來跡部駿河、同上野と申て、甲州の主護代預り、一類餘多有て、何事も信元の旨を背き横行しけり、信元一期の後、伊豆千代に跡部背きける、甲州に輪寶一揆日一揆とて兩一揆あり、輪寶一揆の侍、跡部に一味し逆心を企つ、信長方は加藤も早世し、日一揆の人々計にて、度々に合戰ありしかども、運や此時に盡果けん、から河合戰に日一揆皆打負、信長は忍て信濃へ打越、京へ上り給ひける、此時甲斐は鎌倉の分國なれば、持氏を頼被申は、やがて御加勢を可給に、京へ信長被參ける故に、京上方と鎌倉殿の御意趣のをこり初是なり、○下略

〔國花萬葉記 八甲斐〕甲斐國○中略　知行高貳拾貳千石 ○石數有二誤脱一

府○中○御城　江戸ヨリ卅六里

當國ハ武田晴信勝頼之後、天正十年、穴山梅雪、川尻肥後守少々内守護とす、御領國と成、天正十八年、少將秀勝、秀次、弟加藤遠江守兩人領之、城地未決、

府中當御城主　甲府中納言綱豐卿 ○正三位 御知行三拾五万石 ○中略

前代御城主之次第

淺野彈正少弼長政　同左京大夫幸長 紀州和歌山所替　平岩主計頭親吉 六萬石 慶長五年　尾州清州所替　右兵衞督義直領分 慶長十二年　其後御番城ト成　其後又駿河大納言忠長 領 千代丸後預之　鳥井土佐守成次 駿河亞相公家臣　寛永九年以後御番所ト成　左馬頭綱重殿 二十五萬石 寛文元年　是ゟ當御城主ニ至ル

同國谷○村○當御城主 江戸ヨリ二十六里　秋元但馬守喬朝 實父戸田山城守 知行二萬三千石 ○中略

當城前主代々

淺野彈正少弼長政　同左京大夫幸長　鳥居土佐守成次 三万八千石 駿河大納言家臣　同淡路守成行 同高　秋元但馬守安朝 壹万八千石、寛永十年、　同越中守富朝 同高　是ゟ當城主ニ至

國府

同國とく見之領主江戸ヨリ三十里　伊丹左京某○中略知行壹万石
甲州之内　大久保伊豆守忠高○中略知行壹万石
同國御代官　平野次郎右衛門二百石
〔官中秘策二〕甲斐國　四郡○中略
甲府御勤役支配候人、御役料千石、三千石高、甲府住居、但三千石已外之者なれば、御足し高より三千石之積を以、甲府之御藏において被下之、
一同組頭四人、御役料貳百俵高、
一御勤番五百石已下貳百人、甲府住居、同心五拾人づ
〔倭名類聚抄五國郡〕甲斐國國府在八代郡、行程、上二十五日、下十三日、
〔伊呂波字類抄加國郡〕甲斐國管四○中略八代府ヤツシロ
〔甲斐國志一提要〕一府治
和名抄云、府在八代郡、行程、上廿五日、下十三日、拾芥抄云、在山代郡、山代同八代、說出于前、按ニ、府在八代郡八代鄉、曰國衙、今村名ニ稱ス、下學抄、諸國之府、謂之國衙、是也、古史、東海道駿河甲斐伊豆ト記ス例也、官使巡行駿河國車返驛入本州、歷加吉川口水市三驛、延喜式所載、古蹟部ニ詳ナリ、到國衙、今之鎌倉海道也、返出豆州府、今ノ三島、鎌倉以來、置守護職コトニ爲リテ、武田氏族更替シテ補其職、始據石禾御厨居レリ、小石禾、千野、岩下等ニ存舊地者ハ、一時ノ居處ナリケン、或云、跡部上野景家者、爲武田氏守護代據岩下、於今云國府所國事ヲ沙汰セリト、此邊ハ皆立河庄ト云處ナリ、永正十六年、武田信虎自石禾館遷躑躅崎、今ノ古府ナリ、逮晴信勝頼三世居之、天正九年、勝頼築城於逸見韮崎遷之時人稱云新府、明年壬午、爲織田氏滅サレタリ、神祖御入國ノ剋、於古府建假御殿、及同十八年數次御挍行アリテ、此御殿ニ御逗留ナシ給フ、今尙舊地存セリ其頃一條ノ小山ニ、今ノ府城ヲ被築、御結構アリ、繩張ヲ命ゼラルトニ云、同

十八寅年、豐臣少將、受二封於本州一、明年加藤遠江守光泰代ル、於レ是與二修築之功一、(一條舊記ニ、平岩七之助城代頃ニ、賜下可レ遷レ寺地上、加藤時ニ及テ、遷レ寺由記セリ、)文祿三年年ヨリ淺野長政同長繼父子領主トナリ、城代淺野右近大輔長吉之ヲ經營ス、依レ是大鋸(オホガ)杣(ソマ)等ニ授ル高役免狀モ、多ハ淺野ノ印書存セリ、慶長五子年ノ後、御料所ニナリ、再平岩主計頭親吉城代タル時、猶又修理ヲ加フト云、(國初以來國守令吏事ハ、別其部アリ、委レ之、)

〔甲斐叢記 一〕國名

本州の酒折は、上代の府治なり、今も山内に石室多く存し、內城の處を鎭目と呼び、外宮など在りし處を別殿と稱なす、鎭目とは國鎭の稱なり、九筋の道(委しく下に)皆此處に發り、四方に交通る、屹然なる一巨鎭なり、日本武尊既に東夷を平げ、還りて兵馬を止息玉ふ所にて形勝の地なれば、世々の國造の府治とはなりしなるべし、

〔甲陽軍鑑 二十 品第五十七〕其年(○天正九年)七月、穴山殿御異見に、(○中略)當方によき御城を一ツ御かまへあるべく候、信玄公御武勇私ならざる故、御屋敷かまへまでにて御座被レ成候、甲州四郡の內に御城無レ之候儀は、信玄公御武勇と申內に、戒力をもつて如レ件、(○中略)今は輝虎の樣なる弓取、諸方の大將にも無レ之候と、穴山殿仰らるゝに付、勝賴公尤もと思召、同年七月より、甲州にら崎に新。府。中。を取立給ふは、武田の宗滅却のもとなりとは、後こそしられたれ、仍如レ件、

七月甲府の諸寺、新府中へこす、

〔倭名類聚抄 五國郡〕甲斐國(國府在二八代郡一、行程、上廿五日、下十三日、)管四、(○註略)山梨(夜萬奈之)　八代(夜豆之呂)　巨麻　都留(豆留)

〔延喜式 二十二民部〕甲斐國、上、(管)山梨　八代　巨麻　都留　右爲二中國一、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕甲斐(上中)四郡　山梨　山代(府)　巨摩(コマ)　都留(ツル)

○按ズルニ、山代ハ八代ノ誤ナラン、

〔易林本節用集 下〕甲斐(カフ甲州)上、管二四郡一、(○中略)山梨、山代(シロ府)、八代(ヤツシロ城)、巨麻、都留(ツル)、

○按ズルニ、此書、管四郡トアリテ、五郡ヲ擧グ、恐ラクハ拾芥抄ノ誤ヲ承ケテ山代ト書シ、更ニ他書ニ據リテ八代ノ字ヲ註セシナラン、

〔皇國郡名志〕甲斐國四郡

山梨(ヤマナシ)　府中　△善光寺　●國府　△生澤川　●石和　^藤沼　●鵜セ　武信界　●黒川　三日市場　△天目山

八代(ヤツシロ)　^岩間　●黒駒　^黒澤　△笛吹川　^市川　^上向山　^古關　駿界　^市場　●藤代

巨麻(コマ)　●萬澤　●教來石　^南部　△釜無川　^下山　△身延山　●リル石　^鰍澤　駿信界　●韮崎　^若神子　^韮原

都留(ツル)　●藤木　^下谷　●黒沼　●上吉田　●初雁　●山中池　^岩殿　^大月　武相駿界　●猿ハシ　富士山　●猪目　山付　^ツル川

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕甲斐

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
	山梨(ヤマナシ)	同(夜万奈之)	同	同(國元)	同(ヤマナシ)	同	同	同(ヤマナシ)	東山梨　西山梨
	八代(ヤツシロ)	同(夜豆之呂)	同	同(國元)	同(ヤフシロ)	同	同	同(ヤツシロ)	東八代　西八代
	巨摩(コマ)	同	巨麻	同(國元)	同(コマ)	同	同	同(コマ)	北巨摩　中巨摩　南巨摩

	鶴	都留(ツル)	同	同	同	同(ツル)	同	同	同(ツル)	南都留　北都留
		管四	同	四郡		同	同	同	同	九郡

山梨郡

〔甲斐國志提要一〕郡名

一山梨郡、和名抄云、夜萬奈之、○中略按ニ山梨ハ山無ナリ、本郡地平無レ山、故ニ名トス、神部(コンベ)山在二玉井郷一、都留郡之堺ナリ、今云二大菩薩嶺一、下安二觀音像一、在二裂石雲峯寺一、又名二多麻山一、嶺産二金玉一、御玉川ノ水源ナリ、入二武州一、爲二多麻郡一、玉緒當レ作二玉諸一、玉諸神社ノ舊址、在二酒折山内一、有二小流一、古巨麻郡界トス、今以二荒河一爲二郡界一、鹿泊當レ作二鹿河(カヌカハ)一、中古作二狩野川一、今作二金河一、州人呼かの川ト云是也、八代郡堺ナリ、追田基ハ鷹坂ノ北ニ在リ、今云二大瀧一、武州秩父郡ニ屬ス、

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年六月庚辰、甲斐國山梨郡人、外正八位下要部上麿等、改二本姓一爲二田井、古爾等爲二玉井、鞠部等爲二大井、解禮等爲二中井、並以二其情願一也、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年五月丙申、甲斐國言、山梨郡人伴直富成女、年十五、嫁二郷人三枝直平麻呂一、生二一男一女一、而承和四年平麻呂死去也、厥後守レ節不レ改、年已四十四、而攀號不レ止、恒事二齋食一、敬二於靈床一、宛如レ存日一、量彼操履、堪レ爲二節婦一者、勅、宜三終レ身免二其戶田租一、卽標二門閭一、以旌二節行一、

八代郡

〔甲斐國志提要一〕郡名

一八代(ヤツシロ)郡、和名抄云、夜豆之呂、○中略八代ハ山背也、地繞二富士山之西北一、而家居ス、拾芥抄云、作二八代郡一爲レ是ト、蓋シ山谷屋八ノ訓通用ス、代(シロ)ハ背(ウシロ)ノ訓也、山城國ト云モ山背ナリ、古時波多八代宿禰ノ所レ食ト云、古蹟部ニ詳ニス、寒田川ハ今ノ鵜飼(ウカヒ)川ニ相當ル、淺沼ハ鹿河(カヌカハ)ニ同カルベシ、古時山梨郡界ナリ、今以二日河一爲レ界、東光寺谷ハ都留郡大嵐(オホアラシ)ノ東邊ニ在シニヤ、以二長濱村東光寺一充二今界一ト雖モ、古ノ郡界ニ非ズ、後ニ遷シヽナルベシ、共ニ分明ナラズ、澤田岡ハ河内ノ和田村ナルベシト云、

巨摩郡

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲二年五月辛未、甲斐國八代郡人、小谷直五百依、以孝見稱、復其田租終身、

〔甲斐國志 提要 一〕郡名

一巨摩郡、○中略 按ニ巨麻今作巨摩駒ナリ、地多産駒馬、因爲郡名、風土記、有巨摩郷、今屬北山及逸見、和名抄脱此郷名、木賊(トクサ)川ハ白峯(シラミネ)ノ下ニ在リ、今云能呂川、爲早川之源、其西大山列岳十數里ニシテ人跡ナシ、信州伊奈郡ノ界トス、小田(ヲダ)谷在西保(ニシノブ)、蓋自玉諸川直徑シテ到于此、古ヘ山梨郡ノ界ナリ、今以荒川爲界、磐橋ハ今云縄橋、是ナルベシ、地屬駿州、長貫村ヨリ內房村駿河風土記ニ作內富瀨、伏流ノ義ナルベシ、ヘ濟ル、傳ヘ云フ、古時ハ磐石ノ下、不盡川ノ水伏流セリ、因所名ナリ、後ニ磐橋崩レ落テ、以藤蘿造橋トナリ、妙壽寺山未詳、蓋金峯ノ北面ニ有藥師岳、信州佐久郡ノ界トス、亦八嶽(ヤツガタケ)西有大門嶽、出中山道長久保驛、舊本州域內ナリシト、今ハ屬諏訪郡、堺筋ト稱スル地ノ續ナレバ、若此等ゾ廢寺ノ遺蹤ナランカ、亦此嶽ノ東、根場原(ネンバハラ)ノ邊ニモ廢邑ノ名アリ、

〔續日本後紀 仁明 四〕承和二年四月丙子、甲斐國巨麻郡馬相野空閑地五百町、賜一品式部卿葛原親王、

都留郡

〔甲斐國志 提要 一〕郡名

一都留郡、和名抄云豆留 ○中略 連葛トハ富士ノ山足北ヘ長ク延テ、綿連如蔓葛然リ、方言、山の尾づる、尾さきト云、後人代ルニ以鶴字、爲嘉名、本郡ニ有桂川、方言桂葛ノ訓相通シ、轉ニ文字、他ニモ此例多シ、□大田川ハ川口ノ南ニ太田和村アリ、古昔八代郡ノ分界充之乎、今適知シ難シ、早女坂、武田牧共未考、阿曾谷ハ今ノ明見(アスミ)村ニ湖アリ、阿曾ノ海ト云義ナルベシ、肥後有阿蘇山、信濃ニ有淺間山、皆燒烟立昇リ、恐ロシク淺マシキ義也ト云ヘレバ、卽チ富士淺間ヲ斥シテ云ナルベシ、又朝(アサ)日(ヒ)曾雌(ソシ)村アリ、曾雌氏所出ナリ、按ニ曾雌ハ於曾之ノ義ニテ、適ナルベシ、暮地村ニ相對ヘリ、此等ノ地名ニ由レルナランカ、

〔三代實錄 清和 二十一〕貞觀十四年三月廿日庚寅、甲斐國都留郡大領外正六位上矢作部宅雄、少領外從八位上矢作部毎世、賜姓矢作部連、

〔夫木和歌抄 十四 菊〕家集中宮御歌合、翫菊といふことを、

權大納言長家卿

郷

雲のうへにきくほりうへてかひのくにつるのこほりをうつしてぞみる

此歌注云、風土記に甲斐國鶴郡有菊花山、流水洗菊、飲其水人壽如鶴云々、

〔二中歷（名所）〕甕粥詞　男子（中略）問、然者甲斐國鶴郡。。仁作（氐布）永彥（乃）稻（乃）粥、永（久）甕（耳牟）、

〔倭名類聚抄（六國郡）〕甲斐國　山梨郡　於曾　能呂　林戸（波也之）　井上（乃倍井）　玉井（多萬乃井、已上五郷、爲山梨東郡、）　石禾（伊佐波）　表門（宇止）　山梨（也萬奈之）　加美　大野（於保乃、已上五郷、爲山梨西郡、）

八代郡　長江（奈加江）　白井（之良井）　沼尾（奴萬乃乎）　川合（加波井）　八代（也都之呂）

巨麻郡　等力（止々呂木）　速見（倍見）　栗原（久利波良）　青沼（安乎奴萬）　眞衣（萬木乃、國用眞木野字、）　大井（於保井）　市川（以知加波）　川合（加波井）　餘戸

都留郡　相模（○高山寺本、有左加无乃訓、）　古郡　福地（○高山寺本、有布久知訓、）　多良（○高山寺本、有太波耳訓、）　賀美　征茂　都留

〔甲斐叢記　一〕郷名

山梨郡十七（和名抄に見えたるは十なり、今現に本郡に隷る郷のみを擧て、毎郷の下に方なる内に、和の字を標して是を別つ、委しき事は村條に記せり、他郡これにおなじ、）

山梨（和）（西郡）　郡名の起る所なり

表門（和）（同上）　今は万力筋に隷り、東は石和郷、北は山梨郷にて山前を疆とし、中郡の國玉里吉の邊是に屬く、上代の府治酒折の端門に向ふ地故、表門とは呼しならん、

加美（和）（同上）　山梨郡の北にある故に上と云義なり、又一説に、八幡村より北すべて此郷に屬く、笛吹川の上流なれば、上と唱ふるならんといふ、

竈　又竈之郷とも、釜戸とも作けり、天正十一年、市河半兵衛、河西孫右衛門等賜はりし印章に見えたるは、即ち、釜口村なりと云、（中略）

大野（和）（西郡）　村名にて今に存れり、本村より東北に廣く唱たる名なるべし、

等力圀　栗原圀　以上共に古は巨摩郡に在り、

深澤　勝沼より東の山間にある諸村をいふ、鎌倉以後の名とみえたり、今深澤といふ一聚戸あり、

於曾圀東郡　村名今に存れり

御座　熊野村熊野神社、寛正三年、及び天文十八年の棟札に、甲斐の國御座の郷横井村云々とあり、權現鎭座に依て起れる名ならん、横井は今本村の小名に存れり、

玉井圀東郡　又玉井の里と云り、續日本紀延暦八年の條下に、山梨郡人云々、改本姓古爾等爲玉井とみえたり、竹森村に高森玉森武森とも作けり　玉宮明神あり、黑水晶高六尺許なるを神體とす、又玉室、或は玉諸ともいふ、社中に水晶石英を產す、玉井と云池あり、郷名の起る所なりと云、

玉の井の氷の上に見ぬ人や月をば秋のものといひけん　式子內親王

いづくにか月は宿りぬしかはあれど影をみがくは玉のゐの里　慈鎭

松尾　天文永祿以來の文書に、村名を斥て妄りに郷とすること、一時の風なり、以下准之、

鹿野川　又狩野川、或は神內川と作れり、村名なり、又加納とも作けり、

青沼圀　古昔は巨麻郡に屬く

鍛冶田　惠林寺　大八幡

八代郡十六和名抄には五あり

八代圀　郡名村名共にあり

石禾圀　昔時は山梨郡西郡の郷名なり、石禾の文字、今は石和と作けり、石澤伊澤にも作る、○中略東は石和川の古道を限り、鵜飼川の西にて、今は八代郡小石和筋に屬ける河內小石和等の十村も、其頭は山梨郡の中郡へ地續にて、共に石和郷なる故に、大石和小石和の名はありしならん、

國衙（こくが） 又小岡郷とも作けり、村名なり、下學抄に、諸國府、謂之衙、古しへ官廳を置れし處なり、道基詳ならざれ共村內に禁牓を掲る處を、端門の址なりと云て、大門と唱へ、孔路存れり、又數十步ならずして、百步許の宜夾き地、陸田となる地を字して臺上と云、當時廳屋の址なれば、黎庶の廬舍すべき處に非ずと云傳へたり、延喜式に載する官驛を、鎌倉海道と云て、此處へ懸れり、和名抄拾芥抄等みな、府在八代郡云々、廳屋の事は村條に記せり、

井上鄉 昔時は山梨郡東郡の鄉名なり、童謠に、甲斐のくろ駒、井の上そだちとあれば、黑駒の牧に連りたる地なり、

鹽田（しほた） 末木村長昌寺の支什大般若經奥書に、甲州山梨郡（今屬二八代郡一）一宮莊鹽田鄉傘木村と見えたり、（按るに傘は傘の字の誤りなり、傘音垂、艸木華葉の傘なるりと、字書に見ゆ、後人簡易に就き、末の字に換ゆ、義通ず、）中古鹽田村に古屋對馬といへる長者あり、其が知れる所を都て鹽田鄉と呼しにて、古の鄉名には非るべし、○中略 鹽田は鎌倉海道の中宿にして、便りよき處なれば、後々までも立置れしゆゑに、其名傳はりしなるべし、今鹽田村に、東門西門と云地名存れり、又町屋と云、一叢の人戶あり、古へ往來の駄荷の口錢を取し處なりと云、

林戶鄉 古時は山梨郡東郡の鄉名なり、古事記に見えたる、波多八代宿禰の胤、林臣の賜はりし地は此處なるべし、後に林部に作る、今東原村の內に小名を存す、○中略

田野 天正壬午、武田勝賴朝臣終焉の處にて、初鹿野山一帶の地なり、

能呂鄉 昔時山梨郡東郡の鄉名なり、又野呂とも作けり、南北二村あり、○中略

長江鄉 今永井村あり、一本長井と作けり、是その遺稱ならんと云、

白井鄉 今白井河原村あり

曾根 姓氏錄に、曾根連、（又宿禰とも有）神饒速日命の後なりと有て、舊姓は地名を命る事例多し、○中略

九一色（くいしき） 山谷の間にて、耕田乏しければ、生業の難きにより、天正十年、諸商賈免計の會章を賜は

れり、委くは村條に記せり、

高萩　上に同じ

沼尾 圀　今詳ならず、後の考を俟つ、

市川 圀　昔時は巨摩郡の郷名なり、又殘簡風土記にも巨麻郡とす、○中略

河合 圀　巨麻郡と並びて、同郷名あり、今も東西河內領と分れて、此の河合郷は東河內領なり、本州三郡の諸河、及び山谷の溪流、田間の溝渠、みな此に聚り、駿州の海に注る故に河合の名あり、

巨摩郡十三 和名抄に九つ、殘簡風土記に一つあり、

巨麻　殘簡風土記に載たる郷名なり、然るを和名抄に載せざるは、故ありて停廢られしにや、又は脫簡せしならん、○中略

逸見 圀　速見又倍見と作けり、其外の記錄には皆逸見とせり、按に、逸見は波置なり、古事記にいへる、武內宿禰の男、波多八代宿禰の裔、波美臣が賜はりし地なるか、波美は反鼻なり、波と反と通ふ、比の濁聲美に近し、○中略 又逸の字をもハヤと訓り、橘の逸勢と云る類なり、速の字も同じくハヤと訓たり、ハヤはハに約まり、浪速津と言ふが如し、然ば逸見速見共に波美の假字にて、倍見と訓通ふべし、他邦の人ヘンミと呼者あり、反鼻の假字に似たれども、是は一時の音便なり、後世名義の解き難に因て、種々の議論起り、邊字偏字經字を充るあり、或は穗阪庄に引及ぼして穗見に通はする說あり、皆附會にして信がたし、

龜澤　村名にあり

眞衣 圀　万木乃國、用眞木野字とあり、又里名もあり、餘戶郷の北、二十餘村みな此郷に屬く、牧原村の地、其遺名なり、又牧名に出せり、

餘戶 圀　延喜式に、凡郡不得過千戶、若餘五十戶以上者、分隷比郡云々、餘戶の名、此に出るならん、

和名抄に、諸國ともに此地名あり、中世甘利庄と云も餘の義なり、

西山　龍王村の古名なり、本村、西は釜無川の涯高くして、釜無川押漲しを、機山公〈○武田信玄〉の時、大役を興して水を治め、西山の郷民を此に移さる、永祿中の文書に、於龍王川除、作家分居住者云々とある是なり、慈照寺に藏むる慶長以前の文書には、皆西山郷とあり、今も西山禪林と稱へり、

宮地　又宮路とも作けり、中下條村松尾明神の社頭に降る一叢戸を、今も松尾宮地と呼ぶ、本村里長の藏てる元龜三年の印書に、上條堰破損、〈○中略〉牛句郷、中下條郷、下方郷、大下條郷、天狗澤郷、宮地郷、再興可致也云々、上に謂へる如く、天文永祿以來の文書、妄りに村を斥て郷とせしこと、一時の風なりとみゆ、

大草　異本曾我物語に、大草郷蘆倉村奈良田村などは、工藤庄司が知行所なりとあり、御勅使河の入に數村あり、白根諸岳の間に傍ふ、此山の西北は信州伊奈郡大草郷なれば、爰にも大草と稱るならん、

大井圖　中世大井庄とも云へり、最勝寺鐘の銘に、甲斐國大井之庄最勝寺洪鐘云々、弘安六年未八月日とあり、〈この鐘、今は身延山に在り、〉北は相澤、卽ち八田御牧の界なり、〈相澤とは圖澤の義なり、今鮎澤に作り、〉南は河内領に接き、東は瀧澤を限り、みな此郷の內なり、

稻積　又庄名にも里名にも見えたり、巨摩郡中郡、上條、中條、下條、西條、北山筋の石田篠原に係り、山梨郡の小瀬小曲に及ぶ、東鑑に稻積庄小瀬村あり、〈○中略〉

鎌田　槻米明王寺の神主左京が元龜二年の頌に、稻積十二郷鎌田八郷と見えたり、又宮原村鎌田八幡宮、享德四年の棟札に、鎌田八郷とあり、大永天文中の棟札を校するに、宮原、高室、上中島〈今の宿中島村〉阿荒〈又阿原とも作けり、今の紙漉阿原村なり、〉ヲシコシ、〈今押越と作けり〉中立〈今の中楯村なり〉西荒居〈西荒居、今西新居村と作けり、〉古市場、以上八ケ村なり、慶長の棟札に、大津、堀内、極樂寺、圓滿寺、關口、井口の六村を加へたり、さて寛文の棟札

には十四村と見えたり、

加藤(かとう)　鎌倉大艸紙に、加藤次景廉に仰せ、安田遠江守を誅せらる、○中略甲斐國に加藤と云在所あるは、彼の入道妙法房が居所を、後に所の名に申すとなり、○中略加藤今は河東に作る、天正十九年卯年、加藤光泰が上河東村產靈へ寄進狀には、爲加藤權現領於彼鄕五貫二百文寄進とあり、以前の文書に、河東と書たるも多きは、通音ゆゑ交へ用ひたるなるべし、

河合(かはひ)國　八代郡に詳く志るせり

都留郡七　此郡の鄕名、和名抄にあるのみなれば、別に標記をなさず、

都留　又里名もあり、出雲風土記に、依靈龜元年式、改里爲鄕、其鄕名字者、被神龜三年民部省口宣改之、これ古へ鄕里、同地にして里と稱すること、尙舊き事知ぬべし、

相模(さがみ)　名勝志に、今の道志秋山の邊ならんと云、日本後紀延曆十六年三月二日、先是、甲斐相模二國、相爭國界、遣使定甲斐國都留郡、鹿留村東邊砥澤、爲兩國界、以西爲甲斐國地、以東爲相模國地云云、鹿留砥澤今作戸澤兩村今に在り、砥澤は鹿留の東一里半ばかりにあり、道志秋山は山を隔て其東に當り、相模國へ接きたればこの名あるなるべし、日本後紀、今の地理に能く相適へり、然れど此時國界相定り、道志秋山は相模の國の分內となりしが、後また本州に立かへりしならん又道志より東南の山を阻て、相州の疆域に中川帚澤等の山村あり、是を山相模と云、○中略

古郡(ふるごほり)　上野原牛倉明神慶長六年並に元和元年の棟札に、古郡と云、又古郡山月光寺和見村あり皆鄕名の存れる所なり、○中略

福地　殘簡風土記に、福地鄕土穀五百六十七束とみえたり、鳥澤邊左右の村落、其地なるべし上鳥澤驛の南の方一孤丘あり、上に小祠を置て福地權現と稱す、又接近の地、繩上村小松明神、文永癸酉年十二月十五日棟札に、都留郡福地鄕繩上村とあり、又鳥澤の南桂川を隔て藤崎村あり、古

き打量帳に、伏地崎又伏崎とも記せり、是又禰地崎なるべし、

多良　中古田原郷に作る、谷村の西廿町許に、田原下淺間の叢祠あり、瀧あり、田原瀧といへり（土人）（今十日市場の邊と云）文龜元年十一月、靈山向岳寺、武田刑部大輔信昌朝臣の文書に、都留郡田原郷深田村之内、光澤、分年貢錢廿七貫之在所云々、（深田村今下谷村の支村にして、本村の東十町許にあり、民戸僅に六七在り、）永祿十二年十一月十九日、櫻山公の文書に、都留郡田原之内廿七貫文とあり、按に、上は田原瀧の邊りより、下は田野倉邊まで二里半餘の間左右の諸村、皆田原郷なるべし、田原とは水田多き原を云、凡一郡水田の開けし所、此地に勝れるはなし、郷名の起る處知りぬべし、

加美　十日市場より富士の麓までの際、三十村ばかりを總て上郷と稱す、山麓に依て地稍高き處なる故に云なるべし、水源を上と呼ぶ、此邊一郡の水源なれば、加美と號せしにや、

征茂　國志稿に、丹波山村の枝村加茂澤と云へる處に、加茂明神の舊社あり、（魂簡風土記に載る古迹なり、村條に詳）なり、征の字は加の字の誤寫にて、丹波小菅より、今は武州の域に入り、境村と云邊り、即ち加茂郷にてや有けん、那波道圓が和名抄を校する凡例にも、誤謬の訂定かたかりし事を記したれば、全く誤字無かるべきにも非ず、名勝志に、征茂は志茂の轉語にして、下郷の謂ならん、又は川茂と云處、その遺名にやと有れども、明據なし、且かの邊には、皆引當べき郷名備はれり、志かるに丹波小菅などの曠遠き土地に、郷名を缺く謂無ければ、その說も覺束なく思はる、

追錄、春村の說に、征の字音セイと呼ぶ、セイの約シなれば、シモは即ち下なるべしと云り、

西原　西原村寶珠寺に藏むる、永德二年壬戌に書寫の、大乘經の卷の尾に、甲斐國鶴郡内西原郷鶴地庵堂、書寫、並施入者也、本願法末並中陽謹書畢と見ゆ、

鏡石　上下初鹿二驛の間にある地なり、東鑑にみゆ、事は波加利庄に記せり、

〔東大寺正倉院文書十八〕甲斐國司解　申貢上逃走仕丁替事

坤宮官廝丁、巨麻郡栗原郷漢人部千代、年三十二左手於疵

右同郷漢人部町代之替

以前、被仁部省去九月三十日符偁、逃走仕丁如件、國宜承知更點其替、每司別紙保良離宮早速貢上者、謹依符旨、點定替丁、貢上如件、仍錄事狀、附都留郡散仕矢作部宮麻呂申上、謹解、

天平寶字五年十二月二十三日　從七位上行目小治田朝臣朝集使

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十一月五日壬戌、甲斐國言、嘉禾生當山梨郡石禾郷正六位上清原眞人當仁宅、其一、十三莖五十穗、其一、十二莖三十六穗、當仁是從四位下豐前王之子也、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年○建保元年五月四日甲辰、古郡左衛門尉兄弟者、於甲斐國坂東山波加利之東競石郷二木フタキ自殺矣、

〔南部文書二〕時長師行行長等申、甲斐國南部郷内之村以下地頭職事、召出貢行、忩可被尋究之由所候也、恐々、

十月○建武元年二十六日　重泰○羽島

大宮大夫判官殿

〔大善寺文書一〕奉進柏尾山　甲斐國小岡郷内上野小七郎跡并塚原同人跡事

合田畠六町餘

右爲御敵初鴈五郎當寺炎上之間、不退行法令陵遲之者也、○中略

建武四年七月十六日　陸奥守○斯波家長花押

柏尾山衆徒中

〔萩藩閥閲錄五十八〕内藤次郎左衛門

尊氏公御判

下内藤左衞門四郎泰康跡

可令早領知甲斐國飯。田。鄉。内武田源七跡事

右人爲勳功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武五年正月廿八日

〔甲斐國志百二十一附錄〕補任（〇多田鄉内字御堂後在之）　甲斐國東三昧田肆版（〇版恐坂誤）

名主職事

最手房丸所

右當職者、自大。野。鄉。住人、爲後家尼道忍、爲六郎三郎、爲五郎次郎等之計、以三通賣券、曆應五年二月十八日、貞和五年十月廿日、觀應元年十月廿六日、買得之訖、仍任彼沽券之旨、所補于最手房也、於有限所役御年貢者、守先例、無懈怠可令勤仕之者、三昧衆等宜承知之敢勿違失、故以補下、

觀應二年六月廿日　國別當花押

〔甲斐國志百二十二附錄〕上岩崎村氷川明神棟札

甲州山梨郡巖。崎。鄉。崇社新廟棟札（〇中略）

寬正元年庚辰十二月廿一日辰剋　新立

〔甲斐國志百二十二附錄〕熊野神社梁牌文三章（栗原鄉熊野村ニ在リ）

奉造立熊野本宮權現宮殿、當國御守護武田伊豆千代殿御代、十方勸進、御建立者、後白河法皇御願也、此前者、文祿二戊午年、（當二百四十五年、）于時寬正三年（大戊、）手新立者十二月十五日、棟上同廿七日午剋、願主源義山沙彌心德敬白、大日本國甲州山梨郡御。座。鄉。横井村獅子見堀、白河之法皇御願奉造宮、

〔集古文書三十一下知狀〕武田信玄下知狀（信濃國木曾義家藏）

宅

甲州巨摩郡百之郷貳百貫、信州筑摩郡今井江三百貫、右依數度軍功、御扶助被仰出者也、全令領分武用嗜之陳役可相勤候條、下知仍而如件、

永祿三庚申年五月二日　朱印

山縣三郎兵衛尉奉之

鬼野釆女亮殿

〔甲斐國志附錄百二十一〕東新居村百姓所藏二章ノ內

就于上州箕輪在城、小鼻輪之郷三百貫、除正覺分大窪之郷百貫進之候、猶春日彈正忠可申候、恐々謹言、

永祿十年丁卯十一月廿三日　信玄　書判

松鶴軒　信州人禰津氏

〔甲斐國志附錄百十九〕岩手村神主平塚氏所藏本書折紙

岩手之郷免許

家九　岩手能登守殿　壹弓　溫井同心上野淸二郎

壹鑓　新衆宮內右衛門　壹弓　總七郎〇中略

右如此、奉行衆自廻觸廿日之內可其償、過廿日令無沙汰者、以利倍之勘定可收納者也、

元龜貳年辛未四月朔日

〔甲斐國志附錄百十九〕小河原村島田左衛門所藏棟別定書、本書橫帳、

井口郷免許〇中略

三貫四百文　本屋拾四間　壹貫九百八十文　新屋貳十間　三百貳十五文　明屋敷貳間

合五貫七百五文　此內壹貫三百五文、今度改出、

調衆

村里名邑

井口庄左衛門尉　同名四郎右衛門尉　總左衛門

右如此奉行衆從廻廿日之内ニ遂ニ可其償、過廿日令無沙汰者、以利倍勘定可收納者也、

天正八年庚辰十一月廿八日

〔甲陽隨筆 地〕國玉村三之宮國玉大明神之事

御朱印之寫　權現樣

甲州三宮領國玉鄉九拾貳貫五百文、巨世村内四貫文、土沙原内五百文、鹽部内五貫文、酒依内壹貫文等之事、

右如先規領掌不可有相違者、守此旨、酒掃祭祀等、不可有怠慢之狀、如件、

天正十一年四月廿四日

三宮神主殿

〔甲斐國志 百十九附錄〕小原村早河半左衛門所藏、本書横折帳ナリ、

中尾之鄉軍役衆　兵部殿御同心早川彌三左衛門　同新五右衛門　同七右衛門　同總右衛門〇中略

已上卅壹人、此内廿壹人、又被官同鄉人足甚次郎以上壹人、

乙酉〇天正十三年八月朔日　駒井印〇以下三名略

〔甲陽軍鑑 二十品第五十八〕家康は慈悲ふかき大將にて、勝頼公御最期所に寺を建てよと、甲州先方衆に仰付られ、田野に勝頼公御墓寺は、家康大慈大悲の儀をもつて如件、〇中略此田野寺にも田野鄉皆付よと有て下さる、

〔郡名一覽〕甲斐國 甲州 御料御三卿領地　南北二日餘　四郡

高貳拾五万三千貳拾三石貳斗七升壹合三勺　五百四拾九ヶ村

●府中御城　三十五里廿丁　∧市川大門村　三十九里　∧甲府　三十六里

莊保

八石和　三十四里　八谷村〔ヤ〕　二十六里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕甲斐　〔御料御三卿領知〕四郡、七百六十九村、

高三十一万二千百十九石三斗二升九合四勺九才

〔地勢提要〕〔坤〕郡邑島嶼奇名

甲斐　山梨郡等力〔トンロキ〕村、八代郡石和〔イサワ〕宿、巨摩郡藤田〔トウタ〕村、飯富〔オフ〕村、夜子〔ヨコ〕澤〔サハ〕村、鰍澤〔カジカザハ〕村、荊澤〔ハラザハ〕村、鵜母石〔ウバイシ〕村、圓井〔ツブラキ〕村、教來石〔ケウライシ〕村、

〔集古文書〔一綸旨〕〕後醍醐天皇綸旨〔横瀬氏家藏〕

甲斐國安村別府　同法師〔○泰家〕跡〔○中略〕

右所々地頭職、可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日　式部少輔〔花押〕

兵部大輔殿

〔甲斐國志〔百二十二附錄〕〕熊野神社梁牌文三章〔梁原筋熊野村ニ在リ〕

夫大日本國甲州山梨郡御座郷横井村垂跡玉ヘ獅子見堀、〔○中略〕天文拾八暦己酉六月廿九日、横井村熊野大權現神主、

〔甲斐叢記〔二〕〕庄名。

山梨郡

山前〔ヤマサキ〕　又山埼とも作けり、今も酒折の東に續きて山埼村あり、〔○中略〕

立川　或は竪川、太刀川とも作けり、今萬力村より溝水を引分つ、十八箇村を總稱へる名なり、〔○中略〕

大八幡　又巨麻郡にも同名あり、〇中略

牧　窪八幡より北加美郷、おしなべて稱す、〇中略

中牧　武河牧の地にして、柚口、千野、野宮、城古寺、窪平倉科等の諸村これなり、〇中略

加納　神内川村、古へ狩野川鹿野川とも作れり、小石和筋の金川原村も、狩野川原と作けり、是等も加納の轉語ならんか、〇中略

一條　舊一條の館と云は、今の府城の地なり、すべて此邊の庄名とす、

志磨　庄の内に湯島と稱せし地あり、後世庄名の志磨を省て湯村と呼ぶ、〇中略

小松　小松村は古府の西に在り、古時は西小松と云、〇中略

油川　庄名、古書に見えたる事なし、油川氏の起りし處なるに因て稱しにや、猶考ふべし、

八代郡

八代　郡名に記せり

國衙　郷名に記せり

井上　上に同し、又東鑑に建暦三年、和田一族の闕所を、勳功の賞に被行、井上庄は大須賀四郎胤信とあり、

一宮　本郡塚村淨泉寺の本尊厨子の銘に、甲州山梨縣一宮庄郡塚郷云々、永正四年とあり、〇中略

長江　郷名に記せり

向山　上下向山、中島、心經寺、右左口、藤垈、九一色郷の下蘆川より、東八村を合て十三箇村、中道に係りたる諸村を向山庄といひ傳れども、古書には未見ず、〇中略

淺利　淺利とは、山溪土砂を吐て、水のあせて淺くなれるよしの名なるべし、今も淺利村の東疆に淺利川あり、砂石殊に多し、村名に依て庄とす、〇中略

曾根　鄕名に記せり

青島　又市川庄ともいへり、富士川の涯に青島新田と云處あり、是其名の遺れるなり、〇中略

巖間　東河內領にては、勝れて豐饒なる土地なり、〇中略

巨摩郡

多磨　多磨は玉なり、〇中略金峯の西麓に連りたる處にて、其下流を玉川と云ふ、此溪の左右に傍たる數村を、多磨庄といふ、

穗坂　牧名に記せり

熱那あつな　或は厚桒、阿津名、熱名と作けり、西南は界河を限り、北は八が岳の麓にかゝれる數村を云ふ、〇中略

大八幡　今大八田と作きて、是をオホバッタと唱ぶは、オホヤハタを訛れるなるべし、〇中略

武河むかは　下鄕起請文に、六河乘何某とあり、宮脇村某の藏てる舊記に、六河鄕內折井、入戶野にうとの、圓井つぶらゐ、五十貫とあり、〇中略

甘利　大井　共に鄕名に記せり

麻津名　平林村鷹尾寺嘉吉三年の棟札に、胡麻郡麻津名庄平林之鄕とあり、〇中略

北條　大井鄕の內、中世の庄名なり、〇中略

南條〇中略　古時は八代郡黑澤村も、大井南條に屬ける趣なれば、刀禰川の南、凡て南條の庄と唱へしならん、

八田　牧名に記せり

加賀美　或は各務、又鏡に作る、〇中略

鮎澤　又相澤とも作けり〇中略

奈胡　或は奈古、那古とも作き、今は南胡と作けり、東西二村有り、○中略明德二未年法善寺領記に、七段奈胡庄、淺原郷之内中泥村有之云々、○中略

稲積　里名に記せり

布施　春米村明王寺の地藏靈驗記に、胡摩郡布施庄と申は、上古小井河庄とぞ申ける、其頃儀丹上人と云明匠あり、○中略帝王御病脳により祈禱を命せられ、法驗新らたなればとて、其地を布施物に給へり、因て地名となると云々、○中略

下山　大系圖に、下山小太郎光重は、秋山太郎光朝の男とあり、○中略本村は西に山を負ひ、東は富士川に傍ひ、北に早川の急湍あり、南は身延山に續き、波木井村の堺宮の北に、關島と云處存り、關門の跡なるべし、界内方一里餘、要害堅固なる地にして、河内領第一の殷邑なり、

都留郡

鶴田　奥田丸の舞に、奥田丸は和田義盛の弟、和田三郎宗實が子、この年十三、雲井の鶴を射とめける、頼朝烏帽子兒として、和田の平太胤長と名のり、則ち數多の庄を賜ふ、近江に河原庄、伊勢に車庄、尾張に青柳庄、美濃に山田庄、信濃にすゝへの庄、甲斐に鶴田庄、越前に田中庄、よき庄七箇所賜はるとあり、本郡の鶴川鶴島の兩村に、鶴田といふ地あり、此あたり古時の鶴田の庄ならんか、猶考ふべし、

大原　河口湖の涯に繞回たる、太石、長濱、大嵐、鳴澤、勝山、木立、船津、河口、淺川、新倉等の諸村を大原の庄なりといふ、古時八代郡に屬けりといふ、○中略

波加利　里名にもあり、○中略按に、波加利は初狩なり、又初雁と作く、黒岱より下、初狩まで皆一郷なるべし、今中初狩下初狩ありて上初狩なし、黒岱、藤窪又阿彌陀海道といふ、白野の三村、古へ上初狩の地ならん、

古郡　福地　共に郷名に記せり

〔東寺百合文書一之六〕寳莊嚴院御庄園○中略

甲斐國甘。利。庄。　前寮頭忠房

四丈白布五十段○中略

右注進如件

平治元年閏五月　日

〔長寛勘文〕勘申

甲斐守藤原朝臣忠重并目代右馬允中原清弘在廳官人三枝守政等罪名事

右左大史小槻宿禰永業傳、仰右少辨藤原朝臣長方傳宣、權大納言藤原朝臣公通宣、奉勅、熊野所司等訴申、甲斐守藤原朝臣忠重、仰目代右馬允中原清弘在廳官人三枝守政等、恣停廢當山領字八。代。莊。拔棄牓示、奪取年貢、追捕在家、搦取神人、或禁其身、或劓其口、事宜仰明法博士勘申忠重清弘并守政等所當罪狀者、○中略據勘此等文、甲斐守藤原朝臣忠重爲國司、乍知有鳥羽院廳御下文、爲令停廢熊野領八代莊、令目代并在廳郎從等、令損亡莊民、奪取資財物、搦取神人、劓其口畢者、既盜大社神御物、可中流之上、不致詔命、無人臣之禮、加之太上天皇與正帝無別、廳御下文豈異詔勅哉、其罪可處絞刑、又強盜若干、贓過十五段、尤可絞刑、隨從者共犯強盜、罪無首從、早任律文、可同罪歟、但忠重身帶五位、雖可請減、犯八虐盜賊時無減贖之法、絞刑之條、更以無疑、仍勘申、

長寛元年四月七日　　從五位上守大判事兼明法博士備前權介中原朝臣業倫

〔尊卑分脈十二源氏〕義清出家四十九才配流甲斐國 市。河。庄、武田冠者、刑部三郎、

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於在柄社、不密通落合藏人泰宗之由、書起請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛、被加撿見之處、七日七夜、無其失之由、各申之、仍市河掃部

助入道見西、所訴申之信濃國船山内青沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之、至市河屋敷者、氏女一期之後、可賜見西子孫之由、今日被定之、

〔尊卑分脈 十二 清和源氏〕武田信光 武田五郎、大膳大夫、伊豆守、又號伊澤、法名光蓮、右大將家御時賜石禾庄、仍號石禾五郎、承久亂之時賜安藝國守護職了、

〔甲斐國志 百二十二 附錄〕法光寺鐘銘

甲斐國牧庄法光寺、奉鑄施鐘一口、建久二年辛亥八月廿七、從五位下遠江守源朝臣義定、

〔臨川寺文書〕甲斐國牧莊 號高橋莊 東方 除道蓮 惠林寺領所被寄附臨川寺也、爲常陸國佐都莊并西岡田領家職、同東岡田地頭領家替、可令管領給者、天氣如此、執達如件、

建武二年正月二十五日　　　左中將 花押

夢窓和尚方丈

〔吾妻鏡 二十一〕建暦三年 ○建保元年 五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、波多野中務丞忠綱事、於無雙軍忠者、雖不及御疑、於御前對決之時、以義村稱盲目、爲惡口之上、以不加賞可准罪科之由、有沙汰所被閣也、子息次郎經朝賞事者被行之、又由利中八郎淺被召放所領云云、

甲斐國波加利本庄 武田冠者　同新庄 島津左衛門尉　同國古郡 加藤兵衛尉　同國岩間 伊賀二郎兵衛尉　同國福地 鎌田兵衛尉　同國井上 大須賀四郎

〔古文書類纂 上 處分狀〕後深草天皇建久二年關白藤原道家處分狀

總處分條々事 ○中略

一家地文書庄園事

宜仁門院 洞院攝政長女

泉涌寺　新御堂 四條院御墓所

寺領 ○中略

甲斐國經。田。庄。

件庄者、四條院崩御之後、彼國任先規沒後御事奉仕、便以件庄新主被寄附供僧護摩用途也、

〇中略

以前條々所注置如右、〇中略

建長二年十一月日　　愚老（在御判）

〔吾妻鏡二十五〕承久三年七月廿九日壬子、入道二位兵衞督（有雅、去月出家、年四十六、）爲小笠原次郞長淸之預下著甲斐國、而依有聊因緣、可被救露命之由、申二品禪尼間、暫抑死罪、可相待彼左右之由、雖令懇望、長淸不及許容、於當國稻積庄小瀨村令誅畢、須臾可宥刑罰之旨、二品書狀到來云々、楚忽之爲體、定有亡魂恨者歟、

〔甲斐國志百二十二附錄〕最勝寺洪鐘之銘（最勝寺、在最勝寺村、此鐘今在身延山久遠寺之常什、）

諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅爲樂

甲斐國大。井。庄。最勝寺之洪鐘

弘安六年癸未八月日時正、當寺住持長老比丘空圓、大江沙彌十念、

〔勸修寺文書二〕勸修寺領

甲斐國加。々。美。庄。〇中略

以上十八箇所

建武三年九月十七日

〔甲斐國志百十九附錄〕西郡加賀美村法善寺所藏

甲斐國法善寺領加賀美內九拾八貫六百文、寺部內壹貫文、藤田內壹貫百廿文餘、加賀美中條內壹貫五百文等之事、

右所令領掌不可有相違者守此旨可被抽國家安全之精誠之狀如件、

天正十一年四月十九日　家康（花押）

法善寺

〔椿葉記〕同（○正長）二年十月廿六日御禊行幸なり、（○中略）やがて中納言を御使にて御贈物をたまはる、よろづまうちやく身にあまるまで侍て伏見へ歸ぬ、其後かうまう山前庄を御内書にて給はる、これは室町院領にて、長講堂領のかはりに、最初綸旨を故親王（○榮仁）拜領ありしに、徳光院かすめ申給て、近頃不知行のところをあんどし侍れば、快然のいたりとまゆをひらくもの也、

〔甲斐國志〕（百二十二附錄）同寺（○法善寺）鰐口銘

一奉施入甲州志磨庄上條郷八幡宮鰐口之事、（○中略）時嘉吉三癸亥十二月晦日、信心旦那大家法家敬白、（○中略）

山梨郡西小松村石宮棟札

南無四天大王（各々鎭神）大日本國甲州山梨郡小松庄石宮大明神社檀、奉修造、檜皮葺棟札之事、（○中略）時永祿六癸亥八月三日敬白、當社禰宜右京大夫、地頭飯富源四郎昌景本願、（道一聖、同與右衞門、）大工志摩庄千塚之住人彌右衞門、檜皮大工山梨郡松尾住人、（藤屋彌七郎、堂左近丞、）

〔甲斐叢記〕（二）保名（○中略）

西原保（山梨郡）　西原村に在り、三方絶崖にして要害の地なり、村老相傳て、昔時遠藤某こゝに住すと云ふ、

國衙保（八代郡）　國衙は郷名に記す、又足利義詮の南朝降參の文に、國衙の鄕保并に本家領家年來進上の地に於ては、武家一向その綺を止べきにて候とあり、

藤井保（巨摩郡）　下圓井村諏方神祠、天文十二卯年五月五日の板記に、藤井保之内境村住人、小澤

宮内右衞門尉久吉閭室敬白とあり、穴山より南、小田川、駒井、坂井、中條、下條、薤崎等の數村を云へり、○中略

○福田堡同郡　湯村の鹽澤寺を福田山と號せり、俚老相傳へて、此邊庄保の名なりと云ふ、○中略

○西保山梨郡　保村巨摩郡などは、皆民家の聚れる一簇の地をいふなるべし、

〔甲斐國志一提要〕九筋二領當時所行ナリ

一萬力筋マンリキスヂ山梨郡表門山梨加美三郷隷之、府中東ニ在リ、後ニ板垣庄、山前庄、立川郷、大八幡庄、中摩木、大村、西保、竈戸郷等アリ、按有ニ上萬力村、鎌ニ下万力、落合正徳寺山之根三村充之由ナレバ、頗ル強村ト謂ベシ、一時廳所ヲ置テ、其名冠ニ四十餘村ニ者ナランカ、　田額貳萬參千百餘石　領村四十九

左帶川、右傍山、山甚高カラズ、川甚大ナラズ、卉木繁茂、水脈分徑溉田、沃野平疇、水旱ノ患ナシ、稻穀多實、菓樹奇品、且專蠶桑、凡國中第一ノ膏腴地ナリ、栗原大石和二筋ノ土地モ、亦大抵相同ジ、民多クハ嬌奢ニ弊ユ、

一栗原筋山梨郡、於曾、玉井、大野、栗原、等力五郷隷之、萬力ノ東ニ在リ、栗原等力郷名ノ事ハ前ニ記セリ、後ニ深澤郷、御座郷、馬木庄、塞林寺郷、荻原、五箇村等ノ名アリ、　田額貳萬八千九百餘石　領村五拾三

一大石和筋オホイサハスヂ山梨郡、石禾、能呂、林戸、井上五郷隷之、今爲ニ八代郡、栗原ノ南ニ在リ、後ニハ石禾ノ御厨、林部ノ郷、塩田ノ郷、一宮庄、黒駒等ノ名アリ、　田額貳萬千六百餘石　領村四拾四

一小石和筋コイサハスヂ八代郡、八代、長江、白井三郷隷之、小石禾十村、舊山梨郡ノ域ナリ、後隷之、八代庄、長井庄アリ、武部今作ニ竹居、小長谷等舊地名存セリ、　土地大概大石和筋ニ類シテ沃腴ナリ、蠶絲多シ、　田額貳萬千四百餘石　領村四拾

一中郡筋山梨、八代、巨摩、三郡ニ跨ル、　山梨中郡石禾郷、青沼郷ニ係ル、一條庄、稻積庄、鍛冶田郷等アリ、田額壹万四千四百餘石、領村貳拾五、　八代中郡沼尾郷アリ、後ニ淺利庄、向山庄、九一色郷等ナリ、田額壹万千四百石弱、領村三拾、本郡ハ南ニ負山、山間碁布セル村アリテ、瘠土多シ、　巨摩中郡古郡郷名ナシ、篠田郷、加藤郷、奈胡庄、又稻積庄係ニ本郡之域、　田額貳万八千五百餘石、領村五拾三、　合田額五萬四千參百餘石　領村百八

山梨、巨麻ノ中郡ハ一帶ノ地ニテ、釜無、笛吹二水ノ間ニ介シ、中分荒河、水患頻至リ、殃ヲ爲ス、然ドモ平敞ニシテ水田萬頃、稻美綿多シ、頗有豐饒之名、山澤藪原空閑ノ餘地無ク、地方二里不定ニシテ、村落七拾八、田額四萬石ニ超ユ、比之山傍一村分界稍狹小ナリトス、晉薪樵ニ乏キノミニ非ラズ、苴萑以糞田コト能ハズ、地漸ク瘦テ今不若古、民戸隨テ衰減シ、却テ佃ルニ堪ヘズト云、

一北山筋（キタヤマスヂ　青沼巨麻二郡ヘ、古時曾爲巨摩郡、後分青沼、隸山梨郡、界荒河一條ノ郷中ニ置府、小松ノ庄、豐部等アリ、但平瀨曹郡以北ハ古ヘ巨麻郷ノ城ナリシナルベシ、）　山梨北山、田額壹万千四百石餘、領村貳拾壹、　巨麻北山（志麿庄ハ青沼ノ城、穗坂御牧、龜澤郷ハ、當隸巨麻郷地勢ナリ、）　田額貳万千八百石弱、領村五拾七、　合田額參万參千貳百餘石　領村七拾八

當筋ハ負山枕河、青沼郷有府治、平曠沃野、當中郡之交、巨麻郷ハ山間狹隘、穗坂庄ハ乾燥ニシテ尤水ニ乏シ、六七里ニシテ得之、

一逸見筋（ヘンミスヂ　古郷名ナリ、大八幡、熱那、多麻三庄トシ、後上トモ稱シ、逸見ノ臺トモ云、依八岳地高シ、藤井保、小笠原、麻生、小尾等ハ巨麻郷ノ城ナリ、）　田額參万參千貳百餘石　領村六拾

地據八嶽南面、山多出泉、從高激田自在ヲ得タリ、川澤沃衍、山谿明麗、不旱不溢、風俗淳朴、善治生、駒積ヲ畜シ、秣蓄繁シ、

一武川筋（ムカハスヂ　武川衣、餘戸二郷ナリ、後ニ餘戸爲甘利庄、大草郷ト云アリ、）　田額壹万五千貳百餘石　領村參拾九

西ニ駒嶽、鳳凰ノ諸山鬱然タリ、土地稍逸見ニ類スト雖モ、相劣コト遠シ、

一西郡筋（ニシゴホリスヂ　在八代巨麻二郡、市川郷古隸巨麻、後爲八代郡、大井郷ハ在巨麻、共ニ庄トモ稱ス、大井北入田御牧ニハ郷名ナシ、原七郷高敞ニシテ無水田、加賀美郡南條、臺津名庄等ハ大井城ナリ、）　八代西郡田額五千參百餘石、領村七、　巨麻西郡田額參萬參千五百餘石、領村六拾六、　合參万八千九百石弱　領村七拾參

土地平夷、民俗質實、不事淨華、信佛多淫祀、民多ク田不充業、專爲商賈、原七郷ハ水氣乏ク、瘠土林藪ノ地超牟、粟稗ヲ陸作ス、

田數 石高

一河内領(カハチリヤウ)八代、巨麻二郡、共ニ河合郷アリ、後云ニ西河内東河内、西ハ下山庄、南部御牧、又飯野御牧、早河入中山等アリ、東ハ岩間庄、下部、又岩間、古關、常葉、田原、帶金、大島ヲ六組トモ稱ス、

東河内田額六千七百餘石、領村五拾九、　西河内田額九千百餘石、領村六拾三、　合壹萬五千八百石餘　領村百貳拾貳

山長地廣シ、澗中ニ僻居シ、燒山雜穀ヲ種ウ、水田少ク、民衆シ、

一郡内領(グンナイリヤウ)即謂ニ都留郡、郷名七、前ニ委シ、田原郷、葉置庄、波加利庄、同新庄、古郡庄、福地庄、大嵐七郷、中間入五村等ハ、後ニ所稱ナリ、郡ヲ二ニ割シテ、南ヲ爲上、北ヲ爲下、今ノ通稱ナリ、　田額弐万九百餘石　領村百拾貳

民俗俠逸、地大而皆山ナリ、少水田、蠶業ヲ專ニシテ頗ル利ヲ得、殘簡風土記云、福地郷、此俗不食麥毛、與食則無觸其香、多常食粟稗之粥而已ト、地僻ニシテ今尙如斯者アリ、

〔倭名類聚抄五 國郡〕甲斐國略○註管四　田萬二千二百四十九町九段二百五十八歩

〔伊呂波字類抄加 國郡〕甲斐國管四(中略)本田一万四十三丁

〔海東諸國記〕甲斐州　郡四、水田一萬四千三町、○四千恐四十誤

〔新撰類聚往來下〕國名略○中　甲斐甲州　四郡略○中　田數一万一千四十三町

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕二十二萬七千六百十六石　甲斐

〔裏見寒話一〕甲斐國

總高二十四万千六百六十二石七斗　內三千四百七十七石二斗九升五合寺社領 九百七十二石三斗二升六合小物成

是は古高也、其後の高は三十万石餘也、

〔甲斐國志一 提要〕九筋二領

一武田時代、田野町段ノ數詳ナラズ、以貫高通用セリ、天正十午年ノ後、猶依舊制、同十七丑年、命アリテ伊奈熊藏家次一國打量(ケンチ)アリ、又慶長元申年、淺野彈正少弼打量アリ、右兩度ノ高ハ不分明、同六丑年、大久保石見守長安奉行トシテ打量アリシ時ノ石高ヲ傳ヘテ古高ト稱シ、毎村ニ水帳ヲ

藏セリ、

四郡ノ籾高　村數七百貳拾貳

合貳拾四万千六百六拾貳石七斗六合

米九百七拾貳石三斗貳升六合　小物成納メ
小判參百貳分貳朱　金山押堀役

高貳拾壹万九千七百六拾七石參斗九升壹合　山梨八代巨麻三郡高

高壹万八千四百拾八石貳升　都留郡ノ高ナリ、此時八島居土佐守知行所、

享保九辰年、松平甲斐守得替御料所ノ高辻、

合貳拾八万參千拾貳石壹斗七合四勺九才　三郡高

内　五万四千貳百四拾六石貳斗四升貳合九才
八千九百九十八石四斗七升四合四勺　甲府殿並ニ松平甲斐守打量以後、新田出高ナリ、

貳万八百拾七石九斗貳升壹合七勺　都留郡高

内　貳千參百九拾九石九斗壹合七勺
秋元但馬守知行、元祿中地押ニ付增、

當時高辻　村數七百七拾八、

合參拾万六千九百九拾八石壹斗四升五合四勺九才

貳拾八万六千八拾六石四斗七升六合九勺九才　三郡高

貳万九百拾壹石六斗六升八合五勺　都留郡高

〔官中秘策二〕甲斐國　四郡〇中略

一石高貳拾五万三千貳拾三石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

甲斐國御料御三卿領知　一高三拾壹万貳千百五〇本ノ五一拾九石三斗貳升九合兩勺九才

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

甲斐國正稅公廨各廿四万束、國分寺料二万束、大安寺料一万二千束、文殊會料二千束、堤防料二万束、救急料八万〇万原作レ百、據ニ古本一改、束、俘囚料五万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕甲斐國〇註略 管四(中略)正公各二十四萬束、本稻四十九萬八千九百三十八束、雜稻萬八千九百三十八束五把五分、

〇按ズルニ、此書擧グル所ノ雜稻、延喜式ノ記スル所ト合ハズ、今之ヲ他國ニ比スルニ、此書ノ擧グル所、甚ダ少キニ失スルモノヽ如シ、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略 檑子伊豆、甲斐(中略)廿六箇國各四合、〇中略 密蘇諸國所進 蜜甲斐國一升〇中略 紫草二万二百斤甲斐國八百斤〇下略

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀〇中略 甲斐國三千五百石〇中略

年料別貢雜物〇中略 甲斐國筆卅管、零羊角六具、胡桃子一石五斗、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略 甲斐國十壺並小一升 右八箇國爲ニ第一番一丑未年

〔延喜式二十四主計〕甲斐〇中略 右十一國麁絲〇中略

甲斐〇中略 右十國輸レ絁〇中略

甲斐國行程、上廿五日、下十三日、

調、緋帛卅疋、紺帛六十疋、皂帛廿五疋、橡帛十疋、自餘輸レ絁、 庸、輸レ布、 中男作物、紙、熟麻、紅花、芥子、胡桃油、鹿脯、猪脂、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略 宅常擔ニ集諸國土產一、貯甚豐也、所レ謂〇中略 甲斐斑布、

〔庭訓往來〕甲斐駒、長門牛、

〔毛吹草三〕甲斐

甲州判 郡內紬 紙 漆 蠟 小梅 姬胡桃 柳下木綿 菱紬 生澤川鮎 題目石

〔和漢三才圖會六十九甲斐〕甲斐國 土產

紬郡内　紙同　一分判金甲州　漆　蠟　小梅　搗栗　姫胡桃　蒲萄岩崎　駒　經石生澤川　柹

大和柹

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕製造品

一郡内絹　郡内トハ都留郡ノ自稱ナリ、絹綿ノ事、古書ト波多八代宿禰ノ事跡ニ據ル、古跡部ニ詳ニセリ、八代ハ山背ノ義ニテ、富士山ノ北ヲ云、波多ハ絹綿ノ肌膚ナル義ナリ、秦氏ノ事ハ古語拾遺ニ見タリ、富士ノ西北、古昔屬八代郡、其地潤シ、都留郡及駿州富士郡ト同ク、蠶桑ヲ專業トセリ、古歌、するがなるふじのくわこのにひわたは高ねの雪の色ににるらし、雪ヲ絹綿ノ白比シテ賞シタルナリ、延喜式ニ、本州貢帛ノ品多シ、殘篇風土記、八代郡上略命武庫織染之料、都留郡貢生衣麻布武器等ト、所因來久シト謂フベシ、東鑑、建久六年、駿河國富士郡濟物綿千兩、被進京都云々ト見タリ、其頃マデモ富士郡ニ蠶桑多カリシ趣ナレドモ、駿地ニ不宜故ニヤ、後ニハ其事止ミヌ、本州八代山梨二郡ハ、今尚專ラニセリ、特リ郡内ノ名、公然ト世ニ行ルヽコト、寒凄ノ地養蠶ニ宜キ故ナルベシ、且絹ノ品類多内ニ、互善惡アリ、必婦女ノ手慣タルノミニモ非ズ、元來水土ニ因ル者ナリ、

絲　山梨郡三日河ノ水ヲ用ル處、其色佳シテ、需ニモ增直ト云、索纏ニ始ヨリ、繭ヲ浸水烹ル、謂之沈繰、繭沈釜底也、沸湯ニ繭ヲ入レテ烹レバ、繭ハ水上ニ浮ブ、浮繰ト云、是ヲ佳トス、都留郡桂川ノ水、清麗殊ニ宜シ、　絹帛　白縞織物品々、今擧テ記シ難シ、郡内八代山梨三郡、凡テ活業トナス、

紬、　緝絲ト云義ニシテ、繼續ノ意、絹ノ麁ナル物ナリ、南部村ノ栁島、岩崎紬等、古ヨリ州ニ名アリ、

フトリ　答布太布ノ義ニテ、猶以テ麁ナリ、始索纏トキ、緒ヲ揃ルトテ、撮切タル者ヲ、フリト名ク、此等ノ絲クズヲ聚メ績ミテ織ルナリ、アガリ名付ハ、繭ノ撚絲スヂノ立ザル者ナリ、綿ニ造ルベシ

綿　白井郷ヲ佳トス、曾禰ニハ運上永アリ、凡養蠶ノ村ニテ桑ヲ畠畔ニ植ルハ、桑束トテ本高ニ入テ米納ス、

一木綿布　木綿ノ條ニ記セル如ク軍鑑ニ甲州名物トハ見タレドモ、今ハ業トシテ他方ニ鬻グニ足ラズ、爲國用ノミナリ、織布具ニ方言多シ、今略之、布尺一反二丈六尺（二丈七尺ニ裁ス）ヲ法トス、後ニ長尺トテ、二丈八尺三丈ニモ造レリ、奈胡白布云ハ木綿ノ好處ナレバナリ、志麻庄、縞布、岩崎ノ布ナド州ニ名ヲ得タリ、但本州ハ長機ナリ、一機ニ五反六反ヨリ十反マデモ續緯テ織ル、是ヲ他州ニ異ナリトス、

け衣　今不詳（史記夏本紀ニ、織皮注云、今之罽（ケゴロモ）也、又織皮爲地名、蓋是カ、或云殘闕風土記貢物、有生衣、麻布、生衣け衣ト訓ズベキニヤ、）夫木和歌集かひのけ衣、

月かげにかひのけ衣さらすかとみればしらねの雪にぞ有ける

ふりつもるしらねの雪はいなをさのかひのけごろもほすとみえけり、軍鑑ニ、御料人様音物けかけの帯（上中下）三百端ト有リ、異同未考、

一鹽硝　中郡蓬澤村（清七利助）二人、御用鹽硝ヲ製シ、且州中猪鹿オドシ筒ニ用ル鹽硝ヲ售ル、

一紙　八代郡市川大門村ニテ漉出ス、良品シテ且多シ、毎年御用紙被仰付、運上紙取立役人等ノ事ハ、令吏附錄ニ委シ、紙品ハ、肌吉（ハダヨシ）、奉書、（肌吉或ハ肩好ニ作レリ、厚肌吉小肌吉アリ、皆御用品也、）糊入、檀紙（ダンシ）様、小半紙、生漉、半切、五色半切、唐紙様、黒白龜皮紙等ナリ、本村楮皮ヲ用フ、結香（ミツマタ）入タルハ好カラズ、（○中略）

一苧　逸見筋諸村ニテ多ク植麻製之、大八幡村殊ニ名アリ、北山筋山中諸村ニテモ作之、麻布ヲ織リ出ス、凡窪八幡及河内領、西郡ノ内織蘭席處ニテハ、皆麻ヲ植テ糸ニ用フ、逸見河内ニテ製シ、自用ニスル太布ハ藤蔓ノ皮ナリ、

一蓆筵（ムシロ）　所在ニテ作レドモ、河内領田原村ニテ織ルヲ名トス、北山筋ノ志麻、千塚村ヨリモ多出ス、藁ハ積翠寺村ノ產、良田ニシテ長シ、

一甕　北山筋ノ宇津谷村、武川筋ノ下條南割ニテ造ルハ、水甕ニ用フ、府中一蓮寺ノ寺家町ニテ作ル土器種々ナリ、昔時一條ノ大團扇ト云コト、軍鑑ニ見タリ、土鍋（ウロク）ハ龍地村ニテモ造レリ、本州

二ハ陶工ハ無シ、

一索麪　身延町ニテ製スル者、松平甲斐守六月ノ獻上物ナリ、　豆腐皮、椎飴、念珠ハ數品アリテ、梅、櫻、欅、桑柿、枸骨等ノ木ヲ用テ造ル、

一菅笠　北山筋ノ湯村ニテ製スル者亀品ナリ、西郡寺部村ニ毛代ト云處アリ、中郡大津村ニモ笠縫ト云者アレドモ、今ハ造ラズ、

〔日本書紀雄略十四〕十三年九月、木工猪名部眞根、以石爲質、揮斧斲材、終日斲之、不誤傷刃、天皇遊詣其所、而怪問曰、恆不誤中石耶、眞根答曰、竟不誤矣、乃喚集采女、使脱衣裙、而著犢鼻、露所相撲、於是眞根暫停、仰視而斲、不覺手誤傷刃、天皇因嘖讓曰、何處奴、不畏朕、用不貞心、妄輙答、仍付物部、使刑於野、爰有同伴巧者、歎惜眞根、而作歌曰、(歌略)○天皇聞是歌、反生悔惜、喟然頽歎曰、幾失人哉、乃以赦使、乘於甲斐黑駒、馳詣刑所、止而赦之、用解徽纆、復作歌曰、農播拕磨能、柯彼能矩盧古磨、矩羅枳制播、伊能致志儺磨志、柯彼能倶盧古磨、(一本、換伊能致志儺磨志、而云伊志歌孺阿羅麻志)

〔續日本紀文武二〕大寶二年二月己未、歌斐國獻梓弓五百張、以充太宰府、

〔續日本紀元正八〕養老五年正月戊申朔、甲斐國獻白狐、

〔續日本紀聖武十一〕天平三年十二月丙子、甲斐國獻神馬、黑身白髮尾、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年五月己未、以京庫綿一万屯、甲斐、相模兩國綿五千屯、造襖於陸奥國、

〔類聚國史祥瑞百六十五〕延暦十三年五月乙未、甲斐國獻白烏二、

〔朝野群載朝儀五〕所牒

藏人所　國々

應早速交易進上鴨頭草移上紙墨等事(中略)

甲斐國(花一帖○中略)

治暦元年九月一日〇署名略

〔官中秘策〕二甲斐國　四郡〇中略

一人數三拾壹万千百九拾三人　内 拾五万七千八百七拾八人男 拾五万六千三百拾五人女

〔吹塵錄〕五人口及國高 文化元甲子年諸國人數調〇中略

御料私領一人數貳拾九万七千九百三人　高貳拾五万三千貳拾三石餘　甲斐國

内 拾五万貳百七拾貳人男 拾四万七千六百三拾壹人女〇中略

弘化三丙午年諸國人數調〇中略

御料私領一同三拾壹万貳百七拾三人　高三拾壹万貳千百五拾九石餘　甲斐國

内 拾五万六千六百八拾九人男 拾五万三千五百八拾四人女

〔人國記〕甲斐國

甲斐國之風俗ハ、人之氣質尖ニカタクヘ也、意地餘國ヲ五カ國合セタル程不好國ニ而、死スル事ヲ不厭而、傍若無人之事多シ、因玆上ハ下ヲ苦メ、下ハ上ヲ不敬而、下輩ニ少シノ過チアレバ、主則是ヲ罰シ、主ト而下ヘ非道アレバ、大身ハ忠信ヲ專ト而諫ヲナシテ、本意ト云二字ヲ忘却而怨ヲ含ミ、小身下々ハ、則チ憤ヲ發而害ヲ近ク設ケ、都而道理ヲ不辨シテ無道ナレドモ、其勇氣甚巧ニシテ、死ヲ事トセズ而、ケナゲ成事、譬バ於軍陣親眼前ニ討レヌレバ、子是ヲ見テ其死骸ヲ踏越テ共ニ討死ヲトゲ、子亦討レヌレバ、親亦如斯、去バ人之本ハ勇ヲ以テ初トシ、口ヲ以テ後トス、然バ其機ニ當ル人ヲ遣而嚴ニ威ヲ正ク而、其正改ヲ敎ルモノナラバ、自然ト道理ニ歸服スル事モ有ベキカ、其善一ニ其惡十也、此國生澤之鮎、題目石名高シ、

〔裏見寒話〕一又云〇或説此國の氣質不直にして、人と爭て死を忘れ、上は下を不愛、下は上を不敬、道理不辨にして、都て恨を含む、邊鄙は心無道にして、人の妻妾を盜、傍若無人なる事多しといへり、

信虎信玄の如き智勇鳴世なりといへども、父子の親みを失ひ、多欲驕慢にして亡國の萌を致す、然れども天文御入國以來、年季二百に近く、仁政の風化によつて、國俗の姦曲を轉じ殆堯舜の民たらん事、必然たるべきもの歟、此外悉くは書籍の下を以て可ㇾ窺國事」といふ、

又云の一段に答ふ、是信玄信虎へ孝道缺たるより、割り出せし論ならむか、信玄の事は意味有る事と見へたり、氣質不直の說解しがたし、稀に不直の者も有べし、他國より多くなべてといふは非也、上は下を不ㇾ愛、下は上を不ㇾ敬と、是大きに違たる事也、彼國百姓農人の家に、譜代の家來と年季の家來あり、譜代の家來や名付子、□□□烏帽子などいふ、鐵漿付子、是はゑぼし子とはいはねど、かね付子といふ、是等や、手習子等の後々まで、師匠や親分などへ勤る事、中々他國とは格別に見ゆ、他國にて彼國の如くする事を一度も不ㇾ見、〇中略何ぞ不愛不敬といはんや、又道理不辨にして恨をふくむと也、道理不辨の事は人による也、登國風にあづからんや、論ずるに及ばず、在邊は心無道にして、人の妻妾を盜み、傍若無人となり、是も予が覺へしとは表裏也、予が住居し比迄は、餘人の不義沙汰などの斷は、互に斷し合とても、小聲密々と斷す事也、其故に、我身にあづからぬ他人の不義事にても、心中には憎む事強しと見へたり、〇中略甲府の風俗は、柳澤家入國以來、江戶町人等の風俗移りてあしゝと見ゆ在鄕の風俗をよく〳〵考へて國風を評すべし、〇中略予が聞傳へし事は、甲州もの丶生得は、一大事と思ふて秘する事は、親子兄弟妻にも、露ばかりももらさぬ所有りて、心の底にいたりて深き所有といふ、〇下略

〔甲陽名記〕甲斐國は諸國に違、百姓之家作り家根切つまと申て、丸屋根にはあらずして、行間之雙方直に葺也、但し川內領、郡內領、大逸見筋に、諸國に同く丸棟也、通用之金を甲金とて、丸金也、いにしへは甲の字判と申は、壹分判、貳朱判、壹朱判、朱中判と申し、何れも同斷之形りなり、朱中判は冊尺の形なり、松木判と申壹分判、貳朱判、壹朱判と申三色有也、〇中略又升之義も甲州は京升三升入

を壹升と申也、其升を四ツに割、壹盃貳ツをば五合ト申し、三ツヲ七合五勺、四盃ヲ壹升と立申、

〔和漢三才圖會 六十九 甲斐〕甲斐白嶺(シラネ) 又云 甲斐之嶺(ガネ)

後拾遺 何國ともかひの白ねはしらね共雪降毎に思ひ社やれ 式部

黒駒山 自此望富士山、向正南也、至吉田、總名郡內、都留郡內而織出綾絹、呼稱郡內柳條(シマ)、

夢山 名寄 都人覺束なさに夢山をみるかひ有て行歸らん

鹽山 指出磯 古今 鹽の山指出の磯に鳴ちどり君が御代をば八千代とぞなく

山梨岡 續古今 足引の山梨岡に行水の絶ずぞ君を戀渡べき

穗坂牧 堀川百首 相坂のせきぢにけふや秋の田のほさかの駒をむつ〳〵と引 公實

逸見御牧 在巨勢郡、穗坂小笠原等、皆有牧、出駒、 家集 都までなつけて引は小笠原へみのみまきの駒にぞ有ける 貫之

〔甲斐名勝志 一〕甲斐八景 享保年中、柳澤侯依奏聞、勅許、

夢山春曙 中院大納言通躬卿

きのふまでめなれし雪は夢山のゆめとぞ霞む春のあけぼの

龍華秋月 龍華山永慶寺、享保年中、柳澤侯所建立也、在山梨郡若窪村、今廢、 武者小路參議實陰卿

名にしおはゞ峯なる秋の月やしる其曉の花のひかりも

富士晴嵐 入江民部權少輔相尙朝臣

吹おろすあらしを見せて一むらの雲もさはらぬふじのしら雪

惠林晩鐘 外山三位光顯卿

靜かなる夕のかねのこゑきゝて見れば心の池もにごらず

石和流螢 日野中納言輝光卿

石和川夏なき浪のよる〳〵は水のほたるのかげぞながるゝ

金峯暮雪　久世三位通夏卿

日のかげは暮てもしばし色はれぬ雪ぞこがねの峯にかゞやく

酒折夜雨　冷泉中納言爲綱卿

暮ぬまのあらしはたえて酒折にまくらかるよの雨になるやと

白根夕照　中山大納言爲親卿

此夕のこる日かげははれていまむかふしらねの雪ぞくまなき

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　甲斐國五十人〇中略

諸國器仗〇中略　甲斐國甲一領、横刀三口、弓六十張、征箭卅具、胡䩭卅具、

相模國

相模國ハ、サガミノクニト云フ、東海道ニ在リ、東北ハ武藏、西ハ甲斐、駿河、南ハ伊豆及ビ海ニ至ル、東西凡ソ十四里、南北凡ソ十一里、其地勢ハ、相模川國ノ中央ヲ貫流シテ、自ラ東西ニ兩分シ、東部ハ概ネ平坦ニシテ、其南方ニ於テ、僅ニ丘陵ノ起伏スルヲ見ルノミ、西部ハ山嶽重畳シ、殆ンド平坦ノ地ナシ、而シテ三浦半島ハ東南ニ突出シテ、實ニ東京灣ノ右翼ヲ爲ス、此國ハ古ヘ國府ヲ大住郡ニ置キ、足上、足下、餘綾、大住、愛甲、高座、鎌倉、御浦ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世國ノ西北隅ノ一部ヲ分チテ津久井縣ト稱シ、恰モ郡ノ如クセシガ、明治維新ノ後、餘綾、大住ノ二郡ヲ合シテ中郡ト號シ、津久井縣ヲ廢シテ津久井郡ト稱シ、新ニ横須賀市ヲ設ケテ、一市八郡ト爲シ、神奈川縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕相模佐加三

〔饅頭屋本節用集 左天地〕相模相州

〔地名字音轉用例〕ウノ韻ヲカノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

さがむ 相模國 佐加三 相ハサウノ音ナルヲ、韻ノウヲ、轉ジテサガニ用ヒタリ、此國名ヘ、モトサガムナリシヲ、和名抄ニ佐加三ト注シタルハ、後ノ唱ナリ、古事記相武ト書キ、歌ニモ佐賀牟トアリ、摸字モモノ音ナレバ、ムニ近クシテ、ミニハ遠シ、

〔倭訓栞 前編十一佐〕さがみ 相模は、さがはさうの轉、みはもの轉也、相樂をさがらとよむも同じ、もと坂見の義にて、足柄筥根より見下す國なる故也といへり、又牟佐上のむを略したる也、むさしにむかへていふともいへり、

〔古事記傳 二十七〕相武國、武字、諸本に模も作り、書紀釋、又神名秘書などに引るも同じ、今は眞福寺本延佳本に依れり、記中には、武字は假字に用ひたる例は無けれども、凡て國名地名には、常の假字には用ひざる字を書たる例多し、吉備の吉字、高志の高字、伊賦夜坂、波邇賦坂など〳〵の賦字、伊服岐山の服字、當藝野、當岐麻などの當字などの如し、これらも記中には、常にはをさ〳〵用ひざる假字なり、此の武字も右の類なり、さて又記中國名の字、凡て尋常に異なる多し、山代、无邪志、三野、科野、高志、多遲麻、稲羽、針間、阿岐などの如し、是上代より書來し字と見えたり、されば、こゝも其類にて、本は相武とありけむを、今の本多く相模と作るは、後人のさかしらに書易たるなるべし、かゝる例もこれかれ見えたり、美濃は三野とのみ書るに、上卷に一所美濃とかき、近淡海とのみ書る例にて、遠江も遠淡海とこそあるべきに、遠江と書るなども、皆後のしわざと見ゆ、元正紀に、酒部連相武と云人名も見えたり、是此國名を、古は如此書たりし一の證なり、國造本紀にも此字を書たり、さて和名抄に、相模佐加三とあれども、元は佐賀牟なり、下なる歌にも然あり、模字を書るもムの假字なり、此字ミの假字には遠し、大隅國の郡名の馭謨も五牟とあり、謨模同音の字なり、東遊の一歌に、左加安无乃於禰とあるは、相模の峯と云ことなるべし、萬葉十四に、相模禰乃乎美禰とある相模などをも、サガムと訓べきなり、佐賀美と云は、後に轉れる唱なるべし、上總國の郡名、夷灊も和名抄には伊志美とあれども、此記には伊自牟とあり、國名義の事は下なる歌の處に云べし、

〔諸國名義考 上〕相模

和名抄に相模佐加三、國府在大住郡、名義は、或書に神倭磐余彥天皇、欲平東夷之時云々、自大山之中津峯遁

叙覽之、而動嗟峨身哉、此軍之諸人、依之有嗟峨見之名云々、足輕明神昔狩人也、或時離寵妻有悲傷、故常見亡妻之鏡、思之相模、如見其亡妻、故曰相模といへるは、いと〱みだりなり、わきて鏡の說は字義になづみたる、いみじき妄說なり、皇國のいにしへ、晉もていへる事なし、縣居大人は身狹の國なり、西國北國にては前後もて國を分け、東國にては上下もて分る例あれば、こは身狹上の略なりと云れつれど、穩ならず、上下と分つにも又例ある物をや、國名には、上某下某といふはあれど、某上某下といふはなし、されど郡名にはあれどそは異なり、古事記日代宮の段の弟橘比賣命の歌に、佐泥佐斯、佐賀牟能袁怒邇云々とあり、

〔類聚名物考地理〕相模　さがみ

思ふに、相模國は足柄の二郡みな山にして、その外も多くは山のみにして、海にそへる所、わづかに平地なれば、嶮上の意にていふ成べし、土佐の國も、とき坂の略語と見ゆれば、此も同じ意成べし、

〔古事記中景行〕爾其后、名弟橘比賣命白之、妾易御子而入海中、○中略爾其后歌曰、佐泥佐斯、佐賀牟能袁怒邇、毛由流肥能、本那迦邇多知氐、斗比斯岐美波母、

〔古事記傳二十七〕佐泥佐斯は、相模の枕詞とは聞ゆれども、いかなることとも未考へ得ず、されど誠に強ていはゞ、佐斯は國名にて、佐泥は眞と云と同く、美たる言ならむか、部眞字を佐泥とらよみ、さねかづらなども、眞かづらと云意の名と聞ゆ、其をさなかづらとも云は、稲を伊那、金を加那と云格なり、又万葉十四に、萱を佐國知夜ともよめり、されば佐斯てふ國をほめて、佐泥佐斯とは云ならむ、さて佐斯を國名と云は、駿河、相模、武藏の地を總て本は佐斯國とぞ云けむを、二に分て、相模武藏とはなれるならむ、駿河は後に又相模より分れたること上に云るが如し、かくて其相模と云名は、佐斯上の斯を省き、武藏は、身佐斯の意なるべし、(中略)さて佐泥佐斯佐賀牟とつゞけ云は、御吉野の吉野、佐檜前檜前など云例の如し、延佳云、佐下斯上脱泥字乎、下卷經皇子歌、佐泥斯佐泥氏樓、万葉集、左宿左猴氏許昔と云るはわろし、此はされ〱しと云ては末如にかなはず、又契沖云、相模の枕詞なり、弁詳、今按に、書紀幷に此記に武藏を胸刺と書たれば、牟泥佐斯を略て、牟佐斯とは云なれば、今は、狹胸刺の牟を略て云るにや、武藏相模は、もと一にてあるべければ、かくはつゞけたるにや、相模國は武藏より分ければ、狹胸刺と云かと云れど、此記には、武藏は牟邪志とこそ書たれ、胸刺とは書たることなし、舊事記にも、牟邪志と胸刺

位置

なりとは別に擧たりいかゞ、又師(賀茂眞淵)云、佐は發語、泥は奴に通ひ、奴と牟とは又通へば、牟佐斯なり、古武藏と相模と、一國にて分れぬ時には、かくもよむべしと云れたるもいかゞ、牟佐斯を泥佐斯とはいかでか云べき、又或人相模國は小き峯の多き國なるに因て、小峯(サネ)刺(サシ)の意なり、刺は立なりと云るもいかゞ、又己も前に思へるは、佐は例の眞の意、泥は峯にて、富士山を眞峯とほめ云、佐斯は立ならむ、駿河も舊相模なれば、富士山を以て、枕詞とせるなるべしと思ひしもわろし、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

相模小田原本町極高三十五度一十五分、經度東三度二十四分、從東都東海道二十二里一十五町一十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

相模　大磯　三五度一八分〇〇秒　小田原　三五度一五分〇〇秒

　　箱根　三五度一二分三〇秒略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中　相模　小田原　東三度二三分五三秒

疆域

〔新編相模國風土記稿一〕圖說

本州ノ地ハ、山野及ビ海ニ屬ス、水土考ニ、北極出地三十五度ト見ユ、東北ハ武州ニ接シ、西北ノ際、三國嶺ニ躋キ、甲州ニ隣リ、南方ハ海ニ面シ、西南ハ足柄箱根ヲ擧テ、駿豆二州ニ界ス、南北凡九里餘、東西凡十六里餘、西北ノ方、疊嶂複嶺ニシテ、人跡ノ通ゼザル所、凡方七八里、

〔日本地誌提要十七相模〕疆域　東ハ武藏、西ハ甲斐、駿河、南ハ伊豆、及海、北ハ武藏ニ至ル、東西凡壹拾四里、南北凡壹拾壹里、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕相模國三浦郡　遠測　中島　城ケ島　天神島

鎌倉郡　實測　江島　周廻一十七町五十三間

足柄下郡　遠測　大根山西村　淨根　コウシロ根　大根根府川村　辨天島岩村　鈴島眞鶴

村　笠島　大根(眞鶴村)　鵜根　辨天島(吉濱村)

〔易林本節用集下〕相模(相州)上、管八郡、四方三日、地厚一丈、生產肥、山淺而無材木、只海藻與魚鼈多、中下國也、

地勢

〔新編相模國風土記稿一〕圖說

本州ノ地ハ、山野及ビ海ニ屬ス、(中略)地形、東ハ低ク、西ニ至テハ、漸々ニ高シ、故ニ多ク東方ニ村落ヲナセリ、西方ノ山村ニ至テハ、專採薪ヲ業トシテ、農業ニ疎シ、モトヨリ國ノ中央ヨリ西ニ至テハ、山野ニシテ水田ヲ開ク所少ナシ、(中略)本州海陸ノ便利ヨク、殊ニ海路便宜ノ地ニシテ、諸產ノ品物ニ富ミ、諸國ノ士民輻湊スルガ故、自然郡下ノ習俗ニ移レリ、

道路

〔日本實測錄(街道二)〕從東京東海道至西京(中略)

相模國鎌倉郡戶塚　二里二町一十四間　高座郡藤澤宿、三十五度二十一分半、　二十八町二十八間　辻堂村四ッ谷　二里一十八町一十二間半(至茅ヶ崎村南湖一里一十九丁二間、從南湖至馬入川岸二十四丁五十三間、)　大住郡平塚新宿　九町三十三間半　平塚宿、三十五度二十分、　三十町七間半　淘綾(ユルギ)郡大磯宿、三十五度一十八分半、　四里一十町四十間(至山西村梅澤一里二十八町五十一間、從梅澤至小田原高梨町、二里一十四町三十七間、)　足柄下郡小田原本町、三十五度一十五分、　一里一十二町三十三間　湯本町　二里二十二町二十間　元箱根八町坂　一十八町四十二間(至關所一十四丁四十八間)　箱根宿、三十五度一十一分半、　三里一十九町五間(至國界一十三丁五十八間半)　伊豆國君澤郡三島宿傳馬町(中略)

從東京歷大山及御殿場至大月(中略)

相模國高座郡下鶴間村　二里三十四町三十三間　愛甲郡厚木町相模川岸(歷依智至宮原村二里一十九丁五十間、從宮原至播本村一里三十三丁二十七間半、)　五町五間　厚木町、三十五度二十六分半、　二十九町　大住郡酒井村　二里四町四十八間　上糟屋村石倉　五町二十一間　上糟屋村子易　一十九町一十三間半

大山新町、三十五度二十五分、　五町三十三間　同別所町〈至石尊大瀧三丁二十三間〉　四里三十四町四十三間〈至前不動一十三丁三十六間、從前不動至不動堂九丁四十四間半、〉　足柄上郡神山村淸水　一里二十町五十六間　和田河原村〈至塚原村二十一丁四十二間、從塚原至小田原高梨町一里三十二丁一十九間、〉　九町　關本村追分〈歷道了權現華表前至最乘寺三十四丁五十五間半、從華表前至道了權現社三丁六間、〉　一町三十六間　關本村、三十五度二十分、　一里四町二十四間　矢倉澤村、三十五度二十分、　二里一十九町三十六間〈至矢倉澤關所前一十一丁十八間、從關所前至國界一里一十一丁五十間、〉　駿河國駿東郡竹之下村

〔日本實測錄〈三街道〉〕從東京、歷甲府、至下諏訪、〇中略

相模國津久井縣與瀨村小原宿　二十町五十六間半　同與瀨宿　二十九町五十八間　吉野宿　二十八町二十四間　小淵村關野宿　三十三町三十六間〈至國界八丁四十八間〉　甲斐國都留郡上野原村

〔日本實測錄〈沿海一〉〕從東京、沿海至大坂、〇中略

相模國三浦郡橫須賀村、三十五度一十七分、　一里三十五町六間　走水村、三十五度一十六分、　二里一十二町三十六間〈至走水觀音堂二十町一十二間〉　西浦賀　七里三十四町二間半〈至上宮田村三里一十町三間半〉　三崎　八里二十三町四十八間〈至網代村一里九町一十一間〉　鎌倉郡材木座村〈至光明寺二町一十一間〉　一十四町四十五間　同由井ヶ濱〈至鶴ヶ岡八幡社一十五町一十六間〉　一里一十二町四十三間〈至稻村崎一十三町四十一間〉　片瀨村〈至江之島四町一十七間〉　三里三十五町五十六間半〈至茅ヶ崎村二里一間〉　淘綾郡大磯宿　四里五十一間〈至梅澤一里三十二町二十三間〉　足柄下郡小田原　一里二十九町二間　根府川村、三十五度一十二分半、　一里三十一町二間　眞鶴村、三十五度九分半、〈眞鶴崎徑測四町二十五間〉　一里三十四町六間〈至眞鶴崎二十四町六間〉　吉濱村、三十五度九分半、　九町四十五間　門川村〈至宮上村湯ヶ原一里二町三十五間〉　一二十九町二十四間〈至國界一町一十五間〉　伊豆國賀茂郡伊豆山走湯

〔延喜式〈二十八兵部〉〕諸國驛傳馬〇中略

相模國驛馬(坂本廿二疋、小總、箕輪、濱田、各十二疋、)傳馬(足上、餘綾、高座郡、各五疋、)

〔新編相模國風土記稿(四十八大住郡)〕平。塚。宿(比良都可志久) 東海道宿驛ノ一ニシテ、江戶日本橋ヨリ十五里半、

〔新編相模國風土記稿(六十高座郡)〕藤。澤。宿(布知佐波志久) 郡ノ艮方ニテ鎌倉郡ニ跨レリ、當郡大久保町、坂戶町、及鎌倉郡大鋸町ヲ合テ一宿トシ、藤澤宿ト唱フ、此宿東海道五十三驛ノ內、江戶ヨリ第五ノ驛郵ニテ、行程十二里ヲ隔ツ、

〔新編相模國風土記稿(九十九鎌倉郡)〕戶。塚。宿(止津加之由久) 江戶ヨリ行程十里、小坂鄉ニ屬ス、當所及ビ隣村、吉田、矢部兩町ヲ加ヘ、戶塚三ケ町ト唱ヘ、東海道五十三驛ノ一ナリ、古ハ富塚ト書ス、今ノ文字ハ正保ノ改ニ草創ス、中古ハ町ト稱セリ、○註略 專宿ト書記スル事ハ、元祿已後ノ事ナリ、

〔新編相模國風土記稿(四十一淘綾郡)〕二ノ宮庄

大。磯。宿(於保伊曾志久) 江戶ヨリ行程十六里、當所ハ東海道五十三驛ノ一ナリ、延喜兵部式、當國傳馬ノ數ヲ記セシ條ニ、本郡五匹ト見エタルモノ、他ニ斥ス所ナク、全當所ニ的シテ、古ヨリ驛路タル事識ルベシ、

〔新編相模國風土記稿(二十四足柄下郡)〕早川庄

小。田。原。宿(乎陀波良志久)上 郡ノ南方海岸ニ傍テ平衍ノ地ナリ、東海道五十三驛ノ一、江戶日本橋ヨリ行程二十里十町三十八間、小淘綾里ト唱フ、(東山王原村、西板橋村、南海、北城內、)當宿ノ地形、小田原城ノ東南ヲ擁セリ、城下町都テ十九町ノ內、東海道ノ大路ニ値レル所ヲ通町ト稱ス、其長東西二十町五十六間、(道幅五間)其町々ハ新宿、萬、高梨、宮ノ前、本、中宿、欄干橋、筋違橋、山角ノ九町ナリ、其餘十町ハ、東海道ノ南裏、及甲州道ノ通衢ニ連レリ、

〔新編相模國風土記稿(二十七足柄下郡)〕早川庄

箱。根。宿(波古禰志由久) 足柄鄉ニ屬ス、江戶ヨリ行程二十四里、東海道五十三驛ノ一ナリ、(正保及元祿ノ國圖、并ニ箱根

記(町ト)ス、相傳フ此地宿驛越置レシハ、元和以後ノ事ナリ、關西ノ諸侯朝覲往還ノ時、箱根山ノ嶮峻ニシテ、且郵驛路遠ク、易ヲカラザルヲ以テ、元和四年、松平右衞門大夫正綱仰ヲ奉リ、山野ヲ闢キ、三島(豆州)ノ小田原兩驛ノ民ヲ遷サレ、此地ニ新驛ヲ置ル、是ヲ以テ今宿內ニ三島町、小田原町ノ二名アリ、

〔續日本紀　三十一光仁〕寶龜二年十月己卯、太政官奏、武藏國、雖ㇾ屬山道、兼承海道、〇中略今東海道者、從相模國夷參(イサマ)驛、達下總國、其間四驛、往還便近、〇下略

〔吾妻鏡　四〕元曆二年〇文治元年五月十五日丁酉、廷尉使者景光參著相具前內府父子、令ㇾ參ㇾ內云、去七日出京、今夜欲ㇾ著酒勾驛、明日可ㇾ入鎌倉之由申ㇾ之、北條殿爲御使、令ㇾ向酒勾宿給、

〔吾妻鏡　四十一〕建長二年十二月十三日甲辰、今日相州室被ㇾ著姙帶、鶴岡當別法印隆辨加ㇾ持之、法印去九月以後住持之處、依此請、態所ㇾ被ㇾ遣之飛脚、相逢于萱津驛之間、競寸陰、今夕走著云云、

〔廻國雜記〕大磯の宿といへる所は、いにしへとらといひける、好色のすみける所となんある、同行にたはぶれに申きかせける、

今は又とらふすのべとあれにけり人は昔のおほいその里

〔日本國郡沿革考　二東海道〕相模　古作相武(古事記、國造記)、上國、管九郡、(延喜式八郡)六百七十一村、

三浦(七十八村、延喜式等作御浦)　鎌倉(八十九村)　高坐(百十八村、天武紀作高倉)　足柄上(九十四村、古足柄郡、折爲上下、未詳在何時、延喜式作足上)　足柄下(八十三村、延喜式作足下)　陶綾(十九村、延喜式等作餘綾、萬葉集余呂伎能波麻、此地、國造記所謂師長國造、即餘綾郡磯長郷)　大住(百十八村、古府治)　愛甲(四十五村)　津久井縣(延喜式等不ㇾ載、置未ㇾ詳何時)

〔新編相模國風土記稿　二建置沿革〕抑當國ノ號、正史ニ見エシハ、古事記、日本紀、共ニ景行帝ノ條ニ出ルモノ、是ヲ始ト云フベシ、〇中略國造本紀ニ據レバ、此朝、意富鷲意彌命ヲモテ師長國造トセラル(日、師長國造、志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖、建許呂命兒、意富鷲意彌命、定賜國造、)師長ハ即倭名鈔當國餘綾郡ノ郷名ニ、磯長トアル是ナ

リ、今是ニ據テ、上古ハ全ク相模、師長二國タリシトモ云フベキナレド、猥ニハ、然定難キナリ、サレド北方山間嶮岨ノ地ハ、左加牟ト唱ヘ、南方磯邊ノ地ハ、磯長ト稱シ、自然區別セシ事ハ、識ルベカラズ、中略○斯テ頼朝平家追討有テ、鎌倉ニ府ヲ開キ、建久三年、征夷將軍トナルニ及ビ、海内ノ諸士靡キ從ヒ來タリテ、府下ニ仕フル者、各便宜ニ就テ、邸宅ヲ經營ス、就中府下ニ屬スル所ハ、更ニ山林ヲ闢テ、昵近ノ諸士居宅ヲ構ヘ、市鄽周匝シテ、頗繁榮ノ地トナリ、國地ノ風俗、茲ニ一變セリ、元弘已來、又戰爭ノ地トナリシカバ、漸古制廢棄シテ定規ヲ失フ、茲ニ至テ郡鄕邑里モ紛紜シ、疆域稱呼モ定カナラザリシ事識ルベシ、故ニ此際ノ事狀、今ヨリ測リ得ベキニ有ザレバ、措テ辨ゼズ、又此際郡界變遷シ、餘綾郡ノ地大住郡ニ入ルモノアリ、或ハ大住郡ヨリ高座郡ニ隸入シ、鎌倉郡ヨリ三浦郡ニ分隸スルモノアリ、其年紀古傳ナケレバ詳ナラズ、事ハ各郡ノ條ニ辨ズ、此他村里ニ至テモ、或ハ荒蕪シ、或ハ新開ノ地アリ、是等ハ村里郡ニ干係スレバ、茲ニ贅セズ、足利管領九代ノ際、又治亂定マラズシテ、地理ノ事記載スベキナシ、明應ニ至リ、北條新九郎長氏、伊豆國ニ起リ、尋テ當國ニ移リシ後稍治平シテ九十餘年、本州全ク北條氏ノ有トナル、當時各郡ノ唱ヲ廢シ、三浦郡ノ外ハ、闔稱シテ東郡鎌倉高座二郡西郡足柄上下二郡中郡愛甲、大住、淘綾三郡、ト呼ビ、今ノ津久井縣ノ地ハ、元來愛甲、高座二郡ノ所屬タレドモ、自然區別ヲナシ、當時分テ奧三保ト唱ヘ、或ハ津久井領ト呼ベリ、天正十八年、豐臣太閤ノ爲ニ、北條氏滅亡シ、東國總テ御分國トナリシ後ハ、各郡舊稱ニ復セリ、但シ足上足下ヲ足柄上、足柄下、餘綾ヲ淘綾ト書改シモ、此頃ヨリノ事カ、今詳ニシ難シ、按ズルニ、治承ノ書、頼朝鎌府ヲ開キシヨリ後、郡名ヲ唱フル事稀ニシテ、多クハ郷庄ノ唱ヲモテ呼ベリ、サルガ故、郡名ハ全ク廢セシ知シ、サレバ其文字モ唱モ、當時定カナラザリシ事識ルベシ、此他多加久良ヲ多加左、阿由加波ヲ安以加不、與呂岐ヲ由留岐ト唱ル事モ、其權輿詳ナラズ、各郡ノ總說、併テ見テ考フベシ、其後正保中ノ改定ニ、彼津久井領別區ノ地、全ク分チテ津久井郡トス、卽高座郡ノ所屬十村、上下川尻、中澤、三井、千木良、與瀨、吉野、澤井、小淵、佐野川等ナリ、愛甲郡ノ所屬十九村ナリ、葉山島、小倉、根古屋、大井、荒川、中野、又野、三ケ木、青山、關、鳥屋、寸澤嵐、若柳、青野原、日連、名倉、牧野、青根、長竹等ナリ、サレド正シク定ラレタルニハ有ザリケン、夫ヨリ已後ノ御朱印ニ猶所屬ノ郡名ヲ係テ記

サレタリ、斯元祿四年ニ至リ、山川金右衛門奉ハリ、更ニ分割シテ津久井縣ト稱ス、今ニ至テ然リ、（尚委シクハ、高座愛甲二郡、津久井縣ノ總說、併セ見テ識ルベシ、）又豆相ノ國界、正保ノ改定ニハ、足柄下郡西方、峯通リヲ國界トス、然ルニ元祿十一年爭論アリシカバ、同十三年糺決アリテ峯通ヨリ此方、門川ノ中流ヲ限テ、國界ト定ヲル、（事ハ足柄下郡土肥宮上村條、併セ見テ識ルベシ、）又駿相ノ國界モ、玆年改定アリ、舊ハ足柄上郡西方、足柄峠峯通リ、國界タリシガ、此時峯ヨリ此方十町餘ヲ下リテ、二州ノ界トス、今ニ至テ然リ、

〔日本地誌提要十七相模〕沿革　古ヘ國府ヲ大住郡ニ置（府址未詳、今淘綾郡ニ國府本郷村アリ、）源頼朝ノ興ル、府ヲ鎌倉ニ開キ、總追捕使トナリ、兵馬ノ權ヲ握リ、本州、及伊豆、駿河、武藏、上總、下總、信濃、越後、豐後九國ヲ以テ、其管國トス、文治中、後白河法皇特旨ヲ以テ、本州ヲ頼朝ニ賜ヒ世襲セシム、建久三年、征夷大將軍ニ拜ス、頼朝ノ後二世ニシテ嗣絕エ、其臣北條氏、世執權トナリ、州守ニ任ジ、將軍ヲ廢立スル者六世、（藤原頼經父子、及親王四世、）元弘三年、後醍醐天皇北條高時ヲ誅シ、建武元年成良親王ヲ東國管領ニ任ジ、足利直義ヲ執權トシ、鎌倉ニ鎭ス、明年、足利尊氏東下、遂ニ反シテ自ラ將軍ト稱シ、府ヲ鎌倉ニ定メ、京師ヲ犯ス、子義詮ヲ留守トシテ八州ヲ控制セシム、正平ノ初、其弟基氏、代テ關東管領トナリ、鎌倉ニ居リ本州ヲ領ス、永享ノ末、基氏曾孫持氏ニ至リ、其執事上杉憲實ト隙ヲ生ジ、遂ニ將軍義敎ニ滅サレ、山内ノ上杉淸方、管領ノ事ヲ行ヒ、州事ヲ知ル、文安中、持氏ノ子成氏再管領トナリ、舊怨ヲ修テ憲實ノ子憲忠ヲ誅ス、其弟房顯自ラ管領ト稱シ、兵ヲ擧ゲテ之ト抗ス、成氏連戰克タズシテ、下總古河ニ奔リ、山内氏遂ニ本州ヲ掠取ス、長享ノ初、扇谷ノ定正、山内ノ顯定ト相攻メ、遂ニ其地ヲ取ル、（山内ノ上杉ハ憲顯ヨリ出、顯定ハ其八世ノ孫ナリ、扇谷ノ上杉ハ憲顯ノ伯父重顯ヨリ出デ、三世相模ノ大場城ニ居リ、後武藏川越ニ移ル、定正ハ重顯七世ノ孫ナリ、）既ニシテ北條長氏伊豆ニ興テ、小田原（大森藤頼）新井（三浦義同）諸城ヲ陷レ、上杉氏ヲ逐ヒ、終ニ全州ヲ併呑シ、治ヲ小田原ニ定ム、相傳ル五世、天正十八年、豐臣氏東征、北條氏亡ビ、德川氏關東ニ遷リ、大久保忠隣（チカ）ヲ小田原ニ移封ス、後稻葉氏之ニ代リ、貞享中、再大久保忠朝

國府

ニ賜ヒ、其支封ヲ荻野山中トス、(大久保忠朝ノ第二子敎寬)又奉行ヲ浦賀ニ置キ、船舶ノ出入ヲ監ス、王政革新、改テ縣トナス、既ニシテ廢シテ足柄縣ヲ置、

〔先代舊事本紀〕(十國造)相武國造
志賀高穴穗(成務)朝、武刺國造祖、神伊勢都彥命三世孫弟武彥命、定賜國造、
師長國造
志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖、建許呂命兒意富鷲意彌命、定賜國造、

〔續日本紀〕(八元正)養老三年七月庚子、始置按察使、(令略)○中武藏國守正四位下多治比直人縣守管相模、上野、下野三國、

〔倭名類聚抄〕(五國郡)相模國(國府在大住郡、行程上二十五日、下十三日、)

〔拾芥抄〕(中末本朝國郡)相模(遠上)八郡(略)○中大住(府)

〔伊呂波字類抄〕(左國郡)相模國(略)○中餘綾(府)

〔新編相模國風土記稿〕(二建置沿革)往古、國造、伴造等ヲ置レシ地ハ詳ナラズ、今淘綾郡ニ國府本郷、同新宿ノ二アリテ、新宿ノ地ニ、本州ノ總社ト稱スル、六所明神社勸請アルニ據レバ、(社傳ニ、崇神帝朝、勸請スト)アレバ、最舊社タル事識ルベシ、此二村ノ地、府廳ノ遺蹤タル論ナケレド、(淘綾郡總說、並ニ國府本郷村條、併セ見ルベシ、)上古相模、磯長ノ區別アリシトスル時ハ、今ノ淘綾郡ノ地ハ、所謂國造本紀ニ見エシ師長國造所在ノ遺蹤ニシテ、相模國造所在ノ地トハ云ヒ難キ歟、然レドモ當時區別ノ疆界ヲ詳ニセザレバ、如何ニトモ辨ジ難シ、是等最上古ノ事ニシテ、後世ニ於テ容易ク推考スベキニアラズ、(略)○中當國國司ノ府、及ビ各郡、郡家所在ノ地、フツニ其傳ヲ失フ、倭名鈔ニハ國府大住郡ニアリト見エタレド、今彼郡中、其遺蹤ト思シキ地、考フル所ナシ、前條ニ辨ゼシ如ク、淘綾郡、國府本郷、同新宿ノ地、府廳ノ遺蹤タルハ論ナケレド、是ハ上古已來國造ノ府跡ニシテ、司ノ遺蹤ニハ有ザルニヤ、又高座郡ニ國分村ア

郡

リテ、今尚國分寺舊刹遺レリ、彼寺多クハ國府ニ建ラル、是ニ據レバ、天平ノ昔ハ、國府高座郡ニ在シトモ云フベシ、トカクハ往古此彼府ヲ移サレシナレド其遺名ダニ、後世ニ傳ヘザルナラン、今ニ於テハ、正シク辨別シ難シ、斯テ治承已來、頼朝鎌倉ニ在住シ、國守ハ執權ノ兼任トナルニ及テ、別ニ司ノ府廳アルベカラズ、又國中ノ邑里、過半昵近ノ諸士等ガ私有トナリ、且當時諸國ニ國衙ヲ建テ守護使ヲ置キ、庄園ニ地頭職ヲ定ムルニ及テ、司ノ府廳ハ更ナリ郡家モ必茲ニ廢セシナルベシ、サテ本州ハ將軍府下ノ地ナレバ、他ト異ニシテ、別ニ國衙ヲ建テ、守護使ヲ置ル丶事ハ有ザリケン、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十月二十三日壬寅、著于相模國府、給始被行勳功賞、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕相模國 ○註略 管八、○註略 足柄上 足辛乃加美 足柄下 准上 餘綾 與呂岐 大住 於保須美、國府 愛甲 阿由加波 高座 太加久良 鎌倉 加末久良 御浦 美宇良

〔延喜式 二十二 民部〕相模國上 管 足上 足下 高座 鎌倉 餘綾 御浦 ○中略 大住 愛甲 右爲遠國

〔皇國郡名志〕相模國 舊八郡 今九郡

足柄上(アシカラノカミ) ●酒匂川 △道了權現 ●關本 ●矢倉澤 廿 駿甲界ヨリ ●足柄 海ニ貫

足柄下 小田原 ●根府川 廿 湯本 ●箱根 廿 豆駿ノ界 ●土肥山 ニ一圓

餘綾(ヨロキ) 川原 ●大磯 香津 一ノ宮 海邊ニ付 小郡

大住(オホスミ) 馬入 御馬 △駿河町 大山 ●平塚 〔厚木 國中ヨリ ●伊セ原 海ニ出 ●坪内 萩原

愛甲(アイコウ) ●エチ 金田 ●三増 ●筑井 ●久保澤 武界 ハン原 ス丶カヤ 萩ハラ

高倉(タカクラ) シナノ坂 早川 國分 ●戸塚 ●藤澤 武界ヨリ海ニ貫 小和田 茅サキ

鎌倉(カマクラ) △雪ノ下 △鶴ヶ岡 △江ノ島 武界ヨリ南海ニ貫、街道ヨリ東南方也、

御浦(ミウラ) 和田 野島 衣笠 浦河 長屋 林 南海出崎一國ニ三浦郡

津久(ツク)　●關野　鼠坂　●吉埜　●小原　青原　武界　北ノ方ノ郡

今加津久郡

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕相模

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄕帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
安忍我頁古　阿之我利記	足上(アシノカミ)	同(足辛乃加美 元和抄)	同	足柄上(郡名元)	同(アシカラカミ)	同	同	同(アシガラノカミ)	同
安思我里古	足下(アシノ)	同(足辛乃之毛)	同	足柄下(郡名元)	同(アシカラシモ)	同	同	同(アシガラノシモ)	同
余呂伎古	餘綾(ヨロキ)	同(與呂岐)	同	餘綾知　淘綾國元	淘綾(ユルキ)	同	同	同(ユルギ)	同
大墨	大住(オホスミ)	同(於保須美)	同	同(知國元)	同(オホスミ)	同	同	同(オホスミ)	同
	愛甲(アユカ)	同(阿由加波)	同	同(知國元)	同(アイカフ)	同	同	同(アイカフ)	同
				津久井縣(國元)	同(ツクイガタケン)	同	同	津久井(ツクヰ)明治三年郡トス	同

高倉記			
高座タカクラ	鎌倉カマクラ	御浦ミウラ	管八
同太加久良	同加末久良	同	同
同	同	同	八郡
同闕元知	同闕元知	御浦知 三浦闕元	
同カウザ	同カマクラ	三浦ミウラ	九郡
同	同	同	同
高坐	同	同	同
高坐カウザ タカクラ	同カマクラ	同ミウラ	同
高坐	同	同	同

足上郡

〔伊呂波字類抄左國郡〕相模國管八○中略　足上アシノカミ

〔郡名考〕相模　足上アシカミ　足柄上アシカラカミ

〔新編相模國風土記稿十二足柄上郡〕圖說

本郡ハ、國ノ西邊ニ在ヲ以テ、北條氏割據ノ頃、國中ヲ東西中三分ニ闔稱セシ時、足柄上下ノ二郡ハ、西郡ト唱ヘシコト、北條役帳、及當時ノ古文書等ニ往々見エタリ、郡ノ東邊中村鄕ノ地倭名鈔ニハ、淘綾ノ鄕名トナス、サレド是ハ郡界遷替アリテ、後足柄上下二郡ニ分隸セシナルベケレド、今古圖ノ傳フルモノナケレバ、古ノ沿革知ルニヨシナシ、○中略

足柄上郡ハ、國ノ西邊駿甲二州ノ界ニアリ、○中略本郡ハ、都テ山嶽多キ地ナレバ、酒匂川ノ兩邊平夷ノ地ニ、多ク村落ヲナセリ、闔郡ノ形狀、宛モ瓢ノ如ク、東ヲ首トシ西ヲ尾トス、其四至、東ハ大住郡ニ接シ、南ハ足柄下郡ニ隣リ、西ハ駿甲二州ヲ境ト[illegible]、北ハ愛甲郡及津久井縣ニ邊セリ、地形東ヨリ西ヘ漸々高ク、最西ハ猪ノ鼻矢倉ノ二高嶽ニ至レリ、サレバ陸田多ク畠段別二千百十二町一段七畝三歩一厘

處をいへり、もと山邊郡大和(オホヤマト)と式に出たる名にして、後國號となりし成べし、此郷に國魂の神もましませる也、げにも大和國形、吉野一郡三分の一に居て、山のみ國に充てり、神武天皇東征ましましてより、代々めでたき皇都なりしかば、大八洲の内に豐秋津洲も大日本と標し、後は六十餘州を併ての總號とはなれる成べし、邪山臺、野馬臺など書るは西土の私也、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

大和奈良町(櫟井)　極高三十四度、四十一分、經度東五分、從東都(東海道、自伊賀越)一百三十三里二十七町四十間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

大和　法隆寺村　三四度三七分〇〇秒　小泉　三四度三八分〇〇秒

郡山　三四度三九分〇〇秒　南都　三四度四一分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒　大和　郡山　東〇度〇二分三五秒

疆域

〔大和志一〕疆域　東至勢伊二州界、西至河州界、南至紀州界、北至山州界、東西十四里有半、南北三十里有奇、

〔日本地誌提要四大和〕疆域　東ハ伊賀、伊勢、西ハ河内、南ハ紀伊、北ハ山城ニ至ル、東西凡壹拾里餘、南北凡貳拾五里、

地勢

〔易林本節用集一〕大和(和州)　大、管十五郡、大上々國也、南北二百餘里、山繞而生十倍出國之差圖、故名所舊跡繁、

〔大和志一〕形勝　壯哉一故都、四禽叶圖、三山作鎭、(元明紀曰、今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、)面臨吉水、背倚雍良、左擁國見横嶽、右抵葛城高天、表山帶河、山水秀麗、郡邵平壥、土脈膏腴、穀稼多實、横脩縦窄、所謂猶如蜻蛉臀

咕、神武紀曰、三十有一年夏四月、登脇上嗛間丘、廻望國狀曰、妍哉乎、猶如蜻蛉之臀咕焉、吉野一郡、居於本州三分之二、山崇溪邃、居民鮮少、

〔和漢三才圖會七十三大和〕郡山寅卯至江戶、過伏見行百三十四里、同過伊賀行百十六里、北至京師十二里半、丑寅至奈良二里、戌方至大坂八里、高取至江戶百三十四里、至京師十七里半、亥方至郡山八里、奈良至京師一十一里、至大坂八里、至高取六里半、至三輪五里、至伊賀上野九里、柳生西至奈良六里、北至笠置一里半、至大河原二里、柳本北至奈良四里、蓋樹北至柳本一里、至奈良四里半、

〔大和志一〕路程 南都至京師十一里、至江都一百二十里、至大坂八里、至上野九里、至高取七里十八町、至郡山一里十八町、官道 高座嶺舊名樽岡坂、山州相樂郡界、謂之奈良坂越、至南都驛一里、歷般若寺奈良坂、南都驛至帶解一里、歷附塚永井、帶解至丹波市二里、所歷、曰藏莊、曰檜村、曰櫟本、曰河原城、丹波市至三輪二里十町、所歷、曰三昧田、曰新泉、曰柳本、曰辻村、曰箸中、曰芝村等、三輪至櫻井驛十八町、高座嶺至此、通計六里二十八町、謂之上道、又自櫻井到吉野郡大野三里、謂之針道越、所歷、曰倉橋、曰針道、曰宮奧、曰牧村等、又自櫻井到松山二里有半、所歷、曰外山、曰忍坂、曰半坂、曰下竹等、歌姬越相樂郡界、越本道路一條之名、如直越不盡越之類、是也、近世假用以爲境界之號、出憲姑從之、下皆倣之、至郡山驛二里、歷尼辻、六條等、郡山驛至筒井一里許、筒井至田原本一里三十町、所歷、曰馬司、曰長安寺、曰嘗田、曰菴治等、田原本至八木一里六町、八木至土佐二里、所歷、曰三瀨、曰越村、曰勸學寺等、土佐至檜垣本一里十八町、歷清水谷蘆原、自歌姬至此、通計九里二十二町、謂之中道、又自檜垣本至洞川五里許、所歷、曰下市、曰善城、曰四村、曰廣橋、曰栗飯谷、曰寺戶、曰河分等、謂之山上道、又自筒井至高田三里十二町、所歷、曰額田部、曰小柳、曰古寺、曰南鄕、高田至御所一里十五町、所歷、曰中村、曰新町、曰薑、曰松本、御所至三在二里三十一町、經風森、筒井至此、通計七里二十二町、謂之下道、又自御所至吉野山村五里、所歷、曰稻宿、曰戶毛、曰古瀨、曰今木、曰下淵、曰檜垣本、曰土田、曰越部、曰新野、曰六田、曰佐曾、曰橋屋等、暗嶺河州河內郡界、至南都驛四里四町、所歷、曰西畑、曰藤尾、曰萩原、曰小瀨、曰砂茶屋、曰寶來、曰尼ガ辻、立野越河州高安郡界、上古謂之龜瀨越、龍田越、至郡山驛三里十五町、所歷、曰勢野、曰龍田、曰法隆寺、曰小泉、郡山驛至南都驛一里有半、經大安寺、自立野至此、通計四里三十三町、竹內嶺、河州石川郡界、至竹內二十町、竹內至高田二里十九町、經長尾、高田至八木一里八町、所歷、曰曲川、曰曾我、曰小網、八木至櫻井驛三十四町、所歷、曰石原田、曰西宮、曰戒重等、櫻井至初瀨一里有半、所歷、曰外山、曰慈恩寺、曰脇本、曰黑崎、曰出雲、初瀨至萩原驛一里、萩原驛至赤埴一里餘、所歷、曰檜牧、曰自明、曰高日、赤埴至桃俣四里、所歷、曰諸木野、曰田口、曰黑岩、曰山糟、桃俣至神末二里十三町、歷土屋原、菅野、神末至岩坂嶺勢州壹志郡界三十一町、自竹內嶺至此、通計十四里二十三町、又自萩原至長瀨驛邑上野二里許、上野至長瀨二十四町、通于伊州名張郡阿部田村、謂之新路、杉谷嶺、勢州飯高郡界、至鷲家二里十一町、

來ハ、今本郡中、高麗寺村ノ古名ナリトスル時ハ、彼郡中ノ地モ、又本郡ニ併入スト云ンカ、但此事詳ナラズ、委シクハ、高麗寺村ノ條ニ辨ズ、小田原北條氏割據ノ頃、國中ヲ三分シテ闔稱セシ時、當郡及ビ愛甲大住ノ三郡ハ、中郡ト唱フ、又中郡ヲ大小ニ二分シテ唱ヘシ頃、本郡ハ小中郡ト稱シ、大住郡ハ大中郡ト唱フ、天正中、寺社ニ賜ヒシ御朱印ニモ、シカ見エタリ、古今ノ際、疆域沿革ノ事、古傳ナケレバ強テ知ニ由ナシ、〇中略

淘綾郡ハ、國ノ南方海邊ニアリ、〇中略郡名舊クハ餘綾ト書シ、余呂岐ト唱フ、〇中略郡名ヲシカ唱ヘシコト、上リタル世ニハ聞エズ、下リテ享祿年間ノ物、山西村等覺院藥師像、享祿五年ノ背銘、ニ、始テ動木郡ト記セルヲ見ル、今淘綾ノ文字ヲ宛ツルコトハ、最近世ノ所爲ナル事、論スベカラズ、〇中略郡中、南ハ總テ海ニ瀕シテ平坦ナリ、北ハ山ヲ負ヒ、西ヘ漸々高シ、闔郡ノ廣袤、東西ヘ長ク、二里二十町餘ニ至リ、東方、大磯宿、及ビ高麗寺村ヨリ、西方、川勾村迄ノ里程ナリ、南北ハ狹ク、平均大抵一里許モアルベシ、其四至、東ヨリ北ヘ廻リテ、大住郡ニ邊シ、又足柄上郡ノ地モ僅ニ係レリ、西ハ足柄下郡ニ堺ヒ、南ハ都テ海ニ添リ、水田少ク、二百五十八町八段四畝二十七歩、陸田多シ、六百四町四段七畝十一歩四分五厘土性ハ多ク眞土、赤土ノ二種ニテ、海邊ニ近キハ、砂礫錯レリ、用水ニハ井口川ノ下流ヲ引テ、耕穡スル村四村、中里、一色、二宮、國府新宿、又大住郡ヨリ沃グ、五箇村組合堰ノ餘水ヲ灌漑スル村二村、山下、高田、其餘ノ諸村ハ、天水及ビ山間ノ涌泉等ヲ用ヰル、農間ノ餘資、山寄ノ村ハ、男ハ薪ヲ採リ、筵ヲ織リ、女ハ糸ヲ操リ布ヲ織ル、海邊ノ諸村ハ、專漁釣ヲナシ、驛路ニ連住スル家ハ便宜ニ依テ、或ハ旅客ヲ止宿セシメ、或ハ是ガ爲ニ酒食諸品ヲ鬻グモアリ、サレド富饒ノ戸口乏シ、村數、正保ノ改ニ、十九、元祿ノ改ニ、二ヲ增加シ、大磯宿加宿小磯村、同所新田ヲ二村トシテ數ニ入、一ヲ減ジテ鹽海村ヲ二宮村ニ併入ス、凡テ二十、今ハ又一ヲ增シ、高麗寺村、二ヲ減ズ、加宿東小磯、同所新田ヲ併セ、共ニ本宿ニ隸ス、故ニ又十九村トナレリ、本郡ノ高、正保ノ改ニ、七千五百三十七石九斗七升五合、元祿ニ至リテ、七千八百三十石四斗二升五合一杓、前ニ增加スルコト、二百九十二石四斗五升一杓、後又十二石六斗六升六杓六

撮ヲ增加シテ、今高七千八百四十三石八升五合七杓六撮ニ至レリ、此餘寺社領、二百六十七石一斗、寺社除地、二十八石四斗餘、

〔新編相模國風土記稿四十二大住郡〕圖說

當郡ノ圖、正保四年改定ノ官本ヲ舊シトスレバ、往古ノ沿革ハ知ルベカラズ、サレド倭名鈔ニ載ル、淘綾郡鄕名ノ内、金目、幡多等ハ、今本郡ニ屬シ、當郡ノ鄕名、中島ノ遺名、高座郡ニ存スルアリ、今村名トナル、蓋其地相模川ニ邊スレバ、洪水ノ時、水流變遷シテ、彼郡ニ屬セシナラン又郡中五分一村ハ、足柄上、淘綾ノ二里ニ孕マリ、全ク郡ノ地域ヲ離レタリ、是等ヲ以テ想フニ、往古ト八郡界大ニ改マリシナリ、サレバ村里ノ境界ニ至テハ、尤沿革多カルベケレド、土人ノ口碑ニモ傳フル事稀ナレバ、今ヨリ知ルニ由ナシ、又往古荒廢ノ田、或ハ空閑ノ地ヲ開闢アリシ事、三代實錄ニ見エタリ、其文下ニ註ス夫ヨリ遙ノ後モ猶廣野ノ地高見原、實蒔原、波多野等ナリ、多カリシガ、勝國以前ニ開墾アリシト見エ、後世ノ新田ハ少シ、○中略

大住郡ハ國ノ中央ニテ、○中略郡ノ形狀、巽ヲ首トシ、乾ヲ尾トス、東田村ノ境ヨリ、西澀澤村マデ五里半、南根坂間村ヨリ、北日向村マデ三里餘、四境、東ハ相模川ニカギリ、高座郡、西ハ足柄上郡、南淘綾郡及ビ海面、北愛甲郡ナリ、土地平坦ニシテ、西北ノ隅ニイタリテ山嶺アリ、所謂大山、堀内等ナリ、サレバ村落ヲナスニ便アリテ、空閑ノ地少シ、土性ハ野土黒眞土砂交レリ、水田少ク、陸田多シ、水田二千九百五十七町二段一畝十八歩五厘、陸田四千九百五十二町五段八畝二十一歩六厘用水ハ玉川、鈴川、金目川ヲ引用ヰル、郡ノ村數、正保ノ改ニ百七村、元祿ノ改ニ百二十七、前ニ比スレバ增加スルコト二十、按ズルニ、一村ヲ上下ニ分ツモノ四村、某村ヲ枝郷ト稱スルモノ六村、某村内ト唱フモノ二村、全ク別村トナリシモノ八村、今十村ヲ減ジ、百十九村トナレリ、按ズルニ、三村ヲ合テ一村トスルモノ一、又枝郷或ハ某村内ト唱ヘシ地ヲ、本村ニ合スルモノ七村、又一村ヲ上下ニ分ツモノ一所アリ、全ク地ノ減ジタルニアラズ、郡ノ石高、正保ノ改ニ六万六百二十一石二斗五升七合、元祿ニ至テ、六萬四千四百二十四石二升三合七撮、前ニ比スレバ增加スルコト、三千

愛甲郡

八百二石七斗六升六合七撮、今百二十七石八斗八升七撮ヲ減ジテ、六萬四千二百九十六石一斗四升三合トナレリ、是ハ中古相模川、玉川等堀替アリシ時、川敷トナリ、石高減ジタルナリ、(某村々ノ條ニ詳ナリ、)此餘寺社領、三百七十八石、寺社ノ除地少許アリ、(一石八斗九升五合六勺七撮、及段別二町四段三畝九歩餘ノ地ナリ、)

〔日本後紀 十三 桓武〕延暦廿四年十一月庚辰、相模國大住郡田二町、賜從四位下百濟王敎法、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年二月壬申、相模國大住郡大領外從七位上壬生直廣主、代窮民輸私稻一萬六千束、戸口增益五千三百五十八人、褒此善狀、假外從五位下、

〔三代實錄 六 淸和〕貞觀四年十二月七日辛丑、相模國大住郡荒廢田三十二町、奉充冷然院、

〔三代實錄 十 淸和〕貞觀七年三月廿八日己酉、以相模國大住愛甲兩郡空閑地四百町内見開田十五町、充淳和院、

〔三代實錄 二十七 淸和〕貞觀十七年六月壬子朔、相模國言、大住郡河水變赤、

〔郡名考〕相模　愛甲(アヘカハ アイカフ)　アイカフ

〔地名字音轉用例〕入聲フノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

あゆかは　愛甲(相模郡)　阿由加波　甲(カフ)ヲカハニ用ヒタリ

〔新編相模國風土記稿 五十四 愛甲郡〕圖說

本郡古ノ形狀ヲ考ルニ、總テ空閑ノ地多カリシヲ、承和貞觀ノ頃、年ヲ追テ開墾アリ、事ハ三代實錄、類聚三代格等載スル所ニ就テ知ベシ、(其文後ニ詳ナリ、)北條氏分國ノ頃國中ヲ三分セシ時、當郡ハ國ノ中程ニアルヲ以テ、中郡ノ内トス、(役帳以下當時ノ古文書等、多ク所見アリ、)北隣津久井縣ハ、古大抵當郡ニ屬セシヲ、後分裂セシトイヘリ、(下ノ條ニ詳ナリ、)東方相模川ニ邊セシ地ハ、水路ノ變遷ニヨリ、高坐郡ト其境界互ニ混淆セシ處モ多カルベシ、今古圖ノ傳フル物ナケレバ、沿革ノ詳ナルヲ知ル由ナシ、○中略

高座郡

愛甲郡ハ、國ノ中央ヨリ少シク北ニ寄レリ、○中略闔郡ノ形狀、東ヲ首トシ、西ヲ尾トス、東上依智村ヨリ西丹澤山中迄八里餘、南厚木村ヨリ北三增村迄凡四里、郡ノ四境、東ハ相模川ヲ限リ高座郡ニ界ヒ、南ハ大住郡ニ隣リ、接壤及山嶺ヲ以テ界域トナス、西ハ足柄上郡、北ハ津久井縣ニ界ヘリ、共ニ山嶺ヲ以テ界トセシ所多シ、地形、東ハ低ク、漸々西上シテ高燥ノ地トナリ、中程ヨリ西界ニ至テハ、山巒重疊シ、所謂丹澤山巍然トシテ足柄上郡等ノ深山ニ續ケリ、サレバ中程ヨリ以東ニ多ク聚落ヲナシ、又北ノ方ニ至テハ、藪山ノ隱趾、或ハ峽間ニ孤村ヲ結ベリ、陸田多ク水田ハ僅ニ三分ノ一ニ當レリ、○中略闔郡ノ村數、正保ノ改ニ三十六、數内某村ノ内某村ト園スルモノ二村元祿ノ改ニ十一ヲ増テ四十七、數内一村ヲ五村ニ分ツモノ一村、上下二村トスルモノ三村、上中下トナスモノ一村、某村一枝郷ト園スルモノ二村、今ハ又四ヲ減ジ、郡テ四十三村トナレリ、元祿ニ比スルニ、上下ヲ合テ一村トスルモノ三村、上中下ヲ合スルモノ一村、新田及枝郷ヲ本村ニ併入スルモノ三村ニテ、其地ノ減セシニアラズ、概シテ是ヲ計レバ、新田四村ヲ増加セシナリ、本郡ノ石高、正保ノ改ニ、壹萬七千四百二十一石八斗一升四合、元祿ニ至リテ、二萬五百九十六石九升九合七杓五撮、前ニ増加スルコト、三千百七十四石二斗八升五合七杓五撮、又四千八百九十九石五斗八升餘ヲ増加シ、今ハ二萬五千四百九十五石六斗八升餘ニ至リ、此餘寺社領三百三十四石六斗餘、

〔郡名考〕相模　高座クラト計リタカクラ　タカクラ

〔新編相模國風土記稿五十九高座郡〕圖說

本郡古ハ原野ノミ多ク、僅ニ瀕海及河傍ノ地開ケテ、廣野ノ四邊ニ村落ヲナセリ、夫ヨリ往々原野ヲ開キ、今ニ至テ、猶開墾ヲ企ル所アリ、北條氏國中ヲ三分セシ時、當郡ハ東郡ニ屬ス、且北隣津久井縣ハ、古當郡及ビ愛甲郡ニ屬セシヲ後分割セシト云フ、下ノ條ニ辨ズ又郡界相模川ニ邊セシ地ハ、愛甲大住二郡境、川ニ傍シ地ハ、當國鎌倉郡及ビ武州多磨郡ト接壤スレバ、川瀨ノ變遷ニヨリテ、一村兩郡ニ分拆セシ地モ多カルベシ、○中略

高座郡ハ、國ノ東方ニアリ、(北條役帳ニ東郡ト記ス○中略)圖郡ノ形狀、南ヨリ北ニ衰リ九里程、東西ノ廣サ南邊東海道ノ貫ケル所ハ三里許、中程ニ至テ二里半ニ餘リ、夫ヨリ北方次第ニ狹マリ、西北ノ方ヘ少ク曲レル樣、郡圖ノ如シ、(東北二方ハ境川ニ限リ、鎌倉郡及武藏國多磨郡、南方ハ、築シテ海、西ハ相模川ヲ境ヒ、津久井、愛甲、大住ノ三郡、但川ヲ以テ境界トスル所ハ、水道ノ爲水路變遷アリ、故ニ中古少クテ郡界ヲ改ル所アリト雖ドモ、其川ノ條ニ註シテ愛ニハ略ス、)津久井縣ハ、當郡愛甲ノ二郡ヨリ分割セシ地ニテ、其年代ヲ失タレバ、正シク辨ジ難ケレドモ、地形ヲ推考スルニ、縣內相模川北方ノ村落ハ、(上下川尻、上下中澤、三井、千木良、與瀬、吉野、小淵、澤井、佐野川等十一村ナリ、)當郡ヨリ分裂セシ地ナルベシ、今中澤佐野川二村ハ、尙當郡ノ庄名澀谷ノ唱ヲ存セリ、其餘ノ村落ハ、(葉山島已下凡十八村)愛甲郡ヨリ分拆セシ地ナラン、(尙愛甲郡津久井縣總說併見ルベシ)地ノ高低、郡ノ南海岸ヨリ、東海道ノ左右ハ凡テ低ク平夷ナリ、夫ヨリ東北ノ方ヘ漸々ニ高ク、村落及相模野ノ邊、武藏ノ國境ニ至迄、高燥ニシテ、土地平ナリ、又東方境川ノ邊ハ、郡ノ中程ヨリ南方ハ低シ、西方相模川ニ傍タル地ハ殊ニ低ク、所々水除ノ堤ヲ設ケタレド、水溢ノ患ヲ免カレズ、土性高燥ノ地ハ、黑野土或ハ砂交レリ、其餘ハ總テ眞土ニシテ、是モ砂交レル所アリ、郡內陸田多ク水田ハ三分ノ一ナリ、圖郡ノ村數、正保ノ改ニ、九十五、元祿ノ改ニ百十八、前ニ比スレバ、增加スルコト二十三、今ハ九ヲ減ジテ百九ナリ、(按ズルニ、元祿ノ改ニハ、宮山村ヲ五村ニ分チ、大庭村ノ小名、稻荷ト唱フル地ヲ、別村トシ、或ハ一村ヲ上下ニ分ツノ類ニシテ、其實ハ地ノ增減アルニアラズ、)村高正保ノ改ニ、三万八千百五十石餘、元祿ニ四万七千百二十八石餘、前ニ比スレバ、增加スルコト八千九百七十八石、今ハ二千五百三十九石餘ヲ增加シテ、四万九千六百六十七石餘ニ至ル、(村數元祿ニ增加セズトイヘドモ、各村內近世墾闢ノ地多キガ故ナリ、)

〔日本書紀二十九天武〕四年十月庚寅、是日、相模國言、高倉郡。女人生三男、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年八月辛丑、假相模國高座郡大領外從六位下勳八等壬生直黑成外從五位下、代貧民塡進調布三百六十端二丈八尺、庸布三百四十五端二丈八尺、正稅一萬一千一百七十二束二把、給飢民稻五千五百四束、戶口增益三千一百八十六人、就中不課二千九百四十七人、課二

百三十九人、仍冥其身也、

〔新編相模國風土記稿 六十九 鎌倉郡〕圖說

本郡ハ國ノ東方ニアルガ故、北條氏關東ニ跨有シ、國中ヲ東中西ノ三郡ニ分稱セシ時、卽東郡ト唱ヘシコト、北條役帳ニ見エタリ、往昔右大將賴朝ノ、鎌府ヲ開キシ後、元仁元年十二月、鎌府四境鬼氣祭ヲ行ハル、其四境、東ハ六浦、南ハ小壺、西ハ稻村、北ハ山內ナリト、東鑑ニ見ユ、是ニ據レバ、六浦小坪ハ、當時鎌倉府下ノ地ナリト覺ユ、今六浦ハ武藏國久良岐郡ニ屬シ、小坪ハ當國三浦郡ニ隷セリ、郡界ノ改革、文獻ノ徵トスベキナケレバ、今考據ヲ得ガタシ、〇中略

鎌倉郡ハ國ノ東邊ニ在リ、〇中略 地形、其四至、東ハ三浦郡、及ビ武藏國久良岐郡ニ隣リ、南ハ海ニ邊シ、西ハ總テ高座郡ニ堺ヒ、北ハ武藏國都筑郡及ビ橘樹郡ニモ少シク接セリ、東西ヘ長ク、大抵四里半許ニ至リ、南北ハ廣キ處ニ至テ凡三里餘ニ及ビ、狹キ所ニテハ三十町ニ足ザル處アリ、陸田多ク水田少シ、用水ニハ專戶部川ノ水ヲ引沃ギ、鼬川、砂押川、境川等ノ諸流ヲモ灌漑ス、サレド三分ノ二ハ、山間ノ涌泉ヲ引キ、溜井ヲ構ヘ、天水ヲ仰テ耕植セリ、故ニ旱損ノ患多シ、土性ハ砂礫錯レル地多ク、眞土是ニ次グ、野土糯米土ハ少シ、農間ノ餘資、海邊ノ村々ハ專漁釣ヲナシテ、江戶ニ運送シ、鶴岡江島等ノ道側ニ、連居セル家ハ、參詣ノ遊客ニ、酒食及ビ諸物ヲ鬻ギ、東海道係ル處ハ、往來ノ旅客ヲ休泊シ、其他ハ採薪等ヲ業トス、富饒ノ戶口ハ稀ナリ、村數正保ノ改ニ八十一、元祿ニ至リ八村ヲ增加ス 秋葉村、西村、山谷新田、腰越村、坂之下村、亂橋村ヲ增シ、野場ヲ二村ニ分チ、柏尾村モ上下トセリ、 今又二ヲ增シ 瀨谷野新田、江島龜師町、 九十一村ニ及ベリ、高正保ノ改ニ、二萬三千七百三十五石八斗一升五合、永千五百九十六貫七百四十二文、元祿ニ至リ、高二萬七千六百四十五石一斗四升五合六杓トナル、前ニ增加スルコト、三千九百九石三斗三升六勺、永ヲ減ズルコト、二百四十七貫九百四十一文ナリ、今又增加シテ、總高凡二萬七千九百八十三石六斗九升餘ニ及ビ、永ハ減ジテ、凡千三百十三貫四百文餘トナレリ、此

三浦郡

餘寺社除地ノ分ハ省ケリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

奈爾波都爾、余會比余會比氐、氣布能日夜、伊田氐麻可良武、美流波々奈之爾、

右一首、鎌倉郡上下丸子連多麿、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月廿一日壬寅、相模國鎌倉郡人太皇太后宮少屬從八位上村主眞野武散位從八位上上村主秋貞等、改本居貫河內國大縣郡、

〔郡名考〕相模　御浦ミウラ　三浦

〔新編相模國風土記稿百七三浦郡〕圖說

本郡ハ、國ノ東邊ニ在テ、三面海濱ニ陸出シテ、地形他郡ト同カラズ、故ニ北條氏分國ノ頃、各郡別稱セズ、東郡、中郡、西郡ト圖稱セシ時、當郡ハ其員ニ入ラズ、單リ郡名ヲ唱ヘシコト、北條役帳ニ見ヘタリ、郡界ノ變遷ヲ推考スルニ、東鑑元仁元年十一月、鎌倉ノ四境ヲ記セシ條ニ、東小坪ト載ス、(原文ハ小坪村ノ條ニ註ス)圓覺寺塔頭黃梅院所藏康安ノ文書ニモ、鎌倉郡小坪ト記ス、(文書ハ黃梅院ノ條ニ出ス)倭名鈔鎌倉郡ノ郷名ニ沼濱アリ鎌倉郡中其遺名ナケレバ、當郡今ノ沼間村ナルベシ、(事ハ沼間村ノ條ニ辨ズ)小坪沼間共ニ今本郡ニ屬スレドモ、鎌倉郡ニ接還セル地ナレバ、其頃ハ彼郡ニ隷セシナルベシ、猶古ノ沿革ハ古圖ノ傳ルナケレバ知ルニヨシナケレドモ、郡中桑海ノ變希ニシテ、新墾モ多カラザレバ、他郡ニ比スルニ沿革尙鮮シ、○中略

三浦郡ハ、國ノ東端ニアリ、○中略圖郡ノ形狀宛モ島嶼ノ如ク、東西南ノ三方ハ皆海ニ瀕シ、北ノ一方武州久良岐郡、本國鎌倉郡ニ界ス、其廣袤ハ北ヨリ南ヘ長ク、袤リ六里、東西ノ廣サ南邊ハ纔ニ一里餘、中央ハ四里ニタラズ、北邊ハ又狹リテ凡二里ニ過ズ、地形郡ノ中央尤高ク、四邊ハ漸々ニ低シ、其際山岳高低盤紆シテ平夷ノ地ハ希ナリ、陸田ハ水田ヨリ少シク多シ、土地都テ天水ヲ仰

テ耕植スレバ旱損ヲ免レズ、土性ハ眞土野土ノ兩種ニシテ、何レモ砂交リ、沃腴ノ土ニアラザレドモ、農業ノ外、蠶桑、及漁獵ヲ專トシテ、生產ノ資トスルニヨリ、民戶頗ル富饒ナリ、闔郡ノ村數、正保ノ改ニ五十九、元祿改ニ七十六、前ニ比スレバ增加スル事十七、今又四ヲ增シ、都テ八十村トナレリ、本郡ノ石高、正保ノ改ニ二万千四百四十二石餘、元祿ニ至テ二万千六百二十七石餘トナリ、前ヨリ增加スル事千四百八十五石餘、後又千六百六石餘ヲ增加シテ、今ハ二万四千二百三十三石餘ニ至ル、其餘持添新田ト號スルモノ後世墾開ノ地ニシテ、各村ニ隷ス、五十五石餘、寺社領ハ百四十四石ナリ、

私稱郡名

〔保曆間記〕同〇治承四年十月十五日、賴朝相模國小坂郡鎌倉ニ始テ館ヲ構ヘタリ、

〔新編相模國風土記稿六十九鎌倉郡〕小坂追可佐管スル村二十八雪下、西御門、二階堂、淨妙寺、十二所、大町、小町、亂橋、材木座、長谷、坂之下、極樂寺、扇谷、山之内、峠、大船、臺、山崎、小袋谷、岩瀨、笠間、長沼、上倉田、下倉田、戶塚宿、矢部町、常葉、片瀨、是鎌倉七鄕ノ一ナリ、按ズルニ、谷七鄕ノ稱ハ、鎌倉大草紙、享德四年、上杉長尾亂ノ條ニ、鎌倉ヘ亂入、谷七鄕ノ神社佛閣ヲ追捕シテ、悉燒拂ト見エ、鶴岡社務次第ニ小坂鄕、小林鄕、葉山鄕、津村鄕、村岡鄕、長尾鄕、矢部鄕ト列書ス、其ウチ葉山鄕ハ今三浦郡ニアリ、郡界變遷シテ彼郡ニ隷セシナラン、保曆間記ニ、小坂郡トノセ、永正六年ノ文書圓覺寺龍隱庵藏ニモ、小坂郡長尾鄕ト見ユレド、コハ全ク當時ノ偶記ニテ、郡名ニ唱ヘシ證トハ云ヒ難シ、

津久井縣

〔郡名考〕相模　津久井(ツクヰ)縣カタコノ一郡、郡ノ字ナシニ郡名ニ用ル也、里人ハツクイケントイフトモイヘリ、

〔新編相模國風土記稿百十六津久井縣〕圖說

本縣、往古ハ愛甲高座兩郡ノ內ニ孕マレテ、林樹山嶽多ク、漸クニ原野ヲ開トイヘドモ、皆山間ニシテ曠邈ノ地ナシ、就中西北ノ村落邊裔ノ地ニ至テハ、嵯峨ニヨリテ墾闢シ、往々火耕ノ地モ見エタリ、其間ノ沿革アルモ、勝國以前ノ圖傳ハラザレバ、其詳ナル事知ルベカラズ、〇中略津久井縣、國ノ西北隅ニアリ、〇中略元祿四年、山川金右衞門ガ配隷セシ時、闔境ニ令ヲ下シテ自今已往縣ト唱ヘシムト云、是ヨリシテ、郡名ヲ冠ラシムル事ヲ省ク、元祿國圖、津久井縣ト記ス、爰ニ於テ、一縣ノ名唱定テ、一郡ノ如ク今猶然リ、〇中略闔縣ノ形狀恰モ科斗ノ形ニ似タリ、西方ハ廣袤崔嵬、南ヨリ

鄕

北ニ亘リ、十二里程、西ヨリ東ニ延袤スル事八里ニ餘レリ、中程ニ至リ南北ヘ三里許、夫ヨリ東方次第ニ狹マリ、僅ニ二里若クハ一里ニ足ラズ、（北ヨリ西ハ甲州都留郡、南ニ逮テハ國中足柄上郡ヲ限ル、同ク陰田崔嵬、皆山嶽ヲ以テ隔閡ス、中ニモ西南間ニハ經嶽ナド云ヘル大嶽、郡界ニ跨テ、突出シタル地域ヨリ量ラバ、南北ヘ聯綴スルコト十七八里以上ナランカ、又東西ヘ延袤スルコト十二三里ニモ及ベシ、南ハ愛甲郡ヘ境ヒ、北ハ中程ヨリ西ニ連テハ武州多摩郡ナリ、但シ山ヲ以テ界トス、中程ヨリ東方ニヨリテハ少シク境川ヲ限レリ、又ハ少シク相模川ヲ限リ、又高座愛甲ノ兩郡、山ヲ以テ皆境界トナセリ、）土地ノ高低、西ハ論ナク、南ヨリ北ニ逮テ山峯ニ據リタル所ハ、頗ル高燥ノ地多シ、（〇中略）闔縣ノ村數、正保ノ改ニ（正保圖ニ、津久井郡ト書セリ、）二十九、元祿ノ改ニ（元祿圖ニ、津久井郡ト書セリ、）二十七、前ニ比スレバ減ズル事二、（按ズルニ、正保改ニハ、大井村ノ小名荒川ト唱フル地ヲ別村トシ、青山村ノ小名關ト唱フル地ヲ別村トス、元祿改ニハ、荒川ヲ大井村ニ合テ一村トシ、關ヲ青山村ニ合テ一村トシテ、二ヲ減セリ、其實ハ地ノ増減アルニアラズ、）今ハ二十九、（按ズルニ、元祿改ニ一村タリシ長竹村、中澤村ヲ、今ハ各上下ニ分チテ四村トナシタレバ二村ヲ増加セリ、是亦地ノ増減アルニアラズ、）村高正保ノ改ニ、四千九百五十七石八斗五升五合、元祿ニ一萬千八百十九石九斗六升三合、前ニ比スレバ、増加スル事六千八百六十二石一斗八合、今ハ三十六石二斗三升九合ヲ増加シテ、一萬千八百五十六石二斗二合ニ至ル、（村數増加セズト云ヘドモ、各村ノ内、近世墾闢ノ地多キガ故ナリ、）當縣、神社佛寺ノ所領御朱印地、百四十一石八斗三升五合餘、除地三百廿二石八斗九升一合八勺、外ニ段別七町三段五畝二歩、

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

相模

津久井郡ハ、愛甲郡ノ餘戸鄕ニシテ、鎌倉ノ時、毛利庄ト稱ス、正保圖始テ津久井郡アリ、寛文復古ノ時、之ヲ停メ、元祿四年ニ至リ、代官山川金右衛門ノ時、再ビ分テ、津久井縣ト稱ス、蓋古郡ト異ナレバナリ、明治三年始テ郡ト稱ス、

〔倭名類聚抄六國郡〕相模國　足柄上郡　高家（〇高、高山寺本作レ豪、）　櫻井　岡本　伴郡　餘戸　驛家

餘綾郡　伊蘇　餘綾（與呂木）　霜見　礒長　中村　幡多（〇高山寺本此下有ニ野字一）　金目

足柄下郡　高田　和戸　飯田　垂氷（〇氷、高山寺本作レ水、）　足柄（阿之加良）　驛家

大住郡　中島　高來　川相　片岡　方見　和太　日田　大服　櫛椅　驛家　渭邊　石見○見高山寺本作田、大上　前取　三宅　餘戶

愛甲郡　玉川　英那　印山　船田　六座　餘戶

高座郡　美濃　伊參　有鹿　深見布加美　高座多加久良　渭堤　寒川佐無加波　鹽田之保多　驛家　二寶○寶、高山寺本作實、岡本平加毛止　土甘　河會　大庭於保無波

鎌倉郡　沼濱　鎌倉加萬久良　埼立　荏草　梶原　尺度　大島

御浦郡　田津　御浦美宇良　氷蛭比々留　御埼美佐木　安慰

〔新編相模國風土記稿二建置沿革〕平相國清盛威權幷ナカリシ頃ヨリ、諸國莊園ノ地多クナリ、○註略本州中モ、多クハ武臣ノ私有トナリ、莊園○註略ト稱スル地、居多ニシテ、古昔ノ郷名ヲ廢シ、或ハ私ノ郷名ヲ唱ヘ、或ハ莊名ヲ唱フル地多クアリ、卽郷名ニハ、足柄上郡ニ河村郷今郷名ハ唱ヘザレド、遺名猶存セリ、○中略松田郷今郡中松田惣領、同庶子村ニ此郷遺レリ、○中略二同下郡ニ桑原郷今郷名ヲ唱ヘズ、郡中桑原村其舊趾ナリ、○中略土肥郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘズ田島郷鶴岡藏、嘉永二年ノ文書ニ見ユ、今尙此郷名ヲ唱フ、ニ高田郷同ジ文書ニ見エタリ、倭名鈔ニモ出テ舊キ唱ナリ、今ハ稱セズ、高田村其遺名ナリ、大住郡ニ波多野郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘズ高部屋郷大山寺藏、元曆元年ノ文書ニ見ユ、今郷名ヲ廢ス、糟屋村其遺趾ナリ、坂間郷鶴岡社人金子氏藏、元曆元年ノ文書ニ見エタリ、今ハ唱ヘズ、坂間村其遺稱ナリ、高座郡ニ俣野郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘズ鎌倉郡ニ小林郷(中略)今尙現存セリ大倉郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘズ、郡中雪下村谷合四ケ村ノ邊舊趾ナリ、由比郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘザレド、由比濱邊ノ邑里ヲ云ヘルナリ、村岡郷鶴岡香象院藏、建久二年之文書ニ見ユ、今此郷名ヲ存ス、岩瀨郷上ノ村證菩提寺藏、仁治元年ノ文書ニ出ヅ、今郷名ヲ失ス、岩瀨村其遺名ナリ、倉田郷是モ同ジ文書中ニ見エタリ、今郷名ヲ唱ヘズ、上下倉田二村其遺稱ナリ、矢部郷(中略)今此郷名ヲ唱ヘズ、郡中大矢部小矢部二村其遺蹤ナリ、長尾郷鶴岡相承院藏、正元元年ノ文書ニ見ユ、此郷名モ今尙存セリ、三浦郡ニ矢部郷、○下略

〔東大寺正倉院文書十九〕相模國封戶租交易帳

相模國司　解申天平七年封戶租事

合八郡、食封壹拾參處、壹阡參伯戶、田肆仟壹伯陸拾貳町貳段貳伯玖步、不輸租田壹仟貳伯肆拾肆

町參段壹伯陸拾壹步、見輸租田貳仟玖伯壹拾漆町玖段肆拾捌步、租肆萬參仟漆伯陸拾捌束漆把、○中略

皇后宮食封壹伯戸、田參伯參拾玖町肆段參伯肆拾漆步、不輸租田壹伯貳拾肆町伍段貳伯伍拾壹步、見輸租田貳伯壹拾肆町玖段玖拾陸步、租參仟貳伯貳拾參束玖把、

足下郡埀水鄕、伍拾戸、田壹伯漆拾貳町參段貳伯肆拾步、不輸租田肆拾肆町玖段貳拾肆步、見輸租田壹伯貳拾漆町肆段貳伯壹拾陸步、租壹仟玖伯壹拾壹束玖把、

餘綾郡、中村鄕、伍拾戸、田壹伯陸拾漆町壹段壹伯漆步、不輸租田漆拾玖町陸段貳伯貳拾漆步、見輸租田捌拾漆町肆段貳伯肆拾步、租壹仟參伯拾貳束、○中略

一品舍人親王食封參伯戸、田捌伯肆拾玖町貳段貳伯肆拾陸步、不輸租田貳伯捌拾壹町漆段壹伯伍拾步、見輸租田伍伯陸拾漆町伍段玖拾陸步、租捌仟伯壹拾貳束玖把、

足上郡岡本鄕、伍拾戸、田壹伯貳拾參町貳伯參拾陸步、不輸租田壹拾捌町肆段壹伯肆拾步、見輸租田壹伯肆町陸段玖拾陸步、租壹仟伍伯陸拾玖束肆把、

足下郡高田鄕、伍拾戸、田壹伯陸拾漆町參段貳伯伍拾玖步、不輸租田肆拾參町壹段壹伯參拾玖步、見輸租田壹伯貳拾肆町貳段壹伯貳拾步、租壹仟捌伯陸拾參束伍把、

餘綾郡○餘綾郡下、恐脫鄕名三字、壹伯伍拾戸、田參伯捌拾漆町玖段壹伯肆拾步、不輸租田壹伯漆拾捌町玖段壹伯肆拾步、見輸租田貳伯玖町、租參仟壹伯參拾○此間有缺文、

尺度鄕○鎌倉郡、伍拾戸、田貳伯貳拾伍町捌段貳拾漆步、不輸租田伍拾漆町貳段貳伯陸拾漆步、見輸租田壹伯陸拾捌町伍段壹伯貳拾步、租貳仟伍伯貳拾捌束、

荏草鄕、伍拾戸、田壹伯肆拾玖町肆段貳伯參拾陸步、不輸租田肆拾壹町壹段參伯伍拾陸步、見輸租田壹伯捌町貳段貳伯肆拾步、租壹仟陸伯貳拾肆束、

右大臣從二位藤原朝臣食封、大住郡仲島鄕伍拾戸、田貳伯壹拾陸町柒段參伯肆拾貳步、不輸租田貳拾柒町肆段貳伯貳拾貳步、〇中略

從三位山形女王食封、御浦郡走水鄕伍拾戸、田壹伯壹拾捌町肆段柒拾陸步、不輸租田貳拾柒町貳段參伯壹拾陸步、見輸租田玖拾壹町壹段壹伯貳拾步租壹仟參伯陸拾柒束、納官六百八十三束五把、給主六百八十三束五把、

從三位鈴鹿王食封、高座郡土甘鄕伍拾戸、田壹伯柒拾捌町陸段參伯伍拾參步、不輸租田壹伯壹拾町肆段陸拾伍步、見輸租田陸〇此間有缺文

從四位下檜前女王食封、御浦郡氷蛭鄕肆拾戸、田壹伯玖町柒段壹伯伍拾參步、不輸租田參拾陸町貳段參拾參步、見輸租田柒拾參町伍段壹伯貳拾步、租壹仟壹伯參束、納官五百五十一束五把、給主五百五十一束五把、

從四位下三島王食封、大住郡埼取鄕伍拾戸、田壹伯柒拾捌町貳段參伯捌步、不輸租田肆拾捌町柒段玖拾貳步、見輸租田壹伯貳拾玖町伍段貳伯壹拾陸步、租壹仟玖伯肆拾參束肆把、納官九百七十一束七把、給主九百七十一束七把、

從四位下高田王食封、鎌倉郡鎌倉鄕參拾戸田壹伯參拾伍町壹伯玖步、不輸租田貳拾玖町捌段壹伯玖步、見輸租田壹伯伍町貳段、租壹仟伍伯柒拾捌束、納官七百八十九束、給主七百八十九束、〇中略

天平七年閏十一月十日〇署名略

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月九日己丑、有近江國住人佐々木源三秀義者、平治逆亂時、候左典厩〇源義朝御方、〇中略 恃秀衡秀義姨母夫也赴奥州、至相模國、剋澀谷庄司重國感秀義勇敢之餘、令之留置之間、住當國既送二十年畢、二十日庚子、三浦介義明、一族已下、兼日雖有重奉鬪于今遲參、〇中略 仍武衞先相率伊豆相模兩國御家人許、出伊豆國、令赴于相模國土肥鄕給也、 十月十二日辛卯、寅剋、爲崇祖宗、點小林

鄉之北山構宮廟、被奉遷鶴岳宮於此所、(中略)本社者、後冷泉院御宇、伊豫守源朝臣賴義、奉勅定征伐安倍貞任之時、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潛勸請石清水、建瑞籬於當國由比鄉、(鎌倉郡、今號之下若宮、)永保元年二月、陸奧守同朝臣義家加修復、今又奉遷小林鄉、致蘋蘩禮奠云云、　十六日乙未、爲武衞御願、於鶴岳若宮、被始長日勤行、所謂法華仁王最勝王等鎭護國家三部妙典、其外大般若經、觀世音經、藥師經、壽命經等也、供僧奉仕之、以相模國桑原鄉、爲御供料所、　十七日丙申、爲誅波多野右馬允義常、被遣軍士之處、義常聞此事、彼討手下河邊庄司行平等、未到以前、於松田鄉自殺、子息有常者在景義之許、遁此殃、義常姨母者、中宮大夫進(朝長)母儀(典膳大夫久經爲子)仍父義通就妹公之好、始候左典厩之處、有不和之義、去保元三年春之比、俄辭洛陽、居住波多野鄉云云、　廿三日壬寅、河村三郎義秀被收公河村鄉、被預景義、又瀧口三郎經俊召放山內庄、被召預實平、此外石橋餘黨雖有數輩、及刑法之僅十之一歟云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年(○建久元年)九月三日甲寅、大庭平太景能申云、河村三郎義秀、於今者可被梟首歟者、仰曰、申狀太不得其意、早可處其刑之由、雖被仰付、景能潛扶之歷多年也、依流鏑馬賞原免訖、今更何及罪科哉者、景能重申云、日來者爲囚人之間、以景能助成活命、愁以蒙免許之後、已擬餓死、如當時者被誅事、還爲彼可爲喜歟者、于時二品頻令咲給、可還住于本領相模國河村鄉之旨可下知者、

〔集古文書(四十二寄附狀)〕治承七年寄附狀(伊豆國熱海走湯山東明寺藏)

奉寄　走湯山上常行堂

相模國長塞鄉壹所事

右件鄉本目雖爲寺領、殊爲丁寧勤經御祈請、以彼鄉所奉寄御也、然則堂衆等、右令存其旨、致旁勤行、可令奉祈源家安穩、御息災延命、增長福壽、御願成就之由也、仍奉寄如件、

治承七年七月廿五日

座主　花押

〔集古文書寄附狀四十二〕源賴朝卿寄附狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄

相模國鎌倉郡内鶴岡八幡新宮若中御領事

在當國貳□□

高田鄕　田島鄕

右爲神威增益、爲所願成就、所奉寄也、方來更不可有牢籠之狀如件、

壽永二年二月廿七日

前右兵衛佐源朝臣賴朝花押

〔集古文書下文十二〕源賴朝卿下文相模國鎌倉鶴岡八幡宮社司

花押源賴朝

下　相模國中坂間鄕

可早免除若宮相撲字新三郎家眞給田畠在家等事

田壹町　畠壹町　在家壹宇

右件給田畠在家免除畢、地頭名主等、不可煩之狀如件、

壽永三年六月三日

〔吾妻鏡八〕文治四年十二月十七日戊寅、式部大夫親能男、一法師冠者能直、任左近將監之由、參賀營中、是無雙寵仁也、依御內擧、去十月十四日雖拜任、此間病被相侵、住相模國大藏支鄕、今日始出仕云云、則召御前、

〔相州文書〕鎌倉西御門大藏杉谷鄕二箇所御地事、御寄進圓覺寺傳宗定照院間、土御門二品親王二品親王、恐久明親王、姬宮令旨如此候、早守先例、可有其沙汰之狀、依仰執達如件、

建武四年七月十四日　沙彌道光花押

傳宗庵開山南山和尙雲○士御門徒御中

〔集古文書四十二寄附狀〕建久二年寄進狀 相模國鶴岡普業院藏

奉寄　鶴岡八幡宮寺□吾重□法印供米相模國村岡鄕內并富塚鄕內田畠屋敷合七町伍反者

右爲長日不斷本地供料、所寄進之狀如件、

建久二年十一月廿二日　花押 賴朝○源

〔吾妻鏡十五〕建久六年十一月十九日庚子、相模國大庭御厨俣野鄕內、有大日堂、今日寄進田畠、限未來際、被宛佛聖燈油料、是故俣野五郎景久歸敬之梵閣也、

〔集古文書五十讓狀〕風早禪尼深妙配分狀 大友能直室 肥後家臣志賀太郎助藏

嫡男大炊助入道分

相模國大友鄕地頭鄕司職 ○中略

右件所領等者、故豐前前司能直朝臣、賜代々將軍家御下文、無相違所知行來也、○中略 仍爲後日證文總配分狀如件、

延應貳年四月六日　尼深妙花押

〔集古文書四十二寄附狀〕源賴嗣寄進 相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄進　鶴岡八幡宮御領事

相模國谷部鄕

則神道加護之所致也、爲敬神所奉寄進如件、

寶治元年六月廿日　右少將藤原花押

〔集古文書四十二寄附狀〕將軍惟康親王寄狀 伊豆國熱海走湯山東明寺藏

征夷大將軍家

進

相模國千葉鄕內鈴間二□左衛門尉

右奉㆑仰㆓伊豆權現㆒□承和往代祠宇祐基以來、一陰陽之尊神、靈驗不測、千手□□之垂跡、利益傍深、是以奉㆓進一村之田園㆒、祝㆓著万歲之春秋㆒、請□□或不㆑垂㆓玄鑒㆒、朝野泰平、州縣□□□卒事安全、黎民愷樂者、依□□□如㆑件、

弘安九年十一月廿九日　　左馬權頭兼相模守平朝臣花押

陸奧守平朝臣花押

〔杉浦文書〕永福寺藥師堂供僧等代承成與㆓相模國飯田鄕地頭等㆒相論條々

供米收納斗事

右訴陳之趣、子細雖㆑多、所詮承成則當鄕所當米、每年百八十石也、以㆓當國本斗㆒令㆓收納㆒之處、正嘉二年以後、地頭令㆑減㆓少收納斗㆒之由申㆑之、地頭亦爲㆓清左衛門尉滿定之奉行、被㆑定㆓下收納斗㆒之間、供僧所㆑加㆓判形㆒也、非㆓本斗㆒之旨陳㆑之者、〇中略爰於㆓引付之座㆒問答之時、地頭出帶、延應元年九月十二日御下知畢、如㆑狀者、可㆑用㆓御寺斗㆒之由被㆑載㆑之、自餘寺領、又用㆓寺家斗㆒之由、承成所㆓承伏㆒也、彼斗者、被㆑納㆓置寺庫㆒云々、然則寺庫之斗可㆓收納㆒也、〇中略

以前條々、依㆓鎌倉殿仰㆒、下知如㆑件、

正安元年十月廿七日

陸奧守平朝臣花押〇北條宣時

相模守平朝臣花押〇北條貞時

〔相州文書〕鶴岡八幡宮供僧大夫法印圓重與長江□□左衛門尉政綱相論相模國北深澤鄕內供料田壹町五段大分□米事

□正和三年以來、政綱致未進之由、圓重訴申之處、如政綱陳狀者、當郷者自往古里坪治定之間、供僧等、每年遂撿見、隨得田、面々作人致直納之條、古例也、云田數云作人、政綱不存知之間、給注文可遂進未結解云々者、(中略)然則於被供米者、政綱可究濟之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉曆三年八月十二日　相模守平朝臣花押(北條守時)

〔宇都宮文書〕花押(足利尊氏)

下　三浦介平高繼

可令早領知相模國大介職、幷三浦内三崎、松和、金田、菊名、網代、諸石名、大礒郷、(在高麗寺俗別當職)東坂間、三橋、末吉、上總國天羽郡内古谷吉野兩郷、大貫下郷、攝津國都賀莊、豐後國高田莊、信濃國村井郷内小次郎知貞跡、陸奥國糠部内五戶、會津河沼郡議(蟻)塚、幷上野新田(父介入道道海跡本領)事、

右以人爲勳功之賞、所宛行也者、守先例可致沙汰之狀如件、

建武二年九月廿七日

〔正宗寺文書〕正續院領相模國秋庭郷内信濃村事、近隣地頭御家人動擬致違妨狼籍之由有其聞云云、甚不可然、嚴密致警固、可全寺家知行之狀如件、

觀應二年十二月六日　花押(足利直義)

佐竹和泉前司殿

〔集古文書(四十二寄附狀)〕等持院尊氏公寄進狀(相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏)

奉寄　鶴岡八幡宮　相模國吉田郷

右爲天下安全、武運長久、所奉寄之狀如件、

正平六年十二月廿五日　正二位源朝臣花押

〔集古文書(三十四制札)〕正續院制札(下野國鹽屋郡喜連川處士三浦某藏)

制札

正續院所領、於相模國毛利庄內厚木郷、至致亂妨狼籍輩者、不云甲乙人、可處罪科之如件、

貞治三年十二月二日　三浦介花押

〔大庭文書〕鶴岡八幡宮御供料所、武藏國青木村內、宗興寺林慶昌庵買得之、幷船役同地下人等、買得所々相模國早河庄久富名內、中村播磨助、落合式部入道得買之、同國阿久和郷內水田、同國桑原郷內田畠、同國宮根山關所落合式部入道同前地等事、雖令沽脚爲德政所返附也、早止買得人綺、如元可全知行之狀如件、

寶德二年九月廿一日　花押〇足利成氏

當社少別當御房

〔擁書漫筆二〕相模國鎌倉郡瀨谷村の妙光寺は、日蓮聖人一宿の靈場といへり、〇中略洪鐘の銘に、〇中略南贍部州大日本國中、相州瀨谷郷住、藤原朝臣山田伊賀入道經光、雖執倍々利潤質、本主依置流之、爲大檀那、奉寄進妙光寺矣、于時寶德四年壬申卯月十六日、大工和泉守恒國とゑりたり、

〔集古文書四十五寄附狀〕北條氏綱寄進狀伊豆國熱海走湯山東明寺藏

相州中郡德延郷、爲御神領、奉寶納者也、仍如件、

永正十七年庚辰六月五日　氏綱花押

走湯山衆徒中

〔相州文書〕卯歲懸錢但六月分

右中島郷懸錢前之高辻百九十四文也、來七月晦日を切而、必々可致皆濟、相定分錢候間、不及催促、急度可致皆濟、此上致無沙汰付者奉行人濟々可被指越間、自地下中くりやもたひ可致之者也、仍如件、〇中略

丁卯六月廿四日〇永祿十年、有北條家虎朱印

中島鄕小代官百姓中

〔相州文書〕定

一於當鄕、不撰侍凡下、自然御國御用之砌、可被召仕撰出、其名を可記事、但八人、○中略

右自然之時之御用也、八月晦日を限而、右諸道具可致支度、鄕中之請負、其人交名以下を者、來月二十日ニ觸口ニ可指上、仍如件、

丁亥七月晦日　北條家虎朱印

岩○瀨○小代官百姓中

〔相州文書〕掟

一當鄕ニ有之者、侍凡下共ニ二十日可倩候、行之子細有之間、悉弓鑓鐵炮、何ニ而も得道具を持、何時成共一左右次第可罷出事、○中略

右七ヶ條之旨、能々見届、可入精愚ニ致覺悟候者、ハ行嚴科、又入精候者、爲忠節間、如記右似合々々之望を相叶、可被仰付者也、仍如件、

追御出馬御留守之間、御隱居御封判を、被爲推候、以上、

七月廿二日　北條家虎朱印

酒勻本鄕小代官百姓中

〔郡名一覽〕相模國御料私領　相州　四方三日　九郡

高貳拾五万八千貳拾六石五斗八升貳合貳勺　六百七十九ヶ村

●小田原二十里　○荻ノ山中二十里餘　□浦賀陸上十五里海上十九里　△荒川出張十九里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國舊村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕相模　九郡、六百七十一村、

御料私領高二十八万六千七百十九石七斗五升六合八勺九才　永高千三百四十六貫六百七十文

三浦郡七十八村　鎌倉郡八十九村　高坐郡百十八村　足柄上郡九十四村　足柄下郡八十三村　陶綾郡十九村　大住郡百十八村　愛甲郡四十五村　津久井縣

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

相模高座郡鵠沼村、陶綾郡國府本郷、足柄下郡酒匂村、神山村、風祭村、足柄上郡苅野岩村、大住郡馬入村、津久井縣千木良村、

〔新編相模國風土記稿十二足柄上郡〕今所唱里名

曾我楚賀　上曾我村、曾我、大澤二村是ニ屬ス、又足柄下郡ニ四村跨レリ、

〔新編相模國風土記稿二十二足柄下郡〕今所唱里名二

曾我楚賀　曾我谷津村以下四村是ニ屬ス、足柄上郡ニモ跨レリ、彼郡内ニ村屬ス　此里名ハ曾我物語ニ往往見ユ、宗祇ガ名所方角抄ニモ載ス、曰大磯ヨリ北ニ野ヲ隔テヽ、曾我ノ里有、○中略　又庄名ニモ唱ヘシト見エ、建久元年九月、四年五月ノ記、東鑑、井曾我物語。　曾我庄ノ名見ユ、○下略

〔相州文書〕山内莊秋庭郷内信濃村事、以左馬頭殿御判、寄附正續院之上者、甲乙人等不可致濫妨狼籍、若有違犯之輩者、可被行重科之狀如件、

建武三年五月九日　花押○斯波家長

〔新編鎌倉志一〕鎌倉大意

源順和名抄ニ、鎌倉郡ノ内ニ鎌倉ノ里アリ、何レノ地ヲ云ン歟不分明、大臣山ヲ鎌倉山トイヘバ、雪下ヲ鎌倉里ト云ンカ、藤實方ノ歌ニ、民モ又ニギハヒニケリ秋ノ田ヲカリテヲサムル鎌倉ノ里、又續古今集ニ、鎌倉右大臣ノ歌ニ、宮柱フトシキ立テ萬代ニ今ゾ榮ヘン鎌倉ノ里、夫木集ニ、藤原基綱ノ歌、昔シニモ、タチコソマサレ民ノ戸ノ煙ニギハフ鎌倉ノ里、又東路ヤアヘタ郡ノソノ

中ニイカデ鎌倉サカヘソメケン、中務卿宗尊親王歌ニ、十年アマリ五年マデモ住馴テナヲワスラレヌ鎌倉ノ里トアリ、按ズルニ東鑑ニ、陰陽權助國道云、所謂四境トハ、東ハ六浦、南ハ小坪、西ハ稻村、北ハ山内トアリ、然レバ此内ヲ鎌倉ト云ベシ、鶴岡記錄ニ云、鎌倉谷七鄕トハ、小坂鄕、小林鄕、葉山鄕、津村鄕、村岡鄕、長尾鄕、矢部鄕ヲ云ナリ、鎌倉七口トハ、名越切通、朝夷名切通、巨福路坂、龜谷坂、假粧坂、極樂寺切通、大佛切通、此外ニ小坪切通、稻荷坂アリ、稻荷坂ハ、十二所村ヨリ池子村ヘ出ル坂也、

〔萬葉集 十四 相聞〕東歌 ○中略

可麻久良乃、美胡之能佐吉能、伊波久叡乃、伎美我久由倍伎、己許呂波母多自、

麻可奈思美、佐禰爾和波由久、可麻久良能、美奈能瀨河泊爾、思保美都奈武賀、○中略

右十二首相模國歌、○中略

譬喩歌 ○中略

多伎木許流、可麻久良夜麻能、許太流木乎、麻都等奈我伊波婆、古非都追夜安良牟、

右三首相模國歌、

〔詞林采葉抄 五〕鎌倉山

凡鎌倉とは、鎌を埋める倉と云詞也、其濫觴は、昔大織冠鎌足、未鎌子と申し奉りし頃、宿願の事おはしましけるに依て、鹿島明神へ參詣之時、此由井の鄕に宿り給ひける夜、感靈夢て、年來所持し給ける鎌を、今の大藏松岡に埋み給けるより、鎌倉の郡と云、云々、

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月九日戊午、盛長自千葉歸參申云、至常胤之門前、案內之處、不經幾程招請于客亭、常胤兼以在彼坐、子息胤正、胤賴等在座傍、常胤具雖聞盛長之所述、暫不發言、只如眠、而件兩息同音云、武衞○源頼朝興虎牙跡、鎭狼唳給、縡最初有其召、服應何及猶豫儀哉、早可被獻領狀之奉書、常胤之心

中、領狀更無異儀、令興源家中絕跡給之條、感淚遮眼、非言語之所覃也者、其後有盃酒次、當時御居所非指要害地、又非御曩跡遠可令出相模國鎌倉給、常胤相率門客等、爲御迎可參向之由申也、　十月六日乙酉、著御于相模國、畠山次郎重忠爲先陣、千葉介常胤候御後、凡扈從軍士不知幾千萬、楚忽之間、未及營作沙汰、以民屋被定御宿館云云、

〔吾妻鏡 三十〕文曆二年(○嘉禎元年)十二月廿日戊申、爲御不例御祈、於御所南庭被行七座泰山府君祭、○中略 及黃昏被行四角四境祭、○中略 小袋坂、(雅樂大夫泰房) 小壺、(近江大夫親貞) 六浦、(陰陽少允以平) 固瀨河、(縫殿助文方)

〔海道記 源光行〕申の剋(○貞應二年四月十七日)に湯井濱に落著ぬ、玄ばらく休みて、此所をみれば、數百艘の舟ともづなをくさりて、大津のうらに似たり、千万字の宅軒をならべて、大淀のわたりにことならず、御靈の鳥居の前に日をくらして後、若宮大路より宿所につきぬ、○中略 十八日、此宿の南の軒ばに、高き丸山あり、山の下に細き小川あり、峯のあらしごゑ落て、夕の袖をひるがへし、潟水ひゞきそゝぎて、夜の夢をあらふ、年頭ゆかしかりつる所か、いつしか周覽相もよほし侍れども、いまだ旅なれば今日はむなしく暮しつ、○中略 其後立出てみれば、此ところの景趣は、うみあり、山有、水木たよりあり、廣きにもあらず、狹にもあらず、街衢のちまたは、かた〳〵に通せり、實に此聚おなし邑をなす、鄉里都を論じて、望まづめづらしく、豪をえらび賢をえらぶ、門挪しきみをならべて、地又賑り、をろ〳〵將軍の貴居を垣間見れば、花堂たかくおしひらいて、翠簾の色喜氣をふくみ、朱欄妙にかまへて、玉砌のいしずへ光をみがく、春にあへる鶯のこゑは、好客堂上の花にあざけり、あしたをおくる龍蹄は、參會門前の市に嘶ゆ、論せず本より春日山より出たれば、貴光たかく照て、萬人みな瞻仰士風塵をはらふ、威驗遠く誡て、四方こと〴〵く開きにおそる、何ぞ況や舊水源すみまさりて、淸流いよ〳〵遺跡をうるほし、新花榮鮮にひらけて、紫殿はるかに万歲をちぎる、凡座制を帷帳の中に廻て、徵肅郡國の間につくめたり、しかのみならず、家室は局をわすれて、夜

の戸をおしひらき、人倫は心を調てほこるともほこらず、愚政の至り治りて見ゆ、

夜の戸ものどけき宿にひらくかなくもらぬ月のさすにまかせて、此線邊に付て、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟檝の津、商賣の商人、百族にぎはひ、東西北の三方は高卑の山屛のごとくに立廻て、所をかざれり、南の山の麓に行て、大御堂新御堂を拜すれば、佛像鳥瑟のひかり、瓔珞眼にかゞやき、月殿畫梁のよそほひは、金銀色をあらそふ、○下略

〔東關紀行源親行〕抑かまくらのはじめを申せば、故右大將家〇源賴朝と聞え給ふ、水の尾の御門〇淸和の九の世のはつえをたけき人にうけたり、さりにし治承のすゑにあたりて、義兵をあげて朝敵をなびかすより、恩賞しきりに、瀧山の跡をつぎて、將軍のめしをえたり、營館をこの所にしめ、佛神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた、今繁昌の地となれり、中にも鶴岡の若宮は、松柏のみどりいよ〳〵しげく、蘋蘩のそなへかくることなし、○下略

〔宗祇終焉記〕鎌倉を一見せしに、右大將家のそのかみ、また九代のさかへも、たゞめの前の心ちして、鶴が岡のなぎさの松、雪の下のいらかは、げに岩し水にもたちまさるらんとぞ覺侍る山々のたゝずまひ、やつ〳〵、ま〳〵、いはゞ筆のうみもそこ見えつべし、

〔東國紀行〕かたせ川こしごえすぎゆけば、ゆゐの濱みなせ河も見えわたるほどなり、愛阿彌鎌倉よりむかひにきたれり、ゐるべしてむかしの跡など聞きくほど、暮がたに成てつきたり、旅宿は太守より後藤かたへおほせつけられ、淸閑をそへられ、幻庵より多田など案內者とてくはへられたれば、いづかたもおほつかなからず、舊跡のたびね其感有、けふは三月〇天文十四年一日、早朝先鶴が岡八幡宮參詣、松の木のまのさくらさかりにて、石淸水臨時の祭、舞人のかざしにおもひまがへられたり、近年御遷宮、あけの玉がきよりはじめ、見るめもかゞやく春の光、わづかにむかしおぼえたり、まづ金澤一見すべしとていそぎ侍れば、後藤案內いたしてうちいづるほど、めにちか

き谷々、右大將家の御跡、山がつもこゝろあるにや、はたにもなさず、芝志げらせ、はなち飼駒所へがほなり、ずるすみ、いけずきひやされしながれ、水さびいでかげもみえず、こゝかしこ過がてにするほど暮ぬべしといへば、いそぎつきたり、中略○暮はてぬほどにぞ、うちはへかまくらへくれば、妙法寺住持たるなとたづさへられ、迎にとてきたられしかば、又ゐひをかさねて、暮すぎたるほど旅宿につきたり、蔭山藤太郎來りて、一座の望のよし内儀申たり、ことに一向若年の執心もさりがたきことにて、例の發句、

ことゝはゞ花や志ら雲代々の春

三代將軍、九代の春もはなはかくこそは、圓覺寺の木末、さかりにみへたる會席なればなり、

〔新編相模國風土記稿二建置沿革〕平相國清盛威權弁ナカリシ頃ヨリ、諸國莊園ノ地多クナリ、註略○本州中モ多クハ武臣ノ私有トナリ、莊園ト稱スル地、居多ニシテ、古昔ノ郷名ヲ廢シ、或ハ私ノ郷名ヲ唱ヘ、或ハ莊名ヲ唱フル地多クアリ、中略○庄名ハ、足柄上郡ニ、大井庄、註略○同下郡ニ、早河庄、註略○又此二郡ニ跨ガリテ、中村庄、註略○曾我庄、註略○大住郡ニ、豊田庄、註略○糟屋庄、系圖纂ニ、閑院冬嗣ノ男眞方、相州在國ノ際、男元方糟屋庄ニ出生スト見エ、其男盛方、糟屋庄司ト見エタリ、波多野庄、註略○愛甲郡ニ、毛利庄、註略○高座郡ニ澁谷庄、註略○鎌倉郡ニ山内大庭庄、保元物語、大庭庄司景房ガ子、相模國住人大場平太景義、同三郎景親トハ、我事ニテ候ト云テ控タル云々トアレバ、當時庄名ヲ唱ヘシナリ、今尚現在ス、庄、註略○吉田庄、註略○等アリ、按ズルニ、此他舊唱有ベキナレド、今僅ニ所見ニ隨テ採錄シ、強テ搜求セズ、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月十六日乙未、平氏大將軍小松少將惟盛朝臣、率數萬騎、去十三日、到著手越驛之由、依有其告也、今夜至于相模國府六所宮、於此處被奉寄當國早河庄於箱根權現、其御下文相副御自筆御消息、差雜色鶴太郎被遣別當行實之許、御書之趣、存忠節之由、前々知食之間、敢無疎簡之儀、殊以可凝丹祈之由也、御下文云、

奉寄箱根權現御神領事

相模國早河本庄

爲宮根別當沙汰、早可被知行也、

右件於御庄者、前兵衛佐爲源頼朝沙汰、所寄進也、全以不可有其妨、仍爲後日沙汰、注文書以申、

治承四年十月十六日

〔吾妻鏡七〕文治三年六月十三日癸未、故左典厩御乳母參上、則召御前、談往事、令落涙給、是平治牢籠之後、自京都下向相模國早河庄、而爲庄内田地七町作人、令世渡之由言上、仍永可領掌彼地之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡五〕元暦二年〇文治元年十月二十九日戊寅、爲征豫州備州等之叛逆、二品今日上洛給、〇中略巳剋、令進發給、土肥二郎實平候先陣、千葉介常胤在後陣、今夜止宿相模國中村庄云云、

〔吾妻鏡八〕文治四年六月四日戊辰、所々地頭沙汰之間事、注條々、令付師中納言經房給之處、御返報今日到着、於勅答之趣者、爲讓子細、所頭獻右中辨定長朝臣奉書也、

相模國大井庄事

延勝寺領也、於年貢者、早可進寺家、〇中略

相模國早河庄事

已上三箇所、同家領也、年貢可沙汰送榛範許之由、先日申上之時聞召畢、

八條院領〇中略

相模國　山内庄〇中略

以上件庄領年貢、或先々注進、或本文書紛失、平家時分令致自由沙汰事も候き、又不知庄大小增進事も候き、子細庄家皆存知歟、委捜可令計沙汰、〇中略

以前條々、以此趣可被計遣之由、御氣色候、恐々謹言、

五月十二日　　　　　　　　　　　　　　權右中辨

〔圓覺寺文書 一〕正續院領相模國山内庄秋庭鄕内志奈野村事、自鎌倉依預置于軍勢、借食闕如云々、甚無謂、早停止預人等□□亂、可全寺家所務之由、可加嚴密催促之狀如件、

建武五年二月□□日　　　　　　　　　　花押〇足利直義

三浦因幡六郎左衞門殿

〔吾妻鏡 八〕文治四年八月廿三日丙戌、波多野五郎義景與岡崎四郎義實、於御前遂對決、是相模國波多野本庄、北方者義景累代相承所領也、而竊在京之隙、義實望申之、歸參之後、義景申云、當所者、保延三年正月廿日、祖父筑後權守遠茂、讓與二男義通云云、又嘉應元年六月十七日、讓義景之後、無牢籠之處、依何由緖望申哉、就之被召決之剋、義實申云、可與孫子先法師冠者之由、有義景先年狀云云、義景申云、先法師者、義景外孫也、縱雖請讓狀、外祖存生、爭可競望乎、是偏義實奸曲也云云、義實雌伏、爲全未來所言上也云云、御成敗云、當所進退宜任義景意、義實造意尤不當也、依其科百箇日之間、勤仕鶴岡幷勝長壽院等之宿直云云、　十一月廿七日丙辰、景能父景宗墳墓、在相模國豐田莊、而群盜競來堀開塚、盜取所納之重寶去畢、雖追奔之、不知其行方、思此事之始、去比狐鷩之由、見出時也云云、人以不思儀云云、

〔吾妻鏡 十二〕建久三年十二月二十日戊午、澀谷翟者、偏備勇敢、尤相叶御意之間、爲慰公事勤役、以彼等領所相模國吉田庄地頭、被申請領家圓滿院、爲請所、御倉納物、所被贖其乃貢也、

〔薩藩舊記 前集十二〕雜訴決斷所

相模國吉田上莊上深屋村内、北尾屋畝田畠在家立野、美作國河會莊十町南村内土志谷村田畠在家、薩摩國入來院中村内副田村田畠在家等事、

右當知行、不可有相違者、以牒、

建武元年六月三日　少判事中原朝臣花押

左中辨藤原朝臣花押

〔吾妻鏡十三〕建久四年六月七日壬寅、自駿河國還向鎌倉給、而曾我太郎祐信候御共之處、於路次給暇、剩免除曾我庄乃貢、可訪祐成兄弟夢後之由被仰下、是偏依令感彼等勇敢之無怠給也、

〔吾妻鏡十四〕建久五年八月八日丙申、今曉寅剋將軍家參相模國日向山給、〇中略因幡前司於下毛利庄献駄餉云云、　十月廿九日丙辰、三浦矢部鄉內、可建立一堂之由思食立、爲被訪故介義明沒後也、今日仰仲業巡撿其地云云、

〔集古文書三十四禁制狀〕覺園寺制札同寺藏

花押〇足利尊氏

禁制

覺園寺領相模國毛利庄內安田散田荻野鄉等事

右武士甲乙之輩、猥於左右、令亂入當所、或致殺生等之狼藉、或伐取竹木之條、甚不可然、於向後者、固可停止之、若有違犯之族者、爲處罪科、可注申交名之狀如件、

觀應三年六月十三日

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、波多野中務丞忠綱事、於無雙軍忠者、雖不及御疑、於御前對決之時、以義村稱盲目、爲惡口之上、以不加賞、可進罪科之由、有沙汰、所被聞也、子息次郎經朝賞事者、被行之、又由利中八郎、遂被召放所領云々、〇中略

相模國山內庄相州　同國菖蒲同上　同國大井庄山城判官　同國懷島エノシマ山城四郎兵衛尉

同國岡崎近藤左衛門尉　同國澀谷庄女房因幡局　坂東田原志村次郎

〔慈心院文書〕奉寄　清水寺

相模國糟屋莊豐部鄕內、雜色藤五跡田地事、

右爲レ祈二天之太平、當家之長久一、所二寄附一如レ件、

建武貳年五月七日　　參議花押足利尊氏○

〔鎌倉大草紙〕太田備中長尾左衞門が郞等百廿餘人討死して、陣床も取得ず、相州糟谷庄へ引退、

〔古文帖〕橫山彌一郞

相模國高座郡大高庄貳百二十石

右宛行之訖、全可レ令二知行一者也、仍如レ件、

天正十九年辛卯　御朱印

橫山彌一郞どのへ

〔慶應元年武鑑〕帝鑑間朝散大夫大久保加賀守忠禮　拾一万三千百廿九石餘　居城相州足柄下郡小田原江戸ヨリ二十里

北條家在城、天正十八、大久保七郞右衞門忠世、同相模守忠隣、慶長十九、御番城、寛永九、稻葉丹後守正勝、同美濃守正則、同丹後守正通、貞享三正月、依二台命一再城主大久保加賀守忠朝、以後代々領レ之、

菊之間朝散大夫大久保出雲守教義　一万三千石　在所相州愛甲郡荻野山中江戸ヨリ二十里餘○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕相模國○略註管八田萬千二百三十六町一段九十一步

〔伊呂波字類抄左國郡〕相模國管八(中略)本田万千三百卅六町□畝九十步

〔拾芥抄中末本朝國郡〕相模上達八郡(中略)田万千四百八十六町

〔海東諸國記〕相模州　郡八、水田一萬二千二百三十六町一段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十九万四千百四石　相模

〔和漢三才圖會六十七相模〕八郡　高十九万四千二百石

〔官中秘策二〕相模國　五郡○中略

一石高貳拾五万八千貳百拾六石餘

〔吹塵錄五 人口及國高〕天保度御國高調 〇中略

相模國 御料私領 一高貳拾八万六千七百拾九石七斗五升六合八勺九才 永高千三百四拾六貫六百七拾文

出擧稻

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻 〇中略

相模國、正税公廨各卅万束、國分寺料四万束、大安寺料二万六千九百束、文殊會料二千束、藥分料一万束、鎭守府公廨五万四千卅七束、修理池溝料三万束、救急料七万一千束、俘囚料二万八千六百束、官牧馬牛直五千五百八十三束、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕相模國 〇略 註 管八(中略)本稻八十六萬八千百二十束九把五分、雜稻二十六萬八千四百二十束九把五分、〇二十束九把五分原脫、據二一本一補、

國產貢獻

〔延喜式 二十三 民部〕年料別納租穀 〇中略 相模國 三千五百石 〇中略

年料別貢雜物 〇中略 相模國 筆一百管、零羊角四具、青木香八十斤、牧牛皮〇皮下數脫、中略、

諸國貢蘇番次 〇中略 相模國十六壺 六口各大一升、十口各小一升、 右八箇國爲二第一番一 丑未年〇中略

交易雜物 〇中略 相模國 商布六千五百段、鼓二石五斗、鹿皮廿張、鹿角十枚、紫草三千七百斤、布一千五百端、鞦二十具、鹿革廿張、履牛皮十二枚、榧子四合、

〔延喜式 二十四 主計〕相模 〇中略 右十一國麁絲 〇中略 相模 〇中略 右十國輸二絁一 〇中略

相模國 行程、上廿五日、下十三日、

調、一窠綾五疋、二窠綾三疋、三窠綾五疋、七窠綾五疋、橡帛十三疋、黃帛八十疋、紺布六十端、縹布卅端、自餘輸二絁布一、 庸、輸二綿布一、 中男作物、紙、熟麻、紅花、茜、短鰒、堅魚、海藻、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥 〇中略

相模國卅二種 黃芩十斤五兩、芎藭廿斤、茵陳蒿、茹苺、五茄、芍藥、黃耆、前胡各一斤、枸杞十八斤、藍漆七斤、紫菀八兩、菴䕡子二斤、防風三斤、橘皮十五斤十兩、瓜蔕二兩、款冬花九斤、白頭公一斤、麻黃六斤八兩、署預一斗、麥門冬一升、桃人、胡麻子各三斗、干地黃三升、附子一斗八升、大蛇床子一升、蕒蔚子二

升、荏子二斗、亭藶子五合、石硫黃一斗、猪蹄一具、丹參四斤、豉大五斗、

〔毛吹草　三〕相模

鎌倉柴胡　紅花　鼠大根（鼠ノ手ニ似リト云）　海老（伊勢海老ノゴトシ）　江島江豚（イルカ）　小田原海雀（魚也）　透頂香（トウチンコウ）

甲鉢　十間坂星下梅（日蓮宗數珠ニ用之、玉ニ星一ツヽ有ト云、）　大磯盆山敷石（五色ノ石有之）　爾布川飛石　秦野野大根

〔日本鹿子　五〕同國（○相模）名物出所之部

大根（秦野と云野原にあり、たれなまかずして、おのれといでくる也、）　鼠大根（かまくら邉より出る、鼠の手にかまにたり、よつてかく云ふ、）　柴胡（同所よりいづる）　紅花（同所よりいづる）　海老（世にかまくらゑびと云）　江島江豚（イカル）　小田原海雀　同鰹の扣（タヽキ）　同粕漬梅　同足駄　同外郎透頂香　同夢想枕　盆山敷石（大いそより出る、五色の石也、）　川村材木　十間坂星下梅（日蓮宗數珠に用、玉に星一ツ宛有、）

飛石（爾布川と云所より出る、小田原近所なり、）

〔日本書紀　三十持統〕六年五月辛未、相模國司、獻赤烏雛二隻、言獲於御浦郡、

〔續日本紀　六元明〕和銅六年五月癸酉、相模、常陸、上野、武藏、下野五國輸調、元來是布也、自今以後、絁布並進、又（○中略）相模、石硫黃、白樊石、黃樊石、　七年正月甲申、令相模、常陸、上野三國始輸絁調、但欲輸布、許之、

〔類聚國史　三十三帝王〕延曆十一年十月丁未、停相模國獻橘、伊豫國獻瓜、以路遠也、

〔朝野群載　二十七諸國公文〕主計寮移　主稅寮

勘送相模國年々正稅交易雜物事

治曆參年料

交易調布仟伍佰端　商布陸仟伍佰端　糸緉拾具　紅花拾漆斤　鹿皮貳拾張　鹿革貳拾枚

鹿角拾枚　御履牛皮拾伍枚　樠子肆合　紫草參仟漆佰斤　筆佰管　豉參斗伍升　槃餇

馬肆疋　同牛捌頭

右仰寮移併、撿二彼國稅帳一、頗有二物疑一者、撿二件國年々調帳一、所レ注如レ件、以移、

承保年月日　正六位上行尉

正六位上行允

〔慶長見聞集　三〕關東衣服昔に替る事

我○三浦淨心若きころ、三浦に六十ばかりの翁あり、語りしは、大永元年の春武藏の國熊ヶ谷の市に立しに、西國のもの木綿種を持來りて賣買す、是を調法のものかなと、買とりて植つればおいたり、皆人是をみて次のとし、又西國の者持きたるを、三浦の者ども、熊ヶ谷の市に出て買取り植ぬれば、四五年の內三浦に木綿多し、三浦木綿と號し、諸國にて賞翫す、夫より此方關東にて諸人木綿を著ると語る、

人口

〔官中秘策　二十五〕相模國　郡○中略

一人數三拾壹万七百九拾六人　內 拾六万七千七百九拾壹人男 拾貳万三千五人女

〔吹塵録　五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略○中

御料私領一人數貳拾七万八千六拾八人　內 拾四万七千九百貳拾七人男 拾三万百四拾壹人女○中略

高貳拾五万八千貳拾六石餘　相模國

諸國人數調弘化三丙午年略○中

御料私領一人數三拾万三千貳百七拾壹人　內 拾五万七千六百八拾四人男 拾四万五千五百八拾七人女

高貳拾八万六千七百拾九石餘　相模國

風俗

〔人國記〕相模國

相模之國ハ、風俗豆州ニ似ルトイヘドモ、人ノ氣轉變仕安キ所也、榮ル人ニハ緣ヲ以テシタシミ、今日マデナレシ人ニモ、不レ得二時而一盤居スルト見ル則ハ遠リ、無科人ニモ科ヲ付テソシリナシ、非

有ル人ニモ時メク人ヲバ馳走シテ是ヲホウビシ、常ニ榮花ヲ好ミ、好味ヲ求メ、酒色ヲ翫ブ風儀、十人ニ八九人如斯也、因玆主ハ被官ニ被放、被官ハ主ヲ捨テ、今日マデ傍輩ト成シ人ヲモ、明日ハ主君ト仰ギ、主ガ被官ニナリ、被官ガ主ニ成風俗也、而モ智アッテ智ニ迷ヒ、義ヲ知テ義ニ迷フ、誠ニ惡ヲ備ル風俗也、

〔日本鹿子五〕相模國名所之部

足柄山　同關　箱根山の北也、いにしへの海道也、今ははこね山を海道とせりと云、

秋迄は富士の高根に見し雪を分て越ぬるあしがらの關

竹の下道　足柄山のうち也、續拾遺集旅の歌に、平の長時、

あし柄の山のふもとに行くれて一夜宿かる竹の下道

八重山　はこね山の北なる山をいふ

ふりつもる雪の八重山道とぢて行末うときあしがらの關

鎌倉里　北南へ遠き所也、東は山、西は海也、谷々とて谷合々々を居所したる跡あり、入口七ヶ所、皆巖土手を切とをしたる總がまへ、所々のこりて今に有、鎌倉右大臣の歌に、

宮柱ふとしきたて丶万代に今ぞさかへんかまくらの里

鶴が岡　かまくら山のうち也、若宮八幡立給ふ、くはしく神社の部に有之、

年へたる鶴が岡部の松の葉の青みにけりな春のしるしに

六の浦　大倉谷を南へ行、かまくらのうちを出れば此所を通る也

手本の浦　浪の瀨川　片瀨川　ちかきあたりに續きたる名所共なり

派てこし手本の浦のかひあらば千鳥の跡を絕すとはなん

御浦　越木の礒

思ふこと まつに月日はこよろぎの礒にや出てけふはうら見ん

しぎたつ澤　大礒の宿はづれより、小礒と云所迄のうち也、

心なき身にもあはれはしられけるしぎたつ澤の秋のゆふぐれ〇中略

大礒　小礒　諸越が原　足合の里　此所みなならびて、ちかく有名所どもなり、

鞠子川　そのかみ、源の賴朝、此川をわたりたまふに、梶原景時がのりたる馬のけ上し水、大將の御馬上にかゝりければ、景時取あへず、

まり子川ければぞ浪はあがりける、かく申けるにぞ、打ゑませ給ひて過させ給ひけると云傳へ侍る、

〔延喜式　兵部二十八〕諸國健兒〇中略　相模國一百人〇中略

諸國器仗〇中略　相模國甲四領、横刀九口、弓六十張、征箭六十具、胡籙六十具、

〔日本後紀　桓武十二〕延曆廿四年二月乙巳、相模國言、頃年差鎭兵三百五十人、戍陸奥出羽兩國、而今傜丁之少、勳位多數、伏請、中分鎭兵、一分差勳位、一分差白丁、許之、

〔萬葉集　東歌十四〕相聞

安思我良能乎氐毛許乃母爾佐須和奈乃可奈流麻之豆美許呂安禮比毛等久、

相模禰乃乎美禰見所久思和須禮久流伊毛我名欲妣氐吾乎禰之奈久奈、

或本歌曰、武藏禰乃乎美禰見可久思和須禮遊久伎美我名可氣氐安乎禰思奈久流、

和我世古乎夜麻登敝夜利底麻都之太須安思我良夜麻乃須疑乃木乃末可、

安思我良能波姑禰乃夜麻爾安波麻吉氐實登波奈禮留乎阿波奈久毛安夜思

或本歌末句云、波布久受能比可利與利己禰思多奈保保亦保爾〇二首略

母毛豆思麻安之我良乎夫禰安流吉於保美目許曾可流良米己許呂波毛倍杼、

阿之我利能、刀比能可布知爾、伊豆流湯能、余爾母多欲良爾、故呂何伊波奈久爾、

阿之我利能、麻萬乃古須氣乃、須我麻久良、安是加麻可左武、許呂勢多麻久良、

安思我里乃、波胡禰能禰呂乃、爾古具佐能、波奈都豆麻奈禮也、比母登可受禰牟、

安思我良乃、美佐可加思古美、久毛利欲能、阿我志多婆倍乎、許知氐都流可毛、

相模治乃、余呂伎能波麻乃、麻奈胡奈須、兒良久可奈之久、於毛波流留可毛、

右十二首、相模國歌、○中略

譬喩歌

阿之我里乃、安伎奈乃夜麻爾、比古布禰乃、斯利比可志母與、許己波故賀多爾、

阿之賀利乃、和乎可雞夜麻能、可頭乃木能、和乎可豆佐禰母、可豆佐可受等母、○中略

右三首、相模國歌、

古事類苑

地部十一

武藏國上

武藏國ハ舊ク身剌、又ハ牟邪志ト書シ、並ニ之ヲムサシノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ下總、西ハ信濃、甲斐、南ハ相模、北ハ上野ニ界シ、東南海灣ニ至ル、東西凡ソ二十六里、南北凡ソ二十五里、其地勢ハ、利根ノ河流北境ヲ繞リ、秩父ノ山峯西堺ニ連ル、其間概ネ平夷曠濶、所謂古ノ武藏野ニシテ、實ニ坂東平野ノ中部ニ屬セリ、此國ハ古ヘ國府ヲ多磨郡ニ置キ、久良、都筑、多麻、橘樹、荏原、豐島、足立、新座、入間、高麗、比企、幡羅、橫見、崎玉、大里、男衾、榛澤、那珂、兒玉、賀美、秩父ノ二十一郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、後下總國葛飾郡ノ一部ヲ割キテ、此國ニ屬セリ、德川氏幕府ヲ此國ニ定ムルニ及ビ、田野日ニ開ケ、人衆月ニ加ハリ、國況一變ス、明治維新ノ後、豐島、葛飾、足立、埼玉ノ四郡ヲ各、南北ニ、多摩郡ヲ東西南北ノ四郡ニ分割シ、凡テ二十九郡ヲ立テシガ、後更ニ廢合ヲ行ヒ、東多摩、南豐島二郡ヲ合シテ豐多摩郡ヲ置キ、橫見郡ヲ比企郡ニ、那珂、賀美ノ二郡ヲ兒玉郡ニ、幡羅、男衾、榛澤ノ三郡ヲ大里郡ニ併セ、又下總國中葛飾郡ヲ割キテ北葛飾郡ニ併セ、新ニ東京市、橫濱市ヲ置テ、二市二十郡ト爲シ、東京府、埼玉縣、神奈川縣ヲシテ之ヲ分治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕武藏牟佐之

〔地名字音轉用例〕字ヲ省ケル例

むざし　武藏口國　藏字ハ、ザニ用ヒタルナルベケレバ、シニ當タル字ヲ省ケルナルベシ、藏ハザシニハ用ヒガタカルベケレバナリ、古事記ニハ牟邪志ト書キ、邪モ藏モ濁音ナレバ、古ヘサヲ濁リシナルベシ、古書ニ身刺トモ書タリ、身ヲムト云ルコト、例多シ、

〔日本風土記一寄語島名〕武藏　木散署

〔倭訓栞前編三十一〕むさし　武藏をよむは、音の轉せる也、もと古事記には胸刺と見ゆ、又歌に佐泥佐斯佐賀牟とあるも、佐は發語、泥はむねの略、さむねさしにて、武藏相模を並べ擧たる也、にひばりつくばを並べ擧たるが如し、又或は佐斯の間泥を脫し、さねさねしにて、相模の枕辭也ともいへり、輕皇子の歌に、さねしさねてはとよめるが如し、

〔古事記傳七〕牟邪志國造、武藏なり、今は邪を清て唱れども濁るべし、此邪、又藏字、又万葉十四に、牟射志野と書る射字、いづれも濁音に用る例なり、名義未思得ず、師說には、相模武藏もと一ッにて、牟佐なるを上下に分て、牟佐上牟佐下と云、その上は牟を略き、下は毛を略けるなり、凡て牟佐てふ地名國々に多く、又東の國々は、上總下總上野下野などの如く、上下に分ッ例なりとあり、此說うち聞には諧なりとおぼゆれど、なほ定め難きことあり、其由は中卷傳建の處に云べし、

〔古事記傳二十七〕さて佐斯を國の名と云は、駿河相模武藏の地を、總て本は佐斯國とぞ云けむを二ッに分けて、相模武藏とはなれるならむ、駿河は後に又相模より分れたること、上に云るが如し、かくて其相模と云名は、佐斯上の斯を省き、武藏は身佐斯の意なるべし、古書ともに身刺と多く書り、身とは中に主とある處を云、屋の中に主とある處を身屋と云が如し、後に母屋と云は、牟夜を訛れるなり、されば武藏は佐斯國の內に、主とある眞原の地なれば、如此は名けつらむ、佐を濁るは連便なり、さて一國を二ッに分て名る例、或は前後、或は上下と云ぞ、なべての例なれども、又丹波を分て、丹波、丹後と云は、後に對へて、丹前とは云へざれば、此佐斯國を分たるも、佐斯上に對へて、佐斯下とは云ざるも、例あることなり、

〔諸國名義考上〕武藏

和名抄に、武藏(牟佐之、國府在多麿郡、)名義はいまだ考得ず、縣居大人は、身狹上に對ひたる身狹下なりといはれつれど、諸ならぬ事は上に云り、古事記傳に、○中略名義いまだ思ひ得ずとあり、立入信友云、國造本紀に无邪志國造の次に、胸刺國造とあるも、近き地名と聞えたり、胸刺身刺などの古事によれる地名ならむかといへり、續日本紀稱德天皇神護景雲二年六月癸巳、武藏國獻白雉云々、奏云、雉者斯良臣一心忠貞之應、白色乃聖朝重光照臨之符、國號武藏、既呈戢武崇文之祥云々とあるは、もと牟邪志の三字を好字に改め、二字に定め、武藏と書て志字を略かれしより、後に此國より白雉を奉りしにつきて、武藏の二字を祝して奏したる詞なり、必しも國名の起りと莫思ひ誤そ、さるを或書に、武藏國風土記とて引たるに、武藏國秩父嶺者、其勢如勇者怒立、日本武美此山峯、爲祈禱、以兵具納埋岩藏、故曰武藏といへるは、いにしへ字音のなき事をも、和銅の勅命をもしらぬ後人の字義になづみたる僞作なり、かにかくにしれがたき國號なり、

〔温故隨筆二〕武州の訓は、六つさしの略、さしは道路の義なり、此國諸州人の海道なればなり、小兒の翫ぶ十六むさしといふものにても知るべし、古事記に刺國とあるは、則武藏ならん、○中略又加茂氏が、むさがみむさしともいふ說、本據なしといふべからず、

〔武藏志料二〕武藏國號考

當國の名付し故、その義詳ならず、又物にも見る所なし、○中略さてその文字も、上古は定まれる事なく、古事記には牟邪志と書たるは假名書也、その後元明天皇の御宇に、國郡鄕村の名を改めて、能字二字に定められし時に、武藏とは書改められし也、故に此字によりては、その意推量るべからず、下にその事をしるしつけぬ、

第一　一通云、牟邪志美也、その故は、牟邪は草也、志美は繁也、上古の時は、東方の國は未王化も及

ばざりし故に、民の家居も定らず、もとより守司の官もなかりしほどに、唯木草のみ生茂りたれば、獸禽の住るのみなるべし、後の世にさへ、此國には八百里の曠野有と名に負て、武藏野とさへいへば、行ども秋の果もなきなども、歌にも讀て、天下の最哉一の事とはせる也、さも有つらん、〇中略

第二　又一通の說、此國は廣く大なる故に、その隣國六有、それは相模、甲斐、信濃、上野下野、下總なり、この六國に堺の差合たれば、六〇差〇といふ意なるも又知べからず、

第三　又一通の說、この國關八州の中央に有是を人の形にたとふるに、相模を首とす、故に小首(さがみ)と云ふ歟、武藏その次に有ば、身の如し、身は武と通ひて、武久呂ともいへり、さしは古へ三韓の方言に城を左志といへり、此訓日本紀の古點に見えたり、しかれば中央城の意にても有べき歟、〇中略

第四　又一通說、右第三通は、文字にあづからず、詞と意とによりていふ所なり、さて元明天皇の御宇に、文字を改められし時、武藏とせし事、是又その由故なくては叶ふまじき事也、よて思ふに、秩父郡に武甲山といふ有、土俗傳へ云、昔日本武尊東夷を征したがへ給ひて、その甲を此山に埋め給ひしと、その事攝津國武庫山の故事の如し、此山も定めて武甲(むかふ)とこそ訓つらんを、字の音の俗に引れて、今はぶかうとはいへる、是又訛也、その武を用ゐたるか、藏は局にて、とざしの略し武事を收め、軍器を山にかくされし故、戸閉(とざし)といへるなるべし、〇中略

今按に、此事その故有に似たれども、武は音、藏は訓なり、音訓相交へてその義をいはん事、强たりとはいふべからん、されども國郡名は、音訓相交へて用たれば、ひたすらその義無ともいふまじければ、しばらくしるして後の校正を待のみ、

第五　又案に、國名風土記に、秩父郡武甲山に、日本武尊の甲冑をとめ給ひし事をいへり、〇註略是

は攝津國兵庫の武庫山の事を思ひ合せて書るにやとも思ふに、續日本紀二十九稱德天皇神護景雲二年六月癸巳、武藏國獻白雉、その勅に云、國號武藏、既呈戢武崇文之祥と、群卿の奏上しを思へば、さいへる事有といはんも、また據なしとも云べからず、卷廿九ノ九丁ノ右

或人云、武藏相模は、もと上下の國也、古へ虜囚を武佐といへり、上古三韓の囚人を置し事諸國に有、攝津の高麗郡、當國にも高麗郡有、さて近江國の武佐の郡も、またその虜囚置し所なれば、相模は武佐上(むさかみ)の上を略き、武藏はむさ下の下を略なるべしと、是上下國を分つの例也といへり、

〔江戸紀聞 一〕江戸城

松隣夜話に云、永祿八年、北條氏康子息氏政、上田又次郎入道安獨齋を先陣として、上道中武藏に取詰、江戸の城を責落さんとす、平井柿崎前橋の北城、相ともに中武藏の虛弱を警固のため、兩方より三百五十宛、すべて七百の兵を別て、太田方へ遣しをき、○下略

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

武藏、江戸測量所、淺草御藏前 極高三十五度四十一分半、經度東四度三分、從日本橋二十三町五十間、

武藏江戸深川黑江町、極高三十五度四十分半、經度東四度半、從日本橋二十二町三十七間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

武藏	川崎	三五度三二分三〇秒	江戸	三五度四二分〇〇秒
	桶川宿	三六度〇〇分三〇秒	蕨宿	三五度五二分〇〇秒 ○中略

東西里差

山城	京	〇度〇〇分〇〇秒 ○中略	武藏	江戸	東四度〇四分〇〇秒

〔新編武藏風土記稿 一總國圖說〕武藏國ハ、氐ノ分野ニ屬ス、江戸ノ地、北極出地三十五度半、或ハ三十六度、水土考國ノ大抵巽ヲ首トシ、乾ヲ尾トス、南北表、相模國志名野坂ニ屬ス鎌倉郡堺ヨリ、上野國新町宿

疆域

綠野郡ニ屬ス界勅使河原賀美郡迄三十二里十九町、東西廣、下總國松戸渡界金町村ヨリ、松戸ハ下總州、金町ハ武州、共ニ葛飾郡、甲斐國雁坂峠山梨郡ニ在界迄四十一里一町、廣袤里程正保檢査ニ據此武甲ノ界ハ、山林岑蔚ノ地ニシテ、人跡ノ及バザル所、凡七八里モアルベシト云、此邊秩父郡ハ開國最初ノ地ナリ、三峯ヲ鎭トシテ連山併峙シ、多西郡筑數郡大小ノ諸山、波濤ノ如ク朝宗ス、東ノ方ハ利根川、及其支流海ニ疏通シ、大城ノ前後、平坦ノ地廣大ナリ、是故ニ魚鹽ノ利、山野ノ產ニ富ム、

〔武藏演路一〕當國界限、東は下總國を界、西は甲斐信濃國を限り、南は相模國、北は上野國を限れり、

〔日本地誌提要十八武藏〕疆域　東ハ下總、西ハ信濃、南ハ相模、北ハ上野、東北ハ下野、東南ハ海ニ至ル、

東西凡貳拾六里、南北凡貳拾五里、

〔武藏志料四〕國境四至　武相堺杭在武藏橘樹郡程谷、相模鎌倉郡平戸、　矢宿ハ相中ニテ、平戸ヨリ又先ナリ、

戸塚堺杭

癸未紀行林道春　寬永廿年九月　矢宿坂、在戸塚東一里許、土人曰、是武藏相模堺也、

關左風烟湘水雲、今看俗習異曾聞、擔夫向客聊饒舌、相武二州從此分、

今按に、武藏相模の堺杭は、矢宿坂にあらず、それより北方にて、信濃坂の中程に有、武藏の國は橘樹郡程谷宿と、相模國は鎌倉郡平戸村との堺に有、今はそこに榜示杭有て、堺の地藏とて小堂あり、矢宿はやがて相模の國内にて、平戸村より又先にあり、からたがひは誰も有事にて、往來經過の時、人の云にまかせてしるすものなれども、百年以前といひ、且は名家の云置し事故、さもやと思ふ人も有んとてしるしつくるものなり、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、その男身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじあづまの方にすむべき國もとめにとて行けり、○中略むさしの國と、しもつふさの國とのなかに、いとおほきなる河あり、それをすみだ川といふ、

〔更科日記〕そのつとめて、そこを立て下つさの國と武藏の境にて有、ひと井がはといふ、かゝみのせ、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ舟にてかづく物などわたす、○中略野山葦荻の中を分くるより外の事なくて、武藏と相模との中に有て、あすた川といふ、在五中將のいざことゝはむとよみけるわたり也、中將の集には、すみだ川とあり、舟にて渡りぬれば、相模の國になりぬ、にしとみといふ所の山、ゑよくかきたらん屏風をたてならべたらんやうなり、

○按ズルニ、ひと井がは下總國江戸川ニテ、あすた川ハ舊ク下總國ト武藏國トノ境ニ在リシ隅田川ナリ、而ルニ本書ニ、下總國ト武藏國トノ境ニ在ルヲひと井川ト爲シ、武藏國ト相模國トノ中ニ在ルヲあすた川ト爲セルハ誤ナリ、事ハ渡篇大井渡ニ引ク武藏國隅田川考ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

〔續視聽草二集十〕武藏國略圖附略考

淺草川舊名荒川、世俗兩國川ト云、以東新武州の地は、古昔下總の國に屬せしを、後世變革ありしと云事は、皆人の知る處なれど、その國界改りし年歷を未だ詳にせず、江戸砂子等に、元祿或は貞享中の事と云は、もとより無稽の說にして論ずべくもあらず、現に正保の比成しと云御國繪圖には、利根川國府臺下を流るゝ川筋也以西を武藏國に屬したり、又天正十九年、葛西金町村の鎭守香取社へ御寄附ありし御朱印の文にも、武藏國葛西金町鄉と記されたれば、是よりさきに改りし事、疑ふべくもあらず、予○三島政行前に地理志編集の事に與りし時、私に葛西志と云もの編錄して奉りし頃、此變革の證を得まく思ひて、普く蒐りしに、たまたま或村民の家に傳へし古文書一通を得たるもの、右に摸刻せるが如し、○摸刻略之、但此文書收載二郷條、此書年代記ざれど、政助は古河公方政氏の家老にて、簗田大炊頭といひし人なれば、その時代推て知るべく、且平沼の鄉と書しは、今の二郷半領平沼村なれば、此頃既に武州と唱へし事證すべし、然れば、たゞに天正頃のみならず、其改りし事の古きを知べ

島嶼

地勢

地味

し、此書實に明證なれば、予篤く乞て珍藏せしが、後熟察するに、かゝるものをひめ置んは所謂和氏璧を櫃に藏するに似て益なし、しかじ是を世に公にすべしとて、王子金輪寺は、好古者のつどへる處なれば、かの寺僧に謀りて、社寶の一品に寄納し、且因に新武州變革の大略、及此文書年代等の愚考をも附記したれば、志あらん人は、その眞蹟を一覽して、予が妄言ならざる事を知り給へかし、

丙申木王月　凸凹齋識

〔上野國志那波郡〕武州兒玉郡、都島山王堂宿仁手沼和田等、寛永ノ始マデハ那波郡ニ屬ス、寛永中洪水ニテ、烏川北ニ徙リテヨリ武州ニ隷ク、

〔日本實測錄九島嶼〕武藏國豊島郡實測　佃島　周廻六町二十六間半　寄場島　周廻一十一町七間半

久良岐郡　遠測　夏島

〔易林本節用集下〕武藏武州大、管二十一郡、四方五日半、野宏而无山、仍欠良材、田畠豊而野菜類多、大上上國也、

〔名所方角抄中〕鎌倉より奥州へ下るに、先むさしへ出るなり、武藏野の初る所は、鎌倉より五六里也、鎌倉より北にあたるなり、國中に山なし、秩父山の嶽は、西のはしなり云々、むさし根といふも、此秩父山なり、此山よりみこしに富士は見えたり、又荒川といふは、秩父山より流れ出るにより、東へ流れ出る大河也、

〔日本國事跡考〕武藏國平原廣野、不見山、千村万落、雞犬相聞、朝日夕日、出沒草際、鶴鵠鳧雁、充滿其中、處々有沼、產鯉魚嘉魚、隅田川在武藏下總之界、水深有舟、有鳥曰都鳥、

〔武藏演路一〕一日武藏大管、田畑百十六万餘石、山なし、仍良材を欠けり、田畑豊にして野菜の類多

道路

しと云々、右は往昔の事にして、今山野を開發し、海澤を築出し、新田となるもの幾千万石といへるを不知、大上上國也と稱せしも宜なるかな、且四方運送の便よく、各國より來て貨財を交易、万邦比すべき地なし、誠に天府の國と云べし、

〔日本實測錄(二街道)〕從東京東海道至西京

武藏國東京日本橋(至深川黒江町郎忠敬所居、二十二町三十七間、北極高三十五度四十分半、) 一里一十九町八間(至芝口一丁目一十九丁五十七間) 同芝大木戸 一十八町二十間 荏(エ)原(ハラ)郡品川宿 二里三十三町一十間(至川崎宿六郷川岸二里二十八丁五十二間) 橘(タチ)樹(バナ)郡川崎宿、三十五度三十二分半、 二里一十九町五十五間(至市場村七丁一十二間) 神奈川宿 一里二十一町三十七間(至保土ヶ谷宿帷子橋一里一十丁一間) 保土ヶ谷宿、三十五度二十七分、 二里一十九町四十九間(至國界二十七丁五十八間) 相模國鎌倉郡戸塚宿(中略○)

從東京歷大山及御殿場至大月

武藏國東京芝口一町目 二十八町二十八間 同赤坂傳馬町一丁目 一里三町五十七間 豐島郡澀谷道玄坂町 二里二十一町八間(至玉川岸二里一十三丁二十三間) 橘(タチ)樹(バナ)郡二子村 二里四町九間 都筑郡荏田村 一里三十五町一十八間 長津田村 一里一十町二十七間(至國界二十一丁五十七間) 一 相模國高座郡下鶴間村

〔日本實測錄(三街道)〕從東京中山道至草津

武藏國東京日本橋 四町一十間半 同本町 一十三町五間 同神田旅籠町(至坂本町至千住小塚原町一里一) 二十一町三十間 東京駒込追分町 一里一十四町五十一間 豐島郡板橋宿平尾(十二丁四間半) 九町二十七間 板橋宿 一里一十八町四間(至荒川岸一里一十七丁二間半) 一 足立郡下戸田村渡船場 二十四町五間 蕨宿、三十五度五十分、 一里一十町三十四間 浦和宿 一里一十二町五十五間 大宮宿 二里六町三十五間 上尾宿 一里一町三十八間 桶川宿、三十六度三十秒、 一里三

十五町一十五間、鴻巢宿、三十六度四分、四町一十五間、同土手外、二里八町二十七間半、大里郡久下村ハラ原、一里二十一町八間、熊谷新宿、八町三十六間、熊谷本宿、三十六度九分、一十一町(ママ)十四間(至熊谷寺門前、四十四間、)石原村、二里二十六町二十間、榛(ハン)澤(ザハ)郡深谷宿、三十六度一十一分半、二十四町一十六間、牛原(本澗部)二里二町四十八間、兒玉郡本庄宿、三十六度一十四分、一十町四十二間、本庄宿新田町、一里三十町一十六間(至國界神流川岸、一里二十丁三十一間、)上野國綠野郡新町宿(○中略)

從東京歷岩槻及忍至熊谷、

武藏國東京駒込追分町、一里八町二十間半、豐島郡王子村、三十五度四十五分、一里四町二十四間、岩淵宿、一十一町一十五間(至荒川岸、一丁五十三間、)足立郡川口宿、一里五町三十四間、鳩谷宿、三十五度四十九分半、二里二十五町三十一間、大門宿、一里二十四町五十一間、埼玉郡岩槻久保宿町(至田中橋、一十一丁四十三間半、)二里三十三町三(三下有脫字)(至黑濱村、一里一十四丁二十七間、)篠津村、三十六度一分半、二里三十三町二十四間(至菖蒲戸箇崎村、三十四丁五間、)騎西町場、三里一町一十九間半(至赤城村、一里一十九丁四十三間、)佐間村(至忍行田町、八丁三間、北極高三十六度七分半、從行田町、至小沼橋門、四丁三十六間、)一里二十八町四十間、大里郡熊谷新宿(從東京至熊谷、)街道、通計一十八里三十二町二十二間、

從中山道板橋歷川越至熊谷、

武藏國豐島郡板橋宿平尾、二十町四十一間、上板橋村、二十五町三十七間、下練馬村(至金乘院、六丁一十二間、)一里五町五十四間、新座郡白子村、三十五度四十七分、一里三町一十一間、膝折村、三十四町三十六間、大和田町、一里一十三町二十一間、入間郡大井町、二里一十一町二十五間、松鄕(至仙波喜多院、一十三丁九間、)七町五十四間(至川越松鄕町、五十四間、自松鄕町、至志義町、三十丁九間、)川越本町(歷大手前、至江戸町、二丁三十六間、北極高三十五度五十五分、)四里三町五十五間半(至志多町橋、四丁一十七間半、從橋至入間川岸、三十四町四十二間、從川岸至松山下新田、二里二十七丁一十

一間、比企郡松山町 三里一十三町一十二間半（至荒川岸二里三十四丁三十一間半）十 大里郡熊谷宿熊谷寺門前（從板橋至熊谷）街道、通計一十五里三十一町四十七間

從中山道久下沿荒川至東京

武藏國大里郡久下村ハラ原 一里二十七町五十三間 足立郡糠田村（至鴻巣宿土手外三十丁二十七間） 二里二十一町二十九間 上川田谷村 二里一町二十四間 平方村 三里一十三町三十間 植田谷本村新田、三十五度五十二分半、 四里一十二町三十六間（至道場原一里二十七丁四十六間） 下笹目村早瀬 一里一十一町四十五間 下戸田村渡船場 一里二十一町一十八間 川口宿 三里八町二十八間（至本木村二里一十九丁四十三間半） 千住掃部宿 一里四十一間半（至綾瀬川口一十六丁二十二間、從川口至木母寺前一十町五十五間半、） 葛飾郡寺島村白髭社前 二十町六間 東京中之郷竹町（歷大川橋至花川戸町一丁五十八間） 一十八町四十七間半 同本所元町（歷兩國橋至横山町、四丁一十四間半） 二町一十一間 同相生町一丁目（沿立川至中川岸一里一十丁） 九町三十九間（至深川元町七丁九間） 同深川萬年橋南頭（沿小名木川至中川岸一里四丁四十二間） 八町二十間 同佐嘉町永代橋東頭（從久下至東京）荒川岸、通計二十二里三十五町八間

從中山道石原歷秩父至高坂

武藏國大里郡石原村 三里二十五町二十七間半 榛澤郡小前田新田村 二十八町三十三間 寄居村 一十五町一十二間 同常木（至正龍寺四丁一十八間） 一十一町三十間 末野村（至少林寺四丁三十六間） 三十一町三十間 秩父郡矢那瀨村 一里二十町三間 本野上村 二十八町五十七間 金崎村、三十六度四分半、 二十二町四十間半 皆野村 一里八町四十七間 大野原村（至大宮郷本町三十五丁） 坂（一十八間、從本町至上町限九丁一十二間半、又從本町歷秩父神社至藏福寺觀音堂三町、） 三十三町 三澤村 一里二十六町四十五間 本村 一里一十四町六間 安戶村 三十一町五十一間 比企郡增尾村（至大塚村八幡社四丁二十一間、從社前至大樓寺四丁一十二間、） 八町三十九間 小川村 一十六町一十二間 同下分（至西光寺三丁一間） 一里一十四町二

十一間　菅谷村、三十三度六分、　二里六町四十二間　高坂村（從石原至高坂）街道、通計一十九里二十
町一十六間

從中山道本庄歷下仁田至借宿

武藏國兒玉郡本庄宿新田町　一里二十六町二十一間半（至七本木村三十一丁二十四間半）賀美郡長濱村（至笠御魂
神社一十一丁一十一間）　二里二町五十七間（至國界神流川岸五丁二十一間）　上野國綠野郡藤岡町（中略）

從東京歷甲府至下諏訪

武藏國東京赤坂傳馬町一町目　一十二町四十一間　同麴町十一町目　一十二町三十七間
同四ッ谷大木戶　七町二十三間　豐島郡內藤新宿　一里三十五町五十四間　多摩郡下高井戶
村　一十三町三十九間　上高井戶宿　一里一十六町　布田國領村　二十一町二十七間　布
田上石原村　一里九町（至府中六所明神社前一里六丁四十五間）　府中宿　二里六町二十四間　日野宿下河原（至一
ノ宮小野神社一里一十七丁一十六間）　一里二十六町八間　八王子橫山八日市宿　四町一十二間　同八幡宿
一里二十七町二十三間半（至小佛關所一里十二丁一十七間）　二
上長房村駒木野宿新井（至高尾山藥王院二十二丁二十間半）
十一町二十七間　同小佛宿、三十五度三十八分、　一里一十四町五十五間半（至國界小佛峠十九丁二十六間）
相模國津久井縣與瀨村小原宿（中略）

從東京奧州街道至野邊地

武藏國東京本町　一十二町二十一間　同橫山町　七町三十一間　同淺草片町（至頒曆所二十六間）　一
十三町二十一間　同村木町大川橋通　二十八町三十一間　豐島郡千住中村町　七町四十間
（至千住大橋南頭三丁二十九間半）　足立郡千住掃部宿　二里二十四町四十九間半　草加（サウカ）宿、三十五度五十分、
一里三十三町二十間　埼玉郡越谷宿　二里二十五町五十九間　粕壁宿、三十五度五十九分、
一里二十四町三十七間　葛飾郡杉戶宿　一里一十二町四間　幸手宿、三十六度四分、　二里八

町四十八間　栗橋宿、三十六度八分半、　七町九間〈至栗橋關所前四十三間、從關所前、至國界房川岸、一丁一十間半、〉　下總國都賀郡野木宿

〔日本實測錄一沿海〕從東京沿海至大坂

武藏國東京芝大木戶　四里一十一町二十四間〈至大森村一里三十三町三十八間、從大森、至羽田辨天社一里一町四十八間、〉　橘樹郡川崎宿六郷川岸　七里一十町二十四間〈至稻荷新田一里六間、從稻荷新田、至市場村三里六丁三十四間、〉　保土ヶ谷宿　帷子橋　一里三十四町三十五間　久良岐郡本牧本郷村、三十五度二十五分、　三里二町三十四間　富岡村、三十五度二十二分、　二里一十六町二十三間　泥龜新田〈六浦本金江廻、一里二十二町二十二間〉　一十五町　六浦　三里一十二町二十間〈至國界三十町四十五間半〉　相模國三浦郡横須賀村〈○中略〉

從陸奧國三厩沿海至東京

下總國千葉郡檢見川宿　二里一十六町一間半〈至馬加宿二十七町二十九間半〉　葛飾郡船橋五日市　一里二十七町三十五間半〈至船橋五日市一十町五十三間〉　本行德町　二里三十五町三十九間半〈至國界利根川口一里三十一町六間〉　武藏國葛飾郡又兵衞新田〈沿中川至龜有村三里一十九町五十一間〉　二里一十二町二十六間〈至洲崎辨天一里三十町六間〉　東京深川佐嘉町永代橋東頭　二里一町四十九間　同芝大木戶

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年十月己卯、太政官奏、武藏國雖屬山道、兼承海道、公使繁多、祗供難堪、其東山驛路、從上野國新田驛達下野國足利驛、此便道也、而枉從上野國邑樂郡經五箇驛到武藏國、事畢去日、又取同道向下野國、今東海道者、從相模國夷參驛達下總國、其間四驛、往還便近、而去此就彼、損害極多、臣等商量、改東山道屬東海道、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〈○中略〉

武藏國驛馬〈店屋、小高、大井、豐島、各十疋、〉傳馬〈都筑、橘樹、荏原、豐島郡、各五疋、〉

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年三月乙巳、東海道巡察使式部大輔從五位下紀朝臣廣名等言、〈○中略〉

武藏國乘潴豐島二驛、承山海兩路、使命繁多、乞准中路、置馬十匹、奉勅依奏、

〔新編武藏風土記稿豐島郡九〕總說

今按ニ、大古ハ武相ノ界ハ、山野ニテ人跡通ゼズ、故ニ海道ハ相州ヨリ安房國ニ渡海シ、夫ヨリ上總下總ニ達ス、是武總ノ界モ蒼海ニ隔ラレシナレバ、斯ノ如クナラザル事ヲ得ズ、故ニ當時當國ハ山道ニ屬シテ、上野國ヨリ府中ニ達シ、又同道ヲ反リテ下野ニ達セシナリ、然ニ安閑天皇ヨリ光仁天皇マデ、世ハ二十二世、年ハ二百四十餘年ヲ歷ルノ間、武相ノ界闢ケテ往來通ジケレバ、相模國高座郡伊參驛ト當郡、豐島驛トノ間ニ三驛ヲ置レ、荏原郡、大井驛ヨリ豐島ニ通ジ、夫ヨリ乘潴驛ニ至リ、扨下總國葛飾郡ノ驛ニ達セシナリ、然ドモ舊ニ依テ、當國尙山道ニ屬セシカバ、官使ノ來ル上野國邑樂郡ヨリ横ザマニ同郡五个驛ヲ經テ乘潴驛ニ至リ、夫ヨリ豐島ヲ經テ府ニ達シ、事畢テ又同道ヲ反リシナリ、サレバ豐島、乘潴、山海兩路ヲ承クトハ云シナリ、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月二日辛巳、武衞相乘于常胤廣常等之舟楫、濟大井隅田兩河、○中略今日武衞御乳女故八田武者宗綱息女、小山下野大掾政光妻、號寒河尼、相具鍾愛末子、參向隅田宿、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年六月九日庚寅、於武藏國、左衞門尉景頼令生虜金持次郎左衞門尉將叅、是令與力泰村、去五日籠法華堂、致合戰、俄改變約諾逐電、于時赤威鎧駕鴾毛馬、隆登彼寺後山嶮岨、同六日到于武藏國河貲垣宿、爰景頼郎從等搦捕之云云、

〔享保集成絲綸錄二十二〕延寶九酉年三月、

東海道宿々二割增之覺

一江戶ゟ品川　江二里　本駄賃百四文　から尻賃六拾四文　人足賃四拾八文

中山道宿々二割增之覺

一江戸ゟ板橋江二里半　本駄賃百七文　から尻賃六拾七文　人足賃五拾貳文

日光海道宿々二割増之覺

一江戸ゟ千住江二里八町　本駄賃百五文　から尻賃六拾六文　人足賃五拾文

一江戸ゟ岩淵江三里拾五町　本駄賃百五拾四文　から尻賃百四文　人足賃七拾四文

甲州海道宿々二割増之覺

一江戸ゟ上高井戸江四里拾三町　本駄賃百七十八文　から尻賃百九文　人足賃八拾六文

當年道中就困窮、右之通駄賃人足賃も増候間、當酉三月十五日ゟ同十月晦日迄、如書面取之、十一月朔日ゟハ、延寶三年卯正月、可爲相定通候、以上、

三月

〔江戸砂子五下〕品川　東海道御傳馬宿、日本橋より二里、北本宿、南本宿、歩行新宿南北二ヶ村、凡千石の場、

里人の云、南北宿の境川を品川といふと、一説に、武藏國品川の驛は、往古此奈革を染たる所なりと、訓閱集曰、武藏國大渡庄にて四名革を染るとあり、甲冑を威に齒朶革を用ゆ、當所にて染たる革か、源平盛衰記に、源頼政品川絨の鎧を著たりとあり、品川にて染たるゆへ、品革といふにや、地名と前後分明ならず、今立合といふ所、いにしへしな革を染たる所といひつたふよし、里人の語ぬ、いづれ分明なることをしらず、猶たづぬべし、

〔南向茶話〕問曰、芝邊品川筋之儀に聞及も候はれける事も候哉、承度候、

答曰、〇中略品川の號、或古老の物語に、元下無川と云り、子細は、此前川海岸に近く、川下直に海に入るゆへ也と、此説慥ならず存候に、近頃俳諧人齋藤德元、寛永五年冬、京都より關東下向の紀行の内に云、加の川、此町の中に橋のかゝれる川あり、水上のなき川なればとて上無川と號す、かむ川

なるを、かの川とは申とかや、〇下略今云神奈川宿の事なれば、右之說これに似たり、

〔新編武藏風土記稿 五十四荏原郡〕品川宿

品川宿ハ郡之東海岸ニ傍テ在、海道五十三驛ノ一ナリ、府下ニ接近セルヲモテ、旅人往來尤繁シ、驛亭三區ニ別ル、一ハ南品川宿、一ハ北品川宿、一ハ步行新宿ナリ、古ハ品川村ト唱ヘシヲ、中古町ト改ム、其年代ヲ傳ヘズ、正保元祿ノ國圖共ニ品川町ト記ス、又宿ト改稱スルハ、享保ヨリ後ナリト云リ、鄕庄ノ唱ヲ傳ヘズ、按ズルニ、南品川妙國寺所藏永享六年ノ文書ヲ始トシテ數通ニ、南品川鄕ト載セ、北品川稻荷南品川貴船社ノ御朱印ノ文ニ、品川鄕ノ內云々ナド記ス、當寺多ク某村ト記スベキヲ、某鄕ト記セリ、是等モ其類ニヤ、土人云、古ハ品ケ輪ト書シヲ、後今ノ字ニ改ム、此地出崎或ハ山谷アリテ、品ヨキ地形ナレバ、隣村高輪ニ對シテ品ケ輪ト名付ト云、サレド高輪ハ高繩手ノ下略ナリトイヘバ、此說イカヾハアラン、又今宿內目黑川ノ古名ヲ品川ト云シヨリ、地名トナリシトモ云リ、南向茶話云、元ハ下無川ト云シヲ、後ニ省略シテ、シナカハト唱ヘ、文字モ從テ假借スト云、或書ニ往古鎧ノ威ニ用ル品革(品革威ノコト、源平盛衰記ニ、此奈革トハ藍革ニ文ニシダテソ付タリケルナリトアリ、)ヲ染出セシ所ナレバ、地名トナリシト云、後ノ二說ハ、土人更ニ傳ヘズ、全ク附會ノ說信用スベカラズ、按ニ、文明八年、僧得幺ガ江亭記云、南顧則品川之流、溶々漾々以染碧、人家鱗差乎北南云云ト、北品川トアルハ、全ク海上ヲ云シトモ聞エズ、恐ラクハ當時目黑川ヲ品川ト稱セシコト、土人ノ說ノ如クナリシニヤ、サレバ川名ヨリ起リシト云說穩ナルベシ、〇中略御打入ノ後ハ、慶長六年正月、彥坂小刑部元正、大久保十兵衞長安、伊奈備前守忠次等、東海道巡見ノ時、驛場ニ定メラレ、驛馬三十六匹ヲ定額トシ、五千坪ノ地子ヲ免許セラル、此時步行人夫ノ數モ定メラレシナルベケレド詳ナラズ、

〔江戶名所圖會 四〕品川驛　江府の喉口にして、東海道五十三驛の首なり、日本橋より二里、南北と

分つ、東海寺の南に傍て、貴船の社の側を流るゝ川を堺とす、或人云く、是則品川と稱する所の水流なりと云々、旅舍數百戶軒端を連ね、常に賑はしく、往來の旅客絡繹として絕す、

〔御府內備考一百八品川〕品川は、今も南北品川宿、又步行新宿と稱して、町奉行の支配に屬せす、たゞ白金に續きし邊に、台町と云もの少しく在り、その餘は寺院の門前町のみ、町方の支配に入れり、

〔江戶名所圖會九〕內藤新宿。甲州街道の官驛なり、此地は舊內藤家の第宅の地なりしが、後町屋となる、故に名とす、日本橋より高井土迄の行程凡四里餘りにして、人馬共に勞す、依て元祿の頃、此地の土人官府に訴へて、新に驛舍を取立る故に新宿の名有り、然りといへ共、故有りて享保の始廢亡せしが、又明和九年壬辰、再び公許を得て驛舍を再興し、今は繁昌の地となれり、此所より高井戶へ一里廿五町あり追分といふは、同所甲州街道八王子通、及び青梅等への分道なればなり、

〔德川禁令考五十二高札〕享保三戌年十月

內藤新宿之儀、宿場相止候旨御書付、

內藤新宿之儀、甲州計り江之道筋に而、旅人も少く、新田之儀ニ候間、向後古來之通宿場相止、家居等も常之百姓町家ニいたし商賣物迄渡世爲致可申候、尤自今猶以猥成儀無之樣ニ入念可申候、右宿場相止候付而、馬次之儀も、古來之ごとく、日本橋より高井戶宿馬次に可申付候、新宿運上金不納幷拜借金之儀者、追而可被伺候、

一右新宿之旅籠屋共、二階座敷之分不殘取拂はせ可申候、

以上

明和八卯年

內藤新宿繼場相成候ニ付所々江相建候高札

定內藤新宿江建之

一內藤新宿より之駄賃并人足錢江戶迄

荷物壹駄六拾七文　乘掛荷人共同斷　から尻馬壹疋四拾四文〇中略

右之通可ㇾ取ㇾ之、若於ㇾ相背ㇾ者可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ者也、

明和八年月日　奉行〇中略

安永元辰年四月十一日

內藤新宿繼場ニ相成候儀御觸書

水野出羽守殿御渡

甲州道中は、江戶高井戶宿より人馬繼來候處、內藤新宿繼場ニ相成、當月十四日より、登りは江戶、內藤新宿、高井戶宿、下りは高井戶宿、內藤新宿、江戶と人馬繼立候間、可ㇾ得ㇾ其意ㇾ者也、

右之趣、向々江可ㇾ被ㇾ相觸ㇾ候、

四月

右之通可ㇾ被ㇾ相觸ㇾ候

〔新編江戶志五〕板橋。

中仙道の海道筋也、板橋の名は古來よりあり、鎌倉大草紙に、板橋城の事あり、豐島氏末流此處に住して、板橋と稱するもあり、北條分限帳にも板橋志村とあり、上板橋、下板橋とわかれて、兩道あり、

〔江戶名所圖會十三〕板橋驛　中仙道の首にして、日本橋より二里あり、往來の行客常に絡繹たり、東海道は川々の差支多しとて、近世は諸侯を初め往來繁ければ、傳舍酒舖軒端を連ね、繁昌の地たり、驛舍の中程を流るゝ石神川に架する小橋あり、板橋の名こゝに發るとぞ、板橋は上下に分てり、此地を下板橋と稱す、上板橋は練馬道にして、此地よりは西南の方の通路をいふ、

〔江戸名所圖會十七〕千。住。大橋　荒川の流に架す、奥州海道の咽喉なり、橋上の人馬は絡繹として間断なし、橋の北壹貳町を經て驛。舍。あり、

〔五驛便覽乾〕東海道

一品川（武州荏原郡）江戸より貳里　御料　貳里半
一川崎（同國橘樹郡）　御料　貳里半
一神奈川（同）　同　壹里九丁
一程ヶ谷（同）　同　貳里九丁
一戸塚（相州鎌倉郡）　同　貳里
○中略

中仙道

一板橋（武州豐島郡）江戸より貳里　御料　貳里拾丁
一蕨（同國足立郡）　同　壹里十四丁
一浦賀（同）　同　壹里十丁
一大宮（同）　同　貳里
一上尾（同）　同　三十四丁
一桶川（同）　同　原市江壹里三十丁　鴻巣江壹里貳拾四丁
一鴻巣（同）　同　四里六丁四拾間
一熊谷（同國大里郡）　阿部能登守領分　常陸國行田江貳里　相模國松山江三里半　深谷江貳里半九丁　玉村江貳里三十丁　新町（上野）江貳里
○中略
一深谷（同國榛澤郡）　御料　貳里半七町
一本庄（同國兒玉郡）　同

水戸佐倉道

一新宿（武州葛飾郡）　御料　千住江壹里十九丁　八幡（下總）江貳里六丁　松戸江壹里五丁貳拾間　小岩江壹里半（中略）

日光道中

一千住（武州足立郡）　御料　岩付口舍人江貳里　下妻道大原江貳里　水戸道新宿江壹里十九丁　草加江貳里八丁
一草加（同）　同　壹里廿八丁
一越ヶ谷（同國埼玉郡）　同　岩付江三里　柏壁江貳里三十丁
一柏壁（同）　同　關宿江四里八丁　杉戸江壹里半三丁
一杉戸（同國葛飾郡）　同　壹里半七丁
一幸手（同）　同　岩付江四里　栗橋江貳里三丁
一栗橋（同）　同　古河（下總）江壹里廿丁　此宿日光江計片道筋
○中略

壬生道〇中略

一岩附　武州埼玉郡　大岡兵庫頭城下　幸手江四里　粕壁江壹里三十丁　越ケ谷江三里　大門江貳里半十一丁

一大門　同國足立郡　御料　壹里貳拾五丁

一同　鳩ケ谷　同　壹里拾五丁

一川口　同　江戸江三里十五丁

一岩淵　同國豐島郡　同　鳩ケ谷江壹里十五丁　江戸江三里十五丁〇中略

甲州道中

一内藤新宿　武州豐島郡　御料　江戸方貳里　高井戸江貳里

一下高井戸　武州多摩郡　御料　是者安永元辰年、新規繼場被ニ仰付一候、　上石原江貳里十六丁四拾間　上布田江貳里壹丁四拾間　下石原江貳里九丁四拾間

一上高井戸　同　上布田江壹里廿五丁　國領江壹里十九丁　下布田江壹里廿三丁

此兩宿一ケ宿分

一國領　同　府中江壹里三十丁三拾間

一下布田　同　上高井戸江壹里廿三丁　府中江壹里廿七丁

一上布田　同　下高井戸江貳里一丁四拾間　府中江壹里廿五丁　上高井戸江壹里廿五丁

一下石原　同　下高井戸江貳里九丁四拾間　府中江壹里十七丁

一上石原　同　下高井戸江貳里十六丁四拾間　府中江壹里拾丁

此五ケ宿壹ケ宿分

一府中　同　小田原道關戸江壹里四丁　日野江貳里

一日野　同　岩槻道古河新田江貳里

一横山　同　鶴島江壹里廿三丁　小佛江貳里十六丁十八間　駒木野江壹里廿七丁

一駒木野　同　小原江貳里十三丁

一同 小佛　同　駒木野江廿七丁　小原江壹里廿貳丁

〔日本國郡沿革考 二東海道〕武藏 古作无邪志 國造記 舊屬東山道、寶龜二年十月、更屬東海道、○註略 大國

管二十二郡 延喜式二十一郡、拾芥抄二十四郡、 三千四十二村

豐島 百十四村 荏原 九十四村 橘樹 百二十八村 安閑紀作橘花 久良岐 五十四村 延喜式等作久良、東鑑作海月郡、安閑紀倉樔疑是、

都筑 七十六村 多摩 四百三村 古府治、延喜式作多麻、和名抄作多磨、安閑紀多氷、疑指此地、 新座 三十七村 入間 二百六十一村 萬葉集伊利麻治、即是、 高麗 百五村 靈龜二年五月、以駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野七國高麗人千七百九十九人遷于武藏國、置高麗郡、

男衾 三十六村 大里 四十六村 比企 百五十八村 横見 四十五村 和名抄云、今稱吉見、安閑紀作横渟、 足立 四百四十五村 秩父 八十三村 古知々夫國、見國造記、

葛飾 二百八十一村 近世折下總國之葛飾郡所置、俗謂之新武藏、 埼玉 四百二十七村 萬葉集前玉之小埼、即是地、 幡羅 ハラ 五十九村

榛澤 八十一村 那賀 十三村 延喜式等作那珂、拾芥抄載二那珂、可疑、 兒玉 六十三村 賀美 三十三村

新羅 天平寶字二年八月、歸化新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人、移武藏國閑地、於是始置新羅郡、後廢、未詳在何時、

東海 見拾芥抄、廢置未詳、 大縣 同上

〔新編武藏風土記稿 二建置沿革〕上古國造時代ニハ、今ノ武藏國ハ、知々夫今秩父 无邪志武藏ナリ 胸刺三國ノ地ナリ、其開闢ノ次序ハ、知々夫ヲ初トス、○中略 知々夫彦命ヲ國造ト定ラル、○中略 此後國造聞エル事ナシ、且知々夫ノ地、國ヲ降シテ郡トシ、武藏ニ併入セシ年代亦傳ヲ失フ、○註略 无邪志國地域今考ベカラズト雖、舊本足立府ヲ載スルニ據バ、足立埼玉邊、數郡ノ地其管內ニテ、其界域ハ成務天皇五年ニ定ラレ、○註略 又兄多毛比命ヲ國造ト定ラル、○註略 此後三百餘年ノ間、无邪志國造ノコト聞エズ、當時ノ國府ハ足立郡ニ在テ、今ニ大宮宿邊ニ遺跡存ス、又應神天皇ノ御宇、按ズルニ、國造本紀朝廷ノ號ヲ闕、今考定シテ姑ク此御宇トス、 胸刺國造ヲ伊狹知直ニ定ラル、胸刺今何ノ地ナルコト知ラズ、然ドモ西ニ知々夫アリ、東ニ无邪志アレバ、今ノ多磨郡ノ地ナルベシ、○中略 其年紀、想ニ无邪志國造ヲ置レシ後、朝ハ四世、年ハ百餘ヲ歷シナリ、此胸刺モ、人皇以來國造ヲ置レシ國數、凡百四十四ノ內ト云、國造本紀 此後四世ノ帝王ヲ歷テ、允恭天皇ノ御宇、諸國境ノ

標ヲ立ラル、〇註略此時ハ猶三國ナリシニヤ、此後胸刺ノ國ノコト、寥然トシテ聞エズ、是ヨリ八世ノ朝ヲ歷テ、繼體天皇ノ御時、國造一族互ニ職ヲ爭シコトアリ、〇中略事勢ヲ想像スルニ、當時既ニ胸刺國ヲ廢シテ武藏ニ入シナラン、此時天下ニ畿內七道ヲ置レシ時、當國ハ東山道ニ隷セシナリ、〇中略靈龜元年五月〇中略庚戌、當國以下六國ノ富民ヲ陸奧ニ移サル、〇註略二年五月辛卯、高麗郡ヲ置カル、〇中略神護慶雲元年十二月、足立郡人大部直不破麻呂等ニ、改テ武藏宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、又不破麻呂ヲ國造トセラル、〇中略寶龜二年十月、東山道ヲ改テ東海道ニ屬セラル、〇中略天慶元年〇註略國司ト郡司トノ爭起シヨリ、遂ニ平將門ガ亂ヲ釀成ス、〇中略將門誅ニ伏シテ後、恩賞行ハレ、藤原秀鄕、平貞盛、源經基等、英雄相繼テ當國ノ守ニ任ズ、是此國坂東ノ大國ニシテ、其守ニ任ズルコト、尤規模トスレバナルベシ、サレバ治績モ奄新ニ、國務モ違期ノ失ナカリシナラン、然ニ大寶以來、年所ヲ經テ、功田不輸ノ地域世々ニ多ク、公武買得ノ庄園年々ニ加ハル、遂ニ班田公平ノ法ヲ廢墜セシムルニ至リ、各門戶ヲ立、各莊園ヲ有ス、其尤著名ナルハ武藏七黨ト號ス、曰橫山、〇註略曰猪俣、〇註略曰野與、〇註略曰村山、〇註略曰西、〇註略曰兒玉、〇註略曰丹治、〇註略是皆古ノ良民ニシテ、後世ノ鄕士ナリ、當時京師ノ大番ヲ勤メ、或ハ武者所瀧口トナリ、或ハ牧監別當トナリ、歸テ各家門ノ面目トス、是ヨリ先永承中ニ奧州安倍賴時、及男貞任謀反セシ時、源賴義朝臣鎭守府將軍トシテ征伐ス、尋テ其嫡男義家朝臣鎭守府將軍タリシ時、又武衡家衡亂ヲナス、當時當國ノ諸士、皆將軍父子ニ從テ多ク武名ヲ著ス、〇註略故ヲ以義家將軍ノ嫡孫、左馬頭義朝朝臣、鎌倉龜谷〇註略ニ在テ源家ノ棟梁タリシ時、當國ノ諸士皆心ヲ寄ス、義朝死シテ後、三男賴朝卿、配謫シテ伊豆國ニアリ、永曆ヨリ治承ニ至マデ二十年ニ及ブ、斯テ最勝王ノ令旨ヲ受テ、平家追討ノ企アルニ及テ、闔國早ク其下風ニ歸ス、當時江戶太郞重長ハ江戶ニアリ、〇註略時ニ治承四年十月四日、河越太郞重賴、畠山次郞重忠等ト、同ク武衞將軍ノ長井ノ陣ニ參會ス、〇註略同五日、將軍特ニ命ジテ、當國在廳以下

ノ事ヲ江戸太郎重長ニ沙汰セシメラル、〇註略又豊島權守清光、葛西三郎淸重、足立右馬允遠元等モ參向ス、〇註略其餘熊谷次郎直實、〇註略熊谷小次郎直家、〇註略平山武者所季重〇註略等參向シテ麾下ニ屬ス、〇註略是ヨリ先、當國ノ政、國守廳府ニ在テ沙汰スト雖モ、庄公雜糅セシ故ニヤ、秩父權守重綱撿按職トシテ國務ニ與リ、其孫畠山庄司二郎重忠ニ至ルマデ蔭襲ス、〇註略治承四年、鎌倉殿早ク全國ヲ賜ハリ給ヒテ後モ、重忠因循シテ職ニアリシナラン、今年三月、六十六箇國ノ總追捕使並ニ地頭ニ補セラレ給ニ及テ、諸國ニ守護ヲ置、庄園鄕保ニ地頭ヲ置レシカド、當國ハ鎌倉ノ領國タリシ、譜代衆國守ニ任ジテ、別ニ守護ヲ置レザリシナリ、〇註略又治承ヨリ今年ニ至ルマデ、亂國ノ際、國務ノ事モ閑却セラレシカド、コノ年丙午ヨリ乃貢ヲ勵濟セシメラル、〇中略正治元年正月十三日將軍薨、治承ヨリコヽニ至マデ二十年當國ヲ領セラル、〇註略其後宣下有テ、左中將賴家故將軍ノ遺跡ヲ續シメラレ、二月六日、吉書始ノ儀アリ、中宮大夫屬入道善信吉書ヲ草ス、武藏國海月郡事云云、〇中略建曆二年二月、守平時房入部ノ後、各鄕ニ鄕司職ヲ補ス、修理大夫泰時難ゼシカド、時房領掌セズ、〇註略十月、奉行人等下向シテ民庶ノ訴ヲ沙汰ス、〇註略建保元年五月、橫山黨ノ人々、和田左衞門尉義盛ガ亂ニ與シテ、死者凡三十人、〇註略尋テ勳功ノ賞行ハル、〇中略康元元年十一月、相模守時賴病ニ依テ武藏守長時執權トナリ、當國國務ヲモ沙汰ス、

〔新編武藏風土記稿三建置沿革〕當國ハ治承四年、將軍源賴朝、朝恩ニ依テ拜賜セラレテヨリ、賴家、實朝二代ノ將軍ニ傳ヘ、〇註略續テ二位尼、賴經、賴嗣、宗尊親王、惟康親王、久明親王、守邦親王マデ、〇註略管領セラレシカド、賴經以下ニ至テハ、執權北條氏國務セシナルベシ、〇註略府廳ハ此後舊ニ依テ存セシナラン、何ノ頃廢セシニヤ詳ニセズ、〇註略六月三日、尊氏ノ息千壽王丸、下野國ヨリ鎌倉ニ還入、〇註略其後恩賞行ハルヽ時、當國ハ足利治部大輔尊氏ニ行ハル、〇註略爰ニ於テ尊氏ノ臣高師直ヲシテ守タラシム、〇中略延元元年正月、官軍ト大渡ニ戰フ、〇中略尊氏將軍ハ合戰ニ利ヲ得テ入

洛シ、八月、豐仁親王ヲ王位ニ定メ奉ル、光明院是ナリ、〇中略此ニ於テ天下二分シテ南北二朝トナル、當國ノ諸家或ハ北朝ニ歸シ、或ハ南朝ニ屬ス、〇中略文和元年正月、將軍鎌倉ニ入、〇中略此頃新田左兵衞佐義興、同武藏守義宗、同左衞門佐義治、武上信越ノ間ニ在テ、吉野ノ勅ヲ蒙テ義兵ヲ起ス、國人多ク催促ニ應ズ、〇中略閏二月十六日、高麗彥四郎經澄ガ勳功ノ賞トシテ、高麗郡內高麗三郎兵衞尉ガ地頭職ノ闕ニ補セラル、〇註略新田左兵衞佐義興、少將義宗、左衞門佐義治、當國へ打越、兒玉黨、丹黨、西黨、東黨、私市、村山、橫山黨皆從フ、〇中略二十日、將軍尊氏、武藏野ニ打出、新田武藏守義宗等ト戰フ、〇註略二十八日、再ビ小手差原ニ戰フ、新田方大ニ尊氏ノ陣ヲ敗ル、〇中略康安〇中略六年四月二十六日、左馬頭基氏逝去、〇註略嫡男金王丸、東國ノ管領ニ補セラル、〇中略十二月七日、征夷將軍義詮薨、〇註略若君幼稚ナレバ、細河右馬頭賴之ヲ天下ノ管領職ニ居シメ、武藏守ニ補任ス、〇中略應永二年三月、上杉中務少輔朝宗入道禪助ヲ管領トス、〇中略二十三年八月、新御堂滿隆、犬懸入道禪秀、陰謀シテ鎌倉ヲ滅サントノ廻文ヲ回ラス、當國ノ諸士コレニ應ズ、〇中略二十四年正月朔日、新御堂滿隆持仲、上杉禪秀鎌倉ヲ立テ世谷原ニ陣取、〇註略五日南一揆江戶豐島等、世谷原ニ向テ戰フ、當方敗ス、〇註略九日、又合戰ス、禪秀敗シテ鎌倉ニ歸、翌日滿隆持仲禪秀、武藏守護代兵庫助氏春皆滅亡ス、江戶豐島鎌倉ニ入、〇註略十七日、駿州ヨリ左馬頭歸入、戰功ノ輩ニ恩賞ノ地ヲ與フ、江戶豐島等第一タリ、

〔新編武藏風土記稿四建置沿革〕永享〇中略十二年、結城七郎氏朝、故持氏ノ幼息ヲ守護シテ結城ニ籠城ス、管領ノ下知ニ依、討手發向ス、上杉右馬助憲信入道性順ハ若林、長尾左衞門尉景仲ハ入間河原ニ陣ス、〇中略今年ヨリ寶德ニ至ルマデ九年、關東主無シテ諸國穩ナラズ、〇中略享德三年十二月、管領右京亮憲忠ヲ殺ス、憲忠其罪ニアラズ、〇中略長尾入道、越信武上ノ兵ヲ催テ、成氏退治ノ御教書ヲ京將軍ニ請フ、〇註略康正元年正月、典厩鎌倉ヲ立テ、府中高安寺ニ動座、上州ノ敵退治ノ爲ナ

リ、○中略典厩ハ上杉ト野州ニ戰ケルガ、上杉ハ騎西ニ退キテ陣シ、典厩ハ古河ニ動座、是ヨリ年久シク、此所ヲ居所トセラル、○中略二年正月、岩松右京大夫、上杉方ト岡部ニ戰フ、○中略此年江戸城ヲ築ク、○註略長祿元年四月、河越城成、○註略岩槻城成、○中略長享二年正月、兩上杉未和セズ、當國松山ニ戰フ、○註略秋、山内顯定、鉢形ニアリ、故道灌子太田源六郎、來從テ平澤ニ居、○中略永正元年九月、扇谷五郎朝良、大將軍トシテ立河原ニ陣ヲ張ル、山内ノ管領民部大輔顯定入道可諄、及當屋形憲房、東八州ノ軍兵ヲ催テ會戰ス、朝良敗シテ河越ニ入、○註略二年三月、山内顯定父子河越ヲ圍ム、朝良和ヲ乞フ、依テ山内ハ上州ニ、扇谷ハ江戸ニ歸入、○中略享祿三年六月、上杉朝興ト北條新九郎氏康、小澤原ニ戰フ朝興敗北ス、○註略四年七月、古河御所政氏朝臣逝去セラル、久喜ニ葬リ、甘棠院ト號ス、○中略十四年九月、上杉憲政河越城ヲ圍ム、城中ニハ北條左衛門大夫綱成籠ル、○註略十月、古河御所上杉加勢トシテ河越ニ後詰セラル、○中略永祿○中略十二年八月、甲斐武田信玄小田原ニ攻入ントシテ、當國ニ兵ヲ出ス、○中略元龜元年、北條氏政秩父迄出陣、信玄蓑輪ニ働クヲ以テナリ、○註略十月北條左京大夫氏康卒、○註略三年閏正月、秩父新太郎氏邦、岩槻太田十郎氏房等兵ヲ野州ニ出ス、氏政ノ命ニ依テナリ、○中略天正○中略十八年、小田原兵亂、○註略時關白ノ命ニヨリ、三手ニ分テ當國ニ入、○中略四月、青木城陷ル、○註略松山城留守ノ者モ開城ス、○註略本田砦自落、○註略河越城兵亦退去、○註略八王子城ヲ攻テ是ヲ拔、○註略江戸城ヲ受取、○註略五月、岩槻城陷ル、○註略六月、鉢形城降ル、○註略秩父ノ諸城亦落著ス、○註略忍城主成田下總守氏長、和談シテ城ヲ渡ス、○註略此餘落去セシ諸城ハ、小机、○註略木栖、羽生、菖蒲、○註略深谷、○註略八幡山、○註略久下○註略其外砦倘數箇所アリ、○註略東照宮頓テ北條氏ノ闕國ヲ賜給ヒテ、江戸城ヲ府ト定ラレ、今年八月朔日御打入有テ、旗下ノ諸士ニ領知ヲ頒賜フ、○中略以上古來ヨリノ變革ヲ約言スルニ、上古三國ヲ倂テ武藏國トセラレ、○註略國造ヲ置レテ政治ヲ沙汰セシメラレシカド、元是國人ナレバ、シバ〳〵我意ノ所行ナド、流弊ヲ免レザリ

シニヤ、文武天皇ノ頃ヨリ國守ヲ下向セシメ給ヒテ、國政ノ法改革セラレ、國造ハ府ニ在テ祭祀ヲ掌レリ、○中略其際大寶ニ令ヲ撰バレ、延喜ニ式ヲ撰バレテ、國法修理アリ、文武兼備ケレバ國務怠ラズ、非違ノ患ナシ、斯テ四百二十年ヲ經テ治承ニ至ル、是ヨリ先、京家ノ政紐ヲ解、諸國ニ庄園ノ弊起、年ヲ歴テ富ハ貧ヲ兼、强ハ弱ヲ併テ、遂ニ不輸ノ田多キニ至ル、是ニ於テ國衙庄園ノ政區別シテ、國守ノ治管内ニ偏キコト能ハズ、況保元平治大亂ノ後、諸平權ヲ恣ニシ、遂ニ亂階ヲ生ズ、兵衞佐頼朝ニ至テ、天下全ク武家ニ歸ス、頼朝初義兵ヲ擧ルノ日、四年庚子、朝恩ヲ蒙、早當國ヲ賜リテ知行セラル、幾程ナク六十六箇國ノ總追捕使、幷地頭文治二年正月ナリニ補セラル、依テ諸國ニ守護○註略所有ノ庄園郷保ニ地頭○註略ヲ補セラル、當國ハ將軍知行ノ所ナレバ、唯一族緣家ヲ吹擧セラレテ、國守ニ任ゼラレシカバ、○註略守護ノ沙汰ニ及バレズ、サレド畠山庄司川越太郎ノ如キ總撿按職タリ、是亦守護ノ類ナリ、親王家將軍ト云ヘドモ、亦頼朝將軍ノ職ヲ承繼レシナレバ、陽ニハ當國將軍ノ知行所ニシテ、執權北條氏國守ニ任ジ、其家人ヲ留守代トシテ、府ニ置シ也、○註略故ニ天下諸國國守廢絶ニ至ルト雖、當國最久シク國守ノ權威アリシナリ、京都將軍ノ時、連枝左馬頭基氏ヲ鎌倉ニ置テ關東諸國ヲ管領セシム、此管領職、元是將軍ノ代官ナリ、サレバ基氏ノ子孫義氏ニ至ル迄、九代ヲ管領ト號スベキニ、後ニハ僭稱シ鎌倉公方ト稱シテ將軍ニ擬シ、其執事兩上杉ヲ管領ト號スルニ至ル、○註略管領ノ時代ニ至テハ、諸國トモ或ハ勳功ノ賞ニ賜ハリ、或ハ自己ノ勢力ヲ以、蠶食併呑シ、數多ノ田地ヲ有ツノ類多シ、是ヲ大名ト號ス、國守入部ノ政ハ絶果ヌ然ドモ當國ハ上杉總領山内ノ家ニテ、世々守護職タリシナレバ、其家人ヲ置テ、守護代目代等ノ職アリ、○註略扇谷持朝禪門ノ頃ヨリハ、國中過半ヲ押領ス、○註略此頃天下亂國トナリ、群雄割據シ、强ハ弱ヲ兼、大ハ小ヲ制ス、況當國ノ如キ兩上杉干戈ヲ邦内ニ動ス、北條左京大夫氏綱小田原ニ在テ、此亂ヲ時トシ、江戸河越兩城ヲ乘取、其子左京大夫氏康ニ至テ、闔國大抵幷呑ス、永享禪秀亂

以來、關東ノ戰爭殆百年ニシテ、天正庚寅大兵一度東シテ當國ヲ一洗シ、全ク至治ニ歸ス、郡村ノ沙汰ニ於テハ、鎌倉將軍ノ時、建久七年國撿アリ、承元四年田文ヲ作テ國務ヲ定ム、○註略 此頃久良ヲ海月トス、多磨ヲ分チ多東多西トス、埼玉ヲ埼西トス、男衾ヲ小衾トス、○註略 此後ノ書、或ハ武藏二十四郡ト稱ス、○註略 室町將軍ノ頃ハ、田數五萬千五百四十町、大遠國トス、○註略 戰時割據ノ時ニ至テ、天文五年丙申、十一年壬寅、十二年癸卯、弘治元年乙卯、永祿二年己未北條氏撿地ス、二月十二日、安藤豐前守ガ記セシ帳ノ文ニ、專ラ郡名ヲ用ヒズ、鄕庄ノ名ヲ用ヒタリ、江戸屬スル廣大ナリ所領 葛西比企、足立別テ上下トス 多東、多西、稻毛、小机、入東、入西、高麗、川越、吉見、大抵右ノ如シ、然ドモ八王子鉢形等ノ下邑ハ此外ナルベシ、天正年間、豐臣太閤撿地ノ時、國高六十六萬七千百五石ナリ、天正記ニ見エタリ○中略 當代舊ニ復シテ郡名ヲ用ユ、但總州葛飾半郡ヲ併入シテ二十二郡トス、

〔日本地誌提要十八武藏〕沿革　古ヘ國府ヲ多摩郡ニ置、今ノ府中驛是ナリ鎌府ノ初、平賀義信守護ヲ以テ州守ヲ兼ヌ、建武中興、足利尊氏ヲ守護トス、尊氏ノ反スル、子義詮ヲシテ鎌倉ニ在テ、本州ヲ管セシム、正平四年、義詮ノ弟基氏代テ關東管領トナリ、本州ヲ領ス、永享ノ末、管領持氏亡ビシ後、上杉氏ノ所管タリ、持氏ノ子成氏再管領タルニ及テ、復本州ヲ領ス、俄ニシテ山內房顯、扇谷持朝皆叛キ、成氏古河ニ奔リ、關東大ニ亂ル、長祿ノ初、將軍義政、澀川義鏡ヲ關東探題トナシ、蕨足立郡ニ鎭ス、八州ノ士、命ニ應ズル者ナシ、既ニシテ房顯ハ深谷ニ據リ、持朝ハ川越ニ居リ、本州ヲ分掠シ、扇谷ノ被官太田持資江戸ニ城キ、鉢形、岩槻諸城ヲ修メ、本州大半扇谷ニ屬ス、後持朝ノ子定正、山內顯定ヲ破リ、終ニ全州ヲ取ル、大永中、北條氏綱兵力日盛、遂ニ澀川氏ヲ滅シ、州ノ東南ヲ蠶食ス、天文中、其子氏康、定正ノ曾孫朝定ヲ滅シ、盡ク其地ヲ併ス、天正十八年、北條氏亡ビ、德川氏關東ニ遷リ、府ヲ江戸城ニ開ク、既ニシテ將軍ニ任ジ、列藩ヲ統帥スル十五世、慶應三年、德川慶喜政權ヲ返シ、即將軍ノ職ヲ廢ス、明治元年、德川氏ヲ駿河ニ封ジ、乘輿東臨、皇居ヲ江戸城

ニ定メ、東京ト改稱シ、文武院省ヲ設ケテ、庶政ヲ分理シ、府ヲ置テ都内ノ民治ヲ掌ラシム、德川氏ノ江戸ニ徙ル、其子忠吉ヲ忍ニ、酒井重忠ヲ川越ニ封ズ、忠吉轉封ノ後、松平信綱、阿部忠秋、相代テ封ゼラレ、文政中、忠秋九世ノ孫正權(ノリ)白河ニ移リ、松平忠堯(タカ)封ヲ受、川越藩ハ重忠轉封ノ後、封ヲ易ル者數氏、明和ノ初、松平朝矩(ノリ)ヲ封ジ、慶應中、其八世直克、厩橋ニ轉ジ、松平康英之ニ代ル、其餘前後封ヲ受ル者、岩槻(初高力清長、後大岡忠光)、岡部(安倍信盛)、金澤(米倉昌尹)凡テ五藩、王政革新、都外ノ地、小菅、品川、神奈川、浦和四縣ヲ置キ、金澤藩ヲ改テ六浦ト稱シ、岡部藩ヲ三河ニ徙ス、既ニシテ四藩皆改テ縣トナシ、又悉ク之ヲ廢シテ東京府、及神奈川、入間、埼玉三縣ヲ改置シ、更ニ入間ヲ廢シテ熊谷縣ヲ置、

〔先代舊事本紀(國造十)〕无邪志國造

志賀高穴穗朝(成務)世、出雲臣祖、名二井之宇迦諸忍之神狹命十世孫、兄多毛比命定賜國造、

胸刺國造

波閉國造祖兄多毛比命兒、伊狹知直、定賜國造、

知々夫國造

瑞籬朝(崇神)御世、八意思金命十世孫、知々夫直命、定賜國造、拜祠大神、

〔古事記〕故此後所生、五柱之中、天菩比命之子、建比良鳥命、(此出雲國造、无邪志國造、(中略)遠江國造等之祖也)

〔日本書紀(神代一)〕素戔嗚尊(中略)復嚼右瓊置之右掌、而生兒天穗日命、此出雲臣、武藏國造、土師連等遠祖也、

〔日本書紀(安閑十八)〕元年閏十二月、武藏國造笠原直使主、與同族小杵、相爭國造、(使主小杵皆名也)經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之走出、詣京言狀、朝廷臨斷、以使主爲國造、而誅小杵、國造使主、悚憙交懷、不能默已、謹爲國家、奉置橫渟、橘花、多氷、倉樔四處屯倉、

國府

〔續日本紀 稱德 二十八〕神護景雲元年十二月甲申、外從五位下武藏宿禰不破麿、爲武藏國司造、

〔類聚國史 桓武 十九〕延暦十四年十二月戊寅、武藏國足立郡大領外從五位下武藏宿禰弟總爲國造、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕武藏國 國府在多磨郡、行程上廿九日、下十五日、

〔武藏演路 一〕國府 ○中略

按ニ、國府は一ケ國に一所あり、當國は多摩郡、今六所明神の邊、古の國府の地にて、今府中と云、

〔風流使者記〕府中驛者、武藏國府之舊地也、往世郡縣時、本州太守、莅任此所、僚屬衞兵、奔走誰何、縣令朝覲于此、州民獄訟于此、廨舍第宅、亦應有數、星移物換、唯見蕭然數十白屋、似村非村、似店非店、去都城數十里、既覺兒童語音不好、二子嗟嘆久之、

〔新編武藏風土記稿 八十九 多磨郡〕府廳跡　郡ノ南北ニテハ中央、東西ニテハ東ニ寄レリ、今ノ府中ハ、其遺名ノ地ナリ、上古國ヲ治ル人ヲ國造トイヒ、毎國ニ府廳ヲ置テ、政務ヲ行フ所ユヘ國府ト唱フ、古代ハ當國モ三ケ國ニテ、國造モ三ケ所ニアリシコト、國造本紀ニ載タリ、其後一國ニ合シテ、此所ヲ當國ノ國府ト定ラレシハ、何ノ頃ナリシヤシラレズ、和名抄國郡ノ部ニ、武藏國國府多磨郡ニアリト云々、國史ヲ按ズルニ、皇極天皇ノ勅宣ヨリ、國造ノ號ヲ改テ、國司ト唱フルヨシイヘド、イカナル人ヲ當國ニ任ゼラレシト云ハ、古記ニモ傳ヘズ、文武紀大寶三年秋七月甲午、從五位下引田朝臣祖父爲武藏守ト初テ見エタリ、○中略夫ヨリ遙ニ世ヲ經テ武家ノ代トナリ、鎌倉右大將賴朝ノ時、郡國ニ守護ヲ置、庄園ニ地頭ヲ補セラレ、國守ノ外ニ守護職ヲ置レケレバ、上古ヨリノ國政ハ變ゼシナルベシ、ソノ頃源義信ガ平治ノ亂ニ舊勳アルヲ以テ、最初ニ朝廷ヘ請テ武藏守ニ拜シ、義信當國守トナリ、府廳ニテ國務無私、衆庶ノ歡心ヲ得タリシカバ、建久六年七月十六日、將軍書ヲ以テ褒賞シ、後來當國ノ守タランモノ、義信ガ行ヒヲ以テ法則トスベシトテ、其書ヲ府廳ノ壁ニ榜セシメラル、トゾ、是ヨリ當國守ノ法ハ、皆是ニ倣ヒシトイフ、其後足利義氏ハ、北條

時政ガ外孫ニテ武藏守ニ任ジ、任限僅ニシテ、北條泰時武藏守トナレドモ、執權職ナレバ、鎌倉ニ居テ國務ヲ沙汰シ、嫡孫經時、祖父泰時ガ讓リヲ受テ執權職ニテ、是モ武藏守ヲ兼タレドモ、同ク鎌倉ニ在テ、當國ノ府廳ニ赴ズシテ國政ヲトリ、當國ニハ守護ノミヲ置シカバ、府廳ハ此頃ヨリ廢セリ、尤諸國是ニ同ジカリシヨリ、大抵北條ノ兩執權、或氏族ノ内ニテ、相模守、陸奧守、武藏守ニ任ズルコトニゾ成ケル、其後元弘建武以來ハ、戰國ノ衢トナリ、ヤガテ名ノミノコリ、荒廢ノ地トナリケルガ、アマタノ年ヲ歷テ御打入ノ砌、府廳ノ舊蹟ナルヲ以テ、御畋獵ノ設トシテ荊棘ヲ掃ヒ、其舊蹟ヘ殿舍ヲ結構セラル、サレドモ程ナク寬永ノ末ニ丙丁ノ殃ニ罹リ、其後ハ御造建ハヤミテ、再ビ芝生ノ地トナリケルガ、寶曆中開墾セラレ、今ハ悉ク陸田トナレリ、土俗呼テ御殿地ト唱フ、是上古ヨリ國府ノ舊跡ナリ、

〔吾妻鏡十三〕建久四年六月一日丙申、有五郎弟僧、父河津三郎夭亡之後、當于五箇日所生也、而伊東九郎祐清妻收養之、祐清加平氏、北陸道合戰之時、被討取後、其妻嫁武藏守義信、件僧同相從有武藏國府、可被行兄等同意之由、祐經妻子訴申之間、被尋子細、被遣御使於義信朝臣之許云云、

〔倭名類聚抄五國郡〕武藏〈略〉〇註 管二十一〈略〉〇註 久良〈久良岐〉 都筑〈豆々岐〉 多磨〈太婆 國府〉 橘樹〈太知波奈〉 荏原〈江波良〉 豐島〈止志末〉 足立〈阿太知〉 新座〈爾比久良〉 入間〈伊留末〉 高麗〈古末〉 比企〈比企〉 横見〈與古美、今爲吉見〉 埼玉〈佐伊太末〉 大里〈於保佐止〉 男衾〈乎夫須萬〉 幡羅〈原〉 榛澤〈波牟佐波〉 那珂 兒玉〈古太萬〉 賀美〈上〉 秩父〈知々夫〉

〔延喜式二十二民部〕武藏國、大、〈管久良都筑多磨橘樹荏原豐島足立新座入間高麗比企幡羅横見埼玉大里男衾榛澤那珂兒玉賀美秩父〉〈略〉〇中 右爲遠國、

〔易林本節用集下〕武藏〈武州〉 大、管廿一郡、〈略〉〇中 久良岐、都築、多麻、〈府〉 橘樹、新倉、入間、高麗、比企、横見、崎玉、兒玉、男衾、旛羅、榛澤、那賀、賀美、足立、秩父、荏原、豐島、大里、

〔運歩色葉集〈無〉〕武藏國〈廿四郡〇〉

〔拾芥抄中末本朝國郡〕武藏國大廿四郡　久良　都筑　多麻　橘樹　荏原　豐島　足立　新原座　入間　高麗　比企　横見　埼玉　大里　男衾　幡羅　榛澤　那珂　兒玉　東海　大縣　那珂○那珂重出　賀美　秩父

〔曾我物語三〕はたけやましげたゞこひゆるさるゝ事

こゝにむさしの國の住人、はたけ山のしやうじ二郎しげたゞ○中略申されけるは、いとうがまごどもを、はまにてきられ候なる、いまだおさなく候へば、せいじんのほど、しげたゞに御あづけ候へかし、○中略きみのおほせには、かれらが、せんぞのふちう、みな〳〵ぞんじの事、なにとてかほどにの給ふ、此事かなへぬおこたりに、むさしのくに二十四ぐんをたてまつらんと、おほせくだされしぞ、まことにかたじけなくはおぼへける、

〔江亭記〕寄題江戸城靜勝軒詩序　釋蕭庵龍統

武州江戸城者、太田左金吾道灌公所肇築也、自關以東、與公差肩者鮮矣、固一世之雄也、威愛相兼、風流籍甚、比來騷亂以來、欽承王命者、八州内才三州、三州之安危、係于武之一州、武之安危、係于公之一城、可謂二十四郡唯一人、○下略

〔江戸紀聞一〕江戸城

今按に、武藏國は、初めにものするごとく、古へ二十二郡也、この記は拾芥抄などによりてかきしにや、拾芥抄諸國郡數のうちに、武藏國二十四郡とのせたり、山岡明阿云、和名抄には二十一郡とせるを、此書に二十四郡として、兒玉郡の次に、東海郡大縣郡ありて、又下に那珂郡あり、されば那珂郡は、上下二ツわりて、二十四郡とする事、その故をしらずと、又按、曾我物語にも、武藏國二十四郡とせり、その據をしらず、

〔明治三十年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回　塚本明毅

武藏略二中

二十一郡、後二十四郡タル事、始テ曾我物語ニ出ヅ、文明八年八月、僧萬庵玉統ノ太田道灌ノ爲ニ作レル、江亭記ニ、武之安危、係于公之一城、可謂二十四郡唯一人トアリ、拾芥抄ニ、大縣、東海、那珂三郡ヲ加ヘテ、二十四郡トナス、然レドモ那珂既ニ重複シテ、大縣、東海、古書ニ見ル所ナシ、其社撰知ルベシ、今古記ヲ考ヘ、多磨ノ東西、入間ノ東西、及埼玉ノ東西各二郡アルヲ知レリ、因テ其三郡ヲ加ヘテ、二十四郡トナス、其稱蓋德川氏ノ初、既ニ廢セリ、

多東深大寺鐘銘云、武藏國多東郡深大寺奉治鑄鐘云云、永和二年丙辰八月十五日、按ズルニ小楊、小野、新田、小島、狛江、勢多六鄕チ、多東郡トナセシナラン、

多西應永十九年、多西郡小河鄕二宮社大般若經達トアリ、又川口村圓福寺藏大般若書寫奥書ニ、多西郡由井鄕川口村トアリ、按ズルニ、小川、川口、石津、海田四鄕ノ地ナラン、

入東三ヶ島村長宮棟札ニ、正長元年九月二十三日、武州入東郡宮寺鄕氷川社殿造トアリ、粂村永源寺鐘銘ニ、應永廿九年、入東郡久米鄕トアリ、按ズルニ、大家、高階、安刀三鄕ノ地ナルベシ、

入西七黨系圖、兒玉惟行ノ孫、入西三郡太夫資行アリ、其子淺羽小太夫行業ナリ、今市村法恩寺所藏年譜錄ニ、寶治元年、鎌倉公方下文案ニ、吾邦入西郡ト記セリ、按ズルニ、淺羽、山田、廣瀨、餘戶四鄕ノ地ナルベシ、

埼東未ダ所見ナシ、然レドモ既ニ埼玉郡ヲ埼西ト稱スル時ハ、必ズ此鄕アルベシ、按ズルニ、太田、草原二鄕ノ地ナルベシ、

埼西由良氏古文書、治承五年十一月、源賴朝ヨリ新田大炊助義重ニ與ヘラレシ下文ニ、埼西郡橫田鄕トアリ、按ズルニ埼玉、笠原二鄕ノ地ナルベシ、

下總ノ葛飾郡ヲ本州ニ入レシ事、蓋戰國ノ時ニアリ、葛西志ニ載スル所、簗田右京亮政助ノ古文書ニ見ヘタリ、

禪興寺領、武州平沼之鄕事、自何方致兎角申候、固守寺家不可存疎儀之段、上意候、恐々謹言、

十一月三日　政助判

金子右京亮殿

按ズルニ、簗田系圖ニ政助ハ河内守持助ノ四男ニシテ、持助ハ文明十四年四月六日卒ス、年六

十一、政助蓋シ足利政氏ノ諱ヲ賜ヒシナラン、此書明應以後ナルベシ、平沼村ハ中川ノ東ニアリ、又天正十九年、東照宮ヨリ東葛西領金町村ノ鎮守香取明神ニ寄附アル朱印ノ文ニ、武藏國勝鹿郡葛西金町鄕ト見ユ、然レバ正保中ニ本州ニ入レシト云フ説ハ誤レリ、

〔武藏演路〕延喜式、倭名抄に、武藏二十一郡とす、後に下總の葛飾一郡を加へて、今世二十二郡とす、

〔皇國郡名志〕武藏國 舊二十一郡 今二十二郡

久良(クラキ) 〈金澤 街道ヨリ少シ東南ノ方、相界南山崎、

都筑(ツヽキ) 程ケ谷ヨリ西ノ方ワヅカ也、 相界小郡

多磨(タマ) 中野 前木野 高井戸 小佛廿 石原 日野 〈府中 八王子 相界大郡 △玉川

橘樹(タチハナ) 神戸 神奈川 川崎 小杉 濱口 國中 玉川ノ下南ノ方

荏原(エハラ) 六鄕 江戸赤羽根川ヨリ南ノ方 大森 品川 北澤ヨリ △二子渡 西ノ方ニ廻ル 目黒 漁上 海ニ向郡

豐島(トシマ) 江戸、東角田川、西代々木、木幡ヾ谷 國中郡 鳴子町、南芝増上寺、北板橋、練馬、荒川ヨリ南方、

足立(アダチ) 千住 上尾 草加 大宮 越谷 桶川 柏部 鴻巣 杉戸 葛飾新座ノ間 幸手 栗橋廿 岩付 蕨 浦和

新座(ニヒクラ) 白子 野火留 膝折 大和田 曾根 國中小郡

入間(イルマ) 藤久保 武藏野 大井 △大間川 川越 國中

高麗(コマ) 高ハキ 大イロ イカ 此三ヶ村限 國中小郡

比企(ヒキ) 鬩山 ホマ 二ヶ村限 國中小郡

横見(ヨコミ) 松山 △日吉見山 前島 吹上 エノキト 國中小郡 タケハラワ

埼玉(サイタマ) 忍 新江廿 行田 御關所内限 アラキ 上毛界

大里(オホサト) 熊谷 麻濱 大倉 上田 スガヤ 國中、

男衾（ヲブスマ）　島山　鉢形　二ヶ村限　國中極小郡
幡羅（ハラ）　長井　一村限　上毛界極小郡
榛澤（ハンザハ）　●深谷　〈岡野　上毛界倉ヶ野街
那珂（ナカ）　ナベ田　飯塚　廣木ヨリ井　國中小郡藤岡街
兒玉（コダマ）　平井　一村限山計　上界
賀美（カミ）　入幡　●本庄　上界倉ヶ野街
秩父（チヽブ）　△三峯山　チサシ　カケモリ　小河内　小尾藤倉　甲信上界大郡山地也
葛飾（カツシカ）　江戸深川本所　●新宿　●二合半　中川井　松戸今町ニ有　市川今在ニ有井　利根川角田川ノ間有郡也

今加二葛飾郡一

首書

郡界ニ曲直有、江戸近在ワヅカノ處ニ界有、其荒増ヲ是ニ記、赤羽根川ヲ荏原郡豐島郡ノ界トイヘドモ、廣尾原豐澤村ハ豐島ニ入、白銀目黑ハ荏原郡也、青山宮益町豐島ニテ用水ヲヘダテヽ、上目黑ハ荏原ニ屬、都テ澀谷郷大方ハ豐島也、上中下北澤ヲ荏原ノ限トス、高井戸ハ多磨郡也、柏木鳴子町ハ豐島ニテ、中野村ハ多磨ニ屬、比企、高麗、大里、横見、男衾、兒玉等ハ國北ニ寄テ、各一二ヶ村、又ハ六七ヶ村位ニテ、皆小郡也〇中略松戸市川ハ下サ國ナレドモ、御關所ノ稱號ノ樣成間、此ニ〇葛飾出、松戸御關所ハ金町村也、市川ハ小岩村也、

〇按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

（郡名異同一覽）武藏

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄕帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
	豐島（トシマ）	同（止志末）	同	同（圖元知）	同（トシマ）	同	同	同（トシマ）	南豐島 北豐島
				葛西（東）葛飾（圖元）	葛飾（カツシカ）	同	同	同（カツシカ）	南葛飾 北葛飾
	足立（アタチ）	同（阿太知）	同	同（圖元知）	同（アダチ）	同	同	同（アダチ）	南足立 北足立
	荏原（エハラ）	同（江波良）	同	同（圖元知）	同（エバラ）	同	同	同（エバラ）	同
佐吉多万（萬）	崎玉（サキタマ）	同（佐伊太末）	埼玉	埼玉（知元）崎玉（圖）埼西（東）	埼玉（サイタマ）	同	同	同（サイタマ）	南埼玉 北埼玉
新羅（續）	新座（ニヒクラ）	同（爾比久良）	同	同（圖知元）	同（ニイクラ）	同（ニイザ郡）	同	同（ニヒクラ）	同
伊利麻（萬）	入間（イルマ）	同（伊留末）	同	入東 入間（圖知元）入西	同（イルマ）	同	同	同（イルマ）	同
	高麗（コマ）	同（古末）	同	同（圖知元）	同（コマ）	同	同	同（コマ）	同

比企	橫見	大里	男衾	幡羅	榛澤	兒玉	賀美	那珂	秩父
				播羅					
									知々夫
比企（ヒキ）	橫見（ヨコミ）	大里（オホサト）	男衾（ヲブスマ）	幡羅（ハラ）	榛澤（ハンサハ）	兒玉（コダマ）	賀美（カミ）	那珂（ナカ）	秩父（チヽブ）
同	同	同	同	同	同	同	同上	同	同知々夫
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	賀美 加美	那賀	同
同（ヒキ）	同（ヨコミ）	同（オホサト）	同（ヲブスマ）	同（ハタラ）	同（ハンサハ）	同（コダマ）	同（カミ）	同（ナカ）	同（チヽブ）
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同（ヒキ）	同（ヨコミ）	同（オホサト）	同（ヲブスマ）	同（ハラ）	同（ハンサハ）	同（コダマ）	同（カミ）	那珂（ナカ）	同（チヽブ）
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

多摩	橘樹	都筑	久良	
			久良（闕）	
多摩タマ	橘樹タチハナ	都筑ツヽキ	久良クラキ	管廿一
多磨太末	同太知波奈	同豆々岐	同久良岐	同
多麻	同	同	同	二十一郡
多東多磨（闕） 多西多摩（知元）	同（闕知元）	都筑（闕知） 都築（元）	久良（知） 海月（東） 久良岐（闕元）	
多磨タマ	同タチバナ	同ツヾキ	久良岐クラキ	二十二郡
多摩	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同タマ	同タチバナ	同ツヾキ	同クラキ	同
東多摩　西多摩　南多摩　北多摩	同	同	同	二十九郡

〔郡名考〕武藏　久良クラキ　久良岐

〔地名字音轉用例〕ウノ韻ヲカノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

くらぎ　久良クラギ武郡久良岐

〔武藏演路三〕久良郡　東ハ海ヲ限リ、西橘樹郡ニ界、南相州、北ハ本牧沖ニ限レリ、

〔新編武藏風土記稿七十三久良岐郡〕總說

久良岐ハ、國ノ東南、武相ノ界、海面ニサシ出タリ、江戸ヨリ坤ノ方十里ニシテ郡界ニ至ル、○中略和名抄ニ久良ト記シ、久良岐ト訓ズ、○中略海月ノ字ハ、固假借ナレド、久良ノ唱始終クラキト唱ヘ、其

語音下濁シテ、クラゲニ近似タルコトハ察スベシ、此後京都將軍足利義詮、貞治四年鶴岡八幡社ニ出セシ文書ニ、久良郡久友鄕ト記シ、應安六年細川武藏守頼之ガ鶴岡文書亦久良ト書スル類、此餘僅コレアリ、其後文明五年、礒子村眞照寺文書、及堀之內村寶生寺同十年ノ文書、皆久良岐郡ト記ス、此後ハ皆久良岐ト記スル時ハ、大概鎌倉管領ノ比ヨリ、唱ニヨリテ文字ヲ書添シ事知ベシ、郡ノ地域、上古ノ沿革ハ得テ知ベカラズ、安閑記ニ倉樔、立花、多氷、橫渟四所ニ屯倉ヲ置シコト見ユ、倉樔ハ當郡ノ事ナラント云說アリ、按ズルニ、此四倉皆多磨ノ府中ヨリ南ニ在ガ如クオモハルレバ、倉樔ノ唱、轉訛シテ久良岐トナリモテ來シモ知ベカラズ、遙ノ後鎌倉將軍ノ頃ハ、館ヲ距事遠カラズ、殊ニ風景ノ勝地ナレバ、將軍モシバ〳〵遊覽アリテ、土地ノ繁華大方ナラズ、仁治ノ頃、六浦ノ切通開ケテ後ハ、愈往來ノ便ヲ得タリ、室町將軍ノ時ニ至テモ、管領鎌倉ニ在住シ、猶此地モ賑ヒシナレバ、故水戶殿撰述ノ鎌倉志ニ、此地ヲ相州ニ附シテ收入セラレシモ宜ナリ、○中略郡域ハ、西南相模國三浦鎌倉二郡、東ハ總テ海濱ニテ、艮ニサシ出タルハ本牧村ナリ、因テ此浦ヲ本牧浦ト呼ブ、此所ヨリ江戶迄船路八里ニ及ブト云、西北ニ彎曲セル所ヲ洲乾湊ト云、神奈川臺ト近ク相望ム、北ノ地先ハ橘樹郡、乾ハ都筑郡界ニ至ル、廣サ相州鎌倉郡界ヨリ海岸マデ二里、或ハ三里、袤鎌倉郡峠村界ヨリ橘樹郡保土谷村界ニ至マデ七里餘、土性赤土多シ、連山重疊シテ、陸田山林ノミ多ク、山間ノ平地ニ水田ヲ耕ストイヘドモ、動モスレバ旱損ヲ患フ、海濱ニ至テハ漁鹽ノ利アリ、金澤迄ハ、北ノ郡界保土谷宿ヨリ郡內太田村ニ入、行程五里餘ニシテ町屋村ニ至ル、○中略土人ノ風俗他郡ニ變ル事ナシトイヘドモ、郡域海道ノ東ニ僻在スルヲ以、寒村多ク、土民モ都テ野樸質ナリ、サレド金澤ノ邊ハ、ヲノヅカラ風俗モ華奢ニナラヘルハ、鎌倉ノ遺風ナルベシ、郡域ノ沿革ヲ考ルニ、和名抄當郡八鄕、都筑郡六鄕、及餘戶アリ、橘樹郡五鄕ノミナル時ハ、當時當郡彼二郡ヨリ大郡ニテ、今ノ如ク褊小ナルベカラズ、且星川諸岡二鄕ノ如キ、今見ニ隣郡ニ地名

還リ、又小田原役帳ニ、今ノ橘樹郡岩間青木ノ地名ヲ載セ、共ニ傍ニ久良岐郡ト記スル類ニ據レバ、後世境界變革シテ、郡域ノ狹リシ事知ベシ、此郡鎌倉將軍ノ時ハ、將軍ノ領地ナルベシ、後管領ノ比ハ、上杉氏ナドノ領地ナリシニヤ、小田原北條氏割據ノ頃ハ、旗下ノ人々分チ領セシ事、役帳ニ載ス、御入國ノ後モ、旗下ノ知行、及御料所交レリ、

〔日本書紀 十八安閑〕元年閏十二月、武藏國造笠原直使主、○中略謹爲國家奉置橫渟○中略倉樔四處屯倉、

〔書紀集解 十八安閑〕倉樔 疑久良郡

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年六月癸巳、武藏國獻白雉、○中略勅下群卿議之、奏云、○中略國號武藏、既呈戩武崇文之祥、郡稱久。良。是明實曆延長之表、○下略

〔吾妻鏡 十六〕建久十年○正治元年二月六日戊辰、羽林殿下、去月廿日、轉左中將給、同廿六日宣下云、續前征夷將軍源朝臣遺跡、宜令彼家人郎從等、如舊奉行諸國守護者、彼狀到著之間、今日有吉書始、○中略善信草吉書、武藏國海。月。郡事云云、仲業加淸書、廣元朝臣持參之、羽林於寢殿被覽之給、

都筑郡

〔寶生寺文書〕禁制

武州久。良。木。郡平子太於石川談義所、當手軍勢濫妨狼籍事、

右有違犯之輩者、可被處罪之狀如件、

文明十年二月　日　沙彌

〔武藏演路 三〕綴喜郡、東橘樹郡ニ界、西北多磨郡ニ界、南相州限ル、

〔武藏名所考 一〕都筑郡

按するに、都筑郡、東北は橘樹郡に接し、西は多摩郡に接し、東南久良岐郡に接し、南は相模國高座郡に接する事わづかに數町がほど也、今存する鄕名は、百八、榎下、麻生三所、庄名は、師岡、小机、根古屋三所、領名は、神奈川一所のみ、七十七村をすぶ、

〔新編武藏風土記稿 都筑郡 八十一〕總說

都筑郡ハ、其名義ノ起ヲ詳ニセズ、又國史等ニモ、コノ郡名ノアラハル丶モノヲイマダミズ、○中略當郡ハ、國ノ中央ヨリイハヾ、南ノ方ニアタレリ、其郡ノ南ハ、相模國鎌倉郡ニ接セリ、ソノ餘ノ接界、多ハ橘樹郡ノ村々ニカヽリテ犬牙セリ、上代ノ界域ヲ考ルニ、ソノ地ノサマ變革多クシテ、古ノコトハ證スベキモノモ少ケレバ、今ヨリハ知ベカラザレド、和名抄ニ載ル所ノ地名ヲ以テ、今ノ地理ヲ察スルニ、東ノ方ヨリ南ニイタリテハ、ソノカミヨリ地形モ甚變革アリシニヤ、今ノ郡中ノ村ニ、昔ハ橘樹久良岐ノ兩郡ニ屬セシトオボシキモノアリ、マヅ本郡ニ現存ノ高田村ハ、和名抄橘樹郡ノ鄕名ニノスル高田ナルベシ、又上星川村ト唱フルハ、久良岐ニ屬セリ、今久良岐郡ノ地ハ、南ノ方ニヨリテ、其間ニ橘樹郡ノ地、ワヅカニハサマリテアレバ、久良岐郡ハ今接地トハナラザルナリ、サレド正保元祿ノ圖ニハ、スベテ接シテミユレド、夫ヨリ後ノ沿革ナリ、ワヅカノ年代ニテスラ斯ノ如シ、又郡ノ東北ニカヽリテハ、皆橘樹郡ニ交リ、乾ノ方ハ多磨郡ニシテ、南ハ、相模國鎌倉郡ニツヾケリ、郡ノ廣狭ハ、其サマ數郡ニ犬牙シタレバ、詳ニ辨ジガタケレド、凡東西ヘ三里ニスギズ、南北ハ四里半ニ餘レリ、土地ハ、スベテ陸田山林多ケレバ、谷間ノ平カナル處ヲエラミテ水田ヲ開キ、又西ノ方多磨郡ニツヾキタル處ハ、小山連リテ、土地モ高ク、東ノ方橘樹郡ヘハ、自ラナダレニ卑キ所ニ郡界セリ、土性多ハ眞土ナリ、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

和我由伎乃、伊伎都久之可婆、安之我良乃、美禰波保久毛乎、美等登志怒波禰、

右一首、都筑郡上丁服部於田、

〔夫木和歌抄 雜部 三十一〕武藏守みつすゑくだりける餞に、都筑郡、　能宣朝臣

むさしの丶つゞきのこほりつゞきつ丶おの〳〵ちよを思ふべら也

〔郡名考〕武藏　多麻タマ タバ

〔武藏演路四〕多磨郡

或云、多磨郡は高二十二万石餘の郡にて、武藏第一の大郡也、四谷淀橋を以て豐島と多摩の境とす、去ば中野より府中迄、青梅、氷川、山中、八王子、檜原、甲州境、南は相州を境ひ、北は秩父上の内を一郡とす、

〔新編武藏風土記稿八十九多磨郡〕總説

多磨郡ハ、國ノ西南ニ當リテ、當國ノ内ニテモ、コトニ大郡ナリ、多磨ノ名ハ、安閑紀ニ多氷屯倉トアリ、コノ多氷ハ多磨郡ノコトナルベシト云説アレドモ、サモ思ハレズ、正シク古書ニアラハルルハ、和名類聚抄國郡ノ部ニ、武藏國府多磨郡ニアリト、多磨ヲ訓ジテ太婆ト註ス、今ノ府中ハ其遺名ナリ、江戸ヨリカノ地ヘ六里ニ及ベリ、郡名ノ起ル所ハ、サダカニ傳ヘザレド、郡中三田領ニ、大丹波小丹波ノ兩村アリ、是古ヘ太婆ト唱ヘシヨリドコロナルベケレバ、是ヨリ始トモイヘリ、一説ニ、多磨川ノ水源ハ、甲州都留郡丹婆山村ヨリ出デ郡中ニ流レ入ユヘ、川ノ名モ丹婆川ト唱ヘシヨリ起ルトモイヘド、其本説サダカナラズ、後世スベテタマト唱ヘリ、當郡ハ古ヘ入間郡ヘカケ、人家モマレニシテ、タヾ渺茫タル曠原ナリシユヘ、公私旅行ノ者、ヤヽモスレバ飢寒疾病ノ患アルニヨリテ、多磨入間ノ兩郡ノ界ニ、悲田所ヲ置レシガ、續日本後紀天長十年ノ條ニノス、是郡名ノ初テ古記ニアラハレシモノナルベシ、○中略中古ニ至リ、東鑑ニ、建仁二年、上多磨川ノ水ヲ通シテ、小机郷邊ノ水田ヲ開カレシコトヲノスレド、是ハ稻毛領小机領ノ水田ヲ開墾セラレシコトヽ見ユ、夫ヨリアマタノ年暦ヲ經テ、御打入ノ後ヨリ享保年間ニ至ルマデ、武藏野ノ廣原ヲ開カレ、今ニ至リテ八十餘ケ村ノ、武藏野新田ト唱ルモノ出來タリ、尤他郡ニモカヽレド、其大半ハ郡中ニ在テ、今ノ如ク人家所々ニ散在シ、耕作ノ地アマタ出來シモ、承應年間、多磨川ヲ疎鑿シ

テ、水道ヲ通ゼラレシヨリ、村民交々水利ノ便宜ヲ得テ、ツドヒ來リ村落ヲナセリ、古ヘ荒野ノ形勢ハ、變ジテ阡陌ウチマジリシ耕畝ノ地トナレリ、又イツノ頃ヨリカ、郡ヲ二ツニ分チ、多東多西ト唱フルモ、入間郡ノ人東入西ノ如ク、フルキヨリノコトヽハ見ユレド、此唱ノ起リタル始ハ傳ヘズ、建武ノ頃ノ文書ニハ、既ニ所見アレド、夫ヨリハ遙ニ古キコトナルベシ、思フニ入間郡埼玉郡ノ東西ヲ分チ唱ヘシモ同時ノコトナラン、治承壽永ノ頃ニハ、埼西郡ノ名、マサシキモノニ見ユ、又寶治ノ頃入西郡ト出タレバ、多西多東トモニ治承ナドヨリ上ニ唱ヘ初シナルベシ、既ニ葛西郡ノ名モ東鑑ニ見エタリ、又東西ヲ分チシ方位モ、サダカニシガタシ、多クハ多磨川ヲ以テ分チシナドイヘリ、按僧仙覺ガ、文永六年三月シルセシモノニ、葛西葛東ハ、大井川ヲモテ堺トセリナド云コトモ見ユレバ、多磨川ヲモテ分チシト云ハ、サモアリナンカ、郡ノ地形ハ、東西ヘ長大ニシテ、南北ハ狹ク、東ハ荏原豐島ノ兩郡ニ對シ、南ハ橘樹都筑ノ堺ニ至テハ、犬牙ナセシ所モアリ、都筑郡ト相州鎌倉郡トノ間エ少シク差出テ、同國高座郡ヨリ津久井縣マデハ、堺川ノ流ヲ以テ限トス、西ノ方ハ、又津久井縣ヨリ甲州都留郡北ニムカヒ、秩父郡マデハ悉ク嵯峨タル嶺岑ヲ界トセリ、高麗郡ニ抵テハ成木川ヲ限トス、入間ニ及テハ金子領ノ民戸、陸田入合テ、狹山ノ下ニ至ル迄ハ、南ノ方ヘ少シクセバマリテ、又東エ狹山ノ峯ヲ界トシ、新座郡ノ限リマデハ柳瀬川ヲ界ヒ、新座ニ及テハ、土地平坦ニシテ相接シ、此四郡ヲ郡界トス、スベテ十二郡ニ係レリ、東西ノ長凡二十二里半、南北ノ幅ハ、廣キ所ニテハ六里ニ及ベリ、土性大抵野土ニテ、陸田多ク、水田ハ東南ニヨリ、川ニ從テ平坦ノ地ニアリ、其邊ハ眞土ナレド、郡中ニトリテハ僅ノ所ナリ、又三田領小宮領、由井領ノ内ニモ、山ニ接スル地ハ砂別眞土ト唱ル土性ナレド、陸田多ク、水田ノ地ハ至テ乏シ、郡中ノ地勢、東ハ低ク、西ノ方ヘ漸々高クシテ、三田領ノ奥ニ至テハ、村々ノ民戸、多クハ屈曲シテ登レル山上ニヤドリヲシメタリ、高尾小佛ノ嶺ヨリ案下ノ嶺、並ニ檜原ノ山々並ビ聳ヘ、日原ノ嶮

嚴秩父山ノ峯ヘ連續シテ、三ツ峯山武甲山マデ續キ、〇中略闔郡ノ狀ハ、南北ノ中間ヲ、西ヨリ東ヘ多磨川流ル、南ニ堺川並ニ都筑ノ岡ツラナリ、東ハ村里陸田平坦ノ地ニツヾキ、北ハ柳瀨川ヲ帶タリ、又狹山ノ峯ニカヽリテ宮ノ池アリ、北ヨリ西ヘ巡リ、高麗秩父ノ峯續キ、日原檜原ノ峻嶽、案下小佛ノ嶺高尾山ニ至マデ、嶮巖疊回シテ界ヲナス、サレドモ郡ノ經界ニ至テハ、後世沿革セシコトニヤ、和名抄ニ載ル鄕名ノ中、勢多トイヘルハ今ノ瀨田ノ地ナルベシ、此地名ハ本郡ヲ出テ、荏原郡ニ屬シ、當郡ノ界ニアリ、大岱村ハ入間ノ地ニシテ當郡ニ飛入、日比田村ハ本郡ノ邑ニシテ、入間郡ノ地ニハサマレリ、是等ハ全ク後ノ世ノコトニテ、變革セシトモイヒガタシ、扨人物風俗等ニ至テハ、サセル別異ナシトイヘドモ、西ニヨリタル山谷ノ地ハ、男女常ニ山中ヘ入テ、樹木ナド伐薪トスルヲ以テ生業トシ、女モ貨布ノ短衣ヲ身ニマトヒ、ウチ混ジタルサマハ、サナガラ男女ヲモ別タズ、唯其鬢髮ノ有無ヲ以テ知レリ、言語應對ニ至テハ、尤野鄙ナリ、是ヲノ風俗ハ、頗ル東方ノ諸郡ニ異ナリ、

〔日本靈異記中〕己作寺用其寺物作牛役之緣第九

大伴赤麻呂者、武藏國多磨郡大領也、以天平勝寶元年己丑冬十二月十九日死、以二年庚寅夏五月七日、生黑斑犢、自負碑文矣、

〔續日本後紀一淳和〕天長十年五月丁酉、武藏國言、管內曠遠、行路多難、公私行旅、飢病者衆、仍於多磨入間兩郡界、置悲田處、建屋五宇、介從五位下當宗宿禰家主以下、少目從七位上大丘秋主已上六箇人、各割公廨、以備餬口之資、須附帳出擧、以其息利充用、相承受領、輪轉不斷、許之、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年四月二十日乙丑、小山田三郎重成聊背御意之間、成怖畏籠居、是以武藏國多磨郡內吉富幷一宮蓮光寺等、注加所領之內、去年東國御家人安堵本領之時、同賜御下文訖、而爲平太弘貞領所之旨、捧申狀之間、糺明之處無相違、仍所被付弘貞也、

橘樹郡

〔武藏志料 二〕田。東。郡

神奈川宿の迹を、慶長元和の比いひしにや、今宿の少裏妙仙寺慶多寺などいふ寺の御朱印當御代の文書にも此有、むかし聞へざる郡名也、中世の比、村名をも郡と書し成べし、その類甚だ多し

〔新編武藏風土記稿 九十四多磨郡〕深大寺村

深大寺 ○中略 鐘樓 本堂ノ西ノ方ニ當レル境内ノ山中ニアリ、二間四方ノ樓ナリ、鐘ノ徑リ二尺三寸、銘文左ノ如シ、

敬白武藏國多。東。郡深大寺奉冶鑄推鐘一口長四尺三寸口二尺三寸 ○中略

永和二年丙辰八月十五日　大工山城守宗堯 ○下略

〔新編武藏風土記稿 九十九多磨郡〕百草村

八幡社 ○中略 八幡ノ本地佛ナリト云、重サ八貫目許ノ銅像一軀アリ、背後ニ銘文ヲ刻ス、左ノゴトシ、

敬白冶磨金銅影像法體彌陀座光三尺六寸、○中略

建長二年、大歳庚戌孟夏之天七日、王力南閻浮提日本武州多。西。吉富眞慈悲寺、施主源氏願主佛子慶祐敬白、

〔鶴岡八幡宮藏古文書〕寄進鶴岳八幡宮武藏國多。西。郡吉富事 ○中略

至徳三年九月十四日　左兵衛督源朝臣

〔大日本史 國郡志武藏〕按鎌倉時、分曰多東多西、見新編風土記引古文書、入間埼玉亦分爲東西二郡、蓋當時私制也、

〔武藏演路 三〕橘樹郡　東海ヲ限リ、西接喜郡、南相州界、北荏原郡界、

〔新編武藏風土記稿 五十八橘樹郡〕總說

橘樹郡ハ、國ノ中央ヨリ南ノ方ニテ、多磨郡ヨリハ東南ニ續ケリ、郡名ノ起リハ、其正シキコトヲ聞ズ、古事記及景行紀等ニ載タル、倭建命東征ノ時、相武國ヨリ船ヲ浮べ給ヒシニ、海中ニシテ船

ノ進マザリシカバ、后ノ弟橘媛海中ニ入給ヒシニヨリ、命ノ船忽進ムコトヲ得シ條ヲ證トシテ、當郡ニカノ弟橘媛ノ墓アル故ニ、橘ヲモテ地名トセシナラントト云説アリ、今按ニ、郡中子母口村立花ノ神社ハ、弟橘媛ヲ祭レルナリト云トキハ、橘媛ノ墓トイヘルモノ、モシ是ナリトイハンカ、今彼社傳ヲ尋ヌルニ、更ニ證トスベキコトモアラザレバ、是等ノコトハ今ヨリ知ベカラズ、其正シク橘花ノ地名ノ正史ニアラハレシハ、安閑紀ヲ始トスベシ、○中略其地ノ界域ハ、中古ヨリ甚變革セリ、古ノサマハ、今ヨリシルベカラズトイヘドモ、試ニ和名抄ニ載ル所ノ郷名ヲモテ、今ノ地理ヲ察スルニ、ソノ郡中甚セバカリシト見ユ、今ノ都筑郡髙田村ノ邊ヨリ、多磨川ノ涯ニ至リ、夫ヨリ川崎宿ノ邊ヲ限トシテ、南ノ方ハ今ノ神奈川ノ邊ニテ、久良岐郡ニ接セリ、サレバ古代ハ、東西モ南北モ纔ニ三里ニスギザル小郡ニテ、南西ノカタ相模國ト境ヲ接セザリシナルベシ、サテコソ和名抄ニ、郡ヲツイヅルコト久良ヲ初トシテ、都筑多磨ニ及ビ、次ニ當郡ヲ識シモ、其次敍ヲ得シト云ベシ、遙ノ後永祿ノ頃マデモ、久良岐ノ地ハ神奈川ノアタリマデ及ビシナラン、小田原家人所領役帳ニ、今ノ神奈川宿ノ内、青木町及ビ寺尾村ナドハ、皆久良岐郡ノ地トシテ記セリ、御打入ノ後、正保圖ノナリシ頃ハ、ハヤ青木町寺尾等ノ地モ當郡ニ入レリ、夫モ保土ケ谷ノ内岩間町ノ地ハ、ヤハリ昔ノマヽニ久良岐郡ニ屬セリ、元祿年中、境界ヲ改メラレテヨリ、ホヾ今ノ如クニハナリタルナラン、今見ル所ノ界域ノ大樣ハ、北ノ方多磨川ヲ界トシテ、荏原多磨ノ二郡ニ隣レリ、ソノ里數ハ、西北ノ隅、金程村ヨリ、東ノ方稲荷新田ノ出崎マデ、凡七八里モアルベシ、東南ハスベテ海ニソヒ、南ノハテハ久良岐郡、及相州鎌倉郡ニ接セリ、ソノ里數六里餘ナリ、サレド鎌倉郡ニマジハレル所ニ至リテハ、地形コトニセバマリテ、ワヅカニ東海道往還ノ邊ニスギズ、其所ニ地藏ノ石像一軀アリ、世ニ境ノ地藏ト呼ベリ、コレ武相ノ界ナレバナリ、夫ヨリ郡ノ西邊ハ、スベテ都筑郡ニ隣リ、ソノ界ヒ屈曲シテカケ入タルガ如シ、彼界ヨリ金程村ニ至ルノ里數八里ニ

荏原郡

アマレリ、是今ノ地形、古トカハリタル所ノ大様ナリ、○中略土地ハスベテ西ノ方ニ山々連ナリテ、北ヨリ東南ヘハ山ノ根ヲ廻リテ平地ナリ、ソノ邊ハ自ラヒクケレバ、水田モ多シ、土性ハ多ク眞土ナリ、マタ山ニソヒタル方ハ、陸田山林多ケレド、山谷ノ間纔ニ平ラカナル地ニヨリテ、水ヲタタヘ水田ヲ耕ス所モアリ、風俗ハ大抵近郡ニコトナルコトナシ、サレド都筑郡ニヨリタル方ハ、山アヒノ寒村多ケレバ、人民質樸ノ風アリ、

〔日本書紀 十八 安閑〕元年閏十二月、武藏國造笠原直使主、○中略謹爲國家、奉置橫渟、橘花、○中略四處屯倉、

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲二年六月癸巳、武藏國橘樹郡人、飛鳥部吉志五百國、於同國久良郡獲白雉獻焉、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

伊波呂爾波、安之布多氣騰母、須美與氣牟、都久之爾伊多里氐、古布志氣毛波母、

右一首、橘樹郡上丁物部眞根、

〔武藏演路 三〕荏原郡　東ハ海、西ハ世田ケ谷代田ヲ限リ、多摩郡也、南ハ玉川ヲ界、北澁谷川流新堀ヲ限、

〔和名抄諸國郡鄉考 六 武藏〕荏原 江波夏　今江戸麻生青山の邊をいへりとぞ、(中略)小山田與清云、江戸と云名のよし、荏處の略語にて、好荏の生る地なればなるべし、もとは荏原の郡に隷たりけん、國郡の境は世々にかはり行習ひなれば、後豐島郡に隷るにや、荏原と云るも、荏の生列たる貌に云詞なり、安藝國高田郡麻原鄉あるにも思ひ合すべし、縣居翁の江の門の象といはれしは、しひごとにて、此わたり江の門ともいひつべき地形、古へにもきこえず、今もあることなし、さるを古事に心をよせし人たち、大江の御門とさへいふめるは、本をたゞさゞるみだりごとになん、

〔新編武藏風土記稿 三十九 荏原郡〕總說

荏原ノ郡ハ、其名義ノ起リシユヘヲ詳ニセズ和名抄ヲ閲スルニ、郡中ニ荏原鄉アレバ、鄉ヨリ起リシ郡名ナルモシルベカラズ、是豐島郡ニ豐島村、入間郡、高麗郡ニ高麗本鄉アルノ類ナルカ、或

ハ古ヘ武藏野ノ内ニテモ此地ハ荏草ヲ多ク植シ處ナレバ、カクイヘリトモ言傳フ、相模國鎌倉ノ郡ニ、荏草ノ郷ナドモアレバ、其傳ル處故アルニ似タレド、マサシキコトヲ知ラズ、當國幡羅郡、備中國後月郡、伊豫國浮穴郡ニモ荏原郷アリ、果シテ荏ノ多キヲ以テ名ヅケシヤ、又別ニ故アルニヤ知ベカラズ、此郡名ハ、國史等ニアラハル、モノヲイマダ見ズ、萬葉集ニ、天平寶字七歳乙未二月廿三日、武藏國部防人安曇宿禰三國ガマイラセシ和歌ノ作者ニ、荏原郡物部歲德、同郡上丁物部廣足ガ詠ズル所ヲ載タリ、是等古キ書ニ顯ル、ノ初トセンカ、和名抄ニ江波良ト訓ゼシカバ、其唱フル所ハ古今同ジキト見エタリ、○中略按ニ、此郡ハ古ヘ田多キ所ナリシニヤ、和名抄ニ載ル所ノ郷名、多クハ田ヲ以テセリ、蒲田、田本、滿田、御田、木田、櫻田是ナリ、今ハ田地尤スクナキ郡ナリ、桑田ノ變ハ後ノ世ヨリハカリガタシ、郡ノ方位ハ圖ニモアラハスゴトク、大凡東ノ方ハ品川ノ海邊ヲ限リ、南ニ至リテハ多磨川ノ流ヲオヒテ、橘樹郡ニトナレリ、西ノ方ニ當リテハ多磨郡ヲ境トシ、北ハ豐島郡ニオヨビテ、江戸ノ地ニ接セリ、郡ノ周廻ヲイハヾ、凡十五里ニ及ビヌ、ソノ内豐島郡ニカヽルコト三里半ホド、海濱ニソフモノ凡四里ナリ、橘樹郡ニ接セシ所凡四里半、多磨郡ハ三里餘リナリ、東西ヘ二里半ホド、多磨郡ノ境瀨田村ヨリ、海岸ノ方大井村ニ至レリ、南北ヘハ三里ニ近シ、橘樹郡ノ境古川村ヨリ、豐島郡ノ境目黑村ニ及ブ、巽ヨリ乾ニ至リ四里餘、多磨郡ノ境松原村ヨリ、海邊ノ方羽田村ヲ限ル、艮ヨリ坤ノ方ヘハ二里半、是豐島郡ノ境上高輪村ヨリ、橘樹郡ノ境下野毛村ニ至ルナリ、スベテ郡中ノ地勢ヲオスニ、東ノ方海濱ニ近ヨリテハ、三分ケ一平地ニシテ、餘ハミナ水田、土性モ眞土ガチナリ、西北ノ方ヘツヾキテハ、村々スベテ高低ノ岡ツヾキナレバ、田畠原野山林多ク、土性モ平地ノ方ニクラブレバ大ニ異ニシテ、野土黑土ナレバ、穀物ニ宜シカラズ、是ヲ細ニイハヾ、大井村ヨリ南ノ方、新井宿、一ノ倉、堤方、池上ノ村々皆岡ツヾキナリ、又池上村ヨリ南西ノ方モ、久ケ原峯村、鵜ノ木村、治部村ニ至リテハ、コトニ小山ガチナ

豐島郡

リ、コヽヨリ海濱ノ方ヘハ一圓平地ニシテ、數十村アリ、其内大井村ハモツトモ海岸ニソヒタル村ナガラ、其内ニ小高キ岡モアリ、是ヨリハ海ギハマデ凡七八丁許ニテ、廣平ノ地ナリ、カノ村々ヨリ西北ノ方ハ、皆岡ツヾキニシテ、郡ノ境ニ至ル、又目黑川ノ左右ニ水田アリテ、其幅四五十丁許ニテ、品川ノ方海濱マデ、行程一里アマリモウチツヾケリ、コノ目黑川ヨリ豐島郡ニヨリタル岡ニハ、諸家ノ下屋敷、或ハ商家ナドアマタアリテ、江戸ノ方ニツヾケリ、〇中略又風俗ナドモ他郡ニコトナラザレバ、サシテシルスベキ事ナシ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

志良多麻乎、氐爾刀里母之氐、美流乃須母、伊弊奈流伊母乎、麻多美氐毛母也、

右一首、主帳荏原郡物部歲德、〇中略

和我可度乃、可多夜麻都婆伎、麻己等奈禮、和我氐布禮奈々、都知爾於知母可毛、

右一首、荏原郡上丁物部廣足、

〔武藏演路二〕豐島郡　東限大川、西多摩郡、南荏原郡、北荒川、其中豐洲縣、

〔新編武藏風土記稿九豐島郡〕總說

豐島郡ハ、國ノ東ノ方ナリ、倭名抄國郡部ニ、豐島ヲ訓ジテ止志末ト註ス、風土記殘編ニハ、豐島或ハ砥島ニ作ルト記ス、今見ニ豐島村アリ、是郡名ノ本郷ナルベシ、仁德紀曰、十八年庚申春、令戸田眞人菟、武藏國豐島郡、得二頭之狐而歸奏云々、是郡名ノ國史ニ見エシ始ナリ、天下ヲ七道ニ定メレシ始メ、當國東山道ニ屬セシ頃ヨリ、當所ニ宿驛アリシ事、稱德紀ニ見ユ、曰、神護景雲二年三月乙巳、先是東海道巡察使式部大輔從五位下紀朝臣廣名等言、武藏國乘潴豐島二驛、承山海兩路使命繁多、乞准中路置馬十匹、奉勅依奏云々、此後四年ヲ經テ、光仁天皇寶龜二年十月、改テ當國ヲ海道ニ屬セラル、今按ニ、大古ハ武相ノ界ハ、山野ニテ人跡通ゼズ、故ニ海道ハ、相州ヨリ安房國ニ渡

海シ、夫ヨリ上總下總ニ達ス、是武總ノ界モ、蒼海ニ隔ラレシナレバ、斯ノ如クナラザル事ヲ得ズ、故ニ當時當國ハ山道ニ屬シテ、上野國ヨリ府中ニ達シ、又同道ヲ反リテ下野ニ達セシナリ、然ニ安閑天皇ヨリ光仁天皇マデ、世ハ二十二世、年ハ二百四十餘年ヲ歷ルノ間、武相ノ界開ケテ往來通ジケレバ、相模國高座郡伊參驛ト、常郡豐島驛トノ間ニ三驛ヲ置レ、荏原郡大井驛ヨリ豐島ニ通ジ、夫ヨリ乘潴驛ニ至リ、扨下總國葛飾郡ノ驛ニ達セシナリ、然ドモ舊ニ依テ當國倘山道ニ屬セシカバ、官使ノ來ル上野國邑樂郡ヨリ横ザマニ、同郡五箇驛ヲ經テ乘潴驛ニ至リ、夫ヨリ豐島ヲ經テ府ニ達シ、事畢テ又同道ヲ反リシナリ、サレバ豐島乘潴山海兩路ヲ承クトハ云シナリ、郡ノ地域、風土記殘編ニハ、東限ニ下谷岡、西限ニ箕田、南限ニ藍田川、北限ニ向岡ト見ユ、略○中今ノ境界ハ、東ハ、荒川ニ至リ、對岸ハ葛飾郡ナリ、北モ荒川ヲ界トシテ、足立郡ニ隣リ、西ハ新座多磨ノ二郡ニ接シ、南ハ荏原郡ニテ澁谷川ヲ界トス、東ノ方荒川ノ涯ヨリ西ノ方多磨新座ノ接界マデ、凡六里許、南ノ方荏原郡ノ界ヨリ、北ノ方荒川ノ涯ニ至ル迄凡三里ニ及ベリ、依テ考ルニ、今ノ大城下町通ヨリ、都テ淺草川荒川ノ涯ニ添シ下卑ノ所々ハ、皆後世開ケシ所ト知ベシ、天正以來當家御居城ノ地ナレバ、繁榮他ニ異ナルヲ以、年ヲ追テ變革多シ、御打入前ノ大概ヲ考フルニ、國守下向セシ頃ハ、今ノ多磨郡府中宿ノ地ニ府廳アリテ、官人是ニ居シニ、平家全盛ノ頃、當國ニ秩父別當重弘ト云者アリ、其庶子重綱始テ江戸ト號ス、其子太郎重長ハ、治承年間石橋合戰ノ後、源頼朝當國ニ來リシ時、始テ其麾下ニ屬セリ、東鑑治承四年十月五日條曰、武藏國諸雜事等、仰在廳官人幷諸郡司等、可令致沙汰之間、所被仰付江戸太郎重長也云々、按ニ重長父子在名ニヨリテ江戸ト號スル時ハ、今ノ府城ノ地ニ住セシ事知ルベシ、重長又國衙ノ諸官人ニ頼朝ノ意ヲ傳ヘシ程ナレバ、國中ニテ有勢ノ者ナルコト知ルベシ、是當家御在城ノ地トナルベキ張本ナリ、又當時豐島權頭清光ト云者アリ、秩父別當武基ガ庶子次郎武常ガ子孫ニテ、江戸ト一族ナリ、是又郡中豐島村ニ住シ

テ其邊ヲ領セリ、鎌倉管領ノ時ニ至リテハ、扇谷ノ上杉修理大夫定正ノ老臣、太田左衛門大夫持資入道道灌、江戸城ヲ築テ城代トシテコレニ居ル、當時當國ノ鎭トスル所ハ、江戸川越ノ二城ナリ、大永年間、北條左京大夫氏綱江戸城ヲ取テヨリ、六十餘年小田原ノ抱トナリシガ、遂ニ御居城ノ地トハナレリ、御打入ノ後ハ、郡內スベテ近郊ニテ、御料私領打錯レリ、今東南ノ方ハ市店ニテ、繁侈比倫ナシ、西北ノ方モ、年ヲ追テ百姓町家數多出來シテ、寛文ノ頃ヨリ追々町奉行ノ支配トナリ、正德年中ニ至テ、專ラ改テ町方ノ支配ニ屬シ、其後ニ至リテモ、町並ニツヾキタル田畑ヲ追々廢シ、新ニ町家ヲ建シ分、同支配ニ加ヘラレシモノ若干アリ、是ヲ年貢地町並ト稱シ、貢稅ノ事ハ、舊ニ依テ御代官進退ス、此餘御府內近キ村民等、物商フベキコトノ免許ヲ得、農隙ノ業トスルモノアリ、其地モトヨリ町奉行ニハ屬セズシテ、御代官ノ支配ナリ、是ヲ姑ク百姓商賈家トイヘリ、闔郡ノ石數、正保ノ改ニ二萬八千九百七十二石、元祿ニ至テハ四萬四千百五十石餘ニ至レリ、地勢西北ニ丘アリ、其餘ハ平坦ナリ、土性ハ眞土野土錯テ、水田多シ、百姓五穀ノ外ニモ菜蔬ヲ樹ヘ、或ハ藝園ヲ開キ、花木ヲ養テ鬻グモノアリ、平常ノ農人ニ至リテモ、自ラ府下ヲ學ビテ浮靡ノ風俗アリ、

〔日本書紀 十二 仁德〕四十八年庚申春、令戸田眞人萬武藏國豐島郡得二頭之狐而歸奏、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿加胡麻乎、夜麻努爾波賀志、刀里加爾氐、多麻乃余許夜麻、加志由加也良牟、

右一首、豐島郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黑女、

〔武藏演路 六〕足立郡　東ハ葛飾郡界、西入間新座郡界、南豐島郡界北埼玉郡界ニ至ル、

〔新編武藏風土記稿 一百三十五 足立郡〕總說

足立郡ハ、國ノ中央ヨリ東北ノ間ニアリ、江戸ヨリ北ノ方二里半ニ當ル、倭名抄國郡ノ下ニ、足立

ヲ訓ジテ阿太知ト註ス、其名義ハ知ベカラザレド、陸奧國ニモ安達ト云ル郡名アレバ、文字ハ假借ニシテ、アダチト云ル古言ノ義ハイヨイヨ論ジガタシ、其名ノ起レル地モ、今ハ唱ヲ失ヒタレド、神名帳ニ足立神社アルハ、當時足立本郷アリテ、其地ニタテリシ神社ナルコト知ルベシ、今ハ彼神社ノ舊跡サヘ慥ニ知ベカラズ、郡ノ方位、西ヲ上トシ、東ヲ下トス、其東ハ葛飾郡埼玉郡ノ二郡ニ境ヒ、大抵古隅田川ヲ限トス、南ヨリ西ヲ上トシ、荒川ヲ界トシテ、豐島、新座、入間、比企、横見ノ五郡ニ跨リ、北ハ大里、埼玉ノ二郡ニ隣ル、其大里ノ界ハ地續ニテ、埼玉ノ限ハ元荒川綾瀨ノ二流延亘ス、闔郡巽ヨリ乾ヘ地先長ク張出セリ、葛飾郡ノ界ヨリ大里郡ノ界マデ長凡十三里、横ハ東ノ方千住宿ノ邊マデ一里半、ソレヨリ西ヘ上レバ次第ニ廣ゴリ、中央ニテハ三里半ニ至リ、又スボマリテ、大里郡ノ界ニテハ纔一里ニ過ズ、郡界カタノ如ク、大河ノ流ヲ帶ヌレバ、古ノ地域大抵變革ナキガ如クナルベケレドモ、○中略古ヲ以テ考フルニ、元荒川綾瀨川ノ流ナドヲ通ジ、綾瀨ノ川下、今ノ隅田川ヘ通ゼシアタリハ、押ナベテ江海ナリシヲ、次第ニ洲濱モ出來、ヤガテ變ジテ水田トナリシナルベシ、サレバ郡中水邊ノ所ハ、大抵五百年來新墾ノ地トオモハル、和名抄郷里纔ニ六ニ過ズシテ、大抵戸田領赤山領ノ邊ヨリ、東南ニハ郷里ノ遺名ナシ、是又古ハ今ノ如キ大郡ニアラザルコトヲ證スベシ、其後年歷ヲヘテ、今ノ千住ノ邊マデ寄洲出來シニシタガヒ、東西ノ川岸モ次第ニ地域ヤヒロカリケン、頗大郡トナリ、郡中ヲ二區ニ分チ、西ノ方ヲ上足立ト呼ビ、東ヲ下足立ト云シト云、本郡花又村鷲明神緣起、應德ノ頃ノモノ、七百年ノ餘ナリ、ソレニ下足立郡ト載タリ、遙ノ後小田原役帳ヲハジメ、當時ノ文書等ニモ上下ヲ分テリ、此上下ノ界ヒハ、上谷村修驗大行院文書ニ、大宮宿ヲ限リテワカチシ由見エタリ、是又多磨郡ニ東西ヲ分チ、入間郡モ又同ジキガ如シ、御入國ノ後ニ至リテモ、慶長寛永ノ頃、專ラ開墾セシメ給ヒシカバ、アリツル原野沼地多ク水陸ノ田トナレリ、夫ヨリ年ヲカサネテ彌田額增加セリ、享保十三年、井澤彌總兵衞命

ヲ蒙リテ、見沼溜沼ナドイヘル大池ヲ埋ミテ水田トシ、後又元文二年、堀江荒四郎荒川涯ノ閑地ヲ新墾シ、延享年間高入トナリシニゾ、元祿國圖改定ノ時ニ比スレバ、萬石餘ノ貢稅ヲ加ヘタリ、サレバ東ノ方中古以來新墾ノ地ハ、土性異土ニシテ、水田多クシテ膏腴ノ地ナリ、夫ヨリ西へ次第ニ高クシテ、野土ナレバ陸田多クシテ瘠土ナリ、西北ノ方ニ至リテハ平坦ノ地アリテ、水田開テ土性モヨシ、○中略郡中ハ多ク耕作ノ業ヲ專トシテ、餘業ヲ事トスルモノ少シ、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年十二月壬午、武藏國足立郡人、外從五位下大部直不破麻呂等六人、賜姓武藏宿禰、

〔新編武藏風土記稿足立郡一百三十七〕花又村

鷲明神社○中略

聞昔此靈神也者、鎭座于武州下。足。立。郡。淵江領花亦村也、○中略

應德二年乙丑正月酉日

武州下足立郡淵江領花亦村鷲明神別當正覺院法印光海著

〔新編武藏風土記稿足立郡一百四十三〕中尾村

玉林院〔中略〕當時古ヘハ、玉林坊トイヒテ、古文書ニモ見エタリ、○中略

下。足。立。卅。三。郷。年行事職之事、尤聖護院殿如御策媒於氏賓も不可有相違候、恐々謹言

永祿九年丙寅十月廿一日　源五郎氏賓花押

玉林坊

〔武藏演路五〕新倉村上下二ヶ村

郡には新座と書、村には倉と書よし、

〔新編武藏風土記稿新座郡一百二十九〕總說

新座郡ハ、延喜式民部省ノ内ニ、始テ武藏國新座ト見エタリ、此郡名ハ、古ヘ郡郷ヲ定メラレシ時ヨリ置レシヤ、又ソノ後ニ出來シヤ、延喜ヨリ上ツカタノ事ハ、古記ニモ見ハレザレバ、ソノ年代今ヨリ考フベカラズ、又和名抄新座郡ノ註ニ、爾比久良ト見エタレバ、ニヒクラト稱スルコト、古キ唱ナリ、サレバ中古ヨリハ、假借シテ新倉トモ書セリ、古老ノ傳ヘタルハ、御入國ノ後マデハ、或ハ新座或ハ新倉ト書シテ並行ハレシガ、座ノ字ヲクラト訓ズルコト世ノ人耳ナレザルニヨリ、後ニハ土人オシナベテ新倉ト書スニ至レリ、斯テ新倉村ノ人、己ガ村ハ郡ノ本郷ナリトテ、餘ノ村ヲバオトシメニ、イヒナシケレバ、村ノ人安カラズ思ヒ、ハテハ諍論ヲ起シテ訴ケルニヨリ、ソノ時ノ御代官ウケタマハリテ、イカデカサルコトノアルベキ、郡名ノ字誤テ村名ト同字ヲ用ヒシユヘニ、頑愚ノ民カヽル僻事ヲイヒ出スニコソアレトテ、郡ノ文字ヲバ座ノ字ニ改メラレシト云ツタヘタレド、ソノ年代ハ詳ナラズトゾ、土地ニ傳ヘタル簿書ニ、元祿十一年マデハ新倉郡ト記シ、同十二年ヨリ新座ノ字ニ改メシトイヘド、正保ノ改ニ新座郡ト記シタレバ、信ジガタシ、兎角新倉ノ唱ヘアル時ハ、此村郡ノ本郷ナルコト誣ベカラズ、タトヘバ豐島郡ニ豐島村アリ、入間郡ニ入間村アリ、高麗郡ニハ高麗本郷アリ、此數村ミナ郡ノ本村ナリ、當郡モ亦シカナリ、已ニ古ハ新座村トサヘ書セシコト、ソノ證ハ、正保及元祿ノ改ニ明ナリ、古老ノ傳ヘノ如クナランニハ、奸民ヲ拉ンタメニカクハ命ゼラレシトゾ知ラル、ソレヨリシテ唱モ區々ニ別レテ、東南ノ方ニテハ、ニキクラトモ唱ヘ、又ニキザトモ云、西ノ方高崎領ノ邊ニテハ、シンザト唱フ、カク古ヲ失ヒシカバ、土人己ガマヽニ混亂シテ唱フ、然ルニ享保二年、郡名ノ唱ヲ定メラレ、又享和三年ニモ郡村ノ唱、穿鑿スベキノ命アリテ、ソノウタガハシキヲ正サレシニヨリ、今ハニキザト唱フルコトヽハナリヌ、此郡ハ江戸ヨリ乾ニアタリテ、行程四里ニ餘レリ、東ハ豐島郡ニ隣リ、大抵白子川ヲ界トス、南西ハ豐島多磨二郡ノ際ニ押入リ、西ヨリ北ヘハ斜ニ入間郡ニ接シ、大抵柳瀬川ヲ界

入間郡

トスレド、川越道ノ筋ニハ、中野村柳瀬川ノ西ニアリ、又西北ノ隅ニ當リテ、本郡内間木村ト、入間郡宗岡村トノ界地續ナリ、北ヨリ東ヘハ是モ斜ニシテ足立郡ニ隣リ、荒川ヲ界トス、東西二里餘、南北二里半許、前ニモ云ル如ク、四隅共ニ斜ナレバ、ソノ形菱ニ似タリ、土地大半ハ高クシテ、南ノ方ニハ山谷林丘多ク、猪鹿狐狸兎ノ類スメリ、北ノ方ハ川々延亘シテ、水鳥野鳥多シ、其邊ハ皆平地ニシテ、多クハ沙場ナリ、相傳フ、此郡古ハ甚ダ小郡ニシテ、今ノ西北ノ崖下ハ、當時大河入江ノ如ク、白浪岸ヲ洗ヒシトゾ、今ノ地理ヲ以テ考フレバ、此説覺束ナキコトナレド、桑田ノ變必シモナシト云ベカラズ、又南西ノ方モ、中古マデ武藏野ノ末ニテ、茫々タル原野ナレバ、其比ハ今ノ新倉白子ノ數村ノ地ノミ民家アリシト見ユ、延喜式ニモ、五十戸ヨリ以上隣郡ニ附シガタキ地ハ、別ニ一郡ヲ置レシヨシ見エタレバ、此地撮爾タル村里ナレド、地理ニヨリテ一郡トハ定メラレシナラン、御入國以來、年々ニ新田ヲ開カレシニヨリ、今ハ土地ノ高キハ陸田トナリ、卑キハ水田トナリテ、已ニ七八分ハ開ケタレド、猶山林原野モ少シトセズ、水田ハ陸田ニ比スレバ少キハ、地勢ニヨレルナリ、寒暖ノ氣候ハ、大抵豊島多磨等ノ數郡ト同ジ、スベテ田畑ノ土目ハ中ノ中ニシテ、下モ交ハレリ、サレド土人ガ耕シテ、培養ノ功ヲ闕カザレバ、諸作共ニ豊饒ニシテ、戸數モ自ラ多シ、風俗ハ大抵他郡ニ異ルコトナシ、タヾ重陽ノ佳節ヲ祝フコト九月九日ニ限ラズ、家々農事ノ終ルヲ限トス、故ニ收納ノ遲速ニヨリ、又ハ神社ノ祭日ヲ用ユト云、又召仕フモノヽ出入ハ二月二日ヲ期トス、是ハ江戸ト異ナリ、江戸モ昔ハ二月二日ヲ限トセシガ、今ハヲシナベテ三月五日ニ定メラル、ソノ定メラレシハ、寛文九年ノ事ナリ、

〔武藏演路五〕入間郡　東は埼玉足立に境ひ、西は多磨高麗に境ひ、南は新座多磨、北は比企秩父郡に境ふ、郡中央を川越とす、

或云、いにしへ多東郡（多チ田共云）又入東郡、或日東郡とも云しとぞ、又多摩郡と呼びし事も在りとも

云、元來多摩郡と入組たるゆへに、わかちかねたるや、又は元は多摩と一郡なりしや、神奈川宿裏今宿といへる邊も、慶長元和の頃、田東郡と云しよし一說あり、猶可考、

〔新編武藏風土記稿一百五十六入間郡〕總說

入間郡ハ、國ノ中央ニテ、江戶ヨリ西北ノ方七里許ニアリ、和名抄國郡ノ部ニ、入間ヲ訓ジテ伊留末ト註ス、郡名ノ起ハ、郡中入間川村ヨリ始リシナラン、其村今モ入間郡ニ屬シ、村名モ正保ノ頃マデハ入間トイヒシヲ、後世川ノ字ヲ添シトナリ、クハシクハカノ村ノ條ニ辨ゼリ、又土人ノ說ニ、入間ノ字ハ假借ニテ、ソノ義ハ射魔ナリトイフ俗說アレド、コヽニハ取ラズ、○中略當郡古ハ多磨郡ニ通ジテ茫々タル原野ナリ、都テ是ヲ武藏野ト號シ、後世分チテ入間野ト記セシモアリ、東鑑ニ於二入間野一有二追鳥狩一ト記セシ類ナリ又三芳野ノ鴈、伊勢物語ニ見ユ堀兼ノ井枕草紙及千載集俊成卿歌ノ類ノ如キ、郡中ノ地名、縉紳家ノ歌枕ニモ入シユヘニヤ、郡名モ自ヅカラ世ニイチジルシ、後世ニ至リテ、郡中ノ曠野多クハ新墾シテ、悉ク田畝トナリ、人家モ從テ出來ニケレバ、古トハ大ニコトナリ、又中古ヨリ郡中ヲ二分シテ、入東入西ノ唱アリ、コレ多磨郡ヲ多東多西ト別チシニ同ジ、七黨系圖ニ、兒玉惟行三代ノ孫、入西三太夫資行ト云人アリ、ソノ子ヲ淺羽小太夫行業ト云、淺羽ハ則當郡ノ鄉名ナレバ、入西モ此郡名ニトリシコト論ナシ、是古クヨリ入西ト分チ唱フルノ證トナスベキヤ、又寶治元年、鎌倉公方ヨリ下文ノ案ニ、吾那入西郡ト記セシコト、郡中今市村法恩寺所藏年譜錄ト云記ニ見エ、世下リテ天文永祿ノ頃モ、專ラ東西ヲ以唱ヘシコト、小田原役帳、及當時ノ古證文ナドニ歷々タリ、○中略郡ノ地域ハ、其形譬ヘバ瓢簞ノ如ク、中間狹マリテ、ソノ邊ヲ入間川流ルヽヲモテ、其地形二郡ノ如シ、古入西郡入東郡ト分チ唱ヘシモ、其理ナシトセズ、彼括リタル如キ所ヨリ、西ヘサシ出タル一區ハ、高麗、秩父、比企三郡ノ際ニハサマリテ、東西ノ徑リ凡四里半、南北ノ濶サ、ソノフクレタル處二里ニ餘リ、狹キ所ハ一里ニ過ズ、東ノ一區ハ、北ノ方比企足立ノ二郡ニ對シ、東ハ新座郡

ニ接シ、南ハ多磨郡ニテ、大抵入間川ヲ以界トセリ、南北ノ長五里東西ノ幅三里半ナリ、二區ヲ合シ斜ニ延亘シタル長ハ、殆ド十里ニ及ブベシ、土性ハ大抵野土ニシテ、陸田多シ、水田ハ西北ノ方川ニ沿テ、平坦ノ地ニアリ、スベテ此邊ノ地勢ヲ考フルニ、東ハ卑ク西ノ方ヘ漸クニ高クシテ、秩父郡ノ山足コノ郡中ニ始ルニ似タリ、略〇中闔郡ノ形狀、中間ニ川越城アリ、東ニ柳瀨川流レ、南ニ狹山ノ峯ツヾキ、西ハモトヨリ秩父ノ方ヘ連レル山足ニテ、北ハ越邊入間荒川ノ三流延回シテ界ヲナス、サレド中間高麗郡ノ地押入タレバ、其詳ナルコトハ記シガタシ、猶圖ト照シ見ルベシ、然ルニ以上ノ經界ハ、後世大ニ變革セシト覺エテ、和名抄鄕名ノ中、廣瀨ナドハ今其遺名アレド、本郡ニ入ズシテ高麗郡ニ屬ス、又郡中法恩寺年譜錄ニ載ル大豆土村、今比企郡ニ屬スルノ類ニテ知ベシ、人物風俗等ニ至リテハ、サセル殊異ナシトイヘドモ、西ノ方山ニ添ヒタル地ハ、尤鄙野ノ風アリ、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年七月壬午、武藏國入間郡人物部直廣成等六人、賜姓入間宿禰、

〔續日本後紀一淳和〕天長十年五月丁酉、於多磨入間郡界、置悲田處、

〔伊勢物語上〕昔男むさしの國までまどひありきけり、扨其國にある女をよばひけり、ちゝはこと人にあはせんといひけるを、母なんあて成人に心付たりける、父はなを人にて、母なん藤原なりける、扨なんあて成人にと思ひける、此むこがねによみてをこせたりける住所なん、いるまの郡みよしのゝ里なりける、

みよしのゝたのむのかりもひたぶるに君が方にぞよるとなくなる、むこがねかへし、

わがかたによるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれん

〔武藏演路五〕入間郡

北條分限帳に、入間郡の內に入。東。郡と有、又横見郡內にも入東あり、高麗郡比企郡の內に入。西。

郡。と云あり、いにしへはさも云しにや、

〔鶴岡八幡宮藏古文書〕武藏國入東郡橫沼鄕事

右以當鄕寄進大慈寺內釋迦堂之狀如件、

正嘉元年十月二十八日　沙汰道崇

〔北條分限帳郡村路考〕一帳面の內、武州の郡村に、入西郡としるすは、

考るに、武州の內多摩郡の內西の方、高麗郡、比企郡等のちゝぶ根の村々なり、今も入西筋と云、多摩郡をわけて、多西多東などゝ云事、俚語に殘れり、

〔武藏演路五〕高麗郡　東入間、西多摩、南多摩、北秩父界ニ至ル、

本宿梅原　栗坪内栗原一體高麗郡なれども、わけて此邊を高麗と呼ぶ、

〔新編武藏風土記稿一百七十六高麗郡〕總說

高麗郡ハ國ノ中央ニアリ、江戶ヨリ西北十餘里ナリ、和名抄ニ、高麗ヲ訓ジテ古末ト註セリ、○中略抑本郡ハ、往古多磨郡ヨリ通ジテ、入間郡及ビ高麗郡ニ聯絡トシテ、茫々タル原野ナリシニ、是ヲスベテ武藏野ト稱セシナリ、スデニ元弘年中、新田左中將武藏野ノ合戰アリシナドイフハ、卽チコノ郡ニ亘リテノコトヽ見ユ、今ノ篠井村ノアタリ、壘壁ノ遺蹤アルモ、ソノ頃構ヘシモノト見ユ、又栢原村ト廣瀨村界ノ東邊、入間川ヲ八町ノ渡シト云傳フ、是ゾ堤ナドモテ流ヲサヽエシ廣濶ナル所ト思ハルヽナリ、又ソノアタリヲ霞ケ關トテ、當國ニ名ダヽル名所ハ此所ナリト云、後世分レテ入間野トナリ、或ハ入間ノ里ト云シナラン、又高麗原ト云ルハ、今ノ新堀村邊ナリ、南北十三四町、東ハ的場村マデ二里半許、渺々タル平原ナリシト云、○中略按ズルニ、靈龜ノ前此郡ヲ置ザル時ハ、草昧茫々タル間地ナルガ、恐クハ本郡モト入間郡ノ分郡ト思ハルヽ、○中略既ニ前ニ辨ズルゴトク武藏野ト云、入間野ト云、高麗原ト云、コレスベテ一圓ノ武藏野ニシテ、杳渺タル曠野

西ニ亘リ、秩父郡ノ邊ニ至マデ、後世分レテ漸々新墾シ、或ハ田畠トナリ、或ハ村落トナリ、人家モ從テ出テ來リ、古トハ異ナルコト推テ知ルベシ、〇中略郡ノ地域ハ、ソノ形チ東西ニ長ク、南北ニ狹シ、中ニモ郡ノ中央ト覺シキ所ハ、括レタル如ク狹シ、サテ其クヽレタル所ヨリ、東ハ原野田畠多ク、村落其間ニ點綴セリ、西ハ地形大率崎嶇、多クハ嵯峨ニ據リテ畠ヲヒラキ、卑隰ニ就テ田ヲ作リ、村落モマタ高處迂僻、或ハ澤間溪流ニ添テ民戸各處ニ散在ス、然ルユヘニ山畑ノアルアタリハ、柴モシグハ雜木モテ藩籬ヲナス、謂ユル鹿柴ナドヽ云ベキ者カ、又陷穽ヲウガチテ猪鹿ヲ防グ所モアリ、西端ニ至リテハ、秩父郡ノ山々犬牙接續シテ經界ヲナセリ、偖郡中ヲ流ルヽ川二流アリ、北邊ノ村落ヲ流ルヽハ高麗川ナリ、南邊ノ村落ヲ流ルヽハ入間川ナリ、中間ノクヽレタル所ニ至リテハ、兩川相セバマリテ、其間僅ニ一里許ナリ、コノ郡西ハ秩父郡ニ接シ、西南間ハ多磨郡ニ續キ、南ヨリ東北ヘ環リテ入間郡ナリ、ソノ界ハ、東ヨリ南ヘ入間川ヲ界トシ、佛子村阿須村ノ邊ハ山ヲ界トシ、上下畑村ハ成木川ヲ界トス、ソレヨリ西北ヘメグリテハ、地形犬牙シテ山ノ頂ヲ界ヘリ、艮ノ方ハ原野田畠、或ハ徑路ヲモテ界トセリ、以上ノ經界ハ、後世大ニ變革セシコトト思ハルヽナリ、東西ノ長サ七里バカリ、南北ノ廣サ三里ニハ近シ、中間ノ狹キ所ハ一里半許、中央ハ中居村、中山村ノ邊ナリ、土性ハ大抵野土多ク、眞土少シ、西ノ方山村ハ石交リノ眞土ナリ、水田ハ陸田ニ比スレバ三分ノ一ナリ、其水田ハ多クハ中間ヨリ東ニアリ、西ノ方ニハ僅ニ谷ツ田ノミアリテ、多クハ山畑ナリ、〇中略扨人物風俗等ニ至リテハ、サセル殊異ナシトイヘドモ、西ノ方山ニヨル村落ハ、ナヲサラ年穀大抵一歲ヲ終ルニタラズ、其民ハ總テ山澤ノ利ニヨリテ生理ヲナス、村木モシクハ炭薪ヲ以テ粟米ニ換フ、コノユヘニ丁壯ハ柚取炭燒ヲ業トシ、處女婦孀ニ至マデ是ヲ負擔シ、僦錢ヲトル、又ハ石灰ヤク村ハ、老弱ミナ是ガタメニ奔走シテ、各其資ヲ得ルトイフ、最モ鄙野ノ風俗ニシテ、質朴トハイヘドモ、寬富ノ民或ハ里老輩ニ至リテハ、頗ル都下ノ風

ヲ學ブモノアリ、

〔續日本紀 七 元正〕靈龜二年五月辛卯、以駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野七國、高麗人千七百九十九人、遷于武藏國、置高麗郡焉、

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆八年十月乙酉、散位從三位高倉朝臣福信薨、福信武藏國高麗郡人也、本姓背奈、其祖福德屬唐將李勣拔平壤城、來歸國家、居武藏焉、福信卽福德之孫也、

比企郡

〔武藏演路 五〕比企郡ハ、東橫見界、西入間界、南荒川界、北秩父郡界ニ至ル、

〔新編武藏風土記稿 一百八十六 比企郡一〕總說

比企郡ハ、國ノ中央ヨリ少ク北ノ方ニアリ、江戶ヨリ西北ノ方、郡界マデ十里餘ニ及ベリ、倭名類聚抄國郡ノ部ニ、比企ヲ訓ジテ比岐ト註ス、此餘郡名ノ古書ニアラハルヽモノヲ未ダ見ズ、地形東ヲ首トシ、西ヲ尾トス、東ノ方ハ地幅狹ク、巽ノ方ヘ斜ニ插入シ、地先尖リテ足立入間二郡ノ間ニハサマレリ、此邊ノ地幅ハ一里半、或ハ一里ニ過ザル所モアリ、東ノ界ハ市ノ川荒川落アヒテ延亙ス、其市ノ川ノ對岸ハ橫見郡ナリ、此所モ古ハ郡中ニ屬セシガ、市ノ川ヲ郡界ト定メラレシヨリシテ、彼郡ニ隸セリト云、サレド土人今モ猶其地ヲ新橫見ト呼ベリ、又南ノ方ハ越邊入間ノ二水落アヒテ流レ來レルナリ、老袋村ノ地サキニ至テ荒川ト合ス、然ルニ此入間ノ川流シバシバ水溢ノ患アリケレバトテ、延寶八年、川越城主松平伊豆守信輝、命ジテ川口村及ビ出丸中鄉ノ間ヲ、橫ニ疎鑿シテ荒川ヘ沃ギケルヨリ、水流大抵ハ彼新川ヘ流ルレド、モトヨリ下ニツクノ水勢ナレバ、入間川ノ下流老袋マデノ古川モ、所々ニソコバクノ水ヲタヽヘテ、ソノ形現ニ存セリ、又郡ノ地形、中央ヨリ西ヘ至リテハ地幅ヒロクシテ、大抵四里ニアマレリ、南ノ方ハスベテ入間郡ニシテ、北ハ男衾、大里、橫見、足立ノ四郡ニトナル、西ノハテハ秩父郡、群山ノ麓ニ極ル、東ノ方老袋村ノ界ヨリ當所原川村ニ至マデ、郡ノ長八里餘ニヲヨベリ、中央ヨリ此アタリマデハ、スベテ

野土ニシテ瘠土ナリ、故ニ松山ナド多クシテ、田畠ハ少シ、西ノ方山足ニ連レル溪間ノ窪キ所ニハ、水田ヲ開キ、又陸田ヲ耕スモアリ、モト便宜ノ地ナラザレバ、寒民多シ、東ノ方足立入間ニ接セシ方ハ、水涯ノ眞土ニシテ膏腴ノ地ナリ、此邊水田多クシテ、陸田ハ三分ノ一ニ當ル、郡中ノ地、カタノ如ク廣キヲ以、中央ヲ界トシテ南方北方ノ唱ヲワカツ、是多磨郡ニ多西多東ノ號アリ、入間郡ニ入東入西ノ別アルガ如シ、萬葉仙覺抄ノ奥書ニ、文永六年洗姑二日、於武藏國北方麻師宇郷、書寫畢ト見ユ、麻師宇ハ今ノ增尾村ナリ、又朽木氏建治三年ノ文書ニ、武藏國比企郡南方石坂郷ト、又長樂寺正安元年ノ文書ニ、南方將軍澤郷ト云々、ソノカミ南方北方ノ唱アリシコト證スベシ、永祿ノ頃ニ至リテハ、此唱ヲ失ヒシニヤ、小田原役帳ノ地名ニハ見ヘズ、當郡古ノサマヲ以考フルニ、國ノ中央ヨリ北ニアタリテ、多磨ノ府ヨリハ、其間ソコバクノ曠野ヲ隔テ、足立府ヨリハ、荒川ノ水涯開地アリテ、往來ヲサヘヘタレバニヤ、郡家ヲ置レテ郡中ノ事ヲ沙汰セシナルベシ、下リテ鎌倉管領家ノ頃ニ至リテモ、郡中松山ニ城郭ヲ構ヘテ、上杉氏ノ家人ヲ置キ、分國ノ堅メトセリ、又此頃京都將軍義尙、應仁元年正月廿八日、大館左衞門佐ニ與ヘシ文書ニ、武藏國比企郡、先例ヲ守テ宛行ハルヽ由見エタリ、按ニ大館氏ハ新田ノ一族ニシテ、南朝ニ從ヒシモノナレド、同族岩松治部大輔等、早ク足利將軍ニツカヘテ京師ニアリシナレバ、カヽル所緣ヲモテ京都ニツカヘ、本領ヲ安堵セシナラン、天文年中、小田原北條氏ノ蠶食セシ後モ、松山城ニハ上田能登守籠城セシガ、御入國ノ後ハ、松平內膳正家廣ニ賜ハレリ、慶長五年關ケ原役ノ後、天下モ御武威ニ伏シケレバ、カヽル御備ニモ及ブベカラザレバニヤ、同六年二月、家廣遠江國濱松城ヘ移サレテヨリ、此城ハ廢却セラレヌ、

〔吾妻鏡 二〕養和二年〇壽永元年十月十七日甲寅、御臺所幷若公、自御產所入御營中、〇中略比企四郎能員爲御乳母夫、事御贖物、此事雖有若干御家人、能員姨母號比企尼當初爲武衞乳母、而永曆元年御遠行于

豆州之時、存忠節餘、以武藏國比企郡爲請所、相具夫掃部允、掃部允下向、至治承四年秋二十年之間、奉訪御世途、今當于御繁榮之期、於事就被酬彼奉公、

〔武藏演路五〕横見郡　和名抄ニ横見今稱吉見ト云々

横見郡ハ、東荒川西比企郡界、南北比企、足立兩郡界、北大里郡界ニ至ル、

〔新編武藏風土記稿一百九十六横見郡〕總説

横見郡ハ、國ノ中央ヨリ北ニアリ、江戸ヨリ郡界マデ行程十二里餘、和名抄國郡ノ部横見ノ注ニ、與古美ト訓ジ、今吉見ト稱スト見エ、又延喜式神名帳ニモ、横見郡ノ名見ユ、小田原役帳ニ吉見郡ト記ス、永祿ノ頃モ中古ノ俗字ヲ用ヒシコト知ベシ、又久米田村慶長十七年ノ水帳、及正保四年ノ水帳ニモ、皆吉見郡トアリ、正保ノ國圖ニ據バ、當時官ニハ横見ト記シタレド、民間ニハ因循シテ俗稱ニ從ヒシモ儘有ナルベシ、今當郡及隣郡大里ノ領名ニモ吉見ノ唱アリ、地形巽ヨリ乾ヘ斜ニ闕入テ、南西北ノ三面ハ大抵圓形ナリ、東北ハ斜ニ荒川繞テ、對岸ハ足立郡ナリ、南ヨリ西ヘハ比企郡ニ隣リ、市ノ川ヲ界トス、西北ノ隅ハ大里郡ニ續ケリ、東西二里ニ足ラズ、南北一里半、郡西比企ノ方ヘ寄シ所ハ山々重リ、秩父嶺ノ山足纔ニ出タルガ如シ、土性ハ赤土、野土、砂利錯、或ハ埴土、地底ハ石巖ノ處モアリ、夫ヨリ東北ハスベテ平地ニテ眞土ナリ、水田多ク陸田少シ、昔ハ荒川郡中ヲ貫キ、山野、下松崎、上細谷、黒岩村ヨリ御所村、範頼館跡ノ西ヲ流レ、下細谷、久保田ヲ前河内經テ、江綱ノ北界ヨリ大串等ノ村々ヲ流レシト云、今其跡水田トナリ、字シテ相ノ田ト呼リ、地形他所ニ比スレバ、一段卑クシテ川蹤顯然タリ、當郡ハ足立府跡ヲ去コト、僅ニ六里ニ過ザレバ、當時府ニ隷セシナルベシ、鎌倉將軍ノ頃ニ至テハ、三河守範頼地頭トシテ黒岩村ニ館セシト、今館跡ノ地別ニ一村トナリ、御所村ト號ス、範頼罪ヲ獲テ自盡セシ後モ、子孫猶郡中ニ隱レシ由、岩殿山緣起ニ載タリ、元弘ノ頃、新田義貞上野國ヨリ鎌倉ヘ打向ヒシ時、郡中松山ノ城廓ヲ構ヘシ

埼玉郡

トナリ、纔テ鎌倉管領ノ時ニ至テモ、松山城ニカハル〳〵家人ヲヲキテ、北口ノ固トス、天文十五年四月、時ノ管領時氏、老臣兩上杉ト同ク、北條氏康ガ抱ヘシ川越城ヲ攻シトキ、松山城主上杉朝定討死セシ弊ニ乘ジテ、一旦氏康松山ヲ乘取シガ、管領家ノ侍岩槻ノ太田氏マタ取返ス、斯テシバシバ變革アリシガ、終ニハ北條ノ持トナレリ、事ハ松山城ノ下ニ委シ、斯テ四十餘年ハ小田原ノ分國ニ屬セシカド、天正十八年、北條滅亡ノ後、御領國トナリ、松平内膳正家廣ニ賜リシガ、慶長十八年、家廣濱松ヘ轉ジテ後、松山廢城トナレリ、其後ハ太平ノ御代トナリケレバ、要害ヲモ置レズ、

〔郡名考〕武藏　崎玉サイタマ　案ズルニ、埼ハ碕ニ同ジ、崎ハ碕ニ同ジ、神代卷作埼玉、和名作碕玉、

〔新編武藏風土記稿埼玉郡一百九十九〕總說

埼玉郡ハ、國ノ東北、上野下野下總ノ三國ニ隣レリ、江戶ヨリ北ノ方ニテ、郡中岩槻城マデ九里ノ行程ナリ、サレド郡ノ地域、多クハ足立郡渕江領ノ東ヘ出タレバ、其邊ニテハ江戶ヨリ三里ニ及バザルトコロモアリ、和名抄郡名ノ下ニ、埼玉ヲ訓ジテ佐伊太末ト註ス、其名ノ起ル所以ハ、郷名ノ下ニモ埼玉アレバ、コレ郡ノ本郷ナルベシ、其地ハ今ナヲ埼玉村トイヘリ、萬葉集ノ歌ニハサキタマト讀タレド、後世ハサイタマト唱ヘリ、○中略和名抄ノ郷名ヲ見ルニ、餘戶云々ヲ加ヘテ、タダ五郷ノミナリ、一郷五十戶ニアツルモ、當時二百五十戶ニタラザル小郡ナリシト思ハル、其四郷ノ名、今庄名村名等ニ遺レリト覺ユルモノ三所、皆日光道中、葛飾郡杉戶宿ノ西北ニ當レル地ニシテ、郡中和戶井沼邊ヨリ東南ニハ、曾テ古ノ郷名ノ殘レルト覺シキモノナシ、ヨリテ思フニ、當時當郡ハ、足立郡ノ地先ニ屬スル小郡ニシテ、三方ハ皆入江ニ包マレテアリシナラン、○中略中古以來大郡トナリシカバ、埼西埼東ノ二區ニ別チシニヤ、埼西ノ唱アルヲ以考レバ、埼東ノ唱モアリシナラン、多磨郡ニ多東多西アリ、入間郡ニ入東入西アルニテモ推テ知ルベシ、サレド中古

押ナベテ埼西ト呼シニヤ、東鑑壽永三年正月三日ノ條ニ、武藏國崎西郡内大河土御厨トアリ、今郡ノ東南ノ境ヲ少ク隔テ、葛飾郡内ニ大河戸村アルハ、地ノ變遷シテ彼郡ニ入シニヤ、又東鑑建曆三年五月十七日ノ條ニハ、武藏國大河戸御厨内八條鄉ト記ス、今八條村ハ當郡ノ内ニテ、尤東ニヨリタレバ、埼東トモ號スベキ地ナルニ、猶埼西ト唱フルニテ察スベシ、御打入ノ頃ハ、タヾ埼玉郡トノミ唱ヘテ、埼西ノ沙汰見エズ、此郡内ハ、後ノ世モ沼地多ク、或ハ水涯ノ閑地モ少カラズ、正保改定ノ時ハ、郡ノ高二十三萬六千石餘ナリシニ、元祿ニ至テハ三萬石餘ノ高ヲ增加セリ、享保年間、笠原沼、埼玉沼、黑沼ナドイヘル沼地ヲ埋ミ、三沼代用水、葛西用水ノ水利ヲ鑿通シ、若干ノ水田ヲ開墾シケレバ、又萬石餘ノ高ヲマセリ、地勢ノ大略ハ、南ノ方ニ少シク丘岡アリテ、コヽハ瘠土ナリ、其餘ハ平坦ニシテ、水陸ノ田開ケ、膏腴ノ地多シ、但山林乏少ナレバ、土民薪木ニ苦メリ、今ハ郡ノ四隣、大抵川流ヲ界トスレドモ、一條ノ流ニシテ、古ノ入江ノ形ハ失ヘリ、東ヨリ南ニワタリテハ、葛飾足立ノ二郡ニ界ヒ、古利根、綾瀨ノ二流ニ限リ、西ハ元荒川ヲ隔テヽ、足立郡及福川ヲ隔テヽ、幡羅郡ノ外、大里郡ノ地ニツヾケリ、北ハ利根及ビ間ノ川、渡良瀨ノ三川ヲ限トシテ、上野國邑樂郡、下野國都賀郡、下總國葛飾郡ナドノ地ナリ、郡ノ東西ノ長、凡十五里、葛飾郡ノ境ヨリ西ノ方幡羅郡ノ境ニ至ル、其狀西ヨリ北ニ廣マリ、巽ノ方ヘ長ク張出タリ、南北ノ濶ハ東ノ方岩槻邊ニテハ二里ニ過ズ、西ヘヨリテハ四里半ニ餘リ、最西ノハテハ又二里半許トナル、○中略當郡古ハ小郡ニシテ、足立郡ノ地先ノ如クナレバ、久ク足立ノ府ニ隷セシナルベシ、新築ノ地開ケテ後、鎌倉管領ノ頃ハ、忍、岩槻、羽生、騎西ノ數城アリテ、各自ニ割據セリ、小田原北條氏ノ時モ同ジサマナリシカド、御當代トナリテハ、騎西羽生ノ二壘ヲ廢セラレ、忍、岩槻二城ニ、御譜代衆ヲ置レテ鎭トセラル、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年六月丁酉、武藏國埼玉郡新羅人德師等、男女五十三人、依請爲金姓

〔萬葉集二十〕天平勝寳七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

安之我良乃、美佐可爾多志氐、蘇涅布良波、伊波奈流伊毛波、佐夜爾美毛可母、

右一首、埼玉郡上丁藤原部等母麿、

〔和名抄諸國郡鄕考六武藏〕埼玉佐伊太末（中略）今案、此郡後に、東西に分ちよびしにや、鎌倉大草子に、武州埼西郡、

〔鷲宮村鷲山神宮寺鐘銘〕奉鑄修武州崎東郡太田御庄鷲宮大明神神宮寺之鐘一口、

永仁四丙申大歳十一月八日、聖人妙阿、

〔吾妻鏡三〕壽永三年元暦元年正月三日癸巳、武衞有御祈願之間、奉寄領於豊受太神宮給、依爲年來御禱師、被付權禰宜光親神主云云、

狀云

奉寄御厨家合一處

在武藏國埼西足立兩郡內、大河土御厨者、○中略

壽永三年正月日　　　前右兵衞佐源朝臣

〔新編武藏風土記稿二百十九大里郡〕總說

大里郡ハ國ノ中央ヨリ北ニアリ、江戶ヨリ西北ノ方郡界マデ十二里餘、和名抄國郡ノ部ニ、大里ヲ訓ジテ於保佐土ト註ス、又神名帳ニモ此郡名見エタリ、今郡ノ東ヲ、通テ上吉見領ト云、按ニ隣郡橫見郡ヲ都テ下吉見領ト號シ、和名抄ニモ橫見ノ下ニ注シテ、今吉見ト稱スル由載タリ、然レバ當郡東ノ境變地アリシカ、又ハ隣郡ノ唱ノ移リシナルベシ、郡ノ四隣、東ハ橫見足立埼玉ノ三郡ニ連リ、埼玉ノ界ハ大抵元荒川ヲ界トス、南ハ比企男衾ノ二郡ニ接シ、西モ亦男衾榛澤ノ二郡ニサカヒ、北ハ埼玉幡羅ノ二郡ナリ、地域巽ヨリ乾ヘ三里許、艮ヨリ坤ヘハ僅ニ一里餘、南ノ方比企男衾ノ郡界ハ小山ノ間ニ接ハレリ、土性ハ野土赤土錯リ、陸田及秣場アリ、其餘ハ平地ニテ、大

抵異土ナリ、水田多ク、陸田ハ纔ニ三分ノ一ニ當レリ、往昔ノ事體ヲ察スルニ、當郡ハ國ノ北方ニ有テ、多磨足立ノ府ヨリモ便アシケレバニヤ、大領ノ郡家ヲ置レテ、郡中ノ沙汰アリシト聞ユ、此郡家ノ廢セシ後ハ、如何ナル人ノ此地ヲ領セシヤ、其傳フルトコロヲ詳ニセズ、仁平久壽ノ頃、新田上西入道領セシヨリ、子孫ヘ傳ヘテ、岩松治部太輔ヘ讓與ヘシ由、其頃ノ文書ニ見ユ、世下リテハ、小田原北條氏、忍ノ成田氏ノ領地錯リシト覺ユ、又武田信玄ガ一族源三郞ヘ與ヘシ文書ニ、大里郡一圓、恩賞トシテ出置ト云文アリ、コレニ據レバ、當郡コト〴〵ク甲州ノ指揮ニ從ヒシニヤ、兎角中古ノ事ハ知ベカラズ、天正十八年以來、年ヲ追テ麾下ノ士ニ賜ハリ、今ハ御料私領打錯レリ、

〔武藏演路五〕男衾郡　男衾榛澤兩郡は、荒川の源、秩父郡より東流し、河南を男衾、河北を榛澤といへり、

〔新編武藏風土記稿二百二十二男衾郡〕總説

男衾郡ハ、國ノ中央ヨリ北ニ當リ、江戸ヨリ西北ノ方ニテ、郡境マデ行程十六里ニ及ベリ、和名抄國郡ノ部ニ、男衾ヲ訓ジテ乎夫須萬ト注ス、郡名ノ起リ詳ナラズ、○中略郡ノ地形東西ヘ長ク、凡六里半ニ及ビ、南ヨリ北ヘハ狹クシテ一里半許、東ノ方比企大里二郡ノ際ニサシ入タル所ハ、殊ニ地幅セバマリテ、纔ニ半里ニ足ザル所モアリ、四隣ノサマ、東ハ大里郡ニ界ヒ、南ハ比企郡ニ隣リ、西ハ秩父郡ニ至リ、北ハ荒川ヲ以テ郡界トシテ、其對岸ハスベテ榛澤郡ナリ、今按ニ當郡東ノ方大里ニ邊セシ地、古ヘハ彼郡中ニサシ入シトミエテ、元德三年ヨリ以來、應永ノ頃マデ數通ノ文書ニ、男衾郡小泉鄕トノセ、嘉慶三年及ビ應永二十八年ノ文書ニ、男衾郡和田鄕トノセタルアリ、コノ小泉和田ノ名、共ニ郡中ニアラザル村名ニテ、隣郡大里ニアル地名ナリ、シカモ和田村ハ當郡野原村ニ隣レル地ナレバ、ソノ地ノコトナルベシ、サレバ古ヘハ彼郡內和田村ノ邊ヨリ小泉

村ノアタリマデ、スベテ當郡ノ內ナルベシト思ハル、郡ノ地勢ヲ考フルニ、東ノ方ハ平衍ノ地ニテ、中央ヨリ西ノ方ヘハ次第ニ高クシテ、ソノハテニ至リテハ秩父郡ノ群山ニ連リテ、山々重リ立リ、土性ハ多ク野土ニシテ、或ハ石眞土等ノ處モアリ、水利スベテ不便ナレバ、天水ヲ仰ヒデ耕作ヲナス、故ニ陸田ハ多クシテ、水田ハ三分ノ一ニ當レリ、〇中略當郡古ヘノ樣ヲ考フルニ、圖ノ中央ヨリ北ニアリテ、多磨ノ府ヨリハ其間若干ノ曠野ヲ隔テ、足立ノ府ヨリハ荒川ノ水涯閑地アリテ、往來ノ道ヲ隔テタレバニヤ、郡司ヲ置レテ、國務ノ指揮アリシナルベシ、下リテ鎌倉管領ノ頃ニ至リテモ、郡中鉢形ニ城塢ヲ構ヘテ、上杉氏ノ居城トナシ、郡中ノ事ヲ沙汰セシニ、天文年中ニ及ビ、上杉ノ旗下藤田右衞佐康邦、當郡及ビ榛澤幡羅ノ三郡ヲ兼領セシコト、彼家ノ譜ニ見ユ其後康邦上杉ニ背キテ北條氏ニ屬シ、氏康ノ三男虎壽丸氏吉ヲ養子トシテ家督ヲ讓リ、後北條安房守氏邦ト號シ、鉢形城ニ在リテ郡中ヲ治シム、斯テ天正十八年、小田原滅亡ノ時、氏邦モ前田利家ニ降テ、領地悉ク沒收セラレシ後ハ、關東一圓ニ御料所トナリシニヨリ、又此地ノ要害ニ及バザレバ、鉢形城ハ廢却セラレヌ、然リシヨリ後、郡中ハ御料及ビ旗下ノ士ノ知行ト交錯セリ、土人ノ風俗ナマデ近郡ニ異ナルコトナケレド、秩父ヘヨリシ方ハ、悉ク山村ニシテ、尤朴實ノ風多シ、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年三月己巳、武藏國言、國分寺七層塔一基、以去承和二年為神火所燒、于今未構立也、前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正、奉為聖朝欲造彼塔、望請言上殊蒙處分者、依請許之、

〔吾妻鏡十八〕元久二年六月二十二日戊申、畠山次郎重忠參上之由風聞之間、於路次可誅之由有其沙汰、相州已下被進發、〇中略午剋著於武藏國二俣河、相逢于重忠、重忠云十九日出小衾郡菅屋館、今著此澤也、

〔郡名考〕武藏　幡羅ハラ　ハタラ

〔新編武藏風土記稿〕二百二十六 幡羅郡 總說

幡羅郡ハ國ノ中央ヨリ北ニ當リ、江戶ヨリハ亥ノ方ニテ、郡ノ境マデハ、行程凡十七里、郡廣狹ハ、四方大略同クシテ二里餘ニ及ベリ、和名抄ニ、幡羅ノ假字ヲ字訓ニナ原ト訓ズ、是同書鄉名ニ幡羅アレバ、全クカノ鄉ヨリ起リシ郡名ナラン、今モ郡中ニ原鄉存セリ、又中古郡名ニモ原ノ字ヲ用シコト、今郡中ニ存ル水帳ニ見ユ、按和名抄郡鄉ノ字ハ國史ニ云如ク好字ヲ用シコト勿論ニテ、後世ハ簡便ニ從ヒテ、或ハ二字ヲ一字ニ改シコト、他ニモ此類多シ、〇中略 郡ノ四域、東ハ大里埼玉ノ二郡ニトナリ、南モ大里郡ニツヾキ、西ハ榛澤郡、北ハ上野國邑樂新田ノ二郡ナリ、此國境古クハ利根川ヲ限ルトイヘドモ、變遷アリテ今ハ大抵當郡ノ方ヘ瀨モウツリテ、古利根川ヲ堺ト定ル所多シ、郡中概シテ平且ノ地ナリ、土性ハ眞土ナレバ、頗ル膏腴ノ地ナリトイヘド、水利ハ便ヨカラザレバ、自ラ陸田多クシテ、水田ハトボシ、カノ陸田ノ廻リニハ、多ク桑ノ木ヲ植テ蠶ヲ養ヘリ、サレバ紡績ノ利モマタ少カラズシテ、他郡ニ比スレバ高兌ノ地ナリ、南ノ方ニ中山道ノ往還カヽレリ、ソノ通ズル所、大里郡新島村ヨリ入テ榛澤郡深谷宿ニ貫ク其里程一里半ニ過ズ、〇中略 上古ヨリ此邊ヲ領セシ人ハ詳ナラズ、タヾ承和ノ比、冷然院ノ御領ニ充奉リシコトハ、上ニイヘルゴトシ、成田家譜ヲ按ズルニ、武藏守忠基ヨリ三代ノ孫道宗ト云シ人、此ニ住シ、幡羅太郎ト號ス、シカラバ道宗ノ父武藤大夫家忠、武藏ノ藤氏ニテ、ハヤク此地ヲ領セシヲ、道宗ニ至リテ、其領スル所ノ郡名ヲモテ、カク唱ヘシニアラズヤ、道宗ノ嫡男成田大夫助高モ、打續テコノ邊ヲ領シ、二男別府次郎行隆、三男奈良三郎高長、玉井四郎助實、是等皆郡內ニ散住シ、ソノ地名ヲモテ家號トセリ、是東鑑等ニアラハルヽ者ナリ、サレバ其支屬モ延蔓シテ、此地ニ居シコトシルベシ、郡ノ東ノ方忍領ニ屬スル村々ハ、天正ノ頃マデ成田家ノ所領ニシテ、西ノ方ハ鎌倉管領ノ世トナ

榛澤郡

リシヨリ、上杉陸奥守憲英、榛澤郡深谷ニ城ヲ築キ、此邊ヲ領セリ、今深谷領ト唱フル地ハ彼舊領ナリ、御入國ノ後ハ、大抵御料私料ウチ雜リテ、寺社ノ領モ纔ニアリ、土人ノ風俗近郡ニ同ジ、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月戊戌、武藏國播羅郡荒廢田百卅三町、奉充冷然院、

〔郡名考〕武藏　榛澤ハシサハ ハムサハ ハンサハ

〔新編武藏風土記稿二百三十榛澤郡〕總說

榛澤郡ハ、國ノ北ニアリ、江戶ヨリ西北ノ方、郡界マデ行程十八里、和名抄ニ、榛澤ヲ訓ジテ波牟佐波ト註ス、○中略榛澤鄉ヨリ起リシナルベシ、相傳フ、古榛澤村ノ邊大ナル澤アリ、其左右ニ榛ノ木立リシ由、今モ其邊榛ノ大木許多アル類、土地榛ニ宜キコト知ベシ、郡名ノ所由モ是ガ故ナラン、後世或ハ半澤ト記セシヿノアルハ假借セシナリ、闔郡ノ狀、東南隅ハ狹マリテ尖タルガ如ク、西南北ノ方ヘ張出セルサマ、其形扇面ニ似タリ、サレバ廣狹モ定カニ言難ケレド、大抵東西四里許、南北五里半、東ハ幡羅大里ノ二郡ニ隣リ、南ハ總テ男衾郡ニテ荒川ヲ界トス、西ハ那賀兒玉ノ二郡ニツヾキ、秩父郡ノ地モ少シク出タリ、北ハ上野國新田佐位ノ二郡ニテ利根川ヲ國界トス、然ルニ此川瀨ハ後世變革アリテ、中古マデ上野ニ屬セシ村々ノ、イツトナク郡中ヘ入シモアリ、小田原役帳ニ、上州高島鄉ト載セシモノ、今郡中ニ屬シ、又郡中花藏寺ノ棟札ニ、勢多郡橫瀨鄉ト記ス、勢多ハ則上州ノ郡名ナリ、此類ニテ察スベシ、其變革ヲ考フルニ、隣郡兒玉ノ內、山王堂仁手ノアタリハ、總テ上州那波郡ニ屬キシヲ、寬永年間ノ洪水ニ、烏川ノ瀨北ニ移テヨリ以來武州ニ屬スト、上野國志ニ見エタリ、想フニ此時變革セシナラン、郡ノ地域、東ハ平坦ニテ、中央ヨリ西ヘハ山々連リ、秩父那賀ノ方ヘヨリテハ高山幷立ス、土性ハ、南ノ方荒川ノ邊、及北ノ方利根川ニ寄タル地ハ、眞土ニ砂交リ、ソレヨリ漸ク川ニ遠カリ、郡ノ中央ヨリ山丘ニ至リテハ野土ト赤土トナリ、水利不便ナレバ、陸田多ク、水田ハ少シ、郡中西ノ方ハ、田畔ニ植ルニ桑ヲ以テ、蠶ヲ育テ紡織ヲ

專トス。○中略 按上古當國東山道ニ屬セシ頃ハ、官道ニテ、當郡モソノ街道ニカヽレバ繁榮セシ地ナルベケレド、是ハ尤古代ノ事ナリ、東海道當國ニ移リテ後ハ、人跡モスクナク、次第ニ僻遠ノ地トナレリ、七黨系圖ニ、榛澤三郎成房、其子小太郎、及六郎成清、成清ハ東鑑ニモ載タリ平六郎成長等ヲ載ス、是等皆郡中ノ人ニテ、此邊ニ館ヲカマヘテ、一族モ多カリシコト知ベシ、上杉管領ノ時同氏陸奧守憲英深谷ニ在城シ、其家人等郡中ニ散住セシト云、中ニモ花園山ニ、居城ヲカマヘシ藤田氏ノ如キハ、數世土著シテ、威ヲ近鄕ニ振ヒシナリ、北條氏康ノ時ニ至リ、藤田右衞門佐康邦ガ乞ニ因テ和睦ノ時、三男氏邦ヲカレガ養子トシテ、隣郡鉢形ニ在城セシニ及テ、郡中皆小田原分國ニ屬シ、天正十八年、北條氏滅テ後御料所トナリ、旗下ノ士ノ采邑モ打錯レリ、

〔新編武藏風土記稿 二百三十五 那賀郡〕總說

那賀郡ハ、國ノ中央ヨリ西ノ方ニテ、少シク乾ニヨレリ、江戶ヨリ凡二十二里、東ハ榛澤郡ニ界ヒ、南ハ秩父郡ニテ山々ヲ隔ツ、西北ハ兒玉郡ニ接シテ、接界大牢ハ、見馴川ヲ限リトス、此川廣木村ノ邊ニテ、兒玉村ノ方ヘ流レ入レリ、闔郡乾ヨリ坤ヘ地先長ク、凡三里許、南北狹ク、郡ノ形長クシテ、下ブクラナリ、其開キタルハ東寄ニテ、僅一里半ニ過ザル地ナリ、○中略 又倭名抄國郡ノ下ニ那珂ト出セリ、元祿國圖ニハ那賀ト書セリ、諸國ニ那珂郡アルハ、中ノ郡ノ心ナルベシト、僧契沖イヘリ、今モ賀美那珂ト並ビシニヨレバ、上中ノ義ナルニヤ、サレド國ノ西北ニ當レバ、定カニハ云ヒガタケレド、古ハ當國三ツニ別レシナレリ、當時ノ事ハ別ニ故アルナルベシ、○中略 御打入ノ後ハ、大抵御料所ト旗下ノ人ノ知行ト打交レバ、其後次第ニ原野ヲ開キ、又分村等アリケレバ、元祿ノ頃ハ、正保ノ改ヨリ四村ヲ增加シテ、今モ替ラズ、タヾ僅ノ新闢ノ地高入トナリシノミナリ、郡中南北ハヨホド高キ山打續キ、東北ノ二方ハ次第ニ低シ、サレバ陸田多クシテ水田ハ少シ、多クハ天水ヲ湛テ耕植セル故、干損多シト云、其低キ所ニテハ專水溢アリ、土性ハ近鄕ト同ジク、眞土

野土砂交リナリ、略中郡中耕作ノミヲコトヽシ、餘業ヲナスモノ少シ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

麻久良多知己志爾等里波伎、麻可奈之伎、西呂我馬伎己無、都久乃之良奈久、

右一首、上丁那珂郡檜前舍人石前之妻大伴眞足母、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年五月丙申、武藏國那珂郡元來小郡、官員約小、而今戸口增益、結定四郷、收多職少、不堪頒行、據准令條、誡將下郡、改小爲下、更增一員、

〔新編武藏風土記稿二百三十八兒玉郡〕總說

兒玉郡ハ、北ノ國界ニアリ、江戸ヨリ郡境マデ二十一里餘、西ノ方上野ノ國境マデ二十四里餘、秩父郡境マデ二十六里ヲ隔ツ、和名抄國郡條下ニ、兒玉郡ヲ訓ジテ古太萬ト註ス、其名ノ起レル地ハ、今ノ兒玉町下兒玉村ナルベシ、闔郡乾ヨリ坤ノ方ヘ、地先長ク張出テ、其徑リ凡六里半、幅ハ本庄宿ノ邊ニテ一里半許、西ニヨリテハ一里程ノ處モアリ、東ハ榛澤郡ニ境ヒ、巽ハ那賀郡、南モ同郡ニテ身馴川ヲ隔トス、坤ハ秩父郡ニ交ハリ、山丘ヲ境トス、西ハ神流川ニ限リ、對岸上野國綠野郡ナリ、四域カク山川ヲ以限リタレバ、古來變革ナキガ如クナレド、利根川ニ添タル杉山、新井、都島、山王、堂沼、和田、仁手等ノ數村ハ、古上野國那波郡ニ屬セシヲ、寛永年中ノ洪水ニ川瀨變リテ、當國ニ入シト、上野國志ニ載セ、隣郡榛澤郡横瀨村華藏寺大日堂、天正十一年ノ棟札ニモ、上野國新田庄勢多郡横瀨郷云々ト記シ、又和名抄賀美郡郷名ニ小島ト載セシハ、全ク今ノ當郡小島村ト覺ユ、變革アリシコト知ベシ、按ニ、本郡ハ當國七黨ノ一、兒玉黨ノ住セシ地ナリ略○中中古ハ足利氏ノ領ニ屬シ、天文永祿ノ頃ハ、小田原北條氏ノ所務ナリシコト、寺社ノ寄附狀等ニモ見エタリ、御打入ノ後ハ、大抵御料所ト、旗下ノ人ノ知行ト打交レリ、郡內坤ノ方ノミ山丘ニ續キテ、其餘過半ハ川ニ添タレド、水田少クシテ陸田多ク、土性陸田ハ眞土ニテ、水田ハ砂交ノ野土ナリ、又川ニ

ヨリテ便宜ノ地ナレドモ、ヤヽモスレバ水溢ノ患アリ、マタ秩父那賀兩郡ニ接シタル邊ハ、水利不便ニシテ、旱損ヲ免カレズト云、○中略郡中耕種等餘業、及風俗ノ異ナルコトナシ、

〔和名抄諸國郡鄕考六武藏〕賀美上河越記、加美郡といへるは、二十餘郡の北のはてにて、此郡より流れ出るは、加美の川と云て、末は利根川にたぎりおちて、これなん武藏の國とかみつけの境ひ川なる、

〔新編武藏風土記稿二百四十三賀美郡〕總說

賀美郡ハ、國ノ乾ノ方ニテ、上野ノ國界ニ當レリ、江戸ヨリ二十三里餘、倭名抄國郡ノ下ニ、賀美ヲ訓ジテ上ト註ス、按那賀郡ト並ブトキハ、上中ノ義理ナルニヤ、他國ニモ賀美那賀ノ郡名ハ例多シ、○中略上古ハ當國山道ニ屬シ、寶龜年中改テ海道ニ屬セシカドモ、猶モトノ官道ハ廢セズシテ、山道兩路カヽリシ事、續紀ニ見ユ、當時郡中官道ニ係シ事ナルベシ、サレバ戰爭ノ世ニ、上野國ヨリ打テ出テ、武藏野ニテ戰ヒ、或ハ五十子ニテ對陣シ、マタハ阿保原合戰ノ類、皆郡中ニ大道ノカカリテ、此邊要地ナル故ナリ、中葉以來邊鄙ノ地トナリタレバ、土地變革モアルベケレド、今其傳ヲ失フ、今ノ地域東南ノミ地續キテ兒玉郡ニ隣リ、三方皆水流ヲ界トス、西ハ上野國ニテ神流川其界ヲ流ル、北モ同國ニテ烏川ヲ限リ、艮ニ至リテ利根川ト合フ、此所ハ寛政中ニ變革シテ、今ノ如クナリシト云、郡ノ形大略南北ヘ長シ、其內坤ノ方兒玉郡界ニ至リテハ、地先尖タル如ク差出ダリ、此郡界ヨリ艮ノ方、上野國界利根川岸八町河原村マデ、長凡二里半、東西ノ徑リハ郡ノ中央廣キ處ニテ一里許、ソレヨリ南北ヘ次第ニ狹マリタレバ、里程齊シカラズ、御入國ノ後ハ、大抵御料所ニシテ、私領モ少ク交レリ、郡中平坦ノ地ニテ、田少ク畠多シ、土性眞土ナリ、川ニ添テ屢水溢スル所ハ、變ジテ砂石混雜セシ所モアリ、スベテ此邊ハ水災多ク、東南ニ至テハ旱損ヲ患フト云、村民等耕種ヲ事トスルノミニテ餘業ナシ、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年十二月己巳、武藏國加美郡人、散位正七位上勳七等檜前舍人直由加麻

秩父郡

呂男女十人、貫附左京六條、與土師氏同祖也、

〔運歩色葉集 知〕秩父

〔地名字音轉用例〕入聲ツノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

ちゝぶ　秩父武郡 知々夫　秩ヲチヽニ用ヒタリ

〔武藏演路 五〕秩父郡ハ東高麗、入間、比企、男衾等の郡に連り、西は甲斐、信濃に境ひ、南は多摩郡に隣れり、北は上野國に境ふ、東西凡十七八里許、南北凡十五六里許と云、

〔新編武藏風土記稿 二百四十六 秩父郡〕總說

秩父郡ハ國ノ西偏ニアリ、江戸ヨリ西北二十里餘ナリ、和名抄ニ、秩父ヲ訓ジテ知々夫ト註ス、郡名ノ起リハ、モト國名ヨリ起リ、略○中郡ノ地形ハ、前ニ辨ゼシ如クナレバ、奇峯秀嶽相聳ヘ、險阻狹隘ノ地ニシテ、少シクヒラケタル地ハ、大宮郷ノ邊、或ハ横瀬、太田、及吉田邊ハ水田アリト云ヘドモ、十ガ一ニシテ、其餘陸田モ多クハ高燥ニヨリ、火田ノ地ハ層巒ヲヒラケリ、土性ハ眞土トイヘドモ、悉ク小石交リ、其他黒赤ノ野土多シ、村落ハスベテ山川ニ包マレ、谷川餘多曲流セリ、大ヒナルハ荒川ニテ、西ノ方窮谷ヨリ出テ、郡ノ中央ヲ東ニ走流ス、闔郡ノ地域ハ、狹キ地ニテハ六七里、東ノ方ヨリ艮ノ方マデノ界ハ犬牙シテ、高麗、入間、比企ノ三郡ニ隣リ、夫ヨリ北寄ニ至テハ、男衾、榛澤ノ二郡、同ク犬牙シテ山峯ヲ界トスルモ、屈曲シテ榛澤郡ト那賀郡ノ界ニ至テハ荒川ヲ限トシ、那賀郡ヨリ又峯巒ヲ界トシテ、西ノ方ヘ漸々少シク縮マリ、夫ヨリ兒玉郡ニ接附シテ、上州甘樂郡マデハ、北寄ヘ張出シ、同郡山中領ト神流川ヲ界トスルコト二三里許、同郡ト信州佐久郡、甲州ノ都留郡國界マデ、峻岳萬重ヲ堺トシテ、圓形ノ如ク大ヒニ張出シ、又西ノ方甲州都留郡ト多磨郡ノ界マデハ、漸々縮テ國界ヲナスコト悉ク高山ニテ、多磨郡ニ至リテモ、山峯ヲ界ヒテ高麗郡ニ及ベリ、西ノ方ハ上信甲ノ三國ニトナリ、其餘スベテ九郡ニカヽレリ、東ノ方ヨリ乾ノ方

ヘ凡廿四里許、南ヨリ北ヘ廣キトコロニテ十四五里、〇中略郡ノ經界ニ至リテハ、後世沿革セシニヤ、小丸峠ノ東、上我野郷七ケ村ハ、今本郡ニ隷スレド、舊キ撿地帳ニハ、高麗郡上我野郷ト記シ、又高山村不動堂、及阪石町、分法光寺、天正十九年ノ御朱印ニ、高麗郡吾野ノ内トアレバ、本高麗郡ナルコト論ナシ、土人ノ說ニ、妻阪峠ノ東上下名栗村、及皆新田峠ノ東、皆谷、白石、御堂、安戸、椚平、大野ノ六ケ村、合テ十五村ヲ外秩父ト云、按ズルニ、元高麗郡ニシテ、後本郡ニ屬セシモノカ、和名抄入間郡ノ部ニ、安刀トアリシハ、今安戸村ナラント、ソノ地入間郡トハ比企郡ヲ阻ツレド、前ノ六ケ村モシクハ高麗郡ニ屬セズンバ、入間郡ナランカ、サアレバ入間郡ノ安刀ナランモ當レリ、思フニ、往古ハ妻阪峠小丸峠、皆新田峠ヲ限リテ、是ヨリ西ヲ本郡トスルモノナラン、扨闔郡ノ外ニ接附セシ秩父ナレバトテ、イツシカ外秩父ノ名ヲコレルニ因循シテ、往古ヨリノ地ヲ呼テ奥秩父トハ稱スルナラン、土產ニハ、生絹、横麻、煙草等ヲ第一トス、山ヨリ出セルモノハ、金、銀、銅、鐵、磁石、寒水石、綠青、或ハ木石ヲモ出セリ、土風人物等ニ至テハ、サセル殊異ナシトイヘドモ、深山幽谷ニ僻在スルモノハ、自ラ木訥ニシテ、童齔ヨリ白首ニ至ルマデ、月代ヲ剃ザルモノ有テ、偏ニ總髮ノ如ク、婦嫗モ眉毛ヲ剃ズシテ白歯ナルアリ、婦モ男ト齊シク短褐ヲ著シ、山谷ニ動搖シ、凍寒ニ至リテモ、唯褐ヲモテ重子襲フノミ、イヌルニモ臥具ノ設ナク、ヨモスガラ夫妻子母爐火ヲ擁シテ睡リ、燈ハ松根ヲ焚ケリ、婚姻喪祭ノ禮ノ如キハ、イカニヤアラン、邊境ノ譬ヘニ放言セルハ、酒店ヘ三里、豆腐屋ヘ二里トイヘルモ、斯ル山中ノコトニテゾ有ン、深谷窮民ノサマハ、他郡ノ風俗トハ、違ヘル所多カルベシ、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、〇中略故改慶雲五年而和銅元年爲而御世年號止定賜、〇下略

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

於保伎美乃美己等可之古美宇都久之氣麻古我氐波奈禮之末豆多比由久、

右一首、助丁秩父郡大伴部少歳、

〔郡名考〕武藏　葛飾カツシカ

〔武藏演路六〕葛飾郡ハ、本所、葛西、二郷半、幸手、杉戸、栗橋邊迄、凡十一万石餘の郡にして、延喜式、源順倭名抄等、武藏二十一郡にて、此郡あらず、下總國に在し也、然れども東鑑太平記等を考るに、武藏國住人葛西氏の名出たり、若此比は武藏に屬せし事ありや、又伊勢物語にもむさし下總の間にある隅田川とあり、但し是は隅田川の説區々あれば、とね川の事をいゝしもの歟、且歌書名所によれば、隅田川はいづれも下總にいれたり、武藏二十二郡と改まりしは近代の事にて、元祿中といふ、利根の流れを境とし、故葛西といへるは利根川の西葛飾といへる事也、下總國の葛飾郡は、利根川の葛東也、

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕總説

葛飾郡ハ、國ノ東界ニアリ、和名抄ニ據ニ、此郡元來下總國ノ管内ニテ、當國二十一郡ノ外ナリ、○中略按ニ、古ハ下總國トノ間ニ入江アリテ、埼玉郡ノ地先マデニ插入タリ、奈良御門ノ御時、埼玉ノ入江ナドヽ歌ニモ讀シ事、萬葉集東國歌ニ見タリ、サレバ今ノ郡中ハ、大抵當時ノ江ノ中ナリ、潮水退テ後土地ノ闢ケシハ、延喜以來永和ノ頃ニ至マデ五百年ホドノ間ニ、次第ニ出來シナルベシ、按ニ、和名抄下總國葛飾郡、鄕名六鄕ト、驛家餘戸アリ、今土地ヲ撿スルニ、大抵其地ト覺シキ所、下總國葛飾相馬ノ二郡ニ遺テ、只八島豐島ノ二鄕ハ、其地ト覺シキ所ナシ、想フニ此二鄕皆島ノ字ヲ用ヒタレバ、眞間ノ入江中ニアリシ島ナドニヤアリケン、サレバ其地今ハ葛西ノ中ニ屬シテ、ソノ島嶼ノ廻リニ寄洲ノ出來シモノ、年ヲ經テ今ノ如ク廣大トハナリシナリ、モト下總國葛西郡ヨリ闢シ新田ナレバ、直ニ彼郡ニハ屬セシナルベシ、葛飾、和名抄ニハ加止志加ト訓ズレド、

コレハ大寶年來ノ唱ニテ、古クハカツシカト號セシト見エテ、萬葉集ノ歌ニハ勝鹿ナド書タレバ、今ノ唱ヘ、カヘリテ古ニ復セシト云ベシ、又下總國歌ニ、爾保抒里能、可豆思加和世乎、爾倍須登毛、倶能可奈之伎乎、刀爾多氏米也母ト見エタリ、仙覺ガ註ニ、彼郡中ニ大河アリ、フトキト云、河ノ東ヲ葛東郡ト云、河ノ西ヲ葛西郡ト云ト云リ、今按ニ、フトキ、東鑑ニ太井ト記ス、地理ヲ推ニ、今ノ利根川ナルベシ、仙覺ハ文永頃ノ人ナリ、是ヨリサキ建長五年八月晦日、下總國下河邊庄ノ堤ヲ築固ベキノ沙汰アリシ事、東鑑ニモミエタレバ、此頃ニ至テ、當郡ノ地、大ニ開ケシコト知ラル、然ルニ其頃ハ利根川ヲ界トシテ、今ノ二郷半領ノ邊ヨリ幸手領マデ、總テ葛西ト號セシト見ユ、今ハ小合溜井ヨリ南ニノミ葛西ノ名アリ、又葛東郡ハ唱モ失ヒシナリ、古今集羇旅歌ノ詞書、及伊勢物語等ノ書ニ、武藏ト下總トノ境、隅田川ト見エ、又金澤稱名寺文書ノ內、文永十二年金澤越後守顯時ノ讓狀ニ、下總國下河邊庄平野村トノセ、元亨四年、執權高時貞顯二人ガ下知狀ニ、下總國高野川ニ橋ヲ架セシコト見ユ、正慶元年北條貞時ノ文書ニ、下總國下河邊庄赤岩鄉トモアリ、又下總國中山法華經寺永和三年ノ寄附狀、及應永四年足利氏滿狀、同二十七年千葉兼胤狀、同二十九年左衞門尉定忠狀ニ、皆下總國葛西御厨篠崎鄉ト見ユ、又相州鶴岡文書、應永二十六年足利持氏ノ寄附狀ニ、下總國下河邊庄彥名河關ト記シ、下高野村東大寺寶德二年ノ緣起ニ、下總國葛飾郡來復山東大寺ト載セタリ、此平野、高野、赤岩、篠崎、彥名ノ數村、今皆當郡ニ屬スル時ハ、當時ノ國界推テ知ルベシ、又僧堯惠ガ北國紀行ニ、文明十九年二月ノ初、鳥越ノ翁艤シテ隅田川ニ浮ブ、東岸ハ下總、西岸ハ武藏野ニ續ケリ、此川武總ノ界ニテ、利根入間ノ二川落合所ニ古渡アリト見ユ、サレド國界ノ今ノ如ク改マリシハ、最近キ世ノコトナレド、其年代ニ異說多シ、或ハ寬文年中トモ、又貞享三年ノ事ナリトモ云、又一說ニ、今ノ郡域上古當國ニ屬セシヲ、中古ニ至リ下總國ニ隷シ、元祿年中武州ニ復セシトイヘド、皆無稽ノ說ナリ、按ニ古河公方ノ家老簗田某政助右京亮、後大炊頭ト

〔隔ス〕、金子左京亮某ニ與ル文書ニ、禪興寺領武州平沼郷ト見ユ、平沼ハ今ノ二郷半領平沼村ナリ、政助ハ總州郡山郷水海村三島社ノ鰐口ヲ寄附セシ人ニテ、銘文ニ文龜三年大旦那平右京亮正助ト彫ル、政字正字同訓ナレバ、傍ヲ省略セシマデナルベシ、因テ知ル、政助ハ永正大永ノ頃ノ人ニシテ、國界ノ改リシモ、其頃ヨリ以前ナルコト明ケシ、サレド郡中戸ケ崎村淺間社、天正十年ノ鰐口ノ銘ニハ、下總國戸ケ崎郷ト記タレバ、區々ニ唱ヘシナラン、同十九年金町村香取社領御朱印ノ文ニハ、武藏國勝鹿郡葛西金町郷ト記サレ、又御入國之時御知行割〔註略〕ト題セル繪圖ニモ、當郡ヲ武藏國ニ屬シタレバ、當時既ニ國界變ゼシナラン、正保改メ國圖ニハ、全ク今ノ郡界ノ如ク記セリ、當郡ハ昔將軍賴朝ノ頃ハ、其家人葛西三郎清重住シテ大半領セシト見ユ、又義經記ニヨレバ、千葉介ガ領地モ雜ハリシナリ、續テ親王家將軍ノ頃ニハ、執權北條氏知行セシコト古文書ニ見エタリ、足利將軍ノ頃ハ、關東管領ノ領國ニ屬シ、戰爭ノ時ニ至テハ、小田原北條氏割據シ、其家人モ知行セシコト、小田原役帳等ニ載タリ、唯松伏領以北ノミ、纔ニ古河公方ノ領地ニ屬セシトオモハル、公方衰微シテ、後ハ全ク小田原ニテ領セシガ、天正十八年御打入アリシヨリ御料地トナリ、其後御家人寺社等ヘモ分チ賜ヒシカド、今モ郡内過半ハ御料所ナリ、總テ郡中沼池多ク、或ハ水涯ノ閑地モ少カラズ、南ノ端ノ海涯ニハ、年々ニ寄洲ツキテ、地先出張ル勢ナリ、闔郡石高正保ノ改ニ十萬三千石餘、元祿ニ至テハ十一萬六千石餘、其後モ新墾ノ地闢ケテ、今ハ若干ノ石高増加セリ、郡域ハ南ヨリ北ノ方ニ長シ、郡ノ廻リスベテ川流延亘セリ、南ハ海ニ邊シ、東ハ利根川庄内古川、及江戸川ヲ限テ、下總國葛飾郡ニ隣リ、北ヨリ西ニ廻テハ古利根川、古隅田川淺草川〔隅田川ノ一名〕等ヲ隔テ、埼玉、足立、豐島三郡ニ隣レリ、南涯ヨリ北方栗橋ニ至マデ、里數十里餘、東西ノ徑ハ、南邊濶キ所ニテ三里餘、中央松伏村ノ邊ニテハ、纔一里ニ足ラズ、北ニ至テハ、又廣ゴリテ二里餘ニ至ル、〔中略〕中闔郡打開ケタル平坦ノ地ニテ、縱横水流通シ、水田勝ノ沃土ナレバ、他ノ郡ヨリモ

富饒ノ地ナリ、殊ニ郡南葛西ノ邊ハ、江戸ニ近キヲ以テ、五穀ノ外ニモ菜蔬ヲ栽テ市ニ鬻ゲリ、其利モ少ナカラズ、又海濱ニ至テハ、漁獵ヲ餘業トセルモ多シ、サレバ農民ノ風俗ヤヽ浮靡ニシテ、總テノ事大様江戸ノ俗ニ異ナラズ、又深川本所中之郷、及其邊ノ村ニモ、寛文ノ頃ヨリ次第ニ百姓商家出來テ、正德年中、御府内町並ニ屬セシ地モ少ナカラズ、

〔萬葉集抄 三〕かつしかとは下總國葛飾郡也、彼郡の中に大河あり、ふとゐと云、其川の東をば葛東郡といひ、西をば葛西の郡といふ、

〔北國紀行〕文明十九年二月ノ初、鳥越ノ翁艤シテ隅田川ニ浮ブ、東岸ハ下總、西岸ハ武藏野ニ續ケリ、此川武藏ノ界ニテ、利根、入間ノ二川落合フ所ニ古渡アリ、

〔參考源平盛衰記 四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

伊藤本、八坂本云、○中略北條サラバ十郎藏人殿討テモ搦テモ得サセヨ、勸賞ハ功ニ依ベシト宣ヘバ、常陸房畏テ承、左候バ中間十人ヲ給ハラント申、○中略十郎藏人殿ヲバ手取足取髻取テ生捕ニゴソハシタレケレ、○中略聽テ常陸房ヲモ十郎藏人ノ首ニ添テ、鎌倉ヘコソ下サレケレ、鎌倉殿神妙也、勸賞ニハ流セトテ武藏ノ葛西ヘゾ流サレケル、

〔吾妻鏡 十七〕正治三年八月十一日戊子、甚雨、午剋大風、鄉里穿屋、○中略下總國葛西郡海邊、潮牽ニ人屋千餘人漂沒云云、

〔鎌倉大草紙 下〕尊氏の御時、千葉の家二方にわかれ、宮方、將軍方とてありしが、宮方は九州へ下り、其後終に下總へわたり給はず、關東は一統にてありけるが、今度また馬加は、成氏公と一味して原是を主として、千葉へ移り、千葉の跡を繼ける、其後原は小金の城に居住す、上杉より今度胤直と一所に討死ありし、中務入道了心の子息實胤、自胤二人を取立て、下總國市川の城に楯籠て、千葉又二流となる、○中略康正二年正月十九日、終に城を攻落し、實胤は武州石濱へ落行、

自胤は武州赤塚へ移る、兩總州の兵どもは、大半成氏へ降參申ける、（中略）實胤は千葉城へ入部不叶して武州石濱葛西邊を知行して、時を待て居たりしが、世中を述懷して遁世して、濃州に上りて閑居す、其兄の自胤を上杉より取立、實胤の跡を給はり千葉介に任す、武州の千葉と號す、

新羅郡

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月癸亥、歸化新羅僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人、移武藏國閑地、於是始置新羅郡焉、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年五月甲戌、武藏國新羅郡人沙良眞熊等二人、賜姓廣岡造、

〔日本書紀三十持統〕四年二月壬申、以歸化新羅韓奈末許滿等十二人、居于武藏國、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年四月戊午、置歸化新羅人一百卅一人於武藏國、

〔武藏演路一〕按に、元正靈龜二、高麗人を武藏國に遷し、高麗郡を置事、續日本紀に出せり、然るに武藏に新羅郡無之は、新羅高麗の誤り歟、或は幡羅、或は新座などの誤にや知べからず、

〔和名抄諸國郡郷考六武藏〕新座（爾比久良）松山巡覽志、新座村白子宿立義云、土人はしらくといふ、里老云、武藏に新羅郡といへる有しが、いつのほどにか絕たり、此邊其しらき郡のあとなれば、しらきと云しが、いつしか轉じて、しらくと唱へ、文字さへも改りしと云、按に、續紀天平寶字二年、歸化新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人、移武藏國閑地、於是始置新羅郡（中略）右の如く見えたれど、はやくより廢れたるにや、民部式に載たる郡名の内に見えず、其後の和名抄拾芥抄等にも不見、たま〱類聚往來の武藏國郡名の所に、新座郡となくて、新羅郡とあり、是は何によりて記せしや、古書になき事を、わづかに此書を以て證となしがたし、只後世の書に出たるが參しければしるすのみ、但ししひて證ないはゞ、新座は新羅の轉たるにや、さらば新座と書たるより、文字につきて、にひくらと唱しか、

郷

〔倭名類聚抄六國郡〕武藏國

多磨郡　小川（乎加波）　川口（加波久知）　小楊（乎也木）　小野（乎乃）　新田（爾布多）　小島（乎之萬）　海田（安萬多）　石津（伊之都）　狛江（古万江）　勢多

都筑郡　餘戸　店屋　驛家　立野（多知乃）　針圻（波利佐久）　高幡（多加波多）　幡屋（波多乃也）

久良郡　鮎浦（布久良）　大井（於保井）　服田（波止太）　星川（保之加波）　郡家　諸岡（毛呂乎加）　洲名（須奈）　良椅（奥之波之）

橘樹郡 高田(多加太) 橘樹(多知波奈) 御宅(美也介) 縣守(安加多毛利) 驛家

荏原郡 蒲田(加万太) 田本(多毛止) 滿田(上音下訓) 荏原(江波良) 覺志(加々之) 御田 木田(木多) 櫻田(佐久良太) 驛家

豐島郡 日頭(比乃度) 占方(宇良加太) 荒墓(安良波加) 湯島(由之万) 廣岡 餘戸 驛家

足立郡 堀津 殖田(宇惠太) 稻直(伊奈保) 郡家 餘戸 發度

新座郡 志木 餘戸

入間郡 麻羽(安佐波) 大家(於保也介) 郡家 高階(太加之奈) 安刀 山田(也万多) 廣瀨(比呂世) 餘戸

高麗郡 高麗(古万) 上總(加無豆布佐)

比企郡 郡家 渭後(沼乃之利) 都家(都介) 醎瀨(加良世)

横見郡 高生(多介布) 御坂(美佐加) 餘戸

埼玉郡 太田(於保太) 笠原(加佐波良) 草原(加也波良) 埼玉(佐以多万) 餘戸

大里郡 郡家 楊井(也木井) 市田(以知多) 餘戸

男衾郡 榎津(衣奈都) 鵜倉 郡家 多笛 川原 幡々 大山 中村

幡羅郡 上秦 下秦 廣澤 荏原 幡羅 那珂 霜見(之毛美) 餘戸

榛澤郡 新居 榛澤 瞻形 藤田 餘戸

加美郡 新田 小島 曾能 中村

兒玉郡 振太 岡太 黃田(〇黃田、高山寺本作草田) 太井

那珂(ナカ)郡 那珂 中澤 水保 弘紀

秩父郡 巨香 上斷 美吉 丹田 中村 餘戸

〔日本靈異記 下〕被觀音木像之助脫王難緣第七

正六位上大眞山繼者、武藏國多磨郡小河鄕人也、(〇中略)帝姫阿倍天皇(〇明元)御世、天平寶字八年甲辰

十二月、山繼遭賊臣仲麿之亂、而罹於殺罪之例、入十三人類、〇下略

〔類聚三代格八〕太政官符

應總收百姓二人身分調庸事

壬生吉志繼成年十九〇中略

壬生吉志眞成年十三〇中略

並男金部榎津鄕戶主外從八位上壬生吉志福正之男〇中略

承和八年五月七日

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年五月壬寅、武藏國言、多摩郡猪江鄕戶主刑部直道繼戶口同姓眞刀自咩、爲同鄕刑部廣主妻、生四男三女、經二十一年夫乃死矣、眞刀自咩居喪有禮、事死如生、墳側結廬、晨昏悲泣、推移歲月、終始不渝、見其操行、可謂節婦者、勅宜特授位二階、兼終身免同戶田租、

〇按ズルニ、猪江ハ狛江ノ誤ナラン、倭名類聚抄ニ多磨郡狛江古万江トアリ、

〔集古文書十二下文〕源頼朝卿下文由眞家藏

下　埼西郡之內糯田鄕住人等

定補鄕司職事

新田入道殿

右以人爲彼職、所可令執行□□人□□□□人□住人等、宜承知莫違失、故下、

治承五年十一月　源朝臣花押

〔吾妻鏡二〕治承六年〇壽永元年六月五日甲辰、熊谷二郎直實者、匪勵朝夕恪勤之忠、去治承四年、追討佐竹冠者之時、殊施勳功、依令感其武勇給、武藏國舊領等、停止直光之押領、可領掌之由被仰下、而直實此間在國、今日令參上賜件下文云云、

下　武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補所領事

右件所、且先祖相傳也、而久下權守直光押領事停止、以直實爲地頭之職成畢、其故何者、佐汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯籠、自鎌倉令責御時、其日御合戰、直實勝萬人、前懸一陣懸壞、一人當千顯高名、其勸賞件熊谷鄕之地頭職成畢、子々孫々、永代不可有他妨、故下、百姓等宜承知、敢不可違失、

治承六年五月卅日

〔吾妻鏡十二〕建久三年十一月二十五日甲午、早旦熊谷次郎直實、與久下權守直光於御前遂一決、是武藏國熊谷久下境相論事也、直實於武勇者、雖施一人當千之名、至對決者、不足再往知十之才、頗依貽御不審、將軍家度々有令尋問給事、于時直實申云、此事梶原平三景時引級直光之間、兼日申入道理之由歟、仍今直實頻預下問者也、御成敗之處、直光定可開眉、其上者理運文書無要、稱不能左右、縡未終、卷調度文書等、投入御壺中、起座、猶不堪忿怒、於西侍自取刀除髮、吐詞云、殿乃御侍倍登利波天云云、則走出南門、不及歸宅、逐電、將軍家殊令驚給、或說指西馳駕、若赴京都之方歟云云、

〔吾妻鏡十八〕元久二年六月二十八日甲寅、以武藏國久下鄕、被寄進勝長壽院彌勒堂領云云、

〔集古文書四十二寄附狀〕源賴朝卿寄附狀 相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄　相模國鎌倉郡内、鶴岡八幡新宮若宮御領□所事

在武藏國波羅郡内耼尻鄕

右爲神威增益、爲所願成就、所奉寄也、方來更不可有□籠之狀如件、

壽永二年二月廿七日　前右兵衞佐源朝臣賴朝 花押

〔集古文書十二下文〕源賴朝卿下文 家臣成田行明藏

下　武藏國別府鄕百姓等所、可早令自當鄕内車石赤木奥宮以通于長止呂小道自河西爲次郎行助分致知行、以同小道東相加太郎能行分、爲地頭致知行事、

總田數貳佰伍拾貳町參段小內〈建仁三年九月拾日定〉

太郎能行分、佰參町壹段大、次郎行助分、佰參町壹段大、四郎行直分、貳拾町、後家分拾町、

小林三郎妻分拾町　女子三人分六町〈各貳町〉

右別府鄕事、兄弟相論之間、或遂問注對決、或經次第沙汰之後、去建仁二年九月、令大和前司光行朝臣、幷右衛門次郎光俊等加實撿之處、〈中略〉當鄕能行行助共半分可知行之由、見于問注所之勘狀、仍自車石赤木奧宮以通于長止呂之小道、自河之西爲行助公、以同小道東所相加能行之分也、件東分內有肆拾壹町壹段小之田、此內拾八町九段六十步者、可爲行助分、田幷在家者、如元不可有相違、抑此事度々經沙汰之處、能行所申有其謂歟、仍所分給彼境也者、依鎌倉殿仰、下知如件、以下、

元久元年十二月十八日

清　亘〈花押〉

前右京進中原〈花押〉

左衛門尉平〈花押〉

前大膳大夫中原朝臣〈花押〉

〔吾妻鏡十八〕元久二年二月廿一日乙卯、武藏國土袋鄕乃貢者、所被寄永福寺住侶等供料也、遠州下知給云云、　十一月三日乙酉、小澤左近將監信重、相伴綾小路三位〈師季〉息女、〈二歲〉自京都參著、〈中略〉是母儀者、稻毛三郎入道重成女、遠州禪室御外孫也、去六月重成入道被誅之後、乳母夫信重、雖有扶持之號、猶恐彼餘孫隱居之處、尼御臺所可有御哀憐之由、內々被仰之間、參向云云、　四日丙戌、姬君被參尼御臺所御亭、可爲御猶子之儀也、稻毛入道遺領武藏國小澤鄕、可被知行之由被仰云云、

〔北條分限帳郡村略考〕操和又太郎

武州小澤鄕　永貳百貫文

武州多摩郡橘樹郡兩郡にまたがり、今は小澤鄕別れて菅ヶ村、谷ノ口村、長沼村、百村、大丸村な

ど云、都て貳千貳百石餘の村高也、玉川の南ノ涯なり、いにしへは都て多摩郡なるべし、今も當ヶ村は橘樹郡にて、殘村分は多摩郡なり、當時御料私領、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年五月十七日丁巳、先次郎左衛門尉政宣所領、武藏國大河戸御厨内八條郷、賜武部大夫重清、但地頭澀江五郎光衡者、如本所可安堵之由、所被仰下也、相州前大膳大夫被加下知、

〔集古文書二十六下知狀〕承久三年下知狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

可令早爲鶴岳八幡宮社領武藏矢古宇郷事

右以當郷可爲社領之狀、依仰下知如件、

承久三年八月二日　陸奧守平花押

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年七月十六日丁卯、宮寺領武藏國矢古宇郷内、以別當得分爲御讀經料、所被始置不斷大般若經轉讀云云、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年六月十一日、武藏國在廳等注申云、去九日辰刻、當國金子郷、雪交雨降、又同時降雹云云、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年〇延應元年二月十四日甲寅、武藏國小机郷鳥山等荒野、可開發水田之由、被仰大夫尉泰綱、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十月二十二日丙子、以武藏野可被闢水田之由議定訖、就之可被懸上多磨河水之間、可爲犯土之儀歟、將又將軍家御沙汰歟、可爲私計歟、賢慮猶難被一決、仍今日前武州召陰陽師泰貞晴賢等朝臣被示合、〇中略前武州又被仰曰、雖似沙汰、耕作之後者、爲御所御計可賜人々、然者可爲御所御沙汰、北方當時王相歟、自明年又可爲大將軍方、可見定御方違御本所云云、爲武藤左衛門尉頼親奉行、相具泰貞晴賢、行向武藏國海月郡、自彼所猶爲北方、亥方云々即兩人歸參于前武州亭、

申此由、以秋田城介所領同國鶴見鄕、可爲御本所之旨、泰貞等令一同之間、可有入御之由、〇中略群議治定之後、相副行義義景於泰貞晴賢被申御所、

〔正木文書　一〕讓渡武藏國春原庄內万吉鄕五郎經家所

右彼所者、依爲先祖相傳所領、讓與五郎經家所也、敢不可有他妨、但この所者、故女房に讓所に、死期ちかくなりて、万吉にをきては孝養所にすべきよし、遺言にせらるゝによりて、地頭川くたのうち、五段にをきては、故女房の墓所堂ニ永寄進する所なり、敢不可有他妨、宛給彼堂住僧、爲孝養每日可致勤者也、於彼田五畝者、付公私、不可有一向公事者也、任此讓狀、不可有相違、仍讓狀如件、

弘長三年三月二日　　覺智 花押

〔集古文書　二十六下知狀〕文永三年下知狀 相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮領、武藏國稻目神奈河兩鄕役夫工米事、如先下知狀者、云御燈、云御供、當宮異他之間、被免除彼役、以他計略可被沙汰入其分云々、早任彼狀、可被下知之狀如件、

文永三年五月二日　　花押

〔新編武藏風土記稿　二百二十一大里郡〕小泉村

小泉村ハ、江戸ヨリノ行程前村ニ同ジ、〇十六里此地名ハ古キ唱ニテ、岩松氏所藏ノ文永三年七月ノ文書ニ、當國小泉鄕ヲ岩松氏領セシヨシ見ユ、サレド郡名ヲノセズ、又矢野伊賀入道善久トイヒシ人モ、建武ノ頃男衾郡小泉鄕ヲ領セシトイヒ、又上野國世良田長樂寺元德ノ頃ノ文書ニモイブ、〇中略又隣郡男衾本田村敎念寺所藏、延文元年十二月三日ノ文書ニハ、畠山阿波守國淸申請ニテ、本田鄕及小泉鄕ヲ同寺ヘ寄附シ、康安二年六月六日ノ文書ニモ、此地ヲ同寺ヘ寄附アリシコトヲ載セ、共ニ男衾郡小泉鄕ト書リ、然レバ當村古ハ彼郡內ニ屬シテ、後郡界ノ變革アリシナルベシ、

〔圓覺寺所藏文書〕寄進金陸寺武藏國大里郡大江小泉郷、參分壹方各半分事、右爲當寺領所令寄附之狀如件、

正長元年八月十九日　　從三位源朝臣

〔萬葉集抄二十〕奥書 文永六年、於武藏國比企郡北方麻師宇郷政所註之畢

權律師仙覺在判

〔集古文書四十二寄附狀〕將軍惟康親王寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

征夷大將軍家

寄進　武藏國鹿島田郷

右奉仰條鶴岳八幡宮者、當鎌倉郡之名□摸石清水之宗祧、建久以來、明德惟馨、日居月諸、唯恩仰之是以奉進一村之田園、祝著万歳之春秋、請照丹誠、必垂玄鑒、朝野泰平、州縣豊穰、堂吏安全、黎民愷樂者、依仰寄進如件、

弘安元年十一月廿九日

左馬權頭兼相模守平朝臣花押

陸奥守平朝臣花押

〔新編武藏風土記稿八十四都筑郡〕新羽村

相州鎌倉郡鶴岡八幡社、正應三年ノ文書ニ、當所ノ地頭肥後三郎實村ガ遺領爭論ノ事ミエタリ、其文ニ、

依惡口利事狀、武藏新羽郷地頭大見肥後三郎次郎實村遺領事相論之時、嫡子頼時與平氏番申處、頼村爲逆罪之仁由依申之、被處惡口、被付論所於平氏畢、

又云、武藏新羽郷地頭大見肥後三郎次郎定村遺領事、定時嫡子又次郎頼村與後家平氏頼時継母相論之時、頼村申之定村之、中陰追出□□□念佛之條逆罪也云々、平氏可被惡口罪科之由、依令訴申、被付論所於氏女畢云々、

正慶三年　三番引付
奉行人　島田民部大夫行兼
頭人　遠江入道 道西俗時章

〔長樂寺所藏文書〕武藏國比企郡南方將軍澤鄕內、爲灯明用途田三段、任家時申置之旨、所奉寄進世良田御寺也、若於違亂之輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

正安元年八月二日　沙彌靜眞

〔水月古鑑一〕近江國犬上郡二千貫餘、〇中略武藏國新倉鄕七百貫、都合三千七百貫餘事、右可領知亡父藏人依忠節、本領永不可有相違、〇中略執達如件、

文保元二月十八日

吉良龜松源朝臣

〔人見家譜〕其先武州人見鄕を領せし故家號とす、元弘中に北條高時禪門滅亡の後、領知を失し

〔新編武藏風土記稿九十三多摩郡〕人見村

觀音堂〇中略何ノ頃カコノ地ニ遷セリトイフ、古キ鰐口アリ、徑七寸五分、背ニ當山主當玄雲房乃至法界平等而已トアリ、面圖ノゴトシ、

武州多東郡府中人見鄕觀音堂

天正八年卯月十八日再造修移奉也

山城國坪井久勝寄進、敬白、

〔秩父閑閱錄二十七ノ一〕熊谷小四郎直經申、武藏國木田見鄕一分地頭職事、木田見孫太郎致濫妨云々、所申無相違者、可令沙汰付之、若又有子細者、可被注申之狀如件、

元弘三年十二月二十日　尊氏御判

伊豆守殿〇上杉重能

〔稱名寺所藏文書〕武藏國六浦庄富田鄕、今者稱瀬里谷、此所々者、爲不輸之地、永代奉寄附當寺候、〇中

略

正慶元年二月十六日　武藏守貞將

稱名寺長老

〔萩藩閥閲錄二十七ノ二〕雜訴決斷所牒　熊谷小四郎直經

武藏國熊谷內恒正名、同國木田見鄕、安藝國三入本莊、美濃國倉光寺半分地頭職事、

右當知行不可有相違者、以牒、

建武元年六月十日　大外記中原朝臣師利

左中辨藤原朝臣判　裏ニモ在判

〔華名古文書〕可令早三浦介時繼法師法名道海領知武藏國大谷鄕下野右近大夫將監跡相模國河內鄕遠江權守跡地頭職事

右爲勳功賞所宛行也者、早守先例可令領掌之狀、依仰○成良親王下知如件、

建武元年四月十日　左馬頭源朝臣花押

〔相州文書鎌倉郡四〕御寄進于極樂寺新宮社武藏國足立郡箕田鄕內岩佐七郞知行地事、任被仰下之旨金井八郞相共莅彼知行分所奉打渡百貫文地、今富西方村於當寺僧道戒上人御房之狀如件、

建武二年二月十四日　右馬允政季花押

〔集古文書四十三寄附狀〕鹿苑院義滿公寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　鶴岡八幡宮

武藏國箕田鄕地頭職內河連村除寺社領井人給地事

右爲天下安全武運長久所被寄進也者、守先例可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

應安元年八月廿一日　沙彌花押

〔相州文書鶴岡八幡宮乾〕寄進

鶴岡八幡宮

武藏國佐々目郷美作權頭知行分

右爲不冷座本地供料所奉寄之狀如件

建武二年八月廿七日　源朝臣花押

〔鶴岡事書案〕當郷〇佐々目所務事、於御佃者可致半分沙汰、又所相殘半分內、四分一可致弁之由、百姓等致訴訟之間、當年計以寛宥之儀所出被免也、至所當者任多年之例、以撿見可定之、次於十人百姓者、不應左候間、罪科至極也、仍任奉書之旨、府中へ可被召遣之狀如件、

應永五年十月十三日　法印

佐々目政所殿

納法三升五合法定

〔集古文書四十六寄附狀〕北條氏綱同氏康寄附狀

武州足立郡之內佐々目郷之事、任例早々奉付御神領者也、諸願成就、皆令滿足之所、仍如件、

天文六年七月廿三日　左京大夫氏綱花押

平氏康花押

雪下院家中

〔正木文書一〕武藏國內矢野伊賀入道善久跡所領事

合

一所小泉郷男衾郡內　一所須江郷比企郡內　一所片楊郷足立郡內　一所久米宿在家六間多東郡內

右任御下文幷御施行之旨、奉打渡岩松兵部大輔經家跡御代官賴圓定順等候畢、仍渡狀如件、

建武二年十一月九日　橘行貞在判

〔安保文書〕下　安保丹後權守光泰法師法名光阿

可令早領知武藏國安保鄕內屋敷在家、同國枝名內鹽谷田在家、同國太駄鄕、出羽國海邊余部內宗太村、播磨國西志方鄕、信濃國室賀鄕等地頭職事、

右任代々讓狀、幷正安三年十二月十日、正慶二年二月廿九日外題安堵狀等、可領掌之狀如件、以下、

建武三年十二月十一日　源朝臣花押〇足利直義

〔安保文書〕武藏國瀧瀨鄕瀧瀨左衞門尉跡幷枝松名長峯鄕中院宰相中將家跡事、爲勳功之賞所被預置也、早守先例可被致其沙汰之狀、依仰執達如件、

建武四年四月十二日　大和權守花押

安保丹後入道殿

〔岩松文書〕武藏國榛澤郡瀧瀨鄕內下手墓村事、所宛行也者、早守先例可被致沙汰狀如件、

貞治二年五月廿八日　基氏

岩松治部少輔殿

〔集古文書〕三十四禁制狀新釋迦堂制札所藏不詳

制札

新釋迦堂領、武藏國比企郡大塚鄕事、於彼所不可致濫妨狼藉、若令違犯者、可有其咎之狀如件、

曆應五年卯月八日

〔長樂寺所藏文書〕寄進世良田長樂寺、武藏國賀美郡長濱鄕事、

右爲當寺領所寄附也者、守先例可被致沙汰、依仰奉寄如件、

觀應二年九月廿一日　　散位藤原朝臣花押

(集古文書三十四禁制狀)保寧寺制札所藏不詳

禁制　保寧寺

右於寺領武藏國都筑郡麻生鄉內□□並堀內、軍勢以下甲乙人等不可致亂入狼藉、若令違犯者可處罪科之狀如件、

正平七年正月八日

花押

(新編武藏風土記稿一百四十七足立郡)菅谷村

下　春日八郎行元

可令早領知武藏國足立郡桶皮鄉內菅谷村九七郡廣事

右爲勳功之賞、於當鄉之替所充行也者、早守先例可致沙汰之狀如件、

觀應三年元年○文和九月十八日

(相承院所藏文書)寄進右大將家法華堂武藏國榛澤郡人見鄉內安保余五郎跡同國秩父郡白鳥鄉內青木彥四郎入道跡事、

右爲天下安全武運長久所奉寄進狀如件、

貞治二年五月十六日　左兵衛督源朝臣

(鎌倉五大堂明王院所藏文書)大慈寺新釋迦堂領、武藏國横沼鄉事、任今月十一日御教書之旨、成田下總守相共莅彼所、退片楊長門入道押領、沙汰付下地寺家、畢、仍渡狀如件、

貞治三年六月二十五日　沙彌覺道花押

(集古文書四十三寄附狀)寶篋院義詮公寄附狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮雜掌申、武藏國久良郡久友郷事、故御所一圓御寄附狀分明也、無相違樣可申計、御沙汰候、謹言、

貞治四年七月廿二日　義詮花押

左兵衛督殿

〔高麗郡新堀村民所藏文書〕可令早高麗四郎左衛門澄季入道希弘領知武藏國赤塚郷內石成村半分事、

右任先例、可令頒當之狀如件、

應安元年五月廿一日

〔圓覺寺所藏文書〕武藏國比企郡竹澤郷內、竹澤左近將監入道跡事、爲勳功之賞所被預置也者、守先例可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

應安二年六月十五日　沙彌在判

藤田越中入道殿

〔正木文書一〕足立郡大窪郷地頭二分一方田畠注文

一田大　畠二反　すはの大明神〇中略

已上田二町一反 畠一町二反 公田分　米納升十三合とかき定也〇中略

應安二年七月廿八日

〔北條分限帳郡村略考〕太田源五郎

大窪郷　永五拾五貫文

武州入間郡河越の村也、村高五百五拾石餘なり、當主秋元但馬守知行、

〔集古文書四十三寄附狀〕上杉朝房寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄進　鶴岡八幡宮社

武藏國堀戶鄕內次郎　半分事

右爲所願成就圓滿、奉寄附之狀如件、

應安四年八月十五日　沙彌道商花押

〔集古文書二十九下知狀〕應安七年下知狀武藏國金澤稱名寺藏

金澤稱名寺雜掌賴惠申、武藏國金澤鄕內當寺敷地等事、帶御寄進狀所歎申也、先立依申請被成吹擧、村上河內入道正貞口所詮任理運可有其沙汰之狀、依仰執達如件、

應安七年九月二日　武藏守判

上杉兵部少輔入道殿

〔集古文書四十三寄附狀〕永和二年寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄附鶴岡八幡宮社

武藏國世田谷鄕內上絃卷半分事

右志者、爲天下安全以殊家門繁昌也、仍寄附如件、

永和貳年正月廿九日　散位治家花押

〔鶴岡八幡社所藏文書〕鶴岳八幡宮領、武藏國世田谷鄕內絃卷村府中六所宮役事、連々致催促、〇中略太不可然、所詮任先規可被停止催促之由候也、仍執達如件、

正長二年三月十一日　前筑前守花押

前遠江守花押

大石石見守殿

〔北條分限帳郡村略考〕桑原右京進

世田谷弦卷郷　永八貫六百五拾文

武州荏原郡世田谷領

今は村高百四拾三石餘　當主井伊掃部頭知行

考るに、帳面に世田谷村の事不相見、是は永祿の比は、世田谷邊村々吉良御料所なる故歟、

〔世田谷私記〕武藏國荏原郡菅刈莊世田谷郷は、○註略往古吉良家の領地なり、抑吉良と稱するは、足利家の嫡流、以下世代ヲ記ス中略ス正三位左兵衛佐賴康卿亦左兵衛督也と號勝光院、傍書ニ永祿四酉年トアリ其子從四位下左兵衛佐氏朝朝臣、號實相院、○註略世田谷を領し給ふ、其比何ほどの貫高にや、今に至てわかり難し、土俗の言傳へたるは、拾八萬といへど非なり、○中略世田谷賴康卿をも聟とし、彌關東に猛威を振ひけるが、天正十八年七月十八日、遂に豊臣秀吉公の爲に被亡、○中略東照宮駿遠參甲信の國々を上知し給ひて、北條の領國其儘秀吉公より賜り給ふ、同年八月朔日、江戸の城へ入御、是を關東御入國と云此時氏朝朝臣初て東照宮に謁す、同月九日、右御領國御配分之節、世田谷左兵衛佐氏朝朝臣、本州荏原郡世田谷を賜ふと、河肥の記と云ものに見へたり、○中略同二十年二月朔日、吉良家上總國長柄郡寺崎村に於て、千百貳拾五石を給ふ、此時世田谷郷は上知し給ふと見へたり、○中略世田谷は、前にしるすごとく、何ほどの貫高なる所か不知、古城跡あり、今野山なり、村高四百拾六石餘也、弦卷村高百三十三石餘なり、亦世田谷領と唱へたる所、今郷數五拾七ヶ村あり、村名中略今高合壹萬三千六百三十四石餘あり、是は古の城附、村々のみか分りがたし、外に蒔田郷も領し給ふ、しかれば何程の領地成や、

〔圓覺寺所藏文書〕武藏國都筑郡石河郷內、大井三郎跡、足立郡畔牛郷內、鹽田帶刀左衛門尉跡等事、任今月六日寄進狀之旨、宗兵庫允相共莅彼所、所沙汰付下地於金陸寺雜掌、可執達諸取狀、使節更不可有緩怠之狀如件、

康暦二年八月廿五日　氏滿花押

山下四郎左衛門尉殿

〔鎌倉八幡供僧我覺院所藏文書〕遍照院僧正坊申、慈恩寺領、武藏國太田庄花積鄕內、御厩瀨渡、并船事、澀江加賀入道背上裁、致押領、□太難其□所詮、布施主計允相共莅彼所、假雖□申懸候、許容可沙汰渡船渡等於彼代之状如件、

永德三年四月十一日　氏滿花押

壹岐彈正大夫入道殿

〔集古文書四十三寄附狀〕足利氏滿寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　鶴岡八幡宮寺

武藏國多西郡吉富鄕事

右爲當社上下寺地供護摩料所、爲天下安全武運長久、所寄附之狀如件、

永德三年九月十四日　左兵衛督源朝臣花押

〔永德四年澀江鄕目錄〕

一町　大戸宮神田　二段　立花宮神田〇中略

岩松永郡代國經申、武藏國稻毛新庄內澀江鄕事、任被仰下之旨、差使者、欲沙汰付下地於國經候之處、江戸藏人入道希全、同信濃入道道貞、同四郎入道之儀等、卒多勢、構城擲、無是非擬及合戰候之間、不能打渡候、若此條僞申候者、八幡大菩薩、六所大明神御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

至德元年七月廿三日　沙彌聖顯花押

進上　御奉行所

〔新編武藏風土記稿一百十多磨郡〕大久野村

山祇社今社ニ掛ル鰐口ノ銘ニモ、日奉守吉ガ納メタルヨシヲ刻セリ、左ノ如シ、○中略

奉掛武藏大久野郷山神鰐口

至德三年丙寅三月十日日奉守吉

〔集古文書四十三寄附狀〕足利氏滿寄進狀下野國足利鑁阿寺藏

寄進　足利鑁阿寺

武藏國比企郡戸守郷高坂左京亮跡事

右任上杉民部大輔入道道昌、去應安元年七月十二日寄附狀、如元可被沙汰之狀如件、

至德三年十月七日　左兵衛督源朝臣

〔淨光明寺所藏文書〕左辨官下武藏國、應因准傍例停止造伊勢大神宮役夫工米、造內裏御禊、大嘗會以下勅役、院役幷都鄙寺社所、及國司守護使入勘官使、段米棟別關津賃斷官家俗家臨時公役、甲乙人等妨、一圓不輸、永爲淨光明寺領、當國男衾郡內和田郷事、

右得寺住持比丘慧休、去月日奏狀偁、謹考案內、當寺者武藏守平長時之本願、建長重光淵獻之經始、眞阿和尙權輿于當初、智庵宗師規矩之于後、顯密乘之薰修年積、龍象衆之輻輳日競、以爲海東淨場、營中法窟、故元弘三年、忝鳳綸、匪啻全奉寄之庄園、剩建四个勸學院、鳩四宗博達者、設華嚴八坐之講問、祈葦原十等之泰平、恒規不怠、累歲維新者矣、望請、仁因准傍例、永被免除件諸役等之由、下賜明詔、欲濟緇徒、願陛下治國陶虞之風、四門穆々將營榮茂桓文之業、九土安々不耐懇款之至、表奏以聞、伏乞洪慈曲垂昭覽者、權中納言藤原朝臣公仲宣、奉勅依請者、國宜行之、

大史小槻宿禰花押

嘉慶三年二月三日　右少辨藤原朝臣花押

〔新編武藏風土記稿二百二十二男衾郡〕和田　嘉慶三年二月、左辨官ノ下文ニ、男衾郡内和田郷事トノセ、及ビ應永享德年間ノ文書ニモシカ記セリ、今郡内和田村ナク、大里郡ノ内和田村アリ、郡界ノ地ナレバソノ所ナルベシ、

〔黃梅院文書〕寄進黃梅院、武藏國埼西郡葛濱郷内、久下五郎左衛門尉大河戸女子方、並同國足立郡殖竹郷地頭職内、同郡河田郷領家職内、同郡淵江石塚村等、同足立大炊助跡事、右爲相模國鎌倉郡小坪殘半分替、所令寄附也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

應永四年七月廿日　　左兵衛督源朝臣花押

〔集古文書四十四寄附狀〕足利滿兼寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　鶴岡八幡宮寺

武藏國入東郡内難波田小三郎入道跡事

右爲同國六郷保内原郷替、所寄附之狀如件、

應永七年十二月廿日　　左馬頭源朝臣花押

〔新編武藏風土記稿一百七十四入間郡〕今市村　法恩寺〇中略

寄附　報恩寺

右武藏國入西郡越生郷如意村内蓮道之屋敷、并山林等、多年依有芳契、所令永代寄進、治部律師榮曇、兼又爲老母禪眞菩提所上者、於子子孫孫不可及異儀、若致非禮者、可爲不孝之仁、雖爲小所、有御志於附第、可以傳之、仍狀如件、

應永九年三月五日　　左衛門尉光忠判

〔黃梅院文書〕黃梅院雜掌申、當院領、武藏國小山田保山崎郷同保黑河郷半分、六所宮造營及□事、御沙汰落居候畢、可被閣催促候由也、仍執達如件、

應永十一年六月十二日　　左衛門尉花押

加賀守花押

鹽谷備前入道殿

〔圓覺寺文書〕奉寄進武藏國入西郡粟生田郷五村之內、窪田二段、幷厚河鄉末松名之內、田二段畠一所事、

任淺羽淨願寺塔頭曇華庵主寄付之旨、圓覺寺傳宗庵ニ同所奉寄進之狀如件、

應永十七年庚寅五月三日　　前安藝守貞春花押

〔新編武藏風土記稿足立郡一百五十二〕清河寺村

清河寺〇中略　寺寶古文書六通

寄進　武藏國清河寺

同國足立郡上內野鄉內、田壹町貳段、在家壹宇敷地等、長井駿三郎實基寄進

同鄉內田壹町貳段、佐地川在家壹宇駿河三郎實基伯父紹旭藏主寄進之地等事、

右爲當寺領所令寄附也者、早守先例可致沙汰之狀如件、

應永廿九年十一月廿一日　　從三位源朝臣花押

〔集古文書四十四寄附狀〕應永卅一年寄附狀武藏國金澤稱名寺藏

武藏國六浦庄釜利屋鄉白山堂事、任去建武二年六月十一日、幷貞和六年二月廿一日寄附之旨、爲稱名寺末寺、如元領掌不可有相違之狀如件、

應永卅一年五月二日　　花押〇足利持氏

〔北條分限帳郡村略考〕伊丹右衛門大夫

釜利谷　永貳百五拾五貫四百六拾貳文

武州久良岐郡、今は金澤の內、釜利谷は小村なり、

〔新編武藏風土記稿一百七十四 入間郡〕今市村

法恩寺略〇中

越生山城三郞入道宏秀之門族忠秀、毛呂鄕內、附四至寄附曇秀律師文、在別

應永三十三年七月十六日

〔新編武藏風土記稿一百七 多摩郡〕川口村

熊野權現社略〇中　別當圓福寺略〇中　寺寶　大般若經殘闕百餘卷（古寫本ナリ、コレハ應永ノコロ、領主河口兵庫介幸季トイフ人ノ寄附セシモノニテ、ソノ裝訂ハ旋風樣ノ粘帖トイフモノナリ、卷ノ末ゴトニ奥書アリ、ソノ一二ヲ左ニ記セリ、）

應永卅二年乙巳閏六月八日、於武州多西郡由井鄕大幡觀音堂號寶生寺書寫畢、　金剛資明範、武州多西郡柚井鄕河口村鳥栖寺什物也、

應永卅三年八月十七日　　河內兵庫介幸季

正長元年九月日、武州多西郡北河口鳥栖寺常住也、　願主兵庫助入道與阿敬白

〔圓覺寺所藏文書〕武藏國足立郡中蓋鄕事、一端雖宛行、長井下野守憲□□□申、依有其謂所返付也、早任去明德三年五月十六日御寄進狀、並應永二年閏七月廿八日、同五年三月十日、榮置狀等之旨、領掌不可有相違候如件、

應永三十四年十二月廿四日　　持氏花押

本願寺長老

〔集古文書十五 判物〕慈照院義政公御判物相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岳　八幡宮領、武州寺尾鄕內

澀澤村社役井反錢除之事

右爲給分、守先例可有知行之狀如件、

文安四年閏二月廿八日　花押

助阿闍梨御房

〔岩松文書〕岩松左京大夫望申闕所注文、上州忍府下總入道跡之事、同國師岡郷北一揆秋間跡、武州新開郷事、新開加賀守跡、

享德四年閏四月八日

〔圓覺寺所藏文書〕就屋形出陣可有精誠祈禱、仍武州稻毛庄鞠兒郷山王參錢事、淺草輪藏堂江我等致申沙汰永代御寄進候也、然者於以後傍輩中、時之代官以下、猥藉不可有邪儀、彼輪藏堂停止諸役、年始歲末御出陣之御祈禱簡要候、仍證狀如件、

文明九年丁酉五月十四日　如意藏主禪師　式部尉治家　隼人佐常秀

〔廻國雜記〕まりこの里にてよめる

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめずいそぐ暮かな

〔武藏志料三〕まりこ　丸子　橘樹郡

今思ふに、まりこは、すなはち今の丸子郷也、上丸子中丸子村は橘樹郡に有之、下丸子村は荏原郡に有、川崎宿の西北にあたる、

〔新編武藏風土記稿一百四十八足立郡〕南下谷村　中下谷村　北下谷村

大行院所藏ノ文書○中略

武州中崎西之內自戶崎郷下之事、年行事職可申付之由、儘事候、仍證狀如件、

永正十一年甲戌七月一日　尊能花押

大圓坊

〔續視聽草二集十〕武藏國略圖附略考

禪興寺領武州平沼之鄕事、自何方後兎角申候、固守寺家不可存疎儀之段、上意候、恐々謹言、

十二月三日　政助

金子左京亮殿

〔新編武藏風土記稿二十葛飾郡〕總說

平沼ハ今ノ二鄕半領平沼村ナリ、〇中略政助ハ永正大永ノ頃ノ人ニシテ、國界ノ改リシモ、其頃ヨリ以前ナルコト明ケシ、

〇按ズルニ、平沼村ハ今葛飾郡中川ノ東方ニアリ、蓋簗田氏關宿城主之ヲ攻取テ、舊ニ仍テ武藏ノ國ニ屬セシナルベシ、

〔新編武藏風土記稿一百三十六足立郡〕本木村

木崎領太田窪村農民彌五郞ガ所藏ノ文書ニ、淵江ノ鄕トアリ、其文書左ノ如シ、

當鄕淵江之鄕ヘ、太田美濃守申付陣夫、唯今誰人召仕候、又地頭召仕候歟、其以來之出樣有樣ニ以書付可申上候、鄕中隨員數陣夫可有御定候、毛頭虛言申上者可爲重科候、此御請之書付、七月五日小田原ヘ存知之百姓、一人持來、佐枝恒岡ニ可渡之者也、仍如件、

辛巳六月廿六日

淵江百姓中

〔新編武藏風土記稿八十八都筑郡〕市ケ尾村

舊家者百姓新五兵衛〔中略〕市鄕ヲ唱ヘリシトキノ文書今モ藏セリ、其文ニ、〇中略

武州戶部鄕陣夫之事、先當年中夫錢ニ被仰付候、如御定八貫文相澄、鄕中ヘ罷歸可致作毛者也、仍如件、

北條家虎印アリ、天文十二年ナリ、癸卯二月三日

戸部郷百姓中

同代官

〔新編武藏風土記稿八十八都筑郡〕市ケ尾村

舊家者百姓新五兵衞（中略）市郷ヲ賜ハリシトキノ文書、今モ藏セリ、其文ニ、

太左就申合候、其方別而當方御荷擔候事、誠祝著候、仍御本領之由候間、都筑郡之内市郷雖小地候進候、猶小菅可申候、恐々謹言、

天文十六丁未八月七日　氏康花押

上原出羽守殿

〔北條分限帳郡村略考〕上原出羽守

小机市郷　永四拾八貫五百文

武州都筑郡小机領の內、市ケ保郷なり、

今は村高四百拾三石餘　當主甲斐庄喜右衞門

〔武州文書〕國中諸郡就退轉、庚戌四月、諸郷公事赦免之樣體之事、

五百貫文　武州久良岐郡本牧郷

右爲諸點役之替、百貫文之地より六貫文懸ニ可出趣相定候、然者本牧五百貫文、依不入此役錢貳拾貫文、六月十月兩度ニ御藏へ可納、此以後ハ昔より定候諸公事、一も不殘令赦免候、細事之義も不可申付候、郡代觸口不可有漏候、若背此旨申懸者有之者、百姓御庭へ參可致直奏、但陣夫廻陣夫、幷大普請玉繩城米錢をバ可致之、廻陣夫をバ年中八貫文ニ以夫錢可出事、○中略

一無御印判郡代夫、自今以後不可立者也、仍如件、

天文十九年庚戌四月朔日

〔渡邊文書〕前々仁科鄕より召仕候陣夫壹疋候も、當年孫二郎前引ニ被遣候、此替久良岐郡富岡大岡鄕より前々後藤彥三郎召仕候陣夫壹疋、現夫を以爲仁科之夫替被下由、被仰出候、仍如件、

癸亥四月廿六日　南條四郎左衞門奉之

渡邊孫八郎殿

〔北條分限帳郡村略考〕小机片平鄕　永貳拾五貫九百文　大熊修理亮

武州都筑郡の內　今は村高貳百石　當時御料所

神尾越中守

小机加世鄕　永六拾貫文

武州橘樹郡稻毛領加瀨村　今は村高南北合九百八十九石餘　當主增上寺領倉橋長右衞門

○中略

荻野

久良岐大賀鄕　永九拾九貫四百三拾貳文

武州久良岐郡大岡村なり　今は村高七百七拾八石餘　當主倉橋內匠荒川內記佐野宇右衞門○中略

中條出羽守

多東府田鄕　永貳百七拾四貫三拾文

武州多摩郡布田村なり、永祿の比、多摩郡東西三十里餘の大郡故、西の方を多西、東の方を多東と云よし、此所古へ玉川調布の產の是ある所也、

今は小村なり、今石原國領小島金子など云村々、都て古へは府田村といへり、

今村高千四拾九石餘　當時御料私領〔○中略〕

大森殿

高○萩○鄉○　永五拾貫文

武州高麗郡高萩村、入間河筋にて、武さしの丶中の村也、

今は村高六百五石餘　當時御料〔○中略〕

曾根外記

小○机○宮○內○鄉○の內　永貳拾貫文

武州橘樹郡、今は稻毛領宮內村也、

今村高四百石　當時御料所

〔新編武藏風土記稿一百四十七足立郡〕沖之上村

舊家　權左衛門〔中略〕古文書一通チ家ニ藏ス、〔中略〕其文左ノ如シ、

各相拘候給田之事、先評定之砌決定之上、重而柏原雖捧訴狀候不及取上、如先證文可相拘旨、被

仰出者也、仍狀如件、

天正三年乙亥二月廿一日　　評定衆　笠原藤左衛門

大○谷○鄉○給米　岡田新五郎殿

友光新三郎殿

同將監殿

〔新編武藏風土記稿九十六多磨郡〕小野路村

清淨院〔中略〕天正十三年七月、當院ニテ法會執行アリシトキ、小田原北條家ヨリアタヘシ制札チ藏セリ、スナハチ左ニノス、

制　小○野○路○之○鄉○

右當郷於淸淨院曼陀羅供大法會執行候、橫合非分申出者有之者、不嫌權門僧俗、可處嚴科者也、仍狀如件、

天正十三年乙酉七月廿一日　奉行當檢斷 代官精谷豐後守

〔新編武藏風土記稿八十六入間郡〕王禪寺村

王禪寺〇中略 寺寶 古文書五通〇中略

爲堪忍分新田領金井郷參拾貫文之地出置候、致知行、軍役嚴密ニ可相勤、猶難走廻可重恩賞者也、仍如件、

天正十三年乙酉十一月十日　山上强右衛門奉之

宮下太郎左衛門殿

〔新編武藏風土記稿八十四入間郡〕東方村

舊家者百姓平次左衛門先祖ヲ鈴木但馬守ト云、(中略)其文書十一通ヲ藏ス、〇中略

鈴木但馬就捧訴狀小机河輪郷百姓相目安之儀、被仰付處、令難澁相目安不指上候、無是非曲事候、於借米者、如證文早々郷中へ令催促、急度可請取旨、依仰狀如件、

天正十四年丙戌十二月廿五日　評定衆 上野介康定花押

鈴木但馬守殿

〔新編武藏風土記稿一百三十四新座郡〕橋戸村

舊家忠右衛門(中略)古文書四通ヲ藏ス、其文左ノゴトシ、

改被仰出條々〇中略

一白子郷百姓何方に令居住共、任御國法、代官百姓に申理、急度可召返事、〇中略

右條々違犯之輩有之付而者、注交名、可遂披露者也、仍如件、

天正十五年丁亥年四月三日代官

白子郷百姓中

〔新編武藏風土記稿八十四都筑郡〕東方村

舊家者百姓平次左衞門先祖ヲ鈴木但馬守ト云、(中略)其頃ノ文書十一通ヲ蔵ス、○中略

榎下郷百姓遠藤借錢不濟儀、無是非候、何分ニも遂催促可取候、爲其重而印判遣候、併令用捨百姓も無異儀有之樣肝要ニ候、仍如件、

天正十六年下同
戊子九月廿四日

鈴木但馬守殿

〔新編武藏風土記稿一百四十二足立郡〕浦和宿

當所ノ名主權兵衞、○中略同人ノ家ニ傳ヘシ北條家又太閤ヨリ出セシ文書三通アリ、○中略

當所ヘ御朱印取次候而遣候條、狼藉之族一切有間敷候、若違犯之輩於有之者、此方ヘ可申來候也、

卯月廿九日　淺野彈正少弼長吉花押

武州うらはの郷

〔新編武藏風土記稿一百四十八足立郡〕下宮内村附持添新田

舊家○中略勇藏是モ大島氏ニテ舊家ナリ、前ニ載セタル彦兵衞ガ本家ナリト云、系圖等ハツタヘズ、文書五通アリ、左ニノセリ、○中略

當郷打明之事、其方深井致談合可爲開候、郷中百姓等無兎角可爲入籠也、

永祿二年己未三月廿四日　花押

大島大炊助殿

汝等五人之事、如前々在所ヘ令退住、耕作以下可申付候、若兎角申者於在之ハ、此方ヘ可申來候也、

六月一日　　　　　　　　　　淺野彈正長吉（花押）

武州足立郡内淵江郷

大島大炊助　大島大膳助　矢部卯右衞門　矢部兵部　小川圖書

口迄五人遣之

（新編武藏風土記稿九十三多摩郡）上布田宿

布多天神社（中略）鳥居ノ西邊ニ制札ヲタテリ、コレハ太閤秀吉ノアタヘシモノニテ、其文左ノゴトシ、

禁制　　　　　　　　　　武藏國多東郡　　稲陀郷

一軍勢甲乙人等濫妨狼藉事〇中略

右條々、堅令停止訖、若於違犯輩者、速可被處嚴科者也、

天正十八年四月日

（新編武藏風土記稿九十八多摩郡）關戸村

近郷乞田村農家清左衞門ガ家ニ藏スル、秀吉ノ當所ヘ出セシ制札アリ、ソノ文左ニノス、

禁制

武藏國せきとの郷

一軍勢甲乙人等監妨狼藉事〇中略

右條々堅令停止訖、若於違犯之輩者、忽可被處嚴科者也、

天正十八年四月日　　　　　　　　　　　印

（新編武藏風土記稿九十七多摩郡）大塚村

觀音堂〇中略寺寶　太閤秀吉制札一通（コレハ小田原陣ノトキ住持宗鏡小田原ヘ行キ、カシコニテ賜ハリ來リシ所ナリト云、其文ニ、）

禁制

武藏國多西郡之内　油。儀。之。郷。

一軍勢甲乙人等濫妨狼藉之事〇中略

右條々堅令停止訖、若於違犯輩者、忽可被處嚴科者也、

天正十八年五月日　　花押

〔古文帖〕丸山氏

武州多十郡燒。郷。三百三十石、右宛行之訖、全可令知行者也、如件、

天正十九辛卯　御朱印

丸山市左衛門どのへ

〇按ズルニ、多十ハ多東ナルベシ、燒郷今詳ナラザルモ、姑ラク此ニ收ム、

〔新編武藏風土記稿足立郡一百四十三〕中尾村

玉林院(中略)富寺古ヘハ玉林坊トイヒテ、古文書ニモ見エタリ、〇中略

寄進　玉林院

武藏國足立郡中。尾。郷。之内十五石之事

右令寄進畢、殊寺中可為不入者也、仍如件、福德ノ御印アリ

天正十九年辛卯十一月日

〔武藏志料三〕大門郷

玉露證話九戸田源八郎は、尾州河和の城主也、父は戸田孫右衛門といふ、今の河和の全忠寺は、孫右衛門全忠の菩提所也、この子水野万千代と號、童形の比、舊地河和を離れて、江戸にて台德院様〇德川秀忠へ仕へ奉る、その比御救書を賜る、その文、

武藏國足立郡大。門。郷。高七百石之事

村里名邑

右所ν宛行ニ不ν可ν有ニ相違ニ者乎、此旨可ν抽ニ勳功ニ之狀、仍如ν件、
慶長二丁酉年九月十一日
水野万千代どの
此書大神君御自筆にて、この名をあそばさる、是よりして戸田氏を避て、母方の水野氏を稱すと云々、

〔郡名一覽〕武藏國 御料私領 武州　四方五日半　貳拾貳郡
高百拾六万七千六百六拾貳石九斗八升三合三勺九才　貳千九百五拾壹ヶ村
●江戸御城　●河越 十二里　●忍 十五里　●岩槻 九里八町
○金澤 十四里　○岡部 十九里半
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國舊村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔武藏志料五〕武藏國郡鄕帳上　拾貳郡
豐島郡　百拾七ヶ村　荏原郡　九拾八ヶ村　橘樹郡　百貳拾四ヶ村　久良岐郡　五拾三ヶ村　都筑郡　七拾五ヶ村　多摩郡　三百七拾四ヶ村　新座郡　三拾壹ヶ村　入間郡　貳百四拾三ヶ村　高麗郡　百五ヶ村　秩父郡　八拾貳ヶ村　男衾郡　三拾五ヶ村　大里郡　四拾三ヶ村

〔郡國提要〕武藏　二十二郡、三千四十二村、
高 御料私領 百二十八万千四百三十一石六升八合八勺二才
豐島郡百十四村　荏原郡九十四村　橘樹郡百二十八村　久良岐郡五十四村　都筑郡七十六村　多摩郡四百三村　新座郡三十七村　入間郡二百六十一村　高麗郡百五村　秩父郡八十三村　男衾郡三十六村　大里郡四十六村　比企郡百五十八村　横見郡四十五村　足

立郡四百四十五村　葛飾郡二百八十一村　埼玉郡四百二十七村　幡羅郡五十九村　榛澤郡八十一村　那賀郡十三村　兒玉郡六十三村　賀美郡三十三村

〔武藏上野國村名帳〕關東村數

武藏國　三千三百三拾四ヶ村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

武藏荏原郡、不入斗村、代田村、橘樹郡、生麥村、豐島郡、赤羽村、小豆澤村、根葉村、足立郡、十二月田村、宮谷塔村、鹿濱村、神田村、賀美郡、勅使河原村、多摩郡、給田村、

〔日本靈異記中〕惡逆子愛妻將殺母謀現報被惡死緣第三

吉志火麻呂者、武藏國多麻郡鴨里人也、○中略聖武天皇御世、火麻呂大伴名姓不分明筑紫前守所點、應經三年、○下略

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事

合○中略

一傾倒庄々○中略

武藏國　入間郡安堵郷粟生村、田四十町、林六十町、　已上二十七處、依沈記公驗明白注進之、

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日○署名略

〔武州文書十五〕武藏國飯塚村法華寺住持是徹申寺領事、被下綸旨之處、大河原又三郎致濫妨云々、早可被沙汰付于是徹之狀如件、

建武元年二月六日　尊氏花押

伊豆守殿○上杉重能

〔新編武藏風土記稿一百五十足立郡〕川面村

此地ハ古ク開ケシニヤ、相模國鶴岡八幡社領寄附狀ノ內、上杉民部大輔ガ寄進狀ニモ其名見エタリ、其文ニ、

寄進

鶴岡八幡宮

武藏國箕田郷地頭職內河連村。除寺社領并人給地事

右爲天下安全武運長久所被寄進也者、守先例可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

應安元年八月廿一日　上杉民部大輔法名道昌　沙彌判

〔廻國雜記〕金澤にて時宗の庵の侍りけるに、立よりて茶を所望しけるに、庭に殘菊の黃なるを見てよめる、

誰夏にほりうつしけん金澤や黃なる花さく菊の一本

〔北國紀行〕同じ比六浦金澤をみるに、亂山重なりて島となり、青嶂そばだちて海をかくす、神靈絕妙の勝地なり、

〔新編武藏風土記稿七十七久良岐郡〕横濱村。

横濱村ハ郡ノ北ニアリ、江戸ヨリノ行程庄名等ハ前村ニ同ジ、〇十里、平子庄、以下並ニ同ジ、昔ハ當村及中村、堀之內、三村ヲ合セテ石川村ト唱ヘシヲ、後ニ分村セシト云、正保ノ國圖等ニ、既ニ三村ヲ記セバ、正保前ニ分村セシコト知ベシ、石川ノ村名ハ、堀之內村寶生寺ニ藏スル康應元年ノ文書ニ見エタレバ、古キ村名ナリ、此村鄉名ヲ傳ヘザレド、同寺應永二十一年、及ビ文明十年ノ文書ニ、平子鄉石川村ト載、天文十四年ノ文書ニハ、本牧鄉ニ繫タリ、但平子ハ今此邊ノ庄名、本牧ハ領名ニ唱フレド、當時ハ鄉名ナリシニヤ、民戶八十七、東北ハ海岸ニ傍ヒ、西ハ洲乾ノ湊ニテ、南ハ中村北

方ノ二村ニ降レリ、東西十丁又ハ十七八丁ノ處モアリ、南北モ大低十八丁程ナリ、水田少ク陸田多シ、爰モ天水ニテ耕植ス、正保中ノ改ニ御料所ニテ、外ニ六石一斗五升五合、秀閑寺領ト見ユ、元祿十一年、荒川丹後守ニ賜ハリ、今子孫荒川三郎兵衞ガ知行所ナリ、撿地ハ延寶二年、八木仁兵衞糺セリ、其餘海面ニ傍ヒタル十六丁餘ノ地新墾セシヲ、文化九年、大貫次右衞門撿地シテ高入トス、○中略

藥師堂（中略）嘉吉年中ノ寄進狀アリシ由、本書ハ失テ寫ヲ藏セリ、文ハ後ニ載ス、

寄進　藥師堂

武州久良岐郡横濱村藥師堂免田畠等事、田大貳百文、畠二百文、任由緒依正□儀、限永代寄進所也、然者任由緒上者、後世之代官不可及是非候、爲後日仍執達如件、

嘉吉二年○二年元年誤辛酉卯月廿六日　比留間範政花押

市川季氏花押

石川寶金剛院

〔集古文書四十四寄附狀〕足利持氏寄進狀相模國鎌倉名越別願寺

寄進　龍江寺

武藏國兒玉郡梅原村。。。桶谷彌太郎入道跡事

右爲當寺領所寄附之狀如件、

應永廿七年三月廿五日　左兵衞督源朝臣花押

〔集古文書二十九下知狀〕正長二年下知狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮領武藏國世田谷郷內絃卷村。。。府中六所宮役事、連々致催促、催促太不可然、所詮任先規、可被停止催促之由也、仍執達如件、

正長二年三月十一日　前筑前守花押

前遠江守花押

〔大庭文書〕鶴岡　八幡宮御供料所、武藏國青。木。村。內、宗興寺林慶晶菴買得之、并船役、同地下人等、所々買得相模國早河庄久富名內、中村掃部助落合式部入道得買之、同國阿久和鄕內水田、同國桑原鄕內田畠、同國宮根山園所落合式部入道跡闕所等事、雖令沽脚、爲德政所返附也、早止買得人綺、如元可全知行之狀如件、

寶德二年九月廿一日　花押〇足利成氏

當社少別當御房

〔北條分限帳郡村略考〕多米新左衞門

久良岐郡青木　永八拾八貫四拾四文

武州橘樹郡青木。町、今は東海道神奈川宿の內也、今は村高九百四石、當時御料、

〔新編武藏風土記稿一百三十三新座郡〕下新倉村

吹上觀音堂〇中略　寶物　鰐口元龜二年河村彌二郎某ガ寄進セシモノナリ、イツノ頃ニヤ紛失シテ知ル人ナカリシニ、元祿中當寺再興ノ時、赤池ノ中ヨリ出シト云、

武州新座郡下。村。福田山東明禪寺存貞代置之、于時元龜二年辛未六月朔日、河村彌二郎殿

寄進〇武州以下三十九字、原在鰐口圍中、

〔新編武藏風土記稿一百十多磨郡〕大久野村

佐久間宗兵衞〇中略古文書ヲ藏ス、其文左ニノスル、〇中略

覺

野邊。　雨間。　牛沼。　代繼。　瀧上。　引田。　山田。　網代。　伊奈。　横澤。　立谷。　高尾。　留原。　小和田。　五日市。　中野。　戶倉。　乙津。　養澤。　入野。　三內。　大久野。留

右之村々、當番之面々、來ル二十六日朝七ツ半時、御詰メ可被成候、以上、

天正二年戌八月十一日　讃岐用人

追而申候　横澤大幡中務殿

網代貴志兵八殿

立谷貴志十郎左衞門殿

戸倉篠原與惣次殿

加判之義ニ付、申渡候儀御座候間、此書付廻付次第、讃岐役所江御越可被成候、油断被成間敷候、

〔武州文書〕於熊谷之町ニ、小間物みせ等上下通可致所持者也、

天正八辰

十二月十五日

長野喜三どの

〔新編武藏風土記稿多磨郡百一〕三澤村

百姓八右衞門土方氏ナリ、名主ヲツトム、家ニ古文書ヲ藏ス、〇中略

禁制　武藏國多西郡三澤村

一軍勢甲乙人等濫妨狼藉事〇中略

右條々堅令停止訖、若於違犯之輩者、速可被處嚴科者也、

天正十八年四月日　印

〔古文帖〕久保新三郎

武州吉田村貳百石、右出置畢、全可令知行者也、仍如件、

天正十九辛卯五月　御朱印

久保新三郎どのへ

〔古文帖〕小笠原氏所持

武州入間郡田中村三百五十石、入間川村百石、都合四百五十石、右出置畢、全可令知行者也、仍如件、

天正十九辛卯　御朱印

小笠原喜三郎どのへ

〔古文帖〕高室氏

武州高倉村五百石、并山林等之事、右出置畢、全可令知行者也、仍如件、

天正廿壬辰二月　御朱印

高室豐前守どのへ

〔新編武藏風土記稿多摩郡九十七〕下柚木村

永林寺〇中略　古文書三通、大石氏ヨリノ状ナリ、ソノ文左ニノス、

入東之郡之内久米村之永源寺還置候、惠鑑長老□□御申可爲之候者也、仍如件、

午六月廿八日　大石心月齋花押

永麟寺参

〔武州文書〕二郷半之内もたい新田

一當新田へ罷移候もの、諸役不入たるべく候、但其所之堤井堀御普請之時は、罷出普請可仕候事、

〇中略

右之旨、少も相違有まじく候間、のぞみかたハ相移、田地可有開發候者也、

慶長拾七年子三月五日　伊奈半十花押

もたい新田の藤へもん

莊保

〔吾妻鏡 一〕治承四年十一月十日、以武藏國丸子庄、賜葛西三郎淸重、

〔吾妻鏡 六〕文治二年七月二十八日癸卯、帥中納言奉書到來、新日吉領武藏國河肥庄地頭、對捍去々年乃貢事、幷同領長門國向津奥庄武士狼藉事、取庄家解狀被下之、早可令尋成敗給之由被載之、去六月一日御敎書也、○中略河肥事者、請所也、但領主幼少之間、如請料事、殊有不法事歟、差別奉行人、可令致嚴密辨之旨、被遣御書於武藏守之許云云、俊兼爲奉行云云、　八月五日己卯、就帥中納言奉書被進御請文、是新日吉領武藏國河越庄年貢事、幷長門國向津庄狼藉事等也、平五盛時染筆云云、六月一日御敎書、七月二十八日到來、謹以令拜見候訖、新日吉社御領武藏國河肥庄事、本自爲請所、令進御年貢候之所也、而去年領家令逝去之由依承候、不知可進年貢之所候、

〔新編武藏風土記稿 一百七十六高麗郡〕總說

小田原北條家人所領役帳ニ、新田又七郎ガ領セシ頃、河越三十鄕ノ内上ハ戸村トノス、○中略上ハ戸村ヲ謂テ川越ト書スルヲモテ考レバ、往古川越ノ地ハ、川ヲ挾テ稱スルコト明ラケシ、日吉山王鐘ノ銘ニ、文應元年ニ、河肥庄ト書スルモノアリ、左スレバ川越ノ唱、モトヨリアリシコトイヨ〳〵明ラケシ、河ヲ川トシ、肥ヲ越ト書スルモノハ、後世改ムルモノナルベシ、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年二月十六日戊申、武藏國河越庄本所乃貢、有未濟之由、依被仰下、殊爲有其沙汰、今日被遣雜色等云云、

〔吾妻鏡 八〕文治四年六月四日、武藏國太田庄、以上件庄領年貢、或先々注進、或本文書紛失、平家時分、令致自由沙汰事、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年十一月二日己丑、武藏國大田庄堤修固事、明年三月以前可終功之旨、被仰下云云、

〔吾妻鏡 二十七〕寛喜二年正月二十六日、於武州公文書、武藏國太田庄内荒野可新開事、其沙汰在之、

尾藤左近入道道然奉行之云云、

〔梅松論上〕敵數百人討取間、御かむにたへずして、武藏の太田の庄を小山の常犬丸に充行はる、是は由緒の地なり、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、波多野中務丞忠綱事、於無雙軍忠者、雖不及御疑、於御前對決之時、以義村稱盲目、爲惡口之上、以不加賞、可准罪科之由有沙汰、所被闕也、子息次郎經朝賞事者被行之、又由利中八郎遂被召放所領云云、〇中略

武藏國長井庄、藤九郎次郎　横山庄、大膳大夫

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月二十五日癸未、以田地爲博奕賭事、於件所者可被召放之由被定、是大宮三郎遠員與豐島又太郎時光、相論武藏國豐島庄犬食名、大宮有忠打四一半事起也、各相互難訴申、遂被收公彼所領云云、

〔武藏志料三〕鐘　橘樹郡川崎村勝福寺鐘

上總國望陀郡奈良輪村の東に、坂戸市場といふ處有、そこに坂戸明神の神社有、或云逆手多力雄神を祭り奉ると云、その宮居ゑきくいやかにして、めづらしき結構也、その社頭に古鐘一口を懸おく、この鐘の象形甚古への物にして、今の制とは大に異也、銘有て、その後方に、弘長三年癸亥武州河崎庄內勝福寺と有、今按に、弘長は八十九代龜山院の紀號にて、鎌倉の平時賴最明寺この年に薨せられたり、明和元年に至りて、すでに五百八年におよべり、思ふに古へ戰の亂れに、奪取てかの所へ持行しならん、鎌倉寺々の鐘に、かゝる類ひの事いと多し、

〔勸修寺文書二〕門跡領等、御當知行不可有相違之由、院宣所候也、仍言上如件、

建武三年九月十七日　隆蔭

進上觀修寺僧正御房〇中略

勧修寺領〇中略
武藏國河崎庄〇中略　以上十八箇所
建武三年九月十七日

〔東福寺文書〕二一武藏國船木田新莊事、
一通正御寄進狀、一通〇中略　建武元年二月十七日、
右當寺領文書目錄、如件、
貞和三年七月日

〔黃梅院文書〕奉寄圓覺寺黃梅院、武藏國小山田庄黑河鄉半分事、
右任御仁々局申請、寄附之狀、依仰執達如件、
應安五年九月十一日　畠山源滿家花押

〔北條分限帳郡村略考〕小山田彌三郎
小山田庄　成瀨　小山田莊　小川　小山田莊　高坂
同　森　同　木曾　同　山崎
同　町田　今は原町田と云、原の方に村有、此町田を本町田と云、
同　直ヶ谷　今は熊ヶ谷と云
同　眞光寺　小山田莊　黑川
同　鶴間　今は向鶴間鶴間前と云、是は武藏鶴間なり、四村武州多摩郡にて、相州高座郡と郡境也、
同　金森　小山田莊　大谷　小山田莊　金井
同　廣袴　同　木倉　今は金井の内なり

右村々、永合四百拾九貫八百拾貳文、

此村々武州多摩郡の內今も小山田領と云、總て今村高合四千石餘、

當時都て私領、御料はなし、土地惡敷村々なり、

〔集古文書 二十九 下知狀〕應永二十九年下知狀 武藏國金澤稱名寺藏

金澤稱名寺造營用脚勸進間事

右於六浦庄內當福寺門前人別二文、駄別三文充宛取之、可被修其功之狀、如件、

應永廿九年七月十七日　　沙彌花押

〔吾妻鏡 十二〕建久三年二月二十四日丁卯、於武藏國六連海邊、囚人上總五郎兵衞尉忠光梟首、義盛奉之、

〔吾妻鏡 二十七〕安貞二年四月二十八日、將軍家爲御遊覽、渡御六浦云云、　五月一日、將軍家自六浦還御、去夜御止宿六浦云云、

〔鎌倉九代記 二〕至德三年六月、田村が子息、今年すでに七歲と五歲に成けるを、乳人子これをいだきて落行所を、蘆名兵衞生捕て、鎌倉殿にぐしてまひる、すなはち六面の沖に、沈めにぞかけられける、

〔鎌倉大草紙 上〕應永四年正月二十四日、小山若犬丸が子ども二人は若年にてありしを、會津の三浦左京大夫是を召捕、鎌倉へ進上しけるを、實檢の後、六浦の海に沈めらる、

〔武藏野の記行〕明れば八月十 天文十五年 十三日、朝霧彌々深くして、道もさだかにみえ別ず、馬にまかせて行、長井の庄にも著ぬ、誠や若紫の卷に、かゝる朝霧をわけいらんとあるもこれなるべし、大澤の庄などを行に、漸々すみ田川にもつきぬ、

〔源平盛衰記 三十〕眞盛被討附朱買臣錦袴幷新豐縣翁事

平家ノ侍武藏國住人、長井齋藤別當眞盛ハ、我七十有餘ニ年闌タリ、〇下略

〔北條分限帳郡村略考〕松田左馬助

荊野庄　目懸谷　三田谷

武州相州の內、此地未ㇾ見聞、

〔新編武藏風土記稿〕八十五都筑郡池邊村

百姓久米吉（小泉ヲ氏トス、先祖ヲ帯刀ト云、北條分國ノ頃代官ヲ勤メシト云リ、後太閤秀吉小田原攻ノ時、近郷ヘ與フル所ノ制札一通ヲ藏セリ、其文左ニ載ス、）

こづくへ之庄內

武藏國都筑（いこのへ　ひがしかた　なり本　大熊　さいと　本郷　鳥山　山田　大棚　ちがさき　かち田・以上十一ケ所）

禁制

一軍勢甲乙人等濫坊狼籍事〇中略

右條々堅令ㇾ停止訖、若於ㇾ違犯之輩ㇾ者、速可ㇾ被ㇾ處ㇾ嚴科ㇾ者也、

天正十八年四月日

〔新編武藏風土記稿〕二百四十六秩父郡中古所ㇾ唱庄領

上我野鄕　往古ハ吾那保ニテ有リシコトハ、入間郡法恩寺年譜錄ニ、建治二年ノモノニ武藏國吾那保之在家ト云々、又其餘同記ニ、承元、寶治、弘安、康應等ノ文ニ、吾那上下ト記シタルハ、保ノ上下ナラン、又文和五年ノ碑文ニ、武州高麗郡我那ト見ヘタリ、サレバ鄕名ニ轉ジタルハ、中古以來ノコトヽ思ハレ、舊クハ吾那ナルモ文和ノ頃ハ吾ヲ我ニ替ヘ、其後又我野ニ改タリ、高麗郡ノ本郡ニ混ゼシコトハ前ニ辨ゼリ、

〔新編武藏風土記稿〕九十六多磨郡眞光寺村

眞光寺跡〇中略

請特蒙諸旦主恩施、修造眞光寺梵席、開大慈大悲普門、引入難解難度衆生、仰抜苦與樂誓願、祈

朝廷野庶安泰狀、

夫以大悲利生之春花、吐句於萬人歸依之意樹、隨緣應化之秋月、耀光於一時禮拜之心地、然則法界普門之妙體、無不現諸利觀音妙智之方、用誰人不信敬乎、抑武州小田保有一宇小堂、號眞光寺、本尊則観自尊聖像也、草創巳口數歷、不知誰人建立、〇中略

嘉慶二年戊辰霜月日草案長辨廿七才

〔大慈恩寺文書〕奉寄　大慈恩寺

武藏國六郷保大森郷肆與五郎跡事

右六拾六基之內、爲下總國塔婆料所、所令寄附也者、早守先例、可被致沙汰之狀如件、

明德二年十二月廿五日　左兵衛督源朝臣花押

下總國大慈恩寺雜掌申、六十六基內、當國塔婆料所、武藏國六郷保內大森永富兩所事、御敎書如此不日退彼猥藉人等、可被全寺家知行之狀如件、

應永十一年九月十五日　花押〇上杉朝宗

遠谷備前入道殿

〔集古文書四十四寄附狀〕慈照院義政公寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

鶴岡八幡宮本地護摩公料、武藏國師岡保柴關所事、

爲殊御寄進間、雖被准自餘歟、然者如元社家知行不可有相違由候也、仍執達如件、

嘉吉元年十二月廿六日　前下野守花押

沙彌花押

當社雜掌

〔新編武藏風土記稿 一百十三 多磨郡〕長淵村

永福寺（中略）本尊虚空藏、木ノ坐像ニテ長七寸許、蓮座ニ銘アリ、ソノ文ニ、

武州杣保長淵郷大澤村永福庵之事

本尊三田備州太守性幸禪定門之代、爲鹽行庵主開基、令建立、奉造立本尊而無相違所、享德年中之依一亂、絶失候間、旦那平憲淸、可致重而中興由、度々被請候、先本尊虚空藏薩埵之像奉作、永福庵欲爲致建立、且先師所願爲師、且現當二世志願者也、

寶德丁丑十月十六日

永福庵住持梵誓

大檀那平憲淸

佛所大工　助法眼

古事類苑

地部十二

武藏國下 江戸附

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平大和守直克 大廣間 從四位上少將元治元子五月任 拾七万石 御在城武州入間郡川越 江戸ヨリ十二里

北條時代、大道寺駿河守政繁持、天正十八年、酒井河内守重忠、同備後守忠利、慶長十四、酒井讃岐守忠勝、寛永十二、堀田加賀守正盛、同十六、松平伊豆守信綱、同甲斐守輝綱、同伊豆守信輝、元祿七、松平美濃守吉保、寶永元ヨリ秋元但馬守喬知、同但馬守喬房、同越中守喬求、同但馬守凉朝、明和四ヨリ松平大和守朝矩以後領之、

松平下總守忠誠 溜間 從四位上少將元治元子四月任 拾万石 御在城武州埼玉郡忍 江戸ヨリ十口里

成田下總守長泰、同下總守氏長居、天正十八、松平下野守忠吉、慶長五以後御番城、寛永十、松平伊豆守信綱、同十六、阿部豐後守忠秋、同播磨守正能、同豐後守正武、同豐後守正喬、同豐後守正允、同能登守正敏、同豐後守正識、同播磨守正由、同鐵丸正權、文政六ヨリ松平下總守忠堯、以後領之、

大岡兵庫頭忠恕 雁間 朝散大夫 二万三千石 居城武州埼玉郡岩槻 江戸ヨリ千住通九里八丁 川口通

北條氏直舍弟太田十郎氏房居、天正十八、高力土佐守清長、同河内守正長、同左近大夫忠房、元和五青山伯耆守忠俊、同九、阿部備中守正次、同對馬守正盛、延寶八、戸田山城守忠昌、天和二、松平伊賀守忠德、元祿十、小笠原佐渡守長重、同山城守長信、遠州掛川ヘ替、寶永八、永井伊豆守直敬、同伊賀守尙平、同伊賀守直陳、寶曆六、大岡出雲守忠光、以後領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕安部攝津守信發 菊之間 朝散大夫 二万二百五十石餘 在所武州榛澤郡岡部 江戸ヨリ十九里半

寶曆一年三州半原ヨリ移之、以後代々領之、

米倉丹後守昌言 菊之間 朝散大夫 一万二千石 在所武州久良岐郡金澤 江戸ヨリ十四里

相州大住郡、淘綾郡、野州都賀郡、安蘇郡、都合四箇所之內、元祿九年ヨリ米倉氏代々領之、○節略

田數
石高

〔倭名類聚抄五國郡〕武藏國、○略 管二十一、田三萬五千五百七十四町七段九十六歩

〔海東諸國記〕武藏州　郡二十四、水田三萬五千七十四町七段、

〔伊呂波字類抄无國郡〕武藏國管廿一(中略)水田三万六千六百九十一町

〔拾芥抄中末本諸國郡〕武藏大道 廿四郡(中略)田五万千五百四十町

〔前田家所藏文書〕

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕六十六万七千百六石

武藏

〔和漢三才圖會六十七武藏〕二十一郡　高八十四万石餘東海道

〔武藏演路一〕郡名考ニ載ル、今官ニ用ル郡名順ニ效フ、左ノ如シ、

豐島郡　百十七邑　四万四千百五十石二斗四升九合三勺九才三万二千二百石

荏原郡　九十八邑　三万三千八十六石九升五合三勺二万四千五百石

橘樹郡　百二十四邑　五万千九百四十四石一斗九升六合九勺四才百三十八ケ村四万九千石餘

都筑郡　七十五邑　二万二千九百六十四石四升五合一勺八才二万七千石

久良岐郡　五十三邑　一万六千三百一石八斗一升一合二勺五才一万二千七百石餘

多磨郡　三百七十四邑三百九十二　拾二万一千百四十二石九斗九升五合四勺九才二十二万石餘

新座郡　三十一邑　一万二千二百四十七石六升貳勺一万四千三百石

入間郡　二百四十三邑二百四十九ケ村　七万四千五百九十九石八斗八升五合六勺八万七百石

高麗郡　百五邑　二万五千四百六十六石九斗四升三合六勺五才三万四千石

秩父郡　八十二邑百十三　二万九千九百五十二石七斗二升三万石

男衾郡　三十五邑　八千二十二石壹斗四升四勺四才七千九百石

大里郡　四十三邑　二万千百十二石七升三合七勺二万三千石

比企郡　百五十六邑　五万三千三百石

横見　四十六邑　一万七千石
足立　四百三十八邑　十二万石
葛飾　二百五十五邑　十一万石ヨ
埼玉　四百二十八邑　十五万三千石ヨ
幡羅　六十邑　四万石
榛澤　八十三邑　二万五千石
那賀　十五邑　六千四百石
兒玉　六十八邑　二万九千石
加美　三十六邑　一万四千百石
　合二十二郡
寶暦午年〔〇十二年〕改　村數　三千拾七ヶ村　高合九十八万千百壹石五斗六升三合
　村總計凡三千二十九村許　朱書石高合　百十二万一千六百石餘
　又村數石高者、元祿ノ改鄉ノ村帳之由、此諸書石高定ガタシ
一ニ曰、武藏國中人數凡百七拾七万千二百十四人、内〔男百万六千六百九十四人　女七十六万四千九百二十人〕
武藏國田租〔〇中略〕
或云田數五万千九百二拾町　知行高八十四万石
一ニ云石高十六万七千八百六十二石餘
〔武藏國圖〕武藏國〔郡數貳拾貳郡　村數參千拾七村〕　寶暦午年改取高合九拾八萬千百壹石五斗六升三合
秩父郡　七拾壹ヶ村　高貳万四千六百六拾五石四斗
豊島郡　六拾壹ヶ村　高貳万八千九百六拾貳石餘

新座郡　拾八ヶ村　高七千六百八拾三石五斗
荏原郡　七拾壹ヶ村　高貳万千八百拾八石五斗五合
多磨郡　三百二十ヶ村　高七万三千七百八拾貳石七斗八升
綴喜郡〔都筑和名〕　六拾二ヶ村　高貳万千五石六斗六升五合
久良郡　四拾ヶ村　高壹万貳千九百四拾九石四斗九升三合
橘樹郡　百拾三ヶ村　高四万五百五拾石八升七合
那珂郡〔○村數闕〕　高五千五百六拾五石壹斗九升六合
賀美郡　貳拾二ヶ村　高壹万千六百六拾壹石八斗五升
兒玉郡　五拾九ヶ村　高貳万六千四百七拾七石四斗八升六合
幡羅郡　五拾三ヶ村　高三万六千七百七拾石餘
榛澤郡　六拾九ヶ村　高貳万七千四百八拾壹石五斗八升壹合
男衾郡　三拾四ヶ村　高七千三拾九石九斗
大里郡　三拾九ヶ村　高貳万九千八百拾石八斗
比企郡　百三ヶ村　高四万七千貳百拾壹石四斗八升
埼玉郡　貳百六拾三ヶ村　高貳拾三万六千四百三拾四石
足立郡　三百三拾壹ヶ村　高拾三万六百五拾六石五斗八升
高麗郡　八拾四ヶ村　高壹万九千九百拾七石壹斗八升
入間郡　百八拾五ヶ村　高六万七千百五拾七石
橫見郡〔○村數石高闕〕
葛飾郡　百九拾六ヶ村〔下總國今武藏國內ニ入〕　高拾万三千六百九石四斗貳升

〔武藏名寄上〕總高

高百拾五万三千百三拾七石壹斗四升四合五才　家數貳拾壹万三千三百五拾九軒

內

高四百八拾四石七升壹勺　家數百壹軒　相模國

高八千八百九拾三石　家數四百三拾三軒　下總國

〔官中秘策二〕武藏國　貳拾一郡〇中略

石高百拾六万七千八百六拾貳石

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調〇中略

武藏國御料私領　一高百貳拾八万千四百三拾壹石六升八合貳勺貳才

〔新編武藏風土記稿總國圖說一〕正保改定國高九十八万二千三百二十七石九斗六升五合八勺、此後玉川次左衛門某、野村次郎右衛門某等、武藏野開墾ノ功ヲ起シ、寛文九年閏十月二十七日檢地シ畢、南原野廻北原地藏野、小川新田、砂川新田、下石原新田、松野五箇所、都テ高拾八万石許、一所ニテ廣ナルモノ一區、地藏野分一區、其餘ハ飛地ニテ所々ニ區別セリ、故ニ元祿ノ改ニ至テハ、高百十六萬七千八百六十二石九斗八升三合三勺九才ニ至ル、其相距ルコト六十年ニシテ、貢數ノ增加スルコト十八萬五千石餘、其後享保十三年、井澤彌惣兵衛爲永命ヲ蒙リ、足立郡中見沼、鴻沼ナドイヘル大沼ヲ埋ミテ水田トシ、後又元文二年、堀江荒四郎芳極、荒川涯ノ閑地ヲ新墾シテ高入トナリシカバ、元祿ノ度改定ノ高ニ增加スルコト、又万石餘ニ及ベリ、況今元文ヲ距コト九十餘年、貢穀ノ增入スルコト知ベシ、

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

武藏國、正稅公廨各卌万束、國分寺料五万束、薬師寺料四万二千束、梵釋四王料七千七百束、文殊會

國產貢獻

料二千束、藥分料一万束、修理池溝料四万束、救急料十二万束、悲田料四千五百束、俘囚料三万束、勳旨繫飼御馬秣料二千廿束、神埼牧牛直五千五百卅四束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕武藏國〇中略 註 管廿一(中略)正公各四十萬束、本稻百一萬三千七百五十束五把、雜稻三十一萬三千七百五十束五把、

〇按ズルニ、本稻百一萬云々ハ、百十一萬云々ノ誤カ、又延喜主稅式ニ擧グル所ノ雜稻合セテ三十一萬一千七百五十四束ナリ、此書ニ三千云々トアルニ合ハズ、何レカ誤ナルベシ、

〔延喜式 十五 內藏〕諸國年料供進〇中略 麻子二斛(中略)武藏國六斗〇中略 絁八百五十疋〇中略 交易六百五十疋(中略)武藏、上總、上野七箇國各五十疋〇中略 紫草二万二百斤(中略)武藏國三千二百斤 櫨子(中略)武藏、(中略)土佐廿六箇國各四合〇中略

〔延喜式 二十三 民部〕年料別納租穀〇中略 武藏國一万二千石〇中略

年料別貢雜物〇中略 武藏國筆一百管、膠五十斤、麻黄五斤、麻子六斗、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略 武藏國廿壹口七口各大一升、十三口各小一升、〇中略

右六箇國爲第二番寅申年〇中略

交易雜物〇中略 武藏國絁五十疋、布一千五百端、商布一万一千一百段、穀六十六石五斗、龍鬢席廿枚、三編貲席廿枚、席五百枚、履料牛皮二枚、鞦廿具、鹿革六十張、鹿皮十五張、紫草三千二百斤、木綿四百七十二斤、櫨子四合、

〔延喜式 二十四 主計〕武藏〇中略 右十一國兼絲〇中略

武藏〇中略 右十國輸絁〇中略

武藏國行程上廿九日、下十五日、

調緋帛六十疋、紺帛六十疋、黄帛一百疋、橡帛廿五疋、紺布九十端、縹布五十端、黄布卅端、自餘輸絁布、

庸輸布、

中男作物、麻五百斤、紙、木綿、紅花、茜、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥〇中略

武藏國廿八種　黄芩卅五斤十兩、芎藭五斤、丹參廿五斤、蜘蛛三斤十兩、茹藘二斤、構杞十斤、芍藥三斤、桔梗四斤十二兩、細辛廿斤、大黄二斤、土瓜三斤十四兩、當歸十四斤、甘遂一斤、款多花十兩、瓜蔕五兩、干地黄五斗七升六合、桃人四斗、烏頭一斛二斗、附子八斗、決明子、牡荆子、葶藶子各三斗、蛇床子一斗、地膚子一斗五合、荳蔻子二升、蜀椒三斗、麻黄五斤、豉大一斗、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、(中略)宅常樽集諸國土產貯甚豐也、所謂(中略)武藏鐙、

〔庭訓往來〕上總鞦、武藏鐙、

〔毛吹草　三〕武藏

江戸葵瓜(葵ノ御紋有ト云)　根深(ネブカ)　蕎切　芝雜喉(シバザコ)　川口蜆　蛤　金澤貝香(カイカウ)　長辛螺(ナガニシ)(ヘナタリ共云歟)　海松(ミル)

喰(クイ)礒物(イソモノ)　常伏(トコブシ)　蛎　鮟鱇　筋鰹　鯛　白魚(此外魚類多、餘ハ略之、)　金川海鼠(ナマコ)　津久美(ツクミ)野老(トコロ)　久我素麪

瀧山横山紬(ツムギ)島　淺草島　岩築綿　木綿島

○按ズルニ、和漢三才圖會ニハ、右ノ外ニ、紫染、大菜螺、荒和布、苔、(品川)鬠(モトユイ)、石灰、(八王子)等ヲ擧ゲタリ、

人口

〔續日本紀　八元正〕養老五年正月戊申朔、武藏上野二國並獻赤烏、

〔類聚國史　百六十五祥瑞〕天長四年五月庚午、武藏國獻白雉、

〔文德實錄　十〕天安二年七月甲子、武藏國上白雌雉一、

〔吾妻鏡　十五〕建久六年十二月七日戊午、相模武藏兩國所濟絲綿等被進京都、新藤二傔長相具之云云、

〔官中秘策　二〕武藏國　貳拾一郡(中略)

一人數百七拾七万千貳百拾四人　内(百七拾六万六千六百九拾四人　男)(七拾六万四千五百貳拾人　女)

〔吹塵錄　五人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)

御料私領
人數百六拾五万四千三百六拾八人
內八拾九万八千八百六拾四人　男
七拾五万五千五百四人　女　○中略
高百拾六万七千六百六拾貳石餘　武藏國

弘化三丙午年
諸國人數調　○中略

御料私領
一人數百七拾七万七千三百七拾壹人
內九拾貳万七千四百四拾四人　男
八拾四万九千九百貳拾七人　女
高百貳拾八万千四百三拾壹石餘　武藏國

風俗

〔人國記〕武藏國

武藏國ノ風俗、クワツダフニ而氣廣シ、譬バ秘藏之道具ヲ過チニ因テ損ル時ハ、其者之恐レ哀ムハ最成ニ、其主且而後悔ノ氣色ナクテ、結局夫ニ恩ヲ與テ情ヲ深クスル類之心也、子細ハ秘藏之器ヲタクミテ可ㇾ割樣ナシ、吾モ人モアヤマチスルハ無念也トイヘドモ、トガムルハ亦此方之過リ也ト思案而、名人之風俗也、因ㇾ茲軍ニ合フテ敗軍スルトイヘドモ、敢テ其氣ヲ不ㇾ屈而、能ク氣ヲ改メテ、敗軍之士ヲ集メテ出陣スルノ類也、凡ソ氣ニ乘ト氣ニ後ルヽトハ、雲泥萬里也トイヘドモ、乘モ後ルヽモ、亦ミイナ可也トシガタシ、只道理ニ因ル時ハ氣ニ乘ジ、不ㇾ可ㇾ成時ハ己ガ非ヲ知テ、承而制スルヲ上トス、然レドモ是國風尤イサギヨキ風俗也、次ニ氣廣キヲ以テ驕ル氣強シ、口傳

〔武藏演路一〕按ルニ、西は山深くして、東に江海を受て、廣大繁茂の地、古昔武藏野とて曠原續き、故ニ自然と人の氣活にして、今猶江都の大城ありて、諸國に勝れ大都會の地となり、國民奢美の風甚し、され共秩父山中などは、木質の古俗と云べし、熊谷邊は上州の風俗にうつり、寒暑も中正の內、餘寒烈風常に多しと、

名所

〔和漢三才圖會六十七武藏〕當國神社佛閣名所
霞^(カスミ)ノ關^(セキ)　今在ニ櫻田之內、此邊有ニ白絲瀧、

續千　同じくは空に霞のせきもがな雲路の鴈をしばし留めん　爲世

小山田關

夫木　逢事を苗代水に任せてぞこさんこさじは小山田のせき

箱池

同　冬深み箱の池邊を朝行ば氷の鏡見ぬ人ぞなき　知經

小崎池

山鳥のをさきの池の秋の月拐や鏡をかけて澄らん　爲尹

掘兼井　在豐島郡玉川里、俗云牛込、又云小日向、

其井不用幹繘汲而不涸、雖水旱時無增減、淸冷以爲奇、

千載　むさしのゝほり兼の井も有物を嬉しく水の近付にけり　俊成

讓井　在桶町、最冷水、酒造家爭汲、

新井　在西新井村增司寺、俗傳謂弘法加持涌出、

極樂井　在小石川傳通院、當時開基了譽始掘之、冷水、

逃水

夫木　東路に有といふなるにげ水のにげ隱れても世を過す哉　俊頼

鞍掛松　在千馱茅野、源賴朝繫乘馬於此松云云、

眞土山　或爲待乳山、千壽街道也、山上在聖天宮、

眞土山夕こへ暮ていほさきの角田河原に獨かもねん、

妙龜山　在淺茅原總泉寺前、相傳、梅若丸死于角田川岸、母尋來營小庵、修念佛、終投身於池死、其池曰鏡池、里人立塚、名妙龜山、

角田川　一名三屋戸川、至下淺草川、武藏下總之界川上稱刀根川、

水ぐきの跡かきならすすみだ川ことづてやらん人もとひこず

玉川　俗云太出於池上之北、落于六江、矢口ノ渡

拾遺　加波　玉川のさらす細布さら〳〵に昔の人の戀しきやなぞ

二俣川(フタマタ)　畠山重忠戰死之地(中略)

崎玉津　万葉　さき玉の津にをる船の風をいたみ綱は絶とも事な絶そね

入間里(同川)　さりともとたのむの鴈を賴にて入まの里にけふぞ入ぬる

都筑原(ツヽキ)(同關)　千載　むさし野の草のゆかりも問侘ぬつゞきの原の雪の夕暮(顯昭)

武藏野　行末は空も一つにむさしのに草の原より出る月かげ

當國寺社、及名所數多不枚擧、

〔續視聽草二集十〕武藏國略圖附略考

名勝

武藏野(多磨入間以下十郡ニカヽルト云)玉川、狹山、箱池、小山田關、横山、横野、(多磨郡)都筑原、都筑岡、都筑里、二戻川、立野、(都筑郡)荒藺崎、荒岡磯、笠島、(荏原郡)向岡、忍岡、忍杜、霞關、角田川、赤打山、花崎、關屋里、(豐島郡)氷河原、(足立郡)入間里、入間川、三吉野、田能武澤、堀兼井、大屋原、淺羽野、(入間郡)吉見里、(横見郡)崎玉津、小崎沼、(埼玉郡)岡邊原、(榛澤郡)懸井、(那珂郡)武藏嶺、蝦手山、海比原田里、猪名川、大我井杜、古江湊、岩瀨渡、(以上郡未勘)

〔廻國雜記〕淺草といへる所にとまりて、庭に殘れる草花を見て、

冬の色はまだ淺草のうら枯に秋の露をものこす庭かな、此里のほとりに石枕といへるふしぎなる石あり、(中略)○當所の寺號淺草寺といへる、十一面觀音にて侍り、たぐひなき靈佛にてましけるとなん、參詣の道すがら、名所ども多かりける中に、まつち山といふ所にて、

爭でわれ賴めもをかぬ東路の待乳の山にけふはきぬらん

しぐれてもつゐにもみぢぬ待乳山落葉をときと木枯ぞ吹、淺茅が原といへる所にて、

人めさへかれてさびしき夕まぐれ淺茅が原の霜を分つゝ、おもひ川にいたりてよめる、

うき旅の道にながるゝ思ひ川淚の袖や水のみなかみ、斯て隅田川のほとりに到りて、皆々歌

よみて披講などして、古の塚のすがた哀れさ、今の如くに覺えて、

古塚のかげ行水のすみだ川聞わたりてもぬるゝ袖かな、〇中略次の日淺草を立て新羽といへる所に赴き侍るとて、道すがら名所ども尋ねける中に、忍の岡といへる所にて、松原の有ける陰に休みて、

霜のゝち現れにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし、こゝを過て、小石川といへる所にまかりて、

我方を思ひふかめて小石河いつをせにとかこひ渡るらん、とりこえの里といへる所に行くれて、

暮にけり宿りいづくといそぐ日になれもねに行鳥越の里、芝の浦といへる所に到りければ、鹽やの烟うち靡て、物寂しきに、鹽木運ぶ舟どもを見て、

やかぬよりもしほの煙名にぞたつ舟にこりつむ芝の浦人、此うらを過てあら井といへる所にて、

蘆まじりおふるあらゐのうち靡き波にむせべる岸の松風、まりこの里にてよめる、

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめず急ぐ暮かな、駒林といへる所に到りて宿をかり侍るに、淺ましげなる賤の伏屋に、落葉所をせき侍るを、ちとはきなどし侍りける間、たゝずみて思ひつゞけゝる、

つながれぬ月日しられて冬きぬと又はをかふる駒林かな、新羽を立て鎌倉に到る道すがら、樣々の名所ども、委しく記すに及び侍らず、かたびらの宿といへる所にて、

いつ來てか旅の衣をかへてまし風うら寒きかたびらの里、岩井の原を過るとて、

すさまじき岩ゐの原をよそに見て結ぶぞ草の枕成ける、もちゐ坂といへる所にて、俳諧の歌、

行つきて見れ共みえずもちゐ坂たゞ藁靴に足をくはせて、すりこばち坂といへる所にて、又俳諧歌をよみて人に見せ侍りける、

ひだるさに宿急ぐとや思らん路より名のるすりこばち坂、はなれ山といへる山有、誠に續きなる尾上もみえ侍らねば、

朝まだき旅立さとのをちかたに其名もしるきはなれ山哉、略○中半澤といへる所にやどりて

發句

水なかば澤べをわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て、是彼歌よみ連歌など言捨けるに、

吾妻路の霞の關にとしこえば我も都に立ぞかへらん

都にといそぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待らむ

此關をこえ過て、戀が窪といへる所にて、

朽はてぬ名のみ殘れる戀がくぼ今はたとふも契ならずや、略○中むねをかといへる所を通り侍けるに、夕の煙を見て、

夕けぶりあらそふ暮を見せてけりわが家々のむね岡の宿、堀兼の井見にまかりてよめる、今は高井戸といふ、

卿ぞ語るに殘るむさしのやほりかねの井に水はなけれど

昔たれ心づくしの名をとめて水なき野べを堀かねのゐぞ、やせの里は、やがて此續きにて侍り、

里人のやせといふ名や堀兼の井に水なきをわびて住らん、これよりいるま川にまかりてよめる、

立よりて影をうつさば入間川わが年波もさかさまにゆけ、此河につきて樣々の說有、水逆に流れ侍るといふ一義も侍り、又里人の家の門うらにて侍るとなん、水の流るゝ方角案內なきことなれば、何方を上下と定めがたし、家々の口は誠に表には侍らず、總じて申かよはす言葉抔も、かへさまなることども也、異形なる風情にて侍り、

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒略○中 武藏國一百五十人略○中

諸國器仗略○中 武藏國甲六領、横刀卅口、弓六十張、征箭六十具、胡籙六十具、

〔日本書紀天武二十九〕十三年五月甲子、化來百濟僧尼、及俗人男女幷二十三人、皆安置于武藏國、

〔日本書紀持統三十〕元年四月癸卯、筑紫太宰獻投化新羅僧尼、及百姓男女二十二人、居于武藏國、賦田受稟、使安生業、

〔續日本紀元明六〕靈龜元年五月乙巳、攝津、紀伊、武藏、越前、志摩五國飢、賑貸之、　庚戌、移相模、上總、常陸、上野、武藏、下野六國富民千戶、配陸奧焉、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十二月丙申、武藏國隱沒田九百町、備中國二百町、使仰本道巡察使使勘撿、自餘諸道巡察使、撿田者亦由此也、其使未至國界、而豫自首者免罪、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年正月乙未、令美濃武藏二國少年、每國二十人習新羅語、爲征新羅也、

〔三代實錄淸和五〕貞觀三年十一月十六日丙戌、武藏國每郡置撿非違使一人、以凶猾成黨群盜滿山也、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月二十八日丁丑、遣御使、被召江戶太郞重長、依景親之催、遂石橋合戰、雖有其謂、守令旨可奉令旨、重能、有重折節在京、於武藏國、當時汝已爲棟梁、專被恃思食之上者、催具便宜勇士等、可豫參之由云云、　十月五日甲申、武藏國諸雜事等、仰在廳官人幷諸郡司等、可令致沙汰之間、所被仰付江戶太郞重長也、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十三日辛卯、關東御分國々乃貢、日者依朝敵征伐事頗懈緩、然者被免以前

分、自今年可令糺沙汰之由、所被申京都也、

諸國濟物事、治承四年亂以後、至于文治元年、世間不落居、○中略賴朝知行國々、相模、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等也、○中略

三月十三日　　賴朝

進上帥中納言殿

〔吾妻鏡十四〕建久五年十一月二十六日甲寅、武藏相模兩國乃貢等被進京都、行政、仲業、實景等奉行之、御使雜色時澤成里云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月十六日戊戌、武藏國務事、義信朝臣成敗、尤叶民庶雅意之由、就聞召及、今日被下御感御書云云、於向後國司者、可守此時之趣、被置壁書於府廳云云、散位盛時奉行、　二十八日庚戌、武藏國染殿別當事、被仰付安房上野局、糸所別當事、近濔局奉之云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年十一月三十日戊午、武藏國田文被整之、是故將軍御時、被遂總檢之後、未及田文沙汰云云、

〔吾妻鏡十九〕承元四年三月十四日壬寅、被造武藏國田文、國務條々更定之、當州者、右大將家御代初爲一國朝恩、所令國務給也、仍建久七年雖被遂國撿、未及目錄沙汰云云、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年二月十四日辛卯、武藏國國務間事、時房朝臣被致興行、沙汰於鄕々、被補鄕司職、而匠作泰時聊雖有被執申之旨、任入道武藏守義信國務之例、可令沙汰之旨被仰之間、所存其趣也、雖傾狀之由被答申云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年九月五日壬戌、武藏國務條々事、幷西海諸國守護地頭沙汰之事等有評定、是皆可救窮民之御計也、淸左衛門尉、深澤山城前司等爲奉行、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年四月二日、河越三郎重員者、武藏國總撿挍職也、付當職、四ヶ條有掌事、近來

悉慶訖、仍任例可執行之由、愁申武州之間、爲岩原源八經直奉行、今日被尋下留守所云云、　廿日、河越三郎重員本職四ヶ條事、去二日被尋下留守所、自秩父權守重綱之時、至于畠山次郎重忠、奉行來之條、符合于重員申狀之由、在廳散位日奉實直、同弘持、物部宗光等、去十四日勘狀、留守代歸寂、同十五日副狀等到來、仍無相違可致沙汰之由云云、

〔吾妻鏡　脱漏〕嘉祿二年四月十日甲午、河越三郎重員、武藏國留守所總撿挍職被補之、是先祖秩父出羽權守以來、代々補來云云、

〔吾妻鏡　九〕文治五年七月十七日乙亥、可有御下向于奧州事、終日被經沙汰、此間可被相分三手者、○中略仍武藏上野兩國內黨々等者、從于加藤次景廉、葛西三郎淸重等、可遂合戰之由、以義盛景時等被仰含、

〔吾妻鏡　二十一〕建曆三年○建保元年十月十八日甲寅、以宗監物孝尙、爲武藏國新開實撿被遣、圖書允淸定奉行、

〔吾妻鏡　二十八〕寬喜四年○貞永元年二月二十六日、武藏國榑沼堤大破之間、可令修固之由、可被仰便宜地頭之旨被定、左近入道道然、石原源八經景等爲奉行下向彼國、諸人領內百姓不漏一人可催具、在家別俵二可充、自三月五日始之、自身行向其所、可致沙汰之旨含命云云、

〔吾妻鏡　三十四〕仁治二年十一月十七日庚子、今日箕勾太郎師政、募去承久三年勳功賞、拜領武藏國多磨野荒野、是父左近大夫政高加故匠作時房陣、於勢多橋抽軍忠訖、仍連々雖申其賞、依無其地延引、而今彼所可被開水田之間、兼所有御計也云云、　十二月二十四日丁丑、堀通多磨河、堰上其流出武藏野、可開水田之事、施行既訖、柏間左衞門尉、多賀谷兵衞尉、恒富兵衞尉等爲奉行、今日所下向彼國也、○二十四日條原脫、據一本補、

〔萬葉集　十四東歌〕相聞

多麻河泊爾左良須氐豆久利佐良左良爾奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎、
武藏野爾宇良敝可多也伎麻左氐爾毛乃良奴伎美我名宇良爾低爾家里、
武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與比欲利世呂爾安波奈布與、
古非思家波素氐毛布良武乎牟射志野乃宇家良我波奈乃伊呂爾豆奈由米、
或本歌曰、伊可爾思氐古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我波奈乃伊呂爾低受安良牟、
武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久毛伎美我麻爾末爾吾者余利爾思乎、
伊利麻治能於保屋我波良能伊波爲都良比可婆奴流奴流和爾奈多要曾禰、
和我世故乎安杼可母伊波武牟射志野乃宇家良我波奈乃登吉奈伎母能乎、
佐吉多萬能津爾乎流布禰乃可是乎伊多美都奈波多由登毛許登奈多延曾禰、
奈都蘇妣久宇奈比乎左之氐等夫登利乃伊多良武等曾與阿我之多波倍思、

右九首、武藏國歌、

〔伊勢物語上〕むかしむさしなる男、京なる女のもとに、聞ゆればはづかし、聞えねばくるしとかきて、うはがきに、むさしあぶみとかきてをこせて、のち、おともせずなりにければ、京より女、

むさしあぶみさすがにかけて賴むにはとはぬもつらしとふもうるさし、とあるを見てなん、たへがたき心ちしける、

とへばいふとはねばうらむむさしあぶみかゝるをりにや人はしぬらん

〔更科日記〕今は武藏の國に成ぬ、殊におかしき所も見えず、濱もすなごしろくなどもなく、こひちのやうにて、紫生ときく野も、あし荻のみ高くおひて、馬にのりて弓もたるすゑ見えぬまで、高く生ひ茂て、中をわけ行に、竹芝といふ寺あり、遙にいゝさらふといふ所の、らうのあとのいしずへなど有、いかなる所ぞと問へば、是は古へ竹芝といふさかなり、國の人の有けるを、火たきやのひ

たく衞士にさし奉りたりけるに、御前の庭をはくとて、などや苦しきめを見るらん、我國に七三つくりすへたるさかつぼに、さし渡したるひたえのひさごの、みなみ風吹ば北になびき、北風ふけば南になびき、西吹ば東になびき、東ふけば西になびくを見て、かくてあるよと獨りごちつぶやきけるを、その時帝の御女、いみじうかしづかれ給ふ、たゞひとりみすのきはに立ちいでたまひて、柱によりかゝりて御覽ずるに、此の男のかく獨ごつを、いと哀にいかなるひさごの、いかになびくらんと、いみじうゆかしくおぼされければ、みすをしあけて、あの男こちよれとめしければ、畏まりて高欄のつらに參りたりければ、いひつること今ひとかへり、我にいひてきかせよと仰せければ、さかつぼの事を、今ひとかへり申ければ、我ゐていきてみせよ、さいふやうありと仰られければ、かしこく恐しく思ひければ、さるべきにや有けむ、おひ奉りてくだるに、びんなく人追ひてくらんと思ひて、その夜勢多の橋のもとに、此宮をすへ奉つり、せたの橋を一間ばかりこぼちて、それをとびこして、此宮をかきおひ奉りて、七日七夜といふに、武藏の國にいきつきけり、みかどきさきみこ失せ玉ひぬと、おぼしまどひもとめ給に、武藏の國の衞士の男なん、いとこうばしきものを首にひきかけて、とぶやうに逃けると申いで、この男をたづぬるになかりけり、論なくもとの國にこそ行らめと、公より使くだりて追ふに、勢多の橋のこぼれて、得ゆきやらず三月といふに、武藏の國にいきつきて、此男をたづぬるに、此みこ公使を召して、吾さるべきにや有けん、此男の家ゆかしくてゐてゆけといひしかば、ゐて來たり、いみじくこゝ在り、よくおぼゆ此をのこつみしにうせられば、我はいかであれど、これも前の世に、此國に跡をたるべき宿世こそありけめ、はや歸りて公けに、此よしを奏せよと仰られければ、いはんかたなくてのぼりて、帝に斯なん有つると奏しければ、いふかひなし、其男を罪しても、今は此宮をとりかへし、都にかへし奉るべきにもあらず、竹芝の男にいけらん世の限り、武藏の國を預けとらせて、公けごともな

させし、たゞ宮にその國を、あづけ奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ、此家を內裏の如く造てすませ奉りける家を、宮などうせ玉ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり、その宮の生み給へる子共は、やがて武藏といふ姓をえてなん有ける、夫より後火たきやに女はゐるなりと語る、

名稱

江戶

江戶ハ武藏國ノ一部ニシテ、其地名ハ鎌倉幕府時代ヨリ既ニ史乘ニ見エタリ、蓋シ其名ノ漸ク世ニ知ラレシハ、康正年間、太田資持ノ居城ヲ此地ニ築キシ時ニ在リトス、然レドモ當時ハ疆域未ダ廣カラズ、人衆甚ダ密ナラズ、蕭條タル一漁村ニ過キザリシガ、天正年中、德川氏封ヲ此ニ移シ、ヽヨリ疆域日ニ廣マリ、戶口月ニ加ハリ、未ダ數年ナラズシテ、一大都會ト成レリ、既ニシテ、德川氏天下ノ政權ヲ握ルニ及ビ、江戶ノ地ハ、四方輻湊ノ中心トナリテ、益、繁榮ヲ加ヘ、丘陵ハ夷ゲラレ、海灣ハ塡メラレ、萬戶忽ニシテ田野ヲ覆ヒ、千帆常ニ河海ニ滿ツルヲ看ル、故ニ夙ニ山城ノ京都ト、東西相對峙シテ、私ニ江都若シクハ東都ト號セリ、明治元年、王政復古シ、龍駕東幸スルヤ、爰ニ江戶ヲ以テ、帝都ト爲シ、詔シテ曰ク、江戶ハ東國第一ノ大鎭、四方輻湊ノ地、宜シク親臨シテ其政ヲ視ルベシト、乃チ江戶ヲ改メテ東京ト稱ス、實ニ皇國ノ首府ニシテ、今ノ東京市卽チ是ナリ、

〔倭訓栞中編三〕えど　江戶は武藏國也、鎌倉將軍の時、江戶能範あり、

〔武藏演路二〕江戶東在土、風土記ニみゆ、江ハ大河ヲ曰、江戶ハ戶口ヲ云、

江戶之號の事可成談に、江戶、水戶、坂戶、今戶、花川戶杯云地名に多し、戶口に寄ての名なるべしと云々、或云、江戶の名至て古く、東鑑に江戶太郞重繼、又重長と云、太平記に江戶遠江守とみゆ、

〔南向茶話〕或日、例のごとく二三の友參りつどひ、古今の談に、或人問て曰、抑當御地を江戶と號し

候事、何れを指して申候哉、

答曰、仰のごとく、近代當所名跡等を記し候書も數多相見へ候得共、江戸の號の事慥ならず候、愚〇酒井忠昌が管見仕候に、山中氏被相記候中古治亂記十五卷、江戸城草創之條下、其略に、扇谷上杉修理大夫定政之老臣を、太田備中守資清入道道眞と云、武州都筑郡太田鄕之地頭也、其嫡男鶴千代丸と云、成長之後、太田源六資持と號す、後に受領して任備中守、改資長剃髮して道灌と稱す、當御城を康正二年に普請、初め繩張して、長祿元年四月迄僅兩年之內、巧匠の功成就しける、都五山之都万里和尙、古詩を引て是地を美たる詩に云、窻含西嶺千秋雪、門繫東吳萬里船、又五山より被贈たる詩之內に、江戸城高不可攀、我公豪氣早東關、三州富士天邊雪、快作靑油幕下山と云々、右之詩の句にも江戸城と有之、別號なし、𛀁かれば道灌城築の時に、其地名に依つて直に名付たるべし、既に鎌倉將軍の時代より江戸といふ稱號の士あり、此は平氏類葉よりして、武藏の士と稱すれば、江と云地名其前有べし、愚案に、江に望める意成べし、抑當御城天正年中御入國以前、今の雉子橋の外より北の方大沼にて、此より西の方もちの木坂下迄入江にて有し由、小川町も寬永年中、外廓無之以前は、牛込よりの流は、どんど橋の向へ、直ぐにもちの木の方へ流れ行、又小石川の流は、今の土手三崎稻荷の邊より、一ツ橋の御堀の川江流行𛀁よしなり、然ば唯今御城內、古へより江戸と名付所なるべし、總名となり候事は、其頭近邊の根城たるによりて也、

〔武江披抄　一〕南留別志云、江戸、水戸、りうと、つくと、今戸、花川戸など地名に多し、戸口によりての名なるべし、草按、此說非なり、沙石集六下武藏の江所ト アリ、是江戸ノコトナリ、入江ノアル所ヲ江所ト云シナルベシ、靈岩島ノ古名ヲ江戸中島ト云、江戸橋ナド云名モフルキコトニテ、此邊眞ノ江戸ナルベシ、

〔江戸紀聞　一〕江戸大意

江戸の地、その名義を詳にせず、或書に云く、荏土とかけるを見れば、荏の多き地ゆへかく名付しなる也、荏原郡あるも是ゆへなりと、○中略元來江戸の地は郡にあらず、又鄉にもあらず、いにしへよりの庄の名なるべし（或書に蒲田鄉江戸といふ、正しき書にのするを未見ず、）東鑑にも江戸庄といへるは見へざれど、川越庄、澀谷庄、長井庄、六浦庄などいへるに同じかるべし、

〔御府內備考 一〕江戸總說

江戸は上古武藏野の內なりしよしは、諸記紀行の類にも載たり、後年墾闢して郡鄉を定られし後も、江戸といふ名は猶聞えざりしなり、中古は鄉名に唱へり、相州鎌倉圓覺寺所藏文書の內、建武四年（延元二年なり、關東此號を用ひずといふ、）七月十日、左馬頭某（花押及年歴を缺く、某氏の部將なり、）が寄附狀に、當寺領（中略）武藏國江戸鄉內前島と記し、永和三年十二月十一日同寺の下文に武藏國江戸鄉內前島村と記し、應永二十六年十二月十七日の寄進狀に、武藏國江戸前島內森木村と載たり、此前島森木などいふ地は、いづれの處なりしにや、後世聞えざる地名なり、今姑く前島といふに因て推考るに、恐くは今の芝邊より御城までの內なるべし、是後年村落を廢して、屋舖地寺社地及町並となりし處なれば、おのづから古名を失ひしならん、其餘豐島荏原二郡の內に、前島森木などいふ名は、小名字にも傳ふるをいまだ聞ず、元より此文書に記せし鄉といふもの、上古朝庭より定められたる鄉とは異るべけれど、現に江戸鄉內前島村と書る時は、後世（天文永祿頃の文書をいふ、）の村を某鄉と書しとは、又おのづから別なるべし、新井白石の說に、江戸を庄名ならんといひしは、是等の文書あることを知らざる管見の臆說といふべし、按に武藏國七黨系圖に、秩父太郎大夫重弘が五男を江戸太郎重繼といふ、この重繼が時はじめて江戸の地におり、江戸をもつて稱とせしなり、是より前江戸の名諸記にあらはるゝをいまだ見ず、

〔江戸紀聞 一〕江戸大意

武藏國江戸は、豐島郡荏原郡二郡にかゝれり、上古はすべて武藏野の內にて、廣漠の野なり、此野は、その境もさだかならざれど、古き文書に云、凡十郡に跨りて、西は秩父根、東は海を限り、南は向が岡郡筑(ツンカハラ)原、北は入間郡河越に至れりと或書に見ゆ、江戸はその東の方にて、中古中武藏ともいへり、○中略當國の全圖を以て考ふるに、豐島郡東は隅田川をかぎり、西は落合村柏木村の邊をさかひとし、南は麻布澀谷村にとゞまり、北は岩淵志村の邊に至れり、荏原郡は、東北三田村、白金村、世田谷村の邊にいたり、西南は品川大森をかけ、多磨川をさかひとせり、此二郡にわたるものは、則江戸の地なり、

〔日本地誌提要〕二東京 疆域　東西貳里六町三拾七間、南北貳里貳拾九町三拾八間、

〔東京市統計年表〕市區ノ廣袤

區名	方位	地名	里程	方位	地名	里程
麴町	極東	永樂町二丁目	〇里、三〇町	極南	內幸町一丁目	〇里、三三町
	極西	麴町十丁目		極北	飯田町六丁目	
神田	極東	神田八名川町	〇、二三	極南	西今川町	〇、一五
	極西	三崎町三丁目		極北	神田五軒町	
日本橋	極東	濱町三丁目	〇、一七	極南	龜島町二丁目	〇、一九
	極西	本銀町三丁目		極北	馬喰町四丁目	
京橋	極東	佃島	〇、二二	極南	濱離宮	〇、二一
	極西	八官町		極北	北槇町	
芝	極東	汐留町一丁目	一、〇三	極南	高輪南町	一、〇七
	極西	白金臺町二丁目		極北	今入町	
麻布	極東	飯倉五丁目	〇、一九	極南	麻布田島町	一、二一
	極西	麻布笄町		極北	麻布谷町	

區	極東	極西		極南	極北	
赤坂	溜池葵町	青山北町六丁目	〇、二九	青山南町二丁目	元赤坂町	〇、二四
四谷	四谷仲町一丁目	四谷霞ヶ岡町	〇、一四	四谷霞ヶ岡町	四谷麴町一丁目	〇、一二
牛込	牛込下宮比町	下戸塚町	〇、二八	市ヶ谷本村町	牛込水道町	〇、二五
小石川	小石川指ヶ谷町	高田豐川町	〇、二七	小石川町	小石川宮下町	〇、二五
本郷	湯島天神下同朋町	駒込上富士前町	〇、二〇	本郷東竹町	駒込上富士前町	〇、二三
下谷	下谷龍泉寺町	下谷茅町一丁目	〇、二九	練塀町	下谷三ノ輪町	〇、二八
淺草	淺草橋場町	淺草神吉町	〇、二五	淺草上平右衞門町	淺草町	〇、三五
本所	本所松代町三丁目	本所元町	〇、二卌	本所菊川町二丁目	向島須崎町	一、〇一
深川	深川海邊町	深川能井町	〇、二六	深川越中島町	深川御船藏前町	〇、二七
全市	本所松代町三丁目	赤坂區青山北町六丁目	二、二六	芝區高輪南町	本郷區駒込富士町	三、一一

〔武藏演路二〕南向亭追考ニ、古老云、平河一水を隔て、今の二之丸の方は江戸の郷、日輪寺の方は神田の郷也と云、以是考れば、今の西丸邊の所わづかの地を、江戸の郷と云しと思はるゝ也、又往古いまだ町々ならざる頃は、江戸宿と云しよし、古キものにみゆ、又古へ江戸の邊を中武藏と云しよし、是も古書に出す、又寛文江戸古圖に、武州江戸庄とあり、

又延寶古圖に、日本橋邊より白銀町を限りて、此所に、此土手より北は神田、南は江戸とあり

今江戸と云地は、大城を以て中央とし、大凡行程四里四方にして、其真中を府内と稱す、

江府内外を分ッ傍示杭、江戸橋々巳上二十九ヶ處ニ有之、元祿十一寅年ニ被建、右府外町並と

いへども、御年貢御代官御支配、其外万事町御奉行所御支配也、

〔江戸名所圖會〕一江戸　豐島郡峽田領とす、其封境往古は廣くあらざるに似たり、○略註　武藏國風土記に、荏土に作る、傳云、此地は大江に臨故に江戸と稱せりといふ、甲陽軍鑑に、江戸の邊りを中武藏と唱ふるとあり、義經記に云く、江戸太郎重長は八箇國の大福長者とあり、しかる時は、江戸の地は其頃なべて重長領せしなるべし、南向亭いふ、平川一圓水を隔て、今の三の丸の地は江戸の郷、日輪寺の方は神田郷なりと、こゝに平川と云は、今の飯田町の下より、つゞく入堀の水脈是なりと、又同じ説に、今の御城の邊り、いにしへ江戸となへし地なるべし、攝州大坂御城内の塵水坂、舊名を大坂と號く、徒世御城の號に呼れしより、後地の總名となる、江戸の名も此頃なるべしと云云、寛永二十年開板のあづまめぐりといふ册子に、行へいかにとる白露の葉末にむすぶ淺草など打籠ゆけばほどもなくむさしの江戸につきにけりとあるも、上の意にひとし、よつていにしへの封城、今の如くに廣大ならざるをしるべし、天正巳降、江戸を以て御居城の地となし給ふ故に日を重ね月を追ひ、益繁昌におよび、今は經緯拾里におよむで、都て江戸と稱せり、萬國列侯の藩邸、市鄽商賈の家屋鱗差して、縦横四衢に充滿し万戸千門甍を連ねたり、實に海陸の大都會にして、扶桑第一の名境といひつべし、

〔南向茶話〕相州箱根金湯山早雲寺什物

一北條家分限帳之内に江戸廻りと稱する分

南　上平川　下平川　櫻田　國府方　阿左布　比々谷　大根原　目黒本村　下澁谷　三田

新倉　銀　三田之郷　品川南北　馬込　世田ヶ谷　川崎　局澤　六郷　大師河原　大井

前野　泉邑

西　牛込大胡領　小日向領主興津加賀守　落合　中新居　千駄ヶ谷　小石川　雜司ヶ谷　富塚

原宿　市ヶ谷　石原　板橋　大谷郷板橋之内　志村　練馬　高田　葛谷　横山　土志田　比留方

山中分（戸塚之内）　金谷

北　下谷　湯島　本郷　駒込　芝崎　鳥越村　廣澤内　代山　根岸　赤塚　神田　新堀間

中　栗　新堀　簑輪寺屋平塚之内　西原　田端在家　三河島　石濱　豐島瀧ノ川　十條

江古田　尾久　上野　金杉　千束　石神井内　谷原在家　無戸分　阿佐谷　池袋　梶原

堀之内

〔再訂江戸總鹿子新增大全六下〕江都内外を分ッ傍示元祿十一寅年建、長サ一丈、七寸角、



下谷御徒歩町　同廣德寺前　駒込竹町　淺草　新堀　同追分　谷中淸水谷　目赤不動　小日向水道町　市ヶ谷柳町　牛込榎町　市ヶ谷片町　同加賀屋敷　四谷大番町　紀伊國坂　靑山御そうじ町　芝切通し　麻布龍色　澁谷弁橋　二本榎猿町　牛町喰違　深川髙橋　深川萬年橋　本所辻の橋　同横ほり　本所業平橋　同所扇橋　小梅源森橋　小石川蓮花寺前

已上

此御定杭、一書には江都の内外を分ッ傍示としるす、又一書には、小荷駄馬口附不乗町口所々傍示杭と有て、都合十二ヶ所とあり、甚疎し、米山翁が書甚委し、今彼書に從ふ、實も小荷駄の口附乗打を禁制あれば、内外をわかつ傍示といふとも論なき事か、

〔德川禁令考四十七府内外區域〕天明八申年十二月

御府内御府外之境心得之儀ニ付、評定所一座評議之事、

御府内御府外境之儀、御定書并科條類典、其外前々被仰出候御書留にも、何方を限り内外之境と申儀は無御座、江戸拂御構場所を限り可申哉、亦は倒死、病人、水死、其外變死、迷子等有之候節、芝口

町河岸江建札いたし候場所を限可申儀にも可有之哉、依之評議仕候處、

御定書

一江戸拂 品川板橋 千住本所深川 四ツ谷大木戸 より内

右之通有之、科條類典元例をも相糺候處、寛延元辰年二月、江戸拂御仕置之儀、本所深川町奉行支配限、構之地ニ可申付旨、御定書ニ書入可申段被仰出候御書付之趣を以、相極り候旨有之候、倒死人、水死、其外變死、迷子等有之候節者、所より訴出次第、年頃幷衣類等之品認、芝口町河岸建札可致旨之御定ヶ條ニ、

一南ハ品川より長峯六間茶屋町限

一西ハ代々木村上落合村板橋限

一北ハ下板橋村王子川尾久川限

一東ハ木下川村川通中川通八郎右衛門新田村限

右兩樣之御定を見合、建札之ヶ所、大概江戸拂御構場所ニ相當り候得共、建札之ヶ所を限り候内にハ、町奉行支配外、御料私領寺社領之村方も少々ハ入交有之、御定書目安裏書初判之ヶ條ニ、

一寺社云云

一江戸町中云云

一關八州云云

右ニ見合候而ハ、御府内ハ町奉行支配場と相見候處、前書之通、芝口建札之ヶ所を限候内ニハ、御料私領寺社領之村方も籠り有之候ニ付、右を御府内とハ難決、然上者江戸拂御構場所者、町奉行支配場限之元例も御座候間、右御構場所同樣、品川、板橋、千住、本所、深川、四谷大木戸より内を御府内と相心得可申候哉、奉伺候、

右之通相伺可申哉と、評議有之候處、不及伺評議ニ而極ル、

申　十二月

（德川禁令考四十七府內外區域）文化元子年十一月

江戸拾里四方之事

石川左近將監

隠鐵炮致所持候もの、江戸拾里四方と、右之外とは御仕置差別有之儀ニ候處、江戸拾里四方は、日本橋より四方江五里宛之儀ニ候哉、又者何方迄と申取極等有之候哉、此段及御問合候、

子十一月

御書面、江戸拾里四方鐵炮改之儀、享保十四酉年三月廿六日、水野和泉守殿御書付を以、御拳場井江戸拾里四方と有之ハ、日本橋より東西南北江五里宛と可相心得旨、被仰渡有之候、以上、

子十二月朔日　久田縫殿頭

文政元寅年

御府內と唱候場所之事

御府內と唱候場所心得方之儀、取調候趣申上候書付、

榊原主計頭

土屋紀伊守

去月十四日御渡被成候牧助右衛門伺書一覧仕候處、御府內と唱候ハ、何れより何方迄と心得可申哉之旨問合候向も有之候得共、御目付方掟と書留等無之候ニ付、取調候處、寛政三亥年、松平越中守殿、中川飛騨守御目付勤役中、大目付桑原伊豫守連名ニ相伺候ハ、遠方神社寺院等江参詣、井下屋敷ニ罷在候一類共方江罷越候儀、心得區々ニ而、他役より承合候節、挨拶一同不仕候儀も可有御座、明和二酉年、御書付之趣ニ寄候而も、江戸內外之所、何方迄と申儀引當可申御定も不相見候ニ付、以來之儀、凡御曲輪內より四里內外之所、江戸內之心得ニ而不及御届、罷越候之様可仕候

哉之趣相伺候處、右里數之内ニ而も、御關所有之場所、船渡等有之所ハ御屆申上、其外伺之通、被仰渡候書留相見候得共、御府内之境目、何方迄と申儀書留無之候ニ付、問合候向江及挨拶候兼、猶大目付江も相談仕候處、去々子年、越後國頸城郡高田金剛院、御府内限勸化被仰付候節、寺社奉行より申渡候趣ハ、

東　砂村　亀戸　木下川　須田村　限り

西　代々木村　角筈村　戸塚村　上落合村　限り

南　上大崎村より　南品川宿迄

北　千住　尾久村　瀧野川村　板橋　川限り

右之通ニ付、御曲輪内より四里迄之所を御府内と相心得、御曲輪内よりと申上候ハ、東之方ハ常盤橋御門より、西之方ハ半藏御門より、南之方ハ外櫻田御門より、北之方ハ神田橋御門より、右村村迄を御府内と相心得、問合候向江挨拶可仕哉之段相伺申候、

御書取

別紙繪圖面朱引内を御府内と相心得候趣、御目付江相達候、御仕置筋之儀ハ、御定書之通可被相心得候事、

〔德川禁令考六十戸籍〕天保十四卯年三月

諸國人別改改正

此度被仰出候御府内人別改之儀ニ付、品々伺幷御下知、〇中略

一場末ニ而ハ、在方御一方御支配場と、御町方御支配場と、地面毎ニ入組候場も有之、此分免許狀ニ而ハ差支候哉も難計候間、右入込之在方町屋、幷四宿之分ハ、市中同様、名主共書迄ニ而引越等取計可申哉、尤此儀歸鄕勸農之厚御趣意ニ付、御町方御支配場境ニ而、嚴重ニ御仕法相立不申候而ハ不相成儀ニ御座候心得ニ候得共、下々差支勝ニ付奉伺候、

但申上候ハ奉恐入候得共、右四宿、其外入組場所者勿論、都而御府內と御定之在町之分ハ、市中同樣之取計ニ相成候ハヽ、追年下女下男、其外市中荒働致候出稼之者、差支申間敷、下々弁利之樣奉存候間、可相成御儀ニ御座候ハヽ、御府內在町ハ、市中と一束ねニ、町役人送書ニ而通路仕候方、弁利之樣奉存候、此儀御聞濟ニ相成候共、御府內在町と限候儀ニ付猥ニ相成候筋無御座樣奉存候、

本文境

東　砂村　亀戸村　木下川村　隅田村迄

西　代々木村　角筈村　戸塚村　上落合村迄

南　上大崎村　南品川御支配場限、上落合村迄

北　千住筋　尾久村　瀧野川　板橋宿迄

四宿井在町支配入組候場所之出生之者ハ、伺之通取計、縱令右場所ニ店持居候共、他村出稼之者ハ、免許狀取店貸可申候、

地勢

〔江戸方角安見圖鑑乾〕按に云ク、當地繁昌有由哉、土地方角扶桑無比、地理尤勝たり、先ッ金城東面にして朝日を請け、南方を開ひて陽氣を入レ、西北高ふして陰を塞ス、蒼海の入江在て、万國の運送自由也、要害を以テ譬之、東ハ海岸にして、諸侯列臣館を並べ、西は武藏野平々として、千有餘里の曠野たり、南に多波川の落るあり、北に十根入間の大河流る、又云、東海道には箱根山峻、馬入に相模川あり、中山道に臼井峠嵩て、戸田の渡り角田川に流出る、如此の地理、自然と備て、更に不備所也、

〔日本地誌提要(二東京)〕形勢　武藏國豐島、荏原、葛飾三郡ニ跨ル、東南裏海ヲ抱キ、西北沃野ニ連リ、墨田川其東ヲ繞ル、市街廣壯、車馬絡繹、漕運共ニ便ニシテ、百貨此ニ雲集ス、元江戸ト號ス、明治元年戊辰(紀元二千五百二十八年)陞テ東京トナシ、乘輿東臨ス、

〔東京市統計年表〕市ノ面積及土地ノ高低

區名	面積	土地ノ高低			
		最高		最低	
		海面ヨリノ高度	地名	海面ヨリノ高度	地名
麹町	方里分厘 〇、五二	尺 一一一	麹町十丁目	尺 一一	飯田町二丁目(堀留)
神田	〇、二〇	七七	駿河臺袋町	一二	佐久間町三丁目
日本橋	〇、一九	二二	本石町一、二丁目、	九	濱町二丁目
京橋	〇、二二	一九	尾張町、南傳馬町、	九	靈巖島町
芝	〇、四九	九三	三田巧運町	一〇	汐留町
麻布	〇、二五	一一一	材木町	一九	芝森本町
赤坂	〇、二六	一二〇	靑山北町二丁目	二七	溜池葵町
四谷	〇、一二	一二〇	鹽町一丁目	五五	本村町鮫ヶ橋
牛込	〇、三三	一二九	若松町	一五	新小川町(江戸川側通)
小石川	〇、四〇	九〇	巣鴨宮下町	一六	小石川町(砲兵工廠前通)
本郷	〇、三〇	八四	本郷六丁目(東京帝國大學前)	一八	湯島三組町

下谷	〇、三〇	六七	上野公園	八	山伏町
淺草	〇、三一	二二	諏訪町	七	光月町
本所	〇、三八	一三	元町(兩國橋詰)	五	柳島梅森町
深川	〇、四四	一一	相川町	四	千田町
全市	四、七〇	一二九	牛込區若松町	四	深川區千田町

(紫のゆかり)こゝなるむさしの國は、四方に山なく、いとたひらかに、うちひらきて、たてとよことひとしく、あゆみ行みちの程をもてはからば、二日三日を越べし、そのさかひは、安房、かみつふさ、しもつふさ、かひの國によれり、いにしへより國のさかひひろごりて、こほりもかずまさり、今ははたちあまりふたつとぞなれりける、くだ〳〵しければ其名はもらしつ、こゝの大城、うちのへとのへ、おほきなるいふべくもあらず、○中略ふたへの御くるわのとよりは、市の家ゐ軒をならべ、いづれも〳〵おとるまじうたてつゞけたり、おほぢはたてざま、よこざま、いとをひきはへたるがごとく、小路は星のまつへるにひとし、西北は高く、東南はひきし、高きにのぼりて、はるかにみれば、家ゐはたゞ山のかさなりたるやうにて、また波のうごきたつけしきにもにたり、南は品川の入江近く、入つどふ舟どもに、眞帆片ほ風にまかせて、鷗かもめなどのとぶかとみゆ、うまやぢの家々、かたはらは山にそひ、かたはらは入江にのぞみて、たかどのめくつくりざま也、内にはかけはしわたして深くみやらるゝに、簾打はらひ、すゞしげにて、かりのやどりにも心こむべきをうなうちむれて、なまめきあひたり、にしの國いとおほければ、行かふ旅人もことにおびたゞし

くゝいとにぎはしき所也、

〔江戸紀聞 一〕江戸大意

按に、武藏七黨系圖に、秩父太郎大夫重弘が五男江戸太郎重繼と云、この重繼が時、はじめて、江戸の名諸記にあらはるゝをいまだ見ず、重繼が子を江戸太郎重長と云、砂石集に云、〇全文在この前故略壹岐前司と云は、則葛西壹岐守清重がことなるべし、清重は豐島權守清光が二男也、江戸は則太郎重繼がことなるべし、江戸系圖によるに、豐島江戸は、秩父六郎將恒が子より別れて、同じ流の家なれば、かくしたしき者とはいへるなり、東鑑に云、治承四年九月二十八日丁丑、遣御使被召江戸太郎重長、依景親之催、按に、景親は大庭三郎なり、遂石橋合戰、雖有其謂、守令旨可率相從、重能有重折節在京、於武藏國當時汝已爲棟梁、專被恃思食之上者、催其便宜勇士等可豫參之由云々、又云、十月五日甲申、武藏國諸雜事等、仰在廳官人幷諸郡司等、可令致沙汰之間、所被付江戸太郎重長也云々、是らによれば、重繼重長江戸の地を一圓に沙汰せしこと見るべしその後上杉家武藏國を領せしかば、かの家人等が所領江戸の地にあまたありしと見ゆ、長祿文明のころは、太田入道道灌江戸の城にありて、この所を指揮せり、道灌卒してのち、北條氏當國の半を領せし時、江戸の地は又かの家人等が領知となれり、されどむかしより江戸と稱する所何の地までをさして云しや詳なるをしらず北條家の分限帳を見るに、荏原郡六郷大森の邊、多磨郡泉村のあたり、豐島郡練馬村、赤塚村、志村、岩淵村、十條村、尾久村、石濱村、石原村、牛島をかけて、皆江戸のうちとせりし、永祿のころかくいへば、ふるき世もおほやうおしてしるべし、御當代となりては、相傳ふ日本橋より四里四方をさして江戸とすと、その定められし年歷をつまびらかにせず、

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月三日壬子、被遣御書於小山四郎朝政、下河邊庄司行平、豐島權守清元、葛西三郎清重等、是各相語有志之輩、可參向之由也、就中清重於源家抽貞節者也、而其居所在江戸河越

等中、間進退難治定歟、早經海路可參會之旨、有懇勤之仰云云、

〔沙石集六下〕芳心有人事

故葛西壹岐前司トイヒシハ、秩父ノスヱニテ、弓箭ノ道エタリシ人也、輪田ノ左衛門世ヲミダリシ時、葛西ノ兵衛トイヒテ、アラ手ニテ鬼コヽメノヤウナリシ輪田ガ一門ヲカケチラシタリシ武士也、心モタケク、ナサケモ有ケル人也、故鎌倉ノ右大將家ノ御時、武藏ノ江戸子細アリテ、彼江戸ヲメシテ葛西ニタビケルヲ、葛西ノ兵衛申ケルハ、御恩ヲ蒙リ候ハ、親キ者共ヲモカヘリミムタメナリ、身一ツハトテモカクモ候ヌベシ、江所ハシタシク候、辭事候ハヾ、メシテ他人ニコソタビ候ハメト申ニ、イカデ給ラザルベキ、モシ給ハラズバ、汝ガ所領モ召取ルベシト、シカリ給ケレドモ、御勘當蒙ルホドノコトハ、運ノキハマリニテコソ候ハメ、力ラヲヨバズ、サレバトテ給ハルマジキ所領ヲバ、爭カ給ベキト申シケレバ、江所モエトリ給ハズ、

〔相州文書圓覺寺〕當寺領〇中略武藏國江戸郷内前島〇中略地頭職事、任去々年十一月八日官符、并關東安堵等、可令知行給之狀如件、

建武四年七月十日　左馬頭花押〇足利直義

謹上　圓覺寺長老

〔春波樓筆記〕永祿年間の江戸の圖を見るに、南は金洲崎、白銀臺、西は麻布、飯倉、今井村、今の江戸見坂邊を云ふ、櫻田村、今の霞が關なり、北は神田川、湯島、忍ヶ岡、今の上野なり、不忍池より下谷の方へ流る川あり、また荒川は、今の千住川、淺草觀音は島の如し又芝通、日本橋邊の町々、小川町、下谷、本所、深川、皆淺海にして、池の如し、淺草海苔の名明らかなり、海の漸々阜となる事は、爰を以て知るべし、今より十億萬年を經る時は、此日本、亞墨利加の地と接し續くなるべし、

〔望海毎談〕一武藏の國にて、今の上野を忍の岡と云、湯島天神の臺を向ふの岡と云、谷中の方を入

砂の岡と云、昔は芝浦の海の潮、此所迄入來る入江の續にて、斯三ツの岡の相續を以て谷中の岡に三崎と云地名有、其中間に有る池の大さ十二萬坪有と云傳ふ、此池東は忍の岡の岸、西南の方は向ふの岡の岸、北東は入砂の岡の岸迄にて、其頭は今の池の岸べりの民家通りの道もなしとなり、此池を不忍の池ト名付け、東の岡を忍の岡と名付けしことは、其むかし忍岡の東、今の清水村に關野喜内光耀といふものあり、其地に清水出る故に、關野氏が住居せし所なれば近江の名を引寄て、關の清水と人呼たり、今は根岸の方にて、本阿彌某が隱居したる所に跡有と言傳ふ、忍の岡入砂の岡に對して、池の西の方を向ふの岡と呼ぶ、

〔慶長見聞集 六〕江戸町の水道の事

見しは昔、江戸町の跡は今大名町になり、今の江戸町は、十二年以前までは、大海原なりしを、當君〇德川家康の御威勢にて、南海をうめ陸地となし、町を立給ふ、然に町ゆたかにさかふるといへども、井の水へ鹽さし入、萬民是をなげくと聞召、民をあはれみ給ひ、神田明神山岸の水を北東の町へながし、山王山本の流を西南の町へながし、此二水を江戸町へあまねくあたへ給ふ、

〔慶長見聞集 七〕南海をうめ江戸町立給ふ事

見しは昔、當君武州豐島の郡江戸へ御打入よりこのかた町繁昌すゑかれ共、地形廣からず、是に依てとしまの洲崎に町をたてんと仰有て、慶長八卯の年、日本六十餘州の人步をよせ、神田山をひきくづし、南方の海を四方三十餘町うめさせ、陸地となし、其上に在家を立給ふ、〇中略此町の外家居つゞき廣大なる事、南は品川、西はたやすの原、北は神田の原、東は淺草まで町つゞきたり、

〔落穗集追加 二〕江戸町方普請の事

一問曰、關東御入國後、町方の普請之義、何れの所より始て被仰付るゝや、答曰、右長崎小木曾抔常に申は、只今の日本橋筋より、三河町川岸通りの竪堀の堀るゝが初めにて、夫より段々と竪堀

横堀共に出來、其上ゲ土をば堀ばたに山の如く積上けるを、諸國より參る人ごとに願ひ出し、町屋を割被下候に付、勝手次第に右の上ゲ土を引取り、地形を築立、屋敷取りをいたし、表通りには先葭垣などをいたし置、追て家作を仕り引移と有之、初ての程は町家願の者も多無之所に、勢州の者共あまた來り、屋敷望仕る由沙汰有之、其町屋敷出來候以後、表に掛たるのうれんを見候得ば、一町の内に半分は伊勢屋と申書付見へしと也、但の〇但の有誤脫方などは地形卑く、御城内へもへだゝり候を以、繁昌いたし兼しと有之義、御上へも相違し、遊女町を御免遊ばし、葭原の場所を拜領仰付るゝ故、四方に堀を堀て地形をつき立、家作を調へ、遊女共あまた集め置を以、晝の間は諸人參り候得共、其道筋左右共に葭原の中にてぶつそうに有之候に付、暮るれば人通り無之故、渡世致難き旨願上ければ、女歌舞妓を御免被遊被下候樣にとの願之通御免に付、町中に舞臺を建、棧鋪を掛け、芝居を初め候に付、其比京大坂にも無之見物事と申て、貴賤共に入込、殊之外繁昌いたし、細道の左右にある茨原も切り拂、江戸中より出店をいたし、茶屋抔も多立並しと也、〇中略

鳶澤町の事

一問曰、御入國の砌は町方盜賊共多入込、殊之外難儀いたす處に御仕置を以、件の盜賊共追散申候と有之は實や、答曰、其義を我等〇大導寺友山若年の頃承り及は、其元御申の通り、盜賊共諸方より入集り、以の外ぶつそうに有之由、權現樣聞召され、何卒致し盜賊の張本たる者一人召捕へさせる樣にと、奉行中へ被仰付候所、其頃關東に名を得たるすり大將、鳶澤と申者を搦取、牢舍を被申付候と有るを申上れば、其盜賊を召出し御仕置きなるべく所、一命を御助け被成候間、其働を以、他方の盜賊を御當地へ入り込申間敷由にと、被申付候樣にと被仰出に付、奉行中より右之通り御申渡し候得ば、鳶澤承り、命を御助け被遊るゝ段、ありがたく奉存候得共他方より

入込のあまたの盜賊共を、私一人の力にて防ぎ候と有之義はなり難く候へば、何方に於てなりとも、屋鋪地を被下置候はゞ、私手下の者共を呼集め差置、其者共の盜を相止、吟味爲致度奉存候、右手下の者盜を相止候ては、渡世の仕方無之候間、御當地にて武家町屋を不限、外の者共の古手を買候義御停止に被仰付、私義を古手買の元締役に被仰付被下候樣にと申に付願之通とて、遊女町の近所に於て、一ケ所四方の茨原を屋鋪に被下候に付、夫より切りひらき、鳶澤町と名付、町屋に取立、○中略盜賊の沙汰も無之に付、古著買之義も相止、鳶澤町の義も、今程は富澤町と文字をかへ、葭原町の義も何れの頃より吉原町と文字相改申候也と也、

〔白石紳書 六〕一丙申の冬、雀部六太夫入道重羽のものがたりに、我父など駿河より此所へ引移りし比に、今の駿河臺の邊ひらけたり、此事金地院日記にも見ゆ駿河衆の屋敷被下候故に、駿河臺といふ也、其比には江戸川といひて、今ニ龍慶橋の筋の川南へ流れて、平川に落合たり、今水戸殿の前の土堤の少しひきく見ゆる所、即其川筋也、それを埋みしかど、後に又落入たれば、又築しかど地落入て少しひきゝ也、さてその流の平川に落入らむとする筋は、唯今の内藤駿河などの屋敷也、それ故に内藤やしきに今も池ありといふ、これ其時の川筋の水の殘り也、此所に鶴の下りしを聞召し、台德院殿○德川秀忠御あわせあるべしとて、御出の時に、御番衆の二三人見んとて、御番所より私に御尋につきて來りしを、土井大炊頭の見付て、皆は當番にてはなきかと問ふ、いかにもと答へしかば、御番所を仰もなくてうちあけて參りては、必ず御志かりに逢ふべし、我あとより參れ、よきにすべきといふほどに、志りにつきて來るに、鶴とらせられて御氣色よかりし時に、わかきものども、御鷹の鶴とり候事をつゐに見ぬとて、御あとにつきて參りて候と申されしかば、御覽じて誠に彼等はいまだ見し事はあらじと、御わらひなされたりといふ、今の猿樂町といふには、觀世太夫が屋敷ありて、座のもの少々居たりき、さてかの駿河衆引うつるに至て、今のごとくに水戸

殿の前の堀を淺草へほりつゞけて、其土を以て土堤をつかれて、內外の隔出來て、こなたを駿河台と名付たり、其後に又陸奧守へ被仰付て、いよ〱其堀を深くせられし也、觀世やしきも他所へ引うつされて、その跡にやしきわり渡して、猿樂町の名殘れりといふ、某問ふ、さては今の牛込御門の前の堀も、其時に出來しやと問ふに、牛込前の堀の事、いまだしらず、龍慶橋筋の水を江戶川といひしは、平川へ落合ふをふさぎて、淺草川へ落す事は、前にいふがごとく承りたりといふ也、

按するに、ふるき人のいひしは、(良野治右衛門のいひし也)芝口の町も京橋邊迄にて、それよりこなたは後に出來し也、これによりて京橋邊の町の名に、今も大坂町住吉町などいふあり、これはその所に傾城町有し也、中頃に今の境町へそれをうつされ、丁酉(明曆三年)火事後、又今の新吉原へうつされたり、されば京橋邊よりして、日比谷門の邊迄は、海入込たり、これによりて今の芝口の邊、井上玄徹やしき前むかしの肴市場故に、今も市たつなり、又今の日比谷門のあたりも、町屋なるを、後に武士やしきになされし故に、町は引移されて、日比谷といふ町有、今の門よりは大きに程へだゝりたり、今の日比谷のあたりを、陸奧守の地を築たてしといふは、その海邊を築たてし也といふ、又伊賀衆より出し書付を見るに、寛永の初迄は、赤坂の邊糀町邊は、伊賀衆の知行所の田地なるを他所へ引うつされ、ため池をほられて、其土をば今の安藝守の屋敷などの臺となり、それより堀をほり廻されしといふ也、さらば牛込などをつゞけられしも、其時に出來しなるべし、淺草橋御門は、越前の宰相殿の御承りなりきと、越前衆のいふ也、これは今の松平中務の屋敷は、もと上總介殿の御やしきを、後に越前の下やしきに被下候故、屋敷近くの故なるべし又重羽いふ、今の靈巖島は、母方の祖母の旦那の靈岩寺の雄譽の望給ふて、島をつきだせしといふ、按するに、此靈岩島は、右に云るす京橋よりこなたの地をつかれて後には、町堀

の地を築出し、その後の事にや、又それよりさきの事にや、詳ならず、又按ずるに、桃町は江戸御打入りの時にひらかれしとて、山王祭にも第一＝十二町の笠鉾をわたす也、又赤坂にも傳馬町有、是をおもふに、最初江戸の町は、上方よりしては、京橋の邊よりあなたにて、赤坂へかゝりて城下へ入りしが、御入國後に、桃町ひらかれしなるべし、其時にて、京橋筋よりは、今の西北下を往來の道とし、大手の前より本町へ通りしなるべし、奥のかたへの町の終りは、今の神田の旅籠町これ也と、これも長野のいひし也、今の常盤橋を大橋と名付しといへば、これはむかしよりありし也、平川より海へ落入る水かけし橋と見へし、其後に京橋より本町筋迄の町出來るに至て、川筋をほりひらけて、日本ばし、江戸橋といふも出來しなるべし、これらは慶長五年、關東事終りし後の事なるべし、それより前の事は、右のごとくと見へたり、大猷院樣〇德川家光御代迄、西丸御普請といひしは、今の西丸の大手の廓と、又は西丸下の外櫻田門より和田倉迄の廓など築れし事なるべし、

重羽又云、其後小日向の邊ひらかれし時は、我等が父の奉行を承りたり、此邊に町家なくしてはいかゞと申上ければ、町をもわり渡し候へとの事也、其時は奉行の心々なれば、今の室新助の父の醫師なるに、屋敷一つ割あたへし事などあり、むかしは如斯なりしといふ、

〔江戸紀聞 二〕江戸總説

江戸の大都會なる、古へ京坂の盛んなりしといへども、比すべくもあらじ、それもわづかに二百年來の事にして、天正十八年の前は、北條家の家人等が居宅ありしのみにて、餘は多く田野の地なりしと見ゆ、神祖江戸の城にうつり給ひしより、三河遠江等の御家人等つどひ集りしかば、城下にして、こと〴〵く邸宅の地を給へる、もとより當國の住人もありしなるべし、其後元和二年、駿河の御家人ら此地にうつるべし、さもあらんには、居宅の地せまかるべしとて、江戸川を今の小石

（川御門のうちに有しなり）東北の方へ堀まはし、その中を廣くし、屋舖の割を命せらるべきよし、初は吉祥寺の後より本鄕の臺をほり通すべきむね評議ありしが、後におもむきかはりて、吉祥寺の前を堀わり、田安御門の北東の方に引ならし、神田神社、其外萬隨寺等を外へうつせり、明神は神田のだい、萬隨寺は下谷と定られ、本明寺其外は小石川などへうつし、かの御堀の土をもて築き立、屋敷がまへなりしと云、この頃御曲輪內の大名旗本の屋舖は、ほゞ定りしなるべし、又商家などもいにしへよりありて、ことに今の日本橋のあたりは、諸國のあき人等つどふ所にて賑ひしと見へたり、蕭菴の靜勝軒の詩の序ニ云、城之東畔有河、其流曲折而南入海、商旅大小之風帆、漁獵來去之夜篝、隱見出沒於竹樹烟雲之際、到高橋下繫纜閣櫓、鱗集蟻合日々成市、則房之米、常之茶、信之銅、越之竹箭、相之旗旄騎卒、泉之珠犀異香、至鹽魚漆枲巵筋膠藥餌之衆、無不彙聚區別者、人所頻也と、又萬里和尙の詩の序ニ云、宜哉、公以靜勝稱軒矣、倉廩紅陳之富、栽栗而雜皂莢、市廓交易之樂、（城門前設市場）擁新而換柳絮、僉曰一都會也、これ長祿文明の頃にして、太田道灌江戶の城にありし時なり、此頃商家もありしとみゆれど、今とはさまことなりしなるべし、或書に云、江戶町屋のはじまりは、今の日本橋より道三河岸の竪堀をほられしを初にて、それより次第に竪堀橫堀などいでき、其揚たる土を堀の端に山のごとく積あげてありしを、諸國より集りし町人こひ奉りしかば、町家にわりて給はりしにより、おのがまゝに揚土を引とり、地面を築き、かまひを定め、表の方へは、松葭などもて垣とし、其後次第に家居をたてゝ、引うつりしが、初の內は町家を願ひしものも少なかりしに、伊勢國よりあまた來りてこひしかば、ほどなく町屋多く出來て、一町のうちなかばゝ伊勢屋をもて稱とせしと、按に、かく町屋の建し年歷を詳にせず、されども慶長十四年正月四日、江戶本町五町ほど、又石川玄蕃頭屋舖も燒失せしと慶長記にのす、是によれば、本町などは初載る所より前に立しと見ゆ、或書ニ、日本橋より道三河岸の堀をほりしと云、慶長十六年より後の事

なるべし、慶長記に云、十六年十二月七日、安藤對馬守に命せられ、來年江戸船入をほらしめ、運送の船つきの通路の自在なるべきやうに、中國九州の諸大名におほせて、人夫を出さしむべきよし仰あり、明る十七年二月十五日、今日安藤對馬守御使として駿府に至り、江戸御普請船入の繪圖を奉り、仰をうかゞふと云々、同き年六月二日、江戸新開の地町割の事なるべしと、後藤庄三郎光次に命せられ、京師堺津の商人を呼下し、屋舖を給ひしと云、是より後諸國の商人どもあつまりて、比屋町屋となりしなるべし、されどいく程なく、同き十九年二月二十一日、江戸町中大火ありしよし同記にのすれば、この時多くは烏有となりしと見ゆ、寛永五年、御城外北輪の石壁を築くべきよし命ぜられ、明年の春より諸大名その事をつとむ、寛永十三年、江戸御城外の總石垣、見付升形、その外總堀の普請を諸大名に命ぜらるゝと云、是は五年のことゝは、おのづから別なりや、詳にせず、この時外曲輪の御門に全くなりしなり、すべて外曲輪內を府內とし、外を府外といへり、又この頃江戸辻々にて、ゆきゝのものを故なく害することあり、此年の春より、江戸中辻々に番所といへるものを建て守らしめしかば、後みだりに人を害するものなしと、同十二年、又命せられて、江戸中大名旗下の小路ごとに辻番をおかれ、其外町中端々には、巷門を建しめしらる、爰にして御家人の居宅、商家の家居などもほゞ定りしとみゆ、其後明曆の變にかゝりて、江戸の地三分の二は一變せしとみゆ、〇下略

〔太政官日誌四十六〕詔書寫

朕今萬機を親裁し、億兆を綏撫す、江戸は東國第一の大鎭、四方輻湊の地、宜しく親臨して其政を視るべし、因て自今江戸を稱して東京とせん、是朕が、海內一家東西同視する所以なり、衆庶此意を體せよ、

辰〇明治元年七月

慶長年間、幕府を江戸に開きしより、府下日々繁榮に趣き候は、全く天下の勢斯に歸し貨財隨

て聚り候事に候、然るに今度幕府を被廢候に付ては、府下億万の人口、頓に活計に苦しみ候者も可有之候哉と、不便に被思召候處、近來世界各國通信の時態に相成候而は、專ら全國の力を平均し、皇國御保護の御目途不被為立候而は不相叶御事ニ付、屢東西御巡幸、万民の疾苦をも被為聞度深き叡慮を以、御詔文之旨被仰出候、孰れも御趣意を表戴し、徒に奢靡の風習に慣れ、再び前日の繁榮に立戻候を希望して、一家一身の覺悟不致候而者、遂に活計をも失ひ候事ニ付、而後銘々相當之職業を營み、諸品精巧、物產盛ニ成行、自然永久之繁榮を不失樣、格段の心懸可為肝要事、

道路

〔江戶鹿子五〕日本橋より諸方道積

品川へ二里　高井戶へ三里　板橋へ二里　千壽へ二里　葛西へ二里半　鐵砲津へ二十丁　小松川へ一里八丁　角田川へ一里十二丁　箕輪橋へ一里　駒込富士へ一里六丁　本鄉追分へ三十丁　僧司谷へ一里十丁　四谷追分へ一里　目黑不動へ二里　京へ百十九里半十六丁　大坂へ百三十二里半十五丁　長崎三百四十八里半十五丁　日光へ三十一里十八丁　江島へ相州十三里　鎌倉雪下へ十二里　箱根湯本へ二十二里　あたみへ二十六里

〔江戶方角安見圖鑑乾〕大道之法

南口 一東海道品川ノ驛より　日本橋へ　二里
西口 一甲州口高井戶ノ驛より　同所へ　三里
乾口 一中山道板橋ノ驛より　同所へ　貳里
北口 一奥州道千(センジュ)秋ノ驛より　同所へ　貳里
巽口 一總州葛(カサイ)西ノ驛より　同所へ　貳里半
東口 一安房上總より舟路(行德ノ濱より)　同所へ　三里

小路之法 但日本橋より

巽ノ方 一鐵炮洲之湊へ　廿町
東ノ方 一小松川ノ渡シへ　一里八町
艮ノ方 一角田川之渡シへ　一里十二町
上同(ミノワ) 一箕輪橋へ　一里

北ノ方一駒込ノ富士へ（わうぢへ十町、いわつちへ一りよ、日光道）一里六町　上同一本郷追分へ　卅町
乾ノ方一像師が谷へ　一里十町　西ノ方一四谷追分へ一里（是より淀ばしへ十町餘。此間かしわぎのなるこじゆく、）
坤ノ方一妻驪不動へ　二里

〔望海毎談〕一古來上方筋より關東への道筋、當國へ入ては小机より神奈川へ通り、六郷の川上を渡り、世田谷より澁谷へ通り、二本榎より赤坂の一ッ木、溜池の東岸を北へ、山里の西脇手を下谷淺草へ通り、橋場の渡場を越し、千住へ行、又湯島本郷へ通りて、上下の板橋へ被行、江戸繁昌に付て、御城中を初、方々廣がり、古來の道筋今は語り傳ふる人もなし、御城より東の方は沼深田にて、夫より先は海手にして、其所迄は船共も入繫しかば、道灌泊船の亭を設け、詩歌の詠吟あり、

〔武藏演路二〕江府町數凡一千六百五十有餘町　町鑑之内　内（町方分一千二百有餘町許、寺社門前分四百有餘町許）

〔春波樓筆記〕江戸の町は、御入國此方の事にて、○中略町數八百八町ありしに、千八百八町となりぬ、

〔日本地誌提要二東京〕市坊　壹千壹百七拾七町、六大區ニ分チ、七拾小區ヲ置、

〔續江戸砂子二〕江府町名目

江戸町年寄（一月番、一月番）本町二丁目樽屋藤左衞門　同一丁目奈良屋市右衞門　同三丁目喜多村彥右衞門

名主十八組（名主支配の町々の前に合印を以記す、但寺社御支配の名主は組の外なり、）

一番組　本町　石町　白銀町　室町　本船町　小船町　大傳馬町　堀江町　小網町　箱崎町　三河町　鎌倉町　龍閑町　塗師町等の構

二番組　小傳馬町　馬喰町　横山町　米澤町　田所町　堺町　大坂町　高砂町　富澤町　濱町　橘町　村松町　橋本町　神田紺屋町の構へ

三番組　淺草筋　久右衞門町　淺草茅町　旅籠町　猿屋町　元鳥越町　諏訪町　田原町

並木町　花川戸町　今戸町　端場町　山谷町　新鳥越

四番組　日本橋ゟ中橋迄の中　日本橋通四丁　万町　本材木町四丁目迄　呉服町　檜物町　槇町　平松町　左内町　箔屋町　坂本町等のかまへ

五番組　中橋ゟ京橋迄の中　南傳馬町　桶町　南鍛冶町　疊町　大鋸町　正木町　鈴木町　具足町　南槇町　本材木町五丁目より八丁目迄

六番組　京橋ゟ新橋迄の中　銀坐町　尾張町　竹川町　南紺屋町　銭屋町　弓町　南鍋町　山下町　惣十郎町　彌左衛門町　山王町　加賀町　八官町　三十間堀　木挽町七丁分

七番組　靈巖島の中不殘　南茅場町　龜島町　北八丁堀　幸町　水谷町　金六町　北紺屋町　南八丁堀　鐵炮洲の中不殘　築地の内のこらず　つくだじま

八番組　芝口町　源助町　露月町　神明町　濱松町　三島町　芝富山町　同永井町　同岸町　同新網町　櫻田の中不殘　増上寺中門前

九番組　芝金杉　本芝　芝田町　車町　飯倉町　まみ穴　永坂町　日が窪　一本松　六本木　三田の中不殘　伊皿子

十番組　麻布之内市兵衞町　谷町　今井町　宮益町　龍土町　高輪町　赤坂傳馬町　元赤坂町　平尾町　白金之内　青山の内　赤坂田町

十一番組　神田筋　鍛冶町　鍋町　須田町　連雀町　多町　大工町　新銀町　雉子町　永富町　皆川町　三河町二丁目三丁目四丁目

十二番組　湯島六町　本郷六町　佐久間町四町　松永町　濱松町　神田はたご町　金澤町　豊島町　元町　金助町　春木町　竹町

十三番組　下谷筋　天神前　明神下　上野町　長者町　山崎町　御切手町　池の端　谷中

筋

十四番組　小石川筋　春日町　富坂町　傳通院前　菊坂町　駒込片町　追分　白山前　戸崎町　丸山の内　小石川金杉の内　小日向筋　巣鴨筋　大塚筋

十五番組　牛込筋　小日向筋　茗荷谷　改代町　關口邊　市谷筋　田町　八幡町　大久保　千駄ヶ谷　麹町　平川町　谷町　元飯田町　四谷筋　傳馬町　伊賀町　内藤宿　鮫ヶ橋

十六番組　本所筋　尾上町　相生町　緑町　松井町　林町　柳原町　菊川町　茅場町　徳右衛門町　三笠町　吉田町

十七番組　深川筋　六間町　森下町　扇橋　猿江町　海邊大工町　佐賀町　大島町　永代町　万年町　久右衛門町　伊勢崎町　木場　六万坪　三十三間堂

十八番組　南本所　横網町　石原町　番場町　元町　北本所　荒井町　出村町　小和泉町

中之郷　小梅の内　柳島町　龜戸町

〔江戸鹿子五〕江府異名

浮世ゑやうじ（日本橋北三丁目東横町をいふ）　六本木（かわらけ町より西の方をいふ）　魔魅穴（かわらけ町より西の方をいふ）　鼠穴（糀町一丁目御門内入込を云）　本郷（湯島末六丁の内をいふ）　霊巌島（北八丁堀末をいふ）　赤坂（赤坂御門ノ外をいふ）　四谷（四谷御門ノ外をいふ）　市谷（市谷御門ノ外をいふ）　牛込（牛込御門ノ外をいふ）　小石川（小石川御門ノ外をいふ）　駒込（小川より四方をいふ）　高輪（品川入口をいふ）　芝（金杉橋より南の方をいふ）　二本榎（芝いさらごの先をいふ）　白銀（二本榎より北西の方をいふ）　長者丸（澀谷近所に有）　澀谷（青山宿先百人丁末をいふ）　香貝（麻布百姓丁近所をいふ）　鐵砲津（南八丁堀より南の方をいふ）　伊佐柄子（芝田町九丁めより西方をいふ）　柳原（筋違橋より淺草橋迄間をいふ）　赤羽（かわら町下をいふ）　麻布（溜池より南西の方大樣いふ）　淺草（淺草橋より北をいふ）　染井（駒込之先をいふ）　小日向（小石川の先を大橋いふ）　高田（牛込の先をいふ）　青山（赤坂西をいふ、青山宿とも云、）　山ノ手（糀町近所をいふ）　淺草追分（淺草山ノ宿に有、右へははしば、左は千手へ行道也、是奥州海道也、）　四谷追分（四谷末に有、板橋と八王子とへ分ル也、）　本郷追分（本郷先森川宿有、右へは日光王子へ行道也、左は板橋へ行道、此海道木曾海道也、）　藪小路

愛宕ノ下細川丹後守殿屋敷前をいふ　松原小路桜町一丁目御門之内云也　式部小路日本橋南二丁目東新道を云　小身小路愛宕下田村右京殿屋敷前を云　若宮小路牛込之御門ノ外壘をいふ　佐久間小路愛宕下佐久間備中殿屋敷前をいふ　森川宿本郷の末をいふ　内藤宿四谷の末をいふ　山ノ宿浅草金龍山近所をいふ　大窪高田西南をいふ　日ケ窪麻布六本木より下ル谷をいふ　皮多窪牛込ノ先をいふ　西窪愛宕山後をいふ　鍛冶窪赤坂奥をいふ、此所に火打鍛冶上手有ゆへいふなるへし、　蛇窪川崎村六郷之近所　神田白銀町土手より北西之方大様いふ也　三田芝増上寺うしろ西南之方をいふ

〔武藏演路二〕内廓四方

城東　日本橋南北神田京橋新ﾂ橋俗ニ下町ト云　城西　麹町番町

城南　外櫻田　城北　田安　小川町

外廓四方

北　淺草　三谷　今戸　橋場　新吉原　下谷　上野　箕輪　金杉　谷中　三崎　湯島

本郷　駒込　染井　大塚　巣鴨　小石川　小日向　關口

南　芝口　愛宕下　西窪　飯倉　三田　白銀　高輪

西　四谷　一谷　大窪　牛込　高田　赤坂　青山　原宿　麻布　澀谷

東　本所　小梅　牛島　龜戸　隅田　深河　洲崎　小名木澤　猿江　砂村

〔御府内備考入御白輪内。〕町地名井里俗呼名附雜話

日本橋川筋より北の方神田堀内に屬する町名、并里俗呼名、此邊をしなべて下町と云、按ずるに、下町は、御城下町と稱せる唱なるべし、此下町の地は、元豊島郡の洲崎なりしを、慶長頃より築立て、町地に割渡されし事は、江戸總說の條にいへり、

〔玄同放言一下〕江戸古圖略說

附けていふ、今俗日本橋以西、四ッ谷青山、市ヶ谷、北は、小石川、本郷をすべて山の手といふ、物には山ノ擴と書きたるもあり、按ずるに、やまのては山ノ里なるべし、里字にての訓あり、萬里小路をまてのこ

飯田町
麴町

うちと讀まするが如し、山城の井堤、又井手、或は堰堤に作る、これも井里なるべし、

〔御府內備考八御曲輪內〕飯田町麴町邊町名井里俗呼名

元飯田町、里俗呼名、中坂、中通りを云、もちのき坂、北裏通りなり、　麴町一丁目　麴町二丁目　麴町三丁目　麴町四丁目　麴町五丁目　麴町六丁目、里俗呼名、善國寺谷、五丁目六丁目横町を云、　麴町七丁目　麴町八丁目　麴町九丁目、里俗呼名、藥師横町、北横町と云、　麴町拾丁目、里俗呼名、成瀨横町、北横町を云、　麴町平河町一丁目　麴町平河町一丁目續敎授所付町屋鋪　麴町平河町二丁目、里俗呼名、蛤店又は肴店、　麴町平河町三丁目、里俗呼名けだ物店、　麴町平河町三丁目脇木挽町四丁目裏上納地替地、里俗呼名、麴町貝坂、

湯島三組町續拜領屋鋪切地代地　湯島龜有町代地麴町山元町、里俗呼名、わら店、平河町一丁目之方表通を云、材木店、平河町二丁目三丁目の方を云、　麴町隼町、里俗呼名だるま門前、赤坂御門內を云、　麴町谷町、里俗呼名、三丁目谷、四丁目谷、淸水谷、八丁目、南横町を云、三軒屋、平河天神前通り元山王の內なり、　麴町龍眼寺門前　永田馬場山王門前〇中略

以上記す町名及里俗呼名は、下谷山崎町名主藤八が藏する、文政四年改定の町鑑に據て編錄す、

〔新編江戶志一〕飯田町

求涼雜記云、往古は千代田村と云て、田安に續く田畑也、御入國の時、初て田安邊へ御成の時、此所の里民を召させられしに、其砌は民家十七軒ならではなく、皆々田畑へ出て、只飯田喜兵衞と云者壹人罷出て、所の巨細をも申上ければ、此以來此所の名主たるべきよし命せられ、此所を飯田町と呼ぶべしと也、

〔燕石襍志三〕わがをる町

今もちの木坂と唱るは、舊名万年坂なるよし、古老いへり、寬永中の地圖を按ずるに、町家は今九

櫻田

段坂と唱る處にありけり、こゝらの町家を後に築地へうつされて、元飯田町、築地飯田町とわかれてき、九段坂の上は寛永のころ飯田口と唱たり、この飯田口のほとりなる町家なれば、やがて飯田町といふなり、慶長年間、飯田某開發せしと、土俗の口碑に傳ふ、是不はしらず、

〔江戸砂子一〕番町〈東西十六町南北七十八町〉四谷市谷牛込の三御門の間、御外廓の内を云、此内御旗本衆のやしき也、一番町より六番町にいたり、うら表新道土手何番町などゝありて、むづかしきやしき町也、一書曰、御旗本御番方の武士を御城西の方に置るゝ、町割を賽の目を用ひられ、番町とせらるゝものは、慶長の御下知たり、二四六の偶目は陰なるゆへに裏町を用ひられ、奇目は陽なるゆへ、その町一町づゝ也と云、又曰、今の愛宕山後天德寺の西城山といふ所より、西北の方上高田下高田といふ地まで、牛込忠左衛門殿先祖知行三千石の場なりと、

〔南向茶話〕問曰、番町の名目壹より六迄有之候事、由來も有之候哉、

答曰、此地に數代居住せし古老の物語に、御入國の始、麾下の士に此地を下され候剋、六組に分て勤仕致し、故に壹より六迄の名目ありて、前後入込候由、五番町と申所は、只今少計殘り候は、糀町の内へ入申候由なり、又彼老人の物語に、六番町の方へ市ケ谷御門より上る坂を、三年坂と呼び候事、寛永十三年、外廓出來の剋、新に開ける坂故に云爾と云々、是に付て思ふに、牛込神樂坂より北へ築土へ出る、小坂をも三年坂と號するも同意なるべし、京都東山清水觀音門前より横へ北へ下る坂をも、三年坂と號するは、清水は大同二年に草創、同三年に此坂を開ける故に云爾と、舊記に載之と同日の談なるべし、又麴町貝坂は、元は芝青松寺の舊地にて、此寺青松甲斐と云人の草創由、此所當時玉虫氏の屋敷に其跡あり、故に甲斐坂と云よし、

〔江戸砂子一〕櫻田　山下御門幸橋の内より、虎御門の外までの總名也、風土記殘卷號櫻田者、以其鄉之岡及野櫻樹多也とあれば、むかしは櫻木の多くありし所なり、荏原郡のうちとあり、今は豐

島郡の內也、

〔御府內備考八十二櫻田〕櫻田は、西丸下より愛宕芝邊まで及びたる鄉名と見へたり、和名抄荏原郡の鄉名に櫻田と載す、正保國圖、元祿改定國圖、皆中芝以北を豐島郡に屬す、郡界の改りしは古きよりの事と見ゆれど、その年代等未だ考ふる所なし、○中略北條役帳に、太田源七郎拾九貫文、江戶邊櫻田村、西村分興津加賀守買得三拾貫七百文、櫻田內平尾分、太田新次郎貳貫三百文、江戶櫻田池分を領するよし載たり、池分と云は、今の溜池その殘りしならん、是等に據ても廣き鄉なること推てしるべし、今の櫻田七ヶ町は、元西丸下、及外櫻田御門外、霞ヶ關邊等に在しを、後年虎御門外に移され、麻布櫻田町も、皆同所に在しを、後年葵坂邊に移され、再び今の地へ轉せられしと云をもて、櫻田を虎御門內に限れると云は誤なるべし、たゞ西丸下邊は城下の町並なりしを、櫻田內の野地に移され、霞ヶ關邊も、恐く民家の群住せしを、その宅地を村內の遠地に移されしに過べからず、○中略又北條役帳に、島津孫四郎、飯倉の內櫻田三十八貫百五拾文を領すと書、されば飯倉の邊まで入會し地なる事もしるべし、

〔江戶往古圖說下〕神田村　北條分限帳にも神田の名みへたり、○中略神田之名義、往古は一國に一所ヅヽ神田と號せし地有て其歲の初穗を伊勢兩宮へ獻ずる舊例也とぞ、今絕て此義なし、然るに此地柴崎村を以神田とす、故に神田大明神と云、往古此わたりは皆田畑曠野の地の田、古き書に見えたり、小川町邊も三崎村とて、田畑茅野なりと、三崎神社の緣起にもみゆ、此三崎稻荷の祠至て舊社のよし、しかれども鎭坐年代は不知と云、今の三川町の地も、三ッの小流れ有しゆへ此名ありと云、小川町も小川の流れありしゆへと云、又其後の比に至り、國初の比は、通り町と三川町のみにて、外は田畑寺院のみ也と云、

〔御府內備考八御曲輪內〕神田堀より北の方神田川內に屬する町名、幷里俗呼名、此邊おしなべて神田と云、たゞ柳原土手近き處を、柳原某町と云、

〔江戸名所圖會 一〕神田橋　大手より神田への出口に架す、御門あり、昔此地に土井大炊侯の第宅ありし故に、又大炊殿橋とも號たるとなり、事跡合考に云く、昔は神田橋の外に茅商人あまた住す、今の八丁堀の茅場町是なり、又其後本所にも遷さるゝ、今本所の茅場町といふはこの故なりと云云、此御門の外の町をすべて神田と號く、

〔江戸砂子 一〕小川町　鷹匠町　御旗本衆のゆきゝ多し
此處むかしは田畑なりしをうづみて、御旗本衆の屋敷に下さるゝ、畔道を直に小路になしたるゆへ、其道筋曲りて屋敷形のひづみありと云、又此所を錦の切と云は、小身衆なれども、御大切に思召との事なりとぞ、

外神田

〔御府內備考 九外神田〕外神田は、神田川內なる神田町々に對して、私に稱せる名なり、此外神田町の內、昔より神田の地に隸して、其のまゝ町に取建し所もあれば、多は神田川內に置れし町を、後年鳥越、及下谷の地に移轉せられしなり、又他所より代地に移されしも少なからず、されば元より下谷鳥越に屬する町にはあらず、又下町にも附しがたし、

日本橋

〔江戸砂子 一〕日本橋　南北にかゝる長凡二十八間
江府の中央と云、諸方への道法此はしを元とす、北の橋詰室町一丁目、此西側を尼店と云、尼崎屋又右衞門拜領やしきなれば也、ぬり物見世なり、此所に前店とて、庇より又庇をさしくたして見世をかまへ、荷馬の具、其外小間物を商ふ、東の方河岸は大船町也、肴店にて毎日魚市立、

〔慶長見聞集 二〕一里づかつき給ふ事
日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町わりの時節、新敷出來たる橋也、此橋の名を人間はかつて以て名付ず、天よりやふりけん、地よりや出けん、諸人一同に日本橋とよびぬることきたいの不思議とさせたり、然に武州は凡日本東西の中國にあたれりと御諚有て、江城日本橋を一里塚のもとゝ定め、三十六丁を道一里につもり、是より東のはて西のはて、五畿七道殘る所なく一

里塚をつかせ給ふ、

〔新編江戸志 一〕京橋南筋

京橋の通りは銀座四町目迄あり、夫より尾張丁二丁、竹川丁壹町、出雲町壹町あり、夫より新ばし也、

〔御府内備考御曲輪内〕京橋川筋より南の方、新橋川筋内に屬する町名、幷里俗呼名、

新兩替町一丁目、里俗呼名、蛤新道、西裏通弓町南紺屋町地境を云、新兩替町二丁目　新兩替町三丁目　新兩替町四丁目　以上四ヶ町、銀座何町目とも云、尾張町一丁目元地　尾張町一丁目新地　尾張町二丁目　竹川町　出雲町　與作屋鋪　京橋金六町　京橋水谷町　三十間堀一丁目、里俗呼名、花町、一丁目二丁目横町紀伊國橋通りを云、三十間堀二丁目　三十間堀三丁目　三十間堀四丁目　以上四ヶ町、銀座何丁目裏河岸とも云、三十間堀五丁目　三十間堀六丁目　以上二ヶ町尾張町何丁目裏河岸とも云、三十間堀七丁目、竹川町裏河岸とも云、三十間堀八丁目、出雲町裏河岸とも云、松村町　木挽町一丁目　木挽町二丁目　木挽町三丁目　木挽町四丁目　木挽町五丁目　木挽町六丁目　木挽町七丁目　木挽町四丁目新屋鋪　木挽町續氷川屋鋪　芝西應寺町代地　南紺屋町、里俗呼名、太刀賣、休伯屋鋪　西紺屋町　弓町、里俗呼名、觀世新道、新兩替町二丁目裏通りを云、新肴町、里俗呼名、宇知町、彌左衞門町　鎗屋町　元數寄屋町一丁目　勘左衞門屋鋪　元數寄屋町二丁目　元數寄屋町三丁目　元數寄屋町四丁目　南鍋町一丁目　南鍋町二丁目、里俗呼名、古木店、此二丁目及元數寄屋町四丁目新道幷同三丁目新道、共古木店と云、山下町　南佐柄木町　瀧山町　守山町　總十郎町　金春屋鋪　加賀町　筑波町　山城町　佐兵衞町　喜左衞門町　八官町　山王町　丸屋町　寄合町　南大坂町　内山町

芝

〔南向茶話〕問曰、芝邊品川筋之儀に、聞及も候はれける事も候哉、承度候、

芝邊之事、居住不仕候故、聞傳へ稀に候、芝之事、近頃東海子平維章と申仁之編集せし不問談と云る書に云、江戸斯波を芝と云は誤也、足利家の管領に斯波氏あり、(下文不相見)仍而考るに、昔時斯波氏の居住せしにや、

〔南向茶話追考〕芝の稱號の事、彼地の古老云、芝といふ此海邊の總名を芝浦と云、子細は海岸近き所に、木の小枝をならべ置て、海苔懸り候を取る、木の小枝を俗に芝といふ、故に此浦所々に、右のごとく海苔を取る故、總名を芝の浦と呼び來るといふ、

〔御府内備考 八十八 芝〕芝は芝浦など、呼びて、古き世よりの名なり、古へ此邊みな海邊なる事しるべし、山岡明阿云、むかし此邊芝生にて、武藏野の末なりしゆへ、芝といへるなるべしと、一說(南向茶話)に、此地の古老云、すべて此海邊を芝浦と云は、海岸近き所に木の小枝を並べ置て、海苔をとれり、木の小枝を俗に芝と云ゆへに、總名を芝浦とよび來れりと云は誤れり、近き世にこそ海苔をも取しなるべけれど、地名のこれより起りしとするは無稽の說なり、按に本芝二丁目名主內田源五郎所藏古文書の內、天正十五年、小田原北條家より出せし文書に、蒔田御領分、芝村舟持中と記たれば、此頃は村名に唱へしと見ゆ、又天文廿二年、永祿七年同じ北條家より出せし文書に、柴舟持中と記し、及永祿三年、柴代官百姓へ渡せし浦賀番船の文書、又江戸刑部少輔充の文書に、柴船六艘從前に出來儀候、船橋舟何時も動之剋、觸次第無遲々樣專一候などもみへたれば、古くより船持多く住せし處なる事知るべし、されど此比芝といへるは、金杉本芝邊のみとおもわれたり、今の芝口町は始日比谷の代地に賜はりて、日比谷町と稱せしを、寬永年中芝口御門を建させられし比より、芝口町と改名せらるゝよしなれば、それより前は何れに屬せし地なる事を知べからず、神明町の邊は、飯倉に屬せしにや、飯倉神明なども稱せり、今は芝口町以南、上高輪町、(芝田町、芝車町、)

（芝二本榎、芝伊皿子町と分て唱ふ、）車町までをおしなべて芝といひ、又増上寺の表門芝に出たれば、芝の増上寺と稱するより、切通し土器町邊までも芝と唱ふれど、是は全く増上寺の地名よりおしうつりしに、過べからず、其實は飯倉もしくは櫻田に屬せし地なるべし、

三田

〔御府内備考九十九三田〕三田は古代の郷名なり、和名抄に、武藏國荏原郡御田郷と載せ、及日本總國風土記に、武藏國荏原郡御田郷、（讀美多）公穀三百六十七束、假粟田三十九丸、貢松竹蕨等、又有諸衛充大膳或木工寮と記すもの是なり、〇中略又御田を三田と書改めしも古き事にや、正保改の國圖、及郷帳とも、既に三田の字を用ひたり、〇中略今三田と稱する地域、東は大やう芝に隣り、たゞ南よりの方のみ少しく高輪に交わり、西は新川を境として麻布に並び、（川を隔て少しく飛地あるは、麻布の條に辨ず、）南は白金に續き、北は赤羽川に限れり、その内在方分に屬する年貢地も少しくあれど、多くは拖地と成りて、屋鋪々々の匝込となれり、此餘三田臺と稱して、高輪白金境に飛地あり、又白金村内にもわづかなる飛地ありて、三田老松町といふ、

高輪

〔御府内備考百六高輪〕高輪は高き繩手と云の下略なりしを、後に文字を書改めしなるべし、（地名に何繩手と云ものは、郡中大森村内にさは繩手と云に名あり、是北條役帳に、六郷殿三貫四百文六郷内に花和と載たる地なりと云類あればなり、）此邊町と成しは古くよりの事にて、正保の郷帳にも、上高輪町、下高輪町とみゆ、元祿改の郷帳にも玄か記たり、今は上高輪町を變名して芝田町と稱し、車町、二本榎、伊皿子町も、おしなべて芝と唱へ、（是町方にての通稱なり、郷帳等には、今も上高輪町と書す、）下高輪町のみ舊名に從へり、

〔江戸名所圖會三〕高輪大木戸　寶永七年庚寅、新に海道の左右に石垣を築せられ、高札場となし給ふ、（其初は同所田町四丁目の三辻にありし故に、今も彼地を元札の辻と唱ふ、）此地は江戸の喉口なればなり、（田町より品川迄の間にして、海岸なり、）

白銀

〔新編江戸志七下〕白銀
相傳て云、往古此所に白銀長者といふあり、代々富饒にして住す、ゆへに爰を白銀と云まし、北條

分限帳にも白銀村あり、江戸砂子、村有凡八百石程の高なりと云々、

目黑

〔新編江戸志七下〕目黑　大崎

目黑は往古よりの名にして、北條分限帳にもあり、永祿元龜の比の繪圖にも見へたり、上中下三ケ村有りと也、

〔御府內備考一百五目黑〕目黑は今も上目黑村、中目黑村、下目黑村と分れて、廣き地名なり、○中略目黑町と稱せる處は、永峯町續より、瀧泉寺脇通り不動の門前までにして、全く不動への道筋なれば、往來も多かりしゆへ、町に開きしものと見へたり、

麻布

〔江戸砂子五上〕麻布又阿左布と書　平尾

麻生　又麻布本名　淺生村　龍土　櫻田　谷町　市兵衞町　六本木　上ノ町　雜色　これらいづれも所の小名也、麻布七村といふ、麻布は矢盛庄七鄕の內にて、古き名也、麻布七村といふは、近き事にや、いぶかし、

〔新編江戸志七下〕麻布　阿在布共　又麻生共

麻布の號は、此所多摩川より近きゆへ、此所にて往古は麻など多く植置き、布など織出せるよりの名ならん、多摩郡にも布多村と云有と、手調布など多く在なり、織出るよし、參考太平記に武藏野合戰の條下に、兒玉黨淺羽、毛利家本作淺生、四方田庄櫻井と書、いづれも武藏の住人なれば、麻生とあるは此麻布なるべし、

〔御府內備考七十五麻布〕江戸志云、此所は多摩川へもほど遠からざれば、古へこの地に麻を多くうへおき、布をもおり出せるよりの名ならん、多摩郡にも布多村といふあり、手調布を多くおり出せしよし、又或人云、あさふは麻布にはあらず、此邊昔は山畠にて麻を作りしゆへ、麻田をあさふとよめり、日本紀にも、豆田粟田をまめふあはふと訓ずるがごとく、此外にも蓬生又淺茅生の類に

同じ、武藏國には調布を玉川にさらして、貢物にも奉りしゆへ、此邊麻田なるべし、延喜式萬葉集の歌にものする所なりと、是等の說皆文字にもとづきての牽强にして、その據をえらず、又麻生山善福寺の傳へに、かの山へ往昔麻のふりし事あるゆへ、麻布留山といひしを、中略して麻布山と唱へしより、後年廣き地名となれるなどもいへり、これは殊に甚しき附會の說なり、○中略江戶古圖には、麻生村をのす、又北條分限帳にも、江戶廻り阿佐布五十三貫二百文の地、狩野大膳亮領せしよしみゆと、今案に、正保頃の鄕帳に阿佐布村高七百四拾五石餘內四百二十八石餘、伊奈半十郎御代官所、百三十七石餘、山王領六十六石餘、大養寺領五十八石餘、天德寺領三十八石餘、神田明神領十六石餘、柴明神(神明の誤なるべし)領屋敷四町五反八畝拾五步、上ヶ屋敷伊奈半十郎御代官所、外高拾石善福寺領と載せ、元祿改の鄕帳には、高二百九十六石餘阿佐布町、高拾壹石餘阿佐布町の枝鄕坂下町と出せり、正保の頃七百四十五石餘なりしを、元祿改に二百九十六石餘と有しは、此際拜領屋敷寺地など多く置れしゆへなるべし、今麻布の在町を合せて、その地域をいはゞ、東南は大抵麻布新堀川に限りて三田に對し、(川向に麻布の飛地少しく在り、川の手前に三田の飛地少くあり、こは新川成し時、村界に拘らずして堀割ありし故なり、)北は飯倉赤坂に續き、西者澀谷青山に境へり、

飯倉

〔御府內備考八十四飯倉〕此地は、飯倉村とて、ことに古き地名にて、又廣き村なりとみへし、○中略江戶古地圖にも飯倉村あり、北條役帳に、飯倉彈正忠某といへるもの、此地を三貫八百七拾文領せしよしみゆ、この彈正忠が家、世々この所の領主として、その地の名により、飯倉を氏とせしなるべし、又太田新六郎某も、同じ比飯倉內小早川十四貫文の地を領せしよし、北條役帳にいづ、○中略すべて西久保芝神明邊なども、飯倉のうちなりしとみえ、政隨錄に、飯倉西久保石河藏人町屋敷など記し、神明を飯倉神明ともいへり、今は飯倉町六町、飯倉狸穴町、飯倉片町、飯倉永阪町等の飯倉の名殘りて、芝麻布西久保の間に挾れる地名となれり、

澁谷

〔新編江戸志 七上〕澁谷

往古は矢臺の庄と云より龍見左京貞重入道此所を領す、家系に云、貞重子龍見平次左衞門重明武州澁谷に住す、元弘三年癸酉三月十六日、武州入間郡の合戰に討死すとなり、

〔御府內備考 七十三 澁谷〕澁谷は廣き地にて、今上中下の三村に分れ、又上中下豐澤三村も、元は澁谷の內なりしを、元祿の頃別村と成りし處なり、よりて後人附會して、東鑑、治承五年八月二十八日辛未の條に、澁谷庄司重國の次男、條貳の忠節を竭の間、澁谷下郷を知行すべしとあるを、當所の如く傳へたるは謬なり、相模國高坐郡に、澁谷庄の名今も殘りて、しかもそのかゝる處甚廣ければ、重國等の住居せしは、彼地たりし事明し、殊に東鑑、文應二年五月十三日、佐々木壹岐前司泰綱、澁谷太郎左衞門尉武重と口論に及びし條に、先祖重國は、誠に相模國大名の內なり云々とも見えたり、當所はもしくは彼が氏族の者など住せし地にて、後年村名となりしは知べからず、

赤坂

〔南向茶話〕問曰、青山赤坂邊の儀は如何、承度候、

答曰、赤坂之號、〇中略愚考に、赤坂之號、赤土の地なれば稱する成べし、遠州赤坂も、僅に山ありて、山の土赤き事朱のごとし、三州赤坂も、山中赤土の所也、

〔御府內備考 六十七 赤坂〕赤坂は武藏風土記に、荏原郡赤坂庄、公穀三百六十九束、三毛田、假粟貳百貳拾三丸、出黃麥蕎等、又貢鷄豐等と載たり、荏原郡と書るは謬にや、今赤坂と稱する處は、全く豐島郡に屬し、古名赤坂庄貝塚領壹ッ木或は人繼とも書す村と號せし由云傳ふ、〇中略紫一本に云赤根山赤坂、今の紀伊家の中屋舖をいふと、又加々侯遠清が江砂餘礫には、赤坂の號は、御入國以後松平安藝守下屋敷の地、山赤土なる故に、赤阪といふと記し、江戸圖說には、紀伊國坂を、古へ赤坂といひ、紀伊侯御中館の地を、元赤根山といふ、茜を多く作りし地にて、茜山なるを轉じて赤坂といふとも記せり、未だその正しき說をきかず、按に一ッ木は、古へ上一ッ木村、下一ッ木村と別ち稱して、廣き

地名なり、又赤坂は、元此一ッ木中の小名なりしが、後手廣く推及びて、總名となりしなり、猶橋場は、元石濱中の小名なるが、後總名となりしに同じ、今赤坂と稱する地域の大やふは、東の方御堀に限り、西は青山に接し、南は麻布に隣り、北は紀伊殿御屋舖に限たれど、昔は猶四ッ谷御門外邊迄、一ッ木の地域なりしとて、一ッ木町名主八郎左衞門所藏、上り地記錄の内に、十一石貳斗四合四勺、寛永十二年、麴町十丁目尾張樣へ渡るなど載たり、

〔南向茶話〕問曰、青山赤坂邊の儀は如何、承度候、

答曰、○中略青山の號不ㇾ慥、或說に、此地青山氏の屋敷有ㇾ之ゆへ地名とすと云へり、

〔新編江戸志七上〕青山澁谷の内

天正の比、此邊山口修理亮重政住ス、麻布邊まで此屋しき也、其内七万坪を分て、嘗高木主人正正次のやしきとする由、

一說にいはく、青山忠政十万石の時は、今の青山の地一圓に屋敷也、其後忠俊幸成兄弟、街道を隔て住せしとなり、按するに、山口家一度御勘氣の事あれば、其跡の地を青山家に給はりしにや、然れども今に山口家の屋敷も殘りてあり、山口家、高木家、地はみな澁谷の方なり、青山家の地とは餘程隔たり、尙後の人尋ぬべし、改撰系譜に云、天正十九年、青山常陸介忠成に此處を宅地に賜ふと有、是より青山と號すと云々、

〔御府内備考七十青山〕青山は天正十九年、青山常陸介忠成が宅地に賜りし地なり、○中略昔は青山氏の屋鋪殊に廣かりし事知るべし、後年次第に上り地となりて、青山氏の上ゲ地といふべきを、下略して青山と呼しより、おのづから一ッの地名となり、又其近き邊をもかの名をおし及ぼして、ともに青山といひしかば、今は廣き地名となれり、其大略をいはゞ、南の方麻布今井龍土に續き、北は千駄谷恩田鮫ヶ橋に及び、東は赤坂にて、西は原宿上澁谷なり、

四谷

〔江戸砂子 四、上〕四谷(内藤宿 佐目河橋　大木戸 千日谷　新宿 千駄谷　中野 高井土)

四谷と云は、千日谷、茗荷谷、千駄谷、大上谷の四谷也、前板右のごとし、しかれども千日谷は、御入國よりはるか後に呼たる名也、尤名にかゝはらずといはゞ、猶此餘も谷は多し、四谷は古き名なるよし、永祿天正までは、此邊すべて霞村といひけるよし、古記に見ゆと也、又一說、往古むさし野に續て原野也、いづれのあたりにや、家四ッありし故四家といひたりとか、此類多ければ、實とすべくや、

〔南向茶話〕問曰、四谷之儀、田舍にて民家の家數により、三軒家、四軒家など申候へば、其例に、以前民家少き時の號なるべしと被存候、左候はゞ、谷之字誤りにて候半か、如何、

答曰、仰の通り、我等にも左樣に相心得居候處、彼地に久々居住せし老人物語致され候は、古來此地、今の糀町六七町之内之所谷あり、又今の鹽町の所も谷にて坂有り、其前に民家一軒有之て、夫婦居住せし故に、俗に夫婦と呼し也、寛永十三年外廓出來之刻、御堀揚土を以、東西兩谷埋め候ゆへに、平地となり、谷なしと云とも、舊名殘り、鹽町の入口を坂口と小名に呼び候は此所也と云、此地東西南北ともに谷有ゆへに、四ッ谷と號する由、

〔新編江戸志 八〕四谷

四ヶ所の谷あるゆへに四谷といふ、千日谷(四谷のうち)茗荷谷(大久保なり)千駄谷(青山に近し)大上谷(高井戸邊、四谷よりは凡一里半餘も隔たり)、四谷名主勘四郎に尋るに云、往古はたゞ、武藏野に續たる曠野にて、させる家居もなし、はづかに家四つあり、梅屋、木屋(今久保屋といふ)茶屋、布屋の四軒有り、甲州往來の旅人のやすみ所なり、然るに御當地日々御繁昌に付、江戸傳馬町鹽町の代地、或は糀町邊の寺社の代地替地被仰付、鎌を立るの地もなき樣になりぬる故に、四ッ家名さへ今はうせて、四谷と書かへぬ、されども右四家のうち梅屋保久屋は、子孫今に此地にあり、その地の高札にも、いまだのこりて有り、

往古此邊は、千駄ヶ谷に屬する、北條家舊記に四谷は見えず、千駄ヶ谷の地名は見ゆ、江戸砂子に四ッ谷といふは、千日谷、茗荷谷、千駄ヶ谷、大上谷等の四谷あるゆへなりといふは非なり、四谷雜談にいふ寛永の頃までは、外曲輪は所々に空地多く、就中御城西の方糀町の方に至りては、萩薄生茂り、野鷄墓のみ多く集りて、人のまれなる叢の內に、人家四つならではなかりし故に、其所を四つ家と云けり、其以後次第に家つゞきになるに隨ひて、自然に四谷と書成れるとぞ、

〔御府內備考六十一四谷〕四ッ谷は、〇中略 事蹟合考に云、往古は今の尾陽公の表門の邊に民家一軒、坂町の上の方に一軒、その外の所はさだかならざれど、二軒ありしより、鳴子高井戸の方より四谷と稱して、往來のやすらひ所と定たりといひ傳ふと、此餘江戸砂子等に、昔四ヶ所の谷ありしより起りし地名なりと書しは、全く文字につきての臆說にして、取べきものあらざれば省きて載せず、今四谷と稱するの大概、東は四谷御門御堀に限り西は內藤宿追分に及び、南は紀伊殿御屋鋪及鮫ヶ橋、千駄ヶ谷等に續き、北は市ヶ谷、大久保に境ひたれど、地形多く犬牙して定かならず、又內藤新宿は、元四ッ谷の地なれど、元祿年中、新に宿驛を立られしより、御代官の支配となり、四ッ谷外の地となれり、

〔紫の一本上〕四ッ谷

麴町を西へ出て四ッ谷なり、麴町の十一丁目、十二丁目、今の四谷の見付の御門御堀に成たるゆへ、町屋引て御堀先にて替地を下さる、故に、麴町十一丁目十二丁目は、四谷にあり、

〔江戸名所圖會九〕四谷大木戸、又大關戸に作る 甲州及び青梅への街道なり、土俗云、霞が關或は旭の關共云とぞ、御入國の頃迄は、此地の左右は谷にて一筋道なり、此關にて往還の人を糺問せらる、近頃迄江戸より附出す駄賃馬の荷物送狀なきを通さゞりしとなり、今も猶駄賃馬の荷鞍なきをば、江戸宿又は荷問屋等の手形を出して通るは其遺風なり、此故にや、こゝの番屋は町の持なれ共、

突棒、指股、錑等を飾置り、是往古關のありし時の遺風ならん、

市谷

求涼雜記云、往古は市買と書、按るに、往古此所市の立し所ならんか、今尾州侯御やしきにては、都て市買と書く、又或說に、長延寺谷と云谷あるゆへ、市谷といふ、

〔新編江戶志八〕市谷

〔御府內備考五十八市谷〕市ヶ谷は古之地名と見へて、江戶古地圖に市谷村をのす、又北條分限帳に、太田新六郞江戶市谷三十二貫九百十六文の地を領せしといふ、又同じき人江戶中里市ヶ谷にて、二十貫六百十六文の所を知行せしよしも見ゆ、是によれば、市谷は中里までにつゞきしやうに見ゆ、〇中略正保改の鄕帳には、市ヶ谷高四十三石餘、田方拾五石餘、畑方貳拾八石餘、御代官所と記たり、今市ヶ谷と稱するの地域、南は御堀に限り、東北は牛込に續き、西は四ッ谷に隣りて、皆武家屋鋪町並等の地となり、在方分と稱するは、纔にその間に雜り殘りたれど、それも多くは抱地等になれり、

牛込

〔南向茶話〕問曰、牛込小日向筋御開承及も候哉、

答曰、〇中略牛込の名目は、風土記に相見へ不申候へ共、舊き名と被存候、凡て當國は、往古曠野の地なれば、駒込、馬込、日暮里何れも牧之名にて、込は和字にて、多く集る意也、

〔御府內備考五十三牛込〕中古上野國大胡之住人大胡査太郞重治といひし人、當國にうつり、年時を詳にせず此豊島郡牛込村にすみ、小田原の北條に屬せり、その子宮內少輔重行、天文十二癸卯年の秋、七十八歲にして卒す、その子宮內少輔勝行が時に至り、天文廿四乙卯年弘治元年なり五月六日、北條氏康に、告て大胡をあらためて牛込氏となれり、此時氏康より判物を賜ひ江戶の內牛込村、今井村、今赤坂にあり櫻田村、日尾屋村今日比谷なりを領せり、他國の領地は略せり勝行天正十五丁亥年七月廿五日卒す、とし八十五歲、牛込系圖又北條分限帳を見るに、江戶牛込六十四貫四百三十文之地を、大胡某領せしよしのす、

小石川

この分限帳は、永祿のころ改めし也、されどこの大胡といへるは、牛込勝行がことなるべし、この頃ははやあらためしなれど、未ふるきによりてかき改ざりしと見ゆ、○中略今牛込と稱するの大やう、東は小日向、關口、早稻田、中里等に境ひ、南は御堀、及市ヶ谷、船河原町に限り、西は都而市ヶ谷に續き、北は大久保高田に及ぶ、此餘牛込在方分の地、中里村、早稻田村續に在り

〔江戸砂子　三〕小石川　白山　大塚　巣鴨　板橋

小石川と云は、小石の多き小川幾流もあるゆへ也といふ、わけて傳通院のうしろの流、ねこまた橋の川筋、小石川の濫觴といふ、又白山權現は、加賀國石川郡より勸請あれば、それに對しての名ともいへり、

〔南向茶話〕問曰、小石川は舊名の由、舊記等にも有之候哉、

答曰、小石川之名目、舊記にも見當り不申候、宗祇の廻國記に、名にしあふ小石川を渡ると云々、然ども回國記は、實書ならぬ樣に被存候、宗祇にて無之やうに沙汰有之候、其外は所見なし、總名とする地廣く候、南は小石川御門堀通りより、北は大塚の大道迄は小石川と號す、牛込邊も、上水之通牛天神下迄は小石川之內也、此所今金杉と稱する町やあり、舊名此邊金曾木村といふ所にて、古河公方の家臣、豐前山城守と申仁居住の所なる由、其家傳にあり、宅地の所は、今の新坂俗に今井坂とも云其上なるよし申傳ふ、金剛寺坂の下は、舊名小石川鷹匠町と呼し所也、明曆年中出火は、此所より起れりと承候、

〔御府內備考　四十一小石川〕江戸志に、此地は小石の多き小川幾流もある故、小石川と名付しといふ、こは最古世の話なるにや、詳なる事を聞ず、正保改の武藏國圖には、今の御藥園の西なる田間より、傳通院後の方へ達する流と覺しき川を、小石川と注したり、則江戸砂子に、傳通院の後の流れ、猫また橋の川筋を、小石川の濫觴と書しもの是なり、今は小石川と唱ふる地最廣し、南は小石川御門外なる御堀に限り、北は巣鴨に至り、東は本鄕駒込に添ひ、西は小日向に隣り、乾の方は雜司ヶ谷

村にも少しく接せり、されど北西の方に至りては、水陸の田あり、又在方分に屬する抱地等多ければ、御府內に屬する地は三分の二におれり、又金杉は今小石川の內なれど、古くは別に一村立し地とみへたり、○中略按に小石川の地名と成しも古き事にや、回國雜記に、小石川といへる處にまかりて、我方を思ひ深めて小石川いづこを瀬とかこひ渡るらんと、見へたり、是文明十九年の紀行なり、又小田原北條役帳に、島津孫四郎、五貫四百八十文、小石河內法林院分松月分、及櫻井買得五十六貫五百八十壹文、小石川本所方、元有瀧知行などみへたり、又黄葉集(烏丸大納言光廣卿集)に、江戸に侍る頃、小石川といふ處にて、久かたの月みる宿のすゞしさも隣ありけり石川の水、と載せたり、一說に神社略記を引て、白山權現は加賀國石川郡より勸請せしゆへ、小石川の名起りしといふ、是最無稽の言なり、白山權現を此地に移せしは、元和元年の事といへり、

〔御府內備考 四十五 小日向〕小日向は昔鶴高日向といひし人の領地なり、家絕し後、古日向があと、いへるを、いつの頃よりかこびなたと云來れりと、(江戸砂子)小日向と號するは、鶴高日向が領地なる故名付るよし、小日向名主飯塚三四郎は、鶴高日向が一族のよし、又小日向水道端鶴高山善仁寺は、日向が開基にて、一向宗なり、今に飯塚三四郎檀家なり、(江砂餘稿)按に、此說覺束なし、もし古日向が舊領とせんには、こひうがとぞ稱すべきなり、轉じてこびなたといふもの、附會の說に似たり、又鶴高日向と稱せし人は、他の所見なき人なり、又山岡明阿、和名抄豐島郡の鄕名日頭といふは、小日向にやといひしと、うけがひがたし、北條役帳に、興津加賀守、拾貳貫九百四十六文小日向分元太田源十郞知行、又太田彌三郞、貳拾貳貫八百四十文、小日向彈正屋敷、但太田新六郞與新堀方所領替、十四年以來致之、大普請之時半役、又恒岡彈正忠、十六貫五百七十文、小日向之內、又本住場寺領、廿壹貫四百四十文、小日向屋敷分太田大膳知行之內入と見へて、古より廣き地名なり、正保頃の鄕帳には、小日向村、田方畑方すべて廿五石三斗二升餘、內壹石餘野村彥太夫御代官所十八石餘樽

屋藤左衞門、奈良屋市右衞門、喜多村彥右衞門、御代官所五名當光院領と見へたり、〇中略昔の廣狹は詳ならず、今の地形の大樣は、東北の方小石川に境ひ、南は牛込に續き、西は關口及護國寺領音羽町櫻木町等に限れり、されど武家屋敷の接界に至ては、半は小石川の地にて、半小日向に屬する類も少なからず、

關口

〔御府內備考四十八關口〕總說

關口村は、小石川、小日向、牛込等にとなれり、地名の起りを詳にせず、此所より西の方に行ば、宿坂といへるあり、其處はむかし鎌倉街道にて、宿坂の關といひて、關の有しよしなれば、是等によりて斯唱るにや、何れ古きよりの名なるべし、〇中略今も在町相半し、その內江戶に屬する廣狹の大樣、東は小日向及護國寺領櫻木町に續き、西は高田四ッ家町に接し、南は大抵上水に限りたれど、水道町は上水の南に在り、北は小石川飛地雜司ヶ谷等に境す、

高田

〔新編江戶志九〕高田

或說に、此むかし越後高田領主の館在りしゆへに、高田の號ありといふは誤りなり、南向茶話にも、北條分限帳を引て、高田葛谷横山土志比留方は、戶塚の內にあり、然れば天文年中より、高田の號ある事は明らかなり、

本鄕

〔南向茶話〕問曰、本鄕舊名に候哉、但湯島の本鄕にて候哉、〇中略答曰、御尋の通、本鄕の名目、北條分限帳にも載之、又治亂記にも出候へ共、湯島は風土記に載之候へば、定て湯島の本鄕にて有之べく候、其所入込分ちがたし、

〔御府內備考三十二本鄕〕本鄕は古しへ湯島の內にして、その本鄕なれば、湯島本鄕と稱すべきを、上略して本鄕とのみ唱へしより、後世湯島と本鄕とはおのづから別の地名と成りしなるべし、〇中略天正十九年、駒込吉祥寺へ御寄附の文書に、寄進武藏豐島郡本鄕之內五十石之事、如先規令寄附

湯島

根津

詑云々とあり、及同年小石川祥雲寺に賜ひし御寄附狀にも、本鄕の內にて五石の地を賜ふ由載たれば、此二寺之領も、古へより、本鄕の內にありし事知るべし、今本鄕と稱する地域の大樣は、東之方湯島に續き、(松平加賀守屋敷は、湯島と本鄕にかゝりて、東の方は多く湯島の內なりと云、)西は小石川に境、南は神田川に限り、北は駒込に隣り、されど小石川の地にも少しく接はれり、(武藏屋敷地の境界定メならず、姑くその大略をいへり、)

〔御府內備考二十九 湯島〕湯島は和名抄豐島郡の鄕名に出て、由之萬と訓註あり、總國風土記に、湯島公穀六百七十二束、三字田、假粟三百九十二丸、三字田、貢鹿狐走兎岡領馬牛等、と載す、又小田原役帳に、中村平四郎買得三十八貫文江戶廻湯島之內、龍崎文四郎五十三貫百十二文江戶湯島とみえたり、又堯惠法師の北國紀行に、文明十八年筆記、忍の岡の並びに、油井島といふところあり、古松はるかにめぐりて、注連のうちに武藏野の遠望をかけたるに、寒村の道すがら野梅盛に薰ず、是は北野の御神と聞しかば忘れずば、こち吹むすべ都までとほくとめの、袖のむめか香、此北野の御神と書しは、恐くに今の鎭守天滿宮なるべし、江戶志に、湯島は和名抄に出たれば、もとより古き地名也、いにしへは湯島本鄕は一ッにて、後に本鄕別れだるべしと云、此說實を得たるが如し、何れの地にも本鄕と云處まゝあり、皆其鄕の本たるに依て、直に本鄕とのみ言に似たり、然ればば本鄕かへりて湯島の元地にして、今の湯島は後年その名の廣く推及びし處なるべし、古の如く本鄕を合ていはゞ最廣き地域なり、今湯島と稱する地形の大樣は、東の方下谷へ並び、南の方神田川に限り、西の方本鄕に接し、北の方池の端榊原遠江守等の屋敷に續く、(案に、榊原氏等の屋敷も、元は湯島の內にや、或は本鄕に屬せしも知るべからず、今其地不忍池に近きをもて、通じて池の端と言、)

〔御府內備考二十五 根津〕根津は下谷池之端につき、谷中三崎に隣れり、依之谷中に近き故、多く今谷中の內に入といへども、實は駒込千駄木の地なり、(江戶圖說)案に、根津の地名は、根津權現鎭座以來の唱へなるべし、神社略記根津權現の條に、根津といふは、鼠のいはれにや、是大黑天を祭るならん、こ

とに天井又は繪馬などに鼠を多く書て見ゆれば、大黑の社なる事決せりと見えたり、社の舊地は、千駄木御林の傍にて、今もその所を元根津と呼べり、

駒込

〔御府內備考駒込三十六〕駒込は古き地名なるよしは、既に駒込村の條に辨せり、今御府內に屬する地域の大概、南は本鄉に續き北は巣鴨、西ヶ原に及び東は谷中に接り、西は小石川、巣鴨に並べりされどその內年貢上納地、及武家屋敷等入雜りたれば、巨細には辨じがたし、

巣鴨

〔江戶砂子三〕巣鴨　板橋街道　よほどの町並也

此わたりいにしへ大なる沼地あまたありて、諸鳥多し、中にも鴨多くありしよりの名也とか、古き記に見ゆると人の申き、

〔南向茶話〕問曰、丸山巣鴨の名目如何、承度候、

答曰、○中略巣鴨の號の事、風土記足立郡之內に見へ候は、舊地にて候はじ併北條家の分限帳には相見へ不申候、

〔御府內備考巣鴨三十九〕巣鴨の名義、及在方に屬する事蹟は、巣鴨村の條に辨ず、今町と稱する處は、大抵中山道板橋への往來にして、南は駒込鷄聲が窪續より北は庚申塚に及び、その餘中町原町等は、少しく往來の西にさし入、辻町と稱する僅の町、小石川大塚上町に隣れり、町並の外武家屋鋪も數多あれど、その餘は皆村落畊地のみなり、

雜司谷

〔南向茶話〕問曰、雜司谷舊地の由申傳へ候、如何、

答曰、法明寺は舊地にて候由、紀州の醫師何某の古紀行に、僧司谷と記せり、判本にて候、其書の名は忘れ候、然れば此處は古へ法明寺より領地して司どりけるにや、

〔御府內備考雜司谷五十二〕雜司谷町

一町名起立之儀は、元來地名ニ而、雜司谷村ト相唱候、右は往古禁中雜式相勤居候柳下若狹、戶張

下谷

平司左衞門、長島内匠抔申者、南朝相仕へ候處流浪仕、當所へ參り住居仕候よしニ而、雜司谷と相唱候よし、右之家筋、當時當村方百姓に殘居候、然ル處其後文字之儀モ區々ニ而、藏主ヶ谷、僧司谷、差子谷抔、向々相認候處、有德院樣(〇德川吉宗)御成之節、文字區々ニ而及混雜候間、右混雜之雜之字相用可申旨、上意有之候由申傳候へ共、慥成義無御座候、且當所之義は、寛永十八巳年中、大猷院樣(〇德川家光)御裏方、尾州千代姬君樣御母堂、自證院樣御靈屋領として、市谷自證院領相成申候處、其後延享三寅年中、寺社御奉行、山名因幡守樣、町御奉行能勢肥後守樣、馬場讚岐守樣御勤役中、右雜司ヶ谷村之内、往還附百姓町屋之分、町方御支配被仰付候、其砌より雜司ヶ谷町(與)相唱申候、

〔御府内備考二十一下谷〕國華萬葉記に、下谷は上野に對したる名なりといへり、今その地形を按するに、上野は固り高燥の丘にて、その地に續ける下濕の地なれば、上野に對せし呼名といふ事理あるに似たり、風土記殘篇に、下谷岡と載たるは、上野を指ていへるにや、されどかの記は後人の僞書なりといふ說あれば、いかゞはあらん、永祿改定の小田原役帳に、江戶廻下谷菅野分三十五貫九百文の地を、大谷十郞左衞門領せし由載たり、又松隣夜話に、永祿七年太田三樂、武州下屋と云所にとりでを搆へ、(砦の跡詳ならず、是も上野の內などにや、)取續て松山邊へ節々働きいづとも見えて、古き地名なり、地形、古は南の方今の神田川に及び、北は坂本金杉の二村に限り、東は淺草鳥越に續き、西は上野湯島に添ひ、中央不忍池の下流東西に貫きて、南北に分れし村落とおもはる、御入國の後、不忍池の下流を埋られ、おしなべて平衍の水田と成し由は、羅山文集所載、武州刕學十二景の內、下谷耕田の詩、及同題杏庵堀正意が詩の趣にてもおして知らる、(全詩下に載る、聖堂蹟の條に出す、)其後內神田に在し町並を下谷へ移されしより、南の方過半外神田と成り、又西の方不忍池の南岸次第して陸地と成り、仲町茅町七軒町等の町並出來て下谷に屬し、又北の方坂本金杉三の輪龍泉寺四村に及びて、下谷に屬する町並と成しゆへ、地形大に變じたり、今下谷と唱ふる四域は、南の方外神田に境

ひ、北は小塚原中村町、東は淺草、西は湯島本郷根津に續き、西北の間上野の地差入て、最廣き地名となれり、上野町は、上野の地の差出たる如く見ゆれど、左にはあらず、元來下谷の内なりしを、東叡山御建立の時、山内より轉地せられし町並なれば、今姑く下谷に附錄す、又池の端仲町の邊は、元何れに屬すべしとも定めがたけれど、同じつゞきなる茅町を下谷といへば、是も姑く下谷に屬す、又坂本金杉三の輪龍泉寺町の類は、元來その村々に屬する地なれど、こは當今現に下谷茅町といふをもて、そのまゝ下谷に附記す、

谷中

〔新編江戸志 四〕谷中

駒込と上野との谷なるゆへ下谷に對して谷中といふ成るべし、されど古名にはあらざるにや、北條分限帳にも此名あり、

〔御府內備考 二十七 谷中〕江戸志云、谷中は上野の山と駒込との谷なるなれば、谷中といふよし、又下谷に對せし言葉なりともいへりと、按に、北條役帳に、遠山彌太郎江戸屋中三十九貫文の地を領せしよし載たるは、今の谷中なるべし、此餘谷中の地名古書に未だ所見なし、

淺草

〔江戸砂子 二〕淺草 花川戸 新寺町

往古、武藏野より續て、すべて草深き平原なりしが、四谷大木戸の邊より櫻田邊、北は牛込本郷湯島まで山にて、又此邊平原なれども、民家所々にありて、おのづから草も淺きゆへ、淺草といへるとか、

〔南向茶話〕問曰、淺草邊の義承り度候、

答曰、淺草の名舊記にも相見へ候得共、其由來しらず、茅町瓦町居民の說、昔は瓦町にて瓦を作り候、茅町は茅の賣買をなしけるといへり、凡八丁堀の茅場町は、往古茅商賣の所なり、其後明暦年中巳後、此處兩國橋向へ被移候、其後元祿初頃に、只今の本所四ッ目へ被移候由也、是は茅問屋數代商賣致候者の物語也、橋場邊の義、此地の古老物語に、いにしへ此處に橋有候故に、橋場と號しけると云、

〔江戸紀聞五〕淺草

此地は古の千東鄕のうちなりと見ゆ、千東鄕、後は千東村ともとなへし也、既に淺草寺の鐘の銘にも、豐島郡千東鄕金龍山淺草寺とゑるせり、此鐘銘は、後小松院の御宇、至德四年にゑるす所也、淺草の地名も古き世より傳ふる所にして、東鑑等にも載たり、又江亭記に云、東望江戸城よりさして云則平川漂緲兮、長堤縈廻、水石塊偉兮、佳氣鬱芳、鬧之淺草濱と云々、文明八年の記なり又廻國雜記に云、淺草といへる所にとまりて、庭に發れる草花を見てと云々、歌は略しぬ、此記は文明十八年の記なり、又此邊ふるくは工匠、或は刀鍛冶など居りし所と見へて、東鑑、治承五年七月三日の條に、若宮營作の事、その沙汰ありて、鎌倉中を穿鑿ありしに、ゑかるべき工匠のなかりしに、武藏國淺草の大工字鄕司をめし進ずべきのむね、御書をかの所の沙汰人等に下さると、又同月八日の條に、淺草の大工鎌倉へ參上の間、營作を始めらると云々、又北條家分限帳に、淺草の内四貫三百文の地、江戸鍛冶の所領とす、同き書に、千東村四貫二百九拾文の所、江戸番匠領なりと云、是北條家よりあておこなふなり、この比までも、淺草の地は番匠鍛冶など領せし所なれば、世々名だゝる工匠のおりしことゑるべし、

〔御府內備考淺草十三〕淺草は御城の艮に當り、淺草橋外より、北の方橋場新島越に及び、西は下谷に接し、東は大川に限れり、是今淺草と唱るの地域なり、昔は島越、橋場、淺草とは自から分別ありしならむ、又淺草といふ地は、古へ千東鄕のうちなりしと見ゆ、千東鄕、後に千東村とも云、今も千東の名殘れり、現に淺草寺至德四年の鐘銘には、豐島郡千東鄕金龍山淺草寺と記せり、されど淺草の地名も、古くより傳ふる所にして、東鑑等の書にも載たり、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年七月三日丁丑、若宮營作事有其沙汰、而於鎌倉中、無可然之工匠、仍可召進武藏國淺草大工字鄕司之旨、被下御書於彼所沙汰人等中、昌寬奉行之、　八日壬午、淺草大工參上之間、被始若宮營作、〇下略

本所

深川

〔廻國雜記〕淺草といへる所にとまりて、庭に殘れる草花を見て、

多の色はまだ淺草のうら枯に秋の霜をものこす庭かな

〔南向茶話〕問曰、本庄を本所とも相記し候、いづれか正字ならん、梅若の來由に付て舊地と被存候、

如何御聞つたへも候哉、

答曰、本庄は舊名なるよし、武州熊谷先にも同名あり、元祿年中有故て本所と相改むと云、梅若跡之儀、近年尾州人緣起を相記し、其記には、上古圓融院之御治世之事跡とすといへども、愚按に、足利家之時代亂世之頃之事跡なるべし、○中略文明之頃之五山僧横川叟景三の詩集にも、梅若童子悼といへる詩あれば、其頃の事にや、

〔新編江戶志十一〕本所

里談に云、往古は本庄と云るよしを、元祿の比、本所と改けるよしみゆ、

〔新編江戶志十一〕深河

むかしは鱣河とも書り、往古は海邊にして、鱣なども多くありしにや、舊記も、深河の地名有、未其據を得ず、

〔御府內備考一百十一深川〕深川は、慶長の頃、勢州の人、深川八郎右衞門といひしが、此地に來りて新墾せしまゝに、たゞちにその氏をもて地の名とすると云傳ふ事は末に出す、元町の呈書、及猿江町泉養寺の記錄に詳なり、(泉養寺は即八郎右衞門の開基せる寺にて、昔は深川元町の邊に在しといふ、)江戶志に、昔は鱣河と書て、鱣多くおりし地なりといへるは、おそらくは無稽の說なるべし、此深川と稱するも、もとはわづかなる村なりしが、後に市店屋敷など多く出來て、深川町と改められ、又何の比よりか、此邊の總名とはなれり、今みるところをもていはゞ、東西も南北も、そのわたり凡二十四五丁、南は海岸に邊し、北は六間堀森下丁、富川丁、西丁、猿江丁、大島丁に及び、東は大抵十間川(十万坪の東を流れ、龜戶柳島の間へ通る川なり、)に

産物

搆ひ、西は淺草川にそへり、

〔東海道名所記 一〕れいがん島も、江戸の地を離て、ひがしの海中へつきいだしたる島なり、そのむかひ東の方一町半ばかりの海の中に、うし島新田あり、若宮の八幡のやしろある故に、八幡新田と申すなり、新田の北をば深川といふ、この內にあたけ丸とて、日本一の御舟をつながれたり、深川の北は淺草川のすそなり、

〔續江戸砂子 一〕江府名產 井近在近國

靈巖饅頭　日本ばし通一丁目　靈巖山城 〇中略

靈巖和巾　茶の湯に用るふくさ也、右山城にあり、むらさきの色、仕立共によろし、此家の名物也、

鳥飼饅頭　本町一丁目　鳥飼和泉

塩屋饅頭　淺草こまかた堂　子持眞猿屋

壺屋饅頭　元飯田町　壺屋六兵衞

蘭の梅 井唐菓子　本町一丁目　鈴木越後

沙糖漬 本店京都　本石町二丁目通り丁　水本河內

丸屋求肥　神田鍛冶町一丁目　丸屋播磨 〇中略

丸山輕燒　淺草誓願寺門前　茗荷屋九兵衞　京都丸山の製を摸す、餅かたくしまり、風味丸山にかはらず、

米屋白雪糕　神田としま町　米屋七兵衞　小兒乳なきに用之に、その代りをなして育す、蓮肉を吉これを製すと云、元祿の比までは湯島に住せり、御用地に成り、代地此所にわたりて則住す、

柚餅　かちばしの外　眞猿屋

米饅頭　淺草金龍山の名物也、根元は慶安のころ、此所に鶴屋といふあり、その娘およねといへ

る製しそめたり、よつておよねがまんぢうといへるを、米饅頭と呼て、一名となれり、

幾世餅　兩國ばし西の詰　小松屋喜兵衛　餅を一やきざつと燒て餡を點す、風味美也、元祿十七のとしはじめてこれを製す、今諸所に摸して、江都の名物となれり、

助惣麩の燒　かうじ町三丁目よこ丁　橘屋左兵衛　皮薄紙のごとくにして、餡を裹す、麩のやきはいやしきものとす、此助惣が製は、うへ方にもめされ、あぢはひすぐれて美なり、〇中略

薄雪煎餅　やりや町　いせ屋次郎兵衛

花饅頭　回向院前　伊勢屋金三郎

名酒　品々あり　南てんま町一丁目　てつほう町　鳥飼大和　岡本和泉　葡萄酒は腰腎を暖め、寒を避く、熱病瘧家齒の病に飲べからず、〇中略

隅田川諸白　淺草並木町　山屋半三郎　隅田川の水を以、元を造ると云、〇中略

本江麴　本鄕湯島より、江府の酒みそ麴多く出る、芝邊の麴は、增上寺切通しのうへ三田の邊より出る、總じて下町は濕地にて、三四尺下は水也、本鄕又は、三田邊は、土地高く室を玄つらふに煩なし、よつて此職多く右の所に住す、

伊更子麩　芝伊更子當所の麩名物也、齒ぎれよく味ひ美也、

常盤麩　さまぐの花かたあり、此ふ足にてふまず、手にてわく也、　芝神明前　越後屋五兵衛

粟麩　粟をまじへて製す、よつて黃也、　神田かぢ丁二丁ノひがし影道　するがや長兵衛

揚どうふ　疎なし、名物也、他のあげどうふは多くうろあり　神田多町　山家屋吉左衛門

華藏院豆腐　かたちまんぢうのごとし、あぢわひつれにすぐれたり、　淺草花藏院門前　七軒町

淡雪どうふ　ゆしま切通し　山田や權兵衛、兩國ばし日野屋藤次郎

祇園どうふ　湯島天神前茶屋　京祇園二軒茶屋の田樂を摸す、とうふをうすく切、少炙葛溜、蕃

椒或は生姜を點ず、昔の製は、又異なりといへども、味ひ甘美也、

金龍山奈良茶　淺草金龍山の奉茶屋○中略

目川菜飯　淺草雷神門廣小路　東海道石部草津の間、目川村にて製する所の風味を摸す、

大佛餅　淺草並木町　根元は京誓願寺前に有、又方廣寺大佛殿の門前伏見海道にあり、淺草にて製するはこれを倣ふ也、○中略

ひやうたん屋そば切　舟切の名物也　かうじ町四丁目へうたん屋佐右衞門○中略

深川鮓　ふか川とみよし町柏屋

藤十郎茶　神田紺屋町二丁目　伊勢屋藤十郎　上下品のせんじ茶數品、年々駿遠の山方に至りて、元をたゞすのよし、○中略

宇治挽茶井煎茶　本石町十軒店　八幡屋覺右衞門

池の端香煎　煮山椒　池のはた中町　酒袋加兵衞

油揚　ゆしま天神切通し　烏もどき茸もどき品々

車屋心太　大豆粉沙糖を點ず、第一磯の匂なし、芝橋南詰車屋八左衞門　ところてん草は石花菜の事也、こゝろふとゝ云は、こゝろはこゞるも也、○中略

編笠燒　又音羽燒とも云　目白下音羽町九丁目　若狹屋　かたちあみ笠に似たり、黄色青色あり、當地やき餅の權輿といふ

鹽匠木履（けはうあしだ）　新いづみ町　平四郎

淨林釜　鐵鉢蘆屋風、眞天明風　鑄物所　八丁ぼり北島　大西國貞○中略

新身　播磨物　江府にて一軒の產　神田ぬし町　新身屋久左衞門

國廣鍔　新つば一流　神田かち町　鍔師國廣

藤四郎燒　茶碗水さしの類　淺草聖天丁　高原藤四郎
瀨戶助燒　茶碗水さしの類　すきやがし　瀨戶助
花林尺八一流の細工古今類なし　兩國元町　花林淸兵衞
翠簾屋針　京橋四方やしき
勘三釣針　御用御釣針師　兩國東詰　吉川勘三
刃金燧所々にてひさぐ、まかれどもこれを根元と稱す、　芝神明前　升屋三郞兵衞
神田箒　藁みごの箒也、むかし神田にて製しけるによつて此名あり、今其家とてもなし、所々にて製すといへども、此名を矩摸とす、
堺町雪踏　堺町よこ町長五郞屋敷門並に有、俗にせきだ町といふ也、切廻雪踏と云あり、此所の名產也、〇中略
淺草紙　漉返し紙也、田原町三軒町の邊にて漉之、〇中略
今戶瓦　今戶、橋場、本所中之鄕、瓦師多し、〇中略
淺草海苔　雷神門の邊にて製之、二三月の比さかんなり、
品川生海苔　品川大森の海邊にて取ル、淺草にてせいする所ののりは、則此所ののり也、
葛西海苔　葛飾郡　桑川　舟堀　二の江　今井　これらの所にて取り、其所にて製す、名產也、
淺草のりに似て又異也、〇中略
葛西菜　かさいは淺草川より東の總名也、前は下總の內なり、近年武藏に屬す、江府より二里三里ひがし也、此所の菘いたつてやはらかに、天然と甘みあり、他國になき嘉品なり、〇中略
千住茄子　足立郡也、江戶より二里東に當る、
寺島茄子　西葛西の內也、中の鄕の先、江戶より一里餘、〇中略

早稻田茗荷　牛込の内高田の近所　他所にすぐれて大く、美味也、江府のめうが多く此邊より出る、

地覆盆子　牛込の先き關口の邊より出る、○中略

佃の白魚　又麪條魚　又白小と云　初春海にあつて、二月の比川にくる、○中略

淺草川の白魚　むかしは此海川になかりしを、寛永の末の比、志ら魚の胤をまかせられしと也、

淺草川紫鯉　駒形堂花川戸の邊也、此鯉色金紫也、山州淀川の鯉より勝れたりとす、○中略

江戸前鰺　中ぶくらと云、隨一の名產也、總じて鯛平目にかぎらず、江戸前にて漁を前の魚と稱して、諸魚共に佳品也、

業平橋蜆　中之鄕なり、平橋の堀にて取る、名產也、○中略

鐵炮洲鯊　てつほうづ、石川島、永代橋の邊上品也、○中略

深川蛤　佃沖、辨天沖、秋の末より多に至、貝こまかにして、すぐれて大きなるは稀也、○中略

淺草川手長海老　兩國橋の少上、又本所竪川橫川にあり、

揚場川手長海老　牛込御門の外吐水より下手の御堀　八足の内二足すぐれて長し、○中略

品川鱚　志はさひといふ、大サ四五寸計、又尺ぐらいも有、味ひ淡し、

深川鰻　大きなるは稀なり、中小の内小多し、甚好味也、

池の端鰻　不忍の池にてとるにあらず、千住尾久の邊よりもて來たるよし、すぐれて大きく、佳味也、○中略

千住鮒　かたちひらくして小さし、二三寸計、五寸を大とす、風味琵琶湖の鮒に、おとらず、○中略

芝苗蝦　大さ一寸にたらざる小海老也、○中略

芝海老　芝浦の名產也、車海老よりちいさく、全身やはらかにして甘美也、秋のすへより初冬に

至りさかん也、○中略

宮戸川鯰　關東には鯰なきよし、古來よりいひつたへたりしが、享保七八の比より淺草川に多し、上方の鯰とはかたち異なれども、大方は似たり、○中略

深川鯔　深川冲にて取る、名産也、○中略

金魚　所々にて賣　元和年中異邦より渡る、飼魚にて、江河になし、藻の中に子をなす、○下略

〔假名世説〕延寶二年、道久下人彥作が書ける國町の沙汰に云、木挽町山村が芝居にて、一心二河白道一心二河白道は、丹波國千安の地藏の緣起なるよし、京都にても此佛をくわんじやうし、其名を同號す、土佐少掾上るりを根本ほしかとも是をまなぶ、堺町にて櫻姬に掃部を出だし、木挽町にては類之介を出だす、昔の櫻姬いかで及ばんや、二代目とやらん、面白きよし江地の尊卑是をそらざまになし、あゆみをはこぶ、見ずなりなんも口をしく、誰かれぐして行くべしなどゝて遣し、本より望心は深き最上川、のぼればくだるいな舟の、いなにはあらずとて、よろこぶけしきになん見えたり、棧敷もそこそこ、終日の慰にとてさげ重、せいろうの色ことに艶なるに、鹽瀬まんぢう、さゝ粽、金龍山の千代がせしよね饅頭、淺草木の下おこし米は、木の下おこし米は、勢州山田の者、來りてこしらへるなり、則木の下のものなる故名付く、白山の彥左衛門がべらぼう焼、べらぼう焼は、ふのやきにして、ごまをかけ、其色くろし、八町堀の松屋せんべい、日本橋第一番高砂屋がちりめんまんぢう、麴町の助三ふのやき、兩國橋のちゞらたう、ちゞらたうは、風味甚甘美なり、風邪をさり、氣を散じ、諸病に宜とて、今專ら賞翫す、芝のさんぐわんあめ、大佛大師堂の源五兵衛餅、源五兵衛餅、おまんかたみにせしとて、江地の下俗賞翫す、その色黃にして丸し、おしゆん、殊の外好物なり、武藏の名物とりとゝのへ、さん敷に忍び入り、終日あく氣色も色もなきは、櫻姬となりし頬之助を、露のゆかりの玉かづら、心にかけて思ひ染めつなるべし、

按、延寶の比の江戸の名物こゝに盡くせり、此頃いまだ兩國橋の幾代もち、金龍山の淺草餅、本郷笹屋のごまどうらん、鎌倉がし豐島屋の大田樂、市谷左内坂の栗燒などはなしと見えたり、今にのこれるは、麴町の助惣ふのやきばかりなり、洞房語園にふのやきの事みえしは、ふるき

事なり、

〔江戸人口小記〕享保より天保迄子午改　江戸府内人別書抜

御府内人別〇中略

享保六丑年改諸國人數調の初年　一五十萬千三百九十四人　同十一午年改　一四十七萬千九百八十八人　同十七子年改　一五十三萬三千五百十八人　元文三午年改　一四十五萬三千五百九十四人　延享元子年改　一四十六萬百六十四人　寛延三午年改　一五十萬九千七百八人　寳暦六子年改　一五十萬五千八百五十八人　同十二午年改　一五十萬千八百八十人　明和五子年改　一五十萬八千四百六十七人　安永三午年改　一四十八萬二千七百四十七人　同九子年改　一四十八萬九千七百八十七人　天明六午年改　一四十五萬七千八十三人　寛政四子年改　一四十八萬千六百六十九人　同十午年改　一四十九萬二千四百四十九人　文化元子年改　一四十九萬二千五十三人　同七午年改　一四十九萬七千八十五人　同十三子年改　一五十萬千百六十一人　文政五午年改　一五十二萬七百九十三人　同十一子年改　一五十二萬七千二百九十三人　天保五午年改　一五十二萬二千七百五十四人

右者御城下豐島荏原葛飾三郡町奉行支配場町人、寺社門前町々共、地借店借召仕當歳迄の人數、尤他支配之町人、能役者、幷町宅にても武家家來之分は、右員數之外に候也、

正德より弘化迄　江戸町數人口戶數

正德三年癸巳改

一江戸町九百三十三　内六百七十四町奉行支配　二百五十九御代官支配

享保七年壬寅三月改

一町數千六百七十二町　一家數十二萬八千五百七十五軒

一人數五十二萬六千二百十一人　內男二十二萬五千七百人　女三十萬五百十一人
外ニ　沙門三萬六千九十六人　修驗者六千十五人　社人　九百三人　盲人千人

享保八年癸卯五月改

一町數千六百七十二町　一戶數十二萬八千五百五十五軒
一人口五十二萬六千三百十七人　內男三十萬五百十人　女二十二萬五千八百七人

享保九年甲辰七月改

一町數千六百七十二町　一人數五十三萬七千五百三十一人
外ニ　沙門二萬三百九十人　修驗者四千二百七十五人　比丘尼五千八百三十六人　社人
九百三人　大神樂荒神拂神子共六千七百二十三人　新吉原八千六百七十九人　內男二千
九百十八人　女千八百五十四人　遊女小女共三千九百七人

享保十年乙巳九月改

一町數千六百七十二町　一戶數欠
一人口五十三萬七千五百三十一人　內男三十二萬二千四百二十三人　女二十一萬五千百
八人

享保十一年丙午改　一人口四十七萬千九百八十八人

享保十六辛亥年江戶人數改

一町數千六百七十二町　但表通家持十二萬八千六百軒
一人數五十二萬五千七百人　內男三十萬五百十人　女二十二萬五千百九十人
外ニ　出家二萬六千五人　山伏三千七十五人　禰宜九百人　新吉原　內男二千九百六十
二人　女八千九百九十八人

享保十七年壬子改　一人口五十三萬三千五百十八人

元文二年丁巳江戸町人別改

一町數千六百七十二町　但表通家持十二萬八千五百七十軒

一人別五十二萬六千二百十二人　內男三十萬五百十二人　女二十二萬五千七百人

外ニ　出家三萬六百九十五人　山伏六百七十五人　禰宜九百三人　盲人千十人

元文三年戊午改　一人口四十五萬三千五百九十四人

寬保三年癸亥改

一町數千六百十八町　一家數十二萬八千五百七十五軒

一人數五十一萬五千百二十二人（寬延寄讀二人を一人とす）　內男三十萬十三人（同三人を二人とす）　女二十一萬五千百九人

外ニ　沙門三萬六千六百九十五人（以下寬延寄讀せず）　修驗四千二百七十七人　尼五千八百三十一人　大神樂以下六千七百二十三人　盲人千二百八十九人　新吉原八千六百七十九人

延享元年甲子改　一人口四十六萬百六十四人

延享三年丙寅四月改　一人口五十四萬四千二百七十九人

一本に江戸町奉行支配場地借店借召仕共、五十四萬四千二百七十二人に作る、

寬延三年庚午十二月改　一人口五十萬九千七百八人

寶暦六年丙子改　一人口五十萬五千八百五十八人

寶暦十二年壬午改　一人口五十萬五千八百五十八人

明和五年戊午改　一人口五十萬八千四百六十七人

安永三年甲午改　一人口四十八萬二千七百四十七人（以下天保五年迄の調べ殆ど前文同樣故略す）

天保十二年辛丑五月改　一人口五十六萬三千六百八十九人　内男三十萬六千四百五十一人
女二十五萬七千二百三十八人
天保十三年壬寅改　一組々番外共總町數千六百七十五町
天保十四年癸卯改　一町數千七百十九町
弘化二年乙巳五月改　一人口五十五萬七千六百九十八人　内男二十九萬三千三百九十一人
女二十六萬四千三百七人
附言、江戸町數、戸數、人口、享保十六年、及び元文二年のものは勘定所より得たり、其餘は好事家の記錄より取たる也、併せて年次を以て之を列記す、故に書式一ならず、精粗同じからずといへども、享保以來調査の大槪は左の如し、
一町奉行支配場の町人、寺社門前町々共、地主、地借、店借、召仕、當歳までの人數を擧たる事、
一他支配の町人を除きたる事
一能役者を除きたる事
一武家及武家家來を除きたる事
一僧尼、修驗者、社人、盲人、巫祝の類ひ、及び新吉原遊廓を員外に置たる事、
右數條に注意し、首尾通覽せば、概略を案ずるに足らん、
〔半日閑話七〕一江戸總町數并男女數之覺
一享保二十年乙卯四月改江戸中人別
一町數千六百七拾貳町　一表通り家持拾貳万八千五人
一人數五拾貳万五千七百人内男三拾壹万六千七百人女貳拾万九千人
外　貳万六千五人出家　三千七拾五人山伏　九百人神主　八千九百六拾人新吉原内男五千八

〆五拾六万四千六百人　此外ニ旅人旅僧穢多非人不ㇾ入（百九拾八人、女貳千九百六拾貳人、）

〔蜘蛛の糸卷〕市中の人數

同月（○天明七年五月）廿日の蜂起より、廿一日、廿三日、廿四日まで、江戸中諸商人戸をとざして業をせず、依ㇾ之米はさらなり、諸人日用の品に困る、廿五日初めて戸を開く、町奉行に公命ありて、御救被ㇾ下、（曲淵甲斐守牧野大隅守）四日市に小屋かゝり、施行場とす、壹人に玄米貳合五勺、豆貳合五勺、銀三兩貳分づゝ、小兒七歲以上迄、御救被ㇾ下、此時町家の人數を捻戶ありしと、ある記に、

町數二千七百七十餘町

表店二十萬八千餘家

市中總人數百二十八萬五千三百人

内（八千二百人男　六千三百人女　二千五百人遊女共）

出家五萬二千四百三十人（一向宗の女除く）

山伏七千二百三十人（妻帶の者の女除く）

神職三千五百八十人

右の外御用達町人、能役者、諸家の家業町住の者は除くなり、

〔一話一言二十六〕寛政十年戊午江戸人別

武藏國　武州

一人數四拾貳万五千百貳拾四人（豐島郡之内）　内（貳拾四万五千七百六拾六人男　拾壹万九千三百五拾八人女）　但

同斷　右同斷

一人數壹万八千六百七拾九人（荏原郡之内）　内（壹万三百三拾四人男　八千三百四拾五人女）　但（當午四月人數改當歲以上）

武藏國武州江府　御城下町井寺社門前町屋共

一人數四万八千六百四拾六人　葛飾郡之內　内貳万七千六百八拾三人男 貳万千五百八拾三人女　但當午四月人數改當歳以上

人數合四拾九万貳千四百四拾九人　内貳拾八万三千百六拾三人男 貳拾万九千貳百八拾六人女

右者武州江府御城下、豊島郡荏原郡葛飾郡之內、拙者共支配町方、并寺社門前町屋男女人數、書面之通御坐候、以上、

寛政十午年五月　町奉行　村上

小田切

御勘定所

〔甲子夜話八十八〕文化十二年御改之寫

江戶武家町家總人數井町數

一町數千六百七十八町井家持町人家數拾八萬八千軒　一町人五拾三萬二千七百十人　一出家二萬六千九十人　一山伏三千八拾一人　新吉原八千四百八拾人　都テ五十七萬四千二百六拾一人

一武家方人數二億三千六百五拾八萬三百九十人

此米百億八萬五千七百三十九石五升五合

俵數二百九十六萬四千三百四十七俵二斗五升五合

代金百十八萬五千七百三十九兩三匁五分

右ハ江戶中一日之入用高積被仰付候ニ付、町奉行根岸肥前守於御役宅、宗門帳改有之候書留ナリ、

右之外無宿非人不知數

〔日本地誌提要 二東京〕市坊　壹千壹百七拾七町、六大區ニ分チ、七拾小區ヲ置、

戸數　壹拾四萬九千三百八拾三戸（内寄留壹萬五千壹百八拾四戸）　社壹百零四　寺壹千零貳拾六

人口　五拾九萬五千九百零五人（男三拾壹萬零々五拾零人、内寄留五萬三千壹百六拾貳人、女貳拾八萬五千八百五拾五人、内寄留貳萬九千四百三拾八人、）

○按ズルニ、本書ノ凡例ニ戸數人口ハ戸籍寮明治六年一月一日ノ表簿ニ据ルトアリ、

風俗

〔燕石襍志 三〕わがをる町

ゆたけき御代の長久なる隨に、物として今大江戸に具足せざるはなし、しかれども昔ありて今なきものは、神田の勸進能、（明神の社地にありしといひ傳ふ、）說經座、（堺町天滿八太夫）耳ノ垢取、（名を長官といふ、神田紺屋町三町目にをれりと、江戸總鹿子に出ヅ、）獸の蠢銕師、（永右衞門と稱ス、湯島天神前にをれりと、同書に載たり、）被衣したる女子、野呂間人形つかひ、碁盤人形つかひ、山猫まはし、おはらひおさめ、すたすた坊主、太平記よみ、（街頭に立て太平記をよみ、錢を乞しもの、）唄比丘尼、五月の菖蒲人形賣、扇の地紙賣、奉書足袋賣、（紙にて足袋をつくりて、雨中に新吉原にて賣しとぞ、）これら今はなし、このうちすたすた坊主、おはらひおさめ、唄比丘尼と、扇賣は、二三十年以前までありけり、十歳前後の小比丘尼ども、黑き頭巾を被り、裾を高く引あげ、腰に柄杓を插たるが、三四人を一隊とし、老尼に宰領せられて、人の門に立、いと訛たる聲してうたを唄ふに、物ぞとらせざれば、おやんなといふて催促せり、昔は髱をすりて唄ひしかば、今に比尼髱の名は遺れりとぞ、地獄變相の圖を說示して、愚婦を泣せし熊野比丘尼の流なるべし、伊勢比丘尼の事は、自笑が愛敬昔男といふ冊子よくその趣を盡せり、扇賣は地紙の形したる箱をかさねて肩にし、每夏に巷路を呼びあるき、買んといふ人あれば、その好みに任し、卽坐に是を折て出しき、唯今三十以下の人は、かゝる事をもしらざるべければ、年のをはりの雲祭は、建武の比旣に絕たるが、東のかたにはなほありと、兼好が徒然草にはいへれど、今は東にても俗子はさる事ありともしらずなりぬ、京の懸想文賣、伊勢の街入泉州堺なる九月の鰯祭も、僅にその名を存するのみ、近屬江戸にて猫の畫かゝんと呼びあるきて生活と

したるものありしが、しばしが程にて跡なくなりつ、又猫の蚤をとらんと呼びあるきて、妻子を養しものもありけるとぞ、これも遠き事にはあらず、猫の蚤を取らせんといふものあれば、まづその猫に湯をあみせ、濡たるまゝ毛をひかざる獸皮へ裹ておくに、猫の蚤悉その皮へうつるといへり、工夫はさることなれど、かくまでに猫を愛するもの多からねばや、これも長くは行れず、亦南京操といふ人形は、予〇瀧澤馬琴が少かりしころまで、兩國橋のこなた廣巷路の勾欄にて志たり、狂言は、一年中國姓爺の虎狩の段のみをして見せたりしが、いつの程にか絶て、その跡今は輕業をするなり、黃精賣、辛皮賣、麻賣など、予が幼稚かりし比までは、每春に日としてその呼び聲を聞ざる事なかりしが、今はいと〳〵稀になりつ、夏日街頭に立て、水一碗を一錢に賣ことは、いづれの比よりといふよしを詳にせねど、江戶の外にはかゝる事なし、實に海內の大都會也、仰べし、亦予がものこゝろ覺る比までもなくて、今盛に行るゝものおほかり、錦繪は、明和二年の頃、唐山の彩色摺にならひて、板木師金六といふもの、版摺某甲を相語、版木へ見當を付る事を工夫して、はじめて四五遍の彩色摺を製し出せしが、程なく所々にて摺出す事になりぬと、金六みづからいへり、明和以前はみな、筆にて彩色したり、これを丹畫といひ、又紅畫といへり、今に至ては江戶の錦繪その工を盡せる事、絶て比すべきものなし、さはれ近屬は、紅毛の銅版さへこゝにて出來、陸奥なる會津人すら、彼錦繪を摸してすなれば、世人既に眼熟て奇とせず、彼金六は文化元年七月身まかりぬ、當初彩色摺といふものはじめて行れし時、その美なること錦に似たりとて、世挙て錦繪の名をば負しけん、何ごとも品類多くなりては、賞翫すべきものも賞翫せず、只世に稀なるものを愛たしとするは、奇に誇らんとの爲なるべし、亦紙烟草入といふもの、予が幼稚かりし比までは、伊勢より出すものと、下野なる宇津宮より出すものを、人々賞翫したりしが、これも程なく細工人出來て、今江戶より出す紙烟草入は、世に敵手なきに至れり、亦看版書といふもの、商

人の店前なる障子行燈を張更、その需に應じて數个字を題する事、予が弱年の比までは聞も及
ざりし事也、これらはわきて便宜の技なれば、のち〳〵までも行はるべし、亦挑丁入といふもの
を賣あるくも、十年以來の事也かし、挑丁へ銅の鏇を著ることは、正保年間より起ると、武家故事
要略にいへり、磁器の燒繼せんとて、巷路を離あるくことも、二十年以來の事也、繼漆などいふも
のにて繼たりしに比れば、便利にして大によし、婦女子の髮を結ぶ事なども、予が幼稚き比は小
頭坐を入れて、根をひとつにして、鬢と髱をかき出し、髱入といふものを入れて髱を長くしたれ
ど、今のごとく鬢插といふものはなかりき、その後髮の結ざま大に變りて、少女も老女も、鬢と髱
を別にとりて、紙張なる簪の形したるもの髱の形したる物を入れ、市中の女子は前髮を短くし
て、刷毛の如く上へかきあげておく事になりつ、衣裳に袖口かくる事、東にてはせざりしに、寛永
年間より良賤これをすといひ傳たり、それも明和年間までは、袖口を太くして丸く括りたるに、
今は絲を薄くして括ることをせず、鉋といふものも、寛文年間までなかりしとぞ、和名かんなと
は、かきなぐる義なるべし、吹革といふものも、元祿年間までは罕なりしにや、元祿三年七月に開
板したりし、人倫訓蒙圖彙に見えたる鍋の鑄かけは、火吹竹にて火を吹おこしてをり、觀世紙よ
りは、又三郎はじめたりと、西鶴が男色大鑑にいへり、かばかりの物も、むかしの人は、せざりけん、
紙を漉事のまれなればなるべし、縮紙檀紙は、平人の用ふべきにあらず、伊豆の修善寺紙立野の
紙なども又しか也、いにしへは貴も賤も陸奥紙をのみ用ひたりし、かくまでに物乏しからぬお
ん時にうまれあひたりけるは、いと有がたき洪福ならずや、時に筆硯を措てもて遺忘に備ふ、こ
こに漏せるも夥あるべし、

〔皇都午睡三編上〕江戸は日本國の人の寄場にて、言葉も關八州の田舍在鄕の訛りをよせて、自然
となりし物ゆゑ、江戸詞と云ては甚少なし、其內古風を守り叮嚀の詞も有り、大體京攝の詞を詰

て短かく云ならはせし也、○中略

江戸にて濱側を川岸と云ふ、川岸の路語勿論なり、大坂にて川岸とも云ふ、是路語にて少し異りたる也、京に町と呼ぶ所多くて、丁と唱ゆる所すくなし、江戸は丁といふ方多くて町と呼ぶは少なし、大坂は町と丁と相半なるべし、江戸にて町並よき所にていはゞ、駿河丁、白銀丁、大傳馬丁、石丁、小田原丁、瀬戸物丁、本船丁、伊勢丁、堺丁、葺屋丁、尾張丁、木挽丁などとて丁と呼ぶ方多し、室町、田町、田原まち、麹町など、町と呼ぶ所少からねど、町と云より丁と云方開語に走るゆゑ、多しとしるべし、京にて鉄屋丁、お旅丁、宮川丁、先斗丁と據所なきを丁と呼び、跡は町と呼方多きとゑるべし、大坂は半分宛取合せたればば改いはず、扨江戸で日本橋と走り、大坂にて日本橋と叮嚀にいふ、江戸は短かく詰て云を是とする所なれば、日本橋通と云を、また略して通と計りにて通用させ、通二丁目三丁目と呼來れり、諸事ヶ様に詰ていふ土地なるゆゑ、京攝者の愚痴なる詞に、根から葉からどふもこふも腹が立て〳〵忌々敷て、怪體屎が悪ふて腸が熱くり返つてなることちやないなどと、長たらしく詞をつゞけていへば直に口眞似をして笑はるゝこと也、○下略

〔東海道名所記〕一淺草には観音おはします、貴賤群聚してあゆみをはこぶ、○中略淺草より丑寅のかた半里計ゆきて、角田川あり、この川に都鳥あり、○中略それより東叡山しの輪津が池をめぐり見る、池の中には辨才天あり、東叡山の中には、東照權現の御社あり、○中略春は並木の櫻花、さきつづく枝々吉野はつせの名所にもこえたり、山の上より見おろせば、しのわづが池は、目のした也、南海はれて安房上總も手にとる計に見え渡れり、江戸の城よりは艮にあたれば、都の比叡になぞらへ、東叡の名をあらはし、鬼門をまもる山とせり、○中略これより、○中略巽のかた半里ばかりに、愛宕山あり、これは勝軍地藏と申て、武家殊更にあがめたてまつる、いつの比か、京のあたごを遠江國なるこ坂に勸請し、それそり駿河の國宇津のやにうつし、又この所にうつし奉りける、此山

上にのぼれば、江戸中南海殘らずみゆ、

〔江戸内めぐり〕江戸名所いろは寄

い　守宮池　牛込毘沙門堂の庭に在　井の頭池　四谷中野の先也　壹本松　麻布に在、嫉妬女の墓印を云、いさらご　芝田丁九丁目より南の方を云

ろ　六本木　かはらけ町より西の方

は　旗ケ谷　千駄谷とさゝき村の間を云　班女塚　下谷池の端の榊原殿屋敷に在ト云

に　二本榎の木　ゑろかね原正覺院の側に在　新堀山　谷中の後に有、道灌城跡と云、

ほ　法眼坂　二番町に在　堀かねの井　牛込村に在　星野山　永田丁山王權現の山也　苔蘿曼陀羅石　増上寺に在

へ　屛風坂　東叡山より下谷金杉へ下ル坂也　辨慶堀　かうじ町邊井伊殿屋敷前御堀ヲ云

と　道元坂　ゑぶやよりせたがやに行道ニ在　獨鈷瀧　目黑不動の山にあり　常盤橋　せたがや領の宿の入口に在、小みぞにかゝれる橋也、御城下常盤橋と不可混、

ち　千葉塚　はらば村總泉寺に在、　千葉石　本所龜井戸天神の少過て在

を　落合の坂　今井村赤坂新丁などより往還の行合　小栗坂　鷹匠丁水道橋へ上る所の坂也　狼谷　四ツや新町より先筆塚と云所也　面影橋　なるこ宿と中野村との間に在　おとか淵　兩國橋と三またの間を云よし　大塚　駒込村の先塚の上に不動有

わ　別の淵　三股に在、愛瀾水のわかれ也、

か　霞が關　櫻田松平安藝守殿、松平筑前守殿屋敷の間を云也、古歌に讀る霞ケ關也、　鏡が池　あさぢが原也、梅若丸の母、我子のいくゑをあくがれ、此所迄尋來り、我子の死したる跡に庵をむすびゐけるが、此池にのぞみて、我面かげのおとろへたるをみて、其儘この池に身をなげ、

むなしくなれりと也、　龜の井　神田すだ町ニ在　海晏寺の紅葉　品川海晏寺と云禪寺の後山、一色にみな紅葉也、　島の森　愛宕の下いなりの森を云　鎌が淵　淺草駒形堂の前を云　甲塚　かやば町牧野殿屋敷の內ニ在

よ　横堀　淺草川也、爰ニ立堀有ニ對して、横に有故かく云也淺草川を東へ本所ニ至る川也、　鎧の渡　かやば町より小網町へ行渡しを云、古へ平將門此所ニ來り、甲鎧を置たると云、甲は甲塚とて、今牧野殿屋敷に在、　代々木野　中野先也

た　立堀　淺草川を東へ本所ニ至る川筋也　溜池　江城の西方山王の後也　玉川瀧　赤坂松平出羽守殿屋敷ニ在　高尾の紅葉　葉柴村正光院と云淨土寺に在、そのかみ吉原三浦四郎左衞門が女郎、二代目の高尾とて、いと名高き大夫有て、万治の初方身まかりけり、其からを今の正光院の内に埋て、傳譽妙心と改名して弔をなせり、名女の名殘もいとあはれなれば、名によそへて紅葉一もと植て玄るしとせしに、大木と成、人のなつかしみをうくる色木と成れり、

つ　杖いてう　麻布ニ在、親鸞上人つき給へる杖をさし給ふが、榮て大木となれりと云、　佃島　伊勢佃のりやうしの集て築たてたる島なれば、かく稱すると也、鐵炮洲也、　綱塚　芝聖坂功雲寺に在

な。　業平渡　淺草竹町より向へ越ス渡し也　中野　四ッ谷の淀橋の先を云

う　姥が池　淺草の東明王院の庭にあり、いわれことごとしう云侍る白口　牛島　淺草川の向ひ也、下總の內也、

の　野中の井　谷中三崎の邊野中に在

や　柳の井　湯島天神男坂の下ニ有、又虎御門の內朽木殿屋敷脇にも柳の井と云有、　柳島

本所龜井戸の近所也、

ま　眞土山（まつち）　千住海道也、山上に聖天宮在、

眞土山夕こへ暮ていほ崎の角田川原に獨かもねん　是夏の事也、夏日にはいくばくの遊船を浮て、納涼のあせをすゝけり、　万年石　品川東海寺の泉水に在

ふ　富士見坂　赤坂松平出羽守殿屋敷の前也　富士見馬場　牛込若宮八幡の近所也

こ　小路町の井　神田明神の内に在　御福の井　初は傳通院の内ニ在、今は松平播磨守殿屋敷の内ニ在、　金王櫻　澁谷八幡宮の邊ニ在、澁谷金王丸が植置し木成といへり、古木は枯て新樹也、　腰掛松　目黒不動の坂口に在　幸國谷（かうこく）　市兵衞町より赤坂へ行坂也　骨塚原（こつかはら）千住礫場の近所一片の原也、

あ　淺草川　角田川也、又は三屋戸（みやと）川共云、　あか羽川　白銀原の先也、今新堀へ續て流、かはらけ町の末の橋を、あかばね橋と云、其ひろこうじを、なべてあかばねと云、白銀原の先と云は、川上をさすらん、　淺茅が原　妙喜山の近所也　葵の岡　虎御門外織田殿屋敷前溜池池上江出る坂の辻番所の脇を云

さ　櫻川　芝ニ在、今源助橋の流をさか云と、　鷺の森　麻布元御藥園の先也、宮在、　三途の渡　淺草かや町より向へ渡る所を云也、明暦中燒死たるものを、舟に積て無緣寺に運びける川口なれば、初て三途の渡シとはいへる也、

き　行人坂　目黒の入口也

め　妙龜山　あさぢか原、總泉寺の前也、梅若丸の母堂をいへる山號也、　目黒川　行人坂の下こりかきば也　目黒原　此原を上めぐろ、中めぐろ、下めぐろとて、打つゞきて廣野也

み　三川島　谷中の後に在、往昔三河の諸士供奉の恩賞に給る地也、

ゑ　清水坂　かうじ町尾陽公ト井伊家の間を坂をいへり、　不忍池　上野の下也、辨才天の島あり、　白銀原　さぎの森の先よりなべてかく云　忍の岡　東叡山を云　品川の冲　毎年三月三日鹽干の眺望、住吉の冲にひとし、

ゑ　江戸見坂　虎の御門外松平大和守殿ト、牧野駿河守殿間の坂也、　右衛門櫻　四谷の末ニ在、此木誠に名木にて、春興宴樂不斜、此所をかしわ木村と云、　永代島　本所の隣也、八幡宮在、

ひ　ひじり坂　芝三田功靈寺の前也

せ　關口の川　目白不動の下に在、水道の枝川、

す　角田川　角田川はむさしと下總中間也　駿河臺小川町の上の臺也

〔江戸鹿子　五〕江戸八景

隅田夜雨　忍岡秋月　增上晩鐘　鐵洲歸帆　淺草晴嵐　愛宕夕照　富士暮雪　目黒落雁

〔慶長見聞集　六〕江戸町境論の事

江戸町わりは、十二年巳前の事なり、其頃賣買に、金一兩二兩の屋敷は、今百兩二百兩五百兩のあたへする、町さか行まゝ、皆人やしきを高くつきあげ、家をあたらしく作りなほす、昔の境ぐゐを尋るに、ほそきくひを立置つれば、みなくさりて一々其印一つもなし、然間寸地分地の境をあらそひ、人毎に云事して、近き隣も心遠くへだゝりぬ、

古事類苑

地部十三

安房國

安房國ハ、アハノクニト云フ、東海道ニ在リ、北ハ上總ニ界シ、東西南ハ海ヲ以テ繞ラシタル半島ナリ、東西凡ソ拾里、南北凡ソ七里、其地勢ハ、北方上總ト境ヲ接スル所、山脈横走シテ自ラ國界ヲ爲シ、支脈南走シテ中央ヲ貫ク、此國ハ古ヘ國府ヲ平群郡ニ置キ、平群(ヘグリ)、安房(アハ)、朝夷(アサヒナ)、長狹(ナガサ)ノ四郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、明治維新ノ後、四郡ヲ合シテ安房一郡ト爲シ、千葉縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕安房 阿八

〔饅頭屋本節用集 天地〕安房(アハ) 安房州

〔日本風土記 一寄語島名〕安房 阿(ア)乞(ワ)

〔倭訓栞 前編一阿〕あは 安房國も、古事記に東之淡と見え、阿波の忌部の居たりしよりの名なる事、古語拾遺に見えたり、

〔安房概志 一〕國號基原

古語拾遺ニ載ル如ク、四國粟(アハ)ノ國ヨリ來レル齋部氏居住ノ地ナルヲ以テ、安房郡ト名ク、古書ニハ阿波(舊事紀)或ハ淡(日本書紀)マタハ阿八(和名抄)ナドミエタリ、何レモ粟ノ辭ニ就キ、文字ノ音訓ヲ假借シタルマデノコトニシテ別義ナシ、斯テ養老二年ニ至テ、此國ヲ置キ、之ヲ安房ト稱スルモノ、既

ニ阿波齋部氏、天富命ニ隨從シテ、コノ地ニ來リ、土民ノタメニ、麻穀ヲ播植シ、土民コレニヨリ、衣食餘リアツテ、其處ヲ得タリシカバ、阿波齋部ノ功勞德澤莫大ナルヲ、萬世遺忘スベカラザル爲ニ、安房ノ郡名ヲ取テ、直ニ國號トハ定メ玉フナリ、一說ニ、安房ハ淡ナリ、味ノ淡薄ナルヲ云、卽チ淡水ノ義ニシテ、海水ノ鹹ニ、溪澗ノ流水相混和シ、之ヲ嘗ルニ、其味極テ淡薄ナルナリ、今ノ安房平群二郡ノ海濱、山澗ノ流水幾條トナク落テ海ニ入ル、依テ此邊海水ノ味、之ヲ嘗ルニ自然淡薄ナレバ、淡國トハ名ケタリト云、又一說ニ、上古當國平群ヨリ、上總天羽(アマハ)ニ接スル海濱、陸地ヲ距コト數里ニシテ、海面ニ屛風ヲ展タル如キ山巖、聳峙環抱セリ、天皇其中間ニ於テ、舟行アリシニ、風濤聊沸起セズ、平坦宛モ湖水ノ如クナレバ、淡水門ヲ淡ト云シナルベシ、今ニ海潮退クトキハ、遙ニ礁石ノ水面ニ透ヲ見ト、(房總志料此說ツトル)コレ淡ヲ以テ平淡ノ義トスルナリ、或ハ古昔阿波淡等ノ文字ヲ用シカドモ、元來總(フサ)ノ國ヨリ割タル國ナレバ、其訓ヲ存シテ安房(アハフサ)ノ字ニ改メラレシナド云、諸說各一理アリトイヘドモ、古語拾遺ニ據テ郡名ヲ取リ、直ニ國號トナスノ說ヲ以テ是ニ近トスベシ、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

安房洲崎村、極高三十四度五十八分半、經度東三度五十八分、從東都日本橋至永代橋、沿海四十三里八町五十七間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

安房　勝山　三五度〇六分三〇秒(略〇中)

東西、里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(略〇中)　安房　勝山　東四度〇四分〇〇秒

[illegible]

〔安房樞志一〕海防

當國ノ形勢タル東南大洋ニ面シ西方ハ海ヲ隔テ、伊豆相模ノ二國ト相對シ、一大海港ヲナセリ、北ノ一方高山峩々トシテ相連リ、上總ト國界ヲ接ス、

〔日本地誌提要 十九安房〕疆域　北ハ上總、東西南ハ海ニ至ル、東西拾里、南北七里、

〔房總志料 二安房〕鋸山、上總天羽郡、此山を越ぬれば、安房地平郡也、○中略

一長狹郡小塚村より、上總周准郡鹿野山へ行路に、木の根といふ絕頂あり、是則房總の界也、それよりくだれば、上總天羽郡賣村と云所に至る、行程二里、關村安房より上總の地、天神山への路なり、

〔房總志料 四上總附錄〕一房總の界は、安房の地長狹郡小湊浦と、上總夷灊郡大澤浦との間をいふ也、

〔房總志料 五安房附錄〕一長狹郡に壤を接せる上總の郡は、夷灊望陀の二郡なり、平郡は天羽と接せり、

島嶼

〔日本實測錄 九島嶼〕安房國長狹郡　遠測　辨天島小湊　辨天島興村

安房郡　遠測　沖島　タカノ島

平郡　遠測　雀島　浮島

地勢

〔易林本節用集 下〕安房州房ハウ中管、四郡、南北一日半、山河原野田里平均、魚貝多、是以田糞用之、大中國也、

〔房總志料 二安房〕安房の地方四郡のうち、其土沃壤なるは、長狹郡を第一とす、次は安房郡、其次は平郡、朝夷郡は半は負海の地也、

〔房總志料 五安房附錄〕一安房の輿地考へがたし、如何となれば、海灣迂曲、廣狹難といふことさだかならず、大抵東小湊浦より西渕崎まで、十二里許もありぬべし、南北は妻郎の鼻より鋸山まで、七八里といへども、是又山道直路の地ならざれば、詳なる事不可知、

一安房の山は、極て崇峻、然れども本州より望に、獨清澄山のみ見ゆ、其他は不見、如何となれば、彼

地方本州より一帶低ければなり、房總の界市ヶ坂より、彼地直下に見ゆるにてしるべし、

〔安房概志 一〕海防

當國ノ形勢タル、嗚〇中略所謂天險ノ地ナリ、室町氏ノ時、安房國ヲ指シテ、小囊コフクロ國ト云、言ハ他邦出入スル道路嶮隘狹絕、一夫是ヲ守テ、万夫過ルコト能ハズ、囊ノ口ヲ括スルガ如シ、故ニ古來ノ英雄、一敗地ニ塗ルノ後、逃テ當國ニ入ル時ハ、敵人之ヲ追ニ及バズ、將軍賴朝、里見義實ノ如キ是ナリ、其勢守ニ利アツテ攻ニ利アラズ、然レドモ三面ニ海ヲ帶ルヲ以テ、海寇ノ預備ナクンバアルベカラズ、光孝實錄曰、仁和二年八月四日、勅令安房上總等國重警不虞、註曰東南海寇ノ來侵ントスル、陰陽寮ノ占兆アルヲ以テナリ、里見氏ノ時ニ及テ、小田原北條氏ノ船兵屢渡海シテ、海岸ノ村落ヲ摽掠ス、依テ海岸防禦ノ令ヲ出セリ、里見氏軍令條ニ、南洲崎ヨリ北明金ノ崎マデ、處々ニ遠見番所ヲ置キ、コレニ金太鼓ヲ設置、變アルニ臨ミ、是ヲ擊鳴スベシ、其聲ヲ聞付、近邊ノ百姓町人共、家財ヲ地ニ埋メ、老人妻子ハ山ヘ藏スベシ、何者ニ限ラズ、走來リ敵ヲ防ニ於テ、厚キ恩賞タルベキモノナリトアリ、是ハ里見氏相州ノ北條ニ相對シテノ防禦ナリ、我神祖建櫜以來、海內承平ナリトイヘドモ、猶深慮アツテ、相模及ビ當國ハ格別咽喉ノ形勢タルニヨツテ、文化七庚午二月廿六日、松平越中守定信、及ビ松平金之助後肥後守容衆、幼年ナルニ依テ、名代保科能登守正德ヲ營中ニ召シテ、異國船渡來防禦ノタメ、相模國浦賀、及ビ安房上總兩國ノ濱浦ニ砲臺ヲ設ケラレ、兩侯ニ引請仰付ラレタリ、後文政壬午三月兩侯御免アリ、浦賀御備場ハ浦賀奉行ノ掛トナリ、房總ハ文武ノ才能アル者ヲ撰ビ、御代官ニ命ゼラレ、專ラ防禦ノコトヲ委任セラル、天保十四年八月四日、松平下總守房總ノ海防ヲ命ゼラル、後弘化四年、松平肥後守ニ命ゼラレ、上總富津ニ戍士ヲ置カル可キ由ナリ、因テ下總侯ハ富津ヨリ移リ、當國北條ニ於テ、新ニ陣屋ヲ取立テ、猶又處々ノ海岸ニ砲臺ヲ築カル、近隣ノ諸侯、變アルニ臨テ、之ヲ救援スベキノ由ナリ、是ハ皇國全體ノ防禦ニシテ、治ニ處テ武ヲ忘ザルノ聖慮ヨリ出テ、南蠻西戎ノハテ迄モ、我邦

如此ノ形勢ニ由テ、嚴重ノ備アルコトヲ知リ、窺覦ノ念ヲ爰ニ斷絶シ、蒼海一點ノ塵ヲ揚ズ、万民枕ヲ千歳ニ高スルモ亦宜ナル哉、

〔本朝續文粹 六奏狀〕散位從五位上大江朝臣時棟誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩依安房國任中勘畢公文功拜任丹後上野出羽國守闕狀

右時棟謹撿案内、○中略安房國之爲體也、山重江複、路遠境遙、黔首之栖邊雲也、家草澤而數閭越之俗、渡口之壘喩浪也、掉木道而過呂梁之危、因之延喜以來、彼國守所任總卅四人之中、纔勘畢公文者、唯六人也、○中略

寛仁四年正月十五日

道路

〔日本實測錄 一沿海〕從三厩沿海至東京、○中略

安房國長狹郡小湊村　一里一十一町三十九間　天津村、三十五度七分、　四里三町二十間至貝渚村余瀬町一里三十町一間　朝夷郡江見村、三十五度三分半、　三里三十町三十七間　北朝夷村濱、至北朝夷村宿所六町三十四間　三十四度五十八分、　三里二十町五十五間半至大川村一里一十二町五間半、從大川至野島崎、一里一十二町五間、　安房郡瀧口村下浦至瀧口村一十三町二十一間　三里二十七町五間半至相濱村一里二十二町九間半　洲崎村、三十四度五十八分半、　三里三十一町三十二間至館山新井浦二里三十二町四十七間、從新井浦至北條八町五十三間、　平郡那古村、至那古村宿所一十一町六間　三十五度一分半、　三里三十五町廿七間至大房崎一里一十五町五十六間半　岩井袋村至岬一十七町四十七間　九町四十三間　加知山、本勝山　三十五度六分半、　一里三十間　吉濱村、三十五度八分、　一里一十三町一十三間至國界三十町五十三間半　上總國天羽郡金谷村

宿驛

〔延喜式 兵部二十八〕諸國驛傳馬○中略

安房國驛馬白濱、川上、各五疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考 二東海道〕安房　古作淡、古事記云、定東之淡水門、淡即安房、或阿波、古語拾遺云、阿波忌部所居、便名養安房郡、國造記阿波國造、即是、

老二年五月、割上總平群、安房、朝夷、長狹四郡置、(按、先是養老之間、此再置、而事不見國史、)至天平十三年十二月、併上總國、天平寶字元年五月、依舊分立、中國、管四郡、二百八十村、

平群七十三村(古府治、御國高輔、平作平、疑脱文、)　安房八十三村　朝夷六十二村　長狹六十二村

〔安房概志一〕割國

上總國四郡ヲ割キ、初テ安房國ヲ置レシハ、養老二年ノコトナリ、夫ヨリ二十二年ヲ過ギ、天平十二年ニ至リ、故ニ復シ、上總ノ國ニ并合シテ、安房國ヲ廢セラル、其中間十六年、天平寶字元年ニ及テ、再ビ養老ノ例ニ從ヒ、四郡ヲ分割シテ安房ヲ置玉ヒテヨリ、今日ニ至ルナリ、房總志料ニ、天平寶字元年依舊分立ノ事ヲ載セズ、万葉集ニミユル郡名ヲ引テ、安房分國ノコトヲ論ズルハ、深ク考ヘザルノ誤ト謂フベシ、

〔日本地誌提要十九安房〕沿革　古ヘ國府ヲ平群郡ニ置、(府中村是ナリ)治承四年、源頼朝ノ本州ヲ徇ル、土豪安西(アンザイ景益)、安餘(アマリ光秀、或ハ金餘ニ作ル、)麻呂(信俊)、東條(秋則)四氏、首トシテ來リ屬ス、頼朝本州ヲ四分シテ之ニ賜フ、正平中、鎌倉管領足利基氏、其執事上杉憲顯ヲ守護トシ、子孫ニ傳ヘ、州守ヲ兼ヌ、嘉吉ノ初、憲顯ノ玄孫淸方、管領ノ事ヲ行フ、州内諸豪約束ヲ受ケズ、互ニ相攻擊ス、神餘景貞其臣山下定兼ニ弑セラル、麻呂信朝、安西景春、定兼ヲ殺シテ、神餘ノ故地ヲ爭フ、景春終ニ信朝ヲ殺シテ、二氏ノ地ヲ併有ス、是時ニ當テ、里見義實本州ニ流寓ス、二氏ノ餘衆往テ之ニ歸ス、文安二年、義實遂ニ兵ヲ擧ゲ、景春ヲ降シ、東諒定政ヲ滅シ、本州ヲ取リ安房郡白濱ニ居ル、足利成氏因テ守護ヲ授ク、(後ニ治ヲ同郡稻村ニ定ム、玄孫義弘上總天羽郡佐貫ニ移ル、義弘ノ孫義康又本州安房郡館山ニ移ル、)子成義上總ヲ併セ、自立シテ房總二州ノ主トナリ、孫義堯下總ノ西境ヲ略取ス、其子義弘ニ至テ兵勢日ニ盛ナリ、相模ノ北條氏ト連戰ヤマズ、義弘ノ孫義康ニ至リ、國勢頓ニ衰フ、天正十八年、豐臣氏東征シ、上總下總ノ地ヲ削リ、僅ニ本州ヲ領セシム、德川氏ニ至リ、義康ノ子忠義、罪有テ伯耆ニ謫セラレ、國除ス、後酒井忠國ヲ

勝山ニ稻葉正明ヲ館山ニ封ジ、最後ニ平岡道弘、封ヲ船方ニ受ク、王政革新、勝山ヲ改テ加知山トナシ、長尾(本多正訥)花房(西尾忠篤)二藩ヲ徙封シ、船方ノ地ヲ收ム、凡テ四藩、既ニシテ皆改テ縣トシ、又廢シテ木更津縣ヨリ兼治シ、更ニ千葉縣ヨリ兼治ス、

〔古語拾遺〕天日鷲命之孫、造木綿及麻幷織布、(○中略)仍令天富命率日鷲命之孫、求肥饒地、遣阿波國、殖穀麻種、(○中略)天富命更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀、(○中略)阿波忌部所居、便名安房郡、(○今安房國是也)天富命即於其地立太玉命社、今謂之安房社、故其神戸有齋部氏、

〔古事記(中卷景行)〕此之御世、(○中略)定東之淡水門、

〔古事記傳(二十六)〕定東之淡水門、東は阿豆麻と訓べし、(阿豆麻てふ名は、倭建命の後に始まりつれど、此はなほ後の傳言なればなり、)淡は安房國なり、(東之と云は、四國の阿波と分むためなり、)(○中略)書紀に五十三年秋八月、天皇詔群卿曰、朕顧愛子、何日止乎、冀欲巡狩小碓王所平之國、是月乘輿幸伊勢、轉入東海、冬十月至上總國、從海路渡淡水門云々、そも〳〵此時淡はいまだ一國の名には非ず、上總國の内にて、其水門と云は、安房と相模國御浦郡の御崎(今も御崎と云)との間を、大海より入海に入る海門なり、(此入海は、東は上總、西は武藏、北は下總にて包めり、淡水門は、其南方の口なり、さて今天皇の、此水門を渡坐しとあるは、還り上坐道にて、上總より相模へ渡り賜ふなり、)さて此に定と云は、天皇の渡坐しにつきて、始めて此名を定賜へりとにや、又始めて此海路の開けしを云にもあるべし、

〔古事記(中卷神武)〕神八井耳命者、(中略)長狹國造等之祖也、

〔古事記傳(二十)〕長狹國造、和名抄に、安房國長狹郡奈加佐是なり、(○中略)上總國夷灊郡にも、長狹郷あり、又同國望陀郡に飫富神社あり、長狹國造の祖神なるべし、

〔先代舊事本紀(十國造)〕阿波國造

志賀高穴穗朝(○成務)御世、天穗日命八世孫彌都侶岐命孫、大伴直大瀧、定賜國造、

〔續日本紀(八元正)〕養老二年五月乙未、割上總國之平群、安房、朝夷、長狹四郡、置安房國、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年十二月丙戌、安房國幷上總國、

〔續日本紀二十一廢帝〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、頃者上下諸使、摠附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今已後、宜爲依令、其能登、安房、和泉等國、依舊分立、

〔里見代々記〕抑安房國ニ里見ノ打入、十代相續國ヲ保給フ、其元由ヲ尋ルニ、人皇五十六代清和天皇九代ノ後胤新田大炊助義重ノ三男、里見太郎ノ末孫、足利黨ノ末葉基氏ノ嫡男家基、其子足利刑部大輔義實ト申セシハ、安房里見元祖、〇中略義實ハ父ノ諫ニ任テ、木曾左馬允氏元、堀内藏人貞行ヲ隨身シ、三浦ノ方ヘ落給ヒケル、兩人ニ向テ申サレケルハ、今ハ結城モ落城セリ、後日ノ用意ニナル事モヤナラン、先三浦ヲ差置テ、是ヨリ安房國ヘ渡ラントテ、海人ヲ賴テ濱地ニ下リ給ヒケル、海人承ハリ急ギ船ヲ浮ケレバ、折節順風吹送リ、白濱トイフ在所ニ著ニケリ、其比安房國ニハ四人ノ郡主ヲ立置レケル、平群ニハ安西式部大輔勝峯、勝山ニ住ス、安房郡ニハ金餘左衞門介景春、神餘ニ住ス、朝夷郡ニハ丸右近介元俊、石堂谷ニ住ス、長狹郡ニハ東條左衞門督重永、永泉ニ住ス、彼等四人互ニ心ヲ示シ合セ、分内ヲ守リ居リケル、然ルニ金餘ガ家臣ニ山下左衞門ト云フ者アリ、主君景春ヲ討亡シ、己郡主ト押成リテ、郡ヲモ山下郡ト名ヲ改、放逸無慚ニ働ケリ、丸安西ハ是ヲ見テ、彼ガ無道國ノ汚也トテ示合、山下ヲ討テ捨、郡内ヲ分取、丸安西ト口論出來リ、又俄ニ戰起リテ、暫ク挑タリシガ、安西終ニ打勝タリ、丸ハ此時滅亡セリ、爰ニ金餘ガ浪人共、皆一同ニ云合、義實公ヲ大將ニ賴タテマツリ、奉公申バヤトイフ、〇中略御出馬カクレナケレバ、勝山安西式部大輔勝峯ハ、急ギ大勢ヲ引率シ、瀧田原ニ出張シテ待カケタリシガ、イカヾ思ヒタリケン、甲ヲ脫ギ弓弦ヲハヅシテ、〇中略自今以後御手ニ屬セシタメ、馳參シテ候ト愼テ申ケル、〇中略東條左衞門重永ハ、上總ノ國大瀧ノ正木彈正ト一味シテ、金山ノ城ニ楯籠、文安二年癸巳六月八日ニ合戰初リ、明ル九日ニ落城セリ、東條重永ハ自害セリ、正木彈正ハ大瀧ヲ指テ引退ク、同三年甲午正月廿

七日、大瀧ノ正木ガ城ヲ押取卷、晝夜攻戰、終ニ城方敗レテ、正木降參シタリケル、夫ヨリ白濱ヘ引歸リ、暫ク事靜ニナリケレバ、義實公ノ給ヒケルハ、我十九歲ニテ當國ヘ渡リ、纔五六年モ旅住セシ所ニ、不思議ノ合戰起リショリ、當國ヲ切隨ヒ、今ハ上總迄手ニ入タリ、可然者ノ娘ヲ娶ラバヤト仰ケル、安西承、上總國眞里谷某ガ息女可然候トテ、追付迎取、御前ニゾ定タリ、斯テ御添合睦カリケレバ、御男子誕生マシ〳〵ケル、大將御悅カギリナク、千歲ヲ祝ヒ春若丸ト名付給フ、月日來リ過行程ニ、今年十五歲ニナラセ給フ、御元服ノ御祝アリケリ、義實公ノ給ヒケルハ、我足利ヲ名乘ドモ、元根ハ新田ノ三男里見也、其子足利ナレバ、我父家基末葉故、足利ヲ名乘給ヒシゾカシ、然バ先祖ノ氏里見ヲ名乘モノナシ、今日ヨリ汝元服セバ、里見ヲ名乘ベシトテ、里見利部少輔義成トゾ名付給ヒケリ、〇中略 永正二年乙丑四月十五日、生命五十八歲ニテ薨給ケル、安房ノ里見ノ初祖ハ此殿ニゾ在ケル、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕安房國 國府在平群郡、行程上四十四日、下十七日、

〔房總志料二安房〕府中は、地名にてはなし、安房の國府といふ事なり、順和名抄に、安房國府在平郡と、然れども今は安房郡に并す、又府中を國中といへるも、國府なれば也、

〔房總志料續十一平群郡〕今は府中村となりてあり、村高七拾九石四斗九升五合、外に貳百七石寺領社領ありと、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕安房國 養老二年、割上總國四郡、置此國、 管四、〇註略 平群、倍久利、國府、 安房、如國、 朝夷、阿左比奈、 長狹、奈加佐、

〔延喜式二十二民部〕安房國 中 管 平群 安房 朝夷 長狹 〇中略 右爲遠國、

〔伊呂波字類抄安國郡〕安房國 管 養老二年五月、割上總國四郡爲國、常陸守藤原朝臣宇合、始爲守、 四郡 郷卅五 平栗府 朝夷アサヒナ 安房アハ 長狹ナカサ

〔皇國郡名志〕安房國 四郡

平群（ヘグリ）　^勝山 岩井　●保田 大房　米澤　岡本　本名 上サ 界 リウサキ 内海ニ向

安房（アハ）　北條 瀧セ　●館山 白ハマ　●洲崎 那古　川名 神余　藤原 西ノ 出崎 綾濱 郡 眞倉

朝夷（アサヒナ）　●平館 海發　乙濱 磯村　白子 セト　松田 ゴウト　エミ 南 出 崎ヒ 郡ニエ 白濱

長狭（ナガサ）　東條 平塚　小湊 小松原　内浦　天津　濱荻 上サ 界 清澄 東海 向 清水

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕安房

	平群	安房	長狭	朝夷	
六國史		淡（紀）			
古書		同（古）			
延喜式	平群（ヘクリ）	安房（アハ）	長狭（ナカサ）	朝夷（アサヒナ）	書四
倭名抄	同	同	同	同	同
拾芥抄	平郡	同	同	同	四郡
諸書	平北 倍久里 平群	同（闕元）	同（闕元知）	同（闕元）	
郡名考	平（ヘイ）	同（アハ）	同（ナガサ）	同（アサイ）	同
天保鄉帳	同	同	同	同	同
明治沿革帳					同
地誌提要	平郡（ヘグリ）	同（アハ）	同（ナガサ）	同（アサヒナ）	同
郡區編制	平	同	同	同	同

〔郡名考〕安房　平群(ヘタリ)倍久利

〔伊呂波字類抄安房郡〕安房國　平。栗。府

〔房陽郡鄕考〕平群郡、北は上總國天羽郡界に至り、東長狹朝夷二郡を界とし、南安房郡の界を限り、西は海に至る、

〔安房概志一〕郡名

平群(ヘグリ)郡 和名抄曰、倍久利、　北ハ上總ノ天羽ト國界ヲ分チ、東朝夷長狹ノ二郡ト接壤シ、南安房郡ニ至テ限ル、其西面ハ海ヲ帶テ遙ニ相模國ト相對セリ、○中略吾妻鑑ニハ平。北。郡。ニ作ル、土人平北郡ト呼ヲ聞テ、ソノマヽ記シタルカ、又ハ字形ノ相似ヲ以テ、比ヲ北ニ誤ルニヤ、或ハ周西周東南廳北ナドノ例ニシテ、其頃平群ノ北ヲ、平北ト呼ビ、其南ヲ平南ト稱シタル歟、是皆詳ナラズ、又中古國ノ北方ニアルヲ以テ、直ニ此郡ヲ北。郡。ト呼タルコトアリ、實珠院ノ舊記ニ、北郡佐久間村、マタ里見記ニ、北郡大津城ナドミエタリ、和漢三才圖會ニハ、平郡ニ作ル、邦人ノ說ニ、平群郡ハ畿內ニ同名アレバ之ヲ忌諱シ、且ハ混同センコトヲ恐テ、近年ハ群ノ一字ヲ省テ、平郡トノミ書セリト、然レドモ民部式ニ、諸國部內郡里等名並用二字、必取嘉名トミユレバ、平群ノ二字ヲ用ルヲ以テ正トスベシ、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年二月辛卯、安房國平。群。郡人壬生美與曾、廣主二人、賜姓平群壬生朝臣、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月二十九日己酉、武衞相具實平、掉扁舟、令著于安房國平。北。郡獵。島給、

〔圓藏院文書〕九十八ケ所之內

房州丸郡朝平南村之內四拾石、山下郡北條村之內五石、北。之。郡。保田村之內五石、高台五拾石、右之通御寺領被遣之由、我等所々從御奉行所御書出一冊ニ御坐候間、從甲寅年可有御所務者也、仍如

安房郡

件、

元和貳年辰九月十五日　　中村彌右衛門尉吉繁花押

圓藏院

〔房陽郡郷考〕安房郡、北は平群の界に至り、東朝夷郡界に臻り、西南は海に限る、

〔安房徴志 一〕郡名

安房郡和名抄曰、阿八、　南洲崎ニ起テ、北山名村ニ距リ、平群ト郡ヲ接シ、西濱ハ湊八幡ノ邊ヨリ海ヲ環シテ、東南瀧口村ニ終ル、其正東全ク朝夷郡ト接壤セリ、此郡ヲ安房ト稱スルコトハ、神武天皇ノ朝ニ、阿波齋部氏天富命ニ隨從シテ來リ、麻穀ヲ樹藝センタメ居住アリシ地ナレバ、アハノ辭ニ因テ、安房郡ト名ク、古語拾遺ニ、阿波忌部所居、便名安房郡、天富命卽於其地立太玉命社、故其神戸有齋部氏トミユ、又當郡ヲ指シテ神郡ト稱セリ、式部式曰、安房郡ト號シテ神郡トナス、中略○中古安房郡ノ名ヲ改メ山下郡ト稱セシコトアリ、里見志ニ神餘太郎滿孝ノ臣ニ、山下佐衛門景胤一本宣廉ニ作ル トテ、惡逆ナルモノアリ、或日酒ヲ主人滿孝ニ獻ジテ大ニ醉シメ、其虛ニ乘ジテ、刀ヲ拔テ首ヲ取リ、終ニ其地ヲ押領シ、安房郡ヲ改テ、私ニ山下郡ト號ス、然ドモ臣トシテ君ヲ殺セル、ソノ簒奪ノ罪ヲ惡ンデ、時人之ヲ乏シテ下郡ト呼タリト、里見氏ノ世ニ至テ、猶山下郡ヲ以テ稱セシニヤ、其頃ノ寶珠院ノ舊書記ニハ、山下郡某村ト云コトミエタリ、

〔房總志料 五 安房〕安西は國郡○安房郡のうち也、中略○朝夷郡和田白兒などに接し、安東村有安房郡の安西に對せし名なるべし、

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月一日庚戌、爰安房國住人安西三郎景益者、御幼稚之當初、殊奉昵近者也、仍最前被遣御書、

〔延喜式 十八 式部〕凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓除同門外聽任、神郡陸奥緣

朝夷郡

邊郡、大隅馭謨熊毛等郡者、不在制限、〈謂(中略)安房國安房、(中略)筑前國宗形等郡、爲神郡、〉

〔續日本紀 一 文武〕四年二月乙酉、上總國司請安房郡大少領連任父子兄弟、許之、

〔續日本紀 九 聖武〕神龜三年九月己卯、停安房國安房郡〈中略〉采女、令貢兵衞、

〔房陽郡郷考〕朝夷郡、東南は海に至り、西安房平群二郡に界ひ、北は長狹郡を界とす、

〔房總志料 五 安房附錄〕一、朝夷郡の夷字を、いなととなへしはひな也、田舍の意、後人誤て奈字を加るものは非也、

〔安房概志 一〕郡名

朝夷郡〈和名抄曰、阿佐比奈、〉東面一帶海ニ濱シテ大洋ヲ受ケ、南白濱村ニ起テ、北長狹郡ト隣ル、其西方ハ、安房平群ノ二郡ト接壤セリ、此郡ヲ朝夷ト名ルコトハ、國郡ノ東方ニ在テ、前面一帶蒼海ニ臨ミ、朝日ノ海中ヨリ出ヲ見ル、因テ朝日ノ郡ト呼ブ、万葉集ニハ朝夷ニ作ル、日夷ノ字同クヒナト訓ズ、武夷鳥命或ハ武日鳥命ニ作ルヲ以テミルベシ、里見志ニ丸右近元俊ハ、朝夷郡ヲ自己ノ名字ニ改テ、丸郡ト號ス、里見氏ノ時ニ至テモ、ナホ丸郡ト呼タルニヤ、里見分限帳ニ、丸郡某村ト記セリ、又巨松寺鐘銘ニハ、朝平南郡ニ作ル、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

伊部加是波、比爾比爾布氣等、和伎母古賀、伊倍其登母遲氐、久流比等母奈之、

右一首、朝夷郡上丁丸子連大歲、

長狹郡

〔房陽郡郷考〕長狹郡、南は朝夷郡に界ひ、西は平群の界に至り、北は上總の國周准、望陀、夷隅三郡の界に至り、東は海に至る、

〔安房概志 一〕郡名

長狹郡〈和名抄曰、奈加佐、〉南天面村ヨリノ海岸、北小湊ニ至テ限ル、西南ハ朝夷平郡ノ二郡ト接

鄉

壤シ、其北方ハ、高山峻嶺相連リ、上總國望陀(マウダ)夷灊(イスミ)ノ二郡ニ接シ、國界ヲ分テリ、千光山清澄寺舊記曰、上古事勝國勝長狹命、當山ニ鎭座アルニ因テ、此郡ヲ長狹郡ト名ケリ、古事記曰、神八井耳命者、長狹國造之祖也、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

多知許毛乃(タチコモノ)、多知乃佐和伎爾(タチノサワギニ)、阿比美氏之(アヒミテシ)、伊母加己々呂波(イモガココロハ)、和須禮世奴可母(ワスレセヌカモ)、

右一首、長狹郡上丁丈部與呂麿、

〔倭名類聚抄國郡六〕安房國 平群郡 砥河(止加波) 餘戶 達良(太々良) 石井(伊波井) 狹隈(佐久萬) 長門(奈加止) 大里 穗田(保太) 川上(加波加美) 驛家 白濱(之良波萬)

安房郡 太田(於保太) 鹽海(之保美) 麻原(乎波良) 大井(於保井) 河曲(加波和) 白濱(之良波萬) 神戶 神餘(加無乃安萬里)

朝夷郡 御原(美波良) 新田(爾布多) 大潴(於保奴萬) 滿祿(萬呂) 健田(多介太)

長狹郡 壬生(爾布) 日置 田原(多波良) 酒井(佐加井) 伴部(止毛倍) 賀茂 丈部(波世豆加倍) 置津(乎木津)

〔日蓮聖人註畫讃一〕誕生第一――

蓮師姓三國氏、○中略父自遠州、寓安房州長狹郡東條鄉片海(カタウミ)市河村小湊浦、成漁叟、○中略

建立宗旨第四

爲景信計、當夜擔出寺中、遠離於塔寺之難是也、爾時淨顯房義淨房、隱置自房、竊令出寺、其後至西條華房鄉、寓居靑蓮房、

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元曆元年五月三日庚寅、武衞被奉寄附兩村於二所大神宮、○中略外宮御分、安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖、

〔房總志料安房附錄五〕一安房の地方、東條、北條、南條の稱あれど、西條なしと土人かたれり、東條は長狹の地にあり、北條は安房郡大衙の地、南條は同郡館山より、十二三町許東の地に有と、

日蓮の事記せしものに、西條華英の郡といふ事見ゆ、西は東字を誤れるにや、華英は東條の地なればなり、又花英郡名にてはなし、按に、長狹の地東の方小湊までを東條といへば、華英より西の方を、西條といひしにや、猶又考ゆべし、

〔郡名一覽〕安房國御料私領　房州　南北一里半　四郡

高九万貳千八百八拾六石貳斗壹升貳勺三才　　貳百七拾貳ケ村

○勝山　三十六里　○館山　三十六里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕安房　四郡、二百四十村、

高九万五千七百三十六石二斗三升九合七才御料私領

長狹郡六十二村　朝夷郡六十二村　平郡七十三村　安房郡八十三村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

安房　武射(ムサ)郡、長狹(ナガサ)郡、波太(ナブト)村、朝夷(アサイナ)郡、眞浦(マウラ)村、白渚(シラスカ)村、平館(ヘタテ)村、平郡、不入斗(イリヤマズ)村

〔武藏上野國村名帳〕關東村數

安房國　二百八拾一ケ村

〔里見代々記〕去程ニ義實ハ、父ノ諫ニ任テ、〇中略先三浦ヲ差置テ、是ヨリ安房國ヘ渡ラントテ、海人ヲ賴テ濱地ニ下リ給ヒケル、〇中略其比安房國ニハ、四人ノ郡主ヲ立置レケル、平群ニハ安西式部大輔勝峯勝山ニ住ス、〇中略

第七代義賴公

義賴公、家臣安西、角田、岡本、山本ヲ召サレ、是ヨリ南ニ城ナシ、館山ノ古城跡ハ、何樣能景山ナリ、殊要害ノ地ナレバ、カシコニ城ヲ築クベシト被仰出ケル、來春ヨリ御普請アルベシト聞エケル、實

ニ此館山ト申ハ、昔平判官貞政ト云シ人ノ城跡ナリ、前ハ洋々タル大海ニテ、二ツノ島ヲ浮メタリ、シカモ廻船ノ湊ナリ、八幡ノ浦ニ富士ノ山ノ影移リ、夕日ニカヾヤク有樣ヲ、古ヨリ云傳ヘテ、鏡ガ浦ト名ヅケタリ、向ヲ遙カニ見渡セバ、三浦小田原殿ノ前ナリ、又南北ヨリ敵船ノ入來ルモ、居ナガラ見ユレバ、要害ノ地是ニ過タルハナシ、

〔妙本寺文書四〕乍恐令言上候、當國北郡吉濱村妙本寺之事、

右當寺ハ、法花宗六門跡之隨一、日蓮聖人嫡々正統之總跡、讓狀手續證文分明ニ候、〇中略

六月十四日　妙本寺　日侃花押〇日侃、慶長六年寅、

本名肥後守殿

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月二十四日丙午、新熊野領、安房國群房庄領家年貢事、有去年未濟之由、訴出來、此事及度々之上、至今者、皆召放地頭職、點當時得分物、補去今兩年本所乃貢之後、於可返賜否事者、追可有御計之由被定云云、行政奉行之、數百果嚴重之神用無闕、十二所權現之靈威、定新者歟、

〔集古文書六宸筆〕龜山上皇院宣相模國鎌倉荏柄天神社藏

安房國群房東西庄事、大納言局縱雖得口智之讓、如願已帶前讓、次第傳領不可有相違、兼又入道右府中本家總領事、割廣瀨鄉免年貢之分、不混總領之條、先院宣顯已以炳焉、同不可有忽所論者、院宣如此、仍執達如件、

弘安三年五月五日　權中納言花押

民部卿法印御房

〔本間義存文書〕

安房國多々良莊内本間兵衛五郎入道〇法覺知行分、相傳知行無相違上者、不可有違亂之狀如件、

建武四年卯月八日　家長花押〇斯波

藩封

〔慶應元年武鑑〕酒井銈次郎忠美 菊之間 一万二千石 在所房州平群郡勝山 江戸ヨリ三十六里

當國若里見領、寛永年中ヨリ、酒井氏代々領レ之、

菊之間 朝散大夫

稲葉備後守正善 一万石 在所安房安房郡館山 江戸ヨリ三十六里〇節略

〔嘉永明治年間録十七下〕慶應四年〇明治元年九月廿三日、遠州諸侯ニ、安房上總兩國ニ於テ、換地ヲ賜フ、

高四万三千五百六十石餘 安房國平郡朝夷郡長狹郡、上總國望陀郡、周准郡、 西尾隱岐守

右者先般上知被仰付置候代知として、頭書之通下賜候旨、御沙汰候事、〇中略

高五千百八十石餘 安房國平群郡長狹郡 松平和泉守

右同文

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕安房國〇註略 管四 田四千三百三十五町八段五十九歩

〔拾芥抄中末本朝國郡〕安房 遠中 四郡 百(中略)田四千三百六十二町

〔海東諸國記〕安房州 郡四、水田四千三百四十五町八段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目録〕四万五千四十五石 安房

〔和漢三才圖會六十六安房〕四郡 九万千七百七十九石

〔安房概志一〕石高總數〇中略

里見氏慶長十五庚戌霜月改帳曰 丸郡卽朝夷郡 二万三千六百十五石一升

長狹郡 二万二千二百八十四石九斗二升二合

山下郡卽安房郡 二万千八百二十三石八斗二升六合

北郡卽平群郡 二万三千四百六十五石五斗六升七合

總高九万千百八十八石五斗四升五合

當今石高

平群郡　二万四千二百二十九石九斗四升六合七勺二才

安房郡　二万三千八百一石九斗三升四合

朝夷郡　二万二千四百十八石六斗七升六合五勺

長狹郡　二万二千九百五十石八斗八升七合七勺

總計九万三千四百一石四斗四升四合九勺七才

〔官中秘策二〕安房國　四郡略〇中

一石高九万三千八百八拾六石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調略〇中

安房國御料私領　一高九万五千七百三拾六石貳斗三升九合七勺

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻略〇中

安房國、正稅公廨各十五万束、藥師寺料二万束、文殊會料一千束、安居僧供料一千束、修理池溝料二万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕安房國略〇　註管四(中略)正公各十五萬束、本稻三萬二千束、雜稻五千束、

〔類聚國史八十三政理〕天長八年十一月癸卯、免₂除安房國正稅未納七萬五百九十一束₁、

國產貢獻

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物略〇中　安房國長海松六籠〇中略

諸國貢₂蘇番次₁略〇中　安房國十壺並小一升〇中略　右六箇國爲₂第二番₁寅申年〇中略

交易雜物略〇中　安房國商布二千二百八十段、鹿革革張、縄子四合、〇中略

〔延喜式二十四主計〕安房國行程、上卅四日、下十七日、

調、緋紬布十二端、細貲布十八端、薄貲布九端、縹細布二百五十端、鳥子鰒、都々伎鰒各廿斤、放耳鰒六

十六斤四兩、著耳鰒八十斤、長鰒七十二斤、自餘輸細布調布丸鰒、　庸、輸梅松四百斤、自餘輸布、中男作物、紙、熟麻、枲、紅花、堅魚、鰒、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥中略安房國十八種　王不留行、蜘蛛、葛花、旋覆花各一斤、獨活四斤、枸杞二斤十兩、白朮六斤十兩、杜仲五斤、地楡二斤、白頭公三斤、木防己一斤、貝子八兩、麥門冬、茛蓎子各一升、署預五升、桃人六升、決明子二升、龍骨卅斤、

〔毛吹草三〕安房

木綿　小湊苔　ハゞ苔　生家ノ紐苔　浪子ニ似トニしゃみ貝　目黒鰹分テ多キ故、當國田ノ養ニ用之、

人口

〔續日本紀十二聖武〕天平八年五月辛卯、諸國調布長二丈八尺、闊一尺九寸、庸布長一丈四尺、闊一尺九寸、爲端貢之、中略安房細布、及出絁鄉庸布、依舊貢之、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年五月九日甲辰、是日下符、中略令採進槻弓、中略安房國百枝、

〔安房概志一〕戶口總數

平群郡　六千八百十戶　安房郡　五千三百五十一戶　朝夷郡　六千四十一戶　長狹郡　六千四百十三戶

總計二万四千六百十九戶

〔官中秘策二〕安房國　四郡中略

一人數拾五万八千四百四拾人　內八万三千貳拾壹人　男七万五千四百九人　女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年中略

御料私領人數拾三万貳千九百九拾三人　內六万八千四百四人　男六万四千五百八拾九人　女中略

安房國　高九万貳千八百八拾六石餘

〔弘化三丙午年諸國人數調〕○中略

高九万五千七百三拾六石餘　安房國

御料私領一人數拾四万三千五百人

内七万七千七百七拾六人　男
　七万七百貳拾四人　女

風俗

〔人國記〕安房國

安房之國ノ風俗ハ、人之氣尖成事、譬バ刃ノ如ク、和スルコト寡フシテ、常ノ作法モ、カタクヘナリ、唯人ハ男女トモニ死スル事ヲ手柄トノミ覺テ、假初ノ付合ニモ、タガイニ齒ヲ拔キ、一向之思案ニテ、大形萬事思案工夫分別スル事不成也、其内ニモ氣質之宜ル事、能ク生付タル人モマヽ有、此國人ハ言葉溶卑劣ナレドモ、根源ニ正キ所ヲ生得タル上ニ、道理ヲ分別シタル故、一旦ハ尖ニ見ユルトイヘドモ、武士ハ武士之上ニ備ル程之器トナリ、農工商トモニ皆是ニ準ヘ而可知、然ドモ如斯之人ヽ多ク無之而、唯氣質ニツナガレ、漸ク理非ヲ少辨フル人ノミ有、サ有ルニ付テ、カリ染ニ執行フ事モ、我ガ生得之氣ニ任セテ執行フ故ニ、手強ク而、墮落ナル事稀ナリ、學者ト云人モ今不見バ、其風流ニ隨テ、自然ト勤ルモノナリ、

名所

〔日本鹿子七〕同國○安房名所之部

野島ヶ崎　近江國また淡路にも同名あり、當國野島ヶ崎は、小湊といふ所を云、

東路の野島が崎の濱風にわがひもゆひしいもがかほのみ

當國は小國ゆへにや、名所すくなし、舊記にも不見、

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　安房國卅人○中略

諸國器仗○中略　安房國甲二領、横刀四口、弓十二張、征箭十二具、胡籙十二具、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年三月庚申、定諸流配遠近之程、○中略安房○中略爲遠、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年七月己亥、令造安房、上總、下總、常陸四國、船五十隻、置陸奧國、以備不虞、

〔三代實錄 四十九 光孝〕仁和二年八月四日庚戌、勅令安房上總等國重警不虞、先是安房國言上、去五月二十四日夕、有黑雲自南海群起、其中現電光、雷鳴地震、通夜不止、二十六日曉、雷電風雨巳時、天色清朗、砂石粉土遍滿地上、山野田園无所不降、或所厚二三寸、或處僅蔽地、稼苗草木皆凋枯、馬牛食粘粉草、死斃甚多、陰陽寮占云、鬼氣御靈、忿怒成祟、彼國可慎疫癘之患、又國東南將有兵賊之亂、由是預令戒嚴、

〔吾妻鏡 九〕文治五年二月三十日壬寅、安房上總下總等國々、多以有荒野、而庶民不耕作之間、更無公私之益、仍招居浪人、令開發之、可備乃貢之旨、被仰其所地頭等云云、

上總國

名稱

上總國ハ初メカミツフサノクニト云ヒ、後ニ、カヅサノクニト云フ、東海道ニ在リ、南ハ安房、北ハ下總ニ界シ、東西ハ海ニ面セリ、東西凡ソ十四里、南北亦之ト相若ク、其地勢ハ、南方山ヲ負ヘドモ、概シテ平曠ノ地多ク、山河卑小ナリ、此國ハ古ヘ國府ヲ市原郡ニ置キ、市原、海上、畔蒜、望陀、周准、天羽、夷灊、埴生、長柄、山邊、武射ノ十一郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、後世海上郡ヲ市原郡ニ、畔蒜郡ヲ望陀郡ニ併セテ九郡ト爲シヽガ、明治維新ノ後、望陀、周准、天羽ノ三郡ヲ合シテ君津郡ト爲シ、長柄、埴生(初メ上埴生ト稱ス)二郡ヲ合シテ長生郡ト爲シ、山邊、武射ノ二郡ヲ合シテ、山武郡ト爲シ、凡テ五郡、千葉縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕上總(加三豆不佐)

〔饅頭屋本節用集 加 天地〕上總(カヅサ)(總州)

〔日本風土記 一 寄語島名〕上總(揣迷倭撒)

〔倭訓栞前編加六〕かづさ　上總をよめり、かみつふさの、みとふを略したる也、

〔古事記傳三十〕布佐は、麻なり、古語拾遺に、好麻所生、故謂之總國、古語麻謂之總也、今爲上總下總二國とあり、麻を布佐と云しこと、此傳には見えたることなけれども、總國と云名を思ふに、信に然ぞありけむ、

〔諸國名義考上〕上總　下總

和名抄に、上總(加三豆不佐、國府在市原郡、)下總(之毛豆不佐、國府在葛飾郡、)名義は、古語拾遺に、天富命、更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀、好麻所生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城、(古語、麻謂之總也、今爲上總下總二國是也、)とあり、この義なり、和名抄に、下總國相馬郡布佐郷あり、續日本後紀仁明天皇承和二年三月辛酉、下總國人陸奥鎭守外從五位下勳六等物部匝瑳連熊猪、改連賜宿禰云々、昔物語小事大連錫節天朝出征坂東、凱歌歸報、藉此功勳、令得於下總國、始建匝瑳郡、仍以爲氏、是則熊猪等祖也とあり、この匝瑳は佐總なるべきか、さて或書に、此國風土記とて引たるには、總謂本枝也、昔此國生大楠、長及數百丈、時帝怪之卜占之、大史奏曰、天下大凶事也、因茲斬捨彼木、倒南方也、上枝曰上總、下枝曰下總也云々、とあるはいかゞ、今世にかづさしもふさといへるは略語なり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度(附里程)

上總富津村、極高三十五度一十八分半、經度東四度二分半、前洞二十六里二十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

上總　木更津　三五度二三分〇〇秒　　屋形村(武射郡)　三五度三六分三〇秒(〇中略)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(〇中略)　上總　木更津村　東四度〇八分四二秒

疆域

〔南總郡郷考乾〕郡郷

疆域、南至安房國界、北至下總國界、東西至海、路程南北二十二里餘、東西十三里餘、又曰、古へ總ノ國

也、古語拾遺ニ上麻ト出セリ、

〔日本地誌提要〈二十上總〉〕疆域　南ハ安房、北ハ下總、東西ハ海ニ至ル、東西凡壹拾四里、南北亦同ジ、

島嶼

〔日本實測錄〈九島嶼〉〕上總國夷隅郡　遠測　アシバ島

地勢

〔易林本節用集〈下〉〕上總〈州此ツウ〉大、管二十一郡、南北三日、海岸弘、碧藻多、絹布鐙鍬等發名、大中國也、

道路

〔日本實測錄〈一沿海〉〕從三厩沿海至東京〈○中略〉

上總國武射〈ムサ〉郡屋形村濱、〈至屋形村宿所一十九町五十三間〉　三十五度三十六分半、　二里一十五町一間　本須賀村濱〈至本須賀村二十三町五間〉　三里二十八町五十四間　長柄郡中里村濱、〈至中里村宿所一十三町三十九間〉　三十五度二十五分、　五里二十一町五十間〈至市宮村二里二町二間半〉　夷隅郡小濱村、三十五度一十四分半、　二里二十五町一十九間　岩和田村、三十五度一十分半、　四里一十四町五十四間〈至御宿村二十九町御宿一里三十間半、從勝浦村一里三十四町〉　安房國長狹郡小湊村〈○中略〉

上總國天羽〈アマハ〉郡金谷村、三十五度一十分半、　二里一十四町五十九間　湊村〈又呼天神山〉　濱、〈至湊村宿所五町三十五〉　周准〈スヘ〉郡富津村、〈至八幡村一里二十一町四十四間、從八幡至〉　守谷〈モリヤ〉村〈至南戸崎三町三十五間〉　二里三十町五十八間〈至國界二里七町二十九間〉

三十五度一十三分、　四里一十一町一十間〈至八幡崎村一里二十一町四十四間、從八幡至富津〉　望陀郡木更津村、三十五度二十三分、　四里一十四町〈至小濱村二里二十六町四十五間半〉三十五度一十八分半、　三里二十四町五十間　中島村、〈至中島村宿所一十町四十五間〉　三十五度廿五分半、　五里八町五間〈至奈良輪〉十三分、　二里一町五十八間　市原郡五井　一里五町一十五間　八幡宿　三里三十三町二十三間

宿〈至姉崎宿二里七町七間半、從奈良輪二十九町四十四間〉

〈至國界九町一十九間、從國界至生實新田二里一十町九間半〉　下總國千葉郡檢見川宿

宿驛

〔延喜式〈二十八兵部〉〕諸國驛傳馬〈○中略〉

上總國驛馬〈大前、藤瀦、島穴、天羽各五疋、〉傳馬〈海上、望陀、周准、天羽郡各五疋、〉

建置沿革

〔日本國郡沿革考〈二東海道〉〕上總　古總國〈古語拾遺云、佳麻所生、故謂之總國、古語麻謂之總、今爲上總下總二國、〉古分爲上下二國、未詳在何時、大國管九郡、〈延喜式等十一郡〉千百九十四村、

天羽　七十七村　周准　百九村、古須惠國、見ニ國造記ニ、延喜式等作ニ周淮ニ、拾芥抄作ニ周淮ニ、正德二年四月令、自今宜レ書ニ周准ニ、而今仍作ニ周准ニ、　望陀　百九十四村、古馬來田國、見ニ古事記國造記ニ、和名抄或作ニ望多ニ、　市原　百八十四村、古府治、國造記菊麻國造、即市原郡菊麻郷是、　夷隅　百六十九村、古伊甚國、日本紀安閑元年、伊甚國造稚子直等、獻ニ伊甚屯倉于皇居ニ、因定ニ伊甚屯倉ニ、古事記作ニ伊自牟ニ、延喜式等作ニ夷灊ニ、正德二年四月令、自今宜レ書ニ夷灊ニ、而今仍作ニ夷隅ニ、仁德紀伊寺水門、亦即此地、　埴生　四十七村、延喜式等作ニ埴生ニ、

長柄　百五十一村　山邊　百三十四村　武射　百二十九村、古牟邪國、見ニ古事記、國造記ニ、作ニ武社ニ、

海上　古上海上國、見ニ國造記ニ、古事記作ニ上菟上國造ニ、萬葉海上潟、亦謂ニ此地ニ、　畔蒜　以上二郡、延喜式等載、疑未レ詳ニ在ニ何時ニ、

〔日本地誌提要〕二十上總　沿革　古ヘ國府ヲ市原郡ニ置、今ノ能滿村是ナリ、天長中、親王ノ任國トナシ、特ニ太守ト稱ス、寛平ノ初、高望王、州ノ介ニ任ゼショリ、其子孫世職ヲ襲グ、十世廣常ニ至リ、源頼朝ニ從ヒ、權介ヲ以テ州事ヲ知ル故ノ如シ、後誅死シ、足利義兼、千葉秀常、其子秀胤、相繼テ介ニ任ズ、足利氏ノ初、鎌倉管領基氏、其執事上杉憲藤ノ子朝宗ニ本州ヲ賜フ、子氏憲亂ヲ作シテ誅ニ伏シ、本州管領ノ直隷タリ、文安中鎌倉管領足利成氏、武田信長ヲ以テ守護代トス、信長、眞里谷、廳南二城ヲ築テ之ニ居ル、是時大多喜ノ正木氏、萬喜ノ土岐氏、州東ニ割據シ、千葉氏州北ヲ有ス、既ニシテ里見義實、正木氏ヲ降シ、州西ヲ略取ス、文明中、義實ノ子成義、武田土岐二氏ヲ降シ、後其子實堯二氏ヲ率キ、足利義明ヲ生實ニ奉ジテ主帥トシ、遂ニ千葉ノ諸城ヲ拔キ、盡ク本州ヲ取ル、玄孫義頼ニ至テ漸ク衰ヘ、天正中、北條氏政、萬喜窪田廳南ヲ陷ル、義頼爭フ能ハズ、子義康ニ至リ、豐臣氏本州ヲ創奪ス、德川氏ノ關東ニ遷ル、松平忠政ヲ久留里ニ、後黒田直純本多忠勝ヲ大多喜ニ、後松平正久内藤家長ヲ佐貫ニ、後阿部正春封ズ、其後封ヲ受ル者、飯野、保科正貞一宮、加納久通鶴牧、水野忠位請西、林忠英凡テ七藩、王政革新、小久保、田沼意尊菊間、水野忠敬櫻井、瀧脇信敏鶴舞、井上正直松尾、太田資美大網、米津政敏六藩ヲ徙封シ、請西ノ地、官ニ沒シ十二藩トナル、既ニシテ皆改テ縣トシ、尋テ悉ク之ヲ併セテ木更津縣ヲ置、又之ヲ廢シテ千葉縣ヨリ兼治ス、

〔古事記上〕天菩比命之子、建比良鳥命、此（中略）上菟上國造、伊自牟國造、（中略）等之祖也、次天津日子根命者、（中略）馬來田國造、（中略）等之祖也、

〔先代舊事本紀 十國造〕須惠國造
志賀高穴穗〈○成務〉朝、茨城國造祖、建許侶命兒大布日意彌命、定賜國造、
馬來田國造
志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖、建許呂命兒深河意彌命、定賜國造、
上海上國造
志賀高穴穗朝、天穗日命八世孫忍立化多比命、定賜國造、
伊甚國造
志賀高穴穗朝御世、安房國造祖、伊許保止命孫伊己侶止直、定賜國造、
武社國造
志賀高穴穗朝、和邇臣祖彥意祁命孫彥忍人命、定賜國造、
菊麻國造
志賀高穴穗朝御代、无邪志國造祖、兄多毛比命兒大鹿國直、定賜國造、
〈首書〉今上總國市原郡菊麻〈久久萬〉

〔古語拾遺〕天日鷲命之孫、造木綿及麻幷織布、〈古語阿良多倍〉仍令天富命率日鷲命之孫、求肥饒地、遣阿波國、殖穀麻種、其裔今在彼國、當大嘗之年、貢木綿麻布及種種物、所以郡名爲麻殖之緣也、天富命更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀、好麻所生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城郡、〈古語麻謂之總也、今爲上總下總二國是也、〉

〔類聚三代格 五〕太政官符
應親王任國守事
上總國　常陸國　上野國

右撿中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀偁、○中略望請、點定數國、爲親王國、迭任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人辭聽、若有守闕者、不補他人、其料物者、納置別倉、支充品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

天長三年九月六日

〔吾妻鏡十〕文治六年二月十一日乙未、上總國者、爲關東御管領九箇國之內、以源義兼被補任國司之處、去年御辭退之間、正月廿六日、與遠江國同日被任國司、平親長仍今日目代等國務云云、

〔鎌倉大草紙下〕爰に古持氏の御供に討死しける、里見刑部少輔家基が子、左馬助義實は、房州より打て出、上總半國を押領し、鎌倉へ參、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕上總國國府在市原郡、行程上三十日、下十五日、

〔房總志料四上總附錄〕一上總の國府は、海上郡姉崎の地方をいふなり、按に、海上地今市原郡に幷す、說別見、又夷灊郡刈谷川の側に國府臺といふ一小村有、土人說傳て古の國府の地といふ、しかれども其實は鵠臺(コウノ)など書しなるべし、如何となれば、此邊水厓の高樹などに鵠の巢つくりしなど有しが、いつとなく字せると見ゆ、後世好事國府臺と字に書かへたると見ゆ、

〔房總志料續一夷隅郡〕或云、國府臺は、古へ伊甚の國と稱せし時の國府なるべし、安閑帝の御宇、屯倉の地、國造の住したる所なれば、國府と稱したるならん、
首書良道曰、上總の國府は、市原郡今の能滿村なるべし、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕上總國○註略　管十一○註略　市原伊知波、其國府、　海上宇奈加美　畔蒜阿比留　望陀末宇太　周淮季　天羽阿末波　夷灊伊志美　長柄奈加　山邊也末乃倍　武射　埴生

〔延喜式二十二民部〕上總國大、管市原　海上　畔蒜　望陀　周淮　天羽　夷灊　埴生　長柄　山邊　武射○中略　右爲遠國

〔伊呂波字類抄 加國郡〕上總國 管十二 本作十一 〇一 市原府（イチハラ） 海上（ウミカミ） 畔蒜（アヒル） 望陀（マウタ） 周准（スフン） 天羽（アマハ） 夷隅（イシミ） 埴生（ハウ） 長柄（ナカラ） 山邊 武射（ムサ） 上總十二郡ト注タリ、今一郡不足云々、不審也、

〔南總郡鄉考 乾〕郡鄉

上總國十五郡、曰市原、海上、望陀、畔蒜、周准、天羽、平群、安房、朝夷、長狹、夷灊、長柄、埴生、山邊、武射、續日本紀曰、養老二年五月、割平群、安房、長狹、朝夷四郡、置安房國、其後海上畔蒜二郡廢、九郡ト成ル、

〔皇國郡名志〕上總國 舊十一郡 今九郡

市原（イチハラ）　●八幡　●五井　姉ヶ崎　今富　●登戸　小知　岡井　下サ森村田川ヲ郡界トス、入江ニ向、

武射（ムサ）　上總　一村限山地也　下サ界小郡

埴生（ハユフ）　●長南　清水寺　鹽井　茌村　國中郡

望陀（モウタ）　〈來里　木更津　吾妻　ナラハ　釜生　四方木　房界黒玉入江ニ向

周准（スエ）　〈飯野　庚山　百首　カナヘ　房界富津天羽郡ヲマトイテ内海ニ向

夷灊（イスミ）イシミトモ唱　[小田木]　●今留　●マリヤ　松野　●勝浦　上野　●江波　久留里　中原　メイ宿　内野　●市阪　碓井　●滑川　シンダツ　大澤　沖津　守屋　オソリ　松江

岩崎　萬喜　温石　ツ池　ツセ　岩舟　長世　小濱　山田　下サ界　新田　一國四分一郡

長柄（ナカラ）　●高師　△玉前社　茂原　△白鳥沼　●ホシノフ　大アミ　東海ニ向　帆立

山邊　横芝　成東　東金　流山　ナルト　野田　下サ界　小西　宮作

舊有二海上畔蒜二郡一今減之

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

(郡名異同一覽)七、上總

六國史								伊甚 紀	
古書		須惠	馬來田 宇麻具多		上菟上			伊自牟 伊甚	
延喜式	天羽(アマハ)	周淮(スヱ)	望陀(マウダ)	畔蒜(アヒル)	市原(イチハラ)		海上(ウナカミ)	夷灊(イシミ)	埴生(ハニフ)
倭名抄	同	同	同	同	同		同	同	同
拾芥抄	同	周維	同	同	同		同	同	同
諸書	同	周集 周准	望陀	孟陀	市原			東夷灊 伊北 夷隅	同
郡名考	同(アマハ)	周准(スヱ)	望陀(マウダ)		同(イチハラ)			夷隅(イシミ)	同(ハニフ)
天保鄉帳	同	同	同		同			同	同
明治沿革帳									
地誌提要	同(アマハ)	同(スヱ)	同(マウダ)		同(イチハラ)			同(イスミ)	同(ハニフ)
郡區編制	同	同	同		同			同	上埴生

		長柄(ナガラ)	同(奈加良)	同	同(國知元)	同(ナカラ)	同		同(ナガラ)	同
		山邊(ヤマノヘ)	同(也未乃倍)	同	同(國知元)	同(ヤマベ)	同		同(ヤマベ)	同
	武社(舊)	武射(ムサ)	同	同	同(國知元)	同(ムシヤ)	同		同(ムサ)	同
		管十一	同	十一郡		九郡	同		同	同

市原郡

〔南總郡鄕考 乾〕郡鄕

市原郡、國府此郡ニ在リ、東南ハ山邊、長柄、埴生、夷隅四郡ノ界ニ至リ、西ハ海ニ至リ、北ハ下總國千葉郡ニ至ル、

鄕名　海士(廢ス、村存ス、)　市原(廢ス、村存ス、今國府ノ舊址アリ、)　江田(內田鄕ニ江子田村アリ)　濕津(潤井戶村存ス)　山田(山田橋村アリ)　菓麻(菓ハ菊ノ誤字カ、今菊麻村存セリ)

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿之可伎能(アシガキノ)、久麻刀爾多知氏(クマトニタチテ)、和藝毛古我(ワギモコガ)、蘇氏毛志保々爾(ソデモシホホニ)、奈伎志曾母波由(ナキシゾモハユ)、

右一首、市原郡上丁刑部直千國、

〔三代實錄 四十三陽成〕元慶七年二月九日丙午、上總國介從五位下藤原朝臣正範飛驛奏言、市原郡俘囚四十餘人叛亂、盜取官物、數殺略人民、由是發諸郡人兵千人、令其追討、而俘囚燒民廬舍、逃入山中、商量非敵千兵、不得征伐者、〇下略

〔相州文書鶴岡八幡宮乾〕奉寄進　鶴岡八幡宮

上總國市。東。郡。內年貢用途伍拾貫文事

右旨趣者、爲天下安穩泰平、自身壽福長遠、息災康樂子孫繁昌、奉寄進之狀如件、

正慶四年八月十五日　若狹守時明花押三浦○

海上郡

〔上總志上〕海上郡　今廢ス、延喜式ニ上總國海上姉崎神社トアルヲ見レバ、姉崎椎津ノ邊、古シヘノ海上郡ナルベシ、

〔南總郡鄕考乾土〕郡鄕

海上郡今廢此郡何レノ時代ヨリカ、市原郡ニ幷セラル、

鄕名、佐三、佐瀨村存ス稻庭今廢倉橋今廢大野今廢福良今廢鳴穴延喜式神名帳ニ、海上郡島穴神社アリ、今島野ニ改ム、和名類聚抄ニ島ヲ鳴ト作ルハ、傳寫ノ誤ナラン、馬野今廢山田今廢、今山口村アリ、疑ラクハ田ノ字ノ畫ヲ省キタルカ、

〔房總志料續七〕市原郡古海上郡

或說曰、海上郡と市原郡とは、養老川を分界として、河北は市原郡にして、河南は古への海上郡なるべし、此郡西の方は、都て海に臨をもつて、海上の名を得たり、或曰、望陀郡下泉村の北の方六ケ村、今に海上郡と稱すと、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年九月己巳、賜○中略上總國海上郡人、外從五位下檜前舍人直建麻呂上總宿禰、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年八月乙丑、上總國海上郡、加置主政一員、

〔萬葉集抄十四〕上總國にいまは海。北。海。南。といふは、ふるき海上の郡なりと申す、

畔蒜郡

〔上總志上〕畔蒜郡　今廢ス、或曰、下總印幡郡ノ東ニ、畔蒜ト云村アリ、是古シヘノ畔蒜郡ノ殘レルニヤト、又武射郡ノ中ニ、新田小川ナド云ル地名存セリ、是則和名抄ニ載ル所ノ、畔蒜ノ縣名ナレ

ハ、武射郡ト印幡郡ノ中ヘ、幷隷セルト見ヘタリ、

〔明治十三年東京地學協會報告〕國郡沿革考第二回、　塚本明毅

上總

畔蒜郡、和名抄、六郷アリ、後世廢シテ、望陀郡ニ併ス、今猶久留里ノ近傍諸村ヲ稱シテ畔蒜庄トナス、蓋望陀郡ノ中央ヨリ以南、皆此郡ニ屬セシナラン、六郷ノ中只新田郷ノミ、新田村ノ遺名ヲ存ス、餘ハ皆詳ナラズ、

〔南總郡郷考乾〕郡郷

畔蒜郡廢 何レノ時ヨリカ、望陀郡ニ併セ入ル、按ルニ、同郡眞里韮野邊ヲ、ホヒルノ庄ト云ナレバ、畔蒜ヲホヒルト訓ジタラン、是昔シノ畔蒜郡ナランカ、

郷名、美々、小河、甘木、椅原、三衆、共ニ廢 新田今新田村存ス

〔日本靈異記中〕未作畢佛像而棄木示異靈表緣第廿六

禪師廣達者、俗姓下毛野朝臣、上總國武射郡人、一云畔蒜郡人也、 聖武天皇代、廣達入於吉野金峯、經行樹下而求佛道、

〔南總郡郷考乾〕郡郷

望陀郡　古事記、萬葉集等ニハ、馬來田ニ作ル、此郡西ハ海ニ至リ、南周准郡界ヨリ、安房國界ニ至リ、東北ハ夷隅市原二郡ノ界ニ至ル、

郷名、畔治、廢 表可廢 會戸廢 飯富廢、村存、 磐田廢、今岩井村存ス、 河曲今河久保村アリ、河曲ノ唱ヘ誤リカ、 鹿津廢、今鹿津村存ス、

〔地名字音轉用例〕ウノ韻ヲカノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

うまぐた　望多郡上總 末宇太 望ハマウノ音ナルヲ、ウノ韻ヲ轉ジテ、マグニ用ヒタリ、上ノウニ當ル宇ヲバ書ケリ、ウヲ書ク例ハ常也、サテ和名抄ニ、末宇太トアルハ、後ノ音便ノ唱ヘナリ、古事記ニ馬來田、萬葉ニ宇麻具多トアリ、

〔古事記傳七〕馬來田國造、和名抄に、上總國望多末宇多郡とありて、萬葉十四丁九上總國歌に、宇麻具

多能祢呂とよめる地なり、(末宇多とは、後に誤れる唱なり、)書紀廿八に、大伴連馬來田といふ人名を、廿九卷には望多と作り、(かゝれば、もとは望多と書るをも、宇麻具多と唱しこと知べし、)

〔房總志料上總一〕一望陀郡は六万石の地なりと、土地も廣く、民家いやしからず、美田他郡にまされり、

源平盛衰記に、望陀郡を望西東と別てる、海邊倉浪、木更津、万穀等の地を西とし、茅野、眞里谷、高谷、泉、望陀邊を東とせるなるべし、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌

多比己呂母、夜豆伎可佐禰氐、伊努禮等母、奈保波大佐牟志、伊母爾志阿良禰婆、

右一首、望陀郡上丁玉作部國忍、

〔長門本平家物語十一〕兵衛佐殿は、使者を上總介千葉介方へ遣して、各急ぎ來らるべし、是程の大事を引出しつゝ、此上は賴朝を世にあらせんとも、世にあらせじとも、兩人が心なり、廣常をば父と賴、常胤をば母と思ふべしと宣ひける、○中略上總介廣常は、此次第を聞て、我遲く參りぬとおもひて、當國中、伊比南、伊北、望南、望西、望東、畔蒜、ほり口、むさ、山邊の者ども、平家の方人として、强き黨をば、押寄々々是をうち取、隨ふ者をば相具して、一萬餘騎にて、下總の國府に參會す、

〔南總郡鄕考乾〕郡鄕

〔郡名考〕上總　周淮(スヱ ス、)

周准郡、萬葉集ニハ種洲ニ作ル、延喜式、和名抄ニハ周准ニ作ル、此郡東南ハ、天羽郡界ヨリ安房國長狹郡界ニ至リ、北ハ望陀郡界ニ至リ、西ハ海ニ至ル、鄕名、山家(廢)山名(廢、山野村存ス、)額田(廢、嶋田村存ス、)三直(廢、村存ス、)丸田(廢)湯坐(廢、湯江村存ス、)藤部(廢)勝部(廢)勝川(廢)

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

於保伎美乃、美許等加志古美、伊氏久禮婆、和努等里都伎氏、伊比之古奈波毛、

右一首、種淮郡上丁物部龍、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十九日戊辰、上總權介廣常、催具當國周東、周西、○中略廳北輩等、率二萬騎參上隅田河邊、

〔集古文書四十四寄附狀〕足利持氏寄進狀

奉寄進　鶴岡八幡宮

上總國周東郡大谷村岩松左馬助入道跡事

右爲天下安全武運長久、所奉寄附之狀如件、

應永廿四年正月一日　　左兵衛督源朝臣花押

足利持氏寄進狀相模國鎌倉名越別願寺藏

附

鶴岡　八幡宮

上總國周西郡內大山名上村、同郡濱子田畠、同郡青木村內田畠等築田河內守寄進之地事

右爲且子孫繁昌、且武運長久、所可附也、然者勤行法華問答講間、可被致祈禱精誠之狀如件、

正長三年六月廿七日　　從三位源朝臣花押

供僧中

〔南總郡鄉考乾〕郡鄉

天羽郡、西ハ海ニ至リ、東北ハ周准郡界ニ至リ、南ハ房州平長狹ノ二郡ノ界ニ至ル、　鄉名、三宅、廢讃岐、今佐貫ニ作ル長津廢雨霑廢、寶津村アリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

夷灊郡

美知乃倍乃宇萬良能宇禮爾波保麻米乃可良麻流伎美乎波可禮加由加牟、

右一首、天羽郡上丁丈部鳥、

〔郡名考〕上總　夷灊イシミ　夷隅

〔地名字音轉用例〕シノ韻ヲマノ行ノ音ニ通用シタル例

いじみ　夷灊上總郡　伊志美　灊ハジンノ音ナルヲ、ジミニ用ヒタリ、當心ナドモ此ノ例ナリ、但シ古事記ニハ伊自牟トアリ、モトハ然云シナルベシ、サレバイヨミト云ハ、サガムヲサガミト云類ニテ、後ノ唱ヘカ、書紀ニハ伊甚トアリ、

〔古事記傳七〕伊自牟國造、○中略書紀安閑卷元年四月、伊甚國造稚子直等云々の罪ありて、爲皇后獻伊甚屯倉贖罪、因定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國と見ゆ、即和名抄に、上總國夷灊伊志美郡とある此なり、

〔南總郡鄕考乾〕郡鄕

夷隅郡、日本紀曰、安閑天皇元年四月、定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國、延喜式和名鈔倶ニ夷灊ニ作ル、東ハ海ニ至リ、南ハ安房國長狹郡界ニ至リ、北西ハ長柄、埴生、望陀三郡ノ界ニ至ル、此郡ニ隷セル、粟、又小澤、大田代、小田代、面白、筒森、葛藤ノ七村ハ、往昔市原郡ニ屬セルナラン、又北ノ界、椎木、綱田、中原、泉等ノ四村ハ、舊夷隅郡ノ内ナルベシ、今長柄郡ニ屬ス、　鄕名、雨雲廢、蘆道廢、荒田廢、新田野村アリ、東鑑ニ新田庄ニクタレリ、長挾今長志ニ作ル、白羽廢　餘戸廢、今ヲ案ズルニ、戸數ヲ以テ郡鄕ヲ定ム、戸數一鄕ニ足ラザルヲ餘戸ト名ヅク、故ニ諸國ニ此鄕名有テ、何モ其所ヲ知ガタシ、

〔房總志料三上總附錄〕夷灊郡の地を、夷南夷北と割るものは、房總境清澄山を標とし、南北を別てる也、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十九日戊辰、上總權介廣常催具當國○中略伊。南、伊。北、廳南、廳北輩等、率二萬

長柄郡

騎參上隅田河邊、

〔吾妻鏡　二十一〕建暦三年〇建保元年五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、〇中略

同國〇上總伊北郡〇平九郎左衛門尉

〔南總郡鄉考　乾〕郡鄉

長柄郡、西ハ埴生市原二郡ノ界ニ至リ、東ハ海ニ至リ、南ハ夷隅郡界ニ至リ、北ハ山邊郡界ニ至ル、

古昔ハ此郡ト埴生郡トノ疆界ハ、一ノ宮河ナルベシ、今河ヲ越テ十四村、猿袋、寺崎、川島、北山田、大谷木、上市場、岩井、新生、上ノ郷、下ノ郷、小瀧川、須ケ谷、一ノ宮本郷、東浜見、此郡ニ隷ス、

鄉名　刑部廢、村存ス、管見廢　車持廢　桑田廢、金田村存ス、柏原廢　谷部廢

〔萬葉集　二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

都久之閉爾(ツクシヘニ)、敝牟加流布禰乃(ヘムカルフネノ)、伊都之加毛(イツシカモ)、都加敝麻都里氐(ツカヘマツリテ)、久爾々閉牟可毛(クニニヘムカモ)、

右一首、長柄郡上丁若麻續郡羊、

〔吾妻鏡　一〕治承四年九月十九日戊辰、上總權介廣常、催具當國〇略　廳南廳北輩等、率二萬騎、參上隅田河邊、

〔房總志料　三上總附錄〕一廳南廳北は、在廳の建し地より南北を別てる也、廳南の地は、埴生郡を凡ていふ、

廳北指所分明ならず、疑らくは山邊郡土氣邊の地方をいふなるべし、又在廳の建し地、是又詳ならざれども、恐は海上郡の地方と見へたり、彼地は國府なればなり、

〇按ズルニ、廳南亦長南ト書ス、蓋シ長南長北ハ、長柄郡ノ南部北部ノ義ナリ、房總志料ノ説、恐ラクハ非ナラン、

山邊郡

〔郡名考〕上總　山邊ヤマノヘ　ヤマヘ

〔南總郡鄕考 乾〕郡鄕

山邊郡、東ハ海ニ至リ、南ハ長柄郡ニ至リ、北ハ武射郡ニ界シ、西北ハ下總國千葉印幡兩郡ノ界ニ至ル、　鄕名禾生闕、粟生村存ス、岡山闕山口闕、村存ス、菅屋闕、菅ハ管ノ誤字カ、長柄郡ニ川須ケ谷村アリ、實隣郡ニ須ケ谷村アリ、和名抄誤テ此郡ニ入タルカト或人云リ、武射闕、武射田村存セリ、高文闕草野闕、茅野村存ス、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

和我波々能、蘇氏母知奈氏氏、和我可良爾、奈伎之許己呂乎、和須良延努可毛、

右一首、山邊郡上丁物部手刀良、

〔相州文書 鎌倉郡三〕當寺領上總國山邊北郡内堺鄕○中略等知行不可有相違者、天氣所候也、仍執達如件、

元弘三年十月五日　　　右兵衛督長光花押○葉室

淨光明寺長老知仙上人御房

〔武州文書〕上總國山邊南郡、□□國下河邊莊内春日□鄕地頭職、止方々妨可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

延元元年三月廿二日　　　左中辨花押○中御門宣明

春日部瀧口左衛門尉行○重館

〔郡名考〕上總　武射ムサ　ムシヤ

〔南總郡鄕考 乾〕郡鄕

武射郡、東ハ海ニ至リ、南ハ山邊郡界ニ至リ、北ハ下總國匝瑳香取二郡界ニ至リ、西ハ印幡埴生二郡ノ曠原ヲ界トス、

鄕名、巨備今小倉毛鄕ト稱ス、備ハ倉ノ誤字ナルカ、加毛闕、加茂村存ス、畔代、片野、倶闕大藏闕、村存ス、新居闕、新井田村存、新屋闕墳谷闕、垣谷村

埴生郡

私稱郡名

(存ス、埴ハ埴ノ誤字カ、)理倉(廢)押猨村(廢、牛熊村存ス、)

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

余曾爾能美、々氐夜和多良毛、奈爾波我多、久毛爲爾美由流、志麻奈良奈久爾、

右一首、武射郡上丁丈部山代、

〔郡名考〕上總　埴生ハニフ　埴生ハブ

〔南總郡鄉考乾〕郡鄉

埴生郡、南ハ夷隅郡界ニ至リ、東北ハ長柄郡ニ界ヒ、西ハ市原郡ニ界フ、往古此郡ノ北界ハ、一ノ宮河ニシテ、一名埴生川トモ云、何レノ時カ東方ノ十四村、長柄郡ニ入シト見エタリ、依テ本鄉村ニ坐スル所ノ一ノ宮玉崎神社ハ、延喜式神名帳ニハ載テ埴生郡ニ在リ、　鄉名、埴生、埴石、橫栗、河家、俱(廢)小田(廢、小野田村下ニ村存ス、)上坂本(廢、村存ス、)

〔畑田文書二〕在御判(○源賴朝)

下　上總國佐。是。郡。(○今市原郡有佐是村)內、矢田、池和田兩村、

可早以權介娘爲一色別納、有限所當者令辨加々美小次郞事、

右件兩村、爲令優免公事、爲一色別納所仰付權介之娘也、雖然於有限之所當者、可令辨加々美小次郞之狀如件、以下、

文治二年正月廿一日

〔相州文書鶴岡八幡宮乾〕寄進　鶴岡八幡宮

上總國眞。野。郡椎津鄉內田地壹町事

右且爲天長地久現世安穩子孫繁昌、至于子々孫々、於此料田者、不可致其煩、仍寄進狀如件、

建武三年十月廿三日　三浦介平高繼(花押)

郷

○按ズルニ、倭名類聚抄ニハ、海上郡馬野(無万乃)郷アリ、而シテ海上郡後世廢シテ、市原郡ニ併ス、由テ知ル、當時眞野郡ト稱スルハ、古ノ海上郡馬野郷ノ地ニシテ、今ノ市原郡ニ屬セリ、

〔倭名類聚抄六國郡〕上總國

市原郡　海部(阿万)　市原　江田(衣多)　湿津(宇留比豆)　山田(夜万多)　菓麻(久々万)

海上郡　佐三　稲庭(伊奈波○無、高山寺本作)　大野　山田　倉橋(久良波之)　福良(布久良)　鳴穴　馬野(無万乃)

畔蒜郡　美々　小河(乎加波)　甘木(安万木)　新田　椅原　三枲(美毛呂)

望陀郡　畔治(安留波)　表可　會戸(○高山寺本作會、倉)　飯富(於布)　磐田　河曲　鹿津(加津)

周淮郡　山家(也万以倍)　山名(也万奈)　額田　三直　丸田(○高山寺本作丸、凡)　湯坐　藤部　勝部(○高山寺本無)　勝川

埴生郡　埴生　埴石　小田　坂本　横栗　河家(○高山寺本作河、何)

長柄郡　刑部　管見(豆々美)　車持　兼陀　柏原　谷部(波世部)

山邊郡　禾生　岡山　管屋(○管恐菅誤)　山口　高文　草野　武射

武射郡　巨備　加毛　埋倉　狎猥(○狎恐押誤)　長倉　畔代　片野　大藏　新居(○高山寺本無)　新屋　埴屋

天羽郡　三宅　讃岐　長津　湎露

夷灊郡　雨露　蘆道　荒田　長狭　白羽　餘戸

〔吾妻鏡十三〕建久四年十一月二十三日丙戌、上總國小野田郷住人、本權太國康、依刃傷姨母之罪科、被召之、可遣伊豆大島之由、北條殿令奉給云云、

〔吾妻鏡十九〕承元二年十二月十四日己卯、上總國海上郡久吉郷住人僧善勝以下之輩、被加鶴岳職掌云云、圖書允淸定爲奉行云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年七月二十六日壬子、文元朝臣始行屬星祭、所被募上總國皆吉郷知行之功也、各將軍家御息災御祈禱云云、

村里名邑

〔相州文書鎌倉郡四〕寄進　上總國北山邊郡森郷內藤大夫名田地六反半畠壹反事

右所領者、爲勳功之賞、賴行所拜領也、然者割分彼田畠、爲現當二世、永代所寄進于相模國鎌倉大藏南小路聖天堂也者、早爲燈油佛講之料足、守先例致其沙汰、可有祈禱精誠之狀如件、

建武元年八月三日　右馬權助源朝臣（花押〇一色賴行）

〔集古文書二十五問狀〕文和三年問狀（所藏不詳）

五大堂

春日社雜掌慶退申、上總國金田郷內万石大崎村正稅事、訴狀如此、所申無相違者、可究濟、若又有子細者、可辨申之間、達正員可申左右之狀、依仰執達如件、

文和三年十一月廿四日　前安藝守（花押）

地頭代助法印御房

〔郡名一覽〕上總國（御料私領）（總州）　南北三日　九郡

高三拾九万千百拾三石九斗五升四合壹勺壹才　千百九拾九ヶ村

●久留里　二十三里　●佐貫　二十四里十六町　回鶴牧　十六里

●大田喜　二十二里餘　●飯野　二十二里三十二町　〇一宮　十五里

〇五井　十三里　〇貝淵　二十一里　∧富津　二十二里海防陣屋（浦賀ヘ海上三里）

∧竹ヶ岡　二十六里同上

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕上總　九郡、千百九十四村、

（御料私領）高四十二万五千八十石四斗五升三合四勺一才

天羽郡七十七村　周准郡百九村　望陀郡百九十四村　市原郡百八十四村　夷隅郡百六十

莊

九村　埴生郡四十七村　長柄郡百五十一村　山邊郡百三十四村　武射郡百二十九村

〔地提要 坤〕郡邑島嶼奇名

上總　夷隅郡、部原（ヘハラ）村、守谷（モリヤ）村、周准（スヽ）郡、富津村、青木村、天羽郡、

〔武藏上野國村名帳〕關東村數

上總國　千三百四十七ヶ村

〔上總志 上〕市街

長者町（夷隅郡九ノ日四）　苅谷（同郡一六）　大田喜（同郡三八）　久留里（望陀郡四九）　牛久（市原郡一六）　大網（山邊郡三八）　東金（同郡四九）　一ノ宮（長柄郡五十）　長南（埴生郡二七）　茂原（長柄郡四九）　本納（同郡一六）

〔房總志料 一上總〕望陀郡木更津浦家數千有餘に及べり、富商屋を比す、舟航輻集の地なり、姉崎の人かたりしは、黑戸の濱は、木更津浦をいふと、しかれども其實は非也、百首浦を云也、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年五月九日壬寅、金津藏人次郎貢虎申、上總國新田庄米澤村名主職事、以懸物狀、(壁)申子細、文曆御下知爲相違之旨、雖及改沙汰之由被仰下云云、

〔集古文書 三十四 禁制狀〕覺園寺制札（同寺藏）

禁制覺園寺

右於當寺領上總國小蓋八板兩村、武士甲乙之輩、不可致濫妨狼藉、若有違犯之族者、爲處罪科、可注申交名之狀如件、

觀應三年六月廿四日

〔朝野群載 十七 佛事〕施入帳

藻原庄壹處　地四至（東限清木野、西限巨堤峯原、南限綠野、北限小竹河）　東西壹仟貳拾丈　南北肆佰捌拾柒丈

田代庄壹處（在長柄郡、在天羽郡）　開田參拾餘町畠等（具在文券）

右庄田等制圖券、公驗等書、奉入如件、就中藻原庄曾祖父故從四位上黑麻呂朝臣之牧也、墾闢爲治田也、田代庄始自曾祖父、至于祖父故從五位下春継朝臣、其間往々買得以爲私業也、先考故從四位上良尙朝臣相承管領也、菅根等先人、生平被過庭之訓云、件兩箇庄、先君有命可施入興福寺云、〇中略但天羽庄奉維摩會之資用、藻原庄奉諸聖衆之供給、願以此功德、先奉資祖考、早脫漏屋、遊常樂我淨之域、乍渡迷風、觸究竟涅槃之岸、乃至七世父母皆成佛道、敬白、

寬平二年歲次庚戌八月五日　　蔭子　藤原朝臣敏樹

〔吾妻鏡 六〕文治二年六月十一日丁巳、熊野別當知行、上總國畔蒜庄也、而地頭職者、二品令避付于彼人給、

〔吾妻鏡 八〕文治四年六月四日戊辰、所々地頭沙汰之間事、注條々、令附帥中納言經房給之處、御返報今日到著、於勅答之趣者、爲讓子細、所副獻權右中辨定長朝臣奉書也、〇中略

上總國伊隅庄事

金剛門院領也、於年貢者、可進納寺家、

此外不進年貢之寺〇寺下恐脫領字所注進也、仍相副也、〇中略

上總國菅生庄

前攝政家領也、年貢注文遣之、〇中略

以前條々、以此趣可被計遣之由、御氣色候、恐々謹言、

五月十二日　　權右中辨

〔吾妻鏡 十八〕元久二年三月廿五日壬午、勝長壽院領、上總國菅生庄十二箇郷事、今日被中分之、以六郷爲別當分、割六郷給供僧中云云、

〔下總國舊事考 金石十一〕飯沼村圓福寺鐘銘

藩封

敬白於上總國菅生莊本郷飯富宮社頭奉再興鑄鐘一口、〈○中略〉

享德五年十二月十五日

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〈○建保元年〉五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、〈○中略〉

上總國飯富庄〈武州〉

〔集古文書〈三十六禁制狀〉〕天正十八年制札〈上總國一宮莊高根村農玄蕃藏〉

禁制上總國一宮之莊十二村〈之內高根〉

一當年軍勢亂妨狼藉之事、〈○中略〉

右條々堅令停止訖、若違犯之族於在之者、可處嚴科者也、

天正十八年五月日　淺野彈正少弼

木村常陸守

〔房總治亂記〕同年〈○天正十八年〉七月十一日、小田原ノ北條氏政、氏直、秀吉ノ爲ニ滅亡シ、東八州ヲ家康公ヘ授ケラル、〈○中略〉同八月九日、領地拜領、四箇國ノ分上總大多喜、〈本多中務大輔忠勝、十萬石、〉同廳南、〈本多佐渡守正信、一萬石、〉同勝浦、〈植村土佐守泰忠、三千石、〉同小井戶、〈本多作左衞門重次、三千石、〉同五井、〈松平紀伊守家信、五千石、〉同袰原、〈大久保治右衞門忠佐、五千石、〉同佐貫、〈內藤彌次右衞門家長、二萬石、〉同鳴戶、〈石川左衞門大夫康通、二萬石、任長門守、〉同久留利、〈大須賀五郎左衞門康高、三萬石、〉同矢作、〈鳥居彥右衞門元忠、四萬石、○中略〉上總岩村、武州稻毛峯郷、〈坪內喜太郎利定、二千石〉

〔慶應元年武鑑〕黑田伊勢守直質〈雁間朝散大夫〉　三万石居城上總望陀郡久留里　江戶ヨリ二十二里

〈天正十八、松平出羽守忠政、慶長五、御番城、同七、土屋民部少輔忠直、同民部少輔利直、同伊豫守賴直、廢城、延寶八、酒井雅樂頭忠擧加增、代々領、寬保二再依公命、黑田大和守直純築之、○節略〉

〔慶應元年武鑑〕保科彈正忠正益〈帝鑑間朝散大夫〉　二万石　在所上總周准郡飯野　江戶ヨリ二十二里三十二丁

〈寬永年中ヨリ保科氏代々領之〉

松平彈正忠□〈雁間朝散大夫〉　二万石　居城上總夷隅郡太田喜　江戶ヨリ二十二里餘

〔慶應元年武鑑〕阿部駿河守正恒 雁間 朝散大夫　一万六千石　居城上總天羽郡佐貫　江戸ヨリ二十四里十六町

天正十八、本多中務大輔忠勝領、中絶、承應年中、阿倍因幡守正長、同伊與守正春、元祿十五、稻垣對馬守重富、同十六、松平備前正久、以後領之、○節略

水野肥前守忠順 雁間 朝散大夫　一万五千石　居城上總市原郡鶴牧 格　江戸ヨリ十六里

天正十八、内藤彌次右衛門家長、慶長五、同左馬允政長、元和八、松平大膳大夫勝重、寛永十六、松平出雲守勝隆、寛文六、松平修理亮重治、元祿三、柳澤出羽守保明、寶永七、阿部伊豫守正春、以後領之、

加納大和守 菊之間 朝散大夫 [ ]　一万三千石　在所上總長柄郡一宮　江戸ヨリ十五里○節略

從勢州安房郡北條、文政十亥年、水野壹岐守忠韶移之、

〔慶應元年武鑑〕林肥後守忠交 菊之間 朝散大夫　一万石　在所上總望陀郡請西(ヂヨウサイ)　江戸ヨリ二十一里

〔嘉永明治年間錄十七下〕慶應四年○明治元年九月廿三日、遠州諸侯ニ、安房上總兩國ニ於テ換地ヲ賜フ、○中略

高一万千二百七十石餘　上總國天羽郡周准郡　田沼玄蕃頭

右者先般上知被仰付置候代知として、頭書之通下賜候旨、御沙汰候事、

高六千八百五十石餘　上總國周准郡　増山對馬守

右同文

高六万二千百石餘　上總國市原郡埴生郡長柄郡　井上河内守

右其方領地下總國下野國領知高、今般上知被仰付、右代地並先般上知被仰付候遠江國領分爲代知、頭書之通、下賜候旨、御沙汰候事、

高五万三千三百石餘　上總國夷隅郡　太田備中守

其方伊豆國領知高、今般上知被仰付、右代地並先般上知被仰付置候遠江國領知爲代知、頭書之通下賜候旨、御沙汰候事、

田數
石高

高六千六百八十石餘　上總國望陀郡　大河內刑部大輔

右者先般上知被仰付置候代として、頭書之通下賜候旨、御沙汰候事、

〔倭名類聚抄五國郡〕上總國略〇註管十一田二萬二千八百四十六町九段二百三十五步

〔伊呂波字類抄加國郡〕上總國管十二(中略)本田二万二千六百六十六丁

〔拾芥抄中末本國郡〕上總大遠十一郡(中略)田二萬二千三百六十六町

〔新撰類聚往來下〕國名略〇中上總ヵヅサ總州十一郡田數二万一千八百七十町、南北三日、海岸弘、碁盤多、絹布盤鞭等在、

〔海東諸國記〕上總州　郡十二、水田二萬二千八百七十六町六段、

〔左經記〕長元七年十月廿四日庚辰、上總守辰重來向語云、忠常追討之後、坂東之間、敢无公事對捍輩、但被追討之後、多以損亡之中、當國依爲忠常住國、爲使直方、并諸國兵士等三箇年被調之、人物一塵不遺、則前司維時朝臣任終年、徵符案隨身令見之、國內通計所作之由十八町餘也、前司署名明白也、敢无事疑、被國本田二万二千九百八十餘町云々、○○將門亂間雖最已未、若此時云々、而辰重到任之年、五十餘町、次々年逐年加作、今年內撿定千二百餘町、散在他國々之人民、多以歸來、是全守符旨、于今未徵把分官物之故、漸與復也、而爲申交替事等、單騎上道、封家納官責如雲、忽无方、官符所損已如無已、爲之如何者、答云、官符直免四箇年、官物令與復之後、爲令濟今四箇年物、任八年內濟四箇年事、可勸賞之由所給也、然者至于今年調庸、官官更不可候、又不可濟、而近代之事多以如此之、左右相計可被進止歟者、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕三十七万八千八百九十石　上總

〔和漢三才圖會六十六上總〕十一郡　三十七万八千八百九十石

〔官中秘策二〕上總國　十一郡略〇中

石高三拾九万千百三石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

上總國御料私領　一高四拾貳万五千八拾石四斗五升三合四勺壹才

〔南總郡鄉考乾〕夷隅郡南房州長挾郡界ニ始リ、北長柄埴生二郡ニ接シ、西望陀市原二郡ノ界ニ終ル、○中略

村數百七十三箇邑　合六万七千百六十三石八斗六升三合六勺　戸員一万四千九百六十九

望陀郡北市原郡界ニ始リ、南周准郡ニ接シ、東南夷隅郡井房州ノ界ニ終ル、○中略

村數百七十一箇邑　合高五万七千五百八十二石三斗八升一合六勺　戸員八千八百八十八

天羽郡北周准郡界ニ始リ、東南房州平郡界ニ終ル、○中略

村數七十六箇邑　合高二万四千三百九十三石六斗一升八合九勺　戸員四千六百八十六

周准郡北望陀郡界ニ始リ、南天羽郡界ニ接シ、東南房州界ニ終ル、○中略

村數百三箇邑　合二万五千七百四十二石四斗八升二合三勺六才　戸員四千九百六十八

長柄郡南夷隅郡界ニ始リ、北山邊郡ニ接シ、西市原郡界ニ終ル、○中略

村數百五十二箇邑　合高六万千九十五石六斗三升七合三勺　戸員九千八百八十五

〔南總郡鄉考坤〕山邊郡南長柄郡界ニ始リ、北武射郡ニ接シ、西市原郡ノ界ニ終ル、○中略

村數百二十三箇邑　合高五万千五百五十九石三斗五升六合六勺　戸員八千百四十三

武射郡南山邊郡界ニ始リ、北下總匝瑳郡ニ接シ、西同州香取埴生二郡ノ界ニ終ル、○中略

村數百十二箇邑　合高五万三千七百三十石七斗九升五合九勺　戸員七千三百五十三

市原郡北下總國界ヨリ始リ、南望陀郡ニ接シ、東夷隅郡ニ終ハル、○中略

村數百八十二箇邑　合高五万三千七百八十石三斗二升一合一勺　戸員一万千四百三十一

埴生郡北長柄郡ノ界ニ始リ、西市原郡ニ接シ、東南夷隅郡界ニ終ル、○中略

村數四十七箇邑　合高一万七千九百八十七石九斗五升一合三勺　戸員三千七百二十七

九郡通計　村數一千百四拾九箇邑　高四拾一万三千三拾六石四斗八合八勺五才　戸員七萬四千四百五拾八家

出擧稲

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻（中略）上總國、正税公廨各卌万束、國分寺料四万束、藥師寺料三万四千束、文殊會料二千束、藥分料一万束、修理池溝料四万束、救急料十二万束、俘囚料二万五千束、

〔倭名類聚抄國郡五〕上總國（中略）　（中略）正公各四十萬束、本稻百七萬千束、雜稻二十七萬千束、

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀（中略）　上總國（四千六百九十斛、）（中略）

國産貢獻

年料別貢雜物（中略）　上總國（筆一百管、牧牛皮六張、）（中略）

諸國貢蘇番次（中略）　上總國十七壺（七口各大一升、十口各小一升、）（中略）　右六箇國爲第二番、（寅申年）（中略）

交易雜物（中略）　上總國（絁五十疋、調布一万一千四百廿段、布一千五百九十端、鹿革八張、鹿皮五十張、洗革一百張、鹿角十枚、鐙廿具、木綿四百七十斤、櫃子四合、）

〔延喜式主計二十四〕上總（中略）　右十一國、飽絲、（中略）

上總（中略）　右十國、輸絁、（中略）

上總國（行程上卅日、下十五日、）

調、絁二百疋、緋細布廿端、薄貲布百十四端、細貲布六十三端、小堅貲布五十一端、紺望陀布五十端、縹望陀布七十三端、縹細布三百八十端、望陀貲布百端、（長八丈、廣一尺九寸、）貲布一百卌八端、自餘輸望陀布細布、

調布鰒、　庸、輸布、　中男作物、麻二百斤、紙、熟麻、白暴熟麻、䒼紅花、漆、芥子、雜腊、鰒、凝海藻、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥（中略）

上總國廿種

蜀椒一斤、白頭公三斤、枸杞、木防己各十斤、杜仲、地楡各四斤、瞿麥、貝子各三斤、伏苓廿八斤、葛花、旋覆花各二斤、白鮮六斤、黄黄四斤、榧子二斗二升、署預四斗、麥門冬一斗四升、桃人六斗、附子八斗、蒉蓎子

一升、升麻三斤、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略上總鞦、

〔毛吹草〕三 上總

長南紅花　ヲダキ鮑貝勝タリ　鯛　東金蛤蟹蛤共云

〔續日本紀〕六元明 和銅七年二月庚寅、上總國言、去京遙遠、貢調極重、請代細布頗省負擔、其長六丈、闊二尺二寸、每丁輸二丈、以三丁成端、許之、

〔續日本紀〕十二聖武 天平八年五月辛卯、諸國調布、長二丈八尺、闊一尺九寸、庸布長一丈四尺、濶一尺九寸、爲端貢之、〇中略上總望陀細貲、〇中略依舊貢之、

人口

〔官中秘策〕二 上總國　十一郡〇中略

一人數四拾五万三千四百六拾人　內 貳拾三万七千六百九拾五人男 貳拾壹万五千七百六拾五人女

〔吹塵錄〕五人口及國高 諸國人數調文化元甲子年〇中略

御料私領
人數三拾六万四千五百六拾人　內 拾八万七千四百三拾五人男 拾七万七千百貳拾五人女〇中略

高三拾九万千百拾三石餘　上總國

諸國人數調弘化三丙午年〇中略

御料私領
一人數三拾六万七百六拾壹人　內 拾八万四千三百六拾貳人男 拾七万六千三百九拾九人女

高四拾貳万五千八拾石餘　上總國

風俗

〔人國記〕上總國

上總國ノ人、文風俗、大體安房ニ替ル事ナシ、雖然此國ノ人ハ、別而氣質偏屈ニ而、其勤ル所、諸民トモニ常ニ山賊夜討ヲ本ト覺ヘテ、正道ヲ知ル人、百人ニ九十人無之、雖然其ケナゲ成事、關東二番ト可劣風儀ニ非ズ、サレバ勇ヲ內ニシ、智ト和トヲ外ニ而、是ヲ勤ルヲ以善トス、然ニ此國ノ風儀、勇

ヲ先キニ而、智ヲ後ニスルトイワンヤ、最智勇兼備ノ人有ト雖云、唯氣質ニ勝テ、勇ヲ强ク行フ風俗ナリ、危キ事ノミ多シ、

名所

〔日本鹿子七〕同國〈上總〉〇上名所之部
海上潟　當國中よりひがしのかた也、海上は郡の名也、海邊なり、此所のはまべより、あわ下總の浦々かすみに見えわたる、
浮寢する海上かたの沖のすにたづぞ鳴なるよや更ぬらん
浪の山　海上のうち、礒邊にある此山よりも、近國の浦々よく見えわたり、景よき山也、大明神の宮とて、山のうちにあり、
千草の濱　當國と下總との堺の海邊也といふ、所の人に尋るに、總名當國の濱邊をいふといへり、實正いづれの所にや、おぼつかなし、
色々のかひありてこそひろはめれ千草の濱のあまがまに〳〵

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〈略〇中〉上總國一百人〈略〇中〉
諸國器仗〈略〇中〉　上總國〈甲四領、橫刀十六口、弓卅八張、征箭卅八具、胡籙卅八具、〉
〔三代實錄十四淸和〕貞觀九年十二月四日己巳、勅上總國、置檢非違使一員主典一員、帶劒把笏、
〔三代實錄十八淸和〕貞觀十二年九月十五日甲子、遣新羅人二十人、配置諸國、〈略〇中〉僧嵩、沙彌傳僧關解、元昌、卷才五人於上總國、
〔萬葉集十四東歌〕奈都素妣久、宇奈加美我多能、於伎都渚爾、布禰波等杼米牟、佐欲布氣爾家里、
右一首上總國歌〈略〇中〉
相聞〈略〇中〉
宇麻具多能、禰呂乃佐左葉能、都由思母能、奴禮氐和伎奈婆、汝者故布婆曾母、

宇麻具多能、爾呂爾可久里爲、可久大爾母、久爾乃登保可婆、奈我自保里勢牟、

右二首上總國歌

下總國

下總國ハ初メシモツフサノクニト云ヒ、後ニシモフサノクニト云フ、東海道ニ在リ、西ハ武藏、上野、南ハ上總、北ハ常陸、下野ニ界シ、東ハ海ニ面セリ、東西凡ソ二十二里、南北凡ソ十七里、其地勢ハ、西方武藏平原ニ連リ、田野茫々、國中殆ンド山峯ヲ見ズ、此國ハ古ヘ國府ヲ葛飾郡ニ置キ、葛飾、千葉、印幡、匝瑳、海上、香取、埴生、相馬、猿島、結城、豐田ノ十一郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、後世豐田郡ノ一部ヲ分チテ岡田郡ヲ立テ、葛飾郡ノ西部ヲ割キテ、之ヲ武藏國ニ屬セシム、明治維新ノ後、葛飾郡ヲ東中北ノ三郡ニ分チ、尋デ又東、西、中、北ノ四郡ト爲シ、相馬郡ヲ南北ノ二郡ニ分チ、埴生郡ヲ改メテ下埴生郡ト稱セシガ、更ニ又下埴生郡ヲ印幡郡ニ、南相馬郡ヲ東葛飾郡ニ、西葛飾郡ヲ猿島郡ニ、岡田、豐田ノ二郡ヲ結城郡ニ合併シ、而シテ北葛飾、中葛飾ノ二郡ヲ武藏國ニ屬セシメ、凡テ九郡ト爲シ、匝瑳、海上、香取、印幡、千葉、東葛飾ノ六郡ヲ千葉縣ニ隸シ、猿島、結城、北相馬ノ三郡ヲ茨木縣ニ屬セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕下總之毛豆不佐

〔倭頭屋本節用集天地之〕下總總州

〔日本風土記一寄語島名〕下總什麼倭散

〔千載和歌集十八雜〕しもつふさのかみにまかれりけるを、任はてゝのぼりたりける比、みなもとのとしよりの朝臣につかはしける、

源仲正

あづまぢのやへの霞をわけきても君にあはねばなをへだてたる心ちこそすれ〇返歌略

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

下總銚子湊飯沼村、極高三十五度四十三分、經度東五度六分、前同九十二里三町三十七間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

下總　銚子湊　三五度四三分〇〇秒　古河　三六度三十一分三七秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　下總　古河　東四度〇〇分〇〇秒

〔房總志料三上總附錄〕一下總千葉郡濱村と、上總市原郡村田村との間に三角畠と字せるあり、狀によりて名く、此地に榜示有て、二總の界とす、又同郡閠井戸村より、古市場村を過て、濱村へ至る道に、左右は田にして、臂曲(ヒヂマガリ)と字せる道有、其形灣にして、臂を折たるがごとし、是又二總の界とすとも云、いぶかしきことなり、如何となれば、古へ一國を建るの始、かゝる事にて封域を別てるにてはあらじ、おもふに下總千葉郡に隷せる小弓濱村などの地勢によるに、全く上總に屬せし地と見ゆ、或いふ濱ノ村と埴生村との境に、小流有て海に宗す、源は麹室(カウヂムロ)といふ所よりながると、これ等や二總の界なるにや、なをまた土人に問べし、

疆域

〔日本地誌提要二十一下總〕疆域　東ハ海、西ハ武藏、上野、南ハ上總及海、北ハ常陸、下野、東西凡貳拾貳里、南北凡壹拾七里餘、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年八月庚申、下總國言、天平寶字二年、本道問民苦使正六位下藤原朝臣淨弁等、具注應掘防毛野川之狀、申官聽許已訖、其後已經七年、得常陸國移曰、今被官符、方欲掘川、尋其水道、當決〇決原作渋、據一本改、神社、加以百姓宅所損不少、是以具狀申官、宜莫掘者、此頻年洪水損決日益、若不早掘防、恐渠川崩埋、一郡口分二千餘田、長爲荒廢、於是仰兩國、掘自下總國結城郡小塩鄕小

島村、達于常陸國新治郡川曲郷、受津村一千餘丈、其兩國郡堺亦以舊川爲定、不得隨水移改、

島嶼

〔日本實測錄 九島嶼〕下總國海上郡　遠測　一ノ島　二ノ島　三ノ島　メトケ岬　黑磯　アシカ島　チカ岩

地勢

〔易林本節用集 下〕下總（ソウ）總州 大、管十二郡、南北三日、山海但夥、禽獸交充、雖然无食味、大中國也、

道路

〔下總國舊事考 十五驛遞〕本州在江府之東、故傳遞應接、較之相駿諸國、煩劇不啻天淵、不憂郵政之不肅也、特八幡舟橋等驛、當房總車馬之衝、不爲無勞費、如其古驛地、今雖不可知、據常陸風土記延喜式及史文推之、在千葉者、蓋今之上總路是也、在葛飾相馬者、蓋今水戸道而少迂也、井上、浮島、河曲等數驛、雖不詳其爲何地、以地理推之、在日光道之傍近、在印播香取者、惟爲香取神宮例幣使而置之、故以不要廢也、果然當時官道無與今太異、〇中略

江府日本橋、抵武藏千住二里、千住東折抵新井宿一里十九町、新井宿經小岩關抵下總市川一里半、

市川抵八幡二十八町、八幡抵舟橋一里半、舟橋抵大和田三里九町、大和田抵臼井二里八町、臼井抵佐倉城二里、按道程以三十六町爲一里、蓋中古以還有此制也、古制以六町爲一里者、廢之既久矣、據古制計里程、則不易辨明、故今盡用今制記之、或云、天正十年以三十六町爲一里、始置一里塚、

佐倉城抵酒々井一里、酒々井抵上總加茂四里、加茂抵下總多古陣屋一里八町、

多古陣屋抵松山二里半、松山抵八日市場一里、八日市場抵太田三里、太田抵野尻三里、野尻抵銚子臺場三里、

舟橋抵馬加二里、馬加抵撿見川十八町、撿見川抵寒川三十町、寒川抵千葉臺場二十町、

寒川抵蘇我野二十六町、蘇我野抵濱野二十町、濱野抵生實陣屋一里、濱野抵上總八幡一里、

江府小網町、經中川關抵行德三里八町、行德抵八幡一里八町、八幡抵鎌谷二里八町、鎌谷抵白井一里二十八町、白井抵大森二里八町、大森抵木下二十八町、木下抵安食三里、安食抵滑川三里、滑川抵

高岡陣屋十町、

高岡陣屋、抵神崎本宿一里二十六町、神崎抵佐原二里半、佐原抵津宮三十町、津宮抵小見川陣屋二里、

津宮抵香取神宮十八町

小見川陣屋抵須賀山二里、須賀山抵野尻一里、野尻抵銚子臺場三里、

千住抵武藏草加二里八町、草加抵越谷一里二十八町、越谷抵大澤十町、大澤抵粕壁二里十八町、粕壁抵杉戶一里二十一町、杉戶抵幸手一里二十五町、

幸手抵栗橋二里三町、栗橋抵下總中田十町、中田抵古河城二里三町、古河城抵下野野木二十五町、謂之日光道、

粕壁抵關宿城四里八町、關宿城抵境町十町、境町抵谷貝一里半、谷貝抵仁連二十五町、仁連抵諸川一里半、諸川抵武井一里半、武井抵結城城一里十一町、

新井宿抵松戶一里五町、松戶抵小金一里二十五町、小金經柏抵我孫子三里、我孫子抵取手一里半、取手抵藤代一里三十町、藤代抵常陸若芝一里、謂之水戶道、(國花萬葉集、我孫子抵荒木(今作新木)三里、荒木抵小川二里、小川抵安食二里半、)

木下、舟行五里抵高岡、又七里抵小見川、又六里抵銚子、

〔日本實測錄三(街道)〕從東京奧州街道至野邊地○中略

下總國葛飾郡中田宿　一里一十六町三十四間半　古河三十一町一十八間(至國界一十八丁五十五間半)　下野國都賀郡野木宿

〔日本實測錄一(沿海)〕從三廐沿海至東京○中略

下總國海上郡銚子飯沼村、三十五度四十三分、(歷犬吠崎至大若山下二里三十四町)　二里三十四町九間　飯岡村

東町　三里二十五町　匝瑳郡神宮寺村(至井戶野村三十町五十間)　三里二十八町五十七間半(至野手村一里六町五十一

宿驛

界二里二十二町、）上總國武射郡屋形村濱（中略）下總國千葉郡檢見川宿　二里一十六町一間
半（至馬加宿二十七町二十九間半）葛飾郡船橋五日市　一里二十七町卅五間半（至船橋五日市一十町五十三間）本行德町
二里三十五町三十九間半（至國界利根川口一里三十一町六間）武藏國葛飾郡又兵衞新田

〔延喜式　二十八兵部〕諸國驛傳馬（中略）
下總國驛馬（井上十疋、浮島河曲各五疋、茜津於賦各十疋、）傳馬（葛飾郡十疋、千葉相馬郡各五疋、）

〔續日本紀　二十九稱德〕神護景雲二年三月乙巳、下總國井上、浮島、河曲三驛、武藏國乘潴、豐島二驛、承山海兩路、使命繁多、乞准中路置馬十匹、奉勅依奏、

〔日本後紀　十三桓武〕延暦廿四年十月庚申、廢下總國印播郡鳥取驛、埴生郡山方驛、香取郡眞敷、荒海等驛、以不要也、

〔扶桑略記　二十五朱雀〕天慶二年十一月二十九日、將門還豐田郡鎌輪之宿、長官詔使令住一家、雖加愍勞、寢食不穩、

建置沿革

〔日本國郡沿革考　二東海道〕下總（神護景雲二年八月、仰陸奧國、掘毛野川、自下總結城郡小塩郷小島村、達于常陸國新治郡川曲郷受津村、一千餘丈、其兩國郡界、亦以舊川爲定、不得隨水移改、）大國、管十二郡、（延喜式十一郡）千六百二十三村、
葛飾（三百四十村、古府治、万葉集作勝牡鹿、）　猿島（七十四村、延喜式等作猨島、）　結城（五十一村）　豐田（八十村、延喜四年十二月、改岡田郡爲豐田郡、四年、拾芥抄作二十年、）　相馬（百四十二村）　千葉（百三十七村）　埴生（六十三村、延喜式作埴生、）　香取（二百九十七村）
匝瑳（六十九村）　海上（七十一村、古下海上國、見國造記、古事記作下菟上國造、）　岡田（三十九村、延喜式等不載、置未詳在何時、和名抄岡田郷、隷豐田郡、）
印旛（二百六十村、古印波國、見國造記、延喜式作印播、）
千田（拾芥抄載、延喜式等不載、廢置未詳、）

〔日本地誌提要　二十一下總〕沿革　古ヘ國府ヲ葛飾郡ニ置、（今ノ國府臺村是ナリ）承平中、高望王ノ子良兼、介ヲ以テ州事ヲ知ル、從子將門（良將ノ子）豐田郡ニ居リ、猖獗制ヲ受ケズ、天慶二年、良兼卒ス、將門遂ニ謀

反シ、猿島郡邊南ヲ以テ京師ニ擬シ、僞宮ヲ營シテ八州ヲ扇動シ（本州、及上總、安房、武藏、相模、上野、下野、常陸、）明年誅ニ伏ス、後將門ノ從姪忠常（眞文ノ孫、忠頼ノ子、）州ノ介ニ任ジ、海上郡ニ居リ、長元元年亂ヲ作シ、四年ニシテ法ニ伏ス、後其子常將ヲ宥シテ介ニ任ジ、始テ千葉城ニ居リ、子孫任ヲ襲ギ千葉ト稱ス、玄孫常胤、結城朝光ト源頼朝ニ從ヒ、常胤本州守護トナリ、子孫ニ傳ヘ、後上總ノ北境ヲ併有ス、朝光治承ノ末、結城郡ヲ領シ、結城ニ居リ、後常陸眞壁郡、下野芳賀郡ヲ兼領ス、建武中興、足利尊氏ヲ守護トス、尊氏ノ反スル、千葉貞胤（常胤七世ノ孫）結城直朝（朝光六世ノ孫）皆之ニ屬ス、千葉氏、介ヲ以テ守護ヲ兼ヌル故ノ如シ、鎌倉管領足利持氏ノ亡ブル、直朝ノ曾孫氏朝、其遺孤ヲ奉ジテ結城ニ據ル、上杉氏將軍義教ノ命ヲ以テ來リ伐チ、城陷テ氏朝自盡、結城氏是ニ於テ中斷ス、寶德ノ初、持氏ノ子成氏（シゲ）管領トナリ、氏朝ノ遺胤成朝（シゲ）ヲシテ結城ニ復歸セシム、既ニシテ成氏其執事兩上杉氏ヲ伐ツ、克タズシテ退テ古河ヲ保ツ、時ニ貞胤ノ玄孫胤直、上杉氏ニ黨ス、其叔父康胤（馬加（マクハリ）城主）胤直ヲ襲殺シ、千葉城ニ據テ、印旛以東ノ地ヲ領シ（白井、佐倉、多古、小見川、皆領邑ナリ、）結城氏ト倶ニ成氏ヲ翼戴シ關東八館、皆古河ニ覲ス、既ニシテ上杉氏、胤直ガ從子實胤ヲ胤直ノ後トシ、武藏石濱ニ居シム、千葉氏是ヨリ兩宗トナリ、爭戰ヤマズ、（石濱ノ千葉、後北條氏ニ屬シ、天正ノ末、祀絶ユ、）天文中、里見氏本州ヲ侵シテ東境ヲ略取ス、千葉結城漸ク衰ヘテ、自立スル能ハズ、遂ニ北條氏ニ屬ス、二十三年、北條氏康成氏ノ曾孫晴氏ヲ關宿ニ幽シ、其子義氏ヲシテ僅ニ古河ニ食シム（義氏子ナシ、小弓（ヲユミ）義明ノ孫國朝嗣ト爲ル、慶長中、其嗣頼氏、邑ヲ下野ニ受ク、喜連川氏是ナリ、）天正十八年、豐臣氏東征、成朝ノ玄孫晴朝、款ヲ納レ封ヲ全シ、德川氏ノ庶子秀康ヲ養テ嗣トス、康胤九世ノ孫重胤、北條氏ニ從テ小田原ニアリ、豐臣氏盡ク其封ヲ奪ヒ、千葉氏亡ブ、既ニシテ德川氏關東ニ遷ル、小笠原秀政ヲ古河ニ（後土井利里）松平康元ヲ關宿ニ（後久世重之）久能宗能ヲ佐倉ニ（後堀田正亮）封ジ、慶長中、秀康ヲ越前ニ徙シ、結城城ヲ廢ス、其後州内封ヲ受ル者、生實（ヲユミ）（森川重俊）高岡（井上政重）小見川（内田正信）結城（水野勝長）多古（松平勝以）凡テ八藩、王政革新、下野ノ高德藩（戸田忠至）ヲ曾我野ニ

徙ス、既ニシテ皆改テ縣トシ、尋テ之ヲ併セテ印旛縣ヲ置、又改テ千葉縣ヲ置キ、上總安房ヲ兼治ス、

〔古事記上〕天菩比命之子建比良鳥命、此(中略)下菟上國造(中略)等之祖也

〔先代舊事本紀十國造〕印波國造

輕島豐明〇應神朝御代、神八井耳命八世孫、伊都許利命定賜國造、

下海上國造

輕島豐明朝御世、上海上國造祖、孫久都伎直定賜國造、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月二日庚戌、二位家就諸國宰史事、條々有令申京都給事、〇中略

一散位源邦業國司事

是爲御一族功士、下總國同爲御分國之間、被擧申之云云、

〔倭名類聚抄五國郡〕下總國國府在葛飾郡、行程上三十日、下十五日、

〔成田參詣記一〕國府址　國府臺村にあり、今據寺領百石の地を國府臺村と稱すれど、元は市川村の内なり、古書に小符代、鴻岱、高野臺等に作るもあれど、共に非なり、今國府臺と稱する地是なり、豆相記に、險岸高聳、下帶大河とは、此地の形勢を盡せり、葛飾浦名勝志に、葛西を下總國府と云たるよし、然ども東鑑を考るに、賴朝卿下總の國府に、九月十九日より十月二日まで御陣を居られ、夫より太井隅田の兩川をわたるとあれば、國府は利根川より東の方なるべし、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十三日壬戌、於安房國令赴上總國給、　十七日丙寅、千葉介常胤相具子息太郎胤正、次郎師常、號相馬、三郎胤成、武石、四郎胤信、大須賀、五郎胤道、國分、六郎大夫胤頼、東、嫡孫小太郎成胤等、參會于下總國府、從軍及三百餘騎也、

〔古文帖〕細井喜三郎

郡

下總國國府貳百石出置候畢、全可ㇾ令ㇾ領ㇾ知者也、仍如ㇾ件、

天正廿壬辰三月朔日　御朱印

細井喜三郎どのへ

〔倭名類聚抄　五國郡〕下總國〈○註略〉管十一〈○註略〉葛飾〈加止志加〉千葉〈知波〉印幡　匝瑳　海上〈宇奈加美〉香取〈加止里〉埴生〈波布〉相馬〈佐宇萬〉猿島〈佐之萬〉結城〈由不岐〉豐田〈止与太〉

〔延喜式　民部二十二〕下總國〈大、管、葛飾、千葉、印幡、匝瑳、海上、香取、埴生、相馬、猿島、結城、豐田、○中略〉右爲ニ遠國一、

〔伊呂波字類抄　國郡〕下總國〈管十二〉匝瑳〈サウサ〉葛飾〈府、カトシカ〉千葉　印幡〈インハ〉海上〈ウナカミ〉香取〈カトリ〉埴生〈ハニフ〉相馬〈サフマ〉猿島〈サシマ〉結城〈ユフキ〉豐田　千田

〔拾芥抄　中末國郡〕下總〈大〉十一郡　葛飾　千葉　印幡　匝瑳　海上　香取　埴生　相馬　猿島　結城　豐田〈元岡田、延喜廿年改ニ豐田一、〉千田〈不ㇾ入ニ延喜式一〉

〔和漢三才圖會　六十六下總〕十二郡〈○中略〉葛飾〈カトシカ〉千葉　印幡　匝瑳〈サウサ〉海上〈ウナカミ〉香取　埴生　相馬　狹〈サ〉島〈シマ〉結城　豐田　岡田

〔皇國郡名志〕下總國十一郡

千葉〈チバ〉〈●野田　小弓　馬加　檢見川　●寒川　●曾我野　●濱野　●千葉　山家　大和田　遶田　村田川ニ遶上サ界〉

印幡〈インバ〉〈[佐倉]　●木原　大サハラ　臼井　日丞　船穗　岩留　吉美　入代　村神　圖中ヨリ上サ界〉

匝瑳〈サフサ〉〈入日市場　●飯高　〈多古　●椿　中村　内山　大寺　△矢立浦　東海ニ向〉

相馬〈サウマ〉〈相馬　●鳥手　大井　小山　瓦代　長チキフカヘ　布佐　●安彦　白井　荒木　常界〉

結城〈ユウキ〉〈[結城]　●諸川　●カナヘ　仁連　山川　武井　飯沼　常野ノ界〉

猿島〈サルシマ〉〈[古河]　●中田　磯部　佐川堂　野木　塔田　高根　●境宮　上毛　下毛界〉

香取〈カトリ〉〈●香取　△閏社　大和田　高野　香川　津宮　佐原　常界　●滑川　神崎〉

埴生(ハニフ)　●酒々井　門間　●成田　●木下驛　●大森　常界　寺ダイ　介島　八ヽマキ
豐田(トヨタ)　岡田　マカヤ　飯積　赤法花　常界小郡
葛飾(カトシカ)　國臺　吉川　松戸　●市川　●行德　●舟橋　△鴻臺　●八幡　●釜ケ谷　小倉野　利根川ヲ武ノ界トス

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕下總

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
		千葉(チハ)	同(知波)	同	同(國知元)	同(チバ)	同	同	同(チバ)	同
	可豆思賀(下) 可都思可(下)	葛飾(カツシカ)	同(加止志加)	同	同(國知元)	同(カツシカ)	同	同	同(カツシカ)(カド)	東葛飾 中葛飾 北葛飾
		猨島(サシマ)	同(佐之万)	猿島	同(國知元)	同(サシマ)	同	同	同(サシマ)	同
		結城(ユフキ)	同(由不岐)	同	同(國知元)	同(ユフキ)	同	同	同(ユフキ)	同
	岡田	豐田(トヨタ)	同(止與多)	同	同(國知元)	同(トヨタ)	同	同	同(トヨダ)	同

			管十一	同	十一郡		十二郡	同	同	同	十五郡
		豊田				岡田	同(トヨタ)	同	同	同(トヨダ)	同
			相馬(サウマ)	同	同	同	同(サウマ)	同	同	同(サウマ)	南相馬 北相馬
		印波	印幡(イムハ)	同	同	印幡 印旛	印幡(インバ)	印旛		同(インバ)	印幡
		壟生	埴生(ハニフ)	同	同	同	同(ハブ)	同		同(ハブ ハムフ)	下埴生
	櫻取		香取(カトリ)	同	同	同	同(カントリ)	同(カトリ)	同	同(カトリ)	同
			匝瑳(サウサ)	同	同	同	同(サウサ)	同	同	同(サフサ)	同
		下菟上 下海上	海上(ウナカミ)	同	同	同	同(ウナカミ)	同	同	同(ウナカミ)	同

葛飾郡

〔郡名考〕下總　葛飾(カトシカ カツシカ)　カツシカ

〔地名字音轉用例〕入聲ツノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

かとしか　葛飾(下總)郡　加止志加(カトシカ)　葛ヲカトニ用ヒタリ、但シ萬葉ニハ勝鹿(カツシカ)、又可都思加(カツシカ)ナドア

千葉郡

リ、(中略)サテ山城ノ郡名ノ葛野ノ葛ハ、古事記ノ御歌ニ、加豆怒トアリテ、カヅラノラヲ省ケルナレバ、字音ニアラズ、此ト混ズベカラズ、○中略

入聲キノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

かとしか　葛飾郡下總　加止志加　飾與音シキヲシカニ用ヒタリ

〔下總國舊事考郡七鄕〕葛飾郡和名抄訓加止志加

和名抄訓加止志加トアレド、萬葉集四十ニ、可豆思加、又加豆思賀トアリテ、今モ土人カヅシカト呼ニ據バ、是正訓ナルベシ、按、略解ニ、カツシカハ濁音ニテ、カツシカト訓ベシト云、土人ノ音モカナヘリ、名義ハ葛繁ニテ、此地武藏野ノ東ニ在テ、原野廣ク、葛ノイト繁リシヨリノ名ナルベシ、回國雜記ニ、カタテ郡ノ山ヲ出テ行ク道ニ、葛ノイト繁ク侍リケルヲ見テ、云云トモ見ユ、且郡中ニ葛生村アルニテモ、思ヤラルヽ也、伴信友云、高橋氏文ニ、景行天皇五十三年入東國、冬十月到上總國安房浮島宮、天皇葛飾野毛(毛ハ爾ノ誤ナルベシ)獵シ玉フ、本朝月令ニ、此事ヲ載テ、天皇五十七年トス、書紀ニ據バ、五十三年ヲ是トスベシ、葛飾野ハ今モ小金原トテ、廣キ原野也、和名抄ノ頃ニ至テモ、郡中僅六郷ナレバ、其廣漠ノ原野ナリシコト想像スベシ、本郡ハ、抄ニモ、國府在葛飾郡ト見エテ、一國ノ上游ニアリテ、府治ノ地ナリシ也、今地勢ヲ考レバ、國府ハ栗原ノ郷ノ内ナルベシ、葛東、葛西ノ稱アリ、葛東ハ下總ニ屬シ、葛西ハ今武藏ニ屬セリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

由古作枳爾、奈美奈等惠良比、志流敝爾波、古乎等都麻乎等、於枳氏等母枳奴、

右一首、葛飾郡和部石島、

〔萬葉集抄五〕かつしかとは、下總國葛飾郡也、彼郡の中に大河あり、ふとゐと云、其川の東をば葛。東。の郡といひ、西をば葛。西。の郡といふ、

〔吾妻鏡十七〕正治三年○元仁八月十一日戊子、甚雨午剋大風、鄕里穿屋、江浦覆船、○中略下總國葛西郡海邊湖、牽入屋、千餘人漂沒云云、

〔下總國舊事考郡七鄕〕千葉郡和名抄訓千波

名義ハ、古事記明宮上卷ニ、時天皇越幸近淡海國之時、御立宇遲野上、望葛野歌曰、知婆能、加豆奴袁美

印旛郡

禮婆云云、傳ニ、知婆能ハ、契冲云ク、千葉之ナリ、葛ハ葉ノ繁キモノナレバ、其枕辭ナリ、下總國千葉郡アルモ、サル意ヲ以テ名付タルカトアリ、按ルニ、本州ニ葛飾郡アリ、飾ハ借字、繁ノ義ナルベシ、シカトシゲト通ズ、然レバ、千葉郡ヲ建ル時ニ、ソノ發語ヲトリテ、名トセルニヤ、千葉葛飾兩郡トモ、取分ケ原野多ク、葛藤ノ繁茂セルヨリ、負ハセシ名ナルベシ、〇中略四至、東ハ本郡野田中野等ト、上總國市原山邊二郡ニ接シ南ハ海ヲ限リ、西ハ葛飾郡ト相錯シ、舟橋御厨ノ地、及原野ヲ限リ、北ハ本郡神崎ト、印播郡舟尾トノ間ノ細流、又同郡神野、下市場、稻葉、小谷流等ニ至ル、六方野ヲ限リ、印播郡ト比違ス、古老云、中古ニ葛飾郡千葉庄ト稱シ、貞享三年、復タ郡ヲ稱ス、此郡正德年中、百二十八ケ村アリト云、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

知波乃奴乃、古乃氏加之波、能保々麻例等、阿夜爾加奈之美、於枳氏他加枳奴、

　右一首、千葉郡大田部足人、

〔千葉系圖〕忠常武藏押領使下總介常將千葉小次郎、居下總千葉郡、因氏焉、

〔下總國舊事考七郡部〕印播郡和名抄旁訓インハ名義ハ、稻葉ノ義ナルベシ、郡中ニ稻葉村アリ、是ヨリ起リシ郡名ナルベシト、思ヒヌレド、假字モ違ハ、コレニテハナカルベシ、說印旛郡條ニ詳カナリ、回國雜記ニ稻穗トセルハ、記者ノ詞ヲカザレルノミ、或云、歌ニヨミ入ルヽガ爲メニ稻穗トセシナリト云、サモアランカ、播ノ字、舊事紀ニ波トシ、三代實錄、和名抄、延喜式等ニ、共ニ幡ニ作リ、萬葉集、常陸風土記ニモ、皆波ト書リ、谷田村慶長七年水帳ニハ判トス、平岡村延寶二年鳥見社棟札ニハ、印毅之郡トス、四至、東ハ上總國山邊、武射二郡ヲ限リ、西南ハ千葉、葛飾、相馬三郡ヲ限リ、北ハ利根川ヲ限リ、東北ハ埴生郡ヲ限レリ、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年正月乙亥、下總國印幡郡大領外正六位上丈部直牛養、〇中略授外從五位

下、以進軍粮也、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

志保不尼乃、弊古祖志良奈美、爾波志久母、於不世他麻保加、於母波弊奈久爾、

右一首、印波郡丈部直大歲、

匝瑳郡

〔續日本後紀四仁明〕承和二年三月辛酉、下總國人陸奧鎭守將軍(將軍原脫、據一本改、)外從五位下勳六等物部匝瑳連熊猪、改連賜宿禰、又改本居貫附左京二條、昔物部小事大連、錫節天朝、出征坂東、凱歌歸報、藉此功勳、令得於下總國始建匝嵯郡、仍以爲氏、是則熊猪等祖也、

〔下總國舊事考七郡郷〕匝瑳郡(和名抄訓佐宇佐)名義ハ、或書ニ狹麻ノ義トス、猶考フベシ、(中略)(伊能穎則云、郡ヲ建タルハ、孝德ノ御世ニテ、類史ニ、音羅波朝廷始置郡トアレバ、續後紀ノ文ニノミ依リテ、此時郡ニセラレシト云ベカラズ、按ズルニ小事大連、當昔匝瑳國造ガ縣主ニナリシヲ、後郡縣ノ制ニ改メラレシトキ、國縣ハ皆國郡トナリシヲ、續後紀ハ後ノ稱ヲ前ヘメグラシテ、書シ者ナルベシ、小事連ノコト、國造本紀ニ漏レタリ、)此ニ據ルトキハ、物部小事大連ヨリ始テ建シ郡ナリ、是ノ小事ノ大連ハ、舊事紀(天孫本紀)ニ、弟宇麻志麻治命十二世孫、物部木蓮子連公(布都久留連公ノ子)此連公石上廣高宮(仁賢天皇)御宇天皇御世、爲大連公云云、弟物部小事連公(志陀連、柴垣連、田井連等祖、)トアリ、十三世孫物部麻佐良連公(木連子大連之子)此連公伯瀬列城宮(武烈天皇)御宇天皇御世、爲大連トアリ、彼此推考スルニ、仁賢天皇ガ、武烈天皇ノ朝ニ仕ヘシ人ト思ハル、其事蹟古事記、日本紀等ニ漏レタレド、續後紀ノ此段ニテ詳ニ知ラルヽ也、(志陀ハ、延佳本標註ニハ、匝瑳ノ誤リナルベシト云ヘリ、)此郡ノ建ザル以前ハ、海上ノ國造ノ部内ニテ有リシナルベシ、

海上郡

〔下總國舊事考八郡郷〕海上郡(和名抄訓宇奈加美)本郡ノ名義ハ、遠江國河上郷、安房國平群郡川上郷、越前國足羽郡江上郷、播磨國揖保郡浦上郷ナドノ類ニテ、海ニ取レル義ナルベシ、當時本州第一ノ大郡ニテ、始テ國造ヲ置レ、其源ニ溯レバ、ハヤク天穗日命子建比良鳥命ヨリツヾキテ、此區域ヲ知ラレシナルベシ、〇中略

香取郡

本郡ハ、和名抄ノ時ヨリ、十五郷ノ大郡ニテ、地勢大洋ニ臨ミ、東常陸ト界ル内海アリ、南椿海ノ未ダ田地トナラザリシ已前ナレバ、匝瑳郡ト入海ヲ隔テ界セリ、天正ノ檢田ニ至リ、僅ニ抄ノ六郷ノ地ヲ存シテ、其九郷ノ地ハ、香取郡ニ隷セシ故ニ、今ハ萬石餘ノ小郡トナレリ、サレド永祿ノ頃マデモ、大倉以東本郡ナリシコトハ、海上八幡宮永祿年中ノ祭事記ニ見エタリ、

〔東大寺正倉院文書四十四〕謹解　申請海上郡大領司仕奉事

中宮舍人左京七條人、從八位下海上國造他田日奉部直神護我、下總國海上郡大領司爾仕奉止申故波、神護我祖父小乙下忍、難波朝庭(○孝德)少領司爾仕奉支、父追廣肆宮麻呂、飛鳥朝庭(○天武)少領司爾仕奉支、又外正八位上給氏藤原朝庭(○持統文武)大領司爾仕奉支、兄外從六位下勳十二等國足、奈良朝庭(○元明)大領司爾仕奉支、神護我仕奉狀、故兵部卿從三位藤原卿位分資人、始養老二年至神龜五年十一月、中宮舍人、始天平元年至今廿年、合卅一歲、是以祖父父兄良我仕奉祁留次爾在故爾、海上郡大領司爾仕奉止申、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿加等伎乃、加波多例等枳爾、之麻加枳乎、己枳爾之布禰乃、他都枳之良受母、(アカトキノ、カハタレトキニ、シマカキヲ、コキニシフネノ、タツキシラズモ)

右一首、助丁海上郡海上國造他田日奉直得大理、

〔萬葉集抄十四〕上總國にいまは海北(うなかた)海南(うなかみ)といふは、ふるき海上の郡なりと申す、

〔郡名考〕下總　香取(カトリ　カントリ)

〔下總國舊事考八郡鄕〕香取郡(和名抄訓加止里)

名義ハ、萬葉集ニ、(卷十一八丁)大船香取海、慍下、何有人、物不念有、(ノ、ノニイカリオロシイカナルヒトカモノオモハザラム)ト云歌ニヨリテ、楫取ノ義トシ、應安中海夫文書ニ、常陸下總ノ津々浦々、古來ヨリ香取神宮ノ所務ナルヲ證トシ、(海夫ノコト別ニ言フベシ)或ハ續千載集藤原定家卿ノ、夏衣香取ノ浦ノウタヽネニ波ノヨル〳〵カヨウ秋風、ト云歌ニヨリテ、縑(カタ)

織ノ義トシ、縑ハ、衣ナリ、生衣ヲ云トアリ、水色ノスヾシナリトモ云ヘリ、又、傍近ニ、折幡、幡鉾、小見和名抄麻績鄕ナド云村、皆織ニ因アルヲ證トシ、折幡チ織機ノ義トスルハアタラズ、皇國ノ語例ハ、體言チ先トシ用言チ後トスルガ常ナリ、折播ハ木障畑ノアルヨリ、負ハセシ名ナルベシ、幡鉾ハ島發境ナルベシ、地方ニテ新墾ノ地チホツクト云、又荒久ト云ハ、新發境ノコトナリ、其近隣ニマタ、虫島ナド云村アリ、此ハ文字ノ如クナルベシ、或ハ神集(カムヅマ)リノ義トシ、萬葉五ニ、ウナハラノヘニモ、オキニモ、カムヅマリ、ウシハキイマス、モロモロノ大神タチ、云々ノ歌モアリ、高天原ノ故事ニ取レルナリト云、此説甚ダ非ナリ、上古ノ神ト云ハ、即チ其土地ノ守ナルヲ、神變不可思議ノ鬼神ノ如ク思ヘルヨリ、言出タル僻説ナリ、○中略上古物ヲ結ブニ葛ヲ用ヒ、其葛ヲ採ル人ヲ、葛取ト云ヘリ、鵝古雜帖ニ載タル法隆寺三倉古書中ニ、寶字六年正月云云、葛取雇夫二人、功廾文、人別十文ト見エタリ、同年比、造近江石山寺司ノ用途文書ニ、黑葛蘽斤ト云コトモ見エタレバ、葛取ノ義ニテ、其事ヲ業トスル人、住メルユヱノ地名ナルニヤ、本州ニ葛飾郡アリ、香取地方ニ葛原牧アリ、牧ハ庄ト異ナレド、實ハオナジサマナリ、香取文書ニ見ユ、因ニ云、葛原牧ハ、京師葛原ヨリ取レルニヤ、平氏ノ祖ハ葛原親王ヨリ出ヅ、其庄園ナドノアルニヨリ、千葉氏モ下總ニ蔓衍スルコトナリシニヤ、藤原新田ト云地モアリ、フヂモカヅラモ、葛ノ字ノ訓ナリ、播磨國明石郡葛江ハ、(布知衣)讃岐國多度郡葛原ハ、(加都良波良)豐前國宇佐郡葛原等アリ、證トスベシ、舊事紀天孫本紀ニ、船長同共率領梶取等天降供奉、梶取阿刀連等祖天麻良、古老曰、大禰宜ノ分家ニ、カイトリト云神官アリ、今ハ梶取ト書クヨシ也、船子倭鍛冶等祖天眞浦トアリ、前ニアゲタル海夫文書等ニヨリテ考レバ、梶取等ノ住居セシ地ヨリノ名ナルベシ、上古經津主命、海門ヲ控制シ、ソレユヱ北浦、西浦ニ部下ノ船子等、多ク住シテ、風魚非常ノ警ニ備ヘシモノト見ユ、今霞浦北邊ニモ、南邊ニモ、船子村アリ、是ソノ部曲ノ住セシ地ナルベシ、

〔延喜式 十八式部〕凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓、除同門外聽任、神郡陸奧緣邊郡大隅薩摩等郡者、不在制限、謂(中略)下總國香取、(中略)筑前國宗形等郡爲神郡、

〔續日本紀 九元正〕養老七年十一月丁丑、下總國香取郡、○中略等少領已上、聽連任三等已上親、

〔東大寺正倉院文書 二十一〕下總國釬托郡少幡鄉戶籍

繼目裏書　下總國釬托郡少幡鄉養老五年戶籍

埴生郡

相馬郡

男壬生部波奈年拾貳歲　小子〇下略

〔郡名考〕下總　埴生ハニフ　埴生ハブ

〔下總國舊事考九郡〕埴生郡和名抄訓波牟不

名義、埴生ハ、ハニノオフル處ヲ云、和名抄訓波牟不ナレド、地方ノ方言ニテ、ハブト省言ニ呼ビ來レリ、或云、牟一本ニ誤ニ作レリト、イカヾ、駿河ノ國阿陪ノ郡埴生ノ郷、訓反布トアリ、ソノ地方ノ稱呼モ本郡ト同ジサマナリ、抄ニ四郷ヲ載スレド、龍角寺所藏天正八年、千葉邦胤文書ニハ、埴生十五郷料所、并私領云々トアリ、此ノ料所トハ千葉一家ノ領分ヲ云ニヤ、私領トハ其一族ノ領所ナルベシ、郷トハ十五箇村ノコトニヤ、又吉岡大慈恩寺文書ニ、伊能郷、奈土郷、津富良郷、小松郷等アリ、皆村ト並ベ擧ゲタリ、郷村ノ辨別ナシ、

按ニ、佐倉風土記ニ、本郡中古廢シテ、香取ノ郡埴生ノ庄ト唱フ、貞享三年以來復タ郡トナレリト云、郡名ノ起レルハ、上福田村ニヤ、上福田下福田トモ、舊ハ一村ニテ、埴生郷トモ云シナラン、此村ニ土地明神ト云社アリ、社傳ニ埴安姫命ヲ祭ルト云、サテ上總下總共ニ埴生、海上ノ二郡アリ、四至、今ノサマハ、東南ハ香取郡、上總國武射郡ヲ限リ、西南ハ印旛郡、北ハ利根川、常陸國河內郡ナリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿米都之乃、以都例乃可美乎、以乃良波加、有都久之波々爾、麻多己等刀波牟、

右一首、埴生郡大伴部麻與佐、

〔下總國舊事考九郡〕相馬郡和名抄訓佐宇萬

相馬ノ名義ハ、狹沼ナルベシ、此地昔シ衣川ノ末流、小貝川ニ合シ、今ノ利根川ト川瀨ヲ異ニシテ、立木村ノ北方ヲ迂回シテ、沼澤沮洳ノ地ナレバ名付シナルベシ、但馬國氣多郡狹沼郷アリ、此地ノサマナルベシ、

四至、今ノサマハ、南ハ手賀沼ヲ限リ、（鎌湖ノ新田地ハ印旛郡ナリ）西ハ葛飾郡花野井ヲ限リ、西北ハ鬼怒川ノ落口ヲ限リ、北ハ小貝川、常陸國若芝、龍ケ崎等ヲ限リ、東ハ藤藏印播郡大森、木下（キオロシ）等ヲ限レリ、

〔東大寺正倉院文書二十一〕下總國倉麻郡意布鄕戶籍

（繼目裏書）下總國倉麻郡（相馬○）意布鄕養老五年戶籍

戶藤原部黑栖年參拾肆歲　正丁　戶主藤原部伊良都從文弟、課戶、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

於保伎美能（オホキミノ）、美己等加之古美（ミコトカシコミ）、由美乃美仁（ユミノミニ）、佐尼加和多良牟（サネカワタラム）、奈賀氣己乃用乎（ナガキコノヨヲ）、

右一首、相馬郡大伴部子羊、

〔下總國舊事考九郡鄕〕猨島郡（和名抄訓佐之萬）

本郡ノ（豐田郡宗任明神社藏嘉吉中文書、又岩井延命寺華鬘銘、及常陸大寶八幡社、享德中鐘銘等、共ニ幸島ニ作ル、中古或ハ幸島ト書シト見ユ、坂野耕雨云、將門記辛島郡ハ幸島郡ノ誤リナリト、コノ說極メテ是ナリ、）建置ハ、書紀ニ、景行天皇五十五年春二月戊子朔壬辰、以彥狹島王拜東山道十五國都督、是豐城命之孫也、然到春日穴咋邑、臥病而薨之、是時東國百姓、悲其王不至、竊盜王尸、葬於上野國、五十六年秋八月、詔御諸別王曰、汝父彥狹島王、不得向任所而早薨、故汝專領東國、是以御諸別王、承天皇命、且欲成父業、則行治之、早得善政、時蝦夷騷動、卽擧兵擊焉、時蝦夷首帥、足振邊大羽根邊、遠津闇男邊等、叩頭而來之、頓首受罪、盡獻其地、因以免降者而誅不服、是以東方久之無事焉、由是其子孫於今有東國、蓋當時地方ニ彥狹島王（三代實錄、貞觀六年十一月八日、右京人二品秀良親王家令、正六位上字自加臣吉人賜姓笠朝臣、彥狹島命之後也、）ノ御名代ノ地ヲ建ラレシナルベシ、王カク東國ニ有功ノ人ナレバ、彥狹島王ノ御名代ノ爲メニ猨島郡ヲ建タマヒシナルベシ、詳ニ其事ヲ記サヾルハ史ノ闕文ナルベシ、後物部小事連ナド、此例ニテ匝瑳郡ヲ置レシナラン、

〔一話一言二十四〕下總國郡の事

古代下總國猿島郡に屬せし村々、元祿十四年、結城郡に屬すべきよし、仰出さると云、

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年七月己酉、下總國猨島郡災、燒穀六千四百餘斛、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
牟浪他麻乃、久留爾久枳作之、加多米等之、以母加去々里波、阿用久奈米加母、
右一首、猨島郡刑部志加麻、

〔下總國舊事考 十一 金石〕大寶村八幡社鐘銘〇中略
下州上幸。島。郡。穴太邊星智寺榷鐘
開山權律師隆遍　住持阿闍梨隆翁
享德五年丙子七月十六日

〔下總國舊事考 九 郡郷〕結城郡 和名抄訓由不岐
名義ハ、カヂヲユフト訓ズルハ、結束スルノ義ヨリ取レルナルベシ、古語拾遺ニ、天富命、更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀、好麻所生、謂之總國、穀木所生、謂之結城郡、（本注、古語、麻謂之總也、今上總下總二國是也、）今トアル如ク、穀木ノ生ズルヨリ取レル名ナルベシ、今モ此地ヨリ出ル紬、木綿等ハ、精好天下ニ冠タリ、其由來ノ舊キコト知ルベシ、（按ニ、古語拾遺ノ成リシハ、大同三年ナレバ、其以前ヨリ見エ、同書ノ趣ニテハ、天富命ヨリノ事ナラン、）四至、今ノサマハ、東ハ常陸國眞壁郡毛野川故道ヲ限リ、南ハ豐田、岡田、猨島三郡ニ錯リ、西北ハ下野國都賀郡ヲ限ル、統村四十二アリ、正德中所撿括高二萬四千六百二十四石餘、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
和加々都乃、以都母等夜奈枳、以都母以都母、於母加古比須奈、奈理麻之都之母、
右一首、結城郡矢作部眞長、〇中略
久爾具爾乃、夜之呂乃加美爾、奴作麻都理、阿加古比須奈牟、伊母賀加奈志作、

右一首、結城郡忍海部五百麿、〈○中略〉

於保伎美能、美許等爾作例波、知々波々乎、以波比弊等於枳氏、麻爲氏枳麻之乎、

右一首、結城郡雀部廣島、

岡田郡 豐田郡

〔拾芥抄〕〈中本朝國郡〉下總〈○中略〉 豐田〈元岡田、延喜二十年改爲豐田、〉

〔郡名考〕下總 豐田〈トヨタ〉 〈延喜式頭書云、延喜四年十二月十日、改岡田郡爲豐田、〉

〔延喜式〕〈神名九〉下總國岡田郡一座〈小〉 桑原神社

〔下總國舊事考〕〈九郡豐田郡〉豐田郡〈和名抄訓止與太〉 岡田郡〈豐田岡田ノ二郡ハ、元岡田郡ナリシヲ、延喜四年ニ豐田郡ニ改メラレ、今代貞享三年ニ豐田郡ノ内絹川ノ四十ケ村ヲ割キテ、岡田郡ヲ建シヨリ、二郡分立スル事トハナレリ、〉

名義ハ、郡中ニ豐田村アリ、コレヨリ出タル名ナラン、廢建ハ民部式頭註ニ、延喜四年十二月十日〈拾芥抄延喜廿年トス、神名帳考證土代ニ云、秘釋ニハ延喜四年三月十日改トアリ、〉改下總國岡田郡爲豐田郡トアリ、是ヨリ岡田郡全ク廢セシト見エテ、民部式、和名類聚抄共ニ載セズ、タヾ神名帳ニ岡田郡ヲ載ス、考異云、式ノ撰集、延喜五年ニ始リ延長五年ニ成ル、藤原時平、忠平等前後總裁ヲ異ニシテ、廿三年ニシテ成功セシ書ナレバ、神名帳ハ元ノマヽヲ書キ、〈是ハ神社ニ付テノコトナレバ、後人ノ錯惑ヲ生センカト、筆者ノ深キ意アリテワザト舊郡ヲアゲシナルベシ、〉民部省條ニハ、今名ヲ書セシ故ニ、一書ノ内支互ヲナセシナラムト、猶大須本將門記ニ載ル所ノ地名ヲ撿スルニ、豐田郡大房ト云、豐田郡鎌輪〈今岡田郡ニ鎌庭村アリ、是ナルベシ、〉ト云、岡田郡ヲ載セズ、將門記ハ天慶ニ成リシ書ナレバ延長五年ヲ去ルコト、僅ニ十餘年ナリ、然ルニ絶テ岡田郡ノ名見エザレバ、全ク廢セシト見ユ、其後岡田郡ヲ建タルハ、貞享三年ナリト云、

四至、今ノサマハ東ハ常陸國筑波郡ヲ限リ小貝川コレヲ界シ、南ハ相馬郡ニ接シ、西ハ岡田郡ニ對シ、鬼怒川コレヲ界シ、結城郡ニ接シ、北ハ常陸國眞壁郡ニ對シ、絲縲川コレヲ界シ、〈卽毛野川ノ故道ナリ〉

統村七十七、正德中所撿括三萬九千三百〇三石餘、〈○下略〉

私撰郡名

〔圓福寺文書〕下總國太方郡今里郷圓福寺法儀條々

一於胎寳山圓福寺領仁、自今已後希宗親類并不撰甲乙之素緇於不可向馬之鼻於況佛供便宜之

田畠不可有猥籍事、〇中略

右爲末代所記置如件

應永二年八月三日　　沙彌希宗花押

〇按ズルニ倭名類聚抄ニハ、豐田郡ニ大方郷アリ、

郷

〔倭名類聚抄六國郡〕下總國　葛飾郡　度毛　八島　新居　桑原　栗原　豐島　餘戸　驛家

千葉郡　千葉　山家　池田　三枝　糟莜　山梨　物部

印幡郡　八代　印幡　言美　三宅　長隈　島矢〇島矢、高山寺本作鳴矢、　吉高　船穗　臼理　村神　餘戸

匝瑳郡　野田　長尾　辛川　千俣　山上　幡間　石室　匝瑳　須加　大田　日部　玉作

田郡　珠浦　原　栗原　茨城　中村

相馬郡　大井　相馬　布佐　古溝　意部　餘戸

猨島郡　塔隴　八俣　高根　石井　葦津　色益　餘戸

結城郡　茂治　高橋　結城　小埇〇埇、高山寺本作塙、　餘戸

豐田郡　岡田　飯猪　手向　大方

海上郡　大倉　城上　麻績　布方　輕部　神代　編玉　小野　石田　石井　橘川　横根

三前　三宅　船木

香取郡　大槻　香取　小川　健田　礒田　譯草

埴生郡　玉作　山方　麻在　酢取

〔東大寺正倉院文書二十〕下總國葛飾郡大島郷戸籍

下總國葛飾郡大島鄕戶籍　養老五年

甲和里戶主孔王部小山年肆拾捌歲　正丁課戶

〔東大寺正倉院文書二十一〕下總國倉麻郡意布鄕戶籍

繼目裏書　下總國倉麻鄕意布鄕養老五年戶籍

〔東大寺正倉院文書二十一〕下總國釬托郡少幡鄕戶籍

繼目裏書　下總國釬托郡少幡鄕養老五年戶籍

〔東大寺正倉院文書小杉本〕下總國司解　申貢上逃官賤事

合婢貳口 當國一口 他國一口

婢稻主賣年貳拾壹歲 右頰黑子 部下香取郡神戶大槻鄕中臣部眞敷之婢

右依民部省去天平勝寶元年九月廿日符買取、付運調使史生從七位下土師宿禰稻守貢上者、

〇中略

天平勝寶三年五月廿一日　從七位下行少目守山眞人智万侶

〔續々修東大寺正倉院文書十八〕石山院奉寫大般若經所解　申進返仕丁等事

合仕丁伍人

占〻小足 下總國埴生郡麻在鄕 五月七日逃〇中略

矢作眞足　下總國相馬郡大井鄕

久須波良部廣島 同國郡邑保鄕 〇中略

以前仕丁等、依事畢、進返如件、以解、

天平寶字六年十二月廿四日　造東大寺司主典正八位上安都宿禰

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶二年十二月十五日、賊主將門恣行、合戰章云、〇中略定可建王城之處、下總國猿

島郡石。井。鄉南亭可﹅爲﹂都朝﹂、
〔稱名寺古文書〕新見文書所﹂收
當寺領○中略下總國埴生庄內山。口。鄉。南栖立村、○中略等事、任﹂度々寄附狀、幷元德元年十二月二日下知狀﹂可﹅令﹂知行﹂給﹂之狀如﹂件、
建武三年十二月一日　　　　左馬頭御在判○足利直義
謹上　金澤稱名寺長老
〔相馬岡田文書〕相馬泉五郞胤康今者討死子息乙鶴□□下總國相馬御廚內泉。鄉。本領幷手。賀。藤。心。兩鄉新田源三郞跡安堵事、胤康者爲﹂御方﹂自﹂奧州﹂致﹂軍忠﹂、去年二三兩月、前代一族蜂起之時、散々致﹂合戰﹂○中略以﹂此旨﹂可﹅有﹂御披露﹂候、恐惶謹言、
建武四年八月十八日　　　　陸奧守家長○斯波上
進上　武藏權守殿○高師直
〔集古文書四十二寄附狀〕北條貞將寄附狀武藏國金澤稱名寺藏
下總國下河邊庄內赤。岩。鄉、○中略此所々者、爲﹂不輸之地﹂、永代奉﹂寄﹂附當寺﹂候、此外父祖二代之間、寄附之所々者、如﹂本知行、御管領不﹅可﹅有﹂相違﹂候、天下泰平之御祈念、可﹅致﹂精誠﹂候、恐々謹言、
正慶元年二月十六日　　　　武藏守貞將花押
稱名寺長老
〔大慈恩寺文書〕雲富山大慈恩寺當知行領事
合
伊。能。鄉。內本願寄進井新寄進　奈。士。鄉。內本願寄進井新寄進　津。富。良。鄉。內本願寄進井新寄進　西雲富村內
本願寄進井新寄進　臼栗村內本願寄進井新寄進　物木村內本願寄進井新寄進　久士崎村內本願寄進井新寄進
古山村內本願寄進大椎代　橫山村內本願寄進大椎代　靑木村內　小。松。鄉。內　滑河村

內　水懸村內　一坪田村內本願寄進井新寄進　猿山村內　前林村內本願寄進

柴村內本願寄進井新寄進　大室村內本願寄進　矢田山　中野本願寄進　雨尾

助崎　達山方　南城　上畠　柴田　上總國大椎鄉內

右本願胤氏法名信蓮御寄進、幷代々寄附等文書、依紛失子細、爲後證判者也、○中略仍爲後證狀如件、

應永卅三年丙午卯月十日　　左衛門尉平朝信花押大須賀○

〔集古文書二十補任〕應永卅三年補任相模國鎌倉鶴岡相承院藏

補任

下總國葛西御厨上木毛河鄉內、藥師堂號淨光寺別當職井寺領等事、

右任奧津右衛門五郎家定申請之旨、所補任之狀如件、

應永卅三年六月十三日　　安房守花押

相承院法印御房

〔勝願寺文書〕禁制

磯部鄉之內大坊

一軍勢甲乙人等濫妨狼籍事○中略

右條々有違犯之輩者、可被處罪科之狀、依仰下知如件、

太永三年十月十二日　　式部大夫花押

〔下總國舊事考七郡鄉〕千葉郡

千葉鄉　今千葉町ト稱スル地是ナリ、新田共十二町ニ分テリ、千軒許アリト云、因云、千葉介ト云ヘ、下總介ガ千葉ニ居住セシユヱノ在名ナリ、千葉郡ノ介ニハアラザルナリ、ソレモ國造ノ故址ニヨラレシナルベシ、或云、本郡ニ殿臺村アリ、國造ノ址ハ是ナルベシト、猶考フベシ、千學集ニ、大治元年丙午六月朔、ハジメテ千葉ヲ立ツ、町ノロトナルベシ凡一萬六千軒ナリ、表八千軒、裏八千軒、小路表裏五百八十餘ナリ、曾場鷹大明神ヨリ、御達報稻荷ノ宮ノ御前マデ、七里ノ間御宿ナリ、六丁一里ナルベシ後ノモノナガラ、

村里邑名

〔郡名一覽〕下總國（御料私領） 總州　南北三日　拾貳郡

高五拾六万八千三百三拾壹石壹斗壹升三合七勺四才　千四百八拾四ケ村

●佐倉　十三里半十六町　●古河　十六里　●關宿　十三里　●結城　二十一里

○生實（オヒ）　十二里　○小見川　二十六里　○高岡　十九里　○多古　十九里

大概チ見ルベキニヤ、

〔郡國提要〕下總　十二郡、千六百二十三村、　高六十八万千六十二石六斗三升一合六勺六才（御料私領）

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

葛飾郡三百四十村　猿島郡七十四村　結城郡五十一村　豊田郡八十村　相馬郡百四十二

村　千葉郡百三十七村　埴生郡六十三村　香取郡二百九十七村　匝瑳郡六十九村　海上

郡七十一村　岡田郡三十九村　印旛郡二百六十村

〔地勢提要（埠）〕郡邑島嶼奇名

下總千葉郡、撿見川（ケミ）村、馬加（マクハリ）村、匝瑳（ソウサ）郡、神宮寺（ジングジ）村、

〔下總國舊事考（十五市集）〕古河。城下、十二町、戶凡五百、販賣二麥二豆紅花等、多驛家、有狹斜、

關宿。城下、六町、戶凡五百、向河岸則多鬻魚粕魚油等者、而有高貲戶以萬金稱者、境町則多船僧、船自

此地發、一夕可達江府也、

野。田。町、右傍口町、戶凡二百、多造醬油戶、頗稱殷實、流。山。村口町、戶凡三百、多釀酒米商、近來出精醇九

醞酒、爲三都冠、

松。戶。驛、爲水戶往還、口町、戶凡三百、多旗亭、有狹斜、行。德。村、爲房總到江府要路、三町、戶凡五百、多船僧

塱戶、（以上共沿利根川）

舟。橋。驛、爲佐倉及房總往還、口町、戶凡一千、多漁戶旗亭、有狹斜、

右在葛飾郡

千葉町、□町、戶凡一千、多漁戶、　登戶村、戶凡一百、多船僋、

寒川村、□町、戶凡五百、二總諸物、轉輸江府馬頭也、多船僋漁戶、

蘇我野、　濱野、　共爲房總往還、戶各二百、多旗亭、有船僋、

右在千葉郡

佐倉城下、六町、戶凡七百、

岩富町、爲東上總諸物轉輸之通衢、戶凡二百、

右在印播郡

八日市場、□町、戶凡六百、多鬻木綿魚粕米穀等、

太田村、陣屋下、戶凡二百、

右在匝瑳郡

銚子陣屋下□町、戶凡五千、多漁戶、造醬油、爲關左之最、而奥羽海運屯泊之所、爲本州第一段富之地、

野尻、　高田、　共戶凡一百、九十九里濱所出魚粕魚油、皆從此漕江府、

右在海上郡

小見川陣屋下、□町、戶凡六百、農買雜居、釀酒鬻米爲業者多、

多古陣屋下□町、戶凡五百、佐原□町戶凡一千五百、多釀酒米商、

高岡陣屋下戶一百　滑川、戶凡二百、多旗亭、

神崎、戶凡三百

右在香取郡

成田、戶凡二百、多旗亭、

右在埴生郡

取手、布川、　共戸各五百

右在相馬郡

境町、係關宿城下内口町、戸凡五百、多船僧、

谷貝、赤係關宿城下、戸凡一百、　仁連、　諸川、　共戸各一百、多旗亭、

右在猿島郡

水海道、戸凡三百、多賈酒米綿布等者、　本宗道、戸凡二百、

右在豐田郡

結城、城下、十八町、戸凡五百、織木綿爲業者多、精好爲天下之冠、

右在結城郡

〔相馬岡田文書〕しも口さのくにさうまのこほりいづみのむら、みちのくになめかたのこほりゐんないそしふんはのぞく、やつうさぎ、ゐゝとへやま、たかきのはたや、くろかはのこほりにふたのむら、しそく小ご郎胤家にゆづりわたすじやう、くだんのごとし、

けんむ二ねん十二月廿日　　平胤康

〔相馬文書一〕讓渡　所領事

次男彌次郎光胤分

一下總國相馬郡内　粟野村、〇中略

右村々者、限永代讓渡彌次郎光胤畢、〇中略　永代可令知行、仍讓狀如件、

建武三年二月五日　　平重胤（花押）

〔相馬文書一〕下總國相馬郡内鷲谷村口津々戸（相馬六郎跡）口口　藤谷村（相馬九郎六郎等跡）口口　大鹿口口口　高井口口口　高

柳。村。等事、爲關所由、被聞食之間、將軍家御計程、所□□□□可被致沙汰□狀、依仰執達如件、

建武三年十一月二十二日　　源花押○斯波家長

相馬孫次郎殿○親胤

〔集古文書四十三寄附狀〕足利氏滿寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　別願寺

下總國相馬御厨內横。須。賀。村事

右爲瑞泉寺殿御菩提所、寄附狀如件、

永德二年十月廿九日　　左兵衛督源朝臣

〔大慈恩寺文書〕下總國大慈恩寺雜掌申、同國伊能鄉內壹町三段、奈土鄉內貳町五段、富良鄉內貳町壹段、臼。栗。村內貳町二段、久。士。崎。村內五段、青。木。村內貳段、横。山。村內壹町、古。山。村壹町四段、西。雲。富。村。內貳町貳段、一。坪。田。村內壹町貳段、前。林。村內壹町、中。野。村內陸段、矢。田。山。村內貳段、南。尾。村內貳段、滑。河。村內三段、小松鄉內七段、猿。山。村內貳段、水。懸。村內五段、柴。村內壹町六段、大。室。村內五段、柴。田。村內壹町七段、南城內貳町、上畠內壹町三段、遠山方內四段、助。崎。村內壹町、上。村內五段、物。木。村內五段、上總國大椎鄉內山野等文書事、去二十八年正月七日、當寺廻祿時、令紛失由申之、且云當知行實否、云土貢分限云、可支申仁有無、紛失實否、被起請之詞、可被注申、若引渡訴人捧不實請文者、可有其咎狀、依仰執達如件、

應永卅三年八月廿二日　　前備中守押

國分參河守殿

〔古文帖〕千貳百石　岡部半之助

大神君

下總國葛飾郡相。谷。村。八。木。村百石、相模國大住郡千田村三百石、都合四百石出置候畢、永可ㇾ令ㇾ知行ㇾ者也、仍如ㇾ件、

天正十九年　御朱印

岡部庄左衛門どのへ

〔古文帖〕大神君御朱印

下總國匝瑳郡野。手。村五百石之事

右出置候畢、永可ㇾ令ㇾ知行ㇾ者也、仍如ㇾ件、

天正十九辛卯年月　御朱印

押田與一郎どのへ

〔廻國雜記〕古川。といふ所にて、舟にのりて、

こがくれにうかべる秋の一葉舟さそふ嵐を川おさにして

河舟をこがのわたりの夕なみにさしてむかひの里やとはまし

〔下總國舊事考〕十二古書地名考古川(コ)(諸本古河ニ作レリ)葛飾郡ニアリ、萬葉集(十四卷)ニ、マクラガノコガノ、ワタリノ、カラカヂノ、オトタカシモヨ、ネナヘコユヘニ、夫木抄(二十六卷)西行法師、キリフカキコガノワタリノワタシモリキシノ舟付思ヘ定メヨ、左注ニ、武藏ノ國ト、下野ノ國トノ中ニアル古河ノワタリストナ、霧深カリケレバヨメル云々、此下野ハ、下總ノ誤リナリ、古河ト中田ノ邊ハ、武藏ニ毛錯綜シツレバ、カヽル事ハアルベキナリ、東遊行嚢抄(十八卷)ニ、古河自ㇾ栗橋ㇾ到ㇾ于ㇾ此一里半、利根川舟渡シアリ、坂東太郎ト云大河也、以ㇾ此河ㇾ爲ㇾ武藏之堺ㇾ云々、中田宿ハ利根川ノ東岸ニアリ、古河へ行程一里、

〔成田參詣記〕四佐。倉。城　印旛郡鹿島山にあり、(今の城地を鹿島郷と云は古きことゝ見えて、永祿八年海隣寺佛鑒に見えたり、)衛坊六ケ

町、(田町、新田、鏑勒町、本町、本佐倉町、酒々井町、)江戶より十三里十八町餘、天正十六年七月、千葉介邦胤卒し、十一月、北條氏政がはからひにて、新館を此地に營み、邦胤の長女東をして居しむ、佐倉の本町は元鹿島宿と云、千葉家本佐倉に治城のをりふりだしの宿なり、今猶繼場は此宿にてつとむと云、

〔令條記二十九〕定

下總國佐倉より東におゐて、しがみ錢取遣べし、但われ錢かけ新錢、ゑらび可申事、

慶長十一年七月廿三日　　對馬守判　大炊介判　備前守判

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十四日癸亥、下總國千田庄領家判官代親政者、刑部卿忠盛朝臣聟也、平相國禪閤通其志之間、聞目代被誅之由、率軍兵欲襲常胤、依之常胤孫子小太郎成胤、相戰遂生虜親政訖、

〔吾妻鏡五〕元曆二年(○文治元年)十月二十八日丁丑、片岡八郎常春、同心佐竹太郎(常春舅)有謀叛企之間、被召放彼領所下總國三崎庄畢、仍今日賜千葉介常胤、依被感勳節等也、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十二日庚寅、關東御知行國々內、乃貢未濟庄々、召下家司等注文被下之、可加催促給之由云云、今日到來、

注進　三箇國庄々事(等下總信濃越後國々注文)

合

下總國　三崎庄(殿下御領)　大戶神崎(同)　千田庄　玉造庄(三井寺領)　匝瑳南庄(熊野領)　印東庄(成就寺領)　白井庄(延曆寺領)　千葉庄(八條院御領)　船橋御厨(院御領)　相馬御厨(同前)　下河邊庄(八條院御領)　豐田庄(按察使家領、號松岡庄、)　橘並木內庄(二位大納言)　八幡(○中略)

右注進如件

文治二年二月日

〔吾妻鏡四十三〕建長五年八月三十日戊午、下總國下河邊庄堤、可築固之由有沙汰、被定奉行人、所謂淸久彌次郞保行、鎌田三郞入道西佛、對馬左衞門尉仲康、宗兵衞尉爲泰等也、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十一月二十七日乙未、東平太重胤者、無雙近仕也、其男胤行又相並、又夙夜在君敵、去比下向下總國海上庄、久不歸參之間、將軍家被遣御書、是早可令歸參之由也、

〔神崎文書〕下　下總國神崎御庄神官沙汰人等所

可早如本立行鹿島神田肆町事

右件神田者、本四町也、而右衞門尉行國撿注之時、被倒二町云々、尤不便次第也、但於二町者、以前被立畢、所被倒今二町相加、本可立四町神田之狀、所仰如件者、神官沙汰人等、宜承知、勿違失、以下、

承久三年六月十六日　　文章生平花押

〔吾妻鏡三十七〕寬元四年十二月二十九日甲寅、左馬權頭入道昇蓮、與上野入道日阿、相論下總國松岡庄田久安所鄕所務條々內、去文曆元年貢物所濟事、依爲日阿當給人、可令辨償之由、領所昇蓮訴申之間、日阿拜領者文曆元年十二月十六日也、全不徵納彼年貢物之上者、非辨濟之旨、日阿陳之、仍日來有其沙汰、今日仰件鄕本地頭忠幹、可令致辨之由云云、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年（寶治元年）六月七日戊子、又下總次郞時常、自昨夕入籠此館、同令自殺、是秀胤舍弟也、相傳亡父下總前司常秀遺領垣生庄、爲秀胤被押領之間、年來雖含鬱陶、至斯時並死骸於一席、勇士之所美談也、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年十二月二日丁巳、宮內少輔泰氏朝臣、所領於下總國垣生庄、潜被遂出家、（年三十六）卽年來遂素懷云云、

〔下總國中山法華寺古文書上〕八幡莊若宮戶村內法花寺堂敷（井）畠事、如本不可有相違之狀如件、

建武二年二月六日　　貞胤（花押）（千葉介）

大輔阿闍梨〈諱〇日〉御房

〔武州文書〈八〉〕海上中務入道理一女子尼蓮一言上

欲早任蓮一相傳證文、并安堵下知狀、蒙御成敗金澤稱名寺代官光信非分知行、下總國東。莊。上代鄉

內田八段半、在家一字事、〈〇中略〉

建武二年四月日

〔鎌倉大草紙〕此千葉介は、平將軍村岡五郞重門末葉にて、右大將賴朝の御時、當家の元祖常胤は、鎌倉へ無二の忠節ありて、將軍より御崇敬あり、官加階はあらざれども、諸家の上座に列、一男千葉新介、〈〇中略〉六男東六郞大夫胤賴とて、東庄三十三鄉を知行し、代々歌人にて、禁中の御會にも參ければ、子孫代々在洛す、

〔古文帖〕靑山牛太夫藏

大神君

下總國東庄三千石宛行訖、永可令知行者也、仍如件、

天正廿年二月朔日　御朱印

靑山圖書助どのへ

〔烟田文書〈天〉〕讓與所々所領等事

下總國印。東。莊。貝塚鄉〈自大道北、井加親常跡、〇中略〉

建武三年〈大才丙子〉六月廿日　信崇〈判〉

〔下總國舊事考〈金石十一〉〕龍腹寺村龍腹寺鐘識

南閻浮提大日本國關東下總印。西。莊。龍腹寺玄林山大鐘、寄附之作者谷田部三郞兵衞、千葉于行人

筆者當寺普門坊賢勝

藩封

按此鐘雖レ不レ備二年月一、推二其形状一且文體一、爲二天正以前物一必矣、

〔下總國舊事考〈十一〉金石〕宮本村光明院鐘識

敬白下總國匝瑳南條庄熊野山若一王子御寶前寃鐘

發願壽人上慶〈○中略〉

文和貳年〈癸巳〉拾貳月十三日

〔下總國舊事考〈十一〉金石〕富岡村長德寺鐘銘〈○中略〉

下總國千。葉。莊。椎名富岡山長福寺　願主宥傳　藥師如來鐘一口

天文四乙巳二月十七日

〔東路のつと〕或人安房の清洲を一見せよかしと誘ひしに、いづこかさしてと思ふ世なれば、立歸り江戸のたてのふもとに一宿して、隅田川の河舟にて、下總國葛。西。の。庄。の河内を、半日計りよしあしをしのぐ折しも、霜枯は難波の浦に似通ひて、隱れて住し里も見えたり、

〔慶應元年武鑑〕堀田相模守正倫〈帝鑑間　朝散大夫〉　拾一万石　居城下總印幡郡佐倉　江戸ヨリ〈千住〉道十三里半ヨ

〈天正十八年、久野三郎左衛門宗能、慶長年中、同民部少輔宗秀代、遠州久野所レ替、後中絶、元和年中封レ之、土井大炊頭利勝、寛永十、石川主殿頭忠總、同十二、松平紀伊守家信、同若狹守康信、同十九、堀田加賀守正盛、同上野介正信、寛文元、松平和泉守乘久、延寶六、大久保加賀守忠朝、貞享二、戸田山城守忠昌、同能登守忠眞、元祿十四、稻葉丹後守正通、同丹後守正知、享保八、淀エ替、松平左近將監乘邑、同和泉守乘佐、延享三、堀田相模守正亮、以後領レ之、〉

土井大炊頭利則〈雁間　朝散大夫〉　八万石　居城下總葛飾郡古河　〈江戸ヨリ二十六里　舟路二十二里半〉

〈天正十八、小笠原兵部大輔秀政、慶長七、松平丹波守康長、同十三、小笠原左衛門佐信之、同左衛門佐政信、元和三、爲宿エ替、同五、奥平美作守忠昌、同八、永井右近大夫直勝、同信濃守尚政、寛永十、土井大炊頭利勝、同遠江守利隆、同大炊頭利重、同周防守利益、延寶九、堀田筑前守正俊、貞享二、松平日向守信之、元祿七、松平伊豆守信輝、同伊豆守信高、正德二、本多中務大輔忠良、同中務大輔忠敬、寶曆九、松平周防守康福、同上ヨリ再土井大炊頭利里、以後領レ之、〉

久世出雲守廣文〈雁間〉　四万八千石　居城下總葛飾郡關宿　江戸ヨリ十三里

天正十八、松平因幡守康元、同甲斐守忠良、元和二、松平大隅守重勝、同五、小笠原左衞門佐政信、同信隆、北條出羽守氏重、正保元、牧野內匠頭信成、同佐渡守親成、明曆二、板倉周防守重宗、同阿波守重佐、寬永二、久世大和守廣之、同出雲守重之、元祿十、牧野備後守成貞、同備前守成春、寶永二、久世大和守重之、同讚岐守暉之、同出雲守廣明、大坂ニテ、城地、安永二再領レ之、○節略

〔慶應元年武鑑〕水野日向守帝鑑間朝散大夫□　一万八千石　居城下總結城郡結城　江戸ヨリ小山通二十一里、關宿通二十一里、

當城頼朝公三男結城七郎朝光、結城中納言秀康迄十八代相續、秀康越前所替、慶長十六、爲二城破却一、元祿十六、再築レ之、水野隱岐守勝長以後代々領レ之、○節略

〔慶應元年武鑑〕松平大藏少輔勝行菊間朝散大夫　一万二千石　在所下總香取郡多古　江戸ヨリ十九里

寬文年中ヨリ代々領レ之

井上筑後守正和菊之間朝散大夫　一万石　在所下總香取郡高岡　江戸ヨリ十九里

寬永年中政賢以後井上氏代々領レ之

內田主殿頭菊之間朝散大夫□　一万石　在所下總香取郡小見川　江戸ヨリ二十六里

寬永年中ヨリ內田氏代々領レ之

森川內膳正菊之間朝散大夫□　一万石　在所下總千葉郡生實オイミ　江戸ヨリ十二里

寬永年中ヨリ森川氏代々領レ之○節略

田數
石高

〔倭名類聚抄國郡部五〕下總國○中略　管十一田二萬六千四百三十二町六段二百三十四步

〔拾芥抄中末本朝國郡〕下總大遠　十一郡（中略）三萬二千卅八町

〔新撰類聚往來下〕國名　下總　田數二万六千百三十町

〔海東諸國記〕下總州　郡十一、水田三萬三千一町

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕三十九万三千二百五十石　下總

〔和漢三才圖會六十六下總〕十二郡　三十九万三千二百九十石

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

出擧稻

下總國（私領御料）　一高六拾八万千六拾貳石六斗三升壹合六勺三才

〔延喜式（主稅二十六）〕諸國出擧正稅公廨雜稻（○中略）

下總國正稅公廨各卅万束、國分寺料五万束、藥師寺料三万五千束、文殊會料二千束、藥分料一万束、修理池溝料四万束、救急料七万束、俘囚料二万束、

〔倭名類聚抄（五國郡）〕下總國（○略）註管十一（中略正公各四十萬束、本稻百二萬七千束、雜稻二十二萬七千束、）

〔延喜式（民部二十三）〕年料別納租穀（○中略）　下總國（一万四千石）

年料別貢雜物（○中略）　下總國（筆一百管、牧牛皮六張、牛角十二具、麻子七斗、）

諸國貢蘇番次（○中略）　下總國廿壺（八口各大一升、十二口各小一升、○中略）　右六箇國爲第二番（○寅年中略）

國產貢獻

交易雜物（○中略）　下總國（布一千五百九十端、商布一万一千五十段、鹿革廿張、鞦文革十張、紫草二千六百斤、櫨子四合、）

〔延喜式（主計二十四）〕下總（○中略）　右十一國、絁絲（○中略）　下總、（○中略）　右十國、橡絁、（○中略）

下總國（行程上卅日、下十五日、）

調、絁二百疋、細布六十端、縹布卅端、黃布卅端、自餘輸布、　庸、輸布、　中男作物、麻四百斤、紙、熟麻、紅花、

〔延喜式（典藥三十七）〕諸國進年料雜藥（○中略）

下總國卅六種　青木香一斤八兩、青葙八斤、前胡、連翹、黃精、白芷、槀本、白薇各二斤、獨活、薺苨、桔梗、木斛、白鮮、大戟各五斤、椅杞、松脂各十斤、白朮三斤五兩、藍漆五斤、茳茄一斤、芍藥十兩、瞿麥六斤、地榆十四兩、白頭公九斤、伏苓六斤、續斷四兩、瓜蔕三兩、雜黃二斤、榧子大一斗、署預、桃人各一斗、麥門冬、蜀椒各四升、附子大五升、荏子二升、地膚子一升、獺肝二具、

〔毛吹草（三）〕下總

三度栗（ミタビクリ）（一年ニ三度ナルト云）　葛西苔（カサイ）（是ヲ淺草苔トモ云）　結城紬　中山紬島

〔和漢三才圖會（六十六下總）〕下總國土產

苔（出於葛西、亞于淺草苔）　紬（出於結城、同紬島出於中山、）　栗（一歳三度結實、名之三度栗、）　牛蒡（結城）　干温飩（同）

人口

〔官中秘策 二〕下總國　十二郡〇中略

一人數五拾六万七千六百三人　内（男三拾万七千四百四拾壹人　女貳拾六万七百六拾貳人）

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）

御料私領
一人數四拾七万八千七百貳拾壹人

高五拾六万八千三百三拾壹石餘　下總國

内（男貳拾五万貳千五百拾貳人　女貳拾貳万六千貳百九人）〇中略

諸國人數調（弘化三丙午年）〇中略

御料私領
一人數五拾貳万五千四拾壹人

高六拾八万千六拾貳石餘　下總國

内（男貳拾六万八千貳百五拾貳人　女貳拾五万六千七百八拾九人）

風俗

〔人國記〕下總國

下總國ノ風俗、上總ニ同ジ、然レドモ結城人ハ律義ニ而、一國之内ニモ珍敷キコトナリ、

名所

〔日本鹿子 七〕同國（總〇下）名所之部

勝鹿浦　當國の東にあたりて、小松といふ所に近き也、海邊也、總勝鹿の浦といふ也、續後撰戀のうたに、

勝鹿の浦間の浪の打つけに見初し人の戀しきやなぞ

眞間入江　繼橋有之、勝鹿よりちかし、

勝鹿や昔のまゝの繼橋をわすれずわたる春霞かな

千葉野　千葉郡のうちに有名所也

許我渡　むさしと下總との中間をながるゝ川也

霧深きこがの渡のわたしもり岸の舟かたおもふ定に

雜載

書卷川　こがのわたりと同じ流なり、水上をいふなり

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒略○中　下總國一百五十人略○中

諸國器仗略○中　下總國甲五領、横刀十六口、弓五十張、征箭五十具、胡簶五十具、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年三月乙未、始置下總少目二員、

〔類聚三代格十六〕太政官符

　應造浮橋布施屋并置渡船事略○中

一加增渡船十六艘略○中　下總國太日河四艘元二艘、今加二艘、○中略

以前被從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守宣偁、奉勅、如聞件等河、東海東山兩道之要路也、略○中　但渡船者、以正稅買備之、略○中

　承和二年六月廿九日

〔萬葉集東歌十四〕可豆思加乃、麻萬能宇良末乎、許具布禰能、布奈妣等佐和久、奈美多都良思母、

　右一首下總國歌略○中

　相聞略○中

可都思可能、麻末能手兒奈乎、麻許登可聞、和禮爾余須等布、麻末乃氐胡奈乎、

可豆思賀能、麻萬能手兒奈家、安里之可婆、麻末乃於須比爾、奈美毛登杼呂爾、

爾保杼里能、可豆思加和世乎、爾倍須登毛、曾能可奈之伎乎、刀爾多氐米也母、

安能於登世受、由可牟古馬母我、可都思加乃、麻末乃都藝波思、夜麻受可欲波牟、

　右四首下。總。國。歌。

〔更科日記〕昔下つさの國に、まのゝ長といふ人住けり、引ぬのも千むら万むらをらせさらさせけるが、家の跡とて、深き川を船にてわたる、昔の門の柱のまだ殘りたるとて、おほきなる柱、川の中

によつたてり、人々歌よむを聞て、心のうちに、

くちもせぬ此川ばしら殘らずば昔の跡をいかでしらまし、その夜は、くろとの濱といふ所にとまる、かたつかたは、廣濱なる所の、すなごはる〴〵としろきに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音も、いみじう心ぼそし、人々おかしがりて、歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつかみんくろとの濱の秋のよの月

古事類苑

地部十四

常陸國

名稱

常陸國ハ、ヒタチノクニト云フ、東海道ニ在リ、東ハ海洋ニ面シ、西ハ下總下野ニ接シ、南ハ下總、北ハ陸奧ニ界ス、東西凡ソ十一里、南北凡ソ三十里、其地勢ハ、北方ノ地、一體ニ山嶽多ク、漸ク南スルニ隨ヒ、土地平坦ニシテ田野廣ク、沼澤多シ、霞ケ浦ハ、實ニ琵琶湖ニ次グ我國ノ大湖ニシテ、鹿島、行方、新治、稻敷等ノ數郡ニ渉漫タリ、此國ハ古ヘ國府ヲ茨城郡ニ置キ、新治、眞壁、筑波、河內、信太、茨城、行方、鹿島、那珂、久慈、多珂ノ十一郡ヲ管シ、延喜ノ制大國ニ列ス、後世ニ至リ郡名及ビ郡界大ニ紊ル、其最モ著キモノヲ擧グレバ、新治郡ハ始メ眞壁郡ニ併合セシガ、後茨城、河內、信太、筑波四郡ノ一部ヲ割キテ新ニ一郡ヲ設ケ、之ヲ新治郡ト稱セシガ如シ、又中世奧郡關郡等ノ名モ見エタレドモ、並ニ一時ノ私稱ナルベシ、明治維新ノ後、茨城郡ヲ分チテ東西二郡ト爲シ、信太河內ノ二郡ヲ合シテ稻敷郡ト稱シ、新ニ水戶市ヲ設ケテ、凡テ一市十一郡ト爲シ、茨城縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕常陸比太知

〔饅頭屋本節用集天地比〕常陸常州

〔武備志二百三十一日本考〕常陸非太智

〔常陸風土記〕我姬之道、分爲八國、常陸國居其一矣、所以然號者、往來道路、不隔江海之津濟、郡鄕境堺、

相續山河之峯谷、取近通之義、以爲名稱焉、或曰、倭武天皇巡狩東夷之國、幸過新治之縣、所遣國造毘那良珠命、新令掘井、流泉淨澄、尤有好愛、時停乘輿、翫水洗手、御衣之袖、垂泉而沾、便依漬袖之義、以爲此國之名、風俗諺曰、筑波岳黑雲挂衣袖漬國是也、

〔續日本紀 光仁 三十四〕寶龜八年八月丁酉、大和守從三位大伴宿禰古慈斐薨、飛鳥朝○天武常。道。頭贈大錦吹負之孫、

〔古事記傳 二十〕常道は常陸なり、萬葉二十二十丁に比多知、和名抄に常陸比太知は、比多に常字を書は、萬葉十八に、等能乃多知波奈、比多底里爾之匠とあるは、變らず常に國を、比多底里と云り、此意なり、又十三に、常土と書り、今本には常を當に誤れり、さて知に陸字を書は、陸奥の陸と同くて陸道の意なり、古今集顯注に、常陸はひたかちをひたちとは申すなり、陸をかちともよむなりと云るを、實仲が陸をかちとよめること未知ず、ひたちはひたみちなりと云る、まことに然り、古歌に、東路の道のはてなる常陸とよめるは、東海道の極なればなり、

〔倭訓栞 前編 比 二十五〕ひたち　常陸をよめり、ひたみちの略なり、風土記にも、道路不隔江海と見えたり、新古今集にも、東路のみちのはてなるひたち帶とよめり、衣手のひたちとつゞくる事は、萬葉集に出たり、風土記に、國俗諺に、筑波岳黑雲掛、衣袖漬國と見えたり、されとひだどつゞけたるならんといへり、

〔諸國名義考 上〕常陸

和名抄に常陸、比太知、國府在茨城郡、名義は、○中略東方の極みなれば、日高見の約り轉りたるにてはあらざるか、日本書紀景行天皇卷に、日本武尊云々、蝦夷既平、自日高見國還之、西南歷常陸、至甲斐國酒折宮云々、また武内宿禰自東國還之奏言、東夷之中有日高見國、其國人男女、椎結文身、爲人勇悍、是總曰蝦夷、亦土地沃壤而曠、また此國風土記を万葉註釋に引たるには、自筑前之山、到日高之國云々、時人謂之幡垂國、後世言便稱信太國とあり、釋日本紀に引たるには、古老曰、御宇難波長柄豐前宮之天皇御世云々、分筑波茨城郡七百戶、置信太郡、此地本日高見國云々とあり、延喜神名式に、陸奥

國桃生郡日高見神社あり、立入信友云、日高は景行天皇紀を思ふに、今の蝦夷地にて、常陸はかの日高へ通ふ道なれば、日高道(ヒダカチ)なるべしといへり、この說いとめでたし、こを思へば顯昭が說も捨がたし、或書に、風土記とて引たるには、此國之邊常盧滿、民家多有頻、故宜曰、此國干立成」陸、則百姓安、故曰「飛多智」也とあるは、いかゞとぞおもはる、

〔常陸紀行〕常陸國、上古は海水逆流して遷移常なかりしに、後來漸々潮退き、人民常に陸地を得て居を安んじけるゆゑ常陸國と云、〇中略又常とは永久無盡の意、陸とは路の言にして、是國經歷日久しく、いよ〳〵陸路の無盡なるを見るともいへり、又江海陸地一續直路ともいへり、又干立成」陸ともいひ、或はひたかち、或はひたみちなど云、以上皆常陸の國名因て來れる處なり、然るに常陸は其地高遠にして、先に日を見るゆゑに日高見の國と云說あり、按に、日本武尊上總より轉りて陸奥國に入ると云々、蝦夷の賊首島津神國津神等竹の水門に屯すと云々、（竹はタカにして、陸奥國名取郡に多賀神社あり、）又蝦夷既に平らぎ、日高見國より還りて、西南の方歷「常陸」と云々、（陸奥國桃生郡に、今日高見の神社あり、）これに因て見れば、日高見國とは高遠の地を總稱せるにて、一處の稱にあらざるなるべし、又東西の國を爲「日縱(ひのたてし)」、又朝日之直刺(タヾサス)國、又靑香(かゞ)具山者日經(ひのたて)の大御門など古くいひなせる言葉もあれば、日高見國と稱せるものは、必しも常陸國而已ならず、今の常陸より以東の國を總稱せるものと覺ゆ、奥州を陸奥といへるも常陸の奥といへる意にや、多珂郡勿來關の地方に道口といへる鄕あり陸奥の入口と云意なるべし、

〔冠辭考三〕衣手の　ひたち

万葉卷九に、（筑波山歌）衣手(コロモデノヒ)、常陸國(タチノクニノ)、二並(フタナミノ)、筑波乃山乎(ツクバノヤマヲ)云々、こは在滿がいへる、ひだとつゞけたらんと、今考るに、古の袖はゝのせばくて、たけの長ければ、手拱(タムダク)にも、事をなすにも、袂のくだりをたぐる故に、ひだ多かるべし、依て右の說をよしとす、和名抄に、襞積周禮註云、祭服朝服襞積無」數、（訓二比多米一）こ

は裙をいふらめど、袖のひだのよしともなりぬ、凡此衣手とつゞけたる條々、皆こゝろ得がたき事多きは、古への衣の樣を、よく知り得ぬゆゑなるべし、右を衣うつ事とおもふ人もあれど、しからば下の條に、契沖がいへるごとく、ふる衣などあるべきを、衣手と有は、袖の事なれば、袖を擣ウツてふ事は侍らぬ也、衣手なうちわの里とつゞけたるも、又別なり。

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

常陸成田村極高三十六度一十六分半、經度東四度五十分半、前同一百九里二十五町一十一間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

常陸　矢田部村鹿島郡　三五度四七分〇〇秒　成田村　三六度一六分三〇秒略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中　常陸　矢田部村鹿島郡　東五度〇一分一三秒

疆域

〔古今類聚常陸國誌上〕常陸國、在東海道之域轄、郡十一、鄕百五十三、村一千五百二十四、註、東至東海一十二里、東南至鹿島海口一百二十二里、南至下總國界宮和田川九十六里、西南至下總國結城郡界鬼奴川八十一里餘、西至下野國那須郡界六十三里餘、西北至陸奥國白河郡界八溝山一百八里、北至陸奥國菊多郡界棚倉地七十五里、東北至陸奥國菊多郡界所通關一百五里、至京師九百三十里、

〔日本地誌提要二十二常陸〕疆域　西ハ下野、下總、南ハ下總、北ハ磐城、東ハ海ニ至ル、東西凡壹拾壹里壹拾八町、南北三拾里壹拾町、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年八月庚申、下總國言、天平寶字二年、本道問民苦使正六位下藤原朝臣淨辨等、具注應掘防毛野川之狀申官、聽許已訖、其後已經七年、得常陸國移曰、今被官符、方欲掘川、尋其水道、當決神社、加以百姓宅所損不少、是以具狀申官、宜莫掘者、此頻年洪水、損決日益、若不早掘防、恐梁川崩埋、一郡口分二千餘田、長爲荒廢、於是仰兩國、掘自下總國結城郡小塩鄕小島村、達于常

陸國新治郡川曲鄕受津村一千餘丈、其兩國郡堺、亦以舊川爲定、不得隨水移改、

〔木曾路名所圖會 五〕椎名(常陸)小栗まで四里半、〇中略野原あり、いづれも同じさまを行々て、間壁、まかべ川を過る、此川は常陸下野の國界なり、

地勢 地味

〔常陸風土記〕夫常陸國者、堺是廣大、地亦緬邈、土壤沃墳、原野肥衍、墾發之處、山海之利、人々自得、家々足饒、設有身勞耕耘、力竭紡蠶者、立即可取富豐、自然應免貧窮、況復求鹽魚味、左山右海、植桑種麻、後野前原、所謂水陸之府藏、物產之膏腴、古人曰、常世之國、蓋疑此地、但以所有水田上小中多、年遇霖雨、即聞苗子不登之難、歲逢亢陽、唯見穀實豐稔之歡歟、

〔易林本節用集 下〕常陸(常州)大、管十一郡、四方四日、田宅市鄽逐日盛也、牛馬充牧、蠶多綿繞、大々中國也、

道路

〔郡鄕考 一〕驛傳馬

按、驛路の次第は、先下總於賦驛より(按、於賦は相馬郡大井村なるべしと云ふ、)本國河内郡に入り、(按、河内郡のみ傳馬あり、且行程の便に就て云ふ、)信太郡稻敷、(按、今八代村なり、說其郡に在り、)朝夷(按、根本村地名を遺せり、)二鄕を歷て、榎浦の上流を渡り、榛谷驛に至る、(按、今羽賀村なり、)國界より此驛まで三里半、(按、大井より國界まで一里半なるべし、)榛谷より曾禰驛に至る十四里、(按、行方郡手賀村に地名存せり、廐牧令云、凡諸道須置驛者、每卅里置一驛、若地勢阻險、及無水草處、隨便安置、不限里數、これ驛を置く定法なれば、今の五里程にて一驛を建べき事なるに、かく隔遠なるは、其間必一驛を脫せしなるべし、兵部式諸國の驛誤脫少からず、或云、茨城郡茨城鄕國府ありて、榛谷より九里、平坦の路なれば式に載ざる一驛は國府にて一驛を脫せるにはあらず、國府より曾禰までは今五里にて、恰好の驛なりと、されど兵部式美濃不破郡不破、上野群馬郡群馬の驛は、皆國府の地なる驛馬の傳に出せるを見れば、獨本國のみ茨城の名を載ざるの理なし、傳說には、昔は信太郡と茨城郡との間なる流海をわたりて官道なりと云えるに付て思ふに、信太郡島津鄕の對岸は、茨城郡大津鄕なり、島津大津ともに舟船の集れる地名なれば、もしや此二鄕の內、何れか驛家にはあらざりしか、且島津の國府村なるべき大山村に、驛長が宅址と覺しくて、長者屋敷もあり、又國府あたりの傳說には、古の官道は、府中の地より南にて、三村の方より中津川にかゝりしなりどもいふに因て思ふに、是又大津の方よりの便路なり、廐牧令に、凡水驛不配馬處、量閑繁驛別置船四隻とありて、兵部式にも其地は船數をも載たれども、それは全く水驛舟行の地と見えたり、此地は榛谷より陸路三里島津に至り、舟にて半里の流海を渡り、大津に達すれば、大津より陸路曾禰に至るは十里餘なるべし、船と馬とを兼ざれば往復すべからず、已に風土記にも、不隔江海之津濟とありて、陸地連續の故に、國名ともなりし由なるに、陸路に少しの迂回ありて、津濟に就けると云はんもいかゞ、況傳說に付て思ひよるのみにして、其儀あるにもあらず、但驛長を長者と稱る

し、(古驛には必長者屋敷ある事は、信太郡に詳に載す、)曾禰より安侯驛に至る八里、(按、今安古村なり、)安侯より河內驛に至る三里、(按、上中河內村、)河內より山程は雄薩驛に至る四里、(按、今大里村中世小里、)雄薩より山田に至る二里半、(按、山田今松平村、其名存せり、)(說久慈郡に詳なり、)山田より陸奧白河郡高野驛に至る十二里、(按、國界徳田村まで八里、徳田より高野まて四里、高野は今棚倉なり、)河內より瀨海は田後驛に至る九里、(按、今田尻村なり、)田後より蓋陸奧長有驛に達す、(按、長有は其地詳ならず、田後より國界勿來關までは七里なるべし、)是弘仁三年(後紀)以來の驛路なり、(按、本國には平坦の地多き故にや、太抵卅里一驛の制よりは路程遠し、)又按、風土記に載たる驛は、榎浦、(式、榎谷、同地なり、)曾禰、(式同)板來、(式無、和名抄、板に作る誤、)河內、(式同)助川、藻島、平津、(式並無)巨神、(仙覺萬葉抄所引風土記、和名抄には郡名なり、式無、)凡八所なり、其廢置ありし事は、後紀弘仁三年十月、廢常陸國安侯、河內、助川、藻島、棚橋六驛、更建小田、雄薩、田後等三驛、(按、弘仁元年、文室綿麻呂陸奧出羽按察使となり、二年三月、爾薩體幣伊二村の蝦夷を征するに因て、其四月に機急を告る爲に、陸奧の內に於て海道十驛を廢し、更に本國に通ずる道にて、長有高野二驛を置く、此廢せし十驛は、續紀養老元年に、石城國の驛を置たる時に、其國中に建たる驛にて、其國を經しては要なき故なり、按、其帶に付て、又今年本國の驛に及べり、されど上にも記し如く、安侯、河內の二驛を廢して、其れに代る地を置ざるは、何なる故にか、後其驛要なるを以て復せし事は、兵部式にて知られたり、助川、藻島は、風土記には尙たり、棚驛、成棚島に作る、其地詳ならず、和名抄久慈郡橋島あり、字形稍似たれば、同地にてはなきや、橋島亦詳ならず、或云、其郡折橋と云ふ地あり、棚橋など折橋と書たるより、誤て折に誤りて訓をもなりと改めしなるべし、小田は、式及び風土記に據げ、山田の驛なり、然るに近年式考異に、式を以て誤とせしは、姑て非なり、猶久慈郡に詳に辨ぜり、助川藻島を廢して、二驛の間なる田後の一驛とせしは、頗を省ける事知るべし、)六年十二月廢常陸國板來驛、(按、板來驛は、曾禰より鹿島に赴けるの用のみなれば、廢せしなるべし、式に曾禰は他驛と異にして小路の常數馬五疋を置きたるは、此驛を廢せし故に、其用をも兼たるなるべし、)平津巨神の廢せしは、史に漏たるを以て、其年代知るに由なし。

〔新編常陸國誌六十四行路〕海道

海道ハ東海ノ大道ナリ、伊賀伊勢以東本國ニ至ルマデ十五箇國、皆東海道ノ域ニ屬ス、故ニ往來ノ大道、コレヲ海道ト稱ス、古代石背石城ノ國、イマダ陸奧ニ隸セザリシ間ハ、東海道ニ屬ス、故ニ今ニ至テ、石城、石瀨、菊多、岩崎等ノ四郡、呼デ海道四郡ト稱ス、陸奧國中ニ海道ノ稱アリシコトハ、日本後紀ニ、弘仁二年四月乙酉、廢陸奧海道十驛、更於通常陸道、置長有高野二驛ト見エタルニテ

タシカナリ、海道ノ十驛トイヘルハ、本國多珂郡奈古曾關ヲ越テ、菊多郡ニ入シヨリ、海道四郡ト稱セル內ノ驛家ヲイヘリ、更ニ長有高野ノ二驛ヲ置トイヘルハ、白河郡ノ內ニテ、本郡久慈郡ニ通ズル道ナリ、後三年合戰繪詞、淸原氏系圖等ニ、海道小太郎成衡ト云フ人アリ、岩城岩崎邊ノ著姓ナリ、海道四郡ト云ヘルコトハ、旅宿問答、鎌倉大草紙等ニ見エタリ、又白河結城文書ニハ、東海道宇多庄ナド云フモノ往々出タリ、宇多庄ハ陸奧國ノ內ナリ、今本國ノ內ニテ海道ト稱スベキハ、江戶ヨリ水戶ニ至ルノ道ナリ、然レドモ古代トハ道次ノ變ゼシ所モ多ケレバ、全ク海道ニハアラザレドモ、今ニ於テハ海道ト稱スベキモノナリ、又水戶ヨリ岩城ニ至ルノ道モ、古ノ海道ニテアリナガラ、往還驛路ノ沿革亦少カラズ、(原本願書、多珂郡ノ大窪ヲ、海道ト云ヒシコト、大塚傳記ニアリ、)依テ先古ノ海道ノ驛次ヲ考ヘテ、サテ後ニ當今ノ路程ヲ註ス、凡古ノ里數ハ三千六百歩ヲ一里トス、俗間ニ所謂六町一里ナリ、天正文祿ノ際、豐臣太閤ノ制ニヨリ、ナベテ三十六町ヲ一里トス、神祖又其法ニ准ジテ一里塚ヲ築ク、コレヨリ後悉ク是制ニ從フ、邊鄙ノ俗ナヲ古ニナラヒテ、里數ノ長短同ジカラザルモノハ、天下ノ法ニアラズ、依テ今卅六町一里ノ制ニヨル、但古代ノ路程ヲ論ズルモノハ古ノ法ニ從フ、○中略

陸路

補、今ノ道路ハ茨城郡水戶ヲ起程ノ地ト定テ、東南ニ向ヒ、下總河原代村ニ達スルヲ、江戶海道ト云ヒ、北方ニ走テ、陸奧大垬村ニ出ルヲ、棚倉海道ト唱ヘ、北ニ進デ少ク東ニ向ヒ、陸奧關田村ニ至ルヲ、岩城相馬海道ト呼ブ、スベテ之ヲ大道トナス、又水戶ヨリ西北ニ走テ、陸奧南鄉ニ達スルヲ、南鄉海道ト呼ビ、南鄉海道ノ西ニ當テ下野矢又村ニ出ルヲ、那須海道ト云ヒ、西方ニ進ミ少ク北ニ向テ、下野藍田村ニ至ルヲ、茂木宇都宮海道ト曰ヒ、正西ニ向テ下總結城驛ニ通ズルヲ、結城海道ト稱シ、結城海道江戶海道ノ中間ニ在リテ、下總瀨戶井村ニ達スルヲ、瀨戶井海

道ト唱ヘ、東南ニ進デ下總飯沼村ニ至ルヲ、飯沼海道ト云フ、スベテコノ五路ヲ中道ト稱ス、

〔日本實測錄一沿海〕從二三厩一沿海至二東京一〇中略

常陸國多珂郡平潟湊　三里二十二町二十一間半（至二大津村一一里九町一十五間、從二大津一至二神岡下村一三町五十七間半、）足洗村　三里二十九町五間（至二高萩村一一里一十七町八間）小木津村　四里三十三町三十三間半（至二助川村一一里三十一町二十一間）鹿島郡夏海成田村濱　久慈郡久慈村　七里六町三十二間半（至二村松村一一里一十三町一十六間、從二村松一至二那珂湊一三里一十町三十二間、至二成田村宿所一一十町三十四間）四里一十四町三十九間半（至二玉田村一一里廿町四十五間）汲上村　五里一十九町九間半（至二青驛村一二里二町二十七間）國末村　四里五町一十五間　矢田部村濱（至二矢田部村宿所一三十五町二十四間）三十五度四十七分　三里七町五十六間（至二國界利根川濱口一二里二十町三十九間）下總國海上郡銚子飯沼村

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬〇中略

常陸國驛馬（榛谷五疋、安侯二疋、曾禰五疋、河内田後小田雄薗各二疋、）傳馬（河内郡五疋）

〔新編常陸國誌六十四行路〕自二國府一至二奥州一驛程廢置之圖

上古驛路

補、孝德帝ノ時、天下ノ國郡ヲ分チ、驛路ヲモ定メラレシコトハ、諸書ヲ參考シテ分明ナレバ、更ニ云ベキコトナシ、サテ其頃ヨリ以後、常陸ノ大道ハ、下總ノ於賦驛（今ノ大森驛ナリ、按、風土記ニヨルニ、景行天皇行幸ノ路モ、大森邊ヨリ信太郡ニイラセ玉ヒシト見ユ、關東川々圖ニテ見ルニ、大森ヨリ利根川ヲ渡リ、信太郡大■邊ヨリ榛谷驛ニイタリシ便路ト見ユ、）ヨリ信太郡ニ入リ、（大德村ノ邊ヲ過ギテ）榎浦驛ニ至リ、（榎浦驛、今ノ波賀君山ノ邊ナリ、延喜式ニ榛谷驛ト云ヘルハ、部是ナリ、今ニ鎌倉道ト云アリ、ソノ邊ヨリ仲村邊ニ出タリト見ユ、□□古事アリ、）ソレヨリ國府ニ達シ、（國府ノ邊ニテハ、土田村ニテ馬ヲツギシト見エタリ、驛家ノ古蹟アリ、サレド延喜式ニコノ驛ナシ、思フニ國府ノ役トシテ、別ニ驛ヲバ置ザリシニヤ、何レニモ國府ヨリ馬ヲ出サヾレバ、往來ナリ難キサマナリ、）コヽヨリ兩路トナル、一安侯驛ニ通ジ、（大谷村ノ邊ヲ通レリ、佐竹義政大矢橋ニ在リシコト其證ナリ、）一ハ曾尼驛ニ通ズ、サテ茨城郡安侯ヨリ（安侯ハ今ノ安古ナリ、コノ間加倉井ノ邊ヲスギテ通リシナリ、）那賀郡河内驛ニ至リ、（河内ハ今ノ中河内也、）ソレヨリ久慈郡助河驛ニ至リ、（助河驛ハ今ノ助川、）ソレヨリ陸奥ニ通ゼリ、又

行方郡曾尼驛ヨリ兩路トナリテ、一ハ陸奥ノ海道トナリ、一ハ鹿島社ノ道トナル、其陸奥ノ道ハ曾尼驛ヨリ、曾尼ハ今ノ行方郡玉造邊ナリ、驛家跡今ニアリ、石橋驛、古那珂郡今茨城、今ノ東前ト見エタリ、古ハ遠鹿トカケリ、(石橋ヨリ藻島ノ間遠キ故ニ、遠鹿ノ名アルナリ)鹿ノ名アルヲ以テ知ベシ、且曾尼ヨリコヽニ至ルノ間ニ、古ノ往來ノ古蹟アリ、是ヨリ前ハ平津ヲ以テ驛トセシヲ、コヽニ移セシト見ユ、平津ハ平戸ナリ、東前ノ東數里ニアリ、ニ至リ、ソレヨリ久慈郡助川驛ニ至リ、ソレヨリコノ道ハ那珂河ヲ渡リテ、勝倉村松ヲヘテ、石名坂ニ至リシト見エタリ、心車抄ニ村松山勸進ノ疏アリ、ソレニ東海濱ニ白濱者、通夜洗于旅人之夢、四湖湛緑水者、終日染于行客之服トアリ、コレニヨリ古來往來ナルヲ知ルベシ、村松ノ盧空藏ノ世ニ知ラレシモ、古ノ大道ニテ、往來ノ人多カリシ故ナリ、淺草ノ觀音ナドノ世ニ知ラレシニ同ジ、藻島驛コヽヨリ兩路トナルニ至リ、今伊師三ケ村ノ地ナリサテ多珂郡棚橋驛ヲヘテ、棚橋今ノ折橋ナルベシ、折橋カ、サテ南ノ關ヨリ陸奥ニ入リ、一方ハ海邊ヨリ奈古曾關ヨリ陸奥ニハ入リタリ、又鹿島ノ道ハ、曾尼驛ヨリ板久驛ニ至リ、夫ヨリ鹿島ニ至レリ、鹿島ヨリ下總へ越ル時ハ、コノ板久ヨリ下總へ通ゼシト見エタリ、

國府
- 安侯 弘仁廢
  - 河內 同上
    - 助川 同上、今ノ小菅ナリ、奥州
- 曾禰
  - 石橋 弘仁廢、今ノ遠鹿邊、コヽヲ遠鹿ト云ハ、藻島ノ間ニ遠ケレバナリ、モトハ平津ナリシヲコヽヘ移ス、
    - 藻島 弘仁廢
      - 棚橋 同上、伊師町ノ古メヨリ五里程ナレバ、今ノ神岡驛ノ邊ニアタル、
  - 板久 奥州

弘仁中驛路

補、上ニ云ル如ク定メラレタリシニ、弘仁三年十月ニ至テ驛ノ數ヲ減ゼラレ、安侯、河內、石橋、助川、藻島、棚橋ノ六驛ヲ廢シ、安侯ハ茨城郡、河內石橋ハ那珂郡、助川藻島棚橋ハ多珂郡ナリ、山田、雄薩、田後ノ三驛ヲ置レタリ、其往來ノツイデハ、國府ヨリ曾禰驛ニ達シ、モトハ國府ヨリ兩方ヘ分レシニ、安侯ヲ廢セシ故ニ、コノ一路トナレリ、曾禰ヨリ兩路トナリ、一路ハ舊ノ如ク板久驛ニ通ジテ鹿島ニ至リシナリ、然ルニ同六年十二月ニ、板久驛ヲバ廢セシカバ、曾禰ヨリ直ニ鹿島へ通ゼシナリ、一路ハ曾禰ヨリ山田ニ至リ、山田ハ今ノ那珂郡勝倉ト見エタリ、長

（者ノ宅趾存ス、且コノ村ノ西數里ニ島崎村アリ、ソコニ山田氏ノモノアリ、舊旗ニテ著姓ナリ、モトコノ地邊ヨリ出タルナルベシ、）コヽニテ兩路トナル、一ハ多珂郡田後驛ニ達シ、（田後ハ今ノ田尻也、）サテ奈古曾關ヲ經テ陸奥ニ入レリ、一ハ山田ヨリ（コノ山田ヨリ雄薩ニ至ル間ニ西出村アリ、其地ニ駒形明神アリ、神體馬形也ト云ヘ、駒形社ハ上古必大道ノ路傍ニ祭レル神也、岡村額田ニモ駒形ト字スル地アリテ、先年南ニテ作レル馬形ヲホリ出セリ、コレモ近接ノ地ナレバ、往古少シク道ノカハレルコトモアリシ故ニ、此ニモ有ベシ、）久慈郡雄薩驛（今ノ大里也、長者ノ宅趾存ス、）ニ至リ、明神坂ヲ越テ陸奥ニ入リタリ、（山田驛ハ、石橋驛ノ代リニ立ラレルナレド、モトハ一路ナリシヲ、コノ時兩路トナリシ故ニ、石橋ヨリ少シク北ニヨセラレ、雄薩ハ駒川ノ舊驛ヨリハ南ニヨセラレシナリ、コレ全ク山田ノ驛馬ノ煩勞ヲ省カレシ也、）

國府―曾禰―山田（今ノ鎌倉邊、巳前ヨリ田後ノ國ヲ近クセシム、一驛ニテ二驛ヘ送ル故ナリ、）―雄薩（奥州）
　　　　曾禰―鹿島
　　　　　　　山田―田後（奥州）

延喜中驛路

補上件ノ如ク新制アリシガ、猶不便ナリケレバニヤ、安侯河内ノ二驛ヲバ舊ニ復セラレ、（延喜式ニミユ、）更ニ國府ヨリ兩路ニ分ルヽコトヽナリシ也、是ヨリ後ハ驛家ヲ改メラレシコト聞エズ、鎌倉將軍ノ世ヲ終ルマデハ、諸國ノ國司モアリテ、目代等ノ往來モタエズ、諸國ノ奉幣使ナドモ舊ノサマニテ、當國鹿島使モ下リテ、皇威衰ヘナガラモ、ヨロヅ昔ノ形ハアリケレバ、大道ノカハレルコトモナカリシ也、（鏑矢宮方記ノ文書ノ、相馬郡界ヲ云シニモ、東ハ東海大道ニ限ルトアリ、陸奥海道四郡ノ地ヲ東海道ト云シコト相馬文書ニ見ユ、又光俊朝臣東國下向ノ道モ、舊古ノサマナリ、鹿島使ノ鎌倉季告ノコロマデ下向セシコトハ、□□□記ニアリ、）

國府―安侯―河内―雄薩（奥州）
國府―曾禰―山田―田後（奥州）
　　　曾禰―鹿島

〔常陸風土記　行方郡〕曾尼村、古有佐伯、名曰疏禰毘古、取名著村、今置驛家、此謂曾尼之驛、○中略板來村、近臨海濱、安置驛家、此謂板來之驛、

〔常陸風土記 那賀郡〕平津驛家 ○中略 自郡東北挾粟河而置驛家、本近粟河謂河內驛家、今隨本名之、

〔常陸風土記 久慈郡〕助川驛家、昔號遇鹿、古老曰、倭武天皇至於此時、皇后參遇、因名之矣、至國宰久米大夫之時、爲河取鮭、改名助川、俗語謂鮭祖爲須介、

〔常陸風土記 多珂郡〕郡南卅里藻島驛家東南濱碁子、色如珠玉、

〔萬葉集抄 三〕わがをかのをがみにいひてふらしむる雪のくだけしそこにちりけん ○中略

常陸國風土記云、新治郡驛家名曰大神、所以然稱者、大蛇多在、因名驛家云云、

〔日本後紀 二十二 嵯峨〕弘仁三年十月癸丑、廢常陸國安侯、河內、石橋、助川、藻島、棚島六驛、更建小田雄薩田後等三驛、

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁六年十二月戊午、廢常陸國板來驛、

〔日本國郡沿革考 二 東海道〕常陸 古作常道、常陸風土記云、往來道路不隔江海、因以爲名、又云、倭武尊東征、過新治之縣時、遣國造毘那良珠命、新堀井、流泉清澄、尤可愛、尊停輿玩水、衣袖濡沾、依取漬袖之義、以爲國名、國訓常陸、與漬相通、大國、管十一郡、千七百二十三村、

茨城 三百四村 古茨城國、見國造記、後爲郡、建國府于此、 那珂 百四十二村 古仲國、見國造記、古事記作常道仲國、 久慈 百六十二村 古久自國、見國造記、 多賀 九十二村 古高國、見國造記、延喜式等作多賀、 新治 百七十九村 新治國、見國造記、 眞壁 二百三十四村 筑波 百七十四村 古筑波國、見國造記、 信太 八十九村 河內 百三十村 行方 八十九村 鹿島 百二十八村 笠間 拾芥抄載、延喜式等不載、廢置未詳、 茨木 同上 秋津 同上 西那河 蓋中世所置、後廢併茨城郡、

〔日本地誌提要 二十二 常陸〕沿革 古ヘ國府ヲ茨城郡ニ置、府中是ナリ、今新治郡ニ屬シ、石岡ト云、天長中、親王ノ任國トナシ、特ニ太守ト稱ス、平治中、平清盛奏請シテ、佐竹忠義ヲ州ノ介ニ任ジ、本州ノ事ヲ管セシメ、久慈郡太田城ニ居ル、治承ノ末、源頼朝兵ヲ遣テ忠義ヲ擊チ之ヲ殺ス、忠義ノ從子秀義、陸奧ニ奔ル、頼朝北伐ノ日、秀義來歸シ、舊邑ニ復スルヲ得タリ、頼朝又小田知家ニ筑波郡ヲ授ケ、小田城ニ

治ス、建久四年、大掾義幹ヨシモト、ノ地（茨城、新治、鹿島、行方四郡）ヲ收テ、其支族資幹ニ與ヘ、府中城ニ治ス、（大掾氏ハ、平國香大掾タルヨリ世襲、義幹ハ其九世ノ孫ナリ、）佐竹小田二氏交互州ノ介ニ任ジ、州事ヲ知ル、建武中興、足利尊氏ヲ守護トス、既ニシテ佐竹貞義、（秀義五世ノ孫、）尊氏ノ反ニ應ジ、大掾高幹、（資幹七世ノ孫、）小田治久、（知家七世ノ孫、）官軍ニ屬シ、後皆尊氏ニ降ル、關東管領足利氏ノ八館ノ列ヲ定ムル、三氏皆其班ニ入ル、應永ノ末、江戸通房（初メ那珂郡ニ居リ、後茨城郡川和田城ニ居ル、）大掾氏ヲ襲ヒ、其水戸城ヲ取リ、勢威頗ル振ヒ、爾後大掾氏日ニ衰ヘ、疆城大ニ蹙マル、（是ノ時佐竹氏、久慈、多賀、那珂、茨城四郡ニ連リ、小田氏、筑波、新治、河内、鹿島、行方、眞壁、信太七郡五十三城ヲ擁ス、）天正二年、小田氏治（治久八世ノ孫）上杉ノ故臣太田資正ト戰ヒ、城陷テ自盡、小田氏亡ブ、（知家ヨリ治久ニ至ル十四世、）獨佐竹義重、兵勢頗ル盛、十八年、江戸重通（通房六世ノ孫）大掾淨幹（高幹十世ノ孫）ヲ滅シ、悉ク全州ヲ併セ、子義宣ヲシテ水戸城ニ居シメ、北條氏ト相抗ス、北條氏ノ亡ブル、義宣款ヲ豐臣氏ニ送リ、本州ヲ領スル故ノ如シ、關原役畢リ、德川氏其封ヲ削テ出羽秋田ニ徙シ、（佐竹氏是ニ至テ十九世、）第六子信吉ヲ水戸ニ封ズ、早夭シテ嗣ナク、第十一子賴宣之ニ代リ、其駿河ニ轉ズルニ及デ、第十二子賴房ヲ封ス、（三拾五萬石、）其支封ヲ府中、（慶長六年、六郷政乘ヲ封ズ、元祿中、賴房ノ第五子賴隆封ヲ受、）宍戸（賴房ノ第七子賴雄）ト云、又松平信一ヲ土浦ニ、（後ニ土屋政直、）松平康重ヲ笠間ニ、（後ニ牧野貞通、）山口重政ヲ牛久ニ封ジ、寛永中、賴房ノ庶長子賴重ヲ下館ニ受ケ、尋テ高松ニ移リ、（讃岐）寛文中、増山正彌マサミツ代テ封ゼラル、（後ニ石川總茂、）其他谷田部、（初下野茂木、細川興元、）下妻、（井上正長、）麻生、（新莊直規、）三藩ヲ置、凡テ十藩、王政革新、府中ヲ改メテ石岡ト稱シ、志筑藩（本堂親久）ヲ設、磐城ノ守山藩（水戸ノ支封松平賴之）松川ニ徙リ、水戸ノ傳相中山信徴藩列ニ班シ、（松岡、）凡テ十三藩、既ニシテ皆改メテ縣トシ、又廢シテ新治茨城二縣ヲ置、

〔新編常陸國誌　三〕建置沿革

補〇（中略）文祿三年十月、石田治部少輔三成、豐臣家ノ命ヲ受テ當國ヲ檢地ス、家臣藤林三右衛門等、繩入ノ奉行タリ、（鴇田氏所藏水帳、佐竹氏所領檢地目錄、コノ時諸國大概檢地ノコトアリ、下總モ藤林三右衛門奉行セシトミエテ、香取大宮司ガ領地ヲ役セル社人小

林氏ノ藏セル水帳ニモ藤林三右衞門トアリ、所謂文祿ノ繩トハ是也、當代記、續武家閑談、是時悉ク庄郷ノ稱ヲ廢シテ、直ニ郡ヲ以テ村ヲスベシム、佐竹家士知行目錄又國產ノ租稅ヲ計ルニ、束ノ數ヲ用ヒズ、丁段ノ畝ニヨラズ、始メテ石ノ數ヲ用フ、革島家譜、佐竹家士知行目錄、本國ノ統數五十三萬八石トナル檢地帳、日本得名、十六郡ヲ更メ、古ニ復シテ十一郡トス、然レドモ久シク錯亂ノ境界ヲ、俄ニ改定セラレシ故ニ、名ハ古ニ復ストイヘドモ、其境ニ至テハ大ニ違ヘル地多シ、所謂伊佐庄、及小栗保ヲ以テ眞壁ニ屬ス、古ノ新治也、關庄下妻ヲ河內郡ニ屬ス、然レドモコノ地ト本ノ河內トノ間ニ、眞壁、筑波ノ兩郡隔タルヲ以テ、俗ニコヽヲ西河內ト稱ス、古ノ新治ノ地也、中世下妻ノ人、關、下妻、兩庄ヲ呼デ河內ト稱スルヲ以テ、河內ニ屬セルナリ、其地絹川、蠶養川ノ間ニアリ、下妻領ニトリテハ、河西、河東、河內ト三ツニ分テリ、河西ハ絹川ノ西也、河東ハ蠶養川ノ東也、中郡庄ヲ那珂郡ニ屬ス、然レドモ本ノ那珂郡ト地界隔タルヲ以テ、俗ニ西那珂ト稱ス、古ノ新治ナリ、笠間庄ヲ茨城郡ニ屬ス、古ノ新治也、田中庄ヲ筑波ニ屬ス、過半ハ古ノ河內郡也、方穗庄ヲ新治郡ニ屬ス、古ノ筑波郡也、信太庄東條庄ハ舊ニ准ジテ信太郡ニ復ス、山庄ヲ新治ニ屬ス、古ノ筑波郡也、南野庄ヲ新治ニ屬ス、古ノ筑波茨城二郡ノ地也、佐谷郡ヲ新治ニ屬ス、古ノ筑波也、北郡ヲ新治ニ屬ス、古ノ茨城郡也、南郡河內滑川以南ノ地ヲ新治ニ屬ス、古ノ茨城郡ナリ、今置ク所ノ新治郡ハ、古ノ茨城筑波二郡ノ地ニシテ、一村モ舊郡ノ地ナルハナシ、舊郡ノ地ハ悉ク西河內、西那珂、眞壁、茨城等ノ地トナルヲ以テ也、宍戸庄、小鶴庄、及滑川以北ノ南郡、皆舊ニ准ジテ茨城郡ニ復ス、當麻郡ハ鹿島ニ屬ス、古ノ行方郡也、宮田、宮崎、紅葉、大屋等ノ地、茨城ニ屬ス、古ノ鹿島郡也、行方郡ハ舊ノ如シ、但當麻郷ヲ鹿島ニ削ラレ、茨城ノ立花郷ヲ過半トレルノミ也、然レドモコノ立花ハ、古クヨリ行方ニ屬セリ、今度劃ク所ニアラズ、那珂川以南、那珂西郡吉田庄等、ナベテ茨城ニ屬ス、古ノ那珂郡ノ地也、那珂川以北、久慈川以南ノ地、スベテ那珂郡ニ屬ス、其半ハ古ノ本郡ノ地、半ハ古ノ久慈

郡ナリ、中世稱スル處ノ久慈西、那珂東、佐都西、吉田庄、靈籠庄等コノ内也、依上保ヲ久慈郡ニ屬ス、古ノ奥州白川郡ノ地ニシテ、永正以來常陸ニ屬セル地ナリ、久慈東、及佐都西、佐都東二郡ノ地、遂年舊ニ復シテ久慈郡ニ屬ス、佐都東ノ内石名坂以北、宮田助川以南ノ地、多珂郡ニ屬ス、古ノ久慈郡ナリ、其他多珂郡ノ地ハ、ナベテ舊郡ノ地ナリ、是ニ至テ始メテ十一郡ノ名ニ復ス、（參二取弘安大田文、佐竹家士知行目錄、常陸國圖、常陸國誌、國讚寺記錄、吉田社文書、鹿島社文書、額王陸文書、白川結城文書、佐竹氏文書、佐竹系圖、正宗寺記錄、及父老傳說等、）然レドモ西河内、西那珂ノ地、河内、那珂ノ本郡ニ隔タルヲ以テ、俗間誤テ十三郡ト稱ス、（參二取佐竹氏文書、常陸國誌、常陸國圖、父老傳說、）此内佐竹氏ノ領スル所ハ、茨城郡ノ内八萬五千六百八十八石三斗一升、那珂郡一圓七萬七千七百三十三石五斗九升、久慈郡一圓七萬五千三百五十五石七斗、多賀郡一圓一萬五千三十三石三斗二升、鹿島郡一圓二萬五千九百九石八斗貳升、行方郡一圓二萬六千三百七十一石八斗三升、新治郡ノ内三萬五千四百廿八石九斗七升、眞壁郡ノ内四萬九千卌石六斗九升、筑波郡四萬三千五百卌九石八斗、河内郡ノ内一萬六千四百六十一石一升、信太郡四萬八千九百七十八石二斗八升、合セテ十郡五十萬二百卌一石三斗二升ナリ、其外奥州ノ南郷二萬六千八百三十石三斗九升、下野ノ武茂九千四百八石四斗八升、同國茂木九千三百九十四石四斗、スベテ五十四萬五千七百七十四石五斗九升佐竹氏コレヲ領ス、（佐竹氏文書、正宗寺舊記、）凡本國ノ間、他家ニテ領スルハ、茨城郡笠間城ハ、宇都宮國綱ノ所領ニテ、玉尾美濃守是ヲ守ル、（笠間城記、）眞壁郡小栗城、那珂郡坂戸城等モ、皆國綱ノ領分也、（宇都宮記、小宅家譜、）西河内郡下妻城ハ、多賀谷修理大夫重經是ヲ領ス、（多賀谷系圖、寺記錄、）眞壁郡下館城ハ、水谷伊勢守勝俊ノ所領ニテ、結城ノ附庸也、（水谷系圖、）新治郡土浦城ハ、結城家ノ領分トナル、（土浦城記、素林文書、）河内郡牛久五千石ハ、由良信濃守國繁是ヲ領ス、佐竹領ノ内ニモ、信太郡四萬八千石ハ、蘆名主計頭義廣與力トシテコレヲ領シ、江戸崎城ニ居ル、鹿島行方等ノ地六萬石ハ、佐竹中務大輔義久ノ所領ナリ、陣營鹿島ノ宮中ニアリ、代官ノ者コレニ居ル、（佐竹文書、鹿島大宮

（司文書、福泉寺文書、小宅氏由緒書、）又義宣ノ父義重ノ知行分五萬石アリ、總高ノ内公料一萬石アリ、コレヲ御藏入ト云、義久ノ代官ヲシテ之ヲ管セシム、依テ内千石ハ代官ノ得分トス、又石田三成、増田長盛ノ得分各三千石アリ、（佐竹文書）依テ佐竹五十三萬石トス、（當代記、按ニ東宮記、増補家忠日記等ニ、佐竹八十萬石トシ、慶長見聞記ニ百萬石ト稱スルモノハ、大概ヲ云モノニシテ、其實ニハアラザルナリ、）今年佐竹氏有司ニ命ジテ、水戸ノ城ヲ修築ス、元狹隘ナルヲ以テナリ、爰ニ至テ一國ノ大城トナル、（常陸國記）同四年六月、豐臣家ヨリ佐竹義宣ニ所領ノ朱印ヲ賜フ、凡五十四萬八千石也、内義宣ノ分十五萬石ノ内、五萬石ハ小田原沒落後ノ加増ナリ、同藏入ノ分十萬石ハ無役、コノ内九萬石ハ加増ナリ、義重ノ分五萬石ノ内、四萬石ハ加増ニテ、スベテ無役ナリ、義久ノ分六萬石ノ内一萬石ハ無役、五萬石ハ加増ナリ、與力家臣ノ分十六萬八千八百石、内四萬石ハ加増ナリ、其餘一萬六千石ハ御藏入、及石田増田ノ分ナリ、（朱印、按ニ檢地ノ高ヨリ二千餘石ヲ餘ス、蓋檢地ノ後墾開シテ得ル所ト見エタリ、）是ニ至テ義宣家臣ノ所領ヲ移轉シ、（佐竹家士知行目錄）居住ノ陣營ヲ國界ニ置テコレヲ守ラシム、

〔古事記　中神武〕神八井耳命者（中略）常道仲國造（中略）等之祖也

〔先代舊事本紀　十國造〕新治國造

志賀高穴穗朝（○成務）御世、美都呂岐命兒、比奈羅布命、定賜國造、

筑波國造

志賀高穴穗朝、以忍凝見命孫阿閉色命、定賜國造、

茨城國造

輕島豐明朝（○應神）御世、天津彥根命孫、筑紫刀禰、定賜國造、

仲國造

志賀高穴穗朝御世、伊豫國造同祖建借馬命、定賜國造、

久自國造

志賀高穴穗朝御代、物部連祖伊香色雄命三世孫、船瀬足尼、定賜國造、

高國造

志賀高穴穗朝御世、彌都侶岐命孫彌佐比命、定賜國造、

〔續日本紀 八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、令〇中略常陸國守正五位上藤原朝臣宇合管安房上總下總三國、

〔帝王編年記 十三淳和〕天長三年九月、賀陽親王(桓武皇子)爲常陸大守、〇中略親王任國自此始之、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應親王任國守事

上總國　常陸國　上野國

右檢、中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀、偁、〇中略望請、點定數國、爲親王國、遂任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者、不補他人、其料物者納置別倉、支无品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

天長三年九月六日

國府

〔倭名類聚抄 五國郡〕常陸國(國府在茨城郡、行程上三十日、下十五日、)

〔新編常陸國誌 二十九郡邑〕補、都邑、

府中(字布知)　府中ハ今新治郡ニアリ、近時石岡ト改ム、元祿郷帳、新治郡平村、市川村ノ内ナリ、其地國ノ中央ニ在リテ、四通八達ノ境ナル故ニ、古ハ茨城郡ニ屬シテ、一國政令ノ出ヅル所タリ、倭名抄ニ、國府在茨城郡ト云フ者卽是ナリ、中世以降、桓武平氏世々本國ノ大掾トナリテ此ニ住ス、東

郡

鑑、建保二年條、常陸國府中トミエ、税所氏延元中文書ニ、府中石岡城トアリ、後天正十八年ニ至リテ、大掾氏遂ニ佐竹氏ノ爲ニ滅セラル、佐竹氏ノ後、六鄕、皆川諸城主ヲ經テ、永ク水戸支族松平氏ノ領所トナル、初王政ノ盛ナルヤ、京官來リ、國人聚リ、官衙乾立、市廛櫛比、宛然一國ノ大都タリシガ、天慶以後、屢爭亂ヲ經テ、兵火ニ罹リ、市肆廢シ、士庶散ジ、昔日ノ繁盛復觀ル可カラズ、其陸替變遷ノ迹、古史能ク徵スルモノナシ、

〔常陸紀行〕茨城郡は常陸の中央にして、古へより國府たるべき地なり、今の水府御城も茨城郡常(とき)石(は)鄕にして、天府の地たり、常石鄕昔時は那珂郡にして、那珂郡又仲郡ともいへり、卽ち常陸國中央にして、國府たるべき地の形勝自然なるものなり、其土水陸の府藏、物產の膏腴にして、山東の利を擅にせるといへるも宜なる哉、

〔吾妻鏡一〕治承四年十一月四日壬子、武衞著常陸國府、給佐竹者權威及境外、郎從滿國中、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年九月十九日庚辰、常陸國府中地頭間事、自今以後、大掾資盛可致沙汰者、是自公家依被下在廳解也、

〔税所文書〕讓渡　常陸國南郡府中内元久名田畠事

合田伍町參段半　坪付在別紙〈○中略〉

右田在家者、爲家成重代相傳私領之間、相副廳宣施行以下之手繼證文等、所讓渡于嫡子六郎重成實正也、於御公事者、任先例可令勤仕之、仍爲向後讓狀如件、

延元元年八月三日　百濟家成在判

〔倭名類聚抄五國郡〕常陸國、〈○註略〉管十一、〈○註略〉新治〈爾比波里〉眞壁〈萬加倍〉筑波〈豆久波〉河內〈甲知〉信太〈志多〉茨城〈牟波良岐、國府、〉行方〈奈女加多〉鹿島〈加之末〉那珂　久慈　多珂

〔延喜式二十二民部〕常陸國、大、〈管 新治 眞壁 筑波 河內 信太 茨城 行方 鹿島 那珂 久慈 多珂〉右爲遠國

〔伊呂波字類抄比國郡〕常陸國管十一　新治ニヒハリ　眞壁マカヘ　筑波ツクハ　河內カハチ　信太　茨城カウラキ、ムハラキ、府、　行方ナメカタ　鹿島カシマ　那珂ナカ、延喜式云　久慈クシ　多河タカ

〔拾芥抄中末本朝國郡〕常陸大遠　十一郡　新治　眞壁　筑波　河內　信太　茨城府　行方　鹿島　那河　久慈　多珂　笠間　藝太木　秋津〔已上三郡不入延喜式〕

〔皇國郡名志〕常陸國十一郡

新治ニヒハル　上サヤ　一村限　國中小郡

眞壁マカヘ　[下館]　●マカヘ　●久下田　羽黒　下毛界

筑波ツクハ　[土浦]　△キヌ川　●荒川　△サクラ川　●藤代　●大曾根　△下妻　下サ界　●筑波　△ツクバ山

河內カフチ　●アサキ　龍ケ崎　下サ界

信太シダ　江戸崎　●イナ石　●女男川　下サ界

茨城ムハラキ　[水戸]　岩舟　△宍戸　[笠間]　●千生　●ヌカ田　●夏目　●小幡　●磯濱　●長岡　●勝倉　下毛界ヨリ東海ニ貫

行方ナメカタ　△麻生　●モミ山　△府中　國中ヨリ東海ニ至

鹿島カシマ　△谷田部　●息栖　イタコ　●鹿島　△同社　坂東太郎ナ下サ界トス

那珂ナカ　●比藤　●長倉　下毛界小郡

久慈クジ　△大田　●大橋　△月折山　△男體山　奧ト下毛ノ界ヨリ東海ニ貫

多珂タカ　●介川　△大北川　●アメコ　●足洗　●小ワマ　●新町　奧界ヨリ東海ニ貫

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕常陸

書名	筑波	河内	信太	行方	鹿島	眞壁	新治	茨城	
六國史古書	莵玖波 紀 筑波 續						珥比麼利 紀 新治 續		
								茨木 古	
延喜式	筑波(ツクハ)	河内(カフチ)	信太(シタ)	行方(ナメカタ)	鹿島(カシマ)	眞壁(マカヘ)	新治(ニヒハリ)	茨城(ムハラキ)	
倭名抄	同 豆久波	同 甲知	同 志多	同 奈女加多	同 加之末	同 万加倍	同 爾比波里	同 牟波良岐	
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	同	同	
諸書	同 知元	同 知元	同 知元	同 知元	同 知元	眞壁 知元		同 知元	
郡名考	同(フクバ)	同(カウチ)	同(シダ)	同(ナメカタ)	同(カシマ)	同(マカベ)		同(イバラキ)	新治(ニイバリ)
天保郷帳	同	同 カフチ後	同	同	同	同		同	同
明治沿革帳	同	同	同	同	同	同		同	同
地誌提要	同(ツクハ)	同(カフチ)	同(シダ)	同(ナメカタ)	同(カシマ)	同(マカベ)		同(イバラキ)	同(ニヒバリ)
郡區編成	同	同	同	同	同	同		東茨城 西茨城	同

那賀 那加			
那賀 仲古			
那珂	久慈	多珂	管十一
同	同	同	同
那河	同	同	十一郡
那河東、那河西 那賀那河	久慈東 久慈 久慈西	同	
那珂	同	多賀	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	十二郡

〔新編常陸國誌一建置沿革〕所謂奧七郡ハ、那珂西、那珂東、久慈西、久慈東、佐都西、佐都東、多珂コレ也、佐都郡ハ元久慈郡ノ東邊薩都郷ノアル處ヲ割テ一郡トス、其他一郡ヲ以テ東西二郡トスル如キハ、皆俗習ノ常ヲナス處也、

〔吾妻鏡三〕壽永三年元曆元年八月十三日己巳、御寄進于鹿島社之地等事、常陸國奧郡內、有叛逆之輩、依致妨、社役不全云云、仍如元可爲社領之由、今日重被仰下云云、

〔吾妻鏡七〕文治三年十月二十九日丙申、常陸國鹿島社者、御歸敬異他社、而每月御膳料事、被宛于當國奧郡、今日令加下知給云云、

政所下　常陸奧郡

可令早下行鹿島每月御上日料籾佰二拾石事

多賀郡　十二石五斗　佐都東　十四石　佐都西　九石八斗　久慈東　三十六石一斗　久慈西　十四石三斗　那珂東　十三石九斗　那珂西　十九石四斗

右件糺毎年無懈怠可下行之狀如件、

文治三年十月二十九日　中原〇光家　藤原〇邦通　大中臣〇秋家　主計允〇藤原行政　前因幡

守中原〇廣元

〔常陸風土記〕新治郡東那賀郡堺大山、南白壁郡、西毛野河、北下野常陸二國之堺、即波太岡、古老曰、昔美麻貴天皇〇崇神馭宇之世、爲平討東夷之荒賊、俗曰、阿良夫流爾斯母乃、遣新治國造祖名曰比奈良珠命、此人罷到、即穿新井、今存新治里、隨時致祭、其水淨流、仍以治井因著郡號、自爾至今、其名不改、風俗諺曰、自遠新治之國、

〔新編常陸國誌九郡名〕新治郡　倭名抄云新治爾比波里古ノ新治國ナリ、〇中略風土記、倭名抄ヲ按ズルニ、是郡東那賀郡堺大山、按、今木葉下、大橋等ノ山ナリ、南白壁郡、後眞壁郡ト改ム西毛野川、後鬼怒河、又絹川ト云フ、北下野、常陸二國之堺、即波大岡按、今其名ヲ失フ、笠間ノ北ヨリ西小栗ニ至ルマデ、山巒連續二國ノ界ヲナス、總テ之ヲ大小山ト稱ス、是蓋波多岡ナリ、又按、風土記筑波郡條ニ、逸文ノ四至アリ、其良白壁郡四字ハ、本郡ニ移シテ、下眞伊讚等ヨリノ方位トスベシ、其餘東筑波郡、南毛野川、北新治郡十三字ハ、全白壁郡ノ複出ナリ、ニテ、坂門、竹島、沼田、伊讚、博多、巡廻、月波、大幡、新治、下眞、巨神、井田等ノ十二郷ヲ管ス、中世本郡ヲ分テ西中東三郡ト爲シ、又其西郡ヲ南北二條ニ分チ、南ヲ關郡、北ヲ伊佐郡ト呼ビ、東郡ヲ更ニ笠間郡ト稱セリ、文祿ノ檢地ニ、伊佐ハ眞壁郡ニ入リ、關ハ河內郡ニ屬シテ、西河內郡ト稱シ、中郡ハ那珂郡ニ隷入シテ、西那珂郡ト呼ビ、笠間ハ茨城郡ニ併セラレテ、新治郡ノ地全ク廢ス、故ニ筑波山東南別ニ古筑波、茨城、信太、河內四郡ノ地ヲ割テ一郡ヲ置キ、以テ新治ノ名ヲ存ス、元祿ノ制、之ニ從テ更メズ、元祿中、西河內郡ヲ眞壁郡ニ、西那珂郡ヲ茨城郡ニ加フルニ及テ、古新治ノ地悉ク眞壁、茨城二郡ノ分轄スル所トナル、其他西ハ筑波山下ニ至リ、眞壁、筑波二郡ニ界ヒ、西南ハ信太、河內二郡ニ錯リ、東南ハ霞浦ニ臨ミ、東北ハ茨城郡ニ接シテ、一百七十九村、十萬四千一百餘石ヲ有セリ、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月乙亥、常陸國新治郡大領外從六位上新治直子公、獻錢二千貫、商布一千段、授外正五位下、

〔常陸風土記〕白壁郡東筑波郡、南毛野河、西北新治郡、

〔新編常陸國誌九郡名〕眞壁郡　倭名抄云、眞壁萬加倍又風土記、白壁郡ニ作ル、済事紀天皇ノ御名ニヨリテ、白髪部ヲ諸國ニ置ク、思フニ此地亦其一ニ居ル、蓋古新治國内ニ属ス、風土記行方郡條ニ、新治國小筑波之岳ト云フコトアリ、行方ノ方ヨリ筑波ヲ望ンニハ、本郡其ノ山背ニアレバ、宜ク本郡ヲ擧クベキニ、新治國ト稱セルハ其始新治ヲ割テ一郡トセシコト明ナリ、又續日本紀、延暦三年詔、先帝ノ諱ヲ避ケ、白髪部姓ヲ改メテ眞髪部トセリ、本郡白壁ヲ眞壁ト更メシモノ、蓋此時ニアリ、此國造ハ絶テ見ル所ナシ、今昔物語、康保、天延ノ頃、本國相撲ノ最手ニ、眞髪成村、及子爲成アリ、長元中、源頼信ノ平忠常ヲ伐タル時、河ヲ渉リテ先導シタル眞髪高文ハ、若クハ本郡郡司ノ族ニモヤアラン、風土記倭名抄ニ據ルニ、是郡東、筑波郡南、毛野河按方位ノ大概ナリ、地河ニ狂ヲス、西北、並新治郡ニテ、神代、眞壁、長貫、伴部、大苑、大林、伊讃等ノ七郷ヲ管ス、文祿ノ檢地ニ、新治西郡、伊佐ノ地ヲ加ヘ、元祿中、西河内郡ヲ併セテ、郡境益廣マレリ、其地東ハ足尾、加波ノ諸山ヲ以テ新治郡ヲ限リ、西ハ絹川ヲ以テ、下總結城郡ニ界シ、北ハ茨城郡、及下野芳賀郡ニ隣リ、南ハ筑波郡、及下總豐田郡ニ接シ、東南ハ筑波山下ニ至リ、二百十八村、十二萬五千三百四十餘石ヲ領ス、

〔眞壁長岡文書〕常陸國眞壁郡正税幷闕所除亀谷彦次郎入道跡所務事、爲致其沙汰、國方使者入部之處、有違亂之輩云々、事實者甚濫吹也、早正税以下爲全所務、可令鎭狼藉人給之由候、仍執達如件、

建武二年十月十三日　沙彌花押

長岡又次郎殿

〔郡名考〕常陸　筑波ツクハ、ツクバト訓リ

〔地名字音轉用例〕タノ行ノ音同行通用セル例

つくは　筑波（常郡）豆久波

〔常陸風土記〕筑波郡（東茨城郡、南河内郡、西毛野河、北筑波岳、）古老曰、筑波之縣、古謂紀國、美萬貴天皇（○崇神）之世、遣采女臣友屬筑波命於紀國之國造、時筑波命曰、欲令身名者著國而後世流傳、卽改本號更稱筑波者、（風俗說曰、握飯筑波之國、）

〔新編常陸國誌（九郡名）〕筑波郡　倭名抄云、筑波、（豆久波）古ノ筑波國ナリ、○中略風土記和名抄ヲ按ズルニ、是郡東茨城郡、南河内郡、西ハ毛野河、北筑波岳ニテ、大貫、筑波、水守、三村、栗原、渚薌、清水、佐野、方穗等ノ九鄕ヲ管ス、文祿ノ檢地ニ、東方ハ新置ノ新治郡ニ削ラレ、南方信太、河内二郡中ノ地ヲ倂セテ、郡域大ニ變ズ、元祿ノ制之ニ仍ル、其地北ハ眞壁郡ニ接シ、東ハ新治河内二郡ニ相錯リ、西南ハ下總國界絹川ニ至リ、一百五十八村、七萬一千九百七十餘石ヲ統轄ス、

〔日本書紀（七景行）〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略自日高見國還之、西南歷常陸、至甲斐國、居于酒折宮、時擧燭而進食、是夜以歌之問侍者曰、珥比麼利、菟玖波塢須擬氐、異玖用加爾菟流、諸侍者不能答言、時有秉燭者、續王歌之末而歌曰、伽餓奈倍氐、用珥波虛々能用、比珥波苫塢伽塢、卽美秉燭人之聰而敦賞、

〔冠辭考（七冊）〕にひばりつくばを過て

景行紀に、（日本武尊、日高みのくにより常陸を經て甲斐に到て酒折の宮にます時御うたはして、侍ふ人に問給はく、）珥比麼利、菟玖波塢須擬氐、異玖用加爾菟流、（かたへの人のえも答へ奉らぬを、火ともして侍るおきなぞ、末を申しける、）伽餓奈倍氐、用珥波虛々能用、比珥波苫塢伽塢、こは常陸國の新ばりつくばを過て、此甲斐の酒折までいく夜か宿りて到つるぞと、片歌にうたはして問せ給へるを、御答申せし意は、指をかゞめて、數ふれば、夜にては、九の夜、晝にては十日ぞといふ也、さて御歌のつゞけは、新墾筑波てふ地の名を、新毬をつくといひなして、次をば數の語もてのたまへりと見ゆ、其意を得て、數もて御こたへも申せし物と、荷田大人はとか

れし也、げにも只歷給ふる所々にやどらし、數を問せ給へるのみならば、たれかこたへ奉り難からん、獨此老人は、手まりつく數の語もて末を續申せし故に賞給へりし也けり、（此御歌、古事記には婆里、日本紀には麻利とあるは、婆の濁と麻の清と通ふ例なれば、いづれによみても意は同じき也、）是によれば、今も手まりつくに、ひふみよ（一二三四）云といへるは、古き世よりのことなるべき也、（天智紀にあるは蹴まり也、それよりも上つ代には、手まりのみこそ有つらめ、）猶此事は、万葉卷九に、（筑波山に登）新治乃、鳥羽能淡海毛とよみ、神名式、和名抄などにも、常陸國に新治ノ郡と筑波郡と見えたれど、まだ此尊のいでませしほどには、郡の分ちまでもなくて、たゞ此二つの地の名の有をもて並擧給へる歟、又筑波に新まりをつくとのみいひかけ給へる歟なども思ひしを、今おもふに、小計ノ皇子の御詞にも、出雲は新墾との給ひ、その外新ばりてふ古語も多ければ、此つくばわたりにいと古へ新ばりの所有が、はやく所の名と成て侍りけんを、幸に新まりつくてふ意をそへて、あやにつゞけさせ給へるならんと覺ゆ、

〔續日本紀（稱德）二十八〕神護景雲元年三月癸亥、常陸國筑波郡人從五位下壬生連小家主、賜姓宿禰、

〔吾妻鏡十三〕建久四年六月二十二日丁巳、多氣義幹應召參上之間、爲善信俊兼等奉行、被召決知家、知家訴申云、去月祐成狼藉事、今月四日隨承及、欲參上、而義幹誘引義幹集一族郎從等、楯籠多氣山城、企反逆云云、義幹謝其趣不明、但於構城郭聚軍士之事者、承伏無所遁、仍被收公常陸國筑波郡南郡北郡等領所、被召預其身於岡邊權守泰綱云云、

河內郡

〔郡名考〕常陸　河內（カフチ、カハチ）

〔常陸風土記〕河內郡（東筑波郡、南毛野河、西北新治郡、艮白壁郡、）

〔新編常陸國誌九郡名〕補、郡名、（○中略）河內郡　倭名抄云、河內（甲知）風土記ニ載セズ、（但筑波、信太二郡ノ條僅カニ郡名アルノミ、）故ニ建置ノ始メ考フ可ラズ、蓋信太郡ト同ク、難波長柄豐崎朝（孝德）筑波郡ヲ割テ置キシト見エタリ、其地子飼川ニ抱カルヽヲ以テ、河內ノ名ハアルナリ、風土記、倭名抄ニ據リテ地

圖ヲ按ズルニ、是郡東信太郡、南下總、常陸之界葦原、西毛野河、(眞壁、筑波ニ例セリ、其實ハ子飼川ナリ、)北筑波郡(接風土記、)(筑波郡四至ニ、南河內郡トアルハ、其實ヲ得タリ、信太郡ノ四至ニ北河內郡トアルハ、其郡ノ全體ヨリハ、西ト云フベシ、北ト云ヒタルハ、大村、菅田ノ二郷アルニ就テ指セルカ位ナリ、)ニテ、島名、河內、大山、八部、眞幡、菅田、大村等ノ七郷ヲ管ス、文祿ノ檢地ニ、西北ノ地ハ筑波郡ニ殺レ、東南信太郡ノ南地ヲ併ス、元祿ノ制之ニ從テ更メズ、其境界東ハ霞浦ニ臨ミ、北ハ信太郡ニ接シ、西ハ筑波郡ニ錯リ、南ハ下總國界ヲ限リテ一百十七村、五萬四千九十餘石ヲ有セリ、

〔釋日本紀十述義〕日高見國

公望私記曰、常陸國風土記云、信太(○太原作夫、今改、)郡云々、古老曰、御宇難波長柄豐前宮之天皇(○孝德)御世、癸丑年、小山上物部河內大山上物部會津等、總領高向大夫等、分筑波茨城郡七百戶置信太郡、此地本日高見國云々、

〔萬葉集抄二〕常陸國風土記に、信太郡となづくる由緣を記して云、黑坂命征討陸奧蝦夷、事了凱旋、及多歌郡角枯之山、黑坂命遇病身故、爰改角枯號黑前山、黑坂命之輪轜車發自黑前山到日高之國、葬具儀赤旗青幡交雜、飄颺雲飛虹張、瑩野耀路、時人謂之幡垂國、後世言便稱信太國云々、

〔新編常陸國志九郡名〕信太郡　倭名抄云、信太(志多)古ノ筑波、茨城二國ノ域內ナリ、(○中略)風土記ニ據ルニ、是郡東信太流海、南榎浦、西毛野川、北河內郡ナリ、倭名抄ヲ考フルニ、是後地ヲ南方ニ廣メテ、大野、高來、小野、朝夷、高田、子方、志萬、中家、島津、信太、乘濱、稻敷、阿彌ノ十三鄉、及驛家里ヲ管ス、文祿ノ檢地、南方ハ河內郡ニ併セラレ、北邊ハ新置ノ新治郡ニ削ラレテ、郡域大ニ縮少セリ、元祿ノ制之ニ從テ改メズ、東北ハ霞浦ニ面シ、西南ハ河內郡ニ隣リ、西北ノ一隅新治郡ニ接シテ八十八村、四萬二千一百十餘石ヲ有セリ、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年十月丁丑、常陸國信太郡大領外正六位上物部志太連大成、以私物周百姓急、授外從五位下、

〔萬葉集　二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
於之氏流夜、奈爾波能津與利、布奈與曾比、阿例波許藝奴等、伊母爾都岐許曾、
比多知散思、由可牟加里母我、阿我古比乎、志留志氏都祁氏、伊母爾志良世牟、

右二首、信太郡物部道足、

〔郡名考〕常陸　茨城ムハラキ　イハラキ

〔常陸風土記〕茨城郡東香島郡、南佐禮流海、西筑波山、北那珂郡、

古老曰、昔在國巣、俗語曰、都知久毛、又云夜都賀波岐、山之佐伯、野之佐伯、普置掘土窟、常居穴、有人來、則入窟而竄之、其人去更出郊以遊之、狼性梟情、鼠窺掠盗、無被招慰、彌阻風俗也、此時大臣族黒坂命、伺候出遊之時、以茨蕀塞施穴內、卽縱騎兵急令逐迫、佐伯等如常欲走歸土窟、盡繋茨蕀、衝害刺傷、終疾死散、故取茨蕀以著縣名、所謂茨城郡、今存那珂郡之西、古者郡家所置、卽茨城郡內、風俗諺曰、水依茨城之國、　或曰、山之佐伯、野之佐伯、自爲賊長、引率徒衆、横行國中、大爲劫殺、時黒坂命規滅此賊、以茨城造、所以地名便謂茨城焉、茨城國造初祖天津多祁許呂命、仕息長帶比賣天皇(神功皇后)之朝、當至品太天皇(應神)之誕時、多祁許呂命有子八人、中男筑波使主茨城郡湯坐連等之初祖也、

〔新編常陸國誌　九郡名〕茨城郡　倭名抄云、茨城牟波良岐古ノ茨城國ナリ、〇中略風土記、倭名抄ヲ按ズルニ、是郡東香島郡南佐禮流海、按流海ハ、風土記信太流海、行方海ナドアリテ、當時定名ナシ、和名抄本郡佐賀郷アリテ、今坂村ト云フ、其地南邊流海ニ臨ム處ナレバ、佐禮ハ佐賀ノ誤ナルコト疑ナシ、今ハ流海ヲ總稱シテ霞浦ト云フハ、風土記行方郡ノ地名ヨリ誤マリタル稱ナレドモ、浦ハ江海ノ邊ヲ曰ヒ、又大水有小口別通曰浦ノ二義ニテ、古稱ニ能クカナヘリ、或云佐禮ハ佐我ニ作リタルヨリノ誤ナルベシ、西筑波山、北那珂郡ニテ、夷針、山前、城上、島田、佐賀、大橋、生園、茨城、田餘、小見、拜師、石間、安飾、白川、安侯、大津、立花、田龍等ノ十八郷ヲ管ス、中世本郡ヲ南北二部ニ分チ、國府以南ヲ南郡ト呼ビ、以北ヲ北郡ト唱ヘ、庄保其間ニ錯雜ス、文祿ノ檢地ニ本郡ノ地、南ハ新置ノ新治郡ニ併セラレ、東南ハ鹿島郡ニ割ラレテ、更ニ西方笠間郡ヲ合セ、北方那珂郡ノ南邊ヲ加フ、元祿中、鹿島郡ノ地ヲ舊ニ復シ、西那珂郡ヲ併セテ、新ニ境堺ヲ定ム、其地東ハ涸沼ノ下

流ヲ以テ鹿島郡ノ北邊ニ堺シ、南ハ新治、行方、鹿島三郡ニ錯リ、西ハ眞壁郡及下野國ニ隣リ、北ハ那珂川ヲ限リ、那珂郡ニ對シ、三百三村、十五萬七千七百五十餘石ヲ領ス、

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年五月十日丁丑、常陸國久慈郡人丸子部妖人、茨城郡俘囚吉美侯酒田麻呂等、並進位三階、以孝於父母也、

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

奈爾波都爾、美布禰於呂須惠、夜蘇加奴伎、伊麻波許伎奴等、伊母爾都氣許曾、

佐伎牟理爾、多々牟佐和伎爾、伊弊能伊毛何、奈流敝伎己等乎、伊波須伎奴可母、

右二首、茨城郡若舍人部廣足、○中略

阿我母氐能、和須例母之太波、都久波尼乎、布利佐氣美都々、伊母波之奴波氐、

右一首、茨城郡占部小龍、

〔郡名考〕常陸　行方ナカタ　ナメカタ

〔常陸風土記〕行方郡東南並流海□□□□□北茨城郡

古老曰、難波長柄豐前大宮馭宇天皇○孝德之世癸丑年、茨城國造小乙下壬生連麿、那珂國造大建壬生直夫子等、請總領高向大夫、中臣幡織田大夫等、割茨城地八里○一本此下有那珂地七里五字、合七百餘戶、別置郡家、所以稱行方郡者、倭武天皇巡狩天下、征平海北、當是經過此國、即頓幸槻野之清泉、臨水洗手、以玉落井、今存行方里之中、謂玉清井、更廻車駕、幸現原之丘、供奉御膳、于時天皇四望顧侍從曰、停輿徘徊、舉目騁望、山阿海曲、參差委蛇、峯頭浮雲、谿腹擁霧、物色可怜、郷體甚愛、宜可此地名稱行細國者、後世追跡猶號行方、風俗云、立雨零行方之國、

〔新編常陸國誌 九郡名〕行方郡　倭名抄云、行方奈女加多古ノ茨城國造ノ都內ナリ、○中略風土記倭名抄ニ據ルニ、是郡東南並流海、北茨城郡、按南ノ下四字ヲ補フベシ、本郡ハ西ノ流海ヲ最濶シトス、ニテ、提賀、小高、藝都、大生、當麻、

逢鹿、井上、高家、麻生、八代、香澄、荒原、道田、行方ノ十四郷、及曾禰、板來、餘戶ノ三里ヲ管ス、文祿ノ檢地郡堺舊ニ仍ル、但東北ノ一隅僅ニ鹿島郡ニ入ルノミ、元祿ノ制之ニ從テ更メズ、其地八十九村、四萬三千一百七十餘石ヲ總轄セリ、

鹿島郡

〔常陸風土記〕香島郡東大海、南下總常陸堺安是湖、西流海、北那賀香島堺阿多可奈湖、古老曰、難波長柄豐前大朝馭宇天皇孝德○之世己酉年、大乙上中臣鎌子大乙下中臣部兎子等、請總領高向大夫、割下總國海上國造部內輕野以南一里、那賀國造部內寒田以北五里、別置神郡、其處所有天之大神社、坂戶社、沼尾社、合三處、總稱香島之大神、因名郡焉、風俗說曰、霰零香島之國、

〔新編常陸國誌九郡名〕鹿島郡　倭名抄云、鹿島、加之末、風土記香島ニ作ル、古ノ那珂國及下總海上國ノ域內ナリ、○中略風土記倭名抄ヲ按ズルニ、是郡東大海、南下總、常陸堺安是湖、西流海、北那賀、香島堺阿多可奈湖、按安是ハ淺瀨ノ義ニテ、今銚子口ト云フ處、其常陸原ト稱スル鹿島郡ノ方ヘ、湉江遠ク淺ケレバ、安是ト呼ビタルナルベシ、阿多可奈ハ蓋濶沼ニテ、寒田ニ對ヘテ、其水ノヌルメルヲ云フカ、ニテ、白島、下島、鹿島、高家、三宅、宮崎、宮田、中村、松浦、中島、輕野、德宿、幡麻、大屋、豬尾、新居、伊島、上島等ノ十八鄕ヲ管ス、中世本郡ヲ分テ二條ト爲シ、鄕戶原以南ヲ南條ト云ヒ、以北ヲ北條ト稱セリ、文祿ノ檢地ニ、北邊ノ地茨城郡ニ分屬セシガ、元祿中舊ニ復シ、郡域古ニ異ルコトナシ、其地一百二十四村、四萬四千九百九十餘石ヲ包括ス、

〔續日本紀九元正〕養老七年十一月丁丑、常陸國鹿島郡、○中略等少領已上、聽連任三等已上親、

〔延喜式十八式部〕凡郡司者一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓除同門外聽任、神郡陸奥緣邊郡大隅薩摩等郡者、不在制限、謂(中略)常陸國鹿島(中略)筑前國宗形等郡爲神郡、

那珂郡

〔常陸風土記〕那賀郡東大海、南香島、茨城郡、西新治郡、下野國堺大山、北久慈郡、

〔新編常陸國誌九郡名〕那珂郡　倭名抄云、那珂、風土記那賀ニ作ル、古ノ那賀國ナリ、○中略風土記、倭名抄ヲ考フルニ、是郡東大海、南香島、茨城郡、西新治郡下野國堺、北久慈郡ニテ、入野、朝妻、吉田、岡田、安賀、大

久慈郡

井、河内、川邊、常石、全隈、日下、志萬、阿波、芳賀、石上、鹿島、茨城、洗井、那珂、八部、武田、幡田等ノ二十二郷ヲ管ス、中世本郡ノ地分レテ三郡トナリ、其東邊ヲ吉田郡ト稱シ、其西北邊那珂川ヲ狹デ那珂西郡、那珂東郡ノ名アリ、文祿ノ撿地、那珂川以南ノ地卽那珂西郡及吉田郡南邊悉ク茨城郡ニ併セラレ、更ニ久慈郡ノ北邊ヲ加ヘテ、新ニ郡界ヲ定ム、元祿ノ制之ニ仍テ改メズ、東ハ東海ニ至リ、西ハ下野那須郡界ニ達シ、南ハ那珂川ヲ限リ、北ハ久慈川ヲ以テ久慈郡ニ界シ、一百四十三村、十萬二千九百六十餘石ヲ統括セリ、

〔常陸紀行〕那珂郡は、仲郡とも云、常陸の西に鬼怒(きぬ)川ありて、東に久慈(くじ)川あり、中間に那珂川ありて、卽ち常陸の中郡を東南に流れて、水府御城の東北の外郭を經歷し東海に入る、是那珂郡の稱呼因て來れる處なり、

〔續日本紀九元正〕養老七年二月戊申、常陸國那賀郡大領外正七位上治部直荒山、以私穀三千斛獻陸奧國鎭所、授外從五位下、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年正月乙亥、下總國印幡郡大領外正六位上丈部〇大以下九字原脫、據一本補、直牛養、常陸國那賀郡大領外正七位下宇治部全成、並授外從五位下、以進軍粮也、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

都久波禰乃、佐由流能波奈能、由等許爾母、可奈之家伊母曾、比留毛可奈之祁、

阿良例布理、可志麻能可美乎、伊能利都々、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎、

右二首、那賀郡上丁大舍人部千文、

〔常陸風土記〕久慈郡東大海、南西那珂郡、北多珂郡陸奥國堺岳、

古老曰、自郡以南、近有小丘、體似鯨鯢、倭武天皇因名久慈、

〔新編常陸國誌九郡名〕久慈郡　倭名抄云、久慈古ノ久慈國ナリ、〇中略風土記、倭名抄ヲ按ズルニ、東

大海、南西那珂郡、北多珂郡陸奥岳ニテ、岡田、八部、倭文、密月、助川、美和、志萬、眞野、神前、久米、太田、山田、河内、楊島、世矢、佐竹、高市、木前、佐都ノ十九鄕、及餘戸里ヲ管ス、中世本郡ヲ分チテ、二部ト爲シ、又其西北部ヲ分テ、久慈西、久慈東ノ二郡トス、久慈川ノ東西ニ因テナリ、其東南部ヲ分テ、佐都西、佐都東ノ二郡トス、又佐都川ノ東西ニ因テ也、文祿ノ檢地久慈川西南ノ地、卽久慈西郡及佐都西郡ノ南邊ハ、悉ク那珂郡ニ併セラレ、佐都東郡ノ北邊ハ、多珂郡ニ削ラレ、更ニ西北依上保〈依上保ハ、卽古陸奥白河郡依上鄕ナリ、永正以來佐竹氏ノ領地トナリ、本國ニ屬ス、〉ヲ加ヘテ、新ニ郡界ヲ定ム、元祿ノ制之ニ從テ更メズ、其地南ハ久慈川ヲ以テ那珂郡ニ界シ、北ハ陸奥白河郡ニ隣リ、東ハ多珂郡ニ接シ、西ハ下野那須郡ノ界ヲ限リ、東南ノ一隅ハ東海ニ臨ミテ、一百七十村、十萬八百六十餘石ヲ領セリ、

〔續日本紀七元正〕靈龜元年十二月己未、常陸國久慈郡人占部御蔭女、一産三男、給粮幷乳母一人、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

久自我波々、佐氣久阿利麻弖、志富夫禰爾、麻可知之自奴伎、和波可敝里許牟、

右一首久慈郡丸子部佐壯、

〔常陸密藏院藏古文書〕子息五郎義直六郎義多軍忠之事、於義直者、去年七月二十四日、武藏國鶴見合戰之時、致討死、至義多者、今年二月六日、於常陸國久慈西郡、誅伐楠木判官正成代之時、同致討死條、殊所感思也、於恩賞者、追可有其沙汰之狀如件、

建武三年九月二十八日 御判

佐竹上總入道殿

〔飯野八幡社古文書坤〕目安

伊賀式部三郞盛光度々軍忠事〇中略

一同年八月二十二日、同國久慈西郡、寄於連城之處、馳向御敵小田宮内少輔、〇治久幷廣橋修理亮〇經

拳以下凶徒等之間、同東郡。。華房山合戰抽軍忠畢、○中略右於常陸國所々合戰、致軍忠之間、盛光建武四年正月十日、預御感御教書之畢、然者早預御注進、爲備後證、目安如件、

建武四年五月日　　裏判○佐竹義篤

多珂郡

〔郡名考〕常陸　多珂タガ　多賀

〔常陸風土記〕多珂郡東南並大海、西北陸奧常陸二國堺之高山、古老曰、斯我高穴穗宮大八洲照臨天皇○成務之世、以建御狹日命任多珂國造、茲人初至、歷驗地體、以爲峯險岳崇、因名多珂之國、謂建御狹日命者、卽出雲臣同屬、今多珂石城所謂是也、風俗說曰、薦枕多珂之國、建御狹日命當所遣時、以久慈堺之助河爲道前、去郡西北六十里、今猶稱道前里、陸奧國石城郡苦麻之村爲道後、其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇○孝德之世癸丑年、多珂國造石城直美夜部、石城評造部志許赤等、請申總領高向大夫、以所部遠隔往來不便、分置多珂石城二郡、石城郡、今存陸奧國堺內、

〔新編常陸國誌郡名九〕多珂郡　倭名抄云、多珂、風土記多歐ニ作ル、又古多珂國ナリ、多珂又高ニ作ル、○中略風土記、倭名抄ヲ按ズルニ、是郡東南並大海、西北陸奧常陸二國堺之高山、按久慈郡四至ノ條ニ據ルニ、南久慈郡トアルベキナリ、ニテ、梁津、伴部、高野、多珂、藻島、新居、賀美、道口ノ八郷ヲ管ス、文祿ノ檢地、南方佐都東郡ノ北邊ヲ加フ、元祿ノ制之ニ從テ改メズ、其地東ハ海ニ面シ、北ハ陸奧菊多郡ニ界シ、南西二面ハ久慈郡ニ隣リテ、八十八村、五萬七千二百八十餘石ヲ包括ス、

〔續日本紀八元正〕養老二年五月乙未、割常陸國多珂之郷二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背國焉、

私稱郡名

〔新編常陸國誌十俗稱郡名〕俗稱郡名　和名抄ヲ按ズルニ、官家ノ郡ノ外ニ、國人更ニ別郡ヲ分置スルコト、其來ルコト久シ、所謂和泉國泉南郡、和泉郡ヲ分テ、東西二郡トスルノ類、皆國人ノナス所ニシテ、朝家ノ所置ニハアラズ、然レドモ當時通用スル處分ツ、陸奧國高野郡、白河郡ヲ分ツ、伊達郡、磐瀨郡信太郡ヲ分ツ、等ナリ、其他上野國群馬郡ヲ分テ、ニシテ、國司モマタ知ラザルニアラズ、後世ニ到ルニ及テ、諸國此ノ類多シ、陸奧三十六郡、別テ五十四郡トナルモノ、其尤モ甚ダシキモノナリ、本國新治ヲ、西郡、中郡、東郡トシ、茨城ヲ南北二郡ト

シ、那珂ヲ東西トシ、久慈ヲ東西トスルガ如キハ、皆郡名第一第二各郡ノ下ニ辨セリ、コヽニ載スルモノハ、更ニ別名ヲ設ケ、分テ一郡トセル類ノミナリニ

〔新編常陸國誌俗十郡名〕吉。田。郡。多興之　那珂郡東邊ノ地ニテ、本郡三分ノ一ニ居ル、吉田郷ヲ本トス、故ニ吉田郡ト云フ、將門記ニ、將門常陸ニ在テ、以下原本缺補、貞盛ノ所在ヲ尋ヅヌル條ニ、爰猶相尋之間、漸隔一旬、僅吉田郡蒜間之江邊拘得貞盛、源扶之妻云云、宮本元球云、本國ノ內、私ニ稱セル郡名ニテハ、吉田郡最モ古シ、嘉元田文ニ、吉田郡廿三町一段內、恒富倉員按、吉田社仁平元年留守所廳ニモ、吉田郡倉員アリ、今其所ヲ失ス、靈井河按、大使役記ニモ、靈井河氏アリ、今其所ヲ失ス、大野、石前、武田、大戸、長岡、中野根、今詳ナラズ平戸、馬渡、石川、戸田野トアルモノ、皆其地ノ目ナリ、又大掾傳記ニ、吉田氏族ノ姓氏、葛蒲井、中山、方波見、並上石崎ノ地石崎、大戸、石河、盛戸、今森戸島田、大野、平戸、谷田部、勝倉、武田、堀口、市毛、猫崎、大戸ノ地蛭町、大泉、並下大野ノ地道理山、三段田ノ地八辻、按、其所詳ナラズ、江戸重通、室伏某ニ贈ル書ニ、ヤツムシヤハリノ内ト云フ事アリ、八辻ニ假タリ、今八文字ト云フ苗字ノ人アルハ、此八辻、ヤツムシノ轉セシニヤ、常葉、宇喜、又宇木、浮ニ作ル、常葉ノ地ナリ、袴塚ナドアルヲ以テ、郡境ノ概略ヲ知ルベキナリ、ソノ城ハ、今小鶴川ヲ西界トシテ、ソノ東北ヨリ那珂東ニ渡リテ、ソノ南邊ニ若干アリシナリ、按ズルニ、藥王院延元二年、觀應三年、文和二年、貞治五年、應安元年等文書、吉田社應永三年文書、稅所應永十七年文書、及切手員數、大永中記スル所ノ諸事心覺鈔等ニ吉田郡ノ稱アリ、其他枚擧スルニ遑アラズ、

〔將門記〕新皇勅曰、藤氏等可指申掾貞盛、幷爲憲等之所在、于時藤氏等奏曰、如聞、其身如浮雲、飛去飛來、宿處不定也奏訖、爰猶相尋之間、漸隔一旬、僅吉田郡蒜間之江邊、拘得掾貞盛、源扶之妻、

〔新編常陸國誌俗十郡名〕佐。都。郡。土沙　久慈郡ノ東邊ナリ、本郡三分ノ一ニ居ル、佐都ヲ以テ名稱トセルハ、本郡薩都郷ヲ本トスレバナリ、

補、佐都河ヲ界ヒシテ、東西二郡ニ分チシト見エテ、弘安太田文ニ、佐都東二百八十九町八段三百歩、內東岡田、西岡田、根本大森、泉、今泉、千根、波田、小澤、佐都西二百五十六丁三段小、內小野崎、中小野崎、阿久津、小野、西河內、吉津、磯部、石神、鎌田、東河內、大田、白岩、世谷、大橋、加津見澤ノ名アリ、以

テ二郡境域ノ大概ヲ知ルベシ、

伊佐郡以沙　新治郡ノ西邊ナリ補今眞壁郡ニ入ル、國人新治ヲ分チテ西郡、中郡、東郡トセシコトハ、郡名第一ニ述ベタルガ如シ、其内又西郡ヲ分テ二條トシ、西郡南條、西郡北條トナセリ、サテ南條ヲ關郡ト云ヒ、北條ヲ伊佐郡トヨベリ、弘安太田文ニ、西郡南條ト書シテ、關ト傍書シ、西郡北條ト書シテ、伊佐ト傍書セシハ此故ナリ、全ク伊佐郡ト書キタルガ物ニ見エタルハ北條記ナル、北條時國ノ事跡ニ、弘安七年下ニ向常陸國伊佐郡ト見ヘタル、是ゾ始メニハアリケル、伊達系圖、常陸入道念西ノ傳ニモ、住ニ伊佐郡中郡ト見エタリ、中村ハ今ノ中館ナリ、谷系譜ニ、伊佐三十三郷ノ稱アリ、〔原本頭書〕水、鹿島大禰宜文書、〔以下原本缺〕

補、宮本元球云、鹿島護摩堂文書、應安伊佐郡平塚郷今村アリナドアリテ、伊讀ヲ本郷トス、弘安勘文、西郡北條、伊佐九十九町一段六十歩内以東四十八丁大、以西五十一丁半、トアリ、

〔飯野八幡社古文書坤〕伊賀式部三郎盛光謹言上、欲早且任外題安堵讓狀旨、且依御方合戰軍忠、成賜安堵御下文、備末代龜鏡、彌抽武勇忠節、當知行所領常陸國伊佐郡内石原田郷地頭職、陸奥國好島莊内飯野村、并好島村預所職事、○中略右然早且任重代相傳安堵讓狀等旨、且依御方合戰異于他忠、當知行無相違之上者、成賜安堵御下文、備末代龜鏡、彌爲抽武勇奉公、恐々謹言上如件、

建武四年六月日　裏紙端ニアリ　花押

〔新編常陸國誌十俗稱郡名〕關郡世岐　新治郡ノ西邊ニシテ、西郡南條ノ名ナリ、事伊佐ノ下ニ詳ナリ、コノ地今眞壁郡ニ入ル、〔原本頭書〕圓福寺記録ニ、關三十三郷ノ稱アリ、關郡ト云コトノ物ニ見エタルハ、東鑑〔以下原文缺〕

〔常陸國郡考二新治郡〕關郡　東鑑、寶治二年、關郡二木奈利郷、今二木成村　梅松論、建武三年、箱根竹下合戰の段　常陸關郡を結城廣祐に賜ふとあり、本郷は郡の南地、花田、關本等の地也、弘安勘文に、西郡南條關百八丁五段三百歩とある、是關郡なり、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年六月十五日辛卯、酉剋常陸國關郡仁木奈利郷、白雪降則休止云云、

〔新編常陸國誌十俗稱郡名〕笠間郡　古新治郡東邊ノ地ナリ、故ニコレヲ東郡ト云フ、（今悉ク茨城郡ニ屬）ス弘安太田文ニ、東郡吉原四丁三段小、藤原十八丁六段小、稻田社十七丁小、赤澤十四丁一段半、（鹿島神領）野尻二丁二段小、本殿廿丁五段、大藏省保五十一丁二段大、大渦九十四丁二段六十歩、黑栖四十二丁五段、方庭四十七丁三段、石井原七丁八段、大藏庄五十一丁二段大（按ニ前ニ大藏省保五十一町二段大トアリテ、コヽニ亦カクノ如ク出デタルハ、重複ニ似タリ、サレド笠間十二郷ト云ヘレバ、全クノ重複ニハアラズ、一ヲハ鎌倉ナルベシ、但丁段ノ數ノ同ジキハ、大藏トカキタルヨリ、遂ニ丁段ヲモ誤リタルナルベシ、下ニ云ヘル今ノ十二郷ト合セ見ルベシ、）トアルコレナリ、全ク笠間郡ト記セルハ、親鸞繪傳ニ、笠間郡稻田郷云云ト見エタルゾ始メナル、コノ繪傳ハ、永仁三年ニナリタルモノナレバ、ハヤク此頃ヨリ笠間郡ノ名アリタルコト明ニ知ラレタリ、洞院相國ノ拾芥抄ニモ笠間郡ヲノセタリ、コノ書モ、後花園帝時代ノモノナリ、但笠間ト云ヘル名ハ、古クヨリアリシト見エテ、風土記ニモ、自郡以東五十里在笠間村云々トノセタリ、コレハ村里ノ名ニテアリシヲ、郡ト云ヒ出タルハ、鎌倉將軍ノ世ノコトトゾ聞エタル、コレモ東郡トノミ云ヒテハ、新治一郡ノ稱ニテアレバ、更ニ笠間郡ト稱シテ、別ニ三郡ノ如クニハナレルナルベシ、府中ノ稅所ニ藏セル文書ノ內、年貢ナド召サルベキ符ノ數ヲ書キタル者ト見ユル書ニ、始メニハ切手員數ト題シテ、笠間郡十二枚ト記セリ、太田文ニモ注セルゴトク、笠間郡ヲ十二郷ニ分ケラレタレバ、切手モ十二枚アリシト見エタリ、此書モ年號ハナケレドモ、鎌倉將軍ノ時ノ物トハ見ユルナリ、稅所文書ノ內、笠間孫三郎家朝ガ、應永四年八月、鎌倉奉行所ニ上ツル目安狀ニ、欲早被退寶戒寺三聚院當知行、如元全知行笠間郡十二郷、石井郷半分事（殘半分者御料所）云云、右懸名字笠間十二ケ郷內、相違郷之事、去明德元年十二月給賦銘、令致上訴之處、於京都任至德元年關東御吹噓、並去康應元年御注進等之旨、明德二年二月廿二日、下給十二郷一圓安堵御下文上者、於關東御沙汰、彌不可有豫儀歟、彼石井郷殘半分者、被置御料所上者、宜奉任上意、然早被退彼三聚院當知行、任京都安堵御下文旨、下給御施行、石井郷如元全知行、爲致夙夜奉

公之勇云々トアリ、コレヲ以テ見レバ、笠間十二郷ハマサシク笠間氏ノ知行セシ所ナリ、熊野參詣願文ノ内ニ、明德二年極月初二日、常陸國笠間郡住人、藤原常陸介朝宗、安藤四郎國守(石井)平六三郎國安(黑栖郷)ト見エタリ、後ニハ笠間庄ト稱シテ、郡トハ云ハザリシト見エテ、稻田社祭禮ノ歌ニ、奥州ハ五十四郡、常陸ハ十六郡、其中ニ笠間庄稻田郷ニ立チ給フ、稻田四所大明神云々ト云ヘル句アリ、コノ歌何レノ世ニ作レルモノナルカハシラザレドモ、常陸十六郡トナルニヨレバ、天正以前ナルコト明ナリ、○中略東條郡(皆以音)信太郡ノ東邊也

補、弘安太田文ニ、信太東トアルモノ是ナリ、

〔鹿島文書〕將軍家政所下、可令早鹿島社權禰宜中臣能親、領知常陸國府郡橘郷、行方郡大賀村當社名田畠事、

右任亡父朝親正安三年十月廿五日讓狀(子細載之)爲彼職可致沙汰之狀、所仰如件、以下、

乾元二年二月三日　案主菅野

令左衛門少尉藤原　知家事

別當武藏守平朝臣

相模守平朝臣

○按ズルニ、國府郡ハ茨城郡ナラン、

〔集古文書(四十四寄附狀)〕足利持氏寄進狀相模國鎌倉松岡八幡宮藏

奉寄進　松岡八幡宮

常陸國北條郡宿江(右衛門佐入道跡)事

右爲天下安全、武運長久、所奉寄附之狀如件、

鄉

應永二十四年閏五月二日　左兵衛督　源朝臣

〔倭名類聚抄六國郡〕常陸國　新治郡　坂門　竹島　沼田　伊讃　博多　巡廻　月波都木波　大幡

新治　下眞　巨神　井田

眞壁郡　神代　眞壁　長貫　伴部　大苑　大村　伊讃

筑波郡　大貫　筑波　水守美毛利　三村　栗原　諸蒲　清水　佐野　方穗

河內郡　島名　河內　大山　八部　眞幡　菅田　大村

信太郡　大野　高來　小野　朝夷　高田　子方　志萬　中家　島津　信太　乘濱　稻敷

阿禰　驛家

茨城郡　夷針　山前　城上　島田　佐賀　大幡　生國　茨城　田舍　小見　拜師　石間

安飾　白川　安侯　大津　立花　田籠

行方郡　提賀　小高　藝都　大生　當鹿　逢鹿　井上　高家　麻生　八代　香澄　荒原

道田　行方　曾禰　坂來　餘戶

鹿島郡　白島　下島　鹿島　高家　三宅　宮前　宮田　中村　松浦　中島　輕野　德宿

幡麻　大屋　諸尾　新居　伊島　上島

那珂郡　入野　朝妻　吉田　岡田　安賀　大井　河內　川邊　常石　全隈　日下部　志萬

阿波　芳賀　石上　鹿島　茨城　洗井　那珂　八部　武田　幡田

久慈郡　岡田　八部　倭文　高月　助川　美和　志萬　眞野　神前　父來　大田　山田

河內　楊島　世矢　佐竹　高市　木前　佐野　都　餘戶

多珂郡　梁津　伴部　高野　多珂　藻島　新居　賀美　道口

〔常陸紀行〕國郡古今の沿革轉遷定まらずして、其詳なる事得て知るべからず、眞壁郡の鄉名に伴

部あり、伴部は友部にして、西那珂郡にありと云、又多珂郡にも友部あり、又陸奥國に行方郡あり、又那珂郡に芳賀の郷名見ゆ、芳賀は下野國の郡名たり、又多珂郡に高野郷あり、高野は、中世今の白河郡を高野郡ともいひし事あり、その名にしにや、今白河郡に高野村あり、又茨城郡に白河の郷名あり、又助川郷は多珂郡にあり、然るに久慈郡に屬せり、今彼此の地名を點撿し、古今遷移の來歷を考ふるに、各皆因て來れる處あり、今余〈○黑崎至純〉が臆載を此に存して、以て識者の考定を請、

〔道の幸 中〕廿日、〈○寛政四年十一月〉ひるのしたゝめして法隆寺へ行、〈○中略〉太子御茵とて、あまたある中に、縫めきれて、中倍の細緯筵出たるが、裏は幅ひろき布にて、端に常陸國信太郡中家郷戸主大伴羊□□□天平寶勝八年□□□と墨もて書て有、寶勝は勝寶の書たがへるにや、八年の下は十月とおぼしくて其下は消てみえず、

〔吾妻鏡 二〕治承五年〈○養和元年〉十月十二日乙卯、以常陸國橘郷、令奉寄鹿島社、是依爲武家護持之神、殊有御信仰云云、

奉寄鹿島社御領

在常陸國橘郷

右爲心願成就、所奉寄如件、

治承五年十月日　源頼朝〈白敬〉

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〈○文治元年〉八月二十一日辛未、鹿島社神主中臣親廣、與下河邊四郎政義被召御前、遂一決、是常陸國橘郷者、被奉彼社領訖、而政義以當國南郡〈○茨城〉總地頭職稱在郡内、押領件郷、令譴責神主妻子等、剩可從所勘之由、取祭文之旨、親廣訴申之政義雖伏、頗失陳謝、爲眼代等所爲歟之由稱之、〈○下略〉

〔鹿島文書〕下常陸國鹿島社司并在廳官人等〈在判〉

可早爲中臣親盛沙汰、令勤仕神事奥郡內大窪并鹽濱鄕事、

右件兩鄕、爲親盛沙汰、於有限所當者、一向爲神用途、無懈怠可令勤仕神事之狀如件、敢不可違失、故下、

元曆元年十二月廿五日

〔鹿島文書〕鹿島社權禰宜實則子息大禰宜則氏、申常陸國大窪鄕內鹽行倉村田五町在家五宇事、

右鄕者、右大將家、元曆元年於當社、爲不斷大般若轉讀御寄進之、〇中略

當鄕社領之條、代々御下知分明也、於正應沒收之地者、人領倚以就理非被裁許、況神領雖及沒收之間、於彼田在家者、所被返付實則跡也、次替事可被宛行當給人者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正安三年三月三日

陸奥守平朝臣〇宣時

相模守平朝臣〇貞時

〔吾妻鏡 二十三〕建保六年三月二十三日、今日常陸國志筑鄕內願成寺住僧等有參訴事、檢注使以新儀、可入勘寺領之由張行云云、仍可停止之趣、右京兆下知給之云云、

〔田文 五〕領家雜掌所進　安貞二年戊子田檢注百姓名并目錄事

吉田鄕分　田二十九町大內除田十六丁七反此內神田四丁七反　寺田丁加定人給田十二丁

定收納田十二丁三反大〇中略　酒戸鄕分田十六丁九段內除三丁七反 定收納田十二丁三反二丁一反六十步　河崎鄕分田十丁三段三百步除二丁六反 定收納田七丁六反三百步　細谷村分田五丁一反小內除田入段 定收納田四丁三反小　吉沼鄕分田十二丁六反內除六反 定收納田十二丁三反小

山本鄕分田十四丁二反大內除三丁一反 定收納田十一丁一反大

仁治帳

常葉鄕分　定收納田十二丁一反六十步

袴塚鄕分　田十四丁四反三百步除二丁中神田佐渡村作田入丁七反神生村作田六段

宇喜郷分（田二十五丁九反大内除九丁七反小神田人給田 定數納田十五丁一反小二反三百歩垣丸）

右一段別ニ籾一斗九升五合　頴錢百十五文

此内籾一斗錢百文ハ、上御物、籾九升五合錢十五文ハ、政所田所二人ノ給分、

總合一反別ニ三百文ニなさる

右大略注文如件

應永十二年十月八日書了

〔鹿島文書〕常陸國中郡庄内礒部郷半分預所、高重嫡女大中臣氏申繼母押領當職由事訴狀、（具書別）遣之、子細何樣事哉、早可令注申之狀、依仰執達如此、

弘長元年十二月廿二日　相模守

秋田城介殿

〔鹿島文書〕鹿島大禰宜朝親、與野本四郎左衛門尉法師（法名行□）相論當社領大枝郷事、

右訴陳之趣、子細雖多、所詮當郷下地者、嘉禎三年以和與之義、令中分之由所見也、（○中略）次狼藉事、於守護方有其沙汰云々、其上者不及異儀者、依鎌倉殿仰下知如件、

永仁六年二月三日

陸奥守平朝臣（○北條宣時）

相模守平朝臣（○北條貞時）

〔鹿島文書〕常陸國大枝郷給主能親、與地頭野本四郎左衛門尉貞光、并和泉三郎左衛門尉顯助等、相論鹿島社不開御殿仁慈門造營事、（○中略）遷宮于今遲引、而當郷者、地頭給主折中之地也、任先規兩方可勤仕之旨、云度々御敎書、云木田見、大王、藤井、田子共等之例、炳焉之由、能親所申有其謂、爰國奉行人成敗雖區、下地平均課役、可隨分限之條、相叶理致、然者地頭給主共可造進之旨、加催促、急速可被終其功之狀、依仰執達如件、

正中二年六月六日　　散位

〔常陸國總社文書〕常陸國總社造□役所地頭等請文 □

一通 大枝三分二地頭代左衛門三郎請文　一通 小河庵澤兩郷地頭筌戸七郎左衛門尉 □

一通 竹原郷地頭彌七請文　一通 河俣郷地頭次郎太郎請文

一通 上曾郷地頭上曾三郎請文〇中略　一通 弓削田木谷兩郷地頭筌戸四郎左衛門尉 □

一通 野寺郷一分地頭筌戸四郎兵衛尉 □　一通 志筑郷大枝郷地頭筌戸和泉前司 □

一通 筑波社三村□地頭小田常陸前司 □　一通 田余郷地頭常陸大掾請文

一通 大橋郷給主税所左衛門入道請文　一通 吉田社沙汰人臼根三郎入道請文

一通 小幡菅間兩郷地頭藤原氏請文　一通 小井戸郷地頭等請文連署

一通 大橋郷地頭所請文連署　以上十九通

右目六如件

文保三年□□三十日

〔圓覺寺文書一〕渡進 正續院領常陸國推大郷內宮山田地屋敷具書等事〇中略

右渡進之狀如件

元亨四年十一月十日　平光泰花押

〔鹿島文書〕鹿島社大禰宜良親申、常陸國相賀郷正和三年以來神用等事、如去三月十九日陳狀者、每年致其弁帯返抄云々、早逢結解、有未進者、可令究濟之狀、依仰執達如件、

嘉曆三年七月廿五日　相模守

行方中務四郎入道女子

〔鹿島文書〕常陸國行方郡君舍人郷內根地木村事、爲不斷護摩祈料所寄附也、可被致天下安全御祈

禱精誠之狀、依仰執達如件、

康永六年九月十四日　　參河守按高師冬也

鹿島護摩堂長老

〔臨川寺文書〕常陸國東岡田郷。。。地頭職諸岡式部大夫跡所被付臨川寺也、可令知行給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年八月七日　　右兵衛督花押○葉室長光

夢窻上人御坊

〔烟田文書天〕雜訴決斷所牒　德宿彥太郎幹宗所

常陸國鹿島郡德宿郷。。內、鉾田、鳥栖、富田、大和田、四箇村地頭職事、

右當知行、不可有相違者、以牒、

建武元年五月二十四日　　少判事中原朝臣在判

左中辨藤原朝臣在判

〔續常陸遺文八〕常陸國信太莊信太郡下。。。條佐倉郷。。。權現堂○中略免田貳段坊敷畠等事、

右免田畠等者、任去正和三年三月十八日寄進狀之旨、祐海令領掌彼田畠等、可致公私御祈禱精誠之狀如件、

僧祐海所

建武二年八月十五日　在御判

〔相州文書圓覺寺〕奉寄進

常陸國玉作郷。。內田地參町事

右彼田地者、永代所奉寄進先師佛光禪師塔頭正續院也、仍寄進狀如件、

建武貳年九月日　　　　　　　　　　沙彌存孝花押〇土岐賴眞

〔吉田社文書下〕奉寄進虚空藏堂在家等事

合久恒以前堀内壹字、幷東内壹字等者、

四至限東安主彦三郎知行分畠堺、限南禰宜四郎知行分、限西田所恒長知行分畠堺、限北彼堀内後大堀北堺、

安主彦三郎畠引付此内虚空藏堂等有之

右地者、常陸國吉田鄉分内宿戸吉田社權現名内久恒口代相傳之地也、而間彼虚空藏堂佛物錢七貫文請負依不辨、彼錢以件堀内幷東在家等、彼堂限永代所寄進也、〇中略　仍爲後日寄進狀如件、

建武貳年十月十一日　　　　　吉田社大祝大舍人久恒花押

〔鹿島文書〕下河邊左衛門藏人重狀

下河邊左衛門藏人行景言上、欲早被經嚴密御沙汰、御使注進分明上者、重被成下御奉書、破却城墎、被沙汰付下地、全知行常陸國行方郡倉河鄉倉河三郎太郎大、同郡小牧鄉内小牧彌十郎跡事、

副進

二通　御奉書案

右巨細者言上畢、而於倉河鄉者、午賀土用納禮丸押領之、至小牧鄉内小牧彌十郎跡者、小牧彌十郎知行之、各構城墎、擬及合戰之間、不及沙汰付之由、御使注進分明也、然早重作御使被破却城墎、被打渡下地、爲令知行、重言上如件、

文和三年八月

〔田文七〕讓與嫡子佐竹左近大夫將監義香所

一常陸國佐都西郡内太田鄉、

同國久慈東郡内高倉鄉　同國那珂西郡　同國久慈庄　同國多珂庄　同國石崎保　同國那

珂東郡之內戶村之內○中略

右所領等、代々相傳、御下知安堵御下文、御下狀相副了、嫡男美香、仁永代所令讓與也、更不有他妨、但此內庶子等分以同筆而令讓之、此文不可成違亂煩、凡於本知行分者、代々讓公驗分明也、至于新恩地者、悉上方御承知之間、爲後證書置之、所申與御判也、守此旨可令知行、仍狀如件、

文和四年二月十一日　　右馬權守義等在判

右常陸國密藏院所藏文書數紙之中也

〔鹿島文書〕奉寄進鹿島御社常陸國伊佐郡平塚鄕事

右當郡者、先年以一同御下文拜領之訖、而去年應安元閏六月十二日、有公方御寄進之由、社家被申候云々、前後甚之參差之間、雖可申子細、依有崇敬之志、所奉寄附之狀如件、

應安三年六月廿五日　　下野守義政

〔鹿島文書〕高橋鄕百姓足分帳事

一神講田年本主畢作結分筒罒荒野下地、於山野河者、可爲相所務者也、仍定所如件、

至德貳年十二月廿日

東田井鄕百姓足分帳事

一神講田下地、幷山野河、可爲相所務者也、仍定所如件、

至德貳年十二月廿日

〔集古文書四十四寄附狀〕足利持氏寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

寄進　鶴岡八幡宮

常陸國那珂東國井鄕內佐竹左馬助跡事

右去十六日、於社頭、依下人狼藉收公之、爲武藏國津田鄕內放生會料所不足分、所寄附之狀如件、

村里名邑

應永二十七年八月二十日　　左兵衛督源朝臣判

〔鹿島文書〕事、寄₂進鹿島太神宮₁

常陸國眞壁郡白。井。鄕。(義氏)事

右爲₂天下安全武運長久₁、所₂寄附₁之狀如ᴸ件、

應永卅一年十月十日　　從三位源朝臣御□(足利持氏)

〔集古文書〕(四十四寄附狀)應永三十一年寄進狀(相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏)

奉₂寄進₁　鶴岡八幡宮

常陸國北小栗御厨内小。萩。島。鄕。之事

右爲₂家門繁昌武運長久₁、所ᴸ奉₂寄附₁之狀如ᴸ件、

應永三十一年十二月二十三日　　藤原定賴

〔郡名一覽〕常陸國(御料私領)　常州　南北三日　拾壹郡

高九拾萬三千七百七拾八石四斗五升八合　千六百七拾七ヶ村

●水戸　三十里　●土浦　十八里　●笠間　二十八里半

●下館　二十二里半　○府中　二十一里　○宍戸　二十五里

○矢田部　三十六里　○麻生　三十六里　○牛久　十六里

○下妻　二十里　⊠志筑　(二十里 本堂内藏助)　✕∧龍ヶ崎　(仙臺領 一万石)

✕●松岡　(水戸 二万五千石)　中山備前守　✕○生瀨　(同上 一万石)　山野邊主水正

∧眞岡　二十六里　∧上鄕　十七里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕常陸　十一郡、千七百二十三村、

〈御料私領〉高百万五千七百七石四斗八升九合三才　永高二十一貫文

茨木郡三百四村　那珂郡百四十二村　久慈郡百六十二村　多賀郡九十二村

新治郡百七十九村　眞壁郡二百三十四村　筑波郡百七十四村　信太郡八十九村

河内郡百三十村　行方郡八十九村　鹿島郡百二十八村

〔武藏上野國村名帳〕關東村數

常陸國　千九百九ヶ村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

常陸鹿島郡、勝下(カツオリ)村、下津(オリツ)村、國來(クノコキ)村、東下(トウシモ)村、

〔常陸風土記 新治郡〕自郡以東五十里在笠間村、越通道路、稱葦穗山、

〔常陸風土記 信太郡〕郡北十里碓井、古老曰、大足日子天皇〈景行〉幸浮島之帳宮、無水供御、即遣卜者訪占、所所穿之、今存雄栗之村、從此以西高來里、古老曰、天地權輿、草木言語之時、自天降來神名稱普都大神、巡行葦原之中津國、和平山河荒梗之類、大神化道已畢、心存歸天、即時隨身器仗〈俗曰、伊川甲戈〉楯劒、及所執玉珪、悉皆脫屣、留置玆地、即乘白雲、還昇蒼天、〈中略〉古老曰、倭武天皇巡幸海邊、行至乘濱、于時濱浦之上多乾海苔〈俗曰乃理〉由是名能理波麻之村、乘濱里東有浮島村、〈長二千步、廣四百步〉四面絕海、山野交錯、戶一十五烟、里七八町餘、所居百姓、火鹽爲業、

〔常陸風土記 茨城郡〕郡東十里桑原岳、昔倭武天皇停留岳上、進奉御膳、時令水部新掘清井、出泉淨香、飮喫尤好、勅曰、能渟水哉、〈俗曰、與久多麻禮留彌津可奈、〉由是里名謂田餘、

〔常陸風土記 行方郡〕自郡西北提賀里、古有佐伯、名手鹿、爲其人居追著里、其里北在香島神子之社、社周山野地沃、草木椎栗竹茅之類多生、從此以北曾尼村、古有佐伯、名曰疏禰毘古、取名著村、〈中略〉郡南七里男高里、古有佐伯小高、爲其居處、因名、〈中略〉

麻生里、古昔麻生于潴沐之涯、圍如大竹、長餘一丈、周里有山、椎栗槻櫟生、猪猴栖住、其野出筋馬、□飛鳥淨御原大宮臨軒天皇(天武)之世、同郡大生里建部袁許呂命得此野馬、獻於朝廷、所謂行方之馬、或云茨城之里馬非也、

郡南二十里香澄里、古傳曰、大足日子天皇(景行)登坐下總國印波鳥見丘、留連遙望、顧東而勅侍臣曰、海即青波浩行、陸是丹霞空朦、國在其中、朕目所見者、時人由是謂之霞郷、(中略)從此往南十里板來村、(中略)古老曰、斯貴瑞垣宮大八州所馭天皇(崇神)之世、爲平東夷之荒賊、遣建借間命、(即此那賀國造初祖)引率軍士、行略凶猾、頓宿安婆之島、遙望海東之浦、時烟所見、交疑有人、建借間命仰天誓曰、若有天人之烟者、來覆我上、若有荒賊之烟者、去靡海中、時烟射海而流之、爰自知有凶賊、即命徒衆、褥食而渡、於是有國栖名曰夜尺斯、夜筑斯、二人自爲首帥、堀穴造堡、常所居住、覘伺官軍、伏衛拒抗、建借間命縱兵驅追、賊盡逋還、閉堡固禁、俄而建借間命大起權議、校閲敢死之士、伏隱山阿、造備滅賊之器、嚴飾海渚、連船編栰、飛雲蓋、張虹旌、天之鳥琴、天之鳥笛、隨波逐潮、杵島唱曲、七日七夜、遊樂歌儛、于時賊黨聞盛音樂、擧房男女、悉盡出來、傾濱歡咲、建借間命令騎士閉堡、自後襲擊、盡囚種屬、一時焚滅、此時痛殺所言、今謂伊多久之郷、臨斬所言、今謂布都奈之村、安殺所言、今謂安伐之里、吉殺所言、今謂吉前之邑、(中略)

自郡東北十五里當麻郷、古老曰、倭武天皇巡行過于此郷、有佐伯、名曰鳥日子、緣其逆命、隨便略殺、即幸屋形野之頓宮、車所經之道、狹地深淺、取惡路之義、謂之當麻、(俗曰、多支多支斯、)(中略)其南名田里、息長足日賣皇后(神功)之時、此地人名曰古都比古、三度遣於韓國、重其功勞賜田、因名、又有波都武之野、(中略)從此以南相鹿大生里、古老曰、倭武天皇坐相鹿丘前宮、此時膳炊屋舍、構立浦濱、編艀作橋、通御在所、取大炊之義、名大生之村、又倭武天皇之后、大橘比賣命自倭降來、參遇此地、故謂安布賀之邑、

〔常陸風土記香島郡〕郡東二三里高松濱、○中略自此以南至輕野里、若松濱之間、可卅餘里、此皆松山、產伏苓伏神、每年掘之、○中略

郡南廿里濱里、○中略

郡北三十里白鳥里、古老曰、伊久米天皇○垂仁之世、有白鳥、自天飛來、化爲童女、夕上朝下、摘石造池、爲其築堤乎、徒積日月、築之築壞、不得作成、童女等唱曰、志漏止利乃、芳我都都彌乎、都都牟止母、安瓦布麻目右疑、波古叡□斯呂唱歌昇天、不復降來、由是其所號白鳥鄉、

〔常陸風土記那賀郡〕茨城里、自此以北高丘、名曰晡時臥之山、古老曰、有兄妹二人、兄名努賀毗古、妹名努賀毗咩、時妹在室、有人不知姓名、常就求婚、夜來晝去、遂成夫婦、一夕懷妊、至可產月、終生小蛇、明若無言、闇與母語、於是母伯驚奇、心挾神子、卽盛淨杯、設壇安置、一夜之間、已滿杯中、更易瓫而置之、亦滿瓫內、如此三四、不敢用器、母告子曰、量汝器宇、自知神子、我屬之勢、不可養長、宜從父所在、不合有此者、時子哀泣、拭面答曰、謹承母命、無敢所辭、然一身獨去、無人共去、望請矜副一小子、母曰、我家所有、母與伯父而已、是亦汝明所知、當無人可相從、爰子含恨、而事不吐之、臨決別時、不勝怒怨、欲震殺伯父、而昇天、時母驚動、取瓫投之、觸神子不得昇、因留此峯、所盛瓫甕、今存片岡之村、其子孫立社致祭、相續不絕、

〔常陸風土記久慈郡〕自郡西北六里河內里、本名古古之邑、俗說謂猿聲爲古古、○中略

郡西□里靜織里、上古之村、未識織綾之機、未在知人、于時此村初織、因名之、○中略

郡東□里小田里、多爲墾田、因以名之、○中略　其里大伴村有涯、土色黃也、群鳥飛來、啄咀所食、

郡東七里太田鄉、長幡部之社、○中略　自此以北薩都里、古有國栖、名曰土雲、爰兎上命發兵誅滅、時能令殺福哉所言、因名佐都、○中略

所稱高市、自此東北二里密筑里、村中淨泉、俗謂大井、夏冷冬温、湧成川、

〔常陸風土記多珂郡〕古老曰、斯我高穴穗宮大八洲照臨天皇○成務之世、以建御狹日命、任多珂國造、○中略

略建御狹日命當所遣時、以久慈堺之助河、爲道前、（去郡西北六十里、今猶稱道前里、）陸奧國石城郡苦麻之村、爲道後、其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇（孝徳）之世、癸丑年、多珂國造、石城直美夜部、石城評造部志許赤等、請申總領高向大夫、以所部遠隔往來不便、分置多珂石城二郡、（石城郡今存陸奧國堺内、）其道前里飽田村、古老曰、倭武天皇爲巡東陲、頓宿此野、有人奏曰、野上群鹿、無數甚多、其聳角如蘆枯之原、比其吹氣、似朝霧之立、又海有鰒魚、大如八尺、幷諸種珍味、遊理口多者、於是天皇幸野、遣橘皇后、臨海令漁、相競捕獲之利、別探山海之物、此時野狩者終日驅射、不得一宍、海漁者、須臾才採、盡得百味焉、獵漁已畢、奉羞御膳、時勅陪從曰、今日之遊、朕與皇后、各就野海、同爭祥福、（俗語曰佐知）野物雖不得、而海味盡飽喫者、後代追跡名飽田村、

〔新編常陸國誌（都邑二十五）〕水戸（美登）

水戸ノ地ハ、古ヘ那珂郡ニ屬シテ、常石、吉田二鄕ニ跨レリ、中世吉田郡ノ起ルヤ、其内ニ入リ、郡廢スルニ及ビテ、永ク茨城郡ノ所管トナル、初大掾氏ノ此地ニ據ルヤ、士人ヲ延テ邸宅ヲ與ヘ、商賈ヲ招キテ市廛ヲ開ク、水戸ノ市街、蓋コヽニ始ル、大掾子亡ビテ、江戸氏之ニ代リ、江戸氏衰ヘテ佐竹氏之ヲ領シ、大ニ舊模ヲ改メ城市ヲ廣ム、是ヨリ水戸ノ名漸ク世ニ著ハレ、水戸侯ノ稱天下ニ聞ユ、水戸侯出羽ニ徙ルニ及ビテ、永ク德川氏ノ治所トナリ、益境域ヲ加ヘテ、稱呼ヲ更メ、區畫ヲ正シテ士庶ヲ別チ、國中第一ノ都邑トナル、凡街衢ヲ大別シテ二トナシ、一ヲ上町ト云ヒ、一ヲ下町ト云フ、其地、南ハ千波湖ニ臨ミ、北ハ那珂川ヲ帶ビ、東ハ濱田、細谷ノ二村ニ連リ、西ハ常葉村ノ地ニ錯シテ、中央ニ水戸大城アリ、以テ上町下町ノ分界ヲ爲セリ、（天和三年ノ町方傳馬定法書ニ、杉山ヤライ御門、御三階下ヤライ御門ヨリ西ハ上町、東ハ下町トアリ、）

〔新編常陸國誌（都邑二十九）〕土浦（都知宇良）

土浦ハ、古ヘ河内郡大村鄕ノ内ナリシガ、（一說、茨城郡大津鄕ノ地ナリトス、）後郡鄕ノ變改ニヨリ、遂ニ新治郡ニ屬セリ、元祿鄕帳ニ、新治郡東崎町、中城町トアルモノ即是ナリ、傳言フ、平將門始メテ城ヲ此地ニ築キ、大掾氏ノ支族之ニ代リ、後又今泉、菅谷、結城、松平、西尾

諸城主ヲ經テ、慶安二年ニ至リ、朽木氏ノ居城トナル、萬治元年城ノ西南郭外ナル民屋ヲ、田宿町ノ背ニ移シテ裏町ト云ヒ、其舊址ニ奴卒ヲ置キ、足輕町ト呼ベリ、後外西町ト云フモノ卽是ナリ、○中略

○笠間。加佐麻　笠間ハ、佐白山ノ西麓ニ在リ、古新治郡ニ屬シ、中世笠間郡ニ入リ、西那珂郡ニ轉ジ、後終ニ茨城郡ニ隸ス、元祿郷帳ニ、茨城郡上市毛村アリ、笠間ハ卽其中ナリ、初メ元久中、藤原時朝下野ヨリコノ地ニ移リ、城ヲ佐白山上ニ築キ、遂ニ笠間氏トナル、子孫繼ギ承ケ、十八代ヲ歷テ、天正十八年ニ至リ亡ブ、ソノ後蒲生、松平、永井、淺野、井上、本庄諸氏相續ギテ此處ニ居リ、元文二年ヨリ永ク牧野氏ノ城市トナリ、屢改修シテ區畫大ニ定マレリ、町數凡二十餘、大町、愛宕町、高橋町、荒町、新町、裸町等ハ、商賈居住ノ町ニテ、戶數凡三百四十八、鷹匠町、座頭町、鐵炮町、日向片町、日蔭片町、田町、大和田、櫻町、五騎町、檜町、四谷、御旗前、表町、裏町ハ諸士ノ住地ニテ、其戶數凡ソ三百六十アリト云フ、○中略

○下館。之毛陀底　下館ハ、古新治郡伊讃郷ノ地ナリ、後世伊佐郡ニ入リ、遂ニ定メテ眞壁郡ノ所管トナル、元祿郷帳ニ所謂、眞壁郡西郷谷村、田中村、交會ノ地ニシテ、東ハ勤行川ヲ帶ビ、稻野邊、市野邊、下中山諸村ニ界ヒシ、西ハ菅谷、外塚、西谷貝三村ニ接シ、南ハ下岡芹、二木成、西芳町三村ニ隣リ、北ハ岡芹村ニ連リテ、東西三十丁、南北三十三町アリ、其市中ハ、東西十町、南北十二町ニ餘レリ、下館城主記ヲ案ズルニ、長享文明ノ間、水谷伊勢守勝氏、城ヲコノ地ニ築ヅキ、子孫連綿、寛永十六年ニ至リテ他方ニ移レリ、後松平、增山、黑田諸城主ヲ經テ、享保十七年ヨリ、長ク石川氏ノ城市トナル、天明中ノ舊記ニ據ルニ、市中凡十ケ町アリテ、大町、西町、藥師町、荒町、片町、田町、金井町、裏町、外ケ町、櫻町ト云フ、戶數三百六十五、人口千七百六十二人、但大町、西町、藥師町、荒町、片町ノ戶數ハ二百十七ニシテ、人口ハ千百四十七人ナリ、アリシト云フ、

莊保

〔類聚名物考地理四十八〕朝來。。いたこ　常陸國

朝來の訓は、朝をあしたと訓を、あいたとも通はせるを、上のあを略けるなり、朝所を古訓にあいだんどころといへる例に同じ、近來その文字の訓意を心得かね、かつは文字の雅なるにつきて、潮來と書人もあり、南郭文集に、劉禹錫が竹枝詞にならひて、潮來詞五絶二十首あり、風體絶妙なるに依て、人いよ〳〵その文字を用ゆ、又近頃水戸藩臣森尙謙が儼塾集を讀に、元祿己巳季夏下旬、始從相公巡行水戸、時の詩に、潮來の七絶有り、潮字を用ゐたり、さらばその頃にも此事有りしにや、但潮をいたと訓事は心得がたし、

儼塾集六泛河至潮來、舊作板久、漾々青波數十程、泝流蘭槳擊空明、風輕忽到常州境、洗雨松林蒼不成、

〔常陸紀行〕行方郡に板來(いたこ)村あり、今潮來といふ、國學者云、潮來は朝來なり、朝來(あしたくる)の反切イタコなりと、朝來は、和名抄に板來と見ゆ、今本作板、誤なり風土記にも板來と云、板來の古名如此明了なるを、彼此の反切を論せる蛇足なるものなり、

〔新編常陸國誌莊保二十二〕庄ハ庄田ナリ、中略當國ニテハ、將門記ニ石田庄ト見エタルヨリ古キハナシ、其次ニハ東鑑文治四年三月十七日ノ條ニ鎌倉ヨリ諸國庄園ノ事ニ就テ京都ニ申サルヽ事書、中略同年六月四日勅答ノ事書ニ、八條院御領、常陸國村田、田中、下村、志太庄、早可被仰含候也ト見ユ、

〔吾妻鏡八〕文治四年三月十七日癸丑、付庄々有被申條事、先々雖令申給、未無左右仰云々、仍重被驚事書云々、中略

一常陸國村田。田中。下村。等庄事、

或安樂壽院領云云、或八條院御領、年貢可沙汰何御倉候哉、

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月十二日辛巳、小山左衞門尉朝政、先年募勳功、浴恩澤、常陸國村。田。下。庄。也、而今日賜政所御下文、其狀云、

將軍家政所下　常陸國村田下庄（下妻宮等）

補任地頭職事

左衞門尉藤原朝政（○中略）

建久三年九月十二日　案主藤井（○下略）

〔吾妻鏡二十〕建曆二年六月十五日己丑、常陸國吉。田。庄。地下沙汰人等、濫妨本所々務、且任去文治二年閏七月二十五日故右大將家御下知、爲關東御沙汰可被付彼下地於本所之旨訴申之間、爲廣元朝臣奉行有評議、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年（○嘉祿元年）九月十二日庚午、故大夫判官光秀遺領事、有其沙汰、彼子息四郎秀村等拜領之常陸國鹽。籠。庄。元和田平太知行之云云、

〔常陸國太田文〕（端闕）

同宿内永江六丁八段三百歩　同宿内林十九丁一段半　同宿内小佐三丁四段大　同宿内保立十丁九段六十歩　同宿内山上二丁　同宿内行野二十五丁八段小　同宿内安宗名七丁三段小　下宿内守眞名二丁二段半　下宿内久清二十五丁三段半　同宿内國忠名三十丁八段三百歩　同宿内阿前十三丁五段　同宿内宮武吉名十三丁七段小　同宿内貞國名七丁三百歩　同宿内國正名三十二丁九段小　同宿内猿小河八丁五段三百歩　同宿内五郎丸三丁六段小　同宿内平濱三十丁七段小　同宿内高濱七丁六段六十歩　同宿内筒井三丁五段　同宿内泉河三丁五段　同宿内矢田部十五丁四段小　同宿内矢田葦前三丁　同宿内島前五十七丁三百歩　北條德宿鄕五十四丁八段三百歩　同鄕神谷戸五十九丁少　同宮田鄕五十六

丁九段少　十八丁一段六十步　古河
白鳥郷内中務四郎跡　三十三丁二段少
　二十七丁五段　志筑武家村以下在之
同郷内家吉米遠　十六丁八段三百步
同郷内家吉武國　十六丁四段
同郷内　七丁九段大
下妻庄三百七十町
東郡
吉原四丁三段小　福原十八丁六段小　稻田社十七丁小　赤澤十四丁一段半鹿島神領
野尻二丁二段小　本殿二十丁五段　大廐省保五十一丁二段大　大渕九十四丁二段六十
步　黒栖四十二丁五段　方庭四十七丁三段　石井原七丁八段　大廐庄五十一丁二段大
中郡庄三百八十二丁六段小
眞壁郡
長岡十五丁二段六十步　谷貝十五丁　龜隈二十三丁四段六十步　細柴三丁　一木二丁
八段　紀三郎名三丁二段　伊佐々五丁一段　山野宇十二丁　山田二十二丁　羽鳥十三
丁一段三百步　椎尾國貞十丁三段　同貞則十八丁八段　同助貞十一丁二段　塙世六丁
四段三百步　中村四丁四段小　源法寺六丁一段　窪八丁五段六十步　田村十町　白井
廿丁大　櫻井十七丁　大國玉社三十丁九段大　大曾禰百十二丁四段六十步　光行五十
四丁二段大　松久五十八丁一段大　小幡四十二丁七段　竹東八丁二段六十步
伊勢御厨小栗保三百二十丁

西郡南條百八丁五段三百步
同伊佐北條九十九丁六十步
以東四十八丁大　以西五丁一段半
筑波北條三百四十八丁一段
郡分百十丁一段半
大澤三十七丁犂。分。保。　國松五十七丁一段三百步　隆得三十四丁六段　石前廿二丁五段
三百步　酒依三十丁五段大　熊。野。保。　筑波社五十六丁六十步　本納廿四丁五段大　加納
三十一丁四段六十步
同南條粟野廿四丁五段大
河內郡廿七丁七段半
足高一丁八段大　酒島一丁一段半　大井四丁一段六十步　小茎二丁半　鷲栖一丁七段
羽原一丁九段大　岡見一丁八段　蒲田八段三百步　遠山二丁二段　田却三丁七段
南。條。方。穗。庄。九十一丁二段
村。田。庄。二百六十町　田。中。庄。五百丁　大。井。庄。七十二丁一段　信太東二百七十丁二段大　信
太庄六百二十丁內
北郡二百七十二丁四段六十步內
河俣二十一丁六十步　大多良一丁二段　柿岡三丁九段　菅間七丁三段大　上曾十三丁
小　田子共四十四丁五段大　瓦屋七丁二段小　吉生十一丁七段半　大增尾六丁六段
大田七丁一段三百步　小瓦四丁　高倉十二丁　片岡四段半　金差十一丁六段半　林十
一丁　宇治會十八丁三段　村上二丁四段三百步　片野三十二丁九段　沼田六丁二段大

青田五十丁　横山尻太　小幡三丁　加納二十丁
小。鶴。庄。四百丁
南野牧千百九十一丁九段大
南郡
小河四十一丁一段　志筑三十七丁五段　大枝十三丁大　田木谷十二丁八段半　小井戸七丁八段　野寺十丁　野田一丁四段大　竹原十五町　田余七十三丁七段　上吉影六丁五段半　下吉影十一丁五段半　荒張一丁一段　大谷六丁　土田一丁一段三百歩　高濱田四丁二段　壟橋一丁八段　市河七丁　松延九段半　國分寺十三丁　府郡分六十一丁九段三百歩
在廳名百五十四丁四段三百歩
常安佐谷二十七丁　稻久二十八丁七段六十歩加茨城定　石光三丁六段三百歩　稻貞八丁二段三百歩　米吉五丁九段三百歩　石宗十六丁二段　香丸三丁　金丸三丁五段　稻國七丁五段三百歩　元久四丁小　稻富三段　延吉三段　恒岡二丁三段
別名
福眞三丁五段　三郎丸五丁　大橋十四丁七段半　弓削十八丁三段大　柴高一丁七段六十歩　子野代二丁三段六十歩　久吉二丁一段
一奥郡
多珂郡百五十三丁四段三百歩　久慈東三百八十丁二段半　同西二百四十八丁八段百四十歩　那珂東百四十五丁七段三百歩　安福四十二丁一段半　中村七丁九段六十歩　田谷東方十五丁　同田谷西方十五丁　青柳十丁　枝河九丁六段　津田十二丁　今泉十一

丁
那珂西百五十二丁五段小
佐都東二百八十九丁八段三百歩
東岡田十五丁　西岡田十丁　根本四丁　大森七丁　泉三十五丁　今泉十五丁　千根二丁　波田三十五丁　小澤五十五丁三段半
佐都西二百五十六丁三段小
小野崎十八丁半　中小野崎四丁五段　阿久津八丁五段　小野二十三丁二段　西河内五丁二段三百歩　吉津三丁　磯部十六丁二段大　石神十一丁五段　鎌田三丁
東河内五丁一段小　額田八十一丁半　大田白岩八十丁三段小
世谷四十二丁二段六十歩　大橋加津見澤十丁　國°井°保°二十六丁五段大
右弘安二年作田總勘文、大略注進如件、

〔田文 一〕筑前殿よりの田文案内
注進　常陸國造伊勢口宮役夫工米田數事
合壹段別壹升四合定
奥郡　千五百九十町六段六十分〇中略
一鹿島郡　六百三十八丁九段大〇中略
一吉田郡　二百二十三丁一段〇中略
一東郡　三十七町〇中略
一同°大°藏°省°保°六十六丁十一反〇中略
一中°郡°庄°　二百八十三丁一反小

一眞壁郡　四百十七町半略○中
一西郡南條　百八丁五反三百分
一同北條九十九丁一反六十分略○中
一筑波北條　三百二十三丁四反小略○中
一南。條。方。穗庄。六十四丁四段半　一下。妻。庄。　三百七十町　一同。加。納。田。中。庄。五百丁　一村。田。庄。二百六十町　一河内郡　二十七丁七反半　一大。井。庄。七十二丁一反河内郡内也　一信田東　二百七丁二反大　一信。田。庄。　六百二十町略○中　一小。鶴。庄。　四百町　一南。庄。　六百五十町　一北郡　二百七十二丁四反六十歩略○中　一南郡　二百九十二丁七反大略○中　一在廳名　百五十四丁四段三百分略○中　一行方郡　三百三十町八反三百分略○中　一同加納百四十六丁三反　一勅免地　吉田社　百五十八丁六反半　橘　二十五丁七反　國分寺十三丁
　此外　伊勢御厨小。栗。保。　三百二十丁
　嘉元四年八月十日　稅所平
　大掾平
　目代前加賀守

〔東寺百合古文書玉〕最勝光院
注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事略○中
一常陸國
　成。田。庄。　領家持明院佐兵衛督
　本年貢國絹百疋　綾被物二重內七月御八講一重八月御忌一重　閏月兵士三人　近年以色代五貫

文進濟之、減濟之年記不存知之、　近年代錢絹代六貫文、二ヶ月被物代一貫四百文、外無濟、
右就所見、注進如件、凡近年背先例、不被成返殘於執事公文間、御年貢濟善事、委不存知之、

正中二年三月日　　公文左衛門少尉大江

〔臨川寺文書〕常陸國佐都莊、同國東岡田鄉、同國西岡田鄉、加賀國富永御廚、
右所々爲臨川寺領、可令管領給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月二十三日　　左少辨花押

疎石上人御坊

〔壺簡集殘編一〕野見國右衛門藏
常陸國中郡庄事、度々軍忠異于他上、構城郭致忠節之間、自將軍家被仰下程、所被預置也、仍可被所務之狀、依仰執達如件、

建武三年十月廿八日　　源花押〇斯波家長

小山大後家殿

〔東寺文書樂一ノ八〕山城
當寺領〇中略信太庄〇中略等、任後宇多院御起請、廳御下文、院宣、知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月八日　　參議花押〇四條隆蔭

謹上東寺供僧學衆御中

〔樂王院文書〕注進菅生庄本鄉五町別半分御免名寄事
合五町別田貳拾漆丁八段小四十分　錢貳十六文　反別白米一合五才　籾八合　定〇中略
右注進之狀如件

藩封

暦應貳年二月日

〔常陸紀行〕久慈郡北部を依上(ヨリカミ)保内の郷といひて、昔時は二十四ヶ村なりしが、今は四十二ヶ村となれり、塙村に寄上(ヨリカミ)明神あり、今寄上の古名此に存せるのみなり、佐竹興義の二男依上三郎宗義なるもの見えたり、蓋し此地昔時依上氏の食邑せしにや、土俗いふ、大子と大津と同村にして、今は兩村となる、又上澤と高岡と同村なりしと云へり、下谷田中有田冥賀も同村なるよし、谷田は谷端ともいひしとぞ、下野宮近津社保内郷の總鎭守にして、二十四ヶ村へ年兩度神輿出御し、大祭禮あり、往古の舊例ありて二十四ヶ村に出御し來れり、今を以てむかしを知るに足れり、

〔慶應元年武鑑〕水戸中納言慶篤卿樣 正三位 元治元子五月被任　三拾五万石　御在城常陸茨木郡水戸　江戸ヨリ三十里

當國者佐竹左中將義宣居、慶長七、武田万千代君、同八、德川常陸介頼宣卿、紀州和歌山ニ移、同十四、水戸中納言頼房卿、以後代々被領之、

土屋釆女正寅直 雁間 四品 嘉永三戌九月叙　九万五千石　居城常州新治郡土浦　江戸ヨリ十八里

慶長六、松平伊豆守信一、同安房守信吉、元和三、西尾丹後守忠長、同丹後守忠照、慶安二、朽木民部少輔植綱、同伊與守秀植、寛文九、土屋但馬守數直、同相模守政直、延寶元、松平因幡守信興、貞享十五ヨリ再土屋相模守、政直、以後領之、

牧野越中守貞明 溜間次 四品 元治元子十一月叙　八万石　居城常州茨城郡笠間 江戸ヨリ土浦通二十八リ、守屋通二十入リ、下館通二十九リ、古河通三十一里、

慶長六、松平周防守康重、同七、松平丹後守重貞、元和二、永井右近大夫直勝、同八、淺野釆女正長重、同内匠頭長直、正保二、井上河内守正利、同中務少輔正任、元禄七、本庄因幡守宗資、同安藝守宗俊、遠州濱松エ替、元禄十五、井上河内守正岑、同河内守正之、同河内守正賢、延享四ヨリ牧野備後守貞通、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕松平播磨守頼縄 大廣間 従四位侍従 天保四巳十二月任　二万石　御在所常州新治(ニイハリ)郡府中(フチウ)　江戸ヨリ二十里

元禄年中ヨリ領之

石川若狹守總管 雁間 朝散大夫　二万石　居城常州眞壁郡下館　江戸ヨリ古河通　二十二里半

城主水谷左京大夫勝俊、同伊勢守勝隆、寛永十八松平左京大夫頼重、同十九、御番城、城附三千石増山彈正忠利澄、同兵部少輔利須、元禄十五、井上大和守正岑、同十六黒田豐前守直邦、享保十七石川近江守總茂、以後領之、

田數石高

山口長次郎（菊之間朝散大夫）□　一万十七石　在所常州河内郡牛久（ウシク）　江戸ヨリ十六里

（慶長年中ヨリ山口氏代々領レ之、○節略）

〔慶應元年武鑑〕松平大炊頭賴德　一万石　御在所常州茨城郡宍戸（シヽド）　江戸ヨリ二十五里

（天和二年ヨリ領レ之）

井上伊豫守正棄（菊之間朝散大夫）　一万石　在所常州眞壁郡下妻　江戸ヨリ二十里

（正德二ヨリ當所井上氏新領レ之、）

新庄容丸（柳間）□　一万石　在所常州行方郡麻生（アサフ）　江戸ヨリ三十六里

（當所寬永年中ヨリ新庄氏代々領レ之、○節略）

〔倭名類聚抄（五國郡）〕常陸國（○略）註管十一（田四萬九十二町六段百十二歩）

〔海東諸國記〕常陸州　郡十四、水田四萬九千九町六段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕五十三万石　常陸

〔和漢三才圖會（六十六常陸）〕十一郡　高七十五万三千六百石餘

〔新編常陸國誌（七建置沿革）〕補、元祿三年十月、世子綱條（字九成、號黑山、）嗣、二十八萬石ヲ食ム、（綜貫）五年使役六十員ヲ增置ス、十四年五月、封内墾田七萬石ヲ以テ原封ニ加ヘンコトヲ請ヒ、是ニ至テ許サル、前ニ通ジテ三十五萬石トス、（家乘綜貫）十月、義公肖像ヲ久昌精舍ニ安置ス、（家乘）十五年四月、常陸國圖成ルヲ以テ、之ヲ幕府ニ進ム、凡テ十一郡、總高九十萬三千七百七十八石四斗五升八合、永都合二十一貫文、村數千六百七拾七邑、正保二年ノ改高ニ指引六萬貳千九百七拾六石六斗二升九合一勺高過ス、幕府藏入御代官九人領主三百二十七人、御朱印寺社三百七十八箇所、此高壹萬百五十九石一斗八升三合、一國分此内二千二百五十三石六斗ハ水戸領ナリ、（探舊考證）

〔官中秘策（三）〕常陸國　十一郡（○中略）

一石高九拾万三千七百七拾八石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調○中略

常陸國（御料私領）一（高百万五千七百七石四斗八升九合三才／永高貳拾壹貫文）

出擧稻

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻○中略

常陸國正税公廨各五十万束、國分寺料六万束、大安寺藥師寺料各五万束、文殊會料二千束、藥分料一万束、交易料卌二万束、大學寮料五万四千束、修理池溝料四万束、救急料六万束、俘囚料十万束、

〔倭名類聚抄國郡五〕常陸國管十一（正公各五十萬束、本稻百七十九萬六千束、雜稻七十九萬六千束、）

○按ズルニ、延喜式ニ據レバ、雜稻七十八萬六千束ナリ、此書擧グル所ト一萬束ノ差アリ、

國產貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀○中略　常陸國（一万二千石○中略）

年料別貢雜物○中略　常陸國（筆三百管、麻子七斗、○中略）

諸國貢蘇番次○中略　常陸國廿壹（十口各大一升／十口各小一升）　右六箇國爲第二番○寅申年中略

交易雜物○中略　常陸國（絁一百疋、布四千端、商布一万三千段、庸布七百段、鞍橋十具、韉廿具、履料牛皮九張、鹿皮廿張、洗革一百張、鹿角十枚、席六百枚、紫草三千八百斤、大瓢十口、楡子四合、）

〔延喜式主計二十四〕常陸○中略　右十一國熊綵○中略

常陸○中略　右十國綸絁○中略

常陸國（行程上卅日、下十五日、）

調、緋帛七十疋、緋纈絁卅疋、紺帛七十疋、黃帛一百六十疋、絁一千五百廿五疋、長幡部絁七疋、倭文卅一端、自餘輸絁暴布、　庸輸布、　中男作物、麻四百斤、苧、紙、熟麻、白暴熟麻、紅花、茜、麻子、腊、鰒、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥○中略

常陸國廿五種　靑木香卅斤、桔梗六十斤、蒿鷄、大戟各七斤、前胡四斤、枸杞十四斤、獨活二斤、蜀椒五

斤、白朮廿斤四兩、藍漆七斤、龍膽五斤十四兩、杜仲八斤、白芷五斤、白頭公一斤、茯苓百六十六斤、當歸二斤十兩、甘草廿五斤十三兩、黃耆四斤、狼牙一斤九兩、干地黃一斗三升、署預二升、麥門冬六升、桃人二斗三升、附子一斛、蛇床子二斗七升、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略常陸綾、

〔毛吹草三〕常陸

當歸　比鮫　蓑和田鯉極月下旬唯一日取江戸ニ多出來スルナリ、　水戸浮龜魚也　錢新鑄始ト云　筑波山著木　佐竹

大方　小椙原

〔續日本紀一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金青、○中略常陸國○中略朱沙、

〔續日本紀六元明〕和銅七年正月甲申、令相模常陸上野三國始輸絁調、但欲輸布許之、

〔續日本紀十二聖武〕天平八年五月辛卯、諸國調布、長二丈八尺、闊一尺九寸、庸布長一丈四尺闊一尺九寸、爲端貢之、常陸曝布、○中略依舊貢之、

人口

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年七月戊寅、常陸國那賀郡人文部龍麻呂、占部小足、獲白烏、

〔文德實錄九〕天安元年二月己丑、是日改元爲天安元年、緣美作常陸二國獻白鹿連理之瑞、○中略宣制曰、○中略維齊衡三年十月廿日爾、常陸國木連理乎獻、○中略宜復美作常陸二國百姓當年徭役廿日、就中、瑞祥所出、重以優矜、苫田郡作○美調、眞壁郡庸、今年可輸幷皆免之、

〔官中秘策三〕常陸國　十一郡○中略

一人數六拾五万五千五百七人　內　三拾六万千貳百四拾六人男　貳拾九万四千貳百六拾壹人女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調○中略　文化元甲子年

御料私領

一人數四拾八万五千四百四拾五人　內　貳拾五万九千五百貳人男　貳拾貳万五千九百四拾三人女　高九拾万三千七百七拾八石餘　常陸國

常陸國　高百万五千七百七石餘

弘化三丙午年諸國人數調〇中略

御料私領一人數五拾貳万千七百七拾七人

内　貳拾六万九千八拾貳人　男

　　貳拾五万貳千六百九拾五人　女

風俗

〔人國記〕常陸國

常陸國之風俗、如形不可然而、唯盗賊多シテ、夜討推込辻切等ヲシテ、其惡事顯レ罪科ニ行ハル、トイヘドモ、耻辱トモ且テ不思、結局至其子孫ニハ、病死ナドハ不爲ナド、一ツノ系圖ニ而、盗賊スルヲ微塵モ非義非禮ト云事ヲ不知ヤウノ風儀ニテ、唯肝膽之間、遲ク生レ付テ如此ト見ヘタリ、武士之風儀モ是ニ不替而、道理ヲ知ル人少シ、タトヘ知トイヘドモ、我意ニマカセテ執行、故ニ理ニ似タル無理、義ニ似タル不義ノミ多而、更ニ善ト雖云、世之唱フルニモ、常陸國ヲ差而全キ人ナキ國ト呼リ、昨日味方ニテ今日ハ敵ト成ノ風儀ハ、千人ニ、一人モナシ、若シ國風之垢ヲケブル人アラバ、天下ニ名ヲ呼程之者ナルベシ、

名所

〔日本鹿子　七〕同國〇常陸名所之部

鹿島宮　縁記草創、くはしくは神社の部に有之也、

　常陸なる鹿島の宮の宮柱猶万代も君がためとか

鹿島か崎　かしま郡の海邊なり

　霰ふるかしまが崎の浪高み過てやゆかん戀しきものを

筑波山　當國の海邊にある山なり、觀音の靈地也、

　今はとて心つくばの山みれば梢よりこそ色かはりけれ

水無能川　櫻川　右ふたつの川ひとつ流なり、水上をさくら川といひ、すそを水無能川といふ

　といへり、此所明神の宮井山の上に立給ふ、櫻の木多し、依之櫻川と云といへり、川はふもとを

流るなり、小川なり、後撰戀の歌に陽成院、

筑波根の嶺より落るみなの川戀ぞつもりて淵と成ける

霞山　霞崎　霞の里　ひとつ所也

昨日まで染し氣色を引かへて明る霞の山ぞのどけき

ほのかにもしらせてしがな東なるかすみの浦の海士のもしほ火

足雄山　雫(シヅク)の森　御牧(ミマキ)　戀瀬川

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒〇中略　常陸國二百人〇中略

諸國器仗〇中略　常陸國甲六領、横刀廿口、弓六十張、征箭六十具、胡簶六十具、

〔日本書紀持統三十〕元年三月己卯、以投化高麗五十六人、居于常陸國、賦田受稟、使安生業、

〔續日本紀聖武九〕神龜元年三月庚申、定諸流配遠近之程、〇中略常陸〇中略國爲遠、

〔萬葉集東歌十四〕筑波禰乃爾比具波麻欲能伎奴波安禮杼、伎美我美家思志、安夜爾伎保思母、

或本歌曰、多良知禰能、又云安麻多伎保思母、

筑波禰爾、由伎可母布良留、伊奈乎可母、加奈思吉兒呂我、爾努保佐流可母、

右二首、常陸國歌、〇中略

相聞

筑波禰乃、禰呂爾可須美爲、須宜可提爾、伊伎豆久伎美乎、爲禰氏夜良佐禰、

伊毛我可度、伊夜等保曾吉奴、都久波夜麻、可久禮奴保刀爾、蘇提婆布利氏奈、

筑波禰爾、可加奈久和之能、禰乃未乎可、奈岐和多里南牟、安布登波奈思爾、

筑波禰爾、曾我比爾美由流、安之保夜麻、安志可流登我毛、左禰見延奈久爾、

筑波禰乃、伊波毛等杼呂爾、於都流美豆、代爾毛多由良爾、和家於毛波奈久爾、

筑波禰乃、乎氐毛許能母爾、毛利敝須惠、波播己毛禮杼母、多麻曾阿比爾家留、

左其呂毛能、乎豆久波禰呂能、夜麻乃佐吉、和須良延許波古曾、那乎可家奈波賣、

乎豆久波乃、禰呂爾都久多思、安比太欲波、佐波太奈利奴乎、萬多禰天武可聞、

乎都久波乃、之氣吉許能麻欲、多都登利能、目由可汝乎見牟、左禰射良奈久爾、

比多知奈流、奈左可能宇美乃、多麻毛許曾、比氣波多延須禮、阿杼可多延世武、

右十首、常陸國歌、

古事類苑

地部十五

近江國

近江國ハ、アフミノクニト云ヒ、舊クハチカツアフミノクニトモ云ヘリ、東山道ニ在リ、東ハ伊勢、美濃西ハ山城、丹波、南ハ伊賀、北ハ若狹、越前ニ界シ、東西凡ソ十二里、南北凡ソ十九里、中央ニ琵琶ノ大湖アリテ、山水頗ル明媚ナリ、謂ユル近江八景ハ、其湖邊ヲ環レリ、此國ハ古ヘ國府ヲ栗太郡ニ置キ、滋賀、栗太、甲賀、野洲、蒲生、神崎、愛智、犬上、坂田、淺井、伊香、高島ノ十二郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、明治維新ノ後、淺井郡ヲ分チテ東淺井、西淺井ノ二郡トナシ、更ニ西淺井郡ヲ伊香郡ニ併セ、新ニ大津市ヲ設ケ、滋賀縣ヲシテ一市十二郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕近江知加津阿不三

〔運歩色葉集阿〕近江

〔書言字考節用集二乾坤〕淡海（アフミ）（アハ）上古謂近江爲淡海、故不比等薨後、封近江國侯、謚淡海公、

〔古事記上〕次大山上咋神、亦名山末之大主神、此神者坐近淡海國之日枝山、

〔倭訓栞前編一阿〕あふみ　江をよめり、近江遠江の類也、淡海の義はう反ふ也、和名抄に近江ちかつあふみと見えたるを、今あふみとばかりいふは略せる也、

〔古事記傳七〕淡海は、息長帶比賣命段歌に、阿布美とあり、和名抄に、近江知加津阿不美とあるは、遠江に對へて、後に云る名にして、古も今も常には近江と書ても、たゞ阿布美と云なり、さて此は湖

ある故の名にして、即阿波宇美の切まりたるなり、淡海とは、潮ならぬ淡しき海を云なりさて其に湖の名なれば、其國をば淡海國とは云べけれど、淡海とのみ云ては、國ノ名には非るが如くなれども、本を以てやがて末の名にすることも、他にも常に例おほきことなり。

〔諸國名義考上〕近江

和名抄に、近江知加津阿不三、國府在栗本郡、名義は淡海なり、この國に大湖あるゆゑに負せたる名なり、續日本紀、元正天皇養老元年九月丁未、天皇行幸美濃國、戊申、行至近江國、觀望淡海とある淡海は、則大湖をさして云るにて、此國の名義なり、さるを近つ淡海といへるは、遠つ淡海に對へたる名なり、古事記傳に、遠江に對へて、近つ淡海とはいへども、古も今も、常には阿不美とみの言り、故師は、古事記に近字あるは、後人の加へたるかと云れたり、云々とあり、さもあるべし、國造本紀には、遠江をば遠淡海と書れど、近江はたゞ淡海とのみ書り、藤原不比等公薨去の後に、近江國に封て、謚を字音にて淡海公と賜ひしにても、いにしへ淡海の字を用られしことゝ玄らる、されば阿波宇美と唱へしことうつなくおもはる、

〔近江國輿地志略二建置沿革〕夫以は、近江國舊淡海の國と號す、舊事紀に出たり、衆山東西に峙、中に大水を湛、殆海のごとく水淡し、故に名づく、或は佐々浪の國といふ、樂浪、或は佐々名實の文字につくる、倶に假名文字なり、佐々は小少の名にして、ちいさきの義なり、小き蟹をさゝがにといふ、小さき石をさゞれ石といふ、少しく夜のふくるを小夜ふくるといふがごとく、さゝは少しきなり、此湖の浪少しくして、大海の浪のごとくあらざる、そのいひなり、顯昭もさゝ浪、さゝら浪はみなちいさき波の名なりと玄るせり、淡海國、佐々奈實の國、みな湖水あるによりての號なり、天智天皇都を大津に遷させたまひ、湖の皇都に近くあるをもつて、改て近江國と號したまふ、湖は江なり、遠江の國に對して名づけたまふといへり、古事記に、近淡海國、遠淡海國の名を載たり、今按するに、元明天皇の後、近淡海の文字を近江國の字にあらためさせたまふなるべし、今訓じてあ

ふみといふ、あふみはあはうみなり、はうの反ふと反る故、今あふみとかけり、俗間今江州といひ、近州といふ、文人詩客詞章をつくり、簡牘を裁する者、みなこれをもちゆ、甚しき誤なり、近江國の號は、詔に出てより、歷朝革ることなき嘉號なり、然るを私に近州江州の號をよぶこと、彼西土の禹貢天下を九州に分てるに擬せんと欲せるこゝろなるべし、釋虎關元亨釋書を著し、もつはら州の字を用、是より流例となる、江州のごときは其意なしとすべからず、近州のごときに至ては、全く意義なし、俗習の久しきとはいへども、改むべきことなり、

〔日本書紀 繼體 十七〕二十四年、是歲毛野臣被召到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、比攞哿駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿符美能野、愷那能倭倶吾伊、輔曳府枳能朋樓、

〔萬葉集 一 雜歌〕過近江荒都時、柿本朝臣人麿作歌、○中略

石走、淡海國乃、樂浪乃大津宮爾、天下、所知食兼、天皇之、○下略

〔冠辭考 二 伊〕いはゞしの　まぢかき　あふみ○中略　かみなび

卷一に、石走淡海國乃、また磐走、淡海乃國之云々、○中略いはゞしのあはひといふを、あはうみのあはにいひかけしなるべし、あふみは本阿波宇美なるを、波宇を約むれば布となる故に、阿布美といふめれば、その本の語にいひかけつらん、○中略かく曲かにいひかくるぞ、冠辭のならひなりける、或說に、田上の邊は、瀧ち落る水の瀬の上を走るなれば、石走淡海といふといへるは、ゆくりなく聞てはさも有ことゝおもはるれど古への冠辭のもとづき樣、さる事にあらず、

〔淺井三代記 一〕永正亂の興

夫近江國には、鎌倉源氏の御代より、三十六人の國衆、八十二人の鄕侍と申て御座候處に、其後尊氏將軍の御時分、佐々木佐渡判官入道道譽の威勢に一國なびき、彼道譽にしたがはずといふ事なし、其以前より江州一國を二つにわかち、江南江北と申て、愛知川より北を江北と申、愛知川よ

り南を江南と申ける、

〔江濃記〕淺井出身事

淺井休外齋入道橘高政は、朝倉教景の吹擧により、京極殿の一跡を給りけれども、國人おほく背ければ、伊勢の國司、井長野若狹守、關刑部大輔、美濃土岐殿、井齋藤其外朝倉より加勢を請ひ、北。近。江。五郡をやう〳〵治めける、

位置

〔近江國輿地志略二建置沿革〕大凡此國の野軫にあたれり、北極地をいづること三十五度半、日本の里數にてかんがふれば北極のある所へは千二百八十八里四分一あるなり、四時の氣候中正の國なり、分野のこと、秦漢よりもつはらこれをいへども、故實の論辨ありて、採もちいがたきことあり、富國軫宿にあたれるといふの義、私說にあらず、保井春海、日本の分野の圖を著し、近江をもつて軫にあてたり、今これにしたがふのみ、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

近江彥根町傳馬極高三十五度一十六分、經度東三十一分、從東都道中山一百二十里一十五丁五十二間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

近江　大津　三五度〇〇分三〇秒　長濱　三五度二三分〇〇秒
　彥根　三五度一六分〇〇秒　大溝　三五度一八分〇〇秒
　堅田　三五度〇七分〇〇秒　草津宿　三五度〇一分〇〇秒
　石部宿　三五度〇一分〇〇秒　膳所　三度〇〇分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略

疆域

近江　彥根　東〇度三一分一七秒　膳所　東〇度〇七分四八秒

〔淡海地志序〕中山道近江州者、六十餘州之一邦、〇中略既究厥邊境、則東接濃勢、西交山丹、北隣若越、南界伊賀、環之以七箇國、而略焉、厥土五邑、厥田惟上、按厥收獲、歲修八十三萬餘斛、而稼穡豐美之無盡藏也、昔者分二十有四、而今區爲十二郡、計厥行程、橫得一十有六里餘、竪得三十有三里若干、（本國里數有三等、三十六弓爲一町、而有三十六町爲一里者、但以六町而爲一里者、又以五十町而爲一里者、今從三十六弓爲一町、三十六町爲一里者矣、）

〔淡海地志三〕一四至傍示　北堺越州、東倚勢州濃州、南跨伊州、西隣山州丹州若州、

〔日本地誌提要二十三近江〕疆域　東ハ伊勢美濃、西ハ山城丹波、南ハ伊賀、北ハ若狹越前ニ至ル、東西凡壹拾貳里、南北凡壹拾九里、

〔東海道名所圖會一〕山近兩國堺（いにしへは逢坂山の峠の少し南也、今に兩國寺といふ淨刹あり、當時は追分を山城近江の堺とす、此邊の名物には、大津繪又は算盤、針、饅頭等也、繪は土佐又平こゝに住て書初しとぞ、算盤は一里塚前を眷とす、針は此所の名池の側世に名高し、原此針細工人の家、京東六條に大きなる池ありて、其側なれば池の側針といふ、東本願寺建立の時、公命によつて針師殘らず逢坂山の麓に替地を賜ふ、舊名を呼んで今も池の側といふ、）

〔東海道名所圖會二〕近勢國堺（澤村立場の入口に、近江伊勢二州の封示あり、）

〔近江名所圖會一〕江州勢州國界標木（鈴鹿の峯の堺切川は、いにしへは近江と伊勢の國境也、應永十二年の山崩に、其水落の變りしより以來、貞享年中よりは今のごとしと、鈴鹿郡賦に見へたり、）

島嶼

〔日本實測錄十二湖沼〕近江國　琵琶湖〇中略　湖中竹生島（實測）周廻一十九町一間、沖島（實測）周廻一里廿七町一十六間、大浦葭（實測）周廻二里一十四町一十八間、多景島（遠測）、沖白石島（遠測）、

〔日本鹿子八〕同國（近江）〇名所之部

竹島　比良より奥也、竹生島にちかし、其外島々數多有之、

竹生島　比良より海上六里也、余古の海といふ也、水海の北の奥也、辨才天たち給ふ、草創緣記、神社の所に有之、

目にたて、誰か見ざらん竹生島波にうつろふあけの玉がき

〔帝王編年記十元正〕養老七年癸亥、古老傳曰、〇中略又云、霜速比古命之男多々美比古命、是謂夷服岳神也、女次佐志女命、是夷服神之姉在久惠峯也、次淺井比咩命、是夷服神之姪、在於淺井岳也、是夷服岳與淺井岳、相競長高、淺井岳一夜增高、夷服岳怒拔刀劒、殺淺井比賣之頸、隨江中而成江島、名竹生島、其頭乎、

地勢

〔易林本節用集下〕近江江州近州大、管十三郡、四方三日半、山河田畠保疆潤澤、種得千倍、鄰京、春氣早、日本四番國也、大上々國也、

〔近江國輿地志略二建置沿革〕此國の地たる、北は若狹越前にまじはり、南は伊賀伊勢山城三國に連り、東は美濃伊勢の界につゞき、西は山城若狹丹波の地に校れり、地形長して廣し、巽にいたつては地勢窮迫す、

〔藤原家傳下武智麻呂〕近江國者、宇宙有名之地也、地廣人衆、國富家給、東交不破、北接鶴鹿、南通山背、至此京邑、水海清而廣、山木繁而長、其壤黑壚、其田上々、雖有水旱之災、曾無不穫之恤、故昔聖主賢臣、遷都此地、鄉童壁老、共稱無爲、攜手巡行、遊歌大路、時人咸曰、太平之代、此公私往來之道、東西二陸之喉也、其治急、則姧僞而逋竄、其治緩、則熳侮而侵凌、

氣候

〔近江國輿地志略二建置沿革〕四時中正の國なりといへども、一國の中寒おなじからず、志賀、栗本、甲賀三郡のごときは、大概京都におなじくして、寒暖偏ならず、蒲生、神崎、坂田、犬上、高島等の諸郡は、寒氣はやくして、暖氣遲し、伊香淺井の二郡は、寒氣大甚久しく、毎年十月より明年三月まで雪きへず、大略、越前美濃の地氣に似たり、

道路

〔近江國輿地志略二建置沿革〕此國より他國にいづる路多し、是を彼越是越といふ、坤山城界相坂越より、艮美濃界長競越に至て二十里、午未山城界宇治田原越より、子丑越前界七里半越にいたつ

て二十三里、巳午伊勢界鈴鹿越より、子丑越前界虎杖越にいたつて二十八里、坤山城界相坂越より、巽伊勢鈴鹿越にいたつて十六里、子亥美濃界藤川越より、巽越前界にいたつて十五里あるなり、

〔近江國輿地志略道路四〕官路　東海道、中山道是なり、二道は京師より江戸にをもむくの路なり、其路倶に近江の國を歴るなり、沿革あつて古の如くにはあらずといへども、其名はかはらず、其驛も皆々かはりて、昔し驛なりし處も郊野となり、田畑なりし地もいま驛となるところ多し、源順が和名抄に、驛家南北にありと志るせし篠原も、いまは驛にあらず、東鑑盛衰記等をかんがうれば、鏡の宿、野路の宿などあれば、治承壽永のころは、是も驛なりと見えたり、古へのことは皆かくのごとくかはれるたぐひたり、驛のみに、今驛は東海道にては、大津、草津、石部、水口、土山なり、中仙道にては、守山、武佐、愛智川、高宮、鳥本、番場、醒井、柏原なり、按するに日本紀略に、延暦十四年七月辛の卯、遣左兵衛佐橘入居撿近江若狹兩國之驛路とあり、〇中略

東海道　十四里三十四町五十五間なり、山城近江兩國の界、追分長町より、近江伊勢兩國の界、鈴鹿越に至ッてのつもりなり、山城の國界、追分長町より六町四十五間東に一里塚あり、是より一里ごとに此塚あり、當國東海道の終の一里塚より、伊勢の國界、鈴鹿越まで二十八町十間あるなり、

中仙道　十九里二十八町三十五間なり、山城近江兩國のさかい追分長町より、近江美濃兩國のさかい、寢物語にいたつてのつもりなり、近江の國一里塚ある所より、國堺寢物語まで二十二町五十五間あるなり、

越前路　十二里三町二十四間なり、越前近江兩國のさかい國堺嶺より、近江美濃兩國のさかい夫婦岩までの積なり、近江一里塚あるところより、越前國界に至つては十三町二十四間あり、近

江美濃兩國の界、夫婦岩の邊一里塚なし、

若狹路　八里拾九町なり、柳瀨村より、近江美濃の國界、夫婦岩に至つて積なり、

山城國路　十八あり、十八の內には、官路、小徑、間道ありといへども、次第をわかたず志るす、十八といへるは、逢坂越、追分越、小關越、如意越、山中越、水呑越、青山越、水谷越、八瀨越、仰木越、伊香途越、途中越、久田越、醍醐越、畑越、曾東越、宇治田原越、裏白嶺越、至乃越、以上十八なり、土俗坂路を經て捷徑に行を、何越某の越といふ、○中略

伊賀路　四道あり、於土岐越、丸柱越、內保越、油日越なり、○中略

伊勢路　九道あり、九道は鈴鹿越、安樂越、小岐須越、大河原越、仁正寺越、千種越、八風越、君畑越、大君畑越なり、○中略

美濃路　七道あり、長競越、藤川越、大久保越、加須川嶺越、久加越、中尾嶺越、島津越なり、○中略

越前路　六道あり、虎杖越、庄野嶺越、倉坂越、杳掛越、大浦越、七里半越なり、○中略

若狹路　四道あり、栗柄越、深淸水越、大杉越、針畑越なり、

〔淡海地志　四〕陸路行程

一大津より、京へ三里

一同　草津へ三里半六町、草津より石部へ貳り半十貳町、　石部より水口へ三里九町、水口より土山へ貳里半七町、

一草津より守山へ壹里半、守山より武佐へ三里半、武佐より愛知川へ貳里半、愛知川より高宮へ貳里、高宮より鳥居本へ貳里半、鳥居本より米原へ壹里半、米原より長濱へ貳里八丁、長濱より木本へ三里十貳里、木本より柳ケ瀨へ貳里八丁、柳ケ瀨より中河內へ貳里半十町、中河內より板取へ三里也、○中略

竪横行程

一近江竪道　南は山城宇治田原、北は越前虎杖峠迄三十三里、

一同横道　西は逢坂、東は伊勢鈴鹿迄十六里、

一同横道　北は越前板取峠、東は美濃境藤川迄、

一同東湖之陸伊庭より、伊勢境千草越まで十壹り、

一同西湖之陸今津より、若狹熊川迄四里、

右出軍書

陸路

一疋田より柳ヶ瀨へ三里、築ヶ瀨より木之本へ二り八丁、木之本より小谷へ貳里半、小谷よりすいせうへ四里、すいせうより藤川へ壹り、藤川より關ヶ原へ壹り半、

一高宮より愛知川へ貳里、愛知川より八日市へ貳里、八日市より石原へ三里、石原より鎌がけへ貳り、かいがけより土山へ貳り、土山より坂之下へ貳り半、坂の下より關へ壹里半、關より久保田へ四里、久保田より津之城へ壹り半、津之城より雲津へ壹里、雲津より松坂へ貳里、松坂よりおまたへ四里、小俣よりやうたへ壹り、やうたより外宮へ五十町、外宮より内宮江貳里、宮川有、

一長濱より米原へ貳里半、米原より鳥居本へ壹り、鳥居本より高宮へ壹里半、高宮より愛知川へ貳り、愛知川より八日市へ貳里、八日市より岡本へ貳里、岡本より石原へ半り、石原より鎌懸へ貳里、かいかけより土山へ貳里、土山より坂之下へ貳里、坂之下より關之地藏迄貳り、

一名古屋より須俣へ貳り十壹町、大垣へ貳里半、垂井へ三里半、關ヶ原へ三り半、水晶小谷木之本柳ヶ瀨つはひ中河内道度出前、

一海津より山中へ三里半、駄口へ壹り、疋田江壹り、敦賀へ貳里、ゆかわへ貳里、

一はん原へ壹里、敦賀へ半り、はん原よりしんぼへ半里、ふたはやへ壹り、歸り壹り、今庄へ壹里、今庄より板取峠へ貳里、

右出得用集

〔日本實測錄（二街道）〕從東海道土山歷日野至武佐

近江國甲賀郡土山宿　一里二十三町四十七間　蒲生郡鎌懸（カイカケ）村、三十四度五十九分半、　三十二町五十一間　日野大窪町（至仁正寺陣屋一十一丁一十五間）　一里六町二十間半　石原宿　一十五町五十二間岡本宿、三十五度三分、　二里八町五十九間半　辻村（歷八日市村至濱野村七丁二十一間半）　一里一十八町四十一間　武佐宿（從土山至武佐）街道、通計七里三十四町三十間半、

從東海道鳥居川沿勢田川至伏見

近江國滋賀郡鳥居川村　三十二町八間（至石山寺前一十六丁二十九間）　千町村　二里一十六町二十一間（至瀨于飛三十三丁三十三間）　栗本郡曾束村（至山城國宇治郡池之尾村宿所、一十三丁二十三間、北極高三十四度五十五分、）　二里二十一町三十七間（至國界一十三丁二十四間、從國界至平等院前一里三十四丁四十九間）　山城久世郡宇治郡橋本町（中略）〇

從東海道大津歷海津及疋田至鞆山（本敦賀）

近江國滋賀郡大津宿上京町　九町二十九間　同北保町　一里三十町三十五間半　比兄辻（ヒエフジ）村　二十八町一間半（至琵琶湖傍五丁四間）　雄琴村　一十五町二十四間　衣川（キヌガハ）村　一里二町八間　濱村　二十一町一十三間　南濱村　一十五町三十八間（至中濱村琵琶湖傍五丁一十七間）　北濱村　八町四間　北舟路村　二里六町三十七間　南小松村、三十五度一十四分半、　二十八町四間半　北小松村　一里二十八町三十七間（至大溝長刀町琵琶湖傍一里二十三丁三十七間）　高島郡大溝木町、三十八度一十八分、　二里二十六町三十六間　木津村（又呼古津）　一十五町一十一間（至木津入江傍二丁一十八間）　今津　二里三十一町五十九間半　西濱村　一十町三十七間半　海津（カイヅ）東町　一里三町五十間（至關所二丁一間）　野口村　一十

宿驛

五町七間半(至國界九丁八間半)　越前國敦賀郡山中村(○下略)

〔日本實測錄三街道〕從東京中山道至草津(○中略)

近江國坂田郡柏原宿　一里一十五町一十五間　醒井宿　三十四町五十五間　番場宿　一里二町二十四間　下矢倉村　八町八間　鳥居本宿　一里二十三町二十間　犬上郡高宮宿、三十五度一十四分、(至多賀神社三十三町二十七間)　二里五十七間半　神崎郡愛知川宿　二里一十七町　蒲生(ガマフ)郡武佐宿、三十五度七分半、　一里一十九町二十七間　鏡村、三十五度六分、　一里二十一町一十間　野洲郡小篠原村(至三上陣屋二十丁三十七間)　二十七町一十八間　守山宿　一里一十町一十六間　栗田郡草津宿　(從東京至草津)中山道、通計一百二十九里二十七町五十二間(○中略)

從中山道下矢倉至木本

近江國坂田郡下矢倉村　二十四町四十間　米原(マイハラ)村、三十五度一十八分半、(至琵琶湖傍三丁二十九間半)、二里一十二町四十五間半　長濱(至出町六丁二十七間、北極高三十五度二十三分、)　三里三十三町二十四間(至速見村二丁三十一間半)(里二)　伊香郡木本宿　(從下矢倉至木本)街道、通計六里三十四町四十九間半、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬

近江國驛馬(勢多三十疋、岡田、甲賀各二十疋、篠原、清水、鳥籠、横川各十五疋、穴太五疋、和爾、三尾各七疋、鞆結九疋、)傳馬(栗太郡十疋、滋賀、甲賀、野洲、神崎、犬上、坂田、高島郡、和邇、鞆結驛各五疋、)

〔太平記二〕俊基朝臣再關東下向事

駒モ轟ト蹈鳴ス、勢多ノ長橋打渡リ、行向人ニ近江路ヤ、世ノウチノ野ニ鳴鶴モ、子ヲ思カト哀也、時雨モイタク森山ノ、木下露ニ袖ヌレテ、風ニ露散篠原ヤ、篠分ル道ヲ過行バ、鏡ノ山ハ有トテモ、泪ニ曇テ見ヘ分ズ、物ヲ思ヘバ夜ノ間ニモ、老蘇ノ森ノ下草ニ、駒ヲ止テ顧ル、古郷ヲ雲ヤ隔ツラン、番馬醒井柏原、不破關屋ハ荒果テ、(○下略)

〔書言字考節用集二乾坤〕守山(モリヤマ)江州野洲郡

〔源平盛衰記十九〕佐々木取馬下向事

高綱ハ、〇中略京ヲバ未明ニ出タレ共、不習歩道ナレバ、ナヘグ〳〵其日ハ守山ノ宿ニ著、知タル者ニ馬ヲモ乞乘バヤトハ思ヘドモ、都近程也、世中ツヽマシク思ケレバ、サモナクテ曉ハ守山ヲ立、野洲ノ河原ニ出ヌ、

〔古今著聞集五和歌〕同大將〇源賴朝もる山にて狩せられけるに、いちごのさかりになりたるをみて、ともに北條四郎時政が候けるが、連歌をなんしける、

もる山のいちごさかしくなりにけり、大將とりもあへず、

むばらがいかにうれしかるらん

〔書言字考節用集二乾坤〕篠原(シノハラ)江州野洲郡

〔吾妻鏡四〕元暦二年六月二十一日壬申、卯剋廷尉著近江國篠原宿、

〔今昔物語二十八〕近江國篠原入墓穴男語第四十四

今昔、美濃ノ國ノ市へ行ケル下衆男ノ、近江ノ國ノ篠原ト云フ所ヲ通ケル程ニ、空暗ク雨降ケレバ、立宿リスベキ所ヤ有ルト見廻シケルニ、人氣遠キ野中ナレバ、可立寄キ所无カリケルニ、墓穴ノ有リケルヲ見付テ、其レニ這入テ暫ク有リケル程ニ、日モ暮テ暗ク成ニケリ、

〔吾妻鏡十五〕建久六年三月四日己丑、將軍出江州鏡驛、前羈路鞍馬給、

〔書言字考節用集一乾坤〕番馬(バンバ)江州犬上郡

〔藤河の記〕近江の國に番馬といふ所より路をかへて南へ行、番場を物の名にとりなして、

わくるの、まだ末遠きくさばには日かげの駒よしばしとゞまれ

〔近江國番場宿蓮華寺過去帳〕敬白

陸波羅南北過去帳事

元弘三稔癸酉五月七日、依京都合戰破、當君兩院關東御下向之間、同九日於近江國馬。場。宿。米山麓一向堂前合戰討死自害交名、荒々注文事、〇下略

〔木曾路名所圖會一坤〕柏。原。近江 今須まで一里、此驛は伊吹山の麓にして、名產には伊吹艾の店多し、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年十一月二日壬子、於近江國柏原。。被召取前兵衞尉忠康、則以雜色被觸申其由於民部卿經房之許云云、

建置沿革

〔日本國郡沿革考二東山道〕近江　古作近淡海古事記　或淡海國造記　大國、管十二郡、千五百十六村、

犬上百二十四村　愛エ知チ百十七村延喜式等作愛智、　神崎八十二村天智紀作神崎郡　蒲カ生マフ二百二十八村　甲賀百三十七村鎭坐傳記作甲可　野洲八十一村國造記、持統紀作益須、　栗クリ太モト百十五村古安國見記、和名抄作栗本、舒明紀作栗下、　滋賀八十八村古事記作志賀、萬葉集作思賀或思加、　高島百五十六村　伊イ香カゴ七十一村　淺井百四十二村　坂田百七十五村　栗田見日本紀、廢置未詳、　勢田拾芥抄載、延喜式等不載、廢置未詳、　善積同上

〔日本地誌提要二十三近江〕沿革　古ヘ淡海國ト云、成務天皇滋賀郡高穴アナ穗ホ村ニ都シ、天智天皇大津ニ都ス、後國府ヲ栗太郡ニ置、今ノ勢田橋本村　鎌府ノ時、佐々木秀義功有ルヲ以テ、子孫世守護トナリ、孫信綱以後多ク州守ヲ兼ヌ、信綱子泰綱氏信、倶ニ將軍賴經ニ事ヘ、泰綱南境六郡滋賀栗太甲賀野洲蒲生神崎ヲ領シテ六角ト稱シ、觀音寺城ニ居リ、嫡宗ヲ以テ守護ヲ襲グ、氏信北境六郡愛知犬上坂田淺井伊香高島ヲ領シテ、京極ト稱シ、膽吹上平カミヒラ城ニ居リ、愛知川ヲ以テ界トス、泰綱八世孫義賢ニ至リ、臣民離心、將軍義昭ノ來投スル、依違命ヲ奉ゼズ、永祿十一年、織田信長師ヲ興シテ罪ヲ問フ、義賢其子義弼ト出亡シ、地皆信長ニ歸ス、京極氏信十世ノ孫高峯ニ至リ、家臣淺井亮政專恣、永正十五年、遂ニ其地ヲ奪ヒ、小谷城淺井郡ニ居リ、高峯僅ニ上平一城ヲ保ツ、天正元年、信長淺井氏亮政ノ孫長政

ヲ滅シ、四年、安土(アヅチ)（蒲生郡）ニ城テ之ニ徙リ、明智光秀ヲ滋賀郡ニ封ジ、坂本ニ居ラシメ、淺井氏ノ故疆ヲ割テ豐臣秀吉ニ賜ヒ、長濱ニ居ラシム、信長弑セラルヽニ及テ、其長臣等胥謀テ、柴田勝豐ヲ長濱ニ置キ、丹羽長秀ヲ佐和山ニ鎭セシメ、（後秀吉石田三成(カズヒラ)ヲ此ニ封ジ、貳拾三萬五千三百石ヲ食ム、）州租ヲ以テ織田秀信ニ供ス、天正十三年、秀吉養子秀次ヲ本州ニ封ジ、八幡ニ城カシメ、十七年、高峯ノ曾孫高次ヲ大津ニ封ズ、文祿中秀次罪有リテ國除ス、關原役畢リ、德川氏石田三成ヲ戮シ、井伊直政ヲ佐和山ニ封ジ、後ニ彥根ニ城カシム、又高次ヲ若狹ニ徙シ、戸田一西(カズアキ)ヲ封ジ、徙テ膳所ニ治セシム、（後ニ本多後次）其後州內封ヲ受ル者、水口（初加藤明友、次鳥居忠英(タダテル)、復加藤嘉矩、）大溝、（分部光信）西大路、（初仁正寺ト云、市橋長利、）小室、（小堀正一、天明中六世政方ノ時收封セラル、）山上、（稻垣重定）宮川、（堀田正休）三上、（遠藤胤親）凡八藩、又大津代宮ヲ置、王政革新ノ初、遠藤氏吉見（和泉）ニ轉ジ、山形（羽前）ノ水野氏ヲ徙シテ朝日山藩ヲ建ツ、既ニシテ悉ク之ヲ廢シ、長濱（後犬上ニ改ム）大津、（後滋賀）二縣ヲ置キ、又合シテ滋賀一縣トナス、

〔古事記（中略）〕兄天押帶日子命者、（中略）近淡海國造之祖也、

〔先代舊事本紀（十國造）〕淡海國造

志賀高穴穗朝（○成務）御世、彥坐王三世孫大陀牟夜別定賜國造、

額田國造

志賀高穴穗朝（○成務）御世、和邇臣祖彥訓服命孫大直侶宇命定賜國造、

（首書）額當作坂、今近江國坂田郡乎、

〔近江國輿地志略（三藩封）〕夫以れば、近江東山道に屬す、（今の十五國とはことなり）景行天皇の十五年春二月朔戊子、彥狹島王をもつて、東山道十五國の都督に拜すと、日本紀に見へたり、舊事紀に、志賀高穴穗の朝の御代、彥坐王三世孫、大陀牟夜別をもつて、國造に定たまふとあり、古事記には、天押帶日子命は、近淡海國造の祖なりと見へたり、（○中略）大凡近江國司及介掾目郡司庄司などに任せし人を、一

一書云るさば、牛に汗し棟に充るとも盡すべからず、故にこれを省く、中世に及て、宇多天皇の皇子敦實親王の孫參議扶義、近江の守となる、扶義の末葉佐々木秀義、當國の主となつてより、子孫相續して封をうくる、承久の役、佐々木信綱關東の催促に云たがひ戰功あり、故に信綱北條が爲に寵せらる、信綱が長子を泰綱といふ、佐々木六角の祖なり、次子を氏信といふ、佐々木京極の祖なり、六角家は織田信長の爲に亡され、京極は上坂、淺井等が爲に國除かる、太閤秀吉一統の後、秀次をもつて八幡山に居しめ、近江中納言と號す、いくほどなく秀次都にのぼり、秀吉も薨じぬ、神祖一統の後、諸將をもつて其地に封じたまへり、

〔淺井三代記十八〕信長卿江北仕置之事

信長卿、淺井が侍降人と成、忠節をはげます者共をよび出し、所領を被下ける、礒野丹波守には高島一郡を下されぬ、阿閉淡路守には伊香郡一郡を給はり、堀次郎いまだ幼少たるにより、家臣樋口三郎兵衞に坂田郡半郡を被下、扨木下藤吉郎秀吉には、今度のほねをり分淺からずとて、江北の守護所と被成、小谷の城に、淺井郡に坂田郡半分犬上郡を被下ける、

〔淡海落穗集一〕往古當國の國司三拾六人の名前

一建部山城主　建部左京進　一下之鄉城主　多賀豐後守　一小脇村城主　三井石見守
一肥田村城主　高野瀨備前守（高野瀨喜介此末なり）　一和田城主　伊庭能登守　一北町村城主　池田宮內大夫　一堅田城　山田豐前守　一城不知　川曲主水正　一同　和爾藤九郎　一平井城　平井加賀入道　一八町城　大和田隼人正　一城不知　三上美濃守
一同　高島越中守　一土田城主　土田縫殿之介　一猿木城主　猿木左近大夫
一梅ヶ原城主　福島和泉守　一　朽木修理大夫　一中野城主　蒲生藤三郎（青木一族）
一菩提寺城主　靑木參河守　一羽田城主　後藤但馬守　一馬淵城主　馬淵越中守

一今村城主　今村掃部　一目賀田城主　目賀田甲斐守　一上坂村城　上坂備中
一在士　藤堂修理介（高虎と云は初磯野丹波守が下人也）　一　永原大炊介　一　箕浦
監物　一種之庄　瓜生飛驒守　一十里村城　野村主膳正　一中戸村城　鯰江權佐（此邊
にて此苗字付しは末流也と云）　一丁野村城　淺野靭負正　一　山中丹波守　一久德城
久德左近大夫　一高宮城　高宮三河守　一本庄城　本庄山城守　一江北横山城　横
山和泉守　一小野村大家　科山内膳　一下之鄕大家　二階堂出羽守　一小泉村大家
澤　右京　一山本城　安養寺三郎右衞門　一彥根村大家　安養寺三郎兵衞
此城之分は、後之出來とみえて、國司の中にいらず、
以上三拾六人

〔日本鹿子　八〕近江國

彥根之城（江戸ヨリ東海道百六リ七丁甲州道百十七リ十五丁上州道百十四リ二十八町）
往古當國澤山者、淺井備前守長政領知也、丹羽五郎左衞門長秀居レ之、天正十一年以來、堀久太郎秀
政爲二居城一、其後石田治部少輔光成居レ之、
井伊直政代移二當城一　慶長五年ヨリ　十五万石井伊兵部少輔（直政）　同右近大夫直勝　三十万石關東□同掃部頭直孝
內（十万石大坂役以後兩度加増五万石ハ大猷院殿御代加増、）　同高同掃部頭直澄　當城主　同高同掃部頭直興
同國水口之城　江戸ヨリ百六リ　大猷院殿（○德川家光）御代新城　關ヶ原以前有レ城、長束大藏大輔正
家居レ之、
御番城（山岡主計頭鐵砲頭交替、山口但馬守寛文十二年、但馬守御免以後爲二交替一）　二万石加藤內藏佐明友　御當主　同高同　佐渡守
明英
同國膳所之城　戸田左門一西代廢城、大津移、　當城關ヶ原沒落以後築之

國府

六万石居城大津 京極宰相高次　若州小濱江所替　慶長五年ヨリ　三万石 戸田左門一西　同高 同　左門氏鐵　元和三年攝州尼ヶ崎江所替　元和三年ヨリ　三万石 本多縫殿助康俊　嫡子下總守俊次代ニ三州西尾江所替　元和六年ヨリ　三万石 菅沼織部正定芳　寛永十一年丹波龜山江所替　寛永十一年ヨリ　七万石 石川主殿頭忠總　嫡子昌勝代ニ勢州龜山ヘ所替　慶安四年以後　七万石 本多下總守俊次　同高 同兵部少輔康將　當城主　六万石 同　隱岐守　外壹万石舍弟伊豫守領之、兵部子也、隱岐守從弟也、

同國 仁正寺　江戸ヨリ百六リ　壹万八千石 市橋下總守

同國 小室　江戸ヨリ百六リ餘　壹万二千石 小堀和泉守

同國 大溝　江戸ヨリ東海道百二十七リ 美濃路百十一リ　二万石 分部隼人正

同國御代官

二百石土山 猪飼次郎兵衛　六百石永原 猪狩十助　六百石大津 小野半之助　二百石大津 小野長左衛門　二百石 一且吉兵衛　六百石 小堀源右衛門

二百石 金丸又左衛門

同大津御藏衆

福島八左衛門　鈴木三左衛門　布施庄右衛門　長坂新右衛門

〔倭名類聚抄五國郡〕近江國國府在栗本郡、行程上一日、下半日、

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國　栗本府

〔近江國輿地志略二建置沿革〕國府　今按るに、勢多橋本村の邊ならん歟、順和名抄に曰、國府在栗本郡云々、拾芥抄にもかくのごとく志るされたり、臣勢多をもつて國府といふもの私説にあらず、延喜式の齋宮式に、頓宮は近江の國府とあり、花鳥餘情に、瀬田の頓宮は、彼齋宮の御額の御櫛を徹して、宮に入たまふ處なりと志るせり、これをもつて見るときは、國府を勢多とするもの明なり、

郡

〔延喜式二十二民部〕近江國大 管 滋賀 栗太 甲賀 野洲 蒲生 神崎 愛智 犬上 坂田 淺井 伊香 高島 ○中略 右爲近國

〔倭名類聚抄五國郡〕近江國○註略 管十二○註略 滋賀志賀 栗本久留毛止、國府 甲賀 野洲 蒲生加萬不 神埼加無佐岐 愛智衣知 犬上以奴加三 坂田佐加太 淺井阿佐井 伊香伊加古 高島太加之萬

〔拾芥抄中末本朝國郡〕近江大近 十二郡 滋賀 栗太府 甲賀 野洲 蒲生 神崎 愛智 犬上 坂田 淺井 伊香 高島 勢多 善積ヨシツモ

〔易林本節用集下〕近江江州近州 大、管十三郡、○中略 滋賀シガ又作志賀 栗本クリモト 野洲ヤス 蒲生カマフ 神崎カンザキ 犬上イヌガミ 坂田サカタ 愛智エチ上下 淺井アサヰ 伊香イカウ カゴ香又作甲 高島タカシマ 甲賀カフカ 善積ヨシヅミ上下

〔新撰類聚往來下〕國名○中略 近江江州 十二郡、志賀、栗本、甲賀、蒲生、神崎、犬上、坂田、淺井、伊香、野洲、善積、高島、

〔近江國輿地志略二建置沿革〕夫以ば、近江國舊淡海の國と號す、○中略 大管十二郡、志賀、栗太、野洲、甲賀、蒲生、神崎、犬上、坂田、淺井、伊香、高島なり、印行の諸書、岡田氏が日本國盡圖、日本地理志略、國家万葉記、武用辨略、淡海録、に十三郡としるし、二十四郡と載、みなもつて誤の大ひなるものなり、○中略 唯近世俗間の軍記に、江源武鑑、淺井三代記、織田軍記、太閤記類、善積郡を多く載す、近江の土俗も亦これをいふものおほし、ともに虚僞孟浪の言なり、三正史、六國史、諸實錄、善積郡の名をあぐるものをみず、拾芥抄に十二郡としるし、その十二郡の名の下に、勢多善積としるす、是をもつて郡名とおもへるにや、勢多善積は鄉の名にして、順和名抄に、勢多は栗本郡の下にのせ、善積は高島郡の下にしるせり、是を正說とすべし、東鑑のごとき中世の實紀なり、是亦善積の庄をのせて、善積郡をしるさず、是善積郡なきことあきらかなり、ことごとく書を信せば書なきにはしかず、正史實錄を除て、稗雜の書をとらんや、いはずして明なり、

〔皇國郡名志〕近江國十二郡

滋賀（シカ）　郡所　堅田　大津　比叡　石山　三井寺　白髭社　追分　●山中　●坂本　●途中　●衣川　湖西城界

栗本（クリモト）　●目川　●草津　●勢田　湖南城界

野洲（ヤス）　●木部　△三上山　鏡殿　●守山　湖東

蒲生（カモフ）　●田津畑　●日野　●貝カケ　●武佐　八幡　●鏡　勢界ヨリ東湖ニ貫

神崎（カンサキ）　伊庭　△エチ川　勢界ヨリ細長湖貫

愛智（エチ）　驛町無シ　神崎ニ並共ニ小郡

犬上（イヌカミ）　彦根　●高宮　勢界ヨリ東湖ニ貫

坂田（サカタ）　長濱　●春照　米原　●小谷　●鳥井本　△伊吹山　●番場　●柏原　●醒ケ井　●藤川　濃界湖ニ貫

淺井（アサイ）　本郡ニ驛町無シ、湖ヲ隔テ越前ニ添テ、濃界ヨリ湖ニ貫　●野口　●梅津

伊香（イカコ）　●金井原　△余吾湖　●中河内　●椿市　●柳ケセ　●木本　濃越界

高島（タカシマ）　朽木　●道分　●小入谷　大溝　●河原市　●今津　●森西　湖西丹若界

甲賀（コウカ）　●石部　●土山　●大野　●山中　水口　△信楽　●野川　仁正寺　伊賀伊セノ界

○按ズルニ本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕近江

書名	郡名
六國史	志我[illegible]　志賀[illegible]
古書	
延喜式	滋賀（シカ）
倭名抄	同（志賀）
拾芥抄	同
諸書	滋賀[illegible]　志賀[illegible]
郡名考	滋賀（シカ）
天保郷帳	同
明治沿革幅	同
地誌提要	同（シガ）
郡區編成	同

			高島(タカシマ)	同	同	同 [illegible]	同(タカシマ)	同	同	同(タカシマ)	同
			栗太(クリモト)	栗本(久里毛止)	同	栗本 [illegible] 栗太 [illegible]	栗太(クリモト)	同	同	同(クリモト)	同
			甲賀(カフカ)	同	同	同 [illegible]	同(カフカ)	同	同	同(カフガ)	同
	金須 [illegible] 野洲 [illegible]	安 [illegible]	野洲(ヤス)	同	同	同 [illegible]	同(ヤス)	同	同	同(ヤス)	同
			蒲生(カマフ)	同(加萬不)	同	同 [illegible]	同(カマフ)	同	同	同(ガマフ)	同
	神前 [illegible]		神崎(カムサキ)	同(加無佐岐)	同	同 [illegible]	同(カンザキ)	同	同	同(カンザキ カム)	同
			犬上(イヌカミ)	同(以奴加三)	同	同 [illegible]	同(イヌカミ)	同	同	同(イヌカミ)	同
			坂田(サカタ)	同(佐加太)	同	同 [illegible]	同(サカタ)	同	同	同(サカタ)	同
			淺井(アサイ)	同(阿佐井)	同	同 [illegible]	同(アサイ)	同(アサイ郡)	同	同(アサイ)	東淺井 西淺井

		伊香イカコ	同伊加古	同	同國知元	同イカコ	同イカ	同	同イカ イカコ	同
依智		愛智エチ	同衣知	同	同國知元	同エチ	愛知	愛智	同エチ	同
		管十二	同	十二郡		同	同	同	同	十三郡

志賀郡

〔江濃記〕佐々木兩家わかりの事〇中略總領氏頼遁世の志有、近江の國務の事、道譽老人計にて、總領方をも萬さし引しける、しかも八十餘年長命して、尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ、武家の政道を輔佐し、子孫四職の其一に撰られ、京極殿と稱し、近。江。國。十。三。郡の中、八郡を六角方知行し、五郡を京極方に支配す、〇下略

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〇中略滋賀シカ

〔郡名考〕近江國　滋賀シカ　志賀同

〔近江國輿地志略六志賀郡〕抑當郡は東琵琶湖の半を限とし、巽は栗本郡に交りて、南は山城の國二尾谷、及び宇治醍醐の山に並び、坤は山城の國界牛尾山相坂の關山如意嶽に至り、西は大比叡なり、篠の嶺を限り、乾は山城嶺折立山鍵坂を界とし、北は高島郡界細川鹿瀨山に交り、艮は屈曲して高島郡界打下に接せり、村數七十九あり、蓋し志賀の文字、諸書に載るところ不同なり、日本紀志賀につくり、續日本紀には志我の文字につくれり、諸書にまたをゝく滋賀の字にも書せり、いま日本紀に從、古老傳て云、往古郡中に志賀某と云ものあり因て郡の名とすといへり、

臣按するに、此說わづらはし、人皇十二代景行天皇の御宇、大和國纏向日代の宮より、都を當國志賀高穴穗宮に遷し給ひて、成務天皇、仲哀天皇相續てこの地に都したまふこと、日本紀にあ

り、いにしへは國の境區を稱するに、往々同名を以てす、假令之、和泉國に和泉郡あり、河內國に河內の郡あるがごとし、先志賀の郡あつて、然して後志賀の郡と名付るなるべし、

〔近江名所圖會一〕近江國滋賀郡（中略）滋賀郡は、北は白髭、眞野、鯛川のほとりを限り、西は長等山、比叡、志賀山の嶺を限る、東南は湖の水中にあり。

〔日本書紀景行七〕五十八年二月辛亥、幸近江國、居志賀三歲、是謂高穴穗宮、

〔萬葉集雜一歌〕過近江荒都時、柿本朝臣人麿作歌、○中略

反歌

樂浪之、思賀乃辛崎、雖幸有、大宮人之、船麻知兼津、

〔冠辭考四佐〕さゞなみの（志賀、大津の宮、故きみやこ、國津御神、大山もり、平山）

萬葉卷一に（人麿）左散難彌乃、志我能太和太、また樂浪之、思賀乃辛崎、卷二に（東人）神樂波之志賀、左射禮浪、敷布賀、卷七に、神樂聲浪乃、四賀津之浦廻云々、又集中に、樂浪乃とて、大津宮、故京、國都美神、大山守、平山風などもつゞけたり、こは近江の志賀郡にある彼なみてふ地にて、そこの大名なる故に、其邊りの所には冠らせたる也、地の名なる事は、神功紀に、及于狹々浪栗林云々、欽明紀に、（高麗使到于近江）發自難波津、控引船於狹々波山、而云々、天武紀に、會於筱（此云佐々）浪、而探捕左右大臣云々と有にてしれり、さて其筱は小竹也、浪は借字にて靡の意也、故になびく物にはつけていへり、古事記に、（應神條）志那陀由布、佐々那美遲とよみしも、此筱靡道にて、しなへたゆふてふ語を冠らしめたるにてもおもへ、故に右の狹々は淸て唱ふる也、然るを近江の湖によりて、さゞ波てふ語を冠らしむと思へるは委しからず、その浪のさゞ波をば、卷二に、左射禮浪、卷十三に、沙邪禮浪など、下のさに濁る字を書てしらせたり、かの神樂波之、志賀佐射禮浪とよめるにても、上の神樂波は同じ事ならぬを知べき也、

〔日本書紀九神功〕三月（〇攝政元年）庚子、命武內宿禰、和珥臣祖武振熊、率數萬衆、令擊忍熊王、○中略軍衆走

栗太郡

之、及于狹々浪栗林而多斬、於是血流溢栗林、故惡是事、至于今其栗林之菓不進御所也、

〔日本書紀天武二十八〕元年七月癸丑、諸將軍等悉會於篠。此云佐々。浪、而探捕左右大臣及諸罪人等、

〔日本書紀通證天武三十三〕篠浪神功紀作狹々浪、指滋賀郡而言、篠國史作筱、字彙篠篆文作筱、又云筱字別作篠非、

〔延喜式主水四十〕凡運氷駄者、以徭丁充之、〇中略近江國志賀郡部花一所、三丁一駄、輸

〔續日本紀元正七〕養老元年九月癸亥、還至近江國、賜從駕五位已上、及近江國司等物各有差、郡領已下雜色四十餘人進位一階、又免志。我。依智二郡今年田租、及供行宮百姓之租、

〔今昔物語十七〕依地藏菩薩敎始播磨國淸水寺語第七、

今昔、近江ノ國志賀ノ郡ニ崇福寺ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ一人ノ僧住ス、名ヲバ藏明ト云フ、此ノ僧慈悲忍辱ニシテ施ノ心廣カリケリ、

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〇中略栗本府

〔郡名考〕近江國　栗太クルモト、作栗本、

〔近江國輿地志略三十九栗太郡〕夫以、栗太郡は、日本紀、續日本紀及延喜式、俱に栗太に作り、俗に或は云、栗本の字なれども、古より本の字の丨を誤來て、太の字になすといへり、然れども此言は不稽なり、正史實錄悉誤とすべけんや栗本の文字をもちふべし、三國傳記に曰、近江の栗の樹は、天竺栴檀の種なり、故に栗の文字西と木と合す、　栗の樹枝葉天を覆、農民これを呼て魔木といふ、斧斤截れどもきれず、一夜杣人靈夢をこふむり、木を截やくこと數日、終倒つくるにいたる、その灰を塚につく、今の栗本の灰塚是なり、栗の樹の枝、湖邊に流とゞまるところ、今の木濱なり、その郡をもつて栗本と名づくといへり、世俗のつたふる處も又此のごとく、〇中略たゞそのいにしへ栗の樹のおほくありしゆへ、郡に名づくなるべし、日本紀に、近江國栗田郡としるせるところあり、もとより栗田郡といふ郡なし、おもふに上古は栗田ととなへしにや、栗は栗の字の轉寫の誤なるべ

し、栗田といひしゆへに、栗太の文字を書し、亦一轉して栗本といふなるべし、太にふとしといふ訓あり、ふとゝもとゝ、訓近ければ、また一轉したるなるべし、〇中略凡此郡西は志賀郡なり、南は山城の國白雲山に至り、坤は山城の國界横岩山をかぎり、北は野洲郡の界三宅金が森にまじはり、乾はみづうみをかぎりとす、艮は野洲郡の界南櫻山、甲賀郡石部山に接し、ひがしは甲賀郡の山嶽にとなり、たつみは野尻山、田代山につらなるなり、當郡のうちに靈仙寺村あり、この村いにしへは栗太村とよびしといへり、栗太村あるによつて、郡に名づけしもしるべからず、

〔近江名所圖會〕一栗太郡勢田川より東をいふ昔此地に栗の大木あり、因て郡名とす、

〔日本書紀〕十四雄略十一年五月辛亥朔、近江國栗太郡言、白鸕鷀居于谷上濱、因詔置川瀨舍人、

〔日本書紀〕二十七天智三年十二月、是月淡海國言、〇中略栗太郡人磐城村主殷之新婦、床席頭端一宿之間稻生而穗、其旦垂穎而熟、明日之夜、更生一穗、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與殷、殷得始富、

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合處々庄拾陸處〇中略　近江國六處栗太郡一處〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔今昔物語〕三十一近江國栗太郡伐大作語第三十七

今昔、近江國栗太郡ニ大キナル作ノ樹生タリケリ、其圍五百尋也、然レバ其木ノ高サ枝ヲ差タル程ヲ思ヒ可遣シ、其ノ影朝ニハ丹波ノ國ニ差シ、夕ニハ伊勢ノ國ニ差ス、霹靂スル時ニモ不動ズ、大風吹ク時ニモ不搖ズ、而ル間、其國ノ志賀栗太甲賀三郡ノ百姓、此ノ木ノ蔭ヲ覆テ日不當ザル故ニ、田畠ヲ作得ル事无シ、此ニ依テ、其ノ郡々ノ百姓等、天皇ニ此由ヲ奏ス、天皇即チ掃守ノ宿禰□□等ヲ遣テ、百姓ノ申スニ隨テ、此ノ樹ヲ伐リ倒シテケリ、然レバ其ノ樹伐リ倒シテ後、百姓田畠ヲ作ルニ豐饒ナル事ヲ得タリケリ、彼ノ奏シタル百姓ノ子孫、于今其ノ郡々ニ有リ、昔ハ此ル大キナル木ナム有ケル、此レ希有ノ事也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔伊呂波字類抄安部〕近江國略〇中甲賀カフカ

〔運歩色葉集加〕甲賀カウカ近江

〔書言字考節用集一乾坤〕甲賀カフカ近江州郡名

〔近江國輿地志略四十九甲賀郡〕夫以甲賀郡の名久し、日本紀の天武紀に、鹿深に作る、續日本紀には甲賀に作れり、日本姫世紀、鎭座傳記、及鎭座本緣皆以甲可に作る、油日神社緣記曰、聖德太子誅守屋、勝照四年戊申卯月日、當國有行幸、因勝軍之因緣、先郡號甲賀云々、臣按するに、油日社の緣記は僞說のみにて論ずるにたらず、勝照といへる年號日本になし、何れの年號にや、太子を行幸とかるす、笑べし、甲賀の名、何ぞ此時に始べきや、屑僞もつとも甚し、略〇中凡此郡の地勢、略扇子の形に似れり、南廣して北狹し、南は伊賀國界信樂、燒尾、油日山に接し、坤は山城國裏白嶺乃土の山に隣、西は栗太郡の界に連なる、乾は野洲郡の界櫻山に交り、北は蒲生郡の界に並、艮も亦蒲生郡に接す、東と巽とは伊勢に續く、東は伊勢國界於岐須山鷹野に至り、巽は同國界鈴鹿山に隣、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月、會明至莿萩野、暫停駕而進食、到積殖山口、高市皇子自鹿深越、以遇之、

〔日本書紀通證三十三天武〕自鹿深越今鹿深、即甲賀郡、此所謂信樂越也、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年二月庚辰、是日始開恭仁京東北道、通近江國甲賀郡、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年九月丁巳、甲賀郡調庸准畿內收之、又免當年田租、

〔延喜式二十一雅樂〕公廨田一十町在近江國

甲賀郡二町　野洲郡五町　愛智郡三町

右件田地子米充年中用度、

〔今昔物語十七〕買龜放男依地藏助得活語第二十六

今昔、近江ノ國甲賀ノ郡ニ、一人ノ下人有リケリ、略〇下

野洲郡

〔伊呂波字類抄(安國郡)〕近江國(○中略)野洲(ヤス)

〔近江國輿地志略(六十六野洲郡)〕夫以、野洲郡の文字、日本紀には益須に作る、釋日本紀には、益須は今の野洲郡なりといふ、古事記曰、美知能宇斯王之弟、水穗眞若王者、近淡海之安直祖、又曰、近淡海之安國造之祖意富多牟和氣云々、安の國は安の郡なり、郡を國といひしためし古に多し、郡の音をぐにともよむ、たとへば儀をせに、蘭をらにと云が如く、此郡の地勢乾と巽とは長して廣し、艮と坤とは短して狹し、此郡界南と坤とは栗太郡なり、北西と乾とは湖にして、東と艮とは蒲生郡に交る、巽は甲賀郡との界に接れり、

〔古事記(中開化)〕此美知能宇斯王之弟、水穗眞若王者、(近淡海之安直之祖)

〔日本書紀(三十持統)〕七年十一月乙未、車駕還宮、　己亥、遣沙門法員、善往、眞義等、試飮近江國益須郡醴泉、
八年三月己亥、詔曰、粤以七年歲次癸巳、醴泉涌於近江國益須郡都賀山、諸疾病停宿益須寺、而療差者衆、故入水田四町布六十端、原除益須郡今年調役雜徭、

〔新撰姓氏錄(山城國皇別)〕曰佐、紀朝臣同祖、武內宿禰之後也、欽明天皇御世□奉同族四人、國民三十五人歸化、天皇務以其遠來、勅稱珍勳臣、爲三十九人之譯、時人號曰譯氏、男諸石臣、次麻奈臣、是近江國野洲郡曰佐、山代國相樂郡曰佐、大和國添上郡山村曰佐等祖也、

〔日本靈異記(下)〕依妨修行人得猴身緣第二十四
近江國野洲郡部內御上嶺有神社、名曰陀我大神、奉依封六戶、(○下略)

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合今請墾田地玖伯玖拾肆町(○中略)
近江國貳伯町
野洲郡百町(自郡北川原井峯原)　四至(東百姓熟田、南里、西川、北山之限)(○中略)

合處々庄拾陸處〇中略　近江國六處（中略）〇中略野洲郡一處

天平十九年二月十一日〇署名略

〔夫木和歌抄 三十一〕やすのこほり 野州又近江郡

人めもる關をばゆるせあふみなるやすのこほりのやすくかよはん　正三位知家卿

〔伊呂波字類抄 安國郡〕近江國〇中略蒲生カマウ

〔運歩色葉集 加〕蒲生カマフ

〔近江國輿地志略 五十四蒲生郡〕當郡もと蒲生野とて、廣き郊野なり、日本紀に、蒲生野縱獵の事を載す、萬葉集には、天皇蒲生野遊獵のとき、額田の王の作れる歌を載たり、此蒲生野ある故に、郡にも名づけしなるべし、此郡南は甲賀郡なり、東は伊勢國界、千草山水晶嶽を限、北は神崎郡の界に隣、乾は伊崎山長命寺山に至り、西は野洲郡の界、櫻山鏡山に接す、一郡の地勢東西長くして南北短し、乾と巽と廣して、坤と艮との間窮迫なり、

〔古事記 上〕次天津日子根命者（中略）蒲生稻寸、三枝部造等之祖也、

〔古事記傳 七〕蒲生稻寸、和名抄に近江國蒲生加万不郡、これなり、名義は、いと上代に蒲の多く生たりし地なりしにや、蓬生、淺茅生、麻生などの類なり、

〔續日本紀 二文武〕大寶二年三月庚寅、美濃國多伎郡民七百十六口、遷于近江國蒲生郡、

〔今昔物語 十四〕修行僧至越中國立山會小女語第七

今昔、越中ノ國□□ノ郡ニ、立山ト云フ所有リ、昔ヨリ彼ノ山ニ地獄有ト云ヒ傳ヘタリ、〇中略其レニ三井寺ニ有ケル僧、佛道ヲ修行スル故ニ、所々ノ靈驗所ニ詣デ、難行苦行スルニ、彼ノ越中ノ立山ニ詣デ、地獄ノ原ニ行テ廻リ見ケルニ、山ノ中ニ一人ノ女有リ、〇中略其ノ時ニ僧立チ留テ聞クニ、女ノ云ク、我レハ此近江ノ國蒲生ノ郡ニ有シ人也、〇下略

神崎郡

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〇中略神崎カンサキ

〔郡名考〕近江國　神崎カンザキ　埼同

〔近江國輿地志略七十神崎郡〕夫神崎郡の名は、郡中に神崎村あるによつて名とす、たとへば志賀郡中に志賀あつて郡名とするが如し、神崎村と云は、神社あるの湖岸なるゆへに名づく、神崎村今は甲崎(かうざき)村と云、日本紀の天智紀に、神崎の文字に作る、當郡西は湖水、東は愛智郡なり、巽は伊勢の國界釋迦嶽に隣、南と坤には蒲生郡に接し、又地略鯰魚の形に似れり、西の方伊庭山福堂川、南神崎邊南北廣し、分代山上池田の邊漸細して帶のごとし、釋迦嶽の邊に至て亦少しく廣し、江戸街道より西を下出と云、下の郡と號す、江戸街道より東を上出といふ、上の郡と號す、

〔日本書紀天智三十七〕四年二月、是月、復以百濟百姓男女四百餘人、居于近江國神前郡、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合處々庄拾陸處〇中略近江國六處〔中略〕一處〇神前郡〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

愛智郡

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〇中略愛智エチ

〔地名字音轉用例〕アノ行ノ音同行通用セル例

えち　愛智近江郡　衣知エチ　愛アイヲエニ用ヒタリ

〔近江國輿地志略七十二愛智郡〕夫以れば、愛智の郡名既に舊し、三正史、六國史、あるひは依智、惠智の文字につくる、いま專ら愛智の字を用ゆ、愛にゑの訓あり、因て然り、尾張にもおなじ郡名あり、是はあいちと訓ず、當郡西南と巽の隅は神崎郡の堺に交り、乾の隅は湖水なり、北と艮隅とは、犬上郡のさかいに接り、東は伊勢の國堺初田山に續けり、此の郡は巽と乾とはながふして、艮と坤とは短し、いぬゐは野良、田中、下林村の邊にしては地形ははなはだ狹し、清水西出のあいだにいたつては、漸くひろし鯰江、斧磨のあいだに及んでは、甚だを丶いに、ひろし、蛭谷(ひるだに)木畑(きはた)のあいだのごときは

もつて狹きなり、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合今請墾田地玖佰玖拾肆町〇中略

近江國貳佰町〇中略　愛智郡百町長蘇原　四至東中海谷東上道　南氷室度　西秦武藏家東上道　北胡桃按度〇中略

合處々庄拾陸處〇中略　近江國六處(中略)愛智郡一處　坂田郡一處　淺井郡一處〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔續修東大寺正倉院文書十七〕愛智郡司解　申進上東大寺封租米事

合漆斛伍㪷天平寶字四年料〇中略

天平寶字六年四月二十日

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〇中略　犬上イヌカミ

〔近江國輿地志略七十四犬上郡〕夫以、犬上郡の名舊し、日本紀景行天皇紀に犬上の君の名を載たまひ、狹田親王も、犬上の朝臣犬上の縣主の義を、姓氏錄に玄るしたまへり、万葉集には狗上の文字に作れり、此郡南は愛智郡なり、西と乾の隅とは琵琶湖なり、北と艮の隅は坂田郡界、中靈山、篠尾山、佐和等に交り、東は美濃の國界五僧山に接し、巽の隅は伊勢の國安三國嶽、冷嶽、御池嶽に至る、凡此郡南北短して東西長し、

〔續修東大寺正倉院文書三十七〕造石山院所勞劇帳

造石山院所〇中略

造東大寺司番上少初位上楠守金弓年　近江國犬上郡人〇中略

外散位少初位上勝屋主年　美濃國

畫師造東大寺司番上從八位下上村主楷年三十八　近江國栗太郡

以前人等、造東大寺幷石山院所、奉仕勞劇如件、

坂田郡

天平寶字六年八月二十七日主典

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國〈略〇中〉坂田

〔近江國輿地志略坂田郡七十七〕夫以、坂田の郡舊し、初額田、後に今の文字に改、舊事紀曰、額田國造、志賀高穴穗朝御世、和邇臣祖彥訓服命孫、大眞侶宇命定賜國造云々、度會延佳神主頭書曰、額當坂作、今近江國坂田郡乎云々、日本紀の天智紀、倭姬世紀、及延喜式等に、坂田郡の名出たり、此郡南は犬上郡、西は湖にして、乾は淺井郡の界、南濱曾根に交り、北は姊川を限とす、艮は美濃國界伊吹山に接て、東も亦美濃國界藤川山、彌谷、高野山、梓河內山等に連る、巽は美濃國界淺見が嶽、中靈山に至る、此郡南北長して東西は少しく短し、

〔日本書紀允恭十三〕七年十二月壬戌、讌于新室、〈略〇中〉爰天皇歡喜、則明日遣使者喚弟姬、時弟姬、隨母以在於近江坂田。。

〔日本書紀推古二十二〕十四年五月戊午、勅鞍作鳥曰、〈略〇中〉造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戶、然汝不破戶而得入、此皆汝之功也、卽賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田二十町焉、

〔日本書紀天智二十七〕三年十二月、淡海國言、坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生、身取而收、日々到富、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年三月癸巳、近江國坂田郡人栗田臣之瀨眞瀨麥太人池守等四人、賜姓朝臣、

〔續修東大寺正倉院文書三十五〕國符　坂田郡司

東大寺天平寶字四年料租米百九十九石五斗三升〈略〇中〉

天平寶字六年四月八日

〔東大寺正倉院文書東南院伍櫃三〕神護三年七月十六日見度

官奴司解文一卷无印　所注奴婢二百人奴一百口、婢一百口、○中略

寺家買取奴婢帳一卷十二條並印書○中略

一條　近江國坂◦田◦郡◦立券文　所注婢二人

〔今昔物語 十五〕近江國坂田郡女以蓮花供養佛往生第五十三

今昔、近江國坂田郡□□ノ郷ニ一人ノ女有ケリ、姓ハ息長ノ氏、心柔軟ニシテ因果ヲ悟リ、佛法ヲ信ジテ、殊ニ道心有ケリ、日夜ニ極樂ヲ願テ念佛ヲ唱ヘケリ、而ルニ其國ノ内ニ筑摩ト云フ所有リ、其ノ處ニ江有リ、其ノ江ニ蓮花生タリケリ、此ノ女其ノ江ニ行テ蓮花ヲ取テ、心ヲ至シテ彌陀佛ニ供養シテ、極樂ニ迎ヘ給ヘト懃ニ願ヒケリ、

〔伊呂波字類抄 安國郡〕近江國○中略　淺井アサキ

〔近江國輿地志略 八十四淺井郡〕夫以ば、淺井郡は、近江風土記曰、淺井郡、或阿座膽(あさい)、西限知奈浦、東限朝日湊、南限岡本礒、北限小寢杜云々、茨田親王姓氏錄曰、治田連、開化天皇皇子彥坐命之後、四世孫彥□命、征夷有功効、因割近江國淺井郡地賜云々、當郡南は坂田郡及湖水なり北は伊香郡及越前の國界沓掛坂なり、西は高島郡の界に連て、乾は越前の國界山中山にならべり、東は伊香郡及美濃の國界なり、此郡を以て上下にわかち、南北をもつてよぶことあり、しかれども元來一郡にして、往古風土記にも二郡にわかたず、一郡なり、伊香郡その間にあつて、陸地をもつて見ときは、地脈切たるに似たれども、湖水の中淺井郡にして地脈切ず、淺井郡は首尾をもつて伊香郡をつゝめるごとし、委しく圖を按ずるに解をまたずしてあきらかなり、近江の風土記、今人間になし、わづかに淺井の一郡脫簡紙上一葉ばかり、水戸の館庫にあり、漸淺井一郡の境界、及竹生島のことすこしくしるせり、其餘の神社佛宇山川行路等のことなし、全書をみざれば、そのこともはかりがたく、歎惜するにたへたり、梨木三位祐之の大八洲の記に、當國のことをすこしくしるせども、淺井郡

伊香郡

のみ風土記を引用し、他郡に及ばず、世間流布の近江風土記と云書あれども、一事のとるべきなし、

〔新撰姓氏錄左京皇別〕治田連

開化天皇皇子彥坐命之後也、四世孫彥□命征北夷有功効、因割近江國淺井郡地賜之、爲墾田地、大海眞持等墾開彼地、以爲居地、大海六世孫之後、熊田宮平等因行事賜治田連姓也、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年二月甲戌、賜大師藤原惠美朝臣押勝近江國淺井、高島二郡鐵穴各一處、

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國略○中伊香イカコ

〔地名字音轉用例〕ウノ韻ヲカノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

いかこ　伊香近江郡伊イ加カ古コ

〔近江國輿地志略八十八伊香郡〕夫以、伊香の名、諸書に載するところ、土俗傳說をなじからず、土俗相傳、天智天皇の御宇、餘湖に天人下りて游泳舞樂す、其歌妓の美兒多して、其數五百なり、かるがゆへに五百の兒と書して、いかごと讀といへり、然ども五百の字にいかの訓なし、若しこの說實ならば、五十の兒と書して、いかごと訓するもゑるべからず、五十の字にいかの訓あることはめづらしからず、正史實錄及源氏物語等にも、多出たるも、畢竟夢中に夢を說にて、假令五百五十の字にいかの訓ありとも、天人游泳歌妓の兒ゆへに郡の名とすること、あとかたもなき僞なれば、論ずべからず、一說に曰、往古この地に靈木ありて、其花ひらくるときは、異香四方に薰ず、かるがゆへに異香郡といふ、後に伊香の字にあらたむといふ、是もまたあやまりなり、當郡は伊香津臣命所領の地なれば、郡の名とす、郡中に伊香具神社あり、因て郡名とす、延喜式の神名帳にも、伊香具の社のことを載られたり、旁天人游泳靈木異香のことによらざること顯然たり、伊香具と書しても

いかごと訓す、江家次第には伊賀の字につくれり、是又字にかゝはらざることを見るべし、當郡東は美濃の國界中尾嶺土藏嶽、金据嶽に交り、北は越前の國界三瀬山、中河内山に連る、西南は淺井郡の界に接れりをよそこの郡の地勢、南北は長して東西はみじかきなり、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年三月廿八日己酉、近江國言、伊香郡人石作部廣繼女、生年十五、始以出嫁、三十七失其夫、常守墳墓、哭不斷聲、專期同穴、無心再嫁、量其意操、可謂節婦、勅宜叙二階、免戶內租、即表門閭、

〔今昔物語十六〕石山觀音爲利人付和歌末語第十八

今昔、近江ノ國ニ伊香ノ郡ノ司ナル男有ケリ、其ノ妻若クシテ形チ美麗也、心バセ思量リ有テ、世ニ並ビ无キ物ノ上手也ケリ、〇中略而ニ□□ノ□□ト云フ人、國ノ司トシテ國ヲ政ツニ、此女ノ有樣ヲ聞テ、前々ノ守ヨリモ强ニ此女ヲ得ムト思フニ、夫ニ妻奉レト可乞キニモ非ズ、文ヲ遣テ假借セムニモ、前々ノ事ヲ聞クニ不可叶ズ、何ニセマシト思ヒ廻シテ謀ル樣、御館ニ急事有リト云テ、此郡ノ司ヲ召ス、郡ノ司何ニ事ニカ有ラムト周アハテ急ギ參タリ、〇中略守硯ヲ取寄テ、文ヲ書ク、書畢テ封ジテ上ニ印ヲ差セテ、其レヲ文箱ニ入テ、其文箱ノ上ニモ亦印ヲ差セテ、此レ彼ノ尊ニ給ヘ、此レヲ開テ可見キニ非ズ、此ノ内ニハ和歌ノ本ナン有ル、其ノ末ヲ同心ニ付合セテ奉レ、然レバ此レヲ得テ家ニ持行テ、今日ヨリ後七日ト云ニ可返持參キ也、和歌ノ本末ヲ付合セテ持參タラバ、尊ハ勝ヌ、速ニ國ヲ分テ可知シ、若シ尊付誤タラバ、尊ノ妻ヲ我レニ得サス許也トテ取セタレバ、〇中略此ノ歌ノ末ヲ書テ、前ノ文箱ニ具シテ、七日ト云フ夕方御館ニ參タレバ、守來タリト聞テ、先ヅ奇異ニ日ヲ不違ズ來タルカナ、然リトモ歌ノ末ハ否付ジト思テ、此方ニ參レト召セバ、箱ト歌ノ末トヲ奉レリ、守歌ノ末ヲ見テ、此レ希有ノ事也ト思テ、箱ヲ開テ見ルニ、違フ事無ケレバ、返々ス感ジ恐レテ多ノ物ヲ與ヘケリ、亦我レ既ニ負ヌトテ、約ノ如ク國ヲ分テ令知メケリ、此ノ

箱ノ内ノ歌ノ本ハ、アフミナルイカゴノウミノイカナレバトゾ有ケルニ、此クミルメモナキニ人ノコヒシキト付ケレバ、實ニ目出タシ、觀音ノ付給ハムニハ、當ニ愚ナラムヤ、

高島郡

〔伊呂波字類抄（安國郡）〕近江國（略）○中 高島（タカシマ）

〔近江國輿地志略（九十二高島郡）〕夫高島の名は、萬葉集より以來、世々の撰集に出て、正史六國史みな高島の文字につくれり、この郡、南は志賀郡に隣り、郡は若狹國界大杉山波が畑山に至りて、東は湖水をかぎり、艮は越前の國界に交り、巽は湖に連り、坤は山城丹波若狹三國の界に接し、乾は若狹の國界に至る、大凡この郡、南北はながふして、東西は南北よりもみじかし、

〔日本書紀（十七繼體）〕男大迹天皇（更名彥太尊）譽田天皇五世孫、彥主人王子也、母曰振媛、振媛活目天皇七世孫也、天皇父聞振媛顏容姝妙、甚有媺色、自近江國高島郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、（中此云那）納以爲妃、遂產天皇、

〔續日本紀（二十六稱德）〕天平神護元年正月庚子、勅、復官軍所經近江國高島郡調庸二年、滋賀淺井二郡各一年、並以沒官物、量加賑恤、

〔淺井三代記（七）〕亮政軍評定并高島退治の事

兎角高島郡を可攻取と宣へば、列坐の面々申上けるは、高島は海上へだつといひ、江南の領分志賀の郡につゞきたる所なれば、弓手も馬手も皆敵なれば、如何可有御座やと同音に申、

郷

〔倭名類聚抄（七郡）〕近江國

滋賀郡　古市（布留知）　眞野（末乃）　大友（於保止毛）　錦部（爾之古利）

栗本郡　物部（毛乃乃倍○原脫一字、據高山寺本補）　治田（畱多）　木川（木乃加波）　勢多　梨原（奈之波良）

甲賀郡　老上（於保加美○高山寺本保作支）　夏身（奈豆美）　山直（也末奈保○高山寺本無奈保二字）　蔵部（久良布○高山寺本布作閇）

野洲郡　三上（美加無○高山寺本、美加無下有有上下三字）、敷智（國用遠江字）　服部（入土利○高山寺本入土作波止）　明見（安加美、在南北）、邇保（ニホ、在南北）　篠原（之乃波良）　驛家（在南北）

蒲生郡　東生　西生　必佐　篠田　篠笥　大島　船木　安吉（〇高山寺本有阿支訓）　桐原

神崎郡　高屋　神崎（加無佐木〇高山寺本、崎作埼、又木作支、）　驛家　神主　垣見　小社　小幡

愛智郡　蚊野　八木　大國　長野　平田　養父

犬上郡　神戸（〇高山寺本省之）　田可　沼波　高宮　尼子　甲良　安食（〇高山寺本、食作蓋誤）　清水　寶田　青根

驛家

坂田郡　大原（於保波良）　長岡（奈加乎加）　上坂（加無佐加）　下坂（之毛佐加）　細江（保曾江）　朝妻（安佐都末）　上丹（加無都爾布）　阿那　驛家

淺井郡　岡本（乎加毛止）　田根（多保〇保恐爾誤）　湯次（由須木）　大井（於保井）　川道（加波美知〇高山寺本無美字）　丁野（與保乃）　錦郡（爾之古利）　速見（波也美）　登田（末須太）　新居（爾比井）　都宇　朝日（安佐比）　鹽津（之保津）

伊香郡　柏原　安曇　遠佐（〇遠原作逢、依高山寺本改、）　楊野　余呉（〇呉原作領、據高山寺本改、）　片岡　伊香（伊加古）　大社

高島郷　神戸　三尾（美乎）　高島（太加之末）　角野（都乃）　木津（古都）　桑原　善積　川上　大處　鞆結（土毛由比）

〔近江國輿地志略二〕郷

志賀郡　古市郷（南郷平津邊より、今膳所馬場松本の邊までをいひしなるべし、昔物語にも見へたり、）　眞野郷（今の眞野和邇堅田邊をいひしなるべし）　大友郷（坂本近邊をいふと見へたり、大友のみつの濱邊をうちさらしよせくる波のゆくゑしらずもの神詠あり、三津の濱は坂本にあり、）　錦部郷（志賀の邊より、三井寺の寺門の邊をいふなるべし、）

栗本郡　物部郷（部田追分等の邊なるべし）　治田郷（南笠の邊なるべし、南笠村に治田の神社あり、）　木川郷（今木川村あり、此邊なるべし、）　勢多郷（今勢多莊といふ）　梨原郷（いづれの地を指にや詳ならず）

甲賀郡　老上郷（詳ならず、栗太郡には老上川あり、）　夏見郷（今夏身村あり、此邊をいふなるべし、）　藪部郷（伊賀の國界の邊をいふとみへたり）

野洲郡　三上郷（三上の莊の邊なるべし）　服部郷（服部の邊なるべし）　邇保郷（邇保莊あり、その邊なるべし、）　敷智郷（つまびらかならず）　明見郷（詳ならず）　篠原郷（大篠原村、小篠原村あり、この邊なるべし、）

蒲生郡　船木郷（船木、多賀、北莊、津田、奥島等をいふ、）　篠笥郷（今の佐々木莊の邊なるべし、佐々木舊鷦鷯の御名によれり、亦佐沙之貴、安々岐にも作、佐々木は假名書な

これば、佐々木と篠笥と相通ず、きとけとはかきくけこ入音の相通なれば、佐々木な篠笥といふにや、　桐原郷今存在して相原郷あり　安吉郷是も今存在す　東生郷　西生郷今存在す　必佐郷　大島郷　篠田郷以上、今つまびらかならず、

神崎郡　垣見郷今垣見荘あり、是なり、　小幡郷其小幡村あり、此邊なるべし、　神崎郷今の甲崎村の邊なるべし、甲崎村舊神崎村といへば此邊なるべし、

高屋郷今の妙法寺村の邊ないふ　神主郷　小社郷倶に今詳ならず

愛智郡　大國郷土俗今大國荘と稱する地是なるべし　蚊野郷今蚊野荘あり、是なるべし、　八木郷今八木村あり、この邊か、　長野郷今長野荘あり、これなるべし、　平田郷　養父郷倶に所在詳ならず

犬上郡　安食郷今安食荘あり、これなるべし、　甲良郷今河原荘といふ處是なり、甲良かはらと訓ず、　尼子郷尼子村あり、此邊なるべし、　高宮郷今高宮荘あり、此邊たらん、　田可郷多賀村あり、此邊なるべし、　沼波郷沼波村あり、是ならん、　清水郷今清水村あり、この邊か、　神戸郷　寶田郷　青根郷倶に所在詳ならず

坂田郡　上丹郷今上下の丹生村あり、此邊なるべし、　上坂郷、下坂郷、今上坂荘下坂荘あり、此邊なるべし、　長岡郷長岡荘といふあり、是なるべし、　大原郷今存在す、これし土俗大原の荘といふ、　朝妻郷今朝妻村あり、此邊なり、　細江郷　阿那郷今所在つまびらかならず

淺井郡　錦部郷今錦織荘あり、此邊なるべし、　川道郷今川道の名存せり　新居郷今新井村あり、是なるべし、　益田郷今増田荘あり、是なり、　朝日郷今朝日荘あり、是なり、　速水郷今速見村あり、此邊なるべし、　丁野郷今丁野村あり、是なり、　田根郷今田根荘あり、是なり、　湯次郷今湯次荘あり　塩津郷今存在す　都宇郷　大井郷　岡本郷倶に所在詳ならず

伊香郡　柏原郷今詳ならず　安曇郷　遂佐郷その所在詳ならず　楊野郷今柳野村あり、是なり、　余領郷其所在つまびらかならず　片岡郷今存在す　伊香郷その所在つまびらかならず

高島郡　高島郷　三尾郷三尾里村の邊なるべし　角野郷今角川村あり、此邊歟、　木津郷木津荘あり、是なるべし、　桑原郷今桑原村あり、これ歟、　善積郷善積荘あり、是なるべし、　大處郷　鞆結郷　川上郷　神戸郷倶にその所在詳ならず

此のごとくしるしあれども、今その地に唱るところもあり、亦となへ失ひて、一向にしれざる地もあり、仁壽、貞觀の時代までは、顯に郷の名も建てありと見へたり。○中略　何の郡何の郷何村とい

ふもあり、栗太郡勢多郷橋本村の類是なり、亦郷の名を莊と心得たるもあり、野洲郡桐原莊大篠原郡の類なり、亦郷も莊も自然と同名にて、然もおなじ處に係屬せるあり、犬上郡甲良郷甲良莊法養寺村の類なり、一向郷の名も唱へうしなひて、此村には郷なしなんどいふ地もあり、何ぞ郷なき村あらんや、上古疆界を建たまひし時、村を統るに郷をもつてし、郷を統るに郡をもつてし、郡を統るに國をもつてせり、地として郷なしといふ處はなきことなり、今郷なしと稱する處は、みな郷をとなへうしなひたるなり、今亦此外私に郷と呼ところ多し、栗本郡田上郷、甲賀郡信樂郷、稗谷郷の類なり、今は一村を指さして郷といへる處もあり、村民の居ある處をさして郷中などいへるは、昔の名殘なり、玄かれども古と今とは意もかはれりとみへたり、時世の沿革是のみにかぎるべからず、

〔東寺文書禮〕近江國甲可郡藏部墾田野地賣買劵

甲可郡司解　申賣買墾田幷野地立劵事

合墾田貳拾壹町　野地參町東谷南溪西川北佐遲谷堺　在○藏○部○郷者

右左京五條三坊戸主從五位上阿倍朝臣島麻呂墾田者○中略

賣人從五位上阿部朝臣島麻呂○中略

主帳无位川直百島

天平勝寶三年七月二十七日

〔集古文書六十釋書〕受戒僧綱牒近江國比叡山延曆寺

僧綱牒近江國師

今年受戒僧事

僧最澄年二十近江國滋賀郡古○市○郷○廛、正八位下三津首淨足戸口、同姓廣野、黒子頰左一、左肘折上一、

牒上、件僧以今年受戒已畢、國師承知、經於國司、編附國分寺僧帳、今以狀下、牒到奉行、

從儀師常耀

延暦四年四月六日

〔今昔物語三十一〕近江國鯉與鰐戰語第三十六

今昔、近江ノ國志賀ノ郡古市ノ郷ノ東南ニ、心見ノ瀬有リ、郷ノ南ノ邊ニ勢多河有リ、其ノ河ノ瀬也、其ノ瀬ニ大海ノ鰐上テ、江ノ鯉ト戰ケリ、〇下略

〔夫木和歌抄三十一 里〕ふるいちの里 近江　正安大嘗會　兼仲卿

ふるいちの名にあらはる、里なればひさしくかゝる池の藤波

〔松屋筆記百五〕近江國愛智郡古文書

蚊野郷戸主從八位下依知秦公成人解申、依正稅稻賣買墾田劵文立事、

十二條、八長田里、二十七廣田口、切田參段、

右件墾田、用正稅稻漆拾貳束、充價直、切常土、與賣大國郷戸主勳九等依知秦公万歳麻呂既訖、望請依式立劵文、如前、仍注事狀、以解、

弘仁十一年十二月五日　墾田主依知秦公富吉女

〔古事記中 開化〕次袁邪本王者、(開化皇子彥坐王子)葛野之別、近淡海蚊野之別祖也、

〔松屋筆記百五〕近江國愛智郡古文書

八木郷戸主秦眞條戸同大召女解申常土賣買墾田立劵文事

十條九里二一六口田壹段

右件墾田、米參斛伍斗矣充價直、切常土、沽口大國郷戸主依知秦淨男既畢、仍立劵文如件、以解、

承和十四年九月三日　賣人依知秦眞大召女

〔松屋筆記百五〕近江國愛智郡古文書

大國郷戸主秦公宗直解申依所負官物常土賣買墾田立劵文事

十條六里五野中田貳段〈副二本券文一〉

右件墾田、充二稻伍拾束價直一、常土與沽無依行德既訖、仍爲レ後立券文如レ件、以解、

貞觀八年十月十一日　　墾田主秦公宗直

〔東大寺小櫃文書上〕□□國愛智郡大目鄕居住依知秦又子解申請所由所司明驗事〈○中略〉

延喜二年十一月□日　　依知秦□□又子

○按ズルニ、此ニ大目鄕トアルハ大國鄕ノ誤寫ナルベシ、

〔松屋筆記百五〕愛知郡養父鄕戸主平屎夜須長戸依知秦須富𠮷女解申、依二用米一賣買墾田立券文事、

合貳段

十二條七里、二十一林田、壹伯捌拾步、直米漆㪷伍升、

二十八林田壹段壹伯捌拾步、直米貳斛貳斗伍升、

右件墾田、用二米參斛一充二價直一、切二常土一、與二賣雪麻呂一既畢、仍立券文如レ件、以解、

天安元年三月八日　　墾田主依知秦公酒留𠮷女〈○下略〉

〔吾妻鏡三十一〕文曆二年七月二十九日庚寅、去二十三日、台嶺衆徒奉レ動二三社〈十禪師客人八王子〉神輿於花洛一、是近江國高島郡田中鄕地頭、佐々木次郎左衛門尉高信代官、與二日吉社人等一起二鬪亂一之故也、

〔佐々木系圖〕

盛季〈盛綱二男　野村小三郎　左衛門尉〉

盛蓮〈山徒、號四郎房、〉〈近江國白藤鄕野村鄕知行、其後日向國四所之庄下向、同國諸縣郡之内、嵐田名、踏切名領庄、〉

慶幸〈佐々木大夫坊〉〈後還二武家一、近州白藤鄕知行、〉

村里名邑

〔東寺百合文書み三十二至四十八〕雜訴決斷所牒　近江國衙

仁和寺雜掌信性申當國圓城寺領事

右如目代宗□□□護代聖惠等注進狀者、入交愛智郡內日吉上下、石寺、安食子郷、八木郷、永野郷、小大國巳上七ケ所之條、無相違云々、此上不及預儀、守先例可沙汰付下地於雜掌云々、以牒、

建武元年十二月七日　中務丞三善○下略

〔郡國提要〕近江　十二郡千三百十六村

御料私領 高八十五万三千九十五石三斗五合五勺九才

犬上郡百二十四村　愛知郡百十七村　神崎郡八十二村　蒲生郡二百二十八村　甲賀郡百三十七村　野洲郡八十一村　栗本郡百十五村　滋賀郡八十八村　高島郡百五十六村　伊香郡七十一村　淺井郡百四十二村　坂田郡百七十五村

〔郡名一覽〕御料私領 一近江國　江州　四方三日半　拾貳郡

高八拾三萬六千八百貳拾九石七斗貳升七勺八才　千五百拾六ケ村

●彥根 東海道百八里　●水口 百九里　●膳所 百廿里半　●仁正寺 百八里

○大溝 東海道百廿七里 美濃路百十一里　○宮川 百十九里　○山上 百廿里　○三上 百十九里

☒大森 百十里 最上圖書助　☒朽木 百廿里 朽木鏈殿助　)(○前田 加州 一万石 前田土佐守

△大津 百廿三里　△信樂 百十七里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔地勢提要補〕郡邑島嶼奇名

近江　栗太郡、上鈎村、川邊村、矢橋村、下物村、綣村、坂田郡、米原村、伊香郡、大音村、高島郡、五十川村、滋賀郡、衣川村、蒲生郡、鐮懸村、三十坪村、西生來村、千僧供村、野洲郡、櫻生村、安治村、神崎郡、位田村、愛知

川宿、

〔古事記 上〕故其伊邪那岐大神者、坐淡海之多賀也、

〔古事記傳 九〕多賀、式に、近江國犬上郡多何神社二座と見ゆ、和名抄に田可郷あり、是なるべし、

〔日本書紀 神功九〕三月○攝政元年　忍熊王逃無所入、則喚五十狹茅宿禰、○中略　則共沈瀬田濟而死之、于時武內宿禰歌之曰、阿布彌能彌、齊多能和多利珥、伽豆區苔利、梅現志彌曳泥庭、異枳迺倍呂之茂、於是探其屍而不得也、然後數日之、出於菟道河、武內宿禰亦歌曰、阿布瀰能瀰、齊多能和多利珥、介豆區苔利、多那伽瀰須疑氐、于泥珥等邏倍菟、

〔日本書紀 天武二十八〕元年七月辛亥、男依等到瀬田、

〔類聚名物考 地理三〕大津里　おほつのさと　近江國滋賀郡　宮　濱等をよめり

〔和漢三才圖會 近江七十一〕大津至京師三里、至膳所一里、子丑至越前敦賀二十三里、牛北至海津舟十六里、

〔近江國輿地志略 志賀郡六〕大津　志賀郡の塊區にあり、日本廣邑三十六のその一にして、近江二湊の第一たり、大津、八幡を當國の二湊といふ、抑この地を大津と名づくることは、古事記に據る、はじめは相津なり、古事記の崇神記曰、故大毘古命者、隨先命而罷行高志國、爾自東方所遣建沼河別、與其父大毘古共往遇相津、故其地謂相津也、伊勢延佳神主云、相津は近江國志賀郡、いまの大津の事なりと、○中略大津相津訓近きを以て改め給ふなるべし、其後天武大友の壬申亂より、大津の都あれはて、古都となりしかば、自古津とはいへり、古都をこつと訓ず、古津またこつとよめり、續日本紀曰、聖武天皇天平十二年十二月癸亥、到志賀郡木津頓宮云々、木津又こつと訓ず、古つと同、その後大津と改りしことは、桓武天皇の朝なり、日本紀略曰、延暦十三年十一月丁丑、詔曰、近江國滋賀郡古津、先帝舊都、今接輦下、可追昔號、改稱大津云々、桓武帝及嵯峨帝この蹟に行幸をなしたまへり、日本後紀曰、延暦二十年三月、幸近江、大津國司奏歌儛、近行宮諸寺施綿、類聚國史曰、大同二年十月乙亥、行幸近江國大津、修禊、以御大嘗也、こ

れらを以て見るときは、舊都のあとに行宮頓宮を建させたまふなるべし、行宮頓宮かり宮にて、假につくろふ御所なり、大友皇子天智の皇子の始て五言の詩をつくり、大津皇子天武の皇子の始て七言の詩を作、本朝文物權輿の地といへるは大津の事なりと、林學士鵞峯の文集に特に賞美しのせたり、誠に勝地といはざるべけんや、京都より江戸に赴く五十三次驛の最初にして、驛路の鈴を傳し其始は、孝德天皇の大化二年に始れども、其時よりの驛にはあらず、昔の驛とはかわれり、五十三次驛の定りしは、慶長已來、神君一統の後の例定なり、東海道、中山道、岐蘇道等を經歷するは、皆此驛によらざるはなし、之かのみならず、北陸道に行者も、亦此驛よりす、平安城の固、要樞の地なり、京より大津札の辻に至り三里北越及陸奥出羽より、京都亦西の國々へ出す諸用の雜物、船にのせて越前敦賀へ出し、敦賀より馬にて荒乳山七里半の山路を越、當國貝津にいだし、又船にのせ湖上二十里を歷て當津に著船、大津の名を宜なり、

〔東海道名所圖會一〕近州大。。津。。京師より初の驛なり、これより東を關東ともいふ、關東二十八州、關西三十八州、京よりこゝまで三里、大坂より十四里也、又草津まで三里半餘也、旅籠町の名を八町といふ、此地は、北越及び淡海國中の産物魚物等船にて運び、日毎に市をなして、京都へ交易す、町數九十六町、諸侯の藏屋舖多し、

〔日本書紀天武二十八〕元年八月甲申、命高市皇子宣近江群臣犯狀、則重罪八人、坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田。根。

〔近江國輿地志略淺井郡八十五〕田根沼　同村○木尾村にあり、二所にあり、土俗相傳、往古萬物の種、此處へ天よりふり、それより天下にあまねきゆへ、此邊を種の莊と云、今は田根の文字に書すと云、

〔東海道名所圖會一〕粟。。津。。里。　これも城下にならざるまへ、膳所五ヶの庄の村里をいふなるべし、

〔日本書紀天武二十八〕元年七月辛亥、大友皇子左右大臣等、僅身免以逃之、男依等卽軍于粟。。津。。岡下、壬子、男依等、斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟。。津。。市。

〔日本書紀通證天武三十三〕粟津岡　粟當作栗、催馬樂云、栗津乃原乃三栗栖野、後撰集云、鷲氏栗津乃杜乃不逢登毛清水爾見之影奈忘曾、壽永三年、源將軍義仲戰死于此、

〔日本書紀 垂仁 六〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、〈中略〉於是天日槍自菟道河泝、北入近江國吾名邑、而暫住、復更自近江經若狹國、西到但馬國、則定住處、也、是以近江國鏡谷陶人、則天日槍之從人也、

〔新撰姓氏錄 右京皇別〕眞野臣

天足彥國押人命三世孫彥國葺命之後也、〈中略〉佐久命九世孫和珥部臣鳥務大肆忍勝等、居住近江國志賀郡眞野村、庚寅年負眞野臣姓也、

〔續修後集東大寺正倉院文書 四十三 裏書〕造石山院所解

散役壹萬參仟貳伯拾貳人〈中略〉

土工一百七十人〈司工九十四人 雇工七十六人〉〈中略〉

六人茲賀郡眞野村白土取遣〈三箇日 單〉〈中略〉

以前起天平寶字五年十二月十四日、盡六年八月五日、請用雜物幷作物及散役等如件、以解、

天平寶字六年閏十二月二十九日案主下

別當主典安都宿禰

〔新撰姓氏錄 左京皇別〕小野朝臣

大春日朝臣同祖、彥姥津命五世孫、米餅搗大使主命之後也、敏達天皇御世、大德小野臣妹子、家于近江國滋賀郡小野村、因以爲氏、日本紀合、

〔日本書紀 天武 二十八〕元年七月庚寅、先是近江放精兵、忽衝玉倉部邑、則遣出雲臣狛擊追之、

〔日本書紀通證 天武 三十三〕玉倉部邑〈古事景行記曰、到玉倉部之清水、以息坐之時、御心稍寤、故號其清水、謂寤居清水也、在坂田郡、〉

〔日本靈異記 下〕彌勒菩薩應於所願示奇形緣第八

近江國坂田郡遠〈遠、今昔物語十七作表、〉江里、有一富人、姓名未詳也、〈下略〉

〔運步色葉集 志〕滋賀樂〈近江〉

〔倭訓栞前編十三〕しがらき　近江甲賀郡の郷名也、今もはら陶器茶茗に名あり、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年八月癸未、詔曰、朕將レ行二幸近江國甲賀郡紫香樂シガラキ村一、卽以二造宮卿正四位下智努王輔外從五位下高岡連河內等四人一、爲二造離宮司一、

〔類聚三代格一〕太政官符

應レ貢二猿女一事

右、○中略猿女養田、在二近江國和邇村、山城國小野鄕一、今小野臣、和邇部臣等、既非二其氏一、被レ供二猿女一、熟捜二事緖一、上件兩氏貪二人利田一、不レ顧二恥辱一、拙吏相容、無レ加二督察一也、○中略右大臣宣、奉レ勅、宜下改二正之一者、仍兩氏猿女從レ停廢上、定二猿女公氏之女一人一、進二縫殿寮一、隨レ闕卽補、以爲二恆例一、

弘仁四年十月二十七日

〔叡岳要記上〕左辨官下圓融院御時　近江國

應下延暦寺代々御願堂塔造作修理間、免中除東坂本幷三津濱苗鹿村住人臨時雜役上事、

天元二年八月二十八日下宣旨

國符　滋賀郡

可レ免二除天台山東坂本三津苗鹿住人臨時雜役一事、

天元六年九月二十五日國符

〔書言字考節用集一乾坤〕矢橋ヤバセ本字八早瀨、江州栗太郡、

〔近江國輿地志略四十二栗太郡〕矢橋ヤバセ村　新濱村の北にある村なり、參考保元物語には矢早瀨の字に作る、今昔物語には矢馳に作る、蓋野洲郡とするものは誤歟、然れども國史にさへ郡を違へる所多し、時の沿革もあれば、誤とも謂がたし、

〔今昔物語二十八〕近江國矢馳郡司堂供養田樂語第七

今昔、比叡ノ山ノ西塔ニ住ケル敎圓座主ト云フ學生有ケリ、物可咲ク云テ、人咲ハスル說經敎化ヲナムシケル、其レガ未ダ若クシテ、供奉ト云テ西塔ニ有ケル時ニ、近江國□□ノ郡ニ矢馳ト云フ所ニ有ケル郡司ノ男、年來極ク此ノ人ニ志有テ、山ノ不合ノ事共ナド常ニ訪ケレバ、〇下略

〔今昔物語十七〕地藏菩薩變小僧形受箭語第三

今昔、近江ノ國依智ノ郡賀野ノ村ニ、一ノ舊寺有リ、其ノ寺ニ地藏井ノ像在マス、其ノ寺ハ檢非違使左衞門ノ尉平ノ諸道ガ先祖ノ氏寺也、

〔田代文書一〕雜訴決斷所牒　田代昔賢丸後改市若丸顯綱

近江國三宅〇野洲郡內十三町幷六町大方等地頭職事

右當知行、不可有相違者、以牒、

建武元年九月二十六日　左近將監大江朝臣〇下略

〔田文七〕江州高島郡御藏入

一千百八石七斗　くちおろし村　常眞分
一三百九拾四石三斗三升　をとわ村　同分
一四百貳石壹斗七升　伊黑村　同分
一千三百六十七石八斗二升　見よ村　同分
一五百壹石七斗五升　太田村　同分
一千七百五十五石　しんほう中庄　同分
一三百七十五石六升　おうとも村　同分
一四百四十石壹斗五升　いかゝわ村　同分
一七百六十石七斗　ふかしみつ村　同分

一五百貳石五斗　新庄東西（小越分）

一千三百九拾五石　舟木村

　合九千貳百三石貳斗

右令取沙汰可運上之候也

　文祿四年八月八日（○秀吉公印影略印）

　　　　　　　　　朽木河内守どのへ

〔古文書類纂（上條目）〕後陽成天皇文祿五年石田三成條目（近江國伊香郡古保利村字東柳野、弓削善次郎所藏、）

　伊香郡之内東柳野村掟條々

一千石につめ、夫壹人とあひさだむる也、此外つかふ事あらば、此印判にて、いくたりいだし候へと申つかわすべく候、然者奉行人を申付おくべき間、十二月二十日に、當村之年中の印判の書物あつめあげ可申候、すなはちはん米をつかはすべき事、（○印判略、中略、）

　右十三ヶ條如件

　文祿五年三月朔日　　　　治部少（花押）

〔近江國輿地志略（五十八蒲生郡）〕安土村　八幡町より一里北なり

中古織田信長安土山に居城ありし時は、甚繁昌して、この村を本として、此邊二三里が間の總名を安土と呼り、今悉舊名にかへれり、其時の町は八幡に引移せり、

〔淡海温故錄（三坂田郡）〕長濱　長濱ハ初今濱ト云、秀吉公長濱ト改ラル、

〔江北記〕文明三年（庚寅）當國初亂之事

一六月（文亀元年）合戰、元は上治（上坂治部大輔）をそむき、淺井、三田村、河毛、渡部、堀其外之衆也、六月十七日之夜、今井館へ治部少輔殿濃州いびより被成御出、今濱へ被取掛、被失勝利候也、瓊山寺殿は今濱に御座候

也、

〔豐鑑一長濱眞砂〕明る天正二年の春、小谷山は北にさかひ雪いとふかく、さえまさる空のくるしみあり、三里餘のいゐゐにあたり、今濱とて古き城所あり、海にそひて雪淺く、舟の往來も便ありて、今信長の御座安土山へも程遠からねば、かふり仕るに煩なし、此所にすまむとて、堀をふかくし、石ぐらを打まはし、とのづくりしてうつり給ひぬ、今濱のなをあらためて長濱とならん、

君が代も我よも共に長濱の眞砂の數のつきやらぬまで、たれ人のよみしといふことも忘れにけり、

〔和漢三才圖會七十一近江〕彥根。（一名佐和山、東至江戶百六里七町、西至京師十七里餘、北東至越前府中三十里、寅卯至美濃大垣九里半、坤至膳所十三里、）

〔扶桑略記三十白河〕承曆三年、攝津國水田郡石良里、有沙門德滿者、上野延末之子也、生年二十歲、兩眼忽盲、經三个年、參鞍馬寺祈禱、無驗、從寺出參龍長谷寺、祈請至第七日、夢見自御帳中老僧出來云、我力不及、汝當往近江國犬上西郡彥根山西寺觀音靈驗之處、致誠祈願、三日之內各可有驗、（下略）

〔西遊行囊抄八〕彥根、（自鳥居本到城于此一里）城主井伊掃部頭、此所ハ湖邊ノ便地、江州ノ大縣也、町數千軒、富人多シ、靈神靈社有、其外寺社多シ、

〔近江國輿地志略二建置沿革〕莊　今當國にて、民間稱する處の莊名、亦舊書の中に出たる其一二を擧る、

志賀郡　錦織莊（寺門侍記補錄曰、源賴義逆館錦織莊云々、）　志賀莊（土俗の傳ふところなり）　粟津莊（源尊氏新羅社の寄文にみへたり、亦土俗の所傳にも有、）　和邇莊（後醍醐天皇、三井寺へ下したまふ處の宣旨に見へたり、）　柳田莊（土俗の傳ふところなり）

甲賀郡　檜物莊（撰集に多し、檜物のもの諸櫻なよめり、是なり、東寺村阿星山長壽寺什物に源賴朝及尊氏の寄文多あり、皆檜物莊東寺と記されたり、）

蒲生郡　火切莊（土俗のつたふる處なり、江家次第に、御齒固の具、有鏡餅用近江火切、）

神崎郡　高屋莊（源氏物語に、高屋の、妙法寺のことみへたり、亦故老の傳る處なり、）　伊庭莊（源爲義に伊庭莊を賜由、保元物語に出たり、）

犬上郡　高良莊園太暦に曰、觀應元年南朝正平五年、石塔中務大輔爲二大將一、江州高其莊邊處々放火、又東鑑にもあり、

坂田郡　小野莊古老の傳ふる處、後鳥羽天皇和歌所をおかせたまひて、富莊を附屬したまふ、和歌所預り藤原俊成、定家、爲家、相續して、領知なりといふ、　坂田莊民部卿奉遠常喜院を建立し、家領近江國坂田莊を割て寄附すると、寺門傳記に見へたり、　柏原莊東鑑に出たり

淺井郡　大浦莊三代實錄にみへたり

高島郡　木津莊　饗食莊俱に比叡山延暦寺の舊記にあり　善積莊東鑑に出たり　吉富莊京東山今熊野におさむるところの奉和年中の院宣に見へたり、　今西莊　下端莊　富山莊俱に東鑑に出たれども、其所在をしらず、　吉塚莊定家の舊領なりと明月記に見へたり、是も所在詳ならず、　横山莊元暦元年、源賴朝園城寺に寄附のこと、寺門傳記に見へたり、所在詳ならず、

〔東大寺正倉院文書五〕司牒　造石山寺所

還却上日帳參紙

一勢○多○庄領二人并物部三狩等上日連署此不別當司署仍却○中略

以前三條事、具知二前件一、今以レ狀故牒、

天平寶字六年二月二日　判官葛井連根道

主典志斐連麻呂

〔東大寺正倉院文書史館本七〕造石山寺所

奉充錢拾陸貫貳伯拾壹文○中略

又海藻肆籠重十二斤價壹斗伍升

天平寶字六年二月九日　勢多莊領

主典安都宿禰雄足

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄薗現存日記事

合〇中略

近江國　滋賀郡保良庄、四十町之內、領知十四町、殘國領、〇中略

已上九箇庄、大體有名无實、或被國領、或被人領、或半分、或三分之一也、然而就庄號注進之、

一顛倒庄々〇中略

近江國　栗太郡世多庄在流記　甲賀郡椋部郡〇郡恐鄕誤　栗村在流記　滋賀郡古津庄在流記

野洲郡柴井庄〇中略在流記　已上二十七處、依流記公驗、明白注進之、

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔近江國輿地志略志賀郡三十三〕栗津庄　栗津七村と稱し、西莊、木下、膳所、中莊、別保、鳥居川に馬場を加へて七村といふ、或は此中鳥居川を除き、松本を加へて栗津七村とも云、然れども舊記を按ずるに、栗津莊といへるは、西莊、木下、膳所、中莊、四箇村なり、別保は則栗津の別保なり、

〔近江國輿地志略志賀郡十二〕新羅社〇中略　尊氏の寄文あり、後記す、

寄進新羅社

近江國栗津別保地頭職事

右當社、昔在去外國蠻夷之域、遷本朝君子之列以來、明德光于千古、冥祐被于万邦、就中曩祖豫州大守、專抽歸心、厚蒙靈睠、因温往蹤、彌增渴仰、仍奉寄當保、欲表至誠、伏冀、皇德與天地俱久、寰海休鯨波之聲、塞垣息虎戎之因、干戈無用、稼穀有年、黎垠考槃、戎狄卒服、寄進之義趣如件、

暦應五年四月二十二日　征夷大將軍正二位行權大納言源朝臣尊氏判

〔近江國輿地志略志賀郡十六〕大和の莊　是高畑の北、作り道の南、往還よりは西の方三町四方許を大和の莊と云、

〔山家要略記四〕坂本大和莊施入事

慶命御記云、元慶七年春ノ三七日間、相應和尚於日吉大宮社、轉讀理趣般若經、靈夢云、法宿大菩薩告テ云、爲報上人法施、吾幣與莊一處、不經幾日、西三條ノ女御施入當國滋賀郡倭莊、奉於常住明王云、

〔近江國輿地志略二十八志賀郡〕雄琴莊　千野、苗鹿、雄琴等の諸村をいふ、○中略

法光寺　同處○苗鹿村にあり、緣起曰、○中略元亨二年後五月一日、大夫史殿春宮大進判院宣曰、法光寺領近江國苗鹿雄琴庄土民以下濫妨事、奏聞之處、事實者太不可然、早停止其妨、可被全所務者、院宣如此、仍執達如件、

〔近江國輿地志略三十一志賀郡〕和邇莊　北濱村、中濱村、南濱村、高城村、今宿村、中村、小野村、以上七ヶ村を和邇莊と云、はじめは和邇村とよべりと見えて、類聚國史及類聚三代格等に、みな和邇村に作、いま按するに、往古は中村を和邇村と稱して、それにのみ民居ありしと見えたり、其餘の五ヶ村は、その後出來たる村なり、去かれども和邇莊と呼來こと、近き事にもあらず、建武のころより稱する事と見えて、三井寺の實錄、寺門傳記補錄に曰、後醍醐院建武三年九月二十四日御寄附狀、

園城寺領　近江國和邇莊　崇福寺

これを以見るときは、和邇莊古來崇福寺領なりしを、相續して園城寺に御寄附のこと、見えたり、

〔書言字考節用集一乾坤〕金勝(コンゼ)江州栗太郡、此地在金勝寺、蓋草創之伽藍、則號金勝寺、

〔近江國輿地志略四十五栗太郡〕金勝(こんぜ)莊　觀音寺村、井上村、荒張村、上山依村、東坂村、中村、以上六ヶ村を金勝の莊と云、往古は金勝寺の領知なるべし、金勝寺に禁制書あり、

禁制　廣慶院領近江國金勝莊

一軍勢甲乙人亂入狼藉井守護使不入事　一伐採山林竹木事

右條々堅致停止之訖、若有違犯之輩者、可被處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

應仁二年正月二十三日

和泉守淸原眞人花押

下野守三善朝臣花押

禁制　三洲伊賀入道知行　江州栗太郡金勝寺莊地頭職

右軍勢甲乙人等不可致亂入狼藉、若有違犯之事者、可被處罪科之由被仰下也、仍下知如件、

長享元年九月二十四日名〇略署

〔近江國輿地志略四十九甲賀郡〕信樂莊。此邊は山深して、信樂の山を、多く歌仙詠せり、續日本紀には紫香樂の字に作る、信樂の莊八村と云は、宮町、勅旨、神山、小川、多羅尾、松原、黃瀨、牧村以上八村なり、朝宮、野尻は、信樂の外村なり、其餘は皆八村の端村なり、

〔武州文書十二〕花押

補任近江國信樂莊上鄕下司幷總追捕使職事　沙彌妙親

右以人所補任彼職也、令相傳領掌、有限御年貢以下御公事等、任先例可致其沙汰者、莊家宜承知、敢勿違失、

元弘三年七月二十四日

〔好古日錄末〕延元後五十年間遺器〇文書附中略

碑　近江國信樂莊寺谷碑刻云、正平二年□月、

〔近江國輿地志略五十甲賀郡〕檜物下莊。石部、柑子袋、平松、針、夏見、吉永、三雲、妙感寺、岩根、朝國、正福寺、菩提寺、東寺、西寺等の諸村を云、臣按するに、檜物はもと遣還野の字にて、日本紀に出たり、往古蒲生郡遣連野につゞき、此邊も遣還野の中なりしゆへに、檜物莊と云、詳に蒲生郡檜物莊の條下に載、

此故に蒲生郡にある檜物莊をさして、檜物上の莊と云、當郡にある檜物莊をさして、檜物下の莊と云なるべし、

〔少菩提寺文書〕近江國檜物莊圓滿山少菩提寺領諸所之事、任先規之判例、全以寄付畢、彌以天下安全懇祈可被抽丹誠之狀如件、

建武二年九月二十日　　尊氏判

圓滿山衆徒中

〔近江國輿地志略五十一甲賀郡〕杣之莊　三大寺六村、矢川七村、新宮九村、池田村、高山村、市原村、野出村、六牧村、馬杉村、高峯村、和田村をいふ、相つたふ、でんげう大師ゑんりやく寺を草創せんとほつし、此地に村をもとめ、杣入し給ふ故に號すといふ、

〔江北記〕杣莊、當方御本領、御代官職被仰付相拘候、

〔近江國輿地志略五十一甲賀郡〕大原莊　高木村、高野村、鳥居野村、中村、上田村、大久保村、神村、相撲村、市場村、和田村五反田村、油日谷七谷、以上二十八村をいふ、大原九村と云ときは、油日谷七村を除くなり、古昔は法勝寺領なりと、盛衰記に見へたり、

〔新編諸宗教藏總錄裏書二山城〕あふみのくによしみの莊の領家職下地半分事、ゆづり狀かきてまいらせ候、〇中略　仍爲後日契狀如件、

建武元年四月二十六日　　仁助花押

〔南部文書一〕注進吉見御莊撿注目錄事

合

建武元年甲戌十二月日

總田數肆拾壹町貳段半參拾歩內

除

貳町捌段小十歩 常覺道濟并成河戒壇岡藥師如來敷地等

〔賀茂注進雜記 下神領〕同 ○壽永三年 ○元暦元年 四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、

近江國　舟木庄 ○中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、儻可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔集古文書 十六判物〕勝定院義持公御判物 京都清和院藏

清和院領近江國船木莊內念佛田拾八町事、任證文等之旨、當院領掌、不可有相違之狀如件、

應永二十七年四月十九日　花押

住持

〔集古文書 三十下知狀〕明應元年下知狀 京都清和院藏

清和院領近江國船木莊內念佛田、幷佛性寺分拾石等事、就今度兵糧之儀、國中寺社領以下雖被成御料所、於當院領者被免除訖、早可被全寺務之由所被仰下也、仍執達如件、

明應元年九月二十六日　前信濃守 花押

筑前守 花押

當院雜掌

〔舟木氏系圖〕賴重三代之後胤舟木兵庫大輔賴夏、雖篤志於朝家、父祖賴重落城後、引籠于本領內江

州舟木莊、不レ立二畝色一、〇下略

〔近江國輿地志略 五十五 蒲生郡〕奥島莊　丸山、奥島、白部、王濱、北津田、中莊等の村をいふなり、

〔近江國輿地志略 二 建置沿革〕此國の中古昔と今とかはれるもの多し、たとへば奥島のごとき、三代實錄には野洲郡とあり、今蒲生郡に屬す、

〔三代實錄 十 清和〕貞觀七年四月二日壬子、元興寺僧傳燈法師位賢和奏言、久住二近江國野洲郡奥島一、聊構二堂舍一、島神夢中告曰、雖レ云二神靈一、未レ脫二蓋纏一、願以二佛力一、將レ增二威勢一、擁二護國家一、安二存鄕邑一、望請爲二神宮寺一、叶二神明願一、詔許之、

〔近江國輿地志略 九十九 土產〕蒲生郡

郁子(むべ)　王の濱の產物、王の濱の土人、每歲十一月、郁子二を朝廷に獻じ奉る、〇中略　土人藏むる所の下知狀、

近江國蒲生郡奥島莊內、贄供御人等申、任二先例一止二非分之課役一、可レ專二調貢一之由被二聞召一畢、可レ令二下知一給上之旨、天氣所レ候也、仍言上如レ件、俊秀誠恐謹言、

文安二年十一月二十一日　左中辨俊秀

進上　尹大納言殿

〔近江國輿地志略 五十七 蒲生郡〕佐々木の莊　或は佐々木鄕と云、今土俗專莊と號することは、佐々木の社あるを以てなり、宇多源氏の佐々木を稱號とする者も、佐々木の先祖成賴と云者、此地に居ることあるを以て家號とし、相繼て稱し來れり、佐々木莊の名甚久し、佐々木の莊、延曆寺に寄附のこと、盛衰記に見へたり、常樂寺村、小中村、慈恩寺村、中屋村、此四村を云、然れども今土俗誤て此近村は、多く佐々木の莊と呼者あり、

〔源平盛衰記 三十〕平家延曆寺願書事

平家ノ一族ハ、公卿モ殿上人モ、同心ニ願書ヲ捧ゲ、山門ノ衆徒、日吉ノ神恩ヲ憑ムベキ由被申タリ、其狀云、○中略

又近江國佐々木庄、領家預所得分等、且爲朝家安穩、且爲資故入道○平清盛菩提、併所廻向千僧供料候也、件庄早爲沙汰、可令知行給候、恐々謹言、

七月二〇壽永二年十九日　平宗盛

謹上　座主僧正御房

トゾ書レタリケル

〔吾妻鏡十一〕建久二年四月五日壬午、大理能保卿井廣元朝臣等飛脚參著、各被獻書狀、去月比、佐々木小太郎兵衞尉定重、於近江國彼莊刃傷日吉社宮仕法師等、仍山徒蜂起、所司捧奏狀參洛、可賜定重身上之由申之、又可差進延暦寺所司等於關東之由風聞、朝家大事忽然出來之、其濫觴、近江國佐々木莊者、延暦寺千僧供領也、去年有水損之愁、乃貢太闕乏之間、云定綱定重父云土民、無所于欲沙汰送之、仍衆徒等、去月下旬差遣日吉社宮仕等官、捧日吉神鏡、亂入定綱之宅、叩門戶破城壁、譴責家中男女、頗及恥辱、于時定重不堪一旦忿怒、令郎從等刃傷宮仕一兩人、此間誤破損神鏡云云、

〔近江國輿地志略六十四蒲生郡〕日野莊。　岡本村より一里餘あり、村井村、大窪村、松尾村を日野町と云、村井は高千石餘、大窪は高八百石餘、松尾は高六百石餘、大凡竈數千五百許あり、是を日野町と云ことは、豐臣秀吉公名付たまひ、諸役免許す、東照神君御朱印あり、日野町は、松尾町、石原町、大窪町、愛智川町、新町、本町、麻生町、岡本町、野瀨町、南大窪町、堅地町、銀町、上鍛冶町、長得町、呉服町、横町、今町、下鍛冶町、杉野神町、紺屋町、仕出町、大將軍町、野田町、內池町、塗師町、三段町、川原田町、淸會町、御舍利町、玉屋町、北町、西宮町、北今町、大凡三十四町計あり、臣按ずるに、此邊より東南甲賀郡の疆界までは、黑檜物の莊なるべし、檜物莊は、本遺迴野とかけり、日本紀に見へたり、文字を後に書改しなるべ

し、日野とひものと訓相近し、疑らくはひもののもの字を略せるなるべし、

〔蒲生文書一〕花押

宛行近江國蒲生郡内日野牧上保内成安名名主職事

合拾町伍段小三十歩者坪付在別紙

右名田者、儀俄左衛門太郎入道道覺、爲先祖相傳名田之間所宛行也、有限年貢以下、恒例臨時課役、無未進懈怠者、永代知行不可有相違者也、仍爲後日所宛行之狀如件、

建武元年三月十八日

〔近江國輿地志略七十一神崎郡〕伊庭莊、　伊庭村、能登川村、安樂寺村、須田村、以上四村を云、

〔保元物語一〕新院召爲義附鵜丸事

其比六條判官爲義ト申ハ、六孫王ヨリ五代後胤、伊豫入道賴義孫、○中略六人ノ子共相具シテ白河殿ヘゾ參ケル、新院御感ノ餘ニ、近江國伊庭莊、美濃國青柳莊二箇所ヲ給テ、即判官代ニ補シテ、上北面ニ可候由、能登守家長シテ被仰、○下略

〔東大寺小櫃文書上〕近江國愛智莊

合水田壹拾貳町○中略

貞觀拾捌年拾壹月貳拾伍日

前豐前講師大法師安寶

依疑捺私印

〔山家要略記一〕大宮權現天照大神分神事

康和五年十二月十日、以近江國愛智莊寄進當社、官符、權中納言大江匡房宣、奉勅、

〔近江國輿地志略七十二愛智郡〕押達莊　土俗あるひは押達の郷と云、然れども順和名抄に押達の郷

名なし、

〔壬生文書 主殿寮所領文書〕近江國押立保事、於寮家年貢者、如元可致其沙汰之由、被仰職政〇近衛候了、可令存知給之由、被仰下之旨、右大臣殿〇洞院公賢所候也、仍執達如件、

建武二年九月二日　前丹波守元遠

謹上　大夫史殿〇壬生匡遠

〔古文書類纂 上狀〕順德天皇承久三年興福寺觸狀 大和春日神社所藏

興福寺領近江國犬上莊　本書此處裏判アリ

件莊、三升米辨之上、守護人佐々木四郎右衛門尉代敷居莊內責取所當等、兼搦取莊民男女七人、令收公一庄之間、有限寺節〇節恐家誤用途悉闕如了、早可被停止武士之亂入也、委細之旨在別解、

承久三年十二月二十一日

〔近江國輿地志略 七十五犬上郡〕多賀莊　順和名抄に田可鄉を載す、いまの多賀の莊なり、

〔淡海溫故錄 三犬上郡〕多賀　多賀莊十五鄉有、此處ヲ當國ノ府中ト云說ハ誤也、當國ノ府中ハ栗田郡守山ナリ、

〔集古文書 十八判物〕織田信長公御判物 家臣久德高矩藏

就今度忠節之儀、多賀莊、石灰莊、敏滿寺領諸入口右以三ヶ所都合參千石分令支配候、本知新知共、分一諸役一圓、令免許之狀如件、

元龜元 六月廿六日　信長 判

久德左近兵衛殿

〔集古文書 十九判物〕大閤秀吉公御判物 家臣久德高矩藏

江州犬上郡多賀莊之內以參千石事、目錄別紙相副宛行畢、永代全可有領知候狀如件、

天正十一　八月朔日　秀吉花押

久德左近兵衞尉殿

〔近江國輿地志略七十四犬上郡〕河原莊　順和名抄に甲良の鄕あり、甲良かはらと訓す、今河原の文字に改るにや、園太曆曰、觀應元年、南朝正平五年石塔中務少輔、爲大將江州高良莊邊所々放火云々、是亦此邊なるべし、高良亦かはらと訓す、

〔江北記〕一中郡淸水莊總追捕師同山候、前五ヶ莊公方闕所ニ成、當方知行有、御代官職被仰付候、

〔近江國輿地志略八十一坂田郡〕下坂莊　下坂中村、濱村、高橋村、戌亥村、以上四村をいふ、

〔江北記〕文明二年庚寅當國初亂之事

一右中候秀維、中郡へ罷越とき、住他注〇住他記誤恐事者同道を放多賀兵衞四郎大成を令同道、下坂莊代官職相拘、彼の莊競望不相果候間、淺井藏人今の備前守親事也、

〔近江國輿地志略七十七坂田郡〕小野莊　此莊は當郡の西南、犬上郡の界にして、湖水の邊なり、所謂物生山村、鳥場村、西山村、上樀村、鳥居本村、西方寺村、百々村、小野村、以上八村を云なり、此莊は古昔後鳥羽院和歌所を置せたまひし時、其領知に附させたまふ和歌所の領、藤三位俊成、及定家爲家へも相續の領地なり、

〔近江國輿地志略八十一坂田郡〕柏原莊　伊吹村、大久保村、藤川村、板並村、三野村、大淸水村、杉澤村、須川村、大野木村、柏原村、梓河内村、長久寺村をいふ、柏原彌三郎領地たりし故に、柏原莊とはいひしなり、

〔吾妻鏡十六〕正治二年十二月廿七日己酉、先日上洛、澀谷次郎高重、土肥先次郎惟光等歸著、申云、高重等上洛以前、官軍發向彼柏原彌三郎、住所近江國柏原莊之刻、三尾谷十郎、襲件居所後面山之間、賊徒逐電畢、今兩使rather伺其行方、依無所據歸參云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年十月九日庚寅、於駿河國蒲原驛、院宣到來、是近江國田根莊者、按察大納

言朝房領所也、依二品御鬱胸、日者籠居之間、地頭佐々木左衛門尉定綱、忽緒領家所務云云、

〔榎戸文書〕伏見殿御領目錄

御領目錄○人給付之中略

一近江鹽津莊　同今西莊兩莊年貢三十五貫加增分三百疋

庭田大納言御恩千疋今西分　冷泉三位八百疋故正永御訪相續給鹽津分

田向三位五百疋○鹽津分中略

永享十二年八月二十八日　當知行分記之

後崇光院御判

〔近江國輿地志略九十一伊香郡〕餘湖莊　中河內、椿坂、大谷、片岡鄉十二村、丹生鄉九村、以上二十四村をいふ、

〔江北記〕文明二年庚寅當國初亂之事

一長享三年に、南より光祿御出張候、於北郡致御方人衆事、上坂治部、淺見、礒野彈正忠彼等三人、本人成候、環山寺殿、祇薗より餘呉莊へ御取退候、

〔朽木古文書〕近江國高島本莊安元名內、古天神西南寄貳段者、任手繼讓狀旨、不可有御知行相違候、任先例所當御公事以下、可被致御沙汰候、仍執達如件、

建武元年四月五日　行忠花押

總若殿

〔近江國輿地志略九十三高島郡〕饗場莊　相傳、いにしへ木津莊と號す、後今名にあらたむといふ、賴朝卿の近臣饗場三郎脊氏の愛童饗庭命鶴丸この地を領すといふ、今市村、辻澤村、米井村、五十川村、岡村、上野村、日爪村、森村、山形村、霜降村、針江村、小池村、深溝村、田井村、木津村、以上十五村をいふ、ある

ひはこの十五村に、堀川村、新町、安養寺村、平井村を加へて十九村ともいへり、いまだつまびらかならず、木津莊の傍示下文等あり、此に記す、古昔は比叡山延暦寺領と見へたり、

改所下文案　木津莊進之

可早停止古賀善積自由濫妨、任舊例打定傍示事、右當莊者、鳥羽院御時、保延年中之頃、被寄附山門領、剩爲後代、被定置四至畢、南十三保、西追分北十八條、多年間敢無違亂之處、自南古賀北善積莊、後山雖令押領、自然送年月之間、彼兩莊之住人等、件四至内不入當莊民、奪取鎌斧之上、剩令蹂躪云々、所行之旨、甚以不當也、且以莊民解狀、觸廻三塔之處、早任舊跡、可打定傍示之由、大衆僉議已畢、凡一天下甲乙輩、恐醫王山王御威、於末寺莊園、敢不令忌默之處、近年立坊莊民、觸事現奇怪之條、不知其子細歟、早任舊例、且依先規可令打定傍示之狀如件、解以下、

建保四年八月三日　小寺主法師慶俊

寺主大法師

都維那大法師

修理別當法橋上人位奉之

上座法橋上人位奉之

山門雜掌、與尊勝院雜掌相論近江國木津莊者、如古賀境事、請文披見畢、如執進代官高久狀井佐々木大膳大夫入道高通代狀者、彼論所十三條之通、爲木津莊内山門領之段無子細云々、此上者尊勝院競望、可全山門雜掌所務之由所被仰下也、仍執達如件、

應永十三年四月二日　沙彌判

佐々木備中入道殿

〔近江國輿地志略九十三高島郡〕善積莊。。。　今津村、新保村、弘川村、大伴村、上弘部村、下弘部村、南生見村、藺生

村、以上八村をいふといへり、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月二十九日丁丑、所衆中原信房者、依爲造酒正宗房孫子、殊被優賞、今日賜近江國善積莊、是雖爲圓勝寺領、致信房所望之上、爲被酬宗房舊勞、如此云云、

〔近江國輿地志略九十四高島郡〕貝津莊　知內村、森西村、辻村、石場村、牧野村、白谷村、上開田村、下開田村、浦村、西濱村、寺久保村、蛭口村、下村、山中村、在原村、野口村、國堺村、小荒乳村、坂下村、落合村、小谷村、上山村、田屋村、茅原村、貝津東町村、貝津中村町村、貝津中小路町村、以上二十七村をいふ、

〔古文書類纂上御朱印并御判物〕後陽成天皇天正十六年豐臣秀吉領知宛行狀御判物　山城大覺寺所藏

就今度聚樂行幸、江州高島郡海津西莊蛭口村內貳百石之事、令宛行訖、彌被勵御奉公、其家之道可被相嗜狀如件、

天正十六卯月十五日　秀吉花押

大覺寺殿

〔吾妻鏡十六〕正治二年二月廿日丙子、親長自京都歸參、具下野國人播磨國總追捕使芝原太郎長保、是景時與黨也、佐々木左衞門尉廣綱相副郎從送進之、親長參御所申云、去二日入洛、同七日、廣綱、基清、相共先追捕景時之五條坊門面宅、縛郎從、其白狀、於近江國富山庄、生虜長保云云、於長保者、所被遣義盛之宅也、

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園、領家、預所、下司、公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒、雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　近江國　細江庄〇中略

藩封

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判下略○

（板戸文書）伏見殿御領目錄

御領目錄○人給付之中略

一近江山。前。南莊。　同七里號三梶爪、田內御恩、　八里村奉行院御定直五分　一得分

参百五十餘石六條殿兩社神供正五九月三百疋宛之

同。北。莊。役四十貫　庭田大納言御恩○重賢相續中略

永享十二年八月二十八日　當知行分記之

後崇光院御判

（慶應元年武鑑）井伊掃部頭直憲溜間従四位上中將元治元子四月任　二拾五万石　居城江州犬上郡彥根江戸ヨリ東海道百八リヨ、東山道百十九リヨ、甲州道同斷、

慶長九、井伊右近大夫直大代草創、以後代々領之、

本多主膳正康穰帝鑑間四品元治元子五月　六万石　居城江州滋賀郡膳所江戸ヨリ東海道百二十リ中、美濃通リ百十九リ中、安中通百二十四リ、甲州通百二十七里、

京極宰相高次居、慶長五、戸田左門一西、同左門氏鐵、元和三、本多縫殿介康俊、同下總守俊次、同六、菅沼織部正定芳、寛永十一、石川主殿頭忠總、同彈正少弼康勝、慶安四年、本多下總守俊次、以後代々領之、

分部若狹守光貞柳間従五位上元治元子五月叙　二万石餘　在所近江高島郡大溝江戸ヨリ東海道百二十七里、美濃路百十一里、

當城地若、往古織田七兵衛信澄居之、中絶、元和五、分部左京亮光信、以後代々領之、

市橋壹岐守長和柳間朝散大夫　一万八千石餘　在所江州蒲生郡仁正寺江戸ヨリ百八里

元和年中ヨリ市橋氏代々領之○中略

（慶應元年武鑑）稻垣若狹守太清菊間朝散大夫　一万三千四十三石餘　在所近江神崎郡山上江戸ヨリ百二

十里

元祿年中、移之、稻垣氏領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕堀田豊前守□□（帝鑑間 朝散大夫） 一万三千石 在所江州坂田郡宮川 江戸ヨリ百十九里餘

元祿年中、堀田豊前守正休、以後代々領之、

遠藤但馬守胤城（雁間 朝散大夫） 一万二千石 居城江州野洲郡三上〔格〕 江戸ヨリ百十九里

元祿年中、濃州八幡ヨリ移領之、○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕近江國（○註略） 管十二、（田三万三千四百二町五段百八十四歩）

〔伊呂波字類抄安國郡〕近江國（管大○中略） 本田三万五千五百二十五町（上一日下半日）

〔海東諸國記〕近江州 郡二十四、水田三萬三千四百二町五段、

〔拾芥抄中末本朝國郡〕近江（大近） 十二郡（中略）（田三萬三千四百五十町）

〔新撰類聚往來下〕國名（○中略） 近江（江州） 十二郡（○中略） 田數三万一千百三十町

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕七十七万五千三百八十石

〔淡海地志三〕古賦二十四郡 今者十二郡

近江

一拾芥抄云、田高三萬三千四百五十町、

一江源武鑑云、高八十二万五千三百七十九斛、

一天正記云、高七十七万五千三百九十斛、

一畫圖云、高八十二万二千石餘、

一武用辨略云、高八十三万二千百二十石、

一高辻帖云、高八十三万二千八百十六石四斗八升五合、

郡高

志賀郡
一高四万八千七百七拾壹石壹斗壹升八合
近州民圖帳二日
高七万三千七百九拾九石九斗三升貳合　村員百四十八ヶ村

高島郡
一高七万四千六百貳拾八石九斗四升三合
増四万七千三百五石七斗六升九合　村員七十七ヶ村

栗本郡
一高六万五千六拾壹石九斗八升貳合
増六万七千三百五石七斗九升五合　村員百四ヶ村

野洲郡
一高六万貳千拾九石八斗四升七合
増六万千貳百七十貳石四斗　村員七十七ヶ村

甲賀郡
一高七万五千九拾四石貳斗八升五合
増七万五千百貳石六斗九升四合　村員百三十ヶ村

蒲生郡
一高拾三万四千五百貳拾壹石四升七合
増拾三万四千六百九斛九斗九升五合　村員貳百十ヶ村

神崎郡
一高四万七千百四石七斗貳升八合
増四万七千三百十七石五斗八升三合　村員八十一ヶ村

愛知郡
一高六万四千貳拾三石八斗七升四合
増六万四千貳百四十三石三斗五升三合　村員百九ヶ村

犬上郡
一高六万貳千九拾六石四斗九升四合
増六万八百七十九石八斗三升壹合　村員百十九ヶ村

淺井郡
一高七万五千貳百拾六石壹斗貳升壹合
近州民圖帳
増七万五千三百四十壹石五斗七升六合　村員百四十二ヶ村

出擧稻

一高八万九千貳百九拾八石三斗五升貳合　坂田郡
近州民圖帳八万九千三百三十四石四斗九升八合　村員百四十七ヶ村
一高三万五千七百七拾九石六斗九升四合　伊香郡
増三万五千七百五十石七斗六合　村員六十七ヶ村
高合八拾三萬貳千八百拾六石四斗八升五合也
増高合八拾三万千壹石八斗壹升六合　村員合千四百三十七ヶ村
〔日本鹿子八〕近江國十三郡、大上々國略○中知行高八十三万千百二十石
〔和漢三才圖會近江七十一〕十三郡一宮建部大明神高八十三万二千百二十二石餘　東山道
〔官中秘策三〕近江國　十三郡略○中
一石高六拾四万五千百壹石餘
〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調略○中
近江國私領御料　一高八拾五万三千九拾五石三斗五合五勺九才
〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻略○中
近江國正税公廨各四十万束、大學寮料一万束、國分寺料六万束、崇福寺修理料五千束、同寺傳法會料一万束、梵釋寺料六百七十六束、國興寺修理料一千束、淨福寺料七千束、延曆寺定心院料三万束、西塔院料一万五千束、文殊會料二千束、造院料二万束、修理國府料四万束、勢多橋料一万束、池溝料四万束、救急料五万一千七百束、俘囚料十万五千束、
〔倭名類聚抄國郡五〕近江國略○註管十二(中略)正三十八萬五千束、公四十萬束、本稻本稻百十九二千三百七十六束、
○按ズルニ、本稻ノ二字衍、又百十九ノ下ニ、萬ノ一字ヲ脱セリ、而シテ七十六束ノ下ニ應ニ雜稻四十萬七千三百七十六束ノ十三字アルベシ、

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進略○中縹黑葛百斤近江國卅斤、越前國卅斤、丹波國廿斤、○中略菥安草二千圍近江國五百圍、丹波國五百圍、竝交易所進、○中略調絁○中略二百疋白一百疋、參河國所進、色一百疋、近江國所進、○中略黑米二百斛近江越前二國各五十石○下略

〔延喜式二十四主計〕近江略○中右十二國並上絲略○中

近江略○中右廿九國輸絹略○中

近江國行程上一日、下半日、

調二色綾卅疋、九點羅二疋、白絹十疋、緑帛廿疋、帛百卅疋、柳筥一合、缶六十口、酒壺八合、𤭯瓮四口、水椀四百八十合、大筥坏一千三百六十口、小筥坏百六十口、深坏六十口、麻笥盤廿四口、自餘輸絹、　庸韓櫃卅三合、塗漆五合、白木二十八合、自餘輸米、　中男作物、黄蘗三百斤、紙、胡麻油、醬鮒、阿米魚鮨、煮鹽年魚、

〔延喜式二十三民部〕年料舂米略○中近江國内藏五十石、省五百石、大炊一千二百石、縫三十石、○中略

年料租舂米略○中近江國二千石○中略

年料別貢雜物略○中近江國筆二百管、紙麻一百十斤、零羊角四具、馬革十七張、○中略

諸國貢蘇番次略○中近江國十八壺七口、各大一升、十一口、各小一升、○中略右八箇國爲第三番卯酉年○中略

交易雜物略○中近江國白絹十二疋、縹黑葛卅斤、菥安草五百圍、鹿皮十張、大豆六十石、胡麻子五石、醬大豆廿石、油二石、糯二合、隔三年進醬大豆十石、大豆十四石、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子略○中近江國郁子二輿籠

〔延喜式三十九內膳〕年料略○中近江國煮鹽年魚二石、鮒、鱒、阿米魚、氷魚、○中略

山城國近江國氷魚網代各一處、其氷魚始九月、迄十二月三十日貢之、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥略○中

近江國七十三種　青木香十六斤、黄芩七斤十三兩、芎藭、香薷各十五斤、茵陳蒿六斤、黄連二斤十四兩、前胡十五斤五兩、王不留行二十斤二兩、蝭衙八斤五兩、茄苺六斤十兩、枸杞十三斤三兩、黄菊花一斤二兩、桔梗三十五斤、藁梁香五斤十兩、蕳茹五斤一兩、白朮三十六斤、狼牙十四斤、枳實四斤八兩、澤

漆十五斤五兩、藍漆一斤八兩、昌蒲一斤一兩、石韋五斤、漏盧九斤、黃蘗十三斤、黃芪二斤四兩、龍膽四斤三兩、玄參十三斤、苦參三十九斤、藁本五斤八兩、茈茄四斤三兩、紫參十一斤、躑躅花一斤十兩、杜仲四斤、澤寫三斤、慧苡芢一斤八兩、細辛二十六斤八兩、僕奈七斤、白芷九斤、白前一斤二兩、商陸、木斛各二斤八兩、芍藥一斤、白薇一斤十三兩、松蘿十兩、松脂十斤七兩、大靑二斤十二兩、土瓜六兩、瞿麥一斤二兩、栝樓九斤、大戟十斤一兩、地楡四斤二兩、葛根二十二斤八兩、桑螵蛸一銖、白殭蠶一兩、蛇脫皮一兩、干地黃一斗二升、梔子五斗、署預、桃人各一斗、麥門冬一斗五升五合、天雄、烏頭、牡荊子各六升、決明子二升、蛇床子二升二合、葍蓿子一升、葵子四升、車前子八升、吳茱萸三斗、蜀椒二升、白花木瓜實十斤、山茱萸二斤、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執㯃之圖也、○中略宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略近江鮒、又餅

〔庭訓往來〕近江鮒、淀鯉、

〔毛吹草　三〕近江

蛇骨　蟬蛻　刅安　辛灰　石灰　滑　鯛大豆　納小豆大納言ト言世俗ニ是ヲ　葭箔簾ニ用之　細美衣地

昆元丹　湖水鮭　鱠鯰　鯎　鰐　ワタカ　鯉　似鯉　山田丸餅　源五郎鮒大ナル鮒ヲ取テ織田ニ度ノ　〔源五郎ト云舉ノ力ヘ進ス、故ニ是ヲ源五郎ト名ヅタ、〕　同鮨　鯏　靑花紙　コノ濱海老　堅田小糸餅　鯏　煎餅　和邇

崎鈔　舟木大溝紅葉餅　同骨拔鮓　越川モロコ　木戸石切石ニ用之　朽木塗物盆鉢五器等　炭　砥

石　葛川柳厚板碪板物ニ用之　碓棹柱　綾卷横槌　海津油木當所ニ多作之　天限膏藥　飯浦薰木　志

賀山中大根　柚解餅　坂本𪗱　柳園子　膳所米　勢多燒物　鍍鑄形土　柴敷松葉路地ニ用之、當所ノ

葉色黑ヨシト云　蜆貝　鱣　田上氷魚　水晶　甲賀鐵炮國友ト云　滋賀樂燒物　齒朶正月用之　日野餛

餞　荻　鐵炮　五器　草津樑　守山𥿻　水無口矢根　キセル　篭履　葛籠笠　菅宮菅笠

竹生島表　八幡圓座　燈心　多賀杓子　高島硯　辻村鍋釜　武佐升　墨　栗本スクモ栗ノ葉土ナリ、

下ニ埋レテ、木ノ知タカマメレリ、當所ニハ蘄ニ用ㇾ之、又香爐ノ灰ニ宜ト云、　伊吹蓬艾　當歸　山葵　獨活　兵主菜（ヒヤウブナ）　小山鳥ノ子

板並綿　長濱糸　高宮布　野洲晒　觀音寺納豆（汁ニ用ㇾ之）　追分針

〔淡海地志　三〕海陸土產

夫土產、天所ㇾ生、地所ㇾ宜也、故天不ㇾ生、地不ㇾ養、君子不㆓以爲㆒ㇾ禮、鬼神弗ㇾ饗也、居ㇾ山以㆓魚鼈㆒爲ㇾ禮、居ㇾ澤以㆓鹿豕㆒爲ㇾ禮、君子謂㆓之不㆒ㇾ知ㇾ禮、出㆓禮記㆒、

志賀郡

一大津　鱗乘賣買京車牛馬集、雪駄、楊枝、　一膳所　米、茶問屋、眞野筵、　一坂本　柳園子、小刀つか、きせる、　一衣川　やき餅　一三井寺　黑かは茸、はんミやう虫、　一片田　小糸餅、せんべい、　一石山　松茸、鮒、　一志賀　山中大根、袖翁餅、　一叡山　松茸　一飯室　菩提樹數珠　一大谷山　松茸　一和邇崎　紗　一勢田　蜆貝、靑瓜、柴敷松葉、鍍のいがた土、鰻、うなぎ、　一木戸庭石、切石、庭松、　一苗鹿　壁のうへ塗の土　一上分　針屋（追分ノ書誤リナルベシ）　算盤、繪、　一國分燒物　一尾花川　麥　一葛川　柳厚板、からうす、杼木、あやまき、よこづち、　一金勝村　ーもゝ

高島郡

一高島　硯石　一朽木　釜、砥石、炭、　一梅津　油實　一舟木大溝　紅葉餅

栗太郡

一山田　靑花紙　丸餅　一田上　氷魚、水晶、立花下草眞松、　一草津　うばが餅、馬のむち、　一守山　檞　一富川　椛下草　一辻村　鍋釜、らうそく、　一三上　松だけ　一北櫻　土器　一金勝村　山もゝ

甲賀郡

一甲賀　鐵飽、忍人、信樂、燒物坪、　一水口　きせる、矢根、籠、履、葛籠、　笠　一石部　梅木の藥　一

桐生山　礪石、いけずき名馬、伊香谷する谷より出、

蒲生郡

一日野谷　温飩　岩木　朝日山の茶　きせる　一五器　炭、鮎、蕪、　一土田　すくも（地中より出、薪にす、）

一木濵　海老　一觀音　納豆　一八幡　ゑまとうゑん、疊表、圓座、　一武佐　墨、はせ、升、　一奥島　表、むべ、（禁中へ上ル、）　一沖島　普請石出　一岩倉　石舂、切石、

野洲郡

一野洲　さらし　一兵主　菊、蕪、　一篠原　もち米、納豆、　一長命寺　竹（山王祭に役行、此山より出ル、）

神崎郡

一ふゝど　大納豆

犬上郡

一高宮　一多賀　島布、四十九町之つゞら細工、きせる、　一佐和山　杓子、牛房、松だけ、

坂田郡

一長濵　いと綿、つりがき、　一神田　黒大豆　一國友　鐵炮　一伊吹　からみ大根、もぐさ、うど、山葵、藥種、石灰、

淺井郡

一小谷山　松茸　一飯浦　薫木、すいの杓子、うど、わらび、　一竹生島　竹（舟棹に用ゆ、）

愛知郡

一愛知川　もろこ　川崎あめ

湖には

一水鮭　鰣　鯰　鮒　鰱　似鯉　雜魚　もろこ

山には

一　蒟安　辛炭　蛇骨　蟬蜕　滑

〔近江名所圖會 二〕產物　大根（山中志賀）　蕪（兵主、玉器、二種ともに、其根大サ凡一抱へにて、引ぬきし穴は井戸にひとし。）　榧子（奥島櫨、兵衛と）

（云もの、毎年十一月朔日、禁中に獻ず。）　烏蒻（八幡）　からみ大根　芥子　瓜（清水平田）　獨活　山葵　楊梅（伊崎）　梅漬（竹生島）

茶（松尾寺、政所。）　麥（尾川花）　松茸（勢田山、石山、叡山、大谷山、大津山、三上、佐和山、小谷山、）　黒皮茸（三井寺）　藥種　石灰（巳上伊吹山）　竹

（長命寺山より出るは、山毛の竹也、又竹生島は舟の棹に用ゆ、又安土、）　榴子（海津）　すくも（地中より掘り出し薪とす、是いにしへの栗の大樹の根ならん。）　蘆

蘭（奥島）　絹　縮緬　糸綿　つり柿（長濱）　布（高宮）　晒布（野洲）　無端僊伴（佐々木家の具足屋也、其子孫のもの、農夫までこれを着す。）

扇骨　蚊帳（八幡）　硯（高島）　はせ　升　墨（武佐）　石（白部）　材木（舟木）　庭石　切石　庭松（木戸）　盆山敷砂

（大洞也、方解石共に出ブ、）　岩木（伊吹）　椀（日野）　陶器（信樂、國分、）　綿（栗太、かや野、）　波文（彦根）　天狗石（さゝの尾瓦山）　餅（醒井口井青、な合てかき）

（餅とせり）　すりはり餅　杓子（多賀）　蠟燭　鍋（辻村）　柳團子　小刀柄　きせる（坂本）　縫針（石場川の）　鎗（守山）

忍人（甲賀）　鐵炮（國友）　八合升（武佐判にて、是桀田靜家の創由、軍中に兵糧の量とす、）　馬（大津）　石垣築（阿野の人名人として、今も諸侯に取用らるゝ所也、）

やき餅（安川）　煎餅（醒日）　斑猫（三井寺）　釉解餅（志賀）　菩提樹數珠（坂本）　靑瓜　柴　敷松葉（勢田）　壁上塗土

（鹿苗）　栁厚板　からうす棹木　綾巻　横網（共に富川）　油木　砥石（相生山）　炭（朽木）　靑花紙（山田）　水晶（田上、）

（同木、）　立花下草眞松（同上）　鞭（草津）　土器（北…）　楊梅（金勝寺）　きせる　矢根　籠履　葛籠笠（共に水口、又つゝら町、）

いけづき馬（伊香郡るみ谷す）　温飩（日野）　茶　炭　鮎（五番）　納豆（觀音寺）　縞　疊表　圓座（八幡）　石臼

切石（岩倉）　餅米　納豆（飯縄）　靈木　メイノ　杓子　獨活　蕨（飯浦）　鈴虫（尾の河原）　松虫（平田山）

〔續日本紀 十四聖武〕天平十四年十二月戊子、令近江國司、禁斷有勢之家專貪鐵穴、貧賤之民不得採用、

人口

〔宮中秘策 二〕近江國　十三郡（〇略）

一人數五拾七万五千貳百拾六人　內（貳拾九万五百人　男）（貳拾八万四千七百拾六人　女）

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）（〇中略）

一御料私領人數五拾三万貳千九百六拾八人　高八拾三万六千八百貳拾九石餘　近江國

内 貳拾七万千貳百九拾八人 男
貳拾六万千六百七拾人 女 ○中略

弘化三丙午年諸國人數調

一御料私領人數五拾四万千七百三拾貳人　高八拾五万三千九百九拾五石餘　近江國

内 貳拾七万貳千九百三拾四人 男
貳拾六万八千七百九拾八人 女

風俗

〔人國記〕近江國

近江國之風俗ハ、賢佞之間ヲ兼タル風儀ナリ、雖然賢智之人ヲ聞ク事ナシ、佞人多カルベキナリ、身持上手ニ而、人ニ非ヲ可被討事ヲ言葉ニモ不顕而、隠非而善ヲ説ク、然ル故ニ心ヲ不付而是ヲ見ルトキハ、一段コノ國ノ人ハ、總而キハダチ餘國ニスグレタリト見ユルナリ、是ヲタトヘテ以論ズルニ、カネニヲナジ、カネニハ金有、銀有、銅有、鐵有、錫有、鉛有、ミナカネニ而ミナ格別也、サレバコノ國風、カネトイヘバ結構ノヤウナレドモ、金ニアラズ、銀ニアラズ、タヾ銅鐵鉛錫ノウチ也、是ヲ以是ヲ見レバ、コノ國ハ半佞國ト可知、佞人ハ必利根利發利口ニ而、言舌ハ賢人ニモ劣ルコトナシ、吾愚ニ而賢佞ヲシルベキヤウナシ、唯善惡言行ヲ案而可知也、　口傳

〔松屋筆記九十六〕近江ドロバウ伊勢コジキ

俗諺に、近江ドロバウ、伊勢コジキといへり、○中略關東にては盜人をドロバウといひ、放蕩者をドウラクモノといへり、京邊にては放蕩者をドロバウといひて、盜人の事にはいはず、近江ドロバウ伊勢コジキは、上方人のいひ出し語歟、坂東人のいひ出たる歟、出所によりて其意別なるべし、

名所

〔近江名所圖會二〕風土　湖邊の土は、灰汁なくして、水に泥なし、故に桑を養ふには淸くして、又茶にもよく合へり、爰を以て、人性尤正直にして、音聲淸濁をよく分てり、

〔山槐記〕元暦元年九月十五日辛丑、近江國注進風土記事、

志賀山　大松原志賀　筏立郷同　青柳里同　信楽杣甲賀　佐野山里神崎　千松原犬上　千鳥浦神崎　千倉里甲賀　安吉郷蒲生上　富羽里野洲北　櫟村同　益田橋蒲生下　穐畠村野洲　大原山甲賀東　朝日里浅井　松江同　千束橋蒲生下　勝野濱高島　青羽山　萬木(ユルキノ)杜　廣瀬郷同　萬農池　稲倉山浅井東　長倉山　萬木泉　玉井栗太　高宮郷犬上　河上里眷積　千草原　萬世濱　鶴濱井　鏡山蒲生　會坂關志賀　石根山甲賀　三上山　高月川浅井　打出濱志賀　日雲里　玉蔭井　勢多橋栗太　梅原坂田　佐野鯑橋神崎　祝郷　大岡山　泉川　五井江栗太　長濤池　玉川里　石根山甲賀　板藏山　神山　高御藏山　彌高山坂　龜岡　吉水郷　安良郷栗太　小松原志賀　香高郷　富津濱同　國見岡　玉野郷　比良山　藏部山　心見里志賀　岡見牧　篠原堤　大瀧山　大津浦　富野山　日吉社　彦根山犬上　石山　金柱古麻長者持佛也　外白川同　衣川志賀　内白川甲賀　安曇川同　龍川栗太　枌瀬伊賀

右注進如件

元暦元年九月　日

此文不加懸紙入寶宮見了返給

〔日本鹿子　八〕同國近江〇名所之部

當國は、南北へ廣き間名所東西に有之、南北にはすくなし、海より西、京より東へ先相坂山迄三里なり、

西近江分

關小川　相坂の山中也、關の清水共、岩清水とも、關川とも云、

相坂山　關山　手向山　松本の濱と、關との中間にうちつゞきて有名所なり、

打出の濱　湖の邊なり、關より十町ばかり東なり、今津の關と云所也、打出よりは南、西近江の分、

石山寺への順道也、後鳥羽院の御製、

駒なべて打出の濱を見渡せば朝日にさはぐしがのうら浪

粟津の森　粟津の汀とも云也、湖の邊也、

關越て粟津の森のあはずとも清水に見えし影をわするな

勢多ノ長橋（但唐橋共云）　粟津の南也、橋は西へかけたり、長九十六間あり、橋の上より左に石山寺見ゆる、無雙の景地也、新古今雜の歌に、匡房、

眞木の板も苔生ふばかり成にけりいく代へぬらん勢多の長橋

石山　觀音のれい地也、草創緣記佛欄の所有之、湖の邊、勢多より南也、此山のまへになりて、湖も川流也、石山の東を南へ流たり、此流の末櫻谷に流て、宇治へ出也、京より行程五里也、勢多石山の中間十町ばかり也、藤原長能のうたに、

都にも人やまつらん石山の嶺にのこれる秋の夜の月

大津　宿あり、打出の濱より北なり、間十町計也、東は湖、西は山也、

三井寺　大津の奧也、園城寺と云也、草創緣記佛欄の所にあり、此所三井の水にて、王子のうぶ湯をめさる、依之御井と書といふ節あり、

滋賀　唐崎　花園　大輪田山越といふは、相坂より北に如意越とて道有、志賀の山より西面に如意寺とてあり、山越の東に園城寺有之、志賀と云は古への都の跡也、

荒にけりしがの古郷冬くれば所もわかぬ雪のはなぞの

唐崎　志賀に續たる所也、此所にひとつ松といふあり、神木也、

眞野　打出より、坂本へは中間三里計也、入江あり、坂本より北也、

唐崎や長柄の山にあらねどもをさゝ波間の眞野の秋かせ

堅田浦　眞野のならび、北沖に出たるなり、

　あふことは堅田の浦にひく網の目にもたまらぬわが泪かな

比良山 但高根共云 京より北國への道也、十二里也、京より丑のかたに高く見ゆる山也、麓の海の汀に、白鬚明神御座也、比良の北のかたに、小松と云名所有、道因法師のうたに、

　嵐吹ひらの高根のねわたしに哀時雨る神無月かな

馬島　郡の名也、小松より北のかた也、

玉村　志賀の郡といふ說あり、さもこそあらめ玉村といふ名所未詳、

　うつろはで庭もせ白き初雪におなじ色なる玉むらの里 ○竹生島、竹島、

鹽津　海津　鹽津と云より、北に海津と云所あり、近江の北也、越前へ行に、あらち山と云名所の南の湖ぎはなり、鹽津は越前のさかい也、いぶきの麓也、

　鹽津山打越くればわがのれる駒のつまづく妹こふらしも

　あらち山雪げの空に成ぬればかいつの里に霰ふりつゝ

　東近江の分

信樂城　當國の南のはし、伊賀のかた也、金葉集のうたに、隆源法師、

　都だに雪降ぬればしがらきの眞木の杣山跡たえぬらん

田上川　石山の東也、程ちかし

　衣手の田の上川や氷るらんみほの山風さえまさる也

山田渡、矢橋の渡、　二所ともにちかき間にあり、東近江也、粟津の向也、打出より乗船して渡れば、山田の渡りは近し、矢橋の渡は五十町計也、兩所の間十町也、山田矢橋の渡シ舟といふ、勢多の橋を粟津よりまはれば、野路より、山田は北に當ル也、

野路篠原　守山の寅のかた也、鏡山の麓也、玉葉旅のうたに、安嘉門院四條、
　打時雨古郷おもふ袖ぬれて行さき遠き野路の篠原
三上山　三上の嶽と云、此山の麓を、北へ流たる川を夜須川といふ也、攝政前太政大臣、
　はかりなる三上の山をめにかけて幾瀬渡りぬやす川の波
守山　山はなし、里の名也、京より七里也、野路より北也、東國への道なり、參議雅經のうた、
　此比は月こそいたくもる山の下葉のこらぬ木がらしのかせ
　守山の宿を過ては、やす川を渡る也、篠原といふ宿、此次に有、鏡山の麓也、
鏡山　原より北也、守山より東北のかた也、篠原は此山の西のふもと也、
　鏡山いざ立よりて見てゆかん年へぬる身は老やしぬると
月出島　鏡山より西也、海士の釣舟などよめり、
老曾森　鏡の宿より丑寅のかたなり、間近し、後拾遺夏のうた、
　東路の思出にせん郭公老曾の森の夜半の一聲
蒲生野　宇禰野
　かまふの丶玉のお山に住鶴の千年は君が御代のかずなり
　近江路を朝立くれば宇禰の丶にたつぞ鳴成明ぬこの夜は
鳥籠山　犬上の郡也、犬上山と云也、老曾より北也、いさや川、とこの山の麓也、
　犬上のとこの山なるいさや川いさとこたへて我名もらすな
　いさや川は、東より西へ流たり、ちいさき流也、いさ丶川共、名取川共云也、
小野の宿　とこの山より十町ばかり北のかた也、此所をあさちが小野ともいふ也、
柏原　小野の宿より北也、宿あり、京より十八里也、

醒井　岩根よりわき出る水也、東より南へ流たり、石地藏、水の中にたち給也、此井をさめが井といふことは、むかし日本武のみこと、東夷征罰し給ひし比、當國伊吹の山に入給ひしに、伊吹大明神大蛇と現じ、道の中にわだかまりしを、尊とびこへ給ふとて、御足すこし大蛇のひれにあたり、それよりいたはり給ひ、大ねつきさしけるを、道のほとりにありける清水に、御足をひたし給へば、そのまゝねつきさめけりとなん、さてこそ此石はありけるといへり、

沒て知人しもあらば醒井の清き心をあはれとやみん

梓川(アヅサガハ)　伊吹山つゞき也、梓山と云の麓を流るゝ川也、此川原を過れば、美濃の不破の關也、

筑摩　坂田郡の內也、明神の社あり、緣記草創、神社の所に有之、此神は女の男をいのるに、四月朔日の祭の日、すてられし男のかず鍋をかぶりてまいり、またの男をいのり侍るとは傳る也、拾遺戀のうたに、

近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋のかずみん

水莖ノ岡

水くきの岡の淺茅のきり〴〵す霜のふりはや夜寒成らん

〔書言字考節用集十數量〕近。江。八。景。唐崎夜雨、石山秋月、三井晩鐘、矢橋歸帆、粟津晴嵐、勢多夕照、比良暮雪、堅田落雁、

〔與佐久間洞巖書一〕八景の始は、宋人か元人か宋復古と申す名畫、山水に妙を得たるが一軸を畫かれ候を、凡一代の出來物に候を、人々その興ある處に名を題し、終に八ッの名出來候と申候、これによりて八つの名そろひかね候所とも、畫樣に隨ひ候故のことゝ申候、これより好事の人、詩をも題咏し候き、それを又八ッとし候ことは、沈約が八詠樓に倣ひ候とも申し、李太白金華闕八景と申す一句により候共申候が、本邦にてわけてとりはやし候は、東山公方の御物に、玉澗が八景候故と聞え候、されどこなたの景をそれに擬し候事になり候ひしは、慶長元和

の頃ほひ、京の圓光寺の長老、故有て近江に蟄居の時分、近江の景を瀟湘の八景の題を用ひて摸しなされ候を、時の堂上衆歌も候ひしが、これ近江八景とか申ものに候、夫より此かた、國郡はさておき、當時大名旗本衆之の別業山莊等に、八景のなきは一所もなきやうになり來り、こゝかしこより詩など心得候ものにはその詩、歌など心得候人には、その歌望まれ候事むなしからず候、異國にて八景と名づけ候にも、十も二十も候、八ツに限るべからぬ事、或は詠と云ひ、或は勝といひ、境といひ、總と云のごとき、其名も其數も定まらぬことゝ勿論に候、しかるに本邦の世俗、景として夜雨秋月ならぬなく、歸帆落雁ならぬなく候は、あまりに不雅なる事にや、中國の人は申に及ばず、朝鮮の者の見及び候ても、いかに日本の景はこれに限り候歟とも申べく候、又日本の景、皆々瀟湘の奴隷に候なども、申ほこり候べく候歟、これによりて、老拙〇新井君美はわかきより其詩はなく候、〇中略

十一月十三日

〔近江國輿地志略〕五湖水

琵琶湖八景あり、呼て近江八景といふ、何人の名づけしことをしらず、西土瀟湘の八景に比すといへり、なんぞ八景のみに止らんや、千万の佳景また其中にこもれり、琵琶湖八景といふは、

勢田夕照　石山秋月　粟津晴嵐　比良暮雪　唐崎夜雨　堅田落雁　三井晩鐘　矢橋歸帆

江陽日記曰、明應九年八月十三日、近衞政家公同尚通公父子、佐々木高賴の招請によつて、近江に淹留日を歷にけり、此時政家公八詠あり、

勢多夕照　露時雨もる山遠くすぎ來つゝ夕日のわたる勢多の長はし

石山秋月　石山やにほのうみてる月影は明石も須磨もほかならぬかは

粟津晴嵐　雲はらふ嵐につれて百船も千舟も浪の粟津にぞよる

貢租

唐崎夜雨　夜の雨に音をゆづりて夕風をよそに名立るからさきのまつ
比良暮雪　雲はるゝ比良の高根の夕暮は花のさかりに過るはるかな
堅田落雁　峯あまたこへて越路にまづちかきかたゝになびき落る雁がね
矢橋歸帆　眞帆引て矢橋にかへるふねはいま打出の濱をあとの追かせ
三井晩鐘　おもふその曉ちぎる始ぞとまづきく三井の入あいのかね
〔近江名所圖會二〕近江八景〈國木の絶景をあつむ、比良、堅田より三井、石山につらなり、粟津、辛崎、勢田、矢橋をあはせ、瀟湘の八景になずらふ、〉明應九年八月十三日、近衞政家公尙通公父子、佐々木高賴の招請によりて、江州に掩留ありて、詠歌序など作れり、八景の題號此時より始る、詩歌數多有、略之、〈或は永祿五年ともいへり、〉
○按ズルニ、琵琶湖ノ事ハ、湖篇ニ載ス、
〔延喜式二十五主計〕凡左馬寮秣料米、近江國百五十斛、〈○中略〉以彼寮請文勘會抄帳、
〔延喜式二十八兵部〕諸國器仗〈○中略〉近江國〈甲六領、横刀二十口、弓四十張、征箭四十具、胡籙四十具、〉
〔延喜式三十四木工〕鍛冶戸〈○中略〉近江國四十四烟

名稱

古事類苑

地部十六

美濃國

美濃國ハ、ミノ、クニト云フ、東山道ニ在リ、東ハ信濃、飛驒、西ハ近江、伊勢、南ハ尾張、三河、北ハ越前、飛驒ニ界シ、東西凡ソ二十六里、南北凡ソ十九里、其地勢ハ概シテ山嶽多ク、東北部ハ美濃、飛驒山地ノ一部ニシテ峯巒重疊シ、特ニ東部ノ信濃ト界ヲ接スル邊ニハ、木曾山脈横リ、山勢最モ嶮峻ナリ、而シテ漸次國ノ中央ニ向テ低ク、遂ニ西南部ニ至リテ、尾張國ニ連リテ一大平野ヲ開キ、木曾川、揖斐川、長良川等ノ諸川ハ此平野ヲ貫キテ、伊勢海ニ朝宗ス、此國ハ古ヘ國府ヲ不破郡ニ置キ、多藝、石津、不破、安八、池田、大野、本巢、席田、方縣、厚見、各務、山縣、武義、郡上、賀茂、可兒、土岐、惠奈ノ十八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、天正年中、豐臣氏尾張國ヨリ海西、中島、葉栗ノ三郡ヲ割キテ此國ニ附シ、凡テ二十一郡トス、明治維新ノ後、石津郡ヲ上下二郡ニ分チシガ、後更ニ上石津、多藝二郡ヲ併セテ養老郡トシ、下石津海西二郡ヲ併セテ、海津郡トシ、羽栗、中島二郡ヲ併セテ羽島郡トシ、池田郡ト大野郡ノ一部トヲ併セテ揖斐郡トシ、席田郡ト大野郡ノ一部、及ビ方縣郡ノ西部トヲ併セテ本巢郡トシ、厚見各務二郡及ビ方縣郡ノ東部ヲ併セテ稻葉郡トシ、新ニ岐阜市ヲ設ケテ一市十五郡ト爲シ、岐阜縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕美濃

〔運歩色葉集 見〕美濃

〔日本風土記 一 皆都島名〕美濃 米奴ノ

〔南留別志 五〕飛驒國、美濃國は、道の左りみぎりといふやうなり、

〔美濃明細記 一〕美濃國

當國有三野、所謂靑野、大野、後爲郡名各務野也、故往古稱三野國、國造本記三野國是後用好字稱美濃國、號濃州、

〔古事記 上〕此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音到而弔天若日子之喪時、自天降到天若日子之父、亦其妻、皆哭云、我子者不死有祁理、此二字以音、下效此我君者不死坐祁理云、取懸手足而哭悲也、〇中略於是阿遲志貴高日子根神大怒曰、我者愛友故弔來耳、何吾比穢死人云而、拔所御佩之十掬劔、切伏其喪屋、以足蹶離遣、此者在美濃國藍見河之河上喪山之者也、

〔常陸風土記 久慈郡〕郡東七里太田鄕、長幡部之社、古老曰、珠賣美萬命、自天降時、爲織御服、從而降之神名綺日女命、本自筑紫國日向二神之峯、至三野國引津根之丘、後及美麻貴天皇崇神之世、長幡部遠祖多氏命、避自三野、遷于久慈、

〔新撰美濃志 一 美濃全國〕州號は、異國のさまをまねびて、よからぬならひなれど、むかしより詩文には用ふる人多く、本朝文粹、本朝麗藻、田氏文集、元亨釋書、砂石集、日本紀竟宴和歌の橘朝臣直幹が歌の前書等に美州とかきて、頭文字を用ひしは正しく、同じ田氏文集、本朝無題詩等に濃州とかきしより、いまに至るまで通用となりしは、かへりてたゞしからず、伊賀伊勢頭文字同じければ、伊州勢州と上下の文字を用ひわけしはむべなり、美作に作州と下の文字を用ひたれば、當國にはさしつかへなく頭字を用べき事也、

〔倭訓栞 前編 美 三十〕みの　みの、國は、古事記に三野と書る本義なるべし、國に大野三所ありといふ、舊事紀に見ゆ、本巣郡に美濃鄕あり、

〔古事記傳十三〕美濃國、中卷には三野とも書り、名義眞野なるべし、

〔諸國名義考上〕美濃

和名抄に、美濃(國府在不破郡)名義は各務野、靑野、賀茂野などあれば、三野なるか、または野を稱へて眞野なるか、上にいへる參河の例をも思ふべし、古事記傳に、名義眞野なるよし論ひ給へり、彥麻呂ひそかに思ふに、身惱の約りにてはあらざるか、奈夜牟の三言を約れば、奴の一言になれり、延喜神名式に、美濃國不破郡仲山金山彥神社(名神大)とあり、この神は古事記の伊邪那美命の火之夜藝速男神を生給ふ段に、因生此子、美蕃登見炙而病臥在、多具理邇生神名金山毘古神云々とある、金山は假字にて、令疲惱の略かりなるよし、古事記傳にあり、又は身濡の略かりにてもあらむか、同記日代宮の段に、倭建命取伊服岐山之神幸行云々、騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛云々、其神之使者、雖今不殺、還時將殺而騰坐、於是零大氷雨、打惑倭建命云々とあればなり、伊勢國にての詔に、吾足如三重勾、而甚疲、故號其地謂三重とある類なるべし、

〔和名抄諸國郡鄕考七〕美濃(美乃國(中略)古事記、靈異記、并作三野、國造本紀三野前國造、又三野後國造、)

〔新撰美濃志一(美濃全體說)〕國號は、むかしより靑野、各務野、加茂野とて三所の廣野(あるひは靑野、大野、各務野の三所)とあるゆへ、三野と名づけし物にて、古事記、萬葉集、日本靈異記、舊事紀の國造本紀等にみな三野國とかけり、其のち文字をさま〴〵に書かへて新撰姓氏錄には美努とかき、政事要略、公卿補任師實記、小野宮年中行事、諸門跡譜、八雲御抄、藤原公定の分脈系譜、また日本靈異記の伊奈婆大神の事をいへる條、扶桑略記の文德天皇三年のくだり、日本紀略の天曆元年七月二十一日の記、神宮雜例集の七ケ國ノ封戶の條等には、美乃の二字をしるし、類聚雜要抄には三乃ともかけり、その外六國史をはじめ、正史古記錄等には、今の如く美濃の文字を用ひたり、又ある說に、御野とは、大和の宇陀野、河內の交野などのごとく、禁制野(俗にいふ御留場)の通稱にて、當國にむかしよりさる獵野

のありしゆへ起れる國號也といへるも、據なきにはあらず、奈良の東大寺に所藏の古文書に、大寶三年御野國戸籍と見え、三代實錄に、元慶六年十二月二十一日己未、勅云云、美濃國不破安八兩郡野、本自禁制、永爲藏人所飼野云々としるし、同七年十二月二十二日甲寅、令山城大和云々、美濃等國禁百姓樵於禁野内云々と見えたり、是當國にふるく御野のありし證なり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

美濃加納日三丁極高三十五度二十四分、經度東一度二分、從東都中山道一百六里一十町二十七間、

〔新撰美濃志一美濃全體説〕國界は、京都より三十餘里、寅卯ノ方にあたり、東山道に屬ける地にて、○中略左りははるかに松前蝦夷の地まで三百餘里、右も又大隅薩摩に至り三百餘里に及びたれば、實に日本の中央にあたれる上國なり、

〔日本經緯度實測〕北極出地

美濃　關ヶ原　三五度二二分〇〇秒　加納　三五度二四分〇〇秒○中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　美野　加納　東一度〇二分〇三秒

疆域

〔美濃明細記一〕西國境　美濃國不破郡今須之西、美濃近江國境稱寢物語、

東ノ國堺　美濃信濃國境、惠奈郡落合色、東釜ヶ橋有二間餘、

〔新撰美濃志一美濃全體説〕國界は○中略西は近江、西北は越前、北東は飛驒、東は信濃、東南は參河、南は尾張、南西は伊勢の七箇國に隣り、前は尾張一國を隔てゝ南の海近く、後もまた越前一國を隔てゝ北の海遠からず、

〔日本地誌提要二十四美濃〕疆域　東ハ信濃、飛驒、西ハ近江、伊勢、南ハ尾張、三河、北ハ越前、飛驒ニ至ル東西凡貳拾六里、南北凡壹拾九里、

〔續日本紀六元明〕和銅六年七月戊辰、美濃信濃二國之堺、徑道險阻、往還艱難、仍通吉蘇路、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年九月四日辛卯、令美濃信濃國、以縣坂山岑爲國境、縣坂山岑、在美濃國惠奈郡、與信濃國筑摩郡之間、兩國古來相爭境堺、未有所決、貞觀中、勅遣左馬權少允從六位上藤原朝臣正範、刑部少錄從七位上勒負直繼雄等、與兩國司臨地相定、正範等撿舊記云、吉蘇、小吉蘇兩村、是惠奈郡繪上鄉之地也、和銅六年七月、以美濃信濃兩國之堺、徑路險隘、往還甚難、仍通吉蘇路、七年閏二月、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂、封邑七十二戶田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兄人、各進位階、以通吉蘇路也、今此地去美濃國府、行程十餘日、於信濃國最爲遍近、若爲信濃地者、何令美濃司遠入關通彼路哉、由是從正範所定、

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕東のかたなる木曾山は、當國惠奈郡の地なりしを、貞觀元慶のころ、議定ありて信濃國の筑摩郡につけられしより、歌にも信濃なる木曾路とよみならへり、

〔木曾路之記〕落合美濃國惠奈郡、是より以下美濃、より中津川へ壹里

落合の民家九十軒許、これより西に猶坂所々にあれども、既に深山の中を出て、嶮難なくして、心やすくなる、

今洲より柏原へ壹里

今洲と柏原の間に、長久寺といふ小里あり、是美濃と近江のさかひ也、車がへしともいふ、兩國より、家をちかく作りならべ、其間に小溝をひとつへだつ、國をへだてゝ、寢物がたりをするといふ、このゆへに、此所をねものがたりとも云、

〔木曾路名所圖會二〕寢物語里　こゝは近江美濃の國堺なり、長久寺村にあり、むかしはたけくらべといふ、此里に義經の愛妾靜、江田源藏に逢しなどいふ里諺あれども取らず、

〔藤河の記〕たけくらべといふは、あふみとみのとの山を左右に見て行所なり、

地勢

右ひだりみて過行ばあふみぢの二の山ぞたけくらべする、伊増たうげといふは、みの丶さかひにて、堅城とみえたり、一夫關にあたれば万夫すぎがたき所といふべし、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年九月壬申、尾張國言、此國與美濃國界、有鵜沼河、

〔美濃明細記 一〕慶長十二年丁未、尾張國三郡、木曾川爲國境、入於美濃國、家康公因台命、有美濃尾張檢地、大久保石見守奉之、

慶長十二年閏四月二十六日、賜尾張國於德川義直卿之時、木曾川之西用尾張之郡名、木曾川之東尾張國亦有此三郡、

又天正十壬午歲、尾張國三郡、木曾川下流爲國境、入美濃國、

依秀吉之命、織田三法師秀信自岐阜移安土、信雄信孝爲後見時、信雄尾州領之、時尾州長島入于勢州、信孝領濃州、此時木曾川之西北用尾張之郡名、入濃州、木曾川之東尾張亦有此三郡、

海西 和名抄海部、阿末、後爲海西海東　中島　葉栗　郡而二十一郡也

○按ズルニ、此國ト尾張國上ノ疆域ニ就キテハ、尾張國篇ヲ參看スベシ、

〔易林本節用集 下〕美濃 濃州ヂウ 上、管十八郡、南北三日、山原田圃多、綿帛豐而五穀生万倍、大上國也、

道路

〔日本實測錄 二街道〕從東海道古渡歷名護屋及大垣至垂井 ○中略

美濃國安八郡墨俣宿　二里三町三間半　大垣傳馬町、二里一十三町一間、　不破郡垂井宿　儘父川　從古渡至垂井街道、通計一十四里一十七町一十四間、

從東海道桑名歷高須及大垣至柳瀨 ○中略

安八郡今尾村 至今尾陣屋三丁一十八間　二里五町五十間　南波村　一里二十九町六間　大垣傳馬町　三十三町三十三間　柳瀨村　從桑名至柳瀨街道、通計一十二里五町二間、○中略

從東海道龜山歷鷹野及多良至關原 ○中略

美濃國石津郡時鄕打上村　一里二十七町一十五間　多良村　一里二十九町三十間　牧田村沿川至澤田村九丁七間、　一里一十七町七間半　不破郡關ヶ原宿従龜山至關ヶ原街道、通計一十九里一十七町一十七間半、

〔日本實測錄三街道〕従東京中山道至草津中略

美濃國惠那郡落合宿　三十一町二十六間　中津川宿　一里三十一町七間　大井宿、三十五度二十七分半、至岩村中町三里二十五丁一十八間半　三里九町五十六間　土岐郡大湫宿、三十五度二十六分半、　一里二十五町五十一間　細久手宿、三十五度二十五分半、　二里二十九町一十七間半、至諸木峠一里一十四丁三十二間半　可兒郡御嵩宿　一里四町三十五間　伏見宿　一里三十三町五十六間半　加茂郡太田宿、三十五度二十六分、　二里七町　各務郡鵜沼宿、三十五度二十四分、　四里一十一町三十三間至加納八幡町四里四丁二十一間　厚見郡加納三町目、三十五度二十三分、　三十一町三十三間　東鏡島村至乙津寺二町二十間　二十一町二十四間　方縣郡河渡宿　一里三町四十二間　本巣郡美江寺宿、三十五度二十四分、　三十三町四十一間半　安八郡柳瀬村　一里一十一町二十六間半　不破郡赤坂宿、三十五度二十三分半、　一里一十六町一十九間至谷汲道追分五十七間、従追分至垂井宿僅父川岸一里九町五十五間、　垂井宿　一里一十三町　關原宿　三十五度二十二分　一里五十八間　今須宿　二十九町一十間半至國界寝物語一十丁四十四間　近江國坂田郡柏原宿中略

従中山道中津川歴高山至古川町

美濃國惠那郡中津川宿　三十一町五十二間至木曾川岸一十八町四十五間　苗木至苗木城大手六丁二十四間　一里三十一町五十一間　福岡村、三十五度三十四分、　一里三十町二十一間　田瀬村　二里三町四十八間　付知村川西　一里三十五町三間　加子母村中切　一里三十一町五十七間至國界一里一十八丁九間　一

飛驒國益田郡御厩野村中略

從中山道太田驛至御園町、

美濃國加茂郡太田宿　二里二十六町四十間　武儀郡關村辻町、三十五度二十九分半、　二里一十三町四十六間（至關村西木戸町、七丁三十九間）　各務郡蘇見町、三十五度二十七分半、　一十八町二十五間　岩田村（至伊波乃西神社、六町三十間）　二里一十町一十七間　厚見郡上加納村御園町（從太田至御園町、）至街道、通計七里三十三町八間、

從美濃國關驛郡上八幡至森村、

美濃國武儀郡關村西木戸町　一里二十九町　上有地村二番町　一里三十三町　洞原村　一里三十四丁十八間　郡上郡下田村　一里三十一町四十五間　梅原村　一里六町五十四間　千虎村　一里八町三十三間（至八幡今町、一里五丁三十三間）　八幡橋本町（歷八幡城大手前、至職人町、四丁四十八間）　二里一十一町一十二間（至杉峠、一里二十八丁一十二間）二十　貢間村　三里三十四町二十四間（至下洞村、一里十五丁一十二間）　祖師野村　二里二町三十九間　武儀郡金山村金山町　一十二町二十四間（至國界郡上川岸、一丁三間）　飛驒國益田郡下原村（略○中）

從中山道鵜沼驛名護屋及矢作至平坂、

美濃國各務郡鵜沼宿　三十二町五十九間（至國界木曾川岸、一十五丁五十一間）　尾張國丹羽郡犬山上本町（略○中）

從中山道加納驛高富及谷汲至赤坂、

美濃國厚見郡加納八幡町　一十二町四十五間　上加納村御園町　一十町五十七間（至岐阜下笹土居町、）（八丁一十一間）　岐阜上笹土居町　一町四十八間　同白木町（至四幡神社、三丁五十一間）　一里三十二町二十七間　方縣郡（至材木町木戸、八丁六間、從木戸、至長良川岸、四丁、）　山縣郡高富村天王町（至高富陣屋、六丁一十八間）　二里二十七町三十間　方縣郡中西郷村、三十五度二十八分半、　三町三十六間　同追分（至曾我屋村、一里一十四丁四十三間、從曾我屋、至親島村、二十一丁五十四間、又從曾我屋、至方縣津神社、九丁六間、）　二里一十町三十間　大野郡上長瀨村、三十五度三十一分半、　三十町二十一

間　名禮村至谷汲山觀音堂一十丁、一十八間　一里二十八町三十六間　長良村歷拜殿陣屋前至上町一十四町五十六間　一十六町九間　島村、三十五度二十八分半、　一里八町四十八間　池田郡八幡村至八幡社八丁　一里五町二十一間　不破郡赤坂宿從加納至赤坂街道、通計一十三里八町四十八間、

從中山道垂井歷高田至福岡

美濃國不破郡垂井宿　二里四町二十二間至南宮前一十一丁二十七間　多藝郡押越村牧田川岸沿牧田川至澤田村三十四丁　二里一十二間　島田村高田町、三十五度一十九分、　三町五十七間　押越村至栗笠村一里二丁一十三間、從栗笠至船付村一十六町九間、又從栗笠至烏江村九丁二十四間、　一十一町二十二間　石畑村至澤田村六丁三間　七町三十一間　柏尾村至養老瀧二十丁五十九間　二里二十六町二十間半至伊尾川岸二里二十二丁五十九間　石津郡福岡村從垂井至福岡街道、

通計五里十九町四十四間半、

從中山道關ヶ原歷木本及匹田至小濱

美濃國不破郡關ヶ原宿　三十二町一十四間半　玉宿　九町五十四間半至國界二丁五十七間　近江國坂田郡藤川宿

〔美濃國明細記一道程〕近江境ヨリ信濃境迄

一不破郡今須ヨリ惠奈郡落合迄中仙道三十一里今須ヨリ一里關ヶ原、一里半垂井、一里十三丁赤坂、二里美江寺、一里六丁河渡、一里八町加納、四里十一町鵜沼、二里太田、二里伏見、一里御嶽、三里細湫、一里半大湫、三里大井、二里半中津川、一里落合、

一今須ヨリ尾州起宿迄九里今須ヨリ一里關ヶ原、一里半垂井、二里半大垣、二里墨俣、一里起、

一伊勢境石津郡葛前堺美濃大野郡大河原通下呂下一色ヨリ凡二十里餘

一尾州境葉栗郡笠田新加納ヨリ越前境郡上郡前谷迄凡二十三里

一大垣ヨリ加納江四里十六町大垣二里美江寺、一里八丁河渡、一里八丁加納、

一加納ヨリ郡上江十四里加納三里餘芥見、三里上有知、四里下ノ田、四里郡上、

一苗木ヨリ大垣エ二十三里十六町苗木二里半大井、二里半大湫、二里細湫、三里御嶽、一里伏見、二里太田、二里鵜沼、四里八丁加納、一里八丁河渡、一里八丁美江寺、二里大垣、

一苗木ヨリ加納エ十九里八町道程右ニアリ、

一岩村ヨリ知納エ十八里半八丁岩村ヨリ四里半大久手、二里細久手、三里御嶽、一里伏見、二里太田、二里鵜沼、四里八丁加納、

一大垣ヨリ高須エ五里大垣二里雜波野、一里半佛師川、十八町今尾、一里高須、

一大垣ヨリ郡上エ十九里八町大垣二里美江寺、一里八丁河渡、二里岐阜、四里

里關、二里上有知、四里下田、四里八幡、　一大垣ヨリ岩村エ二十二里半十二丁道程加納ヘカヽル　一苗木ヨリ高須エ二十六里八町道程加納エカヽル、加納三里竹ケ鼻、二里勝村、二里高須、　一加納ヨリ高須エ七里　一郡上ヨリ高須エ二十一里八幡、四里下田、四里上有知、二里關、四里加納・三里竹ケ鼻・二里勝村、二里高須、　一岩村ヨリ高須エ二十三里半餘道程加納エカヽル　一苗木ヨリ郡上エ二十四里苗木一里高山、一里經川、二里切井、一里半赤川、一里犬地、二里上田、泉、廣野、打尾、田島、口金山、奥金山、杏部、戸川、蟲師野、保次、安江、野新田、下洞、下澤、上澤、宮地、美間、中ノ保、八幡、　一苗木ヨリ岩村エ五里半苗木一里半茄子川、四里岩村、　一岩村ヨリ郡上エ二十四里半岩村四里半大久手、二里細久手、三里御嶽、一里伏見、二里太田、二里關、二里上有知、四里下田、四里八幡、　一大垣ヨリ勢州桑名エ十里　一郡上ヨリ越前大野城エ二十里　一郡上ヨリ飛驒高山エ十三里　一鵜沼ヨリ尾州犬山エ一里

〔諸國旅雀四〕京ゟ江戸迄木曾海道

かし原よりいますへ一リ、三十三文、　廟物語、江州濃州の堺也、又たけくらべともいふ、
いますよりせきが原へ一里、卅三文、　山中九條雜司、ときはの塔有、　峠　ふわ、せきやのあと下れば右、是せきと云、小せきと云は北也、大關に溜子川と云有、
せきが原より樽井へ一里半、四十九文　松の尾は西の山也、是より尾州宮迄十五リ有、野上此上の山より江州尾州三國みゆる、けいちう山寺有、今はなし、はんぢよがざいしよ也、
たる井よりあか坂へ一リ半、四十二文、　町端に川有、合川、ぼだい川、大瀧川落合てたるい川と云こゝにおいわけ有、木曾へは左へ行、尾州へは右へ行也、ぼだいへ半道、たるいより北の谷也、たるいの西南の山を南宮山と云、瀧山の前也、おさ十六と云所、たるいより一里、いぶき山もちかし、又あをのがはら、又青野と云村有、青墓といふ、昔長者大炊が屋敷は、道より北也、又ひるい大はかと云村、此間に有、
あか坂よりめいぢへ二里八町、七十二文、　こくう藏山のふもと也　ひらやこくう藏山のを西の方也、孫六といふ鍛冶いたる所也、　町端にくせい川有、あを木、みつや、きたかた中川の内そね

道より北也、　大柹道より南　川尻道より南、ろく川有舟渡り、此川くいせ川と云、本名はくせい川也、此河の下をさわたりと云、

めいぢよりがうどへ一里六町、三十九文、　がうどよりかなふへ二里、此間にぎふへ行道左に有、五十五文、　川有舟わたし也、ながら川の下也、がうどの下をすのまたの渡と云、ぎふノ古城有、

かなふよりうぬまへ四里、百卅五文、　信長公取立の古城也、山をいなば山といふ、古今にもいなば山とよめるが此山也、町端にながら川有、瑞龍寺なはて、各務野と云有、右の方に尾州小牧山みゆる、はゞ是よりうぬまへ二リ、人家なし

うぬまより太田へ二里、七十五文、　世俗にうるまといふ、あやまり也、鵜沼也、犬山の城有、うぬま川のむかい也、半道程有、水野より鵜沼へ四リあり、かち山是より蜂屋へ一リ半也、通道にさるばみとて太田川の岸かけのうへにくはんをん立給ふ、

太田より伏見へ二里、七十五文、　大河有、舟わたし太田のわたりと云、信州木曾川の末なり、水出ればながれはやく、なみたかく、むつかしきわたしなり、此末をうぬま、かさ松、萩原等の渡と云、とた太田のわたりの向也、是より太田の渡せずに大柹へ廻り、舟にて本道へ出る道あり、

伏見よりみたけへ一里、三十三文、　是よりかち田といふ所へ二リ、爰に古城有、齋藤山城守濃州の守護たりし時、息男新五此城に居ル也、よなだへ一リ、日比は肥田玄番居城也、又金山へ半里、信長公の御時、森三左衛門、同むさしの守居城也、右皆加茂郡の内也、

みたけよりほそくでへ三里、百廿二文、　此所かんの大寺共いふ寺有、又入口左の山に九影寺とて、濟下の寺あり、くゝりと云所此近邊也、元和の比、千村市右衛門是に住す、惠奈郡うど、つばし、平岩、

ほそくでよりおほくでへ二里、五十七文、

宿驛

おほくでより大井へ三里、尾張へ出る道有、百五十六文、
大井より中津迄二里半、七十八文、みたけより八里、なすび川、せんだばし、八まんのみや有、
中津川よりおち合へ一里、四十四文、此間下ればは左のむかふ苗木といふ城有、中つより一リ、
おち合よりまごめへ一里、四十四文、むかし木曾殿のさむらい落合五郎かねゆき居城也、此所
ひなわの名所なり、あてひなわと云、水中にてもきへずと云、十石橋坂有、是より信州安曇郡木曾
の内也、

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬略○中
美濃國驛馬 不破三疋、大野、方縣、各務各六疋、可兒八疋、土岐、大井各十疋、坂本卅疋、武義、加茂各四疋、 傳馬 不破、方縣、各務、可兒、武義郡各四疋、大野郡三疋、土岐郡五疋、惠那郡十疋、

〔延喜式民部二十二〕凡美濃國坂本、土岐、大井三驛、信濃國阿智驛子、課役幷免、

〔延喜式主税二十六〕凡諸國驛馬飼秣者、略○中其嶮路使繁、疋別十七束、使稀十束、平路使繁八束、使稀六束、
但美濃國坂本、信濃國阿智兩驛、並疋別卌五束、

〔延喜式雜五十〕凡美濃國互差撿若干一人、令撿按土岐惠奈兩郡雜事、幷驛家遞送事、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年十月壬辰、美濃國菅田驛與飛驒國大野郡伴有驛相去七十四里、巖谷險
深、行程殊遠、其中間置一驛、名曰下留、

〔類聚三代格七〕太政官符
　應擇諸郡司中恪勤者令與治惠奈郡事
右得美濃國解偁、惠奈郡坂本驛與信濃國阿智驛相去七十四里、雲山疊重、路遠坂高、載星早發、犯夜
運到、一驛之程、猶倍數驛、驛子負荷、常困遞送、寒節之中、道死者衆、朝廷悲之、殊降恩貸、永免件驛子租
調、又去承和十一年、擧郡給三年之復、頻雖施無限之恩、徒費公家、曾無所息、前任良宰、雖展治方、猶難
興復、况後任愚吏、更施何術、今撿彼郡課丁、總二百九十六人也、就中二百十五人爲驛子、八十一人爲

調庸、比之諸郡、衰弊尤甚、望請擇諸郡司之中、富豪恪勤者、募以五位、期三年內、令治件郡、謹請官裁者、

右大臣宣、奉勅依請、與奪之事、一准去天長元年八月廿日格、

齊衡二年正月廿八日

〔帝王編年記 二十一 後白河〕平治元年十二月廿九日、義朝二男朝長、於美濃國青墓宿自害、生年十六

〔吾妻鏡 十五〕建久六年六月二十八日辛巳、令著御于美濃國青波賀驛、相模守惟義就獻餉、相州美濃國守護也、

〔平治物語 三〕賴朝生捕事附常磐被落事

彼尾張守家人、彌平兵衛宗清、平季宗子尾州ヨリ上洛シケルガ、不破關ノアナタ關ケ原ト云所ニテ、ナマメイタル小冠者、宗清ガ大勢ニ恐テ、藪ノ蔭ヘ立忍ビケレバ、怪ミテ捜ス程ニ、隱レ所無シテ、囚レ給フニ、宗清見レバ、兵衛佐殿ナリシカバ、喜事限ナシ、縛テ具足シ奉テ、上程ニ、青墓ノ大炊ガ許ニゾ宿シケル、

〔藤河の記〕あふはかといふは、たる井よりこなたなり、名寄に青墓里といへるこの寺にや、

契あれば此里人にあふはかのはかなからずば又もきてみむ

〔十六夜日記〕關よりかきくらしつるあめ、夕ぐれに過ぎてふりくらせば、道もいとあしくて、こゝろより外にかさぬひのうまやといふ所にくれはてねどとゞまる、

たび人はみのうち拂ふ夕ぐれの雨に宿かる笠縫のさと

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜四年〇貞永元年十一月十三日、依飢饉、可救貧弊民之由、武州被仰之間、矢田六郞左衞門尉既下行九千餘石米訖、而件輩今年無據于辨償之旨、又愁申之、可相待明年糺返之趣、重被仰矢田云云、凡去今年飢饉、武州被廻撫民術之餘、美濃國高城西郡、大久禮以上、千餘町之乃貢、被停進濟之儀、道平出左衞門尉春近、兵衞尉等、於當國於株河驛、被施于往反浪人等、於尋緣邊上下向輩者、

勘二行程日數一、而施二旅粮一、至下稱レ可レ止二住由一之族上者、預二置于此庄園之間一、百姓被レ扶之云云、

〔皇代略記（後光嚴）〕文和二年六月十三日、赴二美濃國一、著二御垂井宿小島行宮一、

〔藤川の記〕五日〇文明四年五月のさるの時ばかりにたる井のさゆくにつく、けふは南宮の祭とて、見物のともがら、物さわがしくたちさまよひけり、〇下略

〔梅花無盡藏一（七言絶句）〕始入二濃梐井一雨中望二拜南宮一

山前卸レ笠拜二南宮一、殘雨吹レ晴獸䆿中、尙識神靈有二加護一、至レ今世々出二英雄一、

〔蒲生氏鄕紀行〕猶ゆき〳〵て、みのゝ國たる井といふ所にかりねして、

かりねする宿の軒端のあれはてゝ露もたる井の明がたの空

とよみて、はや夜も明行程に、たび立つゝゆきければ、近江の國にいたりぬ、

〔美濃國古蹟考（二官道）〕鵜沼驛　各務郡太田へ二里古城地ナリ、〇下略

〔後拾遺和歌集（羇旅九）〕東のかたへまかりけるに、うるまといふ所にて、　　源重之

東ぢにこゝをうるまといふことは行かふ人のあれば成けり

〔美濃明細記（二）〕美濃國二十一郡〇中略

村數合千六百三拾壹ヶ村

右ノ内　拾七ヶ村宿驛　内（拾五ヶ村、中仙道往還宿驛、二ヶ村、美濃路尾州街道宿驛、）

元祿十四（辛巳）歳

〔日本國郡沿革考（二東山道）〕美濃　古作二三野一、（國造記云、三野前國造、三野後國造、蓋往昔分爲二二國一、後復併爲二一國一、）上國、管二十一郡、（延喜式十八郡）

千六百二村、

不破（四十五村古府治）　多藝（六十一村文武紀作二多伎一、續紀作二當耆一、古事記云、倭建命到二當藝野一之時、詔吾足不レ得レ步、成二當藝斯形一、故號二其地一謂二當藝一、）　石津（九十一村齊一）

安八（アンパチ百五十二村天武紀作二安八磨郡一、衙二年、分二多藝武儀兩郡一爲二多藝、石津、武義、郡上之四郡一、）　池田（六十七村）　大野（百十九村）　本巢（七十一村古本巢）

國、見ニ古事記一、）席田（ムシロタ）九村（靈龜元年七月、尾張國人外從八位上席田君邇近、及新羅人七十四家、貫ニ于美濃國一、始建ニ席田郡一、）方縣（カタガタ）五十村　厚見五十八村　山縣五十五村　武儀（ムギ）百四十五村（延喜式作ニ武義一、和名抄作ニ武藝一、古事記牟宜都君、日本紀身毛津君、續紀牟義都公、其稱皆出ニ于此地一、）郡上（グジヤウ）百六十四村（延喜式作ニ群上一、齊衡二年置、詳ニ上文一、）加茂百二十一村（延喜式等作ニ賀茂一）惠那八十村（延喜式等作ニ惠奈一）土岐五十六村（天武紀作ニ稱杵郡一）可兒（カニ）九十五村　各務三十七村　羽栗（ハクリ）六十五村　中島三十三村　海西（カイサイ）二十八村（巳上三郡、延喜式等皆不ㇾ載、蓋中世所ㇾ置、）

（日本地誌提要美濃二十四）沿革　古ヘ國府ヲ不破郡ニ置、（今ノ府中村是ナリ）鎌府ノ時、梶原景時大內惟義ヲシテ交替シテ守護タラシム、正治ノ初、土岐光衡ヲ守護トシ、子孫職ヲ襲グ、七世ノ孫賴康、足利尊氏及義詮ニ歷事シ、尾張伊勢ノ守護ヲ兼ネ、州守ニ任ジ、革手城ニ居ル、（厚見郡）孫康政罪ヲ將軍義滿ニ獲テ出亡ス、賴康ノ姪賴益（ヨリマス）之ニ代テ守護トナリ、五世ニシテ賴藝（ヨリノリ）ニ至リ、治ヲ大桑城ニ徙ス、天文十一年、其臣齋藤秀龍賴藝ヲ逐ヒ、本州ヲ奪ヒ自立シテ守護ト稱シ、岐阜稻葉山ニ居ル、孫龍興ニ至リ、西濃ノ著族不破、安藤、氏家、稻葉氏等、皆志ヲ織田信長ニ通ズ、永祿七年、信長遂ニ大擧シテ來リ伐、龍興越前ニ奔リ、本州信長ニ歸ス、九月、信長清洲ヨリ岐阜ニ徙ル、天正四年、近江ノ安土ニ徙リ、子信忠ヲシテ岐阜ニ鎭セシム、十年、信長弑セラレ信忠自盡シ、信忠ノ弟信孝本州ヲ管シ岐阜ニ居ル、兄信雄豐臣秀吉ニ黨シテ信孝ヲ誘殺ス、秀吉池田信輝ヲシテ大垣ニ鎭セシメ、金山城ヲ森長一ニ賜ヒ、州事ヲ監セシム、信輝死後、嗣輝政岐阜ニ徙ル、十八年、秀吉輝政ヲ三河ニ徙シ、信忠ノ子秀信ヲシテ岐阜ニ鎭セシメ、本州ヲ領ス、關原ノ役西軍ニ黨シ、城陷リ出亡、（後高野山ニ終ル）德川氏岐阜ヲ廢シ、慶長六年、石川康通ヲ大垣ニ封ズ、後戶田氏鐵（カネ）之ニ代リ、其曾孫氏定、其弟氏成（シゲ）ニ新田（壹万石）ヲ與ヘテ支封トナス、慶長ノ末、東南境（拾貳萬餘石）ヲ以テ德川義直ニ賜ヒ、其相竹腰正信ヲ今尾ニ封ズ、其他封ヲ受ル者、加納、（奥平信昌、後ニ永井直陳（ノブ））高須、（德永壽昌、後ニ松平義行、）郡上、（遠藤慶隆、後ニ青山幸道、）岩村、（松平家乘、後ニ松平乘紀、）苗木、（遠山友政、）凡テ七藩、後又高富（本莊道芳）ヲ加ヘテ八藩トナス、王政革新、今尾ノ竹腰正舊ヲ直ニ藩列ニ加フ、後皆改テ縣トシ、笠松縣ヲ加ヘ凡テ十縣トス、既ニシテ悉

ク併セテ岐阜縣トス、

〔古事記中開化〕神大根王者、三野國之本巣國造、長幡部連之祖、

〔古事記傳二十二〕三野國之本巣國造、此は二氏にて、上は三野國造なるを、造字を之に誤れるなるべし、日代宮段に、三野國造之祖、神大根王と見え、書紀其卷にも、美濃國造名神骨とあればなり、若三野の本巣ならば、白檮原宮段末に、道奥石城國造、常道仲國造などある例を思ふに、三野之とありて、國字はあるまじきことなるに、三野國とあるも、本巣とは別なるがごと思はる、國造本紀にも、美濃前國造、春日率川朝皇子彦坐王子、八瓜命定賜國造とあり、此次に三野後國造と云もあり、抑如此前と云後と云るは、越前越後などの例の前後にや、若然らば美濃の内にて、本巣郡は京師の方に依れゝば、道口とも云つべければ、三野前國とは、本巣郡のあたりを云るものとして、其し其國造として、三野之本巣國造と云るは、誤ともすべきが如くなれども、美濃國を前後と二に分むには、其前の方にも本巣をおきてなるは、數郡の地あれば、本巣國造の外に、三野前國造あらむし妨なければ、其を三野國造と云むも又妨なし、又本巣郡の内に美濃郷もあれば、上古に三野國造と云しは、其あたりの國造、本巣國造と云しは、又本巣と云地もありけむ、其處の國造なりとせむも、例事かあらむ、又かの前後とあるは、時代の前後を分て云るかとも思へども、若然らば、一っに擧べきに、別に擧たるは然には非じ、八瓜命は、神大根王の亦名にて、上に出たり、天武紀に美濃連と云あれども、異姓なるべし、本巣は、和名抄に、美濃國本巣毛止須郡これなり、

〔先代舊事本紀國造十〕三野前國造

春日率川朝〇開化、皇子彦坐王子、八瓜命定賜國造、

三野後國造

志賀高穴穗朝〇成務、御世、物部連祖出雲大臣命孫、臣賀夫良命定賜國造、

〔日本書紀景行七〕四年二月甲子、天皇幸美濃、〇中略是月天皇聞美濃國造名神骨之女、兄名兄遠子、弟名弟遠子、並有國色、則遣大碓命、使察其婦女之容姿、時大碓命便密通而不復命、由是恨大碓命、

〔倭姫命世記〕十年辛丑〇垂仁、遷幸于美濃伊久良河宮、〇中略次遷于尾張國中島宮坐天、三箇月奉齋、倭姫命國保伎給、于時美濃國造等、進舍人市主、地口御田、並御船一隻進支、同美濃縣主、角鏑作之而進御船二隻、捧船者天之曾己立、抱船者地之御都張止白而進、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜六年三月乙未、始置〇中略美濃少目二員、

〔土岐累代記〕濃州土岐氏守護起本之事

抑當國ハ、東山道ノ要國タルニ依テ、昔ヨリ國司守護其器ヲ撰マル丶所也、人皇六十二代村上帝ノ御宇ニ、源滿仲、天曆年中ニ、當國ノ守ニ任ジ給ヒテヨリ、其子攝津守賴光、同弟河內守賴信、賴光ノ子右馬頭賴國、其子美濃守國房迄、源氏五代守ト成テ、代々斷絕ナク承嗣アリ、白川御宇、承曆三年己未七月、濃州ニヲヒテ反逆シ給ヒ、終ニ阿波國ヘ配流セラレシヨリ、前美濃守義俊迄相續テ是ニ任ズ、是迄源氏七代也、永保二壬戌年、國房赦免セラレテ本官ニ復セシヨリ、國房土岐郡ニ住シ、是ヨリ其子左衞門尉光國、其子出羽守光信、其子伊賀守光基迄四代、世々濃州ニ住ストイヘドモ、美濃守ニハ不被任、後鳥羽院ノ御宇、元曆文治ノ頃、源賴朝兼諸國地頭職ニ至テ、梶原平三景時、相模守惟義、小笠原十郎泰綱等、當國ノ守ニ任ズ、夫ヨリ文治建久ノ頃、光基子左衞門藏人光衡始テ美濃守ニ任ジラル丶ニ及テ、土岐美濃守ト號シ、當家ノ祖トス、濃州神戶城ニ住ス、然レドモ守護職ハ光衡一代ニテ終リヌ、其子出羽守光行、神戶城ヨリ土岐郡淺野ノ里ニ館ヲ構テ、移ラル丶ト云ヘドモ、當國ノ守ニテハナシ、後鳥羽院ノ判官代ナリ、其後關東ヘ下向シテ、右大將實朝ニ隨仕ス、其子伊豫守光定土岐隱岐守モ淺野ノ館ニ住ス、其子伊豫守光包ナリ、其子伯耆守賴包入道存孝ニ至テ、絕テ久キ美濃守ニ任ゼラル、後醍醐天皇ノ御宇、其身ハ濃州高田ニ住セラル、後關東ニ下向シテ北條家ニ隨仕セラレ、其子甚多シ、末子伯耆十郎賴貞、美濃國ヨリ在京シテ、當今ノ御隱謀ニ與シテ、六波羅ヲ可亡ト計シガ、從弟土岐ノ船木左近藏人賴員父左近藏人賴重ナリ、賴包入道存孝弟ナリ、ガ反忠ニ依テ及露顯、元德元己巳年九月十九日ノ早天、六波羅衆山本九郎時綱ト戰テ生害ス、然レドモ父賴包入道、兄民部大輔賴清、彈正少弼賴遠兄弟ハ、淺野大富ニ在リケレドモ、何ノ申旨モナカリシナリ、父入道後又足利家ニ屬セラレケル、其子共將軍ヘ屬シテ、所々ニ於テ武威ヲ顯シケル、入道

存孝ハ、曆應二己卯年二月廿二日、土岐郡高田ニヲヒテ逝去ス、遺骨ハ同郡中島光善寺ニヲサム、定林寺殿前伯州太守雲右存孝大居士是ナリ、頼清ハ淺野ノ館ニ住シ、頼遠始ハ、伯耆七郎ト號シ、父ト一所ニ高田城ニ在ケリ、其器量父祖ニ倍セシカバ、曆應ノ頃、總領職ヲ賜リテ、美濃尾張伊勢三ケ國ノ探題トナリ、父ノ家督ヲ繼テ、則隣郷大富ニ館ヲ構ヘテ住シ給ヒケルガ、所アシキトテ曆應ノ末ニ、厚見郡長森ニ一城ヲ築テ移給フ、其後在京シテ足利家ニ隨ヒ、數度ノ軍功不レ可二勝計一、青野原ノ戰ニ自ラ大ニ働、左ノ目ノ下頰當ノハヅレヲ切付ラレ、疵療治セントテ、居城長森ニ引退ク、其後武威ニホコリ、曆應五壬午年九月三日、京都東ノ洞院ニテ、持明院上皇御幸ニ參逢、頗及二狼藉一、其罪ニ依テ同十二月朔日、六條河原ニヲヒテ害セラル、夫ヨリ弟土岐兵庫頭頼明、總領職ヲ賜リ、長森ノ城ニ住ス、是モ貞和五己丑正月五日、四條繩手ノ軍ニ、周濟坊其外一族ドモ討レケル、其甥大膳大夫頼康ニ總領職ヲ賜ル、濃州ノ太守勢尾ノ守護ヲ兼ラル、此頼康ト申ハ、頼清ノ長男ニテ、始ハ左近將監トテ、淺野ノ館ニ居ラレタリシガ、其器量タクマシク、後民部大輔ト號シ、昇殿ヲユルサレ、大膳大夫ニ任ズ、入道シテ善忠ト申ケリ、是ヨリ當家勢ヒ強大ニ成ヌ、府城長森ハ地狹クテ、國政ニ不自由トテ、觀應ノ頃、厚見郡革手ト云所ニ新城築キ、一國ノ府トセシム、其外同國三輪ニ一城ヲ立、弟揖斐出羽守頼雄ヲ入置給ヒ、長森ノ城ニハ、其弟土岐宮内少輔直氏ヲ入置給フ、此直氏ト申モ、器量勝レタル人ニテ、尾州小川ノ城ニ、小川中務丞ト土岐東池田ト申合、仁木京兆ニ同心シ立籠リタリシヲ、直氏手勢六百餘騎ニテ推寄、廿四日、戰ヒテ難ナク城ヲ責落シ、小川中務ガ首ヲ切、テ京都ニノボセ、池田左近藏人ハ從弟ノ事ナリケレバ、尾州米田豆ケ崎ノ城ヘゾ送リケリ、各本家ニ隨ヒケル、頼康ハ池田郡瑞岩寺ニヲヒテ卒、嘉慶元丁卯年十二月廿五日也、建德寺殿前光祿大夫高巖忠公大居士トゾ申ス、頼康ノ子大膳大夫康行、其子大膳大夫康政、入道シテ善昌ト云、三代革手ノ城ニ住シテ當國ノ太守ナリ、然ルニ康政、康曆年中、當城ニヲヒテ謀叛ヲ

起シ、將軍義滿公大ニ怒リ、氏族ノ池田左近將監賴益ニ命ジテ是ヲ討ゼラル、康政勢ツカレテ、息刑部少輔賴時トモニ自害ス、幕府其戰功ヲ感ジ給ヒテ、賴益末族トイヘドモ總領職ヲ賜リ、美濃守ニ任ゼラレ、左京大夫ト號ス、是ヨリ賴益革手ノ城ニ移リ給フ、此賴益ハ前大膳大夫賴康ノ甥ニテ、池田左近將監賴忠ノ長子ナリ、賴忠ハ、延文ノ比ハ、當國ノ池田郡池田ノ館ニ居給フ、弓馬ノ達人也、鷹ノ繪一流相傳ノ人ナリ、又可兒郡池田ニモ一族アリ、池田修理大夫ト云、是池田三左衞門ノ祖ナリ、賴忠後ニ刑部丞トモ、又美濃入道トモ云、所領恩補有テ、尊氏公ヨリ御下文ニ曰、可レ令早領二知美濃國武儀庄ノ內野所安弘見加藤鄉等地頭職一之事、右爲二勳功之賞一所二充行一也者、守二先例一可レ致二沙汰一也、如レ件、觀應二辛卯九月廿日、尊氏判トアリ、賴忠ハ池田ニテ卒シ給フ、禪藏寺殿眞兼居士是也、寺ハ池田郡願成寺村ニアリ、其子三人、長男左京大夫賴益、二男右馬權頭之康、三男ハ伊勢守光兼ナリ、賴益相續テ池田ニ住ス、後尾張海東郡萱津ノ鄕ヲ領ス、暫爰ニ住スル故ニ、世久シク萱津殿ト云リ、萱津ヨリ革手ニ移ル、應永六己卯ノ冬、一族宮內少輔詮直叛逆ヲ企テ、居城長森ニタテコモル、將軍ノ命ニ依テ、左京大夫賴益、長森ノ城ニ取詰、忽城ヲ攻落シ、詮直ヲ召取首ヲ刎、一圓ニ切隨ヘ、長森ヲ削捨、革手城ニ入給フ、後革手ノ城ニ於テ卒ス、常保壽后居士是ナリ、其子左京大夫持益相續テ國政ヲ司ル、勢州北畠家、幷國人平氏ノ某、關東ノ左馬助退治ノ時、一方ノ大將トナリ、勢州ニ攻入、府中ノ城ヲ攻破リ、大ニ戰功アリ、后革手府城ニテ卒、承國寺殿常祐大助居士ト云、其子左京大夫持兼早世、家系及斷絕、時ニ土岐家ノ長臣、稻葉山ノ城主、齋藤帶刀左衞門藤原利長入道ヲ始、伊賀稻葉氏家、其外一族ノ人々相計ヒトシテ、土岐氏ノ末族饗場備中守元明ノ長子ヲ養テ家督ト成ス、國中ノ武士等皆國主ト仰グ、土岐左京大夫兼美濃守源成頼ト申ハ是ナリ、家臣齋藤帶刀左衞門利長、其子利藤等、稻葉山ノ城ニ在テ國政ヲ執行ヒケルニヨリ、國中ヲダヤカ也、成頼ハ明應六丁巳年四月三日、米田ノ館ニテ病死ナリ、遺骨ハ厚見郡金寶山瑞龍寺ニ葬ル、瑞龍

寺殿前濃州太守國文宗安大居士ト云也、成賴ノ子賴繼家督ヲツギ、在京シテ將軍義政公ニ隨仕シ、忝タモ御名ノ一字ヲ賜リ、美濃守政房ト申ケル、其子左京大夫賴繼太守ナリシガ、弟土岐治郎賴藝ニ奪ヒトラル、此賴藝迄ニテ守護職ノ家系斷絕ナリ、賴藝ノ子數多有ト云、皆チリ〴〵ニ成給ヒケリ、

〔江濃記〕齋藤ガ事

美濃齋藤、元ハ越前ノ住人、利仁將軍ノ末葉也、代々美濃國革手ノ城主也、土岐ハ屋形、齋藤ハ守護代也、然ドモ、前代ノ時ハ、土岐齋藤トテ、國人モ一雙ノ樣ニ思ヒシ也、元弘ノムカシニモ、土岐賴員ハ、齋藤利行ガ聟也、其後高氏ノ御代ト成テモ、齋藤猶美濃ニ繁昌也、○中略

土岐殿齋藤不和之事

其比美濃國大桑ニ御座土岐賴藝ノ代ニ成テ、道三ガ威勢ツノリ、一國平吞シテ、土岐屋形ノ威ノヲトロユル事ヲイカリ、道三ヲホロボシテ國ヲ治メント謀リ、忽ニ道三ト不和ニ成リ、合戰數度ニ及ビケリ、然ドモ道三合戰ノ道ニヲイテハ、近國無雙ノ大將ナレバ、誰カ是ニ向テ勝利ヲ取ルベキ、終ニ土岐殿打マケ、尾張國ヘヒラキ給ヒ、齋藤ハ土岐殿ヲ追出シ奉リ、一國不ㇾ殘治メケリ、

國府

〔倭名類聚抄見國郡〕美濃國國府在二不破郡一、行程上四日、下二日、

〔伊呂波字類抄見國郡〕美濃國管十八○中略　不破府延喜式

〔拾芥抄中末本朝國郡部〕美濃上近十八郡○中略　不破府

〔新撰美濃志三不破郡〕府中村は垂井の北にあり、和名類聚抄に、美濃國國府在二不破郡一としるし、源平盛衰記の治承四年、維盛以下の軍勢東國下向の條に、九月三十日、みのゝこうにつく、十月一日、同じき國すのまたにつくと見えしは、こゝにて國司官廳の地を、國府とも府中ともいへるは、異國唐朝の例と同じ例なり、

〔源平盛衰記二十三〕忠文祝神附追討使門出事
二十七日ニハ、近江ノ國野路ノ宿ニツク、二十八日、同國蒲生野ニ著、二十九日ニ、同國小野宿ニ著、晦日美濃國府ニ著、十月一日、同國墨俣ニツク、

〔延喜式二十二民部〕美濃國上管多藝 石津 不破 安八 池田 大野 本樔 席田 方縣 厚見 各務 山縣 武義 群上 賀茂 可兒 土岐 惠奈 右爲近國、

〔倭名類聚抄五國郡〕美濃國略○註 管十八略○註 多藝多伎 石津伊之津 不破不破國府、安八 池田伊介太 大野於保乃 本巣毛止須 席田無之呂太 方縣○方縣原脫、據二一本一補、 厚見阿美 各務加々美 山縣夜末加太 武藝牟介 郡上 賀茂 可兒 土岐 惠奈

〔和名抄諸國郡鄕考七東山道〕美濃美乃國略○中 管十八今官用二十一郡、有二海西羽栗中島一、

〔拾芥抄中末本朝國郡〕美濃近上 十八郡 多藝タキ 石津 不破府 安八 大野 太樔モトス 席田 方縣 池田 厚見 各務 山縣 武義 群上 賀茂 可兒 土岐 惠奈

〔新撰類聚往來下〕國名略○中 美濃濃州 十八郡 多藝 石津 不破 安八 池田 大野 本蘇 席田 方縣 厚見 各務 山縣 武藝 郡上 賀茂 可兒 土岐 惠奈

〔郡名一覽〕美濃國御料私領 濃州 南北三日 貳拾壹郡略○中
不破 多藝 石津 安八 大野 本巣モトス 席田ムシロタ 方縣カタカタ 武儀ムギ 郡上 加茂 土岐 可兒 各務カヽミ 羽栗 池田 厚見 惠那 中島 海西 山縣

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕郡はむかしより十八郡なりしを、天正の中ごろ、豐臣秀吉公尾張の地三郡のうちの村々を割取て、當國につけられしより、今の如く二十一郡となる、

〔皇國郡名志〕美濃國舊十八郡今二十一郡
多藝タキ〔高田養老瀧〕●舟付 勢江ノ方ニ寄テ國中ニ有

石津　[高須]　●川戸　勢江ニ付テ多藝ニ並郡
不破　●赤坂　●垂井　●關ヶ原　●今須　〈ネモノ郡　江界
穴八　[大垣]　●左渡　●墨股　〈今尾　國中
池田　●岡村　●横山　江界
大野　〈揖尾　●谷汲　●杉原　越前界
本巣　●綿渡　●上太二　●シエン　●河戸　越前界
席田　驛町無シ五六ヶ村限　國中小郡
厚見　[加納]　●左渡　[岐阜]　國中小郡
各務　驛町無シ　尾界木曾川付小郡
山縣　驛町無シ　越前界小郡
武藝　●門原　〈關　●河知　〈金山　越前界
郡上　●鷲見　●法子丸　●前谷　●外原　●二日町　●飯邊　●三日市　〈八幡　飛越前界
賀茂　●錦山　〈太田　〈白川　國中
可見　●瀧田　●ミタケ　●金山　●伏見　●上田　尾界
土岐　●釜戸　●大タテ　●高山　●細タテ　尾界
惠奈　[岩村]　●落合　〈茜木　●串原　●上野　●阿妻　●カシモ　●竹折　●大井　●中津川　飛信三ノ界
方縣　驛町無シ　國中小郡
海西　●秋江　尾ノ木曾川ニ添小郡
葉栗　〈笠松　●竹鼻　尾ノ木曾川ニ添
中島　●駒塚　●大浦　右ニ並テ木曾川ヲ越テ尾張ニ入込

今加ニ海西案架中島ノ三郡一

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕美濃

六國史古書		當書 續 當伎 續 多紀 續後				安八 [illegible]紀 安八 [illegible] 安八 續	
		當藝 古					
延喜式	石津 シツ	多藝 タギ	不破 フハ	池田 ケケダ	大野 オホノ	安八 アムハチ	
倭名抄	同 伊之津	同 多岐	同 不波	同 伊介太	同 於保乃	同	
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	
諸書	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	同 圖知元	海西 圖元
郡名考	同 イシヅ	同 タギ	同 フハ	同 イケダ	同 ヲホノ	同 アンハチ	同 カイサイ
天保鄕帳	同	同	同	同	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同	同	同	同	同
地誌提要	同 イシヅ	同 タキ	同 フハ	同 イケダ	同 オホノ	同 アハチ	同 カイセイ
郡區編成	上石津 下石津	同	同	同	同	同	同

郡上	武義	各務	山縣	方縣	席田	本巣	厚見	羽栗	中島
	務義 武義								
						本巣	淳見		
群上	武義(ムギ)	各務(カヾミ)	山縣(ヤマガタ)	方縣(カタガタ)	席田(ムシロダ)	本樔(モトス)	厚見(アツミ)		
郡上	武藝	同	同	同	同	本巣	同		
群上	武義	同	同	同	同	本樔	同		
郡上	武儀	同	同	同	席田 蓆田	本巣	同	羽栗 葉栗	中島
同(グジヤウ)	同(ムギ)	同(カヾミ)	同(ヤマガタ)	同(カタガタ)	席田(ムシロダ)	同(モトス)	同(アツミ)	羽栗(ハグリ)	同(ナカシマ)
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	席田	同	同	同	同
同(グジヤウ)	同(ムギ)	同(カヾム)	同(ヤマガタ)	同(カタガタ)	同(ムシロダ)	同(モトス)	同(アツミ)	同(ハグリ)	同(ナカシマ)
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

賀茂	可兒	土岐	惠奈	計
		礪杵紀		
賀茂	可兒カニ	土岐トキ	惠奈エナ	管十八
同	同無訓以道古堂本補之	同	同	同
同	同	同	同	十八郡
加茂國元和	同國元	同國元和	惠奈國和 惠那元	
同カモ	同カエ	同トキ	惠奈エナ	二十一郡
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同カモ	同カニ	同トキ	惠那エナ	同
同	同	同	同	二十二郡

多藝郡

〔新撰美濃志 一美濃二十一郡〕多藝郡は、不破郡の南にあり、東は舊杭瀨川揖斐川を隔て丶安八郡に境ひ、南は石津郡、西も笙ヶ嶽を隔て丶石津郡に至り、北は不破郡に隣れり、東西より南北は少し長く、牧田街道ありて商人なンど往來し、旅宿も不自由ならず、古事記に、倭建命取＝伊服岐能之神＝行幸云云、還時到＝當藝野上＝之時、詔云云、今吾足不レ得レ歩、成＝當藝斯タギシ形＝、故號＝其地＝謂＝當藝＝也とあるが、郡名の起れるはじめにて、和名類聚抄に多藝多岐と見え、續日本紀に、多藝、多伎、當耆、當伎と四通にかき、續日本後紀に多紀、平治物語に多記なんどさま〴〵にえるし、其外は國史諸實錄等みな和名抄の文字を用ひ、今にそれにならへり、〇中略高參萬貳千參百六拾九石五斗三升九合、六拾九ヶ村、古高帳には貳萬七千九百九十七石餘五十四ヶ村とし、新高帳には七十八ヶ村とす、

〔古事記 中景行〕倭建命、以＝其御刀之草那藝劒＝、置＝其美夜受比賣之許＝而、取＝伊服岐能山之神＝幸行、於レ是

石津郡

詔、茲山神者、徒手直取而、騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛、爾爲言擧而詔、是化白猪者、其神之使者、雖今不殺、還將時將殺而騰坐、於是零大氷雨、打惑倭建命、故還下坐之到玉倉部之清泉、以息坐之時、御心稍寤、故號其清泉、謂居寤清水也、自其處發、到當藝野上之時、詔者、吾心恒念自虛翔行、然今吾足不得歩、成當藝斯形、故號其地、謂當藝也、

〔古事記傳二十八〕當藝斯は、和名抄舟具に、唐韻云、艫、字亦作舳、正船木也、楊氏漢語抄云、柁船尾也、或作柂、和語云多伊之、今按、舟人呼挾杪爲舵師是とあり、延佳此を引て、疑此物也と云る、信に然り、○中略さて多藝斯を多伊斯と云は、中古より音便に頽れたるなり、○中略故號其地謂當藝也とは、此地名の由縁なることを云なり、(續紀七に、靈龜三年九月、天皇幸美濃國云々、幸當耆郡覽多度山美泉、十一月詔曰云々、改靈龜三年爲養老元年とありて、此美泉は世にいはゆる養老の瀧にて、右に引る萬葉六の歌も、此泉をよめるなり、然るに其歌二首ともに、瀧とよめれば、多藝郡、又多藝野など云名は、此養老瀧に因れる如聞えて、まぎらはしかめれど、然には非ず、多藝てふ地名は、此に見えたる如く、倭建命の御言より起れるなり、)

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月庚寅、美濃國多伎郡民七百十六口、遷于近江國蒲生郡、

〔續日本紀七元正〕養老元年九月丙辰、幸當耆郡、多度山美泉、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十一月己酉、到美濃國當伎郡、

〔萬葉集六雜歌〕美濃國多藝行宮、大伴宿禰東人作歌一首、

從古人之言來流老人之變若云水曾名爾負瀧之瀨、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月十七日辛未、美濃國多藝郡人、太政官史生正八位下物部吉宗、改本居貫山城國愛宕郡、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月廿日丁酉、勅美濃國多藝郡空閑地六十町施入貞觀寺、

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕石津郡は、多藝郡の南西にあり、戌亥より辰巳へ長く曳きたる郡にて、丑寅の方は、多藝安八海西の三郡を堺とし、南は伊勢國桑名郡、南西は同國員辨郡に隣り、西は近

江國犬上郡、坂田郡に至り、北は不破郡に亘れり、文德實錄に、齊衡二年閏四月丁酉、分美濃國多藝武義兩郡、爲多藝石津武義郡上四郡と見えしが、當郡のはじめにて、和名類聚抄に石津〈津伊之〉としるし、其外の古書にみな其文字を用ひて今に至れり、〇中略高二万六千九百八十七石九斗三勺、九十一ヶ村、〈古高帳には、一万九千七百九十一石餘、百三ヶ村とし、郡村記に八十八ヶ村とす、〉

〔文德實錄七〕齊衡二年閏四月丁酉、分美濃國多藝武義兩郡、爲多藝。石。津。武義郡上凡四郡、

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕不破郡は、國のうちの西のはてにありて、東はもと杭瀨川を隔て、安八郡に隣り、東南は多藝郡、南西は石津郡に亘り、西は近江の坂田郡に至り、北はすべて池田郡の地堺なり、東西は長く、南北は短くして、東山道の驛路西より東へ郡の眞中をつらぬけり、和名類聚抄に不破〈不破國府〉と見え、六國史、萬葉集、延喜式等をはじめ、くさぐさの古記どもにもみな不破とかきて、外の文字を用ひたる例なし、〇中略高三万七千八百九十三石四斗一升、四十六ヶ村、〈古高帳には三萬六千七百九十六石餘、四十二ヶ村とす、〉

〔日本書紀二十六齊明〕六年十月、百濟佐平鬼室福信、遣佐平貴智等、來獻唐俘一百餘人、今美濃國不破片縣二郡唐人等也、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月丙戌、男依乘驛來、奏曰、發美濃師三千人、得塞不破道、於是天皇美男依之務、既到郡家、先遣高市皇子於不破、令監軍事、

〔萬葉集二相聞〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌、
挂文、忌之伎鴨、〈一云由遊志計禮杼母、〉言久母、綾爾畏伎、明日香乃、眞神之原爾、久堅能、天津御門乎、懼母、定賜而、神佐扶跡、磐隱座、八隅知之、吾大王乃、所聞見爲、背友乃國之、眞木立、不破山越而、狛劒、和射見我原乃、行宮爾、安母理座而、天下、治賜、〈一云拂賜而〉食國乎、定賜等、〇下略

〔扶桑略記六元正〕靈龜三年九月丁未日、天皇幸美濃國不破山中醴泉、自出飲浴之者、白髮反黑、闇目

忽明、又洗痛處、无不除差、

〔萬葉集 六雜歌〕不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

關無者、還爾谷裳、打行而、妹之手枕、卷手宿益乎、

〔續日本紀 七元正〕養老元年十一月癸丑、天皇臨軒詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十二月癸丑朔、到不破郡不破頓宮、　甲寅、幸宮處寺、及曳常泉、

〔扶桑略記 抄桓武〕延曆廿三年五月辛卯日、律師善謝卒、俗姓不破勝、美濃不破郡人也、

〔三代實錄 四十二陽成〕元慶六年十二月廿一日己未、勅、○中略美濃國不破安八兩郡野、本自禁制、永爲蕩人所獵野、

安八郡

〔郡名考〕美濃　安八アハチ　アンハチ

〔地名字音轉用例〕字ヲ省ケル例

あはちま　安八□(美濃郡)　天武紀ニ、安八磨郡トアル是ナリ、續紀三ニ、安八萬王ト云人名アルモ、此地名ニ由レリト聞ユ、(天武紀ニハ、アハクマト假字附シタレドモ、アハチマナルベシ、又今國人ハ、アンパチ郡ト云ヘ、字ニ依レルイナシキ唱ナリ、)

〔新撰美濃志 一美濃二十一郡〕安八郡は、東西短く、南北は甚長く、東の方にては、大野、本巢、厚見、羽栗、中島、海西六郡の地に亘り、南西は石津郡を境とし、西は多藝、不破、池田の三郡に隣り、北は本巢郡限りとす、北の方に東山道、又美濃路(俗に大垣街道といふ)等ありて、旅行の人絶す、日本書紀天武天皇の卷に、安八磨郡とかき、和名類聚抄に安八としるし、其外古記錄どもにみな安八と見えて、外の文字を用ひたる例なし、○中略高は八萬五千五百六十一石五斗七升三合、百六十四ケ村、(古高帳には七萬四千二十三石餘、百四十七ケ村とし、新高帳には百七十二ケ村とす、)

〔日本書紀 二十八天武〕元年六月壬午、詔村國連男依、和珥部臣君手、身毛君廣曰、今聞近江朝廷之臣等、爲朕謀害、是以汝等三人、急往美濃國、告安八磨郡湯沐令多臣品治、宣示機要、而先發當郡兵、仍經國司

等、差發諸軍、急塞不破道、

〔續修東大寺正倉院文書四〕御野國味蜂間郡春部里戶籍
（繼目裏書）御野國味蜂間郡春部里太寶貳年戶籍

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月庚申、美濃國安八郡人國造千代妻如是女、一產三男、給稻四百束乳母一人、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月壬戌、越前守正五位下藤原朝臣高房卒、高房、（中略）天長四年春、授從五位下、拜美濃介、威惠兼施、屬託不行、發摘奸伏、境無盜賊、安八郡有陂渠、隄防決壞、不得蓄水、高房欲修隄防、土人傳曰、陂渠有神、不欲遏水、逆之者死、故前代國司廢而不修、高房曰、苟利於民、死而不恨、遂駈民築隄、溉灌流通、民至今稱之、

池田郡

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕池田郡は、當國戌亥の隅にありて、東南より北へ長き地なり、東は揖斐川を隔て、、大野郡を境ひ、東南は安八郡、南は不破郡を限り、西は近江國坂田郡、淺井郡、伊香郡に隣り、北は越前國今立郡に至れり、和名類聚抄に池田（伊介太）と見え、其外の古記どもにも皆しか書て、外の文字を用ひず、（中略）高は一万八千五百七十七石六斗二升七合、六十七ヶ村、（古高帳には一万八千二十一石餘、二十五ヶ村とし、新高帳には、八十一ヶ村とす、）

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年七月十二日癸卯、美濃國池田郡人守部秀刀自、夫死後、孀居廬室、守義不移、造佛寫經、晨昏禮拜、永斷葷血、不事織紝、拜佛之外、哭不絕聲、勅叙位二階、免戶內租、以表門閭、

大野郡

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕大野郡は、池田郡の東に並びて、南より北へ長き地なり、東は藪川を隔てて本巢郡を境とし、南西は安八郡、西は池田郡に隣り、北は越前國今立郡に至れり、和名類聚抄に大野（於保乃）と見え、其外すべて古書にしかかきて、外の文字を用ひし物なし、（中略）高四万九千五百石八斗一升九合、百十九ヶ村、（古高帳には、四萬九千二百八十六石餘、百七ヶ村とし、新高帳には百三十六ヶ村とす、）

〔日本靈異記 上〕狐爲妻令生子緣第二
昔欽明天皇(是磯城島金刺宮食國天皇天國押開廣庭命也、)御世、三野國大野郡人、應爲妻覓好孃、乘路而行時、曠野中遇於妹女、

本巣郡

〔新撰美濃志 一美濃二十一郡〕本巣郡は、大野郡の東に並びて、南より北へ殊に細長き地なり、東の方は厚見、方縣、席田、山縣、武儀の五郡を堺とし、南は安八郡に隣り、西はすべて大野郡に接り、北は越前國大野郡に亘れり、古事記に三野國之本巣國造云云と見え、和名類聚抄に本巣(毛止須)としるししより、古記錄どもにもしか書きて、今に至るまでたがはず、其うち拾芥抄には、本樔(モトス)、新撰類聚往來には本蘇郡とかけり、(中略)高は三萬四千九百七十一石八斗八升三合、七十二ヶ村、(古高帳には、三萬三千七百石餘、六十三ヶ村とし、新高帳には、八十九ヶ村とす、)

席田郡

〔類聚名物考 地理二〕席田郡　むしろだ　美濃國
〔新撰美濃志 一美濃二十一郡〕席田郡は、本巣郡の東にありて、東西より南北はすこしながく、飯櫃の形にて、極めて小き郡なり、東は方縣郡に隣り、南西北の三方は本巣郡にて包めり、西の方伊都貫川の流れを郡堺とす、(中略)和名類聚抄に席田(無之呂太)と見え、其外延喜式、國史、諸實錄等にみな同じ、文字をかき、吾妻鏡にのみ筵田と志るせり、(中略)高五千五百七十九石二斗一升四合、九ヶ村、(古高帳には二斗一升四合の六字を書きて餘とし、村數を八ヶ村とし、新高帳には、十一ヶ村とす、)
〔續日本紀 六元明〕靈龜元年七月丙午、尾張國人外從八位上席田君邇近、及新羅人七十四家貫于美濃國、始建席田郡焉、
〔續日本後紀 五仁明〕承和三年六月壬戌、美濃國席田郡空閑地七十町、賜宗康親王、
〔三代實錄 三十一清和〕元慶元年四月十九日庚寅、卜定悠紀美濃國席田郡、主基備中國都宇郡、並卜食、
〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年六月五日丁未、美濃國司上言、國分寺災、梵字佛殿、一時成煨燼、席田郡定額

尼寺、殿堂宏麗、令修御願、請爲國分寺、許之、

方縣郡

〔新撰美濃志 一 美濃二十一郡〕方縣郡は、席田郡の東にあり、南の方東西長く、北の方狭く尖りて、三角の形したり、巳寅の方は山縣郡を堺とし、辰巳の隅にて長良川を隔てゝ、各務郡に隣り、南は同じ川を隔てゝ厚見郡に對し、戌亥の方は本巣、席田兩郡に亘り、北の隅は本巣、山縣兩郡のさかひ也、○中略 高三萬四千三百六石七斗三升六合、五十ヶ村、古高帳には、三萬四千三百七十石餘とし、新高帳には、六十九ヶ村とす、

〔日本書紀 二十六 齊明〕六年十月、百濟佐平鬼室福信、遣佐平貴智等來獻唐俘一百餘人、今美濃國不破、片縣。二郡唐人等也、

〔續日本紀 七 元正〕養老元年九月甲寅、至美濃國、戊午、免方縣務義二郡百姓供行宮者租、

〔日本靈異記 中〕力女捔力試緣第四
聖武天皇御世、三野國片縣郡少川市有一力女、爲人大也、名爲三野狐、是昔三野國狐爲母、生人之四繼孫也、力強當百人力、住少川市內、恃己力凌弊於往還商人、而取其物爲業、

〔續日本紀 三十 光仁〕寶龜元年四月癸巳朔、美濃國方縣郡少領外從六位下國造雄萬獻私稻二万束於國分寺、授外從五位下、

厚見郡

〔新撰美濃志 一 美濃二十一郡〕厚見郡は、方縣郡の南にありて、東西より南北は短く、西の方にて尖りたる地なり、東は各務郡に隣り、南は羽栗郡に至り、西の隅は墨俣川を隔てゝ、安八郡にさかひ、西北の方にて同じ川を隔てゝ、本巣郡に亘り、北は方縣郡を堺とす、文明八年、因幡社本緣起に、當所厚見者、欽明天皇御宇改縣號、稱厚見郡と見えし如く、ふるき地名にて、和名類聚抄に厚見阿都美とありしより、今に至るまでみな其文字を用ひ、日本靈異記にのみ淳見アツミとかけり、○中略 高は三萬六千二百八十四石五斗一合、五十七ヶ村、古高帳には、三萬六千二百十四石餘、五十ヶ村とし、新高帳には、九十六ヶ村とす、

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年七月九日辛亥、先是尾張國言、奉太政官處分、堀開廣野河口、令趣舊流、而美

各務郡

濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、率兵衆步騎七百餘人、襲來河口、〇下略

〔伊呂波字類抄　見郡〕美濃國〇中略十八各務カヽミ

〔地名字音轉用例〕入聲ク／韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

かゞみ　各務美濃郡　加々美〇中略

マノ行ノ音同行通用セル例

かゞみ　各務美濃郡　加々美　務ヲミニ用ヒタリ

〔新撰美濃志　美濃一二十一郡〕各務郡は、厚見郡の東にあり、東は加茂郡に至り、南は木曾川を隔て、尾張國丹羽郡に隣り、西は厚見郡に亘り、北は武儀、山縣、方縣の三郡を堺とす、南の方に東山道の驛路あり、和名類聚抄に各務加々美と見え、其外の古書にもみな玄かかきて、外の文字を用ふる例なし、〇中略高二萬九石五斗一合、三十五ヶ村、古高帳には、一萬九千二十石餘、二十九ヶ村とし、新高帳には、四十一村とす、

〔三代實錄　十三清和〕貞觀八年七月九日辛亥、先是尾張國言、奉太政官處分、堀開廣野河口、令趣舊流、而美濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、率兵衆步騎七百餘人、襲來河口、〇下略

山縣郡

〔郡名考〕美濃　山縣ヤマカタ

〔新撰美濃志　美濃一二十一郡〕山縣郡は、本巢郡の東にありて、南より北に長き地なり、東より北へ武儀にさかひ、東南は長良川を隔てゝ、各務郡に隣り、南は方縣郡に亘れり、和名類聚抄に山縣夜末加太と見え、其外の古記錄にみな同じさまにかき、清輔朝臣の袋草紙にのみ山形とかけり、〇中略高二萬五千六百四石五升八合、五十五ヶ村、古高帳には、二萬四千七百四十五石餘、三十六ヶ村とし、新高帳には、五十ヶ村とす、

〔東大寺正倉院文書　二十五〕御野國山方郡三井田里戶籍

大寶貳年十一月、御野國山方郡戶籍、〇下略

〔東大寺正倉院文書　東南院位櫃十一〕美濃國司解　申進上交易賤事

合陸人婢三奴三　奴小勝年卅四左目下黒子　價稻壹仟束
價稻肆仟玖伯束○中略
右山縣郡大神戶戶主神直大遊之賤○中略
天平勝寶二年四月廿二日　正七位下行大目志斐連猪養○下略

〔三代實錄八清和〕貞觀六年五月九日甲午、勅法隆寺僧承忍、○承忍原本作丞忍、據一本改、還俗復本姓名中臣美乃連益長、便任、○任原本作往、據一本改、美濃國山縣郡少領、益長元各務郡人也、　十四日己亥、以美濃國山縣郡延算寺預之定額、

武儀郡

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕武儀郡は、山縣郡の東にあり、南より北へ長く、南の方にて東に折して、曲尺の形ちしたる地なり、東北は郡上郡に亘り、南は加茂郡、南西の隅にて各務郡に隣り、西は山縣郡、西北の隅にて本巢郡に接はり、北は越前國大野郡を堺とす、和名類聚抄に武藝牟介と見え、新撰類聚往來もそれにならひ、文德實錄、延喜式、拾芥抄、節用集等に武義とかき、續日本紀には務儀とかけり、又古事記に牟宜都君、日本書紀に、君毛津君、新撰姓氏錄に牟義公とあるも、此地名を名のれる人也、名古屋大須寶生院の藏書、法花經第七局奧書には、永正九年卯月十五日、濃州無義郡平賀本壽寺常住、筆者日禪としるせり、無義とは珍らしき書ざまなり、○中略高は三萬二千四百八十五石八斗六升四合、百四十六ケ村、古高帳には、三萬一千九百十八石餘、六十四ケ村とし、新高帳には、百八十六ケ村とす、

〔日本書紀七景行〕四十年七月、大碓皇子○中略封美濃、仍如封地、是身毛津君守君二族之始祖也、

〔古事記中景行〕大碓命○中略亦娶弟比賣、生子押黑弟日子王、此者牟宜都君等之祖、

〔續日本紀七元正〕養老元年九月甲寅、至美濃國、　戊午、免方縣務義二郡百姓供行宮者租、

郡上郡

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕郡上郡は、武儀郡の北にありて、當國丑寅の隅なる地也、東は飛驒國益田郡に至り、南西の二方は武儀郡を堺ひ、北西は越前國大野郡、北東は飛驒國大野郡に隣れり、文

德實錄に、齊衡二年閏四月丁酉、分美濃國多藝武義兩郡、爲多藝、石津、武義、郡上、凡四郡とあるが、當郡のはじめにて、延喜民部式拾芥抄等に郡上とかき、和名類聚抄には郡上とかけり、○中略 高二萬九千九百三十三石一斗五升一勺、百六十九ヶ村、古高帳には、二萬六千七百十六石、百五十二ヶ村とし、新高帳には、百七十四ヶ村とす、

〔文德實錄七〕齊衡二年閏四月丁酉、分美濃國多藝武義兩郡、爲多藝石津武義郡上凡四郡、

〔鎌倉大草紙下〕京都に大亂起り、常縁が美濃國郡上の城を、山名方より打入て、應仁二年九月六日に攻落され、同國住人齋藤持是院法印妙椿と云人悉押領しける、

賀茂郡

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕加茂郡は、武儀郡の東南にありて、丑寅より未申へ長き地なり、東は惠奈郡にさかひ、南は木曾川を隔てゝ、土岐、可兒の二郡に隣り、西は各務郡に至り、北は武儀郡、北東にて飛驒國益田郡に亘れり、和名類聚抄に賀茂と見え、其外の古書どもにみなかくかきて、外に書きたる文字なし、賀を略して加文字かけるも、たまたまにはあれど、まづは例すくなし、○中略 高四萬三千五百石一斗六勺、百二十八ヶ村、古高帳には、四萬二千六百一石餘とし、新高帳には、百四十二ヶ村とす、

〔東大寺正倉院文書東南院第三櫃十一〕美濃國司解　申進上交易賤事

合陸人婢三奴三

價稻肆仟玖伯束　二人充各一千束　一人七百束　二人各八百束　一人六百束○中略

奴益羽年十五右目下黶子　價稻漆伯束

右加茂郡小山鄕戸主上連稻實之賤○中略

天平勝寶二年四月廿二日○署名略

可兒郡

〔郡名考〕美濃　可兒カコ　カニ

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕可兒郡は、木曾川を隔てゝ加茂郡の南にあり、東南は土岐郡に至り、南は尾張國春日井郡に亘り、西は同國丹羽郡に隣り、北は加茂郡を堺とす、北の方にて東山道の驛

路つらぬき、旅人往來す、和名類聚抄に可兒と見え、外の古書にもみな同じさまにかけり、○中略高三萬二千百二十八石八斗九升二合、九十六ヶ村、古高帳には、三十五ヶ村とし、新高帳には、三萬二千百四十石餘、百八ヶ村とす、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年九月十三日壬寅、美濃國可兒郡人左史生從八位上長谷部貞宗貫附左京職、

土岐郡

〔新撰美濃志 一美濃二十一郡〕土岐郡は、加茂郡の南にありて、東は惠奈郡に至り、南は參河國賀茂郡、尾張國春日井郡にさかひ、西北は可兒郡を限り、北は木曾川を隔てゝ加茂郡に隣れり、北の方にて東山道の驛路つらぬき、往來の旅人たゆる事なし、和名類聚抄に土岐と見え、其外にも多くしか書り、○中略高は一萬九千六百二十五石五斗四升一合、五十六ヶ村、古高帳には、一萬九千四百一石餘、三十二ヶ村とし、新高帳には六十四ヶ村とす、

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年五月廿三日庚寅、美濃國土岐惠奈兩郡、百姓弊亡特甚、給復一年、

〔三代實錄 二十清和〕貞觀十三年六月八日癸未、復美濃國土岐惠奈兩郡百姓調庸一年、

〔夫木和歌抄 三十一郡〕見の、國ときのこほりにて

たび人のわびしき時はくさ枕雪ふるときのこほりなりけり　重之

惠奈郡

〔新撰美濃志 一美濃廿一郡〕惠奈郡は、加茂郡の辰巳の方にありて、當國東のはてなる地なり、東は信濃國筑摩郡、伊那郡に惠奈ヶ嶽をへだつに至り、南は參河國設樂郡、賀茂郡に隣り、西は土岐、加茂の二郡に亘り、北は飛驒國益田郡、信濃國筑摩郡御嶽山を堺とす、東山道の驛路つらぬきて、旅店賑やかなり、むかしは信濃の木曾の地、當郡に屬たりしよし、くはしく前に云るす、合せ見るべし、和名類聚抄に惠奈とかき、其外の古記どもにもみな同じさまにかき、外の文字を用ひず、奈を那にかへてかけるも、たまさかには見えたり、○中略高は三萬四千三百七石一斗五升、七十九ヶ村、古高帳には、三萬四千三百十石餘、七十五ヶ村とし、新高帳には、八十五ヶ村とす、

〔三代實錄 四 清和〕貞觀二年閏十月廿五日辛未、太政官論奏、美濃國惠奈郡人縣萬歳麻呂殺百姓三人、法官斷罪當斬刑、詔減死一等、處之遠流、

中島郡

〔郡名考〕美濃　中島ナカシマ

〔張州府志 十八 中島郡〕建置沿革　諸書作中島郡、○中略此郡天正十二年亦半割隷于濃州、

〔新撰美濃志 一 美濃二十一郡〕中島郡は、羽栗郡の西南の方にありて、北より未申の方へ尖りたる地なり、東南は木曾川を隔て、尾張國の中島郡に隣り、西は安八郡に至り、北は羽栗郡を堺とす、是もゝと尾張の地なりし事、羽栗郡に同じ、和名類聚抄に尾張國中島奈加之萬と見え、其外の古書どもにも、みな尾張の國の郡名なるよしいへり、○中略高一萬二千六百九十四石五斗三升六合、三十ヶ村、古高帳には、一萬千八百六十八石餘、二十五ヶ村とし、新高帳には、三十五ヶ村とす、

海西郡

〔郡名考〕美濃　海西カイサイ

〔張州府志 二十六 海西郡〕建置沿革　古爲海部郡、中古割爲東西二郡、天正中豐臣太閤割河以西隷于濃州、○下略

〔新撰美濃志 一 美濃二十一郡〕海西郡は、安八郡の南にありて、北より南へ細くながし、東は木曾川を隔て、尾張國の海西郡に隣り、南西は石津郡に亘り、西北は安八郡を堺とす、むかしは尾張の地なりしよしは、羽栗郡にいへるが如し、往古尾張の海部郡といひしを、今より六七百年以前にわかちて二郡とし、東を海東、西を海西と名づけしとぞ、和名類聚抄に尾張國海部阿末と見えたり、○中略高一萬千六百九十四石六斗一升二合、二十八ヶ村、古高帳には、一萬千三百三十一石餘、二十二ヶ村とし、新高帳には、二十九ヶ村とす、

羽栗郡

〔郡名考〕美濃　羽栗ハクリ

〔張州府志 十七 葉栗郡〕建置沿革　延喜式其餘諸書、皆作葉栗郡、又作羽栗郡、古者隷河西北、隷于葉栗郡、以墨股河爲界、天正十二年、秀吉擊尾州取河西諸邑、其後與信雄和、遂割河西隷于濃州、蓋憚神祖西

征、以大河爲防也、至今河西地、猶呼爲羽栗中島海西三郡、

〔新撰美濃志一美濃二十一郡〕羽栗郡は、厚見郡の南にありて、東より西へ細く長し、東は各務郡にさかひ、南は木曾川を隔て、尾張國の葉栗郡に接し、南西は中島郡に至り、西の隅にては岐阜川を隔てて安八郡にさかひ、北は各務厚見の二郡に隣れり、もと尾張の地なりしを、天正十年、織田内大臣信雄公が尾張の國主たりし時、豐臣秀吉公のはからひにて、沿河の三郡(葉栗、中島、海西、)のうち、百二十餘村を割取て美濃に屬られしより、今に當國の地となれり、故に古書には尾張の郡名とす、尾張にては葉栗とかき、美濃にては羽栗とかくが通例なり、和名類聚抄に、尾張國葉栗(波久利)と見えたり、同抄に葉栗五郷をのせたるうち、葉栗の郷は當郡の本郷村なるべく、延喜神名式に、葉栗郡十座のうち阿遲加神社、川島神社と見え、尾張國神名帳の葉栗郡十二座のうちに、從三位阿遲加天神、從三位川島天神、從三位生島天神としるし、なンどは、當郡の地なるべし、又仙覺法師が萬葉集の抄に引ける尾張風土記に、葉栗郡河島社、在河沼郷河島村、奈良宮御宇聖武天皇時、凡海部忍人申、此神化爲白鹿、時々出現、有詔奉齋爲大社焉とあるもしかなるべし、(○中略)高二萬千七十四石八斗九升六合、六十五ケ村、(古高帳には、一萬九千五百五十九石餘、五十七ケ村とし、新高帳には、八十三ケ村とす、)

〔萬葉集抄一〕尾張國風土記云、葉栗郡川島社(河沼郡川島村○下略)

〔倭名類聚抄七郡〕美濃國　多藝郡　富上　物部　乘穗(○乘、高山寺本作垂、)　立野　有田　田後　佐伯　建部

石津郡　櫻樹　山崎　大庭　建部

不破郡　山本　栗原　有寶　野上　新居　表佐(○表、高山寺本作遠、)　丈部　藍川　荒崎　三桑　高家

眞野　驛家

池田郡　額田　壬生　小島　伊福　春日　池田

安八郡　那珂　大田　物部　安八　服織　長友
大野郡　檜妻　大神　明見　三桑　上杖　下杖　郡家　志麻　大田　石田　栗田　七﨑
驛家
本巣郡　鹿立〇鹿、高山寺本作麻、　遠市　安堵　美濃　穗積　物部　船木　栗田
席田郡　美和　礒部　那珂　名太
方縣郡　村部　大唐　鵜養　方縣　思淡　驛家
厚見郡　市俣　川邊　三家　厚見　郡家　皆太
各務郡　村國　大椽　各務　那珂　芥見　三井　驛家
山縣郡　出石　大竹　片野　三田　大桑　餘戶
武藝郡　御佩　跡部　生櫛　有知　白金　大山　稻朽　管田　揖可
郡上郡　郡上　安郡　和良　栗垣〇垣、高山寺本作原、
賀茂郡　埴生　美和　生部　井門　小山　米田　日理〇日、高山寺本作曰、　神田　中家　川邊　志麻
驛家
可兒郡　可兒　郡家　日理　大井〇大、高山寺本作本、　矢集　池田　驛家
土岐郡　日吉　檜原　異味　土岐　餘戶　驛家
惠奈郡　淡氣　安岐　繪上　繪下　坂本　竹折

〔東大寺正倉院文書東南院伍櫃十一〕美濃國司解　申進上交易賤事
合陸人奴三婢三
價稻肆仟玖伯束二人充各一千束、二人各八百束、一人七百束、一人六百束〇中略
奴豊麻呂年廿二右頰黶　價稻壹仟束

右武義郡揖可鄕戶主武義造宮盧之賤

奴瓮羽（年十五、左目下黒子）　價稻漆伯束

右加茂郡小山鄕戶主上連稻實之賤

婢乎久須利賣（年廿二、左目後黒子）　價稻捌伯束

右厚見郡草田鄕戶主物部足麻呂之賤

婢古都賣（年廿、右頰黒子）　價稻捌伯束

右惠奈郡絵下鄕戶主縣主人足口縣主息守之賤

婢椋賣（年十五、左頰疵又黒子）　價稻陸伯束

右可兒郡驛家鄕戶主守部麻呂之賤〇中略

天平勝寶二年四月廿二日〇署名略

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年九月四日辛卯、令美濃信濃國以縣坂上岑爲國堺、〇中略貞觀中、勅遣左馬權少允從六位上藤原朝臣正範、刑部少錄從七位上粉負直繼雄等、與兩國司臨地相定、正範等撿舊記云、吉蘇小吉蘇兩村、是惠奈郡絵上鄕之地也、〇下略

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月二十九日丙午、美濃藤次安平濫妨美濃國石田鄕之由、領主刑部卿典侍訴左典廐、能保典廐又被執申之間、早可停止之趣、今日被遣御書於典廐云云、　六月二日戊申、刑部卿典侍領事、二品被遣御下文云云、

下　美濃國大野郡內石太鄕住人

可早停止美濃藤次安平濫妨、爲刑部卿典侍御沙汰事、

右件所、致安平無道令押領之由、有其聞、事實者尤以不當也、自今以後、可令停止之狀如件、以下、

文治二年六月日

〔吾妻鏡 十〕文治六年四月十八日辛丑、美濃國犬丸、菊松、高田郷等地頭、對捍乃貢事、同國時多良山地頭玄番助藏人仲經不從神事由事、就在廳申狀被下院宣之間、二品所被遣御下文也、

下美濃國犬丸、菊松、高田郷地頭等、

右犬丸、菊松地頭、字美濃道上高田郷地頭保房等、如私領知行、不致所當以下勤之由、依在廳訴申、自院被仰下、仍可致勤之由度々下知、猶以對捍之間、重所被仰下也、然者度々院宣其恐不少、於今者件兩人地頭職可改補他人也、早可退出郷內之狀如件、以下、

文治六年四月十八日

〔尊卑分脈 十二 源氏〕惟義 逸見太郎 ─ 義重 又太郎

└ 惟長 又太郎

承久亂之時、渡美乃國大井口、依其賞賜美乃國大桑郷了、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年五月七日庚子、就駄物年紀、被付美濃國芥見庄於山田郷、可爲萬年入道御使之由云云、淸左衞門尉奉行之云云、

〔東大寺要錄 二〕一大井庄樂田地頭間事

東大寺衆徒申、寺領美濃國大井庄內樂田郷事、被停止重經法師押領之由、鎌倉二位中將殿御消息候也、恐惶謹言、

文永九年十二月廿六日

相模守在判

左京權大夫在判

〔池田文書 一〕美濃國成田郷地頭水谷藏人三郎重親、今月二日馳參候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年六月二日

藤原重親狀

進上　御奉行所

承了花押○高氏足利

〔鷲見家譜〕當國○美濃鷲見鄕地頭忠保申、屬當御手、燒拂大洞、今月一日於谷汲合戰、抽軍忠候畢、然者早賜御一見狀、爲備向後龜鏡、恐々口之如件、

建武四年三月日　一見了御書判

〔明智系圖〕賴基伯耆守號土岐九郞

—賴重從五位下、民部少輔、假名彥九郞、法名淨榮、自此號土岐明智、領濃州土岐郡之内明智鄕、故又分一氏而稱明智、乃臣家權輿于此者也、將軍尊氏卿賜台筆、(中略)右之外又賴重祖父伯耆守賴貞領知美濃國妻木鄕多藝庄等、有安堵之御下文也、略而不書于此、○中略

—賴高從五位下、下野守、後入道號淨皎、○中略

延文元歲丙申十二月二十三日、及貞治二歲四月二十一日、同五歲丙午八月三日、將軍義詮公、有所賜證文、其中一文曰、

尾張國海東在、除天龍寺領美濃國妻木鄕之内笠原中分、曾木村、細野、同國多藝之内春木鄕、武藏國大井鄕、不入讀村地頭職事、任兄民部少輔賴重、文和四歲乙未十一月六日讓狀、領掌不可有相違之狀如件、

貞治五歲丙午八月三日

土岐下野入道殿　判形有之

〔下野國誌九〕宇都宮の祝部中里好篤が所藏の氏家系譜に、中務丞重國、曆應元年戊寅閏七月二日、於越前國足羽郡藤島、捕新田義貞之首、送京都、尊氏將軍、有賞美於美濃國石津郡、賜闕所之地數箇所、右下文御教書云、

下　氏家中務丞重國

可令早領知美濃國石津郡高須澤田一瀨等地頭職之事、

右件之所者、爲勳功之賞所令宛行也者、守先例、宜致沙汰之狀如件、

曆應元年戊寅十一月　　源尊氏判

於是重國、始而移住美濃國石津郡高須郷、子孫代々繁昌而在其國云云と記したり、

〔集古十種鐘銘七〕美濃國池田郡井頭郷御嵩山藏王權現鐘銘

御嵩藏王權現椎鐘事

右於美濃國池田郡井頭郷、御嵩藏王權現靈場、先日奉鑄、〇中略

明應二癸丑年三月十二日〇下略

〔明智系圖〕頼助從五位下、美濃守、後入道法名不存、

有將軍義滿公之御教書曰

土岐明智十郎頼篤申、美濃國多藝庄内多藝島郷同庄内(此間紙朽而所々文字闕)郷等入土岐十郎跡下野守事、早止島(此所又文字朽而不見)可沙汰付頼篤之状如件、

應永六年十一月廿四日

土岐美濃入道殿

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕台〇中略

五百三十二文　伊勢因幡入道殿濃州武儀郡段錢〇中略

三貫文　花頂御門跡領濃州小泉郷段錢〇中略　四ケ郷

〔蔭涼軒日錄〕長祿四庚辰九月二十八日、香嚴院領美濃國遠山莊大井郷別當職之事、如先規可有成敗之由、命于飯尾左衞門大夫也、

寬正六年二月廿九日、花頂殿濃州大井戶郷、爲守護押妨、卽今花御覽之前、召雜掌可被仰之訴訟被申、今晨以被訴狀披露之、御領掌可申付之由被仰出、卽於殿中命于門跡奉行飯尾兵衞大夫、仍渡被門跡之訴狀、又命于門跡遣狀也、　五月七日、常德院領濃州椿井郷、就海道之事自勢至寺致違亂、被成御奉書、可被仰付于守護方之事、披露之、仍命于飯尾左衞門大夫也、彼院主以遠和尙也、

〔飛州志四寺院〕長林敎寺

在于同郷〇川上郷大原村　同宗同寺末、開基始祖釋空善、長享年中建之、本尊裏書云、　方便法自尊形、

大谷本願寺釋蓮如在判、長享三年己酉二月十五日、飛驒國白川善俊門徒、美濃國滿世鄕大原、願主釋空善、按ズルニ、滿世ハ今世ハ飛驒國馬瀨鄕トナル、

〈飛州志四寺院〉慈雲教寺

在于同鄕〇久々野鄕山之口村　同宗同寺末開基、始祖釋明心、明應年中建之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、文龜元年辛酉十二月十五日、白川照蓮寺門徒、濃州郡上郡馬瀨鄕川上、願主釋明心、按ズルニ、川上村、今世ハ飛州益田郡馬瀨鄕ニ入レリ、

〈梅花無盡藏六雜文〉元三大師堂宇化緣疏幷序　海蓮譔之

娑婆世界南贍部洲大日本國東海道濃州路、各々務郡鵜沼鄕居住勤進沙門某等再拜々々敬白、以圓滿而現者、大日覺雄之慈相也、以建立而唱者、極乘流通之慧命也、〇下略

〈梅花無盡藏七雜文〉臨川庵記

東山道濃州路、各々務郡鵜沼鄕、有三十二應身之靈場、號金剛精舍、山之開也、水之繞也、呑八九之雲夢而不爲芥也、小蓬萊丹郡山名庄乾耕監院受雲谷大和尙之衣盂、且又掛錫瑞龍、不擲一片之心、而期呵々大笑之時、

〈賎の小手卷一〉加茂郡鵜沼村大安寺證文寫

爲大安寺領、於鵜沼鄕中五拾石之處寄附之、右此上當寺山々境可爲如前代、幷一切諸役致免許候、委細大貳申含者也、仍如件、

永祿拾丁卯五月日　池田勝三郞忠倫花押

以上

〈梅花無盡藏七雜文〉美濃州第三宮因幡大菩薩靈社祭禮神事再興式日件々之題辭

伏惟昔日厚見之一郡比屋共勸祭儀、中年以來郡中之平民大牢稱良家子蔑神祖豪、唯加納井口之

兩郡幾補之而巳、

〔梅花無盡藏 三下七言絶句〕乙卯〇明應四年孟秋之末、漆桶子寄杖笠於加納府之東雲門寺者數費朝暮之鉢裹頗華麗、〇中略

帳紫膨脝風露乾、頭々擒住助禪榮、西軍消息久無聽、希止干戈萬戶安、

〔梅花無盡藏 六雜文〕金字妙典爲其師報恩化緣疏幷序 與渥僧需紺紙金泥之

娑婆世界南贍部洲大日本國東海道濃州路、各々務郡蘇原鄉、圓巨禪寺居住勸進沙門某再拜々々敬白、〇下略

〔梅花無盡藏 七雜文〕濃州路郡上郡下田鄉吉田村、臨濟山大寶禪寺僧堂前鐘銘幷敘、

覺雄開山祖通悟溪大和尚、伏呂榮檀通持是院法印權少僧都、今茲甲寅之秋、規此郡鄉虎豹之窟、設龍象之場、輪奐之美、禮樂法器悉備、故便塑工鑄堂前之鐘、聞其般々、則佛祖點頭、神靈合掌、及蠢動卉木同超等妙之以覺、加之國泰民安、吁偉哉、欽奉榮壇之嚴命、爲之銘、〇中略

美江寺本堂上葺化緣疏爲勸進範秀書之

南贍部州大日本國東山道美濃州、本巢郡船木鄉十六條、大日山船積寺 于號美江 本堂上葺化緣疏幷序、

勸進願十穀沙門範秀再拜々々敬白、

〔船田前記〕總官府在革手鄉 厚見郡 乃舟田之東、又數十步三城角、列口分鼎足、

〔船田後記〕五月〇明應六年十日丙寅、未明賊軍掠墨渡、北投旁縣鄉城田山舍衞教寺、

〔賤の小手卷 一〕稻葉內匠頭證文寫

濃州羽栗郡福島之鄉取立御堂建立候、就夫右之福島、貴僧 江 預進之候、幷爲寺領知行百石宛行畢、取付別紙在之、全可有領知候、謹言、

年號不見　稻葉內匠頭

八月十二日　　　　通成花押

滿福寺

〔美濃明細記 二〕郷帳高辻村附

不破四拾六村　大野百拾九村　山縣五拾五村　土岐五拾六村　多藝六拾九村

本巣七拾二村　武儀百四拾六村　可兒九拾六村　石津九拾壹村　席田九ヶ村

郡上百六拾九村　各務三拾五村　安八百六拾四村　方縣五拾村　加茂百二拾八村

羽栗六拾五村　池田六拾七村　厚見五拾七村　惠那七拾九村　中島三拾村

海西二拾八村

美濃國　二十一郡　高合六拾四万五千百一石五斗三合　村數千六百三十一ヶ邑

元祿十四辛巳歲改之

〔郡名一覽〕一御料私領美濃國　濃州　南北三日　貳拾壹郡

高八拾三萬六千八百貳拾九石七斗貳升七勺八才　千六百三拾壹ヶ村

●大垣 九十九里 東山道百十三里　●八幡 九十六里 郡上トモ云　●加納 東海道九十七里 東山道百四里

●苗木 木曾路八十四里 東海道百四十里餘　●岩村 東海九十三里 甲州道八十八里　○高須 九十五里

○高富 九十七里　⧖岩手 竹中吉太郎　⧖多良 三家 高木修理 高木玄蕃 高木大內藏

⧖矢神 毛利源内　)(○今尾 尾州三万石 竹越山城守　)(○駒塚 尾州一万石 石河太八郎

∧笠松 九十六里　∧下河邊 百里餘 出ハリ

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕美濃　二十一郡、千六百二村、

御料私領高六十九万九千七百六十四石三斗二升一合六勺六才

不破郡四十五村　多藝郡六十一村　石津郡九十一村　安八郡百五十二村　池田郡六十七村　大野郡百十九村　本巣郡七十一村　席田郡九村　方縣郡五十村　厚見郡五十八村　山縣郡五十五村　武儀郡百四十五村　郡上郡百六十四村　加茂郡百二十一村　惠那郡八十村　土岐郡五十六村　可兒郡九十五村　各務郡三十七村　羽栗郡六十五村　中島郡三十三村　海西郡二十八村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

美濃　惠那郡、千旦林村、土岐郡、大湫宿、可兒郡、顔戸村、厚見郡、鏡島村、方縣郡、河渡宿、尻毛村、蘆敷村、本巣郡、生津村、木知原村、安八郡、巣田村、曽喰新田、海松村、武儀郡、吉田村、上有知村、郡上郡、木尾村、頁岡村、羽栗郡、田代村、不破郡、晝飯村、藤下村、

〔類聚名物考地理三〕野上里　のがみのさと　美濃國不破郡

野上はいづかたにてもいへば、名所にあらねども、後世は美濃の不破郡の野上の里をのみ歌によみならはせり、たゞ野上は野のうへのかたをさしていふ、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月丁亥、高市皇子、遣使於桑名郡家、以奏言、遠居御所、行政不便、宜御近處、即日天皇留皇后、而入不破、比及郡家、尾張國司守小子部連鉏鉤、率二万衆歸之、天皇即美之、分其軍塞處處道也、到于野上、高市皇子自和蹔參迎、以便奏言、○中略皇子則還和蹔、天皇於茲行宮興野上而居焉、

〔更科日記〕美濃の國なるさかひに、すのまたといふわたりして、野がみといふ所につきぬ、そこにあそびどもいで來て、夜ひとよ、歌うたふに、あしがら成し思ひ出られて、哀に戀しき事かぎりなし、雪降あれまどふに、ものゝ興もなくて、不破の關、あつみの山などこえて、近江の國、おきながといふ人の家にやどりて、四五日あり、

〔續修東大寺正倉院文書二〕御野國加毛郡半布里戸籍

紙目裏書御野國加毛郡半。布。里。太寶二年戸籍

下政戸石部三田戸口十七 正丁二 少丁一 小子三 緑兒三 并九 正女四 少女三 緑女一 并八 ○下略

〔續修東大寺正倉院文書二十三〕御野國本簀郡栗栖太里戸籍

総目裏書御野國本簀郡栗。栖。太。里。太寶貳年戸籍

〔東大寺正倉院文書二十五〕御野國山方郡三。井。田。里。戸籍

次刀自賣 年十 少女 ○下略

太寶貳年十一月御野國山方郡戸籍

三井田里戸數伍拾戸

上政戸拾壹 中下壹戸 下上壹戸 下中壹戸 下々捌戸 ○下略

〔東大寺正倉院文書二十六〕御野國肩縣郡肩々里戸籍

紙目裏書御野國肩縣郡肩。々。里。太寶貳年戸籍

下々戸主麻呂分 年卅三 正丁 ○下略

〔東大寺正倉院文書二十六〕御野國各牟郡中里戸籍

紙目裏書御野國各牟郡中。里。太寶貳年戸籍

寄人丈部古麻 年五十 正丁 ○中略

太寶二年十一月

目追正八位下五百井造豐國 ○下略

〔續修東大寺正倉院文書四〕御野國味蜂間郡春部里戸籍

紙目裏書御野國味蜂間郡春。部。里。太寶貳年戸籍

上政戸國造族石足戸口十三 正丁二 兵士二 少丁三 小子二 緑兒一 并十 正女二 緑女一 并三 ○下略

〔續日本紀 三十六 光仁〕天應元年七月癸酉、右京人正六位上栗原 ○栗原原作柴原、據一本改、下同、勝子公言、子公等之先

祖伊賀都臣、是中臣遠祖、天御中主命二十世之孫、意美佐夜麻之子也、伊賀都臣、神功皇后御世、使於百濟、便娶彼土女、生一男、名日本大臣、大臣遙尋本系、歸於聖朝、時賜美濃國不破郡栗原地、以居焉、厥後因居命氏、遂負栗原勝姓、伏乞、蒙賜中臣栗原連、於是子公等男女十八人、依請改賜之、

〔日本靈異記　下〕女人產生石以之爲神而齋緣第三十一

美乃國方縣郡水野鄕楠見村有一女人、姓縣氏也、年迄于二十有餘歲、不嫁未通而身懷任、逕之三年、山部天皇〇桓武世、延曆元年癸亥春二月下旬、產生二石、方丈五寸、一色青白斑、一色專靑、每年增長、有比郡名曰淳見、是郡部內有大神、名曰伊奈婆、託卜者言、其產二石、是我子、因其女家內立忌籬而齋、往古今來未都見聞、是亦我聖朝奇異事矣、

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕〇中略

百文〇中略　東岩藏寺領美濃國淳見村段錢

〔船田前記〕尋明應甲寅〇三年冬、今持是院公性僧都、剏大寶精剎於州之吉田村、延瑞龍悟溪禪師、爲開山焉、

〔船田後記〕利光猶在南郡、〇中略遂立元頼爲大將、毘沙童子爲副、戎殆四千人、次于逆手、更涉無首、以無水名之濟、松樹名投尾之津島、廿九日丁午、〇明應五年經鏡墓、義朝將軍埋鏡之地、古來出師過此地而光述之、次于堀津石田之際、又遷次狐穴、竹鼻、地隣墨股、

〔美濃國知行方目錄〕

一五百七拾三石四斗　本鄕池田郡　市橋代官所
一三百八拾五石八斗　萩原同　同

一百九拾參石七斗一升　田中村同　同
一六百九拾壹石二斗　くつ井三ヶ村同　同

一八拾七石五斗　段村同　同
一貳百八拾壹石七斗　宮地村同　同

一參百貳拾九石六斗　かうじがいと同　同
一八拾壹石三斗　すなはた村同　同

一千百八拾八石二斗　同片山村　同
一貳百九拾六石四斗　同東野村　同
一百六拾壹石八斗　同青柳　同
一參百四拾七石四斗　同ふちしろ　同たんなべろう　同
一參百九拾七石一斗　同草深村　同
一參百四十七石九斗　同上野村　同
一六百石五斗一升　同六井むら　同
一五百五十九石三斗　同田畑村　同
一貳百六拾石八斗　同山ほら　同
一千貳百貳拾六石九斗　同八幡村　同

合八千拾石五斗二升

右爲加增令扶助訖、全可領知者也、

天正十九年後正月十六日

富田左近將監どのへ

〔古文帖〕九百石池田善十郎

大神君

美濃國武儀郡上有知村千石宛行候、永可令領知者也、仍如件、

慶長十七年十月卅日　御朱印

池田圖書頭どのへ

〔前田文書古蹟文徵二〕當國〇美濃下有智御厨三分方内、依爲河越入道持合關所、自國方所致所務也、爰於島名田畠幷布久々見市庭田畠等者、被帶各別相傳知行證狀之上者、如元知行、不可有相違之由所候也、仍執達如件、

建武二年八月十四日　左衛門尉花押

天野讃岐權守殿

〔古文帖〕高木藤兵衛藏台德公〇德川秀忠

美濃國石津郡相木村百八十石貳斗餘、上原村九十五石餘、宮村四十八石貳斗餘、奈幾今村八十七石四斗餘、加毛肘村八十七石三斗餘、下村百三十貳石餘、突々上村百四十石七斗餘、上村七十七石貳斗餘、細野村八十四石貳斗餘、折上村八十七石一斗餘、時山村十四石五斗餘、此外一石四斗所々散出合千壹石四斗餘之事、全扶助之事、全可知行者也、

寛永六
八月八日　御朱印

高木藤兵衛どのへ

〔新撰美濃志二十九中島郡〕飯柄村は蜂尻の北にありて、西門間庄といふ、○中略尾張の妙興寺所藏の貞治六年丁未十二月九日、前美作守秦隆の寄進狀に、尾張國中島郡賀野御厨内飯柄鄉云々と見えたり、

〔書言字考節用集二乾坤〕岐阜（ギフ濃州厚見郡、世云稲葉山、）

〔行嚢抄五〕岐阜（自宇留馬到于此五里、加納へ一里、江渡へ二里、関ヶ原マテ八里、○中略）逍遙院殿濃路紀行にいはく濃之一州有城名岐阜、予秣鞋見之、則現蓬莱於和國之謂也、賦唐律以杼其賀云、

難慰騷人墨客情、征鞍萬里山都城、日東一曲景搖後、添得岐山鳳鳥聲、

又

岐阜高望勢接天、近移周室舊山川、忠肝曾不分支日、坐致太平八百年、

〔梅花無盡藏二七言絶句〕呈利渉和尚（時住霊薬山正法禪寺開山塔）

忽辭江左赴岐陽、和氣吹春鶯日長、聞説山中有靈藥、爲分半盞洒枯腸、

〔梅花無盡藏三七言絶句〕萬福大和尚寓薔薇洞久之矣、肱不離紅螢之案、空無衆衣、宇内瓜潰以來、栖錫於岐陽之南豊、藥爐經卷索々飄然、詩熟、文熟、禪熟、無不歸仰者也、一日作詩見賀余所寨坡谷二

抄、○中略謹依嚴押者、二篇前以賛、揚大和尙之盛德、充江湖瓢笠之疏、後以及坂谷二抄之一端云、

呑雲夢九有靑丘、曾倘大川三百流、今日詩家尊宿獨、由來風雅屬岐州、
蘇黃岐路蟻黏丘、滿面秋風白汗流、瘴暍三千丈偸髮、橋迷二十五楊州、

〔豐鑑一長濱與砂〕永祿七年、信長主美濃の國をしたがへ、稻葉山のふもとにうつり、井の口となんいひしを、岐阜と改、すみたまふ、

〔土岐累代記〕濃州稻葉山由來之事

夫當國稻葉山ハ不雙ノ勝跡、所謂和歌ノ名山也、○中略所謂岐山ト號ス、麓ノ里ヲ岐阜ト號スル事、往古ヨリノ稱號ニテ、明應ヨリ永正迄ノ舊記ニ多クノスル所ニテ、后世織田家ノ名付ルト云事信ズルニタラズ、但一說ニ往古ハ加納ヲ沓井吉田ト號シ、岐阜ヲ今泉忠節井ノ口宗田ト云シヲ、織田家入城ノ時ニ及ンデ、沓井吉田合テ加納ト云、今泉宗田迄ヲ岐阜ト稱スト云々、

〔行嚢抄六〕大○垣○(自垂井到于此二里)城主戶田采女正

町ノ入口竪ニ小河流ル、小船入也、所々ニ橋ヲ渡テ兩町ノ通路トス、町中ニ櫓門アリ、其前ニ大橋アリ、是ヲ牛屋川ト云、船入ナリ、此川船ニ乘テ尾州宮、勢州桑名、神戶、白子へ行ナリ、道町ヲバ俵町通ト云、前後ニ總門アリ、城ハ俵町通ノ左ノ方ニアリ、總門ノ外ニ少キ堀アリ、

〔常山紀談六〕秀吉石川が弟長松に感狀を與へられけり、其文曰、

今度三七殿、依逢貳軍美濃大垣之處、柴田修理亮勝家、出張柳瀨欲遂一戰之時、兄兵助、先赴合鎗、令擊死拔群之撐(ハタラキ)也(撐動發)於眼前見之、爾雖爲若輩、念兵助之壯志、與秩千石、向後愈可抽忠節者也、

天正十一年七月五日　　秀吉

石川長松殿

〔行嚢抄四〕福○島○(自宮駿到于此一里廿八町)名護屋領、(山村氏居所也)町ハ川ヲ隔テ兩岸ニアリ、人家多シ、木曾路

莊保

ノ大縣也、御關所ハ東ノ町入口ニアリ、番士ノ居所ハ路ノ左ニアリ、女ノ手形幷鐵炮ヲ改、番士ハ山村氏以家士令守之、山村氏ハ尾州亞相ノ御家人也、

〔東大寺要錄 六〕別功德分庄〇中略

美乃國

厚見庄田二百十七町三百歩 巳河虎荒巖、今號茜部庄

右諸國庄家田地目錄如件〇中略

天平勝寶二年三月廿九日

〔東大寺小櫃文書 上〕左辨官 美濃國

應遣官使任延久三年官符令札定東大寺領管厚見郡茜部庄西堺事、

右得彼寺今月十日解狀偁、謹撿案內、件庄數百歲間、四至牓示、更無改變、而近來光國朝臣、彼西堺牓示內、東西貳町、南北拾餘町、橫以押妨、去永久五年奏聞事由之處、被下宣旨偁、宜仰光國且停止四至牓示牢籠、且禁斷鵜鄕住人等濫行者、件牢籠子細、幷論言趣等、載宣旨狀、面前別當大僧都勝覺辭退寺務之間、無其沙汰、空以去任、因茲其妨逐日彌盛、以件牓示內號光國私領、鵜鄕之別符偏所押領也、背古今官符宣旨等之條、專無違勅之科哉、但光國前日陳狀偁、件茜部庄、往古寺領也、四至牓示初以不可有牢籠事也者、如陳申者、若是光國不知案內之處、鵜鄕司等昭所押妨歟、早任永久宣旨被遣官使停止件四至牓示牢籠者、權中納言藤原朝臣實行宣、奉勅、宜遣官使任延久三年官符令札定西堺者、國宜承知依宣行之、

天治元年六月廿日　　大史小槻宿禰花押

少辨藤原朝臣花押

〔東大寺古文書〕撿注

言上東大寺領、美濃國管厚見郡茜部庄西堺子細事、

西堺內相論田畠桑在家等

田畠拾捌町參佰步

田伍町捌段佰貳拾步 已見作　畠拾貳町伍段佰捌拾步　見作八町八段

荒三町七段百八十步

桑參佰貳拾本 大二百木 中百廿本

在家拾貳家

右去六月廿日宣旨偁、東大寺領、美濃國管厚見郡茜部庄西堺、宜遣官使任延久三年官符令糺定、去延久三年六月卅日官符所注載西境高標也、而前出羽守源朝臣光國以私領鶉郷田地寄進、故二位家領平田庄。。加納之剋堺四至之日限高標打牓示先畢、背件牓示所押妨茜部庄西堺田畠十八町餘也、仍任宣旨狀國使幷寺家使相共實撿、如舊令糺定畢、仍言上如件、

天治元年八月廿日

庄司散位中原成季

國使大判官代藤原盛通

官使左史生安倍重貞

〔東大寺文書四〕建武元年十一月廿七日御披露

一當寺興隆事、綸旨幷御事書如斯、先度被付分上横江、茜部等事候歟、向後事、又存其沙汰、悉可有注進、

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地 長德四年注文定 ○中略

美濃國

安八郡大井庄。。田五十町

私勘ニ、大井庄東西廿四町、南北廿四町、合五百七十六町、

〔東大寺要錄 二〕東大寺

注進　寺領役夫工免除證文事

三の國大井庄茜部兩庄免除宣旨四通之内

一通件兩庄役夫工無₂前跡₁宜₂從₂停止₁之由、宣旨、

天永三年二月七日

〔東大寺要錄 二〕去建曆之比、みの丶國大井庄下司職相論候時、申₂子細於關東₁之處、二品家者進₂地頭職於東大寺₁之上、不₃可₂及₂口入₁之由被₂返答₁候、お丶ゐのさうの書もづかさの事、とものりとかやをさ丶ゐなくて心へしとて、東大寺よりとり申て候とて、べたうそう上の御はうの御ふみまいりて、その御返事には、あまのかたにもみてらの御ぐだしぶみ給はりたりとて、しらんと申候に、とものりも、又みてらのくだしぶみを給、〇此間有₂脱文₁あれはいづれもだうりにまかせて、御せいばいにて候べきよしにて候なり、ひきめはむぐわんがとき、地頭をさりて御てらへまいらせたれば、これにては御さた候まじきよしを、あまごせんよりおほせくだされて候、あなかしく、

建曆元――　　ひろもと

東大寺領みの國大井庄下司職事、折紙〈副請文家〉御覽之後、返遣候、於₂寺家₁任₂道理₁可₃有₂裁許₁之由、被₂申₁倩正御房御返事、令₂早可₁申₂寺家₁之狀、依₂仰執達₁如₁件、

建曆元五月廿四日　散位在判

大井尼上ニ

〔東大寺要錄 二〕左辨官下東大寺

應₃令₂國司且停₂止武士狼藉₁且言₂上子細₁、當寺諸國寺領貳拾參箇處事、〇中略

美濃國　大井庄　茜部庄〇中略

右近日都鄙騷擾、丁壯苦軍旅、俗之凋弊職而斯由、就中五畿七道諸國神社佛寺已下庄預、或武士寄事左右、煩費州縣、或民庶不營租税、亡命山澤、權大納言源朝臣通具宣、奉勅宣、令下知彼宰吏等停止狼藉、但若有子細者、言上聽裁者、同下知諸國既畢、寺宜承知依宣行之、事在機急、曾莫延怠、

承久三年七月廿七日　　大史小槻宿禰

中辨藤原朝臣

〔今昔物語二十七〕美濃國紀遠助値女靈遂死語第二十一

今昔、長門ノ前司藤原ノ孝範ト云フ者有キ、其レガ下總ノ權ノ守ト云ヒシ時ニ、關白殿ニ候ヒシ者ニテ、美濃ノ國ニ有ル生津ノ御庄ト云フ所ヲ預カリテ知ケルニ、其御庄ニ紀ノ遠助ト云フ者有キ、〇下略

〔石清水文書一〕太政官牒石清水八幡宮護國寺　宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應知舊領掌庄貳拾壹箇處事〇中略

美濃國壹處　字泉江庄　在池田郡　田地佰拾町肆段貳佰肆拾歩〇中略

延久四年九月五日〇署名略

〔保元物語一〕新院召爲義事附鵜丸事

爲義〇中略誠ニ其儀有トテ打立ケレバ、四郎左衞門賴賢、五郎掃部助賴仲、賀茂六郎爲宗、七郎爲成、鎭西八郎爲朝、源九郎爲仲、以下六人ノ子共相具シテ、白河殿ヘゾ參リケル、新院御感ノ餘ニ、近江國伊庭莊、美濃國靑柳莊、二箇所ヲ給テ、卽チ判官代ニ補シテ、上北面ニ可候由、能登守家長シテ被仰、鵜丸ト云御劒ヲゾ被下ケル、

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略

美濃國　枳東庄〇中略、

保元三年十二月三日

大史小槻宿禰在判〇下略

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

此大納言ノ中納言ニテ御座シ時、尾張國守ニテ、去嘉應元年多ノ比、目代ニテ衞門尉政友ヲ當國へ被下ケルガ、美濃國杭瀨河ニテ宿ヲ取、山門領平野庄ノ神人、葛ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ、直ノ高下ヲ論ジテ、樣々ニナブル程ニ、葛ニ墨ヲゾ附タリケル、〇下略

〔賀茂注進雜記神領下〕同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ケ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

美濃國　脛長庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、僅可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡四〕元曆二年五月一日癸未、故伊豫守義仲朝臣妹公宇菊自京都參上、〇中略豫州爲朝敵、雖預討罰、無指雜意之女姓、盡憐之乎云云、仍所與美濃國遠山庄內一村也、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年七月五日丁亥、一條宰相中將信能、相于遠山左衞門尉景朝、著美濃國、卽於

當國遠山庄例首云云、

〔吾妻鏡十一〕文治六年四月十九日壬寅、內宮役夫大工作料未濟成敗所々事、〇中略

美濃國　蜂屋庄

成勝寺執行昌寛陳狀相副之、此外所々書抄注文所相副下文也、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十二月十二日癸亥、千葉介常胤捧歎狀、是向魚鱗鶴翼陣抽每度勳功、勵警夜巡晝節、積連年之勤勞、濟論其貞心、恐似無等類、老命難期後榮、世事只凝上賞、早存日之際、浴恩澤欲省數輩子孫之由載之、殊稱有由緒、望申美濃國蜂屋庄云云、〇下略

〔木曾路之記〕太田より一里北に蜂屋といふ所あり、此邊の村々より柹を持て、はちやへ出るを、けづりてつり柹とす、美濃のつるし柹は此邊より出る、蜂屋柹と云、蜂屋に町なし、

〔賤の小手卷一〕美濃國可兒郡帷子の庄は、昔天子に帷子を奉りける故に、名付しとかや、七鄕ありて、中切を親村とせり、

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月十四日壬子、一條前黃門書狀參著、以亡室遺跡廿箇所、讓補男女子息、爲塞將來之乖違、去月廿八日、申下宣旨訖、右中辨棟範朝臣傳宣、權中納言兼光卿宣、奉勅云云、是平家沒官領內、〇中略美濃國小泉御厨帷庄、津不良領、〇中略已上廿箇所、先日被奉讓黃門室家、將軍家御妹也云云

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事

合〇中略

一顚倒庄々〇中略

美濃國　城田庄一百餘町

四王堂領、件用途長講法花及春秋六箇日間勤修、同法悔過幷佛聖燈油僧供料所被施入也、

栗田庄、田畠二百餘町、〇中略

已上二十七處、依二流記公驗一、明白注進之、

右依二宣旨一、注進如レ件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔東寺百合文書イ一至二十四〕七條院　在御判

修明門院御處分御所庄々等〇中略

美濃國

彈〇正〇庄〇御筆狀在レ之　鵜〇飼〇庄〇　國分寺可レ被レ止二本所一

安貞二年八月五日

七條院　在御判

すめいもん

〔船田後記〕利綱利實亦自二墨俣一遂及二木田一、江州大守佐々木政高進二師于彌高山一、預伸淺井氏三田村氏兩軍來省二陣于鵜飼一、

〔美濃明細記十一〕方縣郡鵜飼村者、岐阜北也、元來鵜舟十二艘アリ、今七艘トナル、長良川鮎ヲ鵜舟ヲ以テ漁ス、鵜十二羽ヲ一人ニテツカウ也、川ヘ入ラザル鵜ヲ船バタヲタヽキ追入、又魚ヲ呑ミタル鵜ニハ魚ヲ吐カセ、篝火ヲタキ立方セハシキ業ナリ、

〔吾妻鏡二十七〕寬喜二年六月十六日、美濃國飛脚參申云、去九日辰剋、當國蒔〇田〇庄〇白雪降云云、武州太令二怖畏一給、可レ被レ行二德政一之由有二沙汰一云云、濃州與二武州一兩國中間既十餘日行程也、彼日同時有二此恠異一、尤可レ謂之、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建久二年關白藤原道家處分狀

總處分條々事〇中略

一家地文書庄園事〇中略

家領〈○中略〉　伊勢國五眞加利御厨　和田庄　美濃國衣斐庄　石田庄〈○中略〉

已上和田庄以下六箇所、宜秋門院御領、讓于余、其内也、件所々余萬歳以後可讓與之由、有御遺誡、當時又宛彼家要雜事、仍所讓與也、一期之後可被讓進宜仁門院、依有猶子之儀也、更不可分給他人、其後又可被讓右府子息、次第相承莫令違越、〈○中略〉

以前條々、所注置如右、〈○中略〉

建長二年十一月日　愚老〈在判〉

〔集古文書　十六〕鹿苑院義滿公御判物〈攝津國吳田吉田道可藏〉

大興寺〈三會院末寺〉領美濃國揖斐庄三輪保内犬丸名、同庄四十保散在尾張國草部保幷櫻木敷在事、

右任祐康寄進狀、可令爲當寺領、仍下知如件、

嘉慶三年二月七日

從一位源朝臣〈花押〉

〔吾妻鏡　五十一〕弘長三年八月二十五日壬申、今日春日部左衛門三郎泰實、被召放美濃國指深庄地頭職、是當庄沙汰人地頭有非法之由、就訴申六波羅、雖下召文、泰實不應之、仍註進其趣之間及此儀、

〔園太暦〕觀應二年〈○南朝正平六年〉十一月二十六日、朝間大藏卿來、仙洞御領、元弘御沙汰之次第談之、今日具忠朝臣爲示聞也、所詮長講堂法金剛院領、並龜山院御講五箇所、院御方御分室町院御領、半分法皇御分等、被進綸旨云々、

美濃國麻績庄〈○中略〉

右所々御管領不可有相違之、天氣如此、以此旨可令申沙汰給、仍執達如件、

元弘三年六月七日　左中將忠顯

謹上　高三位殿

〔集古文書七令旨〕永福門院令旨 京師淸和院藏

美濃國銀庄、可令知行給之由、永福門院令旨所候也、仍執達如件、

元弘三年九月六日　花押

道惠上人御房 〇中略

廣義門院令旨 京師淸和院藏

美濃國白金庄、爲今出川院御菩提料、所々致寄附當寺也、存其旨、可致知行者、仍廣義門院令旨執達如件、

康永元年五月廿五日　花押

深草道重上人御房

〔大友文書二〕雜訴決斷所牒　美濃國

當國仲村莊雜掌定海、與地頭大友千代松丸代道仙等相論所務以下事、

牒、就訴陳狀召決訖、本新之所務、各擇及確論、如地頭所帶弘安正和文保下知狀等者、爲本司跡之由所見也、無指支證者、難稱新補率法、但爲兩方所務地之條、文保成敗具也、先守彼狀、可致沙汰之由、雜掌申之處、自元無違亂之由、地頭代承諾訖、然早任彼下知狀、云雜役公事、云檢斷以下、兩方可致所務、次山野事、彼時成敗未斷也、然而相互無妨之由、地頭代亦所申也、此上不及子細、各可致等分沙汰者、以牒、

建武二年四月三日　中務丞三善 花押

花押 〇足利尊氏

下　近江龜松丸

可令早領知美濃國仲村庄上方地頭職事、

右人、爲勳功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武四年六月十九日

〔實相院文書乾〕大雲寺、同寺領攝津國萱野莊、山城國大工田、近江國朱雀院田、山城國脇莊、幷美濃國志津野莊、攝津國正木莊、同國福富莊、伊勢國野代莊、近江國犬上位田、大和國琴引別府、播磨國鞍位莊、御知行不可有相違候由、院宣所候也、仍言上如件、

建武三年九月三日　隆蔭上

進上　實相院僧正御房

〔明智系圖〕光賢 太郎三郎法名元快

賴重子、伯耆守賴貞嫡、(中略)曆應二年己卯二月十八日、大將軍源尊氏卿有所賜之證文、其文曰、

下　土岐太郎三郎光賢法名元快

可令早領知美濃國多藝庄內友江吉田地頭職事

右任伯父伯耆守賴貞法師法名存孝讓狀、可令知行之狀如件、

年號月日

判形有之

〔船田後記〕二十九日丁午〇明應六年四月 經鐙墓義朝將軍埋鐙之地、古來出師過此地而光過之、次于堀津石田之際、又遷次于孤穴竹鼻、地隣墨俣、稍來襲境、且分一軍入多藝莊、焚毀民里、

〔集古文書二綸旨〕後村上院綸旨 所藏不詳

美濃國大搦庄參分壹地頭職二見蓮淨、任先度綸旨、知行不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

興國二年三月廿九日　左少辨花押

〔明智系圖〕賴忠 左近將監未知詳

伯耆守賴貞嫡、右近賴重子、讓其領於賴基之子彥九郞、故列于此、將軍義詮有所賜之證文、曰、

下　土岐左近將監賴忠、

可早領知美濃國武義庄內野所、安弘見、加藤鄉等地頭職事、

右爲勤功之賞所宛行也者、守先例可致沙汰之狀如件、

觀應二年辛卯九月二十日

判形有、略

〔船木系圖〕一土岐二郎兵衛尉賴口者、賴尙之次男、正尙舍弟也、先年賴尙暫在濃州土岐庄、産此男、故少名號土岐孫二郎、

〔堯孝法印日記〕文安三丙寅年正月一日、古今集披覽、序春部上、於神前（○五條天神社）讀之、勤行及數刻、終夜不一睡、

美乃國眞桑庄、爲本領、舊多令還補、仍一昨日御下知御施行等拜領之時、細川右馬助入道家へ申侍し、

あふぐ哉みのゝを山のまつかひも有ける御代の道のめぐみを

九日、沙彌素欣もとにすぐにまかりて、三十六首うた讀はべりしに、（○中略）

戀地儀

たのみこしいなばの山のかひ有て今かへりくる契をぞしる

今度還補眞桑庄、稻葉山程近し、仍爲逸興如此詠之、但彼行平中納言の古歌は、いなばの國のいなば山也、同名たる計におもひよせ侍る、不可有混亂事也、

〔吾妻鏡三十六〕寬元三年五月七日庚子、就驛物年紀、被付美濃國芥見庄於山田鄕、（○下略）

〔藤河の記〕十六日、竹の內の僧正のあくたみの庄を一見すべきよしさめす、よて江口より舟にのりて、二里ばかり川づたひにさかのぼる、因幡山のふもとをすぐる路なり、

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合（○中略）

貳貫文　屋代源藏人殿（濃州芥見庄段錢）　壹貫文　駒井殿（美濃國二木庄段錢○下略）

〔集古文書五十四注文〕美濃國小島庄御年貢算用狀事

合文正元年分

一七拾七貫四百文　　京（貳百五十八貫代百一文別ニ三 此内廿一貫寺社除之○中略）

　　　　　　　　　　　　　　　　野依修理進
　　　　　　　　　　　　　　　　　　雄春判

〔木曾路之記〕垂井より關原へ一里半

垂井の近所に小島といふ所あり、兼良公の藤川の記に曰、文和の頃後光嚴院南軍をおそれましまして小島に行幸有し次に、民安寺と云ふ律院にわたらせ給ひけるとなん、

〔兼山記〕齋藤大納言之事

濃州可兒郡中井戶ノ庄雁山ト申スハ、天文ノ初齋藤大納言シツラヒ給ヒ、暫ク居住ス、山高フシテ雲聳エ、前木曾川ノ流幸ニ要害ト成、

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合（○中略）

貳貫文（○中略）　　深坂次郞殿（濃州深草保段錢）

〔蔭涼軒日錄〕長祿二戊寅六月廿三日、玉龍庵領不知行之在所、美濃國玉村保之事、伺之、卽可被還附之由有命也、

〔濃陽志略（附錄十）〕郡邑區別

元和元年八月、以信州木曾、及濃州沿河地三萬石、增封張藩、元和五年、重以濃州上有智等地五萬石、增封張藩、其餘數人附屬我敬公、曾以東照神祖所賜食邑、仍舊領焉、奉仕張藩、世謂之給人高、其郡邑隷于左、

大野郡　付寄　下座倉　東橫山　小衣斐　澤辻　乙原　南條　岡島　郡家　安八郡　北今

淵　大野　大明神　成田　池田郡　岡　片山　西橫山　東野　大門　方縣郡　鷺山　折立

志段味　厚見郡　萱場　古津　本巢郡　曾比中島　山縣郡　上野　中屋敷　多藝郡　飯

田　石津郡　市瀨　福江　城屋敷　中島郡　大浦　駒塚

合九千七百七十六石三斗八合

右慶長中、東照神祖以濃州及攝州地一萬石封石河市正光忠、其後附屬張藩、子孫至今領焉、

可兒郡　御嶽　上郷　羽崎　比元　久々利　大森　落合　中津川　茄子川　伊岐津志　惠那郡　千旦林　正家　手金野　土岐郡　日吉　大湫　半原　一日市場

合一萬四千六百石八斗三升

右慶長庚子之亂、木曾一黨勤王有功、以木曾谷封其一黨山村道勇者、老且智、請曰、木曾山頗出良材、宜隷于御料、願別擇地、神祖大褒稱之、以濃州地一萬六千石餘分賜一黨、唯馬場三郎左衞門屬于麾下、領千六百石、其餘山村千村原三尾四族、分領其邑、皆奉仕張藩、子孫至今依此、

中島郡　八神　大須　石田

合三千石

右慶長中、神祖命賜毛利掃部、附屬我敬公、子孫至今領焉、

本巣郡　十七條

千六百石三升五合

右慶長中、神祖命賜稻葉七丞、附屬我敬公、無嗣公收、

池田郡　山洞　安八郡　海松　二ッ木

合五百一石四斗二升

右慶長中、神祖命賜石黑善十郎、附屬我敬公、子孫至今領焉、

安八郡　高田　山縣郡　梅原

合千石零一合

右慶長中、神祖命賜津田吉兵衞、附屬我敬公、子孫至今領焉、

加茂郡　久田見　細目　野上　和知　牧野

合四千四百三十石九斗

右慶長中、神祖命賜稲葉右近、附屬我敬公、其後子孫斷絶、公收其邑、

安八郡　氷取　石津郡　多良内二村一日小山瀬一日樫原

合五百一石一斗四合

右慶長中、神祖命賜奥平主馬、附屬我敬公、其子彈兵衛私闘致死、公收其邑、

大野郡　西黒郡　山縣郡　伊自良　二村一日長瀧一日富山

合五百石

右慶長中、神祖命賜土岐九左衛門、附屬我敬公、其後有故別賜食邑、

加茂郡　上飯田

二百五十石

神祖命賜西尾喜兵衛、西尾豊藏以養廉、附屬我敬公、其後喜兵衛無嗣、豊藏子孫至今領焉、

總計拾貳萬七千六百七十八石五斗七升一合

〔慶應元年武鑑〕戸田采女正氏彬帝鑑間從四位侍從元治元子九月任　拾万石　居城濃州安八郡大垣　江戸ヨリ九十九里餘

天正十一、池田三左衛門輝政領、同十八、伊藤長門守、同彥兵衛、慶長五、石川長門守康通、同日向守家成、同主殿頭忠總、元和二、松平甲斐守忠良、寛永元、岡部内膳正長盛、同十、松平越中守定綱、同十一ヨリ戸田左門氏鐵、以後領之、雁間

青山峯之助□口　四万八千石　居城濃州郡上郡郡上グジヤウ　江戸ヨリ九十六里

天正十八、稲葉伊豫守通明、同右京亮貞通、慶長五、臼杵エ替、中絶、元祿七、井上中務少輔正任、同大和守正岑、同十、金森出雲守頼旹、同兵部少輔頼錦、寶暦八、青山大和守幸道、以後領之、雁間

永井肥前守尚服朝散大夫　三万二千石　居城美濃厚見郡加納　江戸ヨリ中山道百四里餘東海道九十七里餘

當城岐阜之城引、織田黄門秀信居城、慶長六、奥平美作守信昌、後松平攝津守忠政、同飛驒守忠隆、大久保加賀守忠秀、寛永十六、松平丹波守光重、同丹波守光通、寶永八、安藤對馬守信友、同對馬守信尹、

同郡藏、寶暦六、永井伊賀守直陳、以後領之、○中略

〔慶應元年武鑑〕大廣間 松平範次郎義□ 三万石 御在所濃州石津郡高須 江戸ヨリ東海道九十五里餘、東山道百十一リ四町、

往古高木備郡左衛門居之、後徳永法印、同左馬助、以後中絶、元禄元、松平攝津守義行、以後代々領之、

松平能登守乘命 雁間同 朝散大夫 三万石 居城濃州惠那郡岩村 江戸ヨリ東海道九十三里餘、甲州道八十八里餘

信長時代天正十一、森蘭丸、後田丸中務居之、慶長六、松平和泉守家乘、同和泉守乘壽、寛永十五、丹羽式部少輔氏信、同式部少輔氏定、同式部少輔氏純、同長門守氏房、同和泉守氏音、元禄十五、松平兵庫頭乘紀、以後領之、○中略

〔古文帖〕松平加賀守幕下松平飛州家來所持

濃州惠奈郡一万九千六百八十七石五斗、同土岐郡内一万六千三百六石四斗貳升、同可兒郡内四千六石八升、都合四万石之事、信州川中島爲替地宛行之目録、別紙ニ有之、全可領地、但此内五千石三役、殘三万五千石軍役可被相勤之状如件、

慶長五 二月朔日 神君御判

田丸中務大輔殿

〔慶應元年武鑑〕柳間 遠山信濃守友祿 一万二十一石 居城濃州惠那郡苗木 江戸ヨリ木曾路八十四里、東海道百四里半、但衣川通岡崎ヘ出ル、

慶長十年ヨリ遠山氏代々領之、○中略

〔慶應元年武鑑〕菊之間 朝散大夫 戸田淡路守氏良 一万石 在所濃州安八郡大垣新田 江戸ヨリ九十九里餘

元禄元年、戸田彈正氏成、當所警居所、以後代々住之、

菊之間 朝散大夫 本庄宮内少輔道美 一万石 在所濃州山縣郡高富 江戸ヨリ九十七里

寶永六ヨリ本庄宮内少輔道章、以後代々領之、○中略

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕美濃國〇中略管十八田萬四千八百二十三町一段六十五步

〔海東諸國記〕美濃州　郡十八、水田一萬四千八百二十四町五段、

〔伊呂波字類抄見國郡〕美濃國管十八(中略)本田一万五千三百四丁

〔拾芥抄中末本朝國郡〕美濃近上十八郡(中略)田萬五千三百四町

〔新撰類聚往來下〕國名〇中略　美濃濃州　十八郡(中略)田數四万四千八百卅三町

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕五十四万石　美濃

〔國花萬葉記十美濃國〕知行高五拾八万千五百卅三石

〔新撰美濃志一美濃全體說〕田圃は、和名類聚抄に、美濃國田萬四千八百二十三町一段六十五步と見え、拾芥抄に田萬五千三百四町としるし、新撰類聚往來に、美濃田數四萬四千八百三十三町、南北三日、山原田畠多、紙帛豊也、五穀万倍生ズ、大上國也とかけり、後世數度の撿知に田數增し、あるひは原野を墾開して新田とする物夥しく、和名抄等の田數に八十倍にも及べり、類聚國史に、天長九年九月癸卯、美濃國空閑地二十四町一段爲勅旨田、三代實錄に、仁和二年十月十四日己未、令美濃國班給百姓口分田、政事要略の諸國國造田四百十一町五段のうちに、美濃國二十四町、膂力婦女田二十七町三段のうちに、美濃國二町賜田八町のうちに、美濃國一町と見えたり、稅稻は、〇中略中むかし永錢つもりの頃は、何萬貫文の地なりしにや、定かにしるしたる書なければ、今は知りがたし、天正の中頃より、諸國ともに石高となりて、今の免賦といふ事はじまる、是を天正の石直しといふ、當國は古高帳元和の頃の物といへど、奥書なければ定かならず、に、六十萬九千七百四拾石餘としるし、元祿十四辛巳年十一月の鄕高帳には、六十四萬五千百一石五斗三升と見えたり、

〔美濃名細記五〕美濃國二十一郡

三万四千三百十石餘七十八ヶ村　惠那郡　四万九千二百八十六石餘百七ヶ村　大野郡

一万九千四百一石餘 三十二ヶ村 土岐郡　一万八千二十一石餘 六十五ヶ村 池田郡
三万二千百四十石餘 三十五ヶ村 可兒郡　七万四千二十三石餘 百四十四ヶ村 安八郡
四万二千六百一石餘 百五ヶ村 賀茂郡　五千五百七十九石餘 八ヶ村 席田郡
二万六千七百六石 百五十二ヶ村 郡上郡　三万六千七百九十六石餘 四十二ヶ村 不破郡
三万千五百十八石餘 六十四ヶ村 武儀郡　二万七千九百九十七石餘 五十四ヶ村 多藝郡
二万四千七百四十五石餘 三十六ヶ村 山縣郡　一万九千七百九十一石餘 三十五ヶ村 石津郡
一万九千百二十石餘 二十九ヶ村 各務郡　一万九千五百五十九石餘 五十七ヶ村 羽栗郡
三万六千二百十四石餘 五十ヶ村 厚見郡　一万千八百六十八石餘 二十五ヶ村 中島郡
三万四千三百七十七石餘 五十ヶ村 方縣郡　一万千百二十一石餘 二十二ヶ村 海西郡
三万三千七百七石餘 六十三ヶ村 本巣郡

高都合六十万九千七百四十石餘　村數合千二百五十三ヶ村

〔美濃明細記五城地〕美濃國高六拾四万五千百壹石五斗三合

内

一江戸御藏入　拾壹万七千六百石餘
一拾貳万八千八百石 不破、多藝、石津、安八、池田、大野、本巣、方縣、厚見、山縣、各務、武儀、加茂、郡上、席田、羽栗、中島、可兒、土岐、十八郡之内、 尾張領
高三万石之内壹万五千石信濃國
一壹万五千石餘 石津海西二郡之内 高須領
一拾万石 安八、多藝、石津、不破、池田、大野、本巣、七郡之内、 大垣領
高六万五千石餘ノ内五千石
一六万石 厚見、方縣、席田、本巣、大野、羽栗、 加納領
高三万八千七百六拾石餘ノ内一万四千九百石餘越前國
一貳万三千八百拾石餘 郡上郡 郡上領
高三万石餘ノ内五千貳百七十石餘駿河國
一貳万四千七百三拾石餘 惠那、土岐、山縣、大野、安八、多藝、 岩村領

一壹万五百石　苗木領

〔美濃明細記附録十二〕一高六拾三万七千石餘　恵那賀茂　總高辻

外高千九百三拾九石九斗九升　御朱印寺社領井除地高

拾貳万七千四拾三石　尾張殿領　拾万石　戸田伊勢守領　六万石　安藤對馬守領

壹万八千石　松平攝津守領　貳万石　松平能登守領　貳万三千八百拾九石壹斗八

升　金森出雲守領　壹万八千石　遠山伊豫守領

〆三拾五万六千三百六拾貳石壹斗八升

拾貳万八千九百石餘　給所七拾四人

殘　拾五万四千八百六拾五石五斗四升壹合壹勺　御料所

〔美濃國領主郷名田租記〕郡都合貳拾一郡　高合六拾三万八千壹石三斗一升九合三勺

〔官中秘策二〕美濃國　十八郡〇中略

一石高四拾万四千四百六拾九石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調

美濃國御料私領　一高六拾九万九千七百六拾四石三斗貳升壹合六勺六才

出擧稻

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略

美濃國正税公廨各卅万束、國分寺料四万束、藥師寺料二万七千束、延曆寺揔持院料四万束同寺四王堂料四万束、文殊會料二千束、藥分料一万束、修理官舍料二万束、池溝料四万束、救急料二万束、俘囚料四万一千束、

〔倭名類聚抄五國郡〕美濃國〇略註　管十八（中略）正公各三十萬束、本稻八十八萬束、雜稻二十萬束

〇按ズルニ、本稻八十八萬束トアレバ、雜稻ハ二十八萬束ナルベシ、二十ノ下恐ラクハ八ノ字

國產貢獻

ヲ脱スルナラン、延喜式ナル雜稻モ、之ヲ計算スルニ、正ニ二十八萬束ナリ、

〔延喜式五齋宮〕年料供物〇中略　堝一口、陶埦卅口、臼二口、盤十口、已上美濃國充之〇中略　右水部司所請〇中略

池由加一口、由加四口、匜一口、瓱一口、缶二口、叩瓮四口、以上美濃國充之　右殿部司所請〇中略

所須藥種〇中略　陶堝叩瓮各四口、陶手洗一口、陶椀二合、盤二口、已上美濃國充之　右藥部司所請

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略　絁八百五十疋、〇中略　交易六百五十疋、近江美濃國各五十疋(中略)七箇國〇中略　綿(中略)

美濃國各二合(中略)十五箇〇中略　青木香二百七十斤(中略)美濃國廿斤〇中略　黑米二百斛(中略)美濃丹波備前三國各廿石〇中略　支子數有二挼盆

〇中略　美濃國圓二斛、

〔延喜式二十三民部〕年料舂米〇中略　美濃國內藏廿石、大炊一千四百石、糯廿石、〇中略

年料租舂米〇中略　美濃國二千三百石〇中略

年料別貢雜物〇中略　美濃國筆一百五十管、紙麻六百斤、支子二石、青木香廿斤、零羊角六具、馬革廿四張、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略　美濃國十七壺七口各大一升、十口各小一升、〇中略　右八箇國爲第三番卯酉年〇中略

交易雜物〇中略　美濃國絹二百疋、胡麻子四石、荏子十二石、鹿革卅張、油二石、白絹十二疋、褶二合、隔三年進金漆二斗、

〔延喜式二十四主計〕美濃〇中略　右十二國並上絲〇中略

美濃〇中略　右廿九國絁絹〇中略

美濃國行程上四日、下二日、

調白絹十疋、橡帛廿疋、廣絁十疋、帛三百疋、長絹百疋、絲廿三絇、長席三百七十五枚、瓺二口、甕十六口、由加十二口、缶廿七口、酢瓶八十口、水椀廿五合、深坏卌四口、箸壺十四口、麻笥盤十四口、片盤卌六口、洗盤十二口、手白髮瓶四口、水鉢廿五口、𤭯瓶四口、鐎十口、油瓶二口、大瓶七口、有蓋埦卅五合、高盤十七口、雜坏廿口、甘壺十一口、酒壺十口、臼六口、清坏廿口、足下坏五十口、油坏卅六口、麦坏六十口、乳戸四口、爐瓮八口、宮瓶十口、後盤卌四口、酒坏卌八口、比太爲瓶五口、大盤卌五口、池由加一口、小坏十口、

叩戸廿二口、自餘輸絹　庸、韓櫃卅四口、塗漆著鏁五合、白木廿九合、自餘輸米、　中男作物、紙、金漆、胡麻油、荏油、煮鹽、年魚、鮨年魚、鮨鮒鮨、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〇中略

美濃國六十二種　黃芩、芎藭各十四斤、柴胡、大黃、龍膽、栝樓、商陸、楡皮、升麻各十斤、王不留行、牛膝、茈䓯、地楡、紫菀、白䕫、石南草各廿斤、藍漆五斤、白頭公四斤、蜈蚣九斤、枸杞、薺苨、杜仲、茜草、續斷各五斤、桔梗、細辛、松脂、茯苓各卅斤、獨活十斤、木斛十五斤、白朮卅八斤、丹參十四斤、白芷廿斤、芍藥、桑螵蛸、卷柏各二斤、石斛七十斤、厚朴一斤、巴戟天五斤、貝母三斤、蛇脫皮一兩、干地黃一斛、榧子一斛五升、署預二斗、麥門冬二斗七升、桃人六斗三升、半夏二斗八升、秦椒、葵子各一斗五升、附子大八升、五味子三斗三升、菟絲子二斗一升、葶藶子五升、蛇床子九升、栢子人八升、蜀椒九斗三升、青葉石九斗、獺肝三具、熊膽四具、猪蹄十具、鹿茸七具、熊掌二具、

〔延喜式內膳三十九〕年料　美濃國鮨鮨八擔、鮨年魚四擔、隔月三缶、火干年魚一八擔、

〔延喜式左馬四十八〕凡國飼御馬者、〇中略美濃國十疋、右寮〇中略　飼戸〇中略　美濃國三烟、〇中略　右隷左馬寮每年當

國計帳進官〇中略

美濃國三烟　右隷右馬寮、並准上條、

〔延喜式兵庫四十九〕凡諸國所進修理甲料、馬革者、〇中略美濃廿四張、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂、〇中略美濃八丈、又桥

〔庭訓往來〕丹後精好、美濃上品、尾張八丈、

〔毛吹草三〕美濃

糸　綿　絹　厚紙　中折紙奥具帖ト云　温石　藍玉　山梔子クチナシ、　赤豆世俗ニ當國ノ赤豆ヲモ大納言ト云　眞桑瓜根木ト云　宮代根深　八屋釣柿　木練　横山橡板外ヨリ宜ト云　瀬戸燒物分テ葉茶壺チヤク、藤四郎ト云、伊勢天目ト云モ當國より出スト云、　關剃刀　小刀　爪切等　赤坂刃土　雄島布　岐阜鮎アユ　同鵜　墨俣鯉　北山鷂ハイタカ

〔諸國名物往來〕美濃

紙、絹、同糸、綿、扇子地紙、眞瓜、温石、藍玉、枝柿、釣柿、瀬戸陶器、藤四郎燒と古より云、關小刀、剃刀、庖丁、岐阜鮎、須俣鯉、北山鷂、八木、他國にまされり、

〔美濃明細記十一産物〕一美濃紙　武儀郡洞戸郷十六村、板取郷十三村、牧郷大野、向島、乙狩、上野、長瀨、小坂、アラコ、小倉、山縣郡之内所々出之、本巣郡根尾、池田郡廣瀨、三村、可兒郡久々利、賀茂郡加治田邊、土岐郡大富、アラマキ、郡上郡赤谷、神路、小駄良、須見、藤原等漉出之、

美濃紙隨一ヲ大直紙ト稱ス、長一尺四寸程、幅二尺及也、常ノ美濃紙ヨリ厚シ、

奥具帖次之、是常之美濃紙ノコト也、長五六分、幅七分モ大直ヨリ狹シ、色白塵ナキ宜紙ヲ障子紙ト云、經ヲ細ク作ヲ細經紙ト云、他國ノ紙ハ折ザル紙モアルユヘ、京ニテハ中折紙トモ云ナリ、

右二品、宜紙洞戸牧郷ヨリ出之、

枚透紙　森下紙十文字ニ漉、合羽ニ用、　扇地紙　小菊鼻紙

右ノ品々、武儀筋多ク出之、

〇美濃半切　杉原紙　尺長紙　小杉鼻紙　半紙

ガンヒ紙、鳥子ニ似タル紙也、虫クハザルユヘニ大切ノ書ニ用ル也、ガンヒト云紙木ヲ以漉也、

右ノ品々、武儀諸方ヨリ出之、

厚紙　北山ノ内、池田郡三倉村、津汲村、大野郡乙原、

薄口紙　横山村、杉原村、

右ノ品々、本巣郡根尾郷ヨリ所々出之、

奉書　杉原　美濃紙　厚紙　鼻紙

右ノ品々、池田郡廣瀨三郷、羽根村、西村、北村、并坂本村出之、

美濃紙　半紙

右ノ品々可兒郡久々利村出之、

美濃紙　半紙　鼻紙類

右ノ品々、土岐郡、大宮村、土岐口村枝郷、アラマキ、加茂郡加治田村出之、

奥具帖　中折　河合紙　廣紙　小菊　和紙　厚紙

右ノ品々、土岐郡肥田村、惠那郡串原村、富田村久次見村漉出之、其外同郡之内少々宛出之、

美濃紙類　廣紙　厚紙郡上郡勝原村　小菊類郡上郡小駄良村

右品々、赤谷村、神路村、須見村等漉出之、

一眞桑瓜本巣郡眞桑村產也、昔稱眞瓜村、　ムギハダ青ク、甜味濃カニシテ、口中ニタマラズ、江戸獻上アリ、

一蜂屋柹釣枝柹賀茂郡蜂屋村產　ホサヾル時ニ回リ七八寸、カウザシト云重百錢目計、其味格別ニシテ風味輕シ、江戸獻上、始ニ生熟柹、後爲釣柹再獻上、

一美濃柹御所柹トモ、大和柹トモ云、　和州之產爲本、濃州次之、爲獻上、

一長良川小瀨川鮎方縣郡長良村、武儀郡小瀨村、　長良川者、墨俣河渡川上也、長良則岐阜ノ北也、長良川鮎江戸獻上アリ、長良ヨリ二里川上ヲ小瀨川ト云、此處鮎倘大キニシテ、頭小背大ニ丸ク、故小瀨丸ト稱ス、大槪ヨキ鮎七八寸、重百錢目、至極大キナル希モノハ長一尺一寸、重百八九十目、

池田郡積川、又本巣郡根尾川、伊津貫川鮎モ、亦大キニシテ宜、　鮎之鮨、於岐阜漬之、江戸獻上ア

リ、　鮎ノ鮓有、製法、而其味格別、江戶献上アリ、　方縣郡鵜飼村者岐阜北也、元來鵜舟十二艘アリ、今七艘トナル、長良川鮎ヲ鵜舟ヲ以漁ス、鵜十二羽ヲ一人ニテツカウ也、川ヘ入ザル鵜ヲ船バタヲタヽキ追入、又魚ヲ呑タル鵜ニハ魚ヲ吐セ、篝火ヲタキ、立方セハシキ業ナリ、和名抄方縣郡鵜飼地名アリ、村上帝圓融帝比ヨリ鵜飼アリト見ヘタリ、武儀郡小瀨村、亦鵜飼舟アリ、

一墨俣川鯉（安八郡）　色赤キル事格別也、又煮面油多ク浮ブ、

一鵜沼川鮎（各務郡鵜沼村邊漁之）　又佐渡川下流、安八郡平村、牧村邊漁之、

一菅瀨川鮎（大野郡長瀨村邊）　小キ谷川、古歌アリ、

一鯱鯉　カラズ、口明ズト云エリ、

一宮代瀘白（不破郡）（キツネ）　白ミ多ク、チバラズ、細キ也、一說皆白ト云トモ云エリ、

一根芹（多藝郡）
享保ノ比、養老の瀧芹を上ければ、
根芹つむこれや千年のたねならん老をやしのふ瀧のなかれに　林丘寺宮

一大桐牛房（安八郡大桐村者高須ノ北）　牛房ノ口少ク柔ナリ

一岩茸（本巣郡根尾大須谷田越波邊ノ山明神山ナドニ出）

一美濃撰絲　岐阜絹トモ云　薄キスヾシ（絹）也

一曾代糸（武儀郡曾代村）　曾代絹　當國ニテハ、曾代村ヨリ糸引始、故武儀郡郡上郡邊ヨリ出ル能キ糸ヲ曾代糸ト云、此糸ヲ以テ岐阜ニテ織絹ヲ曾代絹ト云、曾代糸ヲ以、京都ニテ羽二重等モ織ル糸トナル也、庭訓四月文章美濃上品ノ說多シ、前後ノ品ヲ考ルニ衣服類也、此類ノ事ニヤ、

一綿　土岐、可兒寡シ、郡上、武儀產多吉、

一鏡島干大根（厚見郡鏡島村）

一深瀨疊表（山縣郡東深瀨村西深瀨村）

人口

一藍　葉栗郡池田郡ヨリ出

武儀郡
一ツホタハコ　強シテ不宜

一北山鶴（ハイタカ）　本巣郡根尾、大須越波山生之、惠那郡苗木、北巣鷹山數ケ所有、

一煎茶　山縣郡伊自良邊、石津郡時多良邊ノ産、於越前越後交易時ノ下村、梅ノ下風尤可也、又可兒郡虎溪、大野郡横山、郡上郡莖長等ノ産可也、

一磁器（ヤキモノ）　出於土岐郡久尻、駄和、多治見、下洞、妻木下石、笠原等、此邑中久尻、或郡尻燒物ヲ釜久シク作之、久尻釜元祖加藤筑後ト稱ス、延喜式貢物出於此地歟、古瀬戸藤四郎燒、出於尾州春日井郡瀬戸、妻木久尻燒等モ都而瀬戸ト云、

本巣郡曾井村
一土器

一土岐鷹繪　土俗傳曰、土岐頼忠自畫云々、

萬寶全書曰、富景號洞文、鷹繪ノミ長ジタリ、美濃國土岐刑部少輔頼忠、法號禪藏寺芷庵、鷹一流相傳也、頼忠之繪師カ、土岐家之内富景之名未考、

一關打物　武儀郡關村鍛冶多シ、故ニ都而美濃打物ヲ關ト云、（中略）今モ其子孫、岐阜ニリ小刀剃刀等多ク出之、關打物都而位ハノボラザレドモ、地金刃金トモ強、指料ニヨキ也、

日本鹿子曰、美濃刃土ヲ吉ト云々、古老傳曰、不破郡荒尾、西畫飯村邊ヨリ土ヲ、他國之鍛冶モ取ニ來ルコトアリト云傳フ、

〔續日本紀　二文武〕大寶二年七月乙亥、美濃國大野郡人神人太、獻八蹄馬、給稻一千束、

〔續日本紀　五元明〕和銅五年三月戊子、美濃國獻木連理幷白鴈、

〔續日本紀　六元明〕和銅六年五月癸酉、獻〇中略美濃靑樊石、

〔官中秘策　二〕美濃國　十八郡〇中略

風俗

一人數五拾三万三千九拾六人　内 貳拾七万貳千六百三拾人 男 / 貳拾六万四百六拾壹人 女

○按ズルニ、此總數、内譯ト合ハズ、恐ラクハ一誤アラン、

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略

御料私領 一人數五拾六万六千三百五拾五人　高六拾四万五千百壹石餘　美濃國

弘化三丙午年 諸國人數調　内 貳拾九万千四百三人 男 / 貳拾七万四千九百五拾貳人 女 ○中略

御料私領 一人數五拾八万三千百三拾七人　高六拾九万九千七百六拾四石餘　美濃國

内 貳拾九万九千貳百六拾貳人 男 / 貳拾八万三千八百七拾五人 女

〔人國記〕美濃國

美濃國之風俗、其意地キレイニ而、タトヘバ水精ノゴトシ、サレバ水精モ不ㇾ磨バ光リ出ル事アタハズ、然ドモ根性ヲヨク生付キタル風俗ハ、必垢ヲケヅ(ル)コト早シ、而能ク道理ニシタガフ、雖ㇾ然西美濃ハ人之風儀柔ニ見エテ、徹スル處之物鮮ク、言舌風流ニ見ユルナリ、東美濃ハ生得ノマヽニ而木地ナリ、日本ノ内之風俗四五ケ國ノ内ナリ、サレドモトコロガラ氣シツニナレタル風ナレバ、イヤシキコトモ多ク有ㇾ之也、直成ガ能キトテ人ノ手足ノ曲ルハ亦其理之上ノ直也、如ㇾ斯ノ節ニアタルト云事ヲ知リタル人ハ、百人ニ七八十人ハ無ㇾ之而、タマ〳〵一人ニテモコノ理ニ達スル人アラバ名高成ベシ、サレ共勢強フ而、國風之手本トモナルベキホドノ人ハ稀ナルベキナリ、

〔新撰美濃志 一 美濃全體說〕風俗は、質直律儀にして、田舍めきたれど、岐阜大垣のあたり、繁華の地は然らず、京大坂なンどの風儀をまねぶかたも見えたり、すべて農夫も帶刀する事を好み、(俗に美濃のさしだなれといふ)舊家の世系をたゞし、賤と良とのわかちをたて、、由緖をうしなはずして守らむとす、

此故にや、ともすれば、郷黨の爭論起る事あり、むかしもしか義氣強く武藝などもはげみしにや、當國の兵士健兒等を召しつかひ給ひし事多く、續日本紀、類聚國史ともに、天平寶字六年二月辛酉、簡〻點伊勢近江美濃越前等四國郡司子弟、及百姓年四十〈類史四十〉已下二十〈類史廿〉已上、練〻習弓馬〻者〻以爲〻健兒〻云々と見え、延喜の兵部式諸國健兒の條に、美濃國一百人としるせり、又類聚國史に、養老四年十一月甲戌、遠江云々、美濃六國者、免〻征卒及廝馬從等調庸並房戸租〻としるし、三代實錄に、元慶二年六月二十一日乙酉、勅〻令東海東山兩道諸國簡〻擇勇敢輕鋭者〻須〻待〻出羽國奏請〻應〻機奔赴〻云々、美濃三十人と見え、日本紀略に、天慶四年六月二十四日癸巳、於〻右近馬場〻試〻近江美濃伊勢等兵士〻なんどしるせり、

〔美濃明細記十名所和歌〕關藤川〈不破郡、關ヶ原の西、不破關跡の西に、近江國坂田郡藤川驛の方より不破關のきはに流る、むかしより橫にて渡る、○中略〉

不破關〈不破郡、關ヶ原の西、松尾村大關に舊跡あり、○中略〉

野上里〈不破郡關ヶ原の東にあり○中略〉

美濃御山〈不破郡、宮代南宮山也、みの〻中山のうちなる故、南宮を仲山金山彦大神と稱奉る也、山の上にむかしひとつ松有、一條兼良公植繼せ給ふ松もかれて、峯にあとを殘せり、○中略〉

南宮神木白玉椿〈みの〻お山よみ合也○中略〉

美濃中山〈不破郡、南宮山より西、關ヶ原迄の山續き、都てみの〻中山と云、西北の山と續かず、中にある山也、不破山と、萬葉に人麻呂讀るも此山なり、○中略〉

美濃中道〈中山の西南に道あり、關ヶ原牧田澤田のかた烏江より伊勢尾張へ船路の古道也、宗祇名所方角抄に出せり、○中略〉

垂井水〈不破郡、垂井宿南宮鳥居の邊、名井有、古書足井とも書けり、○中略〉

青墓里〈不破郡にあり○中略〉

笠縫里〈安八郡にあり、昔此所往來の道にて、近き所に宿地と云所有、十六夜記曰、關よりかきくらしつる雨、しぐれに過てふりくらせば、道もいとあしくて、心より外にかさぬひのむまやと云所にとゞまる、〈永仁六年二月十八日の事朝〉○中略〉

結神安八郡西結村に鎮座なり○中略

稻葉山厚見郡岐阜山なり、因幡山とも書けり、　古今集在原行平の歌に、立わかれいな葉の山の峯に生る松としきかば今歸りこん、此歌八雲御抄、範兼抄、名所和歌集に美濃と有、清輔抄因州と有、文德天皇實錄云、齊衡二年正月、從四位下在原朝臣行平爲因幡守云々、頓阿の井蛙抄云、因幡國司任の時にや詠じけん、おぼつかなし、二條家傳云因州云々、季吟拾穗抄に曰、兩說なれども因州然るべし、此歌を本歌にして、後代美濃國稻葉山を讀る例多し云々、○中略

伊津貫川席田郡西にあり○中略

席田郡名なり、むかし此邊定家卿の知行所のよし、○中略

船木山席田郡東境の上なり○中略

宇留間各務郡鵜沼といふ、賀間市ともあり、

岩田小町各務郡岩田村なり、今は野なく郡有、茶見村の近所より山縣郡岩田小野はすみれきゞす讀り、みのは小野眞葛原讀り、○中略

日高柚其地不詳○中略

月吉里土岐郡細久手の南也、此里より三日月影の白石の出る、○中略

土岐郡東美濃にあり○中略

尾總橋方縣郡雄總村の南、長良川にむかしは橋有、○中略

母山武儀郡大矢田村の山也神道百首卜部兼邦の歌に、美濃國母山とあり、後に母山と書けるか、○中略

寢覺里池田郡片山村八幡村を寢覺郷又寢覺庄と云、片山鶯は春早く鳴る也、寢覺の里の古歌、梅鶯擣衣とよめりと云々、小島のすさみに寢覺里此あたりと云也、○中略

往來松厚見郡加納の西に有　松平丹後守光永加納の城にありし時、ゆきゝと名づけられ、同丹波守光熙寶永頃山城國淀城に移られし時、陪臣の人の歌に、

あけくれにながめしまつをふるさとの人の往來の便りにぞきく○中略

南宮不破郡宮代に鎮座也、美濃國は東山道なれば○中略

伊吹明神不破郡伊吹村に鎮座也、野上より北へ入程近し、○中略

今須不破郡にあり○中略

山中不破郡山中村○中略

鷲瀧不破郡山中村往来道の南かたわらにちいさき瀧なり、黒地川に関れり、○中略

黒地橋不破郡山中村黒地川有、川はゞせまけれど深き川也、○中略

青野ヶ原不破郡にあり、名所方角抄、秋寝覚に名所に入たり、○中略

赤坂不破池田二郡にかゝる、秋寝覚にも名所に入、つゝじ紅葉月に玉篠よめるとあり、○中略

杭瀬川不破郡安八郡の境なり、赤坂の東に流るゝ川なり、昔はくいせ川、赤坂村邊より赤坂の東の川へ流るゝといへり、○中略

美江寺観音本巣郡美江寺宿也、後に永祿比より岐阜に安置、○中略

江口方縣郡江口なり、長良川の流なり、○中略

長良川鵜飼方縣郡○中略

富士見柳安八郡林中村に、享保始頃まで大木あり、○中略

管瀬川大野郡長瀬村邊にあり○中略

花なし山惠那郡東村の山也、大井宿の近所なり、○中略

關ヶ原不破郡にあり、秋寝覚に名所に入たり、○中略

三津屋安八郡に有、俗にみつや北方と云によりて也、○中略

小野長橋安八郡小野村の西に舊跡あり○中略

藍川不破郡垂井驛の東に有○中略

中川安八郡中川庄十三ヶ村あり○中略

結の里安八郡にあり○中略

帷子山可兒郡○中略

竃山土岐郡今戸村にあり○中略。

遠山惠那郡岩村の邊を遠山の庄と云○中略

白雲水郡上郡山田庄宮瀬川の邊に泉あり、俗に宗祇水と云、紅葉ばの流るゝ龍田白雲の花のみよし野おもひ忘るな、といへる東野州の歌によりて白雲水と名付く、東野州常縁宗祇に古今傳授して、此所まで送り來り、和歌を詠じてあたへられし跡ゆへ宗祇水といへり。今金森兵部少輔臺近の領地たれば、永く世に傳んことを公卿にねがひて、其ことの葉を多くあつめて世に傳へり。

　言の葉の道に結びし契をもつきぬ泉に殘す跡かな　烏丸從三位　光榮

〔藤河の記〕みの、國の歌枕の名所、その所はいづくともしらねども、こゝろにうかぶ事どもを筆のつゐでにかきあつめ侍るべし。

まれにきてみの、お山の松のうれのうれしさみにもあまのは衣

あま衣みの、中山こえ行ばふもとにみゆる笠ぬひの里

いのるぞよおさまるみ世をまつことはみの、お山のひとつこゝろに

時鳥ね覺の里にやどらずばいかでか聞む夜半の一こゑ

はゝきゞの梢有ともみえなくにたれをも山となづけ初けん

明くればしげきうきみのわざみのに猶分まよふ夏草の露

五月雨のもみぢを染るためしあらば舟木の山のいかにこがれん

七夕の逢せは遠きかさゝぎのおぶさのはしをまづや渡らむ

東路のうるまのし水名をかへばしらじな旅にたつの市人

鳰鳥のすのまた川に月すめばあらはれわたる浪の下道

わかえつゝ見るよしも哉瀧の水老をやしなふ名にながれなば

席田を織物ならばゑき浪やいつぬき川のたてとならまし

いく千とせかぎらぬ御代は席田のつるの齡もゑかじとぞ思ふ

蘆がきのまぢかき跡を尋ても小島の里にみゆきやはせぬ

世の人のあだを結ぶの神なりといのらば心とけざらめやは

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略美濃國一百人〇中略

諸國器仗〇中略美濃國甲六領、橫刀廿口、弓卌張、征箭卌具、胡籙卌具、

〔日本書紀二十五孝徳〕大化元年七月己卯、遣〇中略忌部首子麻呂於美濃國、課供神之幣、

〔日本書紀二十九天武〕四年二月癸未、勅〇中略美濃、尾張等國曰、選所部百姓之能歌男女、及侏儒伎人而貢上、 十四年七月辛未、詔曰、東山道美濃以東、東海道伊勢以東諸國、有位人等、並免課役、 十月庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田金鐘於美濃、令煎白朮、因以賜絁綿布、

〔續日本紀三文武〕慶雲四年五月癸丑、美濃國言、村國連等志賣、一產三女、賜穀四十斛、乳母一人、

〔續日本紀七元正〕養老元年八月甲戌、遣從五位下多治比眞人廣足於美濃國、造行宮、 九月甲寅、至美濃國、東海道相模以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等、詣行在所、奏風俗之雜伎、

〔續日本紀七元正〕養老元年九月丁未、天皇行幸美濃國、 戊午、賜從駕主典已上、及美濃國司等物、有差、郡領已下、雜色四十一人、進位一階、又免不破當耆二郡今年田租、及方縣務義二郡百姓、供行宮者租、

十一月癸丑、天皇臨軒、詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除愈、在朕之躬、甚有其驗、又就而飮浴之者、或白髮反黑、或頽髮更生、或闇目如明、自餘痼疾、咸皆平癒、昔聞後漢光武時、醴泉出、飮之者、痼疾平癒、符瑞書曰、醴泉者美泉、

可以養老、蓋水之精也、寔惟美泉卽合大瑞、朕雖痛庸、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年、爲養老元年、○中略美濃國司、及當耆郡司等加位一階、又復當耆郡、來年調庸、餘郡庸、 十二月丁亥、令美濃國立春曉挹醴泉、而貢於京都、爲醴酒也、

〔續日本紀八元正〕養老二年二月壬申、行幸美濃國醴泉、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年十一月乙卯、於南藥園新宮、大嘗以因幡爲由機國、美濃爲須岐國、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年正月乙未、令美濃武藏二國少年、每國二十人習新羅語、爲征新羅也、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十一月癸酉、先是廢帝既遷淡路、天皇重臨万機、於是更行大嘗之事、以美濃國爲由機、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年四月丙午、勅賜美濃國荒廢田空閑地五十町於諱、田邑

〔續日本後紀七仁明〕承和五年五月丁卯、美濃國言、古樣弓弩不可中用、從加修理、何用之有、今須弃古樣廿脚、更造新樣四脚、許之、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年正月壬申、美濃國言、凡上下諸人、隨其位階、乘用人馬、灼立條章、而貢御鷹馬、能膏、昆布、幷沙金、藥草等使或以遷替之國司、便宛綱領、或差浮遊之輩、令得公乘、而公物有限、私荷無數、使等偏假威勢、不憚憲法、驛子無由告訴、運送山谷、人馬斃亡、職此之由、望請除非貢御鷹馬幷四度使之外、諸使等、以初位已下子弟、被差宛之者、勅依請、

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年七月九日辛亥、先是尾張國言、奉太政官處分、堀開廣野河口、令趣舊流、而美濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、率兵衆步騎七百餘人、襲來河口、毆傷郡司、射殺役夫、河水流血、野草霑膏、成功將畢、有此相妨、至是太政官下符美濃國司、偁、○中略又毆傷人、流血輦云郡司之無狀、抑亦國吏之失、靜而言之、理豈合然、宜早令堀開、又擅興兵衆、法禁是重、而數過七百、害及殺傷、須禁國亂首吉雄等、兩國司相共錄死傷人數、依實言上、 廿六日戊辰、先是尾張國言、美濃國各

務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、作レ亂、〇中略太政大臣下二知美濃國司一、推二糺吉雄等之犯過一焉、

〔三代實錄 三十陽成六〕元慶三年十二月五日庚寅、美濃國獲二連理樹二一、

〔百練抄 四條三〕長和二年六月、美濃國異魚出來、進二其圖一、

〔吾妻鏡 六〕文治二年六月九日乙卯、去四月之比、政道事殊可レ致二興行一之趣、付二議卿一令二奏聞一給了、勅答之條々、執二職事目錄一、帥中納言被レ進レ之、今日所二到來一也、

條々〇中略

一美濃國事

在廳申狀等、行二沙汰一先了、子細追可レ被二仰一也、〇下略

〔吾妻鏡 八〕文治四年七月十三日丁未、美濃國鄉々地頭押領事、能盛入道、爲保、成季等、所レ進折紙、井在廳勘狀、同被レ下レ之、又美豆牧司申、本庄井高運島事、景時代官、不レ辨二所當一由事、可レ令二尋沙汰一者、尋究可レ被レ成二御下文一之由云云、

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年四月四日丁亥、美濃國內地頭佐渡前司重隆、幷堀江禪尼妨二公領一、爲レ令レ沙二汰其事一、召二使則國入部之處、菊松、犬丸等公文凌礫之由、依レ有レ訴被レ尋二下之間、二品殊令レ驚申給、其狀內內可レ被レ遣二權中納言許一之由云云、

召使則國申

爲二美濃國菊松文末支犬丸公文延末一、被レ陵二礫則國身一由事、

件兩公文等之所行、何遁二罪科一候哉、早以二御使一被レ召二末支延末一、可レ被二罪科一候也、いかにも可レ有二御裁定一候、於二尼公地頭職一者、不レ日令二停廢一、以二他人一令二改補一候畢、〇下略

〔吾妻鏡 十二〕建久三年六月廿日庚申、美濃國御家人等、可レ從二守護相模守惟義下知一之由被二仰下一云云、

是爲〻被〻鎭〻洛中群盜等〻也、

〔吾妻鏡十四〕建久五年閏八月十日丁卯、相模守惟義、賜〻美濃國中沒收地等〻云云、

古事類苑

地部十七

飛驒國

飛驒國ハ、ヒダノクニト云フ、東山道ニ在リ、東ハ信濃、西ハ加賀、越前、南ハ美濃、北ハ越中ニ界シ、東西凡ソ十七里、南北凡ソ二十里、其地勢ハ四方皆山嶽ヲ以テ圍繞シ、國內亦山嶺重疊シテ殆ド平地ナシ、此國ハ古ヘ國府ヲ大野郡ニ置キ、大野(オホノ)、益田(マシタ)、荒城(アラキ)ノ三郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、後世ノ書ニ、大野郡ヲ天野、或ハ大原ニ作リ、又大原、益田、天野、荒城ノ四郡ヲ擧ゲタルモアレド、皆誤ナリ、蓋シ德川幕府ノ比、荒城郡ヲ吉城郡ト書シルルモノ、多ク公私ノ文書ニ見エタリ、是文字ノ城ヲ荒スト云フニ通ズルヲ惡ミ、好字ヲ以テ替ヘタルナリト云ヘリ、

明治維新ノ後、岐阜縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕飛驒 比太

〔饅頭屋本節用集 比天地〕飛驒(ヒダ)。驒州。

〔飛州志 一土地〕國名

飛驒 仁德紀 斐太 萬葉集 和歌 斐陀 日本書紀 卑田 先代舊事本紀 神社本紀 比太 和名類聚抄 飛駄 國名風土記 飛驒 和漢三才圖會、廣益俗說辨、 按ズルニ、各國字ノ異也、

〔令義解 三賦役〕凡斐。陀。國。、庸調俱免、○下略

〔萬葉集 七雜歌〕羇旅作

斐太人之、眞木流云爾布乃河、事者雖通、船曾不通、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

云云、物者不念、斐太人乃、打墨繩之、直一通二、

〔倭訓栞前編二十五〕ひだ〇中略　飛驒の國の名も、國體の衣のひだに似たる也、山深く澗峪しくて、釣梯篭渡などの名あり、後漢書に跋涉懸度といへる如し、師古註に、懸度は、懸繩而度也と見ゆ、姓氏錄に楲田といふ事も見えたり、

〔古事記傳十五〕豐後國郡名、日高比多と和名抄に見ゆ、風土記には日田とあり、是によりて思へば、飛驒も日高國歟、

〔諸國名義考上〕飛驒

和名抄に、飛彈比太、國府在大野郡、名義は挽手人より負し名なるべし、延喜民部式に、飛彈匠丁とあり、賦役令に、凡斐陀國庸調俱免、毎里點匠丁十人、毎四丁給廝丁一人、一年一替、餘丁輸米充匠丁食とあり、類聚三代格の承和元年の條に、弘仁五年五月廿一日云々、得飛驒國解偁、貢上下匠、毎年有數、事畢之日、規避課役云々とあり、鴨祐之が大八州記に、按杣者材木之名、而匠工造杣木也、此國多材木、而其民課役皆爲匠丁、故以爲國名也乎といへり、萬葉集に、云々物者不念、斐太人乃、打墨繩之、直一道二また、斐太人之、眞木流云、爾布乃河、事者雖通、船曾不通とあり、立人信友は、この打墨繩之云々とよめるによりて、挽板の略かりかといへり、また或書に、此國風土記の文とて引たるには、飛驒本美濃國內也、然建近江大津宮時、自當國良材多出也、駄負木、行大津、如飛也、故號飛駄といへるは、いにしへ字音なかりしに心つかざる妄說なり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

飛驒高山町(町名闕)五丁目　極高三十六度八分半、經度東一度三十二分、從東都(中山道飛驒街道)自二蠶八十四里三十

四町四十八間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

信濃　善光寺　三六度四〇分〇〇秒　上田　三六度二四分〇〇秒

小諸　三六度一九分四〇秒

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略

信濃　上田　東二度三三分一八秒　善光寺　東二度三〇分〇〇秒

〔飛州志二國法〕所在國界村里之名

本土ハ美濃、信濃、越中、加賀、越前ノ五州ニ介マルトイヘドモ、加賀越前ノ二州エハ、順路ノ村里ナシ、故濃信越ノ其國界ニアル地名ヲ載ス、　益田郡下原町自是濃州金山町ニ出ル　同大船渡村自是濃州田島村ニ出ル　同門和佐村自是濃州小野村吉田村ニ出ル　同保井戸村自是濃州岩屋村ニ出ル　同下山村自是濃州宇野原村ニ出ル　同西村自是濃州弓懸村ニ出ル　同中切村自是濃州小川村ニ出ル　同御厩野村自是濃州小郷村ニ出ル　同野麥村自是信州川浦村ニ出ル　同日和田村自是信州關屋村ニ出ル　大野郡大原村自是濃州坂本村ニ出ル　同寺河戸村同上　吉城郡同野々俣村自是濃州水澤村ニ出ル　同小白川村自是越中州赤尾村ニ出ル　同牛首村自是越中州大勘場村ニ出ル　加賀澤村自是越中州加賀澤村ニ出ル、但シ飛越中トモニ、加賀澤村トイヘリ、　同羽根村自是越中州水無村ニ出ル　同二屋村自是越中州切詰村ニ出ル　同小豆澤村自是越中州小豆澤村ニ出ル、但シ飛州越中トモニ、小豆澤村ト云、　同谷村自是越中州鐘寺村ニ出ル　中山村自是越中州猪谷村ニ出ル　横山村自是越中國猪谷村ニ出ル　杉山村自是越中州長槙村ニ出ル　同左古村同上　大多和村自是越中州有峯村ニ出ル　和佐村同上　平湯村自是信州大椴川村ニ出ル

〔飛州志三神祠〕按ズルニ、美濃國郡上郡馬瀬郷、今ハ飛州益田郡馬瀬郷ト成レリ、年代來由ニ於テハ未詳、猶國界ノ寺社ノ古記等ニ此類多シ、餘モ又可准知之、

地勢
地味

〔飛州志八文書〕飛驒越中國界論裁許繪圖裏書

飛驒國吉城郡小豆澤村、桑ヶ谷村、三河原村、角川村、二ッ屋村方、越中國姉負郡桐谷村、布谷村、荒屋村、須郷村國境論之事、爲檢使長田平右衞門、佐脇傳右衞門兼遣見分之處、桐谷村よりはくぶす村高に結び有之由雖申之中之小屋之證據慥に有之條、小屋を取拂、畑可荒之金山之儀、桐谷村より者三十年餘以前より掘候由雖申之、まぶ數年掘候樣不相見候、其上飛驒越中兩國之以繪圖遂穿鑿之處、論所之山、飛驒之繪圖ニ者相見江、越中之繪圖に無之、旁以桐谷村申處非分ニ候條、飛驒之百姓理運ニ申付候、仍爲後鑑繪圖之面、東方小豆澤村八町下兩國境之石塚より、こかや原平之尾通くぶす北之谷、ゑろきが峯、西方境谷、金剛ヶ嶽之峯通、墨筋引之、評定之面々加印判、國境相定、繪圖一枚宛雙方江被下置候條、永不可違失者也、

延寶二年寅八月廿二日

甲斐庄喜右衞門印　德山五兵衞印　杉浦內藏印　宮崎若狹守印

島田出雲守印　本多長門守印　戶田伊賀守印　小笠原山城守印

土屋但馬守印　久世大和守印　稻葉美濃守印

〔日本地誌提要二十五飛驒〕疆域　東ハ信濃、西ハ加賀、美濃、南ハ美濃、北ハ越中ニ至ル、東西凡壹拾七里、南北凡貳拾里、

〔易林本節用集下〕飛彈飛州下、管四郡、南北二日、山深而材木多、致貢柴薪多、鹽味希也、五穀不熟、國之下下國也、

〔飛州志一疆域〕原夫、東仙道飛驒國ハ、三郡二十四鄕四百十四村アリ、凡口碑ニ傳フル處ハ、南北三十四里餘、東西二十五里餘ニ及ベリ、國中總テ平陸少ク、山連リ峯聳ヘテ、雲霧常ニ覆ヒ、朝日遲ク出テ、夕陽早ク沒セリ、溪水周流シテ大河多シ、其激流ノ曉𣴎ナルニハ、處トシテ棧道ナラザルハ無

道路

シ、適其口ニハ綱ヲ浮メテ、此方ヨリ彼方ノ岸ニ亘シ張リ、鈍ナル人ハ是ヲ手クリ、艫ナル人棹テ航セリ、他國ノ航橋ト同日ノ談ニハ非ズ、其外國ニ漕船無シ、又通路ノ嶮岨、經歷之艱難、至レリ盡セリ、其樵跡ニ鳥モ啼カズ、火耕ニ牛ノ助ケモ無シ、其四境ハ、美濃、信濃、越中、加賀、越前ノ五州ニ分リ、猶其國々ニ於テモ、山奥ニ續キタレバ、隣州ト云ヘドモ遠國ニ等ク、往來尤窘苦ナリ、南東ニ御嶽、騎鞍嶽、小鷹嶽、錫杖嶽、笠嶽アリ北ノ俣トイフ大山、東ヨリ北ニ覆ヒ、白木峯、金剛嶽、三方崩ナンド、稱スル嶽々、越ノ白山マデ續キテ北西ニ遶レリ、西南ノ間ハ、河上嶽ノミニテ土地碎ルガ如ク、濃州武儀郡ニ接シテ、高嶽ナシトイヘドモ、道路狹窄ニシテ騎ヲ並ブベキ所稀ナリ、

〔飛州志一土地〕土之性稟

本土ハ總テ土ノ性瘠磽ニシテ、底下ハ小大ノ砂石多シ、故ニ其性乾易シ、　埴土、國名山鳥眞土ト稱ス、田畠トモニ是ヲ以テ極品トス、其色赤ク黑シ、佗ノ土ヨリハ甚重ナルモノナリ、　堊土、中品トス、田地ニ多シ、　砂土、中品也、田畠トモニ是多シ、タトハヾ土一分砂二分有ルガ如シト可謂、壚土、下品トス、國名クロボクト云ナリ、田畠トモニ多シ、　赭土、下品也、畠地ニ多シ、　黃土、赤土、白土、以上三品山澗ニ多シ、各其性カロク、灰ノ如キモノアリ、但シ黃土赤土ハ、家屋ノ壁土ニ用ル也、キラ土、山澗ニアリ、其色白ク、シカモ光リアリ、彩色ニ用ル處ノ雲母ニ似タル故ニ、此名アルカ、

〔飛州志二國注〕驛路

本土ニ於テ、隣國往來ノ本道四道アリ、東ハ阿多野筋日和田通、野麥通ト稱ス、南ハ益田筋竹原通、下原通、馬瀨通、佐美通、白川通、郡上通ト稱ス、西ハ川上筋ト稱ス、北ハ下山中筋越中通ト稱セリ、

〔飛州志九〕隣國之諸城行程之圖〇圖略

本土高山國府ヨリ、隣國五州ノ諸城ニ至ル處ノ驛路行程ヲ載ス、

自高山至于信州松本城、行程廿六里半也、〇中略　同至于信州松代城、行程四十里半也、〇中略　同至于信

州上田城、行程四十七里也、〇中略同至于信州諏訪城、行程三十一里也、〇中略同至于信州高遠城、行程三十三里半也、〇中略同至于濃州苗木城、行程廿一里也、〇中略同至于濃州岩村城、行程三十一里也、〇中略同至于信州飯田城、行程四十里半也、〇中略同至于濃州加納城、行程三十五里半也、〇中略同至于濃州大垣城、行程四十一里餘也、〇中略同至于濃州郡上城、行程十八里也、〇中略同至于越前州大野、行程三十里也、〇中略同至于越前州勝山、行程三十二里半也、〇中略同至于越前州丸岡城、行程三十五里半、〇中略同至于越前州福井城、行程三十九里也、〇中略同至于加州金澤城、行程三十八里、〇中略同至于加州小松城、行程四十六里也、〇中略同至于越中州富山城、行程廿三里也、〇下略

〔飛州志二圖注〕記里杭

本土ニ於テスベテ往還ノ驛路、其一里毎ニ建ル處ノ杭ナリ、是則他州ニ於テ一里塚トイフニ同ジ、元來州內ノ道路狹窄ナレバ、路傍ニ塚ヲ築クベキ地少シ、故ニ杭ヲ建テ其里數ヲ誌シ、道ノ左右ニ備ヘリ、

凡テ高山ノ國府ヲ中央トシテ、東西南北ノ四道是ヨリ分ル、行程尤國府ヨリ計リ、各國界ニ至リ終レリ、其一里ト稱スルハ、多ク五十町ヲ用ヒ來ルト見ヘタリ、

〔日本實測錄三街道〕從中山道藪原歷野麥至高山、〇中略

飛驒國益田郡野麥村　三里二十二町五十七間半至上洞村一里二十五丁一十五間　中之宿村、三十六度二分、一里一十二町三十二間　桑生谷村　二里三十一町一間　甲村、三十六度五分、三里一町六間至高山鳩河原町二里三十一丁四十五間　大野郡高山一之町至一之町四丁目二丁一十二間、從四丁目至照蓮寺二丁二十四間、又從四丁目至二之新町橋三丁一間、二町三十四間　同三之町至上向町三十間　三町五十六間　高山三之町五丁目、三十六度八分半、二町四十三間　同二之新町橋　一町四十四間　同大新町至三福寺村八幡社二丁三十九間　七町一十六間　桐生村神通川岸　從萩原至高山、街道、通計一十九里一十町六間、

宿驛

從中山道中津川歴高山至古川町（中略）

飛驒國益田郡御厩野村（マイノ）　一里三町三十六間　乘政村　一里二十四町三十六間（至森村一里一十三丁一十五間）　湯野島村（又呼下呂）　二里六町二十七間　萩原町村　三里一十三町四十一間　小坂町村、三十五度五十七分、三里二十七町一十一間半（至阿多野川岸一里二十五丁三十三間）　大野郡無數河村、（ムスガフ）（又呼久野宿）三十六度二分半、　三里九町四十間（至宮川岸一里三十町三十七間）　高山上向町　三町三十間　高山下向町（至國分寺三丁一十七間）　一十一町三十三間　桐生村神通川岸　三里二十八町四十間（至吉城川岸三里二十一丁二十四間半）　吉城郡古川町方村（從中津川至古川町）街道、通計三十里五町四十七間、（中略）

從美濃國關歴郡上八幡至森村（中略）

飛驒國益田郡下原町村　三里一町四十二間　保井戸村　二里三十四町四十二間　森村（從關至森村）街道、通計二十四里二十五町三十三間、

建置沿革

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬

飛驒國驛馬（下留、上留、石浦、各五疋、）傳馬（大野郡五疋）

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年十月壬辰、美濃國菅田驛與飛驒國大野郡伴有驛、相去七十四里、巖谷險深、行程殊遠、其中間置一驛、名曰下留、

〔國郡沿革考東山道二〕飛驒　古作斐陀（國造記賦役令）或斐太（萬葉集）　下國、管三郡、四百十四村、

大野（百三十六村、古國府、拾芥抄作大原、）　吉城（ヨシキ）（百七十八村、持統紀及延喜式等作荒城、）　益田（マシダ）（百村、貞觀十二年十二月、割大野郡置、）

弟國（見持統紀、廢置未詳、）

〔日本地誌提要飛驒二十五〕沿革　古ヘ國府ヲ大野郡ニ置、（今ノ灘郷高山是ナリ）　北條氏ノ末、信濃守護小笠原貞宗州事ヲ兼知ス、建武中興、姉小路高基國司ニ任シ、世小島ニ居ル、足利尊氏ノ反スル、貞宗之ニ應シ、子政長ニ至マデ州事ヲ兼管シテ、國司ト相抗ス、國司相傳ル三世、尹綱ニ至リ、應永中、將

軍義持、京極高光ノ弟高數ヲシテ來リ攻シメ、尹綱敗死、義持本州ヲ以テ高光ニ賜ヒ、尹綱ノ從子師言ヲ以テ國司ヲ襲ガシム、文明中、尹綱ノ孫基綱復國司トナリ、網江ニ居ル、初高光家臣三木(ミツキ)正賴、櫻洞(サクラボラ)城ニ居テ州ヲ監ス、其曾孫嗣賴ニ至テ松倉ニ居リ、州內豪傑、高山、山田、鍋山、畑、諸黨ヲ脅制ス、弘治ノ初、姉小路氏絕ユ、嗣賴姉小路氏ヲ冒シ、因テ州守ニ任ズ、子自綱(ヨリツナ)嗣グ、天正十三年、豐臣氏金森長近ヲ遣テ之ヲ擊タシム、自綱拒戰克タズシテ出亡ス、乃チ長近ヲ封ジテ高山ニ治セシム、六世賴時ニ至リ、元祿中、德川氏其封ヲ上山(カミノヤマ)〈出羽〉ニ徙シ、前田綱紀(ノリ)ニ命ジテ戍隊ヲ高山ニ置シメ、代官伊奈氏田賦ヲ掌ル、既ニシテ城ヲ毀チ、戍ヲ罷メ、郡代ヲ置キ、州事ヲ統シム、王改革新、改テ高山縣トス、後廢シテ筑摩縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕斐陀國造

志賀高穴穗朝〈○成務〉御世、尾張連祖瀛津世襲命〈○恐脫于字〉大八埼命、定賜國造、

〔續日本紀九元正〕養老六年八月丁卯、伊勢〈○中略〉飛驒〈○中略〉讚岐等國司、先是奉使入京、不聽乘驛、至是始聽之、

〔集古文書一宸筆〕後醍醐天皇綸旨〈橫瀨氏家藏〉

飛驒國守護職、可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日　式部少輔〈花押〉

兵部大輔殿

〔飛驒國治亂記〕抑モ飛驒國治亂之事、往古ハ何人カ治シヤラン、中興保元ノ頃、人王七十八代二條院時、平淸盛公ハ、日本國ヲ治給フ、〈○中略〉遠國ニハ二心ナキ侍共守護申付、越中ニ次郞兵衞盛次、伊賀ニ平內左衞門成景、上總ニ五郞兵衞忠光、飛驒ニ三郞左衞門景總ナドヽ名乘ラセ、此者ドモ入部スルト云フ事モナク、代官ヲ置シト見ヘタリ、其節當國ハ、南北ハ四拾里、東西ハ貳拾里ノ眞中

ニテ、宜シキ所ハ三福地ニテヤ有ケン、山城ヲ構居タリト見ヘ、平家沒落ノ後ハ國主ナキガ如ク、野武士ノ強者共大將トナリ、五箇村拾箇村五百石三百石ヅヽ分領シ、折々境ヲ爭ヒ合戰止ム隙ナシ、平家一門西海ニ落行、木曾義仲モ亡ビ京都モ北條時政守護ノ時分ノ事ナリシガ、平相國清盛ノ舍弟修理大夫經盛卿ノ妾、經盛卿ノ子ノイマダ幼ナキヲ懷ニイダキ、京近邊ヲサマヨヒシガ、元來美人ナリ、宿緣ニヤ北條此上郎ヲ見始、トヤカク相語ラヒ、彼孤子トモニ鎌倉ニツレ下リ、年月ヲ送ル、此子成長シテ元服スル、江間小四郎輝經ト名乘ル、〇中略小四郎、時政卒去ヲ幸ヒ、謀叛ノ氣色見エシカバ、義時〇中略實朝ノ上意ト號シ、小四郎ヲ飛驒國エ流ス、則高原殿村ニ留リ居住ス、〇中略小四郎子孫十七代迄續トモ、十五代迄ハ武道ニウトキ故カ、銘々名ヲ知ラズ、十六代左馬頭時盛武勇タクマシキ故カ、高原鄕ヲ手下ノ者トナシ、尙三千石ヲ不足トシテ越中ヘ切入、新川郡七萬石ヲ切隨ヘ、中地山ニ城郭ヲ構ヘ、武威ヲ振ヒ給ヒケリ、輝盛時代ニナリテモ、彌以テ繁昌ナリ、是ハ時盛ノ嫡子ナリ、常陸之助輝盛ト云フ、輝盛智惠ヲ廻ラシ、甲斐ノ信玄ニ隨ヒ、治國ノホゾヲカタクシタマウ、然ルニ其昔平家モ亡ビ、源氏モ三代ニテ久カラズ、北條モ九代ニテ沒落シ、後醍醐天皇二度天下ヲ取給ヒ、諸國ニ司ヲスヘ置給フ、當國ニモ姉小路宰相賴鑑朝臣ヲ國司ニ被成、建武二年、小鷹利鄕信包ノ城ニ住給フ、是モ二代三代ハ名ヲ知ラズ、四代目ハ參議中將藤原靈鑑朝臣〇飛州軍覽記作尹綱、小島ノ城ニモ住給フ、是迄ハ國中靜ナリ、然レドモ新田楠打死シ、南朝ノ宮方日々ニ衰ヘ、足利尊氏天下ヲ取ル、サレドモイマダ一統セズ、仍テ當國ハ暫ク無事ナリ、漸ク尊氏三代目鹿苑院義滿ノ代ニ至テ、飛驒征伐有ベシトテ、朝倉左衞門尉、甲斐小太郞、京極近江守、小笠原信濃守被仰付、〇中略國司靈鑑大ニ驚キ、俄ニ國中ノ武士ヲ驅催シ防戰フト雖ドモ、終ニ責崩サレ、應永八年八月六日落城ニテ、國司靈鑑ハ朝倉家臣井上新兵衞ト云者ニ討トラレ給フ、仍テ國司四代目ニテ亡ビケリ、其間年數凡八拾三年也、其後當國ハ甲斐小太郞持分ノ樣ニテ有シ

カドモ、得ト治ルトイウ事モナシ、漸年月押移リテ、○中略織田信長シバシ天下ヲ取ルトイヘドモ、貳拾餘箇國ノ主ニテ尾州ニ居住ス、永祿ノ頃ハ、甲斐ニ信玄、越後ニ謙信、安藝ニ毛利輝元、越前ニ朝倉義景、近江ニ淺井備前、其外諸國ニ貳箇國三箇國ノ大名多ク、互ニ國ヲ爭ヒ、自然ト天下ヲ奪ヒトラント、蜂ノゴトクニ起リ謀ル計リ也、其間ニハサマリシ當國、山國故カ隣國ヨリカマフ者モナシ、依レ之在々所々ニ鋒ヲ爭ヒ、境ヲ奪フ計也、其中ニモ益田郡櫻洞之城ニハ、江州宇多源氏佐佐木ノ末葉多賀太郎子孫ニ、三木大和守直賴、息右衛門督、後入道シテ玄山ト號其子右京大夫自綱入道常休庵、益田郡ヲ治タリ、家臣右近將監、堀越前守トテ能侍有リ、吉城郡小鷹利城ニハ牛丸又左衛門重親、一家五拾餘人士卒百人計楯籠、杉崎ノ城ニハ小島時光、鹽屋筑前守、向井右近大夫等楯籠、田川歸雲城ニハ内島兵庫頭氏理、川尻備中守、山下豐前守楯籠、一之宮ニハ右衛門大夫三宅居住ス、江名子村ニハ畑六郎左衛門休高居住ス、尤杉崎江名子一之宮共ニ小身、各三木幕下ノゴトクニテ暮シケリ、一宮右衛門大夫ハ、自綱妹聟也、其内鹽屋筑前守ハ、勇氣强、手勢計ニテ、越中ヘ討入、越後謙信ニ通ジ、笹津近邊ヲ切隨ヘ、猿倉ノ城ニ居住シテ、天正四年ノ春雪消シカバ、上杉謙信ヲ招、越中ヘ引込、所々相働、筑前守先懸ニテ、中地山ニ籠所之江間家來ヲ追拂、直ニ飛驒ヘ責入、先ヅ江間ガ殿村之城之留主居ヲ責ル、此時江間一家過半討レ危カリシ所ニ、兼々謙信加賀ヲ乘取望有レ之故、越中ニ軍勢ヲ置レシガ、此者共ヨリ注進シケルハ、君飛驒ヘ御越之儀、金澤ヘ知レ候ヨシニテ、加賀勢後ヲ取切ラント責來ルヨシ風聞有レ之由、早々御引取被レ成可レ然奉レ存候ト申來リケレバ、謙信江間ヲ捨テ直ニ越中ヘ引取、加州ヘ御馬進候由、依レ之江間無レ恙忍ヘタリ、織田信長傳聞、前田又左衛門利家ヲ先鋒ニテ、柴田修理亮、同伊賀守、佐久間玄蕃、金森五郎八、原彥次郎ヲ差向ラル、加州宮之腰ニテ對陣ニ及、相方相軍ニテ引退シ也、其後越中ノ諸將鹽屋ヲ惡テ、謙信越後ヘ引レシ後ニテ、一黨シテ猿倉ヲ一時ニ責崩シ、鹽屋ヲ討取ル、此所ニテ鹽屋一家不レ殘亡ビケリ○中略

慶長五年、關ケ原陣有之、此時美濃郡上八幡之城主ハ稻葉右京亮一徹齋、石田方ト見ヘケルユヘ、法印父子是ヲ責ント、郡和良之住遠藤左馬亮慶隆金森父子兩家ニテ取カケイドミ戰ヒ給フ、遠藤氏ハ若キ大將ニテマシマス故、急勝負ヲ決セントハヤリ過給フ間、城ヨリ射出シ給フ弓鐵炮ニ當リ、能侍數多射セ引退給フ、長近卿御覽被成、彼是ト軍卒ニ惡口サセ、敵ヲヲビキ出シ、陽ニヒラキ、中ヲ能トワラセ引包ンデ突立、透間アラセズ責給ヘバ、城ノ軍兵扱ハタバカラレシヨト氣ヲ付、脇目モフラズ戰ヘバ、金森方ニモ打死手負出來、城方ニハ猶又大勢死セシカバ、互ニ戰ヒ疲レ、兩方サツト引、城方ニハ門ヲ閉テ出合ス、金森方ハ手負ヲ介抱シテ陣屋ヘ引、暫合戰ハナカリケリ、尤軍ハ金森方勝タリトイヘドモ、能武士數多ク失ヒ給フ、○中略又大坂陣ニハ生捕八人、首數百五十二、金森手ヘ打取給フ故、旁之高名軍忠ニヨツテ、改五萬石之大名ニ成給フ、美濃上有知四郡、金田一萬二千石、飛驒二萬八千石御知行被成候、然ルニ慶長十三年申八月十二日、法印長近卿御逝去被成、則金龍院殿ト奉號、○下略

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕飛驒國府在大野郡、行程上十四日、下七日、

〔拾芥抄中末本朝國郡〕飛驒下中　三郡　大原府

〔飛州志九〕國府之圖○圖略

國府高山ハ、大野郡灘郷ニアリ、今所在ノ寺祠民屋千五百有餘戶、僧俗男女七千四百有餘人、町ノ名三、稱一番二番三番、是ニ接スル處ノ號三十餘數アリ、○下略

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕飛驒國○註略管三○註略大野於保乃　益田萬之多　荒城阿良木

〔延喜式二十二民部〕飛驒國下、管大野、益田、荒城○中略右爲中國

〔易林本節用集下〕飛驒飛州下管四郡○中略　大原府　益田、天野天又作大　荒城アラキ

〔和漢三才圖會七十飛驒〕四郡○中略

大原府　益田（マシタ）　荒城（アラキ）　天野（アマノ）木爲ニ三郡ハ今加ミ 天野ハ爲ニ四郡ハ

〔皇國郡名志〕飛驒國舊三郡今四郡

大野（オホノ）（高山●月瀬●二ツ十●大島（增島●萩谷●小阪町●上山町●八日町●三河原●落合●古川●黒川　信界ヨリ越中ニ貫キ國一郡也

荒城（アラキ）●平湯●小豆澤（舟渡町●谷村●千貫橋　越中界

益田（マスタ）（下原町●中津原●下呂　美信界

大原（オホハラ）●キマロ●野々殿●小白川　美加越前中四國ニ掛

今加ニ大原郡

○按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕飛驒

書名	益田	大野	荒城	
六國史古書				
延喜式	益田（マシタ）	大野（オホノ）	荒城（アラキ）	書三
倭名抄	同（万之多）	同（於保乃）	同（阿良木）	同
拾芥抄	同	大原	同	三郡
諸書	同（節用）	大野（節用）	同（節用）	四郡（圖郡名ヲ記セズ蓋大野アリシカ）
郡名考	同（マシタ）	同（オホノ）	吉城（ヨシキ）	三郡
天保郷帳	同	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同	同
地誌提要	同（マスダ マシタ）	同（オホ）	同（ヨシキ）	同
郡區編制	同	同	同	同

大野郡

〔飛州志一土地〕郡并名數古今變異

三代實錄曰、貞觀十二年十二月八日乙酉、分二飛驒國大野郡一爲二兩郡一、大野大原、益田、荒城、　延喜式又倭名類聚抄等、大野、益田、荒城、　大八洲記曰、大野(於保乃)益田(万之多)荒城(阿良木)　和漢三才圖會又日本鹿子等、大原、(府)益田、荒城、天野、　續太平記、大原、益田、太野、荒城、　今世稱シ來ル所三郡、益田、大野、吉城、是也、　按ズルニ、大厚大原ノ二郡今ハ廢セリ、又古書ニ富安郡ト載タルモノアリ、博ク諸書ヲ考ルニ未レ見、是富安鄕ヲ誤リ記スモノ歟、(吉城郡保村値念寺本尊裏書ニアリ)或ハ東鑑ニ、飛州荒木鄕ト出タリ、州內ノ古書ニモ、荒木郡吉木郡ト記セシモノアリ、然レバ木ヲ用イシ時モアリケルニヤ、又里民ノ說ニ、古昔荒城郡ノ主タル人、城荒ルト云フ文字ヲ忌テ、吉城ト改メケルト云フ、然シ是等ハ俗記ノ甚シキト謂フベシ、尤城築陣營ノ法ニ於テ、惡名ノ地ヲ除クコト、其謂レナキニハ非ズ、太平記ニ、觀應二年二月三日、將軍播州光明寺ノ城ヲ攻ルトキ引尾ニ陣取、師直ハ泣尾ニ陣取テ、其軍利ナカリシナド見エタリ、

〔飛州志一土地〕一郡之接屬

大野郡ハ、九鄕百三十六村、一万七千四十一石五斗二升六合、五千二百餘戶、二万六千三百九十餘人也、州內ノ中央ニシテ國府ヲ高山ト云、中央トイヘドモ西方ヘ長シ、美濃、越前、加賀、越中、信濃ノ五州ニ接ス、騎鞍ガ嶽、川上(カホヽ)ガ嶽、三方崩ガ嶽、十二ガ嶽、鷲ガ嶽、笈摺ガ嶽、劒ガ嶽、大日ガ嶽アリテ、加賀ノ白山モ是ニ續キ立リ、寒氣霜雪トモニ益田郡ヨリハ强シ、名所位山此郡中ニアリ、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、飛驒國大野郡大領外正七位下飛驒國造高市麻呂(中略)獻二當國國分寺知識物一、並授二外從五位下一、

〔三代實錄二十三清和〕貞觀十五年二月廿八日癸亥、飛驒國司言、大野郡愛寶山、貞觀十三年十一月十八日、十四年十一月十二日、今月十五日三度紫雲見、

益田郡

〔飛州志一土地〕一郡之接属

益田郡ハ、九郷、百村、七千七百拾石貳斗貳升一合、三千百三拾餘戸、一万六千九百六十餘人也、州内ノ東南ニシテ、美濃信濃ノ兩州ニ接ス、御嶽、騎鞍ガ嶽、川上ガ嶽アリ、州内ニ於テハ寒氣弱シ、是濃州ニ接スルガ故也、然レドモ彼州ノ暖和ニハ及ズ、猶御嶽騎鞍ガ嶽ノ麓ニ至リテハ、寒冷霜雪尤甚シ、名所アサムヅノ橋、此郡中ニアリ、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月八日乙酉、勅分₌飛驒國大野郡₌爲₌兩郡₌、

○按ズルニ、此ニ爲₌兩郡₌トノミアリテ郡名ヲ擧ゲザルモ、恐ラクハ大野益田ノ兩郡ニ分チタルナラン、

荒城郡

〔郡名考〕飛驒　荒城アラキ　吉城ヨシキ

〔飛州志一土地〕一郡之接属

吉城郡ハ、六郷、百七十八村、一万九千五百十五石五斗五升四合、四千九百五十餘戸、二万三千八百二十餘人也、州内ノ西方ニ寄リテ、東北西ニ周レリ、信濃越中二州ニ接ス、騎鞍ガ嶽、鎗ガ嶽、硫黄ガ嶽、笠ガ嶽、中ノ俣ガ嶽、北ノ俣ガ嶽、漆山ガ嶽、白山ガ嶽、金剛ガ嶽、白木ガ峯アリテ、嚴寒深雪ノ地ナリ、州内ニ於テモ下山中ト云イ、與飛驒ト云也、名所細江此郡中ニアリ、

〔日本書紀三十持統〕八年十月庚午、以₌進大肆₌賜₌獲₌白蝙蝠₌者、飛驒國荒城郡弟國部○郡一本作部、弟日、幷賜₌絁四匹、綿四屯、布十端、其戸課役限₌身悉免、

郷

〔倭名類聚抄七國郡〕飛驒國　益田郡　益田眞田　之　秋秀阿岐比天○岐原作佐、拠高山寺本改、

大野郡　大原○原、高山寺本作野、　三枝佐以久佐　阿拜阿波　山口也末久知

荒城郡　名張　荒城　深河布加加波　雑見安久美　餘戸　高家加木倍　遊遊阿曾布

〔飛州志一土地〕郷幷名數附所₌廢之郷名

今所存之郷名二十四數アリ、益田郡下原郷、馬瀬郷、竹原郷、阿多野郷、小坂郷、萩原郷、小府上呂郷、中呂郷、下呂郷、大野郡河內郷、久々野郷、川上郷、小島郷、白川郷、灘郷、國府大八賀郷、小八賀郷、三枝郷、吉城郡古川郷、小府廣瀬郷、吉城郷、小島郷、小鷹利郷、高原郷、以上又所廢之郷名下ニ載ス、但シ是ニ限ルベカラズ、詳ナルニハ及ズ、麻生郷、廢今益田郡夏燒村白山祠藏大般若經後書曰、應永二十三年願主益田郡麻生郷、上江郷、中江郷、下江郷、廢今益田郡上呂郷、中呂郷、下呂郷ノ舊稱ナルト云、同郡中呂村禪昌寺藏大般若經後書云、應永十一年益田郡中江野郷、按ズルニ、是中江郷ナルベシ、野字ハ俗ノ猥リニ加フル助字カ、德永郷、廢大野郡冬頭村東等寺藏本尊裏書云、永正十一年、大野郷德永郷、山口郷、廢大野郡山口村了心寺本尊裏書云、永正十五年、大野郡山口郷、一ノ宮郷、廢大野郡宮村一宮祠、慶長十三年ノ棟札ニ載テアリ、富安郷、廢多ク古書ニ載テアリ、

〔飛州志寺院四〕了心教寺

在于大八賀郷山口村、同宗同寺末開基始祖釋了善、永正年中建之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、永正十五年戊寅三月、照蓮寺門徒善宗下、大野郡山口郷平塚釋了善、按ズルニ、山口郷今ハ廢セリ、平塚未考、

〔飛州千光寺記〕稱袈裟山千光寺開闢、人皇一十七代仁德天皇、立都難波、四海波治、萬民歸德、時東仙道飛驒國、大野郡小八賀郷、出羽平山上有窟、石巖苔滑、萬木茂異于他也、○下略

〔飛州軍覽記〕武田勢飛州攻入之事

天下猶亦亂レテ、信長尾陽ニ起リ、謙信越後ニ働キ、信玄ハ甲斐ニ覇タリ飛州其間ニハサマレテ、所々在々ニ鋒ヲ諍ヒ、合戰止ム事ヲ得ズ、其頃益田郡櫻洞ノ城主、江州佐々木ノスヘタルト云、其子孫ニ、三木大和守直頼、其子右兵衛督良頼入道雲山、其子右京大夫自綱入道休庵、代々當國ヲ領ス、然ルニ廣瀬高堂ノ城主山城守宗城ト不和ニシテ、相互ニ彼ヲ亡ボシ其跡ヲ奪ヒ、國ヲ始メン

トハカル、山城守宗城、甲州ヘ使者ヲ以テ信玄ニ通ジ、三木ヲ初メ飛驒ノ諸將ヲ亡ボサント約ス、故ニ永祿七年七月十八日、信玄ヨリ山縣ヲ飛州小八賀郷千光寺ヘサシムク、〇下略

〔吾妻鏡十三〕建久四年十一月十二日乙亥、右近將監多好方、承神樂賞、今日以飛驒國荒木〇ユ〇郷地頭職、被成政所御下文訖、於國衙之深役者、任先例可致其勤之由所被裁也、因幡前司廣元、民部大夫行政等奉行之云云

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合〇中略

四貫卅二文〇中略　姉小路宰相　御家領段錢飛驒〇土〇河〇郷〇

〔飛州志八舊記〕連署久清重氏　同寺藏〇大野郡夏厩村蓮德寺

宛行富〇安〇郷河南本郷田地之事

合一町三段四拾貳步者　小切左近三郎

此內四段大散田也

右御年貢并諸御公事以下、任先例可致其沙汰者也、仍所宛行之狀如件、

寬正六年九月十六日　久清花押

重氏花押

〔飛州志四寺院〕吉田山新長谷禪寺〇中略

鰐口銘　奉鑄鰐口一箇、赤〇佐〇郷〇十王堂、文明第六甲午六月一日、願主大江助太郎、〇中略

蓮德敎寺

在于小〇島〇郷夏厩村、　同宗同寺末、開基始祖釋善性、長享年中建之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋蓮如在判、長享三乙酉二月十五日、飛驒國白川善俊門徒、同國大野郡德〇長〇郷夏舞、願主善性、（按ズルニ、德長作德永、今改廐セリ、夏舞作夏厩）

〔飛州志 四寺院〕南林敎寺

在二于同鄕〇川上有巣村一　同宗同寺末、開基始祖釋正了、明應年中建レ之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、明應七戊午四月十三日、白川正蓮寺門徒、飛驒國大野郡德。永。鄕。有拗、願主釋正了、按ズルニ、德永鄕、今ハ廢ス、正蓮寺作二照蓮寺一、有樔今世作二有巣一、〇中略

滿成敎寺

在二于同鄕〇川上下之本村一　同宗同寺末、開基始祖釋善永、明應年中建レ之、本尊裏書云、方便法身尊形大谷本願寺釋實如在判、明應三甲寅五月廿八日、白川善俊門徒、飛驒國大野郡川。上。鄕。下本村釋善永、〇中略

俗道場

在二于同鄕〇白川小白川村一、　同宗同寺末、開基始祖未レ詳、明應年中建レ之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、明應三庚戌年正月十八日、飛州白川善俊門徒、飛驒國白。川。鄕。荻町願主釋、

〔飛州志 四寺院〕醫王山國分寺〇中略

鐘銘、飛州吉城郡荒。木。鄕。三日町十王堂鐘、永正十一年甲戌十月晦日、願主請衆二十人、按ズルニ、三日町十王堂、今ハ廢セリ、

〔飛州三澤記〕夫飛驒國大野郡一宮水無大明神ハ、往昔七社ニテ、御本社一ノ宮ハ御歲神也、〇中略神領ハ一。ノ。宮。鄕。久。々。野。鄕。代々ノ社家十二人、就レ中永正ノ頃ニ至ッテ、御宮守一ノ宮民部少輔長綱ト號ス、〇下略

〔飛州志 四寺院〕開康坊

在二于同村一、〇上呂鄕上呂村　東本願寺宗、大野郡高山光曜山照蓮寺末開基始祖釋西了、大永年中建レ之、本尊裏書曰、是畫像同襯此如來、裏書ハ門主ノ親書也、木佛ハ見狀ト稱ス、自レ是以下可二准知一之、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、大永三

年癸未八月三日、照蓮寺門徒飛州益田郡上檐郷舳腹、願主釋西了、按ズルニ、上檐今作二上呂一、舳腹ハラ未レ考、實如ハ蓮如ノ子、開山親鸞ヨリ九世也、大永五乙酉二示寂、

同寺村大野郡夏厩蓮徳寺藏

〔飛州志八文書〕連署 三塚富國房氏

古河郷南本郷之内みそむかひ名田之事

合貳段之所

三郎五郎　玄すて依申ニこきり左近三郎ニ、遺分之御年具之未進、つく田五斗之分引替依レ申ニ、末代御預可レ及、若於二末代一沙汰申者あらば、彼之以レ状可二沙汰一者也、就二其禮一貳貫文仍狀如レ件、

大永八年時つちのへ十月廿日　三塚富國花押

房氏花押

〔飛州志八文書〕金森長近源姓五郎八法印兵部卿素玄

大野郡牧戸村河尻氏藏

令扶助所々目録之事

一五拾五石三斗壹升　廣瀬郷之内　上廣瀬村之内　一廿壹石　高原うれ之郷内　たころけ村

一廿五石三斗　大八賀郷　岩井村之内

合百壹石六斗壹升　山林之内用木除之

右全可レ知行之狀、如レ件、

天正拾五十二月十三日　素玄花押

河尻勘平殿

〔玄同放言二〕飛驒三枝みつえだ

飛驒國大野郡に三枝郷あり、三枝みつえだと唱ふ郷内に五个村あり、その三个村を上切、中切、下切と唱ふ、中切村に高山より里許巨樹あり、程遠き處といふとも、この樹の見えざるはなし、さる古木なれども、

今なほこれを伐ることを許さず、もし人ありて、斧を用ふれば、血流れ出づ、且祟ありといひもて傳へて、その落葉だも拾ふことなし、これを犯せば、必瘧を患といふ、〇下略

〔飛州志土地一〕村里之總數并枝村小名

今所存壹國ノ村數四百十四村也、其古數ハ分明ナラズ、元祿年中檢地ノ時、改正セラレテ載ル所是也、枝村ト云フハ、村里毎ニアルニハ非ズ、一村ノ地續キ、或ハ山澗野地ヲ隔タルノ地ニ、別名ヲ稱シテ本村ニ附屬スルモノ也、今世何村新田ト云一例ナリ、故ニ本村ニ等ク民家建來レルアリ、又人家廢シテ、今ハ地名ノミナルモ間アルゴトナリ、小名ト云フハ、多ク民ノ宅地ニ附タル號也、元來ノ地名、或ハ田畠ノ字ト云フニモ非ズ、タトハヾ往古鍛冶ノ住セシ地ハ、今ノ民其筋目ニ非ズ、其職ニ與カラヂドモ、鍛冶ノ何某ト呼ベリ、異名ノ類ト謂フベキナリ、

〔郡名一覽御料〕飛驒國 飛州 南北二日 三郡 四百拾四ケ村

高四萬四千四百六拾九石貳斗壹升九合

●高山 百十一里 木曾路八十六里

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕飛驒 三郡四百十四村

御料 高五万六千六百二石三斗九合

大野郡百三十六村 吉城郡百七十八村 益田郡百村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

飛驒 益田郡、御厩(ミマヤ)野(ノ)村、甲(カブト)村、黍生(キビフ)谷(タニ)村、大野郡、無數(ムス)河(ガウ)村、本(ホ)母(ノブ)村、

〔飛州志神祠三〕和川白山宮〇中略

祠藏印版大般若經之後書 後書ハ名字アルモノヲ載ス、尤各來由未考、 大般若波羅密多經卷

莊

第十九　飛州益田郡和。川。村。應永十九年壬辰八月一日、勸進沙門定鏡、檀那左近、　同卷第一百五十一、奉安置飛州益田郡和川村、應永十九年壬辰八月一日、願主定鏡、檀那馬允、　同卷第二百五十一、益田郡麻生鄉和川、應永廿三年丙申十月日、檀那左近次郎、

〔飛州志（寺院四）〕法蓮敎寺　在于同鄉（〇白川）鳩谷村、　同宗同寺末、開基始祖釋勝歎、文龜年中建之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋實如在判、文龜三年癸亥六月廿日、飛驒國照蓮寺門徒、白川鄉鳩。谷。村。願主勝歎、

〔飛州志（寺院四）〕西敎々寺

在于阿多野鄉黑川村、　同宗同寺末、開基始祖釋宗周、永正年中建之、本尊裏書云、方便法身尊形、永正十二年三月二十八日、釋實如在判、飛州照蓮寺門徒、白川鄉飯島村願主宗周、（按ズルニ、飯島ハ白川鄉ニアリ、其後此地ニ移住セシモノ也、）

〔飛州志（寺院五）〕大國敎寺（〇中嶋）

本尊裏書云、方便法身尊形、本願寺唯如在判、飛驒國吉城郡高原鄉吉。田。村。大國寺、慶長十八年癸丑十月廿二日、

〔飛州志（土地一）〕庄名有無

本土凡テ鄉名ヲ稱シ、古今庄號無シト云ヘリ、然ルニ大野郡八日町村秋聲寺本尊裏書ニ、大野郡川上庄トアリ、疑フラクハ誤ナラン、此一寺ノミニシテ、其餘悉ク川上鄉ト出タリ、

〔飛州志（寺院四）〕秋聲敎寺

在于同鄉（〇川上）八日町村、　同宗同寺末、開基始祖釋慶空、文明年中建之、舊號萩野道場、（萩野ハ此村ノ字ニアリ）本尊裏書云、方便法身尊形、本願寺釋蓮如在判、文明十八年丙午三月廿八日、飛驒國白川善俊門徒、同國大野郡川。上。庄。萩野道場、願主釋慶空、（按ズルニ、川上庄ハ川上鄉ノ事也、善俊ハ白川照蓮寺ノ始祖タリ、）

〔飛州志 寺院四〕西蓮敎寺

在二于同鄕上〇川下之切村一、同宗同寺末、開基始祖釋慶法、天文年中建レ之、本尊裏書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋證如在判、天文五丙申年十二月八日、照蓮寺門徒、飛驒國大野郡河上庄下切、釋慶法、

飛驒

〔倭名類聚抄 五國郡〕飛驒國〇註略 管三 田六千六百十五町七段四歩

〇按ズルニ、六千恐ラクハ一千ノ誤リ、伊呂波字類抄、拾芥抄等皆千ニ作ル、從フベシ、

〔伊呂波字類抄 比國郡〕飛驒國 管三、(中略)本田千六百五十六丁

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕飛驒 中下 三郡(中略)田千三百五十六町

〔新撰類聚往來 下〕國名〇中略 飛驒 飛州 三郡(中略)田數千六百五十町

〔海東諸國記〕飛驒州 郡三、水田一千六百十五町五段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕三万八千石

〔和漢三才圖會 七十飛驒〕四郡 三万八千七百六十四石餘

〔飛州志 一緒歷〕凡合國ノ石計、古昔ハ三万八千石ナリト云、天正年中、金森五郎八郞源長近 後入道素玄兵部卿法印 此州ニ封ゼラレテ、平均ニ治メ、國ノ中央大野郡高山國府ニ於テ、天神山ノ古城跡ヲ再興シ、舊地ノ外ニ二三ノ丸ヲ北方ニ倍セリ、改メテ高山ノ城邑ト號ス是ナリ、夫ヨリ出雲守可重、出雲守重賴、長門守賴直、飛驒守賴業、出雲守賴旹居レ之、然ルニ元祿五年壬申、官命アッテ、賴旹羽州上山ノ城ニ移サル、其先長近、飛州奉命天正十年壬午ヨリ、賴旹得代元祿五年壬申迄、年數凡百十餘年、世數六代ナリ、其後同十年丁丑、又濃州郡上ノ城ニ移サル、自レ是此國官治ト成テ、高山ノ城ハ加賀宰相菅原綱紀ニ命ゼラレ、賀士交代シテ守ル事四年、同八乙亥ニ至レリ、則同年城ヲ毀ツ、此時州内ノ田畠ノ經界ヲ正クセンコトヲ、濃州大垣ノ城主戶田釆女正藤原氏定ニ命ゼラレ、元祿七年甲戌ヨリ八年乙亥迄、家士ヲ遣シテ戶籍ヲ改メ、石計四万四千一百五石餘ト成レリ、元祿五年ヨリ同九年丙子迄、伊奈半十郎源忠篤命ヲ奉ジテ國務ヲ預リ、高山ノ古墟

ニ始メテ治所ノ經營シテ、是ヲ高山ノ廳郡ト云、（通稱陣屋、或曰役所、）同年ヨリ寶永六年己丑迄、其子半左衞門忠須、同年ヨリ正德四年甲午マデ其嗣半左衞門忠達、同年ヨリ享保五年庚子マデ森山又左衞門藤原實道、同年ヨリ同六年辛丑迄都筑藤十郎藤原政直、增田太兵衞源備道、同年ヨリ同九年甲辰迄龜田三郎兵衞源三修、同年ヨリ同十二年丁未迄長谷川莊五郎藤原忠國、皆其御代官ヲ奉ゼリ、忠國奉命ノ後、故墟ノ外、古宅等ノ跡ヲ田畠ニ度尺シテ、百六十二石餘增加フ、今ノ石計四万四千二百六十七石餘トナル、此時合國ノ人別男女僧俗六万八千三百六十九人、同戶數一万一千九百九十一アリ、並ニ座頭瞽女一百三十人、穢多ノ類二百八十二人、（但座頭以下ノ類ハ、國ニ生レ住スル所ノ其員ヲ識ス、是國食ヲ不ﾚ登ガ爲ニ、此類ノモノ無留、他州ヨリ來リ住ス事ナバ、其首長タル者制止ス、）牛馬ノ數七千四百十六匹也、又人別ノ外ニ地役人ト號シ、官米ヲ食テ土著スルモノ八十四人、各賜俸口數人々不同、土地山林ノ事ニ預リ、合國三十一箇所ノ番所ヲ変代シテ守ル、同十二年丁未ヨリ、（志摩藤原○）奉リテ、今年ニ至レリ、以往ハ毎歲ノ秋、治所ニ來リテ、年稅ノ事ヲ沙汰シ、民ノ訴ヲ聞ケリ、然ルニ元文三年戊午、始メテ其地ニ居住シ、其治ヲ致スベキノ旨官命アリテ、自ﾚ是在國ト成レリ、

（飛州志一土地）田野總穀量

今世一國ノ總穀量、四万四千貳百六十七石餘、

（飛高隨筆）飛驒國三郡、大野郡、吉城郡、益田郡、高四萬貳千石餘、大原彥四郞紹正御代官所也、近年收納强、新規之運上等懸リ、三郡の百姓令ﾚ難義、度々訴訟有ﾚ之、○下略

（官中秘策三）飛驒國　四郡○中略

一石高四万四千四百六拾九石餘

（吹塵錄五人口及國高）天保度御國高調○中略

飛驒國御料　一高五万六千六百貳石三斗九合

出擧稻

〔延喜式 二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻(中略)飛驒國、正稅公廨各四万束、國分寺料五千束、文殊會料一千束、救急料二万束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕飛驒國(中略)管三、(中略)正公各四萬束、本稻十萬六千束、雜稻二萬六千束、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十七年十一月庚辰、制、諸國公廨、(中略)下國十万束、就中飛驒、隱岐、淡路、三國各三万束、

國產貢獻

〔延喜式 二十四主計〕飛驒國(行程、上十四日、下七日、)調不輸、但浮浪人輸商布、庸、輸商布、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥(中略)飛驒國九種 芎藭廿斤、當歸十斤、菴閭子四斤八兩、白朮卅斤、藜蘆十斤、杜衡十斤、白樊石二斗一升、猪蹄二具、零羊角卅具、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、(中略)宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂、(中略)飛驒餠、

〔毛吹草 三〕飛驒

綿 鹽硝 銀銅 柾物(根木ト云) 楊枝木 椹(サハラ) 土井桔(クヤキ)等 鷂(ハイタカ) 搗(カチ)栗(グリ)

〔飛州志 一〕凡此國ノ山中ヨリ材木ヲ伐出スヲ號シテ、本伐ト云ヒ、袖取ト云フ、是ヲ河水ニ流シ行テ他國ニ出スヲ川下ト云ヒ、川狩ト云ヘリ、皆民ノツトムル業ニシテ、材木板子榑木三等アリ、又白木ト云一等アリ、各古來國產ノ由ト稱セリ、

○按ズルニ、和漢三才圖會、諸國名物往來等ニハ、右ノ外ニ、古川鮎、紬等ヲ擧ゲタリ、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、(中略)飛驒若狹並樊石、

〔續日本紀 二文武〕大寶二年四月乙巳、飛驒國獻神馬、大赦天下、唯盜人不在赦限、其國司目已上出瑞郡大領者進位各一階、賜祿有差、百姓賜復三年、獲瑞僧隆觀、免罪入京、(流僧幸甚之子也)又普賜親王以下畿內

有位者物、免諸國今年田租、幷減庸之半、

〔續日本後紀 二仁明〕天長十年八月辛亥、飛驒國貢松實御贄、

人口

〔官中秘策 三〕飛驒國　四郡略〇中

一人數七万貳千三百貳拾三人

内 男三万七千九百拾四人
女三万四千四百九人

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年略〇中

一人數八万千七百六拾八人 皆御料

内 男四万貳千五百四拾人
女三万九千貳百貳拾八人

高四万四千四百六拾九石餘 飛驒國

諸國人數調 弘化三丙午年

一人數八万六千三百三拾八人 皆御料

内 男四万四千五百拾貳人
女四万千八百貳拾六人

高五万六千六百貳石餘 飛驒國

言語

〔飛州志 七諸說〕稱謂(シヤウイ)言語(ゲンギヨ)

本土ニ於テ民ノ通稱トスル處ノ國言ヲ載ス、爾此餘解シガタキモノ多シ、詳ナルニハ及ズ、

ヤタ 鄙ノ殘テコキ落シタル蠶ニ殘ル所ノ稱ナ云フ 其 アラモト 來テ發ミ、或ハ春トキ、淺コボレタルモノヲ云、他州ノ傳アシモト、云ニ等シ、文字カレイノ音、アラノ國 アレメ也、 ユルゴ 來チ字傳ニテフルイ、ヨリ出ル所ノ稱ナ云 是 セイナイ 來ノシイナ也 ヲヤス 村里ノ名主庄屋チ、民ノ敬テ云ヘル官也、各其村長也、シヲ

ンノ 直父事也 ノ ナボウ 直母事也 ノ ダヾ 母ノ事也、父チテ、ト云、ト云事ハ俗州ト同ジ、 ボウ 男兒事也 ノ ピイ 女兒事也 ノ タ

シ 子共ト云事也 コリヨウ 小女ノ事也、按ズルニ、本邦ニ於テ高貴ノ女兒チ御料人ト云フ、然ルチ誤リ稱スルカ、太平記ニモ、北條高時ノ男万壽御料 ゴレン 數ノ事也

マ、 孔母ノ事也、按ズルニ、枕草子春曙抄ニ、曾祁ノ君ノ御メノト、註云、源氏蓬生ノ宮ノ孔母チモマ、ト云イシト見エタリ、 ヤラ 我ト云事也 ヲラ 我等也

アンシユ 昔俗アノ來ト云ニ同ジ 威名(イノウ)乘(シユウ) 是村民ノ古昔其領主ニ對シテ功チ立、感狀等得タルモノナ、俺人ノ稱スル號也、 威名田(イノウデン) 同上田畠等チ得テ子孫

ルニ據也、ヘタ 家抱(ケボウ) 是元來民ノ僕タル、モノ、別家ニ出テ民ト成ル、然レドモ誰家抱ト據シテ古來一戶ノ民ニハアラザル也 スマ 隅也 チヤウダイ 民家

壹ナルカ、ノ納戶也、調 カマチ 民家ニ於テ上座ノ事也 ワカタ 上ノ方ト云事也、ヘカメノ略語カ、 ウレ 上也、按ズルニ、歌ニモ落ノウレ業、萩ノウレ葉ナド類ノ

メリ、是上葉也、
アラト　山川村里トモニ、其始ノ入リ口也、
ヘエツポ　穀助ヲ藏ムル所也、稗坪ナルカ、
ヲチ　外地ヲ云、大路ナルカ、
エミヅ　溝也
布橋（ヌノハシ）　材木ヲロメシタル橋ヲ云、布ヲ引タル如シト云事也、
布川（ヌノカハ）　一河ノ名ニハアラズ、凡テ河中ニ岩石無ク、流水靜ナル所ハ布ヲ流スガ如シト云事ナリ、
サラ田　上田ノ號也、是水ヲ乾シテ作ル田也、
水田　下田ノ號也、是水ヲ溜エ、土氣乾カザル如クシテ作ル也、
泥田（トロタ）　同上、深泥ノ田ナリ、
アワラ田　同上
アト　田ニ水ヲ入レ、或ハ水ヲ流ス、其水口ノ號也、
ソメ　田島ニ立ル島ヲドシ也、他州ノカヽシト云ニ同ジ、
ヤキダテ　野猪ノ皮ヲ少シヅヽ串ニ挾ミ、火ニ燒リテ田島ノ圍ニ建ツ、野猪ノ威シ也、其臭氣ニ恐レ來ラズ、
ドウヅキ　是モ威シナリ、引板ト云フニ同ジ、流水ニタヨリ作ルヲ河ドウヅキ、水バツタリト云、
野猪落（シヽオトシ）　凡テ野猪ヲ捕ル穽也
ヲセ　同上
熊落　熊ヲ捕ル穽也
ウトロ　木石トモニ凡テ中眞空虚ナルヲ云
スロ　凡テ中眞ノ穴ヲ云
イナバキ　箒ノ事也
サウゲ　鹽荷ノ事ヲ云
ツブラ　藁ニテ組メル籠也、下民幼兒ヲ是ニ入レ置テ常ニ養育スルモノナリ、
ヒラカ　下駄ノ事也、平架カ、
イシナ臼　石臼ノ事也
カチ　搗也
チヤマガ　茶釜也
エンド　印籠也
ドンピキ　蟇ノ事也
イグイス　鶯ノ事也
ショ〳〵　鰌魚ノ事也
アツホ　餅ノ事也、他州ノ小兒アンモト云ニ同ジ、
ヒリメシ　續飯ノ事也
コシノセ　キコシメセト云事ナリ
ヲムシヤレ　食物ヲスヽムル事也
ウ　湯ノ事也、俗ユテルヲアルト云ニ同ジ、又ウトユト通セリ、
フタ〳〵　水ノ動スルヲ云、他州ノ俗タブ々々ト云ニ同ジ、
マタシ　用意ノ事也
カツト　大分ト云事也
タラフタ　十分ト云事也
ダンサタ　草山ト云事也
フダン　同上
ヘイト　一面或ハ平等ノ事也
リコウ　凡テ宜キト云事也
デカイ　凡テ大キナル事ナリ
ブンブ　小兒ヲ背ニ負フ事也、他州ノ俗ヲブウト同ジ、
アブ　小兒ヲ肩ニ乘セル也、カタクルマト云ニ等シ、
ヲイチ　凡テ物ヲ背ニ負事也、ヲ子ルトモ云ヘリ、負任ニ作ルベキカ、
ハカテツ　凡テ是計夫計リト云ヲ、是バカテツ、夫バカテツト云也、
ホセ　木ノ枝木ノ切レ也
タセ　此方へ越セト云事也
デキナイ〳〵　凡テ苦ルシキ也、他州俗セツナイト同ジ、
テコ　凡テ甚シキト云事也
ヲソガイ　恐キ事也
スカヌ　不宜事、或氣味惡キト云事也、不好カ、
ホセ　押セト云事也
フンギヤラカセ　蹈倒ス也、他州ノ俗フンガラカセト云ニ同ジ、
キックチガエシ　俗言葉カエシト云事ナリ
ギヤメク　喚也
ヌマタタワラ　泥沼ノ地ヲ云
イマ〳〵シイ　勿體無キト云事也、按ズルニ、古書天子ノ御事ハ忌ミ忌ミシキナド出タリ、
マイキサ　傍若無人ニ振舞事ヲ云
キヤッタ　來ヤツメト云事也、キヤトツメテ云フ、
ソコナテ　俗ソコラノアタリト云ニ同ジ
エガム　曲也
シユゲル　萎也
サカヨル　集也
ホケル　耽也
トコシヨ　トコシナユト云事也
センセホウ　折節ト云事也、沙石集ニモアリ
キノフノバン　一昨晩ト云事也
ヤド、　家主他行セシ留守ノ事也
ヨリカエル　フリカエルト云事也
ヨホル　呼也
アヤホヤ　彼是ト云事也
マヽヤク　物ノ間違イメルト云事也
イチゲン振舞　婚姻セシ家ニ於テ、始メテ其一門タルモノ或會

風俗

スル事也、テットショウ必ズ實正ト云事也、ショモンショウ誓文實正ト云事也、又大シヨモントモ云也、テウ是マコト也ト云事ニ用ユ貞心ノ貞カ、
雪ヲコシ冬日雪降ラントスル時、山ノ鳴ル事ヲ云、テウハイ年始ノ禮ヲ云也、按ズルニ、是朝拜ト云ヲアヤマリ傳ルモノカ、畠打(ハタウチ)參(マイ)リタリ山家ノ民年禮ノ言也、ハタウチハ耕作ノ事、畠ヲバ打ト云ヘバナリ、綿脫(ワタヌキ)參リタリ同上、是女ノ言也、親ヲ綿ニ作ルヲムタト云ヘバナリ、凡テ畠打ヲタムキトモニ、山中ニ於テ重ンズルヲ以テ也、メンタイ同上、是以上ノ禮ヲ請ル家主ノ返答也、メンタイハ目出度ノ誤リ成ルベシ、

〔人國記〕飛驒國

飛驒國之風俗ハ、律義ニ而愚也、其愚トハ日本ハ廣トイヘドモ、此國ニ越タルハナキト覺ル、人百人ニ九十人如斯、因茲我國ヨリ他邦ヘ出ル事モ嫌テ、唯井中之坐ヨリ天ヲ知貌ナル形儀ナリ、武士之風俗モ、唯我領スル處之所知ヲ十分ニ覺テ、是ニ上コス事アラジト思フノ類ニテ、カイキウ不ㇾ可ㇾ然也、誠ニ山中之人等、最カク可ㇾ有也、但生得ハ石鐵之性トモ可ㇾ謂也、

〔飛州志一總歷〕凡此州人ハ、山陰ノ氣ヲ稟タルニヤ、男子タルモノ愚癡局校ニシテ、事物ノ上ニ於テ道理ヲ了別セザルコト最多シ、是等ヲアツメテ習俗ノ卑賤ヲ成セリ、余其不辨ヲ見ルニ、氣質一偏ニ頑固ナルニモ止マラズ、意地蓬ウシテ、物ニ遷惑セラレ易シ、又山奥ノ民ハ極メテ偏固ナレドモ、事物ノ道理ニ通ゼサルハ增々甚シケレバ、所謂强者ノ類ニモ非ザル也、婦女ノ體態敢テ他州ニ異ルコト無シ、其敎戒ノ疎カナルハ、此州ノミニモ限ラズ、隣國ノ習俗ト見ヘタリ、桑蠶繰紝ヲ第一ノ業トシ、其餘ノ大業ヲバ男子ニ讓ルトイヘドモ、下賤ニ至リテハ、又男子ノツトメニモ增レルナルベシ、

凡此國ニ生ルヽ男女僧俗、他州ニ出テ其身ヲ立ルトイフモ、古今其例稀ナリ、土著ノ民增々多キコト知レタリ、

凡民ノ食物品多シ、麤食ニ至リテハ、食物トモ見ヘズ、食ノ風味ニモアラネド、飢ヲ助ルニ餘リアリ、器物ノ品、衣服ノ制、猶ソレトモ見難シ、其冬春ヲ過スハ、身ヲ窠ユシテ居レリ、故ニ日中ニ迫バ

ザレバ、爐邊ヲ去テ業ヲ成得ズ、山川村里ノ雪消ザルノ間ハ、其境界モ分チ難ク、積雪勁寒ニ制セラレテ、人ト物ト相アハレムベキモノナリ、毎歳暮春初夏ニ至ラザレバ、春ノ花開ケズ、其開ケルニ及デハ、梅桃櫻ノ次第モナク、皆盛ヲ一時ニセリ、盛夏バカリハ、暑氣至ツテ其代謝ハ見ユレドモ、旦暮冷カニ爽ナルコト餘國ニ異リ、秋冷ノ至ル又早シ、自次序ヲ逐テ業ヲナス間ハ、他州ノ三季ニモ比スベカラズ、習テ性ト成ル故ニ、業ヲ勵ムニ疎慵ナリ、是氣候不順ナルニ制セラルヽ所以乎、○中略

凡商買ハ、合國第一ノ業トセリ、然ルニ中頃材品時メキシニヨリ、諸國ノ商人數多此國ニ入、一時ニ諸材ヲ伐出セシカバ、サナガラ列嶽攅峯ヲ赧ニセントス、爰ニ於テヲノヅカラ俗風一變シ、生民其利ニ趨リテ、身上ノ榮枯地ヲ易ヘタリ、既ニシテ其事モ停ケルハ、在山ノ年數ニ制限アリ、殊ニハ國民永世ノタツキト成セシ材品モ、此時ニ至ツテ悉ク盡ナントスルニ始テ驚キ、是ヲ歎キ訴レバナリ、今ノ如キハ、山中ノ民ノミ材ヲ業トス、租税ニ充ル田畠少キガ故ナリ、

〔閑窻瑣談下編乾〕飛驒國大牧村の籠渡し

彼阿部友の進の採薬記に記されしを見れば、其地の人物さへ眼前に見るごとく、最も便なき所ぞかし、飛驒國田畑村といふ所の外は少き深山なり、雪深く六七月迄も村々に雪あり、極暑の節も朝夕は綿入を著す、甚しき寒國なり、稲を植て實の惡しき故、田に稗を作る、常々農民の食物は、蕨の根を堀て食とす、又栗の木抔のやどり木を採て、其汁を煎じ食す、友之進此山中に旅宿し、夜中蠟を燈し髮月代を召仕の者に致させけるが、其所の男女是を見て、甚奇怪の事と思へる有樣にて、あれは大根に火を燈し、頭を面にするかといふて甚しく笑ふ、

撰者曰、此頃猶此邊にて世に蠟燭の有事を知らず、月代をする事も知らざりけん、又蠟燭をも看たる事のなかりけん、大根へ火をともしたるかとは云しなるべし、今○天保より百年以前

とは云ながら、其開けざる事思ひやるべし、

〔飛州志 二 國法〕奴婢事人期限

本土ノ民間ニ於テ、奴婢ヲ仕フノ期限アリ、各其期月ヲノス、益田郡ハ二月二日ヨリ同年ノ八月二日ニ至ル、又八月二日ヨリ翌年ノ二月二日ヲ限リトス、是半季也、大野郡吉城郡ハ、十二月ヨリ翌年ノ十二月ヲ限リトス、是一季也、大野郡國府高山町ハ、二月二日ヨリ翌年ノ二月二日ヲ限リ、一季トセリ、

〔飛州志 七 人事〕度市參

本土モトヨリ山國ナレバ鹽無シ、仍テ自他州ノ民、越中美濃ノ兩國ヨリ鹽ヲ牛ニ負セ、此州ノ市肆ニ來リテ買フ者ノ總名ヲ度市參ト云ヘリ、其市肆ニ於テ鹽ヲ預リ賣出スモノヲバ、度市參屋ト云イ、度市參宿ト云フ也、是他州ノ鹽問屋ト云フニ同ジ、按ズルニ、一月六次三度ノ市ヲ爲スハ、古代ノ政治也、其度每ニハ遠近ト無ク民參リ向イテ商フニ、古昔ハ鹽ノミニモ限ルベカラズ、外ノ貨物モ交エタラン、サレドモ山國ニテ其重ンズルモノヲ先ヅ云フトテ、鹽ノ事ノミニ成リ來レルカ、六度三度ノ市ニ參ルト云フノ略語ナルベシ、○中略

俗道場

本土ハ東西本願寺宗ノ寺坊多シ、寺號或ハ坊號ヲ稱スル中ニ、其主俗體俗名ニシテ法用ヲ務メ、村里ニ檀家ノ民アツテ、代々相續スルヲ俗道場ト云フ也、或ハ毛坊主トモ云ヘリ、道場ハ宗旨ノ通稱タリ、

〔笈埃隨筆 二〕飛彈里

夫飛彈國は、美濃、越前、加賀、越中、越後、信濃の六國の間にはさまりて、深山幽遼極て片土下品の國也、諸の山々幾重となく重り、鬱々として日光の届ざる所有、谷深く坂路さかしく、斯る險難の地

も、住馴し國人は平地の如く、勞せずして歩行せり、よりて彈を飛すといふ心にて國名とすといふ、辟說ならんかし、又當國に毛坊主とて、俗人で有ながら、村に死亡の者あれば、導師と成て弔ふなり、是を毛坊主と稱す、譯知らぬ者は、常の百姓よりは一階劣りて、緣組などせずといへるは僻事也、此者共、何れの村にても筋目ある長百姓にして、田畑の高を持、俗人とはいへど、出家の役を勤る身なれば、豫じめ學問もし、經敎をも讀、形狀物體筆算までも備はらざれば、人も歸伏せず、勤り難し、則同國三河野村左衞門四郞、種藏村平右衞門、打保村孫總、又尾上村稱名寺、平瀨村常德寺、中野村光輪寺、牛尾村蓮勝寺等也、右の四ヶ寺は、中頃より東本願寺末派として寺號を呼といへ共、住持は皆俗人にして別名あり、初の三人は寺號なければ、何右衞門寺、又何太夫寺と稱して、同じく亡者の弔ひ、祖方の齋非時を勤む、居宅の樣子、門の構、寺院に替る事なし、葬禮齋非時に麻上下を著して導師と成勤、平僧に准じて野良頭にて亡者を取置するは、片鄙ながらいと珍らし、是深山幽谷にして、六七里が間に寺院なく、道儀高德の出家なければ、往古より如此致來りしと覺ゆ、若兄弟あれば、總領は名主問屋を勤役して、弟は同居しながら寺役をなせり、遠州、三河、美濃河内抔にも、毛坊主有よし聞り、又同國大野村蜂谷庄出羽平村に洞窟あり、土人傳へいふ、昔し仁德帝の御宇、二面四手四足なりし宿儺といふ異形の者住し跡なりといふ、されば此國の谷間に笹多く生ず、其中に葉の有べき所に、魚の形に類せるもの生ず、小さき笋の如し、末細く尾の形になり、鰭の樣ゑたる所も有、頭と覺しき所竹に付たるさゝ、葉卷て鱗の如し、三四月頃次第に太り、忽然と枝を離れ、水中に落れば變じて魚と成、故に土俗笹魚と號す、味ひも美にして毒なし、誠に非情の有情と化する理、更にはかり難し、

〔本朝俗諺志四〕毛坊主

飛州の山中に、毛坊主といふあり、農業木樵りて常の百姓並也、はるかの奥山にて出家などはな

き所也、人死たる時、此毛坊主を頼み弔ふ也、代々讓りの袈裟をかけ、鉦うちならし、經念佛して、とぶらふ事也、俗人にて坊主の役をするゆへ名付たる也、此家は代々あり、常の百姓より一階おとり、縁組などはせぬ事也、本尊は多ク大津繪の十三佛也、小き石地藏も有、

名所

〔日本鹿子　八〕同國飛驒○名所之部

ひだの國は山國也、海邊遠し、さして名所なし、ひだの細江と云有、又當國たくみの名有、

ひだのたくみ打墨繩にあらぬ共たゞひとすじに君をこそおもへ

二部の川　位山　朝日の原

淺水の原など云名所有之、順道あらざる故在所不分明、

〔和漢三才圖會　七十　飛驒〕當國神社佛閣名所○中略

胷布川　位山　朝日原　清水原　飛驒細江

以上名所未分明、當國邊地不往還順路也、

飛驒人の眞木ながすてふ胷布の川ことはかよへど船ぞかよはぬ

雜載

〔延喜式　二十八　兵部〕諸國健兒○中略　飛驒國卅人○中略

諸國器仗○中略　飛驒國甲一領、横刀二口、弓廿張、征箭十具、胡籙十具、

〔日本書紀　十一　仁德〕六十五年、飛驒國有一人、曰宿儺、其爲人、壹體有兩面、面各相背、頂合無項、各有手足、其有膝而無膕踵、力多以輕捷、左右佩劍、四手並用弓矢、是以不隨皇命、掠略人民爲樂、於是遣和珥臣祖難波根子武振熊而誅之、

〔日本書紀　三十　持統〕朱鳥元年十月己巳、皇子大津謀反發覺、○中略　詔曰、新羅沙門行心、與皇子大津謀反、朕不忍加法、徙飛驒國伽藍、

〔類聚三代格　十二〕太政官符

應レ差二志摩飛驒兩國朝集使一事

右○中略 奉レ勅、計帳公文、宜レ差二專使一、自餘之事、一同二前符一者、諸國承知、依レ宜行レ之、其志摩飛驒兩國守目二員、政多人少、不レ足レ差レ使、宜二朝集已下諸使聽一レ差二目以下一、立爲二恒例一、

弘仁九年十一月三日

〔飛州志〕一 凡往古ハ、飛驒ノ匠、或ハ匠丁ト云モノアリテ、帝都ニ在番セシ故ニ番匠ノ名アリ、又多ク他國ニ遊ビテ飛驒匠ト呼バレタリ、今モ國中ニ木匠多シ、各昔ノ善匠ヲ語リ傳ヘテ口實トスレドモ、其道統ヲ承得タル匠家モナク、今ハ伎術賤杣ナレバ、他州ニモ遊バズ、是中古國司任絕ヘ、國人私ニ立ン事ヲ專ラトセシ時代ニ、如斯ノ古實モ亂レヌト聞ヘタリ、故ニ匠法廢シテ損益ノ作用ヲ失ヒ、強キモノハ飽マデ強カラン事ヲ欲シ、削磨クモノモ用捨利害ノ了別ニ闇ク、事每ニ過不及アリテ、國ノ費ヲナセリ、其中ノ一ツ擧ルニ、其使フ處方木バカリヲ用ヒテ、方圓二ツヲ変ヘ作ルコトヲ知ラザルナリ、又其釘保スベキモノヲモ、漆固スルノ耗アリ、是久シキニ貽スタメニモ非ズ、國風漸々移リ、華美ヲ好ムノ心出テ、終ニ物ニ飾リ、眞ニ儗スル僞リヲ作リ生セリ、民ミヅカラ是良匠ノ道廢ルト知ラズ、古法既ニ亡絕ス、今古代ノ家作ノ遺在ヲ觀ルニ、削ル處削ラヌ處ノ匠法アッテ、妙術至巧其跡存テ然也、タトハヾ、杣人ノ斧ニテ作リ出シタルマヽニテ使アリ、又巧ノ新ニテ打タルヲ用ユルアリ、是ヨリ鉋ノ次第尤多品ナレバ、猶眞舺アリト見ヘタリ、然近年ハ其道ヲ勵ム族ナンド在リト見ユルモ、國土舊ヨリ善匠老手ヲ產スルノ德澤存シテ然ラシムルモノカ、

○按ズルニ、飛驒匠丁ノ事ハ、亦政治部丁役篇及ビ產業部木工篇ニ在リ、

名稱

信濃國

信濃國ハ、シナノ、又シナヌト云フ、東山道ニ在リ、東ハ甲斐、武藏、上野、西ハ美濃、飛驒、南ハ駿河、遠江、三河、北ハ越中、越後ノ十箇國ニ界シ、東西凡ソ二十三里、南北凡ソ四十五里餘、其地勢最モ高ク、至ル所ニ高山峻嶽重疊シ、河流亦四方ニ奔馳シ、實ニ我國中原ノ脊梁ト稱セラル、此國ハ古ヘ國府ヲ筑摩郡ニ置キ、伊那(イナ)、諏方(スハ)、筑摩(ツカマ)、安曇(アツミ)、更級(サラシナ)、水內(ミノチ)、高井(タカヰ)、埴科(ハニシナ)、小縣(チイサガタ)、佐久(サク)ノ十郡ヲ管シ、延喜ノ制上國ニ列ス、是ヨリ先、元正天皇ノ養老五年ニ、諏方郡一帶ノ地ヲ割キテ諏方國ヲ置キタリシガ、聖武天皇ノ天平三年ニ至リテ、復タ信濃ニ倂合セリ、明治維新ノ後、筑摩郡ヲ東西ニ、安曇、佐久ノ二郡ヲ南北ニ、伊那、水內、高井ノ三郡ヲ上下ニ分チ、新ニ長野市ヲ設ケテ一市十六郡ト爲シ長野縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄　五國郡〕信濃　之奈乃

〔運步色葉集　志〕信濃　信州

〔日本風土記　一寄語島名〕信濃(シナノ)　中國

〔地名字音轉用例〕シノ韻ヲナノ行ノ音ニ通シタル例

しなの　信濃國　之奈乃(シナノ)　信(シン)ヲシナニ用ヒタリ、古事記ニ科野(シナヌ)トアリ、濃ノ字モヌノ假字ナレバ、モトハシナヌナリ、

〔日本書紀通證　十二最行〕信濃國　倭名鈔之奈乃、齊明紀及古事記作科野、今按、科木出於此國、其樹皮甚韌(シヒ)強(コワシ)、今用以飾馬韁鐙、並楮穀之類也、或曰、諏訪社裝束、亦用此物、古式也、倭名鈔信濃國更級郡更科左眞之奈、埴科郡倉科久眞之奈、高井郡穗科保之奈、上野國多胡郡辛科加眞之奈、利根郡男信奈眞科之奈、笠科加佐之奈等、亦疑與國名同出于此義也、神樂歌云、木綿造流信濃原賢也、延喜民部式年料別貢雜物、信濃國、上野國、倶有科皮、

〔古事記傳　十四〕科野(シナヌ)國齊明紀にも此字を作(カケ)り、名義は山國にて、級坂(シナザカ)ある故の名なりと師○賀茂眞淵説れき、其説なほ冠辭考しなざかるの條に見えたり、此國には、なほ倉科、埴科、保科、仁科、蓼科など、志那てふ地名いと多かり、又一說には、志那と云木あり、古いはゆる榜これなり、其皮をなよ〳〵しき故に、志那とは名くるなるべし、又其皮色白ければ、志那は志眞なりとも云り、さて此木の皮をはぎて、木綿に作り、衣に織るなどにもし、紙にもせし

な、此信濃國に生るは、綵に色白くて名產なり、神樂歌にも、木綿造る科の原と見え、又諏訪神社の御裝束、鐙のおどし、馬の飾、船の綱などにも用ふ、然れば科野てふ國名も、此木より出たるなり、今のも級布、紙布、藤布、多布布などを出し、更級郡などは殊に精を多く出して名產なり、右の多布布と云も、精皮にて織れる布なれば、多布は多久の訛なるべしと云り、今思ふに、此說もかた〳〵由ありて捨がたし、榜を志那と云ること、古書に見えざれども、こは此方言にても有ぬべし、又神樂歌に、木綿造るしなの原とあるも、國名とは聞えざれば、木綿を造る此志那の木の生たる原なるべし、よし又地名にまれ、なほ本は此木によりての名なるべし、

〔諸國名義考上〕信濃

和名抄に、信濃、之奈乃、國府在筑摩郡、名義は、信濃國風土記に、往昔建御名方神等之所住之地也、治天下御神大穴持命、又少彥名命、建御名方命巡行此國給、到坐阿羅野、詔此國者木葉草葉品々也、故云品野、今云信濃者、音之轉也とあり、古事記傳には級坂あるゆゑの名なりとあり、こは古事記に、志那陀由布云々とある歌の志那は、坂路にて、陀由布は猶豫にて、平らかならざるさまをいふよしあり、日本書紀景行天皇卷に、日本武尊進入信濃、是國也山高谷幽、翠嶺萬里、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、然日本武尊披烟凌霧、遙經大山、既逮于峯云々、また推古天皇卷に、有蠅聚集浮虛、以越信濃坂、鳴音如雷云々、また齊明天皇卷に、科野國言、蠅群向西、飛踰巨坂、大十圍計、高至蒼天云々、また日本紀略延長三年七月二十九日、東國民烟爲風多損、信濃御坂路壞云々、また萬葉集、信濃國防人歌に、知波夜布留、賀美乃美佐賀爾、怒佐麻都里、伊波負伊能知波、意毛知々我多米とよめるを始にて、後拾遺集、新古今集、又今昔物語などにも、信濃の御坂の事見えたり、此坂を級とはいへるなり、志那の約りは佐にて、加は所なり、かゝれば佐加は級所なるよし、古事記傳に見えたり、中略○山根宗利といふ人この國に行て、科布の裁端を我方におこせたり、賤の衾などの料なりといへり、いと麁き布なり、和名抄に、調布、豆岐乃沼能、又有信濃望陁等名云々、其體與他國調布頗別異、故以所出國郡名爲名也とあり、科木より出たる國名か、國名より出たる調布の名か、本末をゑらず、又思ふに、伊勢津彥といふ神、大風を起し立去りしより、伊勢國風土記上の伊勢國の條に引りにあり、

延喜神名式に、水内郡風間神社あり、今も風間村といふ、俊頼朝臣の歌に、信濃なる木曾路のさくら咲にけり風のはふりに透間あらすな、夫木集に、信濃路や風のはふりご心せよさらゆふ花の匂ふ神垣、などよめり、俊頼朝臣難詠抄、また清輔朝臣袋草紙などに、風祝部の事あり、かゝれば信濃は必長野にてもあらむか、中川顯允は萬葉集に、三篶刈信濃とよめれば、篠野ならむかともいへり、

位置

〔萬葉集 相聞 二〕久米禪師娉石川郎女時歌五首

水篶〇舊作薦今改苅、信濃乃眞弓吾引者、宇眞人佐備而、不言常將言可聞、

〔冠辭考 九〕みすゞかる　しなぬ

萬葉卷二に、水篶苅信濃乃眞弓云云、略〇註こは眞篶を苅野とつゞけたり、荷田大人のいへらくは水篶は眞すゞ也、水は借字、美と麻とはことに通へり、神代紀に、使山雷者採五百箇眞坂樹八十玉籤、野槌者採五百箇野篶八十玉籤云云、略〇註これによるに、すゞてふ小竹をかる野とつゞけし物也と、こは古意也、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

信濃上諏訪宿、中町極高三十六度二分半、經度東二度二十五分、從東都 道中山 五十六里二十三町二十八間半、甲州街道四十七里二十九町五十七間半、

信濃長野村、善光寺大門町極高三十六度四十分、經度東二度三十分、從東都 中仙道追分 五十七里二十三町二十二間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

飛驒　高山　三六度〇八分三〇秒 略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　飛騨　高山　東一度三二分〇四秒

〔信府統記　三〕國郡大綱

當國信濃ハ、東山道八ケ國ノ一ニシテ、越後、上野、武藏、甲斐、駿河、遠江、三河、美濃、飛騨、越中、都テ十ケ國ニ鄰レル大國ナリ、郡ヲ分ツコト十郡、南北五日路餘、東西三日路ニ及ベリ、

〔日本地誌提要　二十六信濃〕疆域　東ハ甲斐、武藏、上野、西ハ美濃、飛騨、南ハ駿河、遠江、三河、北ハ越中越後ニ至ル、東西凡貳拾三里、南北凡四拾里餘、

〔信府統記　三〕水内郡〇中略

戌亥ノ方ハ越後境高妻山ノ麓國境ナリ、但シ高妻山西ハ安曇郡雨飾山ノ方ナリ、　黒姫山（高妻山ヨリ丑ニ當ル）　高妻山ヨリ此所マデ麓通國境　關川（黒姫山ヨリ東）　黒姫山ノ麓ヨリ此所マデノ間、信濃國ノ方ノ川岸國境、野尻村ヨリ越後國關川マデ三十町三十間、（但シ往還ナリ）野尻村ノ池ヨリ關川ヘ落合ナリ、

關川ノ岸ヨリ山婆嶽マデノ間、山々左ニ記ス、各峯通國境、

柄切峯國境（越後國ニテハ柏ケ峯ト稱フ）此峯ヲ越ス道、古海村ヨリ越後國桶海村マデ一里三十四町〇中略　班山〇中略　註　此山ノ右ニ道アリ、大川村ヨリ越後國樽本村マデ一里十五町四十間餘、〇中略　大峯（班山ヨリ子丑ニ當ル、越後國ニテハ烏屋ケ峯ト稱フ、）　鷹折場（大峯ヨリ亥子ニ當ル、越後國ニテハイケトヤ山ト稱フ、〇中略）　あさみとや（鷹折場ヨリ丑寅ニ當ル）　松倉山（あさみとやノマヘ右ノ方）　桂池（松倉山ノ東北ニアリ）　つなき平（あさみとやヨリ丑寅ニ當ル）　顔戸村ヨリ越後國下平丸村マデ二里十七町三十間　山婆嶽（つなき平ヨリ子丑ニ當ル、越後國ニテハ黒倉山ト稱フ、）　つなき平、山婆嶽ノ間ニ道アリ、北條村ヨリ越後國小澤村マデ二里三十町三十間、〇中略

高井郡〇中略

當郡ノ北越後境ゑくみ川、此川越後ノ方ノ川岸國境ナリ、〇中略

當郡丑寅ノ隅三國峠峯通、越後、上野、信濃三國境ナリ、是ヨリ當郡ノ東上野境滿山マデノ間、皆峯

通國境ナリ、○中略 白根山（上野國ニテハ今白根山ト稱フ） 澁山（峯通リ國境） 黒湯山（此山峯通リ國境、上野國ニテハおくしかり嶽ト稱フ、乳山マテ
アノ間、山中境界分明ナラズ、） 乳山（峯通國境、上野國ニテハうらくら山ト稱フ、四阿山マデノ間、國境分明ナラズ、） 四阿山（峯通國境、上野國ニテモ同名、往古ハ東屋山、）此四
阿山ノ南ノ方郡境、南ハ小縣郡ニテ申酉ハ埴科郡ナリ、○中略

小縣郡○中略

此郡ノ寅卯ノ方ハ、上野國ヘ降ル、○中略

鳥居峠（四阿山ノ南ナリ）御茶屋久保國堺上野國マデモ同名、大日向村ヨリ上野國田代村マデ二里半、○中
略 湯ノ丸山（佐久郡マデノ内峯通國界）上野國ニテモ同名、○下略

〔信府統記〕四 佐久郡

當郡ハ信濃國東ノ方ニテ、上野武藏甲斐三國ニ降レリ、○中略

碓氷峠（上野國ニテモ同名、はらしこ山ヨリ辰巳ノ方、）横倭山ヨリ此所迄ノ山々峯通國境、但シ此所ニ分杭アリ、○中略 三
國山、武藏上野信濃三國ノ界ニテ、即チ峯通ヲ境界トス、是ヨリ（落合梓山）村出口道迄ノ間、山中國境知
レズ、○中略 十文字峠、峯通國境、（三國山ヨリ未ノ方、武藏國ニテモ同名、）此峠道（落合梓山）村ヨリ武藏國椽木マデ九里四町餘、
○中略 大樫峠、武藏甲斐信濃三ケ國ノ境ナリ、此大樫峠峯通國堺、（武藏甲斐兩國ニテハ國師ケ嶽ト稱フ、十文字峠ヨリ午未ノ方
ニテ、此郡ノ隅ナリ、東ハ武藏、南ハ甲斐ナリ、）金峯山、（大山峠壁ナリ）峯通國境、○中略 八ケ嶽、峯通國境、（甲斐國ニテモ同名、○中略）此八ケ嶽、當
國ノ方北面、峯ノ半ヨリ佐久郡、西ハ諏訪郡ナリ、○中略

伊奈郡○注略

此郡ハ○中略 南前嶽ノ峯通ヲ境トシテ甲斐國ヘ降ル、○中略 此峯ヨリ甲斐、駿河、信濃三國界ノ山マ
デノ間、亦境界判明セズ、○中略 是ヨリ巳ノ方ヘ遙ニ出張タル山岳ハ、即チ駿河、遠江、信濃三國ノ境
ナリトス、○中略

天龍川ハ遠江、三河、信濃三國ノ境目ナリ、此川ノ西ニ坂部村ヨリ三河國佐太村ヘノ通路十八町

ナリ、但シ此所峯通國境、（此所ヨリ新野村出口道マデノ間ハ、山中ニテ境知レズ、○中略）是ヨリ西ひばらはなれ山ノ峯マデノ間ハ、境界分明ナラズ、ひばらはなれ山ノ峯ニ境杭アリ、國境ナリ、此路根羽村ヨリ三河國上津具村マデ三里十八町、是ヨリ西柚路峠マデノ間モ亦境知レズ、柚路峠中ノ沓掛峯通國境、（三河國ニテモ同名）月瀬村ヨリ三河國野入村マデ一里十八町二十間往還ナリ、此路古ヘ美濃國ヨリ木曾山路ヲ開カザリシ以前ハ、中山道トシテ往還セシト云傳ヘタリ、○中略月瀬村ヨリ三河國大桑村マデ二十二町五十間餘、此所ヨリ三河美濃信濃三國境マデ、山中國境分明ナラズ、此三國境ノ山ハ境ノ澤ヨリ、戊亥ニ當ル、是ヨリ野熊山マデノ間モ國堺知レズ、

〔信府統記　五〕筑摩郡木曾○中略

此郡ハ國中ノ西南ナリ、南ハ美濃國ヘ隣リ、野熊山峯通國界、（美濃國ニテハ惠那撥ト稱ス、伊奈木曾ノ郡界モ此峯ナリ、）野熊山ヨリ西ノ方湯舟澤村出口ノ道マデノ間ハ、國界分明ナラズ、堺ノ澤國界（美濃國ニテモ同名）湯舟澤村ヨリ美濃國落合村マデ一里六町二十間餘、是ヨリ馬籠峠マデノ間モ又山中ニテ境知レズ、馬籠村ハ木曾路往還ナリ、峠ノ上一里塚國境、（西南ハ美濃國ナリ、十石峠ト稱ス、東北ハ信濃坂馬籠峠ト云ヘリ、）馬籠村ヨリ美濃國落合村マデ一里五町、此峠ヨリとゞめき道マデノ間モ國境知レズ、とゞめき國境（美濃國ニテモ同名）此とゞめきト云フハ木曾川ノ内ナリ、石龜澤マデノ間川ノ中央國堺ナリ、○中略

石龜澤國境（美濃國ニテモ同名）、田立村ヨリ美濃國坂下村マデ三十三町餘、○中略石龜澤ヨリ長根山マデノ間、國堺知レズ、

長根山峯通國境（美濃國ニテモ同名）此山ノ北ニ谷ノ鳥屋ト云アリ、是モ峯通リ國境、○中略此谷ノ鳥屋ヨリひげすり峠マデノ間、山嶮ニテ國境知レズ、

毘摺峠（此郡ノ南西隅ナリ）峯通リ國堺、（美濃國ニテモ同名）瀧越村ヨリ美濃國小郷村マデ五里六町、毘摺峠ヨリ三

河國境マデノ間、國境知レズ、

鋸摺峠ヨリ北西ヘ出張タル山、美濃、飛驒、信濃三國ノ界ナリ、是ヨリ北ハ飛驒國ヘ隣ル御嶽マデノ間、國境分明ナラズ、

御嶽山峯通國境、(飛州ニテモ同名)此嶽ヨリ永峯マデノ間、國境分明ナラズ、

永峯山嶺通國境、(飛州ニテモ同名)西野村ヨリ飛驒國小日和田村マデ二里十一町、永峯ヨリ寄合峠マデノ間、國境分明ナラズ、

寄合峠峯通國境、(飛驒國ニテハ野麥峠ト稱ス、)川浦村ヨリ飛驒國野麥村マデ二里十八町、是ヨリ乘鞍ケ嶽マデノ間山中國境知レズ、

〔信府統記 六〕安曇郡

乘鞍嶽峯通國境、(此嶽飛驒ニテモ同名、是ヨリ信濃峠マデノ間、山深ク國境分明ナラザルナリ、)

信濃峠峯通國境、(乘鞍嶽ヨリ北ニ當ル、此峠飛驒國ニテハ平湯峠ト云、大野川村ヨリ飛驒國平湯村マデ五里三町、嶮路ニテ寄物ヲ負セル馬足ハ立チ難シ、雪中ニハ通路絶ユ、是ヨリ北ヘ燒嶽迄ノ間モ國境知レズ、)

燒嶽峯通國境、(飛驒國ニテハ硫黄嶽ト云フ、是ヨリ北、越中、飛驒、信濃三國境ノ山マデノ間、國境知レズ、)

越中、飛驒、信濃ノ三國境ハ、深山ニテ山名モ無シ、峯ヨリ東面ハ信濃國ナリ、西ノ方ニテ、南ハ飛驒、北ハ越中國トス、(是ヨリ北ヘ、信濃國ト越中國トノ界ハ、山深ク嶮岨ナル故、通路ナシ、但シ山中ニ、だいら川ト云フ川アリ、是ヲ界トスルナリ、だいら川ハ、加賀川ノ入ニテ、野口澤、木谷ノ北、すばりト云邊ヨリ奥ヘハ通路ナシ、此すばり越ノ邊マデモ、山師杣人ノ外ハ行クコトナシ、夫ヨリ此方ニ、さら〱越ト云所アリ、昔シ天正年中、信長公ノ臣佐々內藏助、越中國ヨリ、此さら〱越ヲ通リテ、富山ヘ來ルコトアリシト云傳ヘタルハ、此邊ヲ越テ、加賀川ニ沿ヒ、野口村ノ方ヘ出テタリトカヤ、だいら山ヨリ、越中國立山ノ、信濃堂ナドイフ所見ユ、山傳ヒニ、立山マデ五里許リモアルベキナリ、是ヨリ越後、越中、信濃三國界マデノ中モ國境分明ナラズ、)

越後、越中、信濃三國境、(此所モ山ノ名ナク、亦通路モナシ、東面ハ信濃國ナリ、西ノ方ニテ、南ハ越中、北ハ越後國ナリ、此山中、層嶽重峰、何嶽トイフ數知レズ、信濃國ノ中ヘ、大山名アル嶽々下ニ記ス、三國界ノ山ヨリ北ヘ、乘鞍嶽マデノ間モ、國界知レズ、)

乘鞍嶽、峯通ヲ國境トス、越後國ニテモ同名、此所ヨリ、蒲原、古澤、姫川ヘ落口ノ所マテ、山ハ峯通リ、川ハ中央ヲ以テ國界トス、乘鞍ケ嶽ノ名、松本領ノ中ニ三所アリ、一ハ前ニ見エタル、南西ノ隅ニアル山ナリ、一ハ此山ニテ、越後境ニアリ、又一ハ信濃國中ノ山ニテ、即チ安曇郡大町與鹽島新田村ノ西北ニアリ、是ヨリハ南ニ當ル、享保七年、山見通シノコト、仰蒙リタル山ノ一ナリ、委ク大町與山ノ部類ニ載ス、

横前鞍嶽越後國ニテモ同名、此嶽乘鞍ヨリ北ニ當レリ、其間ニ、風吹トイフ峯アリ、此風吹ハ乘鞍ト、横前トノ前山ニテ、越後國ヘハ降ラズト見エタリ、

えびらが峠越後國ニテモ同名、此峯横前鞍嶽ヨリ、子丑ニ當ル、又安曇郡來馬村ヨリハ西ナリ、大網橋ヨリハ未申ノ方ニ見ユ、此峯ヨリ北ハ越後領ナリ、是ヨリ東往還ノ路ノ左ニ、古澤トテ川アリ、越後分、蒲原村モ、路ヨリ左ニテ、西ノ方ナリ、此邊ヨリ兩飾山マテノ國境、元祿十五年、雙方ノ百姓評論ニ及ビ、御裁許アリテ相究リタル地ナリ、委クハ御裁許ノ記ニ見エタリ、

蒲原、古澤、此川中央國境、此澤川ハ未ノ方ノ山嵩ヨリ出テ、寅ノ方ヘ流レ、大網橋ノ少シ上テ姫川ヘ落ツ、此落合ヨリかくま澤マテ、姫川ノ中央國境ナリ、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年九月四日辛卯、令美濃信濃國、以縣坂上岑爲國堺、縣坂上岑、在美濃國惠奈郡與信濃國筑摩郡之間、兩國古來相爭境堺、未有所決、貞觀中、勅遣左馬權少允從六位上藤原朝臣正範、刑部少錄從七位上靱負直繼雄等、與兩國司臨地相定、正範等撿舊記云、吉蘇小吉蘇兩村、是惠奈郡繪上鄉之地也、和銅六年七月、以美濃信濃兩國之堺、徑路險隘、往還甚艱、仍通吉蘇路、七年閏二月、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂、封邑七十戶、田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兄人、各進位階、以通吉蘇路也、今此地、去美濃國府行程十餘日、於信濃國最爲逼近、若爲信濃地者、何令美濃國司、遠入關通彼路哉、由是從正範所定、

〔信府統記二十四〕元祿十五壬午年、越後國頸城郡山口村と信州安曇郡小谷村と國境論御裁許、

越後國頸城郡山口村と、信濃國安曇郡小谷村境評論、

山口村百姓申趣、横川は元來越後、信濃兩國境相極候、其上根小屋村之者八十年以前、信州小谷村庄屋之名子に成、於越後國之山陰、田畠致開發、令住居、爲信州中俣村之地由雖申之、畢竟爲越後之地旨訴之、小谷村百姓申候は、從往古白池限之、信越兩國相分れ、正保年中、御國繪圖に有之由申傳候旨答之、

地勢 氣候

右爲檢使佐橋左源太、室七郎左衛門差遣、遂檢分官庫之大繪圖令點檢之處に、白池は兩國境に記之候、又小谷村百姓名子に成候由雖申之、證據一切無之、剩宗門吟味之節、從松本領主改之、且信州人別水帳に載之候、横川之儀大繪圖之面、全信州之地に有之上は、旁以越後百姓申處、無謂境之儀、西はかくま澤より、戸倉山の麓へ移り、自其山王池へ見通、小倉明神へ相續、雨飾山峯限之、兩國境相定畢、但境を隔有之、兩國之畑反畝改互可相替之、仍爲後證繪圖之面引墨筋、各加印判、雙方へ下之條、永可相守者也、

元祿十五壬午年十一月廿二日　戸　備前〇下略

〔日本書紀 七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略日本武尊進入信濃、是國也、山高谷幽、翠嶺万重、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、

〔易林本節用集 下〕信濃州 信州 上管、十郡、南北五日、陰氣深、草不長、海阻而鹽味希也、地深一丈、桑麻厚而帛綿多、大々下國也、

〔本朝事跡考〕信濃國

地高而寒、群川之長大者、其源多自此州流出、岐岨山材木甚多、大者數圍、長者數丈、土民戸々白板屏、屋四面皆板不塗壁、裂大木爲薪、伐木者、轉自山浮河、以達諸國、

〔千曲之眞砂 前編一〕國圖源流并國界風土寒暖

森臺草曰、しなの、國、是坂東一高き國なり、甲斐よりも登り、越後よりものぼる、美濃よりものぼるといへり、日本事跡考曰、上略地高而寒群川之長大者、其源多自此國流出、

私曰、此國外ヨリ流レ入ル水無シ、近國ノ大河、此國ヲ川源トス、其大略天龍川ハ諏方湖ヨリ南方遠州へ流レ、木曾川ハ鳥居峠ヨリ南へ流レテ美濃へ落、犀川ハ駒ガ嶽ヨリ出北へ流レ、水內郡ニ至リ千曲川ト合シ、千曲川ハ金峯山ヨリ出北流レ、犀川ト合シ下テ、越後新潟ニ至テ海ニ

入ル、荒川ハ川上山東ヨリ出、武州ヘ流レ隅田川トナル、釜無川八ガ嶽ノ南ヨリ出、東南ヘ落チ富士川トナル、利根川ハ淺間山後ヨリ出ヅ、碓氷川ハ碓氷山ヨリ出、東流レ下テ烏川ト合シ、利根川ヘ落ツ、同山ノ北角打ガ嶽ヨリ烏巖、烏川ヘ出、碓氷蕪川二川ト合シテ利根川ヘ落チ、姫川ハ安曇郡佐野ノ嶺ノ西北ヨリ出、北流レ越後ノ海ニ入ル、關川ハ水内郡野尻湖水ヨリ出、高田ヘ落、海ニ入、大井川ハ伊奈郡ト甲州トノ境ヨリ出、東海道ヘ落ツ、其外ノ小川源ハ枚擧スルニ暇アラズ、此ノ如クナルガ故ニ、地ノ高キ事日本無雙ト謂ベシ、又雪ノ降事ハ多カラズト雖ドモ、寒氣ノ甚キ事ハ他ニ准ズベキ國ナシ、コレニ因テ少シ降リタル雪モ、旬ヲ越エ月ヲ重テモ消スル事ナシ、又曰、水内高井兩郡、越國ニ隣ル地ハ、北越ニ劣ラズ雪降ル事多シ、常ニ尺餘ニ及ビ、大雪ト云時ハ丈餘ニ至ル、往來雪車橇、又ハ雪竿ヲ用ユ、二月末ニ至リ雪消ル後見レバ、草鞋等樹頭ニ掛レリ、然レドモ寒氣ハ諏方佐久二郡ヨリハ暖ナリ、雪ハ少シトイヘドモ、風烈ク寒氣ノ甚事ハ、諏方、佐久、又ハ木曾谷邊、尤日本ニ雙ビ無シトナリ、

〔日本實測錄 二街道〕從ニ東海道岡崎伊奈街道至ニ金澤、○中略

信濃國伊奈郡根羽(ネバ)村　四里二十三町四十一間(至ニ平谷村ニ二里一十八丁一十七間)　浪合村　三里二十町四十五間　駒場村、三十五度二十六分半、　三里一十五町二十九間半　飯田櫻町　一里一十二町五十間　上市田村　一里二十七町八間　名子村大島町　一十七町　片桐鄕片桐町　一里三十四町四十七間　石曾根村飯島町、三十五度四十一分、　一里二十七町三十七間　上穗村上穗町　一里二町八間　宮田村宮田町　二里三町四十六間　西伊那部村　八町一十二間　山寺村御舞瀨　二里一十五町三十二間　高遠本町(至ニ高遠城大手ニ二丁二十七間)　一里三十五町五間　四日市場村　一里八町二十九間　御堂垣外村　二里二十二町七間半　諏訪郡金澤宿(從ニ岡崎ニ至ニ金澤ニ)街道、通計四十四里二十六町三十一間、

従伊奈街道根羽歴新城至市田

信濃國伊奈郡根羽村　二里三十三町二間半（至國界一里二十六丁四十三間）　三河國設楽郡上津具村（中略）

従伊奈街道山寺歴鮎澤至東堀

信濃國伊奈郡山寺村御鋒瀬　一里六町八間　北殿村　一里六町　松島村　二里一十町一十三間半　平出村　一里二十六町二十二間　諏訪郡鮎澤村（沿川至諏訪湖傍、三十三丁四十九間）　一里二十町九間半（至岡谷村三十丁五十五間）　東堀村（従山寺至東堀）街道、通計七里三十二町五十三間、

〔日本實測録（三街道）〕従東京中山道至草津（中略）

信濃國佐久郡軽井澤宿、三十六度二十一分、　一里一十町一十一間半　沓掛宿　二十一町四十三間　借宿村　二十町一十八間　追分宿、三十六度二十分、　一里一十五町四十九間（至越後街道追分三丁五十一間）　小田井宿　一里二町四十四間　岩田村、三十六度一十六分半、　一里一十七町一十五間半　塩名田宿　二十三町一十八間（至千曲川岸二丁三十七間）　八幡宿　三十二町四十二間　望月宿、三十六度一十五分半、　一里九町一十八間半　芦田宿　一里一十一町三十九間　小縣郡長窪宿、三十六度一十五分、　一里三十四町三十九間　和田宿、三十六度一十二分、　三里三町四十一間半（至和田峠二里二十一丁二十一間）　諏訪郡下原村餅屋、三十六度八分、　二里一十二町三十四間　下諏訪宿、三十六度四分、　二十二町一十四間　東堀村　二里一十二町三十二間（至塩尻峠一里四十二間）　筑摩郡塩尻宿　一十三町五十二間　大門村（至原新田一里七丁三十間）　一里五町五十二間　洗馬宿　三十四町一十五間　本山宿、三十六度三分半、　一里三十五町四十二間　贄川宿（従贄川至馬籠、呼木曾庄、）　一里二十八町四間　奈良井宿、三十五度五十七分半、　一里一十六町五十三間（至鳥居峠二十二丁三十間、従峠至善光寺路追分二十九丁二十三間、）　藪原宿、三十五度五十六分、　一里二十一町五十一間　宮腰宿、三十五度五十三分、　三里三十一町一十九間（至福島關所三里二十七丁借六間）　福島宿、三十六度五十一分、　二里九町三十八間　上松（アゲマツ）宿、三

十五度四十七分、三里五町五十三間半　須原宿、三十五度四十二分、一里二十八町一十六間野尻宿、三十五度四十分、二里八町三十一間　三富野宿、三十五度三十六分半、一里六町二十七間　妻籠宿　一里三十三町四十五間（至馬籠峠一里一十二丁二十一間）　馬籠宿、三十五度三十二分、一里二町三十九間（至國界一十九丁五間、從界境至十曲峠六丁、）　美濃國惠那郡落合宿（○中略）

從中山道追分歷善光寺至今町

信濃國佐久郡追分宿　三里七町一十五間　小諸市町、三十六度一十九分半、二里一十町一間

小縣郡田中宿　二里一十三町一十二間（至海野宿一十五丁四十七間）　上田海野郡、三十六度二十四分、二里三十五町五十三間半　埴科郡坂本宿　一里一十一町　下戸倉宿、三十六度三十分、一里一十七町一十三間半　屋代宿　二十八町四十九間（至千曲川岸二十丁二十八間）　更科郡鹽崎村篠野井　一里三十四町二十六間　丹波島宿　一里一十三町二十間（至犀川岸一十四丁二十二間）　水內郡長野村善光寺大門町、三十六度四十分、一里二間　稻積村（又呼新町）　九町一十間（至下德間村四丁三十六間）　東條村（又呼荒町）　二里一十七町三間　牟禮宿　一里三十三町三十二間半（至古間村一里二十三町四十一間半）　柏原宿、三十六度四十九分、三十五町二十九間　野尻宿　二十八町三十七間（至國界二十六丁三十四間）　越後國頸城郡關川宿（○中略）

從信濃國屋代歷飯山至下德間

信濃國埴科郡屋代宿　二里四町二間　松代伊勢町　二里二町二十五間　高井郡川田村川田宿　一十二町三十一間　綿內（メンナイ）村古屋（至川中島千曲川岸一十一丁三十六間）　一里二十二町五十四間　須坂下町（歷須坂陣屋前至上町限四丁五十間半）　一里八町一十四間　小布施村　四里三十二町二十八間半（至金井村二里一十五丁二十三間、從金井至千曲川岸一里一十三町四十間、）　水內郡飯山新町（至飯山本町八丁四十二間、從本町至飯山城大手五丁、又從本町至伊勢町限一十丁三十三間、）　二里一十八町四十七間半（至替佐峠二里三丁四十八間）　替佐村　一里二十六町三十三間　淺野村　二里四町三

十九間　神代村　一十六町二十一間　石村（至栗野神社三丁五十一間）　一里九町四十二間　下徳間村（從屋代至下徳間）街道、通計一十八里三十四町三十七間、

從中山道洗馬驛松本至篠野井、

信濃國筑摩郡大洗馬宿　一町四十二間　桔梗原（至本洗馬村長興寺一十七丁一十四間）　一里八町四十二間　郷原町村　一里一十一町一十五間（至堅石町三丁三十間、從堅石至原新田一十四丁四十五間）　村井町村（又呼村井宿）　一里二十一町三十九間（至松本博勞町一里二十丁二十間）　松本本町、三十六度一十三分半、一里二十三町二十五間半（至松本安原町際一里二丁五十四間）　下岡田村治郎丸（至岡田神社五丁一十二間）　四町一十五間　岡田町村　一里一十七町一十九間半　刈谷原町村（又呼刈谷宿）　一里八町四十五間　會田町村、（又呼會田宿）　三十六度二十分半、二里二十五町六間（至中峠一里七丁九間）　青柳宿　一里四町二十四間　麻績宿（至法善寺三丁一十二間）　二里一十六町三十二間半（至猿馬場峠一里六丁五十九間）　桑原村（至治田神社二丁五十四間、從社前至龍洞院一十二町二十七間）　一十四町三十九間

稻荷山村新田町（至八幡村八幡社一十五丁、從社前至姨捨山月見堂一十七町四十二間）　三町三十間　同八日市町、三十六度三十二分、一里一町二十二間　塩崎村篠野井（從大洗馬至篠野井）街道、通計一十六里一十八町卅六間半、

從中山道藪原驛野麥至高山、

信濃國筑摩郡藪原宿　一里二十七町二十五間（至木曽川岸三丁五十一間）　荻曽村柴原　二里二十町四十三間　奈川村寄合渡　三里二十町八間半（至野麥峠二里一十九丁四十七間半、從峠至國界六丁五十九間、）　飛驒國益田郡野麥村　○中略

從東京驛甲府至下諏訪、○中略

信濃國諏訪郡蔦木宿、三十五度五十二分、三里七町五十五間　金澤宿　二里一十七町四十一間　上桑原村（至上諏訪社三十三丁一十二間）　二十九町一間半　上諏訪宿中町、三十六度二分半、七町五十間半（至高島城大手前一丁一十二間）　下桑原村辰道　三十三町一十三間　富部村　六町三十三間（至下諏訪五丁二十

一　下諏訪宿（從東京至下諏訪）街道、通計四十八里一十三町五間半、

〔千曲之眞砂前編一〕上代税租賦役次第

行程東西四十七里餘、（自上野國境碓氷嶺、至美濃國境十國嶺下、釜ヶ橋中央、）南北五十四里餘、（自三河國境根羽先檜原村、至越後國境野尻先、關川橋中央、）

〔千曲之眞砂前編三〕松本城（號深志城）地屬筑摩郡

自松本到江戸行程、（東山道經六十一里半、武石通五十五里、保福寺通五十八里二十五丁、）到上野國境碓氷嶺、（廿五里半、東山道通也、）到越後國境、關川橋中央、（二十三里餘）到美濃國境、釜橋中央、（三十里）到上田、（十一里十二丁）到松代、（十四里廿八丁）到須坂、（十六里十八丁）到飯山、（二十三里十丁）到高島、（八里半）到飯田、（二十三里）到高遠、（十三里）到福島、（十三里十四丁）到小諸、（十六里十二丁）到仁科大町、（九里八丁）到越後國糸魚川、（千國通二十九里八丁）到飛驒國高山、

〔千曲之眞砂前編四〕松代城（號海津城）地屬埴科郡

自松代到江戸行程、（五十五里廿七丁、武鑑五十三里ト有ハ非也、）到上野國境碓氷嶺、（十九里八丁）到越後國境關川橋、（十里餘）到松本、（十四里廿八丁）到小諸、（十四里）到飯山、（九里）到須坂、（三里十八丁）到上田、（九里〇中略）

飯田城　地屬伊奈郡

自飯田到江戸行程、（東山道通七十五里十五丁、甲州通六十五里、）到上野國境碓氷嶺、（二十八里）到甲斐國境蔦木橋、（〇里數闕）到美濃國釜橋、（〇里數闕）到參河國境檜原内、（〇里數闕）到遠江國境青崩嶺、（十一里半餘）到高島、（十七里）到高遠、（十二里）到松本、（二十三里）到越後國境關川橋、（四十三里餘）

〔千曲之眞砂前編五〕小諸城　地屬佐久郡

自小諸到江府行程、（四十二里廿七丁、武鑑二四十一里十一丁ト有非也、）到越後國境關川橋、（廿二里十八丁）到上野國境碓氷嶺、（十六里十八丁）到甲斐國境深澤橋、（十四里十八丁）到上田、（五里）到松本、（十六里十二丁）到松代、（十三里）到飯山、（十四里十八丁）到善光寺、（十五里〇中略）

飯山城　地屬水内郡

自飯山到江戸行程、（六十四里二十七町）到上野國境碓氷嶺、（二十八里）到越後國境關川橋、（九里）到越後國境白倉、（九里餘）

宿驛

到松代、九里 到松本、廿三里十丁 到上田、十七里 到小諸、廿二里〇中略

高遠城　地屬伊奈郡

自高遠到江戸行程、東山道六十四里、甲州通五十五里、到遠江國境青崩嶺、〇里數闕 到甲斐國境蔦木橋、〇里數闕 到上州國境碓氷嶺、二十七里 到松本、十三里 到飯田、十二里 到高島、六里半

〔千曲之眞砂 前編 六〕福島館　地屬筑摩郡

自福島到江戸行程、七十里十九町、或七十里九町、到美濃國境釜橫、十三里餘 到上野國境碓氷嶺、三十一里半 到京都、〇里數闕 到宮越驛、二里半 到上松驛、二里半 到櫻澤驛、六里半 到尾州名護屋、〇里數闕 到松本、十三里 到飯田、〇里數闕 到高遠、〇里數闕 到高島、〇里數闕、中略、

木曾路者、自松本領境、到美濃國境、行程廿二里三丁餘也、但往還橋大小三十七有之云云、

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國驛傳馬

信濃國驛馬、阿知卅疋、育良、賢錐、宮田、深澤、覺志各十疋、錦織、浦野各十五疋、亘理、清水各十疋、長倉十五疋、麻績、亘理、多古、沼邊各五疋、傳馬、伊那郡十疋、諏波、筑摩、小縣、佐久郡各五疋、

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年九月甲寅、信濃國伊那郡阿智驛驛子永免調庸、以道路險難也、

〔吾妻鏡 七〕文治三年二月廿五日丁酉、二品渡御三浦介義澄亭、有御酒宴、折節信濃國保科宿遊女長者、依訴訟事參住、召出其女聞食郢曲云云、

〔信府統記 二十 四〕正德二辰年、木曾贄川町、奈良井町、藪原町、宮越町四ヶ宿へ、筑摩郡之内高遠領之内西五千石、松本領二十一ヶ村御用之趣にて、大通之節計助人馬被仰付候村々之內、雨波多村、三溝村、新村此四ヶ村より、同郡之內近き村野溝村、平田村、百瀬村、上下瀨黑村、竹淵村と道路遠近之儀御訴訟に罷出、

御裁許

信州筑摩郡上波多村、下波多村、新村、三溝村訴趣、正德二辰年ゟ、中仙道贄川、奈良井、藪原、宮之腰四

ヶ宿へ、助人馬出之候處に、村方困窮、其上道程も遠、令難儀之間、同國同郡野溝村、平田村、百瀬村、上瀬黒村、下瀬黒村、竹淵村は、道程も近く、無役村に候間、助人馬役引替候樣に仕度之旨申之、相手六ヶ村答候は、村方素田にて、牛馬所持候者も少く、漸作馬計にて、役儀勤候樣成馬無之、難儀仕之旨雖申之、自餘助鄕に類多き事故、難立事候、依之立合繪圖申付候處に、雙方相對之上、右四ヶ宿之內、贄川迄致撿地、相改繪圖差出候付、再應遂穿鑿之處、三溝村より七里三十二間之道一筋、百瀬村より六里四町廿七間餘之道一筋、野溝村より六里十町十三間餘之道一筋有之、何も道程近候付、三溝村助鄕高八百五十四石之分、百瀬村高八十石、野溝村高五百三十石、平田村高五百三十七石、內二百四十四石、合八百五十四石引替之上、新村より七里十三間之道一筋、六里十町十三間餘之道一筋有之、道程近く候條、上新村助鄕高二百八十一石之分、平田村高五百三十七石之內二百八十壹石引替之、上波多村より道二筋平均之六里三十一町十九間餘、平田村より六里十町十三間餘道一筋、竹淵村より六里十五町十五間道一筋、上瀬黒村より六里十八町五十四間之道一筋有之、何も道程近候付、上波多村助鄕之高四百五十七石之分、平田村高五百三十七石之內十二石、竹淵村高二百八十八石、上瀬黒村高二百九十七石之內百五十七石、合四百五十七石引替之、下波多村より道二筋平均之六里廿町八間、上瀬黒村より六里十八町五十四間、道引合候處に、過分之違も無之候付、下波多村助鄕高六百四十三石之內にて、五百廿八石上瀬黒村引替、殘石百四十石之內にて百十五石、合六百四十三石、高割申付候條、右助鄕高、都合二千二百三十五石を以て、向後人馬役可勤之、下瀬黒村は、六百廿町三十間餘之道一筋有之下波多村へ引合、道程少々遠候付、割替之不及沙汰除之候、仍助鄕帳面今般改之、右四ヶ宿へ渡置之間、守其旨、來申の二月より、書面之通、助人馬役可勤之、仍爲後證立合繪圖令裏書、雙方へ下置之條、永不可違失者也、

正德五未年十一月　荻源左衞門

略〇下

〔日本國郡沿革考二東山道〕信濃　古作科野（古事記、國造記）養老五年六月、割信濃國置諏方國、天平三年三月、廢併信濃國、上國、管十郡、千六百十五村、

佐久（サク）百八十八村　諏訪百三十五村（古洲羽國、見古事記、國造記作須羽、後併信濃國、養老五年六月、割信濃國置諏方國、此時蓋再置也、天平三年、廢併信濃國、後爲郡、延喜式等作諏方、正德二年四月令、自今宜書諏訪、）小縣（チヒサガタ）百二十村　伊那二百八十四村（正德二年四月令、自今宜書伊奈、而今仍作伊奈、）筑摩（ツカマ）二百三十三村（古國府、）埴科（ハニシナ）三十七村（延喜式等作埴科、）更科七十三村（延喜式等作更級、正德二年四月令、自今宜書更科、）安曇百八十村　水内（ミノチ）二百十四村　高井百五十一村

〔日本地誌提要二十六信濃〕沿革　古ヘ國府ヲ筑摩郡ニ置ク、（今ノ松本是ナリ）治承中、源義仲木曾ヨリ起リ京師ニ入リ、平氏ヲ西海ニ逐ヒ、征夷將軍ニ任ズ、鎌府ノ時、小笠原長淸守護ニ補シ、子孫世襲ス、玄孫長氏ニ至テ、州守ヲ兼ヌ、元弘ノ末、其孫貞宗兵ヲ起シテ勤王、後叛テ足利尊氏ニ降リ、守護タル故ノ如ク、深志城ニ居ル、（今ノ松本城）永享中、小笠原氏漸ク衰ヘ、村上（埴科郡葛尾城）諏訪（諏訪郡高島）木曾（筑摩郡福島、義仲ノ裔、）諸氏各一隅ニ據ル、天文ノ末、武田晴信侵擾スル連年、小笠原及村上諏訪二氏ヲ滅シ、木曾義昌ヲ降シ、終ニ全州ヲ取ル、時ニ上杉輝虎屢兵ヲ川中島ニ出シテ地ヲ爭ヒ、遂ニ飯山ニ城テ其近境ヲ取ル、天正十年、織田信長、武田氏ヲ滅シ、海津（カイヅ）ヲ（後松代ト改ム）森長一ニ、飯田ヲ毛利秀頼ニ賜フ、既ニシテ信長弑セラレ、武田ノ故將眞田昌幸上田ニ據リ、獨リ上杉氏ニ屬ス、長一等西上シ、州内擾亂ス、德川氏北條氏ト地ヲ爭ヒ、終ニ本州ヲ取ル、舊族小笠原貞慶（松本）保科正直（高遠）皆故地ヲ復シ、義昌昌幸等ト共ニ德川氏ノ節度ヲ受、昌幸尋テ豐臣秀吉ニ屬ス、十八年、德川氏關東ニ遷ル、保科木曾二氏皆之ニ從フ、秀吉貞慶ノ地ヲ收メテ、森忠政（長一ノ弟）ヲ松代ニ、石川數正ヲ松本ニ封ジ、飯田高遠ヲ京極高知ニ、小諸ヲ仙石秀久ニ賜フ、德川氏ノ初、松本（初小笠原秀政、後松平光長）松代（初松平忠輝、後眞田信之）上田（初眞田信之、後松平忠周、）高島（諏訪頼水）高遠（初保科正直、後内藤淸枚）飯田（初脇坂安元、後堀親昌、）須坂（堀直重）飯山（初皆川廣照、後本多助芳）小諸（牧野康重）九藩トス、後ニ内藤正勝ヲ岩村田ニ封ジ、三河奥殿藩（松平乘謨）徙テ田野口ニ治シ、凡テ十一藩、王政

革新、伊那中野二縣ヲ置キ、田野口ヲ龍岡ト改稱ス、既ニシテ皆改テ縣トシ、又廢シテ筑摩長野二縣ヲ更置ス、

〔先代舊事本紀十國造〕須羽國造
纒向日代朝〔○景行〕御代、建沼河命孫大臣命、定賜國造、

科野國造
瑞籬朝御世、〔○崇神〕神八井耳命孫建五百建命、定賜國造、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月辛丑、割信濃國、始置諏方國、

〔續日本紀考證四〕案舊事紀、有須羽國造、古事記、科野國之洲羽海、所謂諏方湖也、今有諏方郡、見和名抄、

〔古事記上〕天鳥船神、副建御雷神而遣、〔○中略〕爾欲取其建御名方神之手、乞歸而取者、如取若葦、搤批而投離者卽逃去、故追往而迫到科野國之洲羽海、將殺時、建御名方神白、恐、莫殺我、除此地者不行他處、

〔續日本紀八元正〕養老五年八月癸巳、以諏方飛驒隷美濃按察使、

〔續日本紀九元正〕神龜元年三月庚申、定諸流配遠近之程、〔○中略〕諏方伊豫爲中、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年三月乙卯、廢諏方國幷信濃國、

〔古事記傳十四〕洲羽海、洲字舊印本、延佳本共に州と作るはわろし、今は一本に從ひつ、洲羽は、和名抄に、信濃國諏方〔須波〕郡〔方字訪とも書けり〕是なり、續紀に、養老五年六月辛丑、割信濃國、始置諏方國、天平三年三月乙卯、廢諏方國幷信濃國とあり、かゝれば、古は一國にもすばかり廣き名なりけむ、名義未考得ざれども、嘗にいはゞ、須夫麻理の意にもやあらむ、〔夫麻を切ればなるを、淸音に轉じ、理を省けるなり、すぶまりはすぼまりにて、上の鳳段にも、須夫須夫と云り、〕其由は此次の詞に見ゆ、海は湖なり、凡て古は湖をも〔某湖とはいはで〕

たゞ某海と云る例なり、さて此に洲羽とのみは云ずして、海としも云るは、道のある限は逃賜ひつるが、此湖の岸に至りて、終に道絶て逃べきすべなく窮(セマ)れる由にて、迫到(セメイタリ)と云る、即其意なり、凡て世麻留ハ狹むるなり、世麻留は狹まるにて、自と他とを云差のみなり、かゝればかの須夫麻理も、此神の追迫(セメ)られて、此處に窮(スボ)まり賜へる田の名にもやと思ふなり、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕信濃國上國府在筑摩郡、行程上二十一日、下十日、

〔信府統記七〕筑摩郡略○註凡當郡ハ、信濃ノ國府ナリ、郡ノ名トセル筑魔村ハ、古ハ塚魔ノ字ヲ書ケリト云ヘドモ、近世筑摩ノ字ヲ用ユ、庄内ノ地ナリ、庄内ノ號モ、國府ナルガ故ナリトカヤ、○下略

〔北國紀行〕神無月二十日あまりに、彼國府長野の陣所に至る事、晡時になれり、此野は秋の霜をあらそひし戰場、いまだはらはずして軍兵野にみてり、

〔市河文書二〕着到

市河刑部大夫助房　同左衛門十郎經助

右信濃國水内郡常岩凶徒等、爲對治致軍忠候、并至于符中令馳參候畢、仍着到如件、

建武二年三月日

承了花押○小笠原貞宗

郡

〔延喜式二十二民部〕信濃國上管伊那　諏方　筑摩　安曇　更級　水内　高井　埴科　小縣　佐久　右爲中國

〔倭名類聚抄五國郡〕信濃國略○註管十略○註伊那　諏方須波　筑摩豆加萬、國府、　安曇阿都之三　更級佐良志奈　水内美乃知　高井太加井　埴科波爾志奈　小縣知比佐加多　佐久

〔信府統記三〕信濃國郡號

水内(ミノチ)　高井(タカヰ)　埴科(ハニシナ)　小縣(チヒサガタ)　佐久(サク)　伊奈(イナ)　諏訪(スハ)　筑摩(ツカマ)　安曇(アヅミ)　更科(サラシナ)

右合テ十郡ナリ、古ヘ誤テ木曾仁科ヲ別郡トシテ、都テ十二郡ト云傳ヘシ所モアリ、併シ是ハ古ヘ郡境分明ナラザル時ノ說ト見エタリ、既ニ木曾ハ、正保年中國繪圖ヲ記シ出サレシ時迄ハ、郡ノ外トシテ十郡ノ內ニ入ラズ、故ニ或ハ美濃ノ內ト云ヒ、亦ハ安曇郡トモ伊奈郡トモ、其說一決セズ、其後元祿年中、國繪圖改メラレシ時、筑摩郡ニ定マレリ、仁科ハ固ヨリ安曇ノ郡ナリト雖ドモ、古ヘ此邊ノ領主久敷爰ニ居住アリシ故、仁科ノ名ヲ唱來レリ、木曾モ亦然ナリ、〇中略古今變遷多キ故、元祿年中、改メ定メラレシヲ以テ是ニ記ス、日本國中凡六百二十郡ナリトカヤ、

〔皇國郡名志〕信濃國十郡

伊那(イナ) 飯田 イナ 宮田 片桐 市田 八重河內 新野 伏地 平田
濵合 高遠 セイナイシ卄 一ノ瀨卄 駒場 立石 山本
駒場 甲駿遠三國ノ界

諏訪(スハ) 高島 下スハ
スワ湖 諏訪同社 甲界

筑摩(ツクマ) 松本 洗馬 鹽尻 麻績 ナラキ 福島 馬コメ 妻コメ 靑柳 カリヤ原
ヤマ原 宮越 ニエ川 西野 畑村 上松 スワラ 野尻 ミトノ 木曾川
ミタケ川
ミタケ山 國中ヨリ美飛ノ界ニ至

安曇(アツミ) セウレ澤 池田 大町 飯盛 橫川
キウマ 新田 保高 飛越ノ中後ノ界

更級(サラシナ) イナリ山 追分
丹波島 國中

埴科(ハニシナ) 松代 屋代 坂城
サラシナ山 國中

水內(ミノチ) 飯山 トクラ ムレキ 柏原
野尻 善光寺 戸隱山 越後界

高井(タカイ) 須坂 田中
シクミツ 上毛越後界

小縣(チイサカタ) 上田 田中 下和田
中クホ 國中郡

佐久(サク) 小諸 鹽カタ 岩村田 輕井澤 追分
八幡 望月 千隈川原 上武甲界

〇按ズルニ、本書及ビ次下郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕信濃

	筑摩	伊那	安曇	諏方	水內	更級	高井	埴科
六國史古書	東間(紀)			諏方國(續紀) 洲羽(古) 須羽(舊)				
延喜式倭名抄拾芥抄諸書	筑摩(ツカマ)	伊那(イナ)	安曇(アツミ)	諏方(スハ)	水內(ミノチ)	更級(サラシナ)	高井(タカヰ)	埴科(ハニシナ)
	同(豆加萬)	同	同(阿都三)	同(須波)	同(美乃知)	同(佐良志奈)	同(太加井)	同(波爾志奈)
	同	同	同	同	同	同	同	同
	同(國知元)(知又筑摩ニ作ルアリ)	伊那(知) 伊奈(元) 木曾(國)	同(知元)	諏方(知) 諏訪(國元)	同(知元)	更級(知) 更科(元)	同(知元)	同(知元)
郡名考	同(チクマ)	伊奈(イナ)	同(アヅミ)	諏訪(スハ)	同(ミノチ)	更級(サラシナ)	同(タカイ)	同(ハニシナ)
天保鄉帳	同	伊那	同	同	同	同	同	同
明治沿革表	同	同	同	同	同	更級	同	同
地誌提要	同(チクマ)(ツカマ)	同(イナ)	同(アヅミ)	同(スハ)	同(ミノチ)	同(サランナ)	同(タカヰ)	同(ハシナ)(ハニシナ)
郡區編制	西筑摩 東筑摩	上伊那 下伊那	南安曇 北安曇	同	上水內 下水內	同	上高井 下高井	同

小縣(チイサカタ)	同(知伊佐加多)	同	同(知元)	同(チイサガタ)	同	同	同(チヒサガタ)	同
佐久	同	同	同(知元)	同(サク)	同	同	同(サク)	南佐久　北佐久
管十	同	十郡		同	同	同	同	十六郡

伊那郡

〔信府統記四〕伊奈郡(高十二萬二千六百八十七石九斗四升六合九勺四才、村數三百三十六、)

此郡ハ東前嶽ノ北麓甲州かまなし川ノ涯諏訪郡界ヨリ、南前嶽ノ峯通ヲ境トシテ甲斐國へ降ル、(此山甲斐國ニテハ駒ヶ岳ト云フ)但シかまなし川ヨリ此峯マデノ間ハ山中境分明ナラズ、此峯ヨリ甲斐駿河信濃三國界ノ山マデノ間、亦境界判明セズ、但シ前嶽ヨリ三國境ハ巳午ノ方ニ當ル、又是ヨリ巳ノ方へ遙ニ出張タル山岳ハ、卽チ駿河遠江信濃三國ノ境ナリトス、其間ハ左右トモ境界知レズ、當郡和田川ヨリ東山深ク村里モ無レバ路モナシ、況テ隣國へ通路アルコトナシ、是ヨリ遙ニ西青崩峠ト云テ遠江國へ通スベキ路アリ、木澤村ヨリ南へ一里餘、和田川ノ西ヲ通リテ川ヲ東へ歩渡リニテ越エ和田村ニ至ル、和田村ヨリ遠江國領家村マデ四里二十四町、此青崩峠、峯通國境(遠江國ニテモ同名)是ヨリ未申ノ方ニ河內川、東ヨリ西へ流レテ天龍川へ落ル、此河內川國堺ナリ、(遠江國ニテハ境ノ澤ト稱ス)和田川ヲ歩渡リニテ越エ、天龍川ノ東ニ鶯巣村ト云アリ、是ヨリ遠江國鹽澤マデ山路二里十八町ナリ、(河內川ヲ越エ行ク)

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年六月乙未、信濃國伊那郡人他田舍人千世賣、少有才色、家世豐贍、年廿有五喪夫、守志寡居五十餘年、褒其守節、賜爵二級、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年二月二日戊申、以信濃國伊奈郡寂光寺、(中略)預之定額、

諏訪郡

〔郡名考〕信濃　諏方ストハ計ス

〔信府統記五〕諏訪郡高三萬五千十九石九斗一升四合九勺、村數百七十二、

當郡辰巳ノ方、八ケ嶽ノ峯半ヨリ未申ノ方ヘ斜ニ、前嶽ノ北ノ麓ノ邊マデ甲斐國ヘ隣リ、かうろく澤ヨリ釜無川マデ、川ノ中央ヲ國境トス、芹ケ澤村ヨリ、甲斐國小荒間村ヘノ路六里三十間餘又圓見山村ヨリ、甲斐國小淵澤村ヘノ路三十三町二十間、かうろく澤、かまの澤、落合ノ西、下蔦木村ヨリ、甲斐國上敎來石村ヘ往還二十一町二十間餘、釜無川ノ橋長七間、敎來石ト名ツケシ古實アリトカヤ南ハ伊奈郡界木ノ間山ノ西ニ伊奈郡御堂垣外村ヘ、當郡高部村ヨリ路二筋アリ、此內西ノ路上ノ諏訪神宮寺ヨリ伊奈郡片倉村マデ、一里十三丁五十間、又是ヨリ西後山新田村ヨリ、伊奈郡一澤川歩渡ヲ越シ、長岡村ヘ路アリ、神宮寺ヨリ長岡村マデ四里半程ナリ又上野新田有賀村ノ支郷ヨリ、伊奈郡上平出村平出村ノ內ヘノ山路アリ、○中略西ハ筑摩郡界、此道筋ハ筑摩郡ノ記ニ見エタリ、北ハ小縣郡界、路筋中山道ハ道程記ニ見エ、門峠筋ハ小縣郡ニ見エタリ、大北東佐久郡界、前ニ見ユ但シやしが峯ハ、諏訪郡ノ山ナリ、甲斐國境八ケ嶽、此外佐久郡境、山嶽等ノコトハ佐久郡ニ見ユ

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年七月三日壬午、信濃國諏。方。郡。水田二段、爲彼國建御名方富命神社田、

〔日本書紀三十持統〕五年八月辛酉、遣使者祭龍田風神、信濃須。波。水內等神、

筑摩郡

〔伊呂波字類抄志國郡〕信濃國管十　筑摩ツクマ ツカマ府　チクマ

〔郡名考〕信濃　筑摩ツカマ　チタマ

〔地名字音轉用例〕入聲クノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

つかま　筑摩郡信　豆加萬ツカマ○中略

タノ行ノ音同行通用セル例

つかま　筑摩郡信　豆加萬ツカマ

〔信府統記一〕信州松本城記錄

信濃國筑摩郡〇中略

當郡ハ中古小笠原氏ノ領地タリシ故、彼幕下ノ氏族タル人所々分チ領シテ、或ハ古城ノ跡ニ倚リ、又ハ新ニ城ヲ築キ、屋鋪ヲ構テ住居ス、其中ニ島立右近本氏廣野ト云フ人、始ハ庄内ノ地、小島村井河ノ城ニ住シ、後城ヲ今ノ松本ノ地ニ移セリ、此井河ノ城ハ、四方ニ流アリテ、井ノ字ノ如クナル故ニ、井河ノ城ト云フ、古ヘ誰人ノ築ケルト云フコトヲ知ラズ、久シク小笠原家ニテ持來レル處、城主中絶シテ、城郭廢壞セリ、寛正六年乙酉、再ビ之ヲ修覆シテ、改メ名ツケテ深志城ト云フ、此邊ハ小笠原氏數代ノ領地ナルガ故ニ、文龜年中迄林ノ城主ヨリ兼ネ持テリ、島立右近モ小笠原ノ一族タリシトナリ、

〔信府統記 七〕筑摩郡高五萬四千八百六石四斗三升九合二勺、村數二百四十二、是ハ元祿年中、國繪圖改ラレシ時ノ知行高村數ナリ、當郡ノ内木曾ハ始メ當郡ノ内ニアラズ、元祿年中、國繪圖改メラレシ時ヨリ、當郡ニ定メラレタリ、木曾ハ尾張殿領分ナレバ、下ニ別ニ記ス、櫻澤ノ橋ヨリ北、松本領ノ境左ノ如シ、

凡當郡ハ信濃ノ國府ナリ、郡ノ名トセル筑魔村ハ、古ハ塚魔ノ字ヲ書ケリトカヤ、近世筑摩ノ字ヲ用ユ、庄内ノ地ナリ、庄内ノ稱モ、國府ナルガ故ナリトカヤ、筑摩ノ神社ハ、昔シ當國ニ鬼神住ミテ、人民ヲ惱マシケル故、退治セラレケル時、其鬼ノ首ヲ此所ニ埋メ、其上ニ神社ヲ建テ、八幡宮ヲ勸請アリシト言傳フ、此神社ノ緣起、天正年中マデハ、社人所持セルノ所ニ、小笠原家當地沒落ノ時、兩社人ノ内一人、異心ヲ懷キテ甲州ヘ屬シ、一人ハ緣テ小笠原家ノ歸國ヲ祈リテ、常ニ神前ニ燈明ヲ捧ゲ、祈禱懈リナカリシ故、貞慶歸參ノ砌、社領ヲ賜ヒシガ、異心ヲ懷キシ一人ハ、貞慶歸參アリテ、怨敵ノ意趣遣レ難ク、遂ニ落失セシガ、其時緣起マデ持行ケルニヤ、紛失セリ、其後尋ネ求ムレドモ叶ハズ、今アル所ノ記ハ、後ニ書記セルモノ故、慥ナラズ、宮中ニアル所ノ物ハ、神秘ニテ社人モ見ルコト能ハズト云フ、去ルニ依テ、此社ノ起發年代知レズ、松本ノ城主代々之ヲ修造ス、祭禮等ノ事ハ、神社ノ部ニ記ス、古書ニ筑摩權現トアルハ、此社ノコトナリ、是レ筑摩郡ト稱スルノ原ナリ、當郡木曾ノ外ハ、過半松本領ナレドモ、御代官所又ハ諏訪高遠ノ領分、少シ入交レリ、

〔日本書紀 二十九天武〕十四年十月壬午、遣輕部朝臣足瀨、高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃、令造行宮、蓋擬幸束間溫湯歟、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年九月四日辛卯、令美濃信濃國以縣坂上岑爲國堺、縣坂上岑在美濃國惠奈郡與信濃國筑摩郡之間、兩國古來相爭境堺、未有所決、

安曇郡

〔信府統記 五〕筑摩郡木曾

此郡櫻澤ノ橋ヨリ南ハ木曾ト稱シテ、尾張殿領分ナリ、此知行高現米千六百十二石五斗五合、但シ山中ニテ田地ナキガ故ニ、榑木二十六万八千百五十八丁、土井四千三百五十二駄ヲ以テ、右現米ノ代トシテ、定納セル村數二十九、此谷ノ内ハ、往古ヨリ木曾トノミ稱ヘ來リテ、何郡ト云フコト分明ニ知レザルガ故ニ、正保二年乙酉、國繪圖出來マデハ郡付ナク、筑摩郡墨引ノ外ナリ、其後元祿年中ニ至リ、國繪圖改メラレシ時、吟味アリシ處ニ、正保二年已後、公儀ヘ筑摩郡ト書上ラレシヨシ、山村氏ノ證文アルヲ以テ、始メテ分明ニ此郡ト定レリ、（櫻澤ノ橋ヨリ北ハ松本領記錄ニ載ス）凡木曾ハ深山幽谷ノ地ナリ、（古人モ蜀ノ棧道ニ比セシトナリ）文武天皇ノ御宇、大寶二年十二月、始テ木曾山道ヲ開クノ由、續日本紀ニ見エタリ、昔者信濃美濃ノ間ニ、通路ナカリシ時ハ、伊奈ヨリ三河國ヘ出ル、杣路峠ヲ越テ往還セシトナリ、木曾ノ中ヘモ、伊奈界ノ山ヲ越テ通路アリ、（伊奈郡ノ所ニ見ユ）然ルニヨリ、木曾ヲ伊奈郡トモ云フ、又安曇郡ト記シタル、舊キ書モアリ、或ハ木曾郡トテ、一郡ニナシタルナドノ說ハ誤リノ由ニテ、今ハ筑摩郡ニ定マレリ、

〔郡名考〕信濃　安曇アヅミ　アヅシ

〔地名字音轉用例〕ンノ韻ヲマノ行ノ音ニ通用シタル例

あづみ　安曇（信郡）阿都三（アヅミ）　曇ヲヅミニ用ヒタリ○中略

タノ行ノ音同行通用セル例

あづみ　安曇（信郡）阿都三（アヅミ）　曇（ドン）ヲヅミニ用ヒタリ

〔信府統記 六〕安曇郡（高三万八千九百四十四石二斗三升八合五勺、村數百八十三、是ハ元祿年中、國繪圖改メ記サレシ時ノ員數ナリ、此郡ハ一圓ニ松本領ナリ、）

隣國幷郡境

當郡ノ西南ノ隅、乘鞍ケ嶽ヨリ北ヘ、西面ハ飛驒國ヘ隣リ同半ヨリ越中國ヘ隣レリ、又西ヨリ北

ニ側至テ、雨飾山マデ越後國ヘ隣ル、雨飾山ノ峯通ヨリ、水内郡ヘ界シ、東側ノ半ヨリ南ヘ更科郡ヘ界ヒ、猶南ハ筑摩郡ノ境ナリ、

〔信府統記 五〕更級郡高四万五千九百七十七石二斗二升六合、村数九十四、

當郡ハ國中ニテ、他國ヘ隣ル所ナシ、北ハ水内郡界、犀川ノ中央ニテ、東ハ埴科郡界、千曲川ノ中央ナリ、委細前ニ見ユ但シ北東ノ隅千曲川犀川落合ノ所、東ニテ少ノ程高井郡界、河合村ノ丑寅ノ隅、両川ノ落合ヨリ川向丑ノ方ヘ、大豆崎村出張リ、同寅ノ方ヘ、牛崎村出張リテ、其下郡界、北ハ水内、東ハ高井ナリ、南ヘ細ク斗出セシ處ハ小縣郡界、室賀峠ノ方、少ノ程ナリ、是ヨリ西ハ、戌亥ノ方ヘ斜ニ、筑摩郡界、姨捨山ノ申酉ノ方、往還ノ峠ヨリ、未申ノ方ヘ斜ニ、又筑摩郡ヘ界シ、下岡村ノ邊ニテ、犀川ノ中央ヘ少シ掛リテ、是ヨリ北ヘハ、當郡ノ西ノ方安曇郡界ナリ、此両界ハ委ク松本領筑摩安曇ノ記中ニ見エタリ

此郡ニハ、當時城地ナシ、牧ノ島古城ノ跡ハ、犀川ノ西ヘ流レ、東ヘ流ル、中間ニテ、島ノ如キノ地ナリ、甲州武田家ヨリ、馬場美濃守ヲ置カル、此所、北ハ水内郡ナリ、水内ノ橋ヨリ、西ニ當レル犀川ノ渡リハ、水内郡ノ部ニ記ス、但シ西ノ方ハ此郡犀川ノ向フマテ出張リテアリ、牧田中村ヨリ大原村ヘ船渡アリ、是ハ犀川ヲ西ヘ渡ル水面三十四間是ヨリ川上大岡村ノ内、柳澤村ヨリ安曇郡船場村ヘ船渡アリ、四十二間、是ハ安曇郡ノ部ニ見エタリ、凡ソ川中島ト云フハ、高井、水内、埴科、更級ノ四郡ヘ亘レリト雖ドモ、取分ケ更級郡ハ、千曲川犀川ノ両間ニアル故、専ラ此郡ヲ指付シ、此郡ニテモ、又別ニ御幣(オンベ)川ヨリ東ヲ指スナリ、御幣川今ハ水ナキ故、川跡モ見エズ、人家田畑等ト為レリ、御幣川村、高田村原村、今井村ノ内、北原村丹波島村ハ往還ナリ、此東ニ横田村ト云アリ、古ヘ木曽義仲越後ノ國主城四郎長茂ト合戦アリシ所ナリ、是ヲ筑摩川合戦共云フ、寿永元年九月、此合戦信濃源氏井上九郎光森ト云フ者ノ武略ニテ勝利ヲ得、或ハ河ヘ追込、或ハ思フ所ヘ追落シ、越後勢多ク討ル、中ニ、越後ノ山野太郎、會津乗丹房ナド云事一騎當千ノ兵討死シ、城ノ四郎モ手負、漸ク脱レテ川ニ沿テ越後ニ歸ル、此長茂ハ平ノ惟茂ノ子貞盛ノ嫡ナリ、兄ノ跡ヲ繼テ、越後守ニ任ズト、古書ニ委シク見エタリ、

永禄四年辛酉九月十日、武田信玄長尾景虎ト合戦アリシモ此所ナリ、川中島合戦トテ、世ニ隠レナキ大合戦ナリ、謙信ノ陣城妻女山ハ、埴科郡ニテ此所ヨリ千曲川ヲ隔テ南ナリ、今ニ陣取ノ塚多クアリ、信玄ハ雨ノ宮ノ渡リヲ取切リ、當郡茶臼山ニ陣取レリ、茶臼山ハ往還ノ西ニテ有旅村ノ近所ナリ、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年五月辛未、信濃國更級郡人建部大垣、爲人恭順、事親有孝、○中略免其田租終身、

水内郡

〔信府統記 三〕水内郡 知行高八萬四千六百七十一石五斗二升三合、村數三百二十三、

當國ニテ北ニ當レル郡ナリ、西北ハ越後國ヘ降リ、西半安曇郡ヘ界シ、南ハ更科郡ヘ界ヒ、犀川ノ中央ヲ郡境トシ、東ハ高井郡ヘ界ヒ、千曲川ノ中央ヲ郡境トス、戌亥ノ方ハ越後境高妻山ノ麓國境ナリ、但シ高妻山西ハ安曇郡兩飾山ノ方ナリ、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年五月辛未、信濃國○中略水内郡人刑部智麻呂、友于情篤、苦樂共之、同郡人倉橋部廣人出私稻六万束、償百姓負稻、免其田租終身、

高井郡

〔郡名考〕信濃　高井タカヰ　計タカキ

〔信府統記 三〕高井郡 知行高六萬九千百十九石四合、村數二百二十四、

當國ノ東北ニ當レル郡ナリ、北ハ越後國ヘ降リ、東ハ上野國ヘ降レリ、南ハ小縣郡ヘ界ヒ、南西ハ埴科郡ヘ界ヒ、千曲川犀川落合ノ處ニテハ、少シノ程更級郡ヘ界ヒ、是ヨリ北ヘ西ノ方ハ水内郡ヘ界ヒ、千曲川ノ中央郡境ナリ、

〔三代實錄 十四清和〕貞觀九年三月十一日辛亥、信濃國高井郡人從八位上物部連善常、改本居貫山城國紀伊郡、

埴科郡

〔郡名考〕信濃　埴科ハニシナ　埴科ハシナ

〔信府統記 三〕埴科郡 高二萬七百八十石二斗壹升四合、村數四十一、

當郡ハ國中ノ小郡ニテ他國ニ接スル所ナシ、未申ノ方ヨリ西北ヘ押廻シテハ、更級郡ノ境千曲川ノ中央ナリ、但シ此川數曲アルガ故ニ千曲川稱フルトカヤ、所ニヨリ川ノ此方ヘ郡筋入込アリ、更級郡ノ内、八幡村ハ、川ノ此方ニアリ、亦北ニテハ川向ヘ當郡出張レリ、更級郡鹽崎村ノ邊、又東福寺村西寺尾村ノ邊兩所アリ、川筋時トシテ替レル

故ナリトカヤ、昔時武田信玄ト越國ノ謙信合戰アリシ所、其時ノ地形今ノ川筋トハ違ヒタリト云フ、丑寅ノ方ハ高井郡ヘ界ヒ、辰巳ノ方ハ小縣郡ヘ界ヒ、各山中郡堺ナリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

知波夜布留賀美乃美佐賀爾、怒佐麻都里、伊波負伊能知波、意毛知々我多米、

右一首、主帳埴科郡神人部子忍男、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年三月廿日戊子、信濃國埴科郡大領外從七位上金刺舍人正長、小縣郡權少領外正八位下他田舍人藤雄等、並授外從五位下、

〔信府統記三〕小縣郡高六萬六千四十三石五斗六合、村數百六十五、

當郡ハ高井郡四阿山ノ南ヨリ、湯ノ丸山ノ東、地藏ノソリノ路ノ東、佐久郡横笹山ノ西マデノ間ナリ、此郡ノ寅卯ノ方ハ上郡國ヘ隣ル、當郡界、北ハ四阿山ノ南ヨリ申ノ方ヘ斜メニ、高井郡ヘ界シ、同半ヨリ未申ノ方ヘハ埴科郡ニ接シ、千曲川ノ西ニテハ、北ノ方少ノ間更級郡ヘ界ヒ、西ハ筑摩郡、南ハ諏訪郡、東ハ佐久郡ナリ、又郡界ノ越口道自攝峠地藏峠亦千曲川ノ端下鹽尻村ヨリ埴科郡鼠宿ヘノ往還ナリ、右三筋ノ路ハ埴科郡ニ見エタリ、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

可良己呂茂、須會爾等里都伎、奈苦古良乎、意伎氐曾伎奴也、意母奈之爾志氐、

右一首、國造少縣郡他田舍人大島、

〔類聚國史八十七配流〕延暦十四年四月戊戌朔、先是信濃國介正六位上石川朝臣清主、爲人被射而不中、遣從五位下藤原朝臣都麻呂等、勘搜射人、不得焉、更遣衞門佐大伴宿禰是成、推問小縣郡人久米舍人望足服焉、流讃岐國、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年五月甲子、賜信濃國小縣郡公田十三町、彈正尹秀良親王、

佐久郡

〔信府統記〕四佐久郡（高七萬七千六百五十八石七斗二升四合、村數二百四、）當郡ハ信濃國東ノ方ニテ、上野武藏甲斐三國ヘ降レリ、此郡ノ北ハ横笹山（小縣郡界）ノヨリ東北ノ方上野國ヘ降ル碓氷峠マデノ間峯通國界ナリ、此横笹山ヲ、上野國ニテハかごのとうト稱ス、水ノとう、みつをね、（兩所共ニ上野ニテモ同名）此みつをねト淺間山ノ間ニ道アリ、（新繪圖ニハ參詣道トアリ、正保ノ繪圖ニハ鎌原ヘ出ル道トア）リ、小諸ヨリ境目マデ三里三十丁、境目ヨリ上野國大笹村マデ三里二十三町、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年二月二日戊申、以信濃國（○中略）佐久郡妙楽寺、並預之定額、

郷

〔倭名類聚抄七國郡〕信濃國伊那郡　輸栗　伴野（土毛乃）　麻績（乎美）　福智（布久知）　小村（乎無）

諏訪郡　土武（土無）　佐補（左布）　美和　桑原（久波波良）　神戸　山鹿（也末加）　氏良

筑摩郡　良田（與之太）　宇賀（曾加）　辛犬（加良以奴）　錦服（尓之古里）　山家（也末無倍）　大井（於保井）

安曇郡　高家（太木倍）　八原（夜八原）　前社　村上（無良加美）

更級郡　麻績（乎美）　村上（無良加美）　當信　小谷（乎宇奈）　更級（左良之奈）　清水（之美都）　斗女（土女）　池郷（以介）　氷鉋（比加奈）

水内郡（美乃知）　芋井（伊毛井）　大田（於保多）　芹田（世利多）　尾張（乎波利）　大島（於保之末）　古野（布奈乃）　赤生（安加布）　中島（奈加之末）

高井郡　穗科（保之奈）　小内（乎宇知）　稲向（以奈無木）　日野（比乃）　神戸

埴科郡　倉科（久良之奈）　磯部（伊曾倍）　船山（布奈也末）　大穴（於保奈）　屋代（也之呂）　英多（衣太）　坂城（佐加木）

小縣郡　童女（乎奈）　山家（也末加）　須波　跡部　安宗（安曾）　福田　海部（安末無倍）　餘戸

佐久郡　美理　大村　大井　餘戸　刑部　青沼　茂里　小沼

〔多武峯略記下〕田園

信濃國筑摩郡蘇我鄕、字草茂庄一處、（田頴帳等、在施入狀、）

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十日己未、甲斐國源氏武田太郎信義、一條次郎忠頼已下、聞石橋合戰事、奉尋武衞、欲參向于駿河國、而平氏方人等在信濃國云云、仍先發向彼國、去夜止宿于諏方上宮庵澤之

邊、及深更青女一人、來于一條次郎忠頼之陣、稱有可申事、忠頼乍怪招于火爐頭謁之、女云、吾者當宮大祝篤光妻也、爲夫之使參來、〇中略忠頼殊信仰、自求出野劒一腰、腹卷一領、與彼妻、依此告則出陣、赴到平氏方人菅冠者伊那郡大田切鄕之城、冠者聞之、未戰放火於館自殺之間、各陣于根上河原、相議云、去夜有祝夢想、今思菅冠者滅亡、預明神之罰歟、然者奉寄附田園於兩社、追可申事由於前武衞歟者、皆不及異儀、召執筆令書寄進狀、上宮分當國平出、宮所兩鄕也、下宮分龍市一鄕也、而筆者誤書加岡。仁。谷。鄕、此名字衆人未覺悟、稱不可然由、再三雖令書改、每度載兩鄕名字之間、任其旨訖、相尋古老之處、號岡仁谷之所在之者、信義忠頼等附掌、上下宮不可有勝劣之神慮已揭焉、彌催強盛信、歸敬禮拜、其後於平家有志之由、風聞之輩者、多以糺斷云云、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年二月三十日己丑、信濃國東條庄內狩。田。鄕。領主職避賜式部大夫繁雅訖、此所被沒收之處、爲繁雅本領之由愁申故云云、

〔吾妻鏡六〕文治二年十一月八日辛亥、藤澤一余盛景依諏方大祝訴、去比蒙御氣色、今日所預厚免也、〇中略

下　信濃國黑。河。內。藤。澤。

可令早任先日御下文旨、專大祝下知勤仕神事等事、

右件兩鄕、御寄進諏訪大明神、神外全無他勤、而余一盛景忘本跡、抑留恒例之御狩、忽緒拜殿造營之由事、以彼對捍之時、無左右雖可令改之、早任先例、且令勤仕御狩、且可令修造拜殿之狀耳、敢不可及遲々、〇中略

元暦三年十一月八日

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年三月十七日丁酉、最明寺禪室買得信濃國深。田。鄕。、今日寄附善光寺、所被充置不斷經衆不斷念佛衆等粮料也、偏思食來世値遇云云、

善光寺金堂不斷經衆結番事〔○中略〕

合〔次第不同〕

定蓮房律師觀西　　理久房阿闍梨重實〔○中略〕

右守番帳之旨、可令勤仕、但彼不斷經用途者、水田六町、在當國水內郡深田鄕內、是則不斷經衆之免田也、〔○中略〕

弘長三年三月十七日　　沙彌蓮性〔在判〕

〔集古文書二十七下知狀〕嘉元四年下知狀〔所藏不詳〕

可令早神眞光爲信濃國伊那郡中澤鄕內中曾倉村參分壹地頭職事

右對決之處、〔○中略〕如後家所進眞〔氏字有傳〕讓男爲眞嘉祿三年五月狀者、如此雖處分、不儲男子者可讓舍弟等也、女子者不可過在家壹字云々、而爲眞以四箇村讓與後家女子之條、雖似背亡父之命、眞直等本自得父讓之上、爲直以年尾莊讓與眞直、以四箇村讓眞光之條、非無思慮、仍可謂相傳歟、此上眞直等不及鬱訴歟、但爲眞以中曾倉村讓與家子小次郎云々、其理不可然歟、仍以彼村參分貳者可爲眞直分、以參分一者可令眞光爲地頭職之狀、依鎌倉殿仰下知如件、嘉禎三年四月十一日云云、〔○中略〕仍任眞光所進御下知文、所被寫下也者、依鎌倉殿仰下知如件、

嘉元四年九月七日　　陸奥守平朝臣判

相模守平朝臣判

〔市河文書二〕信濃國市河左衞門六郎助房謹言上

欲早任相傳當知行旨、下賜安堵國宣、備末代龜鏡、信州高井郡中野西條內、田地參段、在家壹字、幷志久見鄕總領職、貢志加澤村等事、

右所等、重代傳領知行于今無相違上者、依恩劇難不持參次第御下文、御下知、手繼證文等之、欲下給

安堵國宜、若是以不知行地、於掠申國宜、可被處重科者也、仍恐々言上、如件、

元弘三年十月日

〔大德寺文書一〕信濃國伴野莊內高柳鄉、被下綸旨所被召返也、如元爲寺領管領、不可有相違者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年八月二十一日　　左衛門權佐（花押）（岡崎範國）

大德寺長老方丈

〔安保文書〕下安保丹後權守光泰法師（法名光阿）

可令早領知武藏國安保鄉內屋敷在家、同國枝名內鹽谷田在家、同國太駄鄉、出羽國海邊余部內宗太村、播磨國西志方鄉、信濃國室賀鄉等地頭職事、

右任代々讓狀、幷正安三年十二月十日、正慶二年二月廿九日、外題安堵狀等、可領掌之狀如件、以下、

建武三年十二月十一日

源朝臣（花押）（足利直義）

〔島津文書二〕御判

下島津大夫判官宗久

可令早領知信濃國太田莊內大藏鄉（貞顯跡）地頭職事

右人爲勳功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武五年正月廿四日

（裏判）花押（今川貞世）

〔集古文書四十三寄附狀〕貞治五年寄進狀（信濃國諏訪郡下諏訪社藏）

奉寄進　諏方下宮社

信濃國筑摩郡鹽尻鄕東條事

右旨趣者、爲天下安穩、當國靜謐、殊今度合戰勝軍寄附之狀如件、

貞治五年二月九日　　信濃守源〇源下一字脫臣長基

（集古文書四十一施行狀）寶德三年施行狀信濃國諏訪社藏

信濃國筑摩郡春近領鹽尻東西　池東西新村南方、大妻南方等事、任代々判形之旨、御知行領掌不可有相違之狀如件、

寶德參年十月十六日　　大膳大夫花押

諏方大祝殿

（大塔物語）去應永七年庚辰九月廿四日、於信州更科郡布施鄕合戰次第事下略〇

（集古文書四十六寄附狀）木曾義康寄進狀信濃國木曾農家藏

義康判

野尻之鄕之內林在家之事、如年來之、お末代如意口寄進申候、爲後日之右如件、

永祿四年辛酉正月十六日

進上　定勝寺

（和名抄諸國郡鄕考七）永祿九年九月諏訪下社造宮改帳に、一諏方左衛門尉申意趣者、外垣壹間、爲淸水之鄕役之由載、本帳、此故筑摩郡之內、號淸水地造宮錢催促之處、百姓申者、前々此所號淸水、爲庄內之內上宮之神役相勤之由候、然則者信州之內、元來名淸水村鄕尋候、可致所務者也、〇中略諏訪下社永祿九年丙寅九月晦日、下社造宮改帳、小縣郡洗馬、由、横尾、彼三ヶ鄕之造宮錢、諏方藤七郞大和盛物請取、瑞垣拾間建立云云、

（集古文書三十一下知狀）武田信玄下知狀信濃國木曾農家藏

村里名邑

定

信州佐久郡岩村田郷　百貫之事○中略

右御扶助被仰出者也、全令領分軍用嗜之、陣役可相勤旨、下知仍而如件、

永祿十一年辰三月二日　朱印　　山縣三郎兵衛尉　奉之

小澤兵庫殿

〔集古文書三十八掟〕武田信玄定狀信濃國諏訪社藏

定

高梨内原郷、同堤郷、同櫻澤郷、小布施半郷、聖中條郷、長沼内村山、小縣内鹽田、鹽崎内邊久郡、右從郷中集造營錢、下諏訪大鳥居造立之處、累年令難澀、未濟之由、右自由之至也、急度加催促、如前々造營錢可請取之旨、所被仰下也、仍如件、

原隼人佑

天正六年二月二十八日　朱印　小山田六左衛門　奉之

三澤平太

〔郡名一覽〕信濃國御料私領　信州　南北五日　拾郡

高六拾壹萬五千八百拾八石七斗三升七合五勺四才　千六百九拾七ヶ村

●松代　五十三里　●松本　六十一里半　●上田　四十六里半

●飯山　六十四里餘　●高島　五十四里　●高遠　上州道六十四里　甲州道五十五里

●小諸　四十一里十一町　●飯田　七十五里十五町　○須坂　五十八里

○岩村田　五十八里　☒河島　知久千馬佐　☒伊黄木　小笠原靱負

☒山吹　座光寺伊奈助　)(○福島　尾州山村甚兵衛　∧中之條　四十九里餘

＜御影　四十里餘　＜中野　五十八里餘　＜飯島　六十里出ハリ

○按ズルニ、本書符號ハ、山城國舊村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕信濃　十郡、千六百十五村、

御料私領高七十六万七千七百八十八石七升七合六勺

佐久郡百八十八村　諏訪郡百三十五村　伊那郡二百八十四村　筑摩郡二百三十三村

小縣郡百二十村　埴科郡三十七村　更科郡七十三村　安曇郡百八十村

水內郡二百十四村　高井郡百五十一村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

信濃　諏訪郡、文出村、大和村、小坂村、小井川村、小口村、御射山神戸村、芋木村、富部村、佐久郡、馬取萱村、高井郡、米持村、筑摩郡、洗馬宿、日出塩村、桑原宿、麻績宿、上松宿、三富野宿、妻籠宿、馬籠宿、更科郡上氷絶村、鬼無里時廢ノ稱足俣村、

〔信府統記 一〕信州松本城記錄○中略

松本ノ地ハ、往古國々ニ定レル主ナキ頃ハ、時トシテ國司ヲ任ゼラレテ、下向ノ節居住アリシ所ナルガ故ニ、當國中ノ地頭各爰ニ出仕アリケルト云ヒ傳ヘタリ、其頃ハ今ノ三ノ曲輪地藏清水、ノ邊ハ市陌ニシテ、繁榮ナリシ所ナリ、其後國司ノ下向絕テ、町數減少スト雖モ、猶市辻今ノ地藏清水泥町今ノ御町麻葉町今ノ安原口西口今ノ伊勢町ナド殘リテ、市日ニハ衆人群集セシトナリ、○中略註松本ハ當國中ニ於テ平坦ノ地ナリ、筑摩村ニ神社アリ、郡名ノ本トスル所トカヤ、當城ハ府中ニテ殊ニ四神相應ノ地ナリ、其繁昌ヲ慕ヒテ、永正元年甲子、小島ナル深志ノ城ヲ茲ニ移セリ、其頃ハ猶元ノ名ニ順ヒ深志ノ城ト云フ、

〔信府統記 八〕松本領御朱印郷村高辻一○中略

信州松本領七万石ハ、元和三年、松平丹波守康長、當城ヲ賜ハリシ時、中野七藏、高室金兵衞ヲシテ、領地配分セシメ相渡サル、其帳面今猶存セリ、寛永十九年、堀田加賀守ヨリ、忠清公請取ラレシ所ノ帳面アリシト云ドモ、數年ノ後、郷村幷ニ石高共ニ增減多クシテ、右ノ帳面ニ相違出來レルニ依テ、慶安年中、忠職公ノ時、公聽ニ達セラレ、總撿地アリ、其後寛文年中、御朱印成シ下サル、〇中略

信濃國安曇郡百四十四個村、三萬四千三百二石餘、筑摩郡之内百四十二個村、三万五千六百九十七石九斗餘、都合七萬石、目錄別紙アリ事、如前々充行之訖、全可領知者也、仍而如件、

寛文四年四月五日　　御朱印

水野出羽守どのへ

〔信府統記 二〕松代城開起幷城主交代年數

〇〇松代ハ埴科郡川中島ナリ、初メ海津ノ城ト云ヒ、中頃待城、又ハ松代ト唱ヘ、近來ニ至テ松代ト稱ス、川中島ト云フハ、筑摩川犀川二大川ノ中間ナレバナリ、此地更科、埴科、高井、水内ノ四郡ヘ亘レリ、平城ニテ城下ノ西ニ筑摩川流ル、此河今ハ千曲川ト稱ス、此邊ニテ川流數曲アルガ故ナリ、當國名所ノ一トス、昔ハ清野氏ガ屋鋪地ナリ、〇中略慶長八年癸卯、森右近大夫後美作守ト改ム美作國津山ヘ所替トナリテ、其ノ跡暫ク御代官所ト爲ル、此時ヨリ待城ト改メ稱ス、同九年甲辰、松平上總助忠輝公入部、松城ト改メラル、其後越後國ヲ加ヘ賜リテ高田ノ城ヘ移リ給ヒ、當城ニハ家臣花井主水城代ナリ、元和元年乙卯、大坂落去ノ後、忠輝公御改易、花井主水死刑トナリ、〇中略同八年十月廿日、眞田伊豆守信之、同州上田ヨリ封地ヲ增賜リ、都合十萬石ニテ當城ニ移リ、〇中略萬治元年六月十九日、同伊豆守信房二歲ニテ家督シ、享保七年ニ至ル迄六十五年城主タリ、此時城ノ字ヲ改メテ松代ト爲ス、但シ正德元年辛卯、公義ヨリノ仰ナリ、

〔日本靈異記 下〕重斤取人物又寫法花經以現得善惡報緣第廿二

他田舍人蝦夷者、信濃國小縣郡跡目里人也、多富財寶、儲稻出擧、蝦夷奉寫法花經二遍、每遍設會、講讀既了、後復思議猶不足心、更敬繕寫唯未供養、寶龜四年癸丑夏四月下旬、蝦夷忽率而死、妻子量言、丙年之人、故不燒失、點地作塚、殯以置之、死經七日而甦、

〔日本靈異記下〕用寺物復將寫大般若建願以現得善惡報緣第廿三

大伴連忍勝者、信濃國小縣郡孃里人也、大伴連等同心、其里中作堂、爲氏之寺、忍勝爲欲寫大般若經、發願集物、剃除鬢髮、著之袈裟、受戒修道、常住彼堂、寶龜五年甲寅春三月、儵被人讒、堂檀越所打損而死、〇下略、又見二今昔物語一、

〔今昔物語十五〕信濃國如法寺僧藥連往生語第二十

今昔、信乃國高井ノ郡中津村ニ如法寺ト云フ寺アリ、其寺ニ藥連ト云フ沙彌ノ僧住ケリ、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於在柄社不寄通落合藏人泰宗之由、書記請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛被加撿見之處、七日七夜無其失之由、各申之、仍市河掃部助入道見西、所訴申之信濃國船山內青沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、見可令氏女領掌之、至市河屋敷者、氏女一期之後、可賜見西子孫之由、今日被定之、

〔續錦雜誌八〕花押〇足利尊氏

下志水與三郞實俊

可令早領知信濃國石河內小山田村地頭職事

右人爲勳功之賞所宛行也者、守先例可致沙汰之狀如件、

建武五年正月十八日

〔古文帖〕戶隱山神領之覺

信の國水內郡栗田村、二條、上楠川、合貳百石者先寄進也、上野村、栃原村、內分、楠川、宇和原、遠良尾、合

八百石者、新寄進、都合貳千石、內別當五百石、社僧三百石、社家貳百石、全可寺納幷社領同前境內山林竹木爲守護不入、令寄附上者、永代不可有相違者也、仍可抽天下安全祈禱狀如件、

慶長十七年五月朔日　　御朱印

〔信府統記二十四〕御裁許記〇中略

元祿十丁巳年、麻績組同町市野川村永井村と更科郡八幡村郡村、志川村、羽尾村四ヶ村と山論御裁許、

信州筑摩郡松本領麻績村、市野川村、永井村と、同國更科郡松代領、八幡村、郡村、志川村、羽尾村諍論之事、

麻績、永井、市郡川三ヶ村百姓訴候は、いぎれより湯光坊土橋、三ッ嶺、小坂、九折道、せごが池、菖蒲池、屛風岩、中尾、釣根、冠著嶽、境之由申之、八幡、郡、志川、羽尾四ヶ村百姓答候は、小髙柄峯より樋ヶ峯、猿ヶ馬場峠、三ッ峯、風越山峯一本松、冠著嶽、境之由申之、遂糺明處に、雙方申所不分明、依之撿使三上半兵衞、完倉與兵衞撿分之上、いぎれより湯光坊、土橋、三ッ峯、風越山峯、鷲岩、一本松海道限之、冠著嶽迄郡境相定候、墨引之外、東北に有之畑八枚、境不慥に付、開置候と相見條、向後可荒之次に、札山內山、雖及異論、證文證跡無之、柴草多有之方は、內山と相見候、其上見通境用之中尾根より一本松迄、札山境相立候、且又羽尾村百姓申候は、永井村地內之山、爲請納山由申之、永井村百姓札山の由答之、令吟味處、松代領仙石、須坂、若宮、德間四ヶ村百姓、新山札請取由、永井村へ證文出之條、羽尾村も山札致所持、永井村之山へ入候と相聞候、柴草茂り候分は、永井村內山に相極、口あき岩の尾根より、道心が峯迄、繪圖之面墨筋を引、各加印判、雙方へ下置間、不可再犯者也、

元祿十年丁丑七月廿二日　　荻　近江〇下略

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

恩、永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略

信濃國　小谷庄〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔諸家系圖纂藤原十七下〕那須

宗隆那須與一資隆改名、無雙之弓馬之達者也、屬源義經於四國矢島射扇、于時十七歲、鎌倉殿褒美、蒙勳賞所領丹波五ヶ庄、信州角豆庄、若州東宮川原、武州太田庄、備中絵原庄、〇下略

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十二日庚寅、小中太光家、爲使節上洛、是左典厩賢息、二品御外甥依可令加首服給、被獻御馬三疋長持被納砂金絹等二棹之故也、又關東御知行國々內、乃貢未濟庄々、召下家司等注文、被下之、可加催促給之由云云、今日到來、

注進　三箇國庄々事下總、信濃、越後等國々注文、〇中略

信濃國

伊賀良庄尊勝寺領　伴野庄上西門院御領　郡戶庄殿下　江儀遠山庄

大河原鹿鹽　諏方南宮上下社八條院領　同上下社領白川御　小俣鄉熊井鄉

落原庄殿下　大吉社庄宗像少輔領　黑河內藤澤無庄號字之由、今度尋搜之處、被爲諏訪上下社領、仍不當國衙進上、

捧中村庄　捧北條庄　洗馬庄蓮華王院御領　相原庄

麻績御厨大神宮御領　住吉庄院御領　野原庄同前　大穴庄元左大辨師能領、近年忠淸法師領、

前見庄殿樂寺領　仁科御厨大神宮御領　小谷庄八幡宮御領　石河庄御室御領

四宮庄南北同前　布施本庄　布施御厨　富都御厨

善光寺三井寺領　顯光寺天台山末寺　若月庄遣菩提院領　太田庄殿下御領

小河庄上西門院御領　丸栗庄御室御領　弘瀨庄院御領　小曾禰庄八條院御領
市村庄院御領　芋河庄殿下御領　青瀧(シヤウリウ)寺　安永勅旨
月林寺天台末寺　今溝庄松尾社領　善光寺領河居村山馬島吉野　天台山領小市
東條庄八條院御領　保科御厨　橡原御厨九條城興寺領　英多庄殿下御領
倉科庄九條城興寺領　同加納屋代四箇村　浦野庄日吉社領　鹽田庄最勝光院領
小泉庄一條大納言家領　常田庄八條院御領　海野庄殿下御領　依田庄前齋院御領
穀倉院領　佐久伴野庄院御領　千國庄六條院　桑田餘田前堀河源大納言家領
大井庄八條院御領　平野社領淺間社岡田郷、今八幡宮領、

〔集古文書三十三打渡〕享德四年打渡信濃國木曾定勝寺藏
木。曾。庄。淨戒山定勝禪寺住持職之事、永代渡二與於慧嚴首座一處也、仍爲二後證一渡狀如レ件、
享德四年乙亥三月三日　左京大夫家賢書判
定勝寺侍衆禪師

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年三月廿五日癸丑、海野左衞門尉幸氏、與二武田伊豆入道光蓮一、相二論上野國三原庄與二信濃國長。倉。保。一境事一、幸氏所レ申、依レ有二其謂一、任二式目一加二押領分限一、可二沙汰一之旨、被レ仰二含于伊豆前司賴定一、布施左衞門尉康高等訖、

〔慶應元年武鑑〕眞田信濃守幸敎帝鑑間四品安政四巳　拾万石　居城信州埴科郡松代本名河中島　江戸ヨリ五十三里
信玄時代、高坂彈正居、後森武藏守長一、同右近大夫忠政、天正八、松平上總介忠輝、元和中、松平伊豫守忠昌、同五、酒井宮内大輔忠勝、同八、眞田伊豆守信之、以上後代々領レ之、
松平丹波守光則帝鑑間四品文久元酉十二月叙　六万石　居城信州筑摩郡松本江戸ヨリ中山道六十二里半、保福寺通リ五十八里、武石通リ五十五里餘、
當城者、永正元甲子年、島左近大夫築レ之、文永(文永誤)三、水上宗浮、天文三、小笠原大膳大夫長時持、同廿二、武田信玄持城、後武田勝頼持、天正十、小笠原右近大夫貞慶、同兵部大輔秀政、同十八、石川伯耆守康昌、同玄蕃頭光長、慶長十八、再小笠原兵部大夫秀政、同右近將監忠眞、元和三、松平丹波守康長、寛永十、松平出羽守直政、同十五、堀田加賀守正盛、同十八、水野隼人正忠清、同出羽守忠職、同

隼人正忠直、同出羽守忠周、同日向守忠軒、同隼人正忠恒、享保十乙巳年、松平丹波守光慈、以後領之、

松平伊賀守忠禮（帝鑑同　朝散大夫）　五万三千石　居城信州小縣郡上田　江戸ヨリ四十六里半

（眞田安房守昌幸、同伊豆守信之居之、元和八、仙石兵部少輔忠政、同越前守政俊、同越前守政明、寶永三、松平伊賀守忠周、以後領之、）

内藤若狹守頼直（雁間同　朝散大夫）　三万三千石　居城信州伊奈郡高遠（甲州通五十五里、上州通六十四里、）

（晴信時代、仁科氏居之、後保科彈正忠正直、京極修理大夫高知、慶長五、再保科彈正忠正直、同肥後守正之、寬永十三、鳥居主膳正忠春、同兵部少輔忠常、同播磨守忠救、元祿四年、內藤駿河守清枚、以後領之、）

諏訪因幡守忠誠（帝鑑同　從四位侍從　元治元子十一月任）　三万石　居城信州諏訪郡高島　江戸ヨリ五十四里

（本名諏訪ト云、諏訪氏代々居、天正中、日根野織部正高吉、同織部正吉明、慶長六ヨリ再諏訪氏代々領之、○節略）

（慶應元年武鑑）本多相模守助寵（帝鑑同　朝散大夫）　二万石　居城信州水內郡飯山　江戸ヨリ六十四里餘

（天正五、上杉景虎築之、家臣[illegible]城代[illegible]守之、文祿年中、森右近大夫忠政、慶長十五、松平上總介忠輝、同[illegible]持、元和二、佐久間備中守安次、同日向守安長、同三五郎勝長居、寬永十八、松平大膳亮忠重、同遠江守忠倶、同[illegible]後守忠[illegible]、同遠江守忠喬、寶永三、永井伊賀守直敬、武州岩槻エ替、同入、青山大膳亮幸秀、丹後宮津エ替、享保二、本多若狹守助芳、以後領之、）

松平縫殿頭乘護（菊之間　從五位下）　一万六千石餘　在所信州佐久郡田野口　江戸ヨリ四十二里

（元祿十六年ヨリ當所領之、○節略）

（慶應元年武鑑）牧野遠江守康濟（雁間　朝散大夫）　一万五千石　居城信州佐久郡小諸（コモロ）　江戸ヨリ四十一里十一町

（仙石越前守秀久、同兵部大輔忠政、元和八、青山因幡守宗俊、寬文二、酒井日向守忠能、延寶七、西尾隱岐守忠成、天和二、石川美作守乘政、同能登守乘紀、元祿十五、牧野周防守康重、以後領之、）

内藤志摩守正誠（雁間　朝散大夫）　一万五千石　居城信州佐久郡岩村田[格]　江戸ヨリ三十八里

（元祿年中、內藤氏正勝以後代々領之、）

堀石見守親義（帝鑑同　朝散大夫）　一万五千石　居城信州伊奈郡飯田　江戸ヨリ上州通七十五里十五町

（天正十八、毛利河內守秀頼居、後京極修理大夫高知、慶長六、小笠原兵部大輔秀政、元和三、脇坂淡路守安元、同中務少輔安政、寬文十二、堀美作守親昌、以後代々領之、○節略）

石高 田數

〔慶應元年武鑑〕柳間 朝散大夫 堀内藏頭直虎 一万五十三石餘 在所信州高井郡須坂 江戸ヨリ五十八里

元和三ヨリ堀氏直重以後領之○下略

〔倭名類聚抄 五國郡〕信濃國 ○註略 管十 田三萬九百八町八段百四十歩

〔伊呂波字類抄 志國郡〕信濃國 管十(中略)本田四万千六百五十六丁

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕信濃 上中 十郡(中略)田千六百五十六町

○按ズルニ、此書千ノ字ノ上ニ四万ノ二字ヲ脱ス、伊呂波字類抄ニ從フベシ、

〔新撰類聚往來 下〕國名 ○中略 信濃 信州 十郡(中略)田數三万一千四百三十町

〔海東諸國記〕信濃州 郡十、水田三萬九千二十五町三段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕四十万八千三百五十八石 信濃

〔國花萬葉記 十一信濃〕信濃國 信州管十郡 上 田數貳万九百九十六町 ○中略 知行高五拾四万八千六百石

〔千曲之眞砂 前編 一〕國中總高

高四十万八千三百五十八石

右天正十八年庚寅七月、依小田原北條家滅亡、信州不殘豐臣家爲領、時諸士配分之高如斯也、

高五十四万七千三百六十石

高五十四万八千六百石

右文祿四年、太閤撿地改高也、其後御當家、寬永御改右同高也、

高六十一万五千八百十八石七斗三升七合五勺、

右元祿十四年辛巳、御改高辻如斯也、此後至當世、山林川原芝間等、新田開發不可勝計、今者總高七十万石餘有之云云、

〔千曲之眞砂 前編 六〕木曾隱士語曰、木曾谷者廿四箇村有之、十一箇村合三十五箇村、廿四谷也、往古

太閤秀吉公、御改高千六百八十五石八斗六合四勺也、其後享保九年甲辰、自尾州公檢地、御改高二千四百六十三石八斗一合也云云、

〔官中秘策三〕信濃國　十郡（〇中略）

一石高六拾壹万五千八百拾八石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調（〇中略）

信濃國（御料私領）　一高七拾六万七千七百八拾八石七升七合六勺

出擧稻

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻（〇中略）

信濃國、正稅公廨各卅五万束、國分寺料四万束、興福寺料四万束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料三千束、

〔倭名類聚抄國郡五〕信濃國（〇中略）註管十（〇中略）正公各三十五萬束、本稻八千九百五十束、雜稻十九萬五千束、

〇按ズルニ、此書本稻八千九百五十束トアルハ、八十九萬五千束ノ誤ナリ、

國產貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀（〇中略）　信濃國（一万二千石〇中略）

年料別貢雜物（〇中略）　信濃國（筆一百管、零羊角六具、木賊二圍、樺皮二圍、〇中略）

諸國貢蘇番次（〇中略）　信濃國十三壺（五口各大一升、八口各小一升、〇中略）　右八箇國爲第三番（〇卯酉年中略）

交易雜物（〇中略）　信濃國（商布六千四百五十段、熟麻十斤、櫃牛皮三張、鹿皮九十張、洗皮十五枚、紫草二千八百斤、布一千五百端、細貫鑑五十枚、鹿長猪脂一斗、楊子四合、）

〔延喜式主計二十四〕信濃國（行程上廿一日、下十一日、）

調、細布六十端、綵布卅端、緋革五張、自餘輸布、但浮浪人調庸輸商布、　庸、輸布、　中男作物、紙、紅花、麻子、芥子、猪膏、膓、雉腊、鮭楚割、氷頭、背腸、鮭子、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥（〇中略）

信濃國十七種　黃連十斤、細辛卅五斤、白朮廿六斤九兩、藍漆五斤、大黃卅斤、女青六斤、薗茹卅七斤、

人口

干地黃一斗四升、附子三斗、蜀椒一斗六升、蕪荑一斗、石硫黃三斗八升、熊膽九具、鹿茸十具、枸杞廿斤、杏人六斗、大棗大一斛、

〔新猿樂記〕四郞君、受領郞等刺史執鞭之圖也、○中略宅常搆集諸國土產、貯甚豈也、所謂○中略信濃梨子、又木賊

〔庭訓往來〕信濃布、常陸紬、

〔毛吹草三〕信濃

小人參　芍藥　杏仁　小梅　串柿　干蕨　蕎切當國より始ルト云　白苧　小椙原　曾原木賊　木曾麻衣　柾　椹　土井檜皮　諏訪湖鱣鮨　奈良井柾物

○按ズルニ、諸國名物往來ニハ、右ノ外ニ、玄古蔦若、上田紬縞、硫黃等ヲ舉ゲタリ、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月甲午、信濃國獻梓弓一千二十張、以充太宰府、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年四月庚午、以信濃國獻弓一千四百張、充太宰府、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年正月庚午朔、信濃國獻神馬、黑身白髮尾、　壬午、大赦天下、○中略又貢瑞人賜爵及物、并免出瑞郡當年之庸、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年二月九日癸丑、信濃國例貢梨子、大棗與桃子、雉腊、別貢梨子、大棗等貢獻之期、元不立制、太政官議定、例貢每年十月、別爲期、立爲恒例、

〔官中秘策三〕信濃國　十郡○中略

一人數六拾八万六千六百五拾壹人　內　三拾六万四百九拾人男　三拾貳万六千百六拾壹人女

〔吹塵錄五御料私領人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年○中略

一人數七拾四万八千百四拾貳人　內　三拾八万八千八百五拾九人男　三拾五万九千貳百八拾三人女　高六拾壹万五千八百拾八石餘　信濃國

弘化三丙午年諸國人數調○中略

御料私領一人數七拾九万四千六百九拾八人　高七拾六万七千七百八拾八石餘　信濃國

內　四拾万三千八百六拾八人　男
　　三拾九万八百三拾人　女

風俗

〔令義解 一職員〕彈正臺

尹一人　掌肅淸風俗、謂、風者敎也、風者氣也、俗者習也、土地水泉、氣有緩急、聲有高下、謂之風焉、人居此地、習以成性、謂之俗焉、假令信○濃○國○俗○、夫死者即以婦爲殉、若有此類者、正之以禮敎、是以爲肅淸風俗也、

〔人國記〕信濃國

信濃國之風俗ハ、武士之風俗天下一也、最百姓町人之風儀モ、其律義ナル事、伊賀、伊勢、志摩之風俗ニ、五畿内ヲ添タルヨリハ猶モ上也、所以者、義理强ク而臆スル事ナク、百人ニ九十人ハ律義也、タマタマ臆病成者有トイヘドモ、夫モ他國之如形之人ト云程ニハ有ラズシテ、タマ〳〵ノ物語ニモ、弱ミノ比興ノ事ハ無之、若シ比興ノ事ヲ述ベ、亦ナス時ハ、人皆是ヲ惡テ不交、故柔弱之人モ後ニハ義理ヲ知リテ、國風ト成ナリ、都而智惠モ餘國ヨリハ勝レタリ、然ドモ偏鄙之國成故ニ、カタクヘナキコトモ多シトイヘドモ、善十ニシテ惡一二之風俗也、

名所

〔日本鹿子 八〕同國○信濃中名所之部

木曾路　京より江戸まで木曾海道を行は、美濃國大井といふ宿より四り計行て、信州安曇郡木曾のうちなり、是より木曾路ト云、

木曾御坂　まごめ峠といふ、是より深山に入、山坂多し、

出る峯入山のはのちかければ木曾路は月の影ぞみじかき

信濃路や木曾の御坂の小笹原分行袖にかくや露けき

掛橋　是を木曾のかけ橋と云、あげ松と云宿より福島と云宿へ越る間也、則かけ橋と云里あり、

雜載

山の岨にわたしたる橋なり、
生ひすかふ谷の梢を蛛手にて散ぬ花ふむ木曾のかけ橋
薗原山　小縣郡の內也、伏屋は小諸の山ノ手也、此原には、ゝき木と云もの生ふる、後拾遺雜歌、
信濃なるその原にこそあらね共我は、ゝき木と今はたのまん
更科　いづこ共月は分しをいかなればさやけるらん更科の山
姨捨山　更科郡の內也、やしろの宿よりとくらへ越る間、筑間川と云あり、此川の向ふにあり、姨捨石と云も有、
あやしくもなぐさめがたき心かな姨捨山の月も見なくに
有明山　更科の里よりまへにかゝへたる山なり、後鳥羽院の御製に、
片敷の衣手さむく時雨つゝ有明の山にかゝるむら雲
淺間山　上野國へ下るに、武藏野より北に見えたり、伊勢物語のうたに、業平朝臣、
信濃成淺間のたけにたつけふり遠近人の見やはとがむる
諏訪の海　水海也、中に湯あり、冬になれば此海氷はりつめ、そのうへを道にして行かよふ、俗に此氷のうへに鹿の足あとあれば、是神の通給ふ跡なりとて、是をえるしに渡ると也、
諏訪の海の氷の橋の通路は神の渡りてとくるなりけり
桐原　望月　兩所共に牧在所也、望月はあしたの宿よりやはたの宿の外にある宿也、西行法師のうたに、
望月のみまきの駒はさむからし布引山を北とおもへば
須賀荒野　戸隱山　高月山　幾ヶ嶺　筑間川　田每月
〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒〇中略　信濃國一百人〇中略

諸國器仗〇中略　信濃國甲二領、横刀三口、弓卅六張、征箭卅六具、胡䩭卅六具、

〔日本書紀景行七〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略日本武尊曰、蝦夷凶首咸伏其辜、唯信濃國越國頗未從化、

〔日本書紀雄略十四〕十一年十月、鳥官之禽、爲菟田人狗所嚙死、天皇瞋黥面而爲鳥養部、於是信濃國直丁、與武藏國直丁侍宿、相謂曰、嗟呼我國積鳥之高同於小墓、旦暮而食、尙有其餘、今天皇由一鳥之故而黥人面、太無道理、惡行之主也、〇下略

〔日本書紀天武十六〕三年十一月、詔大伴室屋大連、發信濃國男丁、作城像於水派邑、仍曰城上也、

〔日本書紀天武二十九〕十三年二月丙子、是日遣三野王、小錦下采女臣筑羅等於信濃、令看地形、將都是地歟、　閏四月壬辰、三野王等進信濃國之圖、

〔三代實錄陽成四十七〕仁和元年二月八日甲午、聽信濃國以乘田三十町營國厨佃、但其地子任例進納太政官厨、永以爲例、彼國營佃自此始焉、

〔十訓抄中〕信濃國は、極めて風はやき所也、是によりて、諏訪明神の社風の祝と云ものを置て、深くこめすべく祝ひ置て、百日の間尊重する事也、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年十一月一日丙寅、寅刻酉方雷電數度、午刻以後震動、大風甚雨、近日信濃國司、補任諸社事有其沙汰、而諏訪五月會、幷御射山頭人等企訴訟、相當神事頭番之輩、有預免許之先例、但被優神事、雖被免其年、以後年於被遂行其節者、不可有免除之由云云、仍今日有許定、被尋問先例於當社大祝信濃權守信重云云、

〔萬葉集十四東歌〕信濃奈流(シナヌナル)、須我能安良能爾(スガノアラノニ)、保登等藝須(ホトトギス)、奈久許惠伎氣婆(ナクコエキケバ)、登伎須疑爾家里(トキスギニケリ)、

右一首、信濃國歌、

相聞〇中略

比等未奈乃、許等波多由登毛、波爾思奈能、伊思井乃手兒我、許登奈多延會禰、

信濃道者、伊麻能波里美知、可里婆禰爾、安思布麻之牟奈、久都婆氣和我世、

信濃奈流、知具麻能河泊能、左射禮思母、伎彌之布美氏婆、多麻等比呂波牟、

中麻奈爾、宇伎乎流布禰能、許藝氏奈波、安布許等可多思、家布爾思安良受波、

右四首、信濃國歌、

大正元年十月二十一日印刷
大正元年十月二十五日發行

神宮司廳

昭和六年十一月一日印刷
昭和六年十一月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
發行者　川俣馨一

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）